昭和二年一月十五日印刷
昭和二年一月十八日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第十卷

編輯兼發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　野中次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座　七八三番　二一八八番　三六八六番
振替東京五二二九八番

お主に遣る程に、久次がなき後の問ひとむらひ、又は手前が身の上の、しがくの爲に遣つてくりよ。」
お富「アイそんなら主の亡き跡を。」　民部「弔ふ未來の門出は、不思議な縁にて身共が介錯。」　久次「それで願ひも。」ト思入よろしく、皆々こなし有りて、　淨「よろほひ〳〵見送る一念、息も絶え〳〵消えて行く、此の世彼の世の別れ路や、はや曉方近き無常の鐘。」ト本釣鐘、皆々よろしく、お富へ組子一人かゝるを、久次引きつけ、これも刺し通し、上へ乗り掛る事、この時與三郎下手に親しく見かへる。爰へ以前の喜藏出で來り、喜藏「與三郎うぬ。」トかゝるを、與三郎引きとめ立廻り、よくとめる事、久次起き直り捕手の上へ乗りかゝる。民部刀を抜いて上の方へ廻る事ありて、與三郎へこなし。與三郎默諾き、喜藏を件の井戸の中へ當て込み、撥釣瓶を下す事、下に水音どんとする。　淨「あはれ果敢なき。」ト久次引敷きし上へどつさり、與三郎お富ハツト手を合はせる。民部刀を構へる。雙方よろしく木の頭きざみにつけ雙盤の責よろしく。幕。

與話情浮名横櫛　終

中に捨白かぶせ、よろしく納まること。與三郎こなし有りて、與三「是れも久次が忠義故、姿かはれば鎌倉へ、母の敵は源左衛門、平馬も正しく彼所へ同道。」お富「誠の香爐取り返し、今の夫の恨みも倶に、どうぞ霽らして下さんせ。」民部「然ある時には穗積の家名、引興すのも一つの孝道。」與三「それにて不義の汚名をはらし、其の上名乘つて此の身の科を。」民部、久次「少しも早く。」ト民部差添を與三郎へ渡す事、與三郎推戴き腰にさす事。此の時に喜藏蒐るを、民部あてる。與三郎に蒐る兩人を投げ退ける事よろしく、この中に與三郎旅形の拵へする事。牀のめりやす文句の中へあしらひ、この中能き程に喜藏立ち掛るを、民部上の方の障子家體の裏へ當てて蒲團をかける事、以前の組子兩人立ちかかるを久次引付ける。これにて兩人立廻りの仕組よろしく、一人を殺し一人を相手につかひて、上へ乘り掛り、久次宜しく、與三「ハハア有り難く頂戴仕る。」久次「今ぞ此の世の思出なし、とても事に久次が亡骸、首をば刎ねて取隱し。」ト與三郎が以前の著附を持つて思入。「ア、塵塚へ捨ておかば、切られの與三は自殺して、最早此の世に亡き人と。」淨「世の口の端にかけさせる、骸の疵痕身代りと。」トからだの舊疵へ思入ある。淨「知死期に賴みも忠義の一心。」お富「詞に任せ塵塚へ、もし此の事が露見せば、其の與三郎を殺したは、わたしが業と主張つて、亭主殺しの身の罪を。」ト思入。與三「出かしたお富、コレ。」ト財布を出し、「此の金は親の情の賜物なれど、名乘つて出るには不用のもの、これは

組子與三郎へ蒐り引起す事。　淨「藥の爲に總身しびれ、倒れ伏したる切られの與三、其のまゝ捕つたと引起せば。」ト風の音、どろ〳〵の樣に、これへ早めし鳴物あしらひ、立廻つて、　淨「祕藥の效驗あら不思議や。」トこの中民部は喜藏を引付け一寸當てる。長九郎を久次引付け、これへ乘りかゝり見得よく、與三郎は蒐る兩人を投げ退けきつと見得、お富これを見合つて宜しく、人々見得さだまる事。

與三「誠を盡した久次殿の勸めによつて、用ゐし藥に五體惱亂して。」ト皆々思入。この時立ちまはり兩人かゝる事、與三郎これをあしらふ中に、　お富「今まで顏に正々と、其の疵の痕消え失せて。」ト思入。この中民部立廻りの中に運ぶ繪姿取りあげ見て、　民部「此の繪姿に記せしとは、うつて變りし面貌の。」

久次「さ程に變るも久次が願ひ、エ、有り難い〳〵。」ト久次にははつきり見えぬ心いき。　與三「扨こそ藥の。」　お富「效驗をこれで。」トこの中にお富鏡を出し與三郎へ見せ、　淨「さし出したる鏡にて、見れば以前に變りし面影。」ト此の中に與三郎、手甲脚絆を去る事、殘らず疵の痕癒える事、與三郎皆々思入よろしく。　與三「オ、こりや顏ばかりかは身體まで。」　お富「それも偏に久次殿の。」　民部「忠義の一心達きし印。」　與三「コレよく見てくれよ、此の通りだ。」ト與三郎、久次へ立ちより思入。　淨「顏さしつけて手負の傍、見やり〳〵、苦痛も忘れ。」ト久次、身體の體もよく〳〵見て、　久次「エ、有り難い〳〵コレ見やれお富、悦べ忠義は立つた。」　淨「互に歡び感じ入り、しばし惘るゝばかりなり。」ト皆々この

事ありて、お富「承安二年辰年の彌生の産まれ、年月日時揃ひしと、委しく記した臍の緒書。」ト與三郎へ見せる事。與三「ム、、そんなら久次は此の藥に。」お富「合はす年だの。」兩人「生まれで有つたか、ヤ、、、。」ト思入。久次「それ故にこのごとく、お富が手をかり左の乳の下。」ト手疵へ思入。お富「お主を思ふ其の心、少しも早う其の藥を。」與三「オ、忝い久次が賜物。」久次「早く血潮を御用に立て。」浄「それと器へ絞り込む、苦痛は厭はぬ忠義の一心、瀧津瀬流す紅も、あはれと見やる二人が、涙もともに染めぬらん。」トお富この中丼を持ち出る。與三郎立寄りて丼の中へ件の藥を入れる事。兩人介抱しながら、久次よろしく思入ありて、乳の下の血を絞る事よろしく有りて、與三郎お富見合はせて愁への思入。文句一ぱいにある事よろしく、此の中風の音をあしらひ、牀の合方をあしらふ事。お富「早く用ゐて。」久次「われらが忠義を。」與三「オ、何にもいはぬ忝い。」浄「悦び涙そのまゝに、ぐつと一息件の一藥。」ト飲む事、牀の合方宜しく、お富久次見やりてこなし。浄「うけし器の其の儘に、殘る方なく服すれば、五體も惱亂與三郎、苦しみ其處へ倒れ伏す。」ト此の中風の音をあしらひ、文句の中に與三郎飲み終ると、アツト苦しみ、此の中に運びし二枚折の陰へ倒れ伏す。お富「ア、これ申し與三郎さん。ヤ、、、今の藥を飲むと等しく、たつての苦しみ、この熱氣は。」久次「それこそ藥の正しく利き。」浄「さもあらんずと躊躇ふ折柄、奥の物音に、思ひがけなく一室より、道具屋引

夫と定める其の人の、尚々詞は背かれず、此の身は一つ亭主は二つ、絶體絶命お前を殺し、其の刃物にて死なれずば、亭主殺しと名乘出て、罪を請けるは覺悟の前。」 淨「恨み涙ぞ道理なる。」 與三「これお富の手を借り命を棄て。」 お富「忠義ぢやと言はしやんすは。」 與三「おぬしはこゝろが顚倒したか。」 お富「どういふ心か久次殿。」 淨「歎きが中にうら問ふ二人、手負は居直り莞爾と笑み。」ト久次思入有りて起き直り、 久次「サ、、、、仔細といふは此の繪姿。」ト以前の繪姿を出し、科有りて、 久次「與三郎殿の面體、身體へ數ヶ所の疵が配符の表、あり／＼手疵の跡を癒さん爲。」ト思入。 與三「何といふ、そんなら俺が此の疵を。」 お富「癒さう爲に。」 兩人「命をば。」 久次「オ、。」 淨「其のまゝゐざつて落ち散りし、守袋と隱し持つ、藥包を取り出し。」「サア妙藥覺えが御座るか。」ト與三郎へ藥包、守袋をお富へわたす事。 與三郎お富藥包を見て、 與三「オ、これは日外源氏店で、彼の藤八めが持つてゐた、海松杭の松から送りし手紙の中に、封じてあつたお毒藥。」 お富「何か用立つ事もやと、妾が手筥の其の中に、どう紛れてか在つたゆゑ、彼の佛壇の下壇へ置いたを。」ト思入。此の内に與三郎添書をひろげ見て、 與三「酒に合はせて飲むときは、直に人の命を斷つ、南蠻祕法の毒藥ながら、辰の年月揃ひたる、男子の血潮に藥を合はせ、用ゐる時には年を經し、如何なる金瘡古疵も、忽ち癒ると記したは、世にも稀なる藥の效驗。」ト思入。この中お富久次の守袋の中より、色々の臍の緒書を出し見る

つたら訴人して、貰ふ褒美も跡金の、足しにならうと我が家へ、急いで歸つて窺ふ中、始めて聞いた貴方の素性、恩義は深きお主の血筋、その御子息を家來の身で、なんぼ手詰になればとて、どうして刃物が當てられう。汝に殺せと言つたのは、僅かの中でも抱寐して操を破つた言譯に、この久次を殺せといふ、心の謎の憎まれ口、性根の据つた女房が、其の手をかりて命をば、棄つるも矢張お主のため。」與三「俺もこなたの身の上を、聞けば聞く程不思議な奇緣、實父の血筋の恩義を思ひ、其の寶をば手に入れて、穗積の家を立てんとは、俺が性根と心はひとつ、よくも寶を手に入れて、親の隱家へ屆けてくれた、この與三郎は今爰で、隼人樣に逢ふにせよ、お顏は知らず此の態で、何で血筋の倅だと、名乘合がなるものか、よくして吳れた辱いが、お富の手をかり命を棄て、忠義の道を立てるとは、俺を訴人と思ひ込み、言譯心か知らねえが、それは知らねえ前の事、早まつた事しやつたなア。」
淨「早まりし此の有樣と、なげけば沈み伏す、お富もやう〳〵顏を上げ。」ト與三郎思入。お富もこのうち愁への思入よろしく有りて、お富「先刻お前が戻つてから、日頃にかはるお前のそぶり、與三郎さんをひと思ひに殺せよと、手の裏かへす其の一言、もしも妾が殺さずば、自身に斯うとの權幕故、如何にも妾が殺さうと、白刃を取れど義理ある與三さん。明日が日名乘つて出るにせよ、たとへば搦め捕られるとも、一時片時も命をば、永らへて置きたさも、情につれる女の情、さればといつて今爰で、

淨「苦しさ耐へ聲振立て。」ト久次糊紅になり起き直り、久次「これ静かに〳〵。」與三「これ久次、合點の行かぬお主が詞。」お富「どういふ心か。」兩人「其の譯を。」ト思入。久次「なるほど、言はにやア久次が身の上、解るめえ。これお富、聞いてくれ與三郎、イヤ穂積の血筋の若旦那。」與三「何と。」ト竹笛になり思入、お富もこなしあり。久次「今こそあかす久次が身の上、お聞きなされて下さりませ。元は穂積のお家にて、三代恩義の御家來筋、十七歳の春の事、朋輩喧嘩で人を害め、既に死罪と極まりしを、お前の親御の計らひにて、命を助かり資金を貰ひ、それからは町人暮しなれど、以前の氣が失せず、達引事の剛氣の交際、送る月日も六年前、喧嘩出入で岬へ流され、一心不亂に信心の、其の御利益に我が土地へ、大赦にかゝつて歸ると其の儘、お禮參りの道すがら、お前にかゝつた親旦那、仔細を聞けば奥樣には、人手にかゝつて敢ない御最期、左近樣の御切腹、穂積のお家を斷絶と、聞いて悔り南無三寶、どうぞ恩義が送りたいと、思つて暮す其の中に、不圖手に渡りし鶴の香爐、左に右これを買ひ求め、再び殿へ差上げて、お家の再興願はんと、やう〳〵半金才覺も、無理な工面で手に入る香爐、今日お泊りを幸ひに旅宿に御座る民部樣に、お渡し申せば大丈夫、まづ一方は片づいたが、サア是れからが金の工面と、急いで歸り心の目算、先刻こなたが咄の中、涙金とて親御から、貰つたとある五十兩、見たが此方の因果のつくばひ、島紛失の切られ與三、殊に配符の廻つた身の上、品によ

久次「コレお富〳〵。」 お富「どこにお出でだえ。」 久次「こゝに居るよ。」 お富「そこにかえ。」 淨瑠璃「聲なしるべに突き出す白刃。」ト お富、久次の胸さきへ出刃を突つかける。 久次「おれだ。」 お富「危い事の。」 淨「口ではいへど女のひ弱さ、總身に冷汗とつおいつ、久次は爰ぞと胴をする、探り寄つたる暗紛れ、お富は猶も一生懸命、隙を窺ふ背後より、ぐつと一かせ斬り下れば、あつと一聲七顛八倒、音に驚く與三郎、むつくと起きて起ち上り。」ト お富、急度なつて、久次を後袈裟に斬りつける。この物音に與三郎蒲團はね除け急度飛び起き、 與三「コリヤアお富といひあはせ、俺を殺すな。」 久次「ム、殺す所か訴人するワ。」 お富「赦しておくれ。」 淨「モウたまらじと突掛るを、突退け斬付け爭ふ機、肋をかけて乳の下、ぐつと貫きとばしる血潮、痛手に屈せず驅け出るを、遣らじと止むるも眞の闇、絶體絶命女の一心、呼吸をめどの滅多突き。」ト 此の中にお富久次をとめる心にて、是非なく所々へ手を負はせる事、與三郎身を退けながら支へる事、總て暗黑の模樣宜しく、文句の中にうごき有りて、久次よき程に薄傷を所々に負ふ事。ト お富の手先を止めながら、出刃を持添へ、 淨「とめる出刃を我が腹へ、ぐつと突き立て深手の苦痛。」ト 其の儘久次あつと苦しみ大聲、お富與三郎思入ある事、是れにて一室にありし行燈へかけたる與三郎の衣服、風の音して落ちる。是れにて皆々見合はす事。 淨「おほひし衣おち燈火に。」 與三「ヤわれと吾が手に。」 お富「此の重傷は。」 兩人「ヤ、、、。」ト兩方よりおもひいれ。

亭主を囘護ふ心か。」お富「何のさうでは。」久次「但しは俺への面晴に、我が手にかけて殺して仕舞ふか。」お富「サアそれは。」久次「殺す事は出來ねえか。」お富「サア。」兩人「サア〳〵〳〵。」久次「汝はマァひつ腰のねえ女だなア。」淨瑠璃「心ありげな一言に。」お富「退引ならぬお前の賴み、女の愚癡な心から、征にかゝる此の身體、どうなるものかな、仕方がねえ、ワナ。」久次「そんなら汝やァ思案がついたか。」お富「アイ、義理も絲瓜もあるものかな。」久次「恰好今が寐入ばな。」お富「併し女のか弱い腕で。」久次「ナニ寐鳥も同然、俺も傍から。」お富「そんならどうでも。」久次「燈火を持つて來い。」ト是れにて露土器の袖火をよき所に持つてくる。淨瑠璃「謀し合はせる心と心、善か惡かは胸の裏、隔ての障子の神ならぬ、いさ白川の夜半の鐘、勝手馴れたる下流し、取り出す研石出刃庖丁、研ぎ立て〳〵押拭ひ、夜風に一室うば玉の、闇は文なし忍び足、差足拔足窺ひより。」ト本釣鐘風の音、下手に臺付の砥石、手盥へ杓柄にて水を汲み、誂への出刃庖丁を出して、研ぐ事よろしく有りて押拭ひ、お富わざと燈火を吹つ消し、暗がりになる思入。久次「なぜ燈火をば。」ト久次さぐり〳〵、佛壇の引出より藥包を出して懐中する。このとき正面の障子ばらりと引拔く。內に與三郎手甲脚絆にて、蒲團にくるまつて寐てゐる。著付は行燈へ引きかけある故、闇の模樣になり、お富久次よろしく有りて、久次は耳を寄せ窺ふ。お富是非なく殺さうといふこなし。尤もお富、久次を斬る心。雙方よろしく小聲にて、

あうて、其の悪縁が身の錆と、命の恩ある血筋の兄も、縁も何時しか絶え果てて、一生連添はうと思ふ其の人は、この身すがらがなれの果て、義理ある今の夫へも、引くに引かれぬ二張の弓、任意にならぬが憂世といへど、あんまりしがない身の上だなう。」ト此の時久次暖簾口より出て、久次「お富、まだ手前寐ないのか。」お富「オヤおまへお歸りかえ。」久次「相手のねえ獨語、熱病か狂氣ぢやァあるめえし、夜更けさふけに何の事だ。」お富「サアこれはナ。」久次「ア、解つた、さきの亭主の顔を見て、手前は性根が狂つたな。」お富「よしておくれな、とんだ腎助だネ。」久次「そんなら汝ャア未練はねえか。」お富「アイそんな人ぢやァ有りませんよ。」久次「よし、其の性根に違ひなくば、唯一思ひにやらかして仕舞へ。」お富「エ。」久次「今日飛込んだ與三郎、ありやァ立派に名乘つて出る男だと思つてゐるか。」お富「彼の通りいふからは、何で間違あるものかナ。」久次「それだから不可え、どうして／＼、大層な事をいつたとて、高が商人の子息株、いくらすれてもお坊樣だ、中々名乘つて出る根性骨があるものか、男同士の義理張で、深切らしく取留めたが、お手が入りやァ關係合、よし又逃して遣つたとて、捕へられりやァ矢張引合、殊に手前の以前の亭主、今目の前でまごつかれちやァ、怯けた樣だが寐覺がわるい。配符のまはつた切られ與三、此方の身晴に訴人しようか。」お富「そりやァ餘り卑怯といふもの、一旦番うた詞もあり、それでは男といはれますまい。」久次「お爲ごかしにいひ曲げて、以前の

好みの久次の模樣つきし袷、又は單物でも、後の仕込に著更へさせる事、すべて文句の中に、こなしよろしく、與三郎著てゐる衣服を脱いで袖だゝみ、脚絆を脱れといふ仕方、與三郎此のまゝに居るといふこなし、囁く事など宜しく、此の中に別の行燈を持ち出し、障子の内の枕許へ、煙草盆など運ぶ事よろしく、此の中に與三郎お富兩人こなし有つて、牀の合方。お富「モシ愚痴なやうだが、名乘つて出ずに、何處でか一遍身を隱し、どうか爲樣はあるまいかネ。」ト寄りかゝり思入。與三郎こなしあつて、與三「エ、又しても未練な事、凶狀請けて死ぬ時に死なねえとな、死ぬにも勝る身の恥を、縱ひお主も知つて居ようが。」お富「とはいふものの、どうか此の儘に。」ト思入。與三郎お富を突き退け、與三「ドレ一寐入やつつけようか。」トお富ぢつと差俯首く。淨瑠璃「蒲團かむりて臥しにける。」ト與三郎枕ひき寄せ、蒲團被り寐る事、時の鐘、牀と下座の合方よろしくあしらひ、風の音。お富こなし有りて、隔ての障子しめる。正面の障子も是れにて閉める事、内に行燈の燈火さす誂へなり。淨瑠璃「日頃の勞れわれ知らず、結ぶ假寐の夢の間に、過ぎ來し方を思ひやり、お富はひとり寐もやらず。」トお富舞臺のはうへ以前の道具の行燈をおきて、一室の內の樣子を窺ふ思入、下座の合方、よろしく時の鐘のあしらひ有りて、お富「思ひまはせば妾ほど、不幸の者はない、邪見や他人の手に育ち、藝者勤めや人の世話、其の浮沈み幾度か、木更津にゐる其の中に、此の與三さんに思はれた、心と心がゆき

どうでも彼奴が敵の手がゝり。」ト思ひいれ。お富「これは鶴の香爐を隱して江戸へ身を忍び、此の秋までに鎌倉へ、上つた上で香爐を、海老名郡司へ渡さうと、約束の此の手紙。」ト文字を見てこなし有りて、「さうして此の筆は覺えのある。こりや妾が以前世話になつた、源左衞門殿の此の手蹟。」ト思入。與三「ム、。そんなら是れは源左衞門か、今相生の話といひ、乾兒をつれて鎌倉へ、モウ上つたに違へはねえナ。」ト思入、お富もこなし有りて、お富「お前の生みの母さんを、殺した敵も。」ト思入。與三「これまだ其の上にこの江戸へ、本海道では人目に立つと、中仙道へ廻り路の、風の便りに聞いたには。」ト右の手紙へこなし有りて、「此の香爐の紛失より、惡人めらが讒訴に、血筋の兄の左近殿は切腹し、實の親父の隼人樣は屋敷追放、穗積の家は絕え果てたと、來る途すがらに聞き取る風聞。」お富「そんなら實の兄さんも此の世を去り、血筋の父御は浪人の、どこに如何して御座んすやら。」與三「廻り逢ふともお顏は知らず、如何なる宿世の。」兩人「惡緣ぢやなア。」ト兩人抱き合ひ、愁への思入、淚おとす。時の鐘、風の音。兩人氣をかへ、與三「ア、なんの事だ。」ト氣をかへて、「コレ夜が短いワ、早く寐かしてくれないか。」ト時の鐘、これを牀の淨瑠璃になる。淨瑠璃「又つぐる鐘更くる夜の、早苗にそよそよ涼風や、いとゞ淚の梅の雨、妻がさねして蒲團さへ、十編の菅薦まかせぬ義理に、隔つふしども障子ごし。」ト右の中にお富、與三郎の姿を見て、悄々したるを憂へてこなし、佛壇の下の押入より、

も、お二人さんの前でいふぢやァねえが、此の與三郎さんが若旦那の時分、木更津の一件も、不圖した事からお二人が身の上、其の時私も關りあひで、すでの事ぶつ殺される所を、漸う助かつて、今ぢやァ斯うなつて居ますが、モウ／＼思ひ出すと慄として、氣色がわるくなりますが、お前さん方も、あれに懲りて氣をお注けなせえ、イヤとんだことでござりましたねえ。」ト思入。與三「これ無駄をいはずと早く行きねえ。」お富「モシ、相生さん。」ト與三郎へこなし有りて「必ず他へ此の事を。」ト手で仕方して、沙汰なしだと思入。藤八「どう致して私が。」ト兩人へこなし有りて「お早くお休みなされましよ。」ト風の音、合方、時の鐘にて、そは／＼して下手へはひる。與三「いつでもそゝくさして居るが、たのもしい男だワエ。」お富「サァあんな咄を聞くと、何から言はうと氣がどきまぎして、ツイ咄も前後にて。アノ日外鎌倉の野陣が原で、人手にかゝつて死になすつたお前の母さん、殺した人はあれぎりに、其の手がゝりも知れないかえ。」與三「サァ俺も大方斯うだらうと心には浮んだが、それだというて斯う／＼といふ、確乎した證據もなく、其の中に縛られ、お主とも別れ／＼。到頭島へ行つてからは、どう思つても方法もなく。しかし島を破つて來る道で、不思議に手に入る此の手紙。」ト夢ざめに手に入りし密書を、叺煙草入より出して見せる。お富とりて讀む事。「先の宛には海老名の郡司、送つた奴の名を隱すは、どうで胡散と思ふにつき、彼の香爐へ心をかくるは、山鹿毛平馬といふ武士、

さつぴの大一座、私を伴れて來いといふお客があるといふ事故、何でも有り難い儲け口と、直に顏を出した所が、お聞きなせえ。車座にならんだ中、六七人は見た顏だと、考へ出して吃驚さ。源左衛門さんの乾兒の衆さ、もし此の内に赤閒の親方が居なすつたら、どんな目にあふ事かと、ぶる〳〵慄へる杯を一つ請けてゐる中に、彼の黑砂の次郎藏さんが、喰ひしめての問はず語り、お前さんの咄が出て。モシお聞きなせえ。」ト與三郎へ對ひ「あなたへ種々な罪を被せて、遠い所へ憂目を見せたも、矢張源左衛門さんの軍畧だと、私はきつぱり聞きましたよ。」ト與三郎お富顏見合はせ思入。お富「そんなら主を罪におとし、たうとう島へ送つたも、矢張根ざしは彼の人が。」トおもひいれ。與三「海老名へ久しう入り込む風聞、なる程彼奴が所爲で有らうよ。」ト思入。甚八「私が斯ういふと、どうかお前さんの氣を起たせる樣でござりますが、あんまり慘いしかたと思ふから、ツイ申しました。是れさい言へば用はない、モシ油斷のならねえ事を聞きましたよ、どうぞ早くお前さん、人の氣の注かねえところへお出でなされいよ。」與三「案じるなよ、隨分壯健でくらすがいいぜ。」ト此の中そは〳〵立ちかけ、甚八「併しマアお二人が、此の譯の始まりより、私がひよんな事をして、たうとうこんな譯になり、また思はずも今爰で、モシお富さん、若旦那。」トこゞろになり、こなし有りて「今夜も矢張御亭主が留守でござりますぜ。それでも今日のは久次さんが、いひつけなされた蒲團だから、氣遣ひはなければど

郎を見て合點の行かぬ思ひいれ。與三「ム、違へねえ。甚八だオイ相生さん、工面をよくして、片手間が損料屋か、うまくするな。」ト甚八、與三郎を見て、甚八「エ、。ありやア何處のお人だえ。」　お富「これナア。」ト囁く。甚八吃驚ふるへ出し、甚八「エ、、、。そんならあのとき。」ト傍へより見て、「違へねえ若旦那與三郎さん。」トいひかけ、はつと口を押へ思入あつて、「モシとんだ譯で御座りましたねえ。」トよろしく思入、こは〳〵してゐること。與三「ちつとは譯も聞いたらう、見やれ此の態を。」ト甚八戰々して、甚八「誠におめづらしい、ツイお見外れ申しました。」　お富「マア落ちついてお出でなねえ。」　甚八「落ちつかうと思つても、私も何だか氣になる事が有りますから、怖い樣で氣味がわるくつて、それで身體が戰々しやす。」　お富「一つお上りな。」ト茶椀をさす。甚八慄へながら、甚八「ア、、、有りがたう。」ト茶椀を請ける。與三「おれが噂を聞いたのだらう、何も怖い事はねえワエ。」ト此の中大きな茶椀で一つ飲み、甚八「少し心が落ちつきました。イヤ怖いといへば、恐ない目に逢ひました。」　與三「どんな目に逢つたのだ。」　お富「早くはなしてお聞かせな。」　甚八「そりやア外でも御ざりません、さうしてこりやア。」ト與三郎へこなし有つて、「お前さんにも咄さねえければならねえ事さ。」ト引きかけし提灯へ心づき、一寸立つて消し、「其の怖いといふのは、四五日後に本宿の然る店の二階へ、私が馴染の屋敷の客人を勸めて、仕舞うて戻りがけ、表座敷の亂暴な、とつぴ

通り羽目板、此の所に勝手道具、棚、小どりまはし土竈、暖簾の上に佛壇、これより上に九尺の障子家體開閉、この内茶壁綺麗に、下手へ撥釣瓶の草井戸、この後生垣、いつもの所へ誂への廻戸、總て久次の宅奥の體、ここに好みの行燈ともし、蝶足の膳へ丼肴の道具、外に小さき廣蓋へ猪口、燗徳利など、誂への通り置き竝べ、土瓶かゝりし箱火鉢をおいて、爰に與三郎お富兩人、行燈の傍に居て酒を飲む體、誂への合方、風の音時の鐘にて道具まはる。

ト右の合方にて、與三「それぢやァ何か、彼の久次がお主にひし隱しに百兩といふ代物を。」お富「あいサ。妾にわけも話さずに、今言うた、道具屋から買ひ請くる約束も、金に手づかへ、海松杭の松五郎の手から、半金の五十兩をば借り受けて。」ト思ひいれ。與三「それ程にまでして欲しがる代物、先刻落した其の時に、見かけた形はどうやら俺が。」お富「わたしも其の時眼づいたが。」與三「どうぞ正脈を聞きてえもんだ。」ト時の鐘、風の音。やはり右の合方になり、人音する故兩人こなし。此の時橋懸りより甚八、傘の印つきし貸蒲團を二枚肩に引懸け、佐野甚と記したぶら提灯をともし、下駄がけにて出て、門口より入りながら、甚八「お富さん、今夜もお客ださうだが、さつき久次さんがお寄んなすつて、綺麗な蒲團を二枚、遣してくれろとおつしやつたが、ツイ人が無えのでおそくなりました。」お富「お前が持つてお出でかえ、お氣の毒な。」與三「聞いた樣な聲だな。」ト此の中お富立つて、甚八も内へ入り、蒲團をかたへに置くこと。お富「聞いた筈だワナ。」ト此の中に甚八も立つて内へ入り、與三

物は、贋と知つて五十兩、どういふ心で流したのだ。」松「知れた事。中々あま口な梃では、迂闊に行かぬあの久次、甘々欺いだ其の上で、俺が金をば貸付けても、中々明日の朝までには。」長九「お前の方へ五十兩、私の跡金が五十兩、どうして百兩出來るものか。」松「そこを附込んで彼のお富を、俺が方へ引上げる、手段の壺へすつかり陷つた。其の上確かに今家へ、旅姿の來た奴は、慥かにあいつが與三郎。」長九「其の與三郎は元はといへば、私の主人の子息だが、今は方々配符が廻り。」松「確かに彼奴なら島破り、此奴も目明しへ訴人すれば、一廉元手にありつく仕事、これ。」ト長九郎へ囁く事。長九「そんなら私は跡へ殘り、家の樣子を嗅ぎつけて、樣子によつたら明日の手筈に、さうしてお前は是れから何處へ。」松「首尾よくやつた此の品を。」ト懷中へこなし有つて「今夜の中に彼の人へ手渡して、俺も昔の身の上に、又なり出づる手段が肝心、是れから直に川崎まで。」長九「そんなら私は跡で何かの。」松「首尾よく頼むぞ。」長九「大呑込さ。」松「これ。」ト囁く。兩人よろしく科あつて、長九郎は上の方へ、松五郎は此の時懷中より袱紗包の香爐を出し、思入して橋懸りへ入る。浪の音、時の鐘にて此の道具ぶん廻す。

本舞臺、正面より少し下へ寄せて、平舞臺九尺餘の折廻し世話家體鼠壁、眞中に暖簾口、下手へ折廻し、壁の下

ト唄になり、久次門口をぴつしやり、與三郎お富思入、久次橋懸りへ入る。跡風の音。時の鐘。與三郎こなし有つて、お富「今行きがけに取りおとす。」與三「袱紗につゝんだ重みの代物。」お富「お前の望みの。」與三「どうか形も。」ト思入。お富「モシ。」トさゝやく。與三郎こなし。與三「そんならあれを、ムム。」ト思入。お富「咄はおくで。」與三「お富來やれな。」ト唄になり、時の鐘。與三郎お富こなし有りて奥へ入る。跡合方彈流し、時の鐘、浪の音になり、門口を屋臺下手へよせて、件の腰障子の屋臺の下へ、建仁寺垣建てつゞきし、

本舞臺、右の家の横手の道具になる。すべて三方廻しの誂へ、半分廻す事。

ト爰に以前の海松杭の松五郎、尻端折にて立身、同じく以前の長九郎、これも頰かむり、尻端折に立ちかゝり、長九「兼てお前が賴みだから、此方も右と左の手へ、金をせしめる鎹儲け。」ト以前の財布を出し、「お前が久次に貸しなされたコレ彼の金も、まだ爰に。」松「それぢやア金は此方の手許に、まだ餘所外へ渡さぬのか、ム、。」トこなし有りて、「其の大金の商賣を、させて遣らうばつかりに、此方もお主を合槌に。」長九「其の合槌を賴まれたが、先刻のはずみに彼の品は、お前首尾よくやらかしたかえ。」松「その段取は極上々。」松「誠の物はとつくに俺が。」ト懐へ思ひいれ。長九「併し先刻の代

以前の亭主が來たから、今の俺が乙に通りものがつて、餘所へ行くといふ譯ではねえ。俺ア實に用がある。外の者では有るめえし、俺に何が遠慮があるものか。」お富「あんなにいふからマア可いワナ。」與三「そいつは鹽梅式がわるいなア。」トもぢ〳〵してゐる。久次「しかし湯を使ふなら使はせて、早く牀を取つて寐かすが可い。」ト考へ、「とはいへ俺も取付世帶だから、夜著の都合が惡い、往きがけにさの甚の宅へいひつけて、綺麗な蒲團を二枚ばかり、爰へ遣すワ。」お富「さうしておくれ、お前それぢやア託けておくれよ。」久次「よし〳〵言ひつけるワ。」與三「とんだものが尋ねて來て、厄介をかけるなア。」お富「何のお前、遠慮はないよ。」與三「それぢやア何うでも久次さん、お前出かけるかえ。」久次「今夜往かねえとならねえ譯だ。」ト立戻り、お富へこなし有りて、「カウお富、もし今夜遲くなると、一人でぼつ〳〵歸られねえから、さうしたら夜明方に俺が歸る。其の氣で居やれ、早く戸締りをしてゆつくりと寐かすが可い、俺が歸らねえ其の中に與三郎殿、餘所へ行つてくれちやア恨みだよ。」與三「有り難い其の深切、詞に甘へて世話になるとはいへ、長らくかうしては。」お富「なるたけ早く戻つてお出でよ。」久次「承知だよ。」ト此の中お富ぶら提灯へ燈火をつける事、履物出す事よろしく有りて、「そんならば與三どん。」與三「久次どん。」久次「留守を隨分。」ト此のとき以前の袱紗包の香爐をおとす。與三、お富「ヤ。」ト兩人こなし、お富手をかけるを、久次手早く懷中して、久次「ゆつくりと咄しなせえ。」

久次。」　久次「それも眞面目になりたての、堅氣で彈く十呂盤染。」　與三「此方は人目を瓶覗き、見かけた家の噂さんは。」　久次「此方が以前の女房のお富。思ひがけなく今はしも。」　お富「其の濃淺葱重夫。義理と情の半染も。」　與三「くめば一河の水淺葱、流れ渡つて三尺が。」　お富「不思議な縁で咄しあふ。」　久次「どうか芝居に。」　三人「ありさうだなう。」ト三人思入。時の鐘。久次こなし有りて、　久次「ときに與三郎が思ひがけなく來たからは、どうかと思ふが、何よりの御馳走といふのは、此の間さる旦那の所から、熱海の溫泉を樽で貰つたから、据風呂を拵へてある。そこは此の邊の氣散じよ、後の崖下の地面が廣いワ。コレ鐵砲の中へ少し炭をぶち込むと、直に沸くワ。コレお富、與三郎どんに湯を使はせて、何ぞ口に合ふ物を拵へて饗應ふが可い、俺ア一寸今のうち、しかけた用を片づけて來るから。」ト立ちかける。　お富「今からお前どつちの方へ。」　久次「ナニ遠くではねえ、近所までよ。」　與三「オイ〳〵久次どん。俺を一人爰へおいて、跡はお富と唯二人。それぢやア可笑しな鹽梅だ、マアお前が宅に居てくれねえぢやア、俺もかうして居られめえではねえか。カウお富、イヤお富さん、御亭主をとめねえな。」　お富「お前マア、今夜に限つた事ではあるまいに、マア内にお出でなネ。」　與三「俺アそれでは直に行くよ。」ト立ちかける。　久次「これサお前も野暮をいふものだ、お富はお前の女房ぢやアねえか。」　與三「それだから程が惡いワナ、今は此方が亭主ではねえか。」　久次「サア其の以前の女房のところへ、

手前も以前の亭主ぢやァねえか、何とか傍から口を利いて、與三が心を落ちつかせろよ。」お富「アレあの通り久次さんの深切を、無足にせうより寛りと、今夜は此所に心を休め、落著いて居ても可いではないかネ、何氣遣ひがあるものかな。」與三「二人が詞は嬉しいが、他人の家なら格別よ、以前譯あるお富がゐる久次故、どうで名乘つて出る身體、此方の身分は厭はねえが、後の難儀をかけるのも。」久次「イヤ其の心遣ひ尤もだ、併し俺もこの近所に相應に、心易くしておく者もある事だ、滅多に爰へ踏込ませるやうな事はしねえワ。」お富「マァそれだから、落著いて緩りしても可いぢやアないかナ。」ト與三郎もこなし有りて、與三「なるほど二人がそれ程にいうてくれるを、このまゝに振りもぎつても行かれねえ。此の世のなごりだ、せめてのこと、今夜は緩り世話にならう。」久次「それが可い〳〵。」お富「マァ煙草でもお上りな。」久次「なにか味いものでも拵へろな。」與三「ナニ構ひなさんな、斯うして咄すのが何よりだ。」トこの中茶を汲み煙草盆を出す事などよろしくあつて、久次、與三郎の疵へこなし有つて、久次「なるほど、お主が體の疵は、おれが體よりはまた豪氣だ。どうでも寒さ暑さには。」與三「滿足な體と違ひ、疵にはどうでも惱むのよ。イヤ疵と云やァ、脛に疵を持てば笹原とやら譬へがあるが、今こゝへ來かゝる時、誰奴か後から跟けて來ると思つて、早足に急いだ機、手拭を落したから、彼所の障子が目について。」ト障子へ科有つて、「思はず、其の手拭屋の御亭主は、島で馴染の觀音

母さん父様に、お變りもないのかえ。」 與三「向うに變りはねえにしろ、此方は久離斷られた身の上、どうする事もならなんだが、不圖した譯で恩のある、親父殿に唯一言、詞を交したが此の世の思出。」ト思入。 お富「そんならそれが泣き別れ。」 久次「ム、、ム、。そんなら江戸へ疾つくにから。」 與三「島を破つた配符が廻つて。」 お富「エ、、、。」ト思入。 久次「コレ。」トお富を制し、與三郎また久次へさゝやく。 與三「こんな始末よ。」ト久次こなし有りて、 久次「そんなら海老名のおかゝりで、ハテナア。」ト思入。 與三「そこで俺もこれまでだと覺悟を極め、直に名乘つて出づる意で驅け出したがナ、俺が子供の時分から、守をしてくれた忠助といふ老人が、段々譯を言つて俺への頼み、何卒一旦落延びてくれろといふ、其の老人の心根が不便だから、爰までは忍んで來たが、矢張配符は廻つた樣子、今宵の中に鎌倉へ走りつき、立派に名乘つて出る時は、江戸の親へも難儀もかゝらず、親の手前へ死恥をかかせる事も薄らぐ道理、俺が心は臍を極めた。」ト立ち上りかけ、「カウ久次どん。」トお富へ科有りて、「お富が事も頼みます。お富、必ず汝も見すてられるな。隨分ともに無事で暮しやれ、俺ア是れから名乘つて出らア。」ト立ちかける。「後の廻向を頼んだぜ。」 久次「よく名乘つて出る氣になつた、いい覺悟だ、感心したが、餘人の家ならいざ知らず、俺が所へ來るからは、まさか此の儘歸されねえ、切めて今夜は寛りと、爰に足を延ばして寐て、又其の上でどうせうと、篤り相談のしようも有らう。コレお富、

イ一寸足を洗つて、世間の交はり出來ねえ身にするも可愛さうと、俺が緣邊だと引取つて、それから玆へ伴れて來たのよ。」お富「聞かしやんす通り、深切な久次さんのお世話故、やう〳〵妾が身拔をして、爰へ來て居る其の中にも、段々島の咄を聞けば、中々聞くより恐ろしい所ゆゑ、永う命は保つまい、どうで此の世に亡き人と、妾は思ひ諦めて、切めては日每に香花を、心おきなく手向くるは、心の知れぬ其の人へ、身を任すより何かの事、譯を知つた其の人を、力と賴んで月日を送る其の中に、思ひがけなくお前に逢ひ、其の面目なさ恥かしさ、何卒料簡して下さんせいなア。」久次「お富からも言ふ通りだ、今更俺ァ面目ねえ。」このうち與三郞ぢつとこなし有りて、與三「イヤ其の斟酌には及ばねえ、どうで此方も島にゐて、滿一年はまだしもだが、二年と命は保つめえと、行つた時から覺悟はつけたのだ。よくこそお富を引取つて、深切に世話をしてくれた、忝いと禮をいはうが、お主を惡くなに思はう。またお富も、外の亭主を持たず、人に知られた觀音久次を見立てて、よくも亭主に持つた、それで俺も心がやすい。」お富「そんなら妾へ恨みもなく。」久次「この久次へも疑念をはらして。」與三「そこが江戶子、男は當つて碎けろだワ。」久次「流石は與三郞、感心したワ。」お富「妾もそれで少しは心が落著いたワイなア。」與三「されば此方の推量通り、頻りに江戶が懷かしく、艱難苦勞で故鄕の空、元山町の親里の、どうぞ樣子が聞きてえと、昨夜尋ねて往つたればナ。」ト思ひいれ。お富「お前の

やした、彼これする中出船となり、此方は傳も荒磯の、沖の小島へ送られた、其の戻り船に確かこなたは。」ト思入。 久次「サア、聞きやれ、有り難いお赦しの沙汰で、程なく此方は故郷へ歸り、古い馴染や友達も、無事に戻ればやれこれと、賴もしづくで店を借り、馴染んだ土地は觀音前、片名はやつぱり觀音の、久次と人に立てられても、以前の惡の夢もさめ、氣も入れ替へて堅氣暮しさ。」 與三「それだから目でたいといふ事よ。」トお富へこなしあつて「カウ久次どん、イヤ久次。俺が口からどうした譯だと聞くのは、何だかひけた樣で、チツト言ひにくいと思ふがな、併し聞かずにはおかれねえ、此の女は如何した譯で、爰の家に居りやすえ、どうぞ譯を聞きてえネ。」ト久次お富思入。 久次「アノ何かお富の事か。」 與三「さうよ。」 久次「ム、、コリヤア。」トこなし有りて「お主言やれな。」トお富思入。
お富「何だな、お前お言ひな。」 久次「エ、手前から咄せよ。」 お富「マアお前からさ。」ト兩人よろしく、
與三「これさ、夜が短いわ。はやく言やれな。」 久次「ム、、ハ、、、、。」トよろしくこなし有りて「こりやア斯ういふ譯よ、手前とお富と二人が間、種々と苦勞苦患して、其の中不慮な譯となり、此方は流人となつた時宜、こりやア言ふにも及ばぬが、今言つた戻り船で、俺が鎌倉まで歸つた時、まだ此のお富は牢を出ず、引取る人がねえとの事だ。そこで俺も以前江戸に居た時分には、兩國でお富とは心易くしやつた間、棄てておく其の時は、據なく此の女は、忌な所へ身を墮し、さうなつた時はツ

だ。」久次「ハテ止めねえで、俺が家だ、氣遣ひないワ。」與三「それでも俺ア……。」ト立ちかけるを、上へつきやり、久次「エ、はなしがあるワ、マア待たつし。コレサ見て居ずと草鞋でも解いてやれな。」お富「アイ。」ト與三郎兩人氣味合ありて、與三郎草鞋を解く。お富笠をとつて片よせ、こなしあつて與三郎は上の方へ、久次は外を窺ひ、門を閉めて思入あり。與三郎へむかひ、久次「カウ與三郎、俺アよもやと思つたら。」お富「あの恐ろしい。」兩人「島を破つて。」與三「察してくりやれな。」トお富ぎつくり思入ありてさし俯く。久次「素敵な事を遣つたな。」ト思入ありて好みの合方。「今もお主が身の上を、爰で咄してゐた所だ、ナアお富。」お富「今宵お前に逢はうとは、眞に夢さら知らぬこと。」久次「マア何にしろ壯健でめでたいの。」與三「イヤ其のめでたいのは此方の身の上。俺が鎌倉で罪を被て、船に乘つたは去年の今頃、風のもよりで潮待の、其のとき始めて近附になつた所は、ア、何とか言つた。」久次「オ、俺が流されて居た所は、伊豆の岬の高島よ。」與三「ム、違えねえ高島々々。其の高島でお主に逢つたわ。丁度十日程も交際うたなう。」久次「さればよ。」ト思入。お富こなし有つて久次に對ひ、お富「そんならお前のゐた島と、與三郎さんの行く島は。」久次「違ふのさ。其の潮待の流人船、多くの人には間を分けて、切られ與三と肩書の、墨黑々とさげ札は、こいつは立派な惡黨と、俺が方から近附になつてお主が身の上の。」與三「其の概畧を咄した上、イヤ其の時は此方にも、大きに世話になり

向うより一散に走り出で、直に内へはひり、慌てて戸を閉める。兩人共恟りして、久次「エ、恟りすらア。」お富「お前は誰だえ。」ト與三郎思入あつて、與三「御免なせえ。」ト四邊を見まはし、手拭に心づき、「ハヽァ手拭屋だの、カウ手拭を一筋くんなせえよ。」久次「アイ〳〵。」ト行燈出し、燈火つけて居て、「それお客だ、手拭を出してあげろよ。」お富「ハイ〳〵今お目にかけますよ。」與三「どんなのでも可い、はやく截つてくんなせえ。」お富「それでも模樣を御覽なさいませ。」ト掛けてあるのと、ほかに卷きたるを持ち出すこと。與三「ナニどれでも可いワナ。」ト一寸見て、「其の不意氣な半染がよからう。」お富「これでござりますかえ。」ト卷きたるを取り上げること、此の時兩人顏見合はせ、「ヤどうやらお前は。」與三「お富だな。」お富「ほんに與三さん。」久次「そんなら島を。」與三「ヤ此方は久次。」お富「ひよんな所で。」ト思入。久次、與三「逢つたなウ。」トこの中三人よろしく、與三郎を久次内へ引入れ、入れ代つて門口をぴつしやり閉る。三人よろしく思入、與三郎氣をかへ、與三「これ久次どん。何にもいふには及ばねえ、俺がかうして居るからは、お主の胸には譯は知れよう。」トお富へこなし有つて、「可い樣に賴みやす。オイ嬶さん、早く手拭を截つてくんねえナ。」お富「アイ今截るワネ。」ト此の中に手拭をきること、與三郎當百錢と浪錢を出し、手拭を取つて久次をかきのけ、門口を開けようとして、與三「お世話でござりやした。」ト出ようとするを、久次とめて、久次「カウ待たつせえナ。」與三「なぜ止めるの

其の内に、不圖した喧嘩の中へ飛び込み、退くに退かれぬ機になりて、對手へ大勢疵をつけ、俺も其の時この通り。」トからだと脚を卷り見せて、體軀も疵を受けたが、對手に卽死が二三人、其の科により伊豆の島へ、流されてゐたのも凡そ五六年。其の中お主も與三郎と、苦勞をしあうた曉が、たうとう與三郎は重い科で、沖の小島へ捨てられた、其の戻り船へ大赦にあひ、此方は故鄕へ新世帶、お主と二人で此の通り、暮して居るのがよくせきな、因緣づくだと俺ァ思ふよ。」お富「そりやァお前のいふ通りさ、妾も一旦苦勞をした彼の人が、どうで島へ行くからは、あの身軀では長い事、島で命は棄物と、思ひ諦め此の通り、今はお前と夫婦になつて暮すのも、譯を知つたお前だけ、切めて跡で香花を、快く手向けたさ。」久次「そりやァ俺も承知だわ。併し前の亭主も身軀の疵、今の亭主も此の通り、お主は疵のある男に緣があるワ。」トこなしあつて、「併し與三郎は俺がやうな、如此毛むくじやらな脚ぢやァあるめえ、ハ、、、。」トこなし。氣をかへ、「酒があるなら燗でもつけろナ。」お富「アイ支度はしてあるよ。」トときの鐘の入相を打つ。久次「モウ日が暮れるワ、ドレ燈火支度はおれがしようか。」ト合方になり、お富は膳立したる蝶足の膳の上へ、小鉢茶椀丼などのせたるに、燗德利猪口を出し、火鉢へ鐵瓶をかけ、酒の支度の事、捨白よろしく、久次は行燈持ち出でて、燈火を點す事、此の中に向うより與三郎、三度笠合羽脚絆手甲、前幕の品にて扮裝せし體、件の笠をかざし、ばた〳〵

の金であらうが、世間は變らぬ天下の寶、お前が頼むものだから、間に合はせた分の事、それとも借りて氣が濟まずば、すぐに此方へ返しなされえナ。」ト久次思入。久次「イヤ返すめえ、借りておかう。遣つた後で譯を聞き、どうなるものか仕方がねえ、長くは借りねえ、明日の朝まで。」松「此方は明日が明後日でも、そこは其方の勝手次第、併し判證文はしねえでも、お前も觀音久次さん、間違はあるまいね。」久次「ハテ駄目を推すには及ばねえワナ。」松「面白い、其の詞を忘れぬやうに。そんならば久次さん、跡へ鹽花を振んなせえよ。」トこなし、唄になり橋懸りへ入る。久次思入、時の鐘。跡合方彈流し、此のときお富何心なく奥より出る。久次「お富今歸つた。」お富「オヤお前いまお歸りかえ、大層手間が取れた、どこをうそ〳〵ほつき歩いてお出でだえ。」トつんとする。久次「ヘン歸り早々、亭主に權つくを喰はしやァがるぜ、カウ男は外を歩くのが商賣だ、そんなにけち〳〵いふなえ。」お富「それでもお前の留守へ、いろ〳〵の人が來るからの事さ。」久次「來なくつてさ、人出入の多い家が陽氣でいいものだ。」お富「ほんに其の陽氣といへば、噺家の相生さんが來たから、摺物の事を言つたら、歡んで歸つたが、彼の人も此の土地へ來て、貸蒲團屋をして居るとは氣が注かない、眞に縁といふものは、不思議なものだねエ。」久次「そりやァ然うよ、併し何が縁が不思議だと言つても、凡そ不思議なのは、お主と俺よ、お主が以前藝者商賣して居る時分は、俺も其の頃若い身空で、隨分心易くした

の袱紗包の香爐を開けようとする。海松杭も思入有つて見る故、一寸懐中して思入。合方、時の鐘。
久次「松五郎どん、何にしても此方のお蔭で、かたじけねえ、これといふも先だつて、濱川のあの場所で、不圖出逢うて近附になつた此方をば、夢に牡丹餅、五十兩投げ出して貸したのは、餘程昨夕は、出來がよかつたと見えるナ。」松「何のお前、昨夕は何處へも出かけはしねえが、何處ぞの場所の資金にと、持ち合はせた彼の金が、用に足りたは嬉しいのさ。」久次「併し五十兩といふ高を借りて居て、此方の家を知らねえでは濟まねえワエ。」松「私の家は言はずに措かうよ。」久次「言はれねえとは如何いふ譯で。」ト兩人思入。松「私が居處をいふ時は、斯うして咄も爲難いわけさ、素人衆とは違ひますよ。」ト久次ぎつくり科ありて、久次「ム、。素人と違ふといふからは。」松「今では小家へ落ちやした。」
久次「そんならお前の身の上は。」ト思入。「其の小屋者となつたのも、元はといへば木更津で、お富殿をば其の以前、口說いた事が親方の、源左衞門殿の耳に入り、それから此方が疎まれて、仲間の奴には見捨てられ、世間が狹さになり下り、この品川のよせ場へ來て、少し身分は下つたが、其の代りには困らぬ金、昔の仇を恩にかけ、貸すといふ譯ではねえが、幸ひ茲に持つてゐたのが、素人衆の用に立てば、これで私も本望さ。」ト思入。久次こなし有りて、久次「さういふ此方の身の上とは、さつぱり知らずに、イヤとんだ咄だ。どういふ譯で今の金を。」ト思入。松「野伏非人の金にしろ、穢多長吏

半日も待たねえ、早く金をおくんなせえ。」　久次「それだと言つて其の金が。」　長九「金がなければマア其の品を。」ト取りに蒐るを、久次爭ふ中に、海松杭の松門口より顏さし入れながら、包金を五十兩放り出し、　松「久次さん、此の金を遣ひなせえな。」ト久次の前へ投げる。久次取り上げ、　久次「そんなら手許に此の金が。」　松「今聞いた入用には、高が半分足りねえが、樣子に依つたら跡でどうでも、マア間に合はせておきなさいな。」ト內へ入る。　久次「ム、、有り難い。此方も差蒐つた入用だ、樣子によらば少しの間。」ト久次よろしくこなし有つて、「如何にも此方が詞に委せ、それぢやア借りるぜ。サア道具屋さん、半金の五十兩、是れを渡しておくからは、代物は俺が自由、又跡金も明日中に屹と調へて渡すから、さう思つてくんなせえ。」ト金を渡す。長九郎こなし有りて、　長九「なる程、包金で五十兩。確かに受取りました。跡の所は明日中に。」　久次「間違なく調へて遣らうから、それまでどうぞ待つて下せえ。」　長九「よう御座ります、それぢやア何分お約束の、間違はねえ樣にお賴み申します。」　久次「ハテ可いワナ、金を取つたらさつ〳〵と行きなせえ。」　長九「それでも跡が五十兩、きつとお賴み申しました。」　久次「エ、煩い男だぞ。」　長九「オイ呵られた。併しこれでお待ち申した效があつて、先づ商ひも出來たといふもの、併しこれもお前樣がござつた故。」ト海松杭へこなしあつて、「大きに有り難うござります。アイ久次樣、お喧しうござりました。」トテンツ、になり、長九郎向うへ入る。久次一寸右

だと思ひますよ。」トいふ故、久次憤として、久次「これ乙なことを言はつしやるが、それぢやァ俺が彼の代物を引つかけて、遣繰にでも遣つたとおもつて、此方は疑ふかは知らねえが、俺ァそんな小刀細工は嫌ひな男だ。ちつと彼の品には譯があつて、買ひたいと思ふから、お主から預つて居る中に、ヤレ仲直りだの名披露のと、色々なことを頼まれて、それでこなたの方へも無沙汰になつた。彼りやァ俺が買取るから、マアさう思つてくんなせえ。」長九「サァお前樣の方は、俺が引請ける、俺が買はうと、極めはつけてござつても、二兩や三兩の代物ぢやァござりません、大金の品物でござりますよ。それをば玉を引上げて、それなりけりとはをかしなもの。そりやァおまへさん、風が惡いと申すものでござります。」久次「エ、矢張氣障な事を吐しやがる、コレ代物は此の通り。」ト懷より出して袱紗に包みし前幕の香爐を出す。「俺が方に預つてゐるワエ。此方の遣りくりをつけるまで、何で外へ代物を。」長九「そんなら金をお呉んなせえな。」久次「ハテ其の金が爰に有りやァ、直に埒を明けて仕舞ふのだ。」長九「それでは私も迷惑でござります、こちらにはちと望む人が有つて、急に其方へ賣渡したうござります。」久次「それでも俺が先約だワ。」長九「ハテせんやくでも練藥でも、金を早く取らにやア、私の商賣にやァなりませぬ、マア代物を私の方へ。」久次「ハテ俺が買ふワエ。」長九「ハテお前も情の強い、そんなら金を遣しなさいな。」久次「ハテ二三日だ、待たつせえな。」長九「どうして〳〵、

にもつかうされた男だが、今は此の近所へ來て、味な所でお前とも近付になつて、かうして一緒に歩いても、馴染まねえ土地といふものは、世間が見られて、ツイ今の様な奴に逢つても氣障だから、道をよける氣になるのさ。」 久次「何の彼の喜藏なんぞに、何も氣兼が入るものか、マア俺が宅へ來るが可い。」 松「それでもお前の所は。」ト小指を出し、「レコの手前が程が惡いワナ。」 久次「何の構ふものかな、マア一寸一緒に來なせえな。」トこんな筋の事いひながら、宅へ來ること。宅に長九郎、色々退屈の科あつて、 長九「久次殿はまだ戻らぬのか、何時まで待たせておくのだらう、それでも餘り久次殿もずるい人だ。」ト此の内あらましを、門口に久次海松杭聞きゐる。海松杭こなしあつて下手へしのび入る。久次は門口をあけて、ずつと入り、 久次「ずるい男がどうしたえ。」ト思入。 長九「ヤ。これは御亭主、よく戻らつしやりました。」トこなしある。久次も思入あつて、 久次「オイ道具屋さん、お前もまた俺が居ねえ所へ來て、何も彼これやかましく、そんなに言はねえでも、よささうなものだ。」トいひかける故、長九郎きつとなり、 長九「イエ〳〵いふネ、言ひますよ。此の間お前様に初めて逢つた其の時は、お交際のお方が、みんな此の宿の立派な衆、其の中で久次さん〳〵といはれてゐるお前だから、よもやと思つて大金の品、一寸見せろとお言ひなさるから、お貸し申しておいたのだ。其の時からは七日八日、あそこの内證へも來さつしやらず、そりやアお前さん、お名前にも似合ひませぬなされ方

服裝、日和下駄にて、この次へ喜藏、咄しながら出て來り、此の跡より海松杭の松、品川宿の小屋頭の服裝、頬被にて出て來ること。久次「喜藏さん、可い所で逢ひました。」喜藏「お前の宅で、先刻よつぽど待つて居たが、何うも此の一件は内のレコにも。」ト小指を出し、「咄しては惡い筋、委細の事は、昨夕こなたが耳へ入れた通り、又其の外の委しい譯は、こいつを見れば分るのだ。」ト紙入の間より疊みし繪姿を出し、「主の方へ預つておいて下せえ。」ト繪姿を其のまゝ取り懐中して、久次「可うござります。私が呑込みやしたとは請合ふものの、お前方は本職だが、此方はどうも謂はば素人の事だから。」喜藏「ハテさう言つては可けねえ。此方も確かに爰いらへまごついて來ようと思ふから、此方をば頼むのだ。カウ骨さい折つてくれるなら、冗談ではねえ、お出入をする海老名樣や梶原樣から、お前には屹とした。」ト立ちかけるゆゑ、久次「ハテようござります、マア〳〵どうなる事か行つて見ませう、マア任せておきなせえ。」喜藏「それぢやァ何分頼んだよ。」久次「ハテ可いといふ事サ。」ト喜藏は引返し揚幕へはひる。この中に海松杭の松五郎、揚幕より出て來り、喜藏に行き合ふ。喜藏、海松杭を見て兩方よろしく、喜藏は揚幕へ、久次は喜藏の跡見送る心意氣、捨白ある中に海松杭久次見合ひて、松「今のは海老名さまへ出入をする、目明の喜藏だの。」久次「さうよ。此方と咄をしてゐた其の中に、あの男に逢うたから、肝心の咄しかけた一件を。」松「サア私も以前は海松杭の松といはれて、隨分人

さうして昨夕のお顔はえ。」お富「宅の人が以前の友達、大師河原の歸りだと、三四人連で押込んで、たうとう昨夜夜あかしさ。」お村「道理でお賑やかでござりました。」お富「それぢやァをばさん、お前も今夜は家の用を足しなさいナ。」お村「ようござりますかえ。」お富「可いからお出でよ。」お村「それぢやァお願ひ申します、明日の朝はやく參りますよ。」ト甚八立ち上り、お村は蒲團をかたけ、甚八「そんなら姉御。親方へよろしくお頼み申します。モシ道具屋さん御寛りとお待ちなされませ。」長九「アイアイ。」お村「お前所の女中衆も、早く代りを見付けてえものだネ。」甚八「誠に困りやす、いいのがあつたらお頼みまうすよ。」ト門口へ出て、「ハイお喧しうござりました。」ト此の間よろしく捨白あるべし。流行唄になり、甚八お村下手へ入る。お富は火鉢へ炭をつぎなど、よろしくこなし。長九郎延つ反つして、長九「ア、此の久次殿は、モウ戻らつしやりさうなものだ。モシお嬶さん、何時頃おもどりなされませうネ。」お富「どうで自分の宅だから、何時か一度は歸つてくるワネ。お前の口から待たうと言つたのぢやァないか、マァ氣を長く待つておいで、お前のやうな暇人ではないから、構つてはゐられない。待ちなされるなら店に氣を注けておくれ、其の代りお茶位は進げうワイ。」長九「そりやァ御馳走だネ。」お富「どれお茶でも進げうネ。」ト合方になり、お富奥へ入る。長九郎煙草盆を引寄せ、長九「何にしても困つたものだ。」ト煙管くはへ思入。これを流行唄になり、向うより觀音久次、好みの

敷へ出たり、其の片手間の損料屋サ。さうしてお前疾うから伊豆屋を暇を取つて。」 長九「サア聞きなせえ、放蕩者の與三郎にくつついて居て、どうで長い正月もあるめえと、此方から暇をとり、今ではしなれた小道具商賣、久しぶりでお目にかゝつたよ。」トこれをお富きいて思入ありて、 お富「それぢやァ主は、彼の與三郎さんの宅に居た。」トいひかけるゆゑ、 長九「彼の與三郎とは近附かえ。」トお富甚八見合はせてこなし。お富氣をかへ、 お富「なァに與三郎さんとやらは、近附ではねえがネ、そこに居る甚八さんから咄に聞き、それでさういうたのさ。」 甚八「イヤモウ人といふものは、何處でどういふ近づきに逢はうやら、知れねえものさ。私も宅の姉御は古いお馴染で、頼まれた名弘めのせめ道具を、久次さんの顔で方々を配つてお貰ひ申すのを、お頼み申しに一寸來て、大きに長居をいたしました。」 お富「あの配り物の事は、主が承知さ。モウ五六軒遣る所があるから、跡から届けてくれる樣にと、今朝宅の人がいうて居たよ。」 甚八「何分よろしくお頼み申します。時に、昨夕のはお邪魔でございませう、持つて行きませうか。」 お村「アイ爰でございました、お待ちなされい。」ト立つて上の方の障子屋體より、損料蒲團二枚程出す事。 甚八「アイ／＼お世話でございます。」ト擔げにかゝる故、 お富「コレナ甚八さん、お座敷を勸める人が、そんな物をかついで見つともない、今をばさんに持たせてやるワナ。」 お村「私が持つて往きませう。」 甚八「商賣だから私が持つて往くものを。そりやァお氣の毒な、

繰りしかといふ意氣なり。「どんな事の入用か、マアそれにやァ譯があつて、其の品をお前から預りもしたらうが、宅の人に限つては、つひにそんな事で間違引のない氣性、マア何にしても主が留守では分らねえから、明日居る時に來なさいな。」長九「モシ〳〵そりやァお前樣のお詞だがネ、神明前から爰までも餘程ござります。何をいうても、一寸預りで時貸にせえ、三十兩貸す品物、金目の物を何時までも、さう手ばなしては置かれませぬ、觀音前の久次樣と言つては、名の高いお方故、暫時の間も手放したのだ。モウそれからは七八日。」トそこら見廻し、「斯うして家へ來て見れば、さして手堅い……。」ト思入。お富「何だとえ。」トこなし。長九「イヤ。手がたくお約束申した事、何なら御歸りまで待ちませうよ。」お富「其方の勝手で宅の人へ貸しておいて、妾に對うてそんな事。どうとも勝手にしなせえな。併し金目のものとは一體何だえ。」ト思入。長九「エ、そりやァ。」ト甚八お村などへこなしあつて、「そりやァ久次さんにお目にかゝれば解ること、矢張道具で御座りますよ。」トこなし有つて煙草のみゐる。此の中甚八こなし有つて、甚八「モシ〳〵道具屋さん。どうも見たやうなんだと思つたら、おまへは元山町の伊豆屋のお手代長九郎さんだネ。」ト長九郎こなし有りて、長九「さういへば此方も。オ、兩國にござつた甚八さん、お前今こゝにゐるのかえ。」甚八「左樣さ、一しきりは旅へ出て、五行亭相生というて、噺家の眞似を爲たり、方々と流れ渡り、今では女房に引手をさせ、私がかせぎは座

な人の家へ來て、碌々に挨拶もしねえで、大きな聲で家の人の事をどうの斯うのと、いけふさく〵しい、途方もねえ男だなう、マア下にゐて譯をいひなせえナ。」ト科有つて、お富下にゐる故、甚八お村もよろしく座につく事。長九郎しよげて險幕に恐れし體。長九「それぢやァお前は爰の内の、あの久次さんの。」甚八「おかみさんだワナ。」ト長九郎こなし有つて、長九「それとは知らねえで、私もツイ氣が急いたものだから、眞平御免なされませ。これはお嬶さん、お初にお目に懸りました。」お富「さうしてお前、何の川で今のやうに、騷々しくお言ひだえ、譯を早くいひなせえな。」長九「其の譯は斯うで御座ります。私は神明前で小道具屋を致します。長屋の長九郎といふ者で御座りますが、さる屋敷の浪人衆へ、三十兩と言ふ金をかしまして、其の方の質に金目の代物を預りましたが、サア貸した金がどうも戻らず、私も困つてネ、其の代物を捌かうと思つても、結構過ぎて賣口の惡い品。そこで此の品川へは、お屋敷方も方々へ來て御座る事だから、何處ぞへ嫁入をさせうと、此の開持つて來た所、本宿のさる内證で、此方の旦那にお目に掛り、其の時にちつと貸してくれろ、見せる所があると言ひなさるから、大事の物だが、暫時の中と預けて置いたら、それからは其許の内證へも薩張ござらず、モウ今日が日まで七日八日になりますから、それで今の樣に申しました。」ト是れを聞きお富こなしありて、お富「なる程、お前のいふ所は解つたがネ、定めて其の時宅の人が。」トこなし有りて、若しや遣

久次様が戻つたら、少し宅に居て下せえと傳言けて下せえ。」お村「ハイ〳〵さう申しませう。」喜藏「それぢやァ一つ走り往つて來ようか。」甚八「後にお出でなされませ。」トテンツ、になり、喜藏向うへ、是れにて向うより長九郎、道具屋にて摺れ違ひて舞臺へ來る事。喜藏は揚幕へはひる。長九郎門口へ來り、長九郎「ハイ御免なされい〳〵。」ト氣を急くこと。お村「何でござりますえ、騷々しい」長九「何だ、騷々しいえ。モシ久次さんに會ひてえ、久次さんは如何しなすつた。」甚八「誰人か知らねえが、お前マァ内へお入りなされませ。」長九「わたしやァ久次さんに會ひてえよ。」甚八「ハテ門口でそんなに言はずと、マァ内へお入りなせえナ。」ト是れにて長九郎も内へはひり、長九「どうで入るがの、こゝのうちの御亭主は、名前さへ觀音久次といふから、正直な人だと思つたら、さりとてはずるい男だ。」トこれを聞いて甚八は長九郎の顏を見て考へる思入。甚八「オイ〳〵なにが家の親方がずるい男だえ。」甚八、お村「譯を言ひなせえ〳〵。」長九「ハテいけずるいからずるいと言つたので。」トこの中に奧よりお富好みの著附、巻帶、結び髮の鬘、手拭にて扇ぎながら出て來り、長九郎のいふ事を聞いて居て、此の時長九郎へ向ひ、お富「モシお前、何處からお出でだえ。」ト是れにて長九郎思入。「今彼處で聞いて居りやァ、お前さん何といひなすつたえ。」長九「エわたしかえ。」ト險幕に恐れし體。お富「こゝに居る衆は、近所のお方や、雇ひのお婆さん、其のまへで家の亭主は、いけずるい男とお前言つたらう。何だ

十兩だが、三百兩とはちつと仕事が大きいネ。」——お村「さうしてお前さん、其の一件でお出でなされたのかえ。」喜藏「何さ、俺ァ千葉家へは出入をせず、此の一件は外に聞き込んだものも有れば、此方の構つた事譯ではねえが、其の盜人が知れた時は、此方の役がら、どうで係合になる仕事さ、併し屋敷の飛脚を勤むる者が、殺されて三百兩とられるとは、一體とられる者も濟まねえ譯さ。」甚八「マァそんなものさネ。さうしてお前さんなんぞ外に、此の宿に調べる事でもありましてかえ。」喜藏「海老名樣と梶原樣から出た配符でちつと久次どんに會うた上、渡しておきたいものがあり、それで咄も有つて態々こゝへ。」ト紙入より疊みし與三郎の繪姿を出し、こなしある。お村「それぢやァ奥にお富さんが居るから、呼んで來ませう。」甚八「それがいい、早く呼びねえ。」ト立ちかける故、喜藏こなしあつて、喜藏「ア、これ〱待たつせえ、嚊さんに聞かしては、少とわるい筋だ。マァ何にしろ久次に會つてからの事さ。」甚八「ム、わかりやした。」ト親指を出し、「宅のレコが、お富樣へ内密で、又外に女でも拵へたのかネ。」喜藏「馬鹿をいはつせえ、こなたではあるめえし。」甚八「私が何時女をこしらへやした。」喜藏「これ隱しやんな、此の頃年增の情婦が一人出來た事は、此方の帳にとまつてるぜ。」トこなし。甚八「これさ親方、そんな凄味は何だか無氣味だ。」お村「主が言はつしやると、さう聞えるやつさ。」兩人「ハヽヽヽ。」喜藏「冗談は冗談、役向の配符の事だ、鮫津まで往つて後に來るから、

一つくんなせえ。」 お村「アイ〳〵。」トこの中手拭二つ切る事。齒磨、楊枝、三味線絃、紙類、お村兩人捨白よろしく有つて、仕出に出して遣る。 四人「アイ〳〵お世話で御座りました、アイ錢を取らつしやい。」 甚八、お村「ハイようお出でなされました、有り難うござります。」トこの中に仕出は品々を持ち、橋懸りへはひる。 喜藏「甚八さん、お前手傳ひかえ。」 甚八「何さ、爰の家へ用が有つて來た所。」 お村「私一人で間に合はねえから、主がすけてくんなすつたのだ。」 甚八「とんだ粹興者でござりやせうに、さァ今取つた錢は、をばさんお前に渡すよ。」 お村「アイ〳〵。やれ〳〵何時でも暮方になると、混雜くやつす。時にお前樣の御用はえ。」 喜藏「俺ァ久次どんに、少し咄しておいた事もあり、それで態々來たのだが、家に居ねえぢやァ分らねえ。」 お村「モウ今にお歸りでござりませうよ、少しお待ちなされませ。」 甚八「さうしてお富さんは、何をしてお出でだえ。」 お村「今奧の三疊で、髮を結んで居なさるワネ。」 甚八「成程、此の節の譯柄では、一人で結はねばなるめえテ。」 お村「嚴しい事の樣だがネ、これが眞實の事さ、女は手前でいふのが當然よ。」 甚八「イヤ嚴しいと云へば、モシ喜兵衞さん、此の間の川端の一件は、眞の事でござりますかえ。」 喜藏「さうさ、眞の事だが、まだ誰が仕業かわからねえのよ。」 お村「ム、そりやァ千葉家の飛脚を殺して金を奪つたとやらいふ咄だとかえ。」 喜藏「さうさ、宿場ではよくある奴さ。」 甚八「人を殺して金を取るとは、酷い奴があるものだ、定九郎なら五

九幕目　大崎久次内の場

本舞臺三間の間常足の世話家體暖簾口、上の方へ數子戸棚、暖簾口より下手へ、小間物荒物品々の棚、引出の書割、この前歯磨松綠梳油などの掛札、この前欄間より本ものの手拭地、大分下げ、この手拭と倶に金太郎の顔などつきし仕立腹掛、この下へ巻手拭地のならべし箱臺曲紐、小間物の箱ならべ、下手一間の家體前面、爰に腰障子、これへ地染手拭、小間物荒物品々紙類と記し、この脇に三尺の羽目板うちし壁、これへ天地膏、其の外妙振出しの張札、いつもの所に門口、すべて品川宿觀音前久次住家の體、こゝに喜藏梶原家出入目あかしの扮裝、矢立をさし、序幕に出でし噺家相生、好みの扮裝、火鉢の傍へより煙草のみゐる。喜藏も同じく煙草盆控へ、お村木綿やつし前垂かけ、雇嬶の扮裝にて立ちかゝり、門口に若い衆の仕出三四人、買物買ひたちかゝり居る。お村これへ商ひして居る見得、テンツヽヘ雙盤太鼓をかぶせ、賑やかに幕開く。

若衆〇「歯磨と楊枝をおくんなせえ。」　お村「アイ〳〵、今出して上げるよ。」　若衆△「オイ〳〵手拭をはやく裁つてくんなせえ、豆絞が可いよ。」　お村「今裁つて上げるワナ忙しない。」　若衆×「三味線の絲を十五の三を二掛、四ツ切を二帖だよ。」　甚八「よし〳〵、そりやァ俺が出して遣らうワ。」　喜藏「この又久次は何處へ往つた事だ、店を打遣らかして途方も無え。」ト烟草をのみ居る事。　若衆□「私にも芥子玉を

喜兵衛見てこなし、兩方よろしく、　忠助「旦那樣、慘たらしい此の子狗の姿。」　喜兵「不便な事とは思へども、又外の犬の目に懸らば其の身の大事、早う追ひ遣つて下され。」　浄「口には言へど心には、せめて一言親と子の。」ト三人よろしく思入。與三郎こなし有りて、與三「爺やア、親父樣や母樣が、嘸不孝な奴、惡い奴とも思つて御座りませうが、初めは不圖した義理立から、却つて此の身の害となり、モウ斯うなつては仕方がねえ、みんな前生からの約束と、諦めてお呉んなせえ、必ずともに恨まぬ樣、お二人へ言譯してくれ、これ忠助。」ト立ちかける。忠助「モシ切めて別れに唯一言。」　浄「無理にさしつけ障子越、見かはす顏も先立つ涙、互になにと詞さへ、出でぬ親子の別れ路や。」　與三「親父さまか。」喜兵「オヽ、倅。」　忠助「これが此の世の。」ト兩人よろしく思入。忠助跡より與三郎をさしつける。喜兵衛こなし有りて、胴巻のまゝ金を與三郎に投げて遣る。與三郎請取り思入。忠助隔てて、「若し人目に立つては。」ト下手へ與三郎を突きやる。喜兵衛は障子を閉てる。雙方見やつてこれを木の頭。「火の用心火の用心。」トよろしく時の鐘、拍子幕。

與三郎は幕外に菅笠を持ち立ち上り、宜しく有つて、誂へ三重になり向うへ行かうとする、此の時揚幕より按摩出て來り、行き違ひさま與三郎に行き當り轉ぶ。與三郎謝びるこなし、按摩捨臺詞にて幕の曳附へはひる。與三郎は右の鳴物にてよろしく向うへはひる、跡シャギリ。

「御兩親樣御免なされて下さりませ。ありや其の昔の腕白で、亂暴いふのと御赦されで下さりませ。」ト思入、與三郎思はず見かへる。この中に戸少し上り、障子に少し燈の影さし、内より窺ふ體、與三郎ぢつと思入あつて驅け出づるを、忠助宜しく止めて思入。兩人よろしく、與三郎件の風呂敷を緣先へひろげる事、件の合方時の鐘、かすめて風の音。三尺を解き、半股引脚絆などの支度よろしくする事。 浄「あつかふ氣くばり耐へかね、揚戸の障子引きあげて、見合はす顔は親喜兵衛。」ト是れにて内の障子引きあげ、以前の喜兵衛顔を出す事、忠助見合ひてこなし宜しく、提灯の火に與三郎の姿を見せる心意氣、此の中與三郎は脚絆などはく事。 喜兵「コレ忠助よ、お主はまだ其處にゐるか。」 忠助「ハイ。私より旦那樣、お前さん何と思うて今頃外を御覽じますぞ。」 喜兵「サアそりや、今犬めが表で大層吼えた故、目が覺めて外の樣子を。これ門端で犬めが吼えると、爰の家に何事かと、猶々人の思はくが。これといふも其方が可愛がるから、どうも犬めがあまえてならぬ、早く追ひ退けて仕舞ふがよいぞ。」 忠助「ハイ〳〵喧しう吼えた犬は、追ひ退けましたが、たつた一つ跡へ殘りました此の子犬、唯一目よう御覽なされませ。」 浄「いふまゝ燈火さしつける、恩愛深き緣先に、たまりかねつゝ見かはす顔。」トこの中忠助燈火さしつける。與三郎此の間に喜兵衛の聲を聞いて、よろしく思入あつて、此の浄瑠璃、文句にて雙方顔見合はせる事よろしく、與三郎寄らうとするを、忠助隔ててこなしある。

お出でのこのあらまし、親旦那様や御老母様へ、お話を申し上げました。」トこなし。與三郎も思入あつて、與三「たとひ手前が、俺が譯をどの位言はうとも、勘當うけた俺が體、どうして〳〵二親が、何のつけに會ふものかえ。」ト思入。忠助は與三郎の顔を見て宜しく思入。忠助「サァお前が言はつしやる通り、中々以ての外な親旦那のお詞。彼の不孝者めがうせをつたか、イヤそりや途方もない事ぢや、爰ら邊へまごついたら此の上に、どの様な難儀をばかけ居るか知れぬ事、人の目褄にかゝらぬ中に、手前早く行つて叩き出せ。汝も汝ぢや、それを爰へ來て、俺達の耳へ聞かす事があるものか、門端ふますも暖簾の穢れ、どこへなと勝手な所へ失せをる様、なぜ呵りつけて歸しはせぬ、年效もない愚鈍な奴と、思ひの外に叱られましたワイなう。」ト與三郎こなし。下座の合方、牀とうちあはせ。與三「それ見やァがれ。俺が先から言はねえ事かえ、汝がひとり息せえはつてもどうして〳〵、エ、可惜隙をかかせやァがるワ、ざまを見ろえ、箆棒奴。」ト是れを心づかひの意味合よろしく、忠助「コレお前も情ない事いはつしやるぞ。たとひ勘當しられても、育てて貰うた親御の家、其の門端でそんな憎さげな詞づかひ、萬一爰に。」ト此の中正面の揚戸、上の方を少し揚げ、櫛の繪かきし障子を破りさし覗く模様、少し燈火内に映ろふ事、與三郎は是れを知らず、忠助此方へ向ひ、「親御達が御座つたら、僅かの間に彼の様にも人が悪うなるものかと思はれるだけ、お前が不孝になりますぞや。」ト内の方へ向ひ、

捨鐘。牀の合方。下座の合方あしらひ。與三郎この中四邊へ思入ありて、内の樣子などよろしく窺ふ心意氣有りて、ふり仰向き家の樣子をよく〳〵見やるこなし。與三「おれ一人爰へおいて、唯一目なりと親父どんに逢はせると、呑込んで往つたれど、どうして〳〵、よもや親父が會ひはしめえ。なまなかに氣がおくれる、エ、面倒だ。」ト立ちかけ、科有つて「併しなア、此の門口も是れが見納め。」ト本釣鐘、風の音。右の合方あしらひ。「ドレ此の中に。ム、。」淨「人もふす亥の子も過ぎて。」ト縁先へ提灯を其の儘おき、割竹を立てかけ行きかける。縫ひぐるみの犬出て吼える事、割竹にて追ひ廻し、犬は下手へ逃げて入る。つか〳〵と行きかけ、提灯の燈火へ心づき、立戻り提灯を消さんとする。此の中に忠助以前の形にて、小風呂敷の中へ好みの品々脚絆三度笠など持つて出る故、與三郎提灯さし置き、つか〳〵と驅け出るを忠助止めて、忠助「モシマア〳〵待たつしやりませ、お前モウ直に行く氣であらうが、其樣な姿形では猶更人が目をつけます。これ〳〵股引脚絆もあり、風呂敷のその中には、旅に川立つ合羽に著更、こりや親旦那が過ぎし頃參宮なされた其の時の笠を、切めては筐と思ひ、この軒下で支度して、何處へなと行かつしやりませ。」與三「成程、俺が此の姿形ぢやァ人目につくな。爺やァこればかりは手前が働き、有りがてえ〳〵、そんなら直に支度をしようよ。」ト合方、牀下座かけあひ。忠助あたりへ思入ありて、聲をひそめし心意氣よろしく、ぢつとなり、忠助「さうしてお前が

鹽梅は、吟味して上げます。」ト拵へて、「ヘイおあがりなされませ。」ト出す。與三郎丼を取り見て、與三「こりやァ割箸で凝つたものだの。」ト喰ひながら行燈を見て、「藤の紋所で岩附屋か、いつも見かける印だァ。」蕎麥屋「この近所はお馴染でござります、是れから四辻へ夜明まで店を張ります。」ト此の中與三郎喰ひながら、與三「こりやァ善い鹽梅だ。」蕎麥屋「どう御座りますか。イヤモウ夜鷹蕎麥とはいふものの、今は良い衆が召し上るから、氣を注けにやァなりませぬ、其の代り元ばやりには困ります。」與三「何でもそれよ。」ト此の中に代りする事あつて、蕎麥屋又跡を一ッ拵へる事よろしく喰ひながら、與三「オイ蕎麥屋さん。」蕎麥屋「湯を上げませうかネ。」與三「何時だえ。」蕎麥屋「今九時を打ちました。」ト與三郎が體を見て、「お前樣、夜番をしながら時をお聞きなさるなァ可笑しいね。」與三「エ。」ト氣がつき、「それでも蕎麥屋さん、何時だといふのは、お定まりの捨白だ。」蕎麥屋「ハヽヽヽ。爰の御内では、何時でもお爺樣が番に出なさるではござりませんか。」與三「その爺樣が俺に代りを頼んで、今用があつて臺所まで往つたのだ。」そばや「それぢやァ代理かネ。此の夜番も御苦勞樣さネ、併し私の商賣は、お蔭で餘計賣れますよ。」與三「オイ湯を下つし。」そばや「ハイ／＼。」ト湯を出す事よろしく、與三「それ錢よ。」ト丼と兩方とり、蕎麥屋「これは有り難うござります、又明晩お願ひ申します。」與三「早く仕舞ひなせえ。」蕎麥屋「そばい／＼、うどん蕎麥しつぽこ。」ト呼びながら橋懸りへ入る。かすめて風の音、

割竹にて忠助逐ふ。仕出は禮いうて行き過ぎる事など宜しく有つて、始終牀と下座の合方打合はせ、與三郎忠助よろしく門口の前へ來りこなし、時の鐘。忠助「まだ旦那樣はお寐みなされは遊ばすまい、お前一寸こゝに此の割竹と提灯を預けます、番の積りで待つて御座りませ。」與三「イヤ〳〵止すが可い、却つてそりやァ惡からう。」忠助「ハテマァ爰に少しの中、私が一寸奥の樣子を見て參りまする、一寸待つて下さりませ。」浄「何かは胸にくゞり戸へ、心あくせく入りにける。」ト時の鐘、こなし有つて忠助くゞり戸の中へ入る。與三郎是非なく割竹と提灯を持ち待つて居る意、此の時忠助件の揚縁をおろし、戸の内へ入る。此の中に東の揚幕より夜蕎麥賣、風鈴のつきし荷を擔げ、呼びながら出て來る。犬吼えるを、與三郎割竹にて追ひ拂ふ事などよろしく、このうちに捨白よろしく。與三「なんぼこんな身なりになつても、割竹で時廻りを爲ようとは氣がつかねえ、飛んだ目にあはしやァがるワエ。エ、畜生。」ト犬を追ひちらす。蕎麥屋の仕出。蕎麥屋「饂飩蕎麥しつほく、そばい〳〵。」ト呼び來る故、與三「オイ〳〵可い所へ來た、一杯下つし。」蕎麥「ハイ〳〵、何にしませう。」與三「何でも可いワ、熱くして。」蕎麥「煮麵もござりますよ。」與三「やつぱり蕎麥にしよう。」蕎麥屋「ハイ〳〵。」ト縁先へ提灯をおき腰かける。この中蕎麥屋、揚笊へ蕎麥を容れ、湯を通す事、よろしく拵へする。「それぢやァしつほこに致しますよ。」トこしらへる事。與三「汁がからけりやァ湯をまはして、甘え方が可いよ。」蕎麥屋「ナニ

よ。」忠助「オ、よく言つて下されました、お前がさういふ氣にならつしやれば、俺が思はくが御座ります、チト待たつしやりませ。」ト番小屋を出でんとする。與三「どこへ行くのだ。」忠助「ハテお前様に餞別を致します。」與三「何をいふのだ、手前に餞別を貰つてどうなるものだ。」ト思入。忠助こなしあつて、忠助「コレ。是れから遠方へござるお前故、贐と申したは。」ト塀の内へこなし有つて、「奥にござる親御達へ、たゞ一目なとお前の姿を。」與三「エ、。」忠助「モシ。」ト牀の合方、與三郎立ちかけるを忠助止めて、又時の鐘。忠助囁く事。與三郎こなし。淨「子刻告ぐる鐘の音に、繁き往來も邂逅に、割竹曳いて走りの脚、後にすご〳〵裏手より、まはる伊豆屋の表口。」トこの中に忠助、與三郎へ草履を出し穿かせ、手をひき連立ち、捨白よろしく、忠助割竹を持ち、與三郎へ件の提灯を持たせる事。與三郎手拭をわざと不器川にかぶり、共に夜番の心意氣、この中道具三方廻しにて、逆に黒塀の道具より。

本舞臺初めの道具、伊豆屋の表口の體に納まる。

トこの中に與三郎忠助兩人、時廻りの心有つて上の方へ廻る。こゝで柝木を撃つ、生酔夜商人の戻りなど總て四五人、東西より行通ふ事、縫ひぐるみの犬出でて吼える事など宜しく有つて、此の犬を

果てなされましたとか、エ、マアどういふ事にか、親御樣の緣の薄い事ぢやなア。モシ若旦那、この爺が惡い事は申しませぬ、何卒俺がいふ事聞いて、名乘つて出る事はマア見合はせ下さりませ、モシ若旦那、これ程までに俺が、事を分けていひますに、聞き分けては下さりませぬか。コレ默つて御座るは不承知か、エ、不承知なれば是非がない、寧その事に。」トこなしありて、手拭にて我が手に首を縊らうとする。與三郎慌てて止めて、與三「これ〳〵滅相な、何をするのだ。」忠助「イヤ〳〵俺が詞を聞入なくば、何卒放して殺して下され、死にたい〳〵。」與三「エ、これ小さい時から色々と、世話厄介になつたお主、さういふ事を爲して濟むものか。」忠助「止めさつしやるは、俺がいふ事聞かさつしやる氣か。」與三「サアそれは。」忠助「聞きいれなくば俺は矢張。」與三「ア、これ滅相な。」忠助「そんならいふ事聞かつしやるか。」與三「サア。」忠助「サア。」兩人「サア〳〵〳〵。」忠助「モシ若旦那、モウ生先のないこの老爺、俺を不便と思はつしやらば、何卒名告つて出る事は罷めて下され、これ申し。」淨「ききわけて給べこれ賴むと、いふに此方も吻と溜息。」與三「成程、手前がそれ程までに言つてくれるものだから。親父やお袋に歎きをかけ、世間へ恥を晒させるも、餘り榮擧でもあるめえから、罷めにするから然う思へ。」忠助「そんならアノ聞き濟んで、止まつて下さりますか。」與三「それもお主に免じてだ。併し斯うなつてはモウ、江戸の中には居られねえ、これから氣のつかねえ遠い處へ巢を變へよう

忠助「イヤ／＼放さぬ、これ若旦那、そりやお前悪い料簡で御座りますぞえ。」與三「馬鹿をいふなエ、これ親の首へも繩をつけ、奉公人にも難儀をば掛けうよりは、男らしく名告つて出て、立派に凶状うける心、それが何故悪い料簡だ。」忠助「エ、さりとては情ない事言はつしやるの、お前今名告つて出れば、命を助かると思はつしやりますか。」與三「何の命が助かるものか、悪徒の最後は斯うしたもの、行る所まで行つつけるワエ、。」忠助「サ、、それが悪い、死ぬのが知れてゐる事なら、廢しにして下さりませ。コレお前が今名告つて出れば、科は極つた島破り、身は荒繩で高手小手、忌はしい紙のぼり、裸馬に乘せられて。」浄「名も捨札の嚴しく、拔刀の槍で先拂はせ、こゝら邊を引廻される。」忠助「其の時は、人が何といひますぞ。アレ／＼見やれ、彼が元山町の伊豆屋の子息ぢや、以前江戸に居た時分は、アよい男ぢやよい子息、伊豆屋の御夫婦は果報者と、賞めた詞の裏が來て、心一つの迷ひから、親も産みつけぬ恐らしいあの顔は、彼が切られの與三とやらぢや、伊豆屋の子息の身の果てと、言はれ最後が其の體さへ、三尺高い木のそらで。」浄「大身の槍で突かるゝ苦しみ。」「悪徒の最後はかうしたものと、お前それをよいと思はつしやるか知らねども、御兩親の其の歎きは、どの樣にあらうと思はつしやりますぞ。それに又お前の實の父御樣、母御樣もお屋敷にある筈ぢやが。」與三「カウ聞いてくれ、其のお袋も人手にかゝつて亡くなつたア。」忠助「エ、彼の親御も、人手にかゝつてお

おくが可い、モウ斯うなつちやァ風も引かねえ。そりやさうと、親父どのやお袋へも物を思はせ、可哀相に手前にまでも、そんな思ひをさせるのも、皆おれが心から、つく〴〵身體に愛想がつきた。今看經の音を聞き、親にも會うた心持、不思議に手前にも斯うして會ひ、これで俺も氣が濟んだ、程過ぎた其の後で、こんな事がありましたと、言うて可いなら二親へ、手前の口から言うてくれよ。そりやァさうと、俺が島ぬけの事を、どうして知つて居るのだ。」忠助「サァ其の事は今朝海老名様のお屋敷から召狀が著いて、俄に呼び出し、何事かと親旦那さまが宿老方と同道で、お役所へ出た所が、お前さんのお身の上、斯樣々々の不屆故、其方は彼が親里なれば、確かに其の地へ尋ね參るであらう程に、見かゝり次第搦めて出せ、若しも匿しておく時は、親は固より縁者までも同罪と、いやモ嚴しいお上の言渡しを、旦那様が戻る早々、俺へのお咄、モシマァひよんな事になりましたなァ。」浮「咄す詞に與三郎、屹と思案し驅け出すを。」ト與三郎始終の咄を聞き居て、この時屹と思入あつて、ソレと立ち上り行かうとするを、忠助とめて、忠助「モシお前、何處へござる、何處へ行かうと思ふのぢや。」與三「知れた事、名告つて出るワエ。」忠助「エ、。」ト縋るを與三郎思入あつて、與三「よもや俺が此の江戸へ、足のついたといふ事は、誰も知るめえと思つたに、モウ何事もこれまでだ、名乘つて出るのが最上の分別、そこを放せ〳〵エ、。」忠助「イヤ〳〵、そりやなりませぬ〳〵。」與三「エ、はなせ〳〵。」

よくせき薄い親子の縁。どうで彼が體軀では、島で命は終るであらう、船に乘つた日を命日と思ひ、それで營む志ぢやに依つて、今日の正客は忠助其方ぢや、饗應ふ者は外にないと。」淨「膳の上座に据ゑられる其の苦しさ。」忠助「ア、情ない、是れがマア與三郞樣が溫柔しくして御座つて嫁御でも娶らつしやれて、其の披露の悅びか、初孫樣の宮參り、初の節句の歡びぢやと。」淨「家中が賑うて、御祝儀の赤小豆飯、御振舞の末座へなと。」忠助「坐つて喫る事ならば、嘸かし嬉しう御座りませうが、それに引きかへ守り育てたそのお子が、島へ行かれた今日の其の膳へ、この正客にばつかりは、なりたくは御座りませぬと、俺がいへば御兩親も、理におぼしめし、何にも仰しやらいで唯しく／＼と泣いてばつかり。」淨「仕出は八百屋で結構な、手を盡した本膳が。」忠助「一箸咽へ通らばこそ、毎月毎月今日の日が來るのは、俺は思ひで御座るワイノ。」淨「かき口說きたる繰言も、信實見えて道理なる。聞く與三郞も宛らに、しばし詞もなかりけり。忠助それと心づき。」ト思入。與三郞も種々科ありて延つ反つ、蚊を拂ふことなど宜しく、忠助心づき、「ア、こりや氣の注かぬ、お前を捉まへてわが勝手のよい事。どうも爰は溝のある爲かして、モウ蚊が少しづゝ出ますワイノ。それに夜が更ける爲かひや／＼と。」ト與三郞の形を見て、忠助「お前風を引いては惡うござります、これなと引つかけてござりませ。」ト袷の上へ引つかけし絆纏を脫ぎ、與三郞へ著せんとする故、與三「可いワエ／＼、打遣つて

の安否も聞かずともいゝワエ、達者で居ろよ。」ト往きかける故、忠助狼狽へとめて、忠助「ア、これこれ待たつしやれ〳〵、愚癡を言つたは私が不可い、堪忍して下さりませ、待たつしやりませ。」ト科あつて、此の中木魚の音、鈴の音聞えること。忠助「アレ〳〵親御の安否が聞きたくば、彼の鈴の音や木魚は、お袋様や親旦那が、碌々夜の眼もお寐らねば、奥の佛間で看經の、其のお勤めも後世よりは、此の世のお前の身の爲を、思召してのあの廻向。せめて彼の音の聞える間、こゝに御座らば二親へ、お會ひなされた樣なもの、マア下に居て下さりませ。」ト思入あつていふ。與三郎もよろしくこなしある。忠助、與三郎を下に居させ、忠助「モシ若旦那、今日は何日と思はつしやるぞ。」ト思入。與三郎考へるこなし。與三「手前に言はれて氣が注いた。俺が科が流罪と極まり、彼の鎌倉から伊豆の島へ流されたは、如何樣去年の今日であつたなア。」トこなし。忠助「別して今日は祥月とて、宵の中は百萬遍、同行衆を呼び集め、待遇して歸すのも、皆お前の身の祈禱。其の日になると大旦那やお袋様が、座敷へ何時でも俺を呼ばつしやつて仰しやるには、これ爺よ。どういふことか與三郎が、頑是ない時分から、乳母をつけてもお主に馴染み、物心をつけ、守して吳れたは其方許り。それ淺草の觀音樣、兩國の開帳よ、煙花の夜店緣日と、伴れて往くのは其方許り、其の與三郎も成人して、男一人前になる頃に、不慮な事にて世間を兼ね、據なく勘當中、罪を犯して鎌倉より、島流しにまでなると云ふは、

失して御座つたか。」ト當惑の思入、ハア、と泣き伏す。與三郎邊へこなしあつて、與三「コレサ〳〵、そんなに言はずと可いぢやァねえか、靜かにしやれ〳〵。」ト邊へ思入して、與三「其の島を紛失して來ればこそ、俺が育つた土地へも足踏ならず、まだ其の上に今までの、憂目に逢うた恨みある、そいつも昨夕。」ト源左衛門を仕止めしと思ふ心、忠助へこなし。忠助ぎつくり。與三「イヤサ言ふ事はいろいろある。又俺も何彼と思ひ込んだ事も、色々あつたれど、何をいうても此の身すがら、躊躇いてはゐられねえ、是れから又氣を變へて、チツト遠つぱしりを爲にやァならねえ。唯お主に聞きてえのは、親父さんや母さんは、御機嫌よござるか。弟の與五郎も達者で居るか、その安否を聞きに寄つたのだ。」ト言うても忠助泣き伏して居る故、與三「コレサ泣いて居ちやァ分らねえワエ、爺樣や、お袋は達者で、弟は無事で居るか、エ、コレ嘸親達も俺の事を、憎い奴だと言つて御座るだらう。」ト思入。淨「いふに此方も聲うるみ。」ト始終この中誂への合方へ、よきほどに鈴の音ありて、跡は小さき木魚のあしらひ。忠助思入あつて與三郎に向ひ、忠助「親御の安否が聞きたいとはまだしもぢや、其のお心なら何故にマア、大外れた島破り、情ない事爲出つさしやつた、エ、〳〵さりとはお前は恨めしい、恨めしいお人ぢやナウ。」ト思入。淨「怒る眼にこぼるゝ涙、内には佛間に二親が、看經の聲殊勝なる。」與三「今更それを言うたとて、モウ追つつかねえ咄だわ。面倒だ、どうで勘當うけてる體、親父やお袋

アどうでも可いワ。」忠助「悃れたものだ。」與三「言はれて見りやァ此方が、マア〳〵少し義理のわるい譯も。そこで源左衛門といふ野郎の乾兒等が、大勢かゝつて手籠になり、それでしやつ面身體へも、此の通りよ。」ト膝をまくり、引つかけし手拭を除る事。忠助この中に行燈のあかりを、消したる提灯に移し、與三郎を見て思入。忠助「オ、〳〵ヤレ〳〵慘たらしい、ア、情ねえ事を爲やがつたなう。」ト思入。與三「この理由ゆゑに、爰の親仁は躍起となつて腹を立て、中々江戸では寄せつけず、それで手前にも逢はねえ時宜、たうとう其の儘勘當と、體軀ひとつを棒にふり、切られの與三と異名をつけられ、鎌倉にごろつく中、其のお富といふ女をば、嚊アにして暮して居たが、又程もなく食らひ込み、こんな態で江戸へ來て、お主に會ふのも面目ねえなア。」忠助「何のお前、面目ないことがござりませう。尤もお前さんの勘當は、親御樣の御立腹ばかりでは御座りませぬ、それには種々。マア〳〵其の事は後でお咄し申しませうが、モシ若旦那。」ト與三郎へ囁き宜しくこなし。忠助「こんな風聞を聞きましたが。」淨「耳に口。」ト又囁き、忠助「眞實の事でござりますかえ。」ト思入。與三「眞の事よ。」忠助「エ。」與三「さまでも無えことを讒訴され、そこで此の身は流人の境涯、中々咄にやァならねえ憂目を見て、そこで其のまゝ朽ち果つるのも悔しい事だと、島を破つて忍び〳〵、漸うの思ひで爰まで來たのよ。」ト思入。忠助この内、聞く程悃れるこなし。忠助「そりや愈その恐ろしい所を脱け、あの爰へ。島紛

行かう。」忠助「ア、これ〳〵其方は今俺が廻つて來た。」忠助「ハテ年寄といふものは、色々な事をいふものだ。」ト割竹を鳴らしながら下手へ入る。忠助後見送り、思入あつて上の方へゆく。忠助「サア可うございます、爰へお出でなされませ。」トこれにて與三郎上から出て來る樣子を見て、與三「ム、。コリヤア番小屋だな。斯うして毎晩手前が勤めるのか。」忠助「イヤ然うでは御座りませぬが、何でも家持の店々から人を出して、この通り代り〳〵に勤めるので御座ります。マア〳〵爰でお咄申しまする、サアこゝへお上りなされませ。」與三「可いかえ。」忠助「何の氣遣ひはござりませぬ。」ト四邊へこなし有つて、番小屋にある蒲團の塵を拂ふ事。與三郎上つて坐らうとする。忠助「アモシ〳〵板敷の上は薄緣許りで足が痛みまする、汚いけれどこれをお敷きなされませ。」與三「何の可いワ、以前とは違ふワ、これまでの身になるまでに、種々な苦しい目に逢つたのだ。」淨「いふにこなたも溜息つき。」トこの中忠助、無理に右の蒲團をあてがふ。與三郎此の上に坐る事。忠助「モシ若旦那、以前に變るとおつしやるが、イヤモウ變つた事だらけ。マア其の變つた事の始まりに聞きたいは、お前なぜ、そんな顏へ大層な疵をうけ、恐ろしい顏には成らしやりました。」ト是れを好みの合方になり、與三「されば木更津へ預けられた其の頃に、彼の土地に赤間源左衞門といふ道樂者の女房に、お富といふ女が有つて、據ねえ譯で其の女をナ。」トいひかねるこなし。忠助「お前其の女をどうか爲たのぢやな。」與三「そこはマ

本舞臺、眞中は九尺の番小屋板家根、よき所へ店番火の用心と記したる掛行燈へ燈火を點し、上下通し笹矢來の中より、板羽目うちし高塀、天水桶二つ程、これへ元山町裏河岸と記し、日覆より柳の釣枝、番小屋の戸一枚開きて、是れに割竹たてかけ弓張を置き、以前の半助火鉢を控へ番をしてゐる、此の道具納まる。

ト忠助番小屋へ立寄る。半助見て、半助「モウお前來たのか。今犬が吼えたつけえ、此方はどつちを通つて來た。」忠助「一廻り廻つてそれから爰へ、サアこなたはマア暫く休まつせえ。」半助「お前何をいふのだ、たつた今四時を打つたばかりだ、九時から代る積りだ。」忠助「ハテモウ可い、俺が番をするワ、貴様はマア休みなされい。」半助「夫れが否だよ。さう言つてお前に勤めさせておいては、どうかすると先刻の樣にいふではねえか、俺ア九時まで勤める〳〵。」忠助「これは又聞分の惡い、俺が代ると云へば。」半助「ハテ九時から代る積りだよ。」忠助「エ、俺が代る。」半助「なぜそんな事を言ふのだ。」忠助「ハテ俺が内の臺所のようはかた付いた、どうで家に居た所が寐られはしねえから、今日は俺に勤めさせて下せえ。」半助「さういふならどうでもいゝがの、又跡で先刻の樣に云ふと否だぜ。」忠助「先刻のは俺が惡い、料簡さつせえ、マア〳〵俺に替らせて下せえ。」半助「色々な事をいふナウ。それぢやア俺ア八時を打つと出てくるよ。」忠助「ハテマアそれも如何でも可いから、エ、行かつせえ。」トこの中半助こなし有りて、提灯へ火を點け、割竹を持ち、立つて上の方へ、半助「それぢやァ一廻り廻つて

種々な彼の子の事を思つてゐるものだから、俺が氣を察して、そんな事を。併し魔のものぢやァあるめえが。一體手前は何だ。」ト不審だち屹といふ。與三郎考へ、こなし有つて、與三「ム、それぢやァ俺が面や身體の變つた事を。」トこなし有つて、與三「なるほど、其の後お主にやァ逢はねえから、まだ譯を知らねえも理だ、カウ爺やァ、俺は與三郎だ。」忠助「エ、。」淨「忠助は見あげ見下し。」ト忠助よくよく與三郎の姿を見て、忠助「オ、さうだ、坊さん與三さんだ。」ト顏を見て、忠助「何だ、さうしてマァお前の其の顏の疵は。ハ、ァそんなら此の間、噂に聞いたに違ひなく。」與三「木更津の一件で、面も體も此の通りだ。」忠助「エ、〳〵情ない變り果てた其のお姿。」ト燈火を消す。扨はといふ心ありて、怖氣立ちし思入、あたりを窺ひ提灯を消す。時の鐘。あわてて、忠助「マァ〳〵此方へ來さつしやりませ。」ト無闇に手を引張る事。與三「コレサどうするのだ。」忠助「こゝでは咄が出來にくい。マァ俺がよい事がござります、モシ。」ト與三郎へ囁く事。與三「ム、つい其處か。」トめりやす、この中に縫ひぐるみの犬二疋程出て吼える事。忠助「エ、畜生め、提灯を消したら吼えやァがる、畜生め〳〵。」ト犬を逐ふ事ありて囁く。與三郎こなし有りて、天水桶の傍に忍ぶ心意氣、忠助下の方へ來る。柝木につきて三方廻しの誂へに、この道具まはる。

ト呟きながら舞臺へ來る。この中に忠助も火の用心〳〵といひながら、東の步道を渡ること、雙方よろしく、若い衆の仕出、東西より往來ふ事二三人ありて、與三郎は舞臺にて黒塀の方をこゝだといふこなし有つて、色々見まはす思入。忠助は割竹を鳴らし舞臺へ來る故、與三郎素知らぬ風にすれちがふ事。忠助は胡散な奴と訝る事あつて、大きく火の用心〳〵と割竹ならしながら下手へかゝる。與三郎さうだといふ心意氣あつて又後へ戻りかける。忠助こなしあつて、割竹を態とひどく鳴らし行き過ぎんとするゆゑ、與三「オイ爺さん、オイ〳〵。」忠助「何だ、通りへ出るのなら、先の曲り角から出さつせえ、この向うの潛りは閉切だよ。」與三「さうぢやァねえ、一寸聞きてえ事がよ。」忠助「時を聞くのか、まだ四時が鳴つたばかりだ。」トこんな事いひながら行き過ぎるを、與三「これさ俺だよ。」忠助「何だ俺だ、大風な事を吐す、ハヽァ生醉か。」トこなし。與三「オイ爺や、俺だよ〳〵。」忠助「爺やァだ。ヘンあまつたれた事吐すな、誰だえ。ハヽァ家根富の弟の源次か、家へ歸りそびれて、お袋へ詫事してくれか、そんないい氣な事ぢやァねえワ。」與三「コレ爺や俺だ、手前はいつも達者だナ。」トこの中提灯でよく〳〵見て、忠助「扨は狂人か、コレ俺ァそんな汚い若い者に近付はもたねえワ。」與三「エエ解らねえ。」ト側へより、邊へこなしあつて、與三「與三郎だよ。」ト思入。忠助「エヽ。」ト愕りして又よくよく見て、忠助「譃をつかつせえ、俺が育て申した坊さんは、そんなきたねえ男ぢやねえ。ァ、俺が

伊之「コリヤア謝罪つた。」　半助「それぢやァ一遍廻んなせえ。俺等も彼處の新道から、直に番小屋へ往つてゐる。」　忠助「九時を打つたら俺が代るぞ。」　伊之「ドレ店の用を片附けうか。」　忠、伊「火の用心〳〵。」
淨瑠璃「詞つがへて別れ行く。」ト時の鐘。風の音になり、忠助は花道へかゝり、半助は上の方へ入る。
伊之助は内の潛障子をあけて内へ入ること、誂への合方、忠助よろしく、忠助「ア、これ何にしても今日旦那が、海老名様へ呼びつけられ、いひ渡された彼の一件。あれが本當のことならば、大事だが、よもやそんな事はあるめえ、ア、氣にかゝる事だ。火の用心〳〵。」ト此の筋の捨臺詞よろしく、花道より中の歩道へ渡り、提灯を持ち割竹をならし行く。この中に舞臺は靜かに道具まはる。

本舞臺三間の間、目板うち、澀塗の高塀、上へ忍びがへし、此の間より植込の樹の見越、よき所に非常くゞり戸の模様、この側に筥の用水溜、これへ元山町と記したる町名札、伊豆喜とほりたる上へ、漆喰塗模様よろしく此の道具になる。此の間に忠助花道よりなかの歩道へかゝる頃時の鐘、四ツ竹の合方になり、揚幕より前幕の與三郎、好みの箸つけになり、三尺著流し、頬被してのそ〳〵見まはし出て來る。この中に忠助、中の歩道より東の歩道へかゝる事、雙方よろしく。

與三「ア、コレ十年は一昔といふたとへがあるが、まだ漸うと六年餘り、それでせへ此の近所の、大分以前とは變つた樣だ。」ト邊へ思入あつて、與三「併し變りもせうかえ、俺が身の上で知れたものだ。」

ら心任せにするが可い。」ト忠助考へ、忠助「なるほど然うしようか、俺も少し今旦那へ。」トこなし有つて、伊之「何ならさうして貰はう。」兩人「さうしなせえ〱。」ト忠助考へ、忠助「イヤ〱たとひ然うするにしても、この夜番と云ふものは、疎略な役ではねえ、こりやァ今度鎌倉から厳しい命令で、銘々家持から出て勤めると極つた事だ、家の旦那もコリャア忠助が堅い者だから、此の男の役にするが可いと言つて、旦那の眼鏡で勤める役だ。」伊之「そりやァさうさ。」忠助「そこで先づ旦那の命令とはいふ條鎌倉から出たお布令なれば、して見れば、頼朝公から此の忠助へいひつけさしやつたも同じ事だ。」兩人「ハヽヽ、大層な事を云ふなァ。」忠助「イヤ〱笑ひ事ぢやねえテ、お役當から拍子木が渡つて、もし何事ぞあれば、其の番に當つた者がカチ〱とくらはせる。ソリヤ一同に目を覺すワ、よしか、シテ見れば今夜一晩の所は、この一町の者を寐かさうとも、起さうともマァ心任せだ。コリヤ疎かにならねえ役だテ、宵の内は此方に頼むにした所が、何にしろマァ一遍廻らねえ中は役目が濟まねえ。」伊之「なるほど、昔の者は義理がかたいワ。」半助「それぢや一遍廻つたら、此方は臺所で休みなせえ、九時までは俺が番小屋へ往つて居るぜ。」忠助「オヽ、さうさつせ〱。」伊之「わしも又色々用が有つて。」ト件の鐵網の雪洞を持ち立ちかける。ト忠助此の時こゝろづき、忠助「これ〱どうしたものだ、往來へ雪洞を持ち出すとは。店番をする家では猶々氣を注けにやァならねえ、火の用心がわるうござる。」

が一人で勤めて遣るのだ。」　半助「さう言はれりやァ俺が悪いが、何時も早い此方が遅いから、ツイさう言つたのだ。」　伊之「マァ〳〵理窟をいはずと可いでねえか。」　忠助「それでもこんな年の下の者に馬鹿にされるも。」ト内の方へこなし有つて、　伊助「矢張旦那さまがわるいからだ。」トこなし。兩人は解らぬ思入して、　半助、伊之「これ〳〵、そりや何をいふのだ。」　伊助「旦那が悪いなんぞと、滅多な事を言はつしやるな。」トこなし。　忠助「イヤサこりやァ。此方衆も知つての通り、與三郎さんや、弟御の事で家中が亂飛亂國、たうとうこんな騒動になつたのも、俺が言はねえ事かえ。」ト内の方へ思入。　伊之「これさそんな事はお前が言つても追付かねえワナ。」　忠助「それでもモウ六七年前の事だ、俺が何かの譯は知つて居るから、大旦那に斯う〳〵なされる方が可いと言うたけれど、其の通りしねえもんだから、今度の一件だ。」　伊助「サァ其の與五郎様の家に御座らぬ、取込を知りながら、こなたの番に出ようが遅いと言つたのは悪かつたよ。」　忠助「何の與五郎さんはどうでも可いが、それよりかまだ氣にかゝることが。」トこなし。　伊之「エ、。」　忠助「ア、斯うなつては、後の祭だ。」ト氣をおとせし思入。兩人心々に考へるこなし有つて、伊之助の方へ、　忠助「さては。」ト思入。　半助「何の事だ、そりや然うと忠助様。今夜はの、宵の中はお前マア家の臺所も混雜だらうし、勝手に休みねえな。」　伊之「ム、。成程さうして九時を打つたら番小屋へ往つて、それからは貴様の役となつて居るものだから。」　半助、伊之「それか

半助「言はれた事は言はれたれお主も皮肉なものだ、今六兵衛さんにあの位いはれたのではないか。」伊之「そりや誰がよ。」半助「おめへの宅の師直爺が。」ねえ、寒からうが暑からうが、年がよつても勤める所はきつと勤めるなんのと、三段目の師直を見たやうな事を言つて、若い者をせこめてならねえ。」伊之「そりやア誰の事だよ。」半助「忠助爺の事だワナ。」トこの中よき時分より、下男忠助好みの服裝、老けたる拵へにて、割竹を持ち、伊豆喜と記したるすはうで子持筋引店番と記したる弓張提灯を持ち出て、二人が體を後で聞き居て、忠助「何がどうしたと。」ト割竹で下をたゝき、半助、伊之「やこなたは其處に居たか。」ト兩人こなし、忠助半助こなしあつて、忠助「コレ忠助なら忠助で可いワエ。忠助爺たア何の事だ、サア今一遍いつて見せろ。」伊助「コレサ〳〵。マア可いワナ、お前の居ねえと思つて謂うたのだ。爺だから爺だと言つたらうではねえか。」半助「かげでいふ事は、當時鎌倉の天下樣頼朝樣の事さへも、大天窗なんぞとやらかすではねえか、料簡しなせえ〳〵。」忠助「マア〳〵さう言へば堪忍してやるがナ。いつでも俺にばかり番をさせて置くではねえか、今夜は家がちつと色々取込んでる事が有ればこそ、遲くなつたのだ。何時も俺よりも半時づゝも遲く出張つて、九時を聞くとこくらこくら坐睡り始め、八時を聞くと白川夜船、明方には他愛なし、丁度俺と組合ふのが仕合、いつでも俺

半助「オイ〳〵、あの此の家の忠助爺さんは居ねえかネ。」 伊之「今勝手元に居たつけえが、今日はちつと家もいろ〳〵混雜だ。」 半助「混雜でも今日は店番が廻つて居るワナ。」 伊之「その店番の事は承知さ。」 皆々「大方今に出るで有らうサ。」 七助「こなたは組合だが不性だ、穴を埋めてやるが可い。」 半助「お前方がさう仰しやればどうでも可うございますが、爰の伊豆屋は混雜な筈だ、今會所で其の一件を聞きやした、家の嗣子の與五郎さんと、嫁子のお鶴樣が居なくなる、其處へもつて來て、何日か島へ流られた與三郎さんが。」 トいひかけるを、伊之、六兵「マ、これ〳〵、大きな聲で、靜かにさつせえ。」 皆々「靜かに靜かに。」ト制する事、半助科有つて控へる。 七助「時にお二人の一件は、明日仁田樣へ別に訴へる積りと致しませうナ。」 半助「さうさ〳〵、仁田樣ならよからう。」 伊之「これさマア默つて居さつせえ。」 六兵「俺は所は三田に居れど、彼所にも此の家の地面があれば、この事は、やつぱり彼方でも代官所へ屆けておかにやァならねえ、いづれ明日又こちらへ出張りませう。」 七助、若い衆「それは御苦勞で御座りますナ。」 皆々「そんなら明日。」 半助、伊之「これは御苦勞樣でございます。」トテンツ、になり、六兵衛七助跡の兩人つき添ひて橋懸りへ、伊之助、七助と提灯と鐵雪洞と取替へる事、この中にあるべし。伊之助直に内へ入りにかゝるを、半助「これ〳〵マア待ちなされいなア。」 伊之「それでも俺ァいそがしイワ。」 トいふを捉へて、半助「あの忠助殿はどうしたのだ、はやく遣してくんなせえナア。」 伊之「エ、こ

もあれ草臥やすめ、茶でもあがつて歸らつしやれ。」六兵「イエ〳〵、さういたしては居りますまい。」皆々「お内もどうやらお取込の樣子。」七助「失禮ながらこれにて。」皆々「お暇致しませう。」喜兵「そんなら明日會ひませう、皆の衆御苦勞で御座りました。」ト喜兵衛店のくゞりへ入る。あと皆々科ありて、伊之「サア〳〵これから銘々引取つて、内で緩りお休みなされませ、其の内にも俺は昨日からの事に付き、イヤモウ家中粉になりました。」六兵「その御心配は御尤も、私などは箕田の地面を、親の代から宿役をして居まするが、地主のことなり、聞捨にもならず、そこでお前樣方とも立合ひで、海老名樣のお屋敷へ出ましたが、左右彼所はやかましいお屋敷だてナ。」七助「イヤモウちつと物の言ひ樣が惡いと、直にとつこに取つて、眼の球の出るほど叱られる。私などは實は宿役は新參のことゆゑ、びつしより汗をかきました。殊に私は昨日の與五郎樣や、お母さんの一件を、其の序に此方から旦那が發言さつしやつた所が、最初にそれは筋が違ふと言つて呵られた、其の跡が私へ色々とのお訊ねに、何だかびく〳〵して、今に胸がどき〳〵サ。」若い者「とかく御代官所の事ばかりは馴れぬでは。」兩人「いけぬもので御座るテナ。」ト此の中橋懸りの方より、やつし股引の番人半助、割竹店行事といふ提灯を持ち出して、半助「火の用心〳〵。」トいひながら出て、皆々を見て、半助「オイ〳〵莊屋樣方はこれにお出でなされるかナ。」伊之「オ、お主は會津屋の半助どの。」皆々「御苦勞でござるの、御大儀々々。」

は鐵細雪洞を提げ、皆々立ちかゝり居る。喜兵衞伊豆屋主人にて老けたる拵へ、羽織著流しにて幕の内にて、皆々「南無阿彌だんぶつ〳〵、願以此功德平等施一切頓發菩提心往生安樂國」喜兵「これはこれは皆の衆、御苦勞でござりました。」三人「イヤモウ貴方も嘸お草臥でござりませう。」若衆「時に今日は御内にて御法事でも御座りまするか、百萬遍がござりますナ。」喜兵「されば聞いて下され、此の百萬遍も彼の野良殿が、島へやられる船出の日、生死の程も分らねば、每月々々今日を命日と思ふその百萬遍、親は未來の事までも思うて居るが、彼奴めは樣々の惡業働き、今日も俄の呼び出しは、やつぱり彼奴が事に就き、こな樣方にも大きな御苦勞をかけました。」伊之「何のあなた、其の御心配には及びませぬ。」六兵「年が年中お店の御厄介になります私共。」七助「この上とも何なりとも御遠慮なく、御川の筋は被仰つて下さりませ。」伊之「さりながら御子息の與三郎樣には何とも彼とも。」皆々「申し樣もござりませぬ。」喜兵「イヤモウ〳〵斯うなつたら、儕もさつぱり斷念つてしまひました。またこなさん達も、今日お役所で言渡された通り、見かけ次第搦めて出せと、後の後まで斯うした難儀をかけるといふは、詞に絕えた不所存もの、これ皆の衆、彼の野良めがこの周圍にうろ〳〵して目にかからうとも、必ずとも囘護うて遣つて下さるな、若しものことのある時は、お前方を恨みまするぞ。」伊之「そりやお氣遣ひなされまするな、其の事は。」皆々「よう心得て居りまする。」喜兵「アイ〳〵何はと

六郎、親常「正しく赤間の。」親常「ム、、さては風聞の。」ト皆々科、「送りし其の名は。」ト又狀を見て、「ヤ、海老名彈正。」ト思入。六郎「すりや海老名公より。」六郎皆々「彼の者へ。」親常「アこりや。」ト制して、「この儀取沙汰。」ト思入、チョンと木の頭。「無用ぢやぞ。」ト皆々はつと思入。與五郎苦痛の體、六郎いたはる科、親常書翰を見て考へる事、一度の仕組、きざみにつき早めし行列三重にて宜しく拍子幕。

八幕目　元山町伊豆屋の場

本舞臺三間半、瓦葺の廂付、上の方細格子、これへ續き三間、二所へ貫木揚戸おろせし商人店夜の體、眞中の揚戸一枚あげ、この所格子になり、これへはまり彩色に鼈甲櫛の形を描き、「御誂へ鼈甲品々。」としるし、この下くゞり障子にて、これへ引手など誂への通り伊豆屋と記し、二階の上下白木のさゝら羽目、中一面格子窗を、上へ半分程こうりやう外へ見せ、下手にあげ椽、上下あがり框など、すべて好みの如く、綺麗に上の方に土藏の前面、下手に四尺程の店の脇より勝手へ通る潛戸、開閉の誂へよき所へ用水桶、これへ元山町としるしある事、すべて與三郎宅裏がゝりの體、幕の内より百萬遍鐘の音、テンツヽにて風の音をあしらひ幕開く。

トこゝに六兵衛踏込を穿き、宿役人の服裝、伊之助前幕のこしらへ、七助同じく宿役人の裝束、下役兩人、年かさなる者組合にて役所より戻りし體、これを伊之助が弓張提灯を持ち送り出す體、七助

れば、終に其の家滅ぶるためし、なべて人の上を經書にも、孟子は性は善なりといひ、荀子は末世に性は惡なりといひ破る。是れをいづれを取り何れを捨つるか。既に與三郎が所業といひ、又この者の心根も皆それ〲に、親なる者の教へに隔てはあるまじきに、善と惡との身の行ひ、ハテ分けがたき世の人心ぢやなァ。」トときの鐘、科あつて、「コリヤ其方は、手傷をとくと手當いたした上で、親許へ此方より送り屆け遣はすぞ、この儀安心いたし居れ。さりながらチト其方に尋ね問ふべき仔細があれば、今宵は豐島の旅館へ伴れまるるぞ。」與五「ハツ。お情厚き君の御意、いかにも御供仕りまする。」六郎「さはいひながら手負ひし此の者。」ト思入。親常「コリヤ者共、近きに於て用意調へ、召連れ行くべき手當致せ。」皆々「畏まつてござりまする。」ト親常科あつて、親常「その方共の内跡に殘り、心靜かに手當して、直樣豐島の屋敷まで。」八人「ハァ、。」六郎「さはいひながら今宵のあらまし、一先づ當所の代官方へ申し達せし其の上にて、召伴れられ然るべうぞんじまする。」親常「イヤちとおもふ仔細もあれば屆けに及ばぬ、其の儘に致しおけ。」六郎「ハツ。」ト此の時親常袂より件の手に入りし密書を出す事。六郎見て、「シテお手に觸れし其の書翰は。」親常「ム、これか。」ト思入。與五郎これに心づく事よろしく。親常書翰を見て、「未だ封じ目切らざる書翰。コレ。」ト居並ぶ中より提灯を出す。「送りし宛名は、紅を奪ふ筆の渚へ。ム、。」ト考へ、「あけを奪ふは紫の、筆の渚は正しく硯。」六郎「紫石は。」

ちませい。」六郎「親常公の。」皆々「御前なるぞ。」ト屹といふ。是れにて與五郎ぢつと思入、本釣鐘。親常ぢつと見やる。好みの合方、谺のあしらひ。與五「途中の危難に逃げのびる、その暗がりに深手の苦痛、氣絶致した私を、御介抱下されまする此の場の體。」ト邊をよく〳〵見やり、親常へ思入あつて、「シテ君は如何なる御方樣。」ト思入。六郎「在鎌倉の列侯にて、民間市中の政事職。本田の二郎親常公。」與五郎「ハ、。」ト平伏せんとして苦痛の思入。親常「ア、これ〳〵、手傷の身分、差許すぞ。」トいひながら與五郎が體を見て、「急所を避けし其の手傷、案じることはないぞ、心を靜めよ。コリヤ其方は何處のもの、姓名は何と申すぞ、其の答へ相ならば有體に申せ、サ、どうぢや。」ト勞り尋ぬる思入。與五郎手傷を押へ科あつて、與五「當國武藏豐島の郷、元山町に住ひまする伊豆屋喜兵衛の倅にて、與五郎と申しまする。」ト是れを聞き、六郎皆々と顔見合はせ思入。親常考へて、親常「ム、元山町にて伊豆屋の倅。ハテ何等の事でか認め置いた事があつたワエ。ム、、オ、それよ、其方が兄與三郎と申す者がある筈ぢやが、親喜兵衛が勘當致し置いたであらう、さうか。」與五「ハツ、御意の通りで御座りまする。」六郎「其の與三郎と申す者は、先年鎌倉において、海老名殿の手に絡め捕られ、伊豆の小島へ流人の身の上。」ト思入。是れにて與五郎悄々とさしうつむく。親常「コリヤ面をあげい。」ト與五郎顔をあげる。親常つく〴〵見やり思入。誂への合方。「ハテ曇りなき汝が相貌。諺にも家に爭ふ子なけ

の政道の邪正を糺し、民間市中の愁訴をば、無からしめんと忍びの巡檢、あれなる熊野三社の宮へ、武運祈りに旅館より、其の通行に此の場の體。」ト六郎其の外皆々へこなし有つて、「其方共何と心得るぞ。」 六郎「ハ、ハッ。全く是れなる山上にて、盜賊などに出逢ひし者が、手疵を受けし其のはずみ、この谷間へ轉びおち、氣絶致せしものならんと。」 皆々「われ／＼推量仕りまする。」ト此の内親常右の書翰を袂へ納め、 親常「ム、、さもあらん、シテ手傷はどうぢや。」ト此の内六郎改めし體にて、 六郎「ハッ深傷なれども急所をよけ、心下身内の暖まり、氣脈は確かに相見えまする。」 親常「さすれば程經し事とも見えぬな。」トこなし。近習の内より見て、㊀「見受けますれば血氣の若者。」 ㊁「よく／＼介抱加へし上にて。」 ㊂「實否を糺明。」 八人「つかまつるで御座りませう。」 親常「イヤ手傷の上に高みより落ちたる者、苦痛を忍び耐ふる儀も、心には任すまい、何はしかれ。」ト印籠を出し、「携へし此の良藥。」ト六郎へ科あつて、「それ相澤六郎、かれに與へて呼びいけい。」 六郎「ハッ。」ト印籠を受取る事。此の內近習の中、上下より兩人立つて一人は上帶を解き、一人は印籠を持ち、流れの水を掬ふこと。六郎笄を出し、是れへ印籠の藥を引きかけ、與五郎の口へ含ませ、一人は上帶にて腹を卷く事、一人は水を與へる科あつて、トヾ六郎立つてヤッと活を入れる思入。與五郎これにてム、と息吹き返す科、皆々これを見て思入。 與五「ム、、ハア、。」 六郎「こりや町人、心がつきしか。」 皆々「心を慥かに持

る事。源左衛門闇がりにて間違の仕組よろしく、知らせにつき此の道具一面に迫り上る。

本舞臺正面奥向に凸凹の芝山、骨組の畫心丸ものにて、是れへ棕梠植ゑ、此の山の上に二段に柵、これへ所所に躑躅の花をあしらひ、榎松の立樹、赤松など丸物の高木所々に根ばかり、是れへ熊笹、以前の道具より付いて上りし土堤づら、あふり返し、闇ぼかしの霞へ榎の枝を取りつけ、此の前へ日覆より一面の松の釣枝、上下へ高き藪疊、よき所へ木燈籠の古びしへ、王子權現神燈と記し、燈明を點じ、上下植込の見切、下の方に芝山の土堤へしらみ打ち、これへ流水の浪板、爰に王子權現神領石神井川と左右に記し、正面の啄木の木の根へ、以前の與五郎が上著の袖、好みの紋つきしが、血潮に染みて引つかゝりゐる事、おろし本舞臺眞中より本田の二郎親常、好みの鬘割羽織大小、巡檢忍びの拵へ切草鞋、以前與五郎が銜へ落ちし密書を取り上げ見てゐる立身、相澤六郎絆纏股引、割羽織大小にて控へ、以前の手負ひし與五郎髮を亂し、山の上より轉び落ち氣絶の體。この上著の片袖斷れてゐる拵へ、是れを六郎引起せし見得、この傍に丸に木の字を篆書に記したる提灯を据ゑ、大小入りて好みの鳴物をかぶせ、見得よく迫り上げ、前の土堤面へ山幕を取りつけ迫り上げ、道具の納まりに是れを切つて落す。ト爰に近習八人、揃ひの絆纏股引大小にて立並び、此の前へ忍びの箱提灯、是れへ篆書にて丸に本の字を記せしを、四つ程おきならべ、この左右より紺看板の中間若い衆四人出て、上下に控へる事よろしく、かすめし夜神樂へこだまのあしらひ、誂への合方にて納まる。

親常「時も餘月に三更の、分野も納まり閃く星影。その星月夜鎌倉の、巖命受けてかくいふ親常、世

臺と兩方へ工夫あつて分れる事。久次は源左衞門が斬付けるを潜りぬけ、闕路の金へ意ある仕組の立廻り、鐵平は氣を苛ち、滅多斬に斬付ける。是れを與三郎は源左衞門と思ひし仕組の立廻り、鐵平こなし。この以前源左衞門密書を落す。これを與五郎思はずも取り上ぐる事あつて、與三郎鐵平の方へ行く。與三郎闇がりに源左衞門と思ひ鐵平へ突つかける白刃、鐵平身をかはせる事。爰へ與五郎入つて過つて與三郎與五郎を一突つく。與五郎はあつと苦しみ、聲立つる機に金財布を落し、件の密書を口に銜へ苦痛を耐へる仕組に、財布を尋ねながら舞臺の谷間へまろび込む事。與三郎この內、人間違の心意氣よろしくある事。鐵平爰にて與三郎へ斬りつける、兩人立廻りすべて闇がりなり。平舞臺にては、闕路はこの中財布を放さず、苦しみながら二重へ匐ひ上る事、久次闇がりに又一枷切る。闕路あつと苦しみ財布を落す。闕路藪疊の陰へ轉び込み、久次財布を探す意、源左衞門は二重よりおりて下の方へ、この時與五郎が落せし財布が足へ引きかゝり、取り上げにつこり思入。久次源左衞門思ひ思ひの科にて、源左衞門は西へ、久次は東の步道へ懸る事、與三郎は鐵平を二重へ追ひ上げて、源左衞門闇がりに間違へし仕組、與三郎脇差にて鐵平を一突突く。鐵平あつと苦しむ所を押伏せ、與三郎裏向に鐵平を刺し通す。源左衞門久次兩方の花道に、心々の思入。財布をもつて源左衞門につたり。久次財布を持ちよろしく科。件の匕首を持ちしまゝ兩人東西の揚幕へ逸散に入る。與三郎は鐵平を抉

しいのか。とはいひながら二度三度、命冥加な、野郎だなア。」 與三「其の命をば延ばはつて、江戸へ歸るも道を變へ、疲勞を休めた非人小家で、汝が子分の問はず語り、尾に尾をつけて罪を増し、たうとう此方は流人の身と、したのも汝が差畧だと、殘らず聞き取る返報に、疾うから來るのを待つて居たのだ。」 源左「エ、しやらつくせえ其の詞、島を遁れて來るからは、どうで遁れぬ天の網、手を下すのも面倒だ、此奴が腕を叩き折れエ、。」 甲乙「合點だ。」ト撃つて蒐る故、かい潜りて件の竹の仕込を拔く。是れに驚き駕籠の兩人はアッと云うて逃げて入る。直に源左衛門へ突いて蒐る。與三郎を突き退け支へながら、 源左「うぬ此の上は。」ト拔いて斬つてかゝる。立廻り兩人よろしく、一寸立廻つて此の機に源左衛門の切り拂ふ刀にて、枝にかけし自在を切る事、鍋ばつたり落ちて、ぱつと煙の煙硝火立つ。是れにて月雲がくれする。闇がりの模樣宜しく忍び三重、兩人立廻り闇仕合。爰へ上の方ばたばたにて、以前の關路手を負ひし體にて、財布を抱へつか／＼と逃げ出て來る。茲へ觀音久次追ひかけ出て來る。これへ源左衛門は與三郎と心得斬りつける。久次驚き身を替せ受け止める事、この中に與三郎へ關路突き當る、與三郎驚き探り見て女故搔退ける。爰へ源左衛門斬込む。この白刃關路を斬る。アッと苦しみ倒れる。この中に下手より以前の與五郎も、財布を懷中にして髪を亂し、つか／＼と逃げ出て來る。是れを鐵平追ひかけ、刀拔き持ち窺ひ出る事、この仕組の立廻り、二重の上の平舞

駕籠舁「これ〳〵道の邪魔だワ。」駕兩人「夜夜中つくな〳〵。」與三郎「御報謝をお願ひ申します〳〵。」トさし俯き思入。兩人息杖を入れて、駕籠甲「づう〳〵しい乞食ぢやァねえか。」駕籠乙「中の客人を誰だと思ふのだ、何處をはし〳〵へ行かうが、誰知らぬ者もねえ。」駕籠甲「赤間源左衛門さまが、鎌倉へ急ぎの通し駕籠。」駕兩人「邪魔になるワ、退きやァがれ〳〵。」與三「さう見かけましてお願ひでござりまる。」ト是れにて駕籠の垂を上げると、中に赤間源左衛門、これを見やり、源左「この土堤にゐる毎度ゐる山あらしかと思つたら、ハ、ァ汝やァ新米でまだおれを知らねえな。コレ上州はどうした、熊谷を伴れて來い、どうで通る時は遣る錢だワ。」ト云つてもづう〳〵しく屈んでゐる。駕甲「これ〳〵親方を知らねえか。」駕乙「あなたは赤間の。」兩人「源左衛門樣だワ。」與三「その源左衛門どんと知つた故、駕籠を止めた新米へ、御報謝やつて下さりませ。」ト思入あつて手拭を取る事、駕籠舁この中に駕籠をおろし、與三郎を見て驚く。源左衛門よく〳〵見て、源左「しやつ面の疵身體をかけ、殊に身形も野臥とも見えねえ汝が面魂、さうして汝は何處の誰だ。」與三「見覺えの惡い男だ、俺だよ。」源左「ヤ。」與三「與三郎だ。」源左「そんなら汝やァ伊豆の海島をば脱けて、ァノ爰へ。」與三「オ、サ何日が何日まで伊豆海の、それで命を果さうよりと、配所を拔け出てやう〳〵爰へ。」源左「さて〳〵しぶとい毛二才奴、いつかもあれ程憂目を見て、それにも懲りず島を脱け、いまだびく〳〵其の態は、左程命が惜

驅け出すを引止め、懐へ手を差込む。關路「コリヤ理不盡な、そこ放しや。」久次「コレさう言はずと。」ト争ふ。關路隠し持つたる懐劍を抜き斬りつける。久次身をかはせ、この手先を捉へ兩人見得よく、「そんなら刃物を持つてゐるな。」關路「さういふ汝を。」ト手を振切り突つかける。立廻つて、久次「エヽ危えワ。マア刃物をば。」ト捥ぎ奪らうとする。關路「放しや〱」トこの機に兩人揉み合うて關路の乳の下を貫く。「ハヽアー」ト苦しむ事。久次「コレ聲を立つるな、シツ〱。」關路「コリヤ私を殺してこの金を。」ト思入。久次關路を探り見て、久次「ヤ今の機に、手が外れたか。」トぢつと思入。關路「アレ、人殺し。」久次「コリヤモウ寧そ。」ト立廻りよろしく關路の白刃を引つたくる、關路手疵を抑へ逃げ出す。久次引止め財布引出す。關路財布の紐をとらへ、久次懐劍振上げ土堤へ上りかけ、兩人見得よく此の道具ぶんまはす。

本舞臺以前の非人小屋のある土堤のかゝり、小屋へは垂を卸し、此の前へ自在へ矢張鍋かゝりゐる事。此の下すこしづゝ燻りてゐる體、誂への通り以前の道具附の如く飾りつけあり。土堤の上平舞臺に、兩人の駕籠舁、中に客を乗せし體、棒端へ川口宿と記したる提灯を下げ、この棒端の方へまはり以前の與三郎、菰を引きかけ頬被して下より支へてゐる見得、しづかなる禪の勤めにて道具納まる。

取落したのを、俺が先へ手をかけた重みは凡そ四五十兩。」關路「エ、。」ト思入。久次「大概そこらと知れてあるワナ。」ト關路つか〳〵と逃げ出すを引止め、「コレ姉樣待ちなせえ、今大勢の奴等に取卷かれた其の時に、彼奴等が手へ渡らうなら、何處をどう無くなるか知れない金だ、俺が來たのが勿怪の幸ひ、そんなら俺に隱すには及ぶめえ。」關路「ハイ成程、そんなら申しますが、如何にも金を所持致してはをりまするが、是れはちと譯あつて、實意ある其の人から、情の惠みに受けたる金、一旦は預れども、容易に遣ひ捨てられねば、それゆゑ〳〵猶々大切に。」久次「どうで金は大事のものさ、カウお前に賴みだが、私も少し譯があつて、金がなければならぬ事が有るのだ。お前の方では容易に遣はれねえ金だらうが、此方では急になけりやァならねえ入用だ、儕が方の用さへ濟めば、お前の方へ其の金は必と返す、少しの閒どうぞ貸してくんなせえ。」關路「なる程そりやァお前の方で、どの樣な入用の事があらうも知れぬが、ぢやというて此の金は、その惠まれた人へ對し、どうしてマァむざ〳〵と、見ず知らずの此方樣へ。」久次「その見ず知らずの其の人へ、こんな事を言ひ出すのは、薄見つともねえが詮方つき、男が手を下げて賴むのだ。」關路「縱ひ如何程賴まうと、そりや其方の勝手といふもの。」久次「されば勝手でも有らうけれど、そこが賴みだ。」關路「エ、又してもあた執こい、重ねて言はば。」ト見構へる。久次「これ程いつても聞かねえけりやァ、無理にも借りるよ。」ト關路つか〳〵と

みの拵へ、麻裏草履頬被にて出て來り、下手に窺ひゐて、皆々關路へ立ちかゝる體を見て、この中へ分けて入り、一人が撃つてかゝる縫ひぐるみを引奪り、皆々を撲つ事、順禮潛りぬけながら關路を引立て行かんとする。此の立廻りよろしく、關路件の財布を取落す事、關路はつと是れにて巡禮の手を振捩り取上げんとする思入。こゝを久次皆々をうち据ゑる故、皆々敵はず、ばら〳〵と上下へ逃げて入る。時の鐘、薄闇き思入、兩人よろしく、久次「何でも二人は物貰ひだが、二人の野郎は何物だか。オイ姉さんどうした譯だえ。」ト關路は件の財布を尋ねて科ありながら思入あつて、關路「ハイ何やら譯は分らねど、あの通りにいひ合はせ、私を捕へ無體の手籠、貴方のお蔭で助かりました。有り難うござりまする。」久次「彼奴等は惡い奴等だ、やつぱり荒かせぎと見えるワエ。」ト科あつて、「サア危い、行きなせえ〳〵。」關路「ハイ〳〵。」ト尋ねまはる科、久次も是れにうつかりと此の體を透し見て、一寸足許に躓く財布に手をかける。關路も是れへ手をかける。兩人よろしく、關路手早く懷中して、かたへに落ちし菰へ匿したる匕首を持ち立ち上る、久次思入。「私は心も急けばお先へ參りまする。」ト立ちかける。久次「コウ姉さん、今のは金だの。」關路「ハイ。イ、エ。」と怖氣に立ちかける故、久次「オイオイ待ちねえ。一人ぢやァ危險えぞ、定九郎ぢやァねえが、送つて遣らうといふ事よ。」關路「イエイエ私は金子など持つては居りませぬ。滅多な事をいうて下さりますな。」久次「それでも今の混雜に、

門十「扨こそ汝は。」ト組付くを一寸立廻つて、以前門十が使ひし竹鞘の匕首を見つけて、與三郎取り上げる。「ヤイあぶねえ、それを。」ト捥ぎ取りに掛る、一寸奪ひ合ひ、この白刃を見得よく與三郎見て、思入あつて又立廻り、機に門十をポンとあてる、門十たじ〳〵として後の藪陰へころげ込む。與三郎土堤づらの石にて右の白刃を寐刃あはせる科、時の鐘、小凄き合方にてこの仕組宜しく道具廻る。

本舞臺以前の崖づくり、辻堂の道具に戻る。ト中程より禪の勤め、爰に以前の關路、菰に纏ひし脇差を抱へて、是れを以前の順禮、贋六部兩人、段平、子分市助幕明の惡徒立ちかゝり、引きとめてゐる見得にて道具納まる。

關路「見れば先刻の修行者殿、最前情ある人より惠みを受けてありながら、又も私をば跡追ひかけ、こりや何とする、どうするのぢや。」六部△「さつきは毎度の旦那から、扱ひの錢が出た故に。」順禮□「一旦あすこに見遁したが、又改めて蒔直し、それといふも。」兩人「頼みがあつて。」關路「すりや何者の頼みがあつて。」子分、段平「オ、其の頼み人は平馬樣、それ故一味の鐵平へ。」市助「心が一致の此方人們が、汝の跡から。」兩人「尾けて來たのだ。」關路「扨は惡人山鹿毛へ、加擔なしたる惡者よな。」□「それ面倒な。」段平「たゝきしめろ。」ト子分兩人は縫ひぐるみ、順禮□、六部△兩人は關路の懐中を窺ふ意、關路手を觸へさせじと色々潜り拔ける、心意氣の立廻りよろしく、此の内向うより觀音久次、好

れの果て、それで氣をつけてくれるだらう。」ト貰ひし籠を持ち、「今源左衞門さんが通らしつたら、金の一分もくれるで有らう、食物は十分ある、貰つた肴もこの通り、どうして〳〵此の樂しみは、大名になつても出來やァ仕ねえ、二三日すると忘れぬとは、よく謂つたものだなァ。」ト思入。この内に後の菰垂ばらりと落ちる。内に島戻り向う疵の與三郎、窶れし拵へにて、始終の樣子聞いて居た思入。門十見て、「ヤ此方は何時の間にか目が醒めたな。」與三郎「アイサ、たつた今さめやした。」門十「さうか素敵に疲れたと見えるの。」與三「イヤモゥお蔭で、ぐつすりとよく寐やしたよ。」トあたりへ科あつて、「モシ今ちらりと聞きやしたが、源左衞門といふ人の名は、アリヤァ上總の木更津邊に居なすつた赤間源左衞門樣の事でござりますかえ。」門十「オ、サ、其の赤間の親方よ、此方はよく知つてゐるの、それでは近附か。」與三「アイ隨分その以前お世話になつた事もありましたよ。」門十「そりやァ丁度可い、知つた顔なら幸ひだ、路銀でも拵へて貰ふが可い、今に爰を通らつしやるワ。」與三「そんならいよいよ今爰を。」門十「ヤ。」ト思入。與三「ム、。」トぢつと思入。門十不思議だつ思入、時の鐘好みの合方、「疲れてうつゝ何事も、白川夜舟で小屋の隅、青天井の草枕、まだ初物のお菰の味、筵の隙を漏る風に、ふと目が覺むれば二人の野郎、問はず語りも地獄耳、そんなら俺が此の程の、憂目もやつぱり彼奴が業か。」ト門十これにて扨はと科、立ちかゝるを突き退け、「此奴は料簡ならねえワエ。」ト思入。

縄にかゝり、憂目をあくまで見せてやるが可からうと、たうとう其奴は流人の境界。」◎「所も伊豆の離島へ流されて、さんざ憂目を見た上で、果ては磯邊で寐ぐさる命、とつくに島で其の野郎は、おつくたばつて終つたらう。」　丈助「何と可い。」　兩人「氣味ぢやァねえかえ、ァハヽヽヽ。」ト兩人思入あつていふ。　頭門十「なる程、赤間源左衞門樣の勢ひは。」　子分、兩人「凄まじいものだなァ。」◎「今に川口からの通し駕籠で　この土堤を通らつしやるワ。」　丈助「大方祝儀でもくれるであらう、待ち受けて貰ふが可いぜ。」　頭「そりやァ通りさへしなさりやァ、小遣を貰ふ定旦那よ。」◎「時に遲くなつた、行かうぢやァねえか。」　丈助「ちげえねえ。」ト煙管を仕舞ひ件の烏帽子籠を出し、「こりやァ送つて來た手やひが振舞で、喰ひきれねえから持つて來た。お主に土産だ。」　頭門十「こりやァ有り難うござります。」×「さういふ肴が來ては、濁酒をごんつく奢らずばなるめえ。」　頭門十「買つて來い〳〵、その序に土堤のうちを送つて上げろ、病犬がどうもならねえ。」　丈助「そいつは恐れるな。」×「ナニ儕が行けば眼球が魔除になりますワ。」ト子分、提灯を持ち先へ立つ、非人×竹杖を持ち徳利を提げる。　丈助「そんなら上州。」◎丈助「達者でゐやれ。」　頭門十「氣を注けてござりませ。」ト風の音、木魚入の合方になり、丈助◎非人×向うへ入る。非人頭跡見送り、捨白など宜しく有つて、「やれ〳〵奇特な手合だ、併し俺も唯の菰つかむりなら、斯うもしてくれめえが、俺も以前は上州者、山あらしの門十と云つては、煙つてえ男のな

て仕舞つたが、身は今もつて此の通り鞘へ入れて。」ト青竹の鞘を見せ、「庖丁の代りに使つてゐるが、隨分よく切れますよ。」子分◎「とんだ非人敵討だ。」×「本名があると見えませうな。」丈助「とつさんなんぞは、上州では相應に人に知られた男だなう。」×「なる程。館林から熊ヶ谷邊で、山あらしの門十といつては、知らない者はねえ男だと、親分が咄で聞いたつけえ。」頭門十「山あらしでもも〻んがァでも、氣の利いた化物は引込際が肝心だ。」×「お菰となつて仕樣がござりません。」頭門十「しかしお前方の親分の源左衛門樣なぞは、運に叶つて賣出した人さね。」×「いつでも爰を通らつしやる時は、此の土堤に居る者へ、それ相應の心づけ。」頭門十「この間川口の方へ逗留に行かつしやると聞きましたが、何日戻りになりますえ。」丈助「昨日までに彼地の用も片づいて是れから鎌倉のお邸へ、少し頼まれた事もあり、夜を日についで急ぎの道中。」◎「川口から通り駕籠で、追つけ爰を通らつしやるのさ、今度彼方でも相應な金儲けよ。」頭門十「なる程、赤間源左衛門さんといふ人は、何につけても。」◎、丈助「運の強い男だてナウ。」丈助「それといふのも鎌倉の邸方に、可い引つぱりが有つての事さ、モウ五六年跡の事だ、親分が世話をして置いた女をば、ちよろまかした野郎があつて、半殺しの目に逢はせて、其の野郎奴が體をば、相手方へくれてやり、定めし跡でおつくたばつたと思つた所、鎌倉にまごついてうせると聞き、源左衛門どんの口先一つで、海老名樣へ斯う〳〵と吹き込んだら、忽ち其の野郎は

小屋の隅へ寐かしてくれないかと頼むから、可愛さうでもあり、昨夜は王子から素人に喰はせても恥かしくねえお餘りを、しこたま貰つて來たものだから、喰はないかと言つたらば、マァ何にしても寐かしてくれろといふから、其の譯にしておいたら、今日永の日一日寐てゐる樣子だ。よつ程疲れたと見えるが、何でも彼奴は江戸つ子のあがりだが、宿無しの小家へ無心をいつて泊るといふは、路用に盡きたのか、併し世の中には物好きな奴もある者だなァ。」×「可いワ、目の覺めるまで氣儘に寐かして置くが可いワ。」トこの中×は件の品を切り刻み、一つの鍋へ入れる事。此の内に右の鳴物になり、此の臺詞の中に上の方より以前の赤間の子分丈助一本差、同じく子分◎潮干の場の拵へ一本差、尻はしより脚絆がけ草鞋にて、好みの提灯と烏帽子籠へ入れし肴を提げ出て來り、丈助「上州爰にゐたか。」丈助、◎「いつもお主は達者ぢやナ。」頭門十「オ、加納山の親方の組子の旦那衆だね。」×「こりやァお揃ひで、何處からお戻りでござります、今摺火打つて拵へた火だ、宿無しの火でも汚くはござりません、一服喫んで行かつしやりませ。」丈助「なる程一服して行かうか。」子分◎「思ひの外くたびれた。」ト石へ腰かけ莨のむ事。丈助「カウ見りやァ乙なもので料理をして居るな。」ト是れにて非人頭手に持ちし裁刀へ科あつて、頭門十「これかえ。こりやァ斯うさ、一昨年この土堤に行倒れがありやした、それを私が取片附をした時に、廢り物にならうといふ匕首を、とめておいて拵へは段々に凡そ二貫ばかりに賣つ

飾り付け、爰に非人頭門十、襤褸を身に纏ひ、ばら〳〵とした鬘、破れし手拭を頬被、ぼろ〳〵と破れし三尺帶して、上へ菰を引きかけ、非人×、おなじく襤褸を引きかけ、汚き手拭頬被、兩人焚火をして自在へ鍋をかけ、この下をば焚きつけてゐる。非人頭は青竹を割りし鞘へ仕込みし匕首の身にて俎板にする、干葉をきざみゐる。この俎板の上へ鮭の頭のせてある事、時の鐘、木魚入の合方にて道具納まる。

非人×「オイ〳〵頭、可い鹽梅に火がもえた爲か、雜炊がよく出來やしたぜ。」頭門十「待て〳〵、どうしてどうして、まだ思ふ樣焚かないけりやァ行かねぇワ、左右宿なしの拵へる雜炊は、米も麥も方々から集め物だから、よく煮えた樣でもだまがあるワ。」×「成程そんなもので有らう、此方はお餘りばかりで、自分で焚いて喰つて見ねえから分らねえ。」頭「モウ少し煮えたら、ちつと脇へ卸してむらせて置くが可い、今俺が味え物を拵へるワ。」×「コレ何の料理が出來るのだな。」頭門十「ハテ菜漬の香物の漬き過ぎたのを多い事貰つた中へ、鮭の頭を刻み込んで、王子で貰つて來たお餘りも一緒にして、混多煮を拵へるのだ。」×「そいつは味からうワエ。それはさうと昨夜この小屋へ仲間入があつたではねえか。」頭門十「馬鹿をいへ、仲間入ぢやァねえワ。年も若し、可い若い者だが身内から面をかけて疵だらけよ。」×「其奴は只者ぢやァあるめえな。」頭門十「されば相應に逢目のある人足だらうが、まだ宿なしに墜ちきつたといふ譯ぢやァねえ、遠方から路金に竭きて、夜通しに歩いて勞れはてたから、

是れに藤六百藏支へる事、爰へ赤開子分助八走り出て、淸八下女を拔刀にて追ひ拂ふ。これに耐らず供の一卷逃げ出す、早めし鳴物宜しく、惡者、皆々「そりや駕籠を行れ。」駕籠舁「合點だ。」ト舁き出でる。所へ以前の與五郎、鐵平と爭ひ出て、皆々をかきのけ駕籠をとめ、與五「その駕籠やらぬ、マア待つた。」丈助「ヤ、先刻の二才め。」皆々「又うせたな。」與五「平馬に黨せし惡徒ぢやな。」鐵平「オ、知れた事ぢや、邪魔をひろがば命がないぞ。」與五「何を小癪な。」鐵平「それぶつ締めろ。」ト縋りつく。與五郎を藤六百藏引きとめる中に、丈助は駕籠につき橋懸りへ入る。與五郎を突き退け、兩人も駕籠へつき橋懸りへ入る。鐵平與五郎へ縫ひぐるみにて擊つて蒐る。潛りぬけ立廻る中に、懷中より以前の橐を落す。「ヤ慥かに金を。」ト是れを聞き與五郎拾つて、懷中して逸散に橋懸りへ入る。是れにて知らせにつき此の道具ぶんまはす。

本舞臺中足の高さ、棕梠植の土堤、正面よりすこし上へよせて菰張の蒲鉾小屋、この脇へ竹柱、面桶、一升德利を毀したる喰物入の器、梅干樽など置き竝べ、此の前に姿よき松の臺實木、これへ燻りし自在をかけ、この下へ焚火鉢、この小屋の左右へ松の竝木二三本づゝ、この後藪だゝみ、上下同じく高藪、日覆より一面に松の釣枝、舞臺前によき所へ崕山の張物、この後切穴、爰へ冬木の梢、この間より茅萱の茂り、好みの通りにして物凄く

く裏手へ逃げる所。」 清八「大勢の悪徒奴が一度に來て、駕籠に附添ふ者を逐討に、駕籠舁もぐると見え、何所をどうか雲霞。」 清八、下女「かついだまゝに逃げ去りました。」 與五「ヤ、、、お鶴は兎も角も母者人にお怪我があつては猶々濟まぬ。」 兩人「少しも早う御座りませ。」 與五「オ、合點ぢや。」トばたばたになり、此の時上の方にて喧嘩々々と人聲よろしく、與五郎上の上へ走り入る。川水の音、時の鐘にて前の道具引いて取り、淺葱幕を切つて落す。

本舞臺三間の間、五尺許りの高さに土堤前面の張物、尤も凹凸の赤土へ叢の書割、物凄き誂へあつて、眞中より上へ書心に丸太、埋込みの段々、此の上に古びし辻堂、土堤の上へ一面の二重に柵、向う竹藪、上下植込の見切、日覆より松の釣枝、古びし石の榜示杭へ「板橋辨天道」と記してあり、道具納まる。

ト禪の勤めになり、四手駕籠へ垂の上より繩を巻き、若い衆の駕籠舁二人是れを擔げ、以前の藤六百藏附添ひ驅け出る。跡より下女、清八走り跟き出て來り、 清八「悪徒奴等見つけたぞ。」 下女「その駕籠待つた。」 兩人「やる事はならぬ。」と引きとめる。爰は若い衆の下男の拵へ、供男の拵へなど兩人出て、 皆々「駕籠はやらぬぞ〳〵。」 藤、藏「喧しいワ、邪魔をひろぐな。」 下女、清八「イヤ遣る事はならぬ。」ト立廻り引戻す事、混交の立廻り、下女清八駕籠をとめる。若い衆の供兩人もとめる、仕組宜しく。

け、「とはいひながら大枚を。」　與五「ハテ人の目褄にかゝらぬ中に、早う納めて下さりませ。」　關路「チエ、忝う存じまする。」ト思入有つて懐中すること。この時上の方にてばた〳〵の音する故、與五「物騒がしいあの人聲。コレ。」ト囁き、「早く爰をば。」　關路「ハイ〳〵。」ト科あつて笈摺を脱ぎてこなしあつて、「左様なれば與五郎様。」　與五「御用も御座らば我等が店まで。」　關路「おさらばで御座りまする。」トこなしあつて、時の鐘浪の音になり、橋懸りへ走り入る。與五郎こなしあつて、與五「思ひがけない關路殿にお目にかゝり、始めて聞いて驚く事ども、左近殿には御切腹。ア、これにつけても兄者人與三郎様は、未だに伊豆の島守の、憂目に逢うて御座る事か、モウはや此の世を去られしか、それといひ是れといひ、如何なる宿世の因縁ぢやなア。」ト思入。ばた〳〵になり、上手より伊豆屋の下女、雪蹈がけにて、以前の手代清八、尻端折にていきせき走り出て、下女「若旦那與五郎様。」　與五「エ、けたたましい何事ぢや。」　清八「何事所か大騒ぎ〳〵。」　下女「大事で御座りますワイなア。」　與五「そりやどうした事ぢやぞいナウ。」　下女「サア お聞きなされませ、今御老母様やお鶴さんと御一緒に、地内の飾り物を御見物なされてお出で遊ばす所。」　清八「俄に騒ぐ大勢が、喧嘩々々といふ故に、御老母様へ怪我をさせ申しては濟まぬゆゑ、附添ふ者が手を引き申し、山續きに一手は逃げぬけ。」　下女「お鶴様は猶以て危いと思ひまして、清八殿の計らひで、お鶴様をば駕籠へ乘せ、子僧殿や男衆が附添うて、漸

取りくれよと、金を差置きお歸りある、私の意では、義理のある兄の血筋の家へ、聊かなりとも貢ぐ意と思へど、そこは武家の一轍、それ故に打過ぎしに、唯今貴方に承れば、兄與三郎殿が血を分けし貴方の夫の左近様は御切腹なされし上、穂積の家は滅却とは、言はう様なき世の浮沈。思へば〳〵殘念至極、シテ未だお目にはかゝらねど、舅御の隼人様は。」關路「御同道申す途中にて、迷ひし道にはぐれしかど、志すその先は此の吾妻路に二ケ所の知方、それを尋ねて足を留め、お出であらんとそれをば便りに。」與五「ハ、ア頼もしきお志、貴方は他家より御縁組なされし御身でありながら。」關路「ひとたび緣を組むからは、夫の家へ立つるが貞節、女子の常でござりまするワイなア。」トこの中に懐中の胴巻より五十兩包二つ出し、手早く一つを關路へ差出し、あたりへ思入して、與五「モシこの金を御用に立てて下さりませ。」關路「ア、イヤ〳〵、聊か路用の貯へは御座ります、どうしてマア滅相な、多くの金をこなた様から、こりやマアそちらへ。」ト戻す。與五「ハテ此の金は先だつて、小笹様に御用に立つる其の時に、たつて受取るまいと申したを、どうあつてもと御返金下されて、お預り申した金子の高。丁度太々講の預り金、私が今こゝに持つて居れば、これを幸ひ半ばを分けお渡し申すのも今の御身分、お前様のお心を感心致して御用に立てば何卒御辭退なされずと、お遣ひなされ下さりませ。」ト邊へ思入あつていふ。關路「それほどに言うて下さるを、無下にお斷り申すのも。」ト取り上

先へ。」清八「ハイ〳〵畏まりました。」與五「早う行きやれ〳〵。」清八「それぢやァお先へ、貴方御ゆるりとお出でなされませ。」ト早足に上の方へ入る。與五郎邊へ科あつて、與五「もし、どうした譯で此のお姿で此の地へお越しなされましたな。」ト關路もこなし、合方になり、關路「お尋ねに預つて、斯う斯ういふ時宜ゆゑにお尋ね申すも今更に申し上ぐるも涙の種。」與五「シテ貴方の舅御隼人樣はじめ、兄與三郎殿の實の母御、小笹樣には何ぞお變りでも御座りましたか。」關路「鎌倉と東とは近いというても國も隔たり、御存知ないも御尤も、母人小笹樣には、奧樣のお執成で閉門の其の中も、寶詮議のその爲に、鎌倉へお上りなされ、其の折からはお前樣にもお心添で、首尾よう手に入る眞鶴の香爐を、一度下總の御館へ持ち歸り、殿の御覽に入れし上、禁庭へ獻上と事極まり、本國へ持參の途中にて、母樣には人手にかゝりて敢なき御最期とげられました。」與五「シテ何者の仕業にか、手掛りでも御座りまするか。」關路「サア是れぞといふ證據もなく、取り得し寶は人手へ渡し、重々の失策とあつて、私が夫左近殿には言譯なさの御切腹、知行は其の儘召上げられ、お年よられし舅御樣、妾も其のまま永の御暇、無念に送るこの年月、御推量なされて下さりませ。」與五「今日が日までも夢些か、存じもよらぬ其の大變、尤も小笹樣には鎌倉でお目にかゝり、彼の香爐の質請の其の折から、お取替へ申せし五十兩の其の金は、私が和泉屋へ逗留の其の中に、御持參なされてどうあつても、返金すれば受

魔をすると聞かねえぞ。」今「旦那のおかげで助けるのだ。」四人「幸福な奴だなァ。」ト皆々橋懸りへこなし。時の鐘になり入る。關路始終さし俯き、關路「誰方かは存じませぬが唯今の難儀、お救ひ下されまする御恩の程、有り難う存じまする、なか〳〵お禮は詞にも盡されませぬが、又あの者がこれへ參らぬ其の内に、妾は爰を立ち去りまする、重々の御厚恩、御緣もあらば又其の中お目に掛りゆるゆると、お禮申すでござりませう、眞平御免なされませ。」ト顔見せぬ心意氣にて禮いうて上の方へ行かうとする。この中與五郎清八こなたの牀几にかけゐる。關路へ科あつて、關路ゆきかけるを、與五「アもし〳〵お女中。」ト呼びかける。關路また行きかける故、「コレお女中さま、一寸お待ち下さりませ。」關路「ハイ。」トもじ〳〵科あつて、「御用でござりまするか。」トとまる。與五「お姿は變りはてたれど、正しくあなたは。」ト考へ、「其の以前元山町へ一兩度、御邸の御用が表向で、お尋ね下されました關路樣ではござりませぬか。」關路「お目立ちまする上からは、お隱し申さう樣もない、如何にも穗積左近が妻、かかる姿でこのお目もじ。」トあたりへ科あつて、「お恥かしう存じまする。」清八「成程貴方は過ぎし頃、與三郎樣がまだ内を外で御座る頃、お出でなされたお屋敷の。」ト惘れし思入。與五郎こなし有つて、與五「ア、これ〳〵清八、お主は、私が爰へ來た事を、母樣やお鶴にもさう言うて、何か又用もあらう、儕は今に別當所へ行つて、講中の衆にも逢つた上、海老屋まで行く程に、その積りでお主は

を出せ。」ト此の爭ひの中に向うより伊豆屋與五郎、羽織著流し雪蹈がけ、跡より淸八手代の拵へ、棧留の袴、風呂敷を持ち出て、舞臺の樣子を見ながら早足に來り、宜しく見兼ね止めて淸八へ囁く事。淸八「ア、これ〳〵、女を捉まへてどうした物だ。」與五「見れば其方達は每度この往來へ竝んでゐる修行者ではないか。」口「オヤお前樣はいつも手の內を下さる。」四人「旦那でござりますね。」ト悄氣る。この中鬮路、與五郎を見て恥かしき體に顏そむける事。淸八「何だか知らないが、見りやァ新米の修行者だ。」與五「可哀相に料簡するが可いワ。」口「そりやァお前樣のお詞だがね、こんなべんべら物を著て居ながら。」△「私らが出張る場所へつか〳〵と踏み込むから。」四人「出させるつもりで彼これいふのさ。」トこの中淸八こなしあつて錢を二百出して、淸八「コレ〳〵今爰へ旦那がお通り懸りなされて、料簡しろと仰しやるのだ、譯は何だか知らないが、サァ是れをもつて早く彼方へ行くが可い〳〵。」口「それぢやァ旦那がこの新米に。」△「それだから仲間入の錢を。」兩人「商賣の邪魔になりますワな。」四人「肩を持つてかえ。」淸八「何で旦那が肩を持つの腰を押すのといふ譯ではねえ。通りかゝつて止めさつしやるのだ、それを持つて行けといへば。」ト是れにて順禮皆々へ科あつて、口「しかたがねえ、每度御報謝に預る旦那が、堪忍してやれと云はつしやるから。」△「料簡して遣るが可い、コレお主達も料簡しやれ。」口「仕方がねえ、料簡してやりませう。」口「コレ新米、この近所へ來て俺達が商賣の邪

丈助「みんなも一緒に。」鐵平「サア來やれ〳〵。」ト雙盤太鼓になり、皆々上の方へ入る。ト橋懸りにて、大勢「歩みやアがれ〳〵。」ト早めし大拍子になり、橋懸りより左近妻關路、窶れし拵へ、好みの著つけ後帶、上へ坂東札所の笈摺を引つかけ、これを□老けたる女巡禮の拵へ、△おなじく贋六部の形、若い衆×〇二人襤褸非人のこしらへ、縫ひぐるみを持ち、□△、關路を引立て出で來り、□「コレ〳〵姉樣、言譯をしても駄目な事だ。」△「巡禮の形でゐるからは、貰ひ溜があるに違ひねえ。」四人「早く出して仕舞ひなせえ〳〵。」ト口々にいふ故、關路「これは又無體なこと、妾は人の門に立ち、合力受けし覺えもなく、往來で袖に縋り施行貰うた事がなければ、貰ひ溜とやらいふ、其の樣なお前方に取らする錢はござらぬ、滅多な事をいふまいぞ。」□「何だ此奴は大層大風を吐すからは新米だな。そんな美しい新米乞食が、この邊で稼がれては俺達の咽がひるワ。」△「その拵へで貰ひ溜がねえとはいはせねえ。」四人「早く出せ〳〵。」關路「又しても無體な事、なる程順禮姿をして居る故に、さう言やるも尤もぢやが、妾はチト譯があつて。サア信心故に坂東の札所へ參詣をする者ぢや、修行して通る者ぢや御座らぬワイの。」□「御座らうが御座るまいが、順禮の形で居るからは、おいら達が仲間へなぜ挨拶をして通らねえ。」四人「なぜ仲間入の挨拶をしねえのだ。」關路「その樣な法があるかは知らぬが、何をいふも修行者の勝手を知らぬ故の事、マア料簡して。」□「イヤ料簡ならねえ。」四人「錢を出せ錢

ますよ。」ト此の中香爐を仕舞ふこと。 丈助「さうして今道具屋さんが、面倒な奴に逢つたといつたは。」
長九「ナニ外でもねえ、私が以前奉公した主人の息子を見かけたからさ。」 段平「さうしておめへが。」
四人「主人といふはえ。」 長九「されば元山町の鼈甲商賣、伊豆屋の家の私は番頭。」 丈助「そんならお前はその以前、伊豆屋の家に奉公を。」 長九「左樣さ、總領息子は大の道樂、とても末始終長い正月はあるまいと、私が方から伊豆屋を見かぎり、今は氣樂の道具屋商賣、所が總領の與三郎は、色々な事がたゝまつて、伊豆の離島へ流し者、そこで否應なしに弟の與五郎が、伊豆屋の跡式を丸どりで、りうと極り、この權現樣へ太々講で參詣に來た樣子、顔を見合はせても面倒ゆゑ、そこでいまの頬被。ときに私は平塚の邸へも用を抱へてゐやす、どれ急いで行きませう。」 鐵平「それぢやァ香爐の一條は。」
長九「ハテ呑込みやした。そんなら皆さん。」 鐵、丈「長九郎殿。」 長九「ゆるりとお出でなされませ。」ト右の鳴物になり上の方へ入る。跡にみな〳〵殘り、 鐵平「今道具屋の話では。」 丈助「そんなら伊豆屋の與五郎も。」 鐵平「おつつけ爰へ來るとの樣子。」 段平「それぢやァ迂闊に彼の女を。」 藤六「引つぱらう。」
四人「手つがひが。」 鐵平「たとひ與五郎がうせるとも、邪魔をひろがば彼奴ぐるめに。」 丈助「さうしてお鶴の其の外に、かの話の女が形は。」 鐵平「それも此方に見覺えが、コレ。」ト丈七へ囁く。 丈助「ム、よう御座います、そんなら邪魔のねえ中に、喧嘩仕掛で一方から。」 鐵平「おつ片附ける手筈は道々。」

かける事あつて、「こなたに逢つたらくれ〴〵も、此の節金が入用故、早う捌いてくれろといはれた、どうか働いて貰ひてえ。」長九「それだといつてこんな賣物は、さう性急に行く譯の者ぢやアねえ。」ト箱に入れしを出して見せて、「この通り何所へ往くにも持つて歩くが、斯う預つて居るからには、平馬樣の方へも、十五兩といふもの、私が金を用立つてありますワ、賣捌きさへすれば、直々跡金をあげますワエ。」丈助「さうして幾程に賣るつもりだえ。」長九「本當の相場にする時は、三百兩が四百兩といつても、隨分にくくない大名道具、しかし世間では不向な品、急に金が入用ゆゑ、ばつたりに百兩に賣つてくれろと言はつしやるから、マア百兩なら手放す積りさ。」鐵平「これ〳〵積りばかりで居ても、賣れないではつまるめえ。」長九「サアそこで方々と見せたらば、是非々々買ひたいといふ人がありやす。」鐵平「そんなら鶴の香爐を。」皆々「百兩に買ふ人が。」長九「きつと有るね、間違なし。しかし首尾よく賣つた其のときは、私が貸した十五兩、差引いた上できつとした口錢は貰ふつもり、そこに間違はありますめえネ。」鐵平「そこは平馬殿に掛合はつせえ、左に右急に金が入用、何分早く賣拂ふ算段が肝心だ。」丈助「シテ買人は侍か町人か。」長九「ナニ大した人ではねえが、必ず外々へ渡してくれるな、是非買ひたいとかた〴〵の約束、金の算段さへ出來る時は、今夜にも譯が分りやす。今日その人にも逢つて來ました、遲くも明後日までには、金さへ手取れば平馬樣へ。」鐵平「きつと頼み

四人「ものだてなァ。」丈助「しかし主は浪人をなすつて、何時頃から此方の方へ。」鐵平「されば國元木更津は元より、鎌倉までにも當分は、ちつと面伏の譯がある故、身よりを尋ねて武州の熊谷土堤、四郎頭の世話になり、鄕士浪人の仲間へ入り、流れ渡りて川口の、鑄鍋の釜六が組下で、名も改めて踏鞴の鐵平といふ長脇差。今度赤間源左衛門殿が、あの島へ御座つて、同道されたあの平馬は、廻り逢つて見れば昔は朋輩、色々の話も合つて、それから今度鎌倉へ身を落著ける積りだての。」丈助「なる程人の行末は。」皆々「妙なものでごんすの。」トこの中橋懸りより、序幕の手代長九郎、道具屋の形に拵へ、小風呂敷を脊負ひ頰被して出てくる。鐵平皆々見て、鐵平「ヤおぬしは道具屋の。」子分、皆々「長九郎どんではねえか。」長九郎「ヤ鐵平さん、赤間の子分の衆、此のごろはツィかけ違つて。」トいひながら頰被をとる。丈助「なんだお前もこの暖かいに頰被とは。」皆々「どうしたのだ。」長九「ナニいまあそこで面倒な奴に逢つたからさ。」鐵平「面倒な奴とは俺がことではねえか。」長九「ナニとんだ事をいひなせえ、お前方に何のゑんりよが。」トこなしあつて牀几にかける。鐵平「時にこなたどうするつもりだ。」長九「どうするとは何の事を。」丈助「コレサ白を切んなさんな、平馬樣から賴まれた事が有らうがな。」長九「ム、彼の香爐の一件かえ。」丈助「是れ〳〵此方に逢つたら催促しようと思つた所だ、可い所へ來さしつた。」長九「可い所とはえ。」鐵平「ハテ平馬殿がおぬしに。」ト懷中より袱紗に包みし香爐を出し

つこは御座りやせん。サア〳〵鐵平どのがふるまひだ、モウ一つづゝやるが可い、飲まつせえ〳〵。」段平「この大きなもので始めよう。」皆々「やらかせ〳〵。」トこの中に酒屋の亭主、燗の出來し大德利、下物の鉢を持ち出て、亭主「サア〳〵お誂へのお下物、御酒も五合一時にお燗をつけました。」段平「オツト、奇妙々々。」皆々「サア〳〵やれ〳〵。」ト是れより皆々酒宴の模樣よろしく、丈助「時に川口の兄弟分、お前いよ〳〵今度は俺が親分の源左衛門さんと一緒に、鎌倉へ往かつしやるかえ。」鐵平「されば、是れからは鎌倉へ同道して、源左衛門殿にも世話になり、お主達にも入魂をば結ぶ爲だ、快く飲んで下さい。」丈助「そりやァ有り難い、左右一人でも友達が多いのが氣が丈夫だ。」藤六「マァ鎌倉へ行つて見なさいまし。」四人「又格別でござりますぜ。」段平「時に鐵平さんは、元は侍の上りだと聞きやしたが。」四人「眞實の事でござりますかえ。」丈助「眞の噓のと言つて、主はやつぱり下總の、千葉の家の知行取だ。」四人「スリヤァ始めて聞きやした。」鐵平「斯う心易くなるからは言つて聞かせるが、國に居る時分にはかけちがひ、源左衛門殿を初め、お主達にも近づきにならなんだが、此方衆が懇意を結んでる山鹿毛平馬とは我等は朋輩、あの平馬が浪人した其の時に、こつちも屋敷を梵天國よ。」市助「それぢやあ平馬樣とは、のがれない間で御座りますね。」百藏「それで何かの話も合ふといふもの。」藤六「今賴まれた一件も、なる程山鹿毛殿へは友達の好みがひ。」段平「かうありさうな。」

思入よろしく浪の音、右の合方。日の出の方へ指さす心いきあつて、「東はやつぱり故郷の江戸、天道樣は。」トうつかり立ち上り、よろ〳〵としてどつかり坐す思入、木の頭、千鳥大分浪間より日覆へ立ち上り千鳥笛、日は段々と高く昇る。「ありがてえなア。」ト嬉しき科。是れをきざみ、すべて一度の仕組、一聲浪の音にて宜しく拍子幕。跡シヤギリ。

七幕目

飛鳥橋の場
平塚道辻堂の場
王子土堤非人小屋の場
親常巡檢の場

本舞臺上の方に一寸したる橋の欄干、この傍に對の奉納の石燈籠、臺石の上へ、此の傍に稲荷大明神と記した石塚、これへ續き川端の駒寄、是れへ朱塗の開帳の提灯を立てあり、下手に酒肴いろ〳〵と記したる看板障子、牀几二脚直し、後一面の淺葱幕、日覆より好みの釣枝、すべて王子道飛鳥橋の模樣、こゝに鐵平一本ざし、田舍道樂者の拵へ、丈助同じく二幕目の役、赤間の子分段平、藤六、市助、百藏同じ役にて、外に若い衆の茶屋男の若い衆、酒肴の道具酒宴の體、雙盤太鼓にて幕明く。

丈助「サア〳〵皆が思ふやう飲むが可いぜ〳〵。」 四人「さう言はねえでも、たらふくに吸ひ込んだ。」

鐵平「時に飲むのは飲むとして、彼のたのんだ一件は、兩方ともに手筈は可いかえ。」 丈助「そこに間違

身を忍び候が、何れ當秋までには其の地へ發足申すべく、就いては其の眞鶴の香爐、彈正公には兼て御懇望と承り及び候、鎌倉表へ罷り越し候上獻上申すべく、我等が身分の御吹擧偏に頼み入り候。海老名郡司様へ、某より。ム、。」ト思入あつて、「この手紙の文體では、千葉家の重寶眞鶴の香爐、盗んで江戸へ身を隱し、海老名の郡司へ知らせの手紙、己が名前を匿すからは。」ト手紙へ科あつて、「手紙の主は胡散な奴だ、此奴は可い物を見付けたワエ。」ト思入、浪の音生殺しよろしく、是れにて手紙巻き納めて油紙へ包み、腰へ纏ふ思入よろしく、この中に向うの日の出、二分半か三分通りあがる事、さし金の千鳥飛びかふ。與三郎思入よろしく、この中道具の後にてうんじやうなる節付かすめて船唄聞える仕組。　船唄「やら／＼目出たのヤァ、山も見えけりゆたかな帆、幾十かへりの湊入り、ヨノオ。」ト欸乃でかぶせ浪の音のあしらひ、與三郎こなしあつて、「ヤ風のもやうか聞える船歌。この邊をば渡海の船が。ム、。それと見たなら便船頼み、どこぞの湊へあがつた上で。」ト是れにて日の出へ心づく仕組なり。よろしく日の出へ科あつて、浪の手摺へ日の影うつろふ仕かけよろしく、日の出へ與三郎ぢつと科。「オ、あれ／＼日の出が閃くこの浪間。」ト早めの様な合方、浪の音。「今の夢では爲朝が放した鶴に巡りあひ、又手紙では眞鶴の香爐の在所が知れるは正夢、その幸先に日の出の吉相。」ト是れにて向う揚幕の方に鳥笛。「朝日の影によく見れば、彼處は下田、相模の浦々。」ト見渡し嬉しき

は、大方爰等であらうよなァ。」ト思入。浪の音生殺し、あたりへ科あつて、「ァ、何だか篦棒に寒くなつた。」ト邊へ科あつて、「船は碎けて搖り流され、取著いてゐた板子さへ、どうかして仕舞つた。」トあたりへ思入あつて、「一體こゝは何處だ知らん、さつぱり分らねえ、平一面潮煙、せめて方角を知りたいものだ。」トこの中浪の音、千鳥笛など宜しくあしらひ、鼓コィヤィ、この中こなし、窗蓋あけ明るくする事。「ァ、有り難い、少しは靄が霽れるワエ。」ト科、浪の音になり、幕明の油紙につゝみし件の狀箱、さしがねにて舞臺の浪、手摺の中へ漂ふ。與三郎これを見て、「はてな、何だか爰へ流れて來るが、ハヽァ金比羅へあげた神酒樽か、何だか取揚げて見たい物だ。」トこの中浪の音、段々近よる事、岩角へつらまり、手を伸ばし取揚げる事、浪の鼓のあしらひ宜しく取りあげる。この中波の潮煙はれし意、翳し見て、「こりやァ狀箱だ、油紙に包んであるが、こんな物が流れて來るからは、船の往來のある所だ、何だか中をば。」ト岩角へすり附け染繩を切る事。尤も透して見て手探りの心意氣、油紙を拔き箱をあけ、中より封狀を出し、波あかりに翳し見て、「こいつは唯の手紙ぢやァねえ、ァ、讀んで見たいものだ。」トこの中浪の音、始終好みの合方あつて、向う正面岩山のかげより少しつゞ紅絹張の日の出をあげる事、これにつゞき明るくなる意。「ャこりや夜が明けるワエ。」ト思入あつて拔き見て空へかざし抔して讀み取る科宜しく、「飛札を以て申し送り候。我等事彼の香爐を隱し持ち、暫く武藏に

鶴黒堺の内より日覆を引いて、向う正面へ引いて取る、大どろ〳〵にて道具居所にてかはる。

本舞臺眞中に誂への岩組丸もの、この周圍へいろ〳〵の海藻磯草生ひ茂り、岩間より葦の茂み、この前高き浪手摺、一面に舞臺前に浪幕、正面の後奥深に三の手まで段々の書割、棧敷前東西水引をあほり反し浪の水引、向う正面一面に浪手摺、これへ遠山茂りし板の引出し、すべて伊豆相模の沖、巖が崎の模樣、大どろ〳〵にて淨璃より道具段々に變り、よろしく納まると、此の大ドロにて金張の心といふ字を、日覆より巖の影へ引いて取ると、爰に以前の爲朝好みの著附、繩の帶、月代伸び寠れし體、實は與三郎にて島脱の模樣、巖石の上に眠け覺めし體、かすめて本釣鐘ホツト思入あつて。

與三郎「ヤ、。今のは夢か。とんだ話だ。」ト思入。これを誂への合方、鼓のあしらひ、「鎌倉にゐた其の時から、數へて見れば三年越、身の鏽からとはいひながら、海老名の屋敷に捕はれて、有る事無え事無實の罪、言ひ立てられてすんでの事、由井が濱邊に獄門の、臺座の別れが又助かり、沖の小島へ流されて、藻屑を刈込み漁りの、その伊豆海の境界は、死ぬには勝る苦しみと、故郷の空が懐かしく、島を脱け出た丸木船、漂ふ波に碎かれて、打ち上げられた岩の上、命の綱と縋り附き、疲れて眠りも我知らず、姿はあり〳〵爲朝が、廻り廻つて女護の島、初夢ならば富士二鷹、似ても似つかぬ俺がなり、なんぼ家名が伊豆藏でも、かたちに伊豆の御曹司、爲朝樣たァ悃れけへるワ。夢は五臟の煩ひと

給ふ中空へ、羽を伸ばし渡る鶴の聲。」ト風の音トヒヨになり、誂への鶴、足に黄金の札をつけしが口覆より飛びかふ。皆々見て、喜平「ヤ、又も此の土へ飛び來る丹頂。」梅薫「正しく君が。」小藤、龜菊「仰せのあつた。」爲朝「うるまの國より持ち歸る覺えの鶴が、亦候や南を指して飛び行く體。」喜平「君の御座所を指示するしらせか。」小藤「イエ／＼それはお二かたの、妹脊を壽く。」小藤、龜菊「めでたい知らせ。」爲朝「とはいへ奇異なるこの振舞。」ト立ちかゝるを、梅薫「イエ／＼あなたは。」ト引きとめる事。淨「鶴の千歳か萬代も、妹脊は味な鴛鴦の、衾の裏へ入り給ふ。」ト皆々よろしく、爲朝梅薫女正面の家體へ入る。緞帳おりる。爰へ喜平治小藤龜菊殘る。喜平「まづこれで淨瑠璃の役目が濟んだ。」小藤「御苦勞さまで御座りました。」龜菊「マア御酒なりと上げませう。」喜平「どうして／＼、こゝは女護の島、うつかりしては居られねえ、どれこの儘に。」ト立ちかけるを兩人よろしくとめて、小藤「イエ／＼爰へござんす殿だちは。」龜菊「モウ／＼餘所へは遣らぬぞえ。」トとめる事。喜平「これは迷惑な。」兩人「滅多にこゝは歸さぬワイなア。」淨「稀に北風よい南風、吹くとは嬉し二人して、みつ懐の戀中の、嘘にも浮名巽なら、縁は異なものいなさ東風、色の憂世ぢやないかいな。」ト小藤龜菊兩人、手踊り模樣にとまる事。喜平治あしらひながら逃げ出る仕組よろしく、淨「踊る振にて逃げ出す、跡を慕うて。」ト三重にて喜平治橋懸りへ入る、跡兩人追つかけて入る。これにて太夫座を消し、浪の音トヒヨになり、以前の

來る。」ト花道にて喜平治よろしく振あつて舞臺へ來て、爲朝みなく\も喜平治を見てこなしあつて、爲朝「ヤア誰かと思へば八町礫。」梅薫「今おはなしの。」女形三人「喜平治さんか。」喜平治「こゝは名に負ふ女護の島へ御安著ある吾が君樣、御滿悅なる此の場の體、おめでたう存じまする。」梅薫「御注進と聲をかけ、お出でありしは心がゝり。」小藤、龜菊「早う樣子が聞きたいワイなア。」喜平治「ハテ御注進とやらかしたは、わが君はじめ女中方へ氣を持たせた我等が計畧。尤も君を大島より、落しまゐらす其の跡は。」ト思入。爲朝「定めて平家の討手の武士、大軍もつて押寄せつらん、なんとく\。」喜平治「ハァ、。」淨「されば候、そろく\と三つ合はせてさん候。」ト喜平治こなし有つてノリになり、「君が弓勢軍畧に、恐れ戰く弱蟲ども、とても手勢で敵はじと。」淨「わけも白浪風來戎、まつくろ黒船とび乘りも、集めて四十八東寧、一眼國は足長へ、肩を車に遠望の目配り、しのぶ黒子へ長臂のかけ引き、喇叭ちやるめら銅羅太鼓、鬨の聲々蛇味線も、オットセイ、蝦夷松前のお方でも、心にふたつは何の彼これ、六百餘騎を、物の數とも手練の礫、八方十方も投げつけうちつけ、腹穴つん貫き大人これく\膝の皿、こいつァ耐らぬ、蜘蛛の小人を散らすが如く、島の四方へ逃げ散つたり。」ト喜平治宜しく振あつて、「其の勢に寄手の奴原、殘らず討ち取り候へば、御心やすかれ爲朝公。」淨「島に手柄を高島や、乘地でしやべりするてけり。」ト宜しく思入。爲朝「ホ、オ勇ましし賴もしし、出來したく\。」淨「よろこび

にさも似たり、其の時の名は。」ト考へ、「オ、猿酒とやら申したり、イヤ〳〵今少女等と妹と脊の道を開かん爲の酒。」ト思入。淨「猿とは禁や猿舞。」ト扇を持ち立ち上る事。淨「我もましらの水の月、及ばぬ袂さゞ波の、猿めでたく舞はうよ。」ト右の合方にかゝり、囃子のあしらひよろしくあつて、ひとさし舞あつて、淨「汲めや鹹草酒、あしたも汲めよ杯に、妹脊も千代ときく〴〵の酒、齢も延ぶる下露の、流れの末は絶えずとうたり〳〵。」ト又囃子へ移り宜しく、爲朝舞の振よろしくあつて納まる。淨「祝ひ興じて舞ひ納む。」トこれにて浪の音はげしく、さしがねの千鳥だいぶん飛びかふ。皆々こなしあつて、梅薫「風むらだちと飛びかふ千鳥。」小藤、龜菊「潮滿つしらせかあれ〳〵。」爲朝「もしやわれを平家より、狙ひ討たんず者共の、寄せくる知らせか、それ。」淨「弓弦引きかけ番ふ矢の、君の跡から喜平治が。」ト此の中爲朝以前の弓へ弦引掛け、出端に脊負ひし靱より箭を引出し屹となる。梅薫女、小藤、龜菊居並びきつと科。これにて向うより八町礫の喜平治、好みの著付の上へ、厚衣引つかけ、脚絆素脚、艪櫂を擔げ、ばつちやう笠を持ち、喜平治「御注進々々々。」淨「呼ばはる聲と諸共に。」トこれを出の合方になり、喜平治件の拵へにて向うより出て、花道にて、淨「逸散走りに韋駄天竺、支那韃靼、旦那のお供で琉球の、礫も八町八里半、妹が國とは妙でんす、兀良海上も鼻唄で、洒落ては居れど都では、まだどんちやんの眞最中、其處らを氣轉喜平治が、かけつけ三杯機嫌よく、うかれ磯邊を走り

のみぞ啼く濱千鳥、都を跡に滋賀の里、力なく〳〵落武者の、末さすらへに藻潮垂る、露けき袖や如何にせん。」ト右の文句のかゝりより爲朝扇を持ち、軍物語の振、誂への通り宜しくあつて、よき程より愁への科へ移る事、よき程梅薫を引出す心に一寸からんで、文句の納まりに兩人よろしく愁への思入に納まる事。小藤龜菊兩人、右の銚子杯、肴の入りし緣高を持ち出て、龜菊「その御心をはらすには、さもしけれども此の島酒。」小藤「酒は愁への玉帚と、世の諺にも聞きますれば。」龜菊「いざきこしめせ。」兩人「我が君さま。」浄「いざきこしめせと侑むるにぞ、爲朝杯取り上げ給ひ。」ト此の中爲朝杯取り上げる、龜菊酌をする。爲朝一口飲み科あつて、この中に右の文句、トシヤン〳〵遠よせになる。爲朝「最前は心なく一盞を傾けしが、如何致して此の酒をこの島へ貯へあるぞ。」梅薫「サアそれは徐福のむかしより、島に生ひ立つあした草と、熟す木の實を取り合はせ、造り設けし鹹草酒。」小藤「そのお肴の用意さへ、梅薫女樣とわが君の、妹脊を千代もと鶚の鮨。」龜菊「お侑めまうす此の酒も、御心に叶ひなば。」三人「お嬉しう存じまする。」爲朝「ハテ心深き少女のもてなし、世にも得がたき鶚の鮨、殊更酒はあした草へ、木の實を合はせ醸せしとは、珍らしい。」ト思入。浄「人の情の杯は、なほ快く廻らして、こし方世々の語種。」ト爲朝こなしある。梅薫女、小藤、龜菊、兩人もそれ〴〵に待遇す心いきよろしく、爲朝杯を傾け、「その上豊後の山中にて、八町礫喜平治が、もてなす酒

の風吹く其の折は、年に一度の逢瀬さへ、一夜を千代と喞つのも、この奥島になみ〳〵の、男女の身の上にて、妾は徐福のゆかりとて、今に定まる夫もなく、それを不思議のこのお目もじ、いつ〳〵までもこの島に止まつてたべ、わが君樣。」爲朝「ホヽオ切なる妹が志、過分々々。」梅薫「サア此の上は我が君を、慰め參らす其の爲に。」ト小藤龜菊へこなし、小藤「ふつゝかながら。」兩人「わたしらが。」ト思入。浄「何がな心なぐさめんと、海士の小舟の棹の歌。」ト小藤龜菊立つて、「俺が脊子衆はなウ、ヨウコレ、何地へ越したヨ、胸にやく鹽煙がたアえぬ、サンサのうヨ、なつかしむ唱歌も鄙のしをらしや。」ト兩人よろしく納まる。爲朝「ハテ珍らしき海士の小唄、面白い事であつたワエ。」梅薫「シテ又貴方は何故に、今配流の御身にはならせ給ふか、その譯を。」女形三人「お聞かせなされて下さりませ。」爲朝「それぞ保元の初めつ方、新院御謀反のお思立、止む事を得ぬ招きにより、父爲義に從うて、崇德の君へ御味方、左府頼長が舌頭に、我が獻げて計畧の、軍慮も仇に獅子丸の。」浄「直垂の露八龍を、鎧ひし袖も只徒に、かたしく隙もあかつきの、不意に寄手の鬨の聲。」「討手は清盛、兄義朝、是非なきものは武士の。」浄「箭ごろ引きつめ強弓、何の用捨も雨霰。」「百發百中射て落す。」浄「猶もあらてに數千の官軍。」「シヤ物々しき奴輩かな。」浄「われ西海に在る時は、船を浮めて逆まく浪、風波の難に身を犯し、又は峨々たる山岳の、馬蹄あやふく太刀劍、今戰ひも時を得ず、哀れ君には松山に、音を

るやすらかな節づけを、くどき模樣にして、次の文句より賤の手業の機仕業によそへいふ心、この中を梅薰跡兩人へ割振り、淨「緣のいとしさ嬉しい妹脊、さすが結ぶの神さんも、ひねつて大倭唐土と、盡きぬ戀路ぢやないかいな。」トよろしく納まる。爲朝思入あつて、爲朝「弓箭を取つては數萬騎も、いつかな恐れぬ爲朝ながら、まだ初陣の少女らに、取卷かれては殆んど當惑。シテこの島に女のみ、何故あつて住み果てるぞ、其の譯語れどうぢや〳〵。」ト思入、梅薰科あつて、梅薰「女護島なる故事を。」ト團扇を持ち立ち上り、淨「語るも往昔秦の御代、粹な始皇の色好み、鴛鴦の衾に玉の牀、閨に手を筑紫琴、調べも愛し可愛さに、夜晝なしの娛樂を。」ト梅薰よろしくやすらかな振事、この中小藤、龜菊誂への銚子杯、緣高へもりし木の實、みさごの鮨を盛りしを持ち出で、酒を侑める事、雙方振の模樣宜しく、「猶幾千代も長かれと。」淨「方士徐福に命ぜられ、老いせぬ藥を求めらる。」ト梅薰納まる。爲朝思入あつて、爲朝「オ、其の故事は聞きおよぶ、徐福は巨萬の寶をば。」淨「船にたゝへてとも綱解き、わが大御國の蓬萊へ、遙けき波路いとひなく。」トすこし振模樣、科あつて、「日本の地へは著きたれど、かの仙丹を求め得ず、遂に終りを三熊野に。」淨「今も古跡は著き、徐福の宮といひ傳ふ。」ト宜しく科。龜菊「その折徐福が伴ひし、女夫の童を二つに分け。」小藤「この島の東西へ捨てられて、年經るまゝに妹と脊の、その語らひはしたれども。」梅薰「男女ひとつに住居せば海神の祟りを恐れ、南

が振舞、如何にも我は清和の末葉、六條判官爲義が倅にて、鎭西八郎爲朝なるが、某この島へ渡海なすは、何人が告げたるぞ。」　梅薫「仔細といふは外ならず、これ御覽じて疑ひを。」　淨「薫るの處女は懷中より取り出す名玉、爲朝はつく〴〵と打見やり。」ト右の内に梅薫錦の袋を出し、中に入れたる名玉を爲朝へ渡す。爲朝よく〳〵見て好みの合方になり、　爲朝「ヤ、この名玉は過ぎし頃、鳥羽の上皇が敕命受け、琉球國へ押渡り、放せし鶴の有所を求め、寧王女が望みによつて、其の時鶴とかへ〴〵に、與へて戻りし此の玉を。」ト梅薫をよく〳〵見て、「どうしておことは所持なし居るぞ。」　梅薫「お話し申すも七日跡、其の曉の夢の告げに、この玉を授かりて、おつつけ爰へ、御曹司爲朝公のお出であれば、玉を證據にお止め申し、妹脊の縁むすべよと、覺めて嬉しき夢見草。」　小藤「うき世に遠き島少女、尊きお方へお言葉を、交すすべさへ知らざるも、都の手ぶりそれ〴〵に。」　龜菊「をしへられたる其の上に、ともにお側に宮づかへ、お情うけよと妾らも。」　小藤「見たのは同じ。」　兩人「夢のつげ。」
梅薫「それ故待つて今日が日まで。」　三人「ようお出で遊ばしたなア。」ト爲朝こなし、梅薫爲朝へ思入。
淨「まちあかせどもさながらに、桂男へ打ちつけに、あづかしゞまのかね言を、いふ戀草の下萌や、顏そめ色の山つゝじ。」ト右の文句の中、梅薫爲朝へくどき模樣、尤も恥かしき心いき、小藤龜菊兩人も傍より取持つ心にて、自分も爲朝へ戲るゝ心、總て女島へ男の渡りし心よろしく、これまで雲上な

羽二重うへさらげ、誂への貝にて拵へし簪、小藤これに類したる好みの拵へ、龜菊同じく、梅薫女は女護島の姫君、跡兩人はかしづき少女の拵へ、梅薫女異風なる好みの團扇を携へ、小藤は誂への緒環を持ち、梅薫女眞中に立身、上の方小藤、下の方龜菊と兩人坐して、右舞臺花道一度に迫上げ道具納まる。　淨「八十島かけて潮路潟、うるまの國に幾日をか、龍の都に釣たれを、弓弦も戀に和げて、矢武心を八丈と、後に傳へし妹が國、神の告げぞと御曹司。」ト右の文句にて梅薫、小藤、龜菊、花道の爲朝、雙方心々の安らかなる振あつて、文句の納まりまでに梅薫女爲朝をそれと見やり、待ちわびる心いき、振よく納まる、跡の文句にて爲朝舞臺へ來る、振になる。淨「なまめく風も南や、色の汀に著きたまふ。」トこれにて爲朝舞臺へ來る。梅薫と入れ替り、爲朝上に梅薫、小藤、龜菊上下より並び、見得よく納まる。淨瑠璃の合方、浪の音、鼓のあしらひ、爲朝「ハテ麗はしき此の景色、巖に開く牡丹花に、爭ふ色は唐詩にも、つらねし事も聞かざりし、梢まばゆき櫻の眺め、爰も日本の中なるかな。」　梅薫「いかにもおなじ神の國、伊豆七島の中なれど、千里の浪路はるか越え。」　小藤「うき世に遠く妹と脊も。」　龜菊「名のみ渚にかたおもひ。」　梅薫「こゝぞ名に負ふ。」　女形皆々「女護の島。」　爲朝「ム、すりや扶桑國の東にありと唐書に見えたるが、遊歴するは今日はじめて。」　梅薫「サア始めて來ませし貴方こそ、まさしく伊豆の御曹司、爲朝公と疾くよりも。」ト爲朝思入あつて、　爲朝「合點ゆかざる女

いて取る、しらせにつき淺葱幕を切つて落す。

本舞臺正面二間の茅葺、棕梠の丸木柱、上の方へ張出し、横に孫廂、下地窗に好みの簾垂をかけ、壁にひゞわれ此の所はめ網代の書割、家體の前面、瓦燈口の様に塗り下げ、このまはりへ丸竹を折り曲げし體、此の内へ更紗の緞帳、正面見附、銀張へ好みの彩色畫、中へ中足位に一面に牀、上の方家體の下、荒磯の洞になりし岩組の張物、上の方へ畫心誂への岩組、これへ牡丹の盛り、よき所へ青石にて女人國と記したる傍示杭異形に拵へ、下手より後銀張の波、遠望の誂へよろしく、此の下手常磐津連中の山臺、岩組荒磯の蹴込、舞臺前に磯際の浪板、よき所へ置き竝べ、日覆より櫻の釣枝、爛漫と二重に下し、すべて伊豆の七島女人島を、弓張中琉球國の寧王女配所と混じ合はせたる畫面の道具、好みの通り飾りつけ、右の山幕切つて落し、一聲浪の音にて道具納まる。

ト爰に常磐津連中居竝び、前彈にかゝる。　淨瑠璃「緡蠻たる黄鳥は丘隅に止まる、人は尚野暮を離れて憂きを身に、その配謫の爲朝を、色にやつして島廻り。」トこれを誂へのせり出しの鳴物になり、花道より爲朝若衆鬘、後茶筌、半大口仕立の縫模樣の袴、好みの著附、小差衣めきし狩衣の袖を絞り、小さ刀、金剛草履、誂への重籐の弓、弦を片しへかけて釣竿を見立てし好み、これをかたげ、藤蔓編の靫と見たる魚を入れる籠を、形よくせおひ、尤も中へ箭を仕込みある心、右の出立にて花道へ迫出す。正面へ梅薫女、好みの振袖、衣裝の上へ薄桃の小差衣めきしを引つかけ、これへ木の葉の模樣、

及び、もし似寄りの者に出會ひなば、早速からめ捕り差出すべき樣、急度申し渡したぞ。」 漁師△「左樣なれば其の與三郎と申しまする流人、島脱けの御詮議。」 漁師○「それなる人相書をもつて御吟味で御座りまするか。」 無忠「いかにも重罪の者なれば、唯今より申し合はせて吟味致せ。」 漁師□「へイ〳〵仰せの趣、委細畏まりました。」 無忠「それにて身共が役目も相濟み、此の旨役所へ返答致さん、イヤサ返答致せ、身共は喋つて空腹ゆゑ、暫時これにて辨當つかはん。」ト此のときばた〳〵にて向うより中通り二人、山立附の形、書物を奪ひ合ひながら出て來り、無忠太これを見て、「ヤイ〳〵喧しき、何事ぢや。」ト是れにて兩人無忠太を見て思入あつて、 中通◎「ヤアあなたはお役人樣。」 中通×「何でも怪しいこの書物。」 通◎「それを此方へ。」 通×「何を。」ト兩人立廻つて◎これを取り上げ、 通◎「これこそ慥かに萬國繪圖。」 無忠「その品これへ。」ト右の觸を無忠太へ渡す。披き見て、 無忠「ム、何だ。淨瑠璃名題弓張月に棹さして、女護の島へ男淺妻、淨瑠璃太夫。」 通×「三味線岸澤古式部、岸澤三造、上調子式松三次。」 無忠「どれ〳〵。相勤めまする役人、まて〳〵役人とは身共が事、ハテ面妖な、それ讀み上げい。」 通◎「市川小團次、吾妻市之丞、中村歌女之丞、尾上梅幸、市川團十郎。」 無忠「コリャ〳〵團十郎とは聞き及ぶ、しかも身共が師匠であるワエ。」 通×「そんなら是れは淨瑠璃觸。」 兩人「いよ〳〵始まり。」 無忠「其の爲口上、サア來やれ。」ト上手へ入る。どろ〳〵になり、心といふ文字を日覆へ引

ト與三郎お富へ繩かける。この見得よろしく、山おろし雙盤の責にて、宜しく拍子幕。跡シャギリ。

六幕目　淨瑠璃　弓張月の俤を　爰に寫して　島廻り色の爲朝

本舞臺向う一面の淺葱幕、一聲浪の音にて幕明く。

ト爰へ一向無忠太、半素袍烏帽子の形にて牀几にかゝり、次に若い衆三人、柹筒袍漁師の形にて控へてゐる。無忠太思入あつて、無忠太「其方どもは漁師よな。斯く申す某は、梶原が家來番場の忠太が又家來、一向無忠太と申すもの、申し聞かせる次第あり。」漁師○「ハイ〳〵私共は此の濱に年久しく住ひまする漁師仲間のもので御座りまする。」漁師□「仰せの趣何の御用で御座りまするやら、承りたう存じまする。」無忠「如何さま、其方共へ申し渡すは餘の儀にあらず、先つ比鎌倉出生の與三郎と申す者、人殺しの風聞、まつた千葉家の女を殺害の上、所持の品々奪ひ取り、亂暴の擧動これあり、逃れ難き重罪につき流罪仰せつけられしに、此の度の法會によつて、流人の者共赦免につき、人別御調べの所、右與三郎儀は當月三日の夜、島紛失の訴へ、彼これもつて不屆至極、これによつて斯くの通り。」ト人相書を出して、「配符をもつてお尋ねの與三郎、津々浦々は申すに及ばず、山林幽谷詮議に

ば。」ト思ひ出し、「エ、、見た筈だ。こりや過ぎし頃和泉屋で、始めて其の時めぐり逢ふ。」お富「お前の實の母さんか。コリヤマア誰が。」ト大きな聲をする。與三「コ、これ。」ト兩人思入あつて、お富あたりへこゝろを配る事。お富「血筋のしるしか今こゝへ、目にかゝれどもこともきれ。」與三「あとの祭のこの亡骸。」ト思入、又郭公啼く。お富「折も折とて空に音を。」與三「血を吐く思ひ時鳥。」お富「たれの仕業か。」與三「チエ、。」ト兩人よろしく思入あつて、「忌々しいなァ。」ト思入。時の鐘。月雲に隠れる事。この時人音する故、兩人死骸を片寄せお富へ囁く。お富帶ひきあげ點頭く。誂への合方、上手より幕明の立衆目あかし四人、十手持ち窺ひ出てくる。跡より以前の捕手頭にて窺ふ。捕手四人「捕つた。」ト與三郎お富へかゝる故、お富拂ひのける。與三郎突き廻し、捕手を投げ退け屹と思入、これを竹笛入り誂への合方、又兩人かゝる。暗がりの模樣。與三郎手拭にてくるみし腰の出刃を出し思入、右の合方にて立廻り、四人は十手にて蒐るを出刃にてあしらふ。この中にお富へしやこ右衞門組み付く。宜しく搔きのける仕組。與三郎早く逃げろと捨白。お富、「逃げられはしねえワナ。」と捨白いひながら面白き立廻りありて、しやこ右衞門お富にじやらつき心、與三郎出刃にてむね打ちあしらひ、トヾ苛つて組み付くを斬りのける仕組よろしく有つて、チョンと月出る事、見得よく與三郎に四人かゝる。しやこ「お尋ねものの與三郎。そこ……。」ト皆はげしくかゝり、與三郎お富を引きするゑ、皆々「動くな。」

打つてかゝる、立廻り一寸、與三郎件の捕手を引きつけ、與三「こいつはいよ〳〵。」お富「モシ……。」ト兩人思入あつて與三郎件の捕手をあてる。與三「氣を注けろよ。」トよろしくこなし。しらせにつきて此の道具まはる。

本舞臺、もとの野陣ケ原の道具になる。

トよき所に小笹の吹替の死骸倒れ居る事、時の鐘、送にて納まる。ト又件の合方になり、上の方より與三郎、お富の手をひき、つか〳〵と出て、血汐にすべる事。お富「アレどうおしだ。」ト手を離す。與三「道が濘るか思はずすべつて。」トこの時に手につきし科ある。お富「暗さは暗し、妾も何だか。」ト今のはずみに足をさぐり思入、兩人よろしく有つて、與三「たしかに生血が。」お富「エ、。」トこれにて小笹の死骸へ躓く。お富「アレエ。」トこなし。與三「エ、どうしたのだ。」ト與三郎へ摺り寄り、お富「たしかに人が。」與三「ヤ。」ト兩人見やる。これにて霞がくれ引分け、燈入の月出る、時の鐘、誂への合方、日覆にて郭公啼く。兩人よく〳〵死骸を見て、「コリヤ女の死骸だワエ、慘酷いことをしやァがつた。」お富「よもや意趣斬りぢやァあるまいよ、可愛さうにネエ。」ト見る事、與三郎考へる。お富月かげに見る事、郭公啼く。「どこでかこれは見たやうな。」ト與三郎もこなしあつて、與三「成程、手前がさういへ

與三「びく〱する事があるものかえ。手前に逢はねえ其の前かた、安の野郎が家に居て、二年餘りも方々と、漂泊いては居たものの、あの時分には高が小強請、強借の錢貰ひ、あの位の事で食らひ込んでつまるものか。」　お富「それは知れてゐるがネ。いつか和泉屋の一件は、安が氣どつてそれからお前へ。」　與三「何の彼奴にはそれ相應な事がしてあるから。」　お富「それでも妾が考へでは、確かに彼奴がお前の事を、輪をかけて喋舌つたから、それで此樣にお前をば。」　與三「そこは何ともいへねえワ。」ト恁んな事いひながら花道へかゝる事、この中に中通り二人、以前の目あかし黒き手拭にて頰被して、西の揚幕より出て身を潛め窺ふ事、兩人囁き合ふを與三郎ふと心づき、「だれだ何奴だ。」トお富提灯をさしつける。この燈かげに兩人與三郎を見て、兩人「與三郎だな。」ト打つてかゝる故、お富提灯を袖に覆ふ。與三郎兩人をくゞり拔け、一人を投げのけ、一人を取上げし縫ぐるみにて打たんとする。兩人逃げて入る。與三「何をしやアがるのだ。」ト手に殘りし縫ぐるみを持ちお富へこなし。兩人よろしく舞臺へ來る事。「此の間笹目が谷へ少しの內店を借りた時、氣をつけて遣つた目あかしが、昨日おれに用心しろと知らせて吳れたが。」ト思入。　お富「それだから氣になるワネ。」　與三「可いワ、どうかすりやア手前を伴れて、うまれ故郷の江戸へ巣をかへるワ。」　お富「いつそ然うした方がよからうよ。」ト此の中に又一人目あかしの服裝出て、捕手「われを。」トかゝる。是れにてお富提灯を落し、燈火消える。此へ

いづれ武藏へ趣く所存、香爐を道中筋、拙者が所持して參るも危險。いづれ彼の地へ住ひを定め、書狀を以て赤間氏の旅宿までお報らせ申す、香爐はそれまで貴公が手許へ。」源左「ようござります、それだやアこれは確乎と預りました。」ト懷へ納める事。丈助「どうでお前樣の御住居が知れれば、直に私が香爐を持つて上方筋へ。」源左「その内私は鎌倉で、梶原海老名の屋敷の所用を、又彼の一條の手筈もあれば。」トこの中丈助向うを見て、丈助「アレ／＼向うへ提灯の。」平馬「燈影はこゝへ。」源左「モシ。」ト囁く。平馬「ム、この道筋を夜あけぬ中に。」源左「隨分ともに平馬樣。」平馬「赤間氏。」源左「そのうちに會ひませう。」ト靜かなる禪の勤めになり、源左衛門丈助を伴れ上の方へ、平馬は橋懸りへ入る。右の鳴物にてこの道具ぶん廻はす。

本舞臺すべて幕明の道具、夜更けし體に納まる。

ト時の鐘、好みの合方になり、東の揚幕よりお富好みの服裝、鎖にて釣りし模樣附の提灯を提げ、跡より與三郎、同じく好みの服裝、頬被にて出て來り、中の歩道を渡り本花道へ蒐る。内にこなし有りて、與三「コウお富、爰まで來りやアモウ可いワ、靜かに歩け、提灯の火でも消すと始末が惡いワ。」

お富「それでも今日正午からの始末といひ、何だか頻りに胸騷ぎがするからね、それで心が急ぐのさ。」

郎めは獄舎の憂目、後から冥途へ遣る程に、其の時會つて泣面かわけ。」源左「匿し持つた香爐を、早くこゝへ出さねえか。」小笹「ヤア愚かや、卽て帝へ獻上となるべき大事の重器、女ながらも預つて、赴く途中で闇々と、汝等如きに渡さうや。」源左「いけしぶとい其の詞、たとひ何と吐さうと、どうで奪り得る其の香爐、煙も丁度たきゞこる、鎌倉山につゞき野の、往來も稀な古戰場、野陣が原に卯の花の、雨の雫と消えてなくなれ。」ト屹と見得。ト小笹よろめき〳〵立ち上り。小笹「非道の刃に朽ちはつるか、思へば〳〵。」源左、平馬「きり〳〵くたばれ。」ト雙盤の責になり、これより兩人にて小笹を斬る事、よき程にばた〳〵跫音する故、源左衞門平馬ためらふ意にて、トヾ斬り伏せる所へ、以前の金平傷を負ひし體、丈助と立廻りながら出で來り、金平「ヤ小笹樣をば。」丈助「汝もくたばれ。」ト立廻る。この中に源左衞門平馬、小笹をトヾ斬り倒し、源左衞門小笹へ止めさす。この中に平馬、金平を一刀に斬り倒し、丈助もよろしく思入有つて、邊へ思入、時の鐘。源左「おもひの外骨を折らしやがつた。」平馬「確かに香爐は懷中に。」ト平馬丈助へ思入、丈助四邊へ意をつける事、源左衞門香爐を取り出す事有りて、兩人死骸を片寄せて、源左「ム、。紛れもなき鶴の香爐、エ、辱い。」平馬「奪ひかへしたので、少とは恨みが霽れたワエ。赤開氏、扠々貴公へ種々と骨勞をかけ申した。」ト刀を拭ひ腰に指し、丈助「さうして平馬樣はこれから何處へ。」平馬「一たび上方へ罷り越し、ほとぼりをさまして又候や、

と見得。時の鐘、凄き合方。小笹きつとなり、小笹「これなる平馬へ加擔の者が、卑怯未練な騙し討。こりや何故に手にかけしぞ。」ト思入。平馬あたりへこなし、源左衛門思入あつて、源左「オ、そこに御座る平馬殿に、頼まれたとはいふものの、こつちも意趣ある血脈のをんな、それで手傳ひ殺すのだ。」小笹「心得ぬ其の一言、平馬はお家を窺ふ惡人、今浪々もお主の罰、殊更そちはついしかに見かけし事もなき男、何の遺恨でこの如く。」平馬「オ、其の譯、俺が言つて聞かせるワ。日外名所町の和泉屋で香爐の質請爭ふ時、強請にうせた下人めは、隼人が實の子與三郎、手前も其の時思はずも、邂逅つたる覺えがあらう。」源左「その與三郎めはこの俺が、手活の花のお富と不義、其の懲らしめに憂目を見せ、疾くに死んだと思つたら、命冥加に生き延びて、せちまいあると聞くからは、日頃出入の海老名樣へ、舊惡ありと讒訴をして、遲かれ早かれ繩目の恥、どうで一度は由井ケ濱、獄門臺に恥面を、曝させるのも内證は、源左衛門樣が軍略だワ。」平馬「與三郎めを産んだる汝ゆゑ、此の程香爐手に入つて、隼人を始め左近めが、咎めもゆりて身共は浪々、其の恨みをばはらさう爲だワ。」小笹「チエ、扨も根強き其の謀計、たとひ倅が不義ありとも、飽くまで憂目を見せるのみか、平馬へ落擔し騙し討、謂はう樣なき非義非道、思へば恨めしい。」ト思入。源左「喧しいワエ、汝が此度預つて、一度本國へ持ち歸る眞鶴の香爐は、又も此方へ奪ひかへし、隼人親子は縛り首、穗積の家はモウ寂滅。」平馬「與三

五人「うしやァがれエ、。」　丈助「それぶつちめろ。」　四人「合點だ。」　金平「小癪な事を。」ト早めし禪の勤めになり、縫ぐるみにて兩人は金平へ打つて懸る。拔き合はせ一寸あしらふ、跡二人は若い衆の供廻りを追ひ込み、四人一度に懸る事、皆々を斬拂ふ事、此へ丈助拔き合はせ、一寸立廻りみじかく、こゝへ皆々かゝり、混多になり、金平受太刀になり、こゝへ丈助この時斬りつける。右仕組の立廻りながら橋懸りへ入る。山おろしになり時の鐘。乘物の裏より小笹脇指を持ち、件の香爐を懷中して出で あたりへ思入有つて、小笹「駕籠の中にて樣子を聞けば、加擔の者等が今の一言、油斷ならざる今宵の仕儀、大事の名器を所持なす身體、いでこの隙に一先づこゝを。」トこなし有りて立ちかける。この中下手並樹の陰より前幕の平馬、頰被尻端折大小にて窺ひゐて、刀引拔き斬りかける。小笹ちよつと身をかはす、所へ又斬りつける故くゞり拔け拔き合はす。一寸こなし有つて立廻りて、兩人見得よくとまり、「ヤ扨こそ其方は山鹿毛平馬。」　平馬「恨みの小笹覺悟しろ。」ト斬りかける。兩人よろしく一寸立廻りて、小笹手利の模樣、平馬受太刀心になり、よろしく立廻る中に、平馬つけ入り〳〵斬りつけ、小笹受太刀にて立廻りながら、上の方の普請小屋の方へたぢ〳〵と寄る。此の時小屋の戸の中より白刃出て小笹を一かせ斬る、小笹アツと苦しむ。躊躇ぐ所へ平馬又一かせ斬りつける故、小笹たじ〳〵として撐然こなし、これにて普請小屋の戸板、ばら〳〵と摧けて、赤間源左衞門、尻端折にて出で嚴

鼓になり、しやこ右衞門へ右の四人、外黑四天、捕手附添ひ上の方へ入る。しらせにつきこの道具ぶんまはす。

本舞臺、正面常足の土堤、棕梠植土堤の上少し上の方へ廻して、古びたる板破目引戸の建付けし九尺の作事小屋この傍に高き作事の榜示杭、これに扇ケ谷御殿修理の小屋場作事方と記し、これより上へ竹矢來、小屋より下の方へ土堤の上松の竝樹、本枝を打ち、日覆より同じく釣枝、上下植込の砌、藪疊のあしらひ、背面黑幕、都て鎌倉野陣ケ原の道具、中程より早めし禪の勤めにて道具納まる。

トこゝに女乘物を下し有り、前幕の金平、右乘物を囘護ひし見得、若い衆の供廻り　人荷を擔ぎ、一人柹色の脚絆にて立ちかゝり、二幕目の丈助、赤間の子分にて好みの形、長脇指、中通り四人、何れも非人の拵へ。縫ひぐるみにて立ちかゝりゐて、立廻りて宜しく止り、金平「主君の御用で東路へ此の程下向の途中にて、道を遮るこの狼藉、扠は盗賊剽盗だナ。」丈助「イヤ盗みを爲よう爲ではねえ、汝が送つて武藏へ下る乘物の、内の女に恨みのある其の人の賴みに依つて此所で待伏せ。」非人△「付添ふ人足供廻りは、此方が仲間で追ひまくり。」非人□「モウかうなつては囊のねずみ。」非人○「逃げても逃さぬ今夜の手筈。」非人×「われも息せいはらずとも。」丈助「その乘物はこゝへおき、きり〳〵逃げて。」

早速に。」 三人「お知らせ申すでござりませう。」しやこ「オ、出かす〳〵。尚も詮議の手掛りは、與三郎は江戸子の事なれば、武藏の土地には其の面體よく存じたる者あらんと、彼の地へ申し遣はして、江戸で名家の豐國へ、彼等が人相正うつしに、認めさせたるこの姿繪、詮議の手掛りに遣はしおくぞ。」

トこの中に豐國畫二枚續き、汐干見物の場、團十郎（與三郎）梅幸（お富）の錦畫を出す。 捕手〇「それぢやア是れが人相書でござりますか、サア〳〵見やれ〳〵。」ト受取りて、 捕手×「こりや伊豆屋與三郎。」 四人「素的に好い男だなア。」ト思入。 しやこ「所が聞きやれ、それに描いたは未だ手疵を負けざる前の面ざし故、其の面體へ夥しく刀傷のある奴が、則ち切られ與三郎さ。」 捕手×「ようござります、その面は。」 皆々「見覺えがござります。」ト此の中一人お富の繪を見て、 捕手〇「さうしてお富とまうすこの女は。」 しやこ「それは彼の者の女房にて、横櫛お富と申す年增。與三郎につれ添へば罪は免れず、夫婦諸共搦め捕らば、お富は身共が申し請け女房に致す積り、尤も主人の許しはないが、これは身共が一人極め、念のために申しおくぞ。」 四人「よろしう御座ります、のみ込みました。」 しやこ「きつとよいな。」 四人「ようござりますよ。」 しやこ「よければ愈與三郎、召捕る手筈は其方共も。」 黑四天四人「心得ました。」 しやこ「尚も海老名公より仰せの趣、その宿々へ觸れ渡さん、案内致せ。」 四人「かしこまりました、サア〳〵お出でなされませ。」ト禪傑右衞門立ち上り。 しやこ「者ども參れ。」 四天捕手「ハア、。」ト時の太

風體、目あかし捕手のこゝろにて控へゐる。靜かなる禪の勸めにて幕明く。

捕手○「この鎌倉で腕こきの我等が仲間を呼び出し。」 同□「俄に御用と仰しやるは、亡命者かお尋ねもの。」 同△「見つけ次第に訴人をするか、縛つて出せが紋切形。」 同×「シテあなたさまはいづ方の。」

四人「御家來樣でござりますな。」 しやこ「其の方どもを呼び出し、内々所用を賴む上は、身が姓名もいひ聞かせん、某ことは海老名の郞黨、品川硨磲右衞門ゆで高と申すものだ。」 ○「さうしてあなたが。」

四人「御用の筋は。」 しやこ「其の仔細は斯樣ぢやテ。この鎌倉山の谷七鄕、市中は勿論、端々の町方豪家へ罷り越し、組せし惡漢を語らつて、多くの金銀をゆすりとるを渡世と致す發頭人、面體身體へ數ヶ所の手疵、それ故に渾名をば切られ與三郞と稱へる由、元は武藏の江戶生まれ、舊惡もありとの事、我等が主人海老名公、搦め捕つて參れよと密かの嚴命。」 □「その與三郞なら私も見かけた事がござりました。」 △「然うして今はどの邊に匿れ忍んで居りまする。」 ○「その居所さへ知れるなら。」 ×「押へた蝦蛄で。」 四人「なかまの骨折。」 しやこ「ハテ居所が知れれば仔細はないが、所々方々へ住家を變へれば、某事は每日日日、かくの通りに家來を引きつれ、何處彼處のわかちなく尋ね步けど今に見かけず、それ故そち達を呼び出し、若しも見かけし其の時は、その宿々の會所まで、知らさせんがため呼び出したワ。」 ○「それなら氣遣ひござりませぬ。」 □「仲間中へ觸れをまはし。」 △「見つけたならば

財布をもち立ち上る事、多左衛門は與五郎お鶴を隔て、多左「手先をやつたらあかの他人さ。」ト思入。與五、お鶴「それでも一言。」　多左「こりや。」ト與五郎與三郎へ取りつくを突き除ける。お富こなしあつて隔てる。多左衛門、與五郎お鶴と兩人見得よく止めて、「いはぬ言葉の花嫁花聟。」ト兩人へこなしあつて、與三郎お富へかけ、「お富もこの末、夫婦の間を。」トほろりと思入。與三「斷られぬ義理の與三郎。」

お富「いづくの果てにくらすとも。」　多左「親は泣きより。」　お富「血すぢの兄さん。」　與三「逢ふはわかれの。」

與五「兄弟他人と。」　多左「へだてる旅路も。」　與三、お富「心の闇の夜。」トこの時梅八窺ひゐて、梅八「野郎め觀念。」　與三「迷ひ烏の。」トぽんと返し、與三郎兩人ほろりとこなし、木の頭。「ア泣きわかれだなア。」

トよろしくこなし。これをきざみについて大神樂の切をかぶせ、この仕組よろしく、拍子幕。

返し　鎌倉稲瀬川三昧の場
同　野陣ヶ原の場

本舞臺正面すこし上へよせて石の六地藏、茅葺の雨除、この傍に因果車、後生垣、所々に古卒堵婆、古塚をあしらひ、松の立樹、同じく釣枝、うしろ淺葱幕、こゝに硨磲右衛門、半纏股引大小にて十手を持ち、若い衆の黒四天四人、十手を持ち附添ひ、○□△×對の著つけ、脚絆、尻はしをりにて、腰に總付の十手を持ち、好みの

與三「そんなら弟が、ム、。」ト奥へ思入。この中お富守袋より自分の臍の緒と、多左衛門の守より同じ書付添書を出し、お富「モシ是れをば一寸。」ト與三郎へ渡す。兩方取り上げ見て、與三「ヤ、、お富が守と一對の、縁もつながる筐つる裂。」ト思入。お富「その臍の緒の書付の、筆の割符の合うたとは。」多左「元は都の產まれにて、治承のむかし亂世に、かどはかされし此のお富、親の記念のお蔭にて、妹と知つて今日が日まで。」與三「昨日は此方が兄だといつて、實は譯ある女房の。」お富「旦那と言つたが血筋の兄さん。」多左「今ぞあかした名告合。」お富「五歲か三歲の頃なれば、それもお顏を知らぬゆゑ。」多左「曾我兄弟なら十八年、それにもまさる年浪は。」與三「二十餘年の星霜を、生んで貰つたお母に。」お富「逢へども親とは。」與三「いはれぬ因果。」多左「廻る車も。」お富「兩輪とならぶは。」多左「兄と夫の。」與三「思へばつきせぬ。」三人「奇緣ぢやなア。」ト此の時に上の方より、以前の與五郎お鶴イみ窺ひゐる。與三郎と見合はせる事。與三「とかうする中七ツの鐘・夜ふけさぶけ氣の毒な、奇異なお世話になりやした。」お富「それも妾が心から、現在兄に逢ひながら、親身のはなしもならぬ時宜。」多左「又よい機もあらうから、夜ふけぬ中にちつとも早く。」與三「アイ、お詞にしたがつて、餘計な苦勞をかけぬ中。」お富「そんなら與三さん。」與三「そろ〳〵往かうよ。」ト下手へ行く。此の時與五郎お鶴窺ひゐて、與三郎と顏見合はせる事。與五「せめては兄の。」お鶴「與三郎樣へ。」トつか〳〵と寄る。與三郎お富この中

すませろと主人の頼み、其のとき序に話が出て、旦那が爲の姪なれば、至つて祕藏のお鶴殿、聟の爲には義理のある、斷らぬ緣の切られとやら、噂の人を見つけたら、身の納まりをつけるやう、殊に世間の風說にも、よからぬ噂のお尋ねもの、繩目にかゝらぬ其の中に、この鎌倉を落ちのびて、其の身の無事を思ふなら、路金の手當支度料、其の出所も血緣から、身はらを分けた此方の手へ、渡るも味な金の納まり、月日も經つてほとぼりも、さめた時にやァ身の納まり、及ばずながら助力して、資本位の事ならば、いつ何時でも否とは言はぬ、マアそれまでは素直に取つて、この土地を離れた方が、可さそうなものだらうぜ。」ト與三郎科あつて、與三「何だか乙にからんだ異目のついた其の金、氣障りだよしやせう。」お富「ハテ心づくしの今のお詞、お前の身上にかゝはる風說、むそくにならぬ　志。」多左「但しお富が手切の爲に、遣らうと言つても此の金を、矢張お主は受けぬ氣か。」與三「お富が手切といふ事なら、初手からつけめ、貰つておかうよ。」多左「それで根つきり葉つきりに。それ。」ト金包五十兩を投げ出す、與三郎受取る。お富「そんなら妾の手切の爲に。」多左「其の證には證文は、俺が方から添へて遣るワエ。」ト誂への守袋を投げ出す事。お富取上げて見て、自分の掛けしのと引合はする事。お富「ヤこれは覺えの。」ト思入。トこの中與三郎五十兩の包を見て、與三「ヤこの包は元山町の。」ト印鑑へ思入。與三「それは義理ある誰やらが、屋敷の女中へ取替へて、其の納まりは此方の手許へ。」

のけ、小笹「不孝な倅は持たぬワイなウ。」トこれを唄になり、小笹あとより、金平件の香爐の筥を持ち向うへ入る。平馬こなしあつて上の方へ入る。與三郎お富ぢつと思入、多左衛門與五郎お鶴こなし、藤八松兵衛は縛られしまゝ、權助半藏其の他多左衛門こなし有つて、多左「サア權助半藏、皆の者、此の上は藤八松兵衛二人を。」ト科。權助、半藏「どうしますえ。」多左「知れたこと、お定まりの盲仕居だ。」皆々「サア立つたえ〳〵。」藤八「それでは俺もことしかいなア。」松兵「愚癡を言うても仕方がない、今まで人の器物を繩かけたる因果の廻り。」藤八「此方は永らく葛籠の憂目、果ては襦袢で縛られる。ア、袷なき世の。」松兵、藤八「有樣ぢやなア。」ト唄になり、皆せり立てて藤八松兵衛權助半藏若い衆附添ひ、この中與五郎お鶴へも多左衛門こなし有つて囁く事、この唄にて兩人奧へ入る事。時の鐘。與三郎お富こなしにて、與三「來い。」トお富へ科、兩人つか〳〵と、多左「これさ與三郎どん、お富待たねえか。」與三「どうしたと。」多左「折角しかけた高強請、萬更すてては歸られめえ。」與三、お富「ヤ。」ト思入。多左「香爐がはり元利の金。それ。」ト投げ出し、「持つて行きやれ。」ト投げしを與三郎二包、お富五十兩の包をとり上ぐる。與三「そんなら俺が言狀立てて、香爐がはりか但し又。」お富「あの藤八が納まりをつけう爲の大枚の。」多左「些少なれども五十兩、心ばかりの趣意をたて、撮んでいへば彼の香爐、元はといへば盜み物、それを承知で藤八が、質に取りこみ主倒し、公事沙汰となる時は、曖簾の疵事、穩便に

うで御座ります。」　平馬「斯様な所に長居を致すと、武士道が廢る事、どうでも勝手に致せ。」ト思入あつて門口へ出かける。「家來は居らぬか、エ、何をして居るぞ、梅八々々。」ト呼び立つる。橋がゝりより仲間梅八出て、　梅八「モウ御歸宅で御座るか。」　平馬「知れた事だワ。」ト邊へ思入あつて囁き、これにて梅八下手へ、平馬橋懸りへ入る。「必ずぬかるな。」ト敵役見合はせ思入、小笹香爐の筥受取る事。時の鐘。下手より前幕の金平出て、門口より、　金平「ハツ香爐はお手に入ります上は、一先づこれより御旅宿へお供の用意仕つて御座ります。」　平馬「身共そろ〳〵歸宅致さう。」トこなしあつて起ち上る事。

小笹、與五郎、お鶴へこなし、與三郎お富へ思入あつて、　小笹「御縁もござらば又その内に。」ト立ちかける故、與三郎お富前へ出て、　與三「仕込んだ強請も香爐が、ちつと此方に入用故。」　お富「それも人手へ見す〳〵渡り、馴れぬ仕業もたうとう顯れて。」　與三「シテ香爐を質請する。」　お富「其のお屋敷のお女中さまは。」ト兩人小笹へこなし、小笹は與三郎お富へ思入。　多左「これぞ千葉家の御藩中。」　小笹「穂積隼人が女房小笹。」　與三「エ、。」トぎつくり思入。　お富「そんなら昨夕話に聞く。」　與三「誠の血すぢの。」お富「その母さんは。」ト兩人小笹へ思入。多左、與五、お富「ヤ。」　小笹「さては幼い其のときに。」　與五「町家の養子の。」ト思入。　小笹「倅はそなたか。」　與三、お富「思ひがけない。」ト與三郎も思入、兩人よろしく、小笹與三郎をつきのけ行きかけるを、お富モシと止める。三人よろしく、小笹思入あつて與三郎をつき

取りました。左様ならば香爐はお手渡し仕ります。」ト小笹へ渡す事。平馬「そんなら金も調うて、其の香爐を濡手で粟に、請けて行かうと申しても、手形の宛名は正しく身ども。」ト多左衛門書附を見せ、多左「如何にも宛名は平馬樣。」平馬「サアそれぢやに依つて身共が質請仕るを、誰が點のうち人があるまい。」多左「成程御尤も、併し元利合はせて二百五十兩、それは御合點でござりませうな。」平馬「それ承知、如何にも金子は此の通り。」多左「左様なら一寸金子を。」ト手をかけうとする。平馬「屋敷の封金改むるに及ばぬ事。ア、コレ便りに思ふ藤八は、ア、何うか。」多左「イヤ藤八は心から、それは兎もあれ念の爲。」平馬「これは如何に、疑うてこの金を。」多左「改めねば不念とやら、失禮ながら。」ト多左衛門包金をとる。平馬見せじと爭ふ。封じ目切れると中より瓦の小判出る。皆々惘れて顔見合はせ、面目なき思入。多左「モシ平馬樣、コリヤ緣起の百兩、御冗談なされまするな。」平馬「そりやァ唯の見せ金、誠の金子は外にある、香爐持參の上、屋鋪にて相渡す、必ず餘人に渡すまいぞ、身共が置主、他手へ渡さばいづくまでも故障申すぞ。」小笹「若しも彼これ仰しやらば、お家の重器を何時の間に、御持參あつて質入なされた。」平馬「サアそれは。」多左「この書付をお屋鋪へ參つて、白地に仕埒を付ければ後腹病めず。」小笹「いつそ荒立て詮議をせうか。」平馬「それは迷惑。」多左「そんなら此の儘香爐をお渡しなさるゝか。」平馬「サアそりやア。」多左、小笹「サア。」平馬「サア。」三人「サア／＼サア。」多左「ど

引附け、若い衆の手代權助半藏などにて縛る事、平馬皆々を見て、平馬「ヤ松兵衛。藤八。」藤八「五文どころか四文にならッ。」松兵「身にふりかゝる。」藤八「この繩目、ホオ、、、。」ト泣く。平馬「なんのざまだえ。」ト思入。與三「サア其の香爐を約束通り。」多左「イヤこの請主は疾くより奥に。」平馬「ナニ請主が。」與三、お富、平馬「外にあるとは。」ト科。多左「その請主へ一通り屆けずばなりますまい、お鶴さん、與五郎さんと一緒に、奥のお客へ此の譯を仰しやつて下さりませ。」お鶴「アイ〳〵、そんならあなたも御一緒に。」與五「お女中樣へお知らせ申して。」多左「香爐の取引。」お鶴「そんなら妾と與五郎さんも。」與五「サアお先へお出でなされませ。」ト唄になり、兩人奥へ入る。平馬こなしあつて、平馬「合點のゆかぬは香爐の請主、何人なるか面談致した上の事、滅多には請けさせぬぞ。」ト此の時奥にて、トこの中前幕の小笹、奥より出て窺ひゐる。小笹「香爐の在所知れる上は、約束通り手形と引替。」ト以前の手形を出す。平馬見て、平馬「ヤ何時の間にかは小笹殿。そんなら手形を、ム、。」ト思入。トこの中多左衛門手形を受け取る事、小笹は槖のまゝ金を出し、小笹「元利合はせて書附通り、お役所より取寄する時刻うつさぬ其の爲に、取替へて下された。」ト與五郎へこなしありて、與五郎も思入よろしく、一心づくしにつばめも合ひ、此の場の手詰、香爐も異議なく受取るこの手番ひ。」ト與五郎へこなしありて、「包の儘にて御渡し申す。」ト多左衛門。金を二百五十兩包を、封じ目を見て、多左「たしかに金子は受

お鶴「イエ〳〵妾や。」ト思入。と平馬お鶴を引立つる、松兵衛支へる。權助思入あつて、權助「思ひ出した。」ト仰山にいふ。皆々「エ、吃驚するワエ。」權助「その吃驚は尤もぢや、まだ〳〵吃驚させませう。モシ大番頭樣、あのお鶴樣より眞實のお鶴さんを出してお目にかけませう。」平馬「ナニ眞實のお鶴樣とは。」權助「待ちなせえ〳〵。」ト以前の踏臺を出し、「さらばお鶴樣を出しませうか。」ト燕の巣の中へ手をかけようとする。松兵衛惘りして引止め、松兵「ア、これ〳〵、燕の巣の中へ手をかけて何うするのぢや。」權助「何であらうと俺が胸にある事だ、マア退きなせえといへば。」松兵「胸にあらうが棚にあらうが、汝が知つた事ぢやアない。」權助「よう知つてるぢや。」松兵「そりや何を。」權助「何といはつしやつて、見所のある代物ぢや。」松兵「まだ吐すかえ、情ない。」權助「其の置主も知つて居る。」松兵「ヤ。」權助「それぢやに依つて出して見せる。」松兵「飯炊の分際で下れ〳〵。」權助「イヤ上る〳〵。」ト兩人せり合ひ、松兵衛をつきのける。松兵衛踏臺より轉ぶ機に、燕の巣より香爐出る。松兵衛取らうとするを、與三郎松兵衛を引きつける。この中に權助、多左衛門へ香爐を持ち行き、多左衛門取上げて見て、多左「コリヤ紛れもなき鶴の香爐。」與三「そんなら燕の。」お富兩人「巣の中へ。」多左「隱した奴めは。」權助、半藏「松兵衛どの。」ト松兵衛をこづく。與五、お鶴「その盗人は。」多左「確かに藤八。」トうぬと平馬斬りかけるを、與三郎つき廻し刀を打ち落す。藤八逃げ出すを多左衛門括しあげる。松兵衛をば與五郎が

ながらか但しは金か、この家がはねを引合に、抱いて入るが此方の性根、この納まりのつくまでは、
貧乏搖ぎもするものかえ。」ト與三郎思入。この中與五郎お鶴兩人、與三郎へ科あつて、與五「先刻から
見る所、その姿は變れども。」お鶴「お聲も覺え、物越も。」與三「正しくあなたは兄者人。」お鶴「與三郎
さんで。」兩人「御座りませうがな。」ト與三郎思入あつて、與三「カウお前方は何をいふのだ、廣い世界
に似たものは、幾らもあるは總身の疵、片つらをかけ四十五箇所の刀傷、ひらだけだらけのしやつ面
を、覺えて居よう筈もなし、しらばつくれても看板の、疵が異名で切られ與三、面識でもねえ俺を、
馴れ〳〵しい物の言ひ樣、滅多に其の手は喰ふものかえ、遠島船を腰につけ、あると有らゆる惡事も
合點、乘りかゝつた今日の仕事、金か香爐か二ツに一つ、カウ番頭さん、可い加減に往生しなせえ、
この曉はどうして呉れるよ。」多左「奥聞かうより口とやら、成程すわつた物のいひ樣、親御はか程
に產みつけはしやるまいに、朱に交はれば<と>譬への通り。扨もすわつた性根だなァ。」ト思入。この中
平馬立つてお鶴を引立て作れ往かうとする。「コリヤ平馬樣、お鶴をばどうさつしやる。」平馬「ハテ預
けし香爐が紛失故、鶴の香爐のその代り、お鶴は身共つれ行くワ。」多左「スリヤ人質にお鶴をば。」ト
この中松兵衛、平馬を止めて、松兵「イエ〳〵さうはなりませぬ、鶴のかはりなら、龜の甲の水入で御
勘辨下さりまし。」ト有合はす水入を出す故、平馬「馬鹿をつくすな。」ト突き退ける。「サァお鶴來やれ。」

れる氣ぢやワイなア。」 與三「可い覺悟だ、兩人ならべて。」トこの中に藤八たまらず葛籠のまゝ歩き出す事、この仕組宜しく與三郎とめて、出刃の柄で錠前をたゝき拔く。此の中藤八中へ首を入れる事、錠前拔けて蓋開く。はずみに中より藤八ころげ出る事、二重舞臺の方へ行く、與三郎追つてゆく。多左衛門、藤八を引据ゑ與三郎を止めて、多左「スリヤどうあつても藤八を密男にして斬るこゝろか。」與三「知れた事さ。」ト立ちかゝるを多左衛門止める。一寸立廻り、藤八震へながらよろしく蹲る。見得よくとめて、「それとも見世の迷惑と思つて止めるこゝろなら。」ト藤八ハ科あつて、「その代物を質に取る氣か。」 多左「それだと言つて藤八奴をば。」ト思入。 藤八「ア、これ〳〵、隨分ふめますぞえ〳〵、何卒私を質に取つて助けて下され、多左衛門樣。」ト思入。 多左「エ、汝が不聞をはたらく故、重荷に小づけのこの混雜、旦那へ不忠の大癡漢め。」ト藤八へ思ひいれ。 多左「ア、面目ない。」トさしうつむく。與三「そいつを質に取らねえなら、此方が望みの入替と……。」 多左「それ入替の望みの品、今さしかゝつた紛失故に、渡す事はマアならねえ。」 與三「さういふならばやつはり兩人を……。」トこなし。お富も思入あつて、お富「早く殺してお前の心を、それで休めて下さんせ、斯ういひ出すからは妾も意地。」ト與三郎、お富へ立ちかゝるゆゑ、皆々氣をあつかふ思入。 與三「それとも金で三百兩、それで無難に納める意か。」 多左「サアそれは。」 與三、お富「サア。」 多左「サア。」 三人「サア〳〵〳〵。」 與三「お恐れ

時にやァ、對決なしの拘引し、形見がはりの密夫は、葛籠の中の藤八だ、お富と兩人で帶紐解き、寐てゐた所を寐首を押へ、葛籠の中へ入れて來た、この密夫のあかりを立つるか、但し此方の惡事をいひ立て、拘引しの罪を被るか、術よく事を濟ませるか、サア／＼なんと動きは取れめえがな。」ト葛籠の前から藤八顏を出し、藤八「そりや譃ぢや／＼、譃だぞえ／＼。」與三「サア女め、あの通り吐すワ、われから痛い目をさせるのだ、野郎め覺悟しろ。」ト前の穴より出刃を入れかける故、上へ首を出す所を襟上とらへ「奴、どうしてくれうな。」藤八「ア、これお富どの、そりや餘り殘酷ぞや、其方でばかり覺悟されてどうなるものだ、わしやァ其樣なよい思ひを、唯の一度も爲た事はないに、情ない事をいひかけるか。」與三「エ、いくら言つても仕方がねえ、汝が弟の海松杭めが他言つたばかりで、俺もひどい目に逢うた事があるワ。未進を汝でうめるワ、さう思へ。」藤八「知らぬ／＼、そりやァわしは知らぬワエ。」與三「手前が知らねえでも、御見物がよく御存じの事だ。」ト立ちかゝる故、藤八いろいろこなしあつて、よろしく思入。藤八「ア、これさ／＼、そりや弟は弟、俺は俺、其の時の廻り合はせ、わしの知つた事ぢやァない、みんな作者がする事ぢや。コレ／＼お富さん、どうかして助けておくれんかえ。」ト思入あつて葛籠より手を出し、「拜む／＼。」ト思入。お富「エ、お前も未練な、男らしくもござんせぬ、モウかうなれば仕方がない、覺悟して一緒に死んで下さんせ。藤八さんと一緒に殺さ

藤八「これ〳〵平馬樣、松兵衞どん、多左衞門樣とめて呉れぬか、殺されるワエ。」與三「助けてくれろもすさまじい、何處から突かう。」トいろ〳〵思入。多左衞門こなしありて、與三郎に向ひ、多左「これ待たつせえ、與三郎どん。昨日こなたに初めて逢ひ、番へた言葉もある筈だが、其の舌の根もかわかぬ中、又ぞろこゝの店へ來て、俺に難儀をかける氣か。何で藤八が間夫だ、其の譯をいはつせえ。」ト思入。與三郎ぢつとなり、與三「オ、間夫の證據を見せうワ。」トお富を引出し、「サアお富こゝへ出ろ、汝が命は二つあつても足りねえワ、對手の野郎にしらを切られては男が立たねえ、譯があるとも無えとも有體にぬかしてしまへ。」お富「あれさ靜かにおしな、妾だつても初めから、お前の安否が知れぬ故、多左衞門さんのお世話になり、どうかかうかはして居れども、只の牀の間の据物ゆゑ、構うては下さんせず、流石に行末始末の賴もしさうなお方ぢやと、藤八さんと色になり、寢てゐた所をお前に見られ、モウ隱されぬ妾が淫奔、もし藤八さん、斯うなつては仕方がないよ。」藤八「ア、これお富どの、そりや餘り酷いぞや、其方ばかりで覺悟されてはどうなるものぞ、俺やそんなよい思ひは、唯の一度でもした事はないに、情ない事をいひかけるなァ。」與三「サア斯うぶちまけてしまふからは、義理もへちまも構ふものか。お富を木更津から伴れて來て、圍つておいたは三年越、旦那といふはこの店の大番頭の多左衞門さん、たとひ抱寢を爲ねえでも、恐れながらと訴人して、だきこむからは其の

刻その箱をいぢりまはし、あの半藏に質藏へ持たせて遣つた覺えがあらうが、半藏さうか。」 半藏「さつき質藏へ入れました。」 松兵「ア、これ〱詰らねえ事を喋舌る奴だ、アリヤこれではねえ、箱が違ふワエ。」 多左「エ、言譯をさつしやるか、たとひ何と言はうとも、この多左衞門が白眼んだ黒星、其の香爐の盗人も大方そこらに。」ト敵役に目をつける。皆々こなし。藤八葛籠から顏を出し多左衞門と見合はせる。是れにてチヤツと顏をひく。「大概それと知れてあるぞ。」ト松兵衞ぎつくり思入。「それに文を證據と言ひ立て、與五郎殿やお鶴をば、香爐の盗人にしようとは、淺はかなこしらへ事、但しは外に嚴とした證據が御座るか。」ト平馬へ科。 平馬「ム、、サそれは。」 多左「證據がなけりやア二人がよもや所爲とはいはれますまい。申しそんな物ぢやア御座りませんかえ。」ト思入。平馬こなしあつて、平馬「アイヤ〱、たとひ其の儀明白ならずとも、大切な品なくしては相濟みますまい、これは如何致す。」 與三「香爐が無けりやア此方はまだ外に、葛籠の中の雜物で耳を揃へて三百兩、たつた今貸しなせえ。この質種が不承知なら、憚りながら店先で、いけどつた間男野郎、賣買にしてくれべいワ、どいつもこいつも見やアがれ。」ト腰に挾みし手拭に包みし出刃庖丁を出し、「サア野郎め覺悟しろ。」ト立ちかゝる故、中より藤八いろ〱とめて、 藤八「ア、これ〱情ない、人殺し〱、助けてくれぬか。」 與三「やかましいワエ。」ト出刃を見せびらかし、よろしく立ち掛るを藤八蓋の方より手を出しとめて、

をいはつしやるな。」ト言ひながら出て來る。多左「ヤァお前は與五郎さん、お鶴殿を引捉へ、松兵衛お主は何をさわぐのだ。」松兵「何を所か、香爐が紛失しました。」藤八「そりやァとんだ話ぢやな。」ト顔を出す。平馬、與五郎お鶴を見て、平馬「ヤァお主はお鶴、昨日の二才め爰にうせたか、不屆奴めが。」ト思入。與五郎お鶴よろしく科あつて差俯く。多左「これ／＼お鶴殿の縁につれ、與五郎殿はおろそかにならぬお宅のお客人、手荒い事はならねえぞ、さうして香爐が紛失をどうして知つた。」松兵「サァそれは、どの道平馬様なり、又外へ賣渡すにしろ大事の代物、今質庫で改めて見た時に。」ト箱を出し、「中に入れたは鶴どころか、こりや天神様の鷽鳥と、中ごは變つたのみならず、中にはひつたこんな文。」ト文を出すを、與五郎お鶴見てハッと思入、與三郎兩人へ宜しく思入。平馬狼狽へ此の文を取り見て、平馬「扨こそ／＼。與五郎樣參る、鶴より。」松、樓、皆々「ヤァ／＼／＼。」トこの中平馬文句を讀む心あつて、多左「そんなら香爐の筥の中へその文がある故に。」平馬「オヽいけ舌たるい此の文體。コリヤ大切の品の盗人は、與五郎お鶴に極つたワエ。」多左「イヤ平馬さま、そりやお眼鏡が違ひませう。」平馬「とは又なぜに。」多左「ハテ大切の品を盗み取りし其の中へ、自分の名宛の書いてある文を入れておくといふ、そんなたはけは今時は御座りませんよ。」ト平馬こなし。「よしんば又敵役がたくんでも、餘りといへば甘口な、そりやァ三十年も昔の事だ。」ト松兵衛へ科あつて、多左「コレ松兵衛、お主が先

も右も、相談はしませうが、併し三百兩は貸し難いが、殊に依つたら望みの品、其の香爐と入れ替へに、口説きを聞くめえものでもねえテの。」ト思入。與三「ム、面白い。其の句が出れば居じかつて方をつけて貰ひやせうよ。」ト思入。平馬「否々そりやならぬ〳〵、其の香爐の置主は身共ぢやぞ、どうしてどうして外々へ、此の通り金は持つて來た。」トこの時藤八葛籠の中より顏を出し、藤八「これは平馬様の仰しやる通り、縱ひ書附がないにせよ、その置主に違ひはない、貴方の手から受取つた彼の一品、この藤八が請合ひました、松兵衛香爐をもつておぢや。」松兵「ハイ〳〵畏まりました。」ト上手へはひる。お富思入あつて葛籠の傍へ往き、お富「これ藤八様。」藤八「エ、吃驚するワイな。」お富「サア藤八さん、斯うなつたら仕方がないと斷念めて、與三様の言譯の立つやうに、どうとも斯うとも男らしく話をつけておくれ。さもない事ならとても命は投出しもの、それともお前の料簡で、鶴の香爐を妾の方へおくれなら、この與三様の顏も立ち、お方も無事で此の場の納まり、しつかりした返事をおしよ。」藤八「それでも鶴の香爐は、平馬様の方へ手渡しをば。」與三「エ、喧しい、鶴の香爐どころかえ、龜山の化物を見たやうな、引込んでうしやアがれ。」ト又引込む。この時に奧ばた〳〵にて以前の松兵衛、與五郎を引立て出る、跡よりお鶴とめながら出る。松兵衛は件の香爐の箱を持ち來り、松兵「誰でもかれでも用捨はねえ。」お鶴「ぢやといふて與五郎様が。」與五「身に覺えなき言ひかけ事。」兩人「滅多な事

さう思つてお呉んなせえ。」平馬「ア、これ餘人では掛合ひにくい、あれ程のきつかけ、この通り摑合にするとは何の事だ、あゝ藤八はどう致した。」松兵「イエサ藤八は居りませぬよ。」平馬「エ、居ないでは濟まぬワエ、爰が丁度のよいきつかけ。シテ番頭の藤八は。」トこの中件の葛籠むく／＼と動く事、權助、半藏、手代みな／＼見て、顏見合はせ思入。平馬、松兵衛はこれに心づかず、松兵「その藤八居りませんといへば。」平馬「居らぬでは事が濟まぬワ。」トあたりへ色々こなし有つて、「さりとては情ない、シテ二番番頭の藤八は。」トきつと思入。この時ばり／＼と葛籠の蓋を押破り、前幕の藤八顏を出し、藤八「その藤八は爰に居る。」ト皆々見ておもひ入れ。皆々「ヤそんなら葛籠の。」平馬「中には藤八。」皆々「ヤア／＼／＼。」平馬「あれ程頼んだきつかけを。」松兵「扨は先からあはせた手筈も。」藤八「モウ斯うなつては茶ッ茶無茶苦茶。」平馬「エ、思へば怨みな番頭藤八。」藤八「御免。」ト思入。與三郎見遣りて莨ふきかける。與三「奇妙な顏だワ。」ト是れにて藤八ちやつと顏を引込ます。多左衛門與三郎見あひてこなし、平馬松兵衛見あひて、平馬、松兵「エ、何の事だ。」ト思入。松兵衛は科あつて上の方へツイと入る事。與三郎葛籠へこなし有つて、與三「サア見る通りの代物だ、云分通り三百兩貸しなされい。それとも入れ替へに香爐を、いさくさなしに渡す氣かえ、早く方をつけてくんなせえ。」多左「葛籠の中は外店外では、とんとふめない品なれど、此方の店だけ話しあひ、葛籠の中へ質種に、殘つた場合で左

與三郎この中連尺の間より挾みし藤八の袷を引拔き出し、「それ是れが捨利よ。」ト多左衞門この著物を見て、多左「ハテ見たやうな。」松、多「この布子。」ト皆々も思入。與三「さて利はそれで澤山だらう。早く入れ替へてくんなせえな。」ト科。多左衞門右の著物に扠はと科あつて、多左「そんなら葛籠を入れ替へて、あの眞鶴の香爐を、ハテ妙なものを望まつしやるな。」トこなし。平馬へ思入あつて、平馬「先刻から承れば、その汚い葛籠と鶴の香爐を入れ替へる、途方もねえ事を申す奴があるものだ、舌切雀なら葛籠にも緣があるが、鶴に葛籠とは何が附かぬワ、そつちは何と申さうとも、身共が品もやつはり鶴。何でも身共が方へ質請する、早く香爐を渡さつせえ。」トせり立つ。多左「隨分唯今でもお渡し申しますが、肝心の手形がなければなりませぬ。」平馬「それがあるなら氣は揉まぬ。」與三「その手形が無くつても、俺が方には慥かな證據、手形がはりに手紙があるが。」平馬「シテ又證據の手紙とは。」與三「サア讀んで見さつし。」ト前幕の手紙を莨入より出して松兵衞へ渡す。松兵「先だつて其の御地へ罷り越し御話し申し候彼の品質入の儀、こゝ許樣お取持にて百五十兩に御預り下され候趣、忝く、右は下總千葉家の重寶眞鶴の香爐と申し候て大切の品故、其のうちに是非とも請戻し候故、左樣に御心得下さるべく候、猶面談の上萬々申し述ぶべく候以上。藤八樣、みるくひの松より。」平馬「何につけても藤八が居らねば是れも片便宜。」與三「その密書が俺が手へ廻り／＼て勿怪の幸ひ、香爐は俺が請出す、

言はれぬワエ。」ト思入。平馬「見かける所多左衞門も彼に返答致さぬは、深き仔細があると見えるわ、町家へ害なす強請の所爲。」與三「何だ強請だ。侍だと思つて默つて居りやァ、強請とは何の事だえ、この野次馬め、すつこんでうしやァがれ。」ト平馬この權幕に恐れて控へる。「サァ言ひぐさなしに三百兩貸してくれるか、但し又その相談が出來ねえなら、此方が望みの品物、入替にしてもらひたい。」オイ番頭さん、早く挨拶しておくんなせえ。」松兵「これ〳〵いい加減にさつしやいな、何だか知れねえ此の葛籠を三百兩とは何の事だ、夷子講の賣買でも、大抵相場のあるものだ、それにヤァ譯も分らねえ無法ないひかけ、マァ何にしろ葛籠の中を。」與三「オ、面白い　葛籠の中を改めろ、代物せへ見たならば、よもや貸さねえとは云はれめえ。」トこなし。松兵「オ、改めてくれるワ。」皆々「改めろ〳〵。」ト立ちかゝるを多左衞門科あつて、多左「ア、これ〳〵待たつせえ〳〵。」トデモとみな〳〵立ちかゝるを、「エ、騷々しい、控へて居やれ。」ト皆々を制して與三郎へ向ひ、「そんなら愈この葛籠で三百兩貸されずば、入替にしてくれろといふが、品物は何で御座る、それを聞かうかえ。」與三「其の品物は外でもねえ、爰の家へとつくにから、質に來てゐる代物さ。」多左「シテ質入の其の品は。」與三「千葉家の重寶、眞鶴の香爐を。」多左「ヤ。」與三「どうぞ入れかへて貰ひてえね。」多左「そんなら葛籠の入れかへに眞鶴の香爐を。」多左「左樣さ。」多左「それ故二人が。乙なものが望みぢやなァ。」ト平馬ぢつと思入。

く、與三郎是れを見て、與三「何だ此奴らァ、腕でも斬らうと言やァしめえし、恟々するなえ。表にある葛籠を爰へ持つて來い。」トいひながら皆々を睨みまはすゆゑ、皆々「ハイ〳〵。」ト門口へ出て用水の上にある葛籠を門口の内へ荷ひ込む。平舞臺の眞中へ直す事こりやァ重たい葛籠だワエ。」ト舞臺眞中よき所へ直す。與三郎思入あつて、與三「それ見たか、中には雜物はぎつしりと、錠前おろして預ける代物、大金にせにやァならねえワ。」松兵「成程、錠の卸りたこの葛籠、むやみに爰へ擔ぎこんだは。」權助「松兵衞さん。」松兵「何でも是れには。」半藏、三人「譯があるワエ。」與三「オイ〳〵松兵衞樣とやら、其方の掛合がどうならうとも、此方の質からさきへ片附けて貰はう、サァ松兵衞さん爰へ來なせえ。」松兵「俺が往つたといつて何がわかるものか。さうしてマァ葛籠の中は何だか分らず、殊にふりの質物は取りませぬ。」與三「縱ひふりで有らうとも、大番頭さんは知つた顔だ。」ト多左衞門へ科にて、「何でも借りて行かにやァならねえ。」多左「イヤ餘所での懇志は別の事、今持込んだ其の葛籠、錠前おろして中ごは知れず、請判のねえ其の代物、どうして迂闊に取られるものか。」ト思入。與三「所を取つて貰ふ氣だね。此の鎌倉で人も知る質兩替に油店、五德で儲ける大金持、雪の下での角屋敷、名所町の和泉屋と見込んで持ち込む質入の、望みの高は三百兩、是非とも借りて行かにやァならねえ。」ト思入。平馬「サテ町人といふ者は無法無體と申す物。」松兵「こんな葛籠を三百兩とは。」松、權、皆々「惘れて物が

ねえ。」多左「誰かと思やァ與三郎殿ぢやァないか。」與三「へイ、番頭様、其の節は大きに有り難う御座ります。」松兵「そんなら此の人を多左衛門殿には。」與三「アイ番頭さんにはお近附き。」ト平馬、與三郎の素振を見て、平馬「さて／＼年頃といひ屈強の若い者、ぢやが面體といひ體へも、さて凄まじい刀疵が。」權助、皆々「ヤア／＼恐ろしい顔の疵。」トみな／＼與三郎の顔を見て仰山に惘れる事。與三「何だ、刀疵がどうしたと、あんまりぎよろ／＼面ァ見るなえ、晝狐でも逐出しやァしめえし、馬鹿な面な。これ年季野郎め、莨の火でも持つて來い。」ト皆々ぶる／＼する。權助氣味わるさうに、權助「ハイお莨盆。」松兵「してお前、爰へ來なすつたのは、何ぞ用でもあつて御座つたのか、言ふことがあるなら。」與三「私やァ爰の家へ、頼みてえ事があつて來やした、その頼みといふは質に置きてえ物がありやす。」松兵「今聞けば質を置きに來たといはつしやるが、ふりに質をとらぬのが仲間一統の規約だが、爰の見世は二朱や一分の端質はとりませぬよ。」權助「大方おまへ新道の伊勢吉と間ちがへて來なすつたか。」半藏「唯の質なら伊勢吉へお出でなせえ。」松兵「手前で小質は。」三人「とりませぬよ。」與三「やかましいワエ、此奴等ァ見くびつた事を吐しやァがるなえ、二朱や一分の悋な質ぢやァねえ、大金になる代物だ。」權助「さうして代物は何處へ持つて御座つた。」與三「其の代物は表にあらァ、コウ若い衆、手を貸して下つし。」皆々「ナニ手を假して。」ト皆々手を出して惘り思入あつて、懷中へ手を隱す事など宜し

たいから、早く會はしておくれなね。」　多左「さういふのはお富ぢやないか。おぬしやァ爰へ何時の間に。」　お富「アイわたしやァたつた今し方、來る氣もなしにお店へ寄りましたが、ツイ藤八さんにお目に懸つて話したい事、すぐ歸らうと思ひましたが、生憎お不在で解らぬ故、ツイうか〳〵と待ち合はせて、内所の事もお前に知れ、モウ隱しても惡いから、寧そ藤八樣がお歸りなら賴みたい事もあり、また二つには香爐の。イヤ斯う〳〵と話をしたらわかる事、よもや歸らぬといふ事はあるまいねえ。」多左「何の樣子か知らねえが、モウ彼これと五時過ぎ、家の事も不用心、ならう事なら明日にもわからう、今でなけりやァわるいのか。」　お富「アイちつと都合がわるいから。」　多左「ムウさういふ事ならそれでも可いが、あの藤八は何をしてゐるで有らう。」ト煙草を吸ひつける。誂への合方になり向うより前幕の與三郎、以前の葛籠を脊負ひ出て來り、本舞臺を見て、與三郎「向うの角が和泉屋だな。よし〳〵素敵に持ち重りがすらァ。」ト本舞臺へ來り、内の樣子を窺ひ、門口の用水桶の上へ右の葛籠を下して門口へ來り、手拭を取つて、「御免なせえ。」トいひながら内へ入る。邊を見まはしお富を見て、「ヤア女め、何をしてゐやァがる、的然こんなことだらうと思つて來た。」　お富「與三郎さん堪忍しておくれ、わつちやァ面目ないよ。」　與三「ナニ面目ねえも可いやァ、動きやァがるな、たゝつ斬るぞ。」　お富「そんなに言はなくつても可いワな。」　與三「モシ誰方も御免なせえ、とんだ女つてうがお家へ舞込みました

つき請戻さねばならぬ時宜、それ故わざ〳〵罷り越した。」 多左「それは有り難う御座ります、あなた樣からもお頼みで、御大切な品物お預りの手形へ店の印形据ゑまして、則ち元利の金子と右の書附引きかへに、香爐をお渡し申しまする積りで御座りする。お請戻しと仰しやるからは、元利合はせて金高は二百五十兩。右の手形あなた樣が御持參下さる上からは、直樣お渡し致しまする。」 平馬「イヤそこに一つ話が御座るテ、右の手形をば我等が同役林木應助と申す者へ預けおきしに、急に殿の御用向にて上京なし、麁相ながら右の手形懐中いたした儘出立したれば、取戻すには時日もかゝり、其の中に右の品なければならぬ時宜なれば、たとひ手形がなければとて、置主はかくいふ身共の事、金子さへ出せばよもや仔細はあるまいと存じて、それ故請戻しに參つたワエ。」ト多左衛門思ひいれあつて、多左「そりやはや間違も御座りますまいが、もと此の品は藤八が呑込んで、右の印鑑をすゑた書附が御座りませぬ時は、どうも貴方へ右の香爐、お手渡しいたす事はなりますまい。」 平馬「ム、。」ト科あつて、「成程貴公の詞そこも尤も。サア是れからが掛合で御座る、初めより藤八が呑込み居る事、外の仁では話が分らぬ、シテ二番番頭の藤八は。」ト松兵衛呑込まぬ故、松兵「その藤八は昨夜から出まして不在で宅には居りませぬ。」 平馬「これ〳〵松兵衛、お主も少しはきつかけを呑込んで居りさうなもの、留守だとばかりでは相濟まぬ。シテ二番番頭の藤八は。」ト お富思入あつて、お富「その藤八さんに逢ひ

は程の可い人だノウ、その口車ぢやァぞつとする程惚れる氣になるが、わつちばかりは揶揄と畚にやァ乗りたくねえよ。」平馬「こりや御尤も。」松兵「なか〳〵達者な者ぢや。」松兵「顔と口とは又格別。時にお富さん、藤八どのに用も有らうが、いづれ後方に來さつしやれ、其のうちには戻るであらう。」

助「しかし店は四つ限りぢや、お前爰へ來て御座つては惡いから明日の事にさつしやれ、ノウ松兵衛さん。」松兵「さうぢや〳〵、ちと爰に内談もあれば。」權助「サア〳〵今夜はお歸りなせえ。」松、權「女が店に居ては見苦しいワイの。」トお富憮として、お富「何だえ靜かにおしな、見苦しいとは私の事かえ、斯う見えてもお菰ぢやアないよ、いけ好かねえ、歸れといやァ猶の事、藤八さんに逢ふまでは川端へも出る物かな、悔しきやァ指でもさして見なせえ、憚りながら女が違ふよ、お店の邪魔になりやァしめえし、意地の惡いお品だなゥ。」平馬「いやはや惘れて物が言はれぬ。シテ身共が香爐の一件、藤八は何を致してゐるで有らう。」松兵「さればモウ歸る時分、何にしても大番頭さんを呼びませう。モシ多左衛門さん〳〵。」ト此の時奥にて、多左「オイ〳〵今それへ行きませう。」ト出て來り平馬へこなしあつて、「大きに失禮致しました。」ト是れにて平馬思入あつて、平馬「初めて逢ひしお手前は。」多左「多左衛門と申す者で御座ります。まづ平馬さま、貴方様には初めてお目にかゝります、シテ御用の筋は。」平馬「さればさ先刻よりも此の松兵衛にも申す通り、かねて質入致しおいた彼の一品、近々殿の御用に

お富「モシ〳〵平馬さん、以前はともあれ今ぢやァ私も眞面目な堅氣、過ぎ去つた身の上話は禁句だからよしておくれよ。わたしやァ爰の藤八さんに用が有つて來たから、其の積りでゐておくれな。長い月日にァ色々と變るものだねえ。」ト思入あつていふ。松兵「コウ〳〵お富さん、お前藤八さんに逢はうといふのは表向、實は多左衛門さんが歸らねえから、それゆゑ迎へに來なすつたのであらう、さうださうだそれに違ひあるめえがね。」お富「松兵衛さん何だねえ、女だと思つて馬鹿にしておくれでないよ。コウ權助どん、氣の利かぬ人だ、煙草と煙管でも貸しておくれな。」權助「何だかさつぱり樣子が分らない、モシ煙草もあげるが、お前そんなに言うてはお店へ濟みますまいぜ。」お富「なぜ濟まないのだえ、わたしやァ藤八さんに逢ひに來たのさ、お店がたの知つた事ぢやァないから、留守なら歸るまで待たうワな。」ト莨盆を引寄せ一服のんで通らぬ思入。「エ、煙管まで詰つて居るとは、通りの悪い辻占だノウ。」ト簪を取つて火皿の掃除をする事。平馬「身も先刻より藤八が歸宅致すを待ち申すが、それなるお富も藤八へ用事の趣殆んど待ち草臥れたワエ。」松兵「イヤモウ定めし御退屈で御座りませう、店でなければ御酒一つ獻上と申す所で御座りますが、意に任せず。」平馬「身共も實は其の心なきにしもあらず、しかし酒はたぼでなければ飲めぬての。」松兵「左樣々々、なま中な酌人より、お富さんのお顏を拜みながら一口やつたら、さぞ味い事で御座りませう。」お富「これさ松兵衛さん、お前

參りましたが、あの藤八さんはお留守だと承りましたが、わたしやアちつとお目に掛らにやアならぬ譯で參りましたが、モウお歸りなさる時分で御座りますかね。」松兵「されば其の藤八殿は、晝前から用達に出られて歸らぬが、シテ權助このお方は。」お富「ア、わたしやお前さんにはお初にお目にかかりましたが、この權助どんには毎日の樣に。」權助「逢ふの逢はぬのといふ事かえ。モシ松兵衛さん大番頭さんの、それ。」ト小指を出して見せる。松兵衛思入あつて、松兵「ハ、アそんならお前がお富さんかえ。」お富「私もお前さんのお名前を聞いて居りましたが、ツイお出でなされねえから、碌に御挨拶も致しません、堪忍しておくんなさい。」松兵「それは互の事、しかしお前が店へ御座つては旦那の手前、多左衛門さんの思はく、何ぞ急用でも。」お富「用といふのは別の事ぢやアないが、お店の藤八さんに是非お目に掛つて、ちと話し申したい譯があつて。」松兵「ア、それで夜分御座つたのかえ。」ト平馬思入あつて、平馬「最前から樣子を見るに、どうか見知りある面ざし格好、確か以前は木更津で。」お富「エ。」トぎつくり。平馬「オ、さうだ、物腰格好寸分違はぬお富ぢやな。」お富「ほんに貴方は平馬樣で御座りませぬか。」松兵「そんなら旦那さまはお富さんの身の上を、よく御存じて御座りますかえ。」平馬「イヤモウずんと入魂に致した某、しかし其の節風聞に聞くには、水死とやら致したと申す事、聞き及んだがそれは全く世の取沙汰、まづは堅固で目出たい〳〵、シテ其の節に。」トいひかけしを、

松兵「左様々々、たしか右の品はあづかりの手形が、お前様の方へお渡し申してある筈で御座ります。」平馬「サァ其の手形にちと仔細があつて、シテ藤八殿は如何致されたな。」松兵「ヘイその藤八は。」トこなし。この時奥より權助出て來り平馬を見て、權助「ヤァお前は昨日の侍だの。」平馬「さういふ汝は此の家の下男か。」權助「オヽさうだ、吾妻の森でよくも俺を酷い目にあはしやァがつたな。」松兵「これこれ彼方樣を何と思うてゐる、大事の〳〵お客樣、旦那樣ぢやぞ。」權助「旦那どころかえ、團子の樣な瘤をこしらへてからに。」松兵「是れさ、失禮致すなと申すに、どうしたものぢや。」平馬「これ〳〵松兵衞、そんなら玆はお鶴が家か。」松兵「何と仰しやりますえ。」平馬「いやさおつりきな家ぢやと申す事ぢや。」ト言ひ紛らす。權助こなし、松兵衞制してゐる。誂への合方になり、向うよりお富、好みの著つけ著ながし、ぶら提灯をさげて出て來り、直に門口くゞり内を窺ひ、お富「モシ〳〵權助どん、一寸お頼み申します。」ト門口を細目にあける。權助思入あつて、權助「さういひなさるのは誰方でござります。」お富「アレサ私だワな。」權助「もしお前さんは源氏店のおかみさん、マァ内へお入りなせえまし。」お富「アノ藤八さんはお内かえ。」權助「藤八さんは今朝出てまだ歸らないが、用があるなら内へお入りなねえ。」お富「そんなら少許の中、待つてゐてもよからうかねえ。」權助「なに構ふ事は御座りませぬ。」お富「お店に誰方か、御免なさいましよ。」ト内へ入る。平馬松兵衞兩人はお富へ思入。「お店へは始めて

松兵衛「ワア、。」ト平馬を見て、「ヘイどちらからお出でなされました。」平馬「身共は山鹿毛平馬と申して鎌倉の昵近、先年お預け申したる質物の事で罷り越した。」松兵「ヘイ〳〵それはようお出でなされました。こりや子供、お茶莨盆もつて來い。」トこの中平馬上の方へ通る事、この時奥より若い衆兩人幕明の手代、調市茶を汲み出る。若い衆の手代莨盆を平馬の前へ出す事などよろしく。「これ何を勝手へばかり入つてゐるのだ、そこの踏臺を片づけさつせえ。」若い衆△「ハイ〳〵。誰が爰へ踏臺を出したのだ。」若い衆□「今松兵衛さんが使はしつたのだ。」松兵「エ、早く片づけろ。」ト叱りちらすこと、よろしく捨白あるべし。平馬此の中に松兵衛を見て、平兵「これ〳〵お手前は先年木更津にて見受けたる松兵衛と申したお手代ぢやな。」トいふ中松兵衛も平馬を見て、松兵「なる程其の時の、お侍さま、デ御座りましたな。」ト以前匿した香爐の事心づき、燕の棚をきよろ〳〵見ながら、「モウ三年越前の事、大きにお見外れ申しました、眞平御免下さりませ。」平馬「何の〳〵、兎角一人でも馴染の顔があると申すは相談も致しよいて。」松兵「シテお出でなされました御用の筋は。」平馬「それは別儀でない、先年質入致しおいた香爐を受戻したい儀に就いて、今日わざ〳〵參つた。」ト松兵衛これにて科あつて、松兵「イヤそれは丁度よい。彼の香爐をお請戻し下さるとは、私方も勿怪の仕合、ようこそお出でなされました。」平馬「もつともお手前には一別以來ぢやが、藤八殿には面會して話し合つておいた事もあるて。」

せえ。」半藏「是れをかえ。それに險しう呼ばねえでも可ささうなものだ。」松兵「ハテ大事の質物だから云ふのだ、エ、庫へ持つて往かつせえ。」半藏「アイ〳〵。」ト立ちかける。松兵「これ中を見る事はなんねえぞ。」半藏「何の見るものかな。」ト小言いひながら上手の暖簾口へ入る。松兵衛後見送り、松兵「先づあの方はよしと。」ト科あつて又懷中より以前の鶴の香爐を出し、「併しながら此の香爐、どう考へても持つて居るのは險呑だ、あゝどうぞ可い匿し所が有りさうなものだワエ。」ト方々を見廻し、「神棚の燈籠の中は尤も陳し、油樽の中へ入れては、とり出すに手がよごれる、植木鉢の中でもあるまい。」トいろ〳〵考へ、不圖燕の巣を見つけて、「あるワエ〳〵、この燕鳥の巣の中へ、鶴の香爐を出居衆に入れる、これは誰も氣が注くまい、奇妙々々。」ト好みの合方となり、踏臺を持ち出てこれへ登り、件の香爐を燕の巣の中へ匿す事、捨白よろしく。この中に下手より以前の權助、科あつて下手へ忍ぶ。松兵衛いろ〳〵宜しく科あつて巣の中へ匿し、踏臺を下りて下より見上げ、「よし〳〵、どう見ても燕の巣だ、こりや誰も氣が注かぬ、あゝわれながら智慧の程適れ感心。」ト又この中踏臺へのる。「又とはあるまい。」トこの中に揚幕より前幕の山鹿毛平馬、羽織袴にて大小雪踏がけ、後より若い衆の中間一人附添ひ出で來り、平馬家來へ囁く。家來ハッと科あつて橋懸りへ入る。平馬は科あつて門口へ立ち寄る事、この中に松兵衛右の白きれて仕組宜しく、門口より、平馬「頼み申す。」ト松兵衛びつくりして、

り二階の格子窗、廂瓦の體よろしく、下手の暖簾かけて路次より庭つゞき奥へ入口、この前箱の用水桶、これへ雪の下名所町と記し、軒口へ※の印、和泉屋と記したる暖簾かけあり、誂への通りに飾りつけ、毎時の所に門口、平舞臺へ薄縁布く事、この三重に松兵衞以前の手代にて、前幕の香爐の筥を持ち、片手に以前の文を持ちゐて立身、テンツ、角兵衞獅子の鳴物にて道具納まる。

ト稽古唄の合方になる。

松兵「アヽ、これどうぞして木更津から預けられてゐる娘のお鶴、手に入れようと思ふ中に、先刻見かけたあの二才め、扨は初物を占められたと思つたら。」ト件の文を出し、こなし有つて、「お鶴から送つたる此の文の樣子では、彼奴めは許嫁の與五郎と見えるワエ。道理こそ彼の多左衞門が邪魔をして、與五郎めを見のがす體、おもへば〳〵腹の立つ、拾つた此の文を玉にして與五郎奴を罪におとす魂膽の、細工はりう〳〵爲揚をさらば、見せてくれうワ。」ト邊へ科あつて、右の筥の中より中籠に吹替へし鶯鳥を出し、其の中へ件の文を一緒に入れて、「藤八が先だつてちよろまかしたる其の後へ、此の文を入れておくは、後日に詮議といふ時には、文の名宛は與五郎なれば、差詰あいつへ疑ひがかゝり、あのお鶴にも氣を揉ませて、叶はぬ戀の意趣ばらし、味いわ〳〵。」トこなしあつて、「これ久助々々、半藏はどうした、長松は居ねえか。」ト呼び立つる。半藏出て來り、

半藏「エヽ、さうだ〳〵しい、何をお呼びなされます。」

松兵「これ〳〵半藏々々、これを道具質の棚へ上げて置かつ

には及びませぬ、マア爰へ御座りませ。」ト兩人科あつてたち戻る事。與五「そりや我等をば與五郎と。」お鶴「疾くよりお前は。」兩人「御存じあつて。」多左「さればさ。お鶴殿の緣組あつた伊豆屋喜兵衞殿の御子息と、一目見るから私が推量。」お鶴「そんなら何かの樣子といひ。」與五「われ等が身分を推量あつて。」トこのうち三人二重へ上り、多左「左樣で御座ります。チト話したい事もあり、邪魔を拂つて留めたも、このお鶴殿は此の家につながる緣の預り娘、さすれば主人の娘御も同じ事。この和泉屋の後見して店を預る多左衞門へ御斟酌にはおよびませぬヮ。」與五「サア其のお詞の尾について。」お鶴「お前が今のお話の。」ト思入。與五「とはいへ未だ此方とは懇志にあらぬ吾等が親元、はじめて參つた早脚には。」ト思入。多左「ハテお鶴殿のその爲には、おまへは壻の與五郎さん。」トこれにて兩人顏見合はせこなし。「ようこそお出で。」トこなし、三人よろしく、「なされました。」トこれを二度目のしらせにて好みの合方になり、三人話合の模樣よろしく　この仕組にて道具ぶんまはす。

本舞臺三間の間、常足金襴形の蹴込、正面暖簾口へ◇印の紺暖簾を掛け、上の方に帳面天秤など誂への通り兩替屋の店、上の方へ付家體を押出し、爰へも別間より奥への入口暖簾をかけ、下手平舞臺にして一間折廻し、油樽などの書割、爰へ風よけ障子覆ひしあかり見の油皿、あかりを點したる體よき所へ戸棚、書状さし、質物油の諸帳面好みの通りに引つかけあり、家體欄間へ燕の巣店へ釣つてあり、欄間外へ一間通りの塗家造

せえ。」　松兵「サア見世を氣を注けるのは當然の俺が役だが、店ばかり氣をつけても、肝心の奥が猥らゆゑ、蛛蜘の巣どころか預り娘のお鶴さんへ蟲がつきますワエ。」トこの中に一寸與五郎が以前落したる、お鶴より渡したる文を拾ひ、人々に見えぬ樣に袂へ隱す事あつて、「それだから蜘蛛の巣の序に、その蟲めも叩きのめして遣らうとおもつて。」ト立ちかゝるを多左衛門とめて、多左「これはしたり、その蟲の譯ならば私も疾うから知つてゐる。」ト與五郎、お鶴、お米思入。「これ松兵衛、お主も蟲の同類だらうが。」　松兵「エ。」トぎつくり。多左「要らざることは構はずと、しかけた帳合を片附けさつせえ。」
松兵「それだといつて見のがしては。」　多左「ハテこゝの蟲よりお主が頭の蠅でも逐やれといふことさ。」
松兵「とはいへよくも。」　多左「どうしたと。」トきつとなる。松兵衛こなし、お米「御座んせいなア。」トこの中お米はお鶴へさゝやく。はやり唄になり、松兵衛を引つぱり兩人奥へ入る。後に多左衛門思入あつて、多左「ハテたはけた奴だワエ。」トこなし。與五郎お鶴こなしあつて、お鶴も奥の方へ、與五郎はつか〳〵と橋懸りの方へ行きかける。「ア、もしお待ちなされい。」ト兩人構はず立ちかけるを、「これさお二人とも、マアお待ちなされい。」ト與五郎科あつて立ちどまり、與五「サアお詞では御座れども、始めて參りしこの家の内。」　お鶴「さういはるゝほど今更に。」　與五「あたりも見られ。」　兩人「面目なうて。」トまた行きかけるを、多左「是れはしたりお鶴さん、與五郎さん。」　兩人「エ。」トこなし。多左「心づかひ

大事なお方が氣にくはぬワ、やい二才め、わりや何處の野郎だ。」與五「ア、これ〳〵滅多な事、俺はお鶴殿と何も猥らな事は御座らぬぞよ。」松兵「言譯はならぬワエ。」ト立ちかゝる。お鶴「ア、これ〳〵彼方は私の殿御。」お米「お鶴さんの聟樣ぢやワイなア。」松兵「イヤ〳〵譃ぢや〳〵、お鶴さんの聟さんは江戸に御座ると聞いた許り、どうして此の鎌倉に居るものか。お前が私に見せつけて色をすれば、モウ〳〵此方も自暴だ、あの野郎に見せつけてお前を爰で。」トお鶴に取りつき、與五「これは無體な。」ト止める事よろしく、松兵「エ、退きやアがれ、うぬ。」ト以前の棕梠帚にて撃つて蒐る。たち廻りこの棕梠帚を引つたくり、松兵衛またお鶴へ縋りつく。これをお米隔てる仕組よろしく、與五郎が取りし帚を引つたくり、松兵衛與五郎へ撃つてかゝる。この仕組よき程に、前幕の多左衛門出て、松兵衛を突き飛ばし、又かゝる所を突き廻し、よろしく止めて、多左衛門「これ松兵衛、何を騒ぐのだ。」松兵「ヤアさういふ此方は大番頭。」お鶴「多左衛門さんか。」ト松兵衛止められながら、松兵「ア悪いところへ。」鶴、米「ようお出でなされたなア。」多左「これお主は帚を持つて誰を撃たうとおもふのだ、いやさ誰をうつ氣だよ。」ト松兵衛帚を持つてうじ〳〵しながら、松兵「エ、こりやア。今ツイちよつと蜘蛛の巣を拂はうと思つて、それで帚を持ちました。」多左「これ今日は藤八も店に居らず、帳場も空いてゐるうのに、爰へ來て蜘蛛の巣を拂はうとは、扨々お主も健な男だ、爰の事に構はずと店を少と氣をつけさつ

時に、難儀を救うて下すつた、其のお女中に似寄りの物ごし。」ト思入。與五「それこそ的然小笹さま。スリヤあの書附を御持參にて、昨夜のうちに此の店へ。」ト思入。お米「では其のお女中は。」お鶴「御存じの。」與五「サア兄與三郎樣の實の母御、鶴の香爐紛失ゆゑ、穗積の家の難儀となり、お心遣ひの何かのお話、せめては彼方のお力にならうと思ふも、義理のある與三郎さまへわれらが寸志。シテ彼の品を質請なされしか。」お米「どうやら樣子は知らねども、今日また店へお出でなさる約束ぢやといふ昨夜の話。」お鶴「もしも貴方が御用があらば私の部屋で。」お米「お待ちなさる其の間、お鶴さんにお寐首を。」兩人「どうぞ叶へて。」ト兩人より與五郎を引き立つる事。與五「それぢやというて此の家の手前が。」鶴、米「ハテマアちよつと。」ト兩人手をもつて引き立つる事、宜しく捨白あるべし。此の中に松兵衛窺ひ出て與五郎を突き退け、松兵「どつこい／＼ならぬぞ／＼。」お米「お前は松兵衛さんか。」ト與五郎お米おもひ入れ。松兵衛お鶴へ向ひ、松兵「これ／＼お鶴樣、お前は胴慾なものぢやぞや、何やら面倒な譯があつて緣組した壻殿の方へ婚姻もならぬ時宜。段々年頃にならつしやるに、さぞ羨からうし寂しからうと意をとほして、儂が日頃くどけども、つひに一度の挨拶なく、何時の時にか男をひき入れさつしやつたな、それでは濟まぬ／＼。」ト科あつて與五郎へ向ひ、「これ野郎も何處からうせた。」お米「マ、これ／＼滅多な事を言はしやんすな、このお方はお鶴さんの爲には大事のお方。」松兵「その

津の舅殿の手前といひ、殊にこれなる和泉屋は、儕が家とは今もつて懇意ならぬ事なれば、猶更もつて儕まぬ事。」お鶴「そんなら何故に私をば、早う江戸のお前の家へ呼び迎へては下さんせぬ。」與五「さればお主を江戸へ呼び迎ふる其の時は、忌でも應でも伊豆屋の跡式、この與五郎が相續をせねばならぬワイの。」お米「さうした時はお前さんとは天下晴れたる御夫婦間、それをば兎や角と仰しやるは。」お鶴「どうでも足らはぬ私故、外に江戸に增す花の、移り心のあつての事か、そりや胴慾ぢや、御胴慾で御座りまするワイなァ。」ト思入。與五郎あたりへ科あつて、與五「ア、これ〳〵、お鶴殿、決してさういふ譯では御座らぬ、さりながらお主と明日にも婚姻して、伊豆屋の跡式相續すれば、始め儕へ義理立の御放埒が元となり、不慮な事から親々の、勘當の身とならつしやれた兄者人へどうも濟まぬ。何で有らうと與三郎樣のお身の納まりつくまでは、どうも意に任せぬ時宜。」ト思入あつていふ。これにてお鶴お米も得心の行くこゝろ宜しく、與五郎こなし有つて、「早速ながら聞きたいは、この和泉屋の家へ、千葉家の重寶眞鶴の香爐が、もしも質入になりしといふ、何か話は聞きやらぬかいなウ。」ト思入。お鶴「奧と店とは隔つ故、詳しい樣子は知れねども、昨夜ちらりと話に聞いたは。」お米「オ、何處やらのお屋敷から、鶴の香爐が質入してあるならば、密々に請戻したいと尋ねて御座つて屋敷のお女中。」お鶴「そのお方をば直々に見請けはせねど、話の樣子が昨日吾妻の境內で、平馬づらに逢うた

お米「ハテ何であらうとお鶴さまが大抵お待ちかねでお出でなさる事では御座りませぬぞえ。」與五「それでもどうやら心がおくれて。」トこんな事いひながら上のはうへ來る。お鶴以前の形にて出て來り、お鶴「ヤ與五郎さまか。」與五「おつる殿か。」お鶴「ようお出でなされましたなア。」お米「マア〱これへお出でなされませ。」トこれにて緣さきへかけて、與五郎くわいちうより封を開きし文を出し持ちて、與五「昨日不思議にお前に逢うて、この鎌倉に忍んで御座る樣子も知れ、マア安心をしましたワイの。」お米「私も其の時いろ〱と何からお話し申さうかと思うた內に、あの平馬づらが邪魔になり、本意ない別れを致しました。」與五「それから宿へ戾りし所、今朝早うお前から此の文が來る折も折。チト僻もお前に逢うて聞きたい事があつた故、それ故わざ〱今日爰へ。」お米「何にせえお鶴樣が、昨日はあんまり本意ないお別れ、どうぞしげ〱お話がなされたいと仰しやる故、わたくしがお勸め申したそのお文。」お鶴「何で有らうと爰は端近。何かの事は私が部屋へ。」ト手をとり、米、鶴「ちやつとお出でなされませ。」トせり立てるゆゑ與五郎こなし有つて、與五「ア、これ〱待たつしやれ、どうしてマア馴れ〱しうお主が部屋へ行かれうぞ。」お米「これはマアお堅いも程がある。」お鶴「お前と私は親と親とがお許しなされた女夫間、誰に遠慮がござんせうぞいなア。」與五「ちやというて表向婚姻と、のはぬ其の中に、其方の部屋へ落著いて話するも何とやら。若しも猥らな事あると人の思はく、又木更

込み、「ア、これ〳〵こゝへ構はずと、モウ一邊探ねて見ろ〳〵。」權助、半藏「それでも今のは。」松兵「ハテお主たちが構つた事ちやァねえ。もし〳〵お莊屋さん、これ半藏々々、コレ權助々々、とかく朋輩の好みといふものは、さうしたものでは無え、ともかくも藤八を今一應さがして見やれ〳〵。」莊屋「なる程、こんなに言はつしやる、サア〳〵お前方も御座りませ。」權助、半藏「マア捨ててお措きなされませ。」ト思入。松兵「エ、情のこはい、行かねえかい。」五人「さア〳〵探しなさい〳〵。」ト權助、半藏をせり立てて皆々下手へ入る。松兵衛あとに殘り、今隕したる手拭に包みし、前幕の鶴の香爐を出し、科にて、松兵「藤八が日外から詐取かしておいた鶴の香爐、ゆうべから彼奴めが行方が知れぬ、若しもの時に可危いものと、こつそり俺が出して來たが、今の機で隕したが種を見つからぬで、幸運々々。しかしマア藤八は何所へうせたか、寧その事に是れ限りに戻らぬ時は、また此方にも仕樣があるが。マ、天狗にでもさらはれたら、併し神隱しといふ顔でもない。ア、何にしても此の香爐、持つて居ても險呑だ。何處ぞへ忍ばせておかずばなるめい。」ト科あつて奧へ入る。唄になり橋懸りより前幕の與五郎、著ながし庭下駄を穿き、下女お米莨盆を提げ、庭下駄にて案内しながら附き添ひ出て、お米「何れにもお心づかひは御座りませぬ、マア〳〵是れへお通りなされませ。」與五「忝う御座りますが、しかしマア何の中でも、それ〳〵の禮儀もあるに、お鶴殿の部屋へ直々斯うして來ても無遠慮千萬。」

れこれ半藏權助、まじ／＼して居ずと何處か藤八が入りこみさうな所を考へて見やれ、どうだ／＼。」ト此のうち權助考へ、權助「ム、わかつたワエ。」ト手を打つ。皆々「知れたか／＼。」權助「こりやこの權助が鑑定では、なんでも店に御座つては濟まぬ事が出來たから、そこで藤八さまは。」半藏「藤八殿はどうさしつた。」權助「寺號山號とやらかしたのだ。」松兵「寺號山號とは何のことだ。」權助「云はずと知れた引負のいひわけなさに、寺號山號一目さんに隨徳寺に。」ト驅落したといふ思入。松兵「エ、緣起でもないことをぬかしやアがる、藤八に逃げられて耐るものか。これ半藏、きよろ／＼せずと心當りを考へろ。」半藏「無理ばつかり、どうして私が。」權助「これ／＼松兵衛さん、氣を揉まつしやるな、大かた煤はきには出るであらう。」松兵「エ、何を癡漢が。」半藏「それでもお前は氣を揉みなさるが、大番頭の多左衛門さまは平氣の半左衛門で居さつしやります。」權助「大番頭がおちついて御座るに、こなたが氣を揉むは駄目な事だ。」ト松兵衛慍として、松兵「此奴們ア俺がいふこと用ゐねえな。」權、半「それでもどう仕樣があるものか。」松兵衛「エヽ口ごたへを吐し居るな。」トありあはす棕梠帚にて權助半藏を追ひまはす。若い衆みな／＼、五人「マア／＼お待ちなされませ／＼。」ト捨白にてとめる事。此のときに松兵衛手拭に包みし物を取隕す。權助、半藏「そりやこそ何か隕ちたぞ／＼。」ト皆々見つけるを松兵衛其の上へべつたりすわり、松兵「こりやア何でもねえ／＼。」ト內懷より手を出し、股間より懷中へひつ

やァ。」トお富を引寄せるを、チョンと木の頭。「話せるなァ。」トきざみよろしく。拍子幕。

五幕目　鎌倉雪の下名前町質店の場

本舞臺少し上の方へよせて二重の亭家體、正面茶壁瓦燈口の塗下げ、更紗暖簾かけ、上の方建仁寺垣、家體より下手へ黒塀折廻し、此の塀ごしに白壁の土藏、扉前口◇の前の印つきし質屋の體、此の前に柴垣、庭模樣、石燈籠など好みの通り、よき所へ栞戸、すべて和泉屋庭内の模樣。好みの通り飾りつけ、爰に松兵衞以前の手代前掛がけ、權助前幕の下男、半藏油店若い者、若い衆兩人△□同じ拵へ、外に番人○×、下男二人は六尺棒を持ち立ちかゝりゐる、皆々前幕の藤八が行方が知れぬといふ捨白よろしく、テンツヽ、通神樂にて幕明く。

ト越後獅子の合方になり、　松兵衞「コレどうだよ、藤八が行方知れたかよ。」番人○「サア昨夜から何處へ御座つたも知れぬといふ話で御座りまする。」若い衆△「近所のお方もそれ〴〵に。」若い衆□「莊屋樣のお盡力で。」兩人「方々を尋ねましたが、かいくれ行方は知れませぬ、コリヤマアどうした者で御座らうなァ。」ト皆々この筋の白くち〴〵にいふ。權助「こりやァ俺が察する所、藤八さんの行方は、松兵衞樣お前知つて御座らうね。」松兵「ナニ俺が知つて居る位なら氣を揉むものか、心あたりへは大概迎へを出したワ。」番人○「シテ其のお心あたりにも番頭さんは。」松兵「されば居ないから安心ならぬて、こ

つて開き見て、與三郎「何だ能書があるワ、ドレ〳〵。南蠻祕法。アタリマンス、この一藥を酒にて和し服さしむる時は、人命を斷つ事卽妙なり。まつた右の一藥に辰の年月日時揃ひし男子の生血を混じ服する時は、年久しき金瘡古傷たりとも跡なく治する事神の如し。此奴は奇體な藥だな。」お富「そりやアまア幸ひな、お前の顏や體の疵、治すには丁度よいではないかえ。」與三郎「違ひない、併し取り得る事の出來ねえのは人の生血だ、當時は俺が面や身軀の疵も仕事の資本、治さねえ方がよからうよ。時に此の野郎を忍ばせ置く容物はあるまいか。」ト思入。お富こなし有つて二重の押入より誂への葛籠を出し、お富「アイ丁度お福がこの葛籠。」ト與三郎、こゝへ出せと仕形する。お富中に入りし風呂敷包など引出す。與三郎「中へ此奴を。」藤八「コリヤ耐らぬワ。」ト立廻つて中へ入れる事。兩人思入。時の鐘。藤八は葛籠の中へ入る。與三郎蓋をかぶせる事。お富あたりへ思入あるべし。與三郎「こいつを囮に明日の仕事。」お富「モシそれはさうと與三さん、どういふ譯で此の手紙の、千葉の屋敷の寶をお前が。」與三郎「其の香爐がちつと此方に入用ゆゑ、コレ。」ト囁く。お富「そんなら葛籠の藤八を玉に遣つて和泉屋へ。」與三郎「出來合密男つゞらもたせ。」お富「何角の手筈は。」與三郎「寢ながらゆるりと。」ト是れを聞き、葛籠の中より藤八窺ひ出て、藤八「どうやら味な。」ト顏を出すを、與三郎お富たち寄り、びつしやり締める。與三郎「からんだ惡緣。」お富「きつてもきれない。」ト與三郎の顏を見る。與三郎「命があり

へ投げて遣る。お富「そりや何だえ。」ト與三郎笑つて、與三郎「猪口屋ぐすりを見たやうな物さ。」お富「オヤ忌だなウ。」ト投げ出す。この中に一通の書翰を與三郎紙入より引出す。與三郎「何だ。兄藤八様へ。海松杭の松より。」ト思入ある。お富この手紙の上書を見て、お富「どうやら覺えのその名宛。」ト思入。この時藤八いろ〳〵悶躁き居て、縛られたる帯とけて、藤八「それ讀まれては。」ト駈け寄り件の密書を取らんとするを、與三郎手早く突き廻し藤八を當てる。藤八ハァ、と倒れる。與三郎こなしあつて、與三郎「これなる手紙に海松杭の松といふ名は木更津で、手前も俺も怨みのある奴。」お富「兄藤八様とあるからは。」與三郎「扨はこいつは兄弟だな。」お富「道理こそ、よく似た顔つき。」與三郎「とんだ奴に巡り遇ふものだ。」お富「早く讀んで御覽なねえ。」與三郎「ドレ。」ト開き、「先だつて其の地へ罷り越し御噺し申し候彼の一品質入の儀、其許さま御取持にて百五十兩に御預け下され候趣忝く、右は下總千葉家の重寶眞鶴の香爐と申して大切の品故、其の中に是非々々此の方へ請戻し候間、左様御心得下さるべく候、猶面談の上萬々申し述ぶべく候、以上、月日。猶々此の一藥不用に相成り候間、其の儘御戻し申し上げ候、宜しく御計らひ下さるべく候、以上。ム、此の手紙の文體では、千葉家の重寶眞鶴の香爐を質入した密書、ム、。」ト藤八へ科あつて、「此奴は滅多に逃されねえワエ。」トこの中お富、外の藥包に能書を添へたるを見つけて取り上げ、お富「モシ爰にも藥の包があるぞえ。」ト出す。與三郎取

中に、此の通り縛られて、買つた酒まで飲まれれば澤山だ。ア、今日は如何なる悪日ぞや。ハア、。」ト思入。この中に與三郎お富杯を取り替せる事あつて、與三郎「コレお富、さつき俺が亭主だと打ちまけて、てきはき片をつけうと思つたを、なぜ兄だと言ひ張つたのだ」お富「亭主といへばモウそれまで、それよりは兄さんだと言うておいたら、又何ぞお前の力になる時の爲に、却つてよからうと、それで私があの時に。」與三郎「俺もそこらと察したが、何あの時一か八か方をつけたも可かつたらう。」お富「それぢやというて今陰で聞かしやんしたらば、疑ひはお前、霽れたで有らうがね。」與三郎「さればなア、一夜も枕をかはさぬお主を、是れ程までに世話をする主の意が解らねえワエ。」トこの中に藤八が紙入、よき所へ落ち散り、中より書附など出かゝりゐる事。是れを與三郎見つけて、「何だ其處に落ちてゐるのは、紙入ぢやア、ねえか。」ト是れにてお富紙入を取り上げ見る。藤八見て、藤八「ア、それは俺が紙入ぢや、明けては悪い〳〵。」ト色々もがく。お富「中に何やら。」藤八「ア、明けては悪い〳〵。」與三郎「ドレ。」ト中の書附を見て、「何だ。一、金一兩二分也、若浦様。浪の戸様。藝者一組。臺一つ。コリヤ大磯の書出だ。」ト此の内に紙包をお富取り上げて、お富「コレ爰に何か包んだものが。」與三郎「ドレ。」ト開き見る。中に錫の曲物へ入れし藥あり、與三郎上包みを見て、「ム、海内無比。ヨルトスル。交接堂君よし製。この藥は此の近所だ。オ、さうだ、畫師の程よしか頼まれて弘める藥よ。」トお富の方

ヤ貴様には用がある、爰へ來やれ。來いといふに、來られずば寧そ俺が。」ト立ち蒐る。是れにて藤八悄りして、藤八「コリヤモウ耐らぬ。」ト逃げ出す帶際を止める機に、藤八の帶とけてくる／＼と廻り、帶ひろどけになる。立廻つて繻袢一つになるを蹴返し、帶にて引縛り、與三郎「滅多にわれは逃されねえ。」藤八「ハア、。そんなら私に見せびらかし。」與三郎「知れた事だ。其處で存分見物しろ。」藤八「ハ、、ハア、。」と思入、好みの合方、與三郎お富宜しく能き所の柱へ藤八を結へ付ける。此のうちお富白鳥の德利より、別の酒を燗德利へ移し、燗をつける事あつて、お富「與三さん、モウ何にも心遣ひはござんせぬ、マア緩りとお上りな。」與三郎「こいつは妙だ。たしか今聞けば此の酒は、あの野郎が買つたのだな。」お富「アイ奇持な人さね。モシ與三さん、今夜は家の旦那も御店に用があつて來る事ではなし泊つてお出でな。」與三郎「ナニ泊れ。內所はどうでも、表向圍はれてゐるお主が家、亭主の留守にはモウモウこり／＼した。」お富「アレまた矢張そんな事、亭主といふは愛しいお前。」與三郎「今夜がかゝアといひ初め。とんだ明けを追ふ奴さ、ハ、、、、。」ト是れをまた新內節の合方になる。お富「サアお燗が出來た、一つおあがり。」ト猪口を出す。與三とり上げて、お富酌をすること。與三郎一口飲んで、與三郎「此奴は可いワエ、あの蔑棒が買つた酒を、亭主の己が飲むといふは、思ひもよらない事だ。」トいひながら酒を飲む科。藤八「コリヤ酷い目に逢ふものだ、密男のまの字までも行くか行かぬか知れぬ

さん、一つ上らんかいなア。」ト手を引つぱるゆゑ、お富「エ、廢して下さんせ、よい機嫌な。それ所ではないワイなア。」藤八「ハテそこを一つ飲んで、わつさりと氣を發散するがよいワイの。」トいひながら手酌で自分が飲み、よろしくこなしあつて、「これ／＼氣晴らしに一つお上り。」ト猪口を持ち行く。お富品よく拂ひのけ、お富「わたしや酒はたべぬワイなア。」藤八「ハテあがる所ではあがらうがな。これ一寸々々。」トしなだれ寄るをはらひ除けて、お富「エ、またしてもいけ煩い。」藤八「こりやモウやけぢや。」トかじりつくを拂ひ除ける、兩人宜しく。此の以前より與三郎下手より忍び出て窺ひゐる事、お富躓くを押倒し藤八乘りかゝる。此の時與三郎、藤八の首筋をもつて引き退け突き廻す。「アイタ、タ、。」ト與三郎を見て驚き、「ヤ汝は。ハア、。」ト顫へること。お富、與三郎を見て、お富「ヤ。與三さんかえ。」與三郎「お富、いけづ太い野郎だなア。」ト此の中すきを見て逃げ出す藤八を引きするゑて思入。藤八ふるへる事。お富「そんなら今の様子をば。」與三郎「今の所か先刻から、安を歸して裏から忍び、家の主人にお主が噺も。」お富「それも詳しくお聞きかえ。」與三郎「一間隔てた障子越、大抵今の概畧は。」お富「それで私も落著いた。よく戻つて來て下さんした、モシ色々お前にいふ事が。」與三郎「俺も手前に噺があつてよ。」ト此の噺の中、藤八そろ／＼這ひながら下手へ逃げて行くを與三郎見つけ、「オイ番頭どん。藤八どん、こんたは何處へ。」ト聲かけられて藤八ぢつととまり、藤八「一寸。尿しに。」與三郎「イ

合方になり、お富「先刻はマア思ひがけない與三郎さん、よもや此の世に存へては御座んすまいと思うたに、命が互にあればこそ、又邂逅ふ嬉しさも、過ぐる月日の其の中に、以前に變りし今の身の上。ア、何としたもので有らうなア。」ト思入。これをなまめきし合方になり、以前の藤八、前もいくぢなく以前誂へてやりし二ツ物の廣蓋の上へ、白鳥の德利、杯、猪口など載せしを持ち、暖簾口より出て來る。お富の臺詞きれぬ中に奧より出て窺ふ體。是れにてお富こなし有つて、門口の締りをせんと立ち行くを、廣蓋を二重に置き、つか／＼と行きてお富へかじりつく。「エ、たれだえ、よしなさんせ。」藤八「ア、これ喧しういふまい、俺ぢや／＼。」トいふを振切り突き退けて、お富「藤八樣、お前今まで何所にお出でだえ。」藤八「最前の強請の騷ぎ、臺所へ逃げ込んだ其の中に、多左衞門殿は戻られるし、歸るには歸られず、今まで忍んで爰に居た。」お富「家ではお店から迎へが來る。大層店が忙がしい樣子、惡じやれをせずと歸りなさんせ。サア／＼早くお歸り／＼。」ト遂ひ立てるを藤八とめて、藤八「これは又お前でもないぞえ、お富樣。最前お福殿を賴んで、佃長へ酒肴を誂へて、多左衞門殿の留守事に、お前に一つ上げようと思つた所へ、強請めがうせた故、ちや／＼無茶句。下女のお福は強請の騷ぎで驚いた所をば脅しかけ、法を以て宿へ泊りがけに遣つたれば、多左衞門殿は店へ泊り、今夜は私が爰へ、最前の樣な惡い奴のうせぬ樣留守番して、お前とさしで一つ飲み樂しむ積りぢや。これお富

お店の權助どの。」多左「騷々しい靜かにいへ。」權助「サァお聞きなされませ。今店へ何處やらか、立派なお屋敷の奧樣といふ樣なお女中と、男の侍が參りましたよ。」多左「何を此奴いひをるぞ。女の奧樣男の侍はしれてゐるワエ。」權助「サア／＼そのお人が四五年前に入つた質物の事で、內々聞き合はせたい事があつて、是非々々家の旦那にお目に懸りたいと申しますが、どうも大旦那の御隱居所、笹目が谷は遠方なり、また藤八さんは今以てお戻りなされぬから、そこで貴方を呼びに參りました。」多左「ハテ三四年あとの質物とは、ム、何所のお邸から御座つたか。」權助「それからまだ今一つ用がござります。梶原樣のお邸から、明朝までに爲替の金がお入用、六百兩持つて來る樣にと、さつき申して參りました。」多左「梶原樣から御用が出たか。」權助「私が思ふには、おほかた若殿の源太樣が梅が枝の身請の金と、鎧の遣繰に御入用かと思ひまする。」多左「何を馬鹿な。何にしても行かずばなるまい。」お富「それではあなた、この儘に又お店へお出でなさるのかえ。」多左「モウかれこれ四つにもならう、どうで用が片づくと、戻るには遲くなる。今夜は店へ泊るから、戸じまりをして寐るが可いワ」權助「しかし大番頭さんを呼びにくるには、チト不印な役廻りだ。」お富「又其の樣な事をいはずとも、隨分途中を氣を注けて。」多左「そんならお富。」お富「旦那さん。」多左「明日逢ふワ。」ト權助提灯をつけ先へ立ち、多左衞門へ科あつて橋懸りへ入る。お富思入あつて門口を締める。ホツと思入。時の鐘

れなら木更津で、水に溺れて死んだなら、この恥辱を見まいと思ひ、それで私は。」ト驅け出すをよろしく止めて、多左「コレ何を短氣なそんな事を、手前を殺してすむ事なら、船から揚げた其の後に、此の鎌倉へ連れて戻り、疵養生から後々の、肥立つ樣にと醫者よ藥と丹精をするものかえ。今戻つた與三郎が、譬へばお主が兄にもせよ、又夫なら猶以て、この儘添はせて遣る意。おほ方こんな事が有らうと、推量したのは今日の日まで。コリヤ今戻つた與三郎が、生脈たゞしい人ならば、後ともいはずあの人に、お主が身の上も埒明けるが、何をいつても今見た始末。向疵とか切られとか、世間で風聞のある身の上、其の心底をとつくりと見屆けた上、又どうか爲樣模樣もある程に、短氣を出さずに落著いて、俺に任せて此の家に、時節を待つて居やれといふに。」トお富へよろしく思入あつていふ。お富もこなしあつて、お富「それ程までに。おまへの心は嬉しいが、今まで私が此の身をば、任せたといふ譯でもなし。よしみもない私をば、左程に思つて下さんすお前の心根、いうて聞かせて下さんせいなア。」多左「それは今いはれねえ。マア〳〵お主が身體をどうなりと、納まりのつく其の時には、悉しく話して聞かせるから、案じるには及ばねえ。」お富「それ程におつしやるなら、時節を待つて居ようワイなア。」ト思入。此の内にやはり新内の合方、時の鐘になり權助提灯をさげ、以前の男にて橋がゝりより足早に出て來り、慌急しく門口を開けて、權助「御隱居さま急用でござります。」お富「オ、

の金を持つて歸つてやらう。」多左「ム、そんなら俺が詞に任せて。」與三郎「サア縱ひ今夜は歸つても、お富が身體はこれぎりにはすまねえよ。」ト お富へ思入あつていふ。蝙蝠安「ハテそれは知れた事だ、そんなに駄目を押さずと早く歸らつし〳〵。」ト 多左衛門へ思入あつて、「こりやモウ大きにお喧しうござりました。サ歸らつし〳〵。」ト 無理に迫き立てる。門口へ出る。與三郎捨白にて門口へ出て思入あつて、内を見まはし、與三郎「併しなア、歸つた後は差對ひ。」蝙蝠安「へゝやきやァがるな。」與三郎「よしてくれ、そんなぢやねえワエ。」ト 是れを誂へ新内節の合方になり、科あつて花道へ行きかけ、思入あつて、蝙蝠安へ一寸囁き、懐より金を出し蝙蝠安へ遣り、行けといふ科、蝙蝠安呑込み向うへ入る。與三郎思入あつて引返し、下手の路次口へ入る。お富科あつてそれと立ち上る故、多左衛門宜しくとめて、多左「これきつさうして驅け出すのは、あの與三郎が跡を慕つて行くのか。」お富「エ。」ト 閊へる。多左「さうでなくば何ゆゑに。」お富「わたしやお前に面目なさに。」多左「なに面目ねえ。べら棒な、そんな事は取り措いてマア爰へ來やれといふに。」お富「それぢやというて。」多左「ハテマア此所へ來やれといふに。」お富「アイ。」トこなしあつて多左衛門のそばへ來る。多左「さうしてお主やァ面目ないといつて、どうする積りだ。」お富「さァお前に命を助けられ、三年この方此の通り、何不足なく養うて下さんす其の中へ、今の樣な人が來て、又もお前に苦勞をかけ、それを見てゐる私がつらさ。いつそ是

事、併し此の譯は今日はいふまい。何かは措いて爰に金が凡そ十四五兩、是れを此方に進ぜるから、是れで當分どうかして、堅氣になつて商賣を始めた上、定めて親御もあらうから、此の末共に苦勞をば、かけない樣にさつしやるが可うござる。サア左に右に此の金をもつて、今夜は術よく歸らつしやい。」ト件の金を出す。與三郎見て、與三郎「それぢやァ妹のこのお富を、こゝへ引上げておくかはり、此の金をもつて歸れとか、何のたつた是ればかりの。こりやァお返し申しやす。」ト前へおく。蝙蝠安こなしあつて、蝙蝠安「これさ〳〵與三公、そりやァ何をいふのだ、今旦那がいはつしやるのは、お富をつれて行きたけりやァ遣らうといはつしやるぢやァねえか。併し今夜ォイそれと行かねえから、そこで此の金だらう、ノソレよしか、マア此の金を持つて今夜は歸らつし。」與三郎「エ、よせ〳〵、これ許りの金でどうなるものか。」蝙蝠安「これさ分らねえ、手切とか足切とかいつて、判證文の取りかはせする譯ぢやァあるまいし、いはば十四五兩無證據の。イヤサ無商賣のお主の事だ。マァ〳〵金をもつて、エ、是れを資本にして。ナよしか、又どうでもなる事だワな。」トよろしく執りなす思入。與三郎も科あつて、與三郎「いゝワエわかつた、お主もそんなにいふものだ。今夜は是れを持つて歸らうよ。」蝙蝠安「それが可い〳〵、サア〳〵行かつし〳〵。」與三郎「これさ待ちやれな。」ト多左衛門へ對ひ科あつて、「俺が方には言分こそあれ、何にも恩情うける事のねえ俺だが、手前が段々譯をいふから、俺は此

く出てさし俯き「へイ誠にお久しうござります。お目にかゝりますも面目ないわけでござります。」ト色々こなし。多左「これ安、手前マア何と思つて爰へ來た。汝が親父の甚兵衛は、永らく俺が店へ出入して、それで渡世する身分なれども、手前はよくせきに甚兵衛も見限つてか、十八の時其方を勘當、モウ運上して心をば治さうとはしないで、たうとう今の其の身すがら、蝙蝠安と世間でいはれ、忌み嫌はれるを幸ひに、所々方々を强請り歩き、其の根性を改さねえと、疊の上ぢやア死なれないぞよ。門口の坂に書いてある山形に丸は俺がしるしだワ、それを見忘れては濟むまいが。」蝙蝠安「へイ／＼イヤモ面目次第もござりませぬ。」トもぢ／＼科。與三郎こなし有つて、與三郎「何だ／＼俺を待つてと止めておいて、安にぐづ／＼いふにやア及ばねえ。俺が方の方はどうするのだ。」多左「その譯を今つける。」ト此の内紙入の中より金入を出し、中より小判小粒南鐐など大分、鼻紙の上へ明けて、一寸數を概畧に見るこなしあつて、「サア與三郎殿、こなたもお富が兒だといはつしやるからは、他人と思はないから言ふのだが、見ればまだ年は若し、元より賤しい人の兒とは、どうやら見えぬ棲はづれ。それに見りやア顔は元より、總身へすさまじい刃物の疵。又過ぎし頃、このお富を助けた時、やつぱり身中に刀疵、それといひ是れといひ、何か譯のある事だらう。併し此許の妹ゆゑ、たつて連れて行きたいと云はつしやれば、隨分此方に遣りもせうが、今日まで爰へ養つて置くには、思ふ仔細が有つての

めから俺が推量通り。しかし何とそつちでいはうとも、お富を爰に斯うしておくも、氣障な事のない譯は、お富が心を聞いて見りやァ知れる事だが、よもやお富も此の俺に、假に一度も枕をかはし、添寢をしたとはいはれまい。」トお富へ科あつて與三郎を見かへり「しかし斯ういつても緣者の證據、こなたの方では疑つて、彼是いふのは、いはずと知れたお富が爲には。」與三郎「オ、知れた事だ、俺が爲には。」といひかけるを、此の中お富こなしあつていひ消す心にてとめて、お富「ア、これ兄さん〳〵。」與三郎「ナニ兄だ、エ、そりや何を。」お富「アイ兄さん〳〵。兄さんでござんすワイなア。」ト思入あつて、與三郎へ呑みこませる心意氣にていふ。多左「ム、そんなら此方はお富の兄貴か。」與三郎「アイ。取りわけて義理のあるお富が兄に、與三郎切られと仇名のつく野郎サ。」多左「ハテ可い兄を持つて幸福だワエ。」トお富へ思入。與三郎お富へ科あつて、與三郎「これお富、汝やァ遮に無に兄さんごかしに言ひすくめるが、兄といはれりやァ親同然、お主が體は俺が自由、この納まりはどうつける。」お富「アイ其の納まりは。」トいひかけるを、多左「イヤ俺がつける。コウ兄貴、すこし待つて下され。」與三郎「はやくしておくんなせえ。」ト居ずまふ。多左衞門、蝙蝠安へこなしあつて、多左「そつちの男、こゝへ出さつせえ。」蝙蝠安「ハイ。」トもぢ〳〵してゐる。多左「これ手前は安ぢやァねえか、こゝへ出ねえか。」ト蝙蝠安やはりもぢ〳〵してゐる。「これ安、こつちへ出ろといへば。」ト合方。蝙蝠安「ヘイ、。」ト據な

るが、それから後が氣にくはねえ。お前も見りやァ店勤め、大所の番頭さん、妻さんといつても無え樣子。どうやらお富と差向ひ、是れから後はいはねえでも知れたもんだ。女も女だ、默つて居るのは時につれ、番頭さんの襟につき、此の俺をば突出しものに仕やァがるかエ。どいつも此奴も性根をすゑて挨拶をしやァがれ、何の馬鹿な面な。」トどつかり坐る。お富此のうち立ちかゝつて、お富「エ、これお前もマァ、先刻から私が默つてゐれば聲高に、モシ近所の手前もござんすワイなァ。」與三郎「何を吐しやァがるのだえ、近所どころか事によりやァ、此の人の主人の所へねぢ込んで、此の譯をつけるのだ。」お富「そりやマお前のいふ所は分つてゐるけれど、今旦那がおつしやる通り、其の時私は死ぬ所を、不思議な事で助けられ、身内の疵から色々と、介抱受けた命の親、その恩を仇にして、なんぼ私でも濟まぬワイなァ。ちつとは憂世の人情を察してくれたが可いワイなァ。」與三郎「何だ、人情を察してくれろい。へ、エべら棒め、人情を察しるも事によるワエ、命の親が氣にくはねえ。命の親だ／＼と吐すからは、どんな事をするかも知れねえ、安やい、さうぢやァねえか。」お富「やつぱりまだそんな事、さつきもあれ程いふ通り、主に限つて是れ程でも。」トいひかけるを被せかけて、與三郎「エ、よしやァがれ。」お富「これマァ靜かに。」ト取りさへ宥めるこゝろ、多左衛門これを聞いて、多左「これこれお富、うつちやつておけ。先刻から此の男がいふのは一々尤もだ、なんにもいふには及ばねえ。始

した。」與三郎「ハテ今お前が推量の通り、私はお富の身寄の者、足かけ三年居所が知れぬゆゑ打絶えたが、通りかゝつたこの新道、見れば立派なしまうた屋、言はずと知れた圍ひ者、よく〳〵見れば此の女、少と此方に色々と、込入つた譯のある女、どうした譯で爰に居やす、誰が世話をやきやした、何處へ斷つて此の家へ圍つてはおかつしやる。サアト斯ういふのは本筋だが、何か此奴がお前さんにお世話にもなつたさうだ、お禮はお禮で申しやせうが、一體どういふお心で世話をやいて下さるか、そこが聞きたう御座りますよ。」ト思入あつていふ。多左衛門科あつて、多左「此の女の身寄といつて、どうで尋ねてござるからは、大方その句が出ようと思つた。お富を爰へ置く事は、なるほど誰にも斷らねえ、又世話をやいた者もねえ。樣子を聞いたか知らないが、丁度足かけ四年前、魚油の仕入に安房上總、銚子へ乘つ越す漁船へ便船して急ぐ道、浪に漂ふ一人の女、海賊にでも出遇うたのか、但し身投か助けんと、引き揚げて見れば身内の疵。此奴は唯事ではねえと、心づけども仕樣もなく、船へ揚げたで氣が緩み、息が絶えたを其の儘に、海へ萬更又流すは、不便と思づて色々と、手當をする中よみがへり、本腹した後譯を聞けば、仔細を包むお富が樣子。元より身寄の者はねえと、さつぱりいふから此の家に、昨日今日だと思ふ中、月日の經つは早いものさなウ。」トこなし。與三郎「なる程そこは分りやした。其の時助けて下された御深切は有り難い、そこはお禮を申しやす。お忝うござります

に丁稚つき添ひ出て來り、門口へ來て内の樣子を窺ひ、丁稚に囁き、多左衞門丁稚に戾れといふこなし、是れにて丁稚ひつかへし入る。此の途端に多左衞門此の時内へ入る。多左衞門「イヤ　お富が口から聞かうより、わしがいつて聞かせませう。」ト是れを聞き與三郎蝙蝠安見て、蝙蝠安「ヤさういふお前は。」與三郎「お富さんの旦那かえ。」ト兩人顏見合はせ居ずまふ。多左衞門二重へなほる。お富よろしく科。お富「ホンニお前は旦那さん、今日はお仲間の參會ゆゑ、まだお戾りには閒が有らうと思ひましたに、いつよりはお早うござりましたなア。」ト何氣なき體、湯吞へ鐵瓶の湯をつぎゆかりを入れ多左衞門へ出す。多左「サア今日は仲閒の衆も呑人も少ない故、思ひの外はやく濟んだが、さうして此の衆はお主の身寄か、近附か。」ト何氣なく聞く。お富科あつて、お富「近附もあり身寄もあり、打絕えて居たものを、今宵俄に訪ねて來られ、深切に世話して下さんすお前の思はく、恥かしうござんす。」多左「何の恥かしい事があるものか。人の浮沈は色々だ、何處にどんな所緣かゝりが有らうも知れねえワ。」ト莨のみながら與三郎蝙蝠安の方を見やり、蝙蝠安、多左衞門を見て少し悄氣て顏を背ける事。與三郎、蝙蝠安へ手前口ひらきを言へと思入、蝙蝠安は與三郎に言へといふこなしある。「モシお前方はどうでこゝへ來るからは、何か用がありませう、用から先に聞きませうよ。」ト與三郎こなし有つて前へ出、與三郎「其の用といつて外の事ぢやァござりません、爰に居るお富が事さ。」多左「このお富がどうしま

または手ぎれと下素ばるか、おれが面を立てにやァ措かねえ。」トきつとこなし。蝙蝠安うなづいて、蝙蝠安「違ひなし、そいつが極だ。おぬしやァお富故に手ひどい仕置も、滿足な身體ばかりか、其の面へ受けた三筋の刀疵、俺も名代の蝙蝠安、三筋に蝙蝠は遁れねえ中だ。これからは俺も手傳ふのだ。」ト是れまで藤八始終の樣子聞く度に驚く思入、可笑味いろ〳〵あつて慄へゐる。此の時密と二枚折の屛風の影より顏を出す。與三郎見て、與三郎「先刻からまじ〳〵として居やァがる此奴が、お富を世話をする野郎めの慥かに友達だ。」蝙蝠安「ム、よい所へ氣が注いた。」ト藤八たまりかね逃げうとするを引捉へて、「手前は何處の奉公人だ。」與三郎「お富は誰が世話をする。」兩人「それをいへ〳〵。」ト色々こづく。藤八「否々私は知らぬぞ、其の樣な事は知らぬ〳〵。コリヤマァ情ない目に逢ふ事だ、ア、桑原桑原。」蝙蝠安「言はなけりやァ酷いぞ、サア早くいへ〳〵。」ト藤八を捉へ胸ぐらをしめる、藤八苦しむ。藤八「ア、切ない〳〵、許して下さい、いひます〳〵。」與三郎「コウ〳〵安や、言ふといふから緩めてやれ緩めてやれ。」蝙蝠安「サア緩めて遣るから有體にいへ〳〵。」藤八「斯うなるからは有體にいはいで、いはいでどうせう、ありや私が勤めて居る所の丁稚だ。」兩人「何だべら棒め、何をぬかしやァがる。」藤八「イヤサ一番番頭でござりますよ。」トいひながら狼狽へ逃げて入る。與三郎「何だ狼狽へて逃ぎやァがつたな。サア是れからは手前が對手だ、有體にいつて終へ。」ト詰め寄る。此の以前より多左衞門先

ねど、湊から海の深みへ捨つる身も、漂ふ浪の夢現、漕ぎ行く船へ引き上げられ、藥よ醫者よと手厚い介抱、其のお蔭にや甦り、今は斯うして居るものの、圍はれ女とは表向、枕かはすは扨おいて、色めいた事はこれ程もなく、今日まで暮すその中も、此の家の留守を預つて、女の役の針仕事、勤め著替の繕直し、樂すぎるだけ生中に、心苦しう今日明日と、過ぐる月日も三年越、義理に迫つて暮す内、お前は此の世にござんすか、但しは其の時死なしやんしたか、便り聞かねば逢ひ初めて、枕かはせた其の日をば、お前の命日忌日ぞと、忘れる暇はないものを、今の樣なる怨み言、そりや聞えぬ胴慾ぢや、聞えぬワイなア。」トお富思入あつていふ。與三郎煙草のみゐて、與三郎「いい加減にやすめろえエ。半死半生でゐるものを、醫師よ藥よと手當をして、やう／＼達者な身體にして、斯の通り圍つて置く、誰がたゞおく奴があるものかえ。ナア安や、さうぢやァねえか。」蝙蝠安「違へねえ／＼。今お主がいふ通り、此の美しい代物を、金にはあかして療治をした其の上で、こんな家へ圍つて置き、唯遊ばせて喰はせて置く、そんな奇特を箆棒が、今時に何あるものか、そこは何だか分るものかな。お主も此の女故にやァ偉大しい苦勞して今の身の上、切られ與三郎とか謂はれるからだ、俺も又蝙蝠安だ、モウ打つちやつてはおかれねえぜ。お主はどうする積りだ。」與三郎「知れた事よ、居所の知れたが幸ひだ。今此奴を世話をして居る野郎をば捕まへて、其の筋を立つた上、お富を俺が女房にするか、

も三年越、江戸の親には勘當受け、據所なく鎌倉の、谷七郷は喰ひ詰めても、面へ受けたる看板の、疵が勿怪の幸ひに、切られ與三と異名をとり、押借強請も習ふより、慣れる時代の源氏店、そのしらばける黒塀に、格子造の圍ひ女、死んだと思つたお富とは、お釋迦樣でも氣はつくめえ、よくもお主は達者で居たなァ。安やァイ、これぢやァ一分ぢやァ歸れめえぢやねえか。」蝙蝠安「なる程こいつは一分ぢやァ歸られねえワエ。」與三郎「コレ木更津に居たその時は、其方も亭主のある身體、それと知りつつうつかりと、はまり込んだは此方も不覺、其のかはりにマァ此のとほり。」ト身體の疵へよろしくこなし有つて、「身に過りがあればこそ、ぢつと蟄して居るを見て、源左衞門めが非道の手込、殺しもやらず斬り苛責む、其の俤は此の疵だワ。手前も其の時海松杭に追詰められた木更津から、海へ濟然飛び込んだと、聞いたる時の俺が心、今に忘れず思ひ出し、心で念佛を申して居たに、汝やァ其の場を逃げのびて、命を助かり斯うした態は何の事だ。それぢやァ濟むめえ〳〵が、エ、。」トお富の胸倉を取り、色々思入あつて、「サァ誰の世話で爰にゐるのだ。今聞きやァ立派な亭主があると云つたが、亭主は誰だ、何處の誰奴だそれを吐せ、それをいへ、きり〳〵ぬかしやァがれ、エ、。」ト思入。お富この内ぢつと科あつて、お富「エ、モ靜かにおしな、マァ私がいふ事もとつくり聞いた其のうへで、どうなとしたが可いワイなァ。」與三郎「いふ事があるなら早くいへ。」お富「私も其の時ながらへる心なら

退る。蝙蝠安「ナニ篦棒め、ぐづ〳〵吐しやァがると擲きなぐるぞ。」藤八「ヤア引。」ト藤八恐れる科あつてよろしく控へる。蝙蝠安よろしく捨白あつてきつとなる。お富こなしあつて、お富「かうあんまり騒いでおくれでないよ、近所鄰へ恰好がわるいワな。静かにおしな、私にも歴然とした主のある體、何もおつう厭味をいはれる譯はないが、彼これと面倒だ。」ト莨箱の引出より一分銀を出し紙に捻り、「サア是れを持つてお歸り。」蝙蝠安「それだから先刻から、此方はお妻さんに頼み申すのだ。それに彌次馬に出やァがつて、何だ其の面ァ。」ト藤八へ思入しながら、右の金を與三郎の方へこなしあつて、「オイ兄イ聞いたか。お妻さんは流石に苦勞人だ、あの通り段々いひなさるものだから、是れをお貰ひ申して行かうぢやァねえか。」トちよつと見せる。與三郎へ思入。與三郎「よせ〳〵けへしてしまへ。」蝙蝠安「エ、。それでもあんなに譯をいふものだから。」ト合點の行かぬ思入。與三郎「返して仕舞へといふ事よ。」蝙蝠安「そんなら是れでも少ねえからか。」與三郎「そりやァサ、たつた二百でも歸る場もあり、百兩もらつても歸られねえ場所もあらァ。サァ俺が掛合ふのを、そつちの方で見て居ねえ。モシお富、イヤサお富さん、コレお富、久しぶりだなァ。」ト手拭をとる。お富「エ、さうしてお前は。」與三郎「與三郎だよ。おぬしやァ俺を見忘れたか。」お富「エ、エ。」ト惘れる思入、藤八慄へる。蝙蝠安こなし。誂への合方。與三郎「しがない戀の情が仇、命の綱の斷れたのを、どう取留めてか木更津から、廻る月日

にもお前方につけこまれて、無心をいはれる覺えはござんせぬワイなア。」蝙蝠安「そりやァ被仰るまでもなく、これが天秤棒を肩へかけて、一貫の資本で四百儲けるといふ、しがねえ暮しの所なら、こんな事もいつちやァ來やせんが、マァお前さんなんぞは年が年中お蠶ぐるみで居なさるお前さんだ。モシたんとの事ぢやァござりやせん、どうかしてやつておくんなせえ。モシ一服貸しておくんなせえやし。」トこの内よろしく藤八思入あつて、此のとき中へ入り、藤八「最前から私も默つて是れに居つたが、何をいふにも主人の留守、どうも仕樣のない事ぢや。所で儂が扱ひぢや、甚だ輕少ではあるけれど、こりや儕が心許り。マァ〱是れを取つて今日は不承して歸らつしやれ。」ト紙入より當百一枚出し鼻紙に包み、蝙蝠安に出す。蝙蝠安「コリヤ有り難うござりまする。」ト手に取り捻くつて見て、「これ見や、草鞋錢がたつた百だ。モシ有り難うござりますが、こりやァお返し申します。」藤八「ム、そんなら其の錢は要らぬのか。」蝙蝠安「いらないから返すのよ、大の男が二人來て、是れを薪にしても一貫や二貫の代物はあるワ、それに何だ。たつた百とは餘り人を唐變木にするなえ、べら棒め。年が年中お蠶ぐるみの身で居やァがつて、重い物と云つたら箸か煙管。枕の下へ手を入れりやァ、いふ日の出るお前のからだ、それだから貰ひに來たのだ。それに何だたつた百許り。扱ひだも凄まじい。そつちの方へすつ込んでうしやァがれ。」藤八「お富さん、こりや偉う難かしくなつて來たぞえ。」ト跡へひき

ぢやァごぜえますが、又少々お願ひがあつて參りました。」　お富「又お前そんな事を云つて、此の間もあれ程譯をいつてあげたではござんせぬか。殊に緣もゆかりもないお前、そんな形をして度々來られては、近所の前もあり、誠に此方では迷惑でござんすワイな。」　蝙蝠安「そりやァモウお前さんのおつしやる通り、參られた義理ぢやァごぜいやせんが、この間モシわつちらが友達が喧嘩をして、大きな怪我をしました。そこでマァわつち等が寄つて世話をして、湯治にでも遣らうと思ひますが、御覽なさる通りの始末だから、御近所を少々づゝお願ひ申しまする積りで。」トいひながら立つて門口へこなしあつて、「與三や、こつちへ入りやな。モシ此の野郎でごぜえます、何分お頼み申します。これお禮申せお禮申せ。」ト此の内與三郎手拭を被りしまゝ内へ入り、下手へ小さく畏まりゐる。　與三郎「そりやァ大きに有り難うござります。」ト思入。　お富「何の事かと思つたら其の事でござんすか、折角のお頼みではござんすけれど、今日は生憎と旦那も留守なり、さう度々は私にもし難いに依つて、マァ今日はお斷り申しまする。」　蝙蝠安「モシさうおつしやつちやァ物がねえ。縱ひ旦那がお留守であらうとも、隨分わからうと思ふ筋があればこそ、來たのでござりやす。モシたんとの事ぢやァござりやせん、どうかして遣つておくんなせえな。」　お富「モシ今聞いてゐれば、おつに絡んだ物のいひやう。何も私の所で隱賣女や勝負事の宿をしたといふではなし、なにも後暗い事はござんせぬ。しらこの町家の住居、な

やんすなら、早う戻つて下さんせ。」トぢつと腹立つ思入。藤八「何ぢや戻れえ、それでもお前がマア茶がはひるから、寛りとして行けといふたぢやないかいの。」トこなし。お富ひよんな事いひしと思入。「ア、思へば是れが浮世の習ひ、一つ旦那へ奉公はして居れど、多左衛門殿は働き者とはいふ物の、よくせきに果報者なればこそ、お富さんの樣な女子に思はれ、それを自由に寵愛してござるとは、よくよくよい月日の下に生まれたと見えるワエ。ア、羨ましい事ぢやなア。」トこんな事いひながら段々側へよる。お富迷惑なる科よろしく、右の合方、時の鐘。この内向うより蝙蝠安先に、跡より向疵の與三郎、頰被好みの形にて出て來り、花道にて科あつて、與三郎「蝙蝠や、手前が此の間行つたといふは向方の家か。」蝙蝠安「さうよ、隨分わかりの可い家だ、行て見や。」與三郎「さうして今日はどうするのだ。」蝙蝠安「ナニ今日は小遣取りをするつもりだ。マア俺が先へ行くから、手前門口に待つて居やナ。」トこんな事をいひながら門口へ來て、俺が先へ入つて段どつておいて、それから呼び込むから其處に待つてゐや。」與三郎「ム、よし〳〵。」ト思入。蝙蝠安門口をあけて、蝙蝠安「へイ眞平御免なせえ。モシ御免なされませ。」トいふ。お富こなし有つて、お富「アイどなたでござんすえ、こつちへお入りなさんせ。」蝙蝠安「へイ眞平御免なされい。」ト内へ入り、「お新造さん、此の間は大きに御厄介になりました、有り難うござります。」お富「お前は日外のお方、何でござんしたえ。」蝙蝠安「へイちつと申し兼ねた事

一つ鼻紙へくるみ、外に一包拵へる事、此の内雨車やむ。下女「ドレ私は傘を一寸戻して參ります。」ト立ちかけるを、藤八下女を引きとめ、二朱の包を出し下手にて遣る事。「イエこんな事は。」ト捨白の樣に斷ること。藤八「ハテマアよいワイの。」ト仕方でよろしく一つの包を出し、酒肴いひつける心にて囁く故、廢せと下女手にて仕形する。藤八、ハテ行けといふ心意氣よろしく、下女是非なく、下女「ドレ傘を戻して參りませうか。」ト傘を持ち下手へ入る事。お富これに心づかず、此の内に身仕舞して終ふ事、鏡臺を片寄せて、お富「お前さん一人捨てて置いて、身仕舞して居りました故、お構ひも申しませぬ。モシ藤八さん、堪忍して下さんせえ。」藤八「なんの〳〵心おきなく何なりともさつしやりませ、こちらも遠慮なしに煮花をば御馳走になりましたが。ア、大層によい茶だゆゑ、どうやら浮されて今夜はどうか寐られぬ樣だワエ。」お富「お前さん、うかされなさんしたら、何處やらで嘸嬉しがる女中さんがござりませうねえ。」藤八「アハヽヽヽ、よしてもおくれぢや、お富さんおだてさつしやんな。」ト科あつて少しすり寄り、「イヤ先刻風呂から戻らんした其の時も、綺麗な物ぢやと思つたら、今また身仕舞をさつしやたら、又格別に美しいものぢやなア。」お富「エ、モよして下さんせ。」藤八「ハテ廢せというてどう廢されるものぢや。ア、誰に見しよと紅かねつきよぞ、みんな主への心中だて。とは有り難い。」ト好みの合方、思入ある。お富心いきあつて、お富「ア、モシ藤八樣、そんな事いはし

樣子。所で私が呑みこんで、をり〳〵は行きなされ〳〵と勸める樣にして、此方へ泊りにおこしまする。モシ女中衆、あんな固い人でも此方へ泊りに御座つて、お富さんと睦言の癡話などといふやうな事がござりまするかな。」下女「オホヽヽヽ、どうで御座りまするか、そんな事は知りませぬワイなア。」藤八「所で私が多左衞門殿にいふには、ア、してお富さんを内密ものにしておかうよりは、表向御内儀の弘めをしてはどうぢやというたれば、否あれはチト仔細あつて三年以前田舍より連れて戻つたが、私が女房にするといふ譯にも行かぬ者なれば、何處か相應な所があらば、片づけて遣りたいと、この樣にいうてで有つたが、どうも一圓合點が行かぬて、併しマアお富さんが何所へ緣づかうと、眞實思ふ料簡なら、隨分そりやア爰等あたりにも、望人はないでもないが、斯うやつて世話をして置きながら、今さら餘所へ遣らうとは、多左衞門殿の料簡が分らぬて。」ト考へるこなし。お富「ホンニさうで御座んす、私もかうして三年越、深いお世話になつてはゐれど、ほんの牀の間の置物同然でござりますワ。」藤八「ハアそれでは彌多左衞門殿の詞が本當かしらぬて。」と思入。この時下女茶を汲み持ち出て、下女「ハイお茶が入りました。」ト湯呑の茶をお富のわきへそつと置き、藤八へ茶を出して、「お煮花が出來ました。お一つお上りなされませ。」藤八「ア、これこんなお世話になる事なら、何ぞお土産でも持つて來ねばならぬのぢや。アノ鈍な事してのけたワエ。」ト思入あつて此の内紙入より一寸二朱金

れは御内室お世話になりました。」トもじ〳〵立ちかける故、お富「ア、申し、マァお待ちなされませ、珍らしい貴方のお出で。今折角お茶の支度も致しました、マァ一つお上りなされませ。其のまゝにお歸し申しては、宅で戻ると私が叱られまする。」藤八「ア、モシ滅相な、お前さんを叱らせては私がすみませぬ故。そんなら折角のお志、お煮花を一つ下されませうか。ハヽ、併しマァお前を叱らすまいとて私が長居して、却つて多左衛門殿に私が叱られうも知れぬワエ。」下女「是れはしたり、内の旦那は其のやうな事には頓とお構ひはござりませぬ、誠に粋なお氣質でござりまするワイなア。」藤八「サア其の粋な多左衛門殿なればこそ、斯うした粋なお富さんを世話をしておかつしやるてな。とはいへ女子二人の所へ、私らが樣な男が一人永居して居るのは、譬へにもいふ猫に鰹節。」お富「エエ。」ト科。藤八「鰹節は本土佐ぢやが、肝心の此方がどら猫かも知れぬワイの。」ト思入あつていふ。是れにてお富身じまひしながら、おもはず笑ひ、お富「ホヽヽヽ。ほんに可笑しい藤八さんぢやワイな。」トいひながら顔をしてゐる。此の内下女茶を入れること。藤八「イヤ又店向の格式などいふものは堅いもので、まづお前方も定めてお聞き及びでもあらうが、私共の大旦那は三年跡から、笹目が谷の別莊へ隱居さつしやれて、店はこつちの多左衛門殿を始め、私等が預つて居る故に、猶々固くせにやならぬぢや。併し多左衛門殿には別して固いお人故、斯うした休息所はありながらも、滅多にはござらぬ

本舞臺三間常足大坂づち下地窓の欄間、上の方に三尺の牀の間、是れへ續き大坂土の壁、腰張の好み、下に一間上下二段の押入、上の方中窗、同じく壁、船板の羽目、家代一面大和ぶきの廂、二重の紐、腰障子一間の家臺、前面竹の打附窗、此の前へ栗丸太好みの門口を押出し、四ッ目垣へ卯の花の盛り、海棠の臺、實木、庭の模様よろしく、二重よき所に箱火鉢、菓子箪笥、鏡臺など置き竝べある事。右の鳴物にて道具納まる。

ト下手よりお富先に藤八お福つき、件の傘を持ち出て來り、藤八「なる程、こちらが表口ぢやな、此の間は是れから參りましたゆゑ、裏口はとんと勝手が知れなんだワエ。」ト此のうちお富さきへ門口へ入り上へあがること。お福莨盆を出して、下女「サア〳〵一服おあがりなされませ。」藤八「モウ〳〵構はつしやるな〳〵」お富「コレお茶の仕度をしや。」下女「ハイ〳〵。」と立つてあかりのつきし行燈を出す。在合ふ土瓶の茶を汲み出して、「マア是れを一ツお上りなされませ。」ト在合ふ菓子箱を出す。藤八こなしにて茶をとる事。お富「モシ貴方、御免なされませ。」ト會釋して鏡臺を出し、お富髪を搔き上げ顔を直す科宜しく、この内下女お福、茶拵へする、藤八煙草のみゐる。この内下女へお富顔なほしながら指圖する事。下女「唯今すぐにお煮花が出來まする、マ一つお取りなされませ。」藤八「アヽモウモウ構はつしやりまするな。多左衞門殿は今日は爲替仲間の參會へござつて、どうで戻りは遲うござらう、其の留守へ參つて無遠慮千萬。アヽ段々雨がやみましたワエ。傘を一本お貸しなされませ。是

行くを下女お福見て、お富「ヤお前様は慥かにお店の。」下女「藤八さんでは御座んせぬかえ。」藤八「ヤお前は。オヽ大番頭の御内室ぢやな。」ト思入。下女「生憎降り出してさぞお困りなされませう。」藤八「さてさて女中方は目かどの強いワエ。私は先達多左衛門殿が家にござる其の時に、一寸爰へ來た事は來たが、この源氏店は同じ様な家ばかり故、とんと氣が注きませなんだワエ。」お富「モウ今にやみませう。御遠慮なしに少しやめてお出でなされませ。コレお伴れ申しな。」下女「さア／＼お出でなされませ。」藤八「イヤ／＼併し女中ばかりの所へまゐつてお世話になつては。」お富「なんのそんなお心づかひがござりませう。」下女「傘もお店のがまゐつて居ります。」お富「マア／＼やめてお出でなされませ。」藤八「デハお言葉に随ひませうかな。」お富「サアお入りなされませ。」ト下女お福先に立つて件の入口へ手を入れ、鐶を抜いて開をあける。藤八「ハヽア爰に入口が御座りますな。」下女「ハイ爰は裏口でござりますよ。」お富「マアお入りなされませ。」トやはり雨車、かすめて右の合方にてお富先へ入る。藤八思入あつて、後より下女お福、開より入り鐶をかける。是れにて風の音、合方かすめて雨車になり、此の道具寛やかにぶんまはす。

返し

は我等が手で盗み出し、松兵衛にも呑みこませて置いたれば、是れもよしと、此の上は邪魔になる大番頭の多左衛門めを仕舞ひつけるは。ム、、それには是れぢやて。」トこなし有つて、以前の海松杭の松五郎が手紙にくるみし毒藥包を紙入より出して、「一日外弟の海松杭めが、なにか入用だといふから、態々屆けた此の藥、又戻したが天の與へ、是れさへ用ゐれば譯はなしと。其の上彼奴が爰の宅へ圍つて置くお富とやらいふ、あの美しい中年増を、此の藤八が獨り占。それで一生の望みも足り、これが當時流行の藤八五文、奇妙ぢやてハ、、、。さう味くゆけばよいが。」ト思入。此の内かすめたる風の音、雨車をうすくあしらふ。「ヤア／＼こりや生憎ぼろついて來たワエ。いつそ爰へ入つて傘を借りようか、ア、困つたものだ。どうせうなア。」トまご／＼思入あつて手拭を出し頭へのせ、見越の枝の下にて雨を凌ぐ思入。是れを流行唄になり、向うよりお富、好みの拵へ湯上りの形、垢摺つきし手拭、糠袋を持ち、浴衣をかゝへし下女のお福つき添ひ、兩人とも駒下駄、好みの傘さしかけ戻りし體、花道より出て來る。藤八それと見て態と待ち合はせる思入。下女「申しおかみさん、此の頃の日和癖にも困るでは御座りませぬか。」お富「それでも甚い降りではあるまいよ。併し此の傘はよく禮いうて直に戻すがよいぞや。」下女「かしこまりました。」トこんな事いひながら舞臺へ來る中に藤八を見つけ、お福こなし。「アレ誰方やら雨を凌いで。」お富「どうやら見た樣なお方では。」ト此の内藤八花道の方へ

平馬「ム、頼もしく／＼、それで身共も安心だワエ。國元よりあの隼人めが女房が罷り越した時宜とい
ひ、延び／＼には相ならぬム、。」トこなし有つて囁く。「斯う致してはどうで有らう。」ト藤八聞いて、
藤八「そりや可うござります。そこでお前様にも申して置けば彼の品が。」ト又平馬へ囁き、「斯うでござ
りますぢや。」ト平馬聞いて、平馬「ム、／＼、スリヤあの香爐はとつくに貴様が質藏からちよろまかし
て。」藤八「ア、コレ。」ト又囁く。平馬「イヤ面白い／＼、さする時には其の虚に乘つて、あのお鶴めを
身共の方へ引き上げる、丁度手段の壺へはまるワエ。」藤八「それでは今宵の事にも行きますまい、何
れ貴方は私が店へ。」平馬「明日表向にて罷り出るぞ。」藤八「そこで私は店に居りませぬが、可うご
ざりますか、外の者が出て、一應の掛合致し、所で其のとき貴様では分らぬ、シテ一番番頭の藤八は
何處にあるとおつしやるをきつかけに、此の藤八が出てさら／＼と片づけますワ。」平馬「よしよ
し、手筈は萬事吞みこんだ。然らば明日參るぞよ。」藤八「宜しうござります。」ト平馬此の中立ち上る
を、「ア、モシ／＼平馬樣、唯今申した彼の一件。」平馬「ム、。シテ一番番頭の藤八は。」藤八「私が出
てさら／＼／＼。」平馬「コリヤ其のきつかけを必ず共に。」藤八「イヤ私より其許樣が。」平馬「ハテ吞み
こんで居るワエ。」ト流行唄になり橋懸りへ入る。藤八跡に殘り科、時の鐘合方。藤八「ハ、、、。ま
づ香爐の一件も、あの平馬樣が手形をばとり隕したが勿怪の幸ひ、丁度こつちの手筈の掛罠、彼の品

面目ないがとひよんな事をなされましたな、それでは先刻お渡し申した彼の香爐の書付をば。」藤八「これは又お前様も麁相千萬、どうした者でござります。」平馬「されば其方にも申した通り、先刻彼のお鶴をば見つけた時は、恥かしながら心も空、有頂天へ魂は飛び上り、直樣邸へ連れ歸り當人を引きとめし上、赤間源左衞門を以て掛合はせ、望みを叶へうとおもふ所へ。」藤八「そりや只今聞いた隼人の女房が參つた故に、邪魔となつて。」平馬「お鶴も其の儘見遁す始末、勘平ではなけれども、する事爲す事鶍の嘴。併し其の儀はどうともなるが、心ならぬは彼の書附だて、置主は麗々と身共が名を記しあれば、もしひよつと面倒な奴に拾はれては困るてな。」藤八「イヤ〳〵そりや御心配はござりませぬ。何もあれより眞鶴の香爐とぴつたり書いてありはせず、言譯はどうでもなりませう。」平馬「デモあの書附を以て、香爐を若しも餘人が質受しては、此方の手段が。」藤八「ハテ元利金二百五十兩といふ金高ゆゑ、大抵のものには、第一に其の金が出來ますまいて。」平馬「併しながら元利金二百五十兩へ右の書附を添へ、引替に香爐を受取る約束。其の書附をなくした故、身共が質請するにもせよ、其方が店で不承知を申しはせぬか。」藤八「そりや申します。大切な品を預りました手形がなくなりました故、一應は申しますが。其の時には外の者では分らぬほどに、手代の藤八に掛合はう。シテ手代藤八は何處にあると仰しやると、そこへ私が罷り出で、さら〳〵と埒明けまするワ」

お目にかけねばならぬ品が。」小笹「ナニ妾へ見せる其の品とは。」ト一札を出し、與五郎「モシ。これでござりまする。」ト小笹取つて披き見て、小笹「ム、。コリヤ一札、文面には作彫の鶴の香爐を質入なしたる預り手形。」與五郎「其の質入せし有所は、先刻遇ひしあのお鶴が縁ある家の和泉屋にて。」小笹「香爐の置主は山鹿毛平馬ム、。此の書面にて實否を糺さば。」與五郎「正しく寶の盜賊。」小笹「コレ密かに密かに。」ト兩人宜しく、此の仕組早大拍子にて道具ぶんまはす。

本舞臺三間の間、黒塀、上に忍返し、よき所へ三尺の出入口、此の上四方の板へ誂への印付け、細みの三布中暖簾、此の下へ竹の扉戸、爰より出入。此の上にも板塀切拔窗、竹の打ちつけ、内より簾をかけ、下手の見切地境路次に建仁寺垣など。黒塀の下に用水桶、是れへ雪の下源氏店と記したる所書。塀より見越の松、海棠など好みの通り。すべて妾宅裏手の模樣、爰に青竹に拵へし涼み臺据ゑてあり、中程より流行唄にて道具納まる。

ト爰に以前の和泉屋手代藤八、山鹿毛平馬の兩人立ちかゝり居て、平八「モシ平馬樣、爰は私が店の大番頭、多左衞門が休息所、御遠慮はござりませぬ。」平馬「ム、扨は貴樣が店の後見致す多左衞門とやらの妾宅かな。」藤八「マァそんなもので御座ります。」平馬「併し餘人に聞かせるも如何。」ト竹牀几を見て、「幸ひの此の店先で話さうか。」藤八「デハ是れで承りませうワエ。」ト右の牀几へかけ。「扨

く候、其のため一札依つて件の如し。月日、和泉屋手代藤八、宛名は山鹿毛平馬様へ。ム、こりやよい物を拾つたワエ。」と科あつて懐中する。合方になり上手より小笹、窺ひ〳〵出で來り、小笹「オ、そなたは先刻の與五郎殿。」與五郎「まことに貴女は小笹様、ようこそ爰へ。」ト兩人こなしあつて、小笹「コレちとこな様に尋ねたい事が、マア〳〵爰へ。」ト是れにて與五郎牀几へかける。與五郎「シテ私に御用とはえ。」小笹「最前其の場で尋ねようとは思へども、人目もあれば其の儘に、早速に聞きたいは。これ此方の外に定めし兄弟が御座らうがの。」與五郎「ハヽ、お仰せの通り私の其の外には與三郎と申しまして、なさぬ間ゆゑ、猶以て私が爲には義理ある兄、總領の事故に、親父様の名跡を相續なさると極りしを、血脈の弟の私へ義理立なさるゝお心でか、うつて變りしお身持ゆゑ、窮命の爲と木更津にござる其の中に、又候不慮の事起り、其の風聞が江戸へも聞え、程なく親父様が久離きつての御勘當。」小笹「ム、そんなら世間の噂にちがひなく、アノ與三郎殿には勘當を。」トうれへのこなし。與五郎「今は此の鎌倉に漂泊なされて御座ると聞き、お目に懸つて届くだけはお力にならうと思ひ、それ故江戸から態々と。」小笹「テモ優しい此方の心根、それに引替へ不所存者の與三郎が、其の爲にはコレ實の母でござるワイなう。」與五郎「そんならいよ〳〵お前様は、兄者人には血を分けた產の母御でござりましたか、思ひがけない此のお目見得。」ト科あつて、以前の一札を出し、「早速ながら貴女様へ

も旦那へ。」ト菟るを此の内よき程より以前の金神長吉窺ひゐて、中間を突き廻し屹と見得。中間見て、「ヤ邪魔立するな、この小僧めが。」　長吉「オ、邪魔をしたが何とした。」ト中間何をと菟るを立廻つて腕を拗上げ、「此の金神の長吉が、送つて戻るお鶴様へ、指でもさしたら料簡しねえぞ。」ト振解いて締めに來るを立廻つて引付け、「子供そばえの一文奴め、きり／＼消えてなくなれ、エヽ。」ト投出す。清八、權助「イヨ親玉。」ト賞める。中間逃げて入る。　お鶴「そんなら必ず、與五郎さま。」　與五郎「その中わしが。」　清八「ハテマア爰は。」　權助、お米「マアお出でなされませ。」ト唄になり、お鶴、お由、權助、清八も送り心にて、長吉附添ひ橋懸りへ入る。與五郎殘り、跡見送りこなしあつて、　與五郎「ア、思ひがけなき災難を、救つて下さる小笹樣は、兼て噂に聞き及ぶ兄與三郎樣の實の母上。どうやら此方が身の上も、推量なされし先刻の素振、何にしろ今日此所でお目にかゝるも盡きせぬ緣。ア、是れにつけても兄者人に、どうぞお目にかゝりたいものぢやがなア。」トこの以前、平馬がお鶴へしなだれし折、下手へ落せし手紙を拾ひ、披き見て、「ヤ、何やら手紙が。ム、心ならぬ此の文面、もしも噂の香爐をば。ム、ナニ／＼預り申す質物の事、一ツ、元金百五拾兩也、但し金の無垢作り、彫無銘鶴の香爐一ツ、右の品我等方へ相預り、書面の金子御用立申し候處、此の程御請戻しなされ候趣、然る所年月相經ち候故、元利〆金二百五十兩に相成候へば、右の金子竝に此の書面引替に、香爐相違なく御渡し申すべ

渡す。受取つて、平馬「ム、コリヤこれ紛れもなき役所の印鑑、家老中より某へ、ハテなア。」ト色々思入あつて、「たとひ如何程尋ねても、中々香爐の在所は知れまい、どうして〳〵。」小笹「その知れ難き品ゆゑに、平馬さまにお目にかゝり、何かの樣子もうけたまはり、詮議を遂げよと御家老中より。」平馬「ム、そんなら身共配慮に任せて。」小笹「御談じ申す仔細もあれば、此の場はこのまゝ御同道を。」平馬「ハテ二人の奴等を見す〳〵こゝに。」小笹「ハテ何であらうと主命なれば。」主水「一まづ屋敷へお供を致して。」平馬「とはいふものの。」ト一寸立ちかゝるを、小笹「ハテマアお出でなされませ。」ト唄になり、平馬ぢつと思入、小笹こなし、皆々小笹へ禮をいふ心いき、主水之正附添ひ上の方へ入る。荷擔ぎの男は此の前に入る事。與五郎「オ、思ひがけなき今の災難。」お鶴「小笹樣のおかげにて、納まるのみか憎らしい平馬づら。」お米、兩人「よい氣味であつたワイなア。」淸八「ア、これ〳〵壁に耳、滅多な事を謂つては惡い。」權助「又災難のない中に。」與五郎「お鶴殿にはマ、爰を。」お鶴「とはいへ貴方に今爰で、お目にかゝつてそれなりに。」淸八「ハテそれは私がこの女中へ。」お米「御約束まうしたれば。」權助「わつちも共々手引して。」お米、三人「お願ひは叶へまする。」與五郎「サア少しも早う。」ト是れにて皆々立ち上る。捨白宜しく。此の時中通り一人、紺看板の中間の形にて窺ひよつて、中間「女め汝を。」トお鶴へ蒐るを權助止めて、權助「ヤお鶴さんへ手をさへるは。」皆々「扨は今の侍が。」中間「オ、如何に

事ない、畢竟二人が許嫁、親と親とが許したなどとは、今となつて彼奴等が言拔け、身共の方が先から執心。」小笹「しからば其の時親元から、貴方へなんぞ確と致した證據ばし御座りまするか。」平馬「サア證據といふては。」小笹「證據がなければ水掛論、それでも不義とおつしやるか。」平馬「サアそれは。」小笹「たゞしは貴方が不義ものか。」平馬「サアそれは。」小笹「サア。」兩人「サア〳〵〳〵。」平馬「うぬ。」ト與五郎へ拔きかけるを小笹宜しくとめて、小笹「アイヤそこを荒だて言はぬが花、往來も繁き此の境内、マア何事もこれなりに。」トよろしく科あつて、「御料簡遊ばしませ。」ト思入。平馬「よいワ、女の事は此の儘に許してくれるワ。」お鶴「エ、有り難い、是れといふも貴方がこれへお出でなされしばつかりに。」與五郎「無事に納まる此の場の一埒。」五人「エ、有り難うござりまする。」ト皆々小笹へこなし。平馬小笹へ思入して、平馬「其許が事をわけ扱ふ上は、彼等が事は許し遣はす。さりながら其許の夫穗積隼人を始めとして、重き咎めを受けながら、何故あつて此の鎌倉へござつた。」小笹「サア其の仔細と申しまするは、殿の御内意承り、紛失なしたる香爐の詮議の爲にわざ〳〵是れへ。」平馬「ナニ香爐の詮議とは。」ト科、此の内主水之正、書狀の筥より封〆狀を出し、主水「慥かな證據はこの如く、御家老職より其許さまへこの添翰。」ト平馬へさし出し見せる。平馬「ナニ某へム、。ハテなア。」トこなし。主人「卽ちこれなる小笹樣へ殿の御内意あつたる證跡。イザ御落手下されい。」ト右の封狀を平馬へ

やチト御成敗が違ひませう。」平馬「どうしたと。」小笹「たとひ此の娘御を御所望あつて、御内室になさらうとおぼし召すとも、そりや貴方の手前ぎはめと申すもの、其の時娘の親方から、必と貴方へあげませうと、結納の取交せ、しかと致した御挨拶申した事が御座りまするか。」平馬「サアそれは。」トぎつくりこなし、皆々思入。小笹「それが無ければ遮つて不義とは謂はれぬ此の場の時宜。オホヽヽヽしかしマア貴方様は兎もあれ、兩方聞いて下知のたとへ。」ト與五郎へ向ひ、「コレ不義といはれて既の事、お手討とならうとした此方の身許は、サ、何者ぢやぞ。」與五郎「ハツ私は當所の者では御座りませぬ、故郷は武藏の江戸生まれ、元山町にて鼈甲渡世、伊豆屋喜兵衛が二男與五郎と申す者。」ト是れを小笹聞いて惘り、科あつて、小笹「スリヤ喜兵衛殿の御子息、與五郎殿はこなたであつたか。」ト思入あつてまた氣をかへ、「ハテなウ。」ト思入。お米「サアお聞きなされませ、此の與五郎様へお鶴さんは、御幼少の其の折から、親御と親御が御得心づく。」權助「又嫁御も息子さんも、惚れて惚れられて相惚の藍屋の娘お鶴さん。」清八「與五郎さんとの其のなかは、まだ祝言はなさらねど、とつくに極つた。」三人「御夫婦中。」ト小笹思入あつて、小笹「さうした時には平馬様が、このお鶴殿へ却つてかれこれ仰しやらば、どうやら不義の門違ひ、相手が町人なればこそ、侍同志の事ならば、その儘にならぬコリヤ曲事、それでも貴方は彼の者を、やつぱり不義とおつしやりまするか。」平馬「オヽ不義と言つても大

様な者をお對手になされましては、御人體のすたる事、私とても武家に育ち、女ながらも侍の道をば辨へ居りますれば、見るに忍びず此の場の時宜、私が扱ひまする上は、唯何事も御勘辨を偏にお願ひ申しまする。」ト思入あつていふ。平馬屹となり、平馬「默らつせえ小笹殿、侍の道を辨へて居る故見るにしのびず、女ながらも扱ひに入つた。へ、ハ、へ、ハ、、、、イヤ傍痛いワ、其許が夫隼人、又倅の左近、二人共にあの態だ、兼て禁裏へ獻上になるべき家の重寶、預りの眞鶴の香爐を紛失させ、身共が此の鎌倉へ出立する其の頃は、夫隼人は厳しい蟄居、倅左近は牢舎の身の上、それに何ぞや其方が是れへ參り、身共へ對し刃向ひ立ても氣が強い、ソリヤ誠の侍、實の武士のいふ事だワ。」ト此の平馬の白の中に、與五郎小笹へこなしあつて、扨は與三郎の母かと驚くこなし。小笹「シテ又誠の侍の貴方様が、何で彼なる町人や女子供を引捉へ、唯今の様にはなされまするな。」平馬「オ、知れた事、この毛二才奴は不義者故、それ故此奴を成敗するのだ。」小笹「シテ何故に不義者とは御意なされまする。」平馬「其の譯聞きたくば言つて聞かさう。」トお鶴へ科あつて「彼なる娘は御領所木更津の町人、藍屋善右衛門の娘つると申して、身共かねて婦妻に貰ひ受けうと存じ、度々親共へ申し込みしに、あの玉の物のと返答等旡、その中に密りと木更津を立ち退いて當所へ參り、唯今是れなる二才奴とほてくろしい、とち狂ふは言語道斷、それ故に眞二つに成敗致すが如何致した。」小笹「イヤそり

よく與五郎へ斬りかける。爰へ主水之正入り一寸止める事、此の中小笹も舞臺へ來り扇子を翳し此の體を見る。皆々宜しく科。「アイヤしばらく、マアお待ち下されい。」平馬「ヤイ／＼身共が是れなる若者をば手討にしようと思ふをば、いらざる留立、見れば兩刀手挾むからは、物の辨へもあるべきに、退かつせえ／＼。」主水「サ、御腹立では御座りませうが、刀を帶し居りますれば見るに忍びず主人の差圖、それ故に分け入りましてのこの扱ひ、見ますれば町人體、外には女子の事なれば、何か不調法の段は幾重にもお謝言仕る。」平馬「イ、ヤ謝ですむ事ではないワ。」主水「でも御座りませうが、そこを只管。」平馬「エ、面倒な、そこ退かつせえ。」ト主水之正を突き廻し、取りつく權助を蹴返し斬りかける故、小笹科あつて、つか／＼と立寄り、主水之正も刀へ反打掛け嚴となるを、小笹平馬を隔てて主水之正をコレと制す。主水之正はつと控へる。小笹「マ、申し平馬樣、暫くお待ちなされませ。」ト前へ出る。是れにて皆々小笹を見てホット落ちつきし科。平馬見て、平馬「ヤ誰かとおもへば其許は穂積隼人殿の御内室小笹殿。」小笹「思ひがけなきこの御出會、何かは扨おきこの場の仔細、如何の譯でござりまするな。」平馬「事の顚末御存知なくば、打捨ておいて下されい。」小笹「サア女の身にて差控へ、是れなる主水に何事か事を鎭めませうと思へども御聞き濟みござらぬ故、見ますればまだ年若き町家の人、其の外とても女子供、縦ひ何の樣の不調法がござりませうと私がお謝致しまする、サア斯

御執心でも御座りませうが、是れには色々譯が有つて、今この儘にお屋敷へ伴れて行かうと仰しやりましても、さう自由にはなりますまい、マア其の手をば一寸お放しなされませ。」平馬「此奴が〳〵、若輩者の分際で出過ぎた奴、ム、旅形でうせをるは、扨は最前よりの樣子といひ、此のお鶴をば引きつれて此の鎌倉へ逐電の、不義の對手は汝だなァ。」下女「ア、モシ滅多な事をおつしやりまするな。」平馬「エ、又汝も出しやばるか。」下女「マァお聞き遊ばせ、あのお二人樣はまだ御祝言はなさらねど、親御樣方の御約束で、疾うに極つた御夫婦間。」平馬「何を痴呆めらが、申さば在所に居る頃より、此方が先約に申したのだ、是非とも屋敷へ伴れ立つて行くワ。」皆々「滅多にさうは。」平馬「あた面倒な。それ。」ト追ひ廻す。早めし大拍子になり、下女はお鶴をかばふ、清八は與五郎をかばふ、權助止めるを突き廻され、投げられる事など宜しく。この中向うより穗積隼人妻小笹、屋敷風女房の拵へ長合羽旅形、跡より綾瀬主水之正、旅形の侍、脚絆股引、褄褰げ大小にて、兩掛の荷物を擔げし若い衆の供男、一本ざし胸當にて荷物へ菅笠を二つ附け出て來り、舞臺の爭ひを見て、小笹「ハ、ァ流石は繁華の此の鎌倉、何處へ行ても巷の賑ひ、その賑しきあまりにや、何やら彼にて多くの人が。」主水「立騷ぎまするは正しく口論、往來の粗相と見えまする。」小笹「對手はどうやら女子の樣。それ鎭めて遣りやれ。」主水「ハ、ア。」ト此の臺詞にて舞臺皆々へ被せかけ、皆々この中に入り替りうごき有つて見得

權助「與五郎さんの許嫁。」下女「それゆゑあなたを伴れ申して。」清八「さういふ譯なら仕方がある、マアマア一寸。」與五郎「爰を放して、」トいふ内に又引張る事宜しく、たゞ五人心々に引き合うて舞臺をぐるぐるまはる。此の時上手より以前の山鹿毛平馬、少し醉ひたるこなしあつて出て來り、この騷ぎを見て、此の時お鶴心づき驚く事。平馬「オ、それに居るのはお鶴ぢやないか。ゲエイ。」お鶴「あなたは山鹿毛平馬樣。」平馬「よう是れに居つてくれたなア。」ト寄り添ふ。皆々「ヤア〱〱。」ト思入。お鶴振切り逃げんとするを、平馬捉へ、平馬「これ〱戀ひこがれて居る山鹿毛平馬、身共が先年人を以て女房に貰ひ請けんと、手をかへ品をかへ言ひ入れたを、それなりに此の鎌倉へ身を隱すとは、胴慾なものぢやぞよ、盡きせぬ緣があればこそ此の所でめぐり逢ふ、國元で見た時よりは、鎌倉風の一際派手・やか、コリヤどうも耐らぬワ。」ト寄り添ふ故、お鶴「ア、これ滅多な事をなされまするな。」平馬「このまゝに伴れて行く。サ身と一所に。」ト此の内皆々顏見合はせ、思入よろしく、平馬立ちかゝりお鶴を引立つる故皆々立ち寄り、下女「ア、もし御寮人樣を。」權助、下女「どうなされまする〱。」平馬「身が屋敷へ伴れて行くワ。」三人「どうしてさうは。」平馬「とめ立て致すな。」ト又引立てに來るを與五郎隔てて、與五郎「アイヤ〱お武家樣、マア〱お待ちなされませ。」平馬「いらざる女が肩持ち顏。それとも差出る思案があるか。」與五郎「されば此の娘は、なる程あなたが木更津にお出でなされた其の時に、

とやら云ふ奴が、かれこれいつて煩さに、そこで木更津をばお鶴様が、家出をして行方が知れぬと言ひ觸らし、世間では氣の注かぬ御親類の店なれば、此の雪の下の和泉屋へ預けられて御座るお鶴様。」與五郎「ハ、アそれで様子が分りました。何にせいマァ〳〵無事で有つた故、爰で逢はうといふものぢや、この與五郎も悦ばしう思ひますワイなウ。」お鶴「それといふも貴方の方へ早う呼び迎へて下さんすりや。此の様な苦勞もせぬものを、胴慾でござりまするワイなァ。」ト寄り添ひ思入。與五郎「サアその事も譯あつて、どうも意に任せぬ時宜。」お鶴「さう仰しやるはどうしても、花のお江戸は又格別、世間に幾許も美しいお女中さんが多い故。」下女「何で有らうと是れ程に御寮人様が仰しやるからは、お心根をば少しは察して。」ト手をひき立つる。お鶴思入あつて、お鶴「これから何卒わたしと一緒に。」與五郎「ア、コレ〳〵滅相な、どうして此の儘。」下女「ハテマァ一寸。」ト見得よく引張る。爰へ下男權助、以前の土産物の蝶々を持ち出て指金のやうに遣ひ思入あつて、權助「アレ〳〵〳〵蝶さへも番ひ離れず、吾妻様のお引合はせ。」お鶴「御神前で此の様に邂逅ふのは盡きせぬ縁。」下女「何であらうと。」下女、權助「あそこの茶屋へ。」與五郎「コ、これ放して下され。」ト爭ふ所へ以前の清八走り出で此の體を見て、清八「ア、これ〳〵若旦那、どうするのだ〳〵。」權助「退いた〳〵。」下女「退かしやんせ。」ト兩人清八が止めるを突き退け、與五郎を引張る。この中清八お鶴を見て、清八「オ、眞にあなたは木更津の。」

權助「ア、モシ〳〵一寸お待ちなされませ〳〵。」與五郎「是れはしたり、私は往來の者、尋ぬる事なら所の人に聞かつしやれ。」權助「イエ〳〵、さうぢや御座りませぬよ。」下女「あなたちよつと。ソレ御寮人樣。」トこれにてお鶴、與五郎へ科あつて、お鶴「オ、違ひない、あなたぢや〳〵。」權助「ム、扨はあなたが。」下女「與五郎さまでござりまするか。」お鶴「オ、與五郎さまぢや。」與五郎「わしが名を知つて御座るこなたは。」トお鶴をよく〳〵見る。お鶴「まうし與五郎さま。」與五郎「オ、ほんにお前は木更津の。」權助「藍玉屋善右衞門樣の。」權助、下女「お娘御。」與五郎「お鶴殿ぢやの、どうして爰へ。」お鶴「アイ與五郎樣、能うお顏見せて下さりました、お懷かしうござんしたワイなア。」ト科あつて恥かしき思入。差しうつむく。與五郎も宜しく、權助「ホンニ吾妻樣は有り難いワイなア。」トお鶴こなし。與五郎牀几へかける。お鶴寄り添ひもどかしき思入。與五郎「誠にマア思ひがけない所で逢ひました。シテお鶴殿には何時頃からこの鎌倉へはござつたぞ。」お鶴「サア爰へ來たのも三歳越、それといふも貴方とは、父さんや母さんのお許しあつた女夫の間、片時も早う貴方のお傍へ呼び迎へて下さんしたら、早う祝言した上で、天下晴れての妹脊事と、樂しんでる其の中に。」下女「木更津の御地頭樣の御役人、山鹿毛平馬とかいふ侍が、お鶴樣へ惚れまして、たとひ外々へ緣組がして有らうとも、是非々々貰ひ請けたいと、退引ならぬ無理所望。」權助「その樣子も今聞きました、何でもその平馬とやら、ひえまき

へ見立てて宿を取らうとは思うたが、今夜はこの大磯へ泊つて、少し聞き合はせたい事がある故、マア其の譯は今夜ゆつくりと話さうが、お主は早く其邊で宿を取つて貰ひたい。」 淸八「ハイ〳〵それでは私が何處か綺麗な家を見立てませう、さうしてお前樣は。」 與五郞「休息した上で此の吾妻の明神樣へ參詣して行く積りよ。」 淸八「モシ〳〵此の吾妻樣は、色事の御願を聞かつしやると申しますが、そんなら貴方も色の願ひを。」 與五郞「是れはしたり、そんな譯ではない、この御宮は江戶の本所に勸請した、吾妻樣と御神體は一つ故。それ江戶でも、若し家出をした人があれば、迷兒たづぬる其の初めに、吾妻樣へお參りして、それから方々捜すぢやないか、それ故に此の與五郞も、尋ぬる人に片時も早う逢ふ樣にと信心こめてお參りを。」 淸八「ハ、アそれで分りましたワエ、貴方が尋ぬる人とおつしやるは、アノ木更津で不慮な事から、御兩親樣は以ての外のお腹立で、今は御勘當の御身の上、何處にどうして御座るか知れぬ。アノ與三郞樣の行方をば。」 與五郞「ア、コレ何かの話は今夜ゆつくり、お主は早く泊り宿を。」 淸八「ドレ見立てて參りませう。」ト右の唄になり橋懸りへ入る。この中に以前のお鶴、下女、權助附添ひ出かゝりゐて、お鶴與五郞を見つけ、あれぢやと下女へ思入。權助も是れを悟りしこなし、色々有つて與五郞これに心づかず、 與五郞「ドレ此の間に參詣して兄者人の身の行方、何かの願ひをさうぢや〳〵。」ト立ち上る所へ、右の三人立ちより宜しく科、是れを三味線入大拍子。

に、戀しいお方に。」 下女「早う御縁組をなさらうと、お勸め申した今日のお參り。」 權助「さういふ事なら權助も、吾妻樣を信心して、女の方から思はれる御利益を受けずばなるめえ。」 長吉「モシ〳〵お孃樣、御願掛があるならば、少しもはやくお參りをなされませ。」 お鶴「オ、よういうて下さんした。」 下女「すこしも早く御神前で。」 お鶴「此の身につもる御願ひを。」 權助「おいらは御百度をあげうワイ。」 長吉「そんならお鶴さんの爲にかえ。」 權助「サアお鶴さんの爲、權助の爲に。」 お鶴「ホンにをかしい。」 兩人「權助殿ではあるワイなア。」 長吉「モシお鶴さん。」 下女、權助「サアお出でなされませ。」ト右の鳴物になり、お鶴、下女、長吉、權助跟いて上の方へ入る。ト「鎌倉見たか江戸見たか。」の唄になり、向うより伊豆屋與五郎、一本差、旅形脚絆がけ、褄からげ合羽にて出る。跡より手代淸八供の拵へ、柳行李と風呂敷包をわへがけにして是れを擔げ、菅笠を持ち出て來り、淸八「モシ與五郎樣、日は永いでは御座りませぬか。」 與五郎「さればさ、今朝ゆる〳〵と立つたから、日の暮れるまでと思つたが、大きに早かつた。」 淸八「併しお草臥でござりませう。向うの鳥居先で一服して參りませうか。」 與五郎「ム、それが可からう。」トこんな事をいひながら、兩人舞臺へ來り牀几へかけ、捨白あつて、淸八「時に若旦那、いつも鶴が岡の太々講の時は、津の國屋が定宿でござりますが、なぜ今日は外の宿をお取りなされまする。」 與五郎「ハテそれには少し譯が有つて、どうで四五日は此の鎌倉へ逗留せねばならぬ、雪の下

さん、御覧じませ、時も時とて藤の盛り。」お鶴「ホンニ美しい事ぢやワイなう。」トこの中長吉も腰をかけ、長吉「モシ〳〵お孃樣へ、お前樣もこの吾妻樣へ御參詣でござりまするか。」お鶴「アイお參りしようと思うて來ましたワイなう。それはさうと此の子とした事が、賢い樣でも頑是なう。」權助「左樣左樣、お鶴樣を目つけて、お孃さん〳〵と家の娘御と思つてゐるワエ。」下女「エ、モお前もつけ〳〵と、お鶴樣は家のお娘御も同じ事ぢやワイなア。」權助「そりやアモウ娘御も同じ事は、此方がいはねえでもしれてある、振袖で居なさるから娘。今に嫁入なされて眉毛を隕せば年增となる。」下女「エ、モそんな戲言いひなさんすな、このお鶴樣はな、和泉屋の爲には跡取のお孃さんも同じ事、先だつて笹目ケ谷へ御隱居なされた大旦那のお配遇、去年おなくなりなされた御新造の爲には、たつた一人の姪御樣ぢやワイなう。」權助「一體あなたは木更津の藍玉屋善右衛門樣のお娘御なれど、どうした事にかこの鎌倉へ御出でなされて、モウ今年で三年越。」お鶴「それといふも木更津に據ない譯有つて。ほんにモウ思ふに任せぬことぢやワイなウ。」下女「これはしたりお鶴さん、其のあなたのお願ひを。」權助「叶へる爲に神詣で、よく御信心なされませ。」下女「爰の吾妻の明神樣は、橘姫樣をお祀り申し、殿御は妻を戀ひ慕ひ。」權助「女子は男のために心中だてでも仕ましたのかえ。」お鶴「殿御の爲には命をかけ、操正しい其のお方を、爰へ崇めて明神樣と、妹脊の中を結ぶの神樣、お守りなさると聞く故

知れぬワイの。」仕□「ときに是れからは食氣のはうへおもむいて。」仕「そこで一つ遣りかけうかの。」
皆々「夫れがよう御座りませう。」茶屋「その食氣より飲氣の方へ、わたくしも半口のせて下さりませ。」
仕○「夫れでも店を斯うしておいては。」茶屋「イヤ大事ござりませぬ。今朝から大分儲けましたから、祝ひに一つ。」仕△「やりたいと云はつしやるは、餘程正覺坊と見えるワエ。」皆々「サア來さつしやい來さつしやい。」ト皆々先に茶屋男手桶を提げ捨白宜しく橋懸りへ入る。ト直に三味線入大拍子になり、向うより和泉屋娘お鶴、町風振袖娘の拵へ、お米下女の拵へ、日傘をさしかけ、この次へ金神長吉、廣袖の一つ著、袗に手拭をまき、柾の下駄、花の枝へ土産物の烏帽子籠を三つ許り吊したるを擔げ、この跡より下男權助、ぼつとせ鬘、好みの布子、股引、風呂敷包を脊負ひ同じく土産の菓子袋二つ許り、竹にて拵へたる蝶々をかたげ出で來り、花道にて皆々こなし有つて、長吉「和泉屋のお姉さん、珍らしく今日はお出かけなされましたね。」下女お米「どなたさんぢやと思うたら、家へ出入の金神長五郎さんの息子樣。」權助「小頭の長吉兄ィ、丁度可い一緒に行きなせえ。」長吉「アイお供を仕やせうよ。」
お鶴「何であらうと鳥居まで。」下女、權助「マア御休息なされませ。」ト右の鳴物にてみな〳〵舞臺へ來る。
權助「サア〳〵お鶴さん、此の牀几で緩りとお休みなされませ。ヤ茶屋奴が店を開放して、居をらぬワエ、ドレ〳〵自身に汲んで飲んで來ませう。」トよろしく捨白あつて皆々牀几へかける。下女「アレお鶴

たり埒を結ひ廻し、件の建札、石燈籠、玉垣、爰に吾妻大明神と記したる奉納の幟四五本立て、是れに續き低き土堤の張物、この後御手洗水の流れを見せ、此の上へ誂への藤棚、藤の花盛りの體。下手は藤の實木、この傍に掛行燈、出茶屋の出臺、葭簀たてかけ、土堤づらへ四つ目垣、この後一面に淺葱幕、すべて相州鎌倉、大磯の梅澤の間、吾妻明神上の宮の體、平舞臺に牀几二三脚、こゝに若い衆の仕出大勢、思ひ〳〵の拵へにて牀几にかけ、茶屋男一人、皆々へ茶を汲み出して居る、大拍子の鳴物にて幕明く。

茶屋男「これは〳〵誰方もよく御參詣でござりまする、モ一つお茶あげませう。」ト銘々茶を汲んで出す事。仕出〇「アイ〳〵、サア皆飮まつしやれぬか。」仕出△「盆のまゝ其所へ置きなせえ。」茶屋「ハイハイ。」ト盆の茶を置いて、御緩りと御休息なされませ。」仕出〇「アイ〳〵構ひなさんな、いそがしからうに。」茶屋「左樣でござりまする、大層なおまゐりで御座りまする。夫れに又川向うには大芝居がござりまする、殊の外の大入ぢやさうに御座りまする。」仕口「成程、その爲か爰の神の地までが繁昌ぢやてなウ。」仕出△「さうぢや、爰な吾妻樣も御利益があると見える。」仕〇「大層近年は賑しくなつたでは御座らぬか。」仕口「サア是れといふも願か利くからの事でござる。」仕口「さうぢや〳〵、女が男を思うて色事の願ひをかけると、直に御利益があるといふ云慣はしでござるて。」仕△「兎角色氣の世の中だなア。」仕口「それでは儂們でもお參りをしたら。ノウ太郎兵。」仕〇「今に色事で喰へる樣になるかも

髪振亂し手負ひし體、苦しみながら半身現はれ、多左「扨こそ女だ。」トソレと引き上ぐる事、お富船へ上る事宜しく、「確かに是れは刀疵。これ氣を確かに持たつせえ。」ト呼び生ける。是れにてお富一寸眼を明くる事、「心をたしかに、これ女中。」皆々「女ヤァい〳〵」ト呼び立つる。お富弛みし科あつてがつくり落ちいる。多左衛門此の體を見て科あつて、多左「そんなら息が。」トいひながら腹へ巻きし守袋を見つけ、手をかけて科あつて、「ム、若しや是れに何處の誰と、確かな證據の手掛りが。」ト件の守符の裂をよく〳〵目を注け見て、「どうやら覺えの。」ト思入。皆々「エ。」ト見やる。多左衛門守袋を其のまゝお富の懐へ入れて、多左「アこれ何にもいはずと。」ト手早く嚢の金を紙にひねり、皆々の方へ出し見せて、「それ。」ト皆々へ投げて遣る。チョンと木の頭。「船を行らつせえ。」トこなし。皆々艪を立てる。お富ばつたり落ちいる。多左衛門守を取り上げ見る科、これをきざみ一聲浪の音にて、拍子幕。

四幕目　吾妻明神の場　源氏店の場

本舞臺三間の間、上の方へ寄せて石の片鳥居、これに續き玉垣、ずつと上の方へよせて連理の楠の若木、このあ

にて、向うより波布畫心に被りしお富の吹替髪振亂し、手足を跪き浪の間より黒髪襦袢などひら〳〵出て、浮きつ沈みつ流れ來る模樣、花道を引臺にて引く事、中程まで來る中に皆々船頭が沖を見る心あつて、船頭□「アレ〳〵見やれ、赤い物が流れるワ。」船頭△、○「違ひなし、アレ〳〵向うを。」三人「流れるワ流れるワ。」ト是れにて浪幕を切つて落す。

本舞臺向う一面奥深に木更津沖海の遠見、舞臺よき所に苫船一艘かゝり、かすめて浪の音、コイヤイにて道具納まる。

ト直に件の苫船の苫を上げ、爰に和泉屋多左衛門、長けたる町人の拵へ旅形、傍に荷物あり、供男一人控へ居る。多左衛門水死の者へ眼のつきし科、早めし合方、浪の音をあしらひ。多左「オ、。アレアレ浪間へ漂ふは確かに黒髪振亂し、著類は確かに女の樣子、まだ死にきらずに浮きつ沈みつ。身投の者か、海賊の手に打込まれしか知れねども、助ける仕樣はあるまいか。」船頭三人「アレ〳〵段々こゝへ。」多左「これ船の衆、働いた〳〵。」三人「合點だ。」ト此の中右の吹替、花道に浮きつ沈みつして、花道際より一寸浮き上り、艫櫂を入れる事宜しく、早めし合方浪の音。皆々「しめたぞ〳〵。」多左「船へ揚げた船へ揚げた。」皆々「合點だ〳〵。」ト浪の音、浪煙はげしく、お富上著ぬけ長襦袢本水に濡れ、

ずつしり。」源左「これ。」ト本釣鐘。此の時市助、百藏俵を擔ぐ。「確り劫を強くしやれよ。」トこれにてチョンと知らせにつき、淺葱幕をかぶる。ト直に禪の勤めになり、上手より以前の相生、繩にて縛られし體にてその儘逃げ出すを、お熊追つかけて出て繩の先を捉へ引きとめて、お熊「逃さねえぞ〳〵。」相生「放さつせえ〳〵。」お熊「どうして〳〵、手前を逃せば此方が失敗るワ、太え奴だ、汝がみんな此のやうな騷動をおつ始めたのだ、この起りは手前だ〳〵。」相生「べらぼうめ、汝が喋舌りやアがつたから、こんな目に俺があつた、漸うと脱けて來たのだ、今つらまれば直に殺されるワ、放せ〳〵。」ト足にてお熊が手元を蹴上げ逃げ出すと、お熊繩の端にて手繰り寄せ、お熊「こいつは足の働く奴だな。」トまた驅け出すをひき戻す。立廻りよろしく、トゞ相生この機に繩切れること。「うぬ繩を切つたな。」相生「繩が斷れれば汝には恨みが。」お熊「逃さねえぞ。」相生「何を。」ト立廻り短くあつてお熊を當て、相生逸散に橋懸りへ入る。お熊「逃しやアしねえぞ。」ト禪の勤めになり、跡追つかけて入る。ト跡波の音になり、淺葱幕切つて落す。向う一面の波幕になる、浪てすりよろしく飾りつけてあり。この時上の方にて、船頭三人「エイサッサ〳〵。」ト三人とも船頭にて柹の筒袖、艫櫂を立て、船の舳の方へ誂への苫を覆ひ、船舷脇べりを入れて好みの押送り漁船にて出て來り、船頭〇「凪が可い、急げ〳〵。」三人「エイサッサエイサッサ〳〵。」ト此の船宜しく仕掛にて搖れて、浪の上を漕ぎ行く模樣、浪の音劇しく早笛

始末をしやせう。」源左「納屋へ往つて空俵を持つて來い。」段平「そいつが一番手取り早い。」松五郎「ついでに棒も持つて來い。」市助「合點だ。」ト上手へ入る。源左「コリヤ海松杭、御苦勞序に野郎の始末を頼んだぞよ。」松五郎「こんな事は朝腹茶漬。丈助手傳つてくりやれ。」丈助「オツトよし〳〵。思やァ可笑しな理窟だなァ。」トいひながら與三郎を引立てる。松五郎與三郎の耳へ口をよせて、松五郎「これ與三郎、親分を頼んで汝が命を助けて遣るぞ、手前餘程命冥加な者だなァ。」丈助「それに就いてもお富は海へ飛込んだが、手前故に死つた女だ、念佛でも云つて遣りやれさ。」松五郎「エ、餘計な事をいふなえ。」丈助「オ、違へねえ、少と差だのう。」松五郎「差と云やァ手前擔ぐか。」丈助「そりやァどうでも爲やせうよ。」源左「跡の奴等は何をして居やァがる。」ト時の鐘合方にて、上手より段平、市助、百藏、米、俵と天秤棒を持ち出て來る。丈助「オイ松兄ィ、これで可いかえ。」松五郎「よい物があつた、口を切れ。」丈助「よし〳〵。」松五郎「段平、それ足を持たつし。」三人「行かうか〳〵。」ト松五郎は與三郎の胴を抱へ段平は足を持つて、跡三人これを取りまき、この中に吹替好みの通りの拵へにて、皆々俵の中へ荷ひ込んで、少し首ばかり出して繩にてからげ、天秤棒を貫通して、四人「そんなら親分。」松五郎「是れから直に藍玉屋の家へ。」源左「色で商ふ下りの蘇枋、その賣主の代物は、しかも赤間の源左衛門、極色よしの血塗れ仕事。」松五郎「その染賃は。小判で百兩。」源左「詞の澤張、すべよく行きやァ。」皆々「其の時

ト一聲聞えたが、定めしお富が身を投げたと、滅多無性に索しても、皆目跡は白浪と、松吹く風の音ばかり、それで女は玉なしよ。」源左「業つくばりのどぢ女め、死つたに違ひあるめい、若し又其の場を助かつても、俺が眼の黒い中は、貧乏搖ぎもさしやアしねえ。」松五郎「さうして與三郎はどうしやした。」源左「相手の野郎はそれそこに。」松五郎「どれ〱。」ト與三郎をよく〱見て、「ア、モウ早まつたな。」源左「まだ死にきる所へは行くめえが、何にしても女を玉なしにしちやア事が面倒だ、せめて彼奴が居たならば、叩き責めて腹癒と、思つた仕事が間違つた。」松五郎「ハ、アそれぢやア殺す意は無かつたのだな。」源左「知れた事よ、彼奴を賣つた其の金で、又娯しみも出來る積りよ。エ、是れといふも二才野郎め、憎さも憎し息ある中は目障りだ、モウ殺しても可い時分、寧そ俺が引導を。」ト刀を振上げ斬らうとする。松五郎とめて、松五郎「コレサ親分、マア待ちなせえ。」源左「なぜ止めるのだえ。」松五郎「さればさ、短氣は損氣、お富は薩張種なしだが、まだ〱野郎は半殺し、蟲の息でもあるこそ幸ひ、南町の藍玉屋の宅へ持ちかけて。」源左「それをどうする。」松五郎「下り蘇枋の賣物と。コレ。」ト囁く。源左衛門一々聞き取り思入あつて、源左「それぢやア此奴を玉にして。」松五郎「百兩位は大丈夫さ。」ト指を出して見せる。皆々これを見て、扨はと心づき、源左「なる程、こりやア可い思ひつきだ、今から藍玉屋へ押しかけて。」松五郎「しかし野郎が菰包にして擔げば雜作もねえ。」丈助「儂們のはうで

やァ恥の上塗、サすつぱりと殺さつしやい。」源左「引かれ者の小唄とやら、血迷つて樣々の癡言、これ能く聞け、今一思ひに殺したら、汝が勝手はよからうが、それぢやァ餘り曲がねえ。青二才で不便だから、少しも娑婆の風にあて、びこ／＼するも僅かのうち、死に急ぎをしねえでも、どうで汝やァ死る身の上、二親が在らうとも、汝が親なら犬畜生、義理も法も知りはしめえ、人並らしい口巧者、默つて居やれな、くたばりかゝつた分際で、源左衛門が手の裏を、鈍つたと吐したな、コリャ其の頰桁を斬うしてくれるワ。」ト又片頰を貫く。與三郎苦しむこなし。「汝はこの目球で迷はせたか。」ト眼元を突く事あつて、「イヤサこのしやつ面でか、エ、癪に障らァ。」ト刀にて顋を擧ぐる事あつて、「見りやァ見る程まじ／＼と、いつその事に斬う／＼／＼。」ト散々に斬りさいなむ事あつて、「ア、是れで少許は胸が透いた。是れから汝を簀捲にして、果ては海の藻屑となり、磯端へ打上げられ、犬や烏の餌食となれば、定めし汝も本望だらう、面を見るのも穢らはしい、よく／＼因果な業突張め。」ト嚴となつて唾を吐きかける。トばた／＼になり、向うより松五郎走り出で來り、松五郎「オ、親分、爰に居やんしたか。」源左「手前の歸りを待ち兼ねた、さうして女をつれて來たか。」松五郎「親分聞かんせ、あれから直に磯端へ追つかけたら、あいろも知れぬ眞の闇、到頭お富を引捉へ、流石女も一生懸命、ぎしやばり廻るを騙しても、どうして／＼動かねえ、暫く爭ふ其の暇に、ざんぶり浴びる高波に、ハッ

い赤間源左衛門と云はれちやァ、鬼でも恐るゝ男と知らず、なま若輩な分際で、よく此の面へ泥をなすつたな。密夫の成敗、是れぢやァ骨身にこたへたらう。こりや青二才め、よく聞け、汝ばかり憂目は見せぬ。事の起りはあの女だ、情の罠に罹つたが、因果同志の深い間、是れから女めもしよびき出し、料理の仕様は種々様々、ならべておいて嬲斬。泣面かわかし其の上で、この段平を汝がどん腹、それが此の世の別れの杯、これを肴に酒でも飲まう、段平始め、皆の者相手になつて一杯飲みやれナ。」丈助「何かに届く親方の志。」段平「切身に鹽のずた〳〵膾。」市助「それを肴に酒盛は。」藤六「コリヤア格別味からう。」四人「サア〳〵遠慮なしに始めう。」ト又小粒を取上ぐる。丈助酌をする。源左「ドリヤ是れから娯しまうかえ。くたばりかゝつた鹽梅を見りやァ。ァ、氣障だなァ。」皆々「ハ、、、。」與三郎「その腹立は理ながら、命を果すも覺悟の上。未練ではなけれども、定めし私が身の上を知つても御座らう。いふにいはれぬ譯あつて、それを知りつゝ江戸での放埒。この木更津の南町、藍玉屋の家へ預けの身の上。江戸には揃ひし二親の、勘當受けた譯でもなし、夫れにつゞいて諸親類。この始末を荒立つて、二親へ聞かせるも不孝のみか世間の聞え、是れ程に苛責んだら、此方の顏も立たうから、苦痛をさせずと一思ひ、男らしくすつぱりと何故殺さねえ。弄殺しは非道な仕方、それとも腕がなまつたか。男を研く性根なら、怖ぢずと立派に殺さつせえ、助かる心は微塵もねえ。氣後れすり

戀も覺めたであらう、見りやァ見る程慘憺な態だなァ。」丈助「さうさねえ、生白けたしやつ面だが、寸斷々々に疵だらけ、今では二目と見られねえ、これぢやァ三年の戀も覺めるであらう。」段平「さうよ。これからは寄つて集つて試し物、俺が刀も値打があるワエ。これで蟲が落著いた。」藤六「疾うから此奴は評判で、男のよいのを鼻にかけ、女たらしも斯うなつちやア。」市助「モウ陀佛と往生するのだ、汝やァ僅かの娯しみで業恥を曝しやァがる、いくぢなしめ。」源左「コウ黑淵よ、どうか手こねた樣だなァ。」四人「何さ未だ〳〵是れぢやァ死に切れめえ。」トこの中丈助二重の大蠟燭を取つて與三郎の傍へ行き、段平市助百藏三人して與三郎を引起し、丈助蠟燭の火を顏の先へ出して、丈助「どうだ野郎思ひ知つたか。コレ物を吐せ、エ、だらけやァがるな。」段平「何とまァいけ圖太い野郎めだなァ。」源左「どうだ息はあるか、其の蠟燭で面を焦せ。」丈助「なる程、コリヤ可いワエ。」ト丈助蠟燭を顏へあてうとする、風の音して消ゆる。「エ、忌々しい其の蠟燭を。」ト取らうとする。源左衞門思入あつて、源左「燈火が消えちやあ眞暗だ、ドレ俺が。」ト與三郎の傍へ行き、この中丈助蠟燭へ火を移して源左衞門の傍へ持つて行く。源左衞門とつくり見て、蠟燭にて片頰を燒く。是れにて動く事、皆々「野郎め、しつかりしやァがれ。」ト是れにて與三郎目を見開いてこなし。源左「どうだ苦しいか、なる程變つた面だなァ。」トこなし。誂への合方。「ヤイ與三郎、今となつちやァ思ひ知つたか、この木更津で隱れのな

行くさき未來とやらが知れうか、おれと一緒にマア來やれ。」ト手をとる。お富「エヽはなしなさんせ。」松五郎「そんならどうでも言ふ事を。」お富「ふつ〳〵お前は忌ぢやワイなア。」松五郎「さう云や寧そ。」ト斬りかける。立廻りよろしく浪の音、葛西念佛になり、お富礫を取つて打ち付くる。松五郎振拂ひ〳〵お富の後へ廻りしつかり組み付く。此の時下著脱げて吾でに天窓へ被る。お富は手早く松五郎を突き退け、後の蘆間へ飛び込む、水の音ドンとして水煙ぱつと立つ。松五郎この音に驚き、被りし下著を引きめくり、其の儘きつと見込み、やはり波の音にて此の道具まはる。

返し

本舞臺元の二重の道具へ戻る。爰に源左衞門褥を敷き、二重に腰をかけ、左右へ大燭臺、蠟燭を照らし、拔刀を椽端へ突立てギヤマンのコツプを持つて酒宴の模樣、青貝の大臺へ肴鉢、丼、太平鉢、其の外の道具いろ〳〵置き並べあり。平舞臺眞中に與三郎半面血潮によごれ、體は太刀疵、總身血まぶれにて、細引にてぐる〳〵捲き、亂髮にて倒れゐる。左右に丈助、段平、市助、藤六、拔刀にて立ちかゝり居る。誂への合方、時の鐘、鷄の聲にて道具納まる。

四人「親分、何と可い態ぢやァごんせぬか。」源左「概略此奴も半殺し、この蠟燭で面を見ろ、色氣も

心ちやない。モシ與三郎さん堪忍して下さんせ、これ此所から拜んで居るワイなア。」ト兩手を合はせてハアト泣き落す。ばた〳〵と足音する故、お富これに驚き思入あつて、「又もや追人の樣子といひ、生恥をかゝうよりォ、さうぢや。」ト立ち上り身繕ひして舞臺へ窺ひ〳〵行くを、大ばた〳〵になり、向う揚幕より松五郎逸散に出で來り、お富ぶる〳〵慄へて歩かれぬ思入、松五郎窺ひ〳〵する事、あやふくすれ違ふ事二三度あつて、トヾお富躓く音に松五郎さぐり中てて、松五郎「あまめ逃さねえぞ。」お富「お前は松さん、見のがして下さんせ。」松五郎「ナニ見遁してくれ。さう味くは行かねえ、よくも親分の面へ泥をなすつたな。まだそれ許りぢやァねえぞ、汝が心に覺えがあらう、サァうしやァがれ。」お富「イエ〳〵死ぬる覺悟で出たからは、一寸も歸られぬ〳〵。」松五郎「エ、強情などち女め、常が常なら情の道も知つてはゐるが、斯うなつたら日頃の可愛さ餘つて憎さが百倍。無駄をいはずと歩みやァがれ。」お富「そんなら日頃の事を根に持つて。」松五郎「知れた事だ。汝が體は親分に貰ひ受け、一寸だめしに刀の鏽、不便な奴は與三郎、よつて蒐つて斬り苛み、モウ今頃は死つたらう、それで心の雲も晴れ、是れから汝が心の据所、いふ事さへきくならば、汝が命は助けてやるワ。」お富「エヽ穢らはしい。與三郎さんに憂目を見せ、おめ〳〵生きて居られうか、主が死んだと聞くからは、此の世に心が遺らぬ、此の身死んで未來で言譯を。」松五郎「エ、執念深い情を立てても、一寸先は闇の夜だ、死んで

船頭□「さう云ふこなたは專治丸の。」船頭○△「親父さんぢやァごんせぬか。」船頭◎「オヽよいところであつたが、貴樣達を迎へに來た。其の譯といふは斯うぢや、今貴樣の所へ長脇差手合が七八人舞込んで。」船頭●「何を尋ぬるのか、滅多無性亂暴ぢや。」船頭◎「何でも怪しいから海賊ではあるまいかと、樣子を聞けば女の事ぢやげな。」船頭×「その女を埋んだといふからの間違。」○□△船頭「何にても急いで歸らう。」三人「サアござれ〳〵。」ト皆々上下へ別れ入る。知らせにつき浪幕切つて落す。

返し

本舞臺向う一面遠見、海面の闇ぼかし、前の手摺地かすりへ浪の打寄せに左右蘆の茂み、眞中へ誂への蘆原、この後あふりかへし人の飛び込む仕かけ、日覆より松の釣枝、東西の窗蓋を卸し、都て濱邊の物凄ぐ浪の音にて道具納まる。

ト向うばた〳〵になり、お富以前の形の上、綻び裂れたる下著を引つかけ、つまみを取つて逸散に走り來て、花道に躓く。お富「闇路を幸ひ逃げ延びては來たれども、心に懸るは與三郎さん。逃げ延びて下さんしたとはいふものの深手の惱み、多勢に一人の非力といひ、とても命は風の燈火、是れも誰故心の鬼が身をせめて、ひよんな憂目に逢はせしも私が科、縱ひ其の場は逃げ延びても、生きのびる

分丈助、段平、藤六、三人手燭を持ち上下より出て燈火を差出す。是れにて皆々顔見合はせ、お富「ヤどうしてお前は。」ト源左衞門の顔を見てハッとさし俯く。與三郎「そんなら主人の。」子分四人「源左衞門樣だワ。」與三郎「エ、、。ホイ。」ト慄へてどつかりと思入。源左「扨こそ汝が。」ト屹といふ。此の聲に與三郎耐らず立ち上り驅け出さうとするを、とめるを一寸ふり解くを、立廻つて見得よく引据ゑる。松五郎はお富を抑へる。源左衞門兩人の眞中へどつかりと坐して、「大それた二人の奴等、どうするか見やアがれ。」トきつとなる。是れにて雙方ひつぱりの見得。知らせにつき舞臺前よき所へ一面の浪幕を振落す。ト浪の音になり、上の方より若い衆の漁師、柹の筒袖栗下駄にて酒樽を提げ、竹の皮包などを繩にて結び付け、三人程出で來り、船頭○「ナント儀八、今日で三日の船がゝり、やう／＼南が晴れたから、今夜にもふけるであらう。」船頭□「さればよ、追風を待つて一走りと、前祝ひの酒盛に肴を買うたが、まだ何やら忘れた樣ぢや。」船頭△「イヤモウ何を買ふにも土地の勝手は知れず、夜更であるし。」船頭○「酒さへありやア夫れで可いとして、早く船へ歸らうぢやあるめえか。」船頭□「それ／＼氣を注けて行かつし、磯先へ行くと又浴びるぞや。」船頭△「何にしても風が強くなつて來た、モウ彼此潮明であらうなア。」船頭○「さうよ、丸つ半でも有らうが。」ト矢張浪の音にて橋懸りより若い衆の船頭三人出で來り、船頭×◎●「コレ／＼貴樣達は天神丸の若い衆ぢやないか。」船頭●「慥かに天神丸の若い衆ぢやな。」

る。爰に屏風立てまはし、與三郎お富の帶屏風へかゝり、行燈を屏風の外へ寄せてある事。右の合方にて栞の外へ松五郎窺ひ寄つて、松五郎「オイ〳〵お富さん〳〵。お富さん〳〵。」ト栞を叩く。是れにて屏風の內驚きし物音してくり開く。と又外に叩く事。爰に與三郎帶ひろどけ下著、お富は長襦袢、下締の細帶解けし體、兩人驚き起きてうろたへる思入よろしく、與三郎慄へ〳〵起きて狼狽へながら帶を搜す。この中お富行燈の明を消し、暗がりの仕組兩人よろしく、與三郎帶を搜り取り、うろたへて締める事、お富下締を搜す意にて、手に絡む枕下の打ちかへ仕立の肌の守が手に觸るゆゑ、是れにて長襦袢の上締して、枕下の下著を引つかけ立ち上る。この中外にて松五郎あせりながら叩き立て、松五郎「オイ一寸用だ、お富さん〳〵。」ト叩く事、お富右の間に下りたち、お富「エ、モ忙しない、今頃誰だえ。」トいひながら與三郎へ囁く。與三郎戸棚へ隱れんと搜り〳〵て袋棚の襖をあけて中を索る。內物あつて忍び兼ねる故、下の方へ行く。此の所壁ゆゑ又上の方へ搜り行く事、この中外には內より開けぬ故強く押す事、開きの壺拔けてぱつたり音して、松五郎ばつたり倒け込む。お富思入。「エ、誰だえ。」松五郎「私だよ。」お富「今頃に何の用で騷々しい寐てをるものを。」松五郎「オ、よく寐たらう、而も二人で。」お富「エ、。」ト此の以前より源左衞門上の方の襖を開き窺ひ居て、この時與三郎上の方へ行く。突き廻し雙方一度に、源左「イケ泥坊め動きやアがるな。」ト與三郎お富恟と思入。此の時以前の子

に納まる。與三郎「どうするか、しかし斯うなる二人が間、いつがいつまで。」お富「義理ある人にも、すべよく別れの、行末永う連れ添ふ心、よもや見捨ては。」與三郎「見捨てはしねえが、其の内にどうかお主に。」お富「エ。」與三郎「殺されさうだ。」トお富エ、と抓る。兩人氣味合よろしく、お富上著ぬげて長襦袢、兩人こなし有つて牀の上へあがる事。唄「窗の夜雨にしつぽりと、移香のこる枕紙、解けて嬉しき卯の花の雪。」ト兩人宜しく屏風を引きまはす、是れにて伊豫簾を下す。時の鐘合方になり、下手より以前の松五郎窺ひ出て來る。上の方の枝折の外よりお熊、以前の形にて窺ひ出て、互にちよつと透し見て、松五郎「誰だ〳〵。」ト小聲にいふ。お熊「海松杭さんか。」ト小聲にいふ。松五郎「お熊か。お主は内の樣子を見て知つたか。」お熊「お聞きよ、旦那が立たつしやると其の跡は若い衆に小遣を持たして遊びに出しをつたな、乙な鹽梅だと氣取つたから、態と私は息子が宅へ行くから、今夜は歸りませんと早う家を出て樣子をこつそり物置で聞いてゐたが、何でもかのが。」松五郎「そんなら與三郎野郎が來てるか。」お熊「部屋の樣子を窺つたら、忍んでゐるに違ひはないよ。」松五郎「よし〳〵、此方も源左衛門殿に云ひつかつた手筈があるワ。」お熊「さうして手引をした奴はの。」トいひ掛けるを、松五郎「マアマアそれさへ聞けば可い。お主は爰に居ては惡い、早く行かつせえ。」お熊「それぢやァ後で又話さう。ヤレ〳〵とんだ騷動をおつ始めたなァ。」ト下手へ入る。小凄き合方になり、家體の伊豫簾を捲き上ぐ

る。爰に屛風立てまはし、與三郎お富の帯屛風へかゝり、行燈を屛風の外へ寄せてある事。右の合方にて栞の外へ松五郎窺ひ寄つて、松五郎「オイ／＼お富さん／＼。お富さん／＼。」ト栞を叩く。是れにて屛風の内驚きし物音してくり開く。と又外に叩く事。爰に與三郎帯ひろどけ下著、お富は長襦袢、下締の細帯解けし體、兩人驚き起きてうろたへる思入よろしく、與三郎慄へ／＼起きて狼狽へながら帯を捜す。この中お富行燈の明を消し、暗がりの仕組兩人よろしく、與三郎帯を捜り取り、うろたへて締める事、お富下締を捜す意にて、手に絡む枕下の打ちかへ仕立の肌の守が手に觸るゆゑ、是れにて長襦袢の上締して、枕下の下著を引つかけ立ち上る。この中外にて松五郎あせりながら叩き立て、松五郎「オイ一寸用だ、お富さん／＼。」ト叩く事、お富右の間に下りたち、お富「エ、モ忙しない、今頃誰だえ。」トいひながら與三郎へ囁く。與三郎戸棚へ隱れんと捜り／＼て袋棚の襖をあけて中を索る。内物あつて忍び兼ねる故、下の方へ行く。此の所壁ゆゑ又上の方へ捜り行く事、この中外には内より開けぬ故強く押す事、開きの壺抜けてぱつたり音して、松五郎ばつたり倒け込む。お富思入。「エ、誰だえ。」松五郎「私だよ。」お富「今頃に何の用で騷々しい寐てをるものを。」松五郎「オ、よく寐たらう、而も二人で。」お富「エ、。」ト此の以前より源左衛門上の方の襖を開き窺ひ居て、この時與三郎上の方へ行く。突き廻し雙方一度に、源左「イケ泥坊め動きやアがるな。」ト與三郎お富恟と思入。此の時以前の子

に納まる。與三郎「どうするか、しかし斯うなる二人が間、いつがいつまで。」お富「義理ある人にも、すべよく別れの、行末永う連れ添ふ心、よもや見捨ては。」與三郎「見捨てはしねえが、其の内にどうかお主に。」お富「エ。」與三郎「殺されさうだ。」トお富エ、と抓る。兩人氣味合よろしく、お富上著ぬげて長襦袢、兩人こなし有つて牀の上へあがる事。唄「窗の夜雨にしつぽりと、移香のこる枕紙、解けて嬉しき卯の花の雪。」ト兩人宜しく屏風を引きまはす、是れにて伊豫簾を下す。時の鐘合方になり、下手より以前の松五郎窺ひ出て來る。上の方の枝折の外よりお熊、以前の形にて窺ひ出て、互にちよつと透し見て、松五郎「誰だ〳〵。」ト小聲にいふ。お熊「海松杭さんか。」ト小聲にいふ。松五郎「お熊か。お主は内の樣子を見て知つたか。」お熊「お聞きよ、旦那が立たつしやると其の跡は若い衆に小遣を持たして遊びに出しをつたな、乙な鹽梅だと氣取つたから、態と私は息子が宅へ行くから、今夜は歸りませんと早う家を出て樣子をこつそり物置で聞いてゐたが、何でもかのが。」松五郎「そんなら與三郎野郎が來てゐるか。」お熊「部屋の樣子を窺つたら、忍んでゐるに違ひはないよ。」松五郎「よし〳〵、此方も源左衞門殿に云ひつかつた手筈があるワ。」お熊「さうして手引をした奴はの。」トいひ掛けるを、松五郎「マアマアそれさへ聞けば可い。お主は爰に居ては惡い、早く行かつせえ。」お熊「それぢやァ後で又話さう。ヤレ〳〵とんだ騷動をおつ始めたなゥ。」ト下手へ入る。小凄き合方になり、家體の伊豫簾を捲き上ぐ

り、お富「さうぢや。」ト死なうとするを、與三郎慌てとめて、與三郎「かう〳〵途方もねえ。」ト大きくいはうとして心づき、「あぶねえ、よしなせえ〳〵。」ト小聲にてとめる。お富もいろ〳〵有つて、お富「はなしておくれね。」與三郎「ならねえ。よしなせえ。」トこの爭ひきまらず。兩人よろしく有つて、トゞお富ぢつとなつて死なうとする心意氣。與三郎ぢつと見やり、兩人氣味合あつて、「どうでもお主やァ死ぬ氣だな。」お富「アイ知れた事いなァ。」與三郎「ヤ。」ト是れより誂へ、變つた合方。お富「思へば〳〵恥かしい、文で明した私が心根、配遇ふ人や内外のものへ、機嫌氣づまをそれ〴〵に、面白をかしう取りおほせ、憂きを忍ぶもお前をたより、嬉しく逢ふ日を待つ效も、餘り氣強いお前の心根、この儘別るゝ位なら、今まで苦勞は何のせう。モシ何卒死なせて下さんせいなァ。」ト思入あつていふ。與三郎もぢつと思入して、與三郎「そんなら女の操を破り、義理ある男を見かへるのみか、命を捨てて俺への心中たてる心か、これお富。」お富「アイ。」與三郎「心底見えた、死ぬには及ばぬ。」お富「エ、。」與三郎「これも一つ注ぎやれ。」お富「アイ。」ト有り合ふ以前のさしたる杯を取り上ぐる故、お富酒をつぐ事、與三郎呑む。唄「思はせぶりに短夜を、仇に明して三布蒲團、男心の氣強さも。」ト此の内兩人よろしく有つて、與三郎へお富囁く。與三郎思入、件の二重へお富蒲團をしき夜具を廣げる事、與三郎もぢもぢと手酌にて酒つがんとするをお富とめて、トゞ牀の上に寄り添ふ。兩人よろしく右の文句一ぱい

お富「さぞ厚皮なをなごぢやと、愛想もつかさずよくこれまで。」與三郎「ナニ勿體ない、愛想どころか。」お富「エ、モ憎らしいその口は。」唄「ゆるむ心の濁水。」ト樣々眞似して寄り添ひ、「申し變る心はござんすまいな。」與三郎「ハテ變る心はなけれども、いはば此方の迷ひから、お前に惡名つけさせる、それのみならず彼の人へ。」ト思入。お富「エ、今更そんな。」ト與三郎立ちかけるをお富とめる。これを、唄「嬲るの文字は誰が書きそめし、どうで浮氣な水莖や、一寸つけざしケゝの、無理な手爾波も酒の科、味な妹脊の八重結び。」ト右の文句の間に與三郎こなし有つて、立ち歸らんとする。お富これをとめる枷に、燗德利、猪口、下物など取り出す。お富大きなる杯猪口に一つ飲みこなし、文句一ぱいに振よろしく納まり、お富「サア與三郎さん、お前も一つ飲ましやんせ。」與三郎「イ、ヤ飲むめエ。」お富「とは又なぜえ。」與三郎「ハテ主ある花が濁寢のところへ、夜更けて來るからは、わしが心はよく〳〵なと推量してくんなせえ。斯うして逢つて思ひの丈をいへば、私も心が晴れた。」お富「サアそれ程思つて下さんす心なら、今夜はせめて爰へ寢て、私が思ひも。」與三郎「イヤ　愸爰に長居して、情を受けりやァ思ひが増す、それよりはモウこれ限りに。お富さん、隨分達者でお出でなせエ。」ト件の脇差を持つて出かけるをお富止め、お富「もし。」唄「エ、胴慾な戀風が、仇に嵐と吹き亂す、まつはり解けぬ藤かづら。」ト兩人氣味合よろしく、口說模樣のふり、心のこなしあつて、トヾお富與三郎の持ちし脇差をと

口へ來る事、兩人よろしくあるべし。唄「雲間を漏れて水の月。」ト門口を明け、兩人よろしく顏見合はせ、お富「與三郎さんか。」與三郎「お富さんだの。」ト是れにてお富こなしあつて、お富「ようマア忍んで、來て下さんしたなア。」ト手を執りぢつと思入。與三郎「首尾は可いかえ。」お富「アイ。」ト思入。唄「顏見るからについそれと、思ひ餘りて詞さへ。」トお富與三郎を內へ引入れる。與三郎は手拭を取り裾の塵を拂ふ事宜しく、內の樣子を窺ひ上の方へ行く。お富は跡の栞戸を閉し、しまりをつける。思入あつて雙方顏見合ひ、氣味合よろしく、與三郎お富をひき寄せ囁く。お富こなしあつて小聲の心にて、「暮れぬ中から旅立ゆゑ、何も氣遣ひはござんせぬ。」與三郎「よくまァお前唯一人で。外に內輪の人達へは。」お富「間を隔てたる私が部屋、誰に遠慮もないワイなア。」與三郎「さうか。」トこれを聞き、與三郎につこり思入。唄「何から先へいは躑躅、ほのめく露の仇名草。」ト兩人よろしくお富與三郎を上の方へ廻し、二重の上へ手を引き伴ふ事。兩人右の文句一ぱいに、是れを右の合方になり、與三郎「なる程なア、緣といふ物は乙な物だの。いつか汐干の羣集の中、ふと目につくは姿形、何處の人の女房と。ア、これ男と生まれたかうけには、何卒あゝいふ女子と思うたが戀の病みつき、どう思つても主ある花と、心で心を苦しめたに。」お富「その心根がとゞいてか、過ぎし汐干に見かはせた、多くの人とは水際も。」與三郎「立つか立たぬか過ぐる夜に、噺の寄席で仇口も、其の禮文の返し事、筆にいはせて心の丈を。」

與三郎「おぬしは爰から。」ト歸れといふ仕方して、「早く行かつし。」相生「モシ今の一件、必ず二人寢る事は。」與三郎「エ、早く行けといふに。」トきつといふ。相生「ハイ 引。」と相生考へ怖氣立ちし心にて、與三郎がさしてゐる脇差を貸せといふ仕方して、どうぞ貸して下さりませといふ故、與三郎、コリヤ戻りの犬嚇しだと、この白は捨白は捨白の心にて工夫あるべし。唄「結びかねたる夢見草、人目の關路やうやうと、戀の扉におとづれを。」トこの中與三郎こなしあつて舞臺へ來る。相生よろしく與三郎へこなしあつて、件の籠燈明を袖に覆ひ提げて揚幕へ入る。與三郎門口へ來り、思入して門の戸を一寸おとづれ、與三郎「お富さん〱。」ト小聲に呼ぶ。思入あつてホト〱と叩く。此のうちに正面の伊豫簾あがる。爰にお富好みの著付、狹き袱紗帶を前にしどけなく結び、二重上の方に絹布の夜著蒲團取り出し片よせあり、六枚屏風黒棚のすきや行燈へ明を點じ、好みの莨盆に長煙管、莨筥、小取りまはしなる肴の鉢臺、重行器の類、本道具に拵へし爛風呂など、酒宴の用意した體、杯 猪口など置き竝べ、お富は以前のおきのが受取りし返事の文を繰りひろげ讀んでゐる見得、右始終文句の中のよき程に伊豫簾まきあげる。與三郎「お富さん〱。」ト又こちらへ來て音づるゝ。お富「アイ〱。」ト思入。與三郎答へありしと内の樣子窺ひこなし。唄「聞くに轟く胸の浪、立つや蘆間の風そよぐ。」ト與三郎あたりへ思入。お富宜しくこなし有つて、さすが心とゞろき、足許蹈みしめ、やゝ下駄を穿いて下りたち、門

續き跡したみへ一面に張壁、間に合張、和かな跳込み彩色書、平舞臺上の方のよき所へ錆びたる石燈籠、此の前よき所へ好み春の下草、土堤板へしかけもの、後に壞れる誂へ、下手四つ目垣へ早咲の卯の花、其の外松檜かなめ黐杯の生花を植ゑ竝べ、正面の家體へ伊豫簾を下し、下の前へ出し㊃の道具にある丸木の柴門を押出す事、浪の音、時の鐘の送りにて道具納まる。

ト本釣鐘、誂への獨吟になり、少し窗ぶたを下し暗くする事、唄「吾が妻を戀ひそむ昔妹と脊の、契り片しく袖の露、君が情に去りし世を、かこつの國に奧つぎの。」ト右の文句の内へかすめて風の音、本釣鐘、向うより伊豆屋與三郎著流し誂への脇差をさし、中拔草履頰かぶりし、以前の相生羽織を疊み懷へ入れ、素足雪蹈がけ、誂への提燈籠へ火を點じ、忍び〳〵出る體、與三郎件の文を讀みながら出る。始終心いき宜しくあるべし。この中に、唄「髫處女に比べこす、操にあらぬ仇えにし。」ト花道よき所にて、與三郎「これお主が手引でお富殿へもの言ひかはせば、猶更に思ひがまして今日までも。」相生「私がお文の取り遣り、お媒介をしましたが、今夜は。」ト親指を出し、「これが旅の留守。」與三郎「忍んで來てくれ、繁々と話がしたいと送つた文。見れば凡夫の淺ましさ、心も空に竟爰へ。」相生「お作れ申して來たれども、もし。」ト燈火を下に置き、指にて仕形して、「寢る事は今宵は罷しになされませえ。」與三郎「可いワエ、しようちだよ。」トかすめて本釣鐘。相生「モシ遲くなりますよ。」トせりたてる。

もお鶴と譯があつて、平馬殿と緣組が叶はねえのかと感ぐつたら、却つて燈臺元暗し、手活の花のあのお富と、ちゝくり合つてうしやァがつたか。ム、。」ト屹と思入。松五郎「今夜お前が旅立つと、跡へ彼奴をば引摺り込み、日比の念ひを嘸かし二人が。」源左「エ、。それとは知らずにおめ〱と、今までよくも。」ト思入あつて立ち上り、屹と思案の科。松五郎「子分の奴等に觸れ込まし、女は固より彼の野郎をいつそ是れから。」ト身拵へする。源左衛門とめて、源左「エ、馬鹿をいふなえ。」松五郎「なぜ止めさつしやる。」源左「ハテこれが世間へ流布すれば源左衛門は恥の恥、縱ひ二人を殺しても、穢れた面は雪がれないワエ。」松五郎「ム、尤もだ、さうして兄貴が思案の底は。」源左「コレ。」ト松五郎へ囁く。松五郎「そんなら今夜の實否を糺して。」源左「ア、これ靜かに。」ト思入。松五郎「ホイ。」ト口をおさへる。源左「野暮な聲だぞ。」トこなし、よろしく時の鐘の送りにて道具ぶんまはす。

返し

本舞臺三間の間、中足の家體本緣付、尤も亭座敷の模樣、四谷丸太柱、風流なる切出し欄間、砂壁つのがら窗、緣側木地にて緣の下をすかし、上の方下地窗前づら、下の家體内の横壁の張物、上の方下の地窗の内襖にて出入り、正面見つけ、上の方牀の間、次に四尺程の袋棚、本當に拵へ、襖開け閉て、銀張光琳風の彩色畫、これに

日比兄弟の様にも思ふお主の事だワ。」松五郎「男と見かけ頼むとあれば、俺アちつとお前に折入つて言はにアならねえ事がある。」源左「ム、改まつた其の言分、いはにやアならねえとはそりや何を。」ト何心なく聞く。松五郎こなし有つてぢつとうつむく。源左衛門は牀几へかけ、「いふ事とはそりや何だ。」
松五郎「外でもねえお富どんの事よ。」源左「あいつがどうした。」松五郎「こんな事は云ふめえとは思ふが、それについてもお前は痛い日頃から大腹中、巨細なことには構はぬゆゑ。こなたは何も知らねえの。」
源左「ヤ。」松五郎「斯ういふ譯だぜ。」ト一寸囁き、「ノ、それモウ〳〵、マアかうだ。」源左「箆棒め馬鹿をいふな、彼女に限つてはそんな事が有る物かえ。」松五郎「是れさ親分、そんな事をいふから今までいはずに居たのだ。」源左「こう手前、そりや大方彼女に無心でもいつて、彈かれた悔しんぼうであらう。俺だから可いが滅多な事をいふなえ、ハア、、、。」松五郎「アこれ〳〵親分々々、それだから人に鼻毛をよまれるのだ。川柳點にもある、旅の留守家へもごまの蠅がつき。カウお前お目に掛る樣な姉御でもねえ。したがこんな事は聞かねえ方が可いが、餘り此方が氣の毒故。」源左「それぢやア是れぞといふ證據でもあつての事か。」松五郎「親分にも似合はねえ、證據のない事を言ひ出される物かな。」
源左「さうして證據は。」松五郎「慥かな物は此の文だ。」ト以前の文を出す。源左「ドレ見せやれ。」ト文を取つて見る事あつて、「そんなら先刻平馬殿が執心の娘が親元藍玉屋へ、江戸から來て居る與三郎、若し

よい。」段平「モシ供に立つた源十と竹藏は荷物を持つて。」藤六「山鹿毛樣の旅宿に。」皆々「またせてお きましたよ。」平馬「イヤモウ思ひがけなく馳走になつて氣の毒千萬な、身共も心急きの儀もあれば、お主と同道致して何かの事を申し談ずるであらう。」源左「なる程、さう仰しやれば丁度よい折柄でござりまする。」松五郎「それぢやァ旦那も御同道でござりますかね。」平馬「さればの事よ、この源左衞門に話もあれば、是非とも出帆致す積りぢや。」松五郎「左樣でござりまするか。」源左「コウ松や、お主が兄の所へあの香爐を預けたので、平馬樣も氣が安し、其の金も用を達して能い都合ぢや。何かと骨折であつた。」松五郎「何さお前、兄貴が身分の出世になりやァ、どうで此方も仕合といふ物。」源左「これ留守中の事は何分手前に頼んだぜ。」松五郎「アイ頼まれやした。」源左「それぢやァモウ送るには及ばねえ、緩りと酒でも飲みやれ。」ト身拵へして立ちあがるを、松五郎「オイ親分、マァ一寸お待ちなせえ。」源左「用があるのか。」松五郎「一寸耳へ入れて置きたい事がありますよ。」源左「それでも旦那をお待たせ申しては。」平馬「ナニ源左衞門、其方に仕殘した用事もあらば、身共は先へ參つて居るから、跡よりお來やれ。」源左「左樣なら自由ながら、一足お先にお出でなされて下さりませ。」平馬「承知致した。」松五郎「てんなら旦那。」皆々「私らも一緒に。」平馬「必ずともにお待ち申す。」ト唄になり、平馬向うへ入る。跡合方。松五郎「コウお前、本當に留守を賴むと云はつしやるか。」源左「分らない者ぢやァねえか、

くをふり切り行かうとする、いろ〳〵追ひまはしトヾおきの袂より三本の文のうち一ぽん落ちる。兩人これに心づかず、おきの丈助を突き退け奥へ入る。丈助起き上り追ひかけ入る。此の始終を松五郎うかゞひ居て、あたりを窺ひ〳〵出で來り、右の落ちたる文を取上げ、松五郎「何だ。與三郎樣參る、富より。ム、こりや可い物が手に入つたワヱ。」ト莞爾こなしあつて懐中する。浪の音かすめて此の道具ぶん廻す。

返し

本舞臺三間の間建仁寺垣、下手芝の植込、小高き土堤板へ紅白杜鵑花の盛り、上の方に栗丸太、皮つき柱、花車なる柴門、畫心にかざり、この傍におなじく杜鵑花の芝山、後淺葱幕、誂への通りの飾付、時の鐘合方にて道具納まる。

ト上の方の柴戸を披け、以前の山鹿毛平馬先に、赤間源左衞門旅支度、好みの形、一本ざし淺裏草履、跡より了分丈助、外に以前の中通四人附添ひ、海松杭の松五郎以前の形にて附添ひ出て、丈助「それぢやア親分、隨分ともに御機嫌よく。」皆々「めでたうお戻りを待ちます。」源左「オ、皆達者でゐるが

金包と文と共に渡す事、相生思入あつて、相生「ム、〱。それぢやァ今日は屆けるがね。重ねてはお斷りだよ。」おきの「どうぞ早く屆けて下さんせ。」相生「よし〱今日は屆けて。」ト懷中して右の先方から來た文をば片手に持ち、「この先樣から來た文も、私が持つて居ては却つて惡い。こりやお前、手拭紙にでも遣つてくんなせえ。必ずお富さまへ手渡ししては惡いよ、きつと斷つたぜ」おきの「アイ〱承知ぢやワイなア。」ト文を受取る事。相生「ドレ往て來ようか。」ト時の鐘、合方になり、相生橋がゝりへ入る。よき程に以前のお熊婆出て下手より窺ひ、又忍ぶ事、兩人是れを知らず。おきの後を見送りて、おきの「ほんに彼のお方のいはしやんすも理、わたしも濟まないとはおもへども、あれほどに仰しやるもの。この取次はするものの、ひよんな事を賴まれたものぢやなア。」トこなし。此のとき奥より丈助思入有つて出できたり、丈助「おきのさん、何をしてゐなさるぞえ。」おきの「アイわたしやァちよつと用事があつて今こゝへ。」丈助「コウ味くいふぜ、あの相生と密々話。おれも半口乘せて下せえな。」おきの「エ、またそんな事、おかしやんせ、知らぬワイなア。」丈助「知らざァ俺が敎へてやらうか。」トちよつと手を引つぱる。おきの「何をしなさんすぞいなア。」丈助「オ、しなさる、するのぢやぞや。ハテよい事をしてやるのぢや。」トひき寄せ懷へ手をさし込むを拂ひのけ、おきの「エ、惡い事ばつかり、御新造さまへ告げるぞえ。」丈助「ナニ告げる。つけるが八ばう外が濱。一寸〱。」と抱き付

相生「そりや屆かないで何うする物か、不斷いろ〳〵とお世話になるお富さんの事なり、又先の彼の人も、私が江戸にゐた時分には、年が年中お世話になつた旦那の事。とんだ淨瑠璃の口說だが、いつか汐干の戻りがけ、互に見合はす顏と顏、それから後は川端で、私の席が大入で、日延を三日の續き物、お富さんも彼の人も、聞きに御座つた其の時に、術よく引合はせ、其の時物を言ひ交し、それから斯うした文の取り遣り、文箱地藏と平內樣を俺が二役勤めて居るのだ、屆けないで何うする物か。」おきの「そんなら可うござんすが、お富樣が仰しやるには、此方からお文を上げても先からお返事が無い故に、もしもお前が其の閒で。」相生「何のお前、先から其の度每に必度返事が屆いてゐる。」ト紙入より二三通文を出して、「此の通り持つてはゐるがの、其の中にどんな事が書いてあるか知れまいではないかえ、それをお孃さんか何ぞならよけれども、お富さんには嚴とした、源左衞門樣といふ旦那のある身の上だ。ナ可いかえ、互の爲を思つて見たら。もし此の事が親玉の耳へ聞えたらそりやァ事だ、第一俺等がどんな目に遭はうも知れず、又彼の人の身分にもさはる事だ。それだから先方から來た返事をば、お富さんへ屆けねエワな。」ト思入あつていふ。おきの「お前の詞は有理ぢやワイなア。其の事はお嬶さんに私が言譯をする程に、何卒モウ一度此のお文を急に屆けて下さんせ。」トいひながら文を出し、誂への

たゞぢな奴だワエ。これ金紙の包に入つたは、南蠻祕法の大毒藥。これは酒の中へ入れてから仕方がない。」ト藥紙へ入れし藥を科あつて、「此の藥紙へ入れたのは其の毒氣を消す藥。これまで添へて遣しても、肝心の毒藥さへ今の分では不用な物、毒消藥は猶不用だ。」ト書いてありし封しめぬ手紙を出して、「幸ひあの松兵衛に屆けうとは、藤八へ送る此の手紙へ封じ込んでもどして遣らう、それが可いそれが可い。」ト手紙の中へまき込む中に風の音して、舞臺へおきし以前の藥法書、よき所へ曲尺にて引いて取る。松五郎これに心づかず、手紙を見物に見える樣に懷中して仕舞ふ事あつて、件の藥法書見えぬ故、心づく科あつて、「ヤア〱今まであつた毒藥の用ゐ方を書いた清書を、どつちへかやつたワエ。」トいろ〱考へるこなしあつて、「エ、任よ、此方の名前のねェ品だ。風に飛んでもかけ構ひのないのだ、よし〱。」トこなし。此のとき奥にて、呼び「オイ松五郎さん〱。」松五郎「オイ〱今行くワエ。それにしても。」ト德利の始末にこまる思入。「ア、これ何處ぞへこれを。」呼び「オ、松さん〱。」松五郎「エ、今行くワエ、忙しない。」ト下手の葉蘭の茂みへ心づき、「少しの間爰へかうして。」ト右の包の儘、中へ隱して、「よし〱、これで入用の時に引出すワ。ア、これ此の樣に齷齪するもこれも戀ゆゑ。」呼び「オイ松さん。」ト大きく呼ぶ。松五郎「エ、思案もなく呼びやアがるワエ。」ト唄になり、上手へはひる。奥より縫師おきの、帮間相生、思入しながら出で來り、きの「モシ相生さん、あのお富さんが

お熊「アレまだそんな事をいつてゐるなウ。そこがお前苦勞人、下つ腹に毛のないのだコレ。」ト親指を出し思入あつて、「をナ、一杯味く喰はせてゐるのだ。」松五郎「ム、此方は一杯も喰はせられねエだけ、猶腹が立つワエ。よいく〜こりやモウ此の儘ではおかれねエワイ。」ト立ちかけるを、お熊「ア、これこれ、そんなに荒立つてはいけねエよ、私がとつくり實正を見屆けた其の上で。」松五郎「俺に知らせろ、骨折代は。」お熊「アイく〜承知さ。」松五郎「早く行きな。」トお熊は下手へ入る。松五郎思入、「やれく〜とんだ話だワエ。」ト邊へ思入あつて合方になり、以前の藁苞を提げて出て、「それとは知らないで、お富はよもや俺がいふことを聞くであらう。其の時はあの源左衛門を仕舞をつけ、お富を俺が女房にして、跡式を丸〆と、鎌倉に居る弟の藤八が手をもつて買ひ求めた此の毒藥。」ト懷中より叺莨入を出し、此の中より藥包を二つ、藥法の書付を出し、又藁苞の中より、誂への備前徳利に、保命酒と記したるを出し、こなしあつて、「則ちこの保命酒の中へ仕込んで、道ならねども源左衛門をキユウといはせて。とまづ殺すさ、仕事をするも皆誰ゆゑぞ、お富ゆゑ。そのお富がさういふ譯になれば、こりや滅多には源左衛門には呑まされねエワエ。」と思入あつて徳利をもち、「併し高い金で買つた藥、棄てて終ふも惜しいもの、何ぞの役に立つ事があらう。」ト又藁苞に入れて、「こりや斯うして措いてと。」ト右の藥の二つの包と藥法の書付を持ち、思入あつて、「それにつけても俺が弟の藤八も、馬鹿念の入つ

松五郎「これ〳〵お主も日外はじめて文を頼んだ其の時に、急度骨を折つてくれるといふから、それ相應に禮をして置いたぜ。それにたたねえなゥと、さうすまして居られてはいけめえぢやねえか、さうして文は達けてくれたのか、お富が手へ受取つたかえ。」お熊「受取つた事は受取つたが、又返されたのさ。」松五郎「又返されちやアいけめエぢやアねエか。」お熊「それでも始めて文を遣つた時はね、十が九つ出來さうな鹽梅さ。」松五郎「卜が九つ出來さうな鹽梅で。」お熊「さうしてお富さんが。」松五郎「なんとか云つたか。」お熊「此の文は彼の眞實に松さんが書いたのかえといふから、アイ眞實でござりますといつたのさ。」松五郎「さうするとどうした。」お熊「ほんに顏に似合はぬ優しい人だとさ。」松五郎「その臺詞は極可いの。」お熊「譃にも斯ういふ物をくれるは嬉しいか。」松五郎「ム、。ム、。」ト科。お熊「文を遣すとは今時には甘口な、時代な洒落はよしておくれ。人の目褄にかゝつては惡いといふから。」ト文を二三通出して見せて、「これ此の通りみんな私が持つてゐるのサ。」松五郎「文では惡いといふから、直ぶつつけにやらかしても今の樣に。こりやア俺が氣をひかれたのだワエ。」お熊「ア、可けねエ〳〵、おあひだ〳〵。」松五郎「なぜ〳〵。」お熊「これ。斯ういふ譯だ。」ト囁く。松五郎「なんと云ふ。そんなら今あのお富には、疾うから外に。」お熊「アこれさ。」トまた囁く。松五郎こなし有つて、松五郎「そりや譃だ譃だ。今もお富が一寸した事で、源左衛門殿へやきもちを燒く鹽梅體は、どうして〳〵そんな事は。」

前も餘程苦勞性だなゥ。」松五郎「所がおらァ苦勞になるよ。ぞつこんお前に惚れてゐるから、ソレ日外から度々あのお熊婆さんに賴んで、文で大抵俺が心意氣は知れさうなものぢやァねえかな。」お富「アもし松さん、お前彼の文は本氣かえ。」松五郎「本氣でなくつてどうするものかな。これ〳〵お富さん、娘子供ではあるまいし、親分の噂さんへ、斯う打出して惚れてゐると、男が口外したからは、だいでごつこの一か八。お前だつても苦勞人、察し心もありさうなものだ、萬更恥をかかせてくれめえの。」お富「それだといつて私には、今は源左衞門さんといふ主のある此のからだ。」ト又行きかけるを宜しく止めて、松五郎「サァ其の主の心が。モウ裏はらになつてゐるよ。」お富「エ、しつつこい放しておくれ。」松五郎「イ、ャ放さぬ。これどうぞ。」ト宜しく止める。お富思入あつてぢつと留り、お富「テモ思ふに任せぬ。」トぢつと思入。松五郎「エ、やつぱり亭主へ。」ト抱き付かうとするを振切り、又寄る所を、お富「エ、それ所では。」ト突き退け、「ないワイなァ。」ト唄になり、お富上の方へ入る。松五郎起き反り科あつて、松五郎「今度の話をば、あのお富めが穿きちがへ、何だか源左衞門殿へやきかける鹽梅、可い呼吸だともち込んで口說いても、けんもほろゝ、エ、忌々しい何の事だえ。」トこなし。上のかたよりお熊、前幕の婆にて出て來り、お熊「オ、イ。オイ松さん。」ト呼ぶ。松五郎ふりかへり見て、松五郎「お熊か。」お熊「おあひだだね。」松五郎「めんぼく次第もないワイ。」お熊「たたねえなゥ。」ト思入。

こなたも奥へ。」 お富「イヽエ私は跡から往くワイなァ。」ト源左衛門は平馬をせり立つる。平馬は畜生奴と源左衛門の脊中を叩く。お富見合はせ顏そむける、心々のこなし。これを唄になり、源左衛門、平馬上の方へ入る。跡なまめかしき合方になり、お富科あつて、人を待合はせる意の思入。「相生さんやァノおきのへ頼んでおいた今朝の文、早く否やを聞きたいものぢやなァ。」ト思入。此の内下手より松五郎うそ〳〵出で來り、お富と一寸顏を見合はす事、お富こなし有つて上の方へ行かうとするを引きとめ、 松五郎「これお富さん、一寸お待ち。」ト呼びとめる。 お富「エヽモ悧りするワイなァ。」 松五郎「何もさう悧りする事はねえ。マァ私がいふ事を聞きなせえな。」ト宜しくとめる。誂への合方。「モシ今見た通り聞いた通り、この儂が親分とか兄貴とか云つて、尊敬しておく當時マァ御亭主の源左衛門殿、アノわつぱな男だ。働き者だがあの人の性質で、直に物倦のする男だよ。實は鎌倉に引つかゝりの女が出來て。あの地頭の役人平馬殿が、殿樣の用で旅立を幸ひ、一緒に往つて、其の女の始末を付けうといふ先刻の目算。俺もその以前江戸へ行たその時分は、お前も藝者して、その時には此方も相應に間拍子がよかつたから近附になつて、萬更知らぬ顏の半兵衛といふ譯でもねえ。今いふ通り、赤間の源左衛門殿は、倦きつぽい人だから、今にお前もおあひだにされて、その鎌倉の女をば爰へ引張つて來ようもしれねえぜ。」 お富「エヽ私が倦きられうが倦きられまいが、お前の世話にはならないよ、お

か。」平馬「アいや〳〵先刻奥で一寸逢ひ申した、扨お富殿は源左大人が江戸から苦勞して呼び寄せた程あつて、扨も〳〵美しい。」松五郎「オイ〳〵姉御、親分の旅立はちつと耳寄りな事があつての事だ、惡う思つてはいけまいでは有るめえか。」平馬「マアちつと是れへかけ給へ。」お富「イエ〳〵、面白さうなお話のお邪魔になつては惡いワイなア。」ト思入。源左衞門平馬もよろしくこなし。松五郎松兵衞きつと科あつて、松五郎「ハヽア、それぢやア今の爰の話が。」平馬「とんだ間ちがひだ。」源左「これお富、爰にはちつと込入つた話があるのだ、お主はマア奥へ行きやれ。」お富「その込合つた耳寄りの話ゆゑ、私に聞かせては惡いのかえ。急に鎌倉への旅立といひ、嘸面白い事で御座んせうなア。」源左「何だこいつは爰へ來る早々氣觸な事を吐しやアがる、サア彼方へ行けよ。」お富「高が女の一人位、男の働きでどうでもしなさんせといふ事さ。」源左「篦棒め、おつに氣をまはしやアがる、今言つたのは平馬樣へ娘を取持つ話だワエ、。」お富「知らぬワイなア。」源左「どうしたと。」ト立ち掛る。此の内に松五郎間が惡いと件の苞を提げ上の方へ入る。源左衞門立ちかゝるを平馬とめて、平馬「アこれ〳〵源左衞門殿、可うござる〳〵、參る早々お富殿がひぞりかけたが彼の悋氣の角文字、いとしがられるとは。貴公は何たる果報者。ア、身共もせめて半分あやかりたいな。」ト源左衞門こなし有つて四邊を見廻す。松五郎が見えぬ故、源左「モシこいつに構はずとマア奥で。サアお出でなされませ。」平馬「コレお富殿、

松兵衛「さうして此の香爐の質請は何日頃なされて下さりまするな。」平馬「ハテそりやァ何れ鎌倉へ往つた上、此方の諸用が片づき次第早速に請け戻す、氣遣ひさつしやるな。」松兵衛「お前樣のお詞なら此方も安心、左樣なら私は日の暮れぬ中少しも早く。」源左「道をば氣を注けて行きなせえ。」松兵衛「左樣ならば平馬樣。源左衞門樣、是れから直に。」源左「大儀でごんした。」松兵衛「その中お目に懸りませう。」ト松兵衛橋懸りへ入る。兩人四邊へ科有つて、平馬「先づあの香爐を和泉屋方へこつそりと埋めて置くときは。」源左「それでお前も身分の安心、是れから直に鎌倉へ上る支度を。」平馬「源左衞門どの、先刻申し入れた婦人の一件は。」源左「なんの高が女ひとり、どうなりとなる事で御座りまするワナ。」松五郎「何のお前さん、どんな堅い女でも靡かないといふ事はござりません。」平馬「ム、畜類め。」ト思入。此の時上手よりバタ〳〵と駒下駄の音してお富出て來り、つんとこなし。源左衞門と顏見あひ、源左「オ、お富か。」お富「お前今お出でかえ。」トつんとしたこなし。源左「さうよ。俄に爰にござる平馬樣と、お屋敷の御用で鎌倉へ往てここにやならねえ、立饗應の意で急に思ひついた今日の催し、さぞごたごたと急がしかつたらうの。」お富「お前も又斯うした事なら、一昨日にも一寸知らせておくれなら可いに、足許から鳥とやらで。」ト思入。平馬「ム、分つた〳〵、さては主人が急の旅立ゆゑ、そこでお内儀にはチト逆鱗の體と見えるワエ。」源左「コレお富、なんだえ手前は平馬樣へ御挨拶でもしねえの

く見て合方。平馬「其の香爐の儀について複雜つた仔細といふは斯樣ぢやて。先だつて賴朝公南都東大寺を御建立、その供養の事につき近き中の御上京、其の折から諸大名より禁廷へ家の寶を獻上と事極まり、主人千葉家には一つの重寶と申すのは、往昔、下總の相馬より傳へ受けし夜光の玉と號けし名玉、これを時の帝より御懇望なさるれども、世にも得難き品なれば、此の木更津の鎭守たる吾妻大明神の末社の裏へ、稻荷の神と祀ひ籠めある事は、コリャ世の人の知る所。此の事を委しくいへば、橘姬の由來を說いて開帳の言立めく故、左樣な事は申さぬが、夜光の名玉の其の代りに獻上致す鶴の香爐、近く寄つて御拜とげられませう。ハ、、、。」源左「成程委しい由來は初めて承りました。此の品が彼の譯でお前が持つてござる故、兼て一味企ての邪魔になる穗積隼人。倅の左近は。」平馬「二人共に咎めの身の上。さうして始終は兩人とも、痛い腹は安いもの。シテ松兵衞とやら、この香爐をいよ〳〵其方へ預りくれるか。」松兵衞「それ故にこそ參つたからは、お賴み通り金子と引替へ、百五十兩持參致しました。」源左「サアそれならば香爐は。」ト筥へ入れて手代松兵衞へ渡す。この內松兵衞うちがへより百五十兩取り出し、松兵衞「金は封金、私の主人和泉屋の極印が御座りますれば、兩替仲間の何方で引替にならうとも、お氣遣ひはござりませぬ。」平馬「よし〳〵、百五十兩確かに落手。」ト金を源左衞門へ渡し、「鎌倉へ參り金子は貴公へ。」源左「確乎と預りました。」ト松兵衞右の筥を受取り、

是れからが酒盛だ、相生先生奥へ往て座敷の支度を頼みますぜ。」相生「それでこそ私の世界となりました、そのこと〳〵。」源左「今に行くから用意をしやれ。」丈助「そんなら親分。」相生「お早くお出でなされませ。」ト兩人はひる。このうち松五郎は提げて來た藁苞を下手へ片寄せ、松五郎「サテ早速話さねばならぬのは、日外平馬様が兄貴へおたのみの。」ト四邊へ思入して、皆々もこなし。「彼の鶴の香爐は。」平馬「その眞鶴の香爐は、某が肌身はなさず所持して居るて。」ト懐中へこなし。源左「シテあの仁を同道したのは。」松五郎「されば、いつかはなした藤八といふのが、實は私の兄でござりまする。」兵衛「道理でお前は似てゐると思ひました。其の藤八が參るべきでござりましたが、此の節大番頭の多左衛門が、魚油仕入の事に就いて留守中ゆゑ、藤八は跡を預つて居りますれば、代りに私が參りました。」松五郎「まだ其の上に。」ト小判の形をして見せ、「レコも直に屆けて遣しました。」源左「それは手筈がよかつた。」平馬「重疊々々、然らばすぐに取替せませう。」松兵衛「私も大事の品お預り申して戻るからは、拜見致したう御座りまする。」平馬「尤もな儀ぢや。これが則ち千葉家の重寶、眞鶴の香爐ぢや、篤りと見やれ。」ト懐中より蒔繪のしたる香爐の筥を出し、紐を解き紫の袱紗より件の銀にて拵へたる鶴の香爐を出し、源左衛門へ見せる。源左衛門受取り、源左「ム、なる程、話に聞いたが見るは始めて。是れが千葉家の重器、眞鶴の香爐かな、成程こりやァ結構な品だワエ。」ト松兵衛もよくよ

突き當てたら、そこは此方が男づく、私が一番乘り出して忽ちかゝりをつけますワ。高が小娘一人の事、マァ落著いてござりませ。」平馬「何分骨折を頼み申す。」丈助「もし〳〵あの通り親分が、平馬樣の方へは譯をつけると言はつしやるが。モシ杢兵衛さん、早く爰をば歸んなせえ。」莊屋「歸る事は歸るが、既に斬られるかと思つた故、がつかり腰も拔けかけて足がぶら〳〵。」ト徐々立ち上る。丈助「早く行きなせえ、長居は却つて爲にならねえ。」莊屋「戻ります歸ります。扠々親方、お前が御座つた許りに、斬られる所を命拾ひ。忝うござりまする、しかし饗應はれ酒はすつぱり醒めた。ア、怖い事怖い事、何ぼこの木更津が、貝が所の名物でも、ア、恐ろしい拔身の馳走。」丈助「エ、何を馬鹿いはつしやる。」莊屋「イヤ馬鹿は今年は切物でござつた。」ト橋懸りへ入る。テンツ、になり向うより海松杭の松五郎、好みの拵へにて、誂への小さき藁苞を竪に提げ出る。松兵衛手代の拵へ、合羽を著て脚絆に手甲、中拔草履、旅形にて出て來り、直に舞臺へ來る。皆々見て、源左「オ、海松杭の松五郎か、お主が來るを待つてゐた。」松五郎「兄貴。平馬樣こゝに御座りましたか。」平馬「オ、松五郎殿か。シテ同道したあの者は。」松五郎「コリヤア鎌倉で心易い藤八殿の名代に御座つた手代衆さ。」平馬「ハ、アこりや一件の和泉屋のか。」松兵衛「ハイ松兵衛と申す者でござりまするが、誰方も始めてお目に懸りました。」ト此の内源左衛門は丈助へ囁き、丈助呑込み相生に向ひ、丈助「時に親方がこゝへござつたから、

目もどきの斷口上、俺も平馬樣へ濟まぬ故、度々手を更へ品を更へ懸合つたら、其の中に肝心の彼の娘のお鶴が、どこへ行つたか行方が知れず、何でも是れは神隱との事故に、有體に申したばかり、何分親方、平馬樣へそこを宜しく執成を偏にお願み申しまする。」ト思入あつていふ。源左「ム、よしよし、しかし平馬樣、こりや何か先方に込入つた譯がありますワエ。」平馬「それ故身共猶更存外、彼奴有德なる藍玉屋へ抱き込まれ、却つて先方より扱ひ金を取り、約した詞を反古に致す、それ故彼奴めを討放しくれるワエ。」ト立ち蒐るを源左衞門一寸とめて、源左「マア／＼お待ちなされい。マア待たつしやりませ。此の事は初め私にもお前樣がお話はなされたが、世間並の媒介人へ大人氣なく係り合ふ事もねえと、それなりに聞き流しておきましたが、こりやァ必然その娘をどつかへ轉したに違ひねえワエ。」ト子分丈助へ科あつて、「コウ丈助、お主やァ何ぞ心當がねえか。」丈助「されば俺もさつきにから考へて見るに、たしか彼所の藍玉屋には、江戸から預けられてる與三郎とかいふ若い野郎、美い男でと世間の風聞。」平馬「ム、そんなら其の與三郎とやら申す奴が、彼のお鶴とちゝくり合つたのだな、ホイ鶴の初物を左樣な奴にしめられては、いよ／＼武士が廢るワえ、是れといふも汝が懸合がまだるい故だワ。」ト杢兵衞へ立ちかゝる。杢兵衞驚き入つたる思入。源左「これはしたり、お前樣も取越苦勞な、まだ何うだかしれやァしねえ。モシ藍玉屋が拵へ事で、玉を隱して置くやうな、實正を

助こなしあつて、丈助「山鹿毛様には今日はよく早くお出でなされましたなァ。」莊屋「この杢兵衛などは、馳走になるかならぬ中に平馬様にお目に懸り、誠に可危な所へ主のお戻り。やれ〱びつしより汗をかきました。」平馬「第一は斯うぢやて、貴公も兼て知らるゝ如く、この度身共も殿様より加増を賜はり、鎌倉へ出勤いたすに就いて、未だ定まる妻もなく、閨寂しく思ふ折から、かねて其許も存じの如く、當所の町人藍玉屋善右衛門が娘のお鶴、恥かしながら一目見るよりぞつこん執心。どうぞ宿の妻に致したく存じてゐる折からに、これなる杢兵衛、藍玉屋へは入魂とやら。私が申し入れ媒介の儀然るべく取計らはんと、立派に請けあひし故、時をり〱に心を用ゐる、過分のまひなひ賄賂を以て、身分を捨てて相頼めば承知致し、先方へ首尾相なるやう媒介せんと、日々夜々に刻を延ばし、今日の唯今と相なつた。埒明くの明かぬのと、人を癡者に致した申譯、それ故この平馬、武士道が相立たぬ、貴公が是れへ今少し戻られずば、眞二つに討ち放さんもの、殘念な事致したワエ。」源左「それぢやァ腹を立たつしやるも御道理だ。シテまた杢兵衛殿、こなたは何と平馬様へ御挨拶をしたのだ。」莊屋「サア私もどうか彼のお鶴殿を平馬様へ媒介をする心なれば、段々藍玉屋へ懸合つた所が、はじめ前方で申すには、まだお鶴は年も參じませず、殊に病身ゆゑに縁組もまだ早い。殊に平馬様は御地頭の御重役、此方は町人の事なれば、下世話に申す提灯に釣鐘、釣合はぬは不縁の原。何のかのと九段

相ならぬ、武士たる身共を嘲弄するか、今日までは耳よりな返事を聞かせるであらうと、心待に待つて居つたが、小兒を欺く唯今のいひぬけ。」莊屋「デモそれは有體の事でござりまする。」平馬「吐すなやい吐すなやい、察する所元々から事を企み、武士たる身共を甘々と一杯はめた不屆奴、それへ直れ。いで打放してくれん。」ト刀へ手をかけ屹相して拔きかける。莊屋「ア、御免なされませ〳〵。桑原々々萬歳樂々々々。」おきの「何であらうと今日の事は、アレあのやうに謝びてでござりまする、御堪忍なされませ。」平馬「イヤ〳〵退け〳〵、ならぬ〳〵。」莊屋「これは手ひどい目に逢ふものだ。」平馬「うぬどうするか。覺悟致せ。」ト刀を拔き嚇しに追つかける。莊屋杢兵衛逃げまはる、右の唄祭の鳴物になる。向うより赤間源左衛門羽織著ながし一本差、誂への柾の下駄、跡より丈助子分の拵へ、風呂敷包を擔げ、同じく一本ざし、次に相生前幕の幇間持にて附添ひ出で來る。舞臺はおきの平馬をとめ、よろしく雙方見合つて、源左「イヤナニ平馬さま、何の間ちがひか存じませぬが、マア〳〵お待ちなされませ。」平馬「イヤ〳〵退け〳〵ならぬ〳〵。ヤさういふお主は源左衛門。」おきの「よい所へ旦那さま。」源左「それへ往て、マ篤りわけを聞きまかせう。」トこれにて平馬こなしあつて牀几へかける。おきの後へ控へる。莊屋杢兵衛下手に控へる。赤間源左衛門、丈助、相生、舞臺へ來り銘々牀几へかける事、おきの「旦那がお出でなされた事を、お富さんへお知らせ申しておかうワイなア。」ト上の方へ入る。丈

の木更津では羽のきく親方。」同□「近郷近在を男をみがく手あひが、時をりふしの折見舞。」同△「其の悦びだと言つてこの通り、酒肴もたつひつに。」同×「村方の儂們へ酒をたらふく饗應はしやるからは。」四人「さて〳〵氣をはられた事でござる。」藤六「モウ一度座敷へついでに。」段平「熱燗でモウ一ぱいづゝ。」兩人「過して行きなせえ〳〵。」四人「モウ〳〵澤山にたべました。」若い者×「これでお暇まうしませうかえ。」四人「よろしく禮いうてくだされ。」中通皆々「そこは承知。よう御座りました。」ト右の鳴物にて若い衆の仕出四人橋がゝりへ入る。段平「イヤ百姓衆といふ者は律義なもの、其のかはり言ふ事がみなおあひだだから。」藤六「違へねえ。ときに肝心の正客山鹿毛樣を。」段平「座敷に一人沖の石、人こそしらじかわくまゝ。」藤六「手酌で大かた飲んでで有らう。」段平「しかし今莊屋の杢兵衛親父さんが見えたによつて。」藤六「また直に酒宴になるであらう。」段平「なにしろ己等達は。」藤六「勝手で別にやらかさうか。」段平「それが可い〳〵。」お市、お半「サア〳〵ござんせいなア。」ト右の鳴物にて此の人數のこらず下手へ入る。舞臺へ牀几を一脚直し、是れにて右の鳴物活殺よき程に、上手より山鹿毛平馬著流し挾帶、大小にて庭下駄、杢兵衛莊屋の拵へ、草履を穿き、次におきの前幕の役にて平馬をなだめながら出て來り、おきの「マア〳〵何事も御料簡なされませ〳〵。」平馬「イヤ止めるな〳〵、其方が存じた事ではないワイ。」莊屋「どうも今さら私も思案につきました、マア〳〵御料簡なされませ。」平馬「イヤ

富さん、何を。」お富「エ、。」お熊「エ、モウござんせいなア。」ト無理に引つぱり入る。與三郎うつかり恍惚れて羽織ぬげる。金五郎思入あつて、金五郎「モシ〳〵若旦那。これサ若旦那。」ト羽織を著せる。木の頭、與三郎羽織を被ながら藻脱の樣に向うを見こみ、見とれるこなしよろしく、拍子幕。

三幕目

木更津赤間別莊の場
同　濱邊の場

本舞臺三間の間常足の家體、向う赤壁、櫛形窗の欄間、正面誂へ塗下の瓦燈口、更紗暖簾かけあり、上手一間風流なる障子屋體、これに續き一間の牀の間、この向う茶壁、こゝに飾り付けよろしく、平舞臺上の方に以前の丈助、段平、藤六、百藏、市助、何れも前幕の子分にて住ひ、此の前へ酒肴の道具置きならべ、ずつと下手若い衆、村方若い者にて控へ居る。お半、お市、これも前幕の在所娘にて酌して居る。何れも振舞に招かれし體、總て赤間別莊の體、濱祭の唄鳴物にてよろしく賑やかに幕あく。

藤六「マア皆の衆、可いではないか、モウ少し寛りと飲んで行きなせえ。」段平「親分が御地頭の御用を達す身分になり、心祝ひの今日の酒宴。」お半「それ故に私等もお前方を饗應に。」お市「御酒のお酌や御飯の給仕。」兩人「手傳ひに來た今日のよろこび。」若い者〇「さればこゝの親方の赤間源左衞門樣は、こ

ぎ。何と大層なものぢや御座いませぬか。」與三郎「ム、そいつは大層な事だね。」相生「モシおつりきと
いふは、其の姉御の事でござります。お前さんなんぞはお會ひなすつたら御存じで御座りませう、そ
れ彼の深川の藝者富吉さんで御座いますワな。」與三郎「何だ富吉。オ、さうか、彼奴がこの木更津へど
うして來てゐるで有らう。」相生「否モウ私も此の間こつちへ來て、顔を見て互に吃驚さね。併しそ
れからの手續きで所の衆の贔屓になり、マア私も大きに幸運。そんな事や何やらで今日も取持役と
出かけましたのさ。」與三郎「誠に江戸の者はなつかしい。是れから濱川の湊屋で一口やる積りだ、用が
濟んだら後から來ねえか。」相生「そりやァ仰せなくとも、是非とも推參。」ト花道にて話す中、唄にな
り上手より以前の子分大勢、酒に醉うたる科、妻楊子つかひながら出る。跡よりお富、お熊ばゝア、
おもよ附添ひ出る。相生これを見て直に本舞臺へ來て、相生「是れは皆さんお早うござります。モシ御
新造さん、申譯もござりませぬ。お近附にあひましてお供に後れました、まつぴら御免下さいまし。」
お富「何だね固くろしい。」トこんな事いふ中、子分一人づゝ與三郎とすれ違ふ事よろしく有るべし。子
分の岩吉、すれ違ひながら懐劒を懐より出す。與三郎金五郎慄へる。皆々すれちがふ事あつて、お
富と與三郎見あひ、お富扇を翳す。色合のすれちがひ有りて子分は引きこみ、お富、お熊、おもよ、
お竹殘り、花道まで行きながら、扨は噂あるあの男かと見とれる。お熊「モシ〳〵お富さん。これサお

の湊屋へ往て、今に俺が行くから支度をしておけといひつけて來い。」三太「ハイ畏まりました。」ト鳴物になり三太入る。相生捨白いひ〳〵出て、相生「オヤお前さんは伊豆屋の若旦那與三郎さんではございませぬか。」與三郎「オヽさういふは幇間の甚八、どうして此地へ來てゐるのだ。」金五郎「オ、甚八さんか、今日はもし、能く知音に遇ふ日ぢや御座いませぬか。」相生「イヤモウ江戸でもお前様のお噂たらたら、實は戀しくつて遙々とお後を慕うて參りました。」與三郎「うまくいふ奴さ、しかしマアどういふ事で此地へ來たのだ。」相生「左様でござります、有様は江戸に居つても、お前様はこつちへ來ておいでなさいますし、此の節は色の方もちつと隙になりますし、だからお前様の跡を追つかけ來ました。」併し是れから夏期をかけては牽頭の甚八も、五行亭相生と名告つて、夜は川端へ寄席をかけ、昔噺の兩名たんまりとしめる積りでまゐりました。」金五郎「ム、そいつは味い鎹儲だ。」與三郎「さうして今日はお客で來たのか、又一人か。」相生「サア今日は此の木更津での、赤間源左衛門さんといふお人の内室、濱見物に行くから取持に行けと、所の若い衆に誘はれて參りました。斯ういふ片田舍にもおつりきな人も有るものサ。」金五郎「ナニおつりきとはどういふ譯だ。」相生「さればその源左衛門さんといふ人は、この木更津での利物。今こゝへお出でなさる道で、若い衆大勢よつて酒を飲んでゐる所がござりましたらう、あの手合もみんな源左衛門さんの子分、今日姉御の濱見物といつて、取持の彼の騷

造り物前面一面の總浪の遠見、前に常足の二重けごみとも浪、右そで山芦原、日覆より松の釣枝、よろしく道具納まる。

金五郎「若旦那、前方に見える岩の景色は、どうもいはれませぬ。」與三郎「サアあの岩の上は、七八疊許りもあるだらう、あの上で一杯やる所だ、何と可い岩ぢやアないか。」金五郎「左樣でございまする。いやモ歩むともなしに磯邊へ參りました。」與三郎「眞にさうだね。」トこんな事いひながら上手へ入る。トすぐにばた／＼になり、上手より相生、鰈を持ち走り出てくる。あとより丁稚三太おつかけ出て、三太「これ相生さん、その鰈は俺がつかまへたのぢや、此方へ返しなさい。」相生「馬鹿をいへ、俺がつきあてた、何で汝にやるものか。」三太「それでも俺が見つけて捕らうとしたのだ、此方へ遣せ／＼。」相生「何を小癪な。」トをかしみの鳴物になり、立廻りあつてたうとう鰈を蘆原へほり込む。相生三太を當てて向うへ走り入る。三太脾腹を抑へながら起き上り、三太「相生のべらぼうめ、それ。」ト往かうとする。與三郎金五郎出て、與三郎「これ三太々々。手前マアそりや何の態だ、いたづらも大概にしろ。」三太「いたづらぢや御座りませぬ、大きな鰈を私が見つけて捕らうとするを、相生の馬鹿面めが奪つた故、それで爭うてる所でございまする。」與三郎「又しても惡戯ばかり、大概にしろ、そして手前は濱

與三郎「ハテ又そんな事、つまらねえ事は廢してくんな。俺も今日は退屈したから遊びに出たのだ、それに詰らねえ事をいつて、鬱がしちやアいけないではないか。」金五郎「眞にさうでござりました、つまらない事いひ出して私が惡うございました、お氣に觸へられずと眞平御免下さいまし。」與三郎「ハテマアそんな三指では恐れる。イヤ久しぶりでそつちの顏を見た故、どうか江戸へ歸つた樣だ、そこらで一口やらうよ。」金五郎「よくございませう、久しぶりでお供致しませう。然しあの小僧どんは何時の間にやら、どう致しましたらう。」與三郎「大方磯へ出て汐干の景色でも見て居るだらう。」金五郎「天氣はよし、ぶら〳〵往つて見ませうか。」與三郎「それも可からう。」五八「モシ旦那樣、是れから先は煙草の火が不自由でございます。これをお持ちなされませ。」ト竹に挾みし火繩を出す。與三郎「こいつは氣が利いてゐる。ソレ茶代ぐるみに是れを取つておきな。」五八「ア、モシ〳〵旦那さま、こんなことを。」金五郎「ハテ何もいはずに取つておきなよ。」五八「そんなら戴きまする、大きにありがたうございます。」金五郎「サア參りませう。」ト鳴物になり、東の歩道にかゝる。金五郎「ときに若旦那、私はこの木更津は初めて參りましたが、イヤ風聞に聞いたよりはよつぽど佳い景色でございますな。」與三郎「さうよ、こんな所が江戸に有つたら、錢儲けになるであらう。」トこんな捨白いうて眞中の歩道まで來ると、木なしにて道具變る。淺葱幕きつて落す。

總木更津南町藍玉屋善右衛門樣の所へお尋ね申さうと存じましたが、幸ひ此の所でお目に懸りました、マアこれ御覽なされませ。」ト狀を出す。手紙を取り上げ、與三郎「それは大きにお世話でございました、又弟が何日の事を云つて遣したのであらう。」金五郎「否何の御用か存じませぬが、もし若旦那、お前樣に對しまして私がかやう申すは如何な樣ではございまするが、親共の代からお店の仕事をして、それで渡世をする私、大事の旦那だ惡い事は申しませぬ、貴方のお身の上も親父から承る。大旦那與左衛門樣が、三十をお越しなされてもお子樣が無かつた故、お前樣を御養子にお貰ひなさつた其のあとへ、御出生の與五郎樣なれども、御總領と極つてゐるお前樣。あの與五郎樣は御別家と、事のきまつた時分まで、物がたいお前樣がどうした機に御放埓、御親類へお預けの身の上、それを案じて弟御の與五郎樣が御手紙だらうと、推量致して居ります。マアこんな事は人情本などによく有る事でございます、實のお子へ義理立して、お前さんが放蕩をして、與五郎樣を名跡に立てうといふお意ではあるまいかと、どうやら私は思ひまする。そりや御實子への義理立は御尤もでございまするが、お前さんは先から家へ。」與三郎「これさ〳〵、そりや何をいふのだ。何のあれに義理立が要るものか、第一義理といふ字をわきまへてゐれば、親類や兩親へこんな厄介をかける者か。」金五郎「サ、そりやお前さんは御別家なさつて、氣樂におくらしなさるも、萬更でもなけれども、それでは世間が。」

耳よりな話だ。時に黑戶の若い者中より姉御の待受け贈物を披露して下んせ。」岩吉「違へねえ忘れてゐた。これ姉御、黑戶の若い衆から魚が一船、酒を一駄お前の所へ贈物でござります。」お熊「濱手の納屋へ受取つて、皆の衆には馳走しておきました。後に挨拶して下んせや。」お富「アイ／＼それはマア御心配をかけました、そんなら斯うしませう、皆もこれなら濱手へ往て汐干狩なとしませうワイなア。」岩吉「それが可からう、皆も一緒に。」お富「サア／＼。」皆々「ござんせ／＼。」ト唄になり皆々はひる。トすぐに與三郎丁稚をつれて出る。後より金五郎呼びかけ、金五郎「モシ／＼。」丁稚「モシ呼ぶのは私等の事かね。」金五郎「其處へお出でなさるは伊豆屋の若旦那、與三郎さんではござりませぬか。」ト與三郎振りかへり見て、與三郎「オヤさういふは金五郎どんぢやアないか。」金五郎「ヤこれは若旦那、誠にお久しうござります。」與三郎「眞に久しく逢はなんだ。幸ひ前方に茶店がある、一寸一服やりませう。」金五郎「サアお出でなされませ。」ト　物はやし舞臺へ來る。此の時丁稚三太下手へ入る。五八「誰方樣もお早うござりました、サア一ぷくお上りなさいませ。」ト茶莨盆持つてくる。與三郎「アイ／＼構やんな構やんな。金五郎どん、何の用で此方へ來なすつた。」金五郎「サアお聞きなさいまし、黑戶の親類へ用たしながら成田へも參りたし、此方の方も始めてでござりますから、通つて見ようと江戶を立つ前の日にお店へ一寸參りましたら、貴方の弟御與五郎樣からお手紙が參りました。此の上書の所を的に上

お富「ほんにお前方の其の心配、マァお氣の毒な事で御座んした。モウ皆さんは構はずと、汐干狩なさんすとも、酒になさんすとも、心任せにしやさんせいなア。」岩吉「そのお許しが出るからは、今日一日は無禮講、汐干に命の洗濯婆ァ。シタガお富さんは江戸の結構な所からござつては、何處を見てもこんな田舍、慰みにもなりますまい。」相生「イヤたま〱江戸から爰へ稼ぎに來て、此の土地でお世話になつて居ると、行く先々が氣が變つて、よつ程よく御座りますぞえ。」お富「ほんにお前は江戸ッ子だの。イヤ江戸から來るといへば、この南町藍玉屋善右衛門さんの所へ、江戸から逗留の客があるさうだが、其の客はァ、江戸の何とやらいふ所の小間物屋の息子さんで、放蕩を爲竭して預けられてゐるといふ話、お前方は聞かねいかえ。」五八「成程、儕們は其のお方は見た事はなけれども、大さう美い男だといふ話。」相生「ム、そんなら江戸から來てゐる美い男とは、もしやこの相生の事ぢやござりませぬか。」岩吉「何を馬鹿な。しかしその藍玉屋の家には、お鶴といふ美い娘がある筈だ。」相生「その美しい娘のある家へ、江戸の美い男の江戸ッ子が預けられて居るとは危いものだ。」岩吉「イヤよつ程おまへは苦勞性だぜ。」相生「これ〱今話した藍玉屋の娘お鶴とやらは、親分が熟懇にさつしやる此の濱の御領主、千葉家の役人山鹿毛平馬樣が惚れてござるといふ話。どうぞして鶴をもとめ貰ひ、ひきがしたいとやら、こいつを取持つてあげたなら、褒美をずつしりであらうぞや。」子分〇「そいつは

レおれが除つて遣らう。」時にお富さんは遲いこつちやねいか。」圓八「大方濱の武藏屋で飲んでであらう。」お市「申し／＼前方へ見えるがお富さんぢやワイなア。」皆々「オヽほんに姉御だ、オヽイ／＼。」トすり鐘入、世話の流行唄になり、向うよりお富妾宅の拵へ、お熊婆ア、子分大勢つき添ひ出る。花道よき所にて、お熊「モシお富さんえ、此の間から旦那の源左衞門樣がお勸めなさつたが、やう／＼の事で此の濱見物。しかし何不自由なく派出にして御座つた江戶深川の藝者衆だから、こんな所はつまらないが、又折節は田舍の景色も可いもので御座いまするワな。」お富「眞にお熊さんの言はしやんす通り、かう出かけて見れば氣が晴れて可いといふもの。然し今濱の武藏屋で一つ過した故か大層に醉うたワイなア。」お熊「ナニお前さん、濱風にすこし吹かれりやァ直に醒めますワな。」相生「イヤそれといふも親分が、この木更津で羽振の利く故に、源左衞門さんのお嬶さんに、近づきになりていと、その取持でこの相生なども近年の大酩酊でござりました。」子分○「モシ／＼姉御、むかうにも子分の同類が待つて居る樣子、サア／＼あれへ往きませうか。」お熊「何はともあれ、あれへお出でなされませいなア。」お富「サアござんせいなア。」ト唄になり本舞臺へ來る。子分大勢出て、岩吉「姉御、最前から待ち兼ねた、お早うごんしたの。」お富「オヽこゝへ御座んしたは黑戶の濱の衆達だの。」岩吉「されば姉御がござることは、昨日から聞えてゐたゆゑ、途中の間違ふせぎのために。」皆々「出やんしたワイなウ。」

二幕目　木更津潮干の場

造り物三間の間、向う淺葱幕、上手梅の立樹、鳥居玉垣、眞中に茶屋牀几、下手葭簀張の團子店に草鞋、紙、竹の先に火繩など差してあり、爰に五八團子を燒きゐる。すべて本更津海邊の體よろしくあるべし。辻打にて幕開く。

岩吉「何と賑やかな事ぢやねいか、斯ういうて親分を贊めるぢやねいが、この木更津で飛ぶ鳥も落ちる赤間源左衞門親分が、今度江戸から請出し伴れてござつたお富さんを、濱見物に出さつしやるので昨日からの大趣向、何と大仕合ぢやねいか。」子分〇「さうよ、お富さんも親分の家に居れば、大概な大名の奧樣よりか可い、いふ目が出るの。」團平「イヤ大層な贊めやうだ。」五八「お市ばう、大層蛤を取つたの。」お市「ハイ是れはお富さんが濱見物と聞いたゆゑ、それで態々汐干狩に出て、このやうに拾うてお富さんに上げようと思うて。」五八「ハイ〱團子が燒けました。」皆々「オイ〱これは御馳走だ。」トこの內團八蛤にはさまれ、團八「アイタ、、、、人殺し助けてくれ〱。」皆々「どうした〱、氣を確かに持て〱。」ト見て、岩吉「ハ、、、大笑ひだ、はまぐりに手を喰ひつかりやァがつた。ト

類中がそれなりには濟まぬとて、木更津の伯父御樣が何事も預つて、一先づ藍玉屋へ預けの身の上。さもなくては世間の風說、人の噂も當座の事と、何かなしに彼の地出立と事きまりまして御座りまする。」關路「スリヤ與三郎樣にはの。」良助、關路「木更津へ。」淸八「此の事お知らせ申さうと、わざ〳〵是れへ驅け付けました。」良助「今夜の中にともかく下郎は、元山町へたち寄りませう、マア此方樣は少しも先へ。」淸八「左樣なら仰せに從ひ、お先へ參るで御座りませう。」ト淸八向うへ入る。關路「心ならぬはお國において寶の紛失、をりもをり。」良助「かてて加へし伊豆屋の騷ぎ、シテ瑇瑁を奪ひし惡者は。」關路「その惡徒を詮議の手づるに。」ト囁く。良助扨はと思入。上手より千太郎件の筥を抱へ窺ひ出る。下手藪疊より丈四郎拔刀にて、月は雲隱れ、少し暗がりの模樣、丈四郎良助へ斬りかける、是れをすり拔け關路身をかはせる。千太郎つか〳〵と下手へ行き、良助關路上手より千太郎を當てる。丈四郎良助を突き退け、此の時勘太に行き當り、勘太恟り心づき行かうとするを、關路支へる。千太郎此の中へ割つて入る。關路窺ひ寄つて、關路「扨こそ先刻の。」千太郎「放しやァがれ。」ト此の中かすめたる題目太鼓、丈四郎觀念と斬り込む。五人の立廻り、一度關路の手へ件の筥を取る。トヾ千太郎取つて左右へ蹴飛ばしきつと見得、是れにて月現はる〻。雙方顏見合はせる。木の頭。千太郎右の筥を口に銜へ、きざみについて雙盤になり、此の見得よろしく。幕。

の千太郎、汝らも一つ穴の貉、逃した先を吐してしまへ。」兩人「そんな事は知らねえワエ。」良助「知らぬといやアかうして。」ト引立てうとする。ト右の鳴物になり三人立廻つて、トヾ長九郎嘉四郎逃げ込む。良助跡を追ひかけ上手へ入る。爰へ關路、勘太立廻りながら出て來り、勘太を引きつけ、關路「汝が支へたばつかりに、彼の瑇瑁の盜賊を。」勘太「そんな事を知るものか。」ト振切つて逃ぐるを、ひき戻して立廻り宜しく、此の機に勘太をあてる。其のまゝたぢ〱となる。關路「これも詮議の後日の手がゝり。あの良助は。」ト思入。ばた〱になり、良助以前の飛脚にあひし體にて、連立ち走り出て、良助「あなたは關路さま、これにお出でなされましたか。」關路「オ、其方は良助。」飛脚「お國元より火急の早狀。」ト狀を出す。關路「ナニ此の中へ書狀とや。」ト早い合方、狀を出して讀む。飛脚は提灯をさしつける、讀みをはつて、「ヤ、此の文體では、兼てより父上樣が御預りの眞鶴の香爐を、御寶藏の戸前をあばき、何者とも得知れず奪ひ取り、立退きしといふ知らせの文體。」良助「スリヤ御預りの香爐が紛失したれば。」飛脚「お家の浮沈、ヤ、、、。」關路「一まづ旅宿でわしが戻りを。」飛脚「心得ました。」良助「ござれ。」飛脚「ハテ。」ト走り入る。ばた〱になり以前の手代淸八出て來り、淸八「ヤ御女中樣は此の所に。」關路「さういふ此方は伊豆屋のお手代。」良助「シテ與三郎さまの身の上は。」關、良「なんとなんと。」淸八「あなた樣のお勸めで、一旦元山町へお戻りなされた與三郎樣。併し今まで御放埒、親

と跡逐うて入る、闘路丈四郎のこる。伴助「邪魔な女め。汝からさきへ。」ト伴助縫ひぐるみにて闘路へ撃つてかゝる。丈四郎こなし有つてこれを支へ、丈四郎「無禮な匹夫め。」ト抜きかけるを闘路とめて、闘路「アイヤ返つて貴方のお刀が。モシ穢れませう。」トこなし。鳴物よろしく道具まはる。

本舞臺三間の間、練塀艸の土堤、内より石の鳥居、笠木を見せ日覆より松の釣枝、大音寺前、大鷲の門口を横に見たる道具、題目太鼓にて道具納まる。

ト日覆より月の出、ばた／＼になり、向うより伊豆屋手代長九郎、船頭嘉四郎兩人走り出て、長九郎「アア息が切れた／＼。嘉四郎アノ侍奴は。」嘉四郎「土堤のまがりでたうとうまいた。」長九郎「やれ／＼それ聞いてほつと息が納まつた、何にしてもとんだ處へ與三郎の身寄の闘路とやら。」嘉四郎「彼奴がうせたばつかりに、何かの事がたうとうばれて危い事だ。さうして與三郎はどうしたらう。」長九郎「此のもくが割れると直に藝者めらが、喋つたに違ひなし。」嘉四郎「それぢやア家へ歸つたらう、をしい事だがお前は是れからどうしなさる。」長九郎「與三郎に歸られちやア俺は家へは歸られねえ、これといふも戀の罰だ。」嘉四郎「きびしい祟りだ。」長九郎「新堀ぢやアあるめえし。」トばた／＼になり、兩人足音を聞いてうろ／＼する。向うより良助走り出て、良助「二人ともに爰にうせたな、今の強請騙りの當人、船頭

郎奥へ入る。關路「其の瑇瑁の詮議は追つて。マア差當る與三郎殿を科におとす根差といふは千太郎、よも言譯はあるまいがな。」千太郎「これが證據になるものか。」ト千太郎思入。丈四郎、關路が持ちし狀を取つて火鉢へくべる。かけ煙硝はつと立つ。女形みな〳〵見て、女形皆々「大事の手紙を火中して。」關路「覺えがなければ其の密書、火中致すいはれはあるまい。是れからがなほ詮議、女中は爰に構はずと奥の樣子を。」お兼「お氣づかひなされまするな、私共がとも〴〵に。」關路「何かの事を賴みました。」女皆々「合點ぢやワイな。」ト女形みな〳〵奥へ入る。關路、敵役のこる。關路「たとひ證據がないにもせよ、モウ此の上は此方から事を糺すは千太郎。」丈四郎「たとひ何といはうとも、證據なければ水掛論。」千太郎「ナニおれがしるものか。」ト此の時ばた〳〵になり、淺野良助、中間作助をひき連れ出て來る。良助「證據の手紙は燒失しても、まだも慥かな證據はこゝに。サア何もかもきり〳〵ぬかしてしまへ。」作助「縱ひどの樣に責められても、知らない事は仕方がねえワエ。」良助「イヽヤさうは拔けさせねえ。謀計の樣子は勘太より、汝も加擔の餘類であらう。」ト締めあげる。作助、千太郎を見て、作助「ア、これこれどうかしてくれろ、知らない顏をする事は無いぢやアねえか。」良助「吐さにやいつそ。」ト一寸ぼき立廻る。此の内千太郎逃げんとする。良助捕へる拍子に、千太郎以前懷へすりかへし瑇瑁を落す。關路「扨こそ瑇瑁。」ト取り上げる。千太郎「南無三それを。」ト引奪り、千太郎逃げて入る。良助ソレ

長九郎殿へ、荒倉丈四郎。」ト三人思入あつて順に讀み下す。この手紙長九郎が落せし思入にて面目ないといふ科、千太郎丈四郎へ態を見ろといふこなし。お米「なんとマア恐ろしいたくみ事。」お粂「そんならこの元といふは。」お米「丈四郎さんもやつぱり心は。」ト三人顔を見合はせ、お粂、お米「あんまり惘れた手紙ぢやワイなア。」關路「サア此の手紙の文體では、あらかた樣子も解りましたで御座りませう。是れでも貴方、とも〲に與三郎どのを科人ぢや、下手人ぢやとおつしやるか。」丈四郎「サアそれは。」關路「まだ其の上に瑇瑁の、其の盜人は長九郎殿、よもや知らぬとは申されますまい。」長九郎「サアそれは。」關路「强てとあれば此の書面を以て、一々糺しませうか。」丈五郎「サア。」關路「サア。」皆々「サア〱サア。」關路「か程に慥かな證據があれば、伊豆屋のお手代長九郎、此の返答が承りたい。」長九郎「成程御尤もなる被仰りやう、其の瑇瑁の代物は大事の品故、與三郎樣が家から持ち出して御座つたを、失うてはなるまいと、心をつけて守護する番頭の白鼠、滅多に人手に渡しませうか、則ちこれに。」ト以前の袋棚より出す事。關路「ナニ瑇瑁が。其の品これへ。」長九郎「ハツ。是れを御覽じませ。」ト袱紗を解く。中より煎餅出る。「ヤアこりや瑇瑁がいつの間に。」ト取り出し見て愕り。丈四郎「こりや竹村の煎餅、どうしてそれが。」長九郎「いつの間にやらオ、〱〱。ハテ面妖な。コリヤ斯うしてはゐられぬワエ。」ト長九郎思入あつて奥へ入る。嘉四郎「己も斯うしては居られぬワエ。」ト同じく眞似をして嘉四

身拔をして、其の元宿の與三郎が罪を糺さずば掟が濟むまい、コリヤ身共が申さずとも、内分に致し置けば町役人までが不調法、どうあつても此の儘には置かれまい。」關路「モシ丈四郎樣、是れ許りはさう一概にも申されますまい。其の元宿を洗ふ時は、與三郎殿ばかりでは御座りますまい、まだ外にも一件にかゝりあひ、今更空吹く風と知らぬ顔して御座る加擔人も、そこらあたりに御座りませう。」丈四郎「ナニ關路殿、加擔人とは聞きにくい。慥かにそれと見極めたら、此の座において承らう。」ト屹となる。關路「お望みならば申しませうが、マア第一に此方樣。又お手代の長九郎殿、お前方も此の事は定めて覺えが御座りませうがな。」長九郎「いかに女中のお詞とは存じまするが、斯樣な事は言ふ事といはぬ事、それには何ぞ慥かな證據が。」關路「たしかな證據はこの手紙、それ。」ト藝者お吉の前へはふる。四人「ヤその手紙は。」トこの中お兼上書を見て、お米「かねて申し談じ候通り、郭にて度々遺恨御座候與三郎、何卒恥づらかかせ申したく候折柄、千太郎が指圖に任せ、鎌倉米問屋の息子稻四郎が倅なりと。お内儀さん、このあとはお前さん。」お儀「倅なりと似せものを拵へ、與三郎が戻りがけ喧嘩じかけに致し候、水練致しかんその事ゆゑ、水死と見せかけ與三郎に難儀致させ候間、遺恨を散じ候手段。」トお吉思入あつて、お吉「どれ／＼その跡は私が。尚又伊豆屋が家に傳はり候瑞瑁、屋敷の御用と申し立て取り出し、與三郎に科をぬりつけ、跡々にて賣り拂ひ候事此の儀われら承知いたし候。」

萬更知らねえ顔でもなし、どうのかうのと理窟もいへず、強て斯うとの頼み故、この嘉四郎にも一杯呑ませ、其の場は内密で終つたが、昨夜の人の風聞には、その鎌倉の親許から、息子の行方を尋ねる樣子、もしもくのわれる時にやァ、相手は伊豆屋の若旦那、私もともに引合に、食らひこんぢやァうまらぬ仕事。それだによつて手短に、お恐れながらとやらかすか、それとも俺に路銀をくれて、遠い所へ落してくんなさるか、二つ一つの挨拶が聞きてえのだ、何とわつちが言ふのも無理ぢやァあるめえ。」ト丈四郎こなしあつて、丈四郎「なる程こりやァ尤もだ、表沙汰になる時は、どうでも濟まぬ此の一埒。」長九郎「サア〱それ故にこそ此の間、息子どのから内濟金を取つたちやないか。」嘉四郎「コウ千太兄イ、互に知り合つた中だ、そんな阿漕な事をいはずと、大概にしておくが可いぢやァねえか。」千太郎「べら棒め、あれつはかりのめくされ金で、手前が不承するか知れねえが俺はならねえ。なぜと言つて見ろ、人一人の命だ。四の五のいふのは面倒だ、手前も其の時のかゝり合ひ、これから會所へ一緒に歩べ。」ト千太郎、嘉四郎を引立てうとする。關路「アイヤ兩人まつた。」トとめる。千太郎立ちどまり、千太郎「ム、行くを止めるは、奥に居る與三郎にあはせる氣か。」お米、お熊「ア、もし今お前を奥へやつては。」千太郎「そんなら會所へ出かけるか。」兩人「サァそれは。」千太郎「但しは踏ん込み引きずり出さうか。」丈四郎「成程これは千太郎とやらが申すも尤も。コリャ寧そ表沙汰に仕り、千太郎とやらが

この折奥より關路、湊屋女房お兼、藝者お米つきそひ出かゝりゐて此の中へ入り、關路「マア〳〵待つた。」トとめる。千太郎見て、千太郎「オ見りやァ立派なお屋敷さん、何でお前は與三郎の肩を持つて、イヤサ何でとめ立しなさるのだ。モシありやァ科のある體だよ。」お兼、お米「シテ與三郎さんを科人とは。」千太郎「ハテ科人も科人、人殺しの凶狀持、息子株とはいはせねえワ。」關路「シテ其の仔細はどういふ事で。譯を聞いたる其の上で、樣子に依つては兎も角も。」千太郎「そんなら女中のこなさんが。併し並々ならねえお屋敷さん、話せといふなら其の譯を。」ト此の中清八へ關路囁く事、清八は奧へ入る。丈四郎「身共も唯今詮議の折ふし、其の次第を承らうか。」千太郎「モシ其の譯といふは斯うでござえます。」ト前へ出る。誂への合方になり千太郎こなしあつて、「わつちが乘せた客人は、鎌倉の米問屋稻四郎の息子さん。何か此地に逗留中、玉屋の家へ馴染が出來、度々通ふ其の中に、毎でも歸りはわつちが船。折しも早い朝歸り、大棧橋から押し出して、淵を廻らうとする時に、後から一挺押し出す小船、見りやァ嘉四郎手前であつた。不器用な蹈張りやう、氣を注けろといつたのが、物の間違ひ事の始まり。一つ二つ言ひあふ中、互に客の喧嘩となり、浪に搖られて寄る船の、舷を引き寄せ擲たうとするを、振拂ふ機勢に、どんぶり落ちたは運のつくばい。俺が客人、慌てて飛び込み探しても、折しも早い上汐で、死骸はどつかへ玉なしだ。方法がねえから船へ上り、相手を見りやァ與三郎さん、

長九郎「これはしたり、支配人のわしが扱ふといふではないか、それに待たれぬとはどういふ譯ぢや。」千太郎「べら棒め、端金ぢやァ濟まねえ事だ、それだによつて直應對、達て汝等がせぎるなら、千太郎樣が直接だ。」ト立ち上る、皆々捨白にて態と止める。皆々「これはしたり氣の短い、靜かにしろ〳〵」トとめる。この物音を聞いて手代清八も出て來り、此の體を見て中へ入る。清八「マア〳〵靜かにしなされ。今奧で聞けば、若旦那に會ひたいといふお人さうなが、マアそれも支配人の長九郎殿が呑みこむとあれば、暫く任したが可いではないか。」千太郎「エ、喧しいワ箆棒め、そこを退きやァがれ〳〵。」ト清八を突き倒す。是れにて丈四郎態と腹立ちし科にて、丈四郎「ヤイそこな素町人め、最前より身共おし默つて窺ひ居れば、立ちはだかつて無禮な奴。殊に與三郎へ達て會ひたいと申すは、泣々の事ではあるまい。仔細を申せ、ド、どうぢや。」千太郎「知れた事、あの與三郎には凶狀のある身體だワ。」清八「ヤ。」ト吃驚思入。丈四郎「ナニあの與三郎に罪があるとは、そりや又どうして何科が。」ト心遣ひのこなし。千太郎「オ、外でもねえ人殺しだ。表沙汰にする時は、一も二もねえ息子は下手人。」皆々「ヤァヤァ〳〵。」ト思入。千太郎「始めは俺も知れねえ積り、僅かな金の口塞ぎ、知らねえ顏で居て見たが、この二三日は世間の噂。モウ斯うなつちやァ仕かたがねえ、與三郎をつれて出て、此方の科の身脱をするのだ、與三郎。」ト立ち懸り奧へ行かうとする。清八長九郎さうはならぬととめる事一寸あつて、

長九郎「そのまた堀の船頭さんが、何の用があつて來さしつた。」千太郎「其の用といふのは伊豆屋の息子さん、與三郎さんに逢ひに來やした。」嘉四郎「オヽ、誰かと思やァ千兒ィ。何の用か知らねえが、いま若旦那は、ぐつすりやつて寐て御座らァ、今の事にやァいかねえワ。」ト知らぬふりにいふ。仲居もこなしあつて、女中〇「ほんにさうで御座んす、與三郎さんは滅多に醉うて御座んすゆゑ、とても逢うても埓はあくまい。」女中△「急な事でなくば明日の事に。」兩人「なさんせいなァ。」千太郎「どうして／＼、俺が命に拘ることだ、明日所か一時がむづかしいワ、早く會はしてくれ／＼。」ト思入あつて、嘉四郎おもひ出したるこなしあつて、嘉四郎「なる程、お主がさういふので氣がついた、此の間の船の一件か。」千太郎「知れた事よ、俺が遠い所へ遣られりやァ與三郎さんも身の上だ。番頭さん、そんなものぢやァごぜえやせんか。」嘉四郎「ナニ與三郎が身の上とは、そりや如何致した譯合ぢや。」長九郎「イヤ／＼コリャなか／＼貴方方のお耳へ入れまする事では御座りませぬ。これ／＼千太郎殿とやら、其の事は儕も此の間うす／＼聞いた噺、一方ならぬ一大事。儕が内々扱ひませう程に、マァ／＼穩便に賴みます。」嘉四郎「殊には家もあるお人、爰へ來るにやァ及ばねえ、家へ行つたが可いぢやァねえか。」千太郎「べら棒め、そこに如在があるものか、家へ往つて聞いて見りやァ、四五日も家へは歸らねえと言ふ故に、みえの場所でも仕方がねえ、こつちの體へ火のつく仕事だ、はやく與三郎に逢はしてくんねえ／＼。」

くめ、こいつはちつと舊い奴だが總身が金で冷やアしねえか。」ト思入。此の時奥にて人音する故、千太郎竊と下手へ忍ぶ。やはり流行唄の合方にて、奥より丈四郎長九郎、前幕の船頭嘉四郎、仲居みなみなつき添ひ出て來り、嘉四郎「これは旦那方、毎々ながら御全盛でござりまするな。」丈四郎「オ、さういふは船頭の嘉四郎、扨は與三郎と同道して奥へ參つて居つたのぢやな。」嘉四郎「左樣でござります。貴方がたが爰に御座る事は、先刻より存じて居りましたが、送つてこゝへ來て居りますれば、據所なく今までついて守をして居りました。モシあれは番頭さんにお聞き申したら分りませうが、あのお邸の女中は、アリャ與三郎さんの何でござりますね。」長九郎「ハテあれは彼の野良くら殿の實の兄嫁さ、いくら女が口先で歸れといつてもどうして〳〵。」丈四郎「あの通りの始末では、どうでも勘當は近きにありだテ、アハ、、、。時に嘉四郎、そつちはこれから歸るのか、どうするのだ。」嘉四郎「左樣サ、私はあなた方のお供をいたしたう存じますが、まだ伊豆屋の息子さんがゐますから。」長九郎「それぢやアどうも仕方がねえ、歸りを氣を注けてあげて下せえ。」ト態と立役にいふ。此の時下手より千太郎出て來り、皆々へ向ひわざと白を切り、千太郎「モシ憚りながらお聞き申しますが、お前さん方は伊豆屋の若旦那のおつれ樣かね。」長九郎「これ〳〵待たつしやい〳〵、内の若旦那を尋ねて、可怪しな風體の人ぢやが何處から來たのだえ。」千太郎「アイわつちかえ。わつちやア千太郎といつて堀の小船乘さ。」

紗に包みしを取り出し、「ォ、幸ひ〳〵、こゝの袋戸棚へ暫時の間忍ばせて、よし〳〵。」ト袋戸棚の中へ隠して此方へ來り思入あつて、「斯うして置けば誰も氣の注く氣遣ひなし。まづ一方はこれでよし、是れから行つてあのお米、存分に怨みをいうてやらん、さうだ〳〵。」といふまゝに、奥の間さして入りにける。ト淨瑠璃を語りながら、こなしあつて奥へ入る。始終はやり唄の合方。この以前より下手より千太郎出かゝり窺ひゐて、此の時ぬつと前へ出てこなし、千太郎「べら棒め、此の間から俺を頼んで、あいつらが謀計の種をさづかりながら、俺が爰にゐる事も知らず、味い仕事さして耐るものか。よし〳〵彼奴は此方へ濡手で粟とせしめてくれう。」ト思入あつて、袋戸棚より以前長九郎が入れたる袱紗包の筥を出して見て、「こいつは少と嵩ばりものだ、懐へ入れては始末がわるい。」トいろ〳〵工風する事。「可いワ斯うやらかしておいて脊中へ御安置申せ。」ト内懐から脊中へ廻し入れる。「これから跡へ何ぞお定まりの替玉を入れておきてえ物だ。」ト思入。そばに有り合ふ以前の竹村の煎餅のさゝ折を見つけ、「此奴は可い吹替があるワエ。よし〳〵。」ト件の折を一つ取り出し袱紗へ包み、もとの通りにして袋戸棚へ入れて此方へ來り、科あつて、「斯うしておけば大丈夫。そりやァさうと、此方へ捲き上げた今の筥は、確かに中は古渡の鼈甲、こいつも大金になる代物だ、この拍子運のいい所から、與三郎にぶつかり、今日は是非ともいつかの事を、表向と嚇しかけりやァこいつも金。雙方共に金づ

入れて居るゆゑ、お米「アイタ、、、、。」ト痛き思入。長九郎吃驚して手をはなす。お米飛び退き、長九郎「エ、何だ聲を立てて。コレどうも爲ないのに痛いなどと、子供ぢやァあるまいし。」お米「それでもお前、懐へ何か入れてお出でだねえ。なんだか角ばつた物を入れて居なさんす儘で、それで私へ悪戯をなさんす故、何様に痛う御座んしたやら。」トいはれて長九郎心づき懐を見る。此の時件の箱懐より出かける。長九郎「ム、此の箱か。」お米「モシ一寸それを。」ト立寄るを身構へ、長九郎「どつこいどつこい、手をつける事はならぬぞ。此の中には奇々妙々といふ品があるが、それとも其方が儕がいふ事さへ聞くならば、此の箱の裏はいざ知らず、まだどの様な珍物でも見せる意、サア返答は何と何と。」ト宜しく逃げるお米を捉へんと追ひ廻す。トヾお米ふりきる。お米「エ、モ執こい、知らぬワイなア。」ト長九郎を突き飛ばし唄になり奥へ入る、跡に起き直り邊へ科あつて、長九郎「ア、痛い〳〵。コレお米、酷い目に逢はせ居つたな。誰あらう伊豆屋の番頭長九郎ともあらう者を、斯様な目にあはせるとは、そりや聞えぬ胴慾ぢや、これお米ばう。」ト邊を見廻し、居ぬ故に、「ヤいつの間にやら逃げ居つたか、エ、忌々しい。さりながら今お米奴が此の箱へ氣の注いた様子といひ、又奥へ來て居る與三郎が身寄の關路とやらが、最前云つた詞の端、コリャ俺が爰にこの瑇瑁を持つて居ては可危いもの、何處ぞしばらくそこらへ忍ばせ所は。」ト宜しくあたりへ科あつて、桐の箱へ入れし瑇瑁を箱のまゝ袱

三郎さんはちつと間の悪い所ぢやによつて、今に私が間を見合はせ、會はせてあげよう程に、あの向うの小座敷で少と待つて居なさんせ。」千太郎「そりやァお前さん、會はせてせえおくんなさりやァ、待たなくつてどうするものか。殊にお前さんやお米さんのいふ事だもの、何處へでも行つて待つて居やせう。」お米「そんなら向うの三疊で待つてゐなさんせ。」お兼「サァ私が案内して上げう。」ト立ち懸る。千太郎兩人へ科あつて、千太郎「そんならもしきつとお頼み申しますぜ。」お兼「サァ御座んせなァ。」ト流行唄になり、お兼、千太郎をつれ下手へ入る。お米殘り思入あつて、お米「ほんにマァ此の間から樣子を聞けば、いつぞや玉屋で初會で御座んした鎌倉のお客さんと、大川で船と船との大喧嘩とやら、どうした物の間違か、與三郎さんにとんだ災難、又その事を種にして、あの人が強請に來たのでござんせう。どうぞ今日は與三郎さんを、切り拔けさして上げたいものぢやなァ。」ト思入。この時後に長九郎うかゞひゐて、後よりそつとお米に抱き付く。長九郎「しめたぞ／＼。」お米「アレ誰方でござんす、惡い事なされまするな。」長九郎「誰方でもない、儕ぢや／＼。」トしなだれかゝる。お米「エ、モ執こい、よして下さんせいなァ。」トふり切る。長九郎「どうも其のぴんしやんとした所が猶たまらぬ。幸ひあたりに人もなし。」ト邊へ科あつて、「モウ／＼。」ト後だきに〆る。お米「アレモシそんな惡い事なさると、聲を立てますよ、アレ／＼。」長九郎「モウ斯うなつたら逃しはせぬぞ／＼。」ト締める。長九郎懐に箱を

レキは何處にゐるのだ。」千太郎「向うの花屋敷だといふ事だ、コレ。」ト勘太にさゝやき、「ナ、よしか。」勘太「よし〳〵合點だ。」ト行きかけ思入あつて、「間違うてくれるなよ。」千太郎「承知だといふ事よ。」ト是れを流行唄になり、勘太は橋懸りへ入る。千太郎は門口へ來り、うそ〳〵内の樣子を窺ひゐる。此の時奥より藝者お米、お米「アイ〳〵今すぐに行くワイな、一寸待つて下さんせ。」ト捨白をいひながら出て來り、千太郎を見て、「オ、お前は此の間御座んした千太郎さんか。」トいひ捨て上手へ行かうとするを、千太郎「オイ〳〵お米さん、何も俺だといつて、そんなに逃げなくても可いぢやァねえか。」お米「イイエ逃げはせぬけれど、今奥でお客が呼んででござんすもの。」ト又行きかけるを、千太郎「これさ何も怖い理窟はねえ、俺だといつて元を糺しやァ、おまへ方も相應におかげをあづかる元山町の伊豆屋の息子、與三郎とおんなじやうに小間物問屋の息子さん、あんまり粋が身をくつて、柳橋からごろつきの、たうとう堀の小船乘、かういふ身空になつたとて、さう見くびつた物ぢやァねえ。これサこの間の一件だ、奥に來て居る與三郎さんに、一寸逢はしておくんなせえ。」お米「サア爰へ呼び申しても上げうけれど、此の間からの流連で何かの埒も明くまい、それに又今しがた、お邸の女中のお客が、何か眞面目なお話故、今に呼び申して上げう程に、モウ少しどこぞで待つてお出でなね。」千太郎「どうか急に會ひてえものだ、どうか呼び申しておくんなせえな。」お米「オ、誰かと思へば堀の千さん、今與

れさ。」ト慨としたる思入。　闕路「そんなら皆様。」　良助「奥の座敷へ御案内。」　女皆々「サアお出でなされませ。」ト唄になり藝者お米、お吉、女房お兼さきへ、闕路、良助、清八跟いて奥へ入る。跡より女中〇△も奥へ入る。丈四郎長九郎殘りこなしあつて、　丈四郎「何の事だ馬鹿々々しい、折角味く飯みかけた所へ、あの女奴が參つた許り、大きに酒が滅入つて參つた。」　長九郎「殊に與三郎にかこつけて持ち出した瑇瑁の事までけどつた樣子。どうやら此方の目算が。」　丈四郎「エ、其の樣に氣を揉むな。まだよい思案はさま〲あるワ。」　長九郎「何かは奥の小座敷で。」　丈四郎「申し談ずる其の間。」ト長九郎女中へ指圖して、　長九郎「ソレお下物を取りかへて。」　丈四郎「飲み直しに致さう。」　長九郎「左樣ならば丈四郎樣。」　丈四郎「サア來やれ〱。」ト流行唄になり、丈四郎先へ長九郎附添ひ奥へ入る。此の唄をかりて向うより宵の口の千太郎、船若者のこしらへ、跡より以前のむぐりの勘太、頰被はしてつき添ひ出て來り、　勘太「コウ其方もよつぽど分らねえ者ぢやねえか、此の間の分口はあんまり酷いぜ。こつちやア命がけの仕事をして居らア、モウちつとどうかしてくれよ。」　千太郎「これ靜かにいへ、邊の人が聞くワ。あのときャアお互に命がけだ、俺も少許ばかり可い事はしたが、そこが惡錢身につかずだ、三日が中にちやんころなしだ。所で今日は與三郎の家へしかけて、又一資金と思つたが、矢張流連に居ると聞いたから、そこで此方へしかけて來たのだ。コウ手段つけるうち、そこらで一寸待つてゐさつし。」　勘太「さうして

は。」長九郎「珍らしい事を聞くものだなア。」トみな〳〵思入。良助科あつて、良助「斯うなるからは其の譯いつてお聞かせなさるのも、此の座の面ばれ關路様。」長九郎「シテ與三郎と此方にはどういふ譯の。」丈、長「緣續き。」關路「いかにもその仔細といふは、與三郎殿と私が夫左近殿は血筋の兄弟。」丈四郎「ヤ。」ト思入、合方。滑八「かねて養子の御身分とは、噂に聞いて居りましたれど、委しい事は今が始めて。」

關路「與三郎様が伊豆屋の家の養家となつた其の譯は、實親隼人様が四十二の二ッ子、藁の上から親知らず。」長九郎「そんなら伊豆屋の與三郎は此方が舅の隼人殿が。」お富「血筋のお子で御座りましたか。」ト敵役顔見合はせ、長、丈「おもひがけない、初めて聞いたわっ」良助「われらが主人隼人様は、物堅い御性質、御内方小篠様、御夫婦共に養子にお遣りなされてより、其の後は一度も御對面なされぬ故、實の血筋の二親のお顏は元より、兄弟も御存じあらぬ事ながら、不思議な事で此の間關路様と此の良助。」

關路「お目にかゝりし與三郎殿、色々話の其の内に、聞けば伊豆屋に義理ある弟あるとの事、此の程遊所に入りびたり、身持惰弱も樣子のある事、何はともあれ與三郎殿に會うて、今宵の裏に一先家へ戻さぬ時は、如何に慈愛しみ深き親御ぢやとて、親類中の手前もあり、勘當せねばならぬとて、以ての外の御立腹、それゆゑ參つた今日の時宜、奧へ參つて面會なし、與三郎殿に意見せうとも、よも御批判はござりますまい。」丈四郎「サそれは。」關路「申分はござりますまいがな。」ト思入。丈四郎「勝手にめさ

清八「御用むきなら私どもへ御註文さへ下されば、聊か間違は御座りませぬ。」關路「其の御用ゆゑ態々元山町へ參りし所、親御喜兵衛殿にも對面致し、段々の樣子も聞けば、夜どまり日どまり、身持不埒の與三郎殿、殊には伊豆屋の家に傳はりし瑇瑁まで持ち出しあるとの事。何れ御用に立つべき品、その儘には捨ておかれず。シテ與三郎殿には。」お俊「アノ離座敷で、みなさんと御酒で御座りますといなア。」お米「與三郎さんへ御用なら。」お吉「私どもが御案内。」女形皆々「申しませうワイなア。」良助「左樣なら關路樣、御遠慮なく奥へお越しなされて御意見なされ、とにかくお家へお歸し申すが御當人のお爲、伊豆屋のお爲と申すもの。」清八「如何にも左樣仰せられて下さりまするが御得意樣の有り難さ、何分宜しく貴方樣。」長九郎「これはしたり、清八なんの汝が小差出た、あなた樣へ失禮千萬、すつこんで居りませう。伊豆屋の爲には白鼠ともいはれる此の長九郎が、これまで度々意見をいうても馬の耳へ念佛、少しも分らぬ放蕩者の若旦那、モウ意見も諫言もおきにしたが可いワイなウ。」次四郎「如何樣箸にも棒にもかゝらぬのらくら、その放埒者を捉へてお爲ごかしの世話やきぶり、殊には女性の御身の上、世間の聞えも何となら、他人の此方が要らざる事と、いふまいものでも御座らぬぞや。」トこなしあつていふ。關路「なる程、他人の事なら捨ておけども、夫が爲には肉縁ある與三郎殿、舅御樣の内意も受けし故、それゆゑ是非に與三郎殿へ。」清八「ナニ與三郎樣を。」女形皆々「他人にあらぬと仰しやる

きまして、參りまして御座りまする。」丈四郎「なる程それにてお出での樣子がさらりと知れた。ア、數へて見ればモウ彼これ三年越にも相ならうとも、そこ許も吾等とは同家中、香取潤平殿の娘御にて、鎌倉の奥勤め、お暇賜はり親許へ戻られた其の時は、文金島田の御殿風。その美しさ〳〵、一寸見るから其の姿に身共もぞつこん惚れた故、何卒宿の妻に申し請けたいと、人をもつて度々申し入れたれど、お手前の親潤平には不得心で、權もほろゝな其の挨拶。千葉家の某へ養女にやるとの斷りなりしが、今聞けば夫の名代に參つたとやら、折目正しい姿態は、扨は千葉家へ緣邊を。」ト思入。關路こなし、良助思入あつてさし出で、良助「ハテ知れた事、今では千葉家の重役たる穗積隼人樣の若旦那、左近樣の御内室、御名もあらため關路樣。」關路「それも父上母樣の、お許しありて女夫の固め、今は主ある此の身の上。」丈四郎「その主のある身をもつて、女の用なき此の色里、何故これへ御座つたぞ。」關路「それも今いふ御用の爲に。」丈四郎「何と。」長九郎「御註文なら元山町の店へお出でもなさるべきに。」清八「爰へお出でなされたは。」丈四郎「その御心底が承りたいな。」ト思入。關路「ハテ其の大切な御用をば、申附けたる伊豆屋の總領與三郎殿、此のほど聞けば其の以前に打つて變りし放埒にて、外を内なる身持の取沙汰、左樣な所業である時は、及ばずながら意見をも加へん爲に參りました。」丈四郎「ハテせいしやうかわきな女の才に。」長九郎「與三郎殿は、大切な御用の事は扨措いて、此の頃の酒びたし。」

い衆の供はちよつと良助へこなしあつて橋がゝりへ入る。茶屋の男は提げたる折を此方へ持ち來て、
供「ヘイお約束の品でござります。」ト長九郎に渡し科あつて下手へ入る。長九郎「オツトよし〳〵、御苦勞御苦勞。」ト件の菓子折を、長九郎受取りながら關路を見て居る。この中丈四郎、關路良助と顏見合はせ、丈四郎「オ、珍らしや此方は慥か。」トいふに關路も振返り見て、關路「オ、ほんに貴方は丈四郎樣。」丈四郎「まづ〳〵是れへ。」ト科、關路上座に直る。清八「今日は定めて此の吉原を御見物、それ故爰へ。」兩人「お立ち寄りでござりまするか。」關路「何れもの推量通り、音にも高き東の名所、出府致した折柄なれば、態々これへ見物がてら。」丈四郎「スリヤ其許にも此の所へ、女子の御身で何用あつて。」關路「如何にも夫の名代、お主の御用で。」丈四郎「ナニ夫の名代お主の御用に、ハテナア。」ト思入、良助こなしあつて、良助「ア、イヤ其の儀は私がかい摘んで話を致しませう。この度關路樣が御當地へ態態御出府なされた其の譯は、今度結城家の姫君樣が、我等が主人千葉家の若殿左門之助常房樣へ御緣組、定めてそれ故あなた樣にも結城家の御用人、色々御支度もござりませうが、又われ等が主人も同じ事、嫁君をお待受の其のために、お名道具からお召の品々、イヤモウ莫大なる御支度さ。」關路「お輿入なる姫君へ進ぜられる櫛笄の御用向は元山町の伊豆屋方へ仰せつけられ、尤も外の品は兎も角も、女子の髮のかざりの品は、女子の鑑識が格別と、御主人のお詞で、それ故勤むる今度の御用につ

座りまする。殊に又彼のお方様も、一寸噂に承れば、この四五日は此の郭へ來て御座るとの事、それ故昨日お勸め申して態々こゝへ御同道。」湊屋女房お兼「ほんにあの伊豆屋の若旦那、與三郎さんの事を今もあのお方がお尋ねなさんした故、委しうお話し申して上げました。先刻までは私どもの二階で御酒をあがつてお出でなされましたが、先刻太夫衆が誘ひ出しに來た故に、此の花屋敷へ。」若い衆「それ故これへ御案内申したのでござりまする。」良助「モシ奥樣へ、ツイ前方の栞が花屋敷でござりまする。」關路「何はともあれ、あれなる酒席へ。」皆々「サアお出でなされませ。」トやはり右の鳴物にて皆々舞臺へ來る。舞臺の女形は此の中、女中○△も出て、藝者お米、下女お瀧、皆々捨ぜりふにて酒宴になり、此の時湊屋女房お兼を見て科あつて、お米「オヤそこへお出でなさんしたは湊屋のおかみさん。」女皆々「ようお出でなされました。」お兼「オヤ皆さんお揃ひでよかつたねえ。」お岩「モシお客さまで御座りますかえ。」お兼「アイ與三郎さんを尋ねてお出でなされたお客さま。かのお方は此方かえ。」女中「ハイ奥の隔座敷で御座りまする。」女中○「アノ宮戸さんや秀さんが先棒で。」お吉「いつもの通りの大酒盛。」お兼「そりやマア嘸賑やかな事でござんせうなア。」トお兼門口へ向ひ、「モシちやうど奥へかのお方が、サア／＼貴方、これへお入りなされませ。モシお客様だよ。」ト是れにて舞臺の女形、女中○△出で迎へ、女中「サアこれへお越しなされませ。」ト捨白にてわや／＼いふ。是れにて關路、良助内へ入る。若

卒この者共もこれに居りまして、お取持致しまする間、どうぞ御機嫌直して今一獻、召上つて下さりませ。これ〳〵お米さん、お吉さん、お前方も賑やかにお取持〳〵。」お米、お吉「アイ〳〵合點でござんす。」お米「サア〳〵これからは何なりと、お座敷の浮立つやう。」女中兩人「私共もお座敷で一つ戴きませうワイなア。」丈四郎「そんなら其方共も此の所に居つて取持致すか。」女皆々「ハイお取持せいで何と致しませうぞいなナ。」丈四郎「オヽよし〳〵、殊に長九郎清八が、事をわけての挨拶ゆゑ、料簡致して遣はすワ。」長九郎「そりや御料簡下されますとか、エヽ有り難う存じまする。」丈四郎「それお銚子のお代り。」女中「アイ〳〵畏まりました。」ト兩人立つて銚子を持ち、「お銚子だよ。」トいひながら奥へ入る。藝者お米は外の銚子にて丈四郎に酌をする事、皆々よろしく捨白。是れを流行唄になり、向うより左近妻關路、丸髷裾模樣、派手なる方の屋敷風、跡よりお兼茶屋の女房の拵へにて附添ひ、この次へ以前の淺野良助、この跡より茶屋のわかい衆、竹村の卷煎餅を入れたる振出の秤を三つばかり、くご繩にて結へしを提げ、この次へ手筥の小風呂敷を持ちし供一人附添ひ出て來り、花道にて向うを見込み科あつて、關路「何とマァ花の吾妻に聞き及ぶ、わけ吉原の郭景色、四季のへだてもおし竝べて、きそひくるわの全盛は、ほんに女子の私たちさへも、おのづと心うかさるゝ、テモよい眺望ではないかいなア。」良助「如何樣、貴女樣の仰しやる通り、此のマァ繁華の郭の景色、一度は御見物遊ばすも、話の種で御

つてか、つて與三郎さんへ酒を侑めるそれ故に。」女中〇「ほんにモウ毎度ながらお前さん方の氣あつかひは。」女中△「わたし等がよう存じて居りまする。」丈四郎「エ、つべこべ／＼と喧しい。左右あの與三郎には女がちやほや致す、あゝいふ奴がある故に此方は何時でもお間だ、サア是れからは仲の町へ參つて、湊屋で飲み直しと致さう。」長九郎「それも宜しう御座りませう。」ト立ちかけるを手代清八とめて、清八「あゝモシ／＼暫くお待ちなされませ、私が斯樣申すはいかゞなれど、長九郎殿もマア下に居て聞いて下され。今日爰へ斯うして丈四郎樣のお取持で、打ちつれ爰へ來るといふも、實はと申せば主人が大事、此の度の御用首尾よく勤めうばかりでは御座りませぬか。また今丈四郎樣が御立腹なされて、お歸りなさるといふ事、相手はやつぱり主人の與三郎樣。」ト女形に向ひ、「なりやお前方も與三郎樣を大事と思ふならば、此の場に御座つて丈四郎樣のお取持してくれたが可いでは御座りませぬか。」お米「成程なア、さう云うて見ればそんな者で御座んすなア。」清八「サアそれぢやに依つて皆の衆も、爰でお取持して下され。」ト長九郎に向ひ、「マア長九郎殿、そんなものでは御座りませぬか。」ト長九郎不承々々に煙草を喫みゐて、長九郎「なるほど、コリヤ清八がいふ所が尤もぢやワエ。」清八「サア尤もか道理かは知らぬけれど、お前までが一緒になつて腹を立てては、チト都合がわるう御座りませうぜ。」長九郎「如何さま是れは出違ぢや。イヤナニ丈四郎樣、唯今清八が申す事、お聞きの通りの始末合、何

本舞臺三間の間、常足二重、大和葺廂附の家體、蹴込竹さんの板羽目、上手一間折廻の障子家體、正面茶壁、上手へよせて牀の間、眞中に三尺更紗暖簾の茶立口、軒先へ四季の花色ざしの模樣つきし提灯を引つかけ、いつもの所門口、是れに花屋敷と記したる掛行燈、下手建仁寺垣にて見切舞臺前、流れの土手板、杜若の盛り、其の外芝山に躑躅の盛り、菖蒲の下草などをあしらひ、都て郭中花屋敷の懸り。爰に荒倉丈四郎以前の侍、長九郎伊豆屋手代、清八同じく手代にて居並び、其の外お米お吉、藝者の拵へ、茶屋の女中二人にて取持ちゐる見得、酒肴をおき列べ、太鼓の入りたる騷唄にて幕開く●

藝者お吉「モウ〳〵私共は御酒はいけませぬワイな。」ト杯を下におく。丈四郎「これ〳〵お米もお吉も其の樣にせずともよいではないか、たとひ此の花屋敷へ與三郎につれられて來たにせよ、この丈四郎も萬更知らぬ者でもあるまい。」長九郎「コリヤなる程、貴方樣が仰しやるが御尤もでござりまする。殊に與三郎樣のためにも、丈四郎樣は大事のお得意屋敷の御用人樣なりや、これとても疎かにはなりませぬて。」清八「アヽモシ長九郎殿、さうお前の樣に言はつしやると、内輪から事が崩れまする。サなぜというて御覽じませ、其の大切な御用人樣ゆゑ、お前を始め私も與三郎樣の名代、かうしてお執持に參つて居るでは御座りませぬか。」お米「ほんにさうで御座んす、かうしておつき申すお客さんに、すこしも分隔てはござんせぬけれど、奥へ來て御座んす與三郎さんは、今日で丁度五日の流連。」お吉「酒もあの樣に上つては毒ぢやに依つて、私どもがお傍に居てかけひきはするなれど、太夫衆が寄

人よろしく立廻り、爰へ以前の中間作助、船頭の松出て來り、兩人勘太の體を見て、兩人「そこに居るのは勘太ぢやァねえか。」助太「オ、さう云ふのは先刻の二人、加勢してくれ。」兩人「合點だ。」ト在合ふ縫ひぐるみを持つて兩人良助に撃つて掛る。誂への鳴物になり、宜しく絡んで立廻り、よき程にこの中を勘太は摺り拔け、橋懸りへ逃げて入る。良助は作助、船頭に支へられ、宜しく立廻り屹となる。このをり上手よりばた〳〵に早助一本差飛脚の形にて走り出て來り、此の體を見て、飛脚「それに御座るは良助殿ではござらぬか。」良助「オ、然いふはお飛脚早助殿、待つて居た。」ト兩人透を窺ひ撃つて蒐る。良助すかさず立廻つて、飛脚「さうして此の場の爭論は。」良助「玆は些細な私事。」ト又立廻つて、「お國へ急ぐは御狀。」ト懷中より、「御兩親樣　鯛路」と記したる書狀を出し、「隼人樣御夫婦へ。」ト飛脚へ渡す。中間作助心得、中間「それを此方へ。」ト飛脚の方へ取りに行く。飛脚手早く突廻し狀を持ちかへ、飛脚「そんなら是れを穗積樣へ。」良助「此方は今の野郎が行方。」飛脚「そんなら是れにて良助殿。」ト何をと雙方とも又蒐るを立廻つて、良助「ちつとも早く。」飛脚「心得申した。」ト中間を振切る。中間はたぢ〳〵として良助の方へ來る。良助中間を引付け船頭を捻ぢ上げる。飛脚は逸散に向うへ走り入る。一聲浪の音にてよろしく、幕。ト浪の音にてつなぎ、直に引返す。

しいばつかりだ。それに彼の丈四郎さんからたつた三兩、あの千太郎め、俺に半分わけ口を遣せばいいが、彼奴の事だから覺束ねえ。ア、何だか寒くなつた、ドレ天窗を束ねの其處等で一杯やつ付けうか。」ト行きかける。此の以前長九郎、丈四郎などの入る頃より、駕籠の中より淺野良助窺ひ居る事。

この時駕籠の裏より聲かけ、良助「ヤイ野郎め、待ちやァがれ。」勘太「ナニ待てとは俺が事か。」ト立ちどまる。駕籠の裏より淺野良助旅形大小、若黨の拵へにて出て、良助「如何にも待てといつたはお主が事。」ト立ち塞がり、「今これなる駕籠の内で樣子は殘らず聞いて居た、その本人は結城家の藩中丈四郎奴とこゝろを合はせ、伊豆屋の息子與三郎どのへ非難をつける其の目算、一から十まで聞いてゐた。」勘太「そんなら何かの樣子をば。」良助「オ、サ、淺い謀計の品玉の、種になつたる騙者の野郎め、逃ぐるといつて逃すものか。」ト勘太の胸倉をとる。勘太ふり拂ひ、勘太「エ、やかましいワ覺棒め。たとひ何といはうとも俺が方ぢやァ知らねえこと、よし又知つた事にしろ、見りやァ、田舎の三ぴん野郎、何で伊豆屋の倅の肩を。」良助「オ、持たねばならぬお主の縁筋。」勘太「ヤさう聞いちやァ堪らねえ。」ト逃げうとするを良助一寸ひき戻し、立廻つて屹となり、良助「ヤァ死んだと見せて水底くゞり、外へ上つてのめ／＼と、鵜の眞似ひろぐ烏より、まだいけ太い靑鳶め。汝引縛つて役所へ牽く、覺悟なせ。」勘太「うぬさう吐しやァ此方も腕づく。」ト拂ひのけるを、良助「なにを小癪な。」ト浪の音をあしらひ、兩

餘の所は萬事千太郎へ掛合つて置いたれば、彼方へ掛合つて取つたが可いぢやァねえか。」勘太「そりやァ何方でも談合さへ分りやァ可いので御座ります。」長九郎「そりや直様はなしはわかるワ。時にモシ丈四郎様、これでみんなの安否が知れて、御同然に安心したと申すもの。」丈四郎「手前も重荷を下した心地、何はしかれ其處等で一獻祝ひにやらうか。」長九郎「それも宜しう御座りませう。コレお前方も一ぱいやらぬか。」嘉四郎「そりやァモ有り難うはごぜえますが、私も千太郎の様子が氣がゝりだ、一寸行つて外ながら聞いて來ませうよ。」勘太「違へねえ、様子が分つたら俺にもちよつくら知らしてくれ。」

嘉四郎「さうしてお前は何處に居る積りだ。」勘太「さうさ、俺も旦那のお供をして、一杯やりに行かうとおもふが、天窗が此の形ぢやァいけねえ、ちよつくら束ねの大川橋で待ち合はさう。」嘉四郎「そんならちよつくら俺は行つて來よう。モシ旦那、長九郎さん、其の中お目にかゝりませう。」ト行きかける。

長九郎「オイ〳〵勘太がことを。」勘太「頼んだぜ。」嘉四郎「がつてんでごぜえます。」長九郎「サアもし旦那。」

丈四郎「どうだうおしやれ。」皆々「サアお出でなされませ。」トやはり浪の音、流行唄になり、嘉四郎は向うへ、丈四郎先に長九郎、伴助、船頭つきそひ上手へ入る。勘太殘り跡見送り科あつて、勘太「アノ嘉四郎には言つてやつたからは、何とか今に沙汰があるで有らう。併しなんぼ俺が泳ぎを知つて居るといつて、こゝまで水底を潛つて來るのは、なか〳〵一通りでは出來ねえ仕事、これといふのも金が欲

かけるといつて、持ち出して質入したといひ觸らし、愈彼奴が勘當とでもなる時は、こつそり捲き上げ賣り拂へば、一資本になります代物。」丈四郎「これ〳〵長九郎、最前より押默つて其方が話を聞けば、手前が名前を申し立て、其のはう一人よい事を致し居るな。」長九郎「イヤこれは恐れ入りまして御座りまする。」丈四郎「それも斯樣致して日日の饗應、入魂に致す其方なれば、定めて心入もある事であらうな。」長九郎「これは貴方のお詞とも存じませぬ、伊豆屋の手代長九郎、そこに如在があつてよいものでも御座りませうか、アハ、、、。」丈四郎「ときに皆の者、だん〳〵の骨折、千萬忝い、尤も此の一條は千太郎へ任せおきたる事なれば、彼方より骨折は致すであらうが、まづ首尾よくやつたる事なれば、別段拙者が其方へ。」ト紙入より金子を取り出し、紙に拈つて勘太へ渡し、同じくして嘉四郎へも遣り、「些少なれども其方へも。」嘉四、勘太「こりやァ御褒美有り難う存じます。」丈四郎「これ〳〵勘太とやら、其方へわけて申すは、まづ今日の事は首尾よく遣つてくれたが、猶又後日に至つて、與三郎へ肩持つ奴の目にかゝれば是れまでに致して、それ例へにも申す百日の說法、何とやらではないか。ぢやに依つて暫く何處か遠方へ、巢を變へてはおくりやるまいか。」トいふ。勘太呑みこみ科あつて、懷中にて金の數を見ることあつて、勘太「そりやァさ、お前さんがお賴みなら、遠くへでも行きはしませうが。これ許りぢやァ少許。」ト天窗をかきながら思入。長九郎「イヤ〳〵それも旦那が御承知、其の

の嘉四郎、あはせておいた手筈から、大棧橋を突出して、眞乳の下の淵の端を押し切る拍子船と船、兩方いそぐ樣に見せ、初めて相手は私と千太、船頭同士のいひがゝり。」勘太「そこへわつちがなまぶけな、喧嘩かはうと出たものだから、向うの船の與三郎も、商人ながらもそこが江戸つ子、二口三口いひ合ふ中に、近づく船、此方の方から立ちかゝるを與三郎が、持つた煙管で拂ひ退ける所をわつちがぶたれたと見せて、川の中へ轉がり込んだと思ひなせえ。コウ嘉四郎、これから先は俺はモウ死んだ積りだ、跡はお主が話して下せえ。」嘉四郎「サアそこでぬからねえ彼の千太郎だ、色々と此の人を尋ねる積りで、棹を入れたり、自身と潜つて尋ねたり、狂言たつぷりした上で、こいつは所詮しかたがねえ、斯うなるからは與三郎の船が對手だと、向うの船へ乘り移り、兼て言ひあはせて措いた通りやりかけたら、遉に與三郎も大盡子だ、穩便に濟ませてくれろと、あの千太郎へ賴み故、是れから跡は千太郎が、お賴み通り味く遣るに違ひはござりませぬ。」丈四郎「味い〳〵、さうして置くのも、われら度々與三郎に、此方の趣向を出しぬかれたる、少しは腹癒と申すもの。」長九郎「私とても其の通り、とかく與三郎には何かの尻尾を見つかりまする故、まづ右樣に致しておけば、少しの安堵。所で先日貴方樣へお目にかけると申して、宿元より取寄せおいたる此の瑇瑁の。」ト懷中より箱入の瑇瑁、甲のまゝなるを出し見せ、「其の儘宿へ持つて戻らぬのは、與三郎が毎日日日の曲郭通ひ、お前樣にお目に

舞臺へ驅け來り、嘉四郎「オ、皆さん爰にでごぜえましたか。」長九郎「オ、さういふのは船頭の嘉四郎。」皆々「お主の來るのを待つて居た〳〵。」勘太「嘉四郎兄ィ、俺も今やつと爰へ泳ぎ著いた所だ、手前から旦那へ段取をお話し申してくれ。」嘉四郎「そりやァサ俺もお話し申すが、手前も知つて居る通りお話し申すが可いぢやァねえか。」長九郎「首尾いたしたか、何とだ。」皆々「樣子が聞きてえ〳〵。」ト是れにて勘太、嘉四郎牀几にかけ、勘太「モシまんまと首尾よくやつてのけたといふ其の段取、マア斯ういふ譯だ、聞いておくんなせえ。」ト流行唄の合方、かすめて浪の音になり、「お前さんも御存じの通り、わつちが昨夜、あの通りに身形を拵へて、鎌倉の八幡町米問屋の稻四郎の息だといつて、玉屋の家へおし上り、あの與三郎が買つて居る朋輩の女郎を買つて、何か側から大勢で大々づくしのやうに取扱ふものだから、流石の與三郎も聞いては居られず、先方でも藝者をのこらず呼べとか何とか大散財さ。」丈四郎「其の樣子は夜前湊屋にて概畧拙者も承つた。」長九郎「所へ家から與三郎があんまりかへらぬものだから、出入方の職人金五郎が呼びに來て、あいつが口車で、たうとう與三郎が今朝は家へ戻るといふ事。」嘉四郎「所で昨夜狂言の筋が賣込んである物だから、此方が先へ驅け拔けて、山谷堀から歸り船、雙方見りやァ見知りだし、昨夜見かけた顏だから、互に乙な鹽梅で、たうとう漕ぎ出す川の中。」勘太「わつちが乘つた其の船は、此方かきの千太郎、又與三郎が乘つた船頭は。」嘉四郎「側艪に入つた此

といつて此方も途中。さうして昨夕まで著てゐた著物はどうしたのだ。」勘太「これさ、なんぼ俺が泳ぎが達者でも、あの著物を著てゐちやァ、働きが出來ねえワ。さうしてまご／＼してゐる中に、人に引き上げられて見ねえ、何かの事は皆ばれて仕舞ふだらう。又あの儘で泳ぎおほされず、水を食らつてぶく／＼といきやァ、お前方や千太郎に賴まれて、命ひとつ棒にふらにやァならねえ。そこで川へころげ込むと、水の底を泳ぎながら皆脫いで襦袢ひとつになつて泳ぎつけたのさ。」文四郎「さうしてあの著類は如何致した。」勘太「知れた事、流して仕舞つたのさね。」船頭「ナニ流して仕舞つた、コウ作助さん聞いたか、あの著ものを流してしまつたとよ。」中間「そいつは惜しい事をしたな、川へ流したとあつては、こいつばかりは利上もなるまい、モシ旦那、どうかしてお遣りなされずばなりますまい。」文四郎「と申して此の期に及んで致し方もないが。かやう致さう、それなる包に拙者が著更の浴衣があつた、マァ／＼似合はしからずと、それなと著たがよい。ソレ出して遣りやれ。」ト指圖する。中間「ハイハイ畏まりました。」ト持つて來りし包より誂への浴衣を出し勘太に著せる。船頭も立ち寄り手拭にて體を拭いてやりなどする事、手早くあつて、勘太「コウ松や、この襦袢をそこらへ突つかけておいてくれ。」船頭「オイ／＼合點だ。」ト濡れたる襦袢を邊のよき所へ干すこなし、皆々捨てぜりふ。ト是れを矢張浪の音、ばた／＼になり向うより嘉四郎、船頭の拵へ、走り出て來る、皆々の居るを見て直に

ぬ。」中間「なる程、彼奴は惡い事にかけては拔目のない奴。」長九郎「しかしモウ彼これ安否が分りさうなものだが。」長、丈「早く樣子が聞きたいものだ。」ト思入。浪の音になり、はげしく浪の花たつ。みなみな是れを見込み、船頭、中間「何だ〳〵、川の中へ大分浪が立つが何だらう。」丈四郎「されば長九郎あれを見やれ、確かに人が泳いで來る樣だ、一件ではあるまいか。」長九郎「左樣で御座ります、どうか一件らしうござります。」トこの樣な事、捨白にて川の中を見込み居る、浪の音激しく浪煙立つて、地飛白の間へむぐりの勘太、襦袢一ッ髮振亂し、泳ぎ上る模樣。皆々見て、「オ、慥かに勘太だ。」皆々「首尾は可いか、どうだ〳〵。」ト皆々立ち上る。勘太やう〳〵泳ぎ上りし科あつて、勘太「ア、苦しい〳〵、恐ろしい目にあつた。」丈四郎「オ、さう申すはむぐりの勘太。」皆々「御苦勞々々、よく爰まで泳いで來たなア。」ト皆々たち寄り捨白にて科、勘太「皆樣が爰で待ち合はせてお出でなさる約束だから、爰まで泳いで來ましたが。」ト長九郎、丈四郎へ科あつて、「モシ丈四郎さん、長九郎さん、こりやア先の本讀よりはなか〳〵苦しい仕事だ、モウすこし增しを貰はにやアならねえ。」ト襦袢を脱ぎ水を絞り、耳より水を出したりなど宜しくこなし。丈四郎「そりやモ首尾よくさへ遣つてくれれば、どうでもいたす。」皆々「どうだ〳〵樣子が聞きてえ〳〵。」勘太「そりやアさ、一部始終の話も爲ようが、凡そ十町餘りも泳いで來たのだ、殊に往來中だ。裸ぢやア話も出來ねえ、何ぞ引張る物はあるめえか。」長九郎「それだ

ば隨分あなた様を、御意にかなふ様おもてなし申せと主人の吩咐。それ故昨日も堀切の菖蒲から、直に吉原へお供を致しこの仕合。」丈四郎「何日とは氣を變へて湊屋へ參り、郭中の樣子窺はせた所、その方が主人の倅ののらくら者の與三郎、やつぱり玉屋の二階に流連致して居るとの事。町人とは申しながら、扠々伊豆屋は手堅い身代、羨ましい事ぢやてな。」中間「併しなんぼ總領息子でも、あんなに遣つてよく親御が默つてござるな。」船頭「そりやァさ、今元山町でも日出の身上だ、一本や二本の金子に絲目はねえワナ。」長九郎「それといふのも彼の與三郎は、乳呑兒の時から私の店へ養子の身分。あの與三郎を貰ひますると、そのあとへ出來ましたのが弟の與五郎。實の子は出來て居ても、主人はやつぱり與三郎どのを跡とりと、わけ隔てなく育てましたを、増長して箸にも棒にもかゝらぬ放蕩。」丈四郎「イヤ身共も折々彼の與三郎とは一座致したが、彼奴と參る時は、どうも與三郎にばかり女が惚れて、この方はとんとお間にされる。なりや彼は拙者が戀の敵と申すもの。」長九郎「サア私もアノ與三郎めを、家をはふり出して終へば、都合のよい事がござります故、そこでお前さまといひ合はせ。」丈四郎「右樣な事には素早い悪徒、千太郎へ相談致せしところ、斯う〳〵致せと彼が軍畧。」長九郎「委細は私承り、それ〳〵へ申し合はして御座りますれば、さだめて首尾よくやつたで御座りませう。」船頭「そりやァモシお氣遣ひなされますな、わつちらが仲間の千太郎だ、遣つたものぢやァごぜえやせ

ハァ左樣かね、それではまだ時刻が餘程早いワエ。」丈四郎「それでは彼の一件の者共が、安否のしれるも今暫く間があらう。」長九郎「左樣でござります、暫時こゝで待ち合はせて居つたら知れるで御座りませう。」茶屋「それでは貴公方には、お待ち合はせなさるお方がござりまするか。」長九郎「アイサ、今道連の人が後から來る積りさ。」茶屋「左樣ならあなた方が爰にお出でなさる中、一寸私は水を一杯汲んで參ります、どうぞ憚りながら店をお賴み申します。」長九郎「アイ／＼ゆつくり往つて來なせえ。」ト茶屋爺は手桶を提げ下手へ入る。矢張かすめて浪の音、はやり唄の合方にて、丈四郎こなしあつて、

丈四郎「時に長九郎、お主と拙者かやうに致して、日頃別懇に致すも不思議な奇緣と申す物ぢやてな。」

長九郎「イヤ左樣で御座りまする、私は高が元山町にて鼈甲渡世の伊豆屋の手代、この通り何れへでもお供いたして參りまするは、まつたく貴方樣がお上の御用を私店へお引きつけ下さつた故の事。」

丈四郎「何さま、此の度主人結城の姬君、千葉家への御緣組、その御婚禮の御用に就いて、莫大な御用向も、拙者が囘護のまはし樣と申すもの。」長九郎「イヤモシ實以てその御用を勤めまする噂が、世間へ風聞致した故か、其のお姬樣の御緣付の先は。ア、何とか申しましたな。」ト考へる科。丈四郎「ハテ其の先方は同國の領主、千葉殿の御嫡子だワ。」長九郎「左樣々々、其の千葉家からも御用が出て、此の間色々と御注文がござりました。それといふも貴方さまのお邸より御用を承るが御緣つなぎ、さすれ

き添ひ、捨白にて出て來り花道にて、長九郎「時に丈四郎樣、昨夜は別嬪のお世界、大分おもてなされた御樣子で御座りましたな。」丈四郎「イヤサ手前などが持てる事は何日の事ゆゑ、さしたる樣にも存ぜぬが、ツイ〳〵酒を呑みすごし、名妓と枕ならべながらも酒と討死、これには拙者も後悔いたすて。」中間「夜の更けるのも打忘れ、あんまり御酒がはやつた故。」兩人「それゆゑ旦那はツイとろんと。」長九郎「寐るかと思うと直に夜明さ。」丈四郎「拙者抔は夜の明けたのも存ぜずに、よい心持に寐て居つたを長九郎が參つて無理矢理にひき起し、これまでつれ出したが、是れは一體どういふ趣向だな。」長九郎「なる程、其の事は兼てお前樣と申し合はせた彼の一條、同腹の者へも申しつけて、件の事は今朝やらかしました。」丈四郎「ハヽアそんなら兼ての一條、今朝計らひめされたか、それは重疊、扨はその一件ゆゑ仲の町も素通り、山谷堀へもたち寄らず、何は格別、店を出したての彼の茶屋で。」長九郎「如何にも一服致し、何かの手番ひお話いたすで御座りませう。」丈四郎「サア何れも一緒に來やれ〳〵。」ト矢張以前の合方、浪の音にて本舞臺へ來り、茶屋の牀几に腰をかける。茶屋「これはお早うござります、おかけなされませ。」トいひながら茶を汲み持ち出で、「あなた方も町のお歸りでござりますな。今朝は川霧が深くかゝりました爲か、いつもお船のお方樣が、大分陸をお歸りでござります。」ト皆々へ茶を出す。長九郎「ハ

頭船「それといふのもあんまり旦那が、お座敷の樣子が可いゆゑ、藝者衆まではずみが來て。」

けたのも夢中で居た。」ト明を消し、「時に郭中の旦那は下總の方の邸の衆で、いつも馴染の旦那だが、ゆうべから通しの道中故、疲れて寐てござるが、駕籠賃は貰つたし、起し申すも氣の毒だ。何と爺さん、少しのうち爰へ置き申しておくんなせえ。なァ棒組、この中ちよつと遣つて來ようか。」ト飯を喰ふ思入。駕甲「ちげえねえ、腹が減つちやァ仕事は出來ねえ、この中に遣つて來ようか。したが今に後のお連も爰へござる筈だ。」ト此のうち仕出も捨白にて、仕出△「斯う俺們達も何處かでほぞを附けずばなるめえ。」仕出○「されば、爰の横町の秋葉亭と出かけやせうかね。」仕出○「それよりぶら〳〵兩國まで出かけやせう。」仕出○「それも可からう。」駕兩人「此方も一寸やつて來よう。」仕出○×「サァ〳〵行きやせう行きやせう。」ト茶代をおく事あつて上手へ入る。駕兩人「モシ爺さん、頼みましたぜ。」ト浪の音になり、駕籠はその儘おき、駕籠屋も續いて上手へ入る。茶屋「お靜かにお出でなされませ、有り難うござります。」と茶椀莨盆など片づけ科あつて、「ヤレ〳〵天道樣は有り難い、まづ口明がしたといふ物、先づこの鹽梅では今日もお客が確乎で有らうワエ。ドレ駕籠の旦那にもお茶一つ上げうか。」ト駕籠の方へ來て見て、「なる程話の通り、大分疲れて寢てござる、コリヤお目の覺めた時にしようワエ。」ト科。是れを流行唄になり、茶屋は釜の下をさしくべるこなし、此の唄にて向うより荒倉丈四郎、著流し大小雪踏がけ、小道具屋長九郎手代の拵へ、これも著流し、作助中間の形、松吉小船の船頭の形にてつ

船の三味線は、木母寺どまりの遊山船か。」〇「但しは寺歸りを送りの船か、なんと夜の引明から氣の悪い奴儕ぢやァねえか。」　茶屋「ナニお前さん、こんな事ぢやァごぜえません。いつも私は七つ起で店を出しますが、滅相に人が出ますよ。」ト皆々此の樣な事をいひ居る。駕籠屋二人は汗を拭きなど色々科あつて、駕籠甲「時に爺さん、今鳴る鐘はアリヤァ何だえ。」　茶屋「アイサ、アリヤァ觀音の六つでござります。」　駕甲「さうかえ、こいつは滅法早かつた。」　駕籠乙「棒組、モウ僅かだ、ゆつくりいれ込んで行つても可いワ。」　駕甲「一ぷくやれ〳〵。」ト牀几にかける。仕出の〇駕籠屋の體を見て、仕出〇「モシ駕籠の衆、かう見た所が吉原歸りの客人とも見えねえが、どつから乘せて來やしたえ。」　駕甲「わしやァ三軒屋でごぜえますが、彼の旦那が何かお邸の急用だといつて。」　駕乙「やたらに急がつしやるから、夜中も厭はず出て來やした。」ト此のうち茶屋爺、盆に茶椀をのせ持ち出て、茶屋「サァ〳〵漸う茶が出來ました、サァ皆さん上りまし。」ト仕出の皆々へ茶を汲んで出す。茶屋ぢゝ駕籠屋にも持ち行き、「サァ茶を一つあがらつしやりませ。」ト駕籠屋を見て、「オ、お前方は何日も客人をつれて來て下さる若い衆だ。年をとつちやァ埒は明かねえ、とんと氣が注かなんだ、アハヽヽ。」ト駕籠の提灯を見て、「これさ駕籠屋さん、夜の明けたのに蠟燭が無駄だ、燈を消しちやァどうだね。」　駕甲「ちげえねえ、こいつは大笑ひだ。棒組、ちよつくり消して下つし。」　駕乙「オイ〳〵、あんまり急いだものだから、夜の明

與話情浮名横櫛

瀬川如皐作

序幕

大川端藥師前の場
吉原花屋敷の場
大音寺前の場

本舞臺三間の間、向う一面の浪幕、此の前地がすり浪打ちよせの張物、上手へよせて古びたる地藏堂、後の方を畫心に見せ、下手に葭簀張の出茶屋、牀几二三脚置き並べ、よき所に榎の大樹、日覆よりも同じく釣枝、すべて大川端多田の藥師の門前より淺草川を見渡したる景色。爰に茶屋の爺、朝店を明けたるこなし、茶釜の下を焚きつけ居る。吉原かへりの仕出二三人牀几にかけ、捨白にて莨を喫みゐる。下手に若い衆二人、旅駕籠舁の拵へにて、垂を卸せし四手駕籠、棒端に四ツ木村三軒屋と印したる提灯を點け休み居る體、淺草寺の明六ツ、浪の音、はやり唄にてよろしく幕明く。

仕出○「爺さん、何日ながらお前の店は早いの。」茶屋爺「ハイこれから七月盆過ぎまでは、朝が見世が忙がしうござります。」仕出△「なる程時分柄だ、川筋が賑やかだ。」仕出○「違ひねえ、朝つぱらから家根

輿話情浮名横櫛

瀨川如皐

日はこれ限り。」ト辭儀する。皆々一同に辭儀する、めでたく打出し。幕。

いろは假名四谷怪談　終

伊右衛門が肩先一刀きる。伊右衛門少したるむを、背後より次郎吉たち寄り腰の邊を斬る。伊右衛門振廻り次郎吉を斬らんとする。孫兵衛ちやつと次郎吉を抱いて下手へ退く。此の隙にお花伊右衛門と切り合ふ。お花危く見える故、與茂七後より又一刀きる。伊右衛門段々苦しみひよろ〳〵する。お花トヽ伊右衛門を一刀斬る。與茂七たち寄り伊右衛門の刀を叩き落す、お花又斬る。與茂七伊右衛門を蹴返す。ト仰向けにこける。與茂七、次郎吉お花を傍へやり、止めを刺せといふ科。兩人死骸へ一時に乘り蒐り科ある。始終うすどろ〳〵にて。次郎吉「父樣の敵。」お花「夫の仇。」與茂七「舅の敵お岩の仇、今こそ。」三人「思ひ知つたか。」ト三人一度に止めを刺す。伊右衛門手を上げ苦しみ、息絶える科。傳藏立ち寄り、傳藏「三人とも手柄々々。」ト扇を廣げ煽ぐ。孫兵衛始終孫の次郎吉に眼を離さず。此の時次郎吉を扇にて煽いだり又天窗を撫でたりして、孫兵衛「ヤイ次郎吉よ、よう父樣の敵を討つたなア、強い者ぢや〳〵。出來した〳〵、お花も出來した、誰方樣も孫めを賛めておやり下さりませ。」ト孫兵衛大きに悅ぶ科。此の時どろ〳〵〳〵打ち上げる。ト下手の上より、誂への雲の上に、南無彌阿陀佛の箔紙の彫拔の文字出る。ト皆々是れを見て手を合はし拜み、與藏七「アレ〳〵亡執成佛得脫。」ト此の時又之丞すこし向うへ出て、又之丞「惡人亡び照月の一軸手に入る上は。」傳藏「鹽冶家を再興なさん。」與茂七「めでたし〳〵。」ト皆々前へ出で竿になる。此の時口上いひ向うへ出て、口上「東西々々、まづ今

與茂七「ヤア大惡人の民谷伊右衛門、うぬ主家の名器たる照月の一軸を奪ひ取り、此の所へ隱しおく事、お岩の死靈の知らせによつて。」又之丞「小鹽田又之丞。」傳藏「赤坂傳藏。」與茂七「佐藤與茂七むかうたり。サア速かに一軸を渡した上、わが爲には舅左門殿の敵、お岩の仇。」次郎吉「父樣の敵。」お花「夫の仇。」孫兵衛「吾が子の敵。」與茂七「サア尋常に。」皆々「勝負致せ。」伊右「ヤア雀に等しき汝等が胸中、何ぞ大鵬が意を知らんや。某この一軸を以て、鹽冶家を引興さん所存なるワエ。」又之丞「ヤア如何樣に陳じても。」傳藏「お岩の死靈の告げによつて。」與茂七「年來の積惡露顯の上は、一軸を渡し。」皆々「覺悟覺悟。」伊右「ヤ小賢しい敵呼ばはり、たつて某に刃向はゞ、この一軸寸々に引裂かうか。」與茂七「サアそれは。」伊右「サア。」與茂七「サア。」伊右「サア。」皆々「サア〱〱。」ト伊右衛門科、皆々無念がる。

ト此の時又大どろ〱になり、大鼠出て伊右衛門の裾の邊這ひ廻る、伊右衛門苦しみ立竦みとなる。トゞ鼠飛び上り、仕掛にて一軸を銜へ與茂七の側へ行く。ト與茂七手早く一軸を取る。鼠消える。與茂七、又之丞に一軸を渡す、又之丞受取り戴く。どろ〱掠める。此の時伊右衛門心づきし科あり。一軸なき故、伊右「ヤア今まで所持せし一軸。」ト邊を探す科あると、又之丞「其の一軸これに有り。」ト見せると伊右衛門吃驚して、伊右「エ、是れも死靈の。」ト無念の科。「モウ此のうへは伊右衛門が死物ぐるひ、汝ら寄つたら反討だ。」ト與茂七に斬つて懸る。少し立廻りあり、又どろ〱になり、トゞ與茂七

覺悟して其處へ直れ。」與茂七「エ、飛んで火に入る蟲けらめ、此の世の暇とらしてくれう。」ト身構へする。ト非人皆々薪雜木を引提げて、宮藏「顎たゝかさずと。」非人皆々「たゝんで終へ。」ト是れより與茂七大勢を相手に働く。お花孫兵衞にも非人蒐る、入亂れての立になる。此の時うすどろ〳〵にて小兵衞の死靈乘り移り、次郎吉働く。孫兵衞お花危むこなし。非人次郎吉に追ひまはされ、殘らず下手の方へ逃げて入る。お花も孫兵衞も次郎吉について橋懸りへ入る。與茂七も孫兵衞親子を氣にかけて居るこなしにて、宮藏と立廻りありてト、宮藏を斬り倒す。宮藏苦しむを見事蹴返し、與茂七「老人といひ女童心元ない、さうぢや。」ト與茂七こなしあつて、橋がゝりへ入る。トチョン〳〵と木入る。淺葱幕おとす。

造り物、三間の間向う遠見に本堂庫裏、間に樹木のあしらひ、すべて深川回向院寺内の書割よろしく、舞臺の眞中に鐘樓堂、上手の方楓の大木あり、石壇の上に伊右衞門、照月の一軸を口に咬へ、拔刀を見得よく構へゐる。上手の方に小鹽田又之丞、赤垣傳藏、擬勢して居る見得、佐藤與茂七凛々しき形にて、石壇へ片足かけ、伊右衞門に詰寄つてゐる。下手の方にはお花、次郎吉、これも凛々しき形にて、拔身をかまへ伊右衞門詰掛けゐる。後の方に孫兵衞も擬勢してゐる。上より紅葉の釣枝おりる。すべて回向院釣鐘堂の體、禪の勸めにて道具とまる。

軸を守護なす爲、スリヤ今夜の中に一時も早う一軸を。」伊右「イヤそれにつき心懸りは佐藤與茂七、小鹽田又之丞、赤坂傳藏の三人、忍び〳〵に照月の一軸を詮議する由。まつた小兵衛の妻子、我を敵と狙ふといへども、高が女童、取るに足らねど、又してもお岩の死靈我を惱ますのみならず、若し又彼奴等に一軸の有所を知らさんも計られず。今にも與茂七この邊へ來りなば。」官藏「其の儀なら氣遣ひあるな、見らるゝ如く大勢の仲間の者を頼みあれば。」非人今「縱ひ幾人うせうとも。」非人口「皆々が加勢する程に。」非人今「こゝ構はずと。」官藏「一時も早う。」伊右「そんなら官藏、皆の者、頼んだぞよ。」皆々「合點ぢや。」ト伊右衛門落著きたるこなし有つて、上手へ入りきると、官藏非人捨白いうてゐる。ト向うより與茂七凛々しき形にて出る。跡よりお花、佛孫兵衛、子役次郎吉を脊に負ひ出る。これも凛々しき誂への形、花道よき所に立ちどまりて、與茂七「あれに見ゆるが回向院。」お花「ちつとも早う。」孫兵衛「サア御座りませ。」ト四人とも本舞臺へ來る。ト非人みな〳〵四人を取卷く。與茂七こなし有つて、後の三人へ心を配り、よけて通らんとする。此の時官藏前へ出て來り、官藏「與茂七久しいなア、官藏ぢやが見忘れたか。」與茂七「ヤアさう云ふは不義士の官藏、我々が行く先を妨害なすは。」官藏「オ、汝が來るを此の所に待つてゐるぢや。」與茂七「エ、そりや何故。」官藏「貰ひたい。」與茂七「非人の事なら手の裏か。」官藏「否汝が命を。」與茂七「こりや誰ぞに頼まれたな。」官藏「オ、伊右衛門殿に仇なす汝等、

手の方より關口宮藏、つぎ〳〵の垢づきたる著物、非人頭の形、跡より非人大勢ついて出で、舞臺よき所に皆々立つて、宮藏「汝們にかね〴〵話す通り、俺ももとは鹽冶家の浪人、かく非人となりさがれど、朋輩の伊右衛門殿が、近々世に出る話だが、あの人があり附くと、俺も其の手筋で元の武士に取立てらるゝから、其の時は又汝們にもづつしりと祝うてやる。」非人〇「そりや忝い。」大勢「味い話ぢやなァ。」宮藏「イヤ味い話のついで、其の時はしたみでない、劍菱でたらふく。」非人△「のめるな〳〵。」宮藏「こりや飲み食ひ許りぢやない、いびつなりもやるワイ。」大勢「そりや有り難い〳〵。」トこんな捨白いうてゐる。ト向うより伊右衛門、以前の形にて走り出で、花道よき所へ來て、舞臺の宮藏と顔見合はせ、宮藏「ヤァ伊右衛門殿。」伊右「オ、宮藏か、よい所で。」ト本舞臺へ來て、皆々の上手へ立つて、宮藏「伊右衛門殿、夜中といひ其の形は。」伊右「オ、不審、尤も、豫て貴公に申せし通り、喜兵衛方より申し請けし五百石の墨附をもつて、師直公へありつかんと思ひの外、お岩の死靈の鼠めが、所々喰ひ破り反古同然。其の上預け主の長藏も、お岩の爲に其の場で最後。まだも頼みは彼の一軸、近日師直公の屋敷において、歌合の會興行あれば、是非高家に要るべき品、それを囮にありつく手段。それ故あの一軸をもつて、師直か邸へおして推參、俺が世にさへ出たら、貴殿もとも〴〵推擧して、元の武士にとり立てるワ。」宮藏「それは重疊、かね〴〵貴殿のお頼み故、かく非人となつてへちまふも一

講頭「そんなら矢張怨靈がなす業かいの。」ト此の時又ばゝお熊苦しき科、伊右衞門も苦しむ。「サア／＼責めて苦痛を助かるやう、百萬遍の念佛ぢや／＼。」大勢「それがよい、始めう／＼。」伊右「お頼み申しまする。」トこれより百萬遍にかゝる。よき程にまたどろ／＼になり、佛壇へ御燈あげんとして燈心なきゆゑ、行燈の引出明けると、其の引出の中よりお岩の幽靈出て、お熊のうしろへ屈んでゐる。責念佛になる。トお岩門口へ行きかゝり、又元へ來りお熊の髻を摑んで立つ。お熊苦しむ。皆々これを知らず念佛申してゐる。お岩だん／＼お熊をふり廻す。トお熊の首拔ける。此の時皆々これを見て吃驚して、ハアというてばら／＼と逃げて入る。ト大どろ／＼にて、お岩姿の首持つて立身になり居る。伊右衞門これを見て、伊右「エヽ斯くまで根強き嫉妬の念、ハテ恐ろしい死靈ぢやなア。」お岩「嫉妬の念の怨みの程、民谷一家類葉まで、この如く枝葉をからしたれども、まだ此の上に官藏と其方の命、見よ見よ今に取殺さん。」トお岩科。伊右「ヤア神力勇者に勝つ事能はず、人の盛んに祟りがあらうか。うぬを。」ト刀を拔き切り拂ふ。どろ／＼になり、お岩よき所へ消える。ト伊右衞門すこし落ちつき、此の時きつとなる科あつて、「此の上は照月の一軸をもつて、師直公へ推して推參、これより直に鐘樓堂へ、さうぢや。」ト伊右衞門刀をさし凛々しく尻引つからげ向うへ入りきると、チョン／＼と木を入れる。トこの家體後へ引込むと淺葱幕おりる。深川回向院門外のかゝり、上手へすこし塀を出す、ト下

殘念な。」　郡次「伊右衛門殿、身共を馬鹿にさつしやるのか、此の様子では一軸も覺束ない、やれ馬鹿馬鹿しいお人だ。ドレお暇申す。」ト出るを伊右衛門郡次をとめて、伊右「お待ち下されい、唯今の墨附は是非もなく候、此の上は一軸を御覧に入れん。」　郡次「否々モウ其の一軸といふも、大方贋物でがな有らう。貴公ひとり勝手に狂はつしやれ、ェ、狂人にかまふ閑はないワエ。」　伊右「モシ。」ト又とゞめる。　郡次「エ、放さつしやい。」ト振りきる、早き唄になり、橋がゝりへ郡次入る。伊右衛門跡に茫然として無念の科。　伊右「ハア、。うぬお岩め、又しても段々と人を悩ます餓鬼修羅め、此の上は汝が印を。」ト門口に立て置いたる塔婆を持ち來り、足にて蹈み折る。ト大どろ〳〵になる。ト上手の障子家體の内にて、源四郎あつといふて苦しむ音する。　伊右「確かに親父様の聲。」ト走り寄り、障子を少し明けて見て吃驚し、ちやつと鎖し、「ヤア親父様が縊れて。」ト惘れるこなしあつて、「エ、科なき親までくびれ殺す、これもお岩のなす業か、チエ、恐ろしい執念ぢやよなア。」ト撞とへたる。此の物音に奥より婆お熊、苦しみながら出る。跡より講中皆々跟いて出で來り、お熊「これ〳〵倅。」大勢「どうさつしやつたどうさつしやつた。」トこれにて伊右衛門心づいたる科あつて。　伊右「アレあの一間で親父様が、縊れて死んで居らるゝ、ワイなう。」　お熊「ナニ親父殿が。」　大勢「首縊つて死んだとは。」トお熊皆々障子家體を覗き、皆々吃驚して。「ヤア大騒ぎぢや〳〵。」ト皆々狼狽へる科。　伊右「これも死靈の祟りなるか。」

責めて〳〵これ此の樣に。」ト天窗の手拭を除つて見せる。ト天窗鼠にくはれし體。「鼠に嚙られて誠に困り切る。」伊右「そりや大方。南無阿彌陀佛。」長藏「何でもお岩や小兵衞がなす業だらうよ。」ト此の時どろ〳〵になり、ねとり遙か上よりお岩が幽靈、逆さまになつて下り、無言にて長藏の襟に卷きついてある手拭にて咽喉をしめる。「ア、誰だ、弄戲するな。」トいひながら喉をしめられ苦しむを、其の儘上へ引き上げらるゝ。伊右衞門見て、伊右「ヤア〳〵長藏を、あれ〳〵〳〵お岩の死靈が。ア、こりや其の黒附は置いてくれ〳〵、あれ〳〵。」ト大どろ〳〵にて引き上げながら、お岩「これも惡事に連なる枝葉、民谷一家の血筋は元より、關係はせた者までも、取殺さいで措かうか。」ト大どろ〳〵にて引き上げて終ふ。ト上より血汐たら〳〵と流れて黒附と一緒に落ちる。伊右衞門これを見て、伊右「ハテ恐ろしや、ヤ、、まだしもお岩が黒附を戻してくれたか、心根は嬉しいぞよ、忝いぞや〳〵。」ト黒附を戴き懷中する。此の時橋懸りより以前の郡次出て來り、直に內へ入り。郡次「サア伊右衞門殿、約束の通り參つた、シテ黒附は。」伊右「恰好幸ひこれに、サア改めて御覽下されい。」ト差出す。郡次黒附を取上げ改め見て、吃驚して、郡次「ヤ、、こりやこれ黒附の樣には見ゆれども、文字の中も裂れ〳〵鼠が喰ひさき破れあれば、反故にもならぬ此の紙を、黒附なりとは何の事。」ト伊右衞門へ渡す。受取り見て、伊右「ドレ。ヤ、、そんなら是れも死靈の業か、チエ、情ない、この黒附まで此の樣に、エ、

貴公のとりなし、近々歌合の會興行と御座らば、いよ〳〵鹽冶家は再興ならず、不運を見限り師直公へ隨身。如何にも二品とも唯今は無けれども、後ほどまでに取揃へまする間、左樣におぼし召し下され、よしなに御計らひ下されい。」郡次「左樣ござらば拙者も後刻參上いたす間、間違なく取揃へ。」伊右「屹と御覽に入れるで御座らう。」郡次「イヤモ御墨附さへ明らかなれば仔細なし、殊に殿樣の御望み、照月の一軸は宇宙の重器、風流の奇品なれば、殿にも滿足で御座るて。」伊右「これは〳〵忝い御挨拶、萬事貴殿のお執成しを。」郡次「お賴みなくとも承知で御座る。然らば後刻。お暇申す。」ト門口へ來て、「伊右衞門殿。」伊右「やれ〳〵嬉しや、歎きの中の悦びと、事急に相なつて參つた。併し一軸はよけれど墨附は、あの秋山長藏に預けおいたれば、彼奴の居る所は慥かに釜屋堀と申す事、是れより直に參つて。あゝこれ病耄けたれば夜分の步行は、ハテ何としたものであらう。」ト伊右衞門科、時の鐘相方になり、橋懸りより秋山長藏非人の拵へにて、これも病耄けたる體にて出て來て、長藏「御免なさい。」ト内へ入るを伊右衞門見て、伊右「ヤァ長藏か、よい所へ來た、マア早速だが少し耳よりの話があつて、彼の墨附が入用だが、何と戾してくれまいか。」長藏「イヤモウ戾せといはねえでも、此方から態々返しに來たのさ。」伊右「オヽそりや幸ひ、物事が此の樣に拍子よくなつて來ては、しめた物だ。」長藏「此方は占めたか知らねえが、其の書物を預つた日より鼠が出て、晝夜といふ事はなく、

めるは、ハテ執念の深い物ぢやなア。」お熊「あゝこれさりながら、どのやうな苦しい目をしても、命さへ全うして。これ先達手に入りし黒附や一軸は、大事にかけて持つて居るであらうなア。」伊右「イヤモ其の儀は氣遣ひあるな、黒附は朋輩の長藏に確と預け置く。まつた一軸は回向院の鐘樓堂にかくしてあれば案じる事はない。此の上はどうぞ死靈の立去るやう、此の苦しみでは最早慾も德も要らぬ氣に成りましたワイなう。」お熊「エヽモウ氣の弱い、死靈を立去らすには、神佛の力でなければならぬ。ドリヤ奥へ往て、祐天樣の御名號など取つて來て戴かさう。」伊右「些とも早う苦痛を遁るゝ樣、念佛を申して下され。」お熊「オヽ合點ぢや〳〵、どれ〳〵。」ト奥へ入る。ト唄になり向うより三宅郡次役人の拵へにて、家來二人つれ出て來て、門口に立止り、郡次「それ案内致せ。」家來「ハア。伊右衞門殿、宿に御座るか。」伊右「ハア誰方でござるな。」ト伊右衞門出で迎ふ、こなしある。郡次「イヤ師直の家臣三宅郡次で御座る。」ト内へ入る。伊右「ヤレ〳〵郡次殿、ようこそ御入來、まづ〳〵。」郡次「御免下されい。」ト上座へ坐る。「扨早速ながらお話申すは、主人師直公、望む所の照月の一軸御所持との事。二つには伊藤喜兵衞へ遣はしたる五百石の黒附、先だつて喜兵衞殿より其許へ讓られたる由。それに就き近々お歌の會日に、かの二品を持參致さるれば、御抱へあらんとの儀。それ故その實否を改め參れとあつて、今宵拙者密々の使者、此の旨しかと御承知下されませう。」伊右「先づもつて忝い

ろどろ寢鳥にて、お岩の幽靈内へ入り、無言にて立つてゐる。「エ、お岩か情ない、まだうかまずに居るか。こりや能う聞けよ、汝を非義非道に殺したといふ譯ではないが、元は忠義の間違から、照月の一軸が欲しさ故、邪見にあたりし事もあり、又不慮の最期もみな因果、それから俺につき纏ひ、そちと小者の小兵衛がなす怨靈で、何事も皆間ちがひし出世の手がゝり、一軸や墨附は所持致しても、身のありつきもならざる時宜。コリヤ現在夫の難儀を見て、それ程あくまでうらまずと、モウよい加減に浮んでくれ、これ頼む、手を合はして拜むワやい〳〵。」ト色々詫言する、お岩科ある。ト伊右衛門きき耳立てる思入。「ナ、何と申す、それなる倅が、則ち身共と汝が間に出生した倅とな。ム、其の倅を養育すれば、汝は心殘らず浮むといふか。オ、氣遣ひ致すな、守立てて大事にかけ育てる程に、心殘さず成佛致せ、南無阿彌陀佛々々々々々々。」トお岩聞き分けて伊右衛門に子を渡す。伊右衛門取つて抱く。トお岩上手へ立つ。「オ、泣くな〳〵、よい子ぢや〳〵。」ト見る内どろ〳〵烈しうなり、抱きし赤兒忽ち石の地藏にかはる、伊右衛門愕りして取落す、お岩見て、お岩「アハ〳〵〳〵〳〵。」トお岩、伊右衛門の方へ指さしして心地よげに笑ひながら、上手の生垣へ消ゆる。伊右衛門苦しむ。此の時奥よりお熊走り出で、お熊「オ、倅々、又何ぞ見たか、俺も鼠が責めて〳〵、ア、苦しや〳〵。」伊右「これ母者人、今も今とてお岩が死靈、種々樣々の仇をなし、一家血筋に至るまで、この樣に苦し

の罪亡ぼし、出家してくれ倅伊右衛門。」伊右「思ひがけなき親父樣、まづは御堅勝で、それにつきまして拙者のこの難病、面目次第も御座りませぬ。併しながら今少し望みも御座れば、出家には得なりませぬ。」源四郎「エ、情ない、其の形になつてもまだ望みの思ひたち、どうで惡い望みであらうが、得心なくば強て出家になれとは云はぬがこりや倅、この卒堵婆は私が千遍の廻向をして、俗名お岩小兵衛と記し置いたれば、自分の手づから往來の道端へ建つて置けば、せめて無縁の人々が、往來に唱ふる念佛の功力によつて、罪障消滅する事もあらん、サ、門口へ建てておいたがよい。」ト卒堵婆を伊右衛門に渡す。ト受取り、伊右「そんなら此の塔婆を門へ立てて廻向をしませう。」源四郎「俺も奥へ往て、夜と共に後世を助かるお念佛。」伊右「そんなら親父さま。」源四郎「倅、後方逢ひませう。」ト唄になり、源四郎こなし有つて奥へ入る。伊右衛門跡に殘り、卒堵婆を持ち科あり。伊右「親父樣の仰せの通り、この卒堵婆をば門口へたておかば、少しは罪も滅する道理、流灌頂のあの傍へ、オ、さうぢや。」ト伊右衛門卒堵婆を持ち門口へ出る。ト一つ鉦すごき合方になり、流灌頂の傍へ塔婆を建て、門口へ入り手を合はし、「お岩小兵衛頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々。」ト廻向する、どろ／＼寐鳥になり、燒酎火もえる。ト門口の流灌頂の眞中より、お岩の幽靈子を抱いて出る。伊右衛門見て恟りする。赤兒の泣く聲する。「又もお岩が死靈の迷ひ、殊に赤兒の泣く聲は、ハテ訝しや。」トこの中始終ど

れ、私も一緒に奥へ行きませう。」源四郎「サア御座れ。」ト唄になり兩人入る。トどろ〳〵になり、此の時紙帳の中より伊右衛門やまひ鉢巻、やみほうけて百日鬘にて拔刀を提げ飛んで出る。此の間に講中大勢出て來て、講中「こりや〳〵氣を確かに持たつしやれ〳〵。」ト皆々とめる。伊右「己お岩め、うぬ。」ト大勢にて伊右衛門をおさへ、拔刀を無理に鞘へ納める。伊右衛門皆々を見て、「ムウそんなら今のは夢であつたか、ハア情ない。」皆々「コレ夢でも見たのか、えらいおびえ樣ぢや。」伊右「ハア、此の世からなる火の車、熱湯地獄の苦しみも、マア此の樣にはあるまいかいやい。」皆々「よく〳〵苦しいと見える、サア百萬遍にかゝらう。」△「肝心の道心坊が見えぬ、私ひとかへり呼んで來よう。」講中「どうぞ頼みます、その中俺們も奥で澁茶など呑んでゐよう。」皆々「よからう〳〵。」講頭「これ氣を鎭めてゐやしやれ。」皆々「サア〳〵御座れ〳〵。」ト講中皆々奥へ入る。時の鐘、凄き合方になり、伊右衛門科あつて、伊右「ア、情ない、此の樣に成つたるも、忠義を思うてした事が、鶍の嘴とくひ違ひ、それから段々重なる惡事、今では後悔先に立たず。コレお岩、俺が惡かつた、料簡してくれよ、又小兵衛もうかんでくれ、俺の口から廻向の言譯、南無阿彌陀佛々々々々々。」ト此の時奥より源四郎塔婆を持ち出で來り、源四郎「久しや倅、何かの事は詳しく聞いた、これまでの惡逆は數へられず、其の中にも罪なき女房お岩といひ、又小兵衛とやらを無實の罪にて殺した其の報いで、其の如くに難病、せめて後生

マア緩りと休息して、百萬遍を一緒に繰らつしやれ。」皆々「オ、それがよい〳〵。」源四郎「又有り難いお守を色々頂いて來ましたれば、是れを倅に藏かせませう、シテ倅はどこに。」お熊「今はあの紙帳の内で寐てゐまする、マア後にでも。」源四郎「時に講中のお衆、奥へ御座つて澀茶でも。」講中「ハイ〳〵勝手知つて居る故、出て呑みまする。」今「ときに久しぶりぢや、婆樣に何かの話を聞いたがよいて。」皆々「サア〳〵奥へゆきませう、親仁殿、後に逢ひませう。」源四郎「マアござれ〳〵。」ト講中皆々奥へ入る。跡唄になり、「イヤお婆、今日こゝへ戻る道々、内の樣子を講中の衆に問うたれば、斯樣々々と詳しい話は皆聞いた、此方や倅の惡事から、因果は廻る車の輪、前世此の世の敵同士ぢや。」お熊「これも倅の女房お岩の死靈がなす業にて、親子この樣に苦しめるといふは、恐ろしい女の一念、これも惡事の報いであらう、ア、情ない身の上で御座るワイなう。」源四郎「今いうたとて詮ない事、又俺も倅に逢うて惡念を發起させ、出家にでも勸めてやりませう。」お熊「ア、これ〳〵、まだ出世する倅、坊主にはなるまい。」源四郎「ア、まだ其の樣な事ばかり、惡事をなして出世がならうか。」お熊「イヤ〳〵さうでない、出世の種になるものを持つて居るから、今に大名ぢや。とも〴〵に世話さつしやれ、末がよいワイの。」源四郎「エ、やつぱり熱にうかされてゐるさうな。」お熊「イヤ此方は何にも知らぬ故ぢや。」源四郎「マア〳〵何は格別、奥へ往て足なと休めう。」お熊「マア久しぶりぢや、家でゆつくりと休ましや

順禮をせうと思つて、札所々々を打つて行くに、皆それ〴〵に不思議があつて、どうも心ならず。それ故一先づ家へ歸つて見た所が、前の所には居ず、うろ〳〵と尋ねる中、あの作兵衞殿に出逢ひまして、詳しい話も承り、吃驚しながら此の蛇山へ來る途で、皆の講中方に逢うて、マア大きに力を得まして御座る。マ、すぐに行きませうか。」○「家へ行て話しませう。」皆々「サア御座れ〳〵。」トテンツ、にて皆々門口へ來て、今「ヤア婆さんや〳〵、此方の先の配偶源四郎殿に道で遭うて、連れ立つて來ましたぞや。」ト此の聲にお熊奥より出て、お熊「何ぢや、源四郎殿が歸つたとな、やれ〳〵。」ト門口へ來て、「眞に源四郎殿ぢや、講中の衆も御大儀、この樣な時は餓鬼も人數ぢや、サア〳〵入らつしやれ入らつしやれ。」ト此の人數皆々内へ入る。源四郎葛籠を下し、草鞋など解きて塵うち拂ひ上手へ坐る。皆々竝よく竝ぶ、皆々科。源四郎「やれ〳〵途で講中のお衆や、あの作兵衞殿に何かの話は聞きました、何からお禮を申さうやら、大きに忝うござります。」皆々「何の〳〵、そりや互の事で御座る。」お熊「時に親仁殿、定めて話を聞かれたで有ろ、儕と其方との實の倅、久しぶりで家へ戻つた其の日から、何ぢややら家中へ鼠が出て、私も倅も此の樣に、天窗も何處も嚙り附き、大抵苦しい事ぢや御座らぬ。其の元は倅が女房のおもひといふ事で御座るワイなう。」源四郎「イヤモウ儕も坂東廻國に出た所が、札所々々で奇怪な夢許り。そこで一先づ戻つて來たのぢやワイの。」作兵衞「それは丁度よかつた、

伊右「何を。」ト刀を拔き斬り附けんとする途端に、お岩すがた隱す。ト大きなるお岩の顏出る。トありあふ絲車火の車となる。ト所々の南瓜みな〳〵お岩の顏と變る事誂へあり。伊右衛門おどろき、よき所へ立身になり、姿消ゆるとドロ〳〵うちあげる。ト右の飾り附けの道具、みな〳〵仕掛にて一時にどんてん。

返し

本舞臺三間の間、眞中二重舞臺、上の方藪の生垣、この所消ゆる仕掛あり。二重眞中暖簾口、上手に佛壇の書割此の前に鉦撞木あり。下手鼠壁、毎の所に門口、此のほか下の方柳の立樹生垣、其の下に流灌頂誂へあり。樒の花を立て、手桶に杓つけてある。すべて蛇山庵室の體にて道具納まる。トテツンにて向うより講中大勢、あとより近藤源四郎、諸國順拜の形、葛籠負うて出て、

講中「サア〳〵御座れ〳〵。」ト花道よき所にとまり、講中「これ〳〵源四郎殿とやら、道々も話した通り、あれに見えるが此の頃深川から引越して來たお熊婆樣の家ぢやが、最前から此方の話を聞けば、お熊殿の先の配偶との事、それは幸ひぢや。こなたは知らぬが怪奇な事があつて、此の頃は僻們も講中の事なら、晝夜これ百萬遍で責めかけて居るて。」源四郎「それははや忝う御座る。イヤ私も坂東

お岩「ア、まうし、それを手にして此の場を脫けようとは。」伊右「何しにほかへ。」お岩「そりや譃ぢや。」伊右「ヤア。」お岩「如何につたない手業にも、戀の賤機をりよくば、逢うて怨みの數々を。」伊右「そりや誰に。」お岩「お前に。」伊右「今初めて逢うたる身共に馴々しい。」お岩「イ、エ私やとうからあなたに。」伊右「スリヤ眞實に。」お岩「アイ。」ト伊右衞門引寄せ、伊右「可愛いやつの。」トお岩を膝へ横抱にする。お岩「オ、嬉し。」ト兩人抱き付く。トこの途端に簾垂ばつたり隕ちる。ト此のとき下座より官藏出て來り、柴戸の外より窺ふに、兩人の姿見えず、簾垂下りてある故、扨はあの裏にといふ科にて、徐々と拔足をして入る。簾垂の隙から覗き、悑りして後へ倒れ、漸う起きて此方のはうへ慄ひ／＼這うて來て、官藏「たつた今まで美しい娘と思ひの外、あの恐ろしい顏貌、それを知らずに伊右衞門が抱いてるさつしやるは。」ト不思議な事といふ科あつて「イヤ怖ろしい物見たしと、今一度。」ト又怖々ながら覗いて見て、「エ、全で化物だ。」ト又ふるひ／＼下座の方へ逃げて來り、「やれ恐ろしや、こんな所に長居は無用だ。」ト橋懸りへ逃げて入る。この時簾垂あがる。トお岩以前の化物の顏に變る。姿はやはり娘の形。お岩「チ、エ、怨みは盡きじこちの人。」伊右「ヤ、、そちや女房お岩。」お岩「エ、ねたましや。」ト始終どろ／＼。鼓唄『なう恨めしや根なしごと、身は浮草の種となり。』伊右「今に迷うて。」お岩「わが黑髮もろ鬘、漂ふ水に浮みもやらず、遺恨は霽れぬこちの人、ともに奈落へつれ行かん、來やれ／＼。」

て遊山に出た所が、どうやらいふ機會で、拙者家來の樣に相成つたが、何も貴樣に遣はるゝ覺えはないが、朋友の好みに奴となれば增上る、此の上は同格のあしらひ致す、身共が心まかせだ、ナニ馬鹿馬鹿しい。」伊右「こりや〳〵そりや何をまうす、其方は身共の家來に相違ないワイ。」宮藏「イヤ〳〵身共家來になつた覺えは少しも御座らぬ。」伊右「拙者も家來に致した覺えはなけれど、それ犬を牽いて供を致せば家來ぢや〳〵。」宮藏「イヤ〳〵家來は致さぬ、やめぢや〳〵、此の上は貴公身共の家來にならしやれ。」伊右「滅相な事申す奴ぢや、身共と汝とは、見た所が拙者は旦那顏、汝は家來面ぢや。」宮藏「ヤア旦那顏家來面と、面に分隔てがあるものか、拙者が旦那ぢや〳〵。」伊右「イヤ身共だ〳〵。」ト兩人爭ふ。お岩中へ入り、「マア〳〵お二人とも、其の樣に仰しやらずと、私にお預けあそばして、仲直りに酒一つ。」伊右「なる程これも尤も、今爭うたる事は水に流して養老の。」宮藏「瀧のみと致さうワイ、酒ぢや〳〵。」お岩「宜しう御座りませう。」ト是れより酒盛事いろ〳〵あつて、トヾ宮藏酒に醉うたる科。宮藏「ア、醉うた〳〵、アレ家が廻るワ〳〵、くるりと廻つて見えるワ。」兩人「ナニ廻るとは。」宮藏「それ〳〵まはる〳〵、じん〳〵まひぢや、きり〳〵舞ぢや〳〵。」ト千遍舞の囃子になる。ト宮藏くる〳〵と千遍舞しながら橋がゝりへまひ〳〵入る。ト跡より犬もついて入る。伊右「アレアレ彼の樣に、くる〳〵廻つて行くわ〳〵。」ト立つ門口の方へくる。トお岩伊右衛門の袖を控へて、

伊右「承知々々。御免下され。」ト門口より入る。お岩伊右衛門と顔見合はせ科あつて、お岩「これは〱賤しい伏屋へようこそ。鷹が參つたればこそ、斯樣な家へ。」官藏「鷹の餌食に掘溜へ、鶴のおりたる掘出し者。」伊右「賤しからざる爪はづれ、賤が伏屋に珍らしい、定めて主ある花ならん。」お岩「否々、庭守る人のなき故に、存分開く野路の花、ものは言はねどそれぞとは。」トこなし。伊右「しらぬ風情の霞の袖。」ト思入。お岩「ひく人あらば。」ト伊右衛門にしなだれる科。伊右「か。」ト思入。お岩「アイ。」ト袖にて顔を隱す。伊右「ハテ面白い花ぢやなア。」官藏「こりや可笑しな話ぢや、鷹が取持つ色男、俺には鳶でも媒介してくれんかい、これを思へば夜鷹なと買ひに行かうワエ。」伊右「こりや何を申す、身共これに用事もあれば、汝は次へ行て休息致せ。」官藏「イヤ〱それは又餘り、拙者が是れに居つたとて、何も邪魔にはなりますまい。」伊右「イヤ〱ちと彼の者に內々話もあれば、汝は場合をきつて。」官藏「でも鷹の番を致したい。」伊右「鷹は身どもが居ゑてをるワ。」官藏「さやうなら貴方の番を致さう。」伊右「イヤ身どもに番はいらぬワイ。」官藏「左樣なら私が番をわたしが手に。」伊右「そりや勝手に致せ。」官藏「辛と極つた。」伊右「こりや女中、今いうた通り主人はなしか。」お岩「何の主人が。やもめで御座んす。」伊右「スリヤ今まで獨寢か。」お岩「閨溫め鳥、鷹の自由に。」ト思入。伊右「なる心か。」お岩「アイ。」ト兩人より添ふを官藏見て、官藏「ヤア〱こりや耐らぬ、イヤナニ伊右衛門どの、貴樣と拙者同道に

外へはそれなたづね來つらん。」トこなし。此の時かけりになり、伊右衛門鷹狩の形よろしく、後より關口官藏立派なる奴にて、犬を牽いて出て來り、花道よき所にて、伊右「それて行く鷹の行方や穂屋の軒、たしかにあれと見請けたり。栞を問はん案内致せ。」ト合方になる。官藏「へイ／＼、御祕藏の鷹、何でもあの家に、とくと見屆けまゐりませう。」ト門口へ來て、「イヤ御免下され、ちと物が問ひたい、頼みませう／＼。」お岩「ハイ／＼、誰方で御座りますえ。」ト出て來て官藏と顔見合はせ、官藏思入。官藏「へイ／＼ちと物が尋ねたい。ヤア／＼滅相もない美しい者だ。イヤ何ぢやて、唯今これへアノ鷹が一羽、それては參らなんだかな。」お岩「ハイ唯今鷹は外れて參りまして、機嫌ようあれに止つて居りまするワイなァ。」官藏「ヤア／＼ほんにあれなる行燈に止つてをるワイ、これが眞のあんど致したといふもの、此の由傳へん、又そもじの美しい事も傳へん、何もかも傳へて來よう。」ト花道へ來て、「まづお悦びなされい、あの家の内に鷹は無事で居りまするテ。」伊右「それは重疊、左樣ならば仔細なく申し受けてくりやれ。」官藏「ア、申し、まだ外に美しい鷹が御座りまするて、あの樣な鷹を手にお据ゑなされたら、本望で御座らう。」伊右「ナニ美しい鷹が外に居るとな、然らば拙者も見物ながら參らうか。」官藏「サァかうお出でなされませ。」ト門口へ來り兩人囁く。伊右衛門ちよと覗き見て、伊右「成程これは見事な鷹ぢや、色も白斑の顔かたち。」官藏「お氣に入つたら拳を固めて逃さぬ樣に。」

家の者に鼠がついて、それは〳〵晝夜苦しめるげな、何でも一通りの事ぢやないて。」○「イヤモウ此方が身に關係がなけりやよいぢやないか、もう此の話は罷めるがよい。」ミ「どうか斯うちり毛もとがぞろ〳〵と鼠に引かれるやうな心持ぢや。」今「サア去にませうか。」皆々「サア〳〵ござれ〳〵。」ト捨白いうてわや〳〵で入る。どろ〳〵にて舞臺の切穴より心といふ字の切拔を上へ引いて取る、このうち蝶々番ひ飛んでゐる、ドロ〳〵打ち上げる、淺葱幕を切つて落す。

造り物、眞中九尺の二重舞臺、簾かけあり、賤が一つ家の體、周圍に南瓜の蔓這うてある、花の間に南瓜所々に出來ある。庭先には誂へて秋草いろ〳〵植ゑあり、毎の枝折戸、すべて物寂しき秋の景色、直に獨吟にかゝる。

唄『うたかたの合鏡の月さへも、影見せぬ夜に戀人の、しらせか蜘蛛の絲車。』トこれにて簾を上げる、お岩このみの娘の形にて絲車取つて居るこなしあつて、お岩「白玉か何ぞと人の問ひしとき、露と答へよ人の身の、消ゆるは宵の稻妻か、ありやなしやと帚木の、はかなきものは現世の境界、たのみなき世の有樣ぢやなア。」ト宜しく絲車をおき科あつて、獨吟唄『風のたよりも何處より、外れて來つらんはし鷹や。』ト此の時ピヨ〳〵になり、何處よりか鷹それてきて行燈へ止る。お岩見てこなし。「いづくよりかはそれ鷹の、主はたれとも白梅の、かをりとめ木やとまり木に、行儀の見ゆる鷹の有樣、

直助「地獄へ急ぐ置土產、日外手に入る囘文狀。」ト差出すを與茂七受取り、與茂七「慥かに落手、未來成佛。」ト思入。よき時分に古手屋門口に窺ひて、此の時つかへと入り、古手屋「扨は鹽冶の。」ト囘文狀へ手をかける。與茂七手早く拔身をとり斬り下げる、古手屋立身にて苦しむ。與茂七「飛んで火に入る。」ト刀を引く、これにて古手屋宙反りする。與茂七また見事に蹴かへす、これを木の頭。直助「南無阿彌陀佛。」ト引きまはす。與茂七印鑑を口にくはへ、後手に古手屋のとゞめを刺す、この見得よろしく。拍子幕。

大詰

一軒家の場

蛇山庵室の場

深川囘向院寺内の場

本舞臺三間の間、正面淺葱幕、こゝに百姓の仕出立ち並びゐる、雙盤の音にて幕明く。

仕出△「ア、この空合は雪と見えるワイ、降らぬ中に一稼ぎやりかけうか。」○「よからうへ、サアぬらくらも蛇遣はずとやりかけませう。」□「ア、これへ其の蛇で思ひ出した、あの蛇山の庵室の話を聞かしやつたか。」△「聞いた段かナア恐ろしい咄ぢやが、あの庵には死靈の祟りとやらがあつて、

著物は見覺えあるお前の定紋、それ故に。」與茂七「ヤ、、それにて思ひ當りしは、奧田將監が倅庄三郎と、某仔細あつて互に著類を脱ぎかへしが、扨は身共に意趣ある奴、この與茂七ぞと取違へ、欺し討に討つたるか。」直助「ヤ、、すりや大川端にて殺したは、奧田將監樣の御子息、庄三郎樣であつたか、ホ、ホイ。」與茂七「扨は己が庄三郎を。」ト詰め寄る。お袖「モシ。」ト與茂七を止めて、「此の書置を兄さんに逢うたらどうぞ。」トさし出す。直助とつて臍の緒の書附を見て、直助「一、元宮新吾が娘そで。」ト又吃驚する科あつて、與茂七「ヤ、、すりやお袖の親は元宮新吾とな。」お袖「アイ。」ト思入、直助手早く與茂七が捨てたる一腰にて、お袖が首を打ち落し、一腰を前へ投げ出し、撞となる。與茂七「ヤア女房が首を。」直助「サ討たねばならぬ言譯は。」ト出刃を腹へ突込む。與茂七「所詮助けておかれぬ直助、さはさりながら何故に。」直助「人の皮著た畜生が、往生ぎはの懺悔話、聞いて下され與茂七殿。」與茂七「ヤ、、何と。」ト是れより竹笛入の合方。直助苦しき科あつて、直助「元この直助は奧田の家來。身持がわるさに主人の勘當。因果の起りは此のお袖、つけつ廻しつ口說いても、得心せぬのは夫がある故、與茂七を殺した其の上で、此の身の願ひを叶へんと、大川端の暗紛れ、騙し討に殺したは、古主の御子息庄三郎樣と、聞いて知つたはたつた今。親姉夫の仇敵、討つてやらうと僞つて、抱寐をしたは情なや。オ、此の直助が血を分けた、妹と知つた此の書附。槍一筋の親は侍、其の子は畜生主

りといふ科あつて、屏風を蹴返す。ト内にお袖書遺と臍の緒の書物を持ち、手を負ひ苦しみゐる體。兩人左右より手をかけ、お袖をひき起し貫かうとする、この途端きつかけに月出る。是れにて三人顔見合はせ、雙方愕りして、直助「ヤア正しく男と思ひしに。」與茂七「屏風の中には女房お袖。」兩人「ヤ、、こりやどうぢや。」ト思入。これより本調子合方になり、お袖科あつて、お袖「同じ相圖に二人の夫、手びきなしたは疾くよりも、私が命を捨つる覺悟。只恥かしいは與茂七殿、わたしが操を破りし元は、義理ある父さん姉さんの敵が討ちたさ。一つにはお前が存命でゐやしやんすとは、神ならぬ身の夢にも知らず、やつぱり日外大川端にて、父さんと同じその夜に人手にかゝり、死なしやんしたと思ふより、お前の怨みも霽らさう爲、直助殿を力と頼み、枕かはして面目ない、お前に面が會はされうか。お手に掛つて死ぬるのが、せめてもの言譯ぞや、又直助殿には約束の養父の敵、姉樣の仇を討つたる其の後にて、この書遺に添へてある、私が一人の兄さんを尋ねて、この譯いうて聞かせて下さんせ。かへす〲も與茂七樣、この世の縁はうすくとも、未來は同じ蓮の上、夫婦になつて下さりませ。頼みます頼みますワイなア。」ト雙方へかけて宜しく科。與茂七思入あつて、與茂七「オヽ、出來した女房、養父左門殿も嘸悦びで有らう。それでこそ適れ貞心さりながら、合點ゆかぬは何を證據に某が、大川端にて人手にかゝり相果てしと。」お袖「思ひ詰めしは死骸の顔、破れ損じてそれぞとは知れねど、

はる。

造りもの、元の深川三角屋敷、直助宅の段に戻る。眞中に屏風たてあり、やはり捨鉦、誂への合方にて道具納まる。ト屏風の内よりお袖、書遺と片手に行燈を持ち、よき所へ出て、

お袖「水の流れと人の身は、移り變る世の習ひ、思へば因果な私が身の上。實の父さん、幼い時にお別れ申し、まだ其の上に一人の兄さん、ありとばかりお顏も知らず、義理ある父さん姉さんは、非業にお果てなさんした。其の敵が討ちたいばつかり、女の操を破りしからは、所詮この身は。」ト思入あつて懐中の守袋より、臍の緒の書物出す。やはり時の鐘合方、下の方に直助、出刃を手拭に捲き、花道の方へ拔足にて行き内を窺ふ。お袖扠はといふ思入ありて、「この臍の緒の書物は、血を分けし親の筐、せめては是れを兄樣に、私が死んだ其の後で屆けて貰ふは。」ト思入あつて、「これが此の世の。」ト科あつて行燈を吹き消す。この途端、捨鉦の頭を打ち込み、忍び三重に變り、花道の直助出刃を口に銜へ、裾をからげ巖と見得、上の生垣を押し破り、與茂七そこへ出てよろしく科。此の時お袖も科あつて屏風の内へ忍ぶ。兩人窺ひ〳〵、直助は内へ入る、與茂七とすれ違ひ、入れ替つて互に思入あつて、屏風越しに與茂七は一腰、直助は出刃にてぐつと貫く、内にはあつと叫ぶ、兩人しすました

くと立ち。次郎吉「私を殺せしは民谷伊右衛門。」ト子に言はす。お花「ヤアすりやこちの人が此の子に。」
孫兵衛「體を假りてもの言ふか。」又之丞「その伊右衛門こそ近藤が倅にて、親にもまさる邪道者。」お花「そんなら敵は民谷伊右衛門。」トお花屹となり科。孫兵衛抑へ、孫兵衛「コリヤ女の手にあふ民谷でない、何事も俺が胸に、なア。」ト孫兵衛思入あり。「たゞ此の上は若旦那樣、少しも早う其の藥を。」又之丞「オオ心づくしの此の良藥、如何にも服せし其の上にて、この一件を大星殿へ演說なさば、わが惡名も晴れし上、一軸詮議せん、氣づかひ致すな忠義の小兵衛。今ぞ良藥服用なさん。」ト孫兵衛水を汲んで差出す。又之丞、小兵衛が前に渡せしソウキセイの藥を呑む科ある。次郎吉「ア、うれしや。」トどろどろ烈しく又之丞悶絶する。次郎吉も倒れる、鳴物打ち上げる。よき時分に下座の方より婆お熊、米屋うかゞひ出で、此の時内へつかつかと入る。お熊「扨こそ良藥。」米屋「盗んだ又之丞。」ト又之丞へかゝる。又之丞すつくと立つて米屋の手を捩ぢ上げる。皆々是れを見て、孫兵衛「ヤアあなたは。」お花「お足が。」
又之丞「まことに扨は難病全快なしたるか。」お花「草葉の陰にてこちの人が。」孫兵衛「さぞよろこんで。」
又之丞「エ、忝い。」米屋「なにを。」トかゝるを突き廻し、又之丞米屋をボンと斬る。お熊「ヤア人殺し。」ト聲立つるを孫兵衛ちやつと引捕へ、孫兵衛「エ、こゝな魔王め。」トよろしく押し附ける。又之丞刀の血を拭ふ。お花右に位牌、左に次郎吉を抱へ泣きおとす。この見得よろしく時の鐘の送りにて道具ま

やうにといはしやんした故、何意なく法乘院樣へ往て、親父樣が願ひました品をというたれば、方丈樣がお手づから下された、この白木の位牌。不思議な事と手に取り見れば、これ俗名小兵衛、施主は親御のお前の名、悔りせまいか私やモウ、其の場ですぐに死にたう御座りましたワイなア。」ト泣く。又之丞こなしあつて、又之丞「スリヤ倅小兵衛が、此の世を去りし魂魄の、身どもが難病救はんと、寒氣を防ぐ衣類といひ、良藥とても業通にて、取り得て我に與へしのみか、切腹までを止めしは、死しても竭す忠義の心底、忘れはおかぬ忝い。さうとは知らず、我に惡名負はせし小兵衛、憎さも憎しと追詰めて、手討になせしと思ひしに。」お花「そんならこちの人小兵衛殿は、ありし姿を現はして、今までこゝに居やしやんしたか。妻の私や子の次郎吉に、なぜに會うては下さんせぬ。私や會ひたい懷かしいワイなア。」ト泣き伏してこなし。孫兵衛「オヽ、尤もぢや／＼がこれ嫁女、位牌になつたを見た汝より、現在倅が死骸をば、隱亡堀で見つけた時の悲しさは、どの樣に有らうと思やる、其の上慘たらしい殺しやう、涙のありたけ泣いた上、法乘院へお願ひ申し、葬つたは今日の夕方、嫁や孫めに知らさぬは、ちつとも遲く泣かさう爲。この親仁が心の裏、嫁女、若旦那樣、御推量なされて下さりませ。」又之丞「オヽ、聞く程不便な小兵衛が成行、元より正直なる生まれにて、非道を働く者でなし、殺せし奴は何者ぞ。」ト屹となり、誂への合方、寐鳥うすどろ、燒酎火もえる。奧より次郎吉走り出ですつ

腹へ突き立てんとする。此のときドロ〳〵はげしく、小兵衛とめる科。「エ、聞譯なくまだ止めるか、下郞ながらも是れまでの忠義に免じゆるし置けば、某に恥面かかせし其の上に、猶も武士道棄てさするか、モウ此の上は汝を手討に致した上、邪魔を拂うて潔く切腹。」と刀を取直し、小兵衛を膝行りながら追ひまはす。此の時一つ鉦の音、せめ念佛となり、小兵衛よき所へ轟然と立つ。小兵衛「あなたの願ひを叶へんと、苦しい悲しい恐ろしい、いふにいはれぬ艱難にて、やう〳〵手に入る此の藥。それにて全快なされた上、どうぞ首尾よくお家再興御なし下されませ旦那樣。」又之丞「何をおのれ、覺悟なせ。」ト摺り寄つてはげしく斬る、大どろ〳〵になる。小兵衛柱の中へ消ゆる途端に、又之丞卒堵婆を斜に斬る、ドロ〳〵寐鳥やむ。矢張一つ鉦せめ念佛になり、又之丞ぎよつとして、「ヤ、、、小兵衛を手討と思ひしに、姿は消えて此の卒堵婆、ム、俗名小兵衛、こりやどうぢや。」ト思入。ばた〳〵になり、向うよりお花白木の位牌をかゝへ、一散に走り出て來り、門口へこけ込む。お花「舅御さま、モシ孫兵衛さま、コリヤマアどうせうぞいなア〳〵。」トうろ〳〵して泣き伏す。奧より孫兵衛松蟲の鉦を持ちよろめきながら、出て來て、孫兵衛「オヽ、悲しかろ〳〵、尤もぢや〳〵、おりや間がな隙がな佛壇のまへで、この鉦撞木を杖柱、いつそ泣き死に死にたいも、命めが自由にならず、よく〳〵業のつくばつた親父が身の上、嫁よ推量してくれ〳〵。」お花「お前が最前、歸りにはお寺へ寄つて來る

というて手がゝりはなし、日限は二十日、其の上難病、盗人の汚名まで受けては。」ト思入。「こりやどうあつても生害致さん。」ト此の時一つ鉦念佛の聲。又之丞脇差抜き、袖にて拭ひ腹を切る思入ある。ト薄どろ／＼寐鳥にて、小兵衛のすがた幽靈にて、藥の包を持ち忽然と門口へ現はれる。「小鹽田又之丞、今ぞ此の世の。」ト腹へ突き立てうとする。此のとき門口の小兵衛科ある。ト又之丞五體すくんで腹切れぬ科。又思ひ直し腹切らうとする。この時小兵衛ふうはり立つたる誂への門口より内へ入り、又之丞の傍へ坐る。又之丞いろ／＼あつて、「ハテ心得ぬ、手先しびれて切れぬはどうぢや。」ト不審のこなし。此の時初めて小兵衛を見て、「ヤ、、、それに居るは小兵衛でないか。」ト又之丞思入。小兵衛のいふ事を聞き取る科。「ヤ、、何と申す、今切腹なしては犬死、手に入る良藥にて難病を全快なせし上、照月の一軸を詮議して家再興なせ。こりやヤイそれを汝に習はうか、身共はな汝故に盗賊の悪名うけ、古朋輩の手前面目なく、それ故かねての切腹ぢやァやい、うぬ。」ト小兵衛見えぬ科にて、「うぬ何れへ參つた、ナ、なんと申す。」ト聞く事あつて、「大切に思ふ心ゆゑ、心に思はぬ盗みを致し、良藥をも取り得たれば、これを服して全快なせとか。」ト始終又之丞、小兵衛のいふ事を聞き取る科ある。又小兵衛死靈の科にて、又之丞の切腹をとゞめる。「ヤァ今となつて如何樣に申しても。」ト又腹切らうとする。小兵衛止める。「エ、さすが賤しき下郎、汝故に盗賊の悪名受けたれば、最早これまで。」ト又

孫兵衞次郎吉をつれ奥へ入る。婆古手屋米屋行きさうにして囁き合ひ、お熊古手屋は下座へ、米屋は向うへ提灯消して入る。傳藏こなしあつて物をも言はず、ずつと立つて歸らうとしかゝる。又之丞「アイヤ申しお待ち下され傳藏殿、物をもいはず立ち出でめさるは、すりや拙者奴を誠の盜賊と思召しての事で御座るか。」傳藏「イヤ其許盜賊でない事、身どもよく存じて居る、ハテ行步叶はぬ身を以て、左樣な爲がなり申さうか。」又之丞「シテ又何ゆゑ拙者めに。」傳藏「たとひ其身は邪なくとも、鹽冶家中の中に左樣な惡名をうけたる者御座つては、難儀の上の又難儀、家再興の邪魔に相なり、世の人口はふせがれず、その身の不運とあきらめ召され。」又之丞「左樣では御座らうなれど、無實の罪なれば。」傳藏「李下に冠、瓜田に沓、汙名は脫げぬもので御座るて。」又之丞「スリヤ貴殿にも御不審が。」傳藏「御緣もあらば又重ねて。」ト門口へ來て。又之丞「アイヤ。」トとめるを一寸振切り。傳藏「お目にかゝらう。」ト科あつて時の鐘、唄になり向うへ入る。跡合方にて、又之丞「思へば／＼武運拙き者、浪々の上この難病。それにもはや歌合の日限は近づく、其の上一軸の手がゝりはなし。今又はからず盜人と惡名受けて、朋友の手前も恥かしく、傳藏殿と詞は誓ひたれども、この難病では當月二十日までに全快は覺束なし。おめ／＼と世の人に、武士の面が合はされうか、生き存へて恥面かかんより、未來の主君へ言譯の追腹。」ト脇差を取り思入あつて、「イヤ／＼縱ひ何の樣な惡名受けても、一軸さへ手に入れば。

サア。」両人「いつその事。」ト米屋は孫兵衛、古手屋は又之丞をひつ捕へ、「これでもか〳〵。」ト打ちすゑる。始終傳藏手を組み此の樣子を聞いてゐて、此の時ぢつと立つて、米屋古手屋を見事に投げる。
米屋「アイタ、、、此の侍は何で此の樣に。」古手屋「これ盜人の肩を持つのか。」ト立ち蒐るを傳藏、懷中より包金を出し兩人へ投げやる。兩人「アイタ、、、。」古手屋「ヤアこれは小判できつしり六兩。」米屋「こゝへも一歩、そんならこれは。」ト兩人金を見て、傳藏「身共取りかへ遣はす、金子請取つておきやれ。」又之丞「すりや傳藏殿には、某が此の場の樣子、難儀を救うて。」米屋「そつちは六兩、こつちは一歩、同じ痛い目つまらぬ物だ、これお侍、此方には言分があるになア。」傳藏「ヤイ〳〵汝等商人の身をもつて、病人と申し老人を手籠に致す無法者、たゞおかれぬ奴なれども、其の分に赦しつかはす、きり〳〵此の家を歸り居らう。」トきつといふ。米屋「ハイ〳〵歸りまする〳〵。コレ庄七殿、長居したら又どの樣な酷い目にあふも知れねえ。」古手屋「イヤモウ投げられても金さへとれば言分はないぢや。」お熊「これこなさん達歸るなら、其の提灯をかすりに、私も鄰の念佛講へ。」孫兵衛「エ、何を汝が後生三昧、八萬地獄へ眞逆さま。」お熊「アイサそれは承知さ、鬼の樣な亭主がほしいから。」ト三人門口に出かゝる、孫兵衛次郎吉を抱き上げて、孫兵衛「これ坊よ、わりやアノほんまに父に會うたか。」次郎吉「アイ。」孫兵衛「南無阿彌陀佛、々々々々々々。」お熊「サア行かないか。」ト寺のかね、雙盤になり、

こさつしやい。」ト次郎吉を引奪り、「コレ小僧、あの搔卷や著物は、汝が持つて來たのか、サァ有樣に云へよ。」次郎吉「アイあの著物は。」トいひさうにするを、お熊白眼む故おろ〳〵して、「知らぬワイなア知らぬワイなア。」ト又之丞、次郎吉を傍へ引寄せて、又之丞「これ知らぬでは濟まぬ、よい子ぢや有樣に申せ、サどうぢや〳〵。」トせり立てられて、次郎吉「アイあの著物は私が。」ト言はうとするを又お熊白眼む。「知らぬワイな〳〵。」ト孫兵衞思入、お熊次郎吉を引取り、お熊「何とどうで御座りまする、子供は正直な物、知らぬといひますぞえ。そんなら誰が持つて來ませう、矢張盜人は。」孫兵衞「オ、俺ぢやこの親仁ぢや。」皆々「ヤア。」孫兵衞「サア其の品々を盜んで來たのは、南無阿彌陀佛々々々々々。サア質屋の若い衆、この孫兵衞を縛りなりと括りなりとも、勝手にさつしやれ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」ト思入。お熊「エ、この親父殿は何を言はつしやる。」トお熊、古手屋に目配せする。古手屋「この盜人は見す〳〵知れた浪人殿。それとも盜人でないならば、四品しめて元利六兩足らず、勘定すれば盜人の。」又之丞「惡名脫けるとお云やつても、金輪奈落この金は。」古手屋「そんなら此方は矢張盜人。」又之丞「何しに身どもが左樣な事を。」お熊「盜人たけ〴〵しいとは此方の事だ。」米屋「サァ孫兵衞殿、米代はどうするのだ。」孫兵衞「今というてはどうも才覺が。」古手屋「サァ質を請けねば此方は盜人、それとも其の金こゝへ出すか。」又之丞「サァそれは。」米屋「拂ひはどうする。」孫兵衞「サァ。」皆々「サァ〳〵

やら身共も存ぜぬが、親の小兵衛が届けたと申して、あの次郎吉が持參致したて。」古手屋「エ、左樣ならあの年端も行かぬ次郎吉が。もしまだ此の外にソウキセイといふ藥包が參つては居りませぬか。」又之丞「イヤこりや〳〵町人。其許の家にツウキセイを所持いたし居ると申す事なら、是非とも身どもが求めたう御座るが。」古手屋「もし〳〵しらをおきりなされまするな。お前は〳〵、見かけによらねえ盗みをさつしやりますな。」又之丞「なに、ド、どう致した。」ト屹となる。古手屋「ハテ腹をお立てなされますな、其の盗人といふ譯は、もしコ、これが慥かな證據でござりますぜ。」ト布子蒲團搔卷一々に指をさして、「これはみんな私方へ質に取つた代物。マアこの三品は可いが、とてもの事に藥も爰へ出さつしやるが可うござります。」又之丞「こりや町人、爰に身共が古朋輩も聞いて居らるゝに、身に覺えなき無實の難題、殊に大外れた盗人などとは、おのれ今一言いうて見やれ、赦さぬぞ。」ト又之丞脇差を引寄せきつとなり、「こりやこの品々はな、只今も申す通り、此の家の倅次郎吉が。」お熊「エ・年端も行かぬあの餓鬼が、そんなら其の品を。お前もマア大概つもりにも、ハ、、、。」ト思入あつて奥の方に向ひて、「これお祖父殿、小僧をつれて早う御座らつしやれ〳〵。」ト孫兵衛、次郎吉をつれて出で來る。孫兵衛「婆ァなにを其の樣にけたゝましう呼ぶぞい。」お熊「呼ばないでどうするものか、ことによると爰の家の者は、殘らず盗人になる詮索で御座るワイの。エ、何をぐづ〳〵と、其の餓鬼を此方へよ

龍虎二つに其許と契ひをなして忠義の魂。」又之丞「拙者も貴殿と契ひの金打。」傳藏「ア、尤も」ト兩人金打する。「天に通ぜよ。」又之丞「奈落へひゞけよ。」兩人「無量に契ひて心地よし。」ト兩人科。かすめたる禪の勤めになり、向うより以前の古手屋米屋、弓張提灯持ち出て門口へ來り。古手屋「孫兵衛殿、お家に御座るかな。」米屋「ハイ御免なさい。」ト門口をあける。此の聲を聞き婆お熊奥より出で來り、お熊「ハイ／＼何方から御座りました。」ト兩人を見て、「此方衆は又碌な事ぢやあるまいなア。」米屋「オオさう云はれては猶の事だ、このあひだから米代一貫六百文、是非とも今宵勘定して下されい／＼。」お熊「サ、もつともでござりますよ。命を繫ぐ米の代、何を措いても無沙汰にはならぬわけだが、見さつしやる通りの懸寄人。御病人に似合はぬ一食に、重々盛つて三四膳、それでは米代の溜るも忽ち、無理ではござるまい。親仁殿はあの通りの結構人、嫁も壻もかひしやうなし。櫂の廻らぬ身上に、重荷に小づけの藥三昧。」ト又之丞へあてていふ科。「ほんに氣の減る程ものが要ります。米屋さん、長くとはいふまい、モウ二月三月待つておくれな。」米屋「とんだ事いふぜ、どうして待たれるものか。」トこの中古手屋、又之丞が引掛けて居る布子、蒲團、搔卷に目をつけて、古手屋「もしちつとお免しなされませ。」ト古手屋提灯にてよく／＼見るこなし。「ヤアこれだ／＼、是れに違ひねえ、店の符牒もまだ其のまゝ、もしお前様は此の品は何處から持つてお出でなされました。」又之丞「何處から持つて參つた

遣りやれ。」孫兵衞「ハイ〳〵、眞に何にも知らず、子供といふ者は佛樣ぢや、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。左樣ならば貴方樣、ゆるりとお話しなされませ。」ト傳藏に會釋して、孫兵衞次郎吉を伴れ思入あり、奧へ入る。傳藏「さて小鹽田氏、身共今宵參つたは餘の儀では御座らぬ、當月下旬にお歌合の御遊興ある由、さすれば其の節までに照月の一軸手に入らねば、お家再興いよ〳〵難かし。それ故家中に忠義の者、指折り見れば僅か兩三人。賴みと思ふ左門殿は横死、まだしも便りは與茂七なれど、これとても行方知れず、貴公と拙者兩人して、かふが舍利になるまでも一軸の詮議、當月二十日まで、何卒粉骨碎身なし、家再興の一義を賴む又之丞殿。」又之丞「ハ、ア仰せまでもなく、拙者とても其のとほり、火急に迫るお歌の會。その一軸を詮議せんにも、斯くの如くの難病、是非なく月日を徒らに過すも殘念、口惜しやなア。」傳藏「尤も其の樣子では、あゝ心許ない。」又之丞「アイヤ氣遣ひあるな、醫師の申すにはソウキセイと申す良藥。これを服すれば拙者が病、忽ち全快致すとの事。この良藥も此の家の倅小兵衞と申す者、心あたり御座るというて、近々手に入りまする筈。お氣遣ひさるな傳藏殿。」傳藏「イヤそれを承り安堵、さりながら當月の歌合を師直の方にて勤めなば、鹽冶家はいよ〳〵埋木で御座る。照月の一軸さへ手に入れば、此の方にて勤むる會。さすればお家は再興、お喜びあれ又之丞殿。」又之丞「天に契ひ地に伏して、當月二十日までに手に入る事は、其許と此の又之丞。」傳藏「オ、

はどれから。」傳藏「身共は小鹽田氏に用事あつて參つた者、ちとゆるしやれ。」ト内へ入る。又之丞傳藏を見て、又之丞「ヤア貴殿は赤坂傳藏殿。」傳藏「小鹽田氏、さて一別以來。」又之丞「これは／＼能うこそ御入來、まづ／＼これへ。」傳藏「然らば御用捨くだされい。」トよき所へ居る。又之丞膝行り出で、又之丞「先づは御堅勝にて。」傳藏「貴殿にも御無事で、と申したいが承れば、なにか御病氣とのこと。」又之丞「左樣に御座る、霍濕風とか申す病にて、いまだに歩行が心に任せぬやうに御座るて。」お花「ハイお茶一つ。」ト傳藏に茶を差出す。傳藏「イヤ／＼構はつしやるな／＼。」トお花、孫兵衛にさゝやくと、孫兵衛「オヽ、よう氣が注いた。二合半取つて來やれ、これ西横町のがよいぞや、そして何ぞ下物も見繕うて。」ト傳藏思入あつて、傳藏「イヤ／＼馳走は無用になされい／＼。」お花「なんのマア御馳走と申すではござりません、夜分と申し寒さも烈しうござりますれば。ツイ往て參りませう。」ト德利を提げて門口へ出る。孫兵衛「これ／＼お花や、酒買うて歸りに、一寸法乘院樣へよつて、祖父がお願ひ申しておいた物を下されと、其方持つて歸つて下され。」お花「アイ、そりや何でござりますえ。」トこの中次郎吉居眠りをしてゐる。孫兵衛「何であらうと持つて來ればわかる。コレ必ず吃驚せまいぞや。」お花「エ、何ぢややら氣味の惡い。どりや酒買うてこうか。」ト木魚入の合方になり、お花むかうへ入る。又之丞思入あつて、又之丞「こりや／＼孫兵衛、坊主めが眠たうなつた樣子ぢや、納戸へつれて行て寐さして

口へ來り戸を明ける。トお花立つて來り、お花「小兵衞殿、戻らしやんしたかえ。」ト次郎吉を見てこなし。「こちの人かと思うたりや次郎吉、それや何ぢやぞいな。」次郎吉「サ、父さんがこれを旦那樣に著せろというて、屆けさつしやつたワイなう。」トお花蒲團を見て內へ入り、お花「そんなら是れを若旦那樣にお著せ申せと、アノ父さんが。」孫兵衞「何といふ、それも倅が屆けたといふか。」お花「アイ、エ、何の事ぢやぞいな、年端もいかぬ者に、此の樣な重いものを屆けずとも、なぜに主が持つて早う歸つては下さんせぬぞいなア。」孫兵衞「南無阿彌。エヘン／＼／＼。」ト紛らして思入ある。又之丞「やれ／＼次郎吉大儀であつた。爰へ來やれ褒美取らさう／＼。」ト又之丞傍にある菓子を出して次郎吉にやり、「これ今に父が歸るであらう、大人しうしませうぞや、ほんに賢い奴ではある、お花讚めてやりやいの。」お花「ハイ／＼。これ次郎吉、久しぶりで父樣と一緒にねかするのぢや、嬉しいかや／＼。」又之丞「その子よりも第一其方が。」トお花恥かしき思入。「身共も嬉しいワエ、ハ、、、」ト思入。孫兵衞俯いてゐる。向うより赤坂傳藏、大小打裂羽織、小提灯を燈し出て來り、門口へ來て、傳藏「賴みませう／＼。」お花「やこちの人が歸らしやんしたさうな。」トとつかはと門口へ行き戸を明けて、「小兵衞殿かいな、お前はマア。」ト傳藏を見て、「ホ、、、私とした事が。」ト氣の毒なる科。傳藏「ナニ人違ひかなハ、、、。イヤナニ女中、ちと物が尋ねたい、孫兵衞殿と申すはこちらかな。」お花「左樣で御座りまする、貴方

やる深切、こりや寐た間も忘却は致さぬ、忝い〳〵。」孫兵衞「何の其のお禮に及びませう。この親仁奴はお前の親御樣の御草履取、又倅の小兵衞奴はお前樣の御家來。お邸の騷動から、御家老大星樣はじめ御家中もちり〴〵、畢竟わたくし風情をも御家來と思召せばこそ、たよつてお出でなされた若旦那、粗末に致してよいもので御座りませうか。」トこの内お花又之丞の布子搔卷に目をつくるこなし。お花「アモシ若旦那樣、この搔卷や布子はどうして貴方樣、ナア父さん。ト不思議なる思入。孫兵衞「なる程これは夏中。アイヤ誰が持つて參りましたなァ。」又之丞「こりや最前次郎吉が持つて參つて、寒氣を防ぐ爲、身共に著る樣にというて、あの小兵衞が屆けたと申す事ぢやて。」孫兵衞「エ、あの倅小兵衞が。」ト思入あつて、「もし若旦那樣、そりやマア眞實の事で御座りまするか。」又之丞「なに身共が僞りを申さうぞ、あの小兵衞が屆けたに相違はあるまい。」孫兵衞「すりやそれ程までに御主人樣を、倅出來した、南無阿彌陀佛々々々々々。」お花「オホヽヽ、父樣とした事が、何を言はしやんすぞいなァ。又さういふ事なら早う戻らしやんすであらう。」ト門口を覗いて見たり色々するを孫兵衞見て、孫兵衞「もし若旦那さま、ちとおみ足を擦りませうか。」又之丞「あいや〳〵小宵は大分快い、構やるな〳〵。」孫兵衞「ハテ御遠慮には及びませぬワイなァ。」ト又之丞の足を擦る。孫兵衞始終口の中にて念佛を唱ふる思入。靜かなる禪の勤めになり、向うより次郎吉三布の蒲團を繩にて括り、これを引きずり出て門

マ、、辛抱してくりやれ。又仕様もあるぢやあろ。」お花「エ、勿體ない、母さんはかひ〴〵しいお生まれ故、私どもや配偶の致しまする事は、お氣に入らぬも尤もでござります。それはさうとこちの人が留守の中も、くれ〴〵氣を注けて進ぜいというておかしやんした御病人樣は、今日は少しお快う御座んすかえ。」孫兵衛「今すや〳〵寐て御座つたが。どうも捗らぬ御病氣、彼方へ對してもあの婆奴が邪慳故、私は氣の毒で。眞に藥もよい時分であらうぞや。」お花「ハイ〳〵溫めてあげませう。」ト七輪へ土瓶をかけて煽いでゐると、障子の内にて、又之丞「お花は歸りやつたか、孫兵衛殿々々々。」ト呼ぶ故、孫兵衛「ハイ〳〵若旦那樣、お目が覺めましたか。」ト合方になり、上の家體の障子を明ける。爰に小鹽田又之丞病體にて鉢卷、搔卷により懸り、木綿布子を肩に引きかけてゐる體。又之丞「今宵は大分寒氣が強いが、雪でも散らつきは致さぬか。」孫兵衛「イエ〳〵雪は降りは致しませぬが、此の寒さでは病氣にさはりませうかと、私も大きにお案じまうしまするて。」トお花茶椀へ藥をつぎ持つて出る。お花「お藥おあがりなされませ。」ト又之丞くすりを服みながら、又之丞「お花、小兵衛はまだ歸らぬか。」お花「モウ彼これ一月餘りにもなりまするから、お暇を願うて歸る時分で御座りまする。」トこの中孫兵衛は念佛を唱ふることなし。又之丞「夫小兵衛は日雇奉公、妻のそなたは女の身として夜商ひ。その艱難の生計の中へ、かやうに長々の病氣にてのかゝりうど、それをうたてくも思はず、よう世話してくり

お花、とてもの事に何故皆賣つて御座らぬのぢや。」お花「ハイそりや明日の朝の茶漬のおかずに上げうと思ひまして。」お熊「ホヽヽ、そりやよう氣が注いた、が費えな事ぢや。コレ次郎吉、お母が野郎かはいて賣り殘した卵子を、早う賣つて來い、よい子ぢや一寸行つて來やや。」ト猫撫聲をして卵子の籠を持たせ、二人に見えぬ樣に次郎吉をつめる。次郎吉「ア、痛いワイなう〳〵。」孫兵衛「オ、どうしやつたどうしやつた。」次郎吉「ばゝア樣が私を抓つた。」お花「エ、此の子はよう譃を。あれ程不斷いとしがつていはしやんす物、ナニ祖母樣が其の樣な事を。コレ早う賣つて來やいの。」次郎吉「アイ〳〵。」ト泣き泣き門口へ出かける。孫兵衛「エ、邪慳な奴。」お花「ア、もし。サア怪我せぬ樣に行つて來やいの。」ト思入。次郎吉籠をさげて泣き〳〵、次郎吉「たまご〳〵煠卵子。」トいひながら向うへ入る、合方時の鐘鳴る。お熊「なる程瓜の蔓には茄子の譬へ、其方の亭主ぢやが、あの小兵衛が意氣地のない所に能う似てゐるワイの。私が生んだ子を譽めるぢやないが、そりやこなさん達に見せたい歴乎とした侍、それも今は浪人して。ほんに浪人といへばアノ腰拔殿の病人、まだてごねさうにない。あれが眞の穀つぶし。」ト障子の內へあてていふ。「ドリヤ賣溜の勘定でもしませう。」ト合方になり、お熊籠の蓋にある錢を持つて奥へ入る。孫兵衛「なる程、あの婆も年よる程根性が惡うなる。儕も年よつて退去するも外聞がわるさに、捨ておかばよい事にして増長りをる。これお花や、わが身もさぞ疎ましからうが、

籠を提げ出て來て直に內へ入りて、お花「ハイ今歸りました。」ト此の體を見て二人の間へ入り宥めて、「こりや何事で御座ります、マア〳〵御料簡なされませ〳〵。」ト兩人を宥める。孫兵衞「オヽお花か聞きやれ、この婆奴が又坊主をいぢり居るワイ。」お熊「これ〳〵此方へのり出した此の餓鬼、不斷わしが可愛がつてやれば可い事にして。」孫兵衞「ヤイ〳〵うぬ、この坊主奴を何時可愛がつた、大福餅一つ買つて遣つた事があるか。」お花「ハテモウよう御座りまする、マア〳〵御料簡なされませ。これ次郎吉、何をそなたは婆樣の機嫌を損じたのぢや。」孫兵衞「また賣溜が多いの少ないのというていぢりをるワイの。」お熊「これ親仁殿、何も商賣ぢやもの、賣溜の事いはでワイの。こればかりは憎まれても言はにやならぬ、これ〳〵お花も今宵は何程ほど商ひしやつた。」お花「ハイまだ勘定は致しませぬが、一寸御覽じて下さりませ。」ト卵子の籠をお熊の前に差出す。お熊籠の中を見て科あつて、お熊「こりやまだ賣りきらずに歸つて來やつたの。」お花「ハイたつた三個餘りました。」孫兵衞「オヽよう賣つておぢやつた、サヽ饑じかろ、茶漬でも喰うたがよい。コレ賣溜は嘸澤山さうな。」トこの中お熊籠の中の錢を見て、お花「アイ大方四五百もござりませう。」孫兵衞「ヤアそりや大枚の商ひぢや、それで此方も機嫌が直つたであらう。オヽ大儀であつた〳〵。」お熊「又この位の商ひせねば、水も呑まれるものではない。何處の牛の骨か馬の頭か知れもせぬ病人を、家へ引きずり込み、大抵物の要る事ではない。これ

あらう、サア爰へ出せ。」孫兵衞「これ婆ア殿、可愛さうに子供を其の樣に言はぬがよい。シテ賣溜は何程ある。」お熊「これ見さつしやれ、こればかりぢや。」ト百二三十つないだ錢ほり出す。孫兵衞見て、孫兵衞「ハテ五つや六つの子供の商ひ、それ程あれば可いではないか。これ坊や泣くな〳〵、オ、よく稼いだ、坊はよい子ぢやぞ。」お熊「エ、こなさんが其の樣にあまやかすに依つて、商ひに出ても錢をくすねて買食らひ許りしをる。錢を何處へ隱した、出しをらぬか、この餓鬼は出しをらぬかやい。」ト孫の次郎吉をつめる。次郎吉「どこへも隱しは、いたしませぬ、婆さま堪忍ぢや〳〵。」ト泣きねぶる。孫兵衞「これはしたり可愛さうに、どうしたものぢや。」お熊「こなたはそんな結構人だに依つて、世間で佛孫兵衞といひまするワ。其の子も同じ代物故、あの小兵衞も、儕は身腹痛めぬ子の爲かして、一倍間ぬけに思はれます、其奴が產へた餓鬼だによつて、うす馬鹿の筋をひかぬ樣に、根性を叩き直さにやならぬ、エ、退かつしやれ。」孫兵衞「ヤイ汝は年端も行かぬ者を、常住ぶち打擲、モウ〳〵手荒き事は俺がささぬ。指でもさいたら聞く事ぢやないぞ。」お熊「エ、こなさんが囘護ふ故猶腹が立つ。うぬどうして吳れう、エ、小面の憎い。」ト蜆籠を持つて撲きかける。孫兵衞「この鬼婆め、何をするのぢや。」お熊「うぬどうするか見やァがれ。」ト笊を持つて打つてかゝる。孫兵衞止め、トヾ婆お熊と摑み合ふ。佃の合方、時の鐘になり、向うよりお花は世話なり、手拭を被りて前垂高からげにて、煠卵の

大事を抱へしお前の身に、もしもの過ちある時は、古主へ不忠になりませうが。」與茂七「その心配もさる事ながら、今も奥にていふ通り、大切なる印鑑が彼奴に拾はれ、大事を知つたる上からは、所詮生けてはおかれぬ奴。」お袖「さう思はしやんすなら、爲やう模様は。ナモシ。」ト囁く、與茂七呑込んだる科にて、與茂七「ム、すりやいよ〳〵汝が手びきして、直助を討たすとな。」お袖「わしが親も鹽冶の御家來なりや、私が爲にもやつぱり御主人、お爲にならぬ直助殿、殺す手引も御奉公。」與茂七「出かしたお袖、シテ又相圖は。」お袖「サア戻らしやんしたら、何かなしに寐酒を侑めて、正體なき折を窺ひ。

與茂七「あかりを消すを相圖とさだめ。」お袖「枕に立てし屏風ごし。」與茂七「しのびよつてたつた一突。」

お袖「これ必ず。」與茂七「相圖を。」お袖「違へぬ樣に。」與茂七「がつてんぢや。」ト勇むを、お袖「これ申し。」

ト抑へる。兩人よろしく、時の鐘にて此の模様見得よく、道具かへし。

本舞臺三間の間平舞臺、向う鼠壁、眞中暖簾口、上の方折返しの一間、反古張障子家體、下の方誂への門口、下座の方同じく誂への黒板塀あり。こゝに孫兵衛女房お熊惡婆アにて、蜆籠より錢を出し數へてゐる。親仁孫兵衛子役をかばうて捨白。合方彈流し禪の勤めにて道具納まる。

お熊「これこの態は何だ、今日一日かついで歩いて、賣溜はこれ許りか、大方錢をばくすねをつたで

つた與茂七、生きて居るのも不思議の一つ、そんならあの時殺したは、どいつで有つたか、よく〳〵運の盡きた奴。それはともあれ彼奴が欲しがる印鑑を、師直の屋敷へ持參し、恩賞受けた其の上で、厄病神で戀の敵の與茂七奴を。イヤ〳〵それより寧そ手短に、此の家の內でぐつさりと。」ト思入あつて、有合ふ出刃を持つて奧へ行かうとする。この時お袖出て、お袖「マア〳〵待たしやんせこちの人。」直助「そんならわりや今の樣子を。」お袖「モシ與茂七殿も以前は武士、もしお前に怪我が有つては、誰を力に姉の敵。」直助「ハヽヽ、お爲ごかしに文なして、以前の男の與茂七を、かばひ立する詞のはしばし。」お袖「エ、モウ男の癖にまはり氣な。一旦お前に大事をたのみ、枕交した上からは、金輪奈落お前と夫婦、モシ與茂七殿を殺す手引はこれ。」ト囁く。直助「そんなら其方が、與茂七を酒に醉はして此の所へ。」お袖「屛風を引いて寐いりばな。」直助「相圖はおぬしが行燈の。」お袖「あかりを消す折忍び寄り。」直助「あの與茂七をたつた一突。」お袖「もし。」ト思入。直助「必ず相圖を。」お袖「違へぬやうに。」直助「がつてんだ。」ト直助うなづく。時の鐘合方になり、直助こなしあつて下座の門內へ忍ぶ。お袖思入あり。ト與茂七おくより出て、與茂七「お袖、主人の直助は何處へ參つた。」お袖「確かに脫れぬ用事とやらで。」與茂七「他行なしたか、それは幸ひ、歸りを待ち受けたつた一討、さうぢや。」トつか〳〵と門口の方へ行くを、お袖とめて、お袖「もし待たしやんせ、あの直助も以前は武士、殊に常から剛氣漢、

んで。」與茂七「イ、ヤ望みといふは金ではない。場所は沙島六は島、隱亡堀の闇の夜に、なかぬ烏の挑み合ひ、其の時思はず失ひし、小間物仲間の符牒の印鑑、拾つた人はこなさんと、目かどのついた道具から、女房と其の品かへ〴〵に。」直助「ハテ變つたものと女を引替、併し此方は素人で、小間物仲間の符牒は知らぬが、無ければならぬ印鑑とは、この直助が白眼んでおいた。」與茂七「そんならいよいよこなさんが。」直助「拾つて持つて居るならば、握つてゐても益ない反故、返して遣りたいものなれど、拾はぬものは是非がない、外を探すがマア近道でござりやせう。」與茂七「なる程、こなたもなかなか以て、一筋縄ではほぐれぬ氣性、しかし言立する時はみす〳〵知れた密夫直助、以前の身ならば女敵討、又町人なら便により、耳鼻そぐか金銀を、強請つて取るもまゝある習ひ、その兩端に拘らず、只管望むは其の書物、渡さぬうちは外へは決して、此の家の家にゐじかつて。」直助「顋をつらすが承知なら、そりや此方の勝手次第に。」與茂七「一人の女房に二人の男。」直助「ハテなア、札はどちらへ落ちるであらう。」お袖「もし何ごともわたしが胸に。」直助「表から見えぬ人ごゝろ。」與茂七「鏡に映るものならば。」お袖「さぞ恥かしい。」直助「むかしの御亭主。」與茂七「今の御亭主。」お袖「これもし。」ト思入。與茂七「今宵はさぞかし。」直助「ヤア。」與茂七「お暄しうござりませう。」トよろしく科。唄になり與茂七お袖奥へ入る。直助跡に殘り科あつて、直助「ハテ面妖な、いつぞや淺草田圃で、ばらしてのけたと思

はこなさんの。」直助「商賣道具。」與茂七「其の柄にしつかり直助と、あり〱と彫り附けあるからは、そんなら此方の今の名は。」直助「以前はさるお邸で中間奉公、中頃は齒磨賣の直助も、今は深川三角屋敷、寺門前の貸家住居、店で商ふ代物は、三文花に線香の、煙も細き小商人、後生の種は賣りながら、片手仕事に殺生の、漁をふせたり沙村の、隱亡堀で鰻かき、ぬらりくらりと世を渡る、今の其の名も直助權兵衛といふ、金箔のついた貧乏人だ。」與茂七「そんなら此方は御家の御亭主、シテ又お袖は何故爰に。」直助「此の女かえ、こりや儕が女房だワナ。」與茂七「ヤア。」お袖「ア、もしそれをいうては。」ト思入。直助「可いワイ、以前の亭主に在所を知られ、何時の何時まで其の樣に、しらをきつても居られまい、與茂七殿とやら、此の女は儕が嚊アさ。」與茂七「そりやはや一旦この與茂七、夫婦わかれをした女、再緣するは往々あるならひ。併し未だに去狀は渡さぬからは妻女のお袖、たが許して再緣したのだ。」お袖「サアさう言はしやんすも有理。譯を話せば長い事、父さんはじめお前まで、人手にかゝつて。」直助「ヤイ〱今となつて百萬だら、言譯する程罪が深い、未練をいはずと此の女は、儕に下さい貰ひましよ。」ト直助思入、與茂七こなし。與茂七「なる程こなたも横車、おしでを強くずつかりと、女房を呉れとはよく言はれた。その大丈夫な氣性に免じて、この女進上せまいものでもないが、只はやられぬ望みがある。」直助「望みといふは古風なお仕著、大概知れた紋切形、女の手切は金とところ

日外大川端で、ばつさりやつたとおもうたは。」與茂七「ヤア。」直助「いつも達者でおめでたう御座りやす。」ト與茂七直助をよく〳〵見て、與茂七「こなたは淺草にて出會うたる、齒磨賣の直助殿、ハテ變つた所に。コレお袖、こゝは手前の家か。」お袖「サアマアそんなものぢやワイなア。」與茂七「シテ此の人は何で今時分に來てゐるのぢや。」お袖「サアあの人はなア。」ト思入あつて、其處にある宅悦が置いて行きし足力の杖を取つて見せ、「オ、それ〳〵按摩ぢやワイなア。」直助「ナニ俺を按摩だ。」お袖「按摩ぢや按摩ぢや、もし按摩さんになつたな、按摩さんぢやワイなア。」與茂七「ハア、齒磨賣が按摩と化けたか。」直助「さうさ、齒磨賣が按摩と化けるは、雷門のとんだり跳ねたりだ、以前は鹽冶の御家中も、小間物賣や袖乞と。」與茂七「どうしましたえ。」直助「イヤ世の中といふものは樣々な物だ。」與茂七「ハテ思ひがけなく女房の家へ尋ね當つて俺も安堵、その上按摩まで呼んでくれるといふは、ハテ氣のついた。コレ按摩さん、一療治やつて貰はうか。」直助「そんならたうとう按摩にするのか。これ私やァ足力療治で、無性矢鱈に蹈んで〳〵蹈みこくるが、それ承知なら療治さつしやるが可い。」與茂七「その荒療治が此方の望み、併し足力の道具は儕が貸してやりませう。」直助「こりや珍らしい、そんなら道具を。」與茂七「わしが持參の足力の杖は、則ちこの品だ。」ト合方になり、與茂七持ち來りし前幕の鱣鉤を出す。直助見て思入あり。直助「ヤア、こりやこれ日外六ぱ島、隱亡堀で失つた。」與茂七「そんならそれ

といふが、俺が目にはさつはり見えない。これ幽靈どん／＼、何處にゐるのだ／＼。」直助「エ、幽靈たけ／＼しいとは此方の事だ。」與茂七「ナニわしが幽靈だ、そりやァ人違ひだ、わしやァそんな者ではない。マア何にしろ爰を明けて下さりませ。」直助「イヤ／＼滅多に明ける事はならぬ、幽靈に近附はないぞ／＼。」與茂七「これはしたり、一寸お目にかゝりたい事が御座ります、マア門の戸を明けて貰ひませう。」ト此の聲を聞いてお袖こなしあり。お袖「もし今の物言はしやんしたは、以前の夫與茂七殿によう似た聲色。」直助「サアそれだに依つて幽靈だといふのだ。」與茂七「もし幽靈か幽靈でないかはお目に懸れば分ります。マア／＼爰を明けて、正體を見さつしやるがよい。」ト是れにてお袖直助を引退けて門口を明け、與茂七をよく／＼ながめる思入あつて、お袖「ヤアお前はほんに與茂七殿ぢや／＼。」ト與茂七を篤と見て喜ぶこなし。與茂七もお袖を篤と見て、與茂七「お袖か、これお主が在所を一ぺんと探したが、變つた所でハテ面妖な。」お袖「エ、私よりお前が面妖な、そんならきつと幽靈ぢや御座んせぬな。サア／＼此方へ入らしやんせいな／＼。」ト與茂七を内へ入れ、いろ／＼科あり。「ほんに幽靈ぢやない、正眞正當、寸分違はぬ與茂七樣ぢや／＼、わたしやお前が人手にかゝつて、死なしやんしたと思うた故、エ、今一足早う來て下さんしたら可かつたに、わたしや面目ない。」ト直助を見てこなしあつて又氣を變へ、「よう達者で居て下さんしたなァ。」ト思入。直助こなし有つて、直助「そんなら

ろ打ち上げる、蛇も陰火も消える。與茂七よろしく思入あつて、「扨も不思議な、ハテなァ。」ト科あつて門口を叩き、「申しお頼み申します〳〵。」ト此の聲に直助屏風を少しあけ、からだを出して、直助「オイオイ誰だ〳〵。」與茂七「何卒線香を一把賣つて下さりませ。」直助「ア、お氣の毒だが、線香は切ものでござります。」與茂七「そんなら爰にある樒を賣つて下さりませ。」直助「樒かえ、そりや滅法に高い。一本で百より安くはまからない、そしてそりや賣つてある花だ。外へ行て買はしやるがよい。」ト又屏風を引立て寢る。與茂七「まだ日が暮れて間もないに、怪しからぬ早く寢たワエ、ア、これどうぞ。」トそこらを見て小兵衛の衣服を見て、よし〳〵といふ思入あり。「申し〳〵外に干してある洗濯物を、盗人がもつて行きます、あれ〳〵盗人を洗濯物が持つて行くワ〳〵。」ト科にていふ。是れにて直助とつかは起きて、三尺帶をしめながら門ぐち明けて、直助「さつぱり忘れて寢てしまつた、お前よく氣をつけて下さりやした。」ト洗濯物を持つて内へ入らうとして與茂七を見て、「ヤァ此方は慥かに。」ト思入あつて。「ヤ、、幽靈だ〳〵〳〵。」トとつかは内へ入る。門ぐちをしめて戸をおさへて震うてゐる思入。與茂七「ナニ幽靈が何處に〳〵。」トうろ〳〵探すこなし。直助「これ幽靈が來たワ〳〵。」ト此の聲にお袖も起きて來り、直助に縋りつき、お袖「エ、氣味のわるい、何處に幽靈が居るぞいなァ。」直助「これ近所の衆、幽靈が出て來た。皆來て下され〳〵。」トむしやうに騷ぎ立てる。與茂七「何だか無性に幽靈々々

「ア、素敵に醉うた。」お袖「そんならモウ寢やしやんせぬかえ。」直助「あり難い牀急ぎ、サア〳〵寢よう。」トお袖押入より蒲團枕を出しよき所へしく。直助二重より古き六枚屛風を持ち來り枕卜へおき、門口を閉め思ひいれあり。「サア嬶、寢ないか。」お袖「アイ、わたしや最そつと夜業せうワイなア。」直助「そんなら勝手にするが可い、俺も有樣は赤の他人が勝手だよ。」お袖「エ、モウ寢る事は寢るけれどなア。」ト思入あつて、佛壇へ手を合はして拜むを見て、直助「これ今に敵を討たしてやるワサ。」トお袖が手を取るこなし。唄になりお袖思入あつて、直助に手を引かれ牀の上へ上り、暫くあつて屛風を引廻す。此の時向うより與茂七好みの形にて一腰さし、前幕の鰻鉤を持つて出て來り、花道よき所にて思入あり。與茂七「いつぞや圖らず大切なる印鑑を失ひし其の時手に入る此の品に、あり〳〵名前の彫り附けし、直助といふ者こそ、法乘院の門前にて香花商ふ家なりと、聞き出せしが詮議の手懸り、主人に逢うて印鑑の有無を糺した其の上にて、すべに依つたら蟻の穴、つゝむ大事にやかへられぬ、不便ながらも。何はともあれ、此の持主に逢うた上、ム、さうぢや。」ト思入あつて舞臺の方へ來かゝる。誂への合方、うすどろ〳〵になり、門口の所にほしてある小兵衞の著物の裾に燒酎火もえて、誂への蛇まとふ。與茂七これにきつと目をつけ科。「ヤア、陰火と共に、蛇のあれなる衣類につき纏ふは、ム、非業の最期に世を去りし、正しく死靈の。」ト思入ありて、つか〳〵と舞臺へ來ると、どろど

直助「これは御馳走、そんなら一つ注いで貰はう。」トお袖酌する、直助一ぱい引受け飲んで、「なる程、女の狹い心では、酒でも飲まずば立ちきれまい。話を聞いては此の胸が、いはば他人のおれでさへ。」お袖「イエ〳〵お前を他人にせまい爲、女子の方からさした杯。」直助「ヤア。」お袖「もしモウ祝言は濟んだぞえ。親と夫の百ヶ日、今日が過ぐれば今宵から、約束通りお前と女夫に。」直助「そんならお主は帶紐解いて。」お袖「アイ。」トよろしく科あり。直助「イヤそりや惡からう、おれもお主に有樣は、のろけきつた心から、女房になつたら力にならうと、約束はしたものの、よく〳〵思つて見る時は、草葉の陰の與茂七へ、それでは其方が。」お袖「操を破つて操を立てる私が心、もし其の樣な事をすてておいて。」ト又お袖酒をつぎ飲んで、又直助へ杯をさし、「マア一つ飲ましやんせぬか。」直助「酒ならいくらでもお辭儀なしだ。」トお袖又酌する。直助飲み少し醉うたる心にてお袖にしなだれかゝり、「なる程氣がもめるも無理ではない、たつた一人の姉さんがひよんな。」お袖「サそれぢやに依つてどうぞ力に。」直助「そんならいよ〳〵直助と、夫婦になつた其のうへで。」お袖「一人ならず二人三人、討たねばならぬ仇かたき。」直助「助太刀しよう。」お袖「エヽ。」直助「ぶつて遣らうよ。」お袖「エヽすりやあの眞實に討つて下さんすか。」直助「女房になるか。」お袖「アイ、かならず見捨てて下さんすなえ。」直助「たうとう首尾よく。」お袖「エヽ。」直助「イヤサ首尾よく敵を。」ト脇の方へ向き舌を出したりおもひ入あり。

が、扨々とんだ事になつたなァ。」ト思入。お袖途方にくれし科にて、お袖「思ひがけない姉さんの、刃に罹つてはかない御最期。さういふ事とは露知らず、明日は是れなる櫛を添へ、文を細々便りにと、思うて居たに今の噂。父さんと姉さんまで、非業にお果てなさるといふは、もし私やどうせうぞいなアどうせうぞいなァ、」ト大泣。直助科あつて、直助「かういふ話を聞かう端か、種々様々な今日の事、これ此の櫛も俺が拾うて来て、思はずお主が手へ渡るも、死んだ姉御が一念の。」お袖「わたしに届けて下さんしたのか、それ程までに姉さんの、妹を思うて下さんす記念のこの櫛、今は仇なれ姉壻の。」直助「その伊右衛門も武士の浪人、舅左門の仇敵、討たねばならぬ身をもつて、却つて其の身が敵となれば、これ親の敵姉の仇、討つべきものは其方ひとり。何をいふにもか弱い女、エ、これ直助も、つながる縁もあるならば、安穏に敵をば、さぞ左門どのも草葉のかげで、口惜しからう無念にあらう。」ト直助こなしある。お袖「いかにか弱き女子ぢやとて、なに面目に仇敵を。」ト思入ある。直助「そんなら其方は、親左門殿、姉のお岩に夫の與茂七、この三人の敵をば、見事女の身一つで。その仇敵は覺束ない。俺も以前は武士奉公、二人や三人相手にも、しかねぬ手ぶしは持ちながら、あかの他人で醉興らしく助太刀も、エ、これ腕がむづ〳〵するになァ。」ト合方かはつてお袖思入あつて、徳利と猪口を持ち来り、直助が側へおき、手酌にて一くち飲んで直助の前におき、お袖「サァ一つ飲んで下さんせ。」

爲にも姉さんの敵、その伊右衞門殿の所在、いうて聞かして下さんせ。モシ敎へて下さんせ〳〵。」ト宅悦をいろ〳〵振りまはす。宅悦「ア、これさ〳〵、どうして私がそれを知るものか、こりやマアひよんな話を仕出して。」お袖「イエ〳〵何程でもお前から詳しう聞かねばならぬ。サア姉さんをどのやうに慘う殺したのぢや、サ、もつと言うて聞かして下さんせ。」宅悦「イ、エわしやそんなに詳しくは。」ト持てあましたる科にて段々門口のはうへ出る。お袖纏うてくる。「これは又迷惑な、有様は私も人の話で聞いたが、何にしてもお力落しで御座りやす。私はモウお暇申しやす。」お袖「イエ〳〵もつと聞きたい事が御座んす、何卒いうて聞かして。」ト宅悦の袖を捉へる。宅悦「これはしたり、私は今夜は、大事の得意の御隱居を療治せねばならぬ。マアこゝを。」お袖「イエ〳〵詳しう聞かぬ其のうちは、なんぼうでも放す事は。」直助「これお袖、可愛さうに歸してやるがよい、大體わけは分つてるワさ。」宅悦「左樣さ、いくら喋つてもこんなものさ、やれ〳〵氣の毒な。」ト花道の方へこそ〳〵と行きかけるを、直助呼んで、直助「これ〳〵療治代を持つて行かないか。」宅悦「なる程肝心のものを。」ト歸りさうにして、「イヤこゝが按摩の辛抱どころだ。」直助「これさ〳〵、足力の杖があるよ。」宅悦「これも按摩の辛抱どころだ。」直助「これさ道具が無くつては商賣が出來まいが。」宅悦「それも按摩の辛抱どころだ。」ト木魚の音合方になり、宅悦足ばやに向うへ入る。直助思入あり。直助「これお袖、俺も始めて聞いた

て居るお侍さ。その民谷伊右衛門といふ侍の女房、お岩といふ女が、大の悋氣から起つて亭主に殺されやした。」お袖「エ、、。」ト吃驚する。直助「こりやお袖や、そりや大へんだぜ。」宅悦「ハ、、そんならお前がた、所緣でも御座るかな。」直助「所緣どころか、そのお岩どのといふは此のお袖が姊よ。」宅悦「エ、、。」ト宅悦悄りしてこける。お袖宅悦を捉へて、お袖「もしそりやマアまことでござんすか、眞の事かいなア〳〵。」宅悦「サアほんの事は事だが、私は又そんな緣のある事とは知らず、浮々とんだ話を仕出して。」お袖「イエ〳〵よう言うて下さんした、シテマア姊樣には何の科があつて其のやうな、どうぞ詳しい話をいうて聞かして下さりませ。」宅悦「サわしも其の一件には關係で。イヤ〳〵かかり合だといふ譯ではない故、詳しい譯は知らないが、早くいふと亭主の伊右衛門殿が、そのお岩樣に厭が來て、外の女を女房にせうとしたのを、少しやきかけたから起つた騷動といふ話さ、それから其の伊右衛門といふ人は、氣が違つたか、自暴になつたか、其の外に二三人も人を殺し、影を隱したが、イヤモ思ひ出すもぞつとする程恐ろしい事が。イヤ又其の筈の事ぢや、さして科もないお岩殿、それは〳〵慘い殺しやう、イヤ〳〵此の話はやめにせう、何だか目先へ死骸がちら〳〵ちらついて、何にしても其の民谷伊右衛門殿といふ男は強惡な侍さ。」ト直助こなし、お袖口惜しき思入あつて、お袖「チエ、如何に夫のかうけぢやとて、科もない姊さんを、その樣に慘たらしう殺すといふは、私が

ない。」宅悦「譃をいふぜ、もし御亭主があの樣な事をいはつしやるが、眞の事かえ。」お袖「オホ、、、眞の事ぢやワイなア。」宅悦「イヤモウ惘れるワ。なる程似たもの夫婦とは、よく言つたものだ、二人ながら閻魔樣の前へは行かれぬワエ。」トこの樣な事をいひながら、直助の頭を揉みにかゝる。直助「コレ按摩さん、思ふさま頭を掻いて貰ひたい。」宅悦「それでもお前、昨日あたり結つた頭を。」直助「ナニ二十八文の出入だ。」宅悦「イヤそれでも、お袖さん、一寸櫛を貸しなさい。」お袖「そんなら待ちなさんせ、黄楊の櫛を取つて來て。」宅悦「おまへの頭にそれ程さしてゐるでないか。」お袖「この櫛で頭を掻いては耐らぬけれど。」ト櫛を拔いて渡す。宅悦取つて見て、宅悦「ハア此の櫛はどうか見た樣な櫛だが。」ト思入あつて、「さうだ〳〵思ひ出した、此の櫛について飛んだ話が。」トいはうとするを、直助いふなといふ科、お袖はこれを知らず。お袖「エ、飛んだ話とはどのやうなことぢやえ。」宅悦「イヤサ一體その櫛は、お前何處から貰うてさして居なさるか知らないが、そりやァ山の手の四谷町で、民谷伊右衛門といふ浪人の女房、お岩どのといふ女のさしてゐた櫛であつたが。」直助「コレ此方くはしい事を知つて居るの。」宅悦「知らないでさ、あの邊にゐた。イヤ療治場ぢや。」お袖「そしてもし其のお岩さんといふ女中は、どうごさしやんしたかえ。」宅悦「どうした段か、イヤ大騷動で御座りやした。」お袖「エ、そりやマアどうした譯で。」宅悦「もし世の中に怖いものといふは、やきもちふかい女と人斬庖丁をさし

に。ハアそんならたうとう此のお人を御亭主に持つたのか、蓼喰ふ蟲もすき〲だな。」ト直助の方を見ていふ。直助むつとする。こなし有つて氣をかへて、直助「これは〱御挨拶だ。時にまだこなた淺草に居るか。」宅悦「イヤちつと彼の邊には居にくい事があつて、この頃まで本所の方へ行つて居りやした。」お袖「もし本所はどの邊に居やしやんしたえ。」宅悦「四谷町の近所にさ、よう〱一月ばかりか居ませぬテ。」直助「お坊もとかく尻がすわらない樣子だな。」お袖「あんまり色事をかせがしやんすからの事よ。」宅悦「ナニかせがせもせぬくせに。イヤ又お前となら、夜晝寐ずにかせぎたいね。イヤ此の樣な事をいつて、七兩二分になつてはならぬハ、、、時に療治をなされやすか。」直助「折角呼び込んだものを、唯もかへされまい、雜とやらかして貰ひやせうか、どうぞ強くやらかしてくんな、頼みやす。」トやはり四つ竹の合方にて、宅悦捨白いひながら、直助の肩を揉みにかゝる。お袖は矢張つゞくり物をしてゐる。宅悦「イヤもし大川端の騷動は、誠に珍事ちうえうな事で御座りやしたぢや御座りませぬか、一體あの一件は。」トいはんとするを、直助「ア、これ〱、其の話は爰では御免だ、レコが鬱ぐよ。」とお袖へ思入。いふなといふ科するを宅悦呑みこみ、宅悦「ハヽア彼の話は爰では禁句かな。しかしお前方が斯うして夫婦になつてゐるといふのも、仲人は人知れず俺がしたのだ。何にも今夜はしつかり御馳走に預りやせうよ。」直助「ナニ夫婦といふはほんの名ばかり、まだ俺ア女房の味をしら

したのぢやえ。」ト右の模樣、お袖が目にはさつぱり見えぬ思入。直助「櫛か、櫛は盥のなかへ、ア、そんなら手前は今のを見ないか。」お袖「そりやなにを。」直助「テモおそろしい。」お袖「エ、。」直助「いやサよいところへ隕した故、櫛に別條がないといふ事。」ト此の中お袖櫛を盥より取り上げ、前垂で拭き、お袖「よい所へ隕ちた故。」ト櫛を透して見たりいろ〱科あり。直助「米屋はどうともするから、マア其の櫛は手前に預けておくよ。」お袖「アイ〱そんならさうして下さんせ。」トお袖よろこぶこなし。直助始終盥の方へ目をつける思入。直助「こいつはけぶだワエ。」ト四つ竹の合方、木魚の音になり、下座の方より宅悦頭巾を被り、前幕の按摩のこしらへにて出て來り、杖を突き笛を吹きて、門口をうち通りに、花道よき所まで行きかける。ト直助。直助「オイ〱按摩さん〱。」ト是れにて宅悦取つて返し門口へ來て、宅悦「ハイお呼びなされましたかな。」直助「オツト此方だ、入らつしやい。」宅悦「ハイ〱御免なされませ。」ト内へ入つて頭巾を脱ぐ。直助「ア、足力だな、こいつ奇妙だワエ。そして按摩さんお前見えるな。」宅悦「ハイ左樣でござります。」ト行燈の火影にて、宅悦直助をつく〲と見て、「ヤアこなさんは慥かに何時やら淺草の前で逢うた、齒磨賣の直助殿ぢや御座らぬか。」直助「道理で聞いた樣な聲ぢやと思うたが、其の時の灸點屋だな。イヤ此奴はとんだ人を呼び込んだワエ。」ト此の時お袖宅悦を見て、お袖「ヤアお前は宅悦樣、どうして爰らへ。」宅悦「ヤお袖さんか、俺よりお前はどうして爰

此のとき奥よりお袖膳拵へして持つて出る。「モウ膳を持つて來たのか、これ酒の買うたのはあるか。」お袖「アイ酒も取つておいたワイなア。」直助「そんなら熱く燗をして來てくんな。」お袖「それに如才があらうかいなア。」ト徳利を見せながら、落ちてある櫛を見て取り上げて、「エ、あれ程姉さんが大事がらしやんす櫛ぢやといふに、此の樣に捨てておかしやんして。ほんに男といふものは、モシこりや私が預つておくぞえ。」直助「何にも借取にするといふではあるまいし、明日は直に持たしてやるが可い。畢竟おれが饂飩へ引つかゝつたから、手前の手に渡るといふもの、さうでないと水の底で腐つて終ふ代ものだ。コレもうじ／＼してゐる中、米屋の野郎が來ると煩い、野暮をいはずと貸して下つし。」お袖「なる程、思うて見ればいはしやんす通り、お前か見つけさしやんしたらこそ姉さんの仕合、其の上榮耀に遣ふといふではなし、細い生計の煙の代、姉さん、ちつとの間貸して下さんせえ。」一寸櫛を戴く科。「サア持つて行かしやんせいなア。」直助「そんなら聞き分けて貸してくれるか。」ト盥を眞中にしてお袖は上の方、直助は下の方、及び腰に直助櫛を受取り、矢張右の合方、このときうすどろ／＼になり燒酎火もえる。ト盥に漬けてある著物の袖より、誂への細く長き忌らしき手、すつと出て直助が櫛を持つてゐる袂を引く。ト直助吃驚して身體すくばる科。この拍子に櫛を盥の中に落す。右の手を引込む。直助吐息をつきながら、「エ、不氣味な。」お袖「これ何をお前は其の樣に仰山な、櫛はどう

やしやんした單物に、寸分ちがひは御座んせぬワイなア。」直助「これ〳〵手前もよつほど馬鹿な事をいふものだ、著物の模樣や櫛の恰好は、世間には同じ物は幾許もあるワさ。」お袖「イエ〳〵著物はともあれ。この櫛許りはそれに違ひは御座んせぬ。明日お鄰の伯父なと頼んで、四谷町まで屆けねば、私が心が濟みませぬワイなア。」直助「エ、愚癡な事許り、手前が貰ふ約束の櫛だといふではないか、そんなら其のやうな無駄な事をせずとも、直に手前の物にしておくが可いでないか。」お袖「イエ〳〵實の兄弟ならよけれど、義理ある姉さんの物故に。」直助「なる程、馬鹿律義な事を言つたものだ。今時の女には似合はない、死んだ亭主へ義理を立てて、斯うして居ても夫婦といふは唯の名許り。コレおらア每晩變な心持になるよ。」お袖「エ、お前も私が願ひの叶ふまでは、其の約束ぢやござんせぬか。」直助「オツトあやまつた、のろい奴だがどうなりとお心次第。時に御新造樣、私めは甚だ空腹、どうぞ夕飯を一膳お願ひ申しやす。」お袖「ほんに夕飯前でござんす、そんなら拵へて來てあげる程に、必ず此の櫛どこへも遣つて下さんすなえ。」直助「ハイ〳〵畏まりました。」ト少しおどけていふ。お袖思入あつて、お袖「エ、何ぢやぞいなア、ホヽヽヽ、どりや飯の支度せうか。」ト凄き合方、一つ鉦になり、お袖暖簾口へ入る。直助殘り科あつて、直助「姉の櫛であらうが、お母の櫛であらうが、俺が手に渡つては安穩におく物か、こいつ質におかうよりは、寧その事大家の妻さんに。」ト直助いろ〳〵科ある。

三つ提げて出て來り、門口にて、直助「これ日が暮れてあるに、乾物が取り込まずにある。」トいひ／＼内へ入りそこらを見て、「何だこの盥のなかにも洗濯物があるな、イヤ大そう稼ぐな。それに引きかへ俺ァ今日はあぶれて來た。」お袖「あぶれたとはえ。」直助「サア聞きや、横川へ三つ四つどを伏せておいたに、めそつこにもお目にかゝらねえ。」お袖「其のやうな事もよう御座んせう、モウ餘り物の命を取る事は、よしにして下さんせ。」直助「馬鹿な事をいふな、鰻かきが殺生を罷めては、顋をつるして居ないけりやならない。コウ顋をつらすで思ひ出した、米屋はどうした。」お袖「最前持つて來る事は來たけれど、後刻までと旁いうて去んで貰うたツイなナ。」直助「それ見た事か、早速にお差支だ。かうつとたつた今一枚の縕袍は、大家が立催促に飛んでしまふし。オツトあるぞ／＼、天道人を殺さず、いつやら斯ういふものを拾つた。」ト叺煙草入の中より前幕の櫛を出し、「コレお袖、この櫛は幾許位かすであらう。」トお袖何心なく取り上げ見て、思入あつて、お袖「もし此の櫛は何處で拾はしやんした。」直助「オヽ、二三日前に、猿子島の橋の下で、鰻鉤へひつ懸つて上つたが、手前見おぼえでもある櫛か。」お袖「ある段かいなァ、この櫛は私が姉様お岩さん、母様の記念ぢやというて、大抵や大方大事にしなさんした事ぢやござんせぬ。その上ゆく／＼は私に讓つて下さんす約束、それがどうして川の中に。それにまだ不思議なは、最前庄七さんが洗うてくれいと頼ましやんした此の著物、姉様が夏中著てる

ます。」ト門口へ出て、「サテ次郎吉よ、行かうかい。」お袖「ほんに父さんも待つてぢやあらう、早う歸つて、父樣に何ぞ買うて貰はしやんせ。」次郎吉「これ祖父さん、父樣によい物買うて貰うて下されや。」孫兵衛「南無阿彌陀佛々々々々々々ハ、、、年よれば何かにつけの涙脆うて。サア次郎よ、祖父と一緒に。これは大きに御厄介で御座りました。」お袖「ハイようお出でなされました、又必ず。」孫兵衛「ハイハイお邪魔樣致しました、どれ參りませう。」ト唄、入相の鐘なる。子役をつれて孫兵衛向うへ入る。お袖あと見送り科あつて、お袖「ほんに彼のお人も年よつて、何ぢややら多う物案じのある樣子、とかく苦勞の娑婆世界、待たぬ月日は早いもの、今日は義理ある父さん、許嫁の夫與茂七殿の百ケ日、同じ場所にて同じ日に、親夫を非業の刃に失ふといふは、よく／＼因果な私が身のうへ、まだ其の上に枕こそ交さね、今の直助どのを夫に持ちしも、何卒お二人の仇敵。モシ堪忍して下さりませ。」ト色々科あつて、「ア、モウ日が暮れるに、庄七樣に頼まれた洗濯物。」ト門口の盥を内へ持つて入り、手桶の本水を入れ、「コリヤかうしておいて、明日の朝の事。」ト竿にかけてある著物をさぐり見て「此の著物はまだ少しかわかぬ。コリヤもそつと斯うしておいて、どりやお御燈明でもあげうか。」ト四ツ竹節の合方、木魚の音して、お袖佛壇へ燈をつけ行燈をともす、此の時分上の柾垣の奥の卵塔場へ、白張の提灯にあかりを點けて立てる。この明にてむかうより直助、前幕の役、川魚をとり、道具と籠を二つ

お袖「サア今日は大事の佛の百箇日ぢやに依つて、それでの事でござんすワイなア。」孫兵衞「テモマアそれはお若いに似あはぬお優しい事で御座ります。それに引きかへ、聞いて下さりませ、此の孫めが祖母は私が後配でござるが、それは〱邪見な奴で、ちつと商ひがたるいと、年端も行かぬ此の坊主めを、撲つたり抓つたり、それを見るが不便に御座るワイなア。」お袖「それはマア可愛さうに其のお祖母さんのかはり、どうぞお前さん可愛がつてあげなさんせ。シテおまへは此の近所で御座んすかえ。」孫兵衞「アイこの二三町先で御座りまするが、此方樣はこの頃こゝへお越しなさつた樣子で御座るの。」お袖「ハイ左樣でござります、私も段々不仕合な事が御座んして、先月爰へ參りました。此の樣に香花賣つたり、すゝぎ洗濯、艱難な生計、お恥かしうござんすワイなア。」孫兵衞「ナニそれが恥かしう御座らう、これ艱難な生計といへば、此の子の母親で御座ります。マア聞いて下され、それは〱かひがひしい生まれ。若い身の上で、正月の薺から初めて、嫁菜蒲公英菠薐草、又は枝豆ゆで卵、あるとあらゆる出商ひ。其の艱難の中から、舅の儕們を孝行にしてくれまするで。」お袖「それはマア奇特なお方で御座んすなア。」孫兵衞「ハヽヽ、年がよれば愚癡になり此の樣なお話、お恥かしうござりまする。アアモウ日が暮れるさうな、どりやお暇致しませう。」お袖「そんならモウお歸りなさんすか、又お寺參りの次手には、休んでお出でなされませ。」孫兵衞「ほんに袖の振りあはせも他生の緣、有り難うござり

う。」お袖「オ、さうして下さんせ、おまへはマア利巧な子ぢやなア。」ト木魚入り合方にて、下座の門の内より孫兵衛、親爹にて老けたる拵へにて出で來り、子役治郎吉を見て、孫兵衛「わりや次郎吉、父今日は蜆賣に出やつたか、あゝ何にも知らずに。」ト干してある著物に目を著け、科あつて、「彼處に干してある著物は倅が死骸に。」ト一寸科。次郎吉「祖父樣今日は蜆が賣れぬ故、晩にばゝ樣に叩かれるワイなア叩かれるワイな。」孫兵衛「オ、可愛想に、年はも行かぬ孫めに、この樣な商ひさせて。これ案じやんな、祖父が錢をやらう程に、是れを今日の賣溜ぢやと、あの鬼婆に見せて遣りや〳〵。」ト懷より小錢を出して次郎吉にやる。次郎吉「あの伯母さんにも、只錢貰うた。」孫兵衛「ム、そんなら何といふ、此の家のをば樣に、たゞ錢を貰うたといふか。」ト門口へ來て、「これは〳〵、孫めに錢下されたさうに御座りまする、ハイ〳〵有り難う御座りまする。」お袖「すりやおまへは此の子のお祖父さんでごごんすか、マア〳〵此方へお入りなされて、休んで御座んせいなア。」孫兵衛「ハイ〳〵有り難う御座ります、左樣なら御免なされて下さりませ。」ト孫兵衛内へ入る。「時にもし彼に干して御座りますあの著物は。」お袖「ハイあれはいつも洗濯を遣しまする所から。」孫兵衛「ヘエ左樣で御座りますか、ハテ變つた、あれは倅めが死骸に。」お袖「エ、」トお袖吃驚する。孫兵衛こなし。孫兵衛「ハテよう似た著物で御座りまする。ヤそれはさうと、お前さんは孫に唯錢をおやりくだされて、蜆はなぜ取つては下されませぬぞ。」

ゐるから、雜と振出して貰うて、競賣にでも出さうと思うてさ。」米屋「おきやァがれ、みす〳〵知れた土左衞門の著物を。」古手屋「これさ其の樣な事いふまい。これ〳〵お袖さん、此の男のいふ事を、必ず誠にせまいぞ。ナニ俺が湯灌場まで買ひに歩くものか、それ程に慾ばりはしないよ。」米屋「あんまり慾ばらない事もあるまい。」古手屋「ハテさて胸氣をいふ男だ。」ト門口にある中盥の中へ右の著物を入れ、かうしておけば可いといふ科あつて、「お袖さん、何卒お賴み申しやす。」米屋「申しお袖さん、米の代はどうで御座ります、一體置替になつて居るから、先頃の代が濟まぬ中は、米は入れ難うござります。」お袖「アイ〳〵此方の人が戻らしやんしたなら、直に持たしてあげる程に、後まで待つて下さんせ。」米屋「そりや迷惑なものだなァ、そんなら親方へは後までといつておきますぞえ。」お袖「アイ宜しうお賴み申します。」ト佃ぶし木魚の音になる、兩人下座へ入る。お袖こなしある。ト向うより小兵衞倅次郎吉、子役にて蜆の荷をかつぎ出て來り、門口へ來りて、次郎吉「をばさん、蜆買うて下さりませ。」お袖「ア、可愛らしい蜆賣、どうぞマァ買うてやりたいが、蜆は要らぬ程に、是れ持つて行たが可いワイなァ。」ト次郎吉に遣ると是れを取らず。次郎吉「イエ〳〵蜆買うて下さらねば、錢は取りませぬ。」お袖「ホ、、、ほんに正直な溫和しい子ではある。これ其の樣に思ふならかうしなさんせ、私に賣るだけ其の蜆、川の中へはなして下さんせ。」次郎吉「アイ〳〵そんなら川の中へ逃してやりませ

といふは、眞に世の中には惨い奴もあるものだ。」お袖「どのやうな悪い事して、其の樣な目に遭ふ事やら、ほんに氣味のわるい話ぢやなァ。」△「そりやてつきり密夫の出入でござりませう。」米屋「それだからお袖さん、お前も密夫はマァしない事サ。」古手屋「しかし此の庄七となら大事あるまい。」米屋「おきやァがれ。」○「お前達も其の葬式を見る氣は御座らぬか。」△「どうで寺へ參りますから、行つて見ませう。」○「サァ〳〵一緒に行きませう、そんならお内儀。」お袖「どなたも參つてお出でなされませ。」トとむらひの鳴物になり、仕だし皆々下座の門の内へ入る。古手屋「時にお袖樣、お頼みといふは外でもないが、何卒この著物をざつと振出して貰ひたい。」ト風呂敷包よりお岩の死骸に著いてゐた衣裳を出す。お袖「モウ日暮ぢやよつて、今から洗うたとて干る事ぢや御座んすまいぞえ。」ト手に取り上げて思入あつて。お袖「この著物はどうやら見覺えのある、確かにこりや儕が姉樣の。モシ庄七樣、こりやお前は何處から買うて來やしやんしたえ。」古手屋「こりやァ何さ、あそこに乾してある著ものと一緒に戸板の土左に。」米屋「ハァそんなら湯灌場物だな。」お袖「エ、何ぢややら氣味のわるい。」ト投げ出す。古手屋「ナニそんな物ぢやァないよ、これお前も野暮な事を、たとひ湯灌場ものぢやというて、門前に住居をしながら、それを嫌つてなるものかな。」お袖「わたしやそんな物なら御免ぢやワイなァ、したが此の著物は何處で買うて來やしやんした。」古手屋「そりや何さ、俺們が店の流れだが、あんまり汚れて

米屋「申し米を持つて參りました。」お袖「何卒毎の所へあけて下さんせ。」米屋「オツト呑込みやした。」古手屋「わしが賴んだ洗濯物は、まだ干ぬかしらん。」ト干物をあちこち持つて見てゐる。米屋は押入をあけて、米を米櫃へあける見得。お袖「これ庄七さん、お前もせはしない、かう曇つた日で其のやうに早う干るものかいなア、元の通りにしておかんせ。」古手屋「なる程、どうして見ても爰が一番日當りがよい奴さ。」トよき所へ著物をかけておく。仕出〇「これ〳〵お內儀、こゝへも花を十六文がの下さい。」お袖「ハイ〳〵たゞ今あげまする。」米屋「もし今入れた米の錢はどうなされやす、待つて居りやすよ。」お袖「どうぞもそつと待つて居てくださんせ、おまへには話が御座んすワイなア。」古手屋「わしも急に賴みたい事があつて又來やした、なんにしろ一寸お目にかゝりたいな〳〵。」お袖「エ、モウ忙しない、このやうに手が塞がつてゐるものを。サアお持ちなされませ。」仕出△「アイ錢はそこへおきましたよ。」お袖「ハイ〳〵。サアお前さんもお持ちなされませ。」ト仕だしへ花を渡す。〇「アイ〳〵、モシ今日は此の法乘院に葬式がござるかな。」古手屋「而も二つあるが、珍らしい亡者を持ち込んだの。」米屋「阿蘭陀からでも渡りはしまいし、亡者に珍らしいといふが有りはしまい。」古手屋「これ此方は其の萬年橋へ流れついた戶板の死屍の噂を聞かないか。」米屋「その話は聞いたが、あゝそんなら今日の葬式は戶板を脊負つた、土左衞門二人のとむらひかな。」古手屋「男女を戶板の兩面へ釘付にして、どんぶりやらかす

茂七非人の姿にて、一時に出て三人きつと見得宜しく、忍び三重になる。ト是れより二人行き當りだんまりの立色々あつて、直助鰻鉤にて撃つて蒐る。伊右衛門この穂先を刀にてポンと切り落す。立廻りにて與茂七懐中より印鑑おちる。これを直助手早く取上ぐる。件の鰻鉤の先は與茂七の手に入る。是れより三人入りかはり、伊右衛門の比丘籠へ一時に三人とも手をかけて上げる。トどろ〳〵にて此の比丘籠にお岩の目鼻つく。これを三人見て吃驚し、皆々手を放す。比丘籠おちる。トチョンと木の頭を入れる。三人分つて此の見得よろしく、拍子幕。

四幕目

法乘院門前の場
孫兵衛内之場
直助内の場

造物、本舞臺三間の間二重の世話家體、正面暖簾口、鼠壁一つ竈、引窓、上の方卒堵婆交りの生垣、この奥若むしたる五輪の頭、塔婆などを見せ卵塔場の體、下の方下座へ黒の棟木の門を取附け、門口より軒へ棹を渡し、前幕の小兵衛の著物乾してあり、門口醬油樽に樒の花を入れ、都て深川三角屋敷法乘院門前の模様、爰に庄七町人の形、古手屋にて風呂敷包を持つてゐる。米屋の若い者、叺を持ち烟草喫んでゐる。ト門口には若い拵への仕出花を買うてゐる、お袖世話女房にて山刀を持ち、樒の根をまはしてゐる、此の見得テンツ、とむらひの鳴物に幕開く。

きな髪の毛だ。」ト髪の毛を除つて又鰻鉤を洗はうとする。ト又お岩の櫛が掛つて上るを、手に取りて見て、直助「こりや櫛だ、しかも玳瑁、よつぽどな價値だ。」伊右「ナニ櫛だ、ドレ。」ト伊右衛門見ようとするを直助手早く隱し、直助「ア、符牒分は御免だ。ドリヤ仕舞はうか。」伊右「そんなら其のうち。」ト兩人たち別れて、直助「逢ひませう。」ト入相の鐘、みだれにて橋懸りへ入る。ト伊右衛門跡に殘り、釣道具をしまひ立ち上る。トどろ／＼になり前幕の戸板、川の中より浮み上るゆゑ、お岩の死骸見ゆる。伊右衛門きつと見て科あり、戸板をひき上げ土堤へ立てかける。トお岩死骸、手に最前乳母が隕した守を持つて目を開きて、お岩「エ、恨めしいこちの人、不義密通の惡名つけ、死んだ後でも恥かかせ、恨み重なる大惡人、血縁を絶やすこの守、思ひしらさん待つてゐるよ。」伊右「嫉妬の念に引かされて、迷うてゐるか女房お岩、このまゝ流せば鳶や烏の餌食とならん。まづ斯うして。」ト戸板へ手をかけ反すと、裏に又小兵衛の死骸ついてあり、始終ドロ／＼にて、「ハア、裏にあるは小佛小兵衛だな、ドレ。」ト顔にかゝつてある藻をとると、小兵衛早變りにて目を開き、小兵衛「お旦那、お藥下せえ。」ト小兵衛手を出す。ト伊右衛門直に刀を抜き振上げ、伊右「怨念退散。」ト刀を見せると仕掛にて小兵衛の衣服おちる、一時は骸骨となる、始終どろ／＼。伊右衛門吃驚して又振上ぐる刀にて、此の骸骨ばらばらとおちて、綺麗な戸板になり流れ行く。ト本釣鐘ゴンと鳴る。上手より直助出る。ト樋の口より與

へ來た、ドリヤかぎを入れうか。」ト舞臺へ來り樋の口の方を窺ふ。伊右衛門は高土堤より密とお弓が後へおりかゝる。お弓「エ、乳母は可愛や水死したか、是れもやつぱり伊右衛門から起る事。たとひ女の細腕でも、思ふ念力恨みの刃、思ひ知らさん民谷伊右衛門、チエ、。」トお弓悔しき科。後から伊右衛門、突然にお弓を突きこかす、前の川へどんぶり落ちる。浪の花散ると、伊右衛門この時編笠を脱ぐ。ト下手の直助と顔見合はせて兩人こなし、きつばりとした合方になる。直助「お前は確かに伊右衛門殿。」伊右「さういふ汝は直助か、變つた所で。」ト兩人たがひに傍へより、直助「遭ひました、日外四谷左門を手にかけて、たち退くときに言ひ交した、貴樣と俺は相聟同志、それから音信便りもなく、今また遭うたる出あひがしら、非人の女をどんぶりと、これも大方悪工み、お前もよつぽど膽玉の。」伊右「オ、サ太いはたがひだ、そのかはり俺が今でも出世したら、何時でも貴樣も一所に立身さすワ。」直助「又可い事があつたなら知らせて下せえ、何時でも、悪い事なら騙け出して行くよ。」伊右「天上ぬけの不義非道。」直助「イヤモ働きかけた鰻鉤、どうで仕舞は身を割かれ。」伊右「くびが飛んでも動いて見せるワ。」直助「エ、適れ丈夫な。」伊右「南無三餌竿をとられた。」ト釣竿をあげると、入相の鐘ゴンと鳴る。直助「ア、モウ日が暮れる、どりや今日は不猟でかへらう。」ト鰻鉤を川で洗ふと、それにかゝり髪の毛が多くつく。直助この髪の毛を拂ふ科あつて「エ、此の川には土左衛門がゐると見えて、すて

するのだ。」 伊右「エ、マア大きな聲だぜ、そんなら斯うせう、さし當つて物はないが、こゝに鹽冶家の墨附五百石の印鑑がある、是れをもつて願へば何時でも出世は出來るが、何を云うても日數を經たねえ、これを二人に預けるから、一月二月待つてくりやれ。」ト懷中より墨附を出して兩人に見せる。長藏「なる程、金といつちやァ一文もあるまい、殊に貴樣も日陰の身、なる程聞き屆けてあづからう。」官藏「その代り出世の蔓があるならば、何時なりとひき上げて下せえ、俺が所は釜屋堀だ。」 長藏「俺もその近邊の菰被だ。」 伊右「俺は又蛇山の庵室まで沙汰をすれば居所は知れる。それ墨附。」ト渡す。兩人披き見て、 兩人「よし〱、慥かに預つた。」 伊右「そんなら必ず約束したぞよ。」 兩人「合點だ、伊右衞門殿。」 伊右「又尋ねて來いよ。」ト時の鐘にて兩人橋懸りへ入る。ト上手に人音する。伊右衞門編笠を被り見ると孫兵衞ゆゑ、高土堤に上り窺ふ。孫兵衞は下の土堤へ來て、非人のお弓が倒れてゐるを介抱して、心をつけてやる科。 孫兵衞「こりや非人の女、心を慥かに持てやァい〱。」ト呼びいける。お弓心づいたる科。 お弓「扨は乳母は此の川へ、ハァ、。」ト泣きおとす。 孫兵衞「こりや〱隨分氣を慥かにもつて、マァ〱小屋へ入つてゐやれ。エ、可愛さうな事ぢや、心はついたか、よし〱。」ト捨白いうて花道へかゝる。ト一つ鉦凄き合方になり、向うよう直助、鱣釣漁師の拵へにて、かぎ棒を持ち出て來り、兩人すれ違うて孫兵衞はむかうへ入る。直助は舞臺の方へ行きながら、 直助「モウ隱亡堀

衛門に逢ひたいものぢやが。」ト舞臺へ來り川岸をとほり、伊右衛門を見つけて、兩人「ヤ伊右衛門殿だ伊右衛門殿だ。」伊右「ア、これ密かに〳〵。」長藏「貴樣の行方を毎日探してゐるワイの。」官藏「こゝでおうたが幸ひだ、マアそこへ行かうワイ。」伊右「マアこゝへ來やれ〳〵。」ト舞臺へ來り、長藏「時に伊右衛門殿、いつぞや貴樣に頼まれて、お岩小兵衛が死骸を川へ流した其の跡で、喜兵衛親子を貴樣が手にかけたと聞いて愕り、それからすきが廻つて來て、たうとう俺等二人も日陰者となつた、元はといへば此方から起つた事、二人が難儀を外に見て、知らぬ顔してゐる事はねえぢやアねえか。」官藏「それ故やけから此方を見つけ次第、二人が身のうへの立つやうに、養つて貰はうと思うて、一ぺんと尋ねてゐたのだ。」長藏「こゝで逢うたが百年目だ、白とも黒とも。」官藏「譯道つけて。」兩人「貰ふのだ。」伊右「オ、二人がいふ通り、尤もだが、俺が喜兵衛親子を殺したは、いふに云はれぬ間違で、それもお岩と小兵衛が怨靈のなす業よ、それから俺も身の置所なく、この近邊は無宿かまひ者の多い所だ、知邊の方にやつと身を隱して居る許りだ、どうも今では仕やうがないて。」長藏「これ伊右衛門殿、しよ事がなければ此方も是非がない、二人が命を元にしてお願ひ申すと驅け込んで、一から十まで注進せうか。」伊右「さア それぢやア全で物がねえ。」官藏「そんなら俺等の身の上の立つやうにしてくれるか。」伊右「サア今はどうも。」兩人「そんなら代官所へ。」伊右「サアそれは。」三人「サア〳〵〳〵。」二人「どう

が倅の爲、この隱亡堀は毎年けぶのある川と聞いたる故、この卒堵婆、ちつとも早く、さうぢや。」ト右の鳴物にて舞臺の川の岸を通り、土堤前を歩み下の土堤へ上り、兩人の非人を見て、「これは非人さうだがやれ〱手の内を進ぜませう。」お弓「これは〱、お年寄の後世願ひと見えて、お志忝う御座りまする。」お槇「南無阿彌陀佛々々々々々々。」孫兵衛「イヤモウ年寄つて倅に生訣れ、この如く卒堵婆を拵へ、川々へ立てておくのも子が可愛さ、御推量下されませ。」お弓「ほんに何くも同じ親子の愛情、お察し申します。」孫兵衛「ヤドリヤ是れからしもつへ參りませう。」ト空を見て、「ア、降らねばよいが。」ト一つ鉦にて上手を入る。跡に兩人顏見合はせ、ホツト吐息つく科。此の時うすどろ〱になり、以前の伊右衛門が守、鼠大分來て川へひき込む。お槇見て、お槇「あれ〱鼠が守を〱。」ト取らんとして、ずる〱と川の深みへ入る。姿見えぬやうになり、また薄どろ〱にて、お弓これを見て悶絶する。ト一つ鉦、凄き合方にて、高土堤より伊右衛門編笠かぶりて、釣道具、釣籠、釣竿をかたげ、着ながしにて出で來り、伊右「いつの間にか隱亡堀へ來た、此の川は鱣が澤山るさうだが、マア竿を下して見ようか。」ト眞中のあがり口を下りて、よき所にて編笠取り、釣竿を出し釣する。この見得よろしくありて、摺火を打ち莨のむ。此の時向うより長藏官藏、さんするな姿にて兩人出て來り、長藏「何でも此の邊にゐるといふことだ。」官藏「逢うたら有無なしにやつけうぜ、どうぞマア伊右

お弓「ハイ〳〵是れは有り難う御座りまする、南無阿彌陀佛々々々々々。」お槇「今日は空も曇つてをりますので一倍お氣が塞ぎませう。隨分大切なお身の上、お氣をお晴らしなされませいなア。」お弓「移り變るは世の習ひとはいひながら淺ましい、現在夫喜兵衛殿、娘お梅も同日に、聟民谷伊右衛門が手に掛り、すぎ去りしも因緣とはいひながら、何卒伊右衛門に遇うて一太刀なりと恨まんと、其方も儕も此の樣に、雨露を忍びて此の小屋に、暮すも敵に遇ひたさ許り、推量してくりやいなう。」お槇「御尤もでござりまする、私とても其の通り、一旦お主と崇めた貴方、殊にお育て申したお梅樣、誠の娘も同じ樣に思へば、矢張私が爲にも敵の伊右衛門、いつぞや討つて立退く場所に、落ち散つたるこの守、披いて見れば四谷の住人、馬持にて佛孫兵衛倅小兵衛とあるが證據と、則ち伊右衛門が元のうまれ國所、尋ねて見れば其の人は、諸國廻國に出たとの事、何を的なきこの月日、よく〳〵運につきたるか、チエ、はかなき憂世の有樣ぢやなア。」お弓「この樣な艱難も、皆伊右衛門が爲す業、おのれやみ〳〵安穩でヤァ措かうか。」ト兩人悔しき科、一つ鉦合方にて、向うより馬士孫兵衛、親仁の拵へにて、塔婆を持ち出で來り、よき所にて、孫兵衛「ア、これ倅小兵衛が行方知れず、命あるやら無いやら、又鼻の高い人にでもさらはれたか、一向たよりの無い故に、年よつた親の役、爰ぞと思ふ川々へこの如く卒塔婆を拵へ、頓生菩提二世安樂、命があらば息災延命、俗名小佛小兵衛と、これを立つる

岩か南無阿彌。」ト一刀に首をぽんと斬ると、よき所へお梅が死骸と眞實の首おちる。伊右衛門見て吃驚し、「扨はお岩と思ひつるに、お梅であつたか、ャ、、、。舅殿大變で御座る、不思議な凶事にてお梅を。」ト二重下の屛風をあける。ト小兵衛、伊右衛門の兒を抱いて喰ひ殺してゐる。伊右衛門愕りする。小兵衛「旦那樣、藥を下せえ。」ト手を出す。これも一刀に首を斬る。トよき所へ喜兵衛の死骸と本首出る。伊右衛門見て吃驚して、伊右「ャ、、、扨は小兵衛と見えたるは舅殿か、これも二人が。おそろしい。」ト刀を棄て尻居にへたる。ト木の頭。「執念ぢやよなァ。」トきざみ拍子木、この見得よろしく拍子幕。

三幕目　深川隱亡堀の場

本舞臺三間の間、向う上手二間の高土堤この前一間の中土堤、これに非人小家あり、下手樋の口にあり、上り口誂への所にあり、舞臺一面の浪板、同じく浪幕を張り、よき所に蘆のあしらひ、すべて深川隱亡堀の體宜しく、爰にお弓、乳母お槇兩人、零落れて非人になり焚火してゐる。ひとつ鉦、蟲の音、合方にて幕明く。

ト向うより物參りの仕出し二三人、捨白をいうて高土堤へあがりながら、非人に報謝してはひる。

ト二重舞臺へ伊右衛門あがる。「何から申さうやら、先刻お内から戻りまして、家の樣子を見れば、お岩と日雇中間の小兵衛と、不義はたらき居るを見つけ、據所なく武士の習ひ、兩人ともに仕留め、諸人へ見せしめの爲に、裏手の川へ戸板に打ちつけ流しましたれば、最早心おく事はなし、御安堵なされて娘御と夫婦になされて下されい。」喜兵衛「ヤ、思はざる凶事、併し拙者や娘の爲には先づは重疊、めでたい吉左右。」お梅「それなら貴方のお家さんは、小兵衛とやらと。」お弓「密夫のあらはれ、殺されたといなう。」お槇「日ごろのお願ひこちらの身には。」皆々「めでたい〳〵。」喜兵衛「しかしよほど夜も更けたれば、萬事は明日取極めませう。」お梅「どうぞおねがひ。」伊右「左樣いたさう。」お弓「わたしは奥へ、乳母と一緒に。」お槇「まゐりませう。」喜兵衛「拙者は是れにて宿直のまどろみ。」伊右「左樣ならいづれも方。」皆々「おやすみなされませ。」トお槇二重の下へ喜兵衛が牀敷いて、屏風たてる。奥へ式禮してお弓と共に入る。物凄き合方になり、伊右衛門牀の上へあがる。伊右「イヤモウ嘸お待兼で御座らう、其の甲斐あつて今宵は相互に、打解けて語らひませう。」ト此の白の中うすどろ〳〵にて、鼠出てお梅にまとふ。ト無言にて後へたふるゝ。伊右衛門捨白にて上手の家體へ行く。始終うすどろ〳〵。
伊右「これお梅殿、其の樣に恥かしがる事はない、最早差合ない、今夜はゆつくりと二世のかためを、コレお梅殿。」トいふと仕掛にてお梅の身體よりお岩の顏出て、お岩「恨めしい此方の人。」伊右「ヤ、お

の裏へ打ちつけて、裏手の川へ、ナア。」 両人「心得て御座る。」 伊右「拙者は是れより君が許へ、今宵は晴の縁結び。」 長蔵「邪魔は拂うて首尾よう參つた。」 官蔵「御遠慮なしにちつとも早う。」 伊右「參るで御座らう。」 両人「めでたい首途に。」ト長蔵はお岩の死骸、官蔵は小兵衛の死骸を伊右衛門に見せる。但しお岩の死骸は吹替なり。伊右衛門につたりと笑うて、伊右「ドリヤ參らうか。」ト橋懸りへ入る、両人死骸を縛りつける。時の鐘よろしく此の道具かへし。

本舞臺元の伊藤の屋敷になる。上手障子屋體に牀を布き、其の上にお梅下著にて待つてゐる體、二重の上に喜兵衛、お弓、乳母お槇ならび居る。時の鐘、しんみりとした合方にて道具とまる。

喜兵衛「最早知らせがありさうなものぢやて。」 お弓「さうで御座んす、さりながら産婦もあるし、家の場合がわるう御座んせうワイな。」 お槇「モウ御得心の上は、お案じなされますないなア。」 お梅「お目にかゝらぬ間は、どうも意が。」 喜兵衛「おちつくまい、俺も心が落著かぬ。」 弓、槇「おそい事で御座りまするなア。」ト此の時橋懸りより伊右衛門出で來り、栞門をあけてすつと入る。 伊右「さぞお待兼でござらう、種々取込んだ儀が御座つて思はぬ遲刻。」 喜兵衛「オヽ、伊右衛門殿か、皆が待兼ね、娘はなほの事。」 お弓「大抵待つた事ぢや御座らぬワイなア。」 お槇「サア／＼是れへお越しなされませ。」 伊右「然らば。」

兵衛が脇差、殊に此の者の手が緩んであれば不審の一つ、此奴に違ひ御座らぬ、此の上は詮議致しませう。」 兩人「よく御座る。」ト是れより小兵衛を捉へ惨くする。伊右衛門兩人に指圖して、 伊右「ソレ其奴が指を一本々々斬り落し、白狀させて下さい。」 兩人「承知致した。」ト小兵衛を捉へ、指を一本々々斬ると、此の時誂へあつて小兵衛の指蛇となる。小兵衛苦しき科にて、 小兵衛「ア、どの樣になされても知らぬ〳〵、お岩樣を殺した覺えは御座りませぬ。この疑ひを晴らし、何卒わたくしが願ひの妙薬を下さりませ。」 伊右「ヤアのぶとい奴、妙薬所かお岩の敵は汝であらう。」 小兵衛「さら〳〵覺えは御座りませぬ、どうぞ疑ひをお晴らしなされて下さりませ、どうぞお願ひで御座りまする。」 長藏「こいつのぶとい奴、撲ちのめして言はせませう。」 官藏「いつそ殺して仕舞ふがよい。」ト三人して小兵衛をぶち据ゑる、伊右衛門刀の峯打する。ト小兵衛苦しみ、 小兵衛「エ、存じもよらぬ難題に、たとひ此の身は死するとも、恨みは民谷伊右衛門。」 三人「そりや癩者の瘡うらみだ。」 伊右「凡夫さかりに祟りが有らうか、馬鹿なことを。」 三人「たうとう往生致しました。」 伊右「後日の人口を脱るゝため、此奴の死骸はお岩と一緒に、鳶や烏の餌食となし、日數杉戸の板がへし、浮名を流す水葬禮。」 長藏「成程尤も、お岩小兵衛の姦通と。」 官藏「言ひ觸らしたら後日の禍ひ。」 伊右「遁るゝ工夫はそれ。」ト指圖する。 兩人「合點だ。」ト兩人押入の戸を外して小兵衛の死骸をくゝり、手足を板へ打ちつける。 伊右「お岩の死骸も其

房になるものか。マア樣子を窺ひ、ソレ。」ト門口へ來て窺ひ、物音せぬ故さてはといふ科にて、密と内へ入る。暗闇ゆゑ。「お岩、宅悦々々。」ト呼べど返事なきゆゑ、行燈を出して提灯を移し邊を見る。トお岩倒れてゐる故吃驚し、抱き上げて、「コレお岩、如何致した。」ト見て、「ヤ見れば肩先よほどの深手、ハテナア。」ト思入。この時後の押入しきりに内より叩く。ト押入の戸を明けて小兵衛を引摺り出す。「サア小兵衛奴、汝が小手が緩んでゐる故、女房お岩を殺したに相違あるまい、有樣に申せ。」ト是れにて小兵衛悶躁く。伊右衛門見て、「ハヽア猿轡を箝めてある故、物が言へぬか、ドレ取つて遣るによつて譯を申せ。」ト猿轡を取つてやる。ト小兵衛吻と息つくこなし。小兵衛「ヤレ／＼有り難う御座りまする、どうぞ御料簡下されませ。」伊右「何を申す、これ料簡で事が濟まうか、女房お岩をなぜ殺した。」小兵衛「エヽどうして私が、これには段々譯が。」伊右「譯もへちまも有るものか、これ汝が脇差で殺してあるからは、なんでも汝が手に掛けたに違ひはない、汝どうして。」ト小兵衛を引捉へる所へ、ばた／＼にて向うより長藏官藏走り出て來て、門口へ來て、長藏「さて伊右衛門殿、めでたい事が御座るて、喜兵衛殿が今宵祝言致したいとの事、御承知なればお悦びなされい／＼。」長藏「それ故わざわざお知らせにまゐつた、是非ともお伴れ申さねば我々が。」兩人「濟みませぬて。」伊右「これは忝いが、いづれも大變が御座る、只今宿許に歸つて見れば、お岩が討たれて居りました、詮議致せば小

恥、髪かき上げて鐵漿つけて、存分いうて。宅悦殿、一寸鏡臺と鐵漿つけ道具を取つて下されといふに。」ト腹立ちていふ。此の時宅悦鏡臺と鐵漿つけ道具をもつて來る。お岩向うを見詰め、悔しき科、鏡に對ひ、又ハアと泣く。ト獨吟になり、この獨吟の中宅悦に髪を梳かせる、産後の髪故解けぬ科。痛いといふ思入にて自分に梳く。仕替鬘にて毛脱ける事あつて、それより鐵漿つける、この中始終あつらへあり、獨吟の切に行燈に宅悦火を燈す。トお岩鐵漿つけしまひ、髪かきなで、脱けたる髪の毛をあつめて手に丸めて、「チエ、うらめしや伊藤親子、妬ましや伊右衛門殿、人に恨みがあるものか無いものか、檜木山の火は檜木より生ずると、われも焦るゝ胸の火焰、思ひ知らさん待つてゐよや。」ト髪の毛を絞る、よき程にこげてあり、衝立の障子へ血がたら〱と流れる。ト障子血にそまる。宅悦見て胸り慄ふ。お岩は血の上つたる思入にて、ウントたぢ〱と件の柱へ靠れると、ハアとお岩倒るる。宅悦吃驚して驅け寄り見て驚き。宅悦「ヤア〱大變々々、お岩樣、こりや最前の脇差が柱に立つてゐて、お岩樣は死んだ〱。」ト大きに慌てる科、四邊かけ廻り、「コリヤかうしては居られぬ、あの樣な惡い伊右衛門、又俺が業になるで有らう、ちつとも早くさうぢや〱。」ト行燈蹴返し逸散に驅け出で、橋がゝりへ逃げて入る。ト時の鐘合方になり、向うより伊右衛門、提灯つけて出て花道にて、

伊右「宅悦が首尾よくやれば重疊、縦ひ其の方がゆかずとも、あのやうな顔になつたもの、どうして女

密通をしてくれ、それを難につけ叩き出ずといふ魂膽、これまだ其の上に今日喜兵衛が所より遣した血の道の藥といふは大毒藥、不具に變る藥を呑ませ、伊右衛門殿に愛想つかさせ此方を去りこくり、跡で喜兵衛が娘と一つにならうといふ謀計で御座るワイ。」 お岩「ヤ、、、そんなら喜兵衛となれあうて。」 宅悦「貧乏な世帶せうより、大金持の伊藤氏へ聟に行く意と最前の話、それ故に儕に姦通をしてくれ、首尾よくゆけば褒美、否だといつたら眞二つと、刀を拔いて退引ならず、是非なく意にもなき不義をいひかけました、樣子はかくの通りで御座りまする。」 お岩「チエ、口惜しや腹立や、その意では父さんの敵も討つては下さんすまい、妬ましいは喜兵衛親子、主のあるものを横戀慕、此の上は逢うて恨みを。」ト行きかけるを宅悦とめて、 宅悦「もし其の顏では。」 お岩「ナニその顏とは。」 宅悦「とくに形は變つて有るぞえ。」 お岩「エ、どれ鏡。」トこの中悔しき思ひ、宅悦手早く鏡を取つて、 宅悦「ハイハイ。」トお岩に鏡さしつける。一寸見て、 お岩「ハア、、」ト鏡を棄てて吃驚し、 宅悦「それ見なされ、その樣な顏に」トお岩怖々顏を見て、まだ得心せず、後に誰やらゐるかと思ふこなしにて、後を見たり種々有つて、櫛を取りさして見ると吾が顏ゆゑ、 お岩「ハア。」ト泣き出す。 宅悦「有理ぢや〳〵、どうもせうことが。」 お岩「此の上は誰を恨みん、喜兵衛親子に逢うて、存分いうて約束を變替させて腹を癒んそれ。」ト驅け出さうとするを宅悦とめる。トお岩科あつて氣をかへ、「否々このまゝ行くも女子の

らじやらぢやない眞實ぢや、それが嘘なら此の通り。」ト後からお岩を抱く。お岩飛退き、お岩「コリヤお前氣が違うたかエ、イヽヤ女と侮り惡戲すると許さぬぞや。」宅悦「ハイ／＼、でも惚れました物。」お岩「まだ其の樣な事、サ私も武士の妻、料簡が御座んす。」トすつと立つて小兵衛が差して來た脇差を抜き放し、「サア今一度いうて見やれ料簡が御座んす。」宅悦「ア、短慮々々、コリヤモウ何方へ廻つても命が危い、というて首尾よくやらぬと命、又やりかけたれば命、どうしても命づくぢや。」お岩「主ある者に不義いひかけ、一とほりで濟まうと思うてか、伊右衛門どのへの言譯、命は貰ひましたぞ。」宅悦「ア、これ／＼其の樣に固くなつてはモウ暴ぢや、何もかも言うて仕舞ひます。」お岩「ナニ云うて終ふとは。」宅悦「いうて終ふから、其の抜身を納めて下され。」お岩「否々樣子を聞かぬ其の中は、滅多に元の鞘へは納まらぬ、サアどうぢや／＼。」宅悦「その樣に責めかけると出る事が出ぬ、マア／＼。」トお岩が持つてる脇差へ飛びつき、此の拍子に屛風倒るゝ。「マ、これを放して／＼。」お岩「イヤ放されぬ放されぬ。」ト互に取り合うて振拂ふ拍子に、脇差は上手の障子家體の、よき所の柱へ立つ。お岩摺り寄つて、「サア樣子はどうぢや／＼。」宅悦「外でもない伊右衛門殿に頼まれた。」お岩「正々しい虚言、こちの人が何の其の樣な事頼む物か、有樣にいはぬときく事ぢやないぞえ。」宅悦「正眞正銘頼まれたのぢや、其の樣子は伊右衛門殿、アノ喜兵衛の娘を女房にするにつけ邪魔になるお岩、どうぞ

承知ぢや〳〵、力一ぱい密通して見る、命はお助け〳〵。」伊右「そんならいよ〳〵密通を。」宅悦「するともするとも、密通をして斬らるゝは當然ぢやが、密通せぬと命がない、すれば命が助かるとは、世は逆さまの事ながら承知しました。」伊右「首尾よく致せ、褒美は遣はす。」宅悦「承知々々。」ト伊右衛門刀をさめて、伊右「無理からでも今夜のうちに首尾よく致せ。」宅悦「智慧を揮うてやりかけませう。伊右「そんなら宅悦待つて居るぞ。」ト時の鐘にて別れる。伊右衛門は向うへ入る。宅悦は舞臺へ來る。此の内お岩は子を寐さし蚊を逐うてゐる。宅悦「あの樣な無理な事を、密通せぬと殺すとは妙な亭主ぢや。」ト宅悦舞臺へ來て内へ入り、「お岩さま、今歸りました。」お岩「オヽ宅悦殿か。」宅悦「ハイ時にお前さまは心持はどうで御座りまするな。」お岩「イヤモウ今日は天窓といひ、顔が脱れて行くやうぢや。」宅悦「それははや困つたもので御座りまする、チト脊中でも擦りませうかナ。」お岩「どうぞ擦つて下され賴みます。」宅悦「ドレ〳〵商賣筋ぢや、療治致しませう、ドレ〳〵。」トお岩の後へまはり脊中をさする。お岩「アイ〳〵こりやお慮外で御座ります、アヽ顔が痛い〳〵。」宅悦「申しお岩樣え、お前樣はあの樣な邪見な伊右衛門樣でも、愛想は盡きませぬか。」お岩「そりやモウ邪見な男を持つたが因果、どうもせう事がないワイなア。」宅悦「隨分ありまする、この樣な撫で擦つて可愛がる私と、何と相談はどうで御座りまするなア。」お岩「ホヽヽ、此の人とした事が、じやら〳〵と何を。」宅悦「イヤじや

緒を直して居ました。」ト恐ろしいと捨白にて向うへ入る。お岩立寄り火鉢の蚊燻べなど氣を注け、始終苦しみ居る。此の時入相の鐘、合方にて橋懸りより伊右衛門窺ひ出て、密と門口より覗いて見て、お岩の顔を見て吃驚。伊右「ャあの様にも變る物か、コリャ思案しかへずばならぬワイ。」ト時の鐘。又門より覗いて、「全で化者だ。」ト思案して花道へ蒐る。向うより宅悦油さし持つて戻つて來る。伊右衛門行き逢ひ、宅悦悄りして、宅悦「モシ〳〵伊右衛門様々々々々々、あのお岩様の顔が、とひやうもないものになりました、御覧なされましたか。」伊右「オ、見た〳〵、何も騒ぐ事はない、高が斯うだ、喜兵衛殿の娘を女房に貰ふ約束故、邪魔になるはあのお岩、秘藥を以て彼の様にかはる姿を幸ひに去つて仕舞ふ魂膽だ、コレ宅悦、貴様にも頼みがある、コレ。」トさゝやくこなし、宅悦びつくりして、宅悦「どうしてマア其の様な事が、そして彼の様なものを間男が出來るものか。」伊右「出來ても出來ねえでも是非頼みたい。此の役目首尾よくやれば褒美の金、不承知なればしよ事がない。大事をいうた宅悦、貴様の命は貰うたぞよ。」ト刀を抜き振上げる。宅悦慌てて、宅悦「ア、是れ〳〵其の様な無理な事、あのマアお岩様と密通しろ、せずば殺すとは胴慾ぢや。あの様な化物と色が出來るものか、といふたら斬らんすであらう。マア可いワ承知ぢや。」伊右「一寸のがれ氣に入らぬ、きつと承知か。忌なら眞二つ。」ト又刀を振上ぐる。宅悦逃げ廻り手を合はして拜んで、宅悦「ア、此の通り〳〵拜む〳〵、

たら聞き入れず、そこで私の著物脱いで上げた其の上に、まだ何ぞ出せというていろ〳〵な難題ばかり、其の上にあの蚊帳を出せといはしやんす故、此の子が蚊に咬はれると、段々事譯いうても聞き入れず、私が止めたを振り切り、この樣に爪まで放して行かしやんしたワイなア。」宅悅「ドレ〳〵、それは邪見なお人だ、オ、痛みませう、何ぞ血止をつけて、エ、情ない人ぢやなア。」お岩「ア、顏が痛い顏が痛い。」宅悅「申し〳〵逆上して血が上つたら惡い、氣を落しつけて暫くお休みなされませ。」ト此の時赤兒泣く。これにてお岩立つて顏を抑へ、兒を添乳せんと寢轉び蚊を逐ひ二枚屛風を引廻す。ト宅悅いろ〳〵と捨白あつて、宅悅「ヤレ〳〵可愛さうに、蚊の澤山ゐるに、ドレ〳〵蚊燻べをしかけてあげませう。」ト火鉢へ蚊燻べなどしてゐる。時の鐘、凄き合方になり、行燈を出して燈心を入れ油を差さんとして、「南無三油が絕れた、ドレ〳〵油を買うて來よう、申しお岩樣、油買うて參ります、一寸留守をお賴み申しまする、お岩樣〳〵。」お岩「アイ〳〵。」ト起き上る。トお岩の顏誂への異形に變る。宅悅見て吃驚して、宅悅「ヤア〳〵お岩樣の顏が。」お岩「酷う逆上してならんワイなア。」宅悅「マアマア恐ろしい。」トいひかゝり思入ある。お岩は心つかずゐる。「ドリヤ油を買うて來ようか。」トふりむき見て、「ア、南無阿彌陀佛。」ト門口へ出て。「マア〳〵どういふもので彼の樣な顏にならしやんした事ぢや、モウ一日と。」ト又たち歸り覗いて、「全で化物だ。」お岩「まだ行かんせんかいなア。」宅悅「今鼻

お岩「イエ〱何の惜しい事は御座りませぬが、坊主めが蚊にくはれまするゆゑ。」伊右「子が蚊に咬はれうが、汝が死なうが構ふものか。」お岩「チエ、、。」ト伊右衛門の顔を怨めしさうに見て、わつとなきて、「そりやあんまりで御座りませうがな。」伊右「何があんまりだ、忌々しい其の泣面、エ、面倒なあの蚊帳を。」ト立ちかゝるをお岩ひきとめ、挑み合うてト、伊右衛門振りきる。お岩あつと倒るゝ。お岩「ア、顔が痛い〱。」ト伊右衛門是れを構はず、蚊帳を取つて來て、伊右「ドリヤ行かうか。」ト伊右衛門行くを又とめて、お岩「この蚊帳ばかりはどうぞ罷めてくださんせ。」伊右「エ、面倒な放せやい。」お岩「どうぞ是れは、子が蚊に咬はれます、堪忍して下さい。」伊右「コ、放しやアがらぬか。」ト惨う引つたくる。ト お岩指の爪はなるゝ。お岩「ア痛、、ア痛、爪がはなれましたワイなア。」ト倒るゝ。其の間に伊右衛門門へ出て、伊右「これも照月の一軸が欲しいばかりで、辛く當るも。」ト思入あつて、「ドリヤ一打中てうか。」ト時の鐘にて向うへ入る。ト お岩指をおさへ、轉んで苦しむ。お岩「こちの人、どうぞ其の蚊帳ばかりは、どうぞ。」ト起き上り見て、「モウ行かしやんしたか、ア痛、、、、邪見な男ではあるぞいなう、ア、顔が痛い〱。」ト顔と指とを抱へ苦しむ。この時向うより宅悦戻つて來て門口へ入り、宅悦「今戻りました。ヤお前はお岩樣、又血の道か、どうなされました〱。」お岩「お、宅悦殿、今こちの人が戻らしやんして、何ぞ質に置くもの貸せといはしやんしたけれど、何も無い故斷りいう

せて下さりませ。」伊右「なんだコリャ汝が著もの、これが幾許貸すものか、是れぢや足りないもつと出せ。」お岩「それぢやというて無理ばつかりおつしやる、なにもないものを。」伊右「喧しいワエ、わりやそれでも好きな男には貸すであらうな。」お岩「もし貴方、好きな男とはそりや誰でござります。」伊右「わりや密夫があるで有らう。」お岩「エ、どうしてマア。」伊右「知るまいと思ふか、間夫があるであらうが。」お岩「モシいふ事といはぬ事が御座りまする、私が間男したといふ證據が御座りますか、シテ又いづくの誰で御座ります、サア承りませう、これ許りはうけたまはりませねばなりませぬワイなア。」伊右「サア其の人は。」お岩「その者はエ。」伊右「サそれは。オ、さうだ小兵衛としてるであらう。」お岩「エ、ナニ小兵衛と、シテそれには證據が御座りますか。」伊右「證據は。」お岩「證據はえ。」伊右「サ證據はないが、何でもをかしな素振であつた。」お岩「證據もないに其の樣に、難非難つけるは、こりや何ぞ御量見が御座りまするか。」伊右「サア量見がある。イヤサ量見も譯もないけれど、おれが貸せといふ物を貸さぬゆゑ疑ふのだ。」お岩「それぢやというて無いものがどうして。」伊右「ナニまだ外に。」ト伊右衛門障子屋體を見る。ト蚊帳の吊りあるを見つけて、「幸ひあの蚊帳を質に遣らう。」ト立ち、か丶り取らうとするをお岩とめて、お岩「もしこちの人、此の蚊帳ばかりは堪忍してくださんせ、坊主が蚊に咬はれますワイなア。」伊右「それ見やれ、子をかばひ立する顔で、やつぱり惜しいのだ〳〵。」

好變る稀代の藥なれば、猶不緣にして喜兵衛と同心なさん、ムウさうぢや。」ト舞臺へ來て、門口より覗き見て、「お岩今もどつた。」ト内へ入る。お岩「オ、こちの人遲うござんした。」伊右「お岩、アノ先刻に喜兵衛どのから遣した血の藥を呑んだか。」お岩「最前からたてかけて。」伊右「呑んだか。」お岩「アイ、どうも逆上せてなりませぬ。」伊右「南無三。」ト思入あつて又氣をかへ、「コレお岩、今歸りに、なるこに可い丁半が出來ると聞いたが、久しぶりでぶちあてて來よう、元手が無いか、何ぞ貸してはくれまいか。」お岩「そりやモウお前さんの事、何なりと上げたいが、御存じの通り、皆あなたが質物にお預けなされて、何も無いでは御座りませぬか、それにマアどうして。」伊右「コレ／＼何も無い、コリヤおれに貸すが惜しいか。」お岩「なんのマア惜しい事が。」伊右「なけりや何故貸さぬ、惜しからう／＼。」お岩「あなた、そして何が御座りますえ。」伊右「汝が頭の櫛簪、何なりと出せ。」お岩「そのやうな事おつしやるが、貴方も御存じの通り、あの櫛は母樣の遺物にもかへぬ物ゆゑ、今まで著て居るものを脫いでなと、間に合はして上げましたもの、何卒あの櫛ばかりは御免なされて下されませ。」伊右「よいワ、それ程な櫛なら借りぬ、そんなら外の物なんぞ貸せ。」お岩「何というて何がございますもので。」伊右「エ、やかましいワエ、何なりと都合して出せ。」お岩「ハイ。」ト愁へのこなしいろ／＼あつて、著てゐる衣物脫ぐと淺葱の長下著になりて、衣服をたゝみ渡す。お岩「左樣ならこれなりと、お間に合は

小柄にて金打する。喜兵衛「ハア、それにて安堵。コリヤ娘、よろこべ御承知ぢやとやい。」ト四人大きに悦ぶこなし。お梅「エ、嬉しう御座んすワイなア。」お弓「日ごろの願ひが叶うたワイなウ。」お槇「お嬉しう御座りませうなア。」トお梅へかけていふ。喜兵衛「マ、ちよつと祝ひにソレ傍へ。」ト娘を無理に伊右衛門の傍へ推し遣る。お梅「父様母さんお許しなされませ。」ト伊右衛門の膝に靠れる。喜兵衛お弓側向く。伊右衛門頭を搔く。この見得よろしく時の鐘合方にてチョン／＼。この道具まはる。

造物、元の伊右衛門の内、世話場になる、上の方障子を開け蚊帳を吊りある。爰にお岩以前の形にて子を寐さして藥を呑んでゐる見得、時の鐘、凄き合方にて道具とまる。

お岩「この伊右衛門殿は何をして居やしやんすやら、早う戻つて下さんせいで、ア、痛う逆上せて來たワイの。」ト捨白いひながら藥土瓶など片よせる。トきつぱりとした合方になり、向うより伊右衛門手を拱み思案しながら出て、花道にて、伊右「今聞けばあの喜兵衛が、お家の重器照月の一軸を、隱し所持致すとの事、其の一軸ゆゑお家の騷動、何卒掛地を工夫してとり返したい物ぢやが、さすればお岩を離別致し、あの娘を娶らずはなるまい。とあつて科なき女房を離緣もならず。」トこなし有つて、「イヤ／＼お家には替へられぬ、殊に最前喜兵衛よりお岩に送りし血の藥は祕藥とあつて、一日に相

き故、見せしめに切腹あるか。」喜兵衛「イヤ〳〵面當では御座らぬ、死なねばならぬ拙者がいひわけ。」伊右「ナニ言譯とは。」喜兵衛「聞いて下され、許して下されし伊右衛門殿。お岩殿とは飽き飽かれぬ閒、それを割くには如何いたしたものならんと、娘が不便に惡念おこり、最前持たして遣はしたは、血の道の藥とは虛言、誠は一日のうちに異形の姿と變る祕藥でござる。」伊右「エ、、。」ト吃驚するこなし。喜兵衛「それぢやに依つて今頃は、服用したに違ひはあるまい、娘が願ひを叶へんと、罪なき人に祕藥を盛り、一生涯の廢人にしたも、子故の闇から闇、迷ふ心は親の因果、伊右衛門殿、死なねばならぬとは爰の事。様子はかくの通りで御座る。」伊右「アノ祕藥。ムウハテなア。」ト伊右衛門こなし。お梅「わたし故大事のお岩樣、顏が變つた上からは、猶々わたしが望みは叶はぬ。生き存へて戀しい人に怨まれうより、いつそ殺して下さんせいなア。」ト又自害せうとする。お槇とめて、お弓「オ、其方が死ぬなら私も一緒に。」喜兵衛「身共もともに。」ト三人死なんとするを伊右衛門とゞめて。伊右「お待ちなされ、お三人とも。」喜兵衛「お止めなされな伊右衛門殿。」伊右「イヤ民谷伊右衛門承知いたした。」三人「ヤ、。」ト三人吃驚する。伊右「しかし卽刻には出來にくい。一旦宿許へ立歸り思案致し、お岩が樣子もとつくり見屆けた上、祝言致さう。」喜兵衛「イヤ一旦承知と見せかけて、事を謀る御所存かな。」伊右「不肖ながら伊右衛門は武士で御座る。承知致したと申すが證據、虛言は御座らぬ、武士の金打。」ト伊右衛門

い儀で御座るで。」喜兵衛「イヤ御尤もながら貴殿御承知下さらば、拙者が知行を讓り、其の上で先だつて手に入つたる照月の一軸、これを殿へ差上げ御加増を願ひ、何不足なく暮しなば、娘は本妻、お岩殿の一人や二人、隨分養うておける事、照月の一軸を婿引出に差上げますから、御承引下さらぬか。」伊右「ナニ〱照月の一軸、アノ。ムウ。」トこなし有つて、喜兵衛「いかにも。」伊右「そりや鹽冶家の重器では御座らぬか。」喜兵衛「先つ此勅使饗應のその折柄、人知れず某盜み取りおきしを、それとも知らず預り主の瀬左衛門の切腹、それ故鹽冶一家の騷動、拙者未然を察し其の前に暇を乞ひ請け、師直公へ仕官し、照月の掛地も大切に所持いたす。かく大事を明す上は御承引下されぬか。」伊右「鹽冶の重器紛失の元は喜兵衛殿か、ムウ。」喜兵衛「御不承知かな。」伊右「いかにも照月の一軸は所望ながら、私も武士の端くれ、淸貧濁福不義の榮華はうかべる雲、身の行末が。」喜兵衛「好もしう御座らぬか。」伊右「この儀許りは、ハテ何とも。」喜兵衛「そんなら御承知ないか、女房娘。」ト三人顏見合はせ科。お梅思ひきつた科。お梅「お忌ならば私は、さうぢや。」ト喜兵衛が脇差を拔き取り自害しさうにする。皆々とつて、喜兵衛「アイヤ伊右衛門どの、御承知ない時は娘は此くの通りで御座るが。」お弓、お槇「これでも御承知はないのかいなア。」トいへど無言にて俯きゐる。喜兵衛三人顏見合はせ、思ひきつて喜兵衛は脇差おつ取り切腹にかゝる。伊右衛門とめて、伊右「ヤレ待つた喜兵衛殿、この伊右衛門が承知な

御馳走に相なり千萬忝うござる。」お梅「なんのマアさしたる事も御座りませぬに其のお詞、ナウ父さん。」喜兵衛「イヤナニ伊右衛門どの、他聞を憚り親子三人、ちと貴殿へ折入つてお頼みが御座る。」伊右「イヤモウ斯くお世話にあひなる御自分様の事なれば、身に叶ひし事なれば。」喜兵衛「聞いて下さるか。」伊右「なか〱。」喜兵衛「まづ以て重疊。シテ伊右衛門どの、別儀でも御座らぬが、これなる娘の聟になつては下さるまいか。」伊右「あの拙者に。」喜兵衛「如何にも。」伊右「ム、。」ト思入、合方になり、喜兵衛「この様に申し入れたら、道知らずとも思召さうが、貴殿もお岩殿といふ歴乎とした妻女、殊に子中までなしたる間、引きさくでは御座らぬが、こゝが下世話に申す子故の闇路が不便に御座る。先日より貴殿を見初め、人知れず戀病、親の身ではあるにあられず。如何なる良藥名醫より、貴殿の姿を日に一度見するのが何より藥と、サ親の心を推察あつて、何卒そむけた事ながら、どうぞ娘が聟に成つて下されまいか。」お弓「理も非も除けて兩親がお頼み申しまする。」伊右「これは〱存じもよらぬ事を承る。そりや隨分家柄といひ娘御の御器量、直に承引致す所なれども、茲に一つの難儀は、お岩が舅四谷左門、先だつて何者とも知れず手にかけたる故、舅は親、この敵を討つまでは、お岩と不縁にはなり難し。世の人口にて伊右衛門は敵が怖さ討ちともなさに、お岩を離別致せしとあつては、拙者武士道は相立たず。とあつて大切な娘御、かりに夫婦の名告もならず。此の儀は何とも是非もな

まじき事、御推察下されい。」伊右「數ならぬ拙者をさ程御懇望とは、身に餘る御厚志、民谷伊右衛門かくの通り。」ト手をつき禮をいふ。長藏「イヤモウ斯う申すも異な事ながら、喜兵衛殿は名に負ふ師直の家中にて、人も知つたる武士、殊に金銀は澤山、娘は器量よし。此の人に思はるゝとは、あやかり者の民谷殿、お羨ましう御座る。」官藏「拙者が伊右衛門殿ならば、直に承知致しまする。又女房の古いのと疊の古いはいかぬもの、アノお岩殿は子を産むし、そこらあたりが古くなつて居る。まだ水揚のお娘御をかへ〳〵とは、牡丹餅で叩かれるやうなものぢや。伊右衛門殿、承引されてよく御座る。」お弓「どうぞ伊右衛門殿のお心一つ、娘がおもひを叶へて。」喜兵衛「コリヤ。ハヽヽ、縁は約束事で御座るて。併し御兩所、伊右衛門殿には密々にて話も御座れば、貴公方は奥へ御座つて今一獻召上つて下されい。」長藏「然らば左樣致さう。」官藏「場所が變るとまた飲めるものぢや。」兩人「ハヽヽ、左樣なら。」喜兵衛「これからござれ。」ト唄になり、長藏官藏奥へ入る。跡に喜兵衛お弓伊右衛門三人殘りて、「サ、お寛ぎ下されい。」伊右「自由に致しまするて。」喜兵衛「コリヤお弓、娘をこれへ。」お弓「うばや、娘をつれて來てたも。」ト奥にてお槇、お槇「ハイ〳〵。」ト乳母お槇先に立ち、娘お梅振袖娘にて、恥かしき科にて出てくる。喜兵衛「オヽ、娘か、先刻より伊右衛門殿も是れに御座る、マヽ、爰へ〳〵。」お梅「アイアイ、ようお出で遊ばしました。」ト嬉しきこなし。伊右「これは娘御で御座るか、イヤ毎度お邸へ參り、

お弓「どなたも宜しうお上りなされませ。」伊右「イヤ段々の御馳走、まことに恐縮に存じまする。」長藏「我々までも御相伴に預り、お禮の申し樣もない事で御座る。」官藏「左樣で御座る。」喜兵衞「これはこれは御挨拶、拙者致しかゝりし事御座るゆゑ、碌々お給仕も致さぬ。只今直に相仕舞ひまする、そこへ宜しう。」伊右「先刻より見受けますれば、大枚の金子をお洗ひなさる樣子、いかゞな事で御座るな。」喜兵衞「否これは斯樣で御座る、お恥かしい事申す樣でござるが、親共より貯への金子で御座つて度々洗ひませぬと黴が生えまするで、そこでかくの如く仕りまする。」長藏「イヤ／＼何賤しい事があらうか、是れ位尊いものは御座らぬて。」官藏「われ／＼はついど金銀へ黴の生えたを見た事が御座らぬ、ある黴もはがして二つに致して遣ひたい。」皆々「ハ、、、。」お弓「サア冷めぬうちにお吸物を。」伊右「これは／＼最早お構ひ下されな、かさね／＼の御馳走でござるて。」長藏「然らばお先へ戴きます。」ト吸物の蓋を取つて、「ヤァ／＼是れは小判の餡かけ、小粒の切肉。」官藏「ドレ、なる程結構なお吸物でござる、然らば頂戴致さう。」伊右「イヤ何から何までお心遣ひ、千萬忝うござる。」トこの中喜兵衞小判を洗ひ仕舞うて座に直り、喜兵衞「イヤモウお粗末な事、かく貴殿方を饗應すも、何卒伊右衞門殿の聟舅の因みを結びたさ、とはいへお岩殿といふ妻ある身、押してとは申されぬが、殊の外娘が執心、身共も殆んど當惑。それ故せめてお招き申し、顏なと見せて。」ト一寸こなし、「武士のある

であつた、今又伊藤のお使まゐり、今日お志のお饗應あるというて、呼びに遣はされたゆゑ、一寸御兩所と一緒に參つて來る間、隨分風に當らぬ樣にして留主してくりやれ。」お岩「ハイ〳〵左樣が宜しう御座りませう。先刻私への御見舞物、殊に血の道の藥と有つて下さんしたお心遣ひ、厚くお禮を申して下さんせ。」伊右「承知致した、サア羽織を著して往かう。」ト上手よりお岩よほ〳〵羽織出して來て渡す。「サテいづれも參らう。」長藏「御同道いたさう。」お岩「お早うお歸りなされませ。」伊右「ツイ歸るぞよ。」ト唄になり三人つれ立ち向うへ入る。跡にお岩殘り、抱いたる子を下へ寢さし、藥を煎じにかゝる。お岩「今日は南風で逆上す、この宅悅殿は何處へ往たであらう。最前喜兵衛樣より下された此の藥、どうかよささうぢや。ドレそろ〳〵煎じて飮みませう。」ト下手へ行かうとすると赤兒泣く故、又上手へ來て抱き上げいぶりつける、この見得よろしく道具かへし。

造り物三間の間二重舞臺、向う古當たる墨繩の襖を立て、上の方一間の障子家體、下の方柴垣に松の植込、枝折戸をたて、喜兵衛屋敷庭口の體よろしく、二重の上に金の盥にて喜兵衛小判を洗うてゐる、傍に女房お弓、老けたる拵へにて給仕してゐる、眞中に伊右衛門、長藏、官藏皆々酒肴取散らし、馳走になつてゐる、吸物膳を据ゑゐる見得にて道具とまる、合方になる。

其の手蔓は伊藤喜兵衛、これを頼むは易けれど、さすればお岩を不縁して、先の娘の聟とならねばならず。其の時はお岩への義理立たず、幹木に勝る梢木なしと、やつぱりお岩を。」ト思入ある。ト橋がかりよりお槙また出て來て門口を入り、お槙「お許しなされて下さりませ、又參りました。」伊右「イヤ何ぞ急な御用かな。」お槙「お手紙が參りました。」ト出す。伊右「ハイ／＼どれ／＼。」ト取つて讀んで見て、「これは／＼お手紙の趣では、お志のことと御座つてお招き下さるゝとの文言、忝い、唯今それへ參ります、宜しう仰せくだされ。」お槙「ハイ／＼左樣申しませう、お待ち申して居りまする。」伊右「御苦勞で御座る。」ト橋懸りへお槙入る。ト奥へ向ひ、「長藏殿、官藏殿々々々。」ト呼び立つる。奥より、長、官「ア、何で御座る／＼。」ト兩人出て來て、伊右「イヤ外でも御座らぬ、貴方達も御案内の伊藤氏より又候手紙到來、文言は今日我々を饗應すとのこと、參らうでは御座らぬか。」長藏「御尤も、かね／＼貴公へ御話し申す通り。ナ、娘御がそれで御座るからの事さ。」官藏「大抵の事なら云ふ事聞いて遣はすがよう御座る、後生と申すもので御座るテ。」伊右「さう仰しやると甚だ辛い、ハ、、、。時に留守居がない、お岩を呼んで、コレお岩や／＼。」お岩「アイ／＼。」ト お岩納戸口より誂への産後の拵へ、草たばね、衿に痳をかけ、弱りし體。子を抱へ出て來て、お岩「ハイ何ぞ用で御座んすか、今までお二人が色々な話で氣を慰めてくださんした、何時にない笑ひましたワイな。」伊右「それは幸ひ

み、戸をたつる。伊右「時によろしうお禮を申して下され、いづれ後刻お禮に罷り出まするど申して下され。」お槇「かしこまりました、長藏さん、官藏さんもこれに。」長藏「これはお槇殿、左様なら伊右衛門殿、彼の君よりのお使かな、さぞお喜びで御座らう、ハ、、、、。」伊右「よろしう申して下され。」お槇「ハイ左様なら誰方もちとお出でなされまし。」伊右「御苦勞。」ト唄になりお槇橋懸りへ入る。「時にいづれも御酒一つ差上げう、それ毎度の通り臺所で直燗でおやりなされて下され。」長藏「それは忝い、然らば伊右衛門どの御馳走に。」兩人「相なりませう。」伊右「サ、參れ〳〵。」ト唄になり兩人は奥へ入る。ト伊右衛門宅悅跡に殘り「コレ宅悅殿、さて段々と先日より、お手前以前の好みをもつて一つ家に同居、雑用も揉み込みに致した所、拙者だん〳〵不仕合ゆゑ貴公の世話ばかり、それ故唯今小兵衛が盜み取りし一藥を質物に入れ、金子今日入るゝ間、左樣思うて下され。」宅悅「これは〳〵伊右衛門さま、其の様な事おつしやりまするな。以前貴方の親御兵部樣に大恩受けましたる此の宅悅、同居致せば貴方のお家、私は家來も同然でござりますて。」伊右「何の〳〵、時に今申す通りの譯、一寸一走り質屋へ參り、手代を呼んで來ておくりやれ。」宅悅「ハイ〳〵畏まりました、左様なら往て參りませう。」伊右「大儀ながら賴みまする。」宅悅「ドリヤひとかへり往てこようか。」ト唄になる。按摩宅悅向うへ入る。あと合方になる。伊右「ア、浪人の身貧に暮すよりは、師直方へ取入り立身の願ひ、

公でも致しまする、何卒これお願ひ申しまする旦那樣。」伊右「黙りあがれ素野郎め、汝がどの樣な大事な主人か知らぬが、俺も亦日雇に遣うたも、裏へ自然薯掘りにうせたを正直な者と思ひ、今まで目をかけ家來同然に致して遣はしたに、恩を仇なる人非人、こりやあの藥はソウキセイといふて鹽冶家に傳はり、仔細あつて親兵部殿に賜はり、大切に所持致したるを、汝が盜み取り逐電致した故、親の孫兵衞も番人つけて措いたれば、家へは歸れず、それ故うろついて居る所を、お二人の目に懸り、捕へられたるは天罰といふものぢや。サア有樣に一藥を出せ〳〵。」小兵衞「どうぞ此のお藥は私に下さりませ、手を合はして拜みまするワイ。」伊右「エヽ、此奴、甘言に致せば增長る大罪人。ソレいづれも此奴をしめ上げさつしやれ。」兩人「合點ぢや。」長藏「サア小兵衞、きり〳〵藥を出せ。」小兵衞「こゝには御座りませぬ、どうぞ。」官藏「出さぬと寧そかう〳〵。」ト兩人して小兵衞を酷く打擲する。伊右衞門懷中を改める。小兵衞の懷より藥出る。伊右衞門ちやつと取り上げて、伊右「扨こそ大切なる一藥を、この素野郎奴、それ縛しあげて暫時窮命。」兩人「合點でござる。」ト無理に兩人小兵衞に猿轡を辨めて縛る。此の間にて宅悅お槙も出てくる。宅悅「ヤア〳〵小兵衞、汝やマア太い者ぢやぞよ。汝ゆゑ大騷ぎぢや。」小兵衞「ハイ〳〵何卒御料簡下さりませ。」伊右「これは〳〵お使の手前騷々しい、ソレ小兵衞奴は先づあの戸棚へ浚ひ込んでおかつしやれ。」兩人「心得ました。」ト無理に戸棚へおし込

寸志の品々ありがたう頂戴しまする。宅悦殿、奥へ伴ひお岩に此の由申し傳へて下され、ヤレ〳〵お氣の毒千萬な。」宅悦「左樣なら一寸お岩さんにお逢ひなされませ。」お槇「ハイ〳〵一寸お伺ひ申しませう、御免なされませ。」伊右「サア御遠慮なくお通りなされい。」ト唄になり、宅悦案内してお槇兩人奥へ入る。「ヤレ〳〵毎日々々の心遣ひ、喜兵衞殿の娘御、ハテお笑止千萬な。」ト捨臺詞の中、向う揚幕より、長藏、官藏「うしやァがれ〳〵。」トいひながら長藏官藏兩人、浪人者の拵へにて、小兵衞木綿やつしの破られたるを衣て、髮を亂し、一本差おちぶれたる科にて、謝り〳〵出て來る。兩人「ふとい奴ぢや、うしやァがれ〳〵。」ト小兵衞を酷く兩人して引きずり舞臺へ來て、長藏「伊右衞門殿宅に御座るか、小兵衞を見つけましたる故、つれて參りました。」伊右「ナニ小兵衞を伴れて御座つた、それはそれは。」長藏「サア内へ入れ。」ト突き込む。小兵衞面目ない科。伊右衞門立腹して、伊右「コリヤ小兵衞、汝を探して居る事晝夜わかたず、人夫をかけて探ね居つたワ。サア四も五もない、家に傳はる妙藥を奪ひ取り逐電いたしたる大罪。サア何處へ遣はした、所持致しをるか、サア出さぬかどうぢや〳〵。」長藏、官藏「のぶとい奴、妙藥を出せ〳〵。」小兵衞「へイ〳〵旦那樣、貴方に合はす顏は御座りませぬ。成程お家の妙藥は私が盗みました。無理なる事をお願ひ申しまするが、どうぞあの藥は私に下されませ。と申す譯は、身にもかへられぬ大事のお主の病氣に上げたう御座りまする。私がどの樣な御奉

て、一兩日は相待ちくれる、きつと詮議して差出せ。かけがへのなき大切な妙藥、一兩日中に戻さぬと、汝等も手討に致すぞ。」孫兵衞「イヤたとひお手討になりましても申しぶんは御座りませぬが、何卒小兵衞奴を詮議して、委細を分けまするに依つて、御勘辨願ひ上げまする。」宅悦「サア〳〵旦那が彼の樣に仰しやるから、ちつとも早く内へ歸つて、小兵衞を探ねる工夫したがよいワイ。」孫兵衞「ハイハイ左樣なら旦那樣、お暇申しまする。」伊右「きつと詮議致せ、餘日は待たぬぞ。」孫兵衞「かしこまりました、ハイ左樣なら。」宅悦「しづかに行かしやれ。」ト茶摘唄になり孫兵衞むかうへ入る。伊右「あの親父め、ぐるで致した事と見えるワエ。」宅悦「イエ〳〵あの孫兵衞は大抵固い奴ぢや御座りませぬテ。」伊右「なか〳〵人は固いというても當にならぬものぢやテ。」トこの時橋懸りより乳母お槇重箱を提げて出で來り、門口から内を覗き、お槇「お許しなされませ。」ト内へ入る。宅悦「これは喜兵衞樣のお乳母殿ようお出でなされました。」伊右「毎日々々のお使御苦勞、又今日も何か御用かな。」お槇「ハイ主人左樣申しまする、お家さんも段々お肥だちなされまする。承りますれば、いまだお血が騷ぎまするさうで御座りまする、これは一家共より到來致しましたる毒絕の物、粗末ながら差上げまする。又これはさるお醫者より頂戴致しましたる血の道の藥、これを二三度にお上りなされますと、血が治りまして宜しうござりますと、申し遣はしまして御座りまする。」伊右「これは〳〵毎度々々御心ぞへ、誠に御

二幕目

民谷伊右衛門内の場
喜兵衛内の場

造物、三間の間平舞臺、上の方折まはりの障子家體、眞中上手に一間の杉戸押入、下がゝり鼠壁、眞中暖簾口、下の方板塀、毎もの所に門口を立て、幕の裏に伊右衛門御家人仕事、傘を張つてゐる、其の傍に按摩の宅悦、下に四谷の馬士佛孫兵衛、伊右衛門に言譯して居る。都て浪人者家内の體よろしく、茶摘唄に幕明ける。

孫兵衛「どうぞ御勘辨をお願ひ申します。」伊右「コレ〱其方が倅小兵衛がな、身共が屋敷の裏の藪坂へ、自然薯ほりに參るを、ふと心易うあひなり、身共が宅へ出入致し、日雇同樣に使ひし所、一昨日身が家に傳はる祕方ソウキセイの一藥、身にも代へ難き大切な藥を盜み、行方知れず。それ故その許親の事なれば、知らぬというて濟まうか、たはけ者め。」宅悦「イヤモウ旦那のいふが一々道理、孫兵衛どうぞ言譯して下され、口入した儕まで迷惑しますワイの。」孫兵衛「イヤ御尤もながら常から正直な小兵衛、盜み致し走る樣な者でも御座りませぬが、どう致した物の間違か。いづれ小兵衛が出ますまで何卒お預けなされて下されませ。」宅悦「旦那、あの通りに申し居るから、何卒こゝ一兩日お待ちなされて下さりませ、私もお願ひでござりまする。」伊右「これ待ち難い所ながら、其の樣に申すに依つ

殿の最前の詞、嘘か誠かとつくりと、一緒にゐて糺したら、もしや敵も。ヤサアつい知れまい物でもない、假の夫婦になつたが可いワイの。」ト呑み込ます科、お袖「なるほど、いはしやんすれば私もどうやら。」ト直助へ目をつける。ト直助エ、と恟りする科ある。「表面ばかりの、そんなら夫婦。」伊右「これでたがひに。」直助「力とたより。」お袖「とはいふものの是れがマア。」お岩「あきらめ兼ねる女氣の」伊右「これも有理、しかし何時までいうたとて。」直助「つきぬ名殘と。」お岩「つきせぬ奇緣。」お袖「鴛鴦の襖に引きかへて。」お岩「心のつるぎ刃。」伊、直「やがて本望。」トにつたりと兩人思入ある。ト此のとき以前の非人二人窺ひ出て、非人「人殺し。」ト伊右衛門直助へ蒐る。伊右衛門拔討に一人を斬る。ト直助も一人の非人の手を捩ぢ上げる。お袖お岩こはがる。伊右「敵討と婚禮の首途の血祭。」お岩「かりそめながら祝言の。」ト伊右衛門脇差を見て、伊右「これが則ち色直し。」ト刀の血を拭ふ。お袖「涙のさかづき。」お岩「さん〱くどい。」兩人「繰言ながら。」ト死骸へ思入。伊、直「どうやらかうやら。」ト兩人顏見合はせ舌を出す。お岩お袖死骸に取りつき、女二人「思へばはかない。」ト直助非人を見事に投げる。伊右衛門手を合はす。この途端、女二人「ハア、。」ト泣き落す。雙方こなし宜しく　拍子幕。

お袖「わたしも夫に別れた身の上、夢見たやうな此の世の縁。」お岩「親の死骸の此の場にて。」お袖「夫と共に親子四人。」兩人「さうぢや。」ト有合ふ刃物、お袖は伊右衞門の脇差にて兩人死なうとする。伊右衞門直助あわてゝとゞめ、伊右「こりや狼狽へて今妧娣が自害して、親夫の敵は誰が討つ。」兩人「エ、。」伊右「お岩、親も敵も打ちすてゝ、夫の操も忘れたか、お袖も共にマア〳〵待て。」お岩「デモ別れたる夫婦の中、今更どうも。」伊右「サア厭きも厭かれもせぬ中にて、懷妊の身の上何しに見捨てう、舅の亡き後は元へ戻つて夫婦となれ、親の敵は討たしてやらう、身共が爲にも舅の敵。」お岩「そんなら是れから元の夫婦、たよりになつて親の敵を。」伊右「女房の親は身どもの親。」お岩「嬉しうござんす。」ト泣く。お袖「あかれぬ中はもと〳〵へ、お返りなされて敵の助太刀。私はどうでも。」トまた死なうとするを直助とゞめて、直助「ハテ今儂が申す通り、與茂七樣を討つたる敵、尋ね出して討たせねば、此の身の潔白立ちませぬ、どうぞそれまでお前の命。儂に預けて下さりませ。」伊右「直助が申す通り、左右悲しい辛抱もつゞまる所は夫のため、首尾よく敵討つまでは、兄が許して假の夫婦。」お袖「エ、。」伊右「サアそれが則ち世を忍ぶ世間の思はく、敵の油斷討つ手段。」お袖「デも直助殿とかりそめにも、夫婦と呼びては未來の良夫へ。」直助「立たぬも有理さりながら、憂世を憚る假の夫婦、人目ばかりで離れ〴〵、夜の寢所も別れ〳〵にするが潔白。」お岩「サア妹、表面は假の夫婦なりや願ふ所、直助

お岩「ヤァお前は伊右衛門殿、父さんが殺されて御座るワイの。」伊右「ヤ、こりやこれ舅殿を何者が。エ、これ今一足早くばおめ〳〵と、エ、残念な。」ト悔しがるこなし。直助本花道より矢張態と足音して驅け來り、お袖を見るより、直助「お前はお袖さんか、ヤア〳〵〳〵これは先刻に見覺えある提灯といひ、さては與茂七殿は。」お袖「父さんと同じ所で。」直助「ヤァ〳〵これは大變だ〳〵。」伊右「スリヤお岩、妹お袖が夫與茂七も、此の所で死するを見れば、察する所、舅の身の上危い所へ驅けつけて、助太刀致した此の與茂七、却つて討たれし此の樣子。よつぽど敵は手垂と見ゆる。」直助「さうだ、南無阿彌陀佛。」ト腹切りにかゝる。伊右衛門驅け寄り刀を押へて、伊右「ヤア其方は瀨左衛門殿の家來直助、何故に切腹致す。」直助「サア切らねばならぬ此の身の言譯、安い奉公するものは心をわるく現在の御家中の娘、これなるお袖樣に橫戀慕、金びら切つて與茂七と、宵に二言三言の爭論、別れて切られた與茂七殿、儂に疑ひかゝるは必定。思へば忠義の與茂七樣へ勿體ない、橫戀慕と先非を悔いて此の身の言譯。それぢやに依つて。」トまた腹切らうとする。伊右「エ、うろたへたか直助、申譯は有理ながらコレ能う聞け、汝が言譯相立つは、今死ぬる命を延ばはりて、お袖が力となつて、與茂七が敵さがし出し、討たして遣るが身の潔白。」直助「それは下郎が望む所、今までの無禮、先非を悔いて敵の助太刀。」伊右「それが面晴、お岩お袖、さうではないか。」お岩「父さんに別れ夫に別れてゐる身の上。」

拭かぶり、世話女房の拵へにて走り出る。お岩「モウよつほど夜更けてもあらう、此のマア父さんは何をして居さしやんすやら、急に胸騷ぎがして、エヽ案じらるゝ事ぢや。」ト舞臺へ來ると上手よりお袖以前の形にて、小提灯を提げ走り出で思はず行き當り、お岩「オヽ其許は妹。」お袖「姉樣かいなア、お前は何しに。」お岩「何しに所か、父樣の歸りも遲し、其方も戾らず、案じて迎へに來たワイなア。」お袖「わたしも今日は別れた夫與茂七殿に逢うて、今よひは是非大川端まで行くと言はしやんした、遲い故に爰まで來たのでござんす。アヽ胸さわぎが。」お岩「なんぞ凶事でも。」ト下を見て、「ヤア／＼此の血ワイなウ。」お袖「ほんに氣味の惡い、大層に血が。」トあたりを見る中、兩人一緒に左門と庄三郎の死骸を見つけ。吃驚して取りつき、お岩「ヤア／＼そりやこそ父さんが。」お袖「おぼえの著物、しるしの提灯、與茂七さんも此の處で。」兩人「こりやマアどうせうぞいなア／＼。」と兩人よろしく大泣きになり泣きおとす。ト伊右衞門直助拔足にて兩花道へかゝり窺ひ居る。兩人死骸を抱き起し、お岩「モシ父さん、敵は何者でござんす、これいなア物をいうて下さんせ。」お袖「實に父樣といひ夫まで、一つ所であへない御最期。」お岩「時が延びたか死にきらしやんしたか、今はの際に一言さへ叶はぬ事か。エヽ淺ましい。」お袖「ホンニはかない。」兩人「わかれぢやなア。」ト伊右衞門東の花道から、ばた／＼と足音させ驅け來り、吃驚したる科にて、伊右「夜陰に何やら女の泣聲。ヤアわりや女房お岩でないか。」

造物、向う一面の二重の上に遠見藏屋敷のかゝり、上の方遠見に橋を見せ、下の方に橋を半分見せ大川端の體、こゝに直助頬被にて、襦袢ひとつにて出刃庖丁を持ち、與茂七の衣裝を著てゐる庄三郎を殺し、以前の提灯落ちてある、時の鐘にてよろしくし道具とまる。

直助「戀の敵の與茂七め、宵の意趣覺えたか。」トとゞめを刺す。矢張捨鐘にて蟲の音、凄き合方。「後日見咎められぬ樣に面の皮を。」ト持つたる出刃にて庄三郎の顏の皮をくる〳〵と剝き、「刃物があつては。」ト思入。塀際の溝へ隱す。ばた〳〵になり上の方より左門赤に染みて出る。後より伊右衞門、拔刀にて一寸立廻りあり、左門をトゞ斬り倒し、止めを刺し、伊右「強情ぬかした老耄め、刀の錆は自業自得、ハテ可い態だ。」ト直助すかし見て、直助「さういふ聲は確かに民谷。」ト伊右衞門もすかし見て、伊右「大星瀨左衞門殿の下部直助か、どうしてこゝへ。」直助「戀の意趣ある與茂七奴をたうとう爰で。」伊右「ばらしたか。」直助「お前も誰やら。」伊右「女房が親の四谷左門、お岩を返さぬ其の上に、國で盜んだ用金を、けどられた老耄、後日のさまたげ。それゆゑ是非なく。」直助「ちやうど揃うた人殺し、一寸のかたに面の皮をめくつて當分氣休め。」伊右「俺もそんなら老耄の。」ト刀にて左門の顏を切りにかからうとする。向うばた〳〵人音する。兩人一寸木隱れする。時の鐘、合方になり、向うよりお岩手

また兵部殿は養父ながらも義心の人、とも〴〵に寶の詮議を致せとあつて、態と別れ〳〵に此の姿。」庄三郎「何とぞ師直へ近よつて一軸の詮議を。」與茂七「尤も入りこむは屈強の身どもが門札、この姿と。」庄三郎「なる程、取りかへて貴方は非人の姿と。」與茂七「種々に變じて家再興を、弟必ず。」庄三郎「兄者人。」與茂七「然らば姿をかへ〴〵に。」ト手早く著類引取り、庄三郎の非人の形を與茂七著て、與茂七の町人の形を庄三郎著る。庄三郎「この提灯は。」與茂七「こつちは提灯いらぬもの、これも其方へ。」ト庄三郎へ渡す。「期しての面會。」庄三郎「相待ちませう。」ト時の鐘にて與茂七薦を被り向うへ入る。庄三郎跡見送り、「この姿を仲間の者が見つけたら面倒な、ちつとも早う爰を、さうぢや。」ト時の鐘にて上手へ入る。花道より左門、以前の形にて出て來て、左門「世の盛衰とはいひながら、不慮の事にて家中は散り散り、浪々の身の貧苦の中、二君に事へぬこの左門。それに引つかへあの伊右衞門、心の邪無道の惡者、あのお岩めは添はして置かぬ。それをとやかう望み居る伊右衞門。又壻に取る與茂七は、忠義の魂あつぱれ侍、ハテ思ふ樣にも行かぬものぢや。」ト思案。この時伊右衞門下の生垣より窺ひ出て、左門の行く先へ石を窃と蹴倒す。これにて左門躓きこける。其のまゝ大袈裟に斬り下げる。左門倒れる。伊右衞門足を踏みかけ止めを刺さうとする。左門起き上らうとするを、宜しく踏み附け、刀を振上げ嚴乎見得、時の鐘にて雙方よろしく、此の道具まはる。

走しろ。」非人□「可からう〳〵。誰がれといふと面倒だ、鬮にして酒屋八百屋、燒物を集めて肴屋といくがよい。」大勢「よからう〳〵、鬮だ〳〵。併し一人餘るぜ。」非人△「餘つたのが客分だ、鬮は長いのだ長いのだ。」皆々「よし〳〵。」ト鬮を拵へて引く。庄三郎長い鬮を取る。庄三郎「俺が長い〳〵、客分だ客分だ。」非人○「イヤ此奴は飛んだ目に逢うた。」△□「サァ〳〵行つて來よう。」ト捨白。時の鐘にて大勢橋懸りへ入る。庄三郎「ハテ喧しい奴等だ。」ト後見送り科あり。「今日晝淺草の寺内で、師直の家中に出逢ひ、すでの事に印鑑を。其の時恰好兄者人が。」ト此の時、時の鐘合方になり、向うより佐藤與茂七以前の形、提灯提げ出て來て、與茂七「たしか庄三郎が隱れ居る所はこの近邊。」ト邊を見る。庄三郎すかし見て、庄三郎「さういふは兄與茂七殿か。」與茂七「庄三郎か。」これわが身も嗜め、如何に若いというて、最前とても思慮もなく、うか〳〵身の上を氣取られ、大切な此の印鑑を見咎められ、殊に師直が家中喜兵衞とやら、彼奴は知らねど此方はよう存じて居る。身が參りあはせたから仕合、氣を注きやれ。シテ照月の掛地の手がゝりは。」庄三郎「その儀詮議のため乞食になり、諸國の取沙汰、手がゝりを求めんと存ずれども、今に以て。最前師直の家中に近より、歌あはせの定日を承り、其の日に詮議せんと存じた所、思はざる不覺、殊に鹽冶家の會を師直殿へ引けしも、重器紛失の失策ゆゑ、親又之丞樣切腹、皆照月の一軸より起る事。ハテ是非もない儀でござる。」與茂七「又之丞樣は拙者が實父、

取つて、お袖「もし必ずえ、そしてお前の所はえ。」與茂七「今の所も委しく明日のことさ。」宅悦「サア灸代座敷代、みなおれが損をするから早く出て行かしやれ。」直助「居ろというても居らりやアしねえ。」お熊「そんなら早く行かしやんせ。」直助「今行くワエ。といはへ。」ト直助、與茂七、お袖、三人顔見合はせ、こなし。與茂七「エヘン／＼。」ト咳拂ひ。宅悦「サア出て行け。」ト慘く門へ突き出す。直助門口より外へこけ出て科。直助「この意趣晴しは歸り道。」與茂七「夫婦の衆、大きにお世話になりました。」ト出かゝる。直助はすかし見て、直助「めあては提灯。」トいふを、宅悦「まだ行かぬか。」お袖「ほんに煩い風の神。」與茂七「これ。」ト與茂七お袖の手を執る。ト門口の直助。直助「ハ、クツサメ。」トこの途端皆々よろしく、禪の囃子にて道具まはる。

造物、舞臺向う黑幕、一面の生垣、上の方に古寺の門前、傍に石塔を建て、下の方非人薦張の小屋、舞臺前浪板柳の釣枝、こゝに以前の非人大勢ならび居る。すべて本所番場川岸の體よろしく、庄三郎同じく薦被りにて、皆々一緒に竹の皮に肴の骨を包み、德利酒にて飲んで騷ぎゐる見得。禪の勤めにて道具とまる。

非人二「今日のやうな仕事が毎日あれば可いな、一人まへに一貫文ばかりについて居るであらうな。」非人、皆々「サア思ひ入れ飲め／＼。」庄三郎「時に今日の仕事は俺には沙汰なしだな、何ぞ俺に馳走しろ馳

直助を裸にして著物も金も皆取つて門口へ出る。直助裸にされて面目ない顔してしよげてゐる。皆々よい氣味ぢやといふこなし。與茂七「なる程、人といふものは表面からは知れぬものだ、今ぼん〳〵と金びらきつたが親方の金かえ。人の物をわが物顔、あの金を遣うて見ろ、アノ首はころりだ、危い事危い事。今までいうた廣言も、青菜に鹽のあの姿、眞に馬鹿々々しい顔だなウ。」お袖「身貧には暮しても、歪まぬ心のこちの人、どうしても。」お熊「ほんに齒磨賣の直助さん、商ひ物のかんぼくの楊枝の手前も面目ない。」德兵衛「明日から何處なりと、勝手に口中一切の藥齒磨賣るが可い。あの態では藥齒磨口中ともいはれまい。」宅悦「どうして裸で口中がなる物で。」皆々「ハ、、、、。」ト兩人橋がゝりへ入る。直助俯いてゐる。與茂七「時に入らざる事で隙取つた、何かの話はまた明日の事、出直して來よう。これお袖、必ず舅殿へ俺が話はせぬが可いぞや。」お袖「とつくりと相談した上で、また父さんに逢うて下さんせ。」與茂七「それが可い〳〵、さうせうワエ。それならお熊さん、私は今夜は歸ります。」宅悦「久振での御對面、今夜は逢うてあげなさんせ。」お袖「あのやうに夫婦の衆が深切に。」與茂七「それもさうぢやが、今夜に限つた事はないワイの。」お袖「さうならどうなと。」トお袖一寸ひぞるこなし。與茂七「是れお熊さん、提灯を貸しておくれ、惡いのでよい。」お熊「アイ〳〵サア〳〵。」與茂七「サヽこれが座敷代と。」ト金をやる。お熊「こりや有り難う。」ト二重の上より提灯を出して火を點けてやる。與茂七

たばたにて齒磨の賣子、仲間一人と德兵衞をつれだち出て來て、德兵衞「確かに向うの家だ、直助めがゐたら親方のいふ通りしてやらう。」○「それがよい〳〵、サア早く〳〵。」ト門口へ來て、德兵衞「そこに居るは仲間の直助ぢやないか。」ト此の聲を直助聞いて愕りし、直助「サア〳〵德兵衞めが聲だ、大變だ大變だ、これサア〳〵灸をすゑろ〳〵。」トあわてていふ。宅悦うろたへて直助が脊中へ袋のもぐさを大きうしてすゑる。直助「あつ〳〵〳〵抑へた〳〵。」ト兩人內へ入り、德兵衞「コレ〳〵直助、何をしてゐる。」直助「オヽ德兵衞か、疝氣が起つて今氣つけの灸をすゑてゐる所だ。」德兵衞「ナニ灸所か、貴樣は貴樣は太い男だ〳〵。」直助「ア、これ〳〵邊さはりがある、今に歸る〳〵。」德兵衞「歸る、イヽヤ親方の吩咐、よく聞かつせえよ。コレ齒磨の賣溜、卸店の懸先あつめて十二三兩とつて、今日で二三日家へ歸らず。其の上話を聞けば女郎買に行くの、地獄買に行くの。オヽ是れは爰の家で差合だ、これ皆此方の錢というては一文もない、皆親方の金を盜んで使ふのだ。モウ〳〵親方が料簡ならぬ故、裸にして突き出せというて、二人伴で來たからは、言譯も語譯も聞かぬ〳〵、サア〳〵裸にならしやれ裸にならしやれ。」ト兩人立ち蒐る。直助「ア、これ〳〵尤もだ〳〵。賣溜もこれ爰に十兩ある、まだ一文も使ひはせない、爰にある〳〵。」德兵衞「あるなら受取らう。」直助「サア有るけれど今こゝで。」德兵衞「エヽ、扨は地獄に入れる心だナ。いよ〳〵捨てておけぬ、よこせ〳〵。」ト兩人して財布をとり、

犬骨折つて鷹とやら。其方は摑んで可からうが、今夜貰うたる其のお袖、あんまり廻して貰ひますまい。」與茂七「ムウ誰だと思うたら、以前は大星瀨左衞門が中間直助どの、見れば今では立流な形、これには譯が。」お袖「譯も何にも御座んせぬ、つけつ廻しつ私を口說く、厭と思へど今の身は、荒だてはれぬ陰の渡世。柳ながしにしてゐたワイなア。」ト直助憤として、直助「これ〳〵お袖、そりや何いふのだ。おつう可笑しく持ちかけて、人に存分氣を持たせ、金まで取つた其の上に、柳ながしも惘れるワ。外の野郎と見損ひ、から鐵砲の美人局、噓と誠の二つ彈、悧りする男ぢやアねえ。焰硝臭えしやら臭い、こそばゆい事よしてくれろ。サア今貸した金を出せ、いくら男が立派でも、金といふ奴には敵ふめい。御亭主々々、共々に賴みます。」與茂七「どういふわけか知らねども、女に貸した金とあれば、高が知れた端金、筋ばる事もあるめえさ。」お袖「さうで御座んす。無理に借りたる金ぢやなし、金で面はる戀の餌、ハイ元より欲しうは御座んせぬ、サア戾してあげやんせう、これ必ず此の末、きたなびれた事いうて下さんすな、手に取るも穢らはしい。」ト財布のまゝ投げて遣る。直助取り上げ、直助「ヤレ〳〵恐ろしや、既の事に此の金まで。油斷のならぬ世界だ。マア〳〵此方へ懷中しませう。」お袖「僅かな金を大層に、心のしれた人よりも、二世と交して大事の夫、噓にも見かへらるゝ物かいなア。」與茂七「すてておけ、世は樣々だ。」ト二人寄り添ふ。直助「牛は牛づれ、因果な奴們だ。」ト此の時ば

も程來のあるもんだ。」お袖「その樣にまで疑はしやんすなら、手にかけて下さんせ、父さんの爲にする事なら、君傾城もまゝある事。それとは是れも變らねど、私が心の貞節は、神より外に知らぬワイなア。」與茂七「ムウいつまで云つても同じ事だ。モウ可い、料簡せう。」お袖「それでお前は料簡しても、私はまだ料簡なりませぬ、私や父樣に此の樣に苦しませて、お前は榮耀にお山ぐるひ。ほんに私であつたからよけれ、外の女中ならどうさしやんすえ。」與茂七「どうと云うてどうするものか、高で買ひに來やせぬワイ。」お袖「それに又どうして爰へ。」與茂七「それは斯うだ、お屋敷者の地獄がある、年恰好も似より故、もしやと思うて來て見たのだ。」お袖「ア、口は重寶なものなア。」與茂七「そりやお互長左衛門だ、ハ、、、。」お袖「ホ、、、マア／＼久しぶりで逢うたゆゑ、水にながして下さんせいなア。」與茂七「そんなら互にこれ限りにして中直り。」ト四邊を見ると徳利と鉢肴のあるを見て、「幸ひ爰に酒肴媒介いらずの中直り。」お袖「それが眞の水いらず。」與茂七「オツト妙女夫だ。」ト酒出して茶椀につぎ、二人むつまじう飲んでゐる。ト暖簾口より直助窺ひ出て、此の體を見て吃驚し、直助「もし／＼御亭主御亭主、先刻にお松さんが預けた酒は何處にある／＼。」内にて「ハイ／＼。」ト宅悦出て來て、二人が飲んで居るを見て、宅悦「ヤアお袖さん、その酒は。」與茂七「爰にあつたからツイ飲んだ。」直助「ナニ飲んだえ。人の買つた酒を飲み、其の上女をつかまれて、先刻にから立聞けば、猫に鰹魚の名告りあひ、

座んす。」與茂七「嘘々、可愛い男のためで有らう。」お袖「そんなものは御座んせぬワイなア。」與茂七「なけりやア一寸男になりやせう。」ト寄る。ア、と突き退ける。お袖「其の様な事は。」ト忌がる。與茂七「ナニ其の樣な事は。この樣な事するから來たのだ、サア一寸手附を。」お袖「ア、申しどうも此の事ばかりは。」與茂七「そしてまァお前は何をしに來たのだ。」お袖「サア其の樣に仰しやると誠に辛いことでござりまするが、誰方にも言譯いうて唯歸つてお貰ひ申しまする。」與茂七「ソリヤ其方の勘定は可からうが、此方はつまらない。何でも。」ト又寄る。ア、と突き退ける。いろ〳〵あつて一寸追ひ廻し、行燈の風呂敷おちる、兩人顔見合はせて吃驚。與茂七「ヤア其方は。」お袖「おまへは。」與茂七「變つたなりで。」お袖「恥かしう御座りまする。」ト與茂七憮とした科。與茂七「ヤイ〳〵汝はマア、こりや何の態だ。」ト嚴と坐る。お袖面目なき科、合方。「汝に限つて此の樣な所爲はないと思ひの外、畜生の樣な根性。エ、見さげ果てたる女だなア。」お袖「もしこちの人、わけも聞かずに畜生とは。」與茂七「畜生であるまいか、此のざまは何だ。」お袖「サア譯を聞いて下さんせ。お前に離れて月日を送り。父さんの浪人に方便も細き煙の代、仕樣もやうも内證でこの生業、惡しう思うて下さんすな、誰に一度も終に帶解いた事は御座んせぬ、今現在のお前が證據。アレあの通りで御座んすワイなア。」與茂七「そりや今は成程堅い樣だが、コレ無理な客が有つて見ろ、どうされる事か知れぬ。今眼前に俺を見ろ、すんでの事で。危い事

せ。」與茂七「ハイ〳〵おゆるしなされまし。」ト與茂七うちへ入る。宅悦「これはお久しう御座りました。」與茂七「お前にもお變りなうて、ハ、、、。」お熊「こちの人、與茂七さんがあのお袖さんを呼んで、ひとつ飲まうと仰しやるので態々。」宅悦「ア、これ。お袖樣は奥に〳〵。」ト小聲にて奥をさしていふ。お熊「さうかえ、そんなら一寸さういうて。」ト與茂七と囁く。與茂七「ム、そんなら奥に來てるのか。」宅悦「ハイ左樣でござります。」與茂七「そりや妙だ。これしかし俺も屋敷出と聞いては、すこし差合もあるから、燈火は御免だ。」宅悦「そんなら行燈へ忍びの風呂敷かけて。」お熊「それがよう御座りますワイなア。」トあんどうへ風呂敷かける。宅悦「そんなら一寸ぬすみにして。」與茂七「地獄の廻しも珍らしい。」お熊「それも間夫の中ぢやワイなア。」與茂七「おそれたハ、、、。」宅悦「どりや一寸場合切つて。」ト宅悦お熊奥へ行く。あと合方になり、與茂七「何でも顔見ぬうちが山だ、後で吃驚するものだ。」トこの時お袖をお熊伴れて來て、手ばやく蒲團を布き、お熊「與茂七さん、それお娯しみ。」トお袖をさしつける。お袖「どなたか能うお出でなされました。」與茂七「誰だか、今宵は御苦勞で御座りやす。」お熊「たんまりとお話し。お袖さん、よい加減に奥の人へも。」お袖「アイ承知でござんす。」お熊「ドリヤ奥へ行て。」トお熊は入る。與茂七煙草の火でお袖の顔を見ようとして、無性に火皿を吹く。トヽむせて、與茂七「時にお前、屋敷ださうなが、どういふ譯で此の樣な勤めをしなさるえ。」お袖「どうというて父樣の爲で御

ら、隨分貸してあげようが、寧そ手短に遣らう、しかし其處が話だ。心中見せた儂がいふこと、それでも厭か得心せぬかえ。」ト懷中より財布の金を出して見せる。お袖「サア身貧にくらす父さんの、お爲になつて下さんすおまへの心中、事と品によつたらば。」直助「叶へてくれるか。」お袖「どういふものの張合で。」お袖「味にからんだ其の詞、こつちも心中見せませう。」ト財布を投げてやる。お袖取つて、
お袖「此の金を心中とはえ。」直助「こゝろおきなく遣ひなさいな。」お袖「かたじけなう御座んすワイな。」
直助「ア、金の光は偉いものだなア。」ト此の時奥より宅悦行燈を提げて出て來り、宅悦「コリヤお二人眞の話、ちやうど奥へ牀を敷いておきました。」直助「ソリヤお世話で御座りまする。サア奥で話さう。」
お袖「然うせうワイなア。」宅悦「お袖さん、おつれ申しておくれ。」お袖「アイ〳〵。」ト直助お袖おくへ入る。トこの時、時の鐘合方にて、向うよりお熊與茂七をつれて出て、花道にて、與茂七「コウお熊樣、いよ〳〵屋敷出の堅ざうか。」お熊「さうで御座んす、今會うたら直に知れる事でござんす。」與茂七「それもさうだ、逢はぬ中が山だ。」お熊「サアござんせ。」ト合方にて舞臺の門口へ來てつつと内へ入る。
宅悦見て、宅悦「手前もマアよい加減にもどらぬか、家にはお客がたんとあるし、大抵忙がしかつた事ぢやねえ。」お熊「サアわたしも早う戻る所を、アノ與茂七樣に逢うて、馬道の藤屋で久しぶりで御馳走になりやした。」宅悦「それは忝い、何處にお出でなさるな。」お熊「與茂七さん、お入りなされま

さん、おつう仕組んで來たらうに。」宅悦「そんならお客はお馴染か。」直助「五年このかたのお馴染さ。」お袖「恥かしうござんす。」トこなし。宅悦「ドリヤ燈の仕度でもしようか。」直助「お袖さん、以前の事は捨てて終うて、モウ斯うなつたら賣物買物と、サウいふと腹が立つであらうが、物は相談だ。お前の亭主の與茂七殿は行方知れず、此の間から聞けば、親の貧苦にお前の細腕、どの樣に稼いでも、稼ぐに追付く貧乏犬。轉び合ひの相談で儂とひとつに成つて見な、此の樣な見つともない事はさせぬ。とつくりとマア思案して見なせえ。」お袖「サア事を分けていうて下さんすりや、私も物を打明けて話しませう、聞いて下さんせ。日外の騷動より夫とは別れ〱、父樣は浪人、しやう模樣も內所で人の酌とり、酒の座の相手になるも親の爲、君傾城になど身を賣つてと思へど、堅い父樣の目顏を忍んで此の樣な形。侘びはすれど心は夫へ立つる貞心、終に一度も帶解かず。それ故態とうち明けて、來る客衆に譯いうて無心ばつかりいふ辛さ、道理に詰つて去ぬ人や、又腹立つて歸る人、みなそれ〲に交際うて、勤むる胸の苦しさは、熱湯を飮むやうぢやワイなア。」トほろりとする科。直助もしをれて、直助「イヤさう段々と聞けば悲しくなる、木折で行かぬが戀の道、その道筋も樣子を聞けば忘れて仕舞うたゝ併し私も男だ、今お前が難儀の事を聞き、又見ず知らずの者でも、金を貸してくれる程だものを、況して以前の好みのお前、幸ひこゝに賣溜の、親方へ納める金が十兩ある。お前の心さへ解つた

ておくれ。」お松「合點で御座んす、サア〱かうお出で。」ト舞臺の門口へ來り、「宅悅樣、お客をつれて來ました。」宅悅「アイ〱そりやァお世話でございました。サア〱お入りなされませ。」直助「ハイ御免なさい、どうぞ灸點おろして下さりませ。」トいひながら直助入る。お松「此のお客はわたしが心易いお方、どうぞお袖樣に灸をすゑさせておくれよ。」宅悅「オット承知々々〱、お前歸りがけに一寸お袖さんを呼んで下さりませ。」お松「アイ〱、直助さん待つてお出でよ、どりや往てこうか。」直助、宅悅「これはお世話で御座りました。」トテンツ、になり、お松下手へ入る。宅悅「サアもし今にお袖さんが來るから、奧の座敷でお待ちなされまし。奧は人目立たぬ故奇妙でござりまする。」直助「そんならさうしませう、待つ中が花だ。」宅悅「それからお出でなされませ。」直助「オイ〱。」ト唄になり奧へ入る。ト橋がゝりより三ツ大の調市、以前の形にて御用徳利と、鉢肴をもつて出て來て、調市「御めんなされませ、これはお松さんが、こゝの家へ持つて來て置いてくれろといひなすつた故、置いて下さいまし。」宅悅「そんなら其處へおいて行てくんなさい。」調市「ハイ〱。」ト下手へ入る。ト入れ替つて橋がゝりよりお袖出て、お袖「おゆるしなされませ。」ト內へ入る。宅悅見て、宅悅「ヤァお袖さん、ようお出でぢや、今お客が來て奧で待つてお出でだ。申しお客さん、お袖さんがお出ででござりまする。」直助「アイアイ。」ト合方になり、おくより直助出て來て顏見合はせ、お袖「ヤァおまへは直助さん。」直助「お袖

ぬが、私が家へ來る子に、屋敷出の地獄があるぞえ。」與茂七「ナニ屋敷出、其奴は妙だ。御殿女中の樣
屋、圍はれの多い所だの。何ぞ面白い可笑しい事はないかの。」お熊「イ、エ別に面白い事もござんせ
か。」お熊「さうではないが、固い娘で滅多に帶は解かぬといふ評判ぢや。」與茂七「其の堅い所が賞翫
だ、そいつは今から買はれまいかな。」お熊「買はれる段かいなア、ツイ私が近所藪の内の法華寺の鄰
だ。」與茂七「ソリヤ妙法蓮華經だ。」お熊「直に法華でお洒落だな。」與茂七「ホンニ法華の幸ひだ、これか
ら直に。とはいへ今の印鑑を。」お熊「ナニ今のやうかんとは。」與茂七「すんでのところで取られる所。」
お熊「あの晝とんびが。」與茂七「エ、間違ひきつて居らア、ハ、、、。」お熊「サア行きませうか。」ト辻打
にて兩人連立ち上の方へ入る。時の鐘にて此の道具かへし。

造物、三間の二重舞臺、向う鼠壁、眞中に暖簾口、上の方に一間の障子家體、下の方藪疊、いつもの所に門口を
たて、これに灸點所と書いた看板を出し、爰に按摩の宅悦、捨白にて茶を沸し居る、テンツ、にて道具とまる。

宅悦「ヤレ〳〵今日は灸點の忙しない日ぢや、それにマアお熊は何をしてゐるか、早く戻らいで茶ま
で沸しておかねばならぬ、馬鹿々々しい。」ト此の時テンツ、にて茶店の女房お松先に立ち、あとより
磨摩賣直助、羽織著流しの形に著替へ出て來て、直助「コレお松さん、どうぞお前の働きで、呼んで來

ふ科。庄三郎「へイ／＼有り難う御座ります。ドリヤ竝木の方へ行かうか。」ト下座へ入る。扇彌「エ、これ折角詮議のあるアノ非人奴を。」與茂七「エ、モ非人を捉へて詮議もなるまい、御人體が廢ります、ハハ、、。」喜兵衞「役にも立たぬ事で大分手間どつた、扇彌老、巴屋へ參つて支度致さう、サ、來やれ來やれ。」扇彌「左樣致さう、今の紛擾で腹が減つたに、乞食かつたると棒打ぢや、ハ、、、。」お槙「サア參りませう、今の騷ぎで戀しいお方を。」お梅「あはれぬといふ緣であらうか。」トお梅一寸悄るゝ科。喜兵衞「氣の小さい、また逢はれるワさ。」扇彌「サアお出でなされまし。」ト大拍子にて下座へ入る。この時與茂七楊枝店に腰かけてゐて皆々を見送り、與茂七「ア、これあぶない事で四座の印鑑、弟が。」ト思入あつて、「日外お家騷動より別れ／＼の女房お袖、舅左門殿方へ預けおき、われはそれより重器の詮議、今に手がゝり相知れず。樣子を聞けばお袖は此の寺內に雇はれ、そこゝに暮すとの事、どうぞ逢うて何かの話を。何卒よい傳手がありさうなものぢやが。」ト思案の所へ、上手より灸點屋の女房お熊出て來て、與茂七を見て、お熊「ヤアお前は與茂七樣、遠い所を觀音さまへお參りかな。」與茂七「オ、お熊樣、山の手に居たときは近所故、よう逢ひましたが、此の淺草へ宿替して御座つたと聞いたが、この近所か。」お熊「サアだん／＼の不仕合で、いま此の馬道の藪の內、灸點屋をして居るワイなア。」與茂七「そりや知らぬ事だの。オ、時におまへ、この近所の事はよく知つてであらう、此の邊は全地獄

家斷絶を根に持つて、當家の能の妨げ致す意であらう。コリヤやい此の度の會は、鹽冶家で勤むべき筈なれど、大切なる墨蹟の一軸、紛失致せし失策により家退轉させ、浪人扶持ばなれ、要らざる事を問立して小癪な奴の。」扇彌「かういふ奴はいつそ斯う。」ト蒐るを庄三郎一寸立廻り、庄三郎「非人と思うてほて惡戲、さう手籠にもなりますまい。」扇彌「何を汝が。」ト立廻りの中、庄三郎懷中より印鑑を隕す。扇彌手早く取つて、「ナニ四座の印鑑、扠は。」ト逸散に驅け出す、庄三郎も續いて追ひ行く、神樂になる。向うより與茂七、小間物屋の扮裝、荷箱を脊負ひ出て來て、此の體を見て扇彌の持つてゐる印鑑を取り上げ、突き廻して舞臺へ來る。「コリヤ〳〵町人、わりや何で非人の肩もつ。」ト庄三郎與茂七と顏見あはせ、互に知らぬ振をして、與茂七「コリヤ知らぬ非人なア。サア知らぬ非人なれば何の贔屓致しませう。」扇彌「又何で印鑑を取つたのだ。」與茂七「ナニ印鑑を、そんな物は存じませぬ、唯今のはアリヤ鼻紙でござりまする。それ御らうじ、鼻紙でござりまする。」ト出して見せる。扇彌「なんでも怪しい彼の非人め。」ト蒐らうとするを與茂七とめて、與茂七「ア、申しこの非人は氣ちがひで御座りまするナ。狂人ぢや〳〵。」ト庄三郎の方へ目配でいふ。庄三郎のみ込むこなし。「サア其の氣ちがひを捕へて、とやかう仰しやるお醫者樣もどうやら。」扇彌「なんだ。」與茂七「狂人の樣なお方でござりますぞえ。ソレ非人殿も斯ういふ所にうろつかずと、ちやつと外を稼ぐがよい。」ト庄三郎に早う行けとい

入る。伊右衞門跡見送り無念の科あつて、伊右「どうで一應では行かぬ老耄、殊に大事を知つたる奴、あの樣子ではとてもお岩は戻しはせまい。寧その事に手短に、歸る道筋大川端、先へ廻つて、ソレ。」ト引きからげ逸散に向うへ走り入る。上手より喜兵衞娘お梅、乳母醫者みな〳〵出て來て、喜兵衞「娘あの人か。人品骨柄一器量ある男、あの人ならば隨分壻に。」ト思入。「しかしながら、妻のある身はハテ何とも。」お梅「イ、エたとひお家さんがあつたてて、あのお方ならでは。」ト思入あつて、喜兵衞「添はぬ心か。」お梅「アイ。」お槇「御病氣のもとも此の事で御座りまする。」喜兵衞「ムウ今一度逢ひたいものぢや、汝も見たいか。」お梅「アイ。」ト恥かしきこなし。喜兵衞「俺も見たいワ、ドレ。」ト皆々行きかゝる。

ト下座より奥田庄三郎、非人の拵へにて出で來りて、庄三郎「ハイ結構なお旦那樣、どうぞ御報謝をお願ひ申しまする。」喜兵衞「オ、非人か、手の裏をくれう、ソレ取らして遣はせ。」扇彌「サア戴け。」と錢を出してやるト、庄三郎「ハイ〳〵有り難う御座りまする。旦那はかう見受けまする所が、あなたは師直樣の御家中と存じまする。近々お歌の會が御座りますと承りましたが、何日頃でござりまする。」喜兵衞「ムウ此の非人は異な事を尋ねる、尤もお上より仰付けられしお歌の會はある筈なれど、非人の身としてそれを聞いて何に致す。」庄三郎「サアそれは。何でござりまする、御祝儀に參らうと存じまして。」喜兵衞「それで尋ねるのか、イヤ〳〵左樣ばかりでない、察する所、鹽冶家の浪人者と覺えたり。」

門殿と申し合はせ、穩便には濟ませども濟み難ないは胸の裏。照月の一軸、まつた印鑑とても紛失、預り主の大星瀬左衞門殿を害し、奪ひ取つたる曲者いまだ相分らず。二つには御敕使饗應の茶の湯の折から、刷毛目の茶椀も行方しれねば、親子兄弟とて迂闊にならぬ此度の大事。御家再興を願ふ此の左門、滅多に縁は結ばぬて。」伊右「イヤ左門殿、味な物のいひやう召さるが、重器が紛失して金がない、瀬左衞門殿を害せし者が知れぬと、何ぞかう拙者が存じたやうな物のいひ方、まだ壻にしたる此の伊右衞門が心は知れませぬかな。」左門「知れぬ／＼、ずんど知れぬ。」伊右「ナゼ知れぬ。」左門「ハテお身にも疑ひ懸りあるワエ。」伊右「默れ左門、何で此の伊右衞門に疑ひがあるのだ。餘りずはう／＼と物をいはつしやるな、疑ひかゝる證據があるか。あるなら爰へ出せ。」左門「ハ丶丶、盗人たけ／＼しいと。こりや假にも親子となつたる故な、つゝみ匿すは武士のなさけ、理非を曲げて計らうておいたワやい。」伊右「そりや何を。」左門「さいつ頃、娘お岩方へ遣はせし結納の金子、封のまゝさし置きしに、計らず封を切つて見れば殿の極印。」伊右「ヤア。」ト愕りする。左門「汝が親の民谷兵部は、心よからぬ者ゆゑ、親子は一體惡事の取沙汰、なんと壻には致されまい。それ故今日の禮は又重ねて。」ト行かうとするを引きとめて、伊右「それゆゑ身共を離縁したか。」左門「如何にも。渇しても盗泉の水は通さぬワエ。」伊右「すりやどうあつても。」左門「四谷左門は武士だワやい。」トふり切り、唄になり花道へ

るまいな。」非人△「イヤモウ何にも申しませぬ。」非人皆々「有り難うござりまする。」伊右「禮には及ばぬ、早ううせう。」非人皆々「ハイ〳〵結構な旦那ぢやなア。」ト非人みな〳〵下座へ逃げて入る。左門迷惑の科にて、左門「これは〳〵急難を救ひ下され忝い、お禮は追つて、又重ねてお目にかゝらう。」ト行きかゝらうとするを伊右衛門とめて、伊右「アイヤ暫くお待ちなされませ。」左門「イヤ心も急けば唯今の金子は明日返濟まうす、お禮は其の節。」伊右「イヤ親人お待ちなされ、親子の間に何の一禮、唯今のはほんの寸志、必ずお禮には及びませぬ。」左門「サ、其のやうに親子といはるゝが忌さに、禮は重ねて。」伊右「禮には及ばぬ、伊右衛門が申す事、一通りお聞きなされて下されぬか。」左門「サアいふ事も聞く事も最早ない。お岩を遣はしたればこそ聟舅、娘を取り返した上からは他人、用事はない筈。」伊右「イヤ用事が御座る、どうぞお岩をかへして下されぬか。」左門「ムウ。」トあひ方になり、伊右「左門殿、この伊右衛門にお岩を遣はされてより睦まじう暮し、厭きも厭かれもせぬ間を、如何な御所存かは存ぜぬが、取り戻して其の上に、拙者を騙り去狀取り、それもお家騒動故、事納まり次第、又々お岩は戻さんと、ぬつぺりとした虚言に乘り今での後悔、どうぞお約束の通り、緣ござるならお岩はお戻し下されぬか。」左門「イヤそりやならぬ。」伊右「なぜなりませぬ。」左門「ハテ先だつてお家騒動の砌、御用金數多紛失。其の盜賊も大概知れてはあれど、かかる節に事荒だてたるとて詮ない事と、鄕右衛

はりに店でも片づけうか。」ト茶店へ入る。大拍子になり、向うより四谷左門、浪人者の拵へにて編笠を手に持ち出る。ト是れを非人大勢して左門を引張り、挑み合うて出る。非人大勢「料簡ならぬ〳〵。」

非人△「なんで俺們が場所を荒して歩行くのぢや。」左門「イヤ〳〵今日はじめて參つた者、料簡して下され。」非人皆々「ならぬ〳〵、引きずつて行け〳〵。」ト大拍子にて舞臺へ來る。このあとより民谷伊右衛門浪人のこしらへ、五十日羽織大小にて樣子窺ひながら跟いて來て、舞臺の下のはうに候ひ居る。

非人大勢「サア〳〵譯をつけろ〳〵。」左門「イヤ〳〵其のやうに申されな、浪人の身のたつきなく、據なく今日始めて此の所へ參り、報捨袖乞いたし、未だ一錢も貰ひは致さぬ。胡亂に思はば改めて見やれ。」非人□「喧しいワエ。新米乞食の癖に、何だ一文も貰はぬ。謔をつく奴だ。此の上は汝が身ぐるめ剝いで腹を癒るのぢや。」左門「これは聞きわけのない、衣服を剝ぎ奪らうとは、畢竟盜賊の沙汰であらうぞ。」非人○「乞食侍の癖に大風な奴だ、擲きのめせ。」非人皆々「合點だ。」ト左門を手籠にかゝる所を、後より民谷伊右衛門中へ入りとめて、伊右「こりや〳〵まて〳〵、身共が挨拶ぢや待て〳〵。」ト左門此の時伊右衛門と顏見合はせ面目なき科。「まづ〳〵。」ト左門を上手へ押しやり、「コリヤ非人ども、これなるお侍は身共と熟懇の人、なか〳〵手の內など請ふ人でない、なれども差しかゝつた凶事。ソレ洒手にしやれ。」ト包金投げてやる。非人取つて、非人△「ヤアこりやお金ぢや。」伊右「いひ分はあ

調市「ハイ〱酒を持つて來ませうかな。」直助「オイお松さん、お前案内しておくれ。おれは〇印だ〇印だ。」お松「何の禮はいらぬが、わたし連れて往てあげうか。」直助「有りがてえ。時に一寸一口飲まぬと話が出來ない。酒屋、これ一升持つて來い。」調市「ハイ〱こゝへ持つて來ますのか。」直助「ナニここぢやない、お松さん教へてやんナ。」お松「これサ藪のうちの三軒目の家へ。」調市「エ、あの地獄の看板の出た家かえ。」直助「コレ〱お松さん、地獄にも看板があるか。」お松「ナニお前そこにや看板があるものか。」調市「それでも閻魔さまが灸をすゑて居る看板だ。」お松「エ、其のはずさ、家は灸點屋ぢやもの。」直助「とんだ間ちがひ、地獄の看板もあるめえ。」調市「それでも閻魔樣が、それ〱お前の顏に似て居る〱。」直助「此の調市は色々な事をいふ奴だ、うぬ見ろ。」調市「ハ、、、はらたち花だ〱。」ト下座へ逃げて入る。直助「いま〱しい調市めだ。ときに往かうか。」お松「よからうけれど夕方から晩の事が可いぢやないかえ。」直助「なる程、晝の地獄も殘念、そんなら晩方から。」お松「私が案内して藪の家へ。」直助「竹子掘りに。」お松「行くのかえ。」直助「ハ、、、まだ間もある、是れから風呂へでも入つて衣裝を著かへ、商賣物の齒磨で。」お松「やつしたが可いワイなア。」直助「そんなら必ずお松さん晩には又一時の榮華に、千年をのびる其の意で。」お松「それも壽命の。」直助「藥齒磨。」ト賣りながら辻打にて下座へ入る。お松「まづ晩には直助さんを伴れて行くと、はねにはなるといふものぢや。それを

の様に流浪しても與茂七といふ夫もあり、それに何ぢや、いふ事を諾いてくれいの、又女房になつてと、あた厭らしい口惜しい、モウ此の後聞きともないワイな。」直助「ハヽヽ、お前そのやうに云つても、與茂七は大切な照月の一軸を失うた越度にて、鹽冶家其の外一家中皆騒動の其の元は、預り主たる大星瀬左衛門殿の大失策。寳紛失なしたれば、手に入るまでは行方知れず、今頃はのたれ死でもしてゐるだらう。それを守つて居るは、多い長才坊だ、ハヽヽ。」お袖「エヽ憎らしい、其の様にいふ程厭さが増すワイなア。」ト振切り行くを、直助「そんならどうでも。」お袖「知らんワイなア。」ト振りきり辻打にて上手へ入る。跡輕業の合方になる。直助「なるほど、以前に變らぬ片意地な女だ、どうぞして手に入れたいものだ。」ト思案のこなしあり。下座より茶店の女房お松出て、お松「直助さん、最前から様子は聞いたが、お前あのお袖さんによつぽど北山時雨ぢやなア。」直助「面目ないも古いやつよ。」お松「おまへもマアあの子なら彼のやうに骨を折る事はないワイなア。」直助「そりやお松さん、どういふわけだ。」お松「お知りでないか、あの子は地獄に出るよ。」直助「エ、そんならあの地獄に出るか。」お松「出るだんかい。」直助「ムウほんのこれが地獄でほとけぢや、エ、有り難い、そして宿はどこだ。」お松「アノ藪の中の細道よ。」直助「しんとして味い所だ、是れから直に行かうワイ。」ト此のとき輕業の鳴物にて花道より酒屋御用調市出て來り、調市「三ツ大御用々々。」直助「これ〳〵酒屋々々待て〳〵。」

御挨拶に憚りながら差出ましたので御座りまする。何卒御料簡下さりませ。」喜兵衛「ム、見れば小商人齒磨賣、なる程汝が申す通り、高が女の事取るに足らず。如何にも汝に免じて料簡致して遣はさう。」直助「それは有り難うござりまする。これお袖樣、モウ何もいひなさんな、コリヤお侍樣、有り難うござりまする。」喜兵衛「何の〱、思はぬ事に手間どり。サア娘、扇彌老、參詣致さう。」お梅「それが宜しうござりませう、そんなら扇彌さん、乳母。」扇彌「サアお參りなされまし。とはいへ憎い。」ト意氣ごむ。直助一寸とめて、直助「マアお出でなされまし。」ト大拍子になり、喜兵衛、お梅、お槇、扇彌上の方へ入る。直助あと見送り科ある。お袖前へ出て、お袖「直助さん、大きにお世話でござんしたなア。」直助「何のお前。併しお袖さん、お前も又よい加減に邸質氣を捨てたがいい。昔は昔今は今、長刀さへも菜刀に變りはてるが世の盛衰。以前は鹽谷の御家中で、人も知つたる四谷左門、その娘御のお袖さん、佐藤與茂七といふ壻のあるも合點。私も又大星瀬左衞門殿に仕へた仲間直助が、今は憂世を流し賣、齒磨商ふ松谷權兵衛と、香具仲間で知られたる、匂ひの高い代物だ、此の間からとやかうと、いへど少しも取上げて、くれぬ心の意氣張に、猶々思ひが。」トちよと思入。「萬更憎くはあるめえが。」トいふを無言にて上手へ行かうとする。直助とめて、「コレお袖さん、挨拶なしにふい德寺は、扨はお氣に入らず汁、二日醉のお腹立を治しておくれ、どうだ〱。」お袖「いかに此の身が零落れて、此

喜兵衛「そなたは確かに四谷左門が娘でないか。」 お袖「伊藤喜兵衛樣、お久しう御座りまする。」ト合方になる。 喜兵衛「ム、世の盛衰とは申しながら、以前は同家中であつたが、そもじの親四谷左門と身共とは同役、仔細あつて鹽冶家を見限り、今では師直樣へ仕官の身の上、知行も以前に倍增しで何不自由なき此の喜兵衛。それに引きかへ其方が親左門は、要らざる主人へ忠義立して、今では鹽冶家斷絶同前、其の尾に連なる素浪人、寄る所なく一文商ひ、ハテ笑止千萬な儀ぢやてなア。」 扇彌「左樣々々、左右當世は名を取らうよりは德を取れぢや。時の畫を書かぬは大損、喜兵衛樣にお願ひ申して、野官蘭の一本も餘計買うてお貰ひ申せ、ハテお買ひなされて遣はされい。」 お袖「ハイ有り難うござりますれど、身貧に暮すも人の成行き、たとひ何の樣な德があつたればとて、神は非禮を享けぬとやら、マア貴方には此の楊枝は、ヨウ賣りませぬワイなア。」 喜兵衛「ハ、、、貧乏神の瘠我慢と。賣らぬとあらば強ひては求めぬ。」ト憮とした思入にて、「ナニ女の小差出た、猪口才な事を。」 お袖「外をお尋ねなされませ。」トつんとして振りむく。 喜兵衛「何と致した、今一言いうて見をらう、女とはいはせぬぞ。」ト立ちかゝりし所を、直助見かねて間へ入り、 直助「ア、お侍樣、暫くお待ち下されまし、いやモウ段々の樣子はあれにて承りましたが、お腹の立つは御尤もながら、何を申すも女のこと、御料簡なされて下さりませ。私も同じ仲間の齒磨賣、まんざら楊枝屋とのいた中でもござりませぬ、それ故一寸

るか。」喜兵衞「オ、扇彌老か、貴公も參詣かな。」扇彌「左樣でござりまする、私も貴方が御參りなら御供致しますものを、ハ、、、、。併しこゝで遇うたが天の與へ、お歸りは竝木の巴屋で、腰の立たぬ程やりかけませう。」お槇「扇彌さんは酒の事ばかりいうてぢや。」喜兵衞「ハ、、、左右酒好きは飲む事ばかりぢやて。」扇彌「イヤモウ唐の元之山も、酒を百藥の長と賞美致しましたて。」喜兵衞「イヤ、でも范魯公は酒をさして狂藥なりと惡まれたではないか。」扇彌「これは閉口、旦那とかく唐を用ゐて弱らせる、ハ、、、。」ト此の時辻打になり、向うより直助權兵衞木綿やつし脚絆にて、齒磨の提箱を持ち出てきたり、花道にて、直助「やれ〳〵今日は薩張商ひのない日だ。自暴から矢大臣門の田樂で一杯やらかさう。ドリヤ裏門へ往かうか。」ト右の鳴物にて舞臺へ來る。茶店のお松見つけて、お松「直助さん、今日は早うまはらしやんしたなア。」直助「何さ商ひの少ない所から、早々と流して來やした。」ときにお松さん、鄰のお袖さんは健かの。」お松「アイ隨分しやれてお暮しだよ。」直助「さうだらう、美しい代物と譽めるも野暮だが、また憎くない姿だなウ。」お松「甚うおはまりだねえ。」直助「イヤモウ何といはれても彼の娘のことならだ、ハ、、、。」喜兵衞「ヤ娘、土產には幸ひのあの楊枝齒磨、もとめて參らうではないか。」お梅「それが宜しう御座りまする。」お槇「どれなとお氣に入つたのをお取りなされませ。」喜兵衞「サア〳〵見やれ〳〵。」トみせにある楊枝見るとてお袖と顏見合はせ、お袖「ヤアあなたは。」

へ、袴羽織大小にて、後より娘お梅振袖姿にて、次に乳母お槇ついて出て來て、花道よき所に立ちどまり、喜兵衛「こりや娘、どうぢや、今日は大分顏色もよい樣ぢやが、氣持は何とぢや。」お梅「ハイ有り難うござりまする、今日は少し宜しうござりまする。」お槇「左樣でござりまする、唯ものをお案じなされまするが御病氣でござりまする故、今日は觀音さまへ參詣遊ばし、少しは浮々となされましたで御座りませうなア。」喜兵衛「イヤモウ親が申すは異なものながら、祕藏娘の其方、隨分氣はうじして病氣の重らぬ樣にしてくりやれ。又汝が思ふ人も、品に依つてはあはして。」ト思入あつて、「ハ、、、何をいふにも獨身者でないゆゑに、當惑ぢやて。」お梅「サアそれ故わたしも案じ過して心も空。」お槇「アア申し、どう致したもので御座りまする。旦那樣も承知の事なら、マア／＼緣と時節をお待ちなされませ、又よい傳手も御座りまする。サア／＼あの仲店で人形なとお求め遊ばし、お慰みなされませ。」喜兵衛「それがよい／＼、何なりと望みにまかす、先づ堂へまゐつて來ようか。」お梅「それが宜しうござりまする、そんなら父さん、乳母も來や。」お槇「サアお歩ひなされませ、」ト大拍子にて舞臺へ來る。喜兵衛「暫時これにて休んで參らう。」お梅「左樣になされませ。」お槇「女中さんお茶をあけて下さんせ。」お松「ハイ／＼。」ト茶を汲んで來る。皆々呑み休んでゐると、上の方より醫者市ヶ谷扇彌、藥罐天窗にて出て來り、舞臺の喜兵衛親子を見て、扇彌「これは旦那、御寮人さま、御一緒で御參詣でござります

の見せ物に地獄があつた。」地廻□「ア、これ〳〵見せ物ぢやない、不粋な、ふせ物のさせ物ぢや〳〵。」上方者「そんなら密ぢやな。」皆々「こそとは。」上方者「こつそりと姫を賣る家ぢや。」地廻△「さうよ、此方の地獄も地者の極上を内々賣るから地獄さア。」上方者「分つた〳〵。併しそれも地獄の沙汰も金次第ぢや。」地廻□「その金がないゆゑ火の車ぢや。」皆々「違ひないハ、、、。」お松「もし〳〵誰方も今お話の地獄は如何でござりますな。」地廻△「俺はこの寺内では顔が悪いから賣らねえのさ。」上方者「この寺内にもあるかな。」地廻□「イヤモウ有る段ぢやない、べた地獄ぢや。」上方者「コリヤ笑しい、佛の寺内に地獄があるとは大津繪を賣る店の樣ぢや。」地廻△「ごたまぜだね。」皆々「ハ、、、。」ト此の時大拍子にて上の方よりお袖世話女房、前垂がけ、楊枝店の女房の拵へにて出て店へ來り、お袖「お松樣、お有り難う、よう見て居て下さんしたえ。」お松「オヤお袖さん、一寸というて澤山手間を取らしやんしたなア、怪しいぞえ。」お袖「ナニお前、私のやうなものに誰が。」お松「ようあつたぞ。」ト白の中お袖は店へ上り、楊枝をもんで居る。地廻□「何と皆の衆見なされたか、あの女中が今の地獄ぢやて。」上方者「ヤア地獄どころか、眞の如意輪觀音ぢや、しかし心は鬼であらう。」皆々「ハ、、、。」地廻△「サア閻魔堂へいつて大念佛を遣らかさう。」地廻□「それが可い〳〵。」上方者「ドリヤ俺も一緒に往きませう。」地廻△「サア〳〵來なせえ。」ト大拍子にて上手へ入る。ト此の時鳴物にて向うより伊藤喜多衞、ふけたる侍のこしら

名

一宅悦女房お熊　中山文五郎　一ばゝお熊　中村東藏
一赤坂傳藏　尾上多見藏　一うばお槇　嵐かなふ
一伊藤喜兵衛　淺尾國五郎　一與茂七女房お袖　中村富十郎
一伊右衛門女房お岩　尾上菊五郎　一小佛小兵衛　尾上菊五郎
一佐藤與茂七　尾上菊五郎

造物本舞臺三間の間、向う淺葱幕、上の方二王門の半分を見せ出入あり、其の傍に楊枝店のかゝりいろ〳〵、楊枝歯みがきなど竝べある。下の方には出茶屋のかゝり、葭簀の見切、舞臺牀几二三脚すゑ、仕出こしかけ茶を飲んで居る。茶店の女房お松、前垂掛にて茶を汲んで居る。都て淺草寺内の模樣よろしく、三味線入の大拍子にて賑やかに幕明く。

ト仕出參詣のこしらへにて行きちがひゆく。

上方者「ナント皆の衆、いつも〳〵觀音樣は日本一、賑しいぢやないかいの。」地廻△「そりやァおめへ、京大坂にも此のやうな寺内はないネ。」地廻□「さうぢやさうぢや、毎年秋の四萬六千日の日には、賽錢ばかり一日に千兩づゝ上るて、何と素敵な賽錢だらう。」

上方者「それも偉いが、また伊勢の山田で淺間の萬金丹と、壺屋の煙草入は大晦日一日に千兩づゝの商ひがあるさうぢや。これもどえらいぢやないか。」地廻△「なんと其の商ひを一日賣取にしたいものだ。」

地廻□「慾ばつた人だ。」皆々「ハヽヽヽ。」地廻△「ときにお前は上方の人だが、大坂にも地獄はあるか。」

上方者「何ぢや地獄ぢや、なんぼ大坂は廣いというても、地獄といふはないが、七八年も先、難波新地

いろは假名四谷怪談

作者　鶴屋南北

序幕

淺草寺内の場
按摩宅悦内の場
大川端の場

役人替

一小鹽田又之丞	嵐璃寛
一三ツ大でつち	中村駒之助
一喜兵衛娘お梅	中村梅花
一あんま宅悦	尾上傳三郎
一四谷左門	市川助十郎
一關口官藏	大谷門藏
一喜兵衛女房お弓	嵐璃光
一直助權兵衛	中村芝翫
一齒磨賣德兵衛	市川瀧四郎
一茶店おまつ	瀨川路之助
一小兵衛子治郎吉	嵐三津橋
一小兵衛女房お花	岩井紫若
一下女お才	中村歌門
一秋山長藏	中村蘭九郎
一醫扇彌	中村友三
一佛孫兵衛	淺尾工左衛門
一民谷伊右衛門	市川海老藏
一奥田庄三郎	尾上松助
一同行作兵衛	中村津多右衛門
一非人ちだんだの龜	中村芝藏

いろは假名四谷怪談

鶴屋南北

イヤ〳〵、妹櫻姫と云ひ合はせ人にいひつけ、刃にかけ、殺せし恨みを報ぜんと、御身が大望業通にて、知つたる故に妨げなし、楊柳笛も自らが。」松若「ヤア、その詞にて是非はともあれ、大望挫きし憎き亡者め、この松若が一睨みに。」清玄「愚かなことを。」つな「成佛あれ。」鬼藤「ソレ、松若めを。」

皆々「やらぬワ。」

「やらじと此方も立ちかゝるを、ひらりと見せし刀の稲妻、ひら〳〵〳〵と業通の、破戒の罪のあさましや、水責め火責め三十六度、等活地獄は一萬由旬、眞逆さまに遠近の、奈落へともに連れ行かん、こがるゝ焔に嗔恚の炎、吐く息猛火を吹き來る、筑波颪のとう〳〵〳〵、隅田の川波さら〳〵〳〵、さらに浮む瀬亡き魂も、解脱の雲に法の道、清玄あらしと橘の、櫓にその名殘りけり。

トこの文句にてよろしくあつて、トゞ眞中岩臺の上に、清玄、櫻の枝を持ちて立身、松若同じく岩臺の上に白刃を構へ差寄せ、上の方に綱女、下の方に鬼藤太詰め寄せ、八人は棹に竝び取巻く。

皆々「ドッコイ、」ト見得よろしく、松若「まづ今日はこれぎり。」打出し。とろん〳〵とん〳〵。

隅田川花御所染 終

「戀の譯知り鴛鴦の衾の、比翼枕で中も嬉しき二人寐色の媒、鹿の巻筆、ちよつと文して、何時と逢瀬を知らせ參らせ、それでほんに濡れた、一ィ二ゥ三ィ四ゥ、夜つゆ雪にも忍び通うて、二世も三世も變るまいぞと、起請誓紙は誰が水さすと、おもひ斷らぬが眞實の。「誠や譃といふ事も、知らで過ぎにしなか〳〵に、見てあこがれて、くよ〳〵と、まよひの種は松若さん、エ、妬ましや櫻姫、妹ながらも現在の、惚れた殿御をむつまじう、添はせてよそに三瀨川、胸に漲る思ひの淵、淺いは緣、深いは怨み、怨みは人をも世をも思ひ思はず、唯その人こそ憎し辛し、情ないぞと夕影に、立變りたる怒りの形相、凄まじくも又恐ろしし。

ト引拔にて火炎の形になる、鬘は變つて立ち上る。大ドロ〳〵、皆々おもひいれ。松若「最前といひ今といひ合點行かざる女が有りさま。」鬼藤「そも先づうぬは。」皆々「何奴だエ、。」ト鼓唄になる、寐鳥のあしらひ。

「なう怨めしや我はこれ。

清玄「御身が非道の刃に懸り、この世を去りし清玄尼、これまで浮れ來りしぞや。」ト薄ドロ〳〵。

「清淨觀に入りながら、戀慕の雲の立覆ひ、暗き闇路に迷ふなる。

松若「ハテ、心得ぬこの松若、おことをなにしに害さんや。」つな「すりやァノ、あなたの。」清玄「イヤ

り、松若、鐘の側へ行かうとするを、皆々遁すまいと支へる。松若、鐘の綱を持つ。皆々、「アリャアリャ。」の聲、鐘の音凄まじく、「あれ見よ蛇體は現はれたり。」ト焰硝火夥しく立つて、松若、鐘を引上げる。ト内より清玄尼の亡魂、道成寺の形にて薄衣を擔ぎ、鐵杖を持ち出て來り。本行の通りの鳴物にて、清玄花道へ行く、皆々跡より附いて來る。松若これを見て立ちかゝるを、綱女ぢつと押へて居る。鬼藤太詰め寄る。此のうち清玄、いろ〳〵あつて、好き所まで行き、下に居る。皆々「ウヌ」ト立ちかゝる。清玄すつくと立ち上る。この時薄衣を撥ね退け、衣裳引拔にて派手なる振袖娘の形にて、持つたる鐵杖仕かけにて櫻になり、清玄これを翳し、振袖を顏へ當てる。ト鐘に怨みのやうなる淨瑠璃になる。

「花と鐘とは怨みて暮す、咲いて最中を知りもせで、あだに入相つきやるで散らす、これが怨みぢやあるまいか。

ト文句のうち花道より振にて皆々を追ひ戻しながら舞臺へ來り、千鳥になり、松若、「ウヌ。」ト拔きかける。清玄皆々を櫻にて打ち、構はず。松若が胸倉を執る。八人見事に宙返りする。直に淨瑠璃。

「今更云ふに效も無き、緣を結ぶの神さんが、聞えぬ胸を幾度か、女心は辛氣なものぢやえ。

トこれより毬唄にて立廻り。

て。」ト指にて卦を立つる思入。また浄瑠璃。

「人目の關にわしや腰車、ほんに冷たい膝車、火澤睽々は背なり、二人寝るのが山下風。

松若「志相得ず、爲す事違ふと、オ、、、、。」ト思入。

「柔で投げの。

松若「すりや、大望も徒らに、今の亡者に、エ、〳〵〳〵。」ト無念の思入。

「情知り。

松若「残念な。」トたぢ〳〵となる。鬼藤太を見事に投げ退け、きつと見得。これをきつかけに、ドンドン烈しく、向うより北條の家來寺島村助、請地の畑平、潮入船藏、尾久の里助、綾瀬の川平、荒木田土藏、洲崎の道すぢ、牛田の土手平、いづれも目立つ程なる破れ鱗の四天、鋲打の白鉢巻、胸當、手甲、脚當にて逸散に走り出で來り、すぐに舞臺へ來り、吉田の松若ぶつちめんと、北條が手の者寺島村助。」　畑平「請地の畑平。」　船藏「潮入船藏。」　里助「尾久の里助。」　川平「綾瀬の川平。」　土藏「荒木田土藏。」　道筋「洲崎の道すぢ。」　土手「さてどんじりは牛田の土手平、松若縄に。」　八人「か丶れエ、。」

松若「ハ、、、水覆つて隅田川原の眞砂の數は盡くるとも、われらが刃の立つ松若ならず。それより亡者があの名笛。」　つな「取隠せしは、何か仔細の有明の。」　松若「撞鐘こそは。」トすわ〳〵動くの謠にな

ト松若へ蒐る。松若「なにを。」ト突き退ける。綱女支へて、つな「サ、これだに依つて。」松若「エ、、面倒な。」ト綱女を引退け鐘へかゝる。鬼藤太邪魔する。綱女、鬼藤太を引戻す。松若、鬼藤太を見事に投げ退ける。これにてばつと都鳥たち、中空に舞ふ。トヒヨ、此のうちやはりかすめドンチヤン。松若これを見上げ、きつと思入。鬼藤太起き上るを綱女さゝへる。松若「ハテ、怪しや。」ト思入。鬼藤太拔きかけるを、綱女在合ふ高札にてしやんと受け留め、所作立になる。

「色は互の氣ぜんの車。

ト合方になる。此のうち松若、都鳥に目をつけながら肌を脱ぎ、松若「風もあらぬに都鳥、忽ち空に立ち上り、北方さして飛び廻るは。」ト此のうち綱女、鬼藤太立廻つて、

「心行き合ひお顏を三はね、さりとは好いた肩櫓。

ト此のうち段々松若肌を脱ぎ思入。つな「地は陰にしてこれ女、また水鳥の白きは兌の卦、足なり嘴との赤きは離の卦、共に女にかたどる。」ト矢張これより淨瑠璃の間々、綱女鬼藤太立廻り。松若せりふ斷れると淨瑠璃。

「何のお前を掛け落し。

松若「春は卽ち靑色に擬ふ。これ震なり、離兌は坤より生ずるをもつて、雷地豫の象となる、變爻なし

に松若、綱女、一巻をさつと開くと、ドロ〳〵になり、たぢ〳〵となる。清玄「これは。」ト清玄おもひ入れ、淨瑠璃になる。

「ア、ラ恐ろしの都鳥、神の神祕の神威に恐れ、我が陽炎も忽ちに、消えみ消えずみ傍の鐘引擔いでぞ失せにける。

ト宜しくあつて清玄鐘の内へ飛び入る。鐘どんと落ちて響き凄まじく、焔硝火ぱつと立つ。兩人おもひ入れ。松若「扨こそ怪しと思ひし彼は。」つな「若しやこの世を去り給ひし、清玄様の亡き魂なるか。」松若「何はともあれ家の重寶、楊柳笛もろともに、あの撞鐘へ。」ト立ちかゝるを綱女引留めて、つな「モシ、あの笛よりはその一巻、貴方のお手へ入れ置いては、却つてお身の仇なる品。それ故深くも隠せし綱女。サア、私へお渡しあれ。」松若「ヤア、我へ隠せし綱女、まづあの鐘。」ト又かゝるを綱女支へる事ちやつとあつて、兩人しやんととまる。この時ドンチャンはげしく、向うより荒川鬼藤太、結構なる凛々しき形にて走り出て來り、すぐに舞臺へ來り、松若を見て、鬼藤「そこにうせるは吉田の松若、所の者へ云ひつけて、幸ひあれなる建立の、鐘を合圖と定めし所、知らせに依つて義時が、即ち郎等荒川鬼藤太、走せ向ひし上からは、最早遁れぬ尋常に、松若腕を廻すまいか。」松若「ヤア、小癪なうづ蟲め、大義を戴く吉田の松若、おのれ如きの手に合はうや。」鬼藤「不敵の一言。いで時澄が。」

トちやつと取つて懐中する。松若「經なら猶更。」トおもひいれ。清玄これを隔てて、清玄「ハテ……サ、經文よりは經念佛。」つな「みな同音に。」ト松若思入あつて、三人「唱ふ。」ト太鼓地になり、めい〳〵松蟲の鐘と撞木を持ち、綱女眞中、左右松若清玄と立ち並ぶ。

「極樂は〳〵、遙けき程と聞きしかど、つとめて到る所なりけり。なまいだ〳〵南無阿彌だん佛なんまいだ。

ト松若清玄鐘撞木を捨て、振のはずみ、清玄が撞木の上のつり鐘に當る、ゴンと鳴る。これをキッカケに向うにてトンと太鼓を合はせる。これにて松若、屹となつて向うを見ておもひ入れ、これよりドンチャン。此のうち合方。また淨瑠璃になる。

「西方の〳〵、佛の誓ひと聞くなれば、雪や氷と何隔つらん、なまいだ〳〵南無阿彌だん佛なんまいだ、鐘に浮るゝ歌念佛。

トこの淨瑠璃の内、松若、向うへ行かうとするを、清玄振にて引留むる模樣。薄ドロ〳〵。綱女は鐘撞木にて向うへ支へる、矢張ドンチャン。また松若綱女が懐の一卷を取らうとする。清玄、松若が懐の笛を取らうとする事。すべて合方、今の淨瑠璃の内にてよろしくあつて、納まりに松若一卷、清玄笛を引出して、松若「こりや都鳥。」清玄「楊柳笛。」松、綱「それを。」ト兩人渡すまいとする。立廻り

ぐさむべい座頭の坊、按摩けんぴき鹽津海津の泊り宿。

松若「苫を敷寢に伽するよねの。」

「三味線足曳ちり／＼ちん、ちり／＼難波を引く潮に、しな付きふりも高宮の、晒つく／＼拍子取り。

ト綱女船の内より隅田川の五升樽を持つて來り、これを臼に見立て、櫻の枝を束ね、杵として三人晒になる。

「さても見事な、晒ぢよん女郎衆ぢやよの／＼、とんと突きやれ、月に晒の上るまでもえ。夜妻可愛の露ほどなりと、親を思はば末よかろえ、さいな／＼近江晒え。

ト拍子事あつて納まる。つな「お二人ともに近江のお話。これでもそれと松若さまが……ほんに、松若さまと云や、去年三月十五日、お果てなされし弟君、梅若さまの御一週忌、また清玄さま御追善にと思ひ付いた接待の渡船。つながる御縁もあなたがた、お二人さまへ。」松若「手向の念佛。」清玄「追善菩提のそのために。」つな「幸ひ先刻に木母寺の、御講中からこの樽や、鞨鼓と共に預つた、鉦鼓が船に。」ト云ひながら船へ包を取りに行く。このとき綱女が跡に都鳥の一卷落ちてある。松若手早く取上げ、松若「こりやコレ慥か都鳥の。」ト清玄そでを翳して思入。つな「イエ、こりやお經でござりまする。」

どれが松若さまやら……それ〳〵、おもひ付いたことがござりまする。惟貞さまの御知行は、いま仰しやつた近江國、さだめしお國の名所古跡、名にふれてある事どもを、こゝでお話しなされませい。」

松若「そりや何よりもいと易き。」 清玄「父が御領のあらましを。」 つな「比良のと聞いて三井石山、八景ならぬ名所は。」 松若「昔ながらの山櫻。」

「抑人の皇傳へ來て、三十九代天智帝、都を爰に滋賀の宮、今は名のみに奏でつる、籬はそれよ自然居士。「漣や、志賀辛崎の松の上葉を、さらり〳〵と殊更羯鼓とのぞまれて、「面白の春なれや、梅に來傳ふ鶯の、花の木の間に木の間に花の、ちよいと飛んではホヽ、法華經も梢に暮るるを惜しむ、花巾上に散りぬれば、二月の雪の思ひあり、もとより鼓は波の音、撻と打寄せ〳〵て、波の花咲く志賀の浦船。

松若「浮いた姿の賤の女が。」

「摘みやれお摘みやれ信樂の、茶は廿の人の木と、書いて茶といふ文字と讀むといな、伊豫簾下してちやとつまれ、ちや〳〵ちやつきりちやつと摘む手の品もの。

清玄「知るも知らぬも逢坂の。」

「關には一人蟬丸が、肩に琵琶箱せつたら負うて、戀しき時はべれつ〳〵、ひつひいてもかんな

さては彼こそ我が笛を。」　松若「ナニ、却つて我を盗賊とは。」　清玄「云ふにや及ぶ、その名笛、この松若に。」　松若「何を。」ト兩人おもひ入れ。綱女これを支へて、　つな「ア、モシ、何方を眞の松若さまと、云ふに云はれぬお二人樣……ほんに好い事でござりまする。松若さまと花子さま、お幼少から云號、絕えし御緣も去年の春、新清水で、お逢ひ遊ばし。」　松若「いかにもそれより一睡の、夢に契りを結びしとは、花子は我へ物語り、おことは。」　清玄「知らいでならうか。お身覺えてなら松若が、相手となつて。」　松若「そりや云ふまでもない。幸ひ爰に櫻姬がこの振袖。」　つな「そんならあなたが、花子さまにおなりなされて。」　清玄「この松若と。」　松若「その夢の。」　つな「アノお話を。」　清玄「話さうか。」トこれより松若、振袖を著て女方の振になる。

「御法の庭に初櫻、ふつと見初めて幻の、夢に心の亂れ萩。」「所は野路の玉川に、秋の螢のちらちらと、一村雨の雨宿り、誰が墨染か軒のつま、又も不思議に近江路を、徐々しかけ引寄せて、我をも具に有り難い、所へ是非といたづらな、手先を執れど一心に、普門品第大事ぞと、讀めど刀尋段々と、心うつろふ色衣、爪繰る珠數もどこへやら、勿體ながら下紐を、佛の罰もなんのその、ツイ手枕に極樂の、思ひ重なる嬉しさに、假寐に結ぶ物語。

ト兩人よろしくあつて納まる。つな「なる程、私が承りし、話に違はぬお二人樣の其のお話、矢張

ア何でござりまする。さうして今のおことばは、正氣のやうなお物ごし。すりや花子さまの名香で。」松若「イ、ヤ松若、狂氣もせねば、花子が名香なんのしるし。」つな「でも、渡場での噂には、松若さまには、法體ありし清玄さま、まだ花子さまの折柄には、お云號の事ゆゑに、清玄さまお果てなされしと、お聞き遊ばし、お心が。」松若「ヘ、、、、天下を望む者、ナニ女に心を惑ひ狂氣なさんや。狂ふと見せしは大望の、便りとなすべき朱印は似せ物、それ故再び失ひし、都鳥の一巻を、詮議の手段、似せ氣違。」つな「エ、すりや大望の便りにと、アノ都鳥の一巻を。」トおもひ入れ。松若「今にも手に入るものならば、忽ち武將はこの松若。」つな「アノ、今にも都鳥が……ても恐ろしい其のお望み、それゆゑあなたを鎌倉より嚴しい御詮議、もう〳〵、左樣な事はおやめ遊ばし、暫くお身を私が在所にお忍びありて、折を見合はせ、櫻姫さまとおむつまじう。」松若「ヤア、いはれぬ女の横合から。」つな「すりや、どうあつても。ムウ……さうして此方の松若さま、あなたは何でお心が。」清玄「ハテ、知れた事、あの者が云ひし詞は一々に、この松若が心の大望。」松若「イヤ、にせ者めが小ざかしい。」清玄「其方こそ似せ者、小ざかしい。」松若「然らば證據は吉田の重寶……卽ち爰に楊柳笛、これでも其方が松若か。」ト懷中より袱紗に包みし笛を出す、綱女見て、つな「成程、承りしお家の重寶……モシ貴方もお家の。」清玄「サア、楊柳笛は所持なせしが、盜賊の爲に失ひし、その名笛を所持する男子、

扇を付け、擔ぎし見得にてせり上ぐる。ドロ〳〵打上げ、淨瑠璃。
「上の空なる青柳も、いとし〳〵に亂れ髮、降るは涙かイヤ春雨か、晴れて逢瀬のあるならば、亂れはせまじ我が心、眞葛ヶ原の露の野に、嫁菜土筆はありながら、葛ほうけし俤も何を歎きの物狂ひ。
トかけりになり、狂ひながら、舞臺へ來り、よろしくあつて、どうと下に居る。鳴物打上げる。このとき松若心附き、淸玄を見て思入。松若「ムウ、何時の間にかは狂人の……コリヤ、さうして其方は。」淸玄「サア、我が名はアノ松。」松若「松とは。」淸玄「ハテ、氏も、吉田の待乳山。」松若「夕越え人に。」淸玄「言傳てて。」
「歸らぬものを鴈の、翅交して咲く花捨てて、戻り道かや戻り路か、行こか戻ろかさりとは憎や、蝶は何時でも菜種の牀に、よれつ縺れつわりなき妹背、ア、嫉まし小夜の睦言も、我は白地の扇さへ、今は形見の仇名草。
トこの文句にて兩人ふりあつて、ト、笹を擔げて立ち竝ぶ。この時綱女こゝろづき、兩人を見つけ、つな「ヤア、こりや松若樣がお二人に……モシ〳〵、どちらがほんの松若さまで。」松若「コリヤ〳〵、綱女、我こそ吉田の松若ぢやわい。」淸玄「イヤ、我こそ吉田の松若ぢやわい。」つな「モシ、そりやマ

山上大峯釋迦ヶ嶽、こけの行者が御祈念に、謹みたまへと加持しける。「イ、ヤ、「我は物に狂はねど、風に櫻の物狂ひ、ちらり〳〵ちら〳〵〳〵と、花の振袖うつゝなや。

ト振袖を打捨てて、どうと下に居て思入。綱女最前より、よく〳〵見て、つな「どうやらあなたは、御幼少の折お目見えいたした、アノ、吉田の松若さまぢやござりませぬか。」松若「ヤ。」トおもひいれ。つな「オ、、眞に松若さまぢや〳〵。モシ、私事はお家の下郎、軍助が女房綱女と申す者、お云號の入間家に、御奉公いたして、この東に居りましたれば、御存じないは御尤も。こんな事云うたとて、お狂氣では……ア、、どうぞお正氣に……それ〳〵、お館に居た折から、花子の前さまに戴いた、朧かげのこの一炷。」ト懐より香づゝみを出して、つな「香は心を澄ますとやら、船の火生で、さうぢやさうぢや。」ト舟より尋常なる苫の火生を持つて來て、松若がまへに置き、つな「サアモシ、一炷この香を。」ト香を火生へつぐと、大ドロ〳〵になり、兩人ウンと悶絶する。此のうち煙硝火立つと、今の振袖しぜんと葦間へ消える。とたんに魂下りて花道の切り穴へ落つる。ドロ〳〵打上ぐる。直に淨瑠璃になる。

「風吹き落ちて松若が、かいやり捨てし振袖を、形に影の髣髴と、又も一木の松若が。

ト又ドロ〳〵になる。今の切り穴より清玄亡魂、松若の通りの拵へにて、矢張振袖を肩へかけ、笹に

つな「ほんに、それ／＼船長が。」
「名所に住めど心なく。
つな「今仰しやつたあの鳥を。」
「都鳥とは云ひもせで、沖の鷗と夕波の、昔に歸る業平も、いかいすの字であればこそ、遠き東へ來てまでも、いざ言問はん都鳥。「げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、來いつゝ啼くは都鳥、それは難波江これは又、隅田川原の千鳥足、竹屋待乳や呼子鳥。猪牙で漕がれてエ、サッサ、サッサ板ばしの棧橋手を引かりよ。
松若「ハ、、、。」と倒るゝ。
「正體も無く伏し沈む。
つな「道理こそ、こりや氣のちがうたお方と見ゆる。ア、、お氣の毒な事ではある……幸ひ／＼、此方の鄰の法界坊が御祈禱を、聞きおぼえたも勿怪の調法、てんぽの皮にやつて見よう……エ、、肝腎の錫杖が。」ト櫻の枝を折りて、錫杖にして、つな「ドレ、一祈り祈らうか。」
「まづ筑紫にはこひすてふ、君が袖褄彦の山、返事四王寺きたさのさ、讃岐に今かと松山を、先ぢやしら峯伯耆に御苦勞、大山ならば京近き山衆の、地色は膝で愛宕山、首尾を横川に中宿へ、

ト一せい面白き鳴物になり、船のうへに松若丸、誂への形、病鉢巻にて、肩へ前幕の振袖を掛け、笹に閨の扇をつけ、これをかつぎ、上の方に立身、此方に綱女、染めやつし袖無羽織にて、水棹を持ちて控へる。兩人この見得よろしく、舞臺の眞中へせり上げる。鳴物打上げ、直に淨瑠璃になる。

「浮きて漂ふその人の、行くへ何處の白絲の、亂れて名をや流すらん。「流れ渡りに一日を、横に暮すや渡守、棹に雫にこしかたも、啼くは雲雀か妻戀ふ雉子、ほろゝけん〳〵戀しと慕ふ、我も戀しと一筋に、焦れて、「指して向島、いつか汀に著きて候。

ト兩人よろしくあつて、綱女船を岸へ差寄せる。前の波板せり下りる。つな「サア、モシ、船が著きました、疾く〳〵岸へ御上り候へ。」

「如渡得船と彼の岸に、川ぞひ柳立ち出でて。

松若「なう船人、あれに白き鳥の見え候が、名をば何とか夕潮の。」つな「エ、、あれかえ、ありや沖の鷗でござりまする。」　松若「よし千鳥とも、鷗とも。」

「爰に隅田の鳥ならば。

松若「など都鳥とは、云ひもせで。」

「譃を筑波の山笑ふ、夕せはしき村千鳥、はつと立つ名も厭はぬものを。

ト切り付けるを、軍助白刃を捩ぎ取り、惣太が太腹へ突き立て、立身にて抉り、清玄が有様を見て、

軍助「ハテ、恐ろしい。」ト木の頭、惣太苦しみ、軍助の頭の上へくらひ著く。血、たら〳〵と流れ、軍助の顔へかゝる。この途端に櫻姫、「ワッ。」と坐る機に、清玄摑みし扱の端を引切る。兩手を放す。この時蛇塚の石の上へ心火燃え、塚は碎ける、引切りし扱の端、心火となりて蛇のやうに動きて、櫻姫へかゝる。軍助「執念ぢやなァ。」ト立身にて惣太を抉る。清玄兩眼閉ぢて俯伏せに段々と轉げる。これを木のきざみ、薄ドロ〳〵、柳の枝ザァ〳〵と動く仕かけ。この見得よろしく拍子。幕。

第二番目　大切淨瑠璃　狂亂の錦繪も　柳櫻を混ぜ交ぜて　都鳥名所渡　常磐津連中

本舞臺、一面に淺葱幕、上の方に櫻の立樹、これに前幕の釣鐘かけてあり、所々に山吹のさかり、柵打つたる波板、これに芽出しの蘆、櫻、柳を打交ぜたる吊り枝、すべて隅田川の體、靜かなる禪のツトメにて幕明く。ト頭取、淨瑠璃の名題役人觸れあつて、その爲口上チョンと、淺葱幕切つて落す。うしろ高土手、爰に常磐津連中居並び前彈きにかゝる。此のとたん舞臺先へ波板出る。これに都鳥大分漂ふ。直ぐに淨瑠璃。

流水飛禽自ら、彌生の眺め一入に、あれ都鳥はれ櫻、およばぬ筆に隅田川、寫して爰に船の内。

跡たる、この蛇塚へ怪しの心火。さては刃に果て給ふ、清玄尼の一念なるか。ハテ淺ましきお心ぢやなア。」ト思入。大ドロ〳〵になり、むかうより櫻姫、連理びきの樣に、櫻姫が振袖へ白き蛇まき付きし體にて、この蛇、振袖のよき所を啣へしおもひ入れ。櫻姫、くるり〳〵と引かれて出て來る。軍助見つけ、驅け寄りて介抱なし、軍助「こりや姫君には、何故爰へ。」櫻姫「其方の庵に忍びしを、いづくよりかは蛇の、袖に纏うて此のやうに、思はず爰へ引かれ來る。」軍助「ナニ蛇がアノ袖に。」ト振袖へ手をかける。ドロ〳〵にて、蛇は袖を啣へ、放さぬ思ひいれ。軍助蛇を捕へ、放さんとする時、蛇は袖を啣へ放さぬを無理にもぎ放す。振袖を啣へし儘離るゝ。軍助「姫の袖さき喰ひ切つたるは。」ト思はず蛇を放すと、袖を啣へし儘下手の叢に入ると等しく、焔硝火立つて蛇、袖を啣へて消える。軍助思入ありて、軍助「かかる椿事も果てたまふ、さては姉君清玄さまの。」櫻姫「ナニ姉君は果てたまふか。」軍助「たゞ今これにて、人手にかゝつて。」櫻姫「すりや姉上には。」軍助「せめて死骸に暇乞。」櫻姫「ドレ。」ト兩人、清玄が死骸に立寄り、軍助「變り果てたる姉上樣。」ト兩人手をかけ引起す。薄ドロにて清玄、蛇の啣へし振袖を啣へ、口の端血流れし體。櫻姫恟りして立ち上るを、清玄かよわき手を差伸べ、櫻姫が結び下りししごきの先を執へ、顏を上げて兩眼を開き、怨めしげに見詰める。櫻姫立身にて顫ふ。軍助驅け寄らんとするを、惣太よろぼひ寄つて白刃を振上げ、惣太「おのれ、野郎め。」

情しい。」惣太「くたばれ〳〵。」ト抉る。薄ドロ〳〵、清玄苦しみ、ばつたり落入る。惣太乘りかかり、惣太「南無阿彌陀佛々々々々々。」トとゞめを刺す。禪のツトメになり、向うばた〳〵にて軍助一腰差し、いきせきと出て來り、軍助「女房が話にて、破戒なされし清玄さまの隱家は、たしかに聞きし妙龜庵、お姫樣は殘し置き、尼御に逢うて御意見を。」ト本舞臺へ來り、軍助「たしか草庵、この邊。」ト窺ひ見る。惣太この聲を聞き、惣太「ヤ、さう云ふ聲は、隅田の渡でたしかに逢うた。」軍助「すりやその時の渡守、惣太といふは、實名粟津の。」惣太「南無三こゝには。」ト行かうとするを、軍助、惣太をやらじと立廻りありて、軍助「梅若君の敵は七郎。」惣太「われは吉田の下部の軍助。」軍助「尋ねて居たに、ハテ好い處で。」惣太「惡い處で。」ト立廻りありて、兩人「逢つたなア。」軍助「お主を殺せし天罰は、この軍助がこの場でうぬを。さはさりながら清玄尼、あなたのお行くへ。」ト尋ぬるおもひ入れ。惣太「われが尋ぬる清玄尼、以前花子のその砌、心あつたるこの惣太、こゝで逢つたを幸ひと、口說けど聞かず松若と、姫を恨むる破戒の清玄、この世の暇を取らせたワ。」軍助「ヤ、、、。すりや尼君まで手にかけしか。天罰知らずの極惡人、目前敵は軍助が。」ト立ちかゝる。惣太「さう云ふうぬも冥途の道づれ。」ト拔いて切り付ける。これより鳴物を借り、兩人立廻りありて、トゞ惣太を一刀切る。惣太「ウン。」と倒れる。ドロ〳〵になり、蛇塚の上へ心火燃ゆる。軍助佶と目を著け、軍助「淺茅ヶ原に古

松若どのを取殺せ。こなたは早く往生して、死出の山のだら〳〵下りで、待つてけつかれ。」清玄「どうで存命叶はぬからは、刃に懸つて死ぬるとも、魂は中有にとゞまつて、憎しと思ふ二人とも、なに安穏で置くべきか。思へば〳〵エヽ、怨めしい。」ト白刃を握つて向うを見詰め、無念の思ひいれ。薄ドロ〳〵になり、焼酎火燃え、清玄が胸元より白き蛇現はれ、下の方よき所にて消える、煙硝火立つ。惣太恟りして、惣太「恐ろしいこの動搖。」ト見て、惣太「コレサ、この白刃を放さつしやい。放さぬときは十本の、ソレ、指が切れるが、コレ、放さないか〳〵。エヽ、はなさないか。」トいろ〳〵しても放さぬゆゑ、白刃を手酷く引き、清玄を蹴飛ばす。これにて清玄、十本の指切れし體にて、兩手は血紅になり、うんと倒るゝ。惣太立寄りて、惣太「それ〳〵、指が皆切れたワ。いつその事に一思ひ、この世の暇を。」ト襟髪摑んで引起し、とゞめを刺さんとする。薄ドロ〳〵にて、清玄が十本の指殘らず蛇となつて鎌首を上げて動く。惣太恟りしてためらふ。清玄「エヽ、怨めしい櫻姫。」ト向うを見詰める。惣太「一念凝つて十本の、指も殘らず蛇の、形と見えるもこの世から無間に沈む清玄尼。コレ、恨みは妹櫻姫、憎しと思はば取殺せ。」清玄「辛からば唯一筋につらからめ、斯かる非業も妹ゆゑ、今にも思ひ知らさで置かうか。サア、早う手にかけ、この世の暇を。」惣太「とらせてやらう、成佛しろ。」ト清玄を引寄せ、抉る。清玄苦しみ、清玄「只怨めしきは櫻姫、思ひは同じ松若どの、チエヽ、口

て立廻りある。清玄「すりや妹と松若どのが、頼んでわしを殺すか。エヽ、怨めしい。さりながら、こなたに恨みは無いほどに、二人に逢うて、この恨み、云はねばならぬその間、どうぞ命を助けて下され、存分恨みを云ふまでは、死にともない〳〵。」惣太「オヽ、尤もだ。併し私が知つた事ではない。今云ふ通り松若と、櫻姫に頼まれた、證據と云ふはコレ。」ト以前の短冊を出し、惣太「清玄尼、覺えがあらう、この短冊、櫻姫に頼まれた、これが慥かな證據だワ。」ト見せる。清玄取つて、清玄「こりやコレ違はぬ姫が手跡。すりや。この姉を妹の身で。」惣太「清玄こなたを生け置いては、二人が連添ふ邪魔にならう、そんなら殺すがよからうと、相談づくで頼まれて、こなたを殺しに來た程に、わしが刀で往生さつしやい。」ト白刃を引く。清玄握り詰めて思ひいれあり。清玄「エヽ、聞けば聞く程、無得心とも邪慳とも、大惡人とも何とマア、譬へ少なき二人が頼み、殺さすのみか此のやうな、匹夫下郎にいひつけて、我も入間の胤なるに、賤しき者の手にかゝり、淺茅ヶ原の草の露、屍を巷に晒すか。エエ、淺ましや、口惜しいわいやい。」ト思ひいれ。惣太「イヽヤ匹夫下郎でない。心柄こそ落魄れて、雇ひ侍時折は、おぼえた業の船乘惣太、氏も吉田の家老職、粟津の六郎俊兼が弟、同苗七郎とはおれが事だワ。去年三月主人たる、梅若丸をぶち殺し、今年も三月十五日、爰で此方を殺すのは、梅若丸が一週忌、その追善に殺される。誠に供養だ、コレ尼御、追善供養に殺すのだ。恨みがあらば櫻姫、

を引ッ捕へ、傷口を見て、惣太「これ程云へど聞き入れなく、恥を與へし清玄比丘、殊に大傷、どうで命は危いもの、毒喰はば皿。」ト切り付ける。清玄驚き逃げまはり、清玄「ア、コレ、どうぞ助けて、松若さまに逢ふまでは。」惣太「未練な根性、もう叶はぬワ。」ト切りつけ、清玄逃げ歩く。惣太追ひ驅けトヾ正面の屋體へ上り、兩人立廻りよろしく、清玄を壁へ突き當て、突かうとする時、この壁ばらばらと破れ、清玄外へ落ちかゝる。惣太逃さじと半分壁より落ちかゝつたる見得、一ッ鐘の念佛、忍び三重、蛙の聲、時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、正面庵室の後を見せたる道具、所々に石塔あり、ふりよき柳、よき所に蛇塚と云ふ小高き誂への塚、卒堵婆、生垣、物凄き妙龜庵の裏通りになる。矢張崩れ壁より清玄、惣太、組み合うて出かゝりて居る見得にて道具とまる。トやはり以前の鳴物にて、兩人立廻りになり、惣太が切りつけし白刃を、清玄、兩手にきつと握り、こなしあつて、

清玄「こりや、どのやうに頼んでも、其方はわしを殺すのか。」惣太「姫、松若に頼まれた。」清玄「ヤヽ、なんと。」惣太「櫻姫と祝言の、邪魔になる清玄尼、殺してくれろと松若と、櫻姫に頼まれた。こなたを手にかけ姫と松若、心よう祝言させる。邪魔なこなたは今爰で。」ト切つて行くを、かい潛つ

第の惣太が心中、見せたる上は必ずわしと。」　清玄「慮外な下部の、縦ひ心中見すればとて、おのれら如き何の匹夫に。」　惣太「ハテ、さう云はずとお前の手で、お望み次第の心中を、髪でも指でも、サ、切りなさい〳〵。」ト清玄に刀を持たせて、我も持ち添へ、色々ある。清玄耳にもかけず向うばかり見つめ、清玄「エヽ、妨げ致すな。アノ櫻姫が。」ト跡を追ひ行かうとする。惣太白刃を無理に持たせて、惣太「コレサ、松若ばかり男でもねえ。心中見せる此のわしに、マア爰で心中に。」ト捨てぜりふにて、いろ〳〵揉み合ひ、ト、清玄刀を取捨てんと捥ぎ取る機に、脇腹をしたゝか切り込み、「ワッ。」と云うて倒れ伏す。惣太驚き介抱する。惣太「ヤ、こりや怪我だ〳〵。サア〳〵大怪我だ。」トいろ〳〵いたはる。清玄のたうちまはつて、清玄「ヤヽヽ、コリヤおのれ、なにゆゑあつてわらはを手に掛け。」惣太「されば〳〵、全く此方を切る氣ぢやねえが、こりやァ間ちがひ、大怪我だ〳〵。」　清玄「イヤ〳〵おのれ、手にかけて。」　惣太「コレサ〳〵、毛頭おれが何で切らう。惚れたこなたに心中を、見せん心のこりや怪我だ。併し薄手だ、氣遣ひない。養生した上、わしが心に隨はつしやい。その代りには、憎いと思ふ櫻姫、わしが存分こなたの代りに、どうなりとして進ぜる。こなたは心を取直し、コレ、清玄どの。」　清玄「イヤ〳〵〳〵、たとひ死すともおのれら如きに、なんで妾が隨はうぞ。」　惣太「すりや、どの樣に云つても、こなたは。」　清玄「否ぢや〳〵。これにつけても松若さまに。」ト行かうとする

女、色になつてはくれまいか。」トしなだれ寄るを、清玄きつとなりて、清太「エヽ、穢らはしい、己らは、館にあれば花子の前、なんの身ぢかう寄せ付けうぞ、おのれら如きに賤しめらるゝも、これも誰ゆゑ櫻姫。」ト振切つて行くを、惣太ひッ捕へて、惣太「ドッコイ〳〵、折角逢つたこなたを、外へやつていいものか。否でも應でも、おれのまゝだ。」清玄「エヽ、穢らはしい。唯の女子と思ひ居るか。剃髪染衣の尼の身を、慮外しやると免さぬぞ。」惣太「アヽ、そんならこなさん、五戒を保つ尼法師か。コレ、その尊い清玄比丘が、松若殿には迷つても大事ないか。イヤサ、わしが様な者には從はいで、松若どのなら大事ないか。」清玄「サア、それはな。」トいろ〳〵あつて、清玄「オヽ、大事ない〳〵。コリヤヤイ、松若様は自らが云號、すりや何の大事があらうぞいやい。」惣太「それ〳〵、そこがお前は大名の懐中子、松若殿と櫻姫が、あの睦まじさを知らないのか。」清玄「サ、その道ならぬ櫻姫、それぢやに依つて跡を追ひ驅け、恨みの丈を云はにやならぬ。」ト行くを引留め、惣太「コレサ、その恨みを云ふ心があらば、二人の者へ面當に、男を持つのが何よりだ。身不肖ながらこなさんの、色の男になつて進ぜう。コレ、斯うばかり云つては、僞り者と思はつしやらう。こなたの色になるといふ、證據は卽ちこれ。」ト刀を拔く。清玄恟りして、清玄「白刃を拔いて、どうしやるぞ。」惣太「コレサ、驚く事はない。僞り云はない證據には、こなさんへの心中に、指を切るとも、腕を切るとも、御勝手次

んとする。清玄捕へんとする。暗がりの仕組み。綱女、櫻姫を連れ門口へ出る。惣太は清玄を櫻姫と思ひ捕へる、綱女門口にてほつとおもひいれ。早三重になり、櫻姫が手を引き、向うへ走り入る。清玄外へ行かんとするを、惣太「ドッコイ〳〵、櫻姫なら逃しはせぬぞ。」ト捕へる。立廻りに焚柴を踏みつけ、これを取つて捨てる事。この柴、圍爐裏の内へ落ちて、ぶす〳〵燻り出す。惣太また鉈を踏みつけ、惣太「アイタ、、、、。エ、、いま〳〵しい。イケ邪魔な。」ト鉈を執つて、打つてかゝる。清玄避けるはずみに、惣太、手水鉢へ切りつける。これにて桶ばら〳〵と破れ、本水さつと溢れる。此のとたんに圍爐裏の柴ぼつと燃えあがる。兩人惆りする。時の鐘のかしら。清玄は下の方、惣太は上手にて、兩人圍爐裏の左右に別れ、顏を見合はせきつとおもひ入れあつて、清玄「ヤ、あやしい男子。」惣太「コレサ、わしか。」清玄「其方もどうやら。」惣太「眞にいつぞや清水で、逢つた入間の花子の前、今は剃髪清玄尼、庵主といふはこなさんか。」清玄「サ、その清玄が願ひの妨げ、妹ながらも。」ト門口へ走り行かんとする。惣太立廻つて裾をきつと執へ、惣太「コリヤ、逃しはしねえ。姫を失ふそのかはり、不思議にこゝで花子の殿、よもや忘れもさつしやるまい。松若どのの幽靈話の證據にと、都鳥の一卷を、こなたの縹緻にうか〳〵と、渡して歸つた猿島惣太、その時こなたにうッ惚れたが、どうで及ばぬ色事と、一年寐かして今爰で、逢うたは誠に結ぶの神。コレ、清玄さん、尼でも比丘でも根が

さうか、我が戀かなはぬ上からは、憎しと思ふ櫻姫、妹ながらも世上へ見せしめ、せめて面へ傷なりと、姉が恨みの刃を受けよ。」ト蹣跚ひ廻り、在合ふ鉈を執りて櫻姫へ打つて蒐る。綱女驚き、つな「アモシ、狂氣ありしか淸玄さま。」　淸玄「オヽ、狂氣した。物に狂ふも誰ゆゑぞ。」トよろめき寄るを綱女縋つて、つな「ア、モシ、お危うございます〳〵。マア〳〵、この刃物を。」ト執り付いて、持ちたる鉈を取つて捨てる。淸玄、圍爐裏の火箸その他有合ふ物を取つて、投げつけ〳〵立ちかゝる。櫻姫逃ぐるはずみに、懷の一卷を落す。淸玄取つて、淸玄「こりや神祇官の正しく一卷。」　つな「アモシ、その一卷を。」ト取らんとする。淸玄一卷をさしかざす。ドロ〳〵、岩藤思入あつて姿消える。淸玄「さてはこれこそ吉田の重寶、都鳥の一卷ならん。松若どのへ面當に、いま引裂いて。」　つな「アモシ、滅多なことを。」トすがつて取らんとする。淸玄放さじとせり合ふ。立廻りにて櫻姫を表へ突きやり、一卷を取返し、つな「お怪我の無い内お姫樣、少しも早う。」　櫻姫「ぢやと云うて、この儘どうして。」　淸玄「姫はやられぬ、櫻姫、姉が恨みの。」ト櫻姫へかゝる。綱女さゝへる。立廻りのうち行燈を突きこかし、暗がりになる。この時生垣を押し分け、惣太、窺ひ〳〵出づる。つな「櫻姫さま、サア〳〵、この間に早う。」　淸玄「イヤ〳〵、姫はやられぬ〳〵。」トこの聲を聞きて、惣太、さては姫を逃すと心得、内へはひり、暗がりゆゑ、惣太「姫といふのは、櫻姫か〳〵。」ト引捕へんとする。綱女、櫻姫を連れ、逃げ

岩藤とめる仕組み。清玄「書かぬは、いよ〳〵僞る心か。」つな「アモシ、御勿體ない。」清玄「そんなら其方取持つて。」つな「サ、それは。」清玄「コレ、手を合はす、どうぞ妾に。」つな「サ、どうもその儀は。」清玄「成らずば妹、誓紙を書きや。」櫻姫「仰せに任せて。」ト書かうとする。ドロ〳〵、寐とり、岩藤筆を止める。櫻姫「どうもこの手が。」清玄「誓紙が書けぬか。エヽ、こゝな僞り……アコレ、取持つてたも。」つな「サ、それは。」清玄「思ひ切つたと、たつた一筆。」櫻姫「サ、書かんとなせばこの手の痺れ。」清玄「そんなら綱女、コレ、取持つてたも……コレ、手を合はす〳〵……コレ妹、誓紙を書いて……コレ手を合はす、聞き分けて……コレ、其方はどうぞ取持つてたも。手を合はす……コレ、妹。コレ、綱女。願ひを叶へてたもいなう。」ト兩方ををがみ、いろ〳〵思入。櫻姫「左程のおほせ、誓紙はこれにて。」ト書かうとする。ドロ〳〵寐とり、岩藤書かせぬ思入にて、持つたる筆をうしろにて二ツに折つて捨てる思入。その通りに櫻姫おもはず折つて捨てる。清玄これを見て、清玄「誓紙の筆を折つたるは。」櫻姫「エヽ。」ト悔りするを、清玄顔色變つて櫻姫へ立ちかゝる。頸髮摑んで引寄せる。綱女留めるを同じく引付け聲顫はせ、清玄「エヽ、腹の立つ。其方はなう。」トきつとなり、清玄「心柄とは云ひながら、かかる姿の清玄が、世に落ち果てし身と侮り、妹ばかりか現在の、家來の其方まで僞り表裏、時代に作るゝは人心かと、思うて見ても妬ましさ。思ひ詰めたる松若さま、よも仇人に添は

若さまと快う、添やる心とこの姉が、見た目はよもや違ふまい。」櫻姬「エヽ、お心解けぬ姉上樣……さうぢや。」ト綱女が差して居る一腰を手早く取つて自害せんとする。綱女慌てて止めて、つな「こりや逸まつた。マア〱、お待ち遊ばされませ。」櫻姬「イヽヤ放して。」ト互に引合ふ機に白刃拔けて、清玄がかたへ持ち行くこと。清玄「アヽ、白刃を女の身で、こりや、わしを殺す氣ぢやの。」ト綱女心づき、つな「アヽモシ、勿體ない、お主樣をどうしてマア。夜道と申し、追手の者に逢うてはと、夫の一腰犬威し、ほんの怪我でござりまする。」清玄「イヤ〱〱、此のわしを其方衆二人は切る心ぢや。オヽ、切る心ぢや。所詮破戒の清玄尼、松若さまの事は、どうあつても思ひ切られぬ。それが心に叶はずば、サア、わしを切つてたも〱。いつそ切られて死んだなら、今の苦患はあるまい。サ、切りや切りや。切らぬかいの〱。」つな「モシ〱、假にも左樣な事を、被仰つて下さりまするな。姬君樣の爲には姉君、私には御主人樣、たとひ無理……サア、如何樣な事がござりませうとも、お手向ひなど致す心がござりませうか。」清玄「それ程姉を大事に思はば……サ、櫻姬、松若さまの羽織の前で、僞りならぬ、神の誓ひの誓紙を書きや。」ト料紙硯を突きつける。櫻姬「あなたの疑ひ晴るゝなら、何の厭はう、なる程、誓紙を。」ト書かうとする。ドロ〱になりて、岩藤筆をとめる。櫻姬書かれぬ思入。清玄「サ、妹、どうぢや。誓紙の文言。」櫻姬「お前の見るまへ。」トまた書かうとする。ドロ〱

の端ぢやもの、悋氣妬みもせいでかいの、いかに世に捨てられし清玄ぢやとて……コレ、わしや其方の爲には主ぢやないか、時代につれれば其のやうに、家來にまでも。」つな「ア、モシ、御勿體ない。なんの私が、御姉妹お二方に、分け隔てを致しませう。そりやあなたのおまはり氣とまうすもの。」清玄「ムウ。すりや分け隔てはせぬと云やるのか。」つな「どう致しましてマァ。」清玄「それに僞りないならば、わがみ勸めて松若さまを、思ひ切らせてたもいなう。」つな「ナニ、私にあなたへ勸めて。」清玄「思ひ切らせて取持つてたも。コレ綱女、手を合はす、どうぞ、願ひを。」櫻姫「そんならアノ、松若さまを姉上樣。」清玄「エ、、何ぢやぞいの、其方に頼みはせぬわいの。詞を出さずと控へて居や。」トきつと云ふ。櫻姫「それ程までに自らを、憎しと、思召して、オ、、さらく無理とはおもはねど、存ぜぬ事はどこまでも、松若さまとは露知らず、頼國さまとのみ心得、枕交せし申譯、淵川へなと身を沈め、冥途で云譯いたしませう。おさらばでござりまする。」ト立ち上るを綱女ひきとめ、つな「こりや御短氣な姫君さま、死ぬる命を存へて、姉上さまへお願ひあらば。」櫻姫「イヤく、あなたへ申譯この身を捨てて。」トまた立ちかゝるを留める。清玄簀戸をたてて、清玄「すりや妹には、妾へ云譯無きまゝに、その身を沈めて、死んで云譯しやるのか。」櫻姫「サ、死ぬるよりほか、この身となつては。」清玄「イヤ、それは譃ぢや。」櫻綱「エ、。」清玄「さも眞實に見せかけて、この場を逃げて我が思ふ、松

證據は卽ちこの白湯は、仕込みし毒に相違ない。證據を見せう、これを見や。」ト茶碗をあたりにある櫻の枝へ打付ける。薄ドロ〳〵、焔硝火と共に、櫻の花ぱつとたち、色變つて落花する。皆々驚き、つな「ヤ、、、打ちあけ給ふ茶椀の内、櫻も共に焰となつて。ホ、、、ホイ。」ト驚く。淸玄「毒に違ひはあるまいがの……もうこの上は憎さも憎し、一旦は我が云號、松若さまとは、この姉が、未來を掛けて添ひ遂ぐる。」つな「エ、すりや其のお姿にてありながら、松若さまとお聞きあり、妹姬にはどこまでも、あなたは添はさぬお心か。」淸玄「オ、、妨ぐる。添はせはせぬ。」つな「アノ、尼君の御身にて。」淸玄「墮落した。」つな「エ。」淸玄「破戒の尼と云はば云へ、今日といふ今日淸玄が、願ひ込んだる御經も、みな仇事となり果つる、墮落のしるしはいま目前、爪繰る珠數も。」ト思入。薄ドロ〳〵にて、うしろ現はれし岩藤、珠數を引切る思入、同じく淸玄、淸玄「かう〳〵〳〵。」トひき切り、あたりへ投げ捨て、淸玄「これで心も晴れたわいなう。」トきつとなる。綱女詰め寄り、つな「エ、、お情ない淸玄さま、それ程までにもお心の、變れば變るものかいな。現在の姉上樣に、何の僞りを仰しやりませうぞ……よし又櫻姬さまが、松若さまと御存じなう、枕をお交しなされしとて、あなたの爲には眞實の、妹姬樣ぢやござりませぬか。お前樣は唯今にては御剃髮、浮世を捨てしお姿にて、それをあらはに仰しやるは、そりや下世話に申す悋氣とやら。」淸玄「默りや。悋氣と云やるが、コレ、わしも女子

行き、櫻姫「モシ、御持病でござりまする。姉上樣、お心を確かにお持ちなされませえ。」ト差出す。清玄、櫻姫をヂロリと見やり、茶椀を差出したるその手をしつかと執つて、清玄「コレ、妹、すいや、この羽織は松若さまの。」櫻姫「イヽエ、松若さまぢやござりませぬ。いつぞや清水にて、賴國さまがお召しなされた。」清玄「イヽヤ、云やんな。賴國さまとは、わがみもわしへ白々しい。やはり吉田の松若君、姉が連れそふ御方を、ようもそなたは寐取つたなう。」櫻姫「ヤヽ、モシ、どうしてわたしが。」清玄「イヤ〳〵、賴國さまとは變名にて、誠は吉田の松若さま、わしが殿御と不義密通、思へば其方は大それた。」トきつと云ふ。つな「エヽ、さてはあなたの御立腹の起りといふは、お云號の松若さまを、賴國さまと云ひ立てて櫻姫さま戀ひ侘び給ふ、それ疑うてのそのお氣色。モシ、どうしてあなたが御存じあつて、左樣な儀を。」清玄「イヤ〳〵、其方も同じ樣にわしを僞り、そりや譃ぢや。證據は卽ち茶椀の中の。」つな「サ、そりや姫君がたつた今、あなたが放心なされし故、お白湯なりとも差上げうと。」清玄「それで妾に妹の身で、毒害しやる心ぢやの。」綱、櫻「エヽ。」櫻姫「何であなたへ左樣な事を。」清玄「イヽヤ、其方はこの毒を、姉に與へる心であらう。賴國殿とは自らを、僞る爲の變名にて、誠は妾が云號、過ぎ行き給ふと沙汰ありし、松若樣といふ事を、知りつゝ牀しと戀ひ慕ふ、道知らずとも不義者とも、譬へ少なき妹姬、殊更世に亡きこの姉を毒害なして、誰憚らず添ひやる心か、

からぬ儀を仰しやりまするが、何でマア、お妹御の聟がね樣を。」ト思入あり。つな「ア、左樣におぼし召しまするも御尤も、花の盛りを思ひ切り、以前のお姿引替へて、丈なるお髮もいつしかに、身は墨染の尼君樣、かかる野末の庵室に、佛に手向くる阿迦の水、手馴れぬ業もおいとしい。」櫻姬「ことに窶れしお顏ばせ、松吹く風の軒洩りて、御寢所とても大方に思ひやらるゝ。」トこなし。清玄「イヽヤ、浮世を捨てし身の、佛の御弟子となるからは、この世に望みは無けれども、叶へて欲しいは今一度。」ト袱紗包の羽織へきつとおもひ入れありて、清玄「エヽ、忘れたい〳〵、忘れたうござりまする。」トきつとなる。この時持つたる袱紗包解けて羽織落ちかゝるを、櫻姬見つけて、櫻姬「ヤヽヽヽ、こりやコレいつぞや清水にて、賴國さまがお召しなされしこの羽織。」つな「エ、賴國さまのお羽織を、清玄さまが、どうして御所持なされしぞ。」清玄「サアそれは。」トおもひ入れあり。清玄「エヽ、忘れたい忘れたい、二人の手前こればかりは。」櫻、綱「エ。」ト兩人見上ぐる。清玄目を閉ぢ、清玄「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」ト持つたる珠數にて拂ふ。大どろ〳〵になり、虛空より魂下り、好き所へ下る。圍爐裏の火の内より焰硝火立ち、清玄放心する。これより寐とり、修羅の太鼓、岩藤の亡魂あらはるゝ。櫻姬「ヤ、姉上さま〳〵。」つな「これはしたり、尼御樣、如何なされました、清玄樣……モシ〳〵、お姬樣、お白湯なりとも。」櫻姬「心得たわいの。」ト圍爐裏に有り合ふ鑵子の湯を汲み、清玄が側に持ち

國さまの、隱家を御存じあらば、どうかお教へなされて下さりませ。」ト此の内清玄、心苦しき思入にて、清玄「オ、、尤もぢや〳〵。其方ばかりか清玄も、賴國さまのお行方を、尋ねたうて〳〵……サ、尋ね逢うたら其方と仲好う、添ひ遂げるであらうと思へば、一倍コレ、この胸が、苦しいわいの、苦しいわいの。ア、、これにつけても、忘れたい〳〵、忘れんものと思ひ直して居るものを、其方があなたを尋ぬると、聞いては一倍この胸が。」ト思入。つな「申し清玄樣、何とやらあなた樣には、しどろ勝なるそのお詞、ことにお顏も面やつれ、こりや御所勞でござりまするか。モシ、お館の事、お案じあらば、申し〳〵、お氣遣ひはござりませぬ。お家の惡人岩藤は、人手にかゝつて相果てました上からは、入間のお家は萬々歲。」清玄「サ、その入間家のをさまりも、わしに代つて其方こそ、ふたゝび館へ立歸り。」ト思入。つな「お行くへ知れぬ賴國さまと、めでたうお添ひなさるれば。」清玄「エ、、又かいの。その賴國さまを、忘れたうて〳〵、心もこゝろならぬもの、又そのやうな……南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」ト耳を塞いで思入。櫻姬こなしあつて、綱女心付かず、つな「これはしたり、何を仰せられまするぞ。そのお姿であるからは、松若さまのことならば、忘れたうも思召しませうが、モシ、あの賴國さまは、櫻姬さまのお添ひ遊ばす、お聟樣でござりまするわいな。」清玄「エ、、まだ云やるかいの。その妹が添はうと云やる賴國さまを、早う忘れて見たいわいの〳〵。」つな「これは又、怪し

清玄「すりやアノ、何者が牀したへ、隱し置いたる半がいの。」　櫻姬「アノ、あのうちに居りましたは。」
清玄「アノ、お前か。」ト櫻姬を見る。この時焚火ばつと燃え立つ。明に三人顏見合はせ、おもひ入れありて、つな「ヤ、あなたは慥か、花子さまぢやござりませぬか。」　清玄「さう云やるは、綱女かいなう。」
櫻姬「なに、姉上樣とや。」　清玄「ヤ、其方は櫻姬。」　つな「思ひがけなう御息災で。」　清玄「其方も無事で。」
櫻姬「姉上樣にもお變りなう。」　清玄「イ、ヤ、變りしこの姿、恥かしいわいなう。」　つな「花子さま、お懷かしうござりました。」　櫻姬「悲しいながらも、御堅固のあなたの御樣子、お行方知れぬ姉上樣、この所に御座あらば、お文の便りもあるべきに、悟りきつたる貴方の御心。モシ、お懷かしうござりまする。」　つな「御尤もでござりまする。モシ、花子さま……アイヤ、唯今にては清玄尼さま、私がお附き申した其のうちより、お云號の松若さま、この世に亡きと沙汰ありし、その砌より剃髮の、お望みありし事なれば、新清水の御弟子となり、殊には入間のお家には、惡に凝つたる局岩藤、彼らが企みも氣遣はしく、櫻姬さまへ幸ひと、常陸之助賴國さまと、御緣談の取結び、昨日不思議に姬君樣へ、お目見え致したこの綱女、何かのお話聞きし內、清玄尼さまにも新清水にて、お逢ひなされし賴國さまが、今に於てお行くへ知れぬと、それを苦勞に遊ばして、お隱家を尋ねるため、お姬樣のこの程家出なされしも、御尤もでござりまするわいな。」　櫻姬「殊更あなたは、この處のお住居、戀しと思ふ賴

お尋ね申しにこの邊へまゐる筈。マア〱、左樣ならあの庵室へ參りまして、介抱いたして一禮も、マア〱、斯うお出でなされませ。」ト時の鐘、蛙の聲。櫻姫が手を執り、窺ひて内へ入り、つな「ア、こりや暗うござりまするぞよ。」ト云ふうち、圍爐裏の火自然とたきさし燃え上る。そのあかりにて櫻姫、清玄が倒れ伏したるを見て、櫻姫「コレ、爰に庵主は氣を失うてぢやわいの。」つな「其處にでござりまするか。ア、コレ、折惡う藥も無し。」ト爐に掛けし鑵子の湯を汲み、持ち行き、つな「申し、御庵主樣御庵主樣。氣を確かに持ちなさんせえ。」ト呼び生けて介抱する。清玄心付いたる科にて、清玄「アア、もう心がつきました。病の上に手荒う打たれ、身内の惱みが、アイタ、、、。」つな「何か樣子は存じませぬが、憎い奴等でござりまする。」清玄「何人かは存ぜねど、忝うござりまする。」つな「ハイハイ……ほんに爰に行燈がござりました。私が燈をつけまする。マア〱、お前は冷えては惡うござりませう。殊にマア、まだ春風の肌寒う、アノマア、焚火へ、サア〱、お前樣、介抱なされて。」櫻姫「サア、爰へお寄りなされませ。」トいたはる。清玄「モウ〱、心は確かになりました。お優しい女中の、忝うござりまする。」ト此のうち行燈を燈し、圍爐裏へ差寄り、つな「私どもは道行く者でござりまするが、御難儀の樣子を見受けましての儀。マア〱、焚火へお寄りなされまして。」櫻姫「殊にわたしは狼藉者に出逢うて、思はず爰へ參つた故、あなたの今の御難儀も、皆自らより起りし事。」

藏窺ひ見て、つな「ヤ、姫君樣ぢやござりませぬか。」櫻姫「ヤ、わがみは綱女、コレ、助けてたもいなう。」つな「御勿體ない、どうしてあなたを。」彌藏「コリヤ、女中を捕へて、どうするのぢや〳〵。」ト立ちかゝるを四人は隔てて、勘六「寄るなえ。そんなら汝等は、新造の采女を上げた奴の、身寄りだな身寄りだな。」三人「指でも付けると、同類だぞ〳〵。」つな「ア、コレ、待たしやんせ、大切なあのお方を新造の采女とは……ア、、そんなら小袖の間違から。」四人「ナニ、どうしたと〳〵。」つな「ア、モシ、お前方も滅相な。その子を捕へて采女とやらとは、そりや間違であらうぞえ。」皆々「何が間ちがひ。」つな「それ見さんせ。」ト提灯をさし出す。皆々見て、權、勘「ほんに、こりや采女ぢやァないワ。」彌藏「ソレ見をれ、此奴等は、こりや誘拐か盜人か。村中へ觸れまはつて引ッ縛るぞよ。」四人「ナニ、この在鄕めが、どうしたと。」彌藏「ソリヤ、盜人ぢや〳〵。」ト棒を無性に振廻す。四人これに驚き、捨臺詞にて向うへ驅け出す。彌藏「盜人ぢや〳〵。」ト棒を振廻し、向うへ追うて入る。櫻姫、綱女に縋り居る。この騷ぎ紛れに綱女の持つたる提灯のあかり消える事。つな「モシ、お姫樣、あなたの在所を軍助もろとも、尋ねて參りました。殊に源吾に奪はれし、一卷も取返しました。サア〳〵、この間に少しも早う。」櫻姫「ア、コレ、自らは格別、いとしいはあの庵室の尼御と見え、自らゆゑに思はぬ災難、撲ち打擲に氣絶して。」つな「それはマア氣の毒な。見捨てまするも本意ならず。夫軍助事も、

勘六「サヽ、その誰やらを吐しやァがれ。」 清玄「サア、それ覺えて居るほどならば、なんでうかく預らう。」 權七「あづからぬものが、なぜあのあまが爰に居たのだ。」 清玄「サアそれは、」 又「サアそれでもすさまじい。吐さぬ内はぶんのめすヮ。斯うして預けた男めを。」 權七「斯うして云はせるヮ。斯うしてかうして。」ト二人は清玄を割木にてしたゝかくらはす。清玄病氣のうへに手酷く打たれ、苦痛の思入にて、うんと倒るゝ。勘六窺ひ見る。權七これを知らず、 權七「此奴はものをぬかさないか。」ト打ちにかゝるを、勘六留めて、 勘六「コレ〳〵、待て〳〵。どうか庵主めは、目でも廻したさうなぞよ。あんまり打つな〳〵。」 權七「ナニ目を廻した。そいつは死んだ眞似だらう。曳摺り起してあづけた奴を。」 勘六「コレサ〳〵、采女さへ取りもどせば此方は十分だ。懸り合ひにならぬ内、早く行かう〳〵。」 非人「さうしなさい〳〵。この女は、わしらが引擔いで行きやせう。」 勘六「さうすべい〳〵。ぶちはなしにして行かう〳〵。」 權七「逃すなよ〳〵。」 非人「合點でごんすよ。」 權、勘「サア、行け〳〵。」ト時の鐘、禪のツトメになり、兩人は櫻姫を引立て先に立ち、勘六、權七、捨臺詞にて向うへ掛る。揚幕より彌藏、捨壽詞にて棒を擔ぎ、道を教へながら、綱女、小提灯を持ち行く。櫻姫がゆくへを尋ねる心にて出て來り、 彌藏「眞直にござれば、淺茅ヶ原に出ますぢや。」 つな「忝うござりまする。」ト花道にて行き逢ふ。 櫻姫「アレ〳〵〳〵。」ト聲を立てるを二人の非人、口を押へ手荒く行きかゝるを、綱女彌

る。清玄驚く。四人「そりや出たア。」ト驚く拍子に、權七、弓張の燈をおもはず消す。勘六は持つたる行燈を投げて追ひ驅けるゆゑ、燈消える。勘六「エヽ、何をする、燈が消えたワ。」權七「おぬしも消したワ。暗がりで逃すな」兩人「合點だ〳〵。」ト清玄を捕まへ居る。勘六「暗いとて大事ない、櫃の中から飛びだしたは、釆女に違ひない。小袖の模樣をちらと見ても、やるものではないワ。」權七「コレコレ、二人の者、此のあまめを、つらまへて居ろ〳〵。」兩人「呑みこみました。動くまいぞ。」ト清玄をつゝき飛ばし、探り寄つて櫻姫を引付ける。勘六「これ程マア、あのあまめを隱まつて置きながら、知らぬ知らぬと坊主の癖に、よく譃を吐きをつたな。エヽ、こゝな譃つき坊主め。」ト清玄を蹴飛ばす。權七「コレ〳〵、そりや尼だよ〳〵。」勘六「尼でも比丘尼でも坊主にちがひない。その釆女をあづかつて置くからは、預けた奴があらう。サア、それをぬかせ〳〵。エヽ、ぬかしやアがれ。」トくらはす。權七「比丘尼の癖に驅落者を預るとは、たけの知れない賣主め。あづけた奴を、吐しやアがれ〳〵。」と割木を探り取つて、清玄尼を二人して打ち据ゑる。櫻姫氣の毒がり、立ち上るを、非人兩人引付け、動かせぬ仕組み、清玄尼は二人が打擲の割木に縋つて、清玄「そりや無體であらう。いつの間に、どうして其のやうな怪しい女子を、尼の身でなんのマア預らうぞ。とは云ふものの、この庵室に・女子を隱してあつたのも合點の行かぬ……そんなら若しや最前、御經讀誦のそのうちに、誰やら伴れて。」

此方も又、御本尊を誓ひにかけ、毫頭左樣なものを隱まうた覺えは無いが、左程までに云やること、疑ひ晴らすは苦しうない。僅かな庵室、遠慮無う、詮議して行きやいなう。」勘六「面白い〳〵、詮議しませう。毀れかゝつたこの庵室、佛壇から湯灌場まで、こりや家捜して見ようッ。」權七「そのお許しの出るを待つて居た。わいらは緣の下や、墓場の隅まで尋ねてくれろ。」三「吞みこみました〳〵。」勘六「ヤア〳〵、佛壇の方から尋ねべいか。」ト佛間へかゝるを、淸玄うろたへ、羽織を見られじと思入ありて、佛間を圍うて、淸玄「滅相な。何でマア、この佛間に左樣な者が。」勘六「なんだ、大分膽を潰したの、なほ〳〵怪しいわえ。探せ〳〵。」ト行燈を提げて、障子の內なぞを尋ねる。權七、提灯にてそこらを尋ねる、二人の非人、墓所生垣を尋ね廻る。淸玄はこの間に人に見せじと件の羽織をそつと出し、袱紗包のまゝ抱へ居る。權七ふつと古簑を見付け、引退けると小袖櫃出かゝつて居る。權七「コレ、コレ、この緣の下に、たしか先刻の小袖櫃が。」勘六「ナニ櫃があつた。」ト見て、勘六「オヽ、これだこれだ。引出せ〳〵。」非人「合點だ〳〵。」ト皆々寄つて櫃を引出し、勘六「コレ〳〵、これだ〳〵。これ程隱して置きながら、知らぬ〳〵と、よくマアこなたは、しらをきつたの。」淸玄「イエ〳〵、どの樣に云はしつても、決して覺えの無いその品が、どうして其處に。」勘六「どうしても凄まじい。內を明けろ〳〵。」三人「合點だ〳〵。」ト立ちかゝつて蓋を明ける。內より櫻姬、新造の振袖を著て走り出

囁き〳〵、用心して居る、簀戸明けてあるゆゑ、勘六ずつと入り、うそ〳〵見廻し、勘六「モシ、ちとお頼み申しませう。唯今これへ荷を擔いだ男がまゐりましたらう。エ、モシ、その男は何處へまゐりました〳〵。」ト色々云うても、佛間には清玄一心に經を誦み居る。權七「エヽ、この坊様は、人にばかり口をきかせて。コレサ、挨拶をさつしやれよ。イケ馬鹿々々しい。」と大聲に云ふゆゑ、清玄惘りして、清玄「ヤ、其方衆は何でこの庵室へ、何の用で來やつたのぢや。」勘六「モシ〳〵、たつた今荷を擔いだ男が、茲へ來た筈でござんすが、何所へ隱しやりました。」權七「その野郎を、爰へ出してもらひませう〳〵。」清玄「ヤ、何と云やる。荷を持つた男が、この庵へ來たと申すのか。」勘六「來た筈ぢや出して下さりまし〳〵。」清玄「イヤ〳〵、左樣な者はこゝへは見えぬが、そりや其方衆、間違であらう、外を尋ねて見さつしやれいの。」權七「モシ〳〵、そんなしらをきらねえものだ。たつた今爰へ驅けて來たに違ひない。隱し立てをせずと出しなさい。コレ、年のある女郎を櫃へ打込んで、こゝへ逃げて來たのだな。」勘六「コレ、坊さん、聞きなさい。人誘拐しだよ。そいつは關破りだよ。隱し立てをすると、こなさんも同類。詞の甘い内に出さつしやい。出しやれな〳〵。」三「親方、家搜しをさつしやいな〳〵。」ト口々にわめく。清玄「ヤイ〳〵待て、見れば賤しい者どもまで、同道なしてのこの狼藉、此方に覺え無き事ながら、それ程までに申すことなら、よもや其方衆はいつはりもあるまいが、

た今の奴がうせねばよいが。」トむかうの方へ心遣ひする。揚幕より、ばた〱と人音して、わや〱人聲する。惣太氣を苛ち、「南無三、うせるワ〱。サア〱〱、斯うしては居られぬ。エヽ、コレ、せめてこの荷を。」トいろ〱して、佛間の緣の下の崩れあるを見つけ、「ちつとの間この牀下へ。さうださうだ。」ト壁の崩れへ櫃を捻込み、半分出かゝりし所へ、著て來たる物を脱いでぶつかけるところへ、向うにて頻りに人音近づく事。惣太、門口より向うを窺ひ、思入あつて、門口の生垣を破り逃げ行く。時の鐘になり、勘六先に權七、鴈金屋といふ弓張を燈し、野伏り三、又、賴まれし體。捨てぜりふにて出て來り、三「モシ〱、親方、そりやァ今、櫃を擔いで通つた男でごんせうの。」勘六「オオ、それだ〱。」又「しかも面構へが、高麗屋に似て居やしたよ。」勘六「其奴だ〱。脊負つて居た櫃内には、新造の采女といふを隱して置いたワ。」權七「何でも、てまへ達も骨を折つて、賴む〱。」又「そいつはおつりきはなしでござりやす。角の八本生えた奴だとて、ナニ怖いものか。なう三や。」三「骨つきりはたらいて上げやせうその代り、頭が彼のに間違はあるまいね。」トおもひ入れ。權七「呑み込んで居るワ。併し、あの庵室より外に行く道はあるまいな。」三「イエ〱、道は無いが、それともくねを破つて。」又「なにサ、荷を擔いでは垣を破つて行けまいて。何にしろ、あの庵室に違ひないワ。」權七「さうだ〱。三、驅けて見さつし。」ト四人門口へ來る。野伏り二人、割木なぞを持ちて、

その櫃を明けて見せろ〳〵。」惣太「サ、蓋を取る事は、どうもそりやア。」勘六「そりやこそな。いよいよ采女は櫃の內。きり〳〵見せろ。」惣太「イ、ヤ、どうあつても見せる事は成らねえが、强つてと吐しやア、コレ、一本差して來たぞ。うぬ、ぶつた切るが、放さねえか。」勘六「ナニぶつた切る。さうぬかせば、うぬをぶッ挫くワ。」惣太「おれが又ぶつた切るワ。」勘六「叩き挫くワ。」惣太「ぶッた切るワ。」ト拔かうとする。立廻りよろしく、惣太勘六を、見事に投げる。起き上るを、白刃を拔き、振上げる。勘六「ヤ、拔きやアがつたな〳〵。」ト飛び退いて、勘六「今にどうするか、待つてうせろ〳〵。」ト矢張捨鐘にて、向うへ走りはひる。惣太白刃を納めて、惣太「飛んだ奴にかゝつて大きに隙取つた。ドリヤ、一走り。」ト行かうとして、惣太「イヤ〳〵、今の野郎めが又引返して、ひよつと大勢來やアがつちやア……ア、コレ、どこぞ。」ト庵室を見て、惣太「爰は幸ひ淺茅ケ原の妙龜庵、ちつとの閒あの庵室を。オゝ、さうだ〳〵。」ト門口へ來て、「モシ、ちとお賴み申しませう〳〵。惡者に逢つて難儀する者でござります。モシ、些との閒お貸しなすつて下さりませ。エ、モシ〳〵。こりやアどうだ。もう寐さしつたか。」ト門の簀戸を、いろ〳〵して、竹の閒より手を入れ、鐉を拔き、ずつと內へ入り、「ヤレ〳〵、用心のよい內だ。モシ、ちつとの閒置いて下さりませ。エ、モシ〳〵。」ト云うても淸玄構はず、一心不亂に佛閒に向ひ、お經を讀誦して居る。「なんだ、あの人は聾ださうな。ア、コレ、ま

忍びあるかと思ふうち、來かゝる船に似寄りのお聲、近寄らんにもなさけなや、お姿さへも水馴棹、心急くまゝ船路の別れ、猶更いや増す心の内を、推量なされて下さりませ。」ト羽織をとらへ、いろいろ思入あつて、「つれないお方と思ふ程、因果にわたしや忘られぬ、モシ、忘れたうござりますわいなア。」ト思入、此のとき向う、バタ〳〵にて人音する。きつと目を著け、「また妨げの無いうちに、御本尊へ手を合はせ、心の曇り、晴るゝとも、道ならねどもいま一度、どうぞあなたに。」ト羽織を抱へ思入あつて、「さうぢや。」トあつらへの合方、そろ〳〵立つて、佛間へ上り、前通りの障子をさす。禪のツトメになり、向うより惣太、以前の櫃へ古蓑をかけ、一本差し、走り出て來る。跡より鴈金屋の勘六、追ひ驅け來り、花道にて捨てぜりふあり、立廻りよろしくありて、勘六「ヤイ〳〵。盗人め。どこへ持つて行きをる。やることは成らねえぞ〳〵。」惣太「何を吐しやアがる。おれが櫃をおれが持つて行くを盗人とは、さう云ふうぬが盗人であらう、放しやアがれ〳〵。」勘六「コリヤヤイ、櫃はおのれが道具にもせよ。其のうちには此方の抱へ新造の釆女。どこへ擔いで走るのだ。やる事は成らぬぞ成らぬぞ……エヽ、あの權七めは、どこではぐれたやら。」ト跡を見やつて思入。惣太「何をぬかしやアがる。此のうちに新造の釆女とやらが入れてある。コレエヽ、そんな覺えは無いぞ。邪魔をせずと、退きやアがれ〳〵。」勘六「イヤ〳〵退かぬ〳〵。汝が其のやうに、覺えが無いと意地張るなら、サ、

妹は、夫に持ちやる仕合な。それに引替へこの姉は身は埋れ木といふものの、一生殿御の肌知らず、せめて一夜さ、あのやうな、殿御と枕かはしなば。」ト思入あり。「サ、思はずわたしは迷ひの心。勿體ない勿體ない、未來にお出で遊ばさるゝ、松若樣へ操が立たぬと、心で心取りなほし、忘れたう思ふほど、夢幻といひながら、お情受けし正夢も、尼となる身に天魔の魅いりと、思ふも理、モシ。」ト羽織をきつととらへ、「エヽ、お情ない松若さま……現在あなたの御菩提に、尼となる身の花子にさへ、お名をおつゝみ遊ばされ、この清玄が見る前で、櫻姫とまなびの祝言。その時妹が懷中より、落ちた袱紗は富田裂、さてこそ實名松若さまと、存じだなれどあなたには、云はば天下のおたづね者、口外なすは御身の大事と、他聞の無きを幸ひと、いろ〳〵お尋ね申しても、現在連れ添ふわたしにさへ、明し給はぬその上に、つれない邪見なお心は、お氣に叶はぬことあつて、嫌はしやんすと思へども、どうした事にや胴慾な、つれない貴方が、わたしやどうも忘られぬ、因果な事ぢや、忘られませぬ。」ト羽織を取つて、いろ〳〵あり。「いつぞや隅田の川水に、身を沈めんと思ひしを、里人に助けられ、この庵室に今日と待ち、明日と數へて暮すのも、命の内に今一度、お顏を拜んで死にたうござんす。モシ、夢になりとも隱家を、尋ねんものとさまようて、昨日黄昏隅田川、あいろもそれと分らねど、水にせかれて流れ寄る、文字も怪しき高札に、あなたの素性を記せしは、さては愈この邊に、

ト暮六ッの鐘、すた〳〵と向うへ入る。清玄のこり、おもひ入れあり。清玄「ありや暮六ツ。ドリヤ、佛前へ御燈明を。」ト木魚に伏鉦の入りたる誂への合方、蛙の聲聞える。清玄立ち上り、氣合の惡き思ひいれ。やう〳〵と圍爐裏の際より燧箱を取りよせ、火を打つて佛前へ燈し、行燈へも火を燈し、こなしあつて簀戸を立て鎖を懸け、此方へ來るとて、よき所にある竹筒に生けたる以前の櫻を見て、思入あつて、取上げ、きつと眺め、清玄「浮世の人は花と見ん、この清玄が眺むるは、廣い世界に。」ト佛間の方を振りかへつて思入、鳴物かはり、こなしあつて、そろ〳〵と佛間へ上り、厨子を開き、内より四建目の羽織を出し、「申し、松若さま。」ト羽織を抱きしめ、いろ〳〵あつて、「モシ、松若さま、あなた樣とは親々の、お許し受けし縁定め、まだ輿入れの無い内ゆゑ、お噂ばかり聞くものの、早うお顔が拜みたい。逢ひたい見たいに、あなたのお姿、繪に畫かせ、恥かしながら朝夕に、肌身に附けて居りましたわいなア。その效も無う松若さま、お行くへ知れず剰へ、敢なくお去りなされしと、聞いて身も世もあられませうか。モシ、あなたの後世を弔はんと、去年彌生の花の頃、新清水にて剃髮の、その日に至つて年頃も、松若さまに似寄りのお方、お名を問へば常陸之助頼國さまとて、櫻姫とは俄の縁組み、妾が爲にも妹が壻がね。ア、、我が夫榮えましまさば、丁度あなたの年輩と、松若さまの姿畫に、合はせて見れば生寫し、勿體ない事ながら、好い武士ぢやきつとして、立派な殿御を

彌藏「そりや何よりのお見舞ぢや。サヽ、始めさんせ〱。」無縁「ドリヤ〱、笑はせ踊を始めうか。」トこれより地へ取り、無縁「かさい金町半田の稲荷、疱瘡も輕い痲疹も輕い、芝居繁昌念願成就、敬つて申す。」トをさまる。彌藏「イヨ、よい〱樣〱。」清玄「氣輕なお方ぢやわいの。」トおもひ入れ。無縁「そりや尼御が、につこりやられたワ。何よりは氣の藥。」彌藏「これをお前のはねにして。」無縁「イヤ、相變りませぬ儀右衞門をお目にかけます。」彌藏「なにを云ふぞい。ハヽヽヽ。サ、連れだちませう。」ト合方になり、無縁坊、半田稲荷を踊りながら、彌藏、天秤棒を持ち、すてぜりふにて向うへはひる。清玄「ア、モウ、氣合の惡いたゞ中へ、こゝろないあのお方。」ト思入。妙林、藥を茶椀へ上げ持ち行き、妙林「ハイ、お藥を上げませうか。」清玄「オヽ、もう藥はこれぎりかや。」妙林「左樣でござりまする。わたしや一走り、潮入村のお醫者樣へ行て、お藥を取つて參りまするぞや。」清玄「アコレ、お藥はもう捨てて置きやいの。」妙林「ハテマア、その御病氣で、どうしてお藥を捨てて置かれませうぞ。つい行て參りますわいな。」清玄「それぢやと云うて、もう暮れるぞや。」妙林「アイ、提灯を付けて參るから、お案じなされまするな。」ト盆提灯に三界萬靈と書いたるを出し、燈を燈す事あつて、やす下駄を穿き、妙林「ハイ、行て參りまするぞえ。」ト門口へ出る。清玄「オヽ、早う戻つて來や。」妙林「アイアイ、必ずお冷えなされまするなえ。」清玄「心得ました。はやうもどりや。」妙林「畏まりました。」

知れましたわえ。」ト云はれ、清玄悔りして、清玄「エ、アノ清玄が病のおこりが。」ト思入。彌藏「サ、、てツきりわしが思ふには、先の庵主が辨天の、建立しかけて死なれたゆゑ、お前もそれが出來ないでは、心にかゝるといふやうな、それが病の基でござらう。」ト云はれ、清玄落付きし思入。無縁「エ、、それなれば氣が小さい。愚僧もコレ〳〵。」ト勸化幟を出す。清玄見て、清玄「梅若山王と染めたる幟、それをお前が。」無縁「おいなう、梅若さまといふを、山王權現に勸請して、塚の建立を始めたのぢやわいの。」清玄「すりや、世を去りし梅若丸の。」ト思入あり。清玄「ア、これもこの身に縁ある御方、よくマア奇特に……南無阿彌陀佛々々々々々。」トおもひ入れ。無縁「サ、その序に辨天樣の建立も、してやりませうわいの。」彌藏「コレ〳〵坊樣、こなた、幟を持つて歩いたら、どうやら半田稻荷と云はれうぞや。」無縁「ハテ、この人わいの。よう物を辨へて見さつしやい。葛西金町半田稻荷といふ所を、岩井金箱半四郎、この芝居には稻荷とはどうぢや。」彌藏「こりや奇妙ぢやわい。ハ、、、。時に妙林比丘や、もう炭があるまいが、どうぢや。」妙林「アイ、藥を煎じて、炭は皆になりました。どうぞ買うて來て下さんせ。」彌藏「合點ぢや〳〵。晩にわしが擔げて來ませう。そこらにわしの棒が有つた筈ぢや。」ト天秤棒をたづね、麁朶割臺、鉈なぞを片付け、彌藏「サ、、坊さま、かへりませうぞや。」無縁「さうしませう。しかし、歸りがけぢや。尼御のお見舞に一ツ、につこり笑はせて行きませうか。」

てよいものかいの。知らつしやるとほり、去年までこの庵を、預つて居られた妙龜どのが、あの鏡ケ池の辨天樣を建立しかけて、ぶら〳〵病、成就せずに亡くなられた。この庵室に庵主は無し、ア、好いお比丘なと無いことかと、願ふに幸ひ。」彌藏「オヽ、それ〳〵、コレ尼御。こなさん去年の、ア、收穫時分でもあつたか、なにがマア氣になるやら、隅田川のあの深みへ、すんでの事にどんぶりと、身を投げられると見た故に、譯は知らぬが尼御の事、さのみな事でもあるまいと、留めて見たれば譯も無い、世に飽き果てて死にたいと、若い身空で埒もない、殊に良い衆の果てさうなと、村中寄つて只管に、この庵室の無住を幸ひ、あの妙林をつけ渡りにして、この庵を預けましたが、その時分からぶら〳〵病。コレ〳〵〳〵、病氣見舞と、畑縁に咲いたこの櫻、へし折つて來ました、サヽ、眺めさんせ眺めさんせ。」ト櫻の枝を出す。清玄「これは何より好い花を、忝うござります、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」彌藏「イヤ〳〵、まだござる〳〵。尼御へ進ぜうと思うて、コレ〳〵、私が手づから引いた引割、氣に入つたらいくらも取りに寄越さんせ。これは又旨うも無いが干蕪、病氣見舞に持つて來ました。」ト引きわりの袋、丸盆に載せて干蕪を清玄が前へ持ち行く。清玄「何よりの品々、佛前へ獻げ、その花も筒へ生けて置いてたも。南無阿彌陀佛々々々々々。」妙林「アイ〳〵。」ト櫻を竹筒へ生け、品々を片寄せる。彌藏「アヽ、こりや尼御のぶら〳〵病は、こりやてつきりと、ものでござらう。

サア、わしもさう思ふぢや、今日も見舞ひに來て見れば、アレ、あの小比丘が、飯拵へやら藥の世話やら、可哀さうに手一ッと思ふから、來合はせたを幸ひと、薪もこなして置きました。コレ〳〵、妙林比丘、あの御庵主は毎日修行といふ事ぢやが、昨日もアノ出られたのか。」妙林「アノ、昨夜はとりわけ雨に逢うて、濡れて戻りなさんした所爲かして、今朝から枕が上りませぬ。」無縁「何ぢや、濡れて歩かれたとか。エヽ、滅相な、そんな不養生があるものか、愚僧が逢うて、よう云ひませう、どこに寢てござる〳〵。」ト立ち上る。障子のうちにて、清玄「アイヤ、それへ行て逢ひませう。コレ妙林、枕許の障子を明けてたも。」ト誂への合方になり、妙林差寄りて障子を明ける。清玄病氣の體、絹の蒲團の上に地味なる絹の夜具に凭れ、括り枕、二枚折の屏風を建て、牀につき居る體。無縁「オヽ、清玄さま、どうぢや、無縁坊でござる、修行のついでに見舞ひました。」彌藏「今日はこゝろよい方かの。ちよつと見舞うて行かうと來て見れば、薪もアレ〳〵、枝おろしたまゝ、妙林比丘が手には行くまいと、ようわしがこなして置きましたぞや。」清玄「それはマア忝うござります。殊に毎日々々お前方の御見舞ひ、ようマア心にかけて、嬉しうござりまする。昨日は餘程快う覺えたゆゑ、氣晴らしながら、關屋から綾瀬のあたり、野に咲く花も一入と、眺むる内に驟雨、濡れて戻つたせるかして、昨夜から又寒氣が強うて。」ト思入。無縁「アヽ、らつちもない、其のマアぶら〳〵やまひに、風に吹かれ

の生垣、石地藏、石塔など建てあり。上に浪板、鏡が池といふ高札、よき所に圍爐裏、欄間より自在の竹に罐子を懸け、妙林、黑木綿比丘の頭巾、鼠木綿布子、尼の拵へ、圍爐裏に藥鍋を掛け、これを煎じ居る。門口に潮入彌藏、ぼつとせ鬘、手拭を鉢巻にして木綿袷、百姓の拵へ啣へ煙管にて薪割臺へ麁朶をあつめ、鉈にてこなして居る。すべて淺茅ケ原妙龜庵の體。三味線入りの禪のツトメ、誂への鳴物にて幕明く。ト彌藏は麁朶をこなして居る。矢張この鳴物彈流しにて、向うより前幕の無緣坊、梅若山大權現敷石建立と染めたる勸化幟を持ち鈴を振つて、すた〳〵と出て來り、門口へ來て、

無緣「隅田川木母寺梅若塚敷石建立。」ト鈴を振る。彌藏「これはしたり、とほらつしやい〳〵。」ト見て、

彌藏「イヤ、こなさんは隅田村の無緣坊ぢやないか。」無緣「オヽ、此方は潮入の彌藏どのぢやないか。」

彌藏「彌藏どのどころかいの、氣を附けさんせ、いかに修行ぢやというて、この庵室へ手の內貰ひにござるとは、コレ、此方から貰ひに出る、本家ぢやわいの。」無緣「なるほどなア、ツイ、うか〳〵と爰へ來て、尼御の庵へ修行とは、其處が彼の博學多才の無緣坊、孔子も時に逢はずなア。」ト內へ入る。

彌藏「措かんせいの。こなさんの樣な、よい〳〵孔子が、何處の國にあるものかいの。」無緣「これはしたり、御丁寧な御挨拶。ハヽヽ、時に庵主はどうぢや、病氣は快い方かな。」妙林「イエ〳〵、まだいつもの通りにぶら〳〵煩ひ、その病身な清玄尼さまが、毎日々々御修行に出てぢやわいな。」無緣「ハテ、そりや惡からうに、暖まつてござればよいになう。彌藏どの、さうぢやござらぬか。」彌藏「サア

み、惘りして、清玄「ヤ、、、、、さては違はぬ松若さま。」ト惘りし、持つたる高札を川へ落す。この聲に松若心得ずと清玄に目を著け、松若「その面相は似寄れども、形は雪に墨染の、破れ衣に破れ笠。」清玄「それも誰ゆゑ。」ト小袖に目を著け、清玄「ヤ、櫻姫がたしか著替の。」惣太「エ。」ト櫃の内と心得、惘りする。松若、清玄が物ごしを窺ひ。松若「さてこそ違はぬ。」清玄「お聲は正しく。」トよろ〳〵と立ち上る。惣太おもはず棹にて向うの船を突く。漁船くる〳〵と廻つて西の方へ著く。渡船は東の方へ著く。驅け寄る清玄、たじ〳〵として小袖櫃の蓋へ手を突くこと。惣太「當ります。」トこれを木の頭。惣太「靜かにあがりなさい。」ト肩にて棹をさす。清玄は蓋へ手を突き、ほいなき體。内の姫段々と隠れる。松若は小袖を持ち、笠にて顔を隠す。暮六ッの送り鐘、三方一度のとたん、この仕組み、きざみの拍子木よろしく拍子。幕。

第二番目　中　幕　妙龜庵の場

本舞臺、三間の間、上の方小高き藁葺の屋體、佛壇に誂への廚子佛具よろしく飾り付け、牀の下出入りあり、正面反古貼りの明り障子を立てたる竹椽つき、下地窗、鼠壁崩るゝ仕かけ、雲手の手水鉢、門口竹の簀戸、外輪

この頃はモウ白魚が、剛氣に尾久へ下るて。ほんに、こゝの船を漕いで、樣々な事を聞かれるよ。名代の隅田川の渡だ。こゝの船頭は、ちつとは謠も覺えて居ねばならぬ。」清玄「ア、、アレ〳〵、流れて行くあの白い物は。」ト朧に見える心。惣太「ナニ、流れて行くなら、わしが袷だが、川を流れて行くのか。なにサ、ありやア鷗……イヤ、こゝらが謠で教へるところだ。エヘン〳〵、あの白く流るゝは都鳥にて候。又此方に黑く流るゝは、鵜が鰻を呑むのにて候。ハ、、、、。」清玄「ホ、、ホ、、氣輕な人ぢやわいの。」トこの時によき處へ、最前の切り落せし高札流れ來る。清玄ふつと目を著け、清玄「何やら文字の記したる。」ト杖にて搔寄せ引上げ讀まんとして、月に雲かゝりし體にて、朧に見え分かぬ仕組み。惣太これを知らず、船は段々と東の方へ漕ぐ心にて、舞臺前の牓示杭、波板、柵、水草、花道の方へ引いて取る。正面の張物うち返しにて、川中になる體。此のうち始終誂への合方。東の方より小船に棹さし、松若丸、深き竹の子笠、古き藁蓑を結構なる衣裳の上へ引掛け、さでを持ち、篝火を焚き、白魚くみの思入にて出で來り、眞中にて船行逢ひ、松若、さでにて汲む。この時最前川へ落ちたる櫻姫の小袖、さでにかゝつて上る。松若取上げ、篝火にて見る事。清玄も篝火を幸ひと高札を讀む。松若「いとも派手なる模樣の振袖。」トこれを聞き、櫃の内の姫、そろ〳〵と内より蓋を差上げて窺ふ思入。もつともこれは吹替なり。清玄「賴國とは變名にて、誠は吉田の松若丸。」ト讀み讀

船待ちをする。捨鐘になり、向うの岸へ惣太、以前の小袖櫃をかゝへ出て、惣太「エヽ、今の一降りでづぶ濡れになつた。殊に陸を行つたら、今の奴等がうるさくつて成るまい。ドレマア、この櫃を船へ打込んで、しづむ所は潮入村の。それがよい〳〵。」ト船の内へ入り、櫃をよき所へ置き、手棹をさして乘り出す。淸玄これを見つけ、淸玄「ア、コレ、その船に乘せて下さりませぬか。」惣太「ナニ乘せてくれろ。貴樣は往來の人か。」淸玄「アイ、往來の者でござりまする。渡船と見受けました。わたして下さりませ。」惣太「なる程、こりやア渡船だが、おらアちつと急に川上へ乘り出す船。して、貴樣は何處へ行く人だえ。」淸玄「アイ、淺茅ヶ原の庵室まで參る者でござりまする。どうぞ乘せて下さりませ。」惣太「アヽ、淺茅ヶ原へ通る人か。そんなら滿更乘せずにも置かれまい。エヽ、小面倒な。」ト棹をさし、船を花道の方へ乘りつけ。惣太「サア〳〵、乘らつしやりませ〳〵。」淸玄「これは忝うござりまする。南無阿彌陀佛。」ト船へ乘る。惣太、じろ〳〵見て、惣太「アヽ、坊樣だの。」淸玄「左樣でござりまする。」惣太「おらア又、女の聲だと思つたが。」淸玄「アイ、尼でござりまする。」惣太「アヽ、比丘尼か。どうか若い聲だの。なにか、小梅の尼寺へ行かしつたのか。」淸玄「ハイ。」惣太「ソレ出すよ。」ト棹をさし、船は出る。此のうち淸玄、小袖櫃へ腰を掛け居て、東のかたを見て、淸玄「コレ、渡守どの、あの燈は何の爲に、船で篝を焚きまするぞ。」惣太「エヽ、あの燈か。ありやア白魚を取るのサ。

本舞臺、三間の間、向う遠目に見たる隅田川の體。雨落ち葭の茂り、しがらみ波板などをせり上げ、所々に野桃の盛り、本雨頻りに降り、入相の鐘、蛙のこゑ、上にありし渡場の榜示杭、下の舞臺先へ來る。道具とまる。ト爰にて誂への唄淨瑠璃になり、好き時分雨は止む。唄の内、向うよりやつれし清玄比丘尼、墨の古法衣、松若の羽織を淺葱の大袱紗に包み、これを斜に脊負ひ、素足にて安下駄を穿き、綱代の市女笠やうの古きを被り、竹杖を突き出て來り、花道にて思入。此のうち蛙の聲、藪鶯囀る。空には鴈金四五羽飛び、清玄こなしあつて、

清玄「ア、身は雲水の定めなき、佛に仕へ奉り、來世を願ふも何ゆゑぞ。云號せし御方の、この世に亡きと聞きしゆゑ、望み無き身と尼法師、唯情なきは清水にて、初に逢うたる賴國どの、過ぎ行き給ふ松若さまの、その姿繪に生寫し。ア、好い殿御振と思はずも、迷ふは即ち凡夫心、悟りの胸も花ぐもり。」ト思入。此のうちトヨヒにて空には鴈がねのこゑ、鶯の鳴く音にこなしあつて、「藪鶯は法華經と、經誦む鳥の花を戀ふ。さかりの花を仇事と。」ト我が姿へ思入あり。「見捨てて歸るかりがねの。アコレ、心々の世の中ぢやなア。」ト思ひいれあつて辿り來る。唄淨瑠璃殘りの文句一ぱいに切れる。清玄舞臺へ來り、川の面を透し見る。此のうち誂への合方、時の鐘、雨は小止みし體、あたりを見、「とやかうする内、こゝはもう隅田川の渡場、ア、もう春雨もやんださうな。この間に早う。」ト向うを見て、「渡守も居やらぬ樣子。暫くこゝで、船の便りを待ちませうか。」ト川端の石に腰打掛け・

の小袖があるばつかり、紛らはしい櫻姫、見違へぬ樣に小袖は川へ。」ト前の流れへ投げ込む。小袖、川の面を流れ入る。采女「ヤ、、、お姫さまよりお願ひ申し、あづかり置いたるあのお小袖、隅田川の渦まく波間へ。オ、〳〵ホイ。」ト思入あり。采女「申譯にはこなたの實名、吉田のお家に敵對し、源吾貞景といふ事を、軍助どのへ知らせた上。」ト行かうとする。貞景「べら坊め、それを云はれてたまるものか。」采女「そんならわしが持つて居た、その一卷を返さんせ。」貞景「一旦手に入るこの一卷。要らざる賣女め、口外するとぶツ放すぞ。」采女「どうぞ一卷を。」ト縋るを、貞景「エ、、面倒な。邪魔をひろげば、うぬもこの世の。」ト采女を引付ける。足下に蹈まへ、仕込みを拔かうとする。この時ばたばたにて、綱女走り來り、この中へ入り、采女を圍ひ、貞景を見て、つな「ヤヽこなさんは、たしか松井の。」貞景「おのれは下部軍助が。」つな「女房の綱女。源吾どの、さてはこなたは姿を變へて。」貞景「隱れ窺ふこの樣子、見られた上は、うぬも生けては。」ト切り付ける。綱女走り廻り、この時貞景懷中より一卷を落す。采女手早く取つて、采女「こりや姫君より預りし。」つな「お家の重寶都鳥。」貞景「その一卷を。」ト切り付ける。綱女在り合ふ敷ござを取つて白刃へ打ちかけ、きつと留める。采女一卷を持ち行かうとするを、貞景、采女が裾をきつと蹈まへる。この見得よろしく、入相の鐘、雨車の音烈しく、道具廻る。

執る。采女「エ、、源吾と云はんす修行者は、正しく松井の。」貞景「いかにも源吾貞景だワ。」采女「さては吉田のお家を亂せし、アノこなさんが。」貞景「いかにも。一卷を所持なすからは、疑ひも無き入間の姫たる。」采女「アイ、櫻姫でござりまする。」ト思入。惣太「イ、ヤ、貞景御油斷あるな。姫といふのは僞りにて、浮川竹の下素女、その名も采女といふ新造。誠の姫を軍助が、かくし置いたるこの櫃を、宙で攫つて、コレ爰に。」貞景「すりや、この女は某を、僞る爲の似せものとな。して又まことの櫻姫、其のはんがへに入れ置いたか。」惣太「潮入村の隱家へ、埋んで置いて、こなたのおもひを。」貞景「晴らすばかりか松若が、行くへを尋ぬる好き手がゝり。」惣太「姫が手跡のこの短冊、これも何ぞの役に立て。」貞景「蕾の花の櫻姫、われが埴生で。」惣太「待つて居るぞよ。」采女「すりやその中にはお姫樣。それと聞いては、其方はやられぬ。姫君樣を。」ト驅け行くを、貞景引捉へ、貞景「此奴に構はずちつとも早く。」惣太「合點だ。」ト時の鐘になり、惣太逸散に下座へ入る。采女續いて追驅けんとするを、貞景しごきを取つて引付ける。はずみにしごき解ける。采女「ア、コレ、上著が。」貞景「ソレ〱踠くと丸裸、それでも行くか。」采女「エ、、惡い事。」ト立廻るはずみに、上に著たりし姫の小袖脱げて、下著下締ばかりになり、貞景が摑みし小袖に縋つて、采女「お姫樣からお預り申したこのお小袖、外手へやつては。」貞景「エ、、面倒な、退きやァがれ。」ト蹴飛ばし、小袖を奪ひ取る。貞景「エ、、こ

權七等惣太を追ひ驅け、捨臺詞にて向うへはひる。軍助續いて行かうとする。ばた〳〵にて下座より龜成、釆女を引立て出て來る。軍助見て、軍助「ヤ、そちや釆女ぢやないか。」ト驅け戻る。釆女「ア、コレ、自らことは櫻姬、滅多な事を云ふまいぞ。」龜成「さてこそ自分の白狀といひ、面はそれと覺えねど、道にて見付けた小袖の模樣、櫻姬に極つたワ。」軍助「すりや、姬君と云ひ立てて、あなたにかはつて。」釆女「サ、捕へられなばわたしがすぐに……アイ、自らは疾うから覺悟を。モシ、せめて不便と。」軍助「サ、出來したなれども情なや、隱し置きたる姬君を、奪ひ取つたる曲者め。」釆女「そんならあなたを。」軍助「跡追ッ驅けて。」釆女「わたしも一緒に。」ト行かうとする。龜成「ドッコイやらぬ。」ト引付ける。軍助振返り、軍助「ア、姬に代つて。」釆女「早うござんせ。」軍助「ソレ。」ト時の鐘になり、逸散に向うへ入る。惣太これを窺ひ居る。龜成、釆女を引付け、龜成「櫻姬、うせろ。」ト引立てんとする。釆女懷中より一卷を落す。龜成手早く取つて、龜成「こりやコレ、一卷を。」釆女「ア、コレ。」ト差寄るを龜成引付ける。この時貞景窺ひ出でて一卷を奪ひ取る。龜成かゝるをきつと捻ぢ上げ、貞景「都鳥の一卷を所持なす女、さてはいよ〳〵櫻姬。」龜成「うぬ、修行者め。」ト拔いてかゝるを突廻し、刀を奪ひ取り、見事に首打落す。時の鐘、釆女悔りして顫ふ。惣太これを見て、東のあゆみを本舞臺へ來る。貞景「面體しかと知らざれど、姿はまさしく高位の姬、源吾が閨の伽させん。サ、櫻姬。」ト手を

し、宜しく思入。以前の鴈金屋若い者二人出かゝり窺ふ。軍助「お氣詰りではござりませうが、少しの間。」ト引擔ぎ行かうとする。二人は驅け寄り、權七「待ちやァがれ〳〵。抱へた釆女を引出して、連れて逃げる關やぶり。見付けたぞ〳〵。」軍助「コレ〳〵、めつたなことを云はつしやるな。どうして釆女とやらを。わしはそんなことは知りませぬぞ〳〵。」勘六「イ、ヤ、知らねえとは云はさねえ。コレ鴈金屋の若い者勘六だワ。毎晩々々格子先へ、素見ぞめきの二本棒、知らねえとは云はさねえ。いよいよ知らぬが定ならば。」權七「この蓋を押ッ開き、中をおいらが改めた、その上ではいざ知らず、此のなか見ない其のうちは、やらない〳〵。」軍助「コレサ〳〵、何も貴樣達に改められる覺えは無い。爰を放さつしやいよ。」兩人「覺えが無くば中を見ようか。」軍助「サア、この中は。」權七「見せともながるは猶々怪しい。」勘六「此のマァ櫃は、おいら二人が。」ト引卸し明けんとする。軍助見せまいとする。捨臺詞にて爭ひ居る。惣太上手より出て、これを見て驅け寄り、この櫃を擔ぎ行かうとする。三人見つけて惣太を捉へ、兩人「コレ〳〵、それを何處へ持つて行く〳〵。」惣太「ハテ、こりやァおれが頼まれた、船積みにする荷物だワ。」軍助「ヤ、わりやァ先刻の。」惣太「貴樣は手紙の……こりや斯うしては。」ト驅け出す。軍助「やる事はならねえワ。」兩人「マァ、改めて。」ト四人ごつちやの立廻り。權七等軍助に執りつく内、惣太櫃を擔ぎ、花道へ掛り、中の閒のあゆみを通り、東の方へ來て窺ひ居る。

衆であらう。迎への人が見えて、采女とやらいふ女を尋ねると、あの木母寺に來て居た。サア〳〵、來さつし〳〵。」ト櫻姫が手を執る。櫻姫「ア、コレ、みづからは、その采女とやらぢやないわいなう。」無縁「ハテ、ないかあるか知らぬが、話に聞いた著物が、どうか似たやうだ。マア〳〵、ちよつと來なよ。」ト寄らうとする。軍助留めて、軍助「ア、、コレ〳〵、その女中は、吉原の女郎ではござらぬが。コレ〳〵、お前、ござらずとも可いわえ、可いわえ。」無縁「ござらずとも可いとは、何のことでござる。」軍助「いま牛島の延命寺のお所化が、葬式が來たが、手が足りぬというて、たつた今尋ねて來たぞえ尋ねて來たぞえ。」無縁「ナニ、延命寺へ葬式が來た。」軍助「而も剛氣な好い葬式だ。お前がござらねば成らぬと云うて、尋ねてゐたがハテ惜しい事だ。」無縁「其奴は行かねば成らぬ〳〵。遲くはあるまいかの。」軍助「慥か七つの葬式だ。早く行きなさい〳〵。」無縁「そりや斯うしては居られぬ。エ、、氣が急くわえ〳〵。急けば急くほど、頭ばつかり先へ行くやうだ。アレ〳〵〳〵〳〵。」トよい〳〵の思入にて、すた〳〵と向うへ入る。軍助跡を見送り、軍助「モシ〳〵、姫君樣、あなた樣には、こりやお小袖を。」櫻姫「サア、采女とやらが情にて、追手の者を見送るためにと、その身の上著を脱いで。」軍助「成程こりや好い處へ氣が著きしが、何を申すも晝中に、お顏を存じた今の侍、取つて返せば。」ト小袖櫃を見つけ、軍助「幸ひ〳〵天の與へ、暫くこれへ。」ト蓋を明け、内の品を取捨て、櫻姫をかく

と、そちや某を討つ心。」惣太「コレ、源吾殿、そんならこなたの目からも、それ程までに七郎は、忠義の武士と見えまするか。」貞景「おんでもない事。われも吉田家譜代の侍。」惣太「さう見えるとは有り難い。柳の塚に埋んだる、吉田の公達梅若は。」貞景「不便や人手に横死と聞く。定めて小倅梅若は、敵を尋ねに。」惣太「敵といふは誰あらう、コレ、即ちわしでござる。」貞景「ヤ、日頃不敵と知つたれど、よもや主人の梅若を。」惣太「去年三月、しかも今日、忍ヶ岡の辻番屋、現在家來が打つ杖に、脆くも彌生十四日、風に落花の梅若は。」貞景「いよ〳〵七郎、アノ其方が。」惣太「長田この方……磔刑道具サ。」貞景「ハテ、大丈夫な魂だな。」ト思入あり。貞景「さすれば吉田家の者どもへ、敵たふ七郎、同氣求めし其方は、この貞景に、同心なすべき心は無いか。」惣太「なにしに出世の手蔓とならば、今からこなたと合體して。」貞景「すりや、某が片腕と。」惣太「及ばずながら。」貞景「先づは滿足。」ト向う、ばた〳〵と人音する。惣太きつと見て、惣太「ヤ、こりや先刻の……モシ。」ト貞景にさゝやく。貞景「すりや軍助めが。」惣太「コレ。」ト時の鐘になり、兩人とも笈も小袖櫃も殘し、こなしあつて下座へ入る。向うより軍助、いきせきと驅け戻り來り、軍助「ア、コレ。女房に逢うて、ちつとも早く姫君を、夫婦の者が隱家へ、お供申して。」ト云ひ〳〵舞臺へ來る。このとき下座より櫻姫、采女が形を著替へ驅けて出て來る。無緣坊追驅け出て來り、無緣「コレサ〳〵、姐エどの、貴樣は吉原の女郎

貞景「この如くの觸書は、常陸之助と變名して、此のあたりにとあるからは、日頃某心をかけたる櫻姫と緣談整ふ。さすれば願ひも水の泡。」惣太「サ、その櫻姫は、上より疑ひかゝりし身の上、先刻に爰へ賴國が、行くへを慕うてうせたる樣子、こなたも吉田の滅亡なり、同じ日陰の源吾貞景。搦め出さば一簾の。」貞景「褒美と聞いて、召捕らん不敵の七郎、殊に古主の少將惟貞、身が手にかけし上からは、主人の敵と討たれずば成るまい。七郎、見事身共を討つか。」惣太「負つた子より抱いた子と、今おちぶれた七郎が、この身のしがくに源吾どの、不承であらうが、元手になつて下さい。」貞景「ハテ、大丈夫なその一言。して、わりや、どうして繩かける。」惣太「マア、こなさんを、わしが斯うして。」ト胸づくしへ執付く。貞景振解き、腕を執つて、貞景「友朋輩の貞景に、繩打たんとは、ハテサテ不敵な。」惣太「ところを、わしが。」ト組付くを立廻りて、貞景「いらざる冗談、生け置いたとて益無き七郎。」ト持つたる錫杖の仕込みを拔いて切り付ける。惣太手早く高札にてしやんと受ける。この高札の柄切り折れて、前の川へ折れは落ちて流れ行く。惣太狼狽へる。貞景疊みかけて切り付ける。惣太驚き、蹲る。惣太「ア、コレ〳〵〳〵、滅多なことをさつしやるな。危えわな〳〵。コレ、あやまつた誤つた、もう〳〵貴樣に指でも差す事ではねえ。誤つた〳〵、その白刃を、納めて下さい〳〵。」貞景「イヤ、さう云ふは僞りならん。甘き詞にあざむいて、油斷を見濟まし貞景を、吉田のいへの敵ぞ

と訴へ出でし者には、莫大の褒美下し置かるゝ者なり、月日。」ト讀み、思入あつて、惣太「ヤ、すりや今以て行くへ知れず、死んだと世上に噂ある、あの松若どのが存命にて、さては大友常陸之助と變名して、このあたりに。」トおもひ入れある。皆々「ア、、そりやァお尋ね者かの。」惣太「左樣サ。マアさう見えますて。」杢郎「お觸書なら、土手緣へ立てゝ置きませう。」四人「さうさつしやりませ〱。」ト舞臺前好き所へ高札を杢郎兵衛立てて、杢郎「これでよし〱。これからが又、土手の櫻へこの鐘も掛けねば成らぬ。さて〱莊屋の役も忙がしいものだ。」四人「サア〱、行きませう〱。」ト念佛太鼓になり、杢郎兵衛先に四人、捨臺詞にて鐘を引いて向うへ入る。このとき、貞景出かゝつて窺ひ、件の高札を拔いて、よく〱讀み居る。惣太「ア、、そんなら吉田家の松若も、頼國と變名して……道理で先刻に櫻姫、あの頼國の行くへを尋ねて。それにつけても去年三月、忍ケ岡で暗がり紛れ、餓鬼を預けた侍は、たしか先刻の。」貞景「すりや、今日の今までも、魔道に入つてか但し又、落命せしとか沙汰ありし、松若どのは存命にて。」惣太「ヤ、こなたは慥かに。」貞景「朋友松井の源吾貞景。粟津の七郎、ハテ、久しうて逢うたわえ。」惣太「成程、貴樣は源五貞景。さては都を立退いて。」貞景「諸國を窺ふ廻國修業。過ぎにし吉田家滅亡の砌、少將どのも身が手にかけ、まつた小倅梅若丸、下部の軍助伴うて、行くへ知れず。兄松若は魔道に入り、行くへ知れぬと思ひの外、コレ。」ト高札を差付け、

積んで行つて下さい、コレおらが娘が、あの巴屋に目見得が濟んで、明日引越して行く。おぬし、今夜の潮に、この櫃と土産の菓子袋を、先へ届けて下さい〳〵。」惣太「エ、、何かえ。お前の娘御が引越しでござるから、その先へその櫃を積んで行くのかえ。」杢郎「左樣々々、降らぬうち、早うやつてもらはう〳〵。」惣太「アイ〳〵、承知しやした……して、お前方はその鐘を、何處へ持つてござります。」太郎「サア、この鐘は知つての通り、木母寺樣で新たに出來るこの釣鐘。」治右「土手の櫻へ掛けて置き、御供養がござります。」惣太「ア、、それで、その云譯を書いたこの高札かえ。」治右「イヤ〳〵、これは今鄰村から定使が持つて來て、この土手へ建てて置くのぢや。莊屋樣へ渡して下されと置いて行きました。モシ、莊屋樣、讀んで見さつしやりませ。」ト杢郎兵衛に渡す。杢郎「何ぢや、鄰村から廻つて來たとか。そりや大方お觸書であらう。」皆々「ハテ、讀んで見さつしやりませ〳〵。」杢郎「ハテこの書き物が讀める位なら、なに莊屋役をするものか。祐筆とやらになつて、御奉公を勤めるワ、馬鹿馬鹿しい。」四人「それでもおふれだ。讀んで見さつしやりませ〳〵。」杢郎「ハテ、面倒な。今日は親の日だから、書いたものは讀まぬ日ぢや。コレ、惣太、おぬし讀めるか。ちよつと讀んでくりやれ。」
惣太「ドレ、見せなせえ。」ト高札を取つて、「此の度鎌倉武將へ降參の願ひを立てし常陸之助賴國とは、上を僞る變名にて、誠は朝敵のきざしある吉川家の松若丸、この東路に忍びこれある由、所在をしか

預け申し、私はこれよりすぐに、頼國さまの御隱家、庵崎邊とあるからは、頼り求めて御所在を。」つな「お氣遣ひなされまするな。姫君樣はわたしがお供仕りまする。お前は早う頼國さまのお行くへを。」采女「姫君樣と僞る證據は、しばしが間その一卷、私にお預けなされませいな。」櫻姫「大切な品ながら其方に。」ト一卷を采女へ渡す。綾瀨「然らばわたしは少しも早う。」櫻姫「必ずあなたの御所在を。」綾瀨「畏まりました。」つな「姫君樣も妹も、あの木母寺のお座敷を借りて、小袖を召し替へて。」トよき時分より杢郎兵衞、小袖櫃を脊負ひ、菓子袋を提げ出かゝり居て、この時、杢郎「コレ、お內儀。」ト大きな聲にて云ふ。つな「エヽ、悕りしたわいな。」杢郎「ハテ仰山な。」つな「サア〳〵、入らつしやりませう。」ト念佛大鼓になり、綱女、櫻姫をいたはり、采女附いて下座へ入る。綾瀨向うへ入る。杢郎兵衞殘つて、杢郎「何だか大分美しい、たぼどもが見えたわえ。どうでも春先はお屋敷が出るて……ハテ、それはよいが、この惣太はマア、何處へ行つたやら、潮時の好い內、早くやりたいものぢや。」ト捨臺詞にて尋ね居る。やはり念佛太鼓になり、治右衞門、あつらへの高札を持ち、惣太が手を引ッ張り、跡より太郎八と以前の百姓二人、鐘を載せし地車の綱を引き出て來り、惣太「コレサ、なんの用だよ。」皆々「ハテ、莊屋どのが尋ねて居られた。」治右「モシ〳〵、莊屋樣、惣太を見付けたから。」三人「連れて來ました〳〵。」杢郎「それは氣が付き申した。コレ、惣太、おぬしはこの櫃を、龜井戸の巴屋まで、

つな「お氣遣ひなされますな。さりながら、今の追手が又爰へ、引返して來る時は、女子ばかりで、アコレ、どうぞ仕樣が。」トいろ〳〵思入。此のうち采女こなしあつて、采女「申し、姉さん、わたしが著て居るこの小袖、はゞかりながらお姫樣へ、召させ申して下さんせいな。」つな「ヤ、なぜに其方の、小袖をあなたへ。」采女「召し替へさせ申しまするも、又ぞろや今の追手が玆へ參つて、若し自然叶はぬ時には、彼方の召物わたしが著て、我こそ入間の妹姫、櫻姫ぢやと譃云うて、捕へられて行けばとて、ツイ口先でつべこべと、云ひ拔けて來やんすほどに、どうぞ彼方のお小袖と、わたしが小袖を、召し替へさせ申して下さんせいな。」トこれにて綱女思入あつて、つな「オ、、妹、出かしやつた、好う云やつた。さりながら、捕へられて行く時は、其方がどのやうに云やつても、郭の勤めと事變り、手荒う拷問ある時は。」采女「ア、モシ、わたしもお前の妹でござんす。此のやうな時に姉さん御夫婦、忠義の端ともならうかと、そればつかりで。」つな「流石は妹、好うマア其のよな。」ト思入。この時向う、ばた〳〵と人音する。采女「アレ〳〵、あの人音は慥かに追手、爰へ來ぬうち。」つな「姫君樣の上著のお小袖、少しも早う。」ト采女が裲襠のかゝへ帶を解きにかゝる。櫻姫「アコレ、いかに難儀な場所ぢやとて、采女が深切自らに、代らん心は嬉しいが、どうもそれでは。」采女「ハテ、大事ござりませぬ。どうぞわたしが願ひの通り。」綾瀬「あれ程までに姫君に、暫しも代らん志、あなたを暫しお

なに見覺えござらねど、都鳥の一卷とは、吉田の家のお寶なるを、常陸之助賴國さま、どうして御所持なされしぞ。」つな「云はしやんすればその一卷、賴國さまが姫君へ、おわたしありしは軍助どの。」軍助「これには仔細が無けりやかなはぬ。」ト思入あり。軍助「これについてもたつた今、このところで、姫の短冊所持の曲者、正しく若君梅若さまを、害せしやつに極まつたわえ。」ト下座の方を見て思入。龜成「扨こそ櫻姫。家來、召捕れ。」家來「心得ました。動くな。」ト取卷く。軍助圍つて、軍助「お待ちなされませ、お侍樣、櫻姫とは何を證據に。」龜成「ヤア、證據といふはたつた今、あの女めがぬかした。後で聞いた地獄耳、遁れぬ所だ、姫を渡せ。」軍助「して、櫻姫なら何科がござつて。」龜成「科と申すは、鎌倉降參の賴國こそ、誠に僞り紛れ者。それにどうやら櫻姫、捕へて拷問なすならば、素性知れんと疑ひかゝり、姫を詮議の某は、葛西太郎龜成、きり〱姫を渡すまいか。」軍助「是非に此のまゝ、見遁しくれなばその通り、さなきに於ては軍助が相手になる。お侍、きり〱茲を通しやれな。」龜成「面倒な。姫を召捕れ。」家來「心得ました。動くな。」トかゝるを、軍助立廻りて、軍助「女房、彼方に心を著けて、必ずお側を。」つな「心得ました。」龜成「そりや。」家來「捕つた。」トかゝるを、軍助投げ退け〱、禪のツトメになり、むかうへ追うて入る。龜成は下座へ逃げてはひる。三人殘つて、つな「コレ、軍助どの、必ず長追ひして下さんすないな。」綾瀨「モシ、綱女さん、どうぞお姫さまを。」

釆女「わたしが死ぬるは姉さんへ、身の詫事の申譯。」 軍助「ナニ姉さんへいたづらの。」 つな「ほんにこりやわたしが手跡の文。」ト見て、 つな「コレ〱、いつぞや別れし妹へ、便り無きまゝ認めて、贈りて文の指折れば……はや一昔跡の事、音信不通に東路へ、養子に行きやつた、そんなら妹の。」 釆女「お光といふはわたしが事。養子の先の二親も、五年以前に世をはやう、一人殘つたわたしをば、世話する人が吉原へ、預けたなりについそれなり。お前のお文は二親の、まだ息才の其のうちに、來たのをわたしが大切に、守にかけて居やんしたも、姉妹そばに居る心。モシ、おなつかしうござりまする。」 つな「エヽ、そんならわがみは妹のお光、先の二親過ぎしあと、いまは郭の憂き勤め。」 軍助「エヽ、さては女房の妹か。さうとは知らず姫君の、お行くへ尋ぬる手がゝりと、格子先でのじやらくらを。」 釆女「誠と思ひ驅落の、そのいたづらが今更に、はづかしいやら大膽な、どうで私はお前へ云譯、どうぞ放して。」ト一腰にて死なうとする、兩人止める。この時うしろへ龜成、家來を連れ出かゝり窺ふ。 櫻姫「不思議な縁に廻り來て、兄弟思はぬ名乘合ひ。自らとても戀ひ慕ふ、賴國さまのお行くへ、慕ひ憧れて館を出て。」 綾瀬「お供は卽ちこの綾瀨、殊に姫君御懷中遊ばされし、大切な、賴國さまよりお預けありし。」 櫻姫「都鳥とやいふこの一卷、館で一度失せたりしを、やう〱取り得て自らが。」ト懷中の一卷を出す。軍助思入あつて、 軍助「ハテ、合點參らぬ櫻姫さまのおことば。下司奉公の私が、

マア〳〵暫くが内控へて居やれ……して姫君には、何れを當とお館を。」櫻姫「サ、立退き出でしも、常陸之助さまのお行くへ尋ぬる心より。」綾瀬「して姫君のお身の上、存じた二人のお方は。」つな「御尤ものお詞、私ことは、花子の前さまに宮仕仕りましたる、綱女と申すもの。これに居りまするは私が連合ひ。」軍助「アコレ、女房、他ぶんの聞え。」ト釆女へ差寄り。軍助「色戀ならねど、郭を毎晩彷徨いて、格子の先でむくつけな、心にも無い徒言も、何を隱さう女房が御主人、尼御とおなりなされたる、花子さまが敵の手がゝり、聞き出させる手蔓もあらうかと、浮世ぞめきに交はつて、勝手の知れぬ郭の噂、聞きたい爲におぬしまで、らつちもない事云ひ出したり、また云はれたりお互に、コレ、それを誠とおぬしが深切、忝い。何を隱さうおれが素性は、吉田家の二合半、軍助といふ奴らさ、實ある心と知りながら、小ッ恥かしくて一度でも、嫌味の無いのは爰の道理だ。必ずともにさう思やれよ。」ト釆女始終樣子を聞き、こなしあつて。釆女「すりや、お前さん御夫婦が、吉田の家に譜代の御家來。」つな「私は鎌倉扇ヶ谷、花子さまに仕へたる綱女といふ者、即ち主の女房ぢやわいな。」釆女「エヽ、そんならお前が鎌倉の、扇ヶ谷に居やしやんした、アヽ、綱女さん。」ト思入あり、懷より守を出し、釆女「お前、これを見て下さんせ。」ト投げやる。綱女とり上げ内より文を出す。釆女「南無阿彌陀佛。」ト軍助が一腰へ手を掛けるを留めて、軍助「コレサ、釆女、何でわりやア死なうとする。」

む男だ。殊にどうやら物ごしも、聞いたやうなる。」惣太「サ、おれも先刻からさう思ふが、こなたも何處でか逢つたやら、詞の五音が、どうやら聞いたやうでもあり。」軍助「して、こなたは何商賣だ。」惣太「わしかえ、わしやァ船乘サ。」軍助「名は何と云ひます。」惣太「わしが名は惣。」軍助「ヤ。」トおもひ入れ。惣太こなしあつて、惣太「イヤ〳〵、さうぢやァねえ。まだ私は名は無いよ。」軍助「ナニ名が無い。ハテ、こなさんは不自由な人だの。どうやら覺えのその五音。」惣太「おれもいつぞや手に入つた、歌の書いたるこの短冊、殊にどうやら見覺えの、正しく櫻。」軍助「ほんに思へば、オ、、それそれ、忍ヶ岡の暗紛れ、桐油仕立ての莨入内に宛名の。」ト以前の状を出す。惣太愡りして、惣太「ヤ。」トおもひ入れ。軍助「覺えがあらうが。」ト立ち懸る。釆女縋つて。釆女「ア、、コレイナア。」ト思ひいれ。惣太こなしあつて。惣太「エ、、此のあまは。」ト釆女が方を見て、また氣を更へ。惣太「アイヤ、あまけづいた。ドリャ、船へ苫をきつて置かうか。」ト唄になり、ツイとはひる。軍助思入あつて。軍助「今の船乘。」ト行かうとする。釆女綱女執りつき、釆女「アモシ、わたしをどうぞ。」軍助「慥か覺えの。」ト振切らうとする。つな「ア、コレ、お前は急いたるその顏色、譯はあらうが折角に、めぐり逢うたる姫君樣。」軍助「成程、心急かるゝあの船乘、引ッ捕へんと思ふより、姫君樣と存じたなれど、粗忽の段は幾重にも、御容赦なされて、下さりませ。コレ、釆女、おれも其方の志、必ず無下にはせぬ程に、

なさるな。併し、内の年増ばかり守つて居る亭主は、誠に煎豆に花サ。男で苦勞するは、ほんの事だが、女の當りまへサ。」 櫻姫「あれ聞きやつたか。男で苦勞と云やるからは、何れの浦でも殿御には、女子は苦勞せにやならぬかいの。」 綾瀬「左樣でござりまする。これにつけても、戀ひ侘びたまふお方の、早う所在を。」トその聲に綱女、二人を見て、つな「此の邊には見馴れぬお二人、殊に貴方はうづ高さ、高位の姫ともいふべきお姿、若しや入間の。」 綾瀬「アモシ、左樣な者では。」 惣太「まんざら無いとも云はれまい、いつぞやちよつと見かけたる、大家の姫の面相は、慥かに櫻。」 軍助「ヤ。」 惣太「姉さん、この短冊を覺えてござるか。」ト莨入の内より出し、「九重にたつ白雲と見えつるは。」 櫻姫「大内山の櫻なりけり。ヤ、そりや自らが詠みたる歌、認め給ふは櫻町中納言の御手跡、ほんにいつぞや。」 惣太「覺えがござらう。さすれば違はぬお尋ねの。」ト寄るを引退け、軍助「アイヤ、決してさういふお方ぢやござらぬ。この姫御も吉原へ、この頃目見えの奉公人、女郎じみない素人サ。」 惣太「ア、、吉原へ目見えに來て居る姐エどのか。それで解つた。郭の手合が先刻から、驅落者を尋ねると云ふが、そんならこの子が、郭を走つた。」 軍助「なにサ、この子は其のやうな胡亂なものでは。」 惣太「ハテ、この男は、どう云へば斯う云ふと、拔けつくゞりつ云ひ廻すが、して、貴樣はこの娘の身寄りの人か。」 軍助「サ、身寄り知るべで無けれども、つい居合はせて口を出すが、貴樣も又、要らざることに氣を揉

せえ。」つな「これいな〳〵、ほんにマアこちの人が、女房のある身ぢやと、斷り云うても聞き入れぬは、なんぼ年がゆかぬと云うて餘りな。マア、そんな事が吉原で流行るか知らぬが、私が聞いては、さうはさせぬ。サ、來なさんせ〳〵。」釆女「イエ〳〵、わたしが亭主にしんすよ。來なさんせ來なさんせ。」つな「エヽ、なめ過ぎた。サ、來なさんせ〳〵。」ト兩方より軍助を引ッ張る。綾瀬「コレ、物が問ひたいわいの。」ト櫻姫が手を引き、うか〳〵寄るを綱女、釆女と心得、つな「エヽ、なめ過ぎた。退かしやんせ。」ト手あらう突き退け、軍助に立ちかゝる。ごつちやの立廻り。てんつゝ、祭の鳴物になり、向うより惣太、木綿袷、船頭の拵へ、藁草履を穿き、頰冠にて、綱袋に入りし飯櫃を肩へ掛けて、うか〳〵と出て來り、舞臺へ來り、この中へ入る。綱女、釆女、兩端より惣太軍助が手を引ッ張り、五人とも手を取交し、彼方此方と引ッ張り草臥れて皆々坐り、ほつとして、顔見合はせ、綱、釆「ヤ、こなさんは。」惣太「コレ、何にも知らねえわしを、彼方へ引ッ張り此方へ引ッ張り、一枚袷を揉みくちやにしたわな。ざつと一本値が下つたわえ。」軍助「これはしたり、惡い所へござつたばつかり。こなさん、わしが身代りに立たしつたの。」惣太「飛んだ長屋へ引ッ越して、剛氣な目に逢ひやした。したが、この上お心易くお頼み申しやす。」軍助「イヤモウ、お互でござります。」惣太「アヽ、かう見たところが、こりやァお前方は、燒餅喧嘩だの。この若い人の下ばと見えるが、モシ、かみさん、油斷し

よう。」ト大小の鳴ものにて、二人とも舞臺へ來る。軍助フッと釆女を見て、軍助「ヤ、釆女ぢやァないか。」釆女「ヤァ、主は爰にかえ。ようマァわつちを騙しなんしたの。エ、、怨みだによう。」ト軍助に縋る。綱女悃りする。軍助氣の毒なる思入にて、軍助「ア、、コレ／＼、こゝでは何にもかならずナ、云つては惡いぞ／＼。」ト術なき思入。つな「モシ、こちのひとえ、そんならあの子は、吉原の女郎衆かえ……コレ、來なさんせ。」ト軍助を執へて、つな「こなさんは／＼、お姫樣をお尋ねまうす手がゝりにて、夜に入ると吉原三界、毎晩々々ござんしたは、あのやうな色が出來ての事かいな。お前はお前は。」軍助「ア、、コレ／＼、何を己が浮氣らしい。さういふ心は、コレ／＼、これ程も無いがナ。」つな「イエ／＼、無いものが、あのやうな女郎さんが、なんでまた、お前を尋ねて來たのぢやえ。」軍助「サア、これには段々。」ト云譯せんとする、釆女驅け寄り。釆女「コレ、お前は／＼、毎夜さ郭へござんして、女郎衆に用ありさうに格子から、というて素見の若い衆でもなし、氣前の好ささうなお方故、勤めの身の此方から、恥かしい事云はせて置いて、ようマァ返事をして下さんせぬ。それぢやに依つて驅落して、お前を尋ねて參りんした程に、サ、女房に持つて下さんせえ。」軍助「コレ／＼、釆女どの、何しにおれは、浮氣で郭へ通ひはしねえ。ちつと尋ねる女中があるゆゑ、毎晩格子をうかうかと、コレ、志は忝いが、おれには現在女房が。」釆女「サ、あらうとまゝよ。一分立てて下さん

加へてこれも氣遣ひ。」つな「エヽ、その新造の驅落が、どうしてお前が氣遣ひぢやえ。」軍助「サア、氣遣ひと云うたは、あのお姬樣、サ、あなたの事を氣遣ひと。」つな「それでお前が。」ト思入。軍助「何の役にも立たぬ餘所の噂を。サ、其方もとも〳〵。」つな「アイ。ドリヤ、御廻向まうしませうか。」ト兩人、塚に差寄り、軍助鉦打鳴らし廻向する。綱女線香を立て、水むけを汲み替へ居る。此のうちかすめて三社祭の鳴物聞える。これをかり、向うより新造采女、しごきの形、手拭にて顏を隱し、跣足にて出る。跡より櫻姬、綾瀨、兩人とも道に迷ひし體にて出て來り、花道にて、綾瀨「申し、女中さん、爰はもう、隅田川でござんすかえ。」采女「サア、わたしも始めて來いしたゆゑ、今來る道で聞きんしたが、慥かさうでありんすわな。」綾瀨「エヽ、そんならお前も、此のあたりのお方ぢや無いのかえ。」采女「アイ、わたしや吉原の者でありんすが、尋ねる人があるに依つて、郭を脫けて來いしたわいな。」綾瀨「エヽ、吉原のお方かえ……モシ〳〵、お姬さま、あの女中さんは、ありや吉原の郭の女郎さんと見えまする。あのマア派手やかななりを、御覽遊ばされませいな。」ト櫻姬へ思入。櫻姬「ナニサマ、武家の女子と事變り、一際目立つあの風俗、自らも、繪に書く姿は見たれども、おめもじ致すは始めてぢやわいの。」采女「オヤ〳〵、お前さんのお名は、自らさんとかえ。馬鹿らしいお名だねえ。」綾瀨「ホヽヽヽ、あれお聞き遊ばしたか。物ごしも變つて居りまする。」采女「エヽ、なんだな、ついぞねえ

御の櫻姫さま、外ならぬお方といひ、御剃髪のその場より、花子さまもお行くへ知れず。若し惡者の手へ渡り、君傾城の勤めなどなされはせぬかと、夜に入れば吉原三界うろついて、お尋ね申すも、あなたのお行くへ。」つな「よう心付いてお尋ね申して下さんす。云はんす通り花子さまには、松若さまのお行くへ知れず、とてもこの世にはお出であらぬとお聞き遊ばし、清水にての御剃髪、お名も即ち清玄さま。どういふ事か、直ぐにその日よりお行くへ無う、指折り見ればもう一年。ア丶いづれに御座ある事ぢややら。」軍助「一年跡のこの月は、お痛はしや梅若君、下郎がお供にありながら、見失ひしと思ひの外、この川筋へ浮き死骸、すぐに腹切り、申譯いたさんものと思ひしを、女房の其方にとめられて、生き存へるもそのみぎり、手に殘つたるこの手紙。」ト莨入もろとも出し、軍助「つ丶みを取りに戻る中、預け置いたる辻番の、その侍が落した品、粂の平内長盛と、内通の密書の文言、彼奴は正しく吉田家にて、御勘氣受けし粟津の七郎、此奴を捕へて若君の、敵を取らない其のうちは、死ぬに死なれぬ軍助が、唯口惜しきはその夜の侍。面を覺えずうか〳〵と、預け置いたがこの身の過り。」つな「お行くへ知れぬ姫君も、追手の者の噂では、若しや今にもこの邊へ、お出であるに疑ひあるまい。どうぞ人目にか丶らぬ様に、ア丶、これとても心がか丶り。」軍助「殊に郭の者どもが、尋ねて來たは新造采女、あの吉原を驅落とは、若しやつれない心ゆゑ、俺に逢はうと逃げたのか。かてて

いよいめらが。」皆々「しめてやれ〳〵。」ト立ちかゝる。權七「コレサ〳〵、この衆は氣の強い手合だ、向うは二本差しでござるわな。」ト留める。無緣「措かつしやい、この人は。差した物が怖くつて、隅田川に住まれるものか。田螺でも蒟蒻でも、田樂はどれでも差して居るワ。おつなことを云ふ人だ。飛んだよい〳〵だ。」權七「ナニ、よい〳〵だ。この坊主めは、うぬがよい〳〵だワ。エヽ、飛んだ亡者だ。」無緣「エヽ、間拔けの亡者は、去年一軒つとめて年は明けたワ、間拔け奴め。ハヽヽヽ。」權七「なんだ。間拔けだ。」無緣「間拔けと云つたが如何したえ。」權七「此のよい〳〵坊主め。」ト立ちかゝる。勘六「コレサ、高が坊主だワ。その上、よい〳〵だワ。打ッちやつて置きやれな。」無緣「ナニ、よいよい坊主とはたれが事だえ。」龜成「ハテ、おばう、不承しやな。」皆々「イヤ〳〵、突ッ張れ〳〵。」勘六「マア來やれな。」皆々「和尚、合點するな〳〵。」無緣「否だ〳〵、よい〳〵と吐しちやア濟まねえぞ。」龜成「ハテ、いゝわな〳〵。」ト念佛太鼓になり、兩方の喧嘩ごつちやになりて、皆々捨てぜりふにて下座へ入る。軍助「さて〳〵、騷がしい手合だわい。」つな「コレ、こちの人軍助どの、今の噂を聞かしやんしたかえ。すりや、賴國さまのお行くへを尋ね、櫻姫さまにはお館を、お立退きなされし樣子。今にも爰へお出であらば、成りたけ彼方のお力になつて下さんせえ。」軍助「そりや氣遣ひしやるな。おぬしが鎌倉扇ケ谷に居やつたときは、入間家の御息女花子さまの召仕、さすればそのお妹

げた女をお尋ねなさるゝのかえ。そりやア大きな間違だ。して、お前さまのお尋ねなさるゝ女といふはえ。」龜成「身が尋ねるは入間の息女櫻姫、云號ける常陸之助頼國が、行くへを尋ねてこの程の家出、その頼國こそ朝敵の輩、變名なせしと沙汰あれば、姫を捉へて詮議なさんと、さてこそ尋ぬるこの道筋。して、わいらが尋ねる女といふは何者だ。」助六「アイ、鴈金屋の采女といふ、新造の驅落者でござりまするて。」トこれを聞いて郭の者へ軍助は隱るゝこなし。綱女、姫と聞いて思入。龜成「ア、其方は女郎の驅落か。此方は大名の姫の驅落。何でもこゝらへ來たに違ひはない。コリヤ〳〵、百姓共百姓共、今申した年恰好の娘が來たら、早速に身共に知らせよ。但しその代りに差置くに於ては、屹度曲事に申し付くるぞ。」トこれを聞き、無緣坊主科あつて、無緣「なんだ、其のまゝに差置くと食事に申し付くると、それは御馳走だわえ。折角大事の百萬遍の最中、さま〴〵な事を云ふ侍だ。食事ならはやく出さつしやい。わしらに精進は御無用、魚類でなりと、食事にお目にかゝりたいな〳〵。ハ、、、。」皆々「それ〳〵、わしらも茶の子腹だ。食事とやらに、與りませう〳〵。」龜成「ヤイ〳〵ヤイ、こいつ等は武士を嘲弄いたすか。」無緣「長老とは出家のことでござるワ。大笑ひだ。ハ、、、。」皆々「精靈とは佛の事でござるワ。」龜成「イヤ、うぬ等は侍をきよくるか。片ッ端から目に物見するぞ。」杢郎「ナニ二本坊、癡言を吐くと打ッ挫くぞ。」無緣「愚僧が尻持ちだ。叩き伏せろ〳〵。此のよ

出した奴は、町人とも侍とも、そこは分らぬワ。格子先の色事、慥か一本差しとも聞いたて。」トこの話のうち軍助おもひ入れ。勘六「何でもこりやア、あのお侍を詮議して見るのが、早手廻しだえ。」龜成「ヤイ／＼／＼、ナニ身共を詮議する。何を詮議するのぢや。」勘六「イエ／＼、別して詮議と申したのではござりませぬが、今お前様が、十七八な女がこゝらへ來た筈ぢやと仰しやつたは、ちと耳寄り、お名を聞かば夫の本名、明すまいものでもない、ナ申し。」と問ひかけられて。ト淨瑠璃を語る。權七「エヽ、この人は何を云ふのだ。」勘六「ツイうか／＼と、島物語を語り出した。ハヽヽ。時にお侍様、して、あなたのお尋ねなさるゝは、何と申す女が、爰へ參る筈でござりまするな。」龜成「ハテ、この男は様々な事を聞きたがるが、他聞の聞く前、その女の名は申されぬワ。」權七「そりやこそ云はぬワ。怪しいぞえ／＼。」勘六「成程、こいつは聞きどころだ。隱さんす程その女の、わしらは名が聞きたうござんすて。」龜成「そりや又なぜに。」勘六「ハテ、わしらは吉原の鴈金屋から驅落の新造、こゝらに心當りがあるゆゑに、尋ねて來た出合頭、年恰好の似寄りの女を、尋ねてござつたお侍、コリヤお前、その新造を釣り出したお侍でごんせう。サア、有りやうに云はつしやりませ。」トこれにて鴈金屋と聞き、軍助は思入。侍膽を潰し、龜成「イヤ、此奴が／＼。身は女の逃げたをたづねこそ致せ、ナニ連れて逃げるものだ。さういふ株はまだ廻らぬワ。」權七「エヽ、そんならお前様も、逃

サ、心ばかりのこの品々、サア〳〵、替へて參つて下さりませ。」杢郎「それは御報謝。坊樣、皆の衆も、サア〳〵、辭儀無しに始めませう〳〵。」無緣「愚僧は煮染を引取りませう。」ト見て、無緣「ハテ惜しいかなこの煮染には、田螺がござらぬわえ。」皆々「お坊樣は田螺をまゐるか。」無緣「ハテ、田螺は海川へ出來はしまいし、田へ出來るから米も同然でござる。ハ、、、。」皆々「口強情な坊樣だ。サアサア、御馳走になりませう。」軍助「どなたもよろしくお上りなされませ。」ト三社祭の鳴物聞える。みなみな重箱を引寄せて、捨臺詞にて團子を食ふ。この鳴物をかりてむかうより、鴈金屋若い者勘六、羽織やつし、ぱつちの形。權七、同じくぱつちの形にて、捨臺詞にて出て來る。東の口より葛西太郎龜成、旅侍の拵へ、股引草鞋にて、脚絆旅體の侍三人連れ出て來り、兩方より舞臺へ來る。勘六「コレコレ、權七殿、火があるさうだ。一服吸ひつけて行かう。」權七「さうしませう。ハテサテ、何處へうせたであらうな。」龜成「コリヤ〳〵、家來共、所の者が大勢居る。尋ねて見よう。コリヤ〳〵、われらは最前からこれに居たか。」杢郎「爰に居たが、どうしましたな。」龜成「イヤ、別の事でも無いが、只今このあたりへ、十七八な女は參らぬか。身はその女を尋ぬる者ぢやが、見えぬか〳〵。」杢郎「イエイエ、見かけませぬわえ。」勘七「アレ、權七聞いたか。あのお侍が、十七八な女が爰らへ來る筈とは、どうか怪しいではないか。」權七「成程、こりやァ貴樣、好いところへ探り當てた。その女を引

替へなされて。」軍助「たんとまゐつて下さりませ。煮染といふもお定まり、苞豆腐に芋と蒟蒻、嫁菜の浸し物、お珍らしくもあるまいに。御馳走には貳百茶を買つて參りました。煮花でも拵へて、緩りとお念佛をお願ひ申しまする。」太郎「これは〳〵、丁寧な事でござるの。」治右「さうでござる。そしてマア、大分拵へさしつたの。」太郎「わしらはお煮花には氣があり申すわえ。」治右「佛もさぞ悅ばるゝでござらうて。」杢郎「取りわけ團子は、わしらが好物でござるて。なう、坊樣。」無緣「コレサ莊屋樣、いしいしといふは、何十貫目ござるな。どんな石をか持つて來て、力持を始めるのだ。愚僧も若い時は七十貫目も擔いだが、今は少しよい〳〵掛つて、心許ないて。ハ、、、、。」杢郎「ハア、この坊樣とした事が、あの衆夫婦が拵へた團子でござるワ。石ではござらぬわいの。」無緣「團子の事を今では、いし〳〵と云ひまするか。ハテ、流行いたせば、いろ〳〵と變りまするな。併し、あの夫婦なら、團之助に團十郎、その二人が拵へたのだから、團子……成程、物事は爭はれぬものぢやての、ハ、、、ハ。」皆々「何を云はつしやる。」杢郎「御夫婦は、この佛の緣者といふやうな事かな。」軍助「ア、イヤイヤ、別して左のみな緣もござらねど、痛はしい事ぢやと存じ、それで此のやうに、夫婦の者が阿伽の水。」つな「さうでござんす。野に咲く花を手折り來て、手向けまするも若君樣……アイヤ、若君樣ともいふ樣なお方ぢやと、聞いて思はずおいとしう、思ふが故に此の樣に、なうこちの人。」軍助「さう

皆々念佛にかゝる。貞景思入あつて、笈を擔いで下座へはひる。また百萬遍にかぶせ、てんつゝになり、向うより綱女、やつし女房の拵へ、高褰げにして、軍助、木綿やつし一本差しにて、提籠のうちに、大重箱へ團子煮しめの類を拵へ、線香、樒の花なぞを一つにして、太き竹にてさし荷ひ、軍助は茶の一斤袋と土瓶をくゝし、これを提げて兩人、スタ〳〵と出て來り、花道にて、軍助「アレ〳〵、嗅アや、向うに百萬遍の聲がするワ。もう村の衆が寄らしつたと見えるわえ。」つな「さうでござんす。大きに遲なはつたわいな。」軍助「サア〳〵、早く來やれ〳〵。」トてんつゝにて舞臺へ來り、軍助「さて、どなたもお早うござりました。手どほなゆゑに、大きに遲なはりました。」つな「どなたも御苦勞でござります。こちの人も殊の外せかれましたが、何かの拵へ、大きに遲うなりましたわいな。」

杢郎「これはお若いの、ござつたか……坊樣や、夫婦ながらござつたぞや。」無緣「オヽ、御亭主もお内儀もござつたか。御苦勞々々。今日は天氣も好い故、お念佛も早う始めましたわいの。ハヽヽ。」

軍助「それは有り難うござります、私もお間に合ふ樣にと、殊の外急ぎましたが、何を申すも無調法な私ども……コレ、嗅アや、あなた方へ早く出しやれな。」つな「さうしやんせう。手傳うて下さんせ。」軍助「合點ぢや〳〵。」ト持參の物を好き所へ出して、つな「ハイ〳〵、これはもう、夫婦の者が心ばかり、おいしうも無い此のいし〳〵。粗末な煮しめも恥かしうござりまする。お氣に入らずと、お

どの様な事でござるの。」無縁「サア〳〵、その話は、誠に光陰矢の如し、去年三月十五日、その年頃は十二三の、小児の死骸が流れ著き、所の衆が打寄つて、證據は無いかと捜すうち、懐に守り袋、その内に書いた物がござつたの。」ト貞景思入あつて、貞景「エヽ、その書いた物が。して、何と書いてござつたの。」無縁「サア〳〵、聞かつしやりませ。守の内にあつたのは生まれた年月、素性はたしか吉田の少將、その次男にて、梅若丸と書いてござつた。」ト貞景びつくりして、貞景「ナニその死骸に梅若と、肌に添へたる書きものに。」ト思入あつて、貞景「すりや、吉田家の滅亡のみぎり、軍助めが供せしが、梅若丸はこの世を去り、心がゝりも段々と……アヽ、コレ、坊様へ。して、その死骸の由縁の者もござらぬのか。」無縁「イヤ〳〵、あります〳〵。若い男の夫婦連れ、あの佛の由縁かゝりかは知らぬが、朝夕爰へ香花手向けて。」貞景「それこそ正しく軍助夫婦、見付けられては。」無縁「アヽ、コレコレ、知る人でござるか。今日は取別一週忌の逮夜、茶の子を拵へ、來る筈ぢや。こなさん待つて、逢うてござらぬか。」貞景「アヽ、らつちもない。知る人でなければ、逢うたというて用も無し。これから寺島近所を修行しませう。コレ、坊様、今の話の男が來ようとまゝ、必ずわしが噂をさつしやるなよ。」無縁「オイ〳〵、呑みこみましたが、コレ、茶の子まるつてござらぬか。」貞景「アイヤ、修行の歸り又來ませう。大きに御報謝になりました。」皆々「ドリヤ、百萬遍に蒐りませうか。」ト無縁坊始め、

佛も仕合、わしらも仕合、春めいた土手の景色。一しほ好い〳〵、ハヽヽヽ。好い見晴らしだの。」杢郎「左樣々々、云はつしやる通り。イヤ又、この隅田川の風景は、他國にはあるまいて。」治右「京都のお公卿樣もこゝへ來ては、歌とやらを詠まつしやると云ひまするてな。」苞作「公卿の歌なら、潮來節や、そゝり唄でもござりますまいて。」太郎「それは大方、天智天皇秋の田のなぞとやるのでござらう。」玉六「イヤ〳〵、わしが思ふには、猿丸太夫奥山に、紅葉蹈み分け鳴く鹿なぞと歌ひませうて。」無緣「成程、剛氣に物識でござるわえ。聲聞く時は秋は悲しきと、丁度この佛のやうな悲しいことを、歌に作つて詠みませうて。ハヽヽ……イヤ、どなたも茶をまゐつたら、もう一遍やりませうぞや。」杢郎「さうしませう〳〵。殊にアレ〳〵、三社さまのお祭の太鼓もきこえまする。念佛をかた付けて、若いしうはお祭へも行かざなるまい。もう一息、やりませうぞ〳〵。」皆々「サア〳〵、やりませう。」ト念佛にかゝらうとする。貞景「アヽ、モシ〳〵、ちつと尋ねたい事がござる。わしは上方から廻つてまゐつた六部でござるが、見れば柳の塚に向つて、念佛供養さつしやるが、こりや何人の墓でござるな。」無緣「オヽ、六部どのか。こなたは好い處へござつたの。今日は志の佛がござつて、村方の衆が百萬遍を繰るのぢや。こなたも共々念佛を上げさんせ。その代り澀茶でも進ぜませうワ。此のまた塚には、哀しい話がござるわいの。ハヽヽヽ。」トよい〳〵の思入。貞景「アヽ、哀しいはなしとは、

をきつと見て、平内「エヽ、殘念な。」ト無念の思入。この見得、カケリ、どん〳〵にて幕引付けると知らせに付き、打込み、二番目の呼び。

第二番目　序幕　梅若塚の場

本舞臺、三間の間、うしろ淺葱幕、土手、正面に柳を植ゑし梅若塚、卒堵婆建てあり、所々に稻むら、菜の花の盛り、舞臺前波板、上の方に隅田川渡場といふ榜示杭立ち、好き所へ莫蓙を敷き、塚の前へ机を直し、これに香爐、燈明、花生、桶箱に白團子なぞを手向け、麻法衣、よい〳〵の無緣坊、後向に坐りて鉦を打ち、百姓田芹の治右衞門、たんぼゝの太郎八、外に百姓二人、百萬遍をくり居る。莊屋杢郎兵衞、野火を焚き、藥罐をかけ、茶を煮て居る。下の方、松井の源吾貞景、百日束ねの鬘、鼠木綿、袷、白股引、世話六部にて、笈をおろし、焚火に差寄り、煙草のんで居る。てんつゝゝ、百萬遍にて、幕明く。ト直にかすめたる三社祭の鳴物聞える。

無緣「南無阿彌陀佛。」皆々「なむあみだんぶつ。」ト一二三遍あつて、無緣「願意功德平等一切經發菩提心往生安樂、南無阿彌陀佛々々々々々々。」皆々「南無阿彌陀佛々々々々々々。」ト納まる。杢郎「扨々みなの衆、御苦勞々々々、サア〳〵、茶を進ぜませう〳〵。」ト丸盆に茶椀を載せ、皆々に出す。皆々「これは莊屋樣、憚りでござります。」坊主「誰樣も御大儀々々々。併し野天で繰る百萬遍、天氣が好うて、

本舞臺、三間の間、誂へのこけら屋根、天水桶、舞臺前忍び返し付の黑板塀、上の方を見せ、向う打拔き、空には星現はれ樹木の梢所々に見せ、貝鐘、アリヤ〱の聲、早拍子木と時の鐘、聞え、かすめて、どん〱、正面よき所を切り破り、平内、大童、拔刀にて、御朱印の袋入りに一卷を卷き付け、これを啣へ窺ひ出づる。跡より捕手六人、うかゞひ〱出て來り、「捕つた。」とかゝるを立廻つて切り捨て、それより以前の捕手組子、段々と平内にかゝつて見事なるタテ。此のうち誂への鳴物、凄き合方。平内この人數を相手に、いろ〱切り倒し、御朱印の包を出し、しつかりと懷中せんとする。この時隅田平、捕手の形にて窺ひ寄つて、

隅田「長盛、捕つた。」ト落ちてある弓張を取つて投げる。平内切つて捨て、きつとなる。平内「ヤ、わりや隅田平。おもふに違はず、いよ〱裏ぎりひろいだな。」隅田「下郎も一味はするものの、こなたの惡事を見限りて、反り忠せしこの隅田平。こなたの企みの廻文を、この方へ奪ひ取らんと、方便に渡せし神祇官、御朱印諸共速かに、奴に渡して繩かゝれ。」平内「小癪な、そこ退け。」隅田「繩かゝれ……捕つた。」ト立廻り、好きところにて、十手にて眉間を打つ。打たれて、たじ〱とたじろぐ機に、隅田平は一卷を奪ひ取り、下へ飛びしおもひ入れ。平内起き上つて、つか〱と行く。續いて飛ばんとする。このとき塀の内舞臺前へ、高張大分一度に出づる仕かけ。途端にうしろの打拔へも小振に拵へし高張一度に出でて、下家にて大勢の聲する。大勢「動くな。」ト取卷きし體。平内白刃を構へ、下の方

ながら。」ト差出す。敵役の女中一度に、皆々「ドレ。」ト寄るを、お初ちやつと控へて、はつ「イヤ、貴方がたへは。」庵崎「然らば取次ぎ。」ト寄るを、お初見上げて安堵の思入あつて、はつ「御前へ御披露。」ト木の頭。はつ「お願ひ申し上げまする。」ト平伏して差出す。これをきざみにて拍子。幕。

幕引付けると、ドンチヤンの繋ぎにて引返し。支度よき知らせにつき、ドンチヤン早めて打ちあげ、又とん〳〵となり、向う揚幕より捕手七人、白鉢卷、黑具よてんの形、各自定紋付きの弓張り、十手を持ち、窺ひ〳〵出て來り、舞臺前幕の外へ居竝び、中に頭一人、襷鉢卷、大小、草鞋にて十手捕繩を持ち、控へ居る。

捕一「當家の執權衆の平内長盛こそ、誠平家の殘黨たる。」捕二「世を遁れたる後藤長盛、當家を押領なさんず爲。」捕三「入り込み窺ふ局岩藤、彼奴は現在妹にて。」捕四「兄に劣らぬ不敵の女、尾上が自殺の書置より。」捕五「事顯はれし上からは。」捕六「不敵の平内召捕れと、郡領殿の仰せを受け。」捕七「出口出口の門戸を閉し、組子を選つて圍みし上は。」捕二「どうで遁れぬ籠の鳥、なれども手だれの平内長盛。」捕二「油斷大敵御油斷無く。」捕三「繩打つ手段が肝要ならん。」捕頭「館に見えぬと訴へは、必定屋根へ切り拔けしか。」各「御油斷なさるゝな。」七人「心得ました……捕つた〳〵。」トどん〳〵どん早めになり、捕手殘らず幕の内へ入る。捨鐘、早拍子木、アリヤ〳〵の聲烈しく幕明く。

多な事を仰しやりますな。」岩藤「殊更草履を持つてうせをつたは、おのれ、尾上が仕返しにうせたであらう。いかにも、コレ〳〵、この草履で、あの尾上めを岩藤が、打つた、叩いた、此のやうに。」ト草履を取つてお初を散々に打ち据ゑ、岩藤「ぶちのめした。」ト突きとばすはずみに懐中の密書落ちる。お初手早く取つて燈籠の明に透し、はつ「密事とばかり記せし一通。」岩藤「ヤ、それを。」トかゝるを立廻つてきつと留める。はつ「正しくこりやコレ、長盛どのより内意の密書、文言くはしく見る時は、悪事の手がゝり、お上へ差上げ、御詮議願ふ好き證據。斯うした品もあらんかと、こなたの自由になつたのに、怪しき密書の手に入るも天の憐み、この上は主人尾上が最期のうらみ、今こそ晴らさん、覺悟しや。」岩藤「それ戻さねば、われから先へ。」はつ「イヤ、こなたから。」トちよつとたち廻りあつて、兩人「ドツコイ。」トこれより六段早めの合方、兩人よろしく立あつて、トゞ岩藤を仕留め、立ち身にて抉る。岩藤「エヽ、残念な、下素女めが手にかゝるか。たとひ死んでも岩藤が、恨みは殘つて入間の身寄り、花子を始め櫻姫、なに安穏に置くべきぞ。エヽ、口惜しい。」ト苦しみ倒れる。はつ「主人尾上が恨みの草履、思ひ知つたか〳〵。」ト草履にて散々に打つ。この時切戸口より以前の奥女中、殘らず手燭を照らし、長刀かい込み、つか〳〵と出て、女方「狼藉者。」皆々「動くまいぞ。」ト取巻く。お初書置と密書を出し、はつ「お騒ぎあるな各方。主人尾上が自害の書置、殊に岩藤長盛が密事の一通、憚り

岩藤「わしや持病の頭痛が發つて、折惡う、アイタ、、、、。サ、これぢやに依つて、マヽ、其方ばかり先へ行きや。」はつ「すりや、あなたにはお頭痛でござりますか。」岩藤「持病の頭痛で心惡うて。」トおもひ入れ。はつ「それは御難儀、それには幸ひ私が、好い守を持つて居りまする。」岩藤「して、其方が所持の守は。」はつ「卽ちこれでござりまする。」ト草履を出してさし付ける。岩藤見て、岩藤「こりや草履ぢやないか。」はつ「そのお頭痛のお守には、この草履が相應でござりまする。」岩藤「默りや、最前より慮外緩怠、それと云ふのも、まだ年若でありながら、わしが勤むる局役、足はぬ局と侮つて、おのれは阿房にする氣ぢやの。そりやモウ、おのれが阿房にしをらいでも、上さまの思召し、あなた方のお蔑視みにも、わしが樣な局役が、どのお屋敷にあらうぞいの。これといふも御贔屓強う、年久しう局役を、勤めさんした私が伯母さん、ぬしを見眞似の岩藤ぢや。縱ひ尾上が病氣であらうが、それを何の構ひだて。ヤイ初め、自體おのれが差出て、いつぞやも淸水で、この岩藤にようも後れを。」トお初を引付け、岩藤「取らせたな。」ト髻を執つて捻ぢ廻し、きつとなる。岩藤「コリヤヤイ、大切な御朱印を隱し置き、姫を科に落さんと企んだも、あの尾上。云譯なさの自害であらう。盜んで持つてうせをつた、眞の御朱印、最前わしが取戾し、忠臣の長盛殿へ手渡して置いたからは、何として〳〵、わいらが手にはもう戻らぬ。御朱印盜んだあの尾上、おのれも同じ同類ぢやぞ。」はつ「ア、モシ、滅

されてお出でなさるゝとの事。それを水に寫してお上げ申したうござりまする。どうぞお貸しなされて下さりませ。」岩藤「ハテ、そりや心やすい願ひぢやが、わしや其のやうな守は持たぬ。そりやわしぢやあるまい。間違ひであらうぞや。」はつ「何を仰しやりまする。あなたが有り難いお守を、お持ちなされてお出で遊ばす事は、私がよう存じて居りまする。」岩藤「ハテサテ、初とした事が、なんのマア、持つて居る程ならば、人の爲になる事ぢやもの、貸さいで何とせうぞいなう。」はつ「サ、その人のためになる、お慈悲深いお局樣、何卒お貸しなされて下さりませ。」岩藤「エヽ、アタしつこい、無いと云ふに。」はつ「イ、エ、屹度あるはずでござりまする。」岩藤「そりやなにが。」はつ「あの大切な御朱印が。」岩藤「ヤ。」ト思入。はつ「サ、それを何卒お借り申したう存じまして、わざ／＼これへ參りましてござりまする。」岩藤「すりや岩藤が御朱印を、隱し持つたと推量して。」はつ「お庭傳ひに參りましたも、あなたのお側へ近寄つて、尾上が病氣のいろ／＼を、きつとお話し申した上、御檢分を受けませうと、夜中も厭はず參りました。お局樣、主と病、又これも卽ちお家の御奉公かと存じまする。」

トこの臺詞のうち、ぢり／＼詰め寄る。岩藤思入あつて、岩藤「それほどに云やるもの、友朋輩の病氣とあるを、見舞はぬも後日の無念。いかにも樣子を見屆けに行きませう。」はつ「サ、御一緒に參りませう。」ト身拵へする。岩藤見て、岩藤「アイヤ、今は行かれぬ。」はつ「そりや又なぜでござりまする。」

ひ窺ひ出る。岩藤ためらひ見て、岩藤「それに居るのは誰ぢや、何者ぢや。」はつ「ハイ、私でござります。」岩藤「私とはたれぢや。」はつ「ハイ、初でござりまする。」トきつと云ふ、岩藤おもひ入れあつて、岩藤「又ものの足蹈み叶はぬこの奥庭、誰が許して。」はつ「ハイ、私はお局様へ、ちとお願ひがござりまするゆゑ、お下りを待ちまして、お部屋へ上りませうと存じましたれども、急なことゆゑ、お館の御法度を破りまして、これまで參りましてござりまする。」岩藤「この岩藤に急な用があるゆゑに、それでアノ、奥庭まで。」はつ「やう〳〵の思ひで、參りましてござりまする。」岩藤「して、其方が願ひといふは。」はつ「サ、その儀は。」岩藤「きり〳〵こゝで申さぬか。」ト思入。これより琴六段入りの合方になる。はつ「お局樣、ひよんな悲しい事が出來ましてござりまする。」岩藤「ひよんな悲しいこととは、そりや何を云ふのぢや。」はつ「ハイ、主人尾上は、癪が差込みまして、一向心付きませぬが、若しもの事がござりましては、私一人で心細う存じまする故、あなた樣へお願ひに上りました。憚りながら尾上が部屋まで、お出で遊ばされまして、病氣の樣子、御覽なされて下さりませうならば、有り難う存じまする。」岩藤「なんぢや、尾上どのには持病が起つて、氣が付かぬと云やるのか。そりやマア氣の毒な。早う藥など服ませて進ぜやいなう。」はつ「ハイ、それに如才はござりませぬが、一向心が付きませぬゆゑ、あなたへお願ひ。承りますればあなたさまには、結構なお守を、お持ちな

委細は詳しく認めた一通、内見の上、必ず火中いたしてよからう。」ト懐より密書を出し渡す。岩藤取つて、岩藤「心得ました。密かに内見いたすでござらう。御同心の清玄様、必ずともに、この沙汰多聞へ。」ト懐中する。清玄「氣遣ひ無用。某とても、二人が手引に當家に入り込み、心かくるは櫻姫、いよ〳〵兄弟ぬかりなう、この清玄に。」岩藤「今宵の内にあなたへ、しかと。」清玄「然らばそれまで庭先に、雨を忍びて相待たん。」平内「盗み出すは庭傳ひ。首尾よく姫をわたしなば、連れ行く出口は。」岩藤「堀へ續きし水門より。」清玄「盗み出さば引擔げ。」平内「丁度そこらが通路のぬけ道。」清玄「首尾よく忍んで。」平内「必らずともに。」清玄「心得ました。」平内「御油斷あるな……必ずともに。」ト岩藤へ目顔にて知らせる。清玄「承知いたしだ。」平内「併し他聞をはゞかる大事、蟻の穴から。」岩藤「堤の崩れ。」清玄「必ず隱密。」岩藤「氣遣ひなさるな。」平内「押つつけ姫を。」清玄「ヤ。」ト立ち上るを岩藤、手早く清玄を、刀を引拔き見事に切る。反し板にて首は好き所へ出る。これをきつかけに時の鐘、下の萩垣を押分け、お初窺ふ。岩藤手燭を吹き消す。此の途端三方一度の仕組み、兩人よろしく思入。こゝにて鳴きつれし蛙、一度に聲を止める。平内おもひいれ。平内「大事を知つたる清水清玄、斯樣いたさば。」岩藤「互に安堵。」ト思入。時の鐘になり、平内、窺ひ〳〵下座へ入る。岩藤聞きみゝ立て、岩藤「ハテ、心得ぬ、今まで千草に鳴きつれし、耳喧しい蛙のこゑが、一度に止みしは。」トあたりを窺ふ。お初窺

モシ、旦那さま〳〵。」トいろ〳〵介抱して、草履を取上げ、きつとなつて。はつ「おのれ岩藤。」ト無念の思入。この見得にて道具横へ引いて取る。

本舞臺、三間の間、正面より下の方へかけて奥深く〳〵折廻したる高足の障子屋體、前通り萩垣、山吹の盛り、舞臺前も土手板の山吹、奥の方に枝折戸、石燈籠、手水鉢、ふりよき櫻の大樹を取付け、日覆より一面の枝垂櫻の吊枝、奥御殿庭の景色。雨車烈しく蛙の聲、時の鐘にてこの道具納まる。ト向うより粂の平内左衞門、社杯、半股立、足駄、蛇の目の傘にて、跡より清水清玄、赤合羽、中開笠をかざし出て來り、小石を探り取つて礫を打つ。これを合圖に枝折門より岩藤、下駄、蛇の目の傘にて手燭を持ち出て來り、兩方見やつて思入あり。

岩藤「兄御樣か。」平内「妹岩藤、兼て尾上の隱せしと、察せしところの當家の御朱印、首尾よく其方が。」岩藤「お氣遣ひなされまするな。心憎きは尾上めと、部屋に忍んで窺ひしに、草履の遺恨を根に持つて彼奴は自害、その座にあつた御朱印は、私が奪うて參りました。」平内「それは重疊。して、尾上は。」岩藤「すぐにその場でのたれ死。これさへあれば、わしら二人が願ひも叶ふ。さりながら、尾上が下女めが戻つた樣子、私が方には危いもの。こりや幸ひと兄上樣へ。」平内「長盛しかと受取つた。」ト懷中して、平内「まだ其方に談じたき旨あれど、奥表と隔たる兩人、心に任せぬ事どもゆゑ、

り、忍び足にて向うへ入る。お初この體を見て、はつ「ヤ、、、、、こりや旦那樣、尾上さま〳〵。」ト呼び生け介抱する。尾上岩藤と心得、尾上「おのれ岩藤。」はつ「旦那樣、お心が付きましたか。初でござりまする〳〵。」ト介抱する。尾上これを聞いて、尾上「初か〳〵。」はつ「初でございます〳〵。」ト尾上縋つて、尾上「遲かつた〳〵。」ト云ひながら反りかへる。はつ「モシ、旦那樣、お心を確かにお持ちなされませ。日頃からお情ぶかいお心に相違して、合點の行かぬ今宵のお使、是非なうお屋敷を出ながらも、どうも途中の胸騒ぎ、行くも行かれず後髪、物のはずみに文箱の、中より出でし草履とおふみを、見れば貴方の書置、ハッと思うて氣もそゞろ、どうして戻りましたやら、取つて歸りし效も無う、思ひ切つた事なされて下さりましたなア。マア第一お宿へ私が申譯がござりませぬ、モシ、旦那さま、元の起りはこれでござりまするか。」ト草履をさし出す。尾上取つておもひいれあり。尾上「局岩藤、無念な。口惜しい〳〵。」ト思入。はつ「御もつともでござりまする。お道理でござりまする。」尾上「まだその上に大切なる御朱印、アノ〳〵。」はつ「どうなされましたぞ。」尾上「この部屋へ蹈み込んで、岩藤が持つて行つたわいなう。」ト又のりかへる。お初抱き緊めて、はつ「モシ〳〵、お氣遣ひなされまするな。その御朱印も取り返し、きつと貴方のお恨みは、私が晴らさせまするぞ。」ト耳へ口寄せ思入。尾上お初が手を執り、尾上「うれしい〳〵。」ト云ひながらがつくり落ち入る。はつ「モシ

岩藤「オヽ、わしぢや、岩藤ぢや。」尾上「ナニ、岩藤ぢや。」ト透ひ寄る。岩藤「オヽ、先刻にから後に居て、もう死ぬかくと、其方のよまひ言を聞いて居たが、中々あはれに面白う、好い慰みであつたわいの。サヽ、持つて居やる御朱印を、局に渡して、早う往生しやいなう。」尾上「ナニ大切な御朱印を。やはか其方に。」岩藤「エヽ、死損ひが、御朱印持つて行つてなんにする。コレ、ようマア己、櫻姫どのに盗ませた。その御朱印とすり替へて、あの似せ物を渡しやつたの。コレ、此方にあればわしが兄長盛どのに手渡しして、櫻姫も逐ひまくり、姉の花子は捨坊主、入間の家はわしら兄弟、濡手で粟より手もなう納まる。其方の自害も自業自得、御朱印よりは善光寺の、御印文なと大切に持つて、冥途へ迷はぬ樣に、きりく死んで行きやいなう。」ト尾上を蹴飛ばす。尾上「エヽ、聞けば聞く程恐ろしい、大惡人の岩藤兄弟。その御朱印は、渡さぬく。」トよろめきながらしがみ付く。岩藤「死にかゝつても執念深い。放し居らぬか。」ト引ッ奪り、二重舞臺より蹴飛ばす。尾上「アッ。」ト苦しむ。岩藤御朱印を持ち行きかゝる。尾上這ひより取りつき、尾上「たとひ死んでも此のまゝに、わたさぬく。」ト縋るをふり切る。尾上倒れる。岩藤思入あり、懐劍を執つて尾上に乘りかゝり、刺し殺さうとする。向うよりばたくにて、お初出て來るゆゑ、思入あつて落間へ隱れる。尾上よろほひながら、尾上「おのれ岩藤、いづくまでも。」ト行かうとしてよろばふ。此のうちお初足早に舞臺へ來る。岩藤落間よりあが

んにこれまでわしを大事に、勤めてたもつた優しい其方、眞の兄弟というたとて、其方が様に氣を付けてくるゝ者が二人とあらうか。死後まで私や忘れぬ〳〵、忝い、と、サ、其方の聞く前で、この禮が云ひたいわいの〳〵……可哀や蟲が知らせてか、つかひに行きともない素振を見たに依つてな、とても、思ひ詰めた今日今宵、妨げあつてはなるまいと、涙の胸をも鬼に持つてな、いつにない大きな聲をして叱つたを、さぞ腹が立つたであらうな。叱られたとて顏へも出さず、お使にまゐりますると、悄々立つて行きやつた後影を見た時には、これがこの世の別れかと、思へば思ひ廻す程、八寒地獄の涙の氷柱、大焦熱の苦しみより、コレこの胸が、張り裂く思ひであつたわいなう。これも誰故あの岩藤、今に思ひ知らさいで置かうか……申し御兩親樣、先だつ不孝は御免しなされて下さりませ。萬々年の御壽命すぎ、未來でお目にかゝりませう。」ト思入して、尾上「さはさりながら、大切なるこの御朱印、どうぞ忠義の侍へ手わたししたい。せめては初に渡してなりと、心知れざる者どもの、若し手に入らばお家のお爲に。これが末期の心がゝり。」トおもひいれあつて、尾上「とても部屋へは誰あつて。」ト思入あつて御朱印をしつかりと懷中して、尾上「南無阿彌陀佛。」ト懷劍を二三度咽喉へ當てる事あつて、トゞ机の上へ柄をすゑ、ぐつと突き立て苦しむ。時の鐘、この時後へ岩藤窺ひ出て、尾上が懷へ手をさし込む。尾上その手をとらへ、尾上「ヤ、、、誰ぢや、何者ぢや。」ト苦痛のこなし。

尾上「藤の花長き短き世の中に、なり行く今日の思ひ知らるゝ。」……アヽ、今日は人の身明日は又、我が身の上と知らぬが浮世、二十五年は夢の夢。アヽ、思へば果敢ないものぢや。……計らずも御殿にて、惡企みある岩藤が、草履を以ての。」ト口惜しき科あつて、尾上「局の兄たる平内長盛、兼てお家を窺ふ佞人、花子さまの御剃髪、櫻姫樣に申し含め、御朱印までを失うて、越度は姫へ負はせん企み、察せしゆゑに人知れず、似せを拵へ入れ置きしも、お家を思ふ心より、眞の御朱印この如く、尾上が守護しある事を、悟り知つたる局岩藤、わざとこの頃我儘氣儘。いかに町人の娘なればとて、勤め方一通りを存ぜずに、コレ、お役目がならうと思ふか、不忠者めが。コリヤヤイ、おのれが樣な人面獸心なるものを捉へてな、一々爭ふものならば理を以て非に陷り、御恩を受けし御前樣をも、勿體ないが自然とお怨み申し上ぐる儀も出來ようかと、ぢつと無念を怺へてな、面を和げ居ながらも、心の中の口惜しさは、ほんに寐た間も忘れた事は無いわいやい。よしそれとても御奉公ぢやと、胸を撫り、恥恥辱とは思はねどな、今日の恥辱は捨て難き草履の恥辱、とても生きては居られぬこの身の命。アア、さうとは知らずあの初が、さぞや今頃はとつかはと、急いで行きやるであらうに、可哀さうに。コレ、其方が部屋に居やつては、快く自害もならず、又よもや殺しもしやるまい。留める其方に氣後れして、若し見苦しい死を遂げなば、アレ見よ町人の娘ゆゑと、笑はるゝが口惜しいわいやい。ほ

が文箱の紐を挿へ引く機に紐が解けて、内より片しの草履と書置落ちる。お初手早く取り上げる。三人立廻り、行燈の燈に透し見て、はつ「ヤ、、、、書置の事。」惣太「草履は慥か。」ト見ようとする。軍助「若君様は。」ト惣太を引付ける。はつ「こりや斯うしては居られぬわえ。」ト書置と草履を持ち、時の鐘にて向うへ走り入る。兩人殘つて、軍助「爰を逃ぐるは仔細ぞあらん。若君様は。」ト引捕へんと立廻りの内、惣太が腰に挾みし狀の入りし莨入、軍助が手へをさまる。門八窺ひ出て、門八「合役、どうした。」ト思はず出るを、軍助引退ける。この間に惣太蒲團を脊負ひ、辻番火鉢を提げ、花道へかゝり、莨入を落せしを心付きしおもひ入れ。軍助門八を引付け、軍助「あなたのお行くへ。」惣太「エイ。」ト花道より小石を打付ける。軍助、門八にて受ける。門八「アイタ、、、、。」ト面を押へる。軍助「合點だ。」ト莨入を啣へ、裾を端折る。門八中返りする。惣太むかうへはひる。この見得、時の鐘の送りにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、前幕の尾上の部屋の道具。爰に尾上、白無垢のしごきの形、珠數を持ち、机の上に三方に袋入りの御朱印を載せ、香爐を直し、硯箱引寄せ、文庫など取散らし、行燈を照らし、辭世を書き居る見得。時の鐘靜かなる合方にて、この道具を好き所まで押出す。ト尾上こなしあつて、

を縄にて絡げ、提げて出て來り、惣太「穿物をこゝらに置いたが。」ト尋ねるおもひ入れ。はつ「怪しからぬ鴉鳴き、お使に行くをいやぢやと思ふ矢先へ、アレ〳〵、鴉鳴きの悪さ〳〵もうコリヤお里へ行た振をして、すぐに歸るがよいわいの、しかし、跡で知れたらお叱りなさるであらうし、と云うて思はぬこの怪我、鴉の鳴く音、行くに行かれず。オヽ、それ〳〵、何かの様子は、この文箱を開いて見たならば。」ト文箱を開いて見んと解きかゝり、はつ「此のやうに封のある物を、解くもどうやら、と云うて今日の仕儀。アヽ、心がゝりな……アイタヽヽ。」トまた小指を結へるおもひ入れ。時の鐘、向うり軍助、風呂敷包を提げ、息せきと出てきたり、軍助「アヽ、おもはず手間取つて、さぞお待兼ねであらう。殊にあの鴉鳴きが、一倍氣にかゝるわえ。」トこの臺詞云ひながら、すた〳〵と舞臺へきたり、軍助「爰だ〳〵。モシ、番屋のお人え。大きにお世話でござりました。」トこの聲を聞き、惣太悯りして尋ね當りし履物を穿き、諸道具を持つた儘、つか〳〵と行きて、行燈の燈を借り小指を結へて居るお初を突き退け、燈を吹き消さうとする。お初驚く拍子に革文箱をばつたり落して、はつ「アヽ、コレ、滅相な。」軍助「コレ、お預け申したあのお方を。」ト惣太委細構はず行かうとする。軍助見咎め、軍助「貴様が慥か。」ト寄るを振切る。軍助「合點の行かぬ。」ト又寄らうとするを、お初は文箱を取つて行かうとする。惣太思はず交り邪魔にされる仕組み。軍助は惣太が提げて居る道具を捕へ留めんとして、お初

て、はつ「コレ〳〵、斯うして下さんせ。こなさん、もう行かいでもよい程に、これからすぐにお屋敷へ歸つて、庵崎さまの女中衆に、わたしがお使からもどるまで、なんぞ尾上さまの御用があらうも知れぬほどに、氣を付けて下さんせと、こなさん、頼んで下さんせ。」可助「ハイ〳〵、畏まりました。したが、お前一人で。」はつ「ハテ、大事ない程に、こなさん歸つて、さう云うて下さんせ。」可助「そんなら、これでお別れ申しませうか。」はつ「エヽ、また氣にかゝる事を。」ト耳を塞ぐ、可助心付かず、可助「アヽ、いま降られると未來だ。」ト禁句ばかり云ひながら向うへ入る　鴉頻りに鳴く　はつ「折も折とて、今日に限りてこのお使、先へと云うては一足も行かれぬのみか、今の人の心にかゝる云ひ事。先刻にお部屋で皆樣の詞といひ、いつに變つて何ぢややら、そわ〳〵とした御殿の樣子、尾上さまのお身の上に、どうやら仔細が。アヽ、行きともない〳〵。思ひ切つて爰からお屋敷へ歸らうか……アア、したが又、どのやうな急な御用のお使かも知れず、ハテ、どうしたものであらうな。ドレマア、一走り行て來ようか。」ト行かうとして、石につまづいて爪を離したる思入。はつ「アイタヽヽ。ほんに急げば廻れとやら、躓いて爪を離したさうな。これも氣にかゝる……ちやつと結へて。」ト番屋の辻行燈の燈を借り、はつ「モシ、御免なされませ、ちやつとお貸しなされませ。」ト鼻紙を出し、足の小指を結び居る。この時番屋より惣太、三布蒲團を天とくじに包み、これを脊負ひ、椀箱の膳と辻番火鉢

せう。」ト肌を入れ、刀を納め、 惣太「併し、この死骸をこゝらへも置かれまい。幸ひと忍ヶ岡の御池から、流れの末は宮戸川、爰から直に水葬と仕らう。」ト梅若が死骸を抱き上げ、前の流れへ打込み、 惣太「さて、これからは今の奴のうせぬ内、爰を隨德寺と出ようか。所詮この所の住居はならねえ。驅落をする位なら、箸片しでも置いて行くは損だ。ドレ、はやく諸道具を纏めて行かう。」ト時の鐘、惣太は番屋へ入る。矢張時の鐘、向うより中間可助、箱提灯を持ち、お初、件の革文箱を持ち、出て來る。可助「モシ、ちとお急ぎなされませ。今日は十四日で月夜の筈だが、曇つて來た故、今にも泣き出しさうな空でござります。」 はつ「アレ、この人わいの。ちと心に懸つて案じて居るところへ、泣き出しさうぢやの何のと、そんなこと云うて下さんすな。」 可助「でもお前、よくなる方は、心許なうござります。」 はつ「これはしたり、嫌な事ばかり云ふ人ぢや。其のやうな事云はずとも、早う行かしやんせいの。」 可助「ハイ／＼、行きまする。コレ、ひよつと提灯の火でも消えて御覽じませ、六道の辻を迷ふやうなものだ。」 はつ「エ、、いろ／＼な事ばつかり云うて。サア／＼、だまつて行かしやんせ。」 可助「ヘイ／＼、畏まりました。」ト云ひ／＼行きかゝる。空には鴉二三羽飛び頻りに鳴く。お初思入。このとき提灯の火消える。 可助「南無阿彌陀佛々々々々々々。たうとう火が消えてみやくがあがつた。」 はつ「又かいな。ほんに氣にかゝる事ばつかり。そしてマア、この胸騷ぎのする事わいの。」ト思入あつ

痛の思入にて、梅若「世になき梅若、よしなに頼む〳〵。」ト手を上げて惣太を撫でまはす。惣太、梅若が顏をよく見て、惣太「神祇官の司たる、吉田の少將惟貞卿、御母君は斑女御前、御二方のいつくしみ、寵愛常に淺からず、お乳やめのとに傅かれ、御運全き梅若君、世の盛衰とはいひながら、お家の亂れ情なや、この東路にさまよひ給ひ、旅の疲れの面瘦れ、まだ稚なき御方を、うち打擲は何事ぞ。それも何者現在の、御家來粟津の七郎が、數打つ杖の笞にて、落命あるか梅若さま、約束事とはいひながら、思ひ廻せば廻すほど、御果報拙き。」ト顏見詰め、守の紐を引きつけ、ぐつと首を締めあげ、惣太「餓鬼めだなァ。」ト時の鐘、蛙の聲、忍び三重、梅若苦しみ落ち入る。おもひ入れあつて、惣太「あの世で親の少將どのに、廻り逢ふのはこの書きもの、こりやァ矢ッぱり持つてござるがよい。」ト頸へかけさせ、惣太「サア、これからはおれも侍。主殺しと云はれぬ先に、潔く腹を切つて死ぬがよい。さうだ〳〵。」ト刀を拔き、大肌脫ぎになり、惣太「モシ梅若さま、お前ばかりはやりませぬ。私も跡から參つてお供いたします。待つてござりませ。南無阿彌陀佛。々々々々々々。」ト二三度切らうとして氣を變へ、惣太「イヤ〳〵、こりやァ死ぬがものはねえわえ。主を殺したといふことは誰も聞かねえ。この樣子を知つた者は、廣い世界に、あのお月樣とおればかり。そんなら別してうろたへて死ぬがものはない。お月樣がこれまで物を云つた例も無し。イヤ〳〵、こりやァ生害思ひ止まりま

梅若「わしが事を梅若と、その名を呼んで介抱なすが、その梅若といふ事を。」 惣太「サア、存じましたは、コレこの書物。」ト見せて、一法師とおもひの外、かかる證據があるからは、疑ひも無き吉田の公達。」 梅若「今更名乘るも面伏、されども疑ひ受けし身の、疑ひ晴らさすその爲に、父の御家名云ひ聞かさん。我は都の北白川、父は吉田の。」ト云ひかけて苦しきおもひ入れ。 惣太「モシ〳〵、お心慥かにお持ちなさりませ〳〵……コレ、そんならいよ〳〵吉田の少將、惟貞卿の御公達、松若君の弟君。」 梅若「我ぞ吉田の梅若丸。」 惣太「エヽ。」ト驚く。 梅若「かかる非道のおのれらに名乘るまじとは思へども、所詮病のその上に、今打つ杖に身内の惱み最早存命思ひも寄らず。今の家來が來りなば、最期のこの由詳しく語り、せめて兄君松若さまへ傳へてくれよコレ下部、慈悲ぢや情ぢや頼むぞよ。」トうんと反りかへるを、惣太介抱して、 惣太「モシ、お心を慥かにお持ちなさりませ。知らぬ事とて私は、お家の忠臣粟津六郎俊兼が弟、若年の砌より、勘當受けて流浪のこの身、粟津の七郎俊次と申す者。あなたの御誕生なされぬ前に、お館を立退き、あなたを始めお供の人も、誠に知らぬが間違ひの始まり。一法師殿と心得て、ひよんな事を致しました。モシ、私は御家來でござります。御免なされませ〳〵。」 梅若「ナニ、家來粟津が弟にて、聞き覺えたる七郎俊次、すりや某が家臣とな。」 惣太「左樣でござります。御家來でござります〳〵。」ト抱きかゝへて介抱する。 梅若苦

ち叩かしやつても、身に覺えなき事なれば、どうしてその名を。」　惣太「云はずば外に名があらう。その名を云へ。」　梅若「サ、その名はどうも。」　惣太「そりや外に名はあるまい。一法師だと吐しやァがれ。」ト散々に打つ。梅若竹に縋つて、梅若「そりや胴慾ぢや、コレ下部、病に冒され只ならぬ、苦痛の我をこの打擲。ア、コレ、なぜに歸つてくれぬぞいなう。」ト向うの方を見遣り、軍助を待ちかねるおもひ入れ。惣太「供の野郎が來ぬうちに、名乘らせて訴人する、殊に下部と大風な、その詞の遣ひやう、平人の餓鬼ぢやァない。訴人されて金になれ。われを訴へ、褒美にする。その名を吐せ。」　梅若「サァそれは。」　惣太「云はねば手酷く。」　梅若「サァそれは。」　惣太「ぬかせ。」　梅若「サァ。」　兩人「サァ〳〵。」

惣太「云はねば、カウ〳〵、ぬかせ〳〵〳〵。」ト割竹にて重ね打に打ち据ゑる。此のうち時の鐘、凄き合方。梅若丸氣を失ふ。惣太「うぬ、空死をひろぐのか。太い餓鬼めぢや。その手を食ふものか。サア、起きやァがれ。」ト引起し見るうち、梅若の頸にかけたる錦の守袋ぶらりと下る。惣太見て、

惣太「さてこそ結構な掛守。この中に證據があらう。」トまもりの内を搜し見て、書物を取り出し、辻行燈の明りに透し見て、惣太「承元元卯年九月十日誕生の男子吉田の少將惟貞の二男梅若丸。」ト讀み、

惣太「ヤ、こりやコレ一法師丸と思ひの外、そんならあなたが。」ト驅け寄つて介抱なし、白湯を與へ、

惣太「モシ、梅若さま〳〵、心がつきましたか、梅若さま。」ト、これにて梅若、心のついたる科にて、

よいよお前が、その大友家の公達なら、わしが隱まひまするワ。今も今とてこなたの噂。コレ、斯うしては置かれませぬワ。必ずわしに心を置かずと、一法師丸ぢやと名乘つて聞かさつしやりやせよ。」トいろ〳〵といいたはる顏にて裏問ひかくる。梅若「そりやモウ、頼もしき志、この身に取つては喜ばしい。嬉しうござる。さりながら、今お前の云はしやる、一法師丸とやらでは。」惣太「ないと云はつしやるのか。」梅若「アイ。」惣太「そりやお前、惡い合點だ。併し浮世を忍ぶお身分ゆゑ、隱さつしやるも聞えたが、わしに於て決して其の樣な、胡亂な者ではござらぬ程に、隱さつしやらずと、一法師丸と。」梅若「サ、どの樣に問はしつても、一法師丸とやらではござりませぬ。」惣太「アノ、これ程に欺し賺し、いたはつて問ひかけても。」梅若「一法師ではござらぬわいの。」ト胸苦しきおもひ入れ。惣太きつと氣を變へ、惣太「手溫く問へばいつまでも、その名を隱す小童め。古金買に見せたとて、そのうづ高い顏色は、疑ひもなき一法師、名乘らないとて其のまゝに、それなりにして置かうか。云はにやァ惣太が今爰で。」トあたりを見廻し、捨ててある割竹を取つて、惣太「これで苛責み名乘らせろと、天道樣よりお授けの、この割竹で苛責むが、一法師と早く名乘れ。」梅若「アレ、どの樣に問ひやつても、その一法師とやらでは。」惣太「ないとぬかせば割竹で、斯うして云はせる。カウ〳〵〳〵。」ト散々に打ち倒し、助太「一法師だと早くぬかせ。」梅若「エヽ、情ないこの打擲、たとひこの上どの樣に、打

軍助「ドリヤ、一走り取つて來ようか。」ト捨鐘になり、逸散に向うへ入る。梅若あとを見送り、ほいなきおもひいれ。梅若「コレ、どうぞ早う戻つてくれ。何やらわしや賴り無う思うて。」ト心苦しき思入氣色の惡き體。惣太窺ひ見て、惣太「コレ、兒イどの、氣合でも惡うござるか。お供の人は今直に戻りまするわな。何なら白湯でも進ぜうか。ドレ〲。」ト番屋の內へ入る。梅若胸を抑へて、梅若「どうやら又胸苦しう。ア、コレ、早う來て介抱して。」ト苦しむ。惣太土瓶と茶椀を持ち來り、惣太「サア〲。白湯でも進ぜう。これを飮まつしやい〲。」梅若「アイ、忝うござるの。」惣太「案じさつしやるな。供の人も、今に歸りまするぞ〲。」トいろ〲介抱のうち、梅若が衣服を撫でまはし見る事あつて、惣太「身の廻りもたゞならぬ扮裝。賤しき者の御子息とは覺えぬ物ごし。コレ、兒イどの、こなたは何處から何處へござる旅人だ。」梅若「アイ、都よりはる〲と、陸奥へと志し、參る者でござりまする。」惣太「エ、、上方からアノ奥州へ。」ト思ひいれあり。惣太「先刻に噂のあつた大友家の身内、そんなら若しや。」梅若「エ。」ト思ひいれ。惣太もこなしあつて、惣太「コレ、若衆どの、お前は若しや九州の大友家の公達、一法師どのであらうがの。」梅若「イエ〲。左樣な者ぢやござりませぬ。」惣太「なにサ、隱さつしやるな。今は日陰の身分ゆゑ、その名を云はぬも聞えたが、情ない事には、路行く人も見咎めまするわな。唯者ならぬ子供の道中、疑ひもない一法師丸、コレ、氣遣ひな事はござらぬ。い

をどうぞ、お邪魔ではござりませうが。」惣太「頼んで行きたいと云はつしやるのか。」軍助「左樣でござります。少しのあひだ。」ト思入。惣太「心得ました。案じさつしやるな。病氣となれば、夜風に吹かる事も惡からう、番屋へ入れて置きまする。お前は氣遣ひなしに、早く行つてござりませ。」軍助「それは有り難うござります。左樣なら直に行つて參ります。モシ〳〵、直に戻りまする程に、何方へもお出でなく、あのお方の側を離れずに、お出でなされませ。」梅若「そんなら爰に私一人居るのかや。どうやら心細うて。」軍助「これはしたり、直に戻りまする。」梅若「さうであらうが少しの閒も、其方に別るゝのが。」トおもひ入。軍助こなしあつて、軍助「成程、仰しやれば長の道中、寸の閒も奴めがお離れ申さぬあなた樣、御尤もでござります。イヤ〳〵、こりやよしにしませう。お前樣を負ひ申して、おつゝみを取つて參りませう。サア〳〵、これへお出でなされませう。」ト梅若を脊に負はんとする。惣太「これはしたり、此のお人は、鹽梅の惡いといふ若衆殿を、夜風に吹かせて歩くとは、そりやア惡うござるわな。何も世話な事はござらぬ。番屋へ預けて、ちよつと取つてござりませいな。」軍助「イカサマ、ハヤ、夜風に彼方此方お連れまうすも如何。左樣なら忽ち行つて參りますから、少しの閒この人のかたに。」梅若「そんなら待つてゐる程に、早う戻つてくれいやい。」軍助「ハイ、直に行つてまゐりまする。モシ、番屋のお人、すこしの閒お賴み申しまする。」惣太「アイ、早く行つてござりませ。」

りまする。申さばあなたは御主人様、殊には旅のお疲れ、御家來の奴めが、どの樣に御介抱申したとて、誠にこれは當前でござりまする。少將さまの御最期より、三郎さまも御切腹、お家の敵は源吾貞景、廻り逢はんと思ふうち、長の旅路にあなたの御所勞。モシ、必ずきな〳〵思召されまするな。これより遙か陸奥へお供いたすも、惟貞卿へのお知るべを、便りましての道すがら、あなたの御不例。ア、コレ、どうぞ今宵の宿りを。」ト心遣ひの思入。梅若「アヽ、イヤ〳〵、わしがやまひは氣遣はずとも、お行くへ知れぬ兄君、松若さまの御在所を早う尋ねて、吉田の家を再興なし、父上の敵を討つてたもいなう。」軍助「お氣づかひなされまするな。松若さまのお行くへも、お尋ね申して、めでたう。」トあたりを見て、軍助「幸ひのこの番屋、こゝへ頼つて、用意いたしたお藥を。」トおもひいれあつて、軍助「南無三、藥の包も召替も、同じつゝみに脊負ひしとおもひしに、そんなら跡の接待場へ、不調法な、忘れて參つたと見えたわえ。」梅若「そんなら最前のあの藥も。」軍助「取落して參りました。下郎めは一走り、あの包を取つてまゐるその間、あなたは暫く。」ト思ひいれあつて番屋に向ひ、軍助「ハイ、ちとお頼み申しませう〳〵。」惣太「アイ〳〵、誰だ。」ト顏を出し、「なにを聞かつしやる。どこをたつねさつしやる。」軍助「アノ、私共は旅の者でござりますが、同道いたしました若旦那が、急に病氣疲れまして、途中と申し、殊に持參の品を、跡の接待場へ忘れて參じました。取つて參るまでこの子

法師丸立廻つて見得。これより鳴物を借り、兩人少し立ある。此のうち門八、番屋より身拵へして窺ひ出て、六尺棒を持つて一法師を生捕らんとする思入。兩人とも切り立てられ、はふ〳〵に下座へ逃げて行くを、一法師追ひ驅けてはひる。あと、ときの鐘。惣太、番屋よりかほを出し、思入あつて、

惣太「なんだ、牛醉か、盗人か。番屋の前でどつさくさ。あの門八めも同じやうに、棒を持つてうせたが、ア、、たしか一法師とやら聲がしたが、もしや其のお尋ね者の一法師が、この邊へうせたのか。ア、、そんなら何も稼ぎだに、捕まへればよかつた。エ、、跡の祭、惜しい事をしたわえ……併しあぶねえ仕事に掛つて、生兵法大疵のもと、矢張仕かけた草鞋を作つてしまはうか。」ト時の鐘、合方、小鼓の稽古きこえる。惣太、番屋の内へはひる。向うより軍助、旅奴の拵へ、脚絆、草鞋にて、廣袖丸ぐけの前帶、脚絆、中ぬき草履、紫の頰冠せし、おしよぼ褁げ、旅疲れの吉田の梅若丸が手を引き、介抱しながら出て來り、本舞臺へ辿り來り、軍助「申し、若君樣、押してお徒歩なされずとも、軍助めが肩を當座の腰車、決してお心遣ひは御無用に遊ばされませう。」梅若「忝い其方が志、世にない吉田の梅若を、家來も多きそのなかに、はるか下部の其方が、長の旅路を樣々と、殊に病に惱む身を、斯程にいたはる嬉しさは、家來と思はぬ某を、守護なし給ふ氏神とも、朝夕忘れはせぬわいやい。」軍助「これはしたり、御勿體ないそのお詞、決して左樣な儀は、假にも仰しやらぬものでござ

りや誰も同じ事よ……時に惣太や、今夜は酒の買つたのがあつたか。」 惣太「ほんの五合ばかりあつたぜ。」 門八「其奴は奇妙だ。肴は無いか。」 惣太「田螺のよごしを買つて置いた。」 門八「奇妙〳〵。切つてやらうか。」 惣太「さうすべい。サア、來やれ。」ト時の鐘、稽古の小鼓になり、兩人番屋の内へ入り、戸を閉てる。この時、割竹は好き處に捨ててある。矢張鳴物、向うより、ばた〳〵にて、柹の脚絆、旅奴二人取卷き、大友の一法師丸、凛々しき扮裝にて、石濱官藏、大小黑股引、草鞋、旅扮裝、半纏の形、一法師丸と立廻りながら出て來り、本舞臺へ來て、 官藏「家來め、召捕れ。」 奴「心得ました。動くな。」 一法「旅疲れの某を、召捕れなんどと下知なすは、仔細ぞあらん有りやうに、とつくりと申し聞かせよ、ナ、なんと。」 官藏「仔細々々を聞かずとも、その身の上に覺えがあらう。お咎め受けたる九州の領主、大友家の一子、一法師丸といふ事は、つけ廻して見屆けた。われを詮議の石濱官藏、東海道を見えかくれ、つけて下つたこの東路、出會せたが百年目、きり〳〵腕を。」 奴「まはせエ、。」 一法「小癪な一言、某が素性を、篤と見極めし上からは、包むに詮なし。いかにも汝が推量違はず、九州の領主たる、大友常陸之助賴國が一子、一法師丸とは我が事なるワ。」 官藏「扨こそ違はぬお尋ね者、急いで召捕れ。」 奴「捕つた。」トかゝるを投げ退け、 一法「知られた上は、小腕の試み。」ト拔いて切り付ける。家來二人立廻つて、切り立てられ、はふ〳〵に逃げる。官藏後より十手にてかゝる。一

五五八うろたへ花道へ逃げ行き、五五「うぬ、折助め、覺えてうせろ。」門八「まだ減らず口を。」ト割竹を振上げる。五五「べら坊折助エ。」ト惡體を吐きながら向うへ逃げて入る。惣太「なる程、口がうしやな野郎めぢや……ほんに門八、おれが廻りに出た跡へ、誰ぞ尋ねては來なんだか。」門八「オヽ、來た來た、來た段ではない。アノ平内さまとやらからお手紙が來て居た。コレ〳〵。」ト懷より狀を取り出し、門八「この狀を此方が留守ゆゑ、ツイ懷へ入れて夜廻に出たが、今の樣な事あると、落さうも知れぬ。ヤレ〳〵、あぶない事〳〵。」ト惣太に狀を渡す。惣太「エヽ、この御狀は平内さまから。」ト受取つて見る事。此のうち門八こなしあつて、門八「時に惣太や、先刻おつな話を聞いたわえ。アヽ、京の北白河とやらいふ所で、吉田とやらいふ屋敷が、だりむくつたげなの。」惣太「エ、それがどうした。」ト恟りする思ひいれ。門八「コレサ、この人は、何もさう恟りする事はない。その吉田とやらばかりでもない。アノ何よ、オヽ、それ〳〵、九州の大友常陸之助どのとやらいふ家も退轉して、その子に一法師丸とやらいふがあるげな。その餓鬼がこの吾妻へ來たとやら云うて、捕へて出せば大きな褒美になる事だと、組合の辻番へ配付が廻つたが、なんと、その一法師とやらを捕まへて、褒美を貰ひたいものだな。」トこの話のうち、惣太、手紙を讀み、叺の莨入へ差込み、懷中して、惣太「成程、そんな噂を聞かねえでもないが、いよ〳〵違ひのない事なら、その餓鬼を訴人したいものだの。」門八「そ

町夜廻といふぶらを提げ、門八に引立てられ、出て來る。門八「うぬ、太い奴だ、度々の事だ、屋敷へ連れて行く〳〵。うせろ〳〵。」五五「モシ〳〵、親方、御免なされませ〳〵。」門八「ナニ、うぬ、如何するか見ろ。」五五「モシ〳〵、あやまります〳〵。今度から捨てませぬ。御免なされませ〳〵。」ト詫びるを、門八こづき廻す。惣太これを聞いて番屋より出て來り、惣太「門八ぢやアないか。ア、、見れば町の夜番を捕へて、どうするのだ。何を腹を立てるのだ。」門八「オ、。惣太か。聞かつしやいな。此奴は七軒町の夜番だが、この間度々捨て物があると、此方の持場へ掃きつけたり、おくつたりして、苦厄介をかけるを、見つけたら〳〵と思ふうち、今夜きつと見屆けた。うぬ、その分には濟まさぬぞ。イケずるい奴だ。」五五「イエ〳〵、今度から決して捨てませぬ。御免なされませ。モシ親方、お頼み申します〳〵。」惣太「そりやアてまへ、惡い所を見つかつたな。道理こそこの間中、おいらが持場にごもくが捨ててあると思つた。して、今夜は何を捨てたのだ。」五五「ハイ、今夜はツイお前、私が番屋のまへに、炭俵に入れた鉋屑がございましたゆゑ、思はずお廻り場所の辨へもなく、捨てましたのでござります。御免なされませ〳〵。」門八「うぬ、御免で濟むものか。屋敷へうせろ〳〵。」ト棒にて打たうとする。惣太この棒を無理にとらへ、惣太「ハテ、好い加減にしやれな。」ト棒を無理に取る。門八「ハテサ、癖になるわな。」ト捨ぜりふにて五五八が持つて居る割竹を引ツ奪り、したゝかに打つ。

がら跡へ戻つて來る。尾上は向うを見る。おもはず顔を見合はせ、尾上「まだ行きやらぬか。」はつ「ハイ……行て參りませう。」トよろしく拍子、幕の外、お初思入あつて向うへ入る。

第一番目　五建目

辻番屋の場
尾上自害の場
家根仕合の場

本舞臺、三間の間、うしろ板塀、忍び返し見越しの松、正面辻番屋、九尺に飾り、辻行燈、緣側敷臺折廻しの生垣、眺への通り飾り、舞臺前流れの波板、すべて忍ケ岡寄合ひ辻番、爰に足輕猿島惣太、かんてらの燈にて草鞋を作り居る。はめ板には賣物の草履二三足つるしあり、侍、麻𧘕𧘔を脱ぎ居る。供の中間、緣側にて𧘕𧘔を疊み居る。隣屋敷に張扇を交ぜたる囃子の稽古、時の鐘、五ツの拍子木にて幕明く。

中間「アレ、もう五ツでございます、大分長うかゝりましたね。」侍「さればサ、思ひのほか手間取つた。」ト中間は𧘕𧘔を風呂敷へ包み、侍、羽織を著て裾を褰げ、侍「これは大きに御世話になりました。忝うござる。」惣太「アイ、お易いことでござります。」中間「サア、まゐりませう。」ト矢張稽古の囃子になり、中間箱提灯を燈し、二人とも捨せりふにて下座へ入る。矢張この鳴物、五ツの鐘、むかうより門八、木綿やつし、一本ざし辻番侍にて、六尺棒を持ち、町の夜番五五八、割竹を持ち七軒

急に云うて上げねばならぬ、大事の用。何卒、太儀ながら。」 はつ「お使にまゐりますのでございますかえ。」 尾上「行てたもらずばなるまいわいの。」 はつ「イエ〳〵、このお使ばつかりはまゐりますまい。」 尾上「なぜ行くまいと云やる。」 はつ「サア、イエ、參りますまいではございませぬが、もうやがて五ツでもございませう。いつそ明日の事に遊ばしませぬか。」 尾上「初とした事が、エヽ、何ぢやの、わしが使に行く事はいやぢやの。」 はつ「左樣ではございませぬけれど、ひよつと又私が留守に、お癪が發りました時はと存じまして、それで明日の事と申しましたのでございます。」 尾上「イヤ〳〵、もう行かいでもよい。アノ、初、斯うしや、モウ〳〵、其方の樣に云ふ事を聞かぬものは、いつその事、宿へ下りや。」 はつ「エヽ、旦那さま、御免なされて下さりませえ。」トおろ〳〵しながら、はつ「ハイ參りまするでございませう。」ト尾上も涙を隱し、尾上「參りさへすりやよいわいの。」 はつ「參るまいと申しますれば、宿へ下れと仰しやるゆゑ、參りまする。」ト云ひ〳〵帶を締め直す。尾上「サア、早う行きや。」ト思入。はつ「ハイ、畏まりました。」ト文箱を持ち、花道へかゝる。よき程に尾上こなしあつて、尾上「ア、コレ、初。」 はつ「ハイ、御用でございますか。」トお初跡へ戻り顔を見る。尾上、お初をぢつと見て、尾上「隨分まめで。」 はつ「エ。」 尾上「怪我せぬやうに、行ておぢや。」 はつ「ハイ、參りまする。」ト思案しい〳〵花道へ行く。尾上思案しながら、もう行たかと思入。お初立ちどまり、ぢつと思案な

硯箱を持つて出て、はつ「ハイ、お硯を取つて參じました。」尾上「オ、、初か。」はつ「ハイ。」尾上「オ、まだ何やらぢやわいの。序に革文箱を取つて來てたも。」はつ「ハイ〳〵、畏まりました。」トはひる。

また尾上跡見送り、尾上「あの樣子では、御殿の譯を聞いたか聞かぬか知らねども、コレ初、わしや局岩藤に、コレこの草履で。」ト懐より最前の草履を出し、尾上「どうも腹が立つわいの。おのれやれ岩藤と、心は逸れど、大切なる御殿と、チツと辛抱したわいの。我が身にせまるこの身の上、とても生きても居られねば、この樣子を親達へ、申し送るが臨終の孝行、お家のため、さうぢや。」ト誂への獨吟になり、尾上、硯を引寄せ、書置を書くと、唄一くさりあつて、奥よりお初、革文箱を持ち出て、はつ「ハイ、お文箱を取つて參じました。」尾上「オ、、初か。」と恟り、書置を隱す。はつ「ハイ、初でござります。」尾上「オ、、アノ、序に小刀を取つて來てたも。」はつ「お小刀はたしか、お硯箱にござりましたが。」尾上「イヤ、この内には無い。大方文庫の内であらう。とつくりと尋ねて取つて來てたも。」はつ「ハイ、畏まりました。」トまた奥へ入る。尾上「初が來ぬうち、それ。」トまた獨吟になり、書置を書き、草履を文箱へ入れ、封をする。唄いつぱいに納まると、お初出て、はつ「ハイ、お小刀を持つて參じました。」尾上「オ、初か。」トお初恟りして、はつ「初でござりまする。」尾上「コレ、初や、其方は大儀ながら、この文を本町まで持つて行てたも。」はつ「エ、あなたのお宿へ參りますのかえ。」尾上「サア、

る所を致しましたが。」尾上「成程、そんな所もあつたかいの。」はつ「ほんに、ありや半四郎が、八百屋お七の狂言でござりました。團之助はお杉になりまして、肩を撫りながら、吉三とお七の事で、旦那の手前、主人の事を苦勞に致しまする。あの樣な所は譃ながらも、何卒して遣りたいと存じまする。可哀さうに八百屋のお七も、いろ／＼苦勞いたしまする。それもみんな惡方の致しまする事ぢやけれど、後にはその惡方も、實な人が出まして、たうとうきつい目に合はせまする。お七やお杉が苦勞いたしまして、何事もヂッと怺へて居りまするも、親御樣への御孝行、二つには御主人への事を思召して……ほんにわたしとした事が、八百屋お七にお主は無いもせぬもの。また無調法申しました。拍子にかゝつて旦那樣へ、御意見のやうに。お氣に障りましたら、御免なされて下さりませ。」トこなし。此のうち尾上おもひ入れ。尾上「なんのいなう。其方の話に氣が紛れて、こゝろようなつたわいなう。」はつ「そりやマア、ほんまにお快うござりますか。」尾上「おいなう。さつぱりとしたわいの。」はつ「それはお嬉しうござりまする。」尾上「ほんに初、其方に何やら用があつた。オヽ、それ／＼、次の間に硯箱があらうほどに、ちやつと取つて來てたも。」はつ「ハイ／＼、畏まりました。」トお初奥へ入る。尾上こなしあつて、尾上「年に似合はぬ、あの初、まだ馴染もないこの尾上を、今も今とて煩ひでも出ようか、モシひよつとした事もあらうかと、案じてたもる志、若しや今日の仕儀を。」ト此の内お初

いふ事はあるまいの。」はつ「左様でござります。兎角人は養生が第一、物に屈託さへせねば煩はぬものぢやと、アノ私が存じました巧者なお醫者様が申されました。氣を晴らすが何よりの御養生。物見遊山も氣が晴れてようござりますが、旦那様はアノ、芝居はお好きでござりますかえ。」尾上「オ、芝居はわしも好きぢやわいの。」はつ「左様ならあなたも、御贔屓の役者がござりませうな。」尾上「オ、贔屓が無うてかいの。其方は誰が贔屓ぢや。」はつ「私が贔屓はアノ……此のやうな事を旦那様、お側で。」尾上「ハテ、大事ないわいの。誰ぢや〳〵。」はつ「そんなら申しませうが、私はアノ、市川團之助、三河屋がきつい贔屓でござりますわいな。」尾上「ハテ、變つた者が贔屓ぢやの。團之助ぢやあるまい。幸四郎か、アノ、團十郎であらうがの。」はつ「ハ、、、それも贔屓でござります。さうして旦那様は、誰が贔屓でござりまする。」尾上「わたしはこれでも片贔屓で、あの半四郎が居る芝居でなけりや見た事がないわいの。」はつ「あの杜若は、私は強い嫌ひでござりまする。併し、旦那様がお心意氣なら、葺屋町へお出で遊ばすでござりませう。なんでもこの宿下りには、芝居は見たいものぢや。嬉しいことぢやわい。」尾上「アノ宿下りに……わしが宿下りを。」ト涙含み、尾上「オ、、たのしんで居や。」はつ「樂しみに致して居りまする。いつぞやお宿下りの折、お供いたして、ア、、羽左衛門の芝居を見ました時、丁度このやうに團之助が、誰やらの肩を撫ります

がお發り遊ばした故、御介抱申し上げて、いろ〳〵と心遣ひ。それでわしも、いかう癪が差込んで。」はつ「ナニお癪でござりまする。それなれば、早う被仰つたがようござりまする。いつもの紫金錠を上げませうか。」尾上「イヤ〳〵、藥よりは、少と撫つてたも。」はつ「ハイ〳〵、お撫りでござりますか。」ト此のうち始終合方にて、尾上が脊中を撫りながら、はつ「ほんに、きつうお肩が痞へて居りまする。左樣でもござりませう。毎日〳〵の御前勤め、お心遣ひが多いので、お癪も發らいで何といたしませう。それについても、輕いものは氣散じでござりまする。私はモウ、あなた樣が、旦那樣やら、御家來やら、お友達の樣にお心安う遊ばし下さりますゆゑ、大抵達者な事ではござりませぬ。」尾上「云やればそんなものかいの。したが、其方の父御は侍との事。世が世の時であらうなら、どのやうな結構な、奉公もしやらうに、町人の娘のわしに使はれて居やるは、さぞもの憂いことに思やらうの。」はつ「勿體ないこと仰しやつて下さりますな。西も東も存じませぬ私、御殿向の御奉公、あなたさまが御面倒御らうじて下さります有り難さ、いまこの樣な身になつて居りまするは、却つて氣兼が無うてよろしうござりまする。人間は七轉び八起きとやら、何事も、みな時節でござりまする。」尾上「成程、其方が其のやうな身になるも時節、わしが又、此のやうな身になるのも時節ぢや……オヽ、時節であらうわいの。」はつ「ハイ、時節でござりまする。」尾上「アヽ、わがみの樣に氣を持つたら、煩ふと

る。お初耳を塞いで、はつ「鶴龜々々……ほんにマア、あのお方々は、何やら氣にかゝつて居る中へ來て、ほいない事ぢやの、死ぬ事のと、惡い事ばつかり。それはさうと、もうお下りであらう。ドレ、お鈴の口まで行て見よう。」ト唄になり、お初、勝手元より尾上の上草履を持ち、花道へかゝる。此のうち向うより杉戸を開き、尾上、思案のこなしにて出て來て、花道よき程にて互に行き逢ひ、顔見合はせ、はつ「旦那樣でござりますか。」ト尾上、お初を見て、尾上「オ、初か。」ト思入。はつ「只今おさがりでござりますか、いまお迎へに參るところでござりました。サア、お草履をお召しなされませ。」ト尾上が前に直す。尾上、草履を見て、ぢつとこなしあり。お初、尾上の顏を見て、はつ「見ますればお目に涙をお持ちなされてお出であそばしまするが、お心持でも惡うござりますか。」尾上「アイヤ、どこもわるうはないわいの……サア、行きませう。」トあひ方にて、尾上、草履を見て穿き、お初と入れかはり、本舞臺へ來る。お初ちやを汲んで、はつ「お煮花でござりますが、すぐに御膳をあがりますか。」尾上「イヤ、まだ欲しくない。」はつ「ほんに今、七浦さまや柏尾さまがお出でなされて、氣にかゝる事ばつかり仰しやつて。」尾上「そんならアノ、御殿の樣子を。」はつ「イエ〳〵、何も承りませぬが、何事ぞござりましたかえ。」尾上「イヤ、何にも案じる事ぢやないわいの。」はつ「見れば、おぐしが、いかうそこねて居りまするが、どうあそばしましたか。」尾上「これは……オヽ、それ〳〵、姫君樣がお痞

お仕事のお手傳ひでも。」三人「イ、ヤ、わしらが頼みと云ふはの。」はつ「お頼みと仰しやりまするは。」三人「色事の取持ちぢやわいの。」七浦「好い男を持たしてやるからの、返事を頼むわいなう。」はつ「モシモシ、其のやうな事を、冗談にも仰しやつて下さりますな。さうしてマア、御覽じまする通りの私がやうな、ついにマア、白粉も付けました事も、洗粉も使うたこともござりませぬ。色氣もなにも存じませぬ。旦那樣の事ばつかりかゝつて居ります私、其のやうな御挨拶には、こまりますわいな。」三人「そんなら色事は。」はつ「きつい、嫌ひものでござりまする。」三人「譃ばつかり。」はつ「たとひさう存じましたればとて、尾上と申しまする旦那のござりまする身の上、自由には成りませぬ。」築地「何ぞと云ふと旦那々々と云やるが、一生奉公はしやるまいし、ほんの一季の奉公人。」柏尾「今にも死ぬか、暇が出れば、他人ぢやないか。」七浦「明日をも知れぬ身を以て、堅うして居るのは損ぢやぞや。」はつ「モシ〱、死ぬるの、別れるの、イヤ明日をも知れぬ何のと、其のやうな忌はしい事は仰しやらぬものでござります。鶴龜々々。」三人「そんなら如何でも否ぢやの。」はつ「只今も申しまする通り、御奉公の内は、自由にはなりませぬ。」築地「そんならもう何にも云はず、死んだ樣にして行きませう。」はつ「鶴龜々々〱、萬々年々々々。」七浦「尾上さんが下られたら、先刻の悔みに來たと云うて下さんせ。」柏尾「死ぬ程惚れて居る男を嫌ふとは。」三人「ア、、ほいない事ぢやなう。」ト捨ぜりふにて下の方へ入

道へ引返しながら、侍「念や念や念入れられ。」ト火の番を呼びながら向うへはひる。お初こなしあつて、はつ「今日は何やら晝から胸痞がして、氣にかゝつてあるに、今を限りぢやの、何のと。」ト云ひながら七輪を煽ぐ。ト團扇の柄折れる。トまた心にかゝる思入あつて、はつ「損ねてもないこの團扇。どうしてマア。」ト土瓶を上げて火を見て、消えてあるゆゑ、はつ「いつの間にやら、消えてある程にの。」ト火箸にてあちこちする。ト向うより七浦、築地野、柏尾出て來て、三人「コレ、初、まだ尾上さまはおさがりはないかいの。」はつ「これは皆様、お夜詰がひけましたか。まだ迎へにもまゐりませぬが、マア〱、煙草でもあがりませ。」七浦「ドレ〱、一服喫べませう。」はつ「サア〱、こちらへお出でなされませ。」ト三人上へ通り、三人「コレ、初、昨日は、ようひどい目に逢はしやつたの。」はつ「あれは、ほんの時の張合ひ、跡で存じますれば、いつそモウ、お氣の毒に存じまする。御堪忍なされて下さりませ。」七浦「其方がさう云やれば、此方も何も云ふ氣はない。ナア、築地野さん。」築地「それいなア。もうこれから中を直せば、矢張心安いお初女郎。」柏尾「その代りに、わしらが頼むことを聞いてたもるか。」はつ「そりやモウ、尾上さまの御朋輩のお前様方、矢張旦那様も同じこと、何なりと承りませう。お誂へものならば麁相ないやうに、下村か、住吉町の松本でなりと、調へまして參りますわいな。」三人「なんの、其のやうな事ぢやないわいの。」はつ「左樣ならば、おぐしでも梳きまするか。

軸の、我が手より出でたれば、却つてこの身の越度となり、今の恥辱の口惜しさ、お家の大事はこの時と、怺へ〳〵る胸の内。」ト草履を取上げ、尾上「とは云ふものの、思へば〳〵、チエ、、口惜しい。」ト草履を見詰め、きつとなる思入、管絃になり、チョン〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、長局のかゝり、上の方、鼠壁、腰張中仕切を入れ、次の間の見附茶棚、勝手道具膳椀など竝べ、上の間に鏡臺本箱など直しあり、花道向う揚幕に杉戸を建て、長廊下の模樣、二重舞臺ずつと下のかたに、かな行燈ともしあり。すべて尾上部屋の體。右二重舞臺にお初七輪に土瓶をかけ煽いで居る。好き程より唄になり、道具とまる。ト右唄の間、かすめて時の鐘打つと、お初七輪を煽ぎながら、

はつ「もうやがてお夜詰まへであらう。旦那さまのお下りに程もあるまい。お煮花は仕掛けてあり、大方お顔もお直しなさるであらう。ドレ、鏡臺を直して置かうか。」ト始終合方にて、鏡臺を直し、莨盆に火を入れる。この内かすめて時の鐘打つて居る。ト向うより黑羽織の侍、丸に八重櫻の紋附きし箱提灯をともし、出て來て、侍「念入れ〳〵。」ト云ひ〳〵、本舞臺の下まで來て、下の方のかな行燈を見て、侍「ヤレ〳〵、かな行燈が消えかゝつてある。今をかぎりの樣子ぢや。」トお初次の間にてこれを聞きつけ、氣にかゝるこなし。侍「お夜詰ひきました。お庭まはり御念入れられ。」ト大きく呼んで花

へ引立てて。」清玄「イカサマ、直ぐに引立て、屹度糺明。」ト立ちかゝるを、義澄留めて、義澄「イヤ、今日は某が相役。この旨逐一鎌倉へ申し達した上、後日の御沙汰。」清玄「でも。」義澄「ハテ、謂れざる他家の仕置は、御無用に存じまする。」岩藤「すりや、御上使様には。」義澄「この旨歸つて言上なさん。イザ、清玄どの。」清玄「然らばこれより。」岩藤「御兩所樣。」清玄「イザ、御同道。」岩藤「この岩藤はこの由を、姫君樣へ。」清玄「岩藤どの。」ト岩藤へ思入。岩藤「御上使のお見送りを。」女皆「ハアア、。」義澄「大儀。」ト唄になり、義澄、清玄、關屋、庵崎、奥女中皆々附添ひ、岩藤、七浦、築地野は奥へ入る。跡合方、尾上差俯向いて居て、やう／＼と顔を上げ、尾上「この身に覺えない事ながら、云譯ならぬ御朱印の在所。あの局岩藤は、執權条の平内左衛門が妹、かね／″＼兄弟心を合はせ、當家の御朱印に心をかけると思ふゆゑ、大切な御朱印は、この尾上が肌身はなさず守護なしてはありながら、岩藤が一味の清玄、上使を功に詞をたくみ、御朱印を取上げんとする彼等が企み、それと察せしゆゑ、この程より箱に入れ置く御朱印は、わざと拵へ置きたる似せ物、はたして昨日清水にて、奪ひ隠してその跡へ、この草履を入れ置いて、清玄さまの罪なりと、この尾上までを無實の有樣、云ひ開かんも大切なる、この御朱印を、彼らが手へ若し奪はれなば、これまで盡せし忠義は水の泡、又二つには櫻姫さまの御身の上、いかなる大事に及ばんかと、ぢつと無念を怺へしこの場、爭はんにも一

さまもお上のお咎め、大切な御朱印、こなたが附添ひありながら、迂闊に人手に渡さうやうはない。それも大方拵へ物、眞の御朱印は何處ぞに隱してあるであらう。この場に無ければこなたの仕業。御朱印の在所知つてか。」　尾上「サア、それは。」　岩藤「云譯があつてか。」　尾上「サア。」　兩人「サア〳〵サア。」　岩藤「云譯無ければ。」ト草履を取つて散々に打つ、皆々おもひ入れ。尾上「こりや、草履にて。」　女皆「尾上さまを。」　岩藤「寄つたらお前方も、同類ぢやがや。」　女皆「サア。」　岩藤「まだ〳〵腹の癒るほどに。」トまた散々に打つを、尾上その手を留め、尾上「こりや、草履をもつて。」　岩藤「打つたがどうした。叩いたが何とした。」ト尾上口惜しきこなし。岩藤草履にて尾上の顏を突きながら、岩藤「この岩藤を差措いて、つべこべと日頃から、最前折角仕込んだ……イヤサ、しこなし顏の中老役、大それた企み事、この岩藤が草履の折檻、カウ〳〵。」トまた散々に打つ。尾上詰めかけ、岩藤、草履を振上げ、きつと見得。尾上「差當つたこの場の越度、云譯無さに、ぢつと蟄して居る尾上、滿座の中で打ち打擲、品もあらうに、草履の笞、餘りと云へば。」　岩藤「打ち据ゑても大事ない。以後の見せしめ。」ト又打ち据ゑ、岩藤「何と骨身に徹へたか。」ト草履を打ち付ける。尾上取上げ、尾上「ハ、ア。」ト泣く。七浦「ハア、笑止やの〳〵。中老役もお勤めなさる尾上さまが、草履を以て、あの樣に打たれても、叩かれても、一句一言云譯はならぬとは、よく〳〵お身の過り。」　築地「こりやいつそわたしらが、お表

ほんに喩へに云ふ、狐が虎の威を借りるとは尾上どの、こなたの樣なお人を云ひますわいの。狐といふ獸物が、虎の棲む山へ行て云ふには、この身は神通力を得た獸物なれば、いろ〳〵の獸物が、我を見ては恐れをなす、その威勢を見せませうと譃吐いて、虎の前に立つて行くと、外の獸は猛獸の虎が來た事ぢやに依つて、我を恐れるとは知らず、狐は怖うなけれども、虎に恐れて蹲る、虎は正直ぢやに依つて、我を恐れるとは知らず、狐は怜悧いものぢや、いろ〳〵の獸が、あの樣にたつばひして恐れるわ、アレ、けうといものぢやと思ふ。サ、これが喩への今云うた、狐が虎の威を假りる、お姫樣の威を假りる、アイ、こなたは狐、畜生ぢや、併し畜生の悲しさは、人を僞り騙つたと思うても、獵人といふ捕へ人があつて、正直の罠にかゝれば、ソレ、その首筋に繩を懸けて里へ送る、跪いてもあせつても、とんとそれきり、ほんにどうやら、こなたも畜生顏して、ホヽヽヽ、狐どの、狐も狐、卑しい野狐、獸畜生ぢやわいの。」ト尾上口惜しきこなしあつて、尾上「岩藤樣、大切なる御上使の御前、憚りも無きその詞。」 岩藤「云はいでかいな、二品の紛失、この一軸の出所、啞藥の企み事、箱に草履の入れあつたは、こなたの仕業であるまいか、賢さうに、この岩藤に詰め寄つて、たゞしは外に云譯があつてか。」 尾上「サア、それは。」 岩藤「まだ〳〵そればかりぢやない。大切な御朱印は、姫君のお手から常陸之助賴國どのへお渡しあつたといふ事も、この岩藤が聞いて居る。さすれば櫻姫

た事が、さうであらうが。」ト霧島頷く。岩藤「尾上どの、アレ、こなたの業と知らせるわいの。」ト庵崎前へ出て、庵崎「はゞかりながら、お局様、その香包の事は。」岩藤「すりや、尾上どのに頼まれて、こなさんが。」庵崎「イエ〳〵、最前奥庭で」岩藤「ハテサテ、何をくど〳〵。大切な詮議の場、こなさん達の口出しする處ぢやない、控へてござんせ。」敵三「お局様の仰せ、控へてござんせ。」トきつと云ふ。岩藤「柏尾どの、霧島どのをば、マアお次へ。」柏尾「畏まりました。サア、霧島さんござんせ。」ト合方になり、柏尾、霧島を連れて奥へはひる。岩藤こなしあつて、岩藤「尾上どの、ちよと御意得たう存じまする。」ト尾上前へ出る、岩藤こなしあつて、岩藤「マア、何からお尋ね申さうやら、品が多くて口へも出ませぬが、この薬の事はマア私事。第一は二品の紛失、有りやうに云うておしまひなされませ。」尾上「有りやうに申せとは。」岩藤「覺えないと仰しやつても、眼前證據は鯉魚の一軸、何ゆゑお前の懐に持つてござんしたえ。」尾上「サア、これは。」岩藤「都鳥の一巻も、あるとばかりで何處にござんす。二品を取隠し、この草履を入れ置いたも、清玄さまと馴れ合うて、みんなこなたの拵へごと、何も彼も顯はれてしまうたからは、云譯はあるまい〳〵、日ごろからこの岩藤をさし措いて、姫君のお氣に入り、中老顔が憎いわいの、根が町人の娘ゆゑ、重い奥向の御奉公、冥加ないこととは思はず、お年の行かぬ姫君様をかさに著て、お側役の差出口も、畢竟は姫君様といふ光があるゆゑ。

は、中老尾上、其方が。」　尾上「もしも斯様のことあらんと、折好く最前手に入れしは、清玄さまのお身のあかり、曇らぬしるしのこの一巻、即ちこれに。」ト懐より出して一巻を抜き見て、悄りして、尾上「ヤ、、、、こりや都鳥の一巻ならで。」　岩藤「ほんに、そりや鯉魚の一軸。」　清玄「ナニ鯉魚の一軸とは、ドレ。」ト取つて、清玄「誠にこりや某があづけ置いたる鯉魚の一軸、懐に隠し持ちたるは、さては一軸奪ひ取り、御朱印の紛失も、この清玄に負はせんといふ企みであらう。何故あつて一軸を、奪ひ隠して所持なし居つた。」　尾上「サア、この一軸は。」　岩藤「どういふ事で、その懐に持つてござつた。」　尾上「サア、それは。」　岩藤「こりや、御朱印の疑ひも、こなたにかゝつてあるわいの。」トこのうち霧島またまへへ出て、懐より香包を出して、これを呑ませてくれと仕方する。築地野見て、築地「何ぢや、薬のつゝみを出して見せるは。」ト取上げ見て、築地「ヤア〱、この香づゝみは尾上さまが、姫君より拝領の香包。」　柏尾「彩色の結び柏、尾上さまの香づゝみ。」　七浦「どういふ事で持つて居さんした。様子を早く、と云うたところが物云はれず。」　柏尾「その上常から一字一點物書かぬ、無筆同然なれば。」　歟三「ほんに難儀な事ぢやわいな。」ト岩藤こなしあつて、岩藤「成程、こりやおほえある尾上どのの香包、これをアノ懐に持つて居たは、ハア、聞えた、大事を聞かれて爲方無さに、毒を呑ませて物云はさぬやうに、唖にしたのであらう。」　尾上「エ、。」　岩藤「コレ、あの尾上どのとし

でござりませう。」ト當惑のこなし。岩藤こなしあつて、岩藤「サア、問ひじやうかけて云うたとは、この岩藤が事何と申しました。あの霧島が殘らず何も彼も云うたと仰しやるが、どの様な事申しましたねえ。ホヽヽ、この岩藤が局役を嫉んで、皆さん方が、いろ〳〵との拵へ事、そりやモウ、女中方の中へ入つては、不束な局役、一から十まで無調法がち。そりや云はいでも、いづれも様が御存じでござりますわいの。役にも立たぬ事を問はずと、大切な二品の行くへ、どなたもお智慧お揮ひなされて、御詮議なさるがようござんす。」清玄「ヤア、役にも立たぬこの場の論議、二品の盗人は、清玄尼に違ひあるまい。」尾上「たとひ如何やうに仰せあるとも、清玄様が、何故に左様な事を。」岩藤「無いとあつてもこの通り。殊には昨日清水にて、松若丸のお跡を慕ひ、そゞろ心にお行くへも、定かならずと聞き及ぶ。さすればいよ〳〵清玄さま。」尾上「イヤ、たとひお行くへ知れぬとて、松若さまはこの世になく、その追善に御剃髪、お形見のしるしたる、都鳥の一卷も、清水寺へお納めある、清玄さまの御實心、それが即ち確かな證據。」清玄「イヤ、都鳥の一卷は、吉田の家の重寶なれば、それもやッぱり松若へ、密かに送りやつたであらう。」岩藤「松若どのの生死さへ、分明ならぬ兼ての取沙汰、都鳥の一卷を、何しにお寺へお納めあらう。こりや、此方が當座の云譯であらうわいの。」尾上「そのお疑ひあらうかと、都鳥の一卷も、この尾上が所持いたして居りまする。」清玄「すりや、都鳥の一卷

朱印の詮議に及び、事をくろめん其のために、桃の酒に薬を入れ、その手筈とも首尾ならず、證據の艶書を剰へ、清玄さまの仕業と云ひなし、詞を飾り、しなを付け、云ひ曲げうとなされても、お家の大事、上使の御前、打捨て置かれぬこの場の仕儀、今この場にて彼の者に、一々問はば事明らか。一句一言岩藤さま、御返事がござりますか。」 岩藤「サアそれは。」 尾上「サア。」 両人「サア〳〵〳〵。」 尾上「何とでござりまする。」ト詰めかけて云ふ。岩藤赤面して、「ムウ。」ト思入。尾上「この上は、捕へ置いたる證據の詮議。」 三人「イヤ、霧島どのは。」ト寄るを關屋へだて、關屋「御上使の御前、お控へなされませ。」ト庵崎、霧島を引起し、庵崎「最前奥にて云うたとほり、お局様の計らひぢやと、早うこの場で云うたがよい。」ト霧島前へ出て、物を云はうとして、ぎゝ〳〵と物の云はれぬこなし。女皆「サア早う云はしやんせ。」トいろ〳〵云ふ。霧島物云はれぬゆゑ、さては薬を間違へて飲んだと、恟りしていろ〳〵あり。築地野、七浦、柏尾もたち寄り、柏尾「ヤア〳〵、こりや霧島どのは、唖になつてぢやわいの。」 七浦「そんならアノ白の方を。」ト三人顔見合はせ、築地「こりや、ひよんな目に逢はしやんしたの。」ト霧島べそをかいて泣くこなし、岩藤ぢつと見て居る。尾上「問ひじやうかけんと思ひのほか、物云はれぬは庵崎さま。」 庵崎「顔色とても常とは變り、一言さへも云ふ事ならぬは。」 關屋「合點の行かぬこの場の様子。」 尾上「證據に立つべきその人が、一句も出でぬ俄の唖ころ。」 庵關「何と致したの

仔細、慥かに名宛の清水清玄。」 岩藤「イヤ、こりや清玄ぢやない、訓聲が違うた。」 尾上「訓聲が違うたとは。」 岩藤「中の文體は、今の通り、讀むに及ばぬ。名宛は即ち、櫻姬どの、清水清玄。」 尾上「エエ。」 岩藤「新清水の轟坊にて、御剃髪ありし花子さま、菩提の門の御寺をば、直に御法名清水清玄さま、その清玄を讀み違へ、清水清玄とは、マア、大きな間違ひ。」 尾上「でも、その文體は慥かに艷書。」 岩藤「艷書とは何が艷書。コレ、とつくりと御覽じませ。」ト披き、 岩藤「我が身の戀衣淺々しき心とは、流石輪廻を捨てかね給ふ凡夫心、云號けありし松若どのの御事を、音羽の瀧の露ばかりも、忘るゝ間無きお心の内を、櫻姬さまへ御述懷のこの文體、艷く手爾波は女の常、認め置かれし其のままに、取落されし清水の、內陣箱の側にあつたとあれば、疑ひも無い御朱印の盜賊は、清玄さまに違ひござりますまい。」 清玄「いかにも局の申すとほり、その文は清水清玄、表向は道心堅固で、內證は謀叛人の松若丸と云ひ合はせ、二品ともに取りかくし、入間の家を押領する、その下心に極まつた。」
岩藤「ことには鯉魚の一軸は、尾上どの、こなたの預り。さすればこれもこなたに詮議、其のまゝには捨て置かれぬわいの。」 尾上「この尾上にお疑ひとあれば、この方からも詮議の筋、最前供へし神酒の中に、藥を浸し入れある事は、あの霧島に問ひ狀かけ聞きたる上は、こなた樣の胸に覺えの一々も、承らねばなりませぬ。」 岩藤「ナニ、この局が胸に覺えの一々。」 尾上「今日上使のお入りにつき、御

尾上「關屋さま、最前の艶書を早う。」關屋「ハツ。」ト懐より三建目に清玄が持ちし文を出し、關屋「昨日清水の内陣にて、御祈念終りしその折柄、御朱印の箱の傍に、落ち散りありしこの艶書、合點行かぬと持ち歸り、尾上さまにお目にかけしも、この場の幸ひ、證據の一通。」清、岩「して、その文の宛名は何と。」關屋「櫻姫どのへ、清水清玄。」清玄「ヤア、、その文は。」ト恟りするを、義澄「ハテ、何か證據の手筋とある一通なれば、清玄どの、立騒がずとお控へなされ。」尾上「關屋さま、その文體を、この場で早う。」關屋「ハツ。」ト封じを切り「面影の忘るゝ間無き戀衣、淺々しき心から、常陸帶の解けやらず心を苦しめ〳〵、音羽の瀧の露許り御酌ませありて、好しなの御返事を願ひあげ候。目出たくかしく、櫻姫どのへ、清水清玄。」清玄「サア、その艶書は。」尾上「詮議の手がゝり、櫻姫どのへ清玄と、しるした名宛が證據の一通、二品の盜人が外にあると、申し上げたこの尾上が、誤りではござりますまい。」清玄「サアそれは。」尾上「サア。」清玄「サア。」尾、清「サア〳〵〳〵。」尾上「なんと確かな證據でござりませうが。」トきつと云ふ。清玄赤面して思入。此のうち岩藤、いろ〳〵こなしあつて、岩藤「なるほど、その宛名が確かな證據、その文これへ。」ト取つて見る。清玄「コレサ〳〵、お局そりや何を云ひ召さる。その文の宛名が證據になつては。」岩藤「いよ〳〵科は、清玄さまに違ひござりますまい。」清玄「ヤ、なんと。」尾上「その文が落ちてあれば、清玄さまのなされた事とは、どういふ

義澄「鯉魚の一軸、われ〳〵が內見致すは。」 兩人「その品か。」 岩藤「こりやコレ御朱印とおもひの外。」 尾上「一軸ならぬこの草履。」 岩藤「二つの箱に片しづゝ、ヤア〳〵。」ト驚く。尾上、中より草履を取り出し、尾上「大切なる一品の、箱に入れたるこの草履は。」 岩藤「眞菰を以てつくりたる、佛足守護と號す草履、慥かに昨日清水にて、花子の前樣御剃髮の折柄、お用ゐありし金剛草履、片しづゝ入れあつては、すりや御朱印と云ひ、一軸までも、アノ清玄さまが。」 清玄「盜み隱してその跡へ、草履を入れしは女の淺墓、差當つたる二品の紛失。」 岩藤「清玄さまのこの草履、箱の中にあるからは、正しく二種ともに清玄さまが、お隱しあつたに違ひは無い。」 尾上「岩藤さまのお詞なれど、佛足守護の金剛草履、お用ゐありしは人も知る。その清玄さまがお隱しある程ならば、我と我が身の罪科を、顯はし殘すこの草履、箱にあるべき用はなし。科を負せんその爲に、入れ置いたりと、憚りながら、この尾上は存じまする。」 義澄「剃髮染衣の清水清玄、佛體受けたる尼法師、何とてかかる仕業やあらん。よし再應の詮議もなく一圖にそれと岩藤が詞、ハテ、賴もしい局ぢやな。」 岩藤「御上使のおほせなれど、清玄ならで用ゐぬ草履、よしまた外の盜賊ならば、似寄りの品か拵へ物、入れ置くべきを取急いで、中へ入れたる金剛草履、疑ひもないこれが證據。但し又、御朱印も一軸も奪ひし者が、外にあつてか尾上殿。」 尾上「成程、その盜賊は外にござりまする。」 岩藤「ムウ、外にあるとは、そりや何者。」

りお指圖、今日あれなる神前に、供へ置きたる桃の酒、その中に薬を浸し、尾上さまを啞ころの病にせんと工み事、唯今奥にて白狀ゆゑ、何者に賴まれしか、その儀は御前で問ひ狀かけんと、それゆゑの、この仕儀でござりまする。」ト岩藤ハッと思入、清玄も思ひいれ。敵三「そんなら霧島どのが何も彼も。」　霧島「サア、云ふまいと思へども。」ト岩藤のかたへ寄るを、清玄ツカ〳〵と行て、霧島を刀の鐺にてあてる。皆々「これは。」　庵崎「詮議のある霧島どのを。」　清玄「ハテ、ザワ〳〵と尾籠至極、大切なる御朱印の改め、内見も濟まぬうち無益の論談、詮議はあとで。」　尾上「すりや、この場にて御内見。」　清玄「役目の某。義澄どの。」　義澄「清玄どのにも共々に。」ト始終管絃にて、清玄こなしあつて二重舞臺へあがる。尾上「打捨て置かれぬこの場の樣子。」　岩藤「ハテ、御内見遲なはつては、御上使へ無禮、上への恐れ。」ト三方を一つづゝ義澄と清玄がまへへ直す。尾上「イザ、御内見下されませう。」　義澄「入間家の御朱印は清玄どの。」　清玄「拙者が所持の鯉魚の一軸、イザ、とくと。」　兩人「内見いたすでござらう。」トこなしあつて義澄、箱のふたを明けて思入。清玄おなじく蓋を明け、思入あつて兩人かほ見合はせ、義澄「清玄どのの所持の箱、中老尾上あづかりと聞く。それにて一應あらため見よ。」　清玄「入間家の御朱印も、岩藤、尾上たちあうて、とくとそれにて改め見よ。」　岩、尾「すりや、われ〳〵に。」トきつと云ふ。岩藤・尾上、二つのはこを持つて來て、蓋を明けて、愕り思入。清玄「入間家の御朱印。」

ぢやござりませぬ。アノ、尾上さまが。」 尾上「アイヤ、たとひ神酒はこぼれても、お土器さへ頂戴いたせば、古例はづれぬ御上使の御前。」ト土器を取つて戴き、飲む眞似して、 尾上「神酒頂戴仕りましてござります。」ト三方を取りのける。岩藤こなしあつて、 岩藤「尾上殿、見す〳〵知れた今の仕儀、古例の神酒を打明けしは、柏尾どのの麁粗にも致せ、神酒頂戴が濟んだとは、御上使の御前、この岩藤を阿房になさるゝか。但し又別に樣子の有つての事か、事に依つては岩藤が、その儘には差置きませぬぞ。」 尾上「さう仰しやれば上使の御前、包むもせん無きこの場の仕儀。この神酒は怪しいと存じますゆゑ。」 岩藤「ナニ、この神酒が怪しいとは。」 七浦「神前に供へありし今のお神酒、怪しい事とは何が怪しみ。」 柏尾「それ〳〵、大切な今の酒、我が麁相を人に塗らうと思うて、怪しい酒とは、どういふ仔細。」 築地「しなに依つては御中老でも、わたしらが屹度糺さにやなりませぬ。怪しい酒と仰しやるは、何ぞ確かな。」 三人「證據でも御座りまするか。」 尾上「成程、その證據をお目にかけませう。」 三人「ナニ證據とは。」 尾上「庵崎さま、霧島さまを早うこれへ。」ト下座にて、 庵崎「ハア、。」ト管絃にて庵崎、霧島をしごきにて縛り連れて出る。皆々恟り。 皆々「ヤア、お前は庵崎さま。」 三人「霧島どのを縛めて、この體は。」 岩藤「合點の行かぬ尾上どの、奥向の政道躾は、この局役の岩藤が差配、それに何ぞや理不盡に、縛めの仕置立て、その上たしかな證據とは。」 庵崎「イヤ、憚りながら尾上さまよ

り、神酒頂戴あるが、古例外さぬお前のお役目。」 清玄「イカサマ、神酒頂戴の古例は、鎌倉表より定め置かれし入間家の吉例、武將より下し置かるゝお流れも同然、それをもどくは上への恐れ、名代とあらば中老尾上、急いで神酒を頂戴おしやれ。」 岩藤「疎畧ならぬ今日の式法、遲なはつては御上使への無禮、誰ぞお次の衆、御前へ早う。」 女中「ハア、。」ト管絃になり、下座より七浦、柏尾、築地野出て來て、 二人「御用でござりまするか。」 岩藤「神前にそなへある桃のさけ、今日の御名代尾上どのへ。」 三人「畏まりましてござりまする。」ト柏尾、三方の徳利を其の儘二重舞臺より持つて下りる。築地野、七浦、三方の箱を一ツづゝ持つて下りて平舞臺へ置き、さがる。 築地「御内見の二つの箱、當家の御朱印。」 七浦「清玄さまお預けありし鯉魚の一軸。」 柏尾「神前にそなへし桃のさけ。」 三人「持参いたしましてござりまする。」ト岩藤こなしあつて、 岩藤「サア、尾上どの、神前の神酒、いそいで御頂戴。」 尾上「お免しを受けまして、それへ參つて、神酒頂戴いたしませう。」ト始終此のうち、管絃にて、平舞臺へ下りる。 岩藤「尾上どのには姫君さまの御名代、その神酒を……十分に心を著けて。」ト柏尾に呑みこます。柏尾思入あつて、 柏尾「お酌いたしまするでござりませう。」ト尾上がまへをとほり、下の方へ行かうとするを、尾上わざと柏尾が裾を押へる。柏尾ばつたり轉び、徳利を打ちこかす。七、築「ヤア大切なその神酒を。」 女中「柏尾どのが。」ト柏尾恟りしうろたへ、 柏尾「イエ／＼、こりやわたしが粗相

首尾……イヤサ、首尾好く内見濟むまでは、櫻姫にも心遣ひ召さらうな。」尾上「當館の鎭守、桃園山王の祭禮は、卽ち今日でござりますれば、古例を以て御朱印の御内見は、入間家の古例、御内見よろしく願ひ奉りまする。」トこの時上座にて、岩藤「憚りながら御内見、暫くお待ち下されませう。」ト管絃になり、岩藤出て來て、好き所に手をつき、岩藤「先づもちまして御兩所樣とも、今日のお役目、御苦勞千萬に存じ上げまする。」義澄「當館の局頭岩藤、何ゆゑあつて内見を相待てとは。」清玄「仔細ばしあつての事か。」尾上「岩藤さま、御内見をお咎めありしその仔細は。」岩藤「憚りながら御兩所樣へまうし上げまする。今日は當館の氏神たる、桃園山王の神事に付き、御朱印御内見は入間家の古例、卽ちあれなる神前に、供へ奉りし桃の酒、その神酒を頂戴あつて後、御内見を相願ひまする當家の古例、それゆゑこの岩藤、お止め申し上げましてござりまする。」清玄「成程、例年三月五日は、入間の鎭守山王の神事、桃の酒と號し、神酒櫻姫が頂戴の上、内見いたすは古例とかねて聞き及ぶ。申さば入間の吉例。」岩藤「大切なる今日の式法、その辨へも無う只管に、御内見をねがふ尾上どの。なんぼ町家に生ひ立つて、お館向の格例を、御存じないと申すものの、近頃麁略なお取扱ひかと存じられまするわいの。」尾上「成程、神酒頂戴の儀も、お館の古例と存じてはありながら、折惡しき櫻姫さまの御病氣、それゆゑ名代の、この尾上なれば。」岩藤「サア、その御名代なれば、則ち姫君になり代

へて、物柔かき女子原が出迎へ、流石大家の奥ゆかしさ、櫻姫の館の物好き、疊觸りも無骨の淸玄、役目なれば、免してくりやれ。」トやはり右の鳴物にて、淸玄、本舞臺へ來て、上の方牀几にかゝる。女形皆々竝好く列ぶと、御簾のうちにて、尾上「鎌倉よりの御上使、義澄さまのお入り、いづれも御挨拶あらせませう。」ト三味線入りの樂になり、一面に御簾卷上げると、二重舞臺上の方に、北條四郎義澄、長袴上使の拵へにて牀几にかゝり、尾上、手をつかへ居る。關屋皆々下の方へならび、關屋「義澄樣には今日の御役目。」　皆々「御苦勞に存じ上げまする。」　淸玄「義澄どのにはお早いお越し、拙者も御同伴と存じながら、思はぬ遲參、御容赦下され。」　女皆「淸玄さまには、先づ〳〵これへ。」　義澄「今日すなはち上使をかうむり、當家に傳はる關八州の御朱印、竝に淸玄どのの家の寶、鯉魚の一軸、父義時の名代として、若輩の某、內見の役目、相役の其許、萬事よろしく賴み存じまする。」　淸玄「何がさて拙者とても、相役とは申しながら、某が家へ傳はる鯉魚の一軸、其許が御內見、この淸玄は入間家の御朱印の內見、いづれ疎略ならざる役目、故無く相濟む上までは、心づかひな儀でござる。」尾上「御兩所に申し上げまする。櫻姫は折惡しく風邪に冒され、引籠り居りますれば、憚りながら名代として、中老尾上、お受け申し上げまするでござりませう。」　義澄「すりや櫻姫には、風邪に冒され、病氣とな。」　尾上「左樣でござりまする。」　淸玄「エヽ、コレ、折惡い姫の病氣、今日の役目が、丁度好い

しかと汝に。」隅田「お預けあるか。」平内「いかにも。この上猶も大望の。」隅田「成就いたさば。」平内「入間の家國押領なし。器量次第で。」隅田「二合半から。」平内「武士に取立て。」隅田「槍一筋も。」平内「突かせてくれう。」隅田「然らば此のまゝ。」平内「期して參會。」隅田「長盛さま。」平内「コリヤ。」ト兩人よろしく、唄になり、隅田平向うへ走り入る。平内跡見送り、平内「下郎ながらもあの隅田平、手なづけ置かば、まさかの時の。」ト思入。戸田平心附き、よろぼひ寄つて、戸田「いつはり表裏の平内長盛、企みの一々。」ト行きかゝるを引留め、平内「助け置かれぬ、下郎は口ゆゑ。」戸田「ヤ。」ト逃げようとするを、平内拔討ちに切り、鼻紙にて血刀を拭ふ。この見得、管絃にて道具廻る。

本舞臺、一面の高二重、見附金襖、上の方に九尺の亭屋體、此のうちに結構なる御堂に注連を張り、三方に蒔繪の箱をのせ、机に飾り、この前に幕明の神酒德利供へあり、二重舞臺の前側、一面に御簾上下し、すべて入間の館奥殿の體、管絃にて道具納まる。ト三味線入りの亂れになり、むかうより淸水淸玄、長袿袴、大小にて、跡より關屋、待乳、都、淺茅、綾瀨續いて出て、花道に手をつかへ、

關屋「淸水淸玄さまには、お役目とあつて當館への御入り、お出迎へ申しましたる私ども、お案内申し上げまするでござりませう。」淸玄「武將の御内意を蒙り、罷り越したる入間の館、君殿原に引替

平、下郎は口のさがなき者、どうで生けちやァ置きはしまい。さすればこなたの寐覺めも氣樂だ。斯う云ふからはこの體、野へ出した死人も同然。念佛なしにすつぱりと、ひとおもひにやつて下さい。」平内「韓信はせう夫を害し、佐々木は浦の男を殺す。千丈の堤も蟻の諺。」隅田「血祭がてらだ、今爰で。」平内「粂の平内が、刃の錆となしてくれう。」隅田「サア、すつぱりと。」ト合方になり、合掌する。平内、刀を抜き、隅田平が目先へずつと差出す。チッと思入。また刀のみねを襟もとへ當てる。構はず思入。平内振上げて打込むを、かい潛つてしつかりと留め、隅田「ドッコイ、そんなら奴が願ひの通りに。」平内「身が手にかけてこの世の暇。」隅田「下郎が首を平内さまに、慥かに遣らうと覺悟の奴。」平内「それゆゑこの場で、われが命は。」ト斬つてかゝる立廻り。隅田「進上いたさう、その代り、その懐中の。」ト廻文へかゝる立廻り。平内「身共に命をくれながら、この廻文に心をかくるは、さてはおのれは。」隅田「どうで冥途へ行きがけの。」平内「駄賃に持つて行きたいか。」隅田「なんでもない事。」平内「すりや、一巻を渡したも。」隅田「その廻文を。」ト立廻り、平内が廻文を引出し、隅田「さてこそこれに。」ト平内引取る。隅田「荷擔しませう。」平内「ヤ、なんと。」隅田「吉田の重寶を渡した奴、及ばずながらあなたの片腕。」平内「一味同心致すぢやまで。」隅田「心置き無く腹心の。」平内「ハテ、不敵の魂見届けし上からは。」ト廻文を投げやる。隅田平取つて、隅田「すりや、この廻文を。」平内「後日のそくたく、

を一ッにして、鎌倉へ訴人すれば、一廉の褒美の金、それが近道。平内、われを。」ト抜いて切り附ける。平内突きまはす。この時後の合羽駕籠より隅田平飛び出て、戸田平が拔身を取つてポンと斬り、隅田「罸あたりめが。」ト管絃になり、平内「其方は。」隅田「疾くよりあれに隱れ笠、合羽駕籠に身を忍び、樣子を聞いて飛んで出て、後日の邪魔にと一討ちに討つて捨てたも彼奴めが強慾、お指圖待たず拙者めが、無禮の段は御家老樣、御免なされて下さりませ。」平内「すりや、彼の中に最前より。」隅田「忍ぶ間に戸田平めが、中へ隱せし一品は、吉田の重寶都鳥、イザ、お受取りあられませう。」ト渡す。平内取つて、平内「誠にコリヤこれ都鳥の一卷。先達我が家來、猿島惣太に預け置きしが、この屋形に廻り來るは心得ぬ。」隅田「その猿島惣太めが、花子の前の色香にうツ惚れ、松若どのの形見だと、花子の前にわたしたも、おのが仕かける戀の罠、廻り〱て又元の、平内さまのお手に入つたも、勿怪の幸ひ。」平内「下郎ながらも腹心と、彼奴が魂見込みしゑ、預け置いたる都鳥、花子の前の艷色に、心奪はれ、うか〱と、人手に渡せし猿島惣太、思慮なき下郎に大切なる、一卷迂闊に預けしは、この平内が不覺の至り。併し再び我が方へ、もどり來るも隅田平が働き。出來した〱。」ト懷へ入れる。隅田平思入あつて、平内が前にどつかと居て、隅田「平内どの、サア、すつぱりとやつて下さい。」平内「なんと。」隅田「いま戸田平めが吐したとほり、褒美は何時でもお定まり。大事を聞いたこの隅田

刻出仕の節までは、然るべきやう尾上殿。其方達もつぎで休息。」綾瀬「御免を受けて私も。」尾上「何彼は御前で、長盛さま。」平内「尾上どの。」尾上「後程お目にかゝりませう。」ト管絃になり、尾上思入あつて、綾瀬、待二人跡に附いてはひる。戸田平起きて、戸田「長盛さま。」平内「コリヤ。」ト管絃になり、戸田平あたりを見廻し、戸田「兼てあなたの云ひつけ故、諸國への廻文状を手渡し致さんと、この奥庭までしのび入り、見咎められて今の仕合。」平内「して、いま尾上が持ち行きし、あの一巻は。」戸田「拙者が所持の鯉魚の一巻、と心得て尾上めが。」平内「すりや、鯉魚の一軸を。」戸田「持つてうせてもありや似せ物。それより預り置いたこの廻文。」ト廻文状を出し、わたす。平内「北陸道の諸武士を初め、殘る方無きこの姓名。事成就のその上は、恩賞褒美。喜べ〳〵。」戸田「近國他國を歴巡つて、人を集めたその廻文、一廉の褒美と思つたに、事成就した上の事とは。」平内「いかにも。平内左衞門が詞に二言は無い。その時其方が望み次第。」戸田「ア、コレ、平内どの、そりやァちつと料簡違ひ。云はゞ大事の働きして、命がけの密事の使ひ、骨を折つたるこの戸田平、早いが徳の今の世の中、氣の長いことを云はずと、當座の褒美が今もらひたい。」平内「ムウ。して、其方がのぞみは如何ほど。」戸田「ハテ、千兩でも萬兩でも、多いとは云はぬ貰ひ次第、とサア、斯う云つたならお定まり、褒美をやらうと抜討ちか、ころりばつたり古いやつ。それを一倍新しく、その廻文を此方へ取り、貴樣の首

る。戸田平「ウン。」と倒れる。平内「慮外な奴め。」ト思入あつて綾瀬に目を附け、平内「見ますれば奥女中の、何か下部と立ち爭ひ、携へ持ちしこの一品、樣子あらんと某が、取上げてはござれども、尾上どの、其許、樣子御存じかな。」尾上「なるほど、あれなる綾瀬さまは賴まれ手。その品は私が所持の一品。あれなる下郎、奪ひ取らんと致せしところ、折好くも長盛さまの御出仕にて、恙なうこの場の仕合。」綾瀬「心急くまゝ無禮の段、眞平御免下さりませ。」平内「ムウ。すりや、この一品は尾上どの、其許の御所持ある。」尾上「大切な品でござります。」平内「しからばちよつと。」ト袱紗を取らうとするを、尾上「アイヤ、大切な私が守、御覽は御容赦くださりませ。」平内「何か樣子のあるべき一卷、若しも吉田の都鳥。」尾上「エ。」平内「イヤサ、よし守にもせよ、この場の仕儀、身共がこゝで。」ト解かうとする手を留め、尾上「強つて御覽と仰せあらば、今あの者があなた樣に、詞を交せしこの場の樣子。」平内「ヤ。」尾上「引起してお表の、役所へ連れ行き、糺しませうか。」平内「アイヤ、奥向は格別、非道の沙汰は女中方の指圖に及ばぬ。家來に云ひつけ、身共が詮議。」尾上「左樣ござればその一品、御覽あらずと、この方へ。」平内「左程に云やるこの一品、押して開くも何とやら、先づ此のまゝに。」尾上「お渡し下さる事ならば、この場の事は如何やうとも、後しての御詮議、兎も角も。」平内「守とあらば返上申す。」ト尾上にわたす。尾上「慥かに落手いたしますれば、御用も繁き今日の奥殿。」平内「後

れを。」ト寄るを、立廻りにてちやつと當てる。綾瀬、「ウン。」と倒れる。戸田「ソレ、都鳥の一巻だ。」ト手早く合羽籠の蓋を明け、一巻を打込み、行かうとする。綾瀬心付き、綾瀬「その一巻を。」ト戸田平を捉へ、懐より鯉魚の一軸を引出す。戸田「ヤア、それを。」トやるまいとする。兩人一軸を奪ひ合ひ立廻り。この時下座より、尾上、つか／＼と出て、戸田平を支へて一軸を取る。綾瀬「ヤア、尾上さま。」尾上「これ持つて早う。」と綾瀬へ渡す。戸田「うぬを。」ト行かうとするを留めて、尾上「爰かまはずと。」綾瀬「心得ました。」ト花道へかゝる。向うにて、呼び「粂の平内左衛門出仕。」ト呼ぶ。中のまひになり、綾瀬一軸を持ち、花道へ走り行く。向うより粂の平内左衛門、衣裳裃にて、菖蒲革の侍二人附き出る。綾瀬、つか／＼と平内に行き當る。平内手早く一軸を引取り、綾瀬を下の方へ突き廻す。侍二人綾瀬を圍ふ。此のうち戸田平、ちやつと立廻つて、尾上を振り切り、花道へ掛る。平内と行き逢ひ突き退けようとして、平内、戸田平が利腕を捻上げ、きつとなる、尾上見て、尾上「平内左衛門長盛さま、唯今御出仕でござりまするか。」平内「この長盛が出仕の先、狼藉至極のこの振舞、何さま樣子のあるべきこと。それへまゐつて逐一に、仔細つぶさに承るでござらう。」ト矢張右の鳴物にて、戸田平を捻ぢ上げながら、じり／＼と、綾瀬も家來に圍はれ本舞臺へ來り、平内「家來、女を取逃すな。」侍「ハツ。」ト戸田平振り切り、逃げうとして、顔見合はせ、戸田「ヤ、こなたは。」ト平内ちやつとあて

と音して本神樂になり、正面の塀を切り破り、戸田平、頰冠をして出て、あたりをうかゞひ、戸田「女郎どもを云ひ曲げては來たが、これから直ぐに奥にも傳へ、合羽籠のお旦那を、櫻姫の寢所まで、忍びこませるこの切り穴。この館の執權職、粂の平内左衛門さまから、云ひ附けられた廻文を。」ト懐より廻文を出し、また袱紗に包みて、三建目の鯉魚の一軸を出し、戸田「まだその上に、お旦那清玄さまから鯉魚の一軸、これも斯うして持つては居るが、先づそれよりは廻文状、平内どのに手渡して褒美の金にしたいものだが。」ト思入。下座より人音するゆゑ身をしのぶと、管絃になり、下座より綾瀨、袱紗に包みし都鳥の一卷を持ち出で、綾瀨「これこそは吉田の家に傳はりし、松若さまの御形見、都鳥の一卷、尾上さまの云ひつけにて、奥殿より持ち參れと密かの仰せ。ちつとも早う。」ト行かうとするを、戸田平これを聞いて居て、つか〳〵と出て、都鳥の一卷を取らうとする。綾瀨「ヤ、こなたは淸玄さまの御家來戸田平、大切なこの都鳥の一卷、手をかけて何とするのぢや。」戸田「知れた事、その都鳥の一卷、おれが方にも入用だ。きり〳〵此方へ渡して行け。」綾瀨「ムウ、奥庭近くしのび入りこの一卷を奪はんとは合點が行かぬ。尾上さまへ申し上げて、其方の詮議。」戸田「ハヽヽヽ。うぬ等に詮議されるやうな、奴だとおもふかい。こま言ぬかさずその一卷、こつちへ渡せ。」ト手を掛ける。綾瀨「イヤ、其方を。」ト管絃になり、ちよつと立廻りあつて、戸田平、都鳥の一卷を引奪る。綾瀨、「そ

つて二つの口へさし、岩藤「右の口の白いは毒消し、赤いは唖になる藥。かんまへて、とりちがはぬやうに、合點か。」霧、七「白いは毒消し。」柏、元「赤いは毒藥。」岩藤「コレ〳〵、密かに〳〵。」ト五つの時計鳴る。四人「ありやもう、五つのお時計。」岩藤「この岩藤は御前へ相詰め、何彼の手番ひ。その神酒を元の處へ。」元庵「して、私への御褒美は。」ト岩藤懐の箱せこより包金を投げて遣る　元庵取つて、

元庵「こりやお金、有りがたい。」トいたゞく。岩藤「エイ。」と懐劍をうち付ける。元庵「ウン。」と死ぬ。

四人「これは。」岩藤「後日の妨げ。死骸は直ぐにその籠へ。」四人「心得ました。お局樣。」岩藤「ドリヤ、御前へ上りませうか。」ト唄になり、岩藤こなしあつて下座へ入る。霧島「成程、拔目の無い岩藤さま。」

築地「コレ、人目にかゝらぬやうに、早う死骸を。」ト霧島、七浦、元庵が死骸を合羽籠へ入れる。此のうち下座より尾上出て、德利の口の花を、あちらこちらにさし替へ、懐より金の香包を出し、毒けしの藥と摺替へ、持つて入る。此のうち四人、合羽籠を元の樣にして、霧島「さて、これから川向きの毒けし。」七浦「赤い方が毒ぢやぞや。」霧島「合點ぢや〳〵。一ッついでおくれ。」ト土器に受けて呑む。柏尾、元の樣にして、霧島「サア、これで氣遣ひ無い。この毒けしはわしが方へ。」ト摺替へられし香包を懐へ入れ、七浦「この唖藥は尾上さま。」柏尾「お神酒は、そつと元の所へ。」七浦「サア、霧島どの。」

霧島「サア、ござんせ。」ト唄になり、柏尾は德利を持ち、霧島、築地野、七浦、奥へ入る。トばつたり

岩藤「よい〳〵。今日山王權現の神酒の中へ、これを密かに入れ置いて、あの尾上に用ゐれば、向後差出口もならず、御奉公も直ぐにお暇。」霧島「日頃からつべこべと口きいて、わしらを嗜ませる腹癒せに。」七浦「啞ころにしたら、何でも此方から云ひすくめて、擧句には御殿をお拂ひ箱。」柏尾「何もせたら負せて、罪に取つて落せば、お局樣の心の儘。」築地「お神酒の中へ混へてあるとは、なんぼ賢い尾上でも、夢にも知る事ぢやござりますまい。」元庵「それに付いても、肝腎の事がござりまするぞや。」四人「肝腎のこととはや。」元庵「この毒消しが肝腎でござりまする。」ト懐より出す。四人「何ぢや。毒消しとは。」元庵「ハテ、その啞になる藥を、どういふ機にお前方が、服むまいものでもない。そこで前方に、この藥さへ用ゐて置けば、啞になる氣遣ひはござりませぬ。」岩藤「成程、それも、用意は無けりやならぬ藥。」元庵「この金の色が毒けし、銀の模樣が啞藥、二種ともにお渡し申しまする。」ト渡す。この時後へ尾上出かけ、樣子を窺ひ、下座へ入る。岩藤「成程、神酒頂戴の折柄、念に念を入れる尾上、毒味などと云うた時はこの毒けし。」霧島「差詰め鬼役のこの霧島、お流れ下されるは知れたこと。こりや用心に、私が服んで置きませう。」岩藤「人目に立たぬ内に。」霧島「畏まりました。」ト管絃になり、德利の口を拔き、兩方へ二種の藥を入れ、霧島「先づ斯うして、一つは毒けし、一つは毒。」岩藤「イヤ〳〵、それでも如何やら紛らはしい。それには幸ひ。」ト生筒に入れし桃の花の白と赤とを取

待ち受け、話もあれば。」綾、淺「私どもも御一緒に。」尾上「お先へ參るでござりませう。」ト唄になり、尾上こなしあつて、綾瀬、淺茅、都附いて奥へはひる。岩藤、七浦、柏尾、築地野殘る。跡あひ方。

柏尾「お局樣、兎角何事に依らず、あの尾上が裁き立て。この合羽籠を怪しんでの今の詞。」七浦「お局樣のお詞で、それなりに濟んだれど、この奥に斯うしてあるのも不思議の一つ。」築地「蓋を開いて見たならば、樣子が知れるでござりませう。」岩藤「早う開いて見や。」ト三人して立寄り蓋を明けると、中より元庵縛られた形で出る。柏尾「ヤ、こなさんは。」七、築「藪坂元庵どの。」トしばりを解いてやる。

元庵「ヤレ／＼、窮屈な目に遇つた。」ト岩藤を見て、元庵「ヤ、あなたはお局樣。」岩藤「合點の行かぬ。どういふ事であの中に。」元庵「イヤ、かねてあなたのお頼み、件の藥を調合いたし、お手渡しと存ずるうち、御歸館觸れの混雜に奴が擔げる合羽籠、如才もなく支へるところを、つい打ちこまれたこの仕合。しかし、好い所でお目にかゝりまする。」岩藤「ムウ。して局が、頼み置いた藥は。」元庵「お頼みに依つて調合いたした、拙者が祕方の啞藥。」ト懐より袱紗包の疊紙を出して渡す。岩藤「ムウ。すりや、これが件の祕方、啞になる藥かや。」元庵「その妙藥を、酒に浸し服ますれば、心の臟を閉ぢ塞ぎ、啞ころになる稀代の妙藥でござりまする。」ト下座より霧島、三方に神酒徳利を載せ、持つて出て、霧島「お局樣の仰せに依つて、神前に飾りある桃の酒、密かに持參いたしましてござりまする。」

お達し。何かと一入、お心遣ひに存じ上げまする。」岩藤「これは〳〵御挨拶。この局より其許様、姫君様へ御内意の御上使とあれば、定めし御心配にござりませう。例年三月十五日は、桃園山王權現の祭禮、とりまぜた奥向きの賑ひ。」綾、淺「それゆゑ桃の一枝を獻上。」三人「各自持參いたしましてござりまする。」尾上「合點の行かぬ。奥御殿のお庭先に、雨具を入れしあの籠の、何か樣子のあるべき事。綾瀬さま、淺茅さま、とくと樣子を。」綾瀬「成程、お供の衆の麁相なら、お表にあるべき筈。」淺茅「この奥庭にござりまするは、合點がまゐりませぬ。」尾上「その籠の蓋を開いて御覧なされませ。」兩人「畏まりました。」ト蓋を明けようとするを、岩藤とめて、岩藤「アヽ、コレ〳〵、開いて見るには、及ばぬわいの。マア〳〵待つた。」尾上「お局樣、合點の參らぬあの籠の、詮議を待てと仰しやりまするは。」岩藤「さればいの。下部どもが麁相で、取忘れたその籠、別に仔細のない事。咎め立ては、それ〴〵の役人もあり、奥向きで詮議は、無用になされませいの。」尾上「サア、その奥向きのお庭先、怪しい事と存じまするゆゑ。」岩藤「ハテ、怪しうあらうが、あるまいが、此方の不念にはならぬ事。」尾上「でも又、後日に。」岩藤「奥向きの事は局が取計らひ、お案じなされぬがようござります。」ト奥より都出て、都「尾上さま、これにお入りなされまするか。最早御上使のお入りゆゑ、さき程お召しでござりまする。」尾上「姫君のお召しとあらば、直ぐさま御殿へ。」岩藤「この局は、兄平内左衞門どのの出仕を

う此のところへ。」都「掟厳しき奥御殿、入込みしには様子があらう。」待乳「ことには今日鎌倉より、御上使様もお入りといひ。」梅田「様子を聞かぬ其のうちは、滅多に奥へは。」三人「やることはならぬ。」戸田「これはまた迷惑千萬。清水のお供歸り、大部屋の角内めが、どぶろく酒に他愛なく、お供を缺くのが氣の毒さ、奴同士に相身互、いそいでとつぱ合羽籠、かたげて來ても餘所のお屋敷、勝手を存ぜず、うか／＼と、お庭先まで參つた麁相、お女中方、免さつしやれて下さりまし。」關屋「お供さきより頼まれて來たとあつても、陪臣の入ることならぬ奥座敷、ことには他家の奴戸田平、其のまゝには捨て置かれぬ。」戸田「すりや、どうあつても下郎めを。」關屋「お錠口まで伴うて、役人中へこの由を。」三人「屆けし上にて兎も角も。」戸田「エ、まゝよ、どうするものだ。女中を相手に云譯しても、役に立たぬ水掛論、役人衆に云譯をしませう。」ト鷄鳴く。關屋「ありやもう夜明の。」三人「あの鷄。」戸田「エエコレ、夜が白んでは。」ト合羽籠へ思入。女形皆々取卷いて思入。關屋「サア、一緒に。」三人「歩みやいなう。」ト唄になり、戸田平合羽籠に心を殘し、關屋さきに女形五人あとより附いて上の方へ入る。三味線入の下葉になり、向うより尾上、衣裳、裲襠にて、岩藤おなじく跡より綾瀬、淺茅、著流しにて桃の花を筒に活け、持ち出づる。あとより七浦、築地野、柏尾、桃の花を持ち出る。尾上「岩藤さまにはお早いお上り。今日は鎌倉表より、御上使のお入りとあつて、先ほど粂の平内左衞門さまよりの

廻り。花子行かうとするを、惣太、傘をひろげたるまゝ花子が肩先へ引掛け、とめる。立廻りにて兩人引合ひ、これにて傘の柄抜けて、惣太の脇腹へあたりし體にて、撻と倒れる。花子、傘の頭をかむりしまゝ花道へ、ツカ／＼と行く。この時、雷きびしく鳴り、ガラ／＼と落ちたる體にて、本鐵砲の音する。途端に花子、花道へバッタリこけ、冠りし傘を前へ投げ出す。この時、花帽子取れて、青坊主になり、この雷の音に驚き、耳を押へ、頭を撫でて、恟り思入して、右の傘の頭を持ち、スッと立ちながらこれをかむる。爰にてチョンと木の頭、よろしく、ひやうし。幕。幕の外、本釣鐘にて、花子思入あつて向うへ入る。跡シャギリ。

第一番目　四建目　入間館の場

本舞臺、一面網代塀、見越の枝垂櫻、すべて入間の館、奥庭前の體。幕の内より前幕の合羽籠をおろし、戸田平これを圍うて居る。都、待乳、兩方より取巻いて居る。上の方に關屋、手燭を持ち、宮戸、花形、梅田、下駄を穿き窺ひ、詰め寄せて居る。この見得、少しばた／＼、管絃にて幕明く。

女皆「動くまいぞ。」戸田「こりやお女中、何とさつしやります。」關屋「何ゆゑとは、合點の行かぬ、清玄さまの下部戸田平、入間家のお庭先、まだ明けやらぬ春の夜に、雨具を入れしその荷籠、案内も無

織の袖を摑みしまゝ、袖を引切り、トン〳〵と上の方へ行き、瀧壺の中へ落ちる。水の音。羽織の袖は瀧壺の縁にかゝる。松若、ツカ〳〵と花道へ行き、振りかへり、松若「ヤア、清玄尼には瀧壺へ……わしがつれないばつかりに、可哀さうな……はツつけ坊主。」ト思入。唄になり、向うへはひる。雷の音になり、下座より隅田平出て來り、隅田「いま〳〵しく追ツかけやァがる。暫くどこぞへ。」トあたりを見まはし、隅田「ヨシ〳〵、この合羽籠のなかへ。」ト隠れる。下座より惣太出て來て、惣太「一巻は吹き飛ばされる。あの野郎は、どこへうせやァがつた。」戸田「ドッコイ、この合羽籠を。」トかつぎあげる。惣太、ウロ〳〵尋ねる。下座より牛島軍次出て來て、軍次「ヤイ〳〵、あやしき合羽籠。そりや此方の。」トかゝるを、戸田平振切る。惣太「ナニその中に。」トおなじくかゝるを、三人立廻り。戸田平先に合羽籠を擔ぎ、軍次跡より、一散に向うへ入る。此のうち花子、瀧壺より、本水に濡れ、苦しみながら、枝垂櫻に取り附き、這ひ上らうとしてゐる。惣太これを見て、惣太「誰だか瀧壺に。」トきつと見る。雷の音、雨車すさまじく、惣太、花子をやう〳〵引きあげる。花子、苦しみながら惣太に取りつき、花子「松若さま〳〵。」惣太「ヤア、こなたは先刻の花子の前。有り難い、しめたぞ〳〵。」ト花子を抱く。花子、狂氣のやうになり、あちこち尋ねる心。立廻りよろしく、花子「胴慾なは松若さま。恨めしいは櫻姫。」ト向うを見詰め、思入。惣太は花子を捕へる立廻り。以前舞臺より落ちたる傘を取つて立

レ、松若とはそりや何事。某は常陸之助。」 花子「アレマア、矢張憎らしい。最前婚禮の、杯ごとの
その中にて、松若さまと知つたれど、叛逆人の惡名を受けたまひ、鎌倉よりコレこの如く。」ト繪姿を
出し、花子「お姿繪を以てお尋ねのお身のうへ。知つてもわざと申さぬは、人目を憚る清き尼が、云號
の貞節と、おもうてゐるに知らぬお顏は、そりやあんまりぢや、つれなうござりまする。お姿繪と、
これほど生寫しのあなた樣が。」 松若「そりや心得違ひ。億兆の人おなじからず、烏は烏、鷺は鷺に、
似たる物はいくらもある。して某をいよ／＼もつて、松若といふには。」 花子「證據のこの裂。これ
が有つては。」ト最前の袱紗を出す。松若取つて思入あり。 松若「これがなんと致した。」 花子「なんとし
たとは、世にもまれなる、赤地錦の富田裂。云號のしるしに上げた裂ぢやもの、これをお持ちなされ
ては。」 松若「ハテ、松若でなければ、どこがどこまでも。」 花子「すりや、此のやうに申し上げても。」
松若「常陸之助賴國。」 花子「アノ、これほどたしかな證據があつても。」 松若「知らぬわい。」トきつとな
り、袱紗を引裂く。 花子「ヤア、大切なる袱紗までひき裂いて……エヽ、胴慾な。たとひあなたがお名
乘りなうても、松若さまに違ひない。松若さまぢや／＼、松若さまでござりますわいなア。」ト取りつ
くを、沒義道に振拂ひ、 松若「知らぬといふに。」トこのとき、戸田平出て、 戸田「その御朱印を。」ト松若
にかゝる。戸田平を當てる。これにて、タヂ／＼として花子に行きあたり、倒れる。花子は松若の羽

いまは仇なれその一卷。」尾上「アイヤ、慥かにお納め申すでござりませう。」櫻姫「思へば〳〵姉上樣。」花子「お師匠樣の敎へに任せ、矢張此のまゝ。」櫻姫「そのお嘆きに引きかへて、自らはおもふ殿御と、嬉しい添寢も、みなあなたのお情ゆゑ。」關屋「是非もなき淸玄尼さまの御有樣……アイヤ、お局はじめ供廻りは、眞珠院に相殘れば、淸玄さまにはお跡から。」櫻姫「左樣なれば姉上樣。」ト花子おもひ入れ。櫻姫「自らはお先へ。」關屋「姫君樣の。」皆々「お立ち。」ト三重になり、櫻姫先に女形皆々、向うへ入る。花子殘り、こなし。本釣鐘、櫻散る。花子「あす見んと、おもふ心の仇ざくら、夜半に嵐の吹かぬものかは。」ト時の鐘、合方になり、下座より松若、御朱印を持ち、出て來て、行かうとする。花子「モシ、松若さま。」松若「ヤア。」ト思入。花子「おなつかしうござります。」松若「それがしは常陸之助賴國。松若なぞとは人違ひ。」ト花子思入あつて、花子「エヽ、人違ひとはおなさけない。あなたへ操を立てての剃髮。入間の家を妹に立てさせ、その云號のあなた樣に、最前フッとお目もじなせしに、お姿繪の松若さまに生寫し。ハテ、よい殿御と思ふは仇と、觀念すれど勿體ない、普門品を讀みあげ申す其のうちに、松若さまと添寢した夢。とても生きてはゐられぬ身と、覺悟きはめて舞臺より飛び、死んだと思ふにまたも御介抱、お口うつしの水の情に助けられ、賴國さまと添はうとおもふきづなを、切らうと思へど胸の炎。迷ふも道理矢張あなたは、誠の〳〵松若さまであつたもの。」松若「アヽ、コレコ

さま、是非もないことでござります。」花子「捨てかねし、身を捨ててこそ浮む瀬と……とてもこの身は、あきらめてゐるわいなア。」轟坊「知らぬ事とて婚禮の杯を、叛逆と云ひなせしは、清玄が役目の權威。咲耶姫の神酒なりと云ひくろめたが、妄語の佛罰、折角染衣の身となりし、清玄尼に破戒させたる、阿闍梨が心は未來永劫、地獄へ落つる苦しみでござるわいなう。」ト愁へのこなし。花子思入あつて袈裟を取り、前へ出す。靜かなる合方。皆々「これは。」花子「清玄尼が脫衣のお願ひ。」轟坊「すりや、鴛鴦の血酒を飲みたる罪にて。」皆々「おいとしい事でござりますなア。」轟坊「無情の風は時を待たず、悟りの花も嵐と散る。たま／＼受け難き佛體を得て、佛の御弟子となつたるに、方便の妄語に難儀を救はんと、女心のあさはかに、早まつたことといたされて、殺生飲酒の、二戒を破り、これまで積りし經文もこれ限り。思へば阿闍梨は魔王の思ひ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。」皆々「とは云ひながら清玄さまを、此のまゝには。」轟坊「アイヤ、その儀は愚僧も慈悲心あれど、破戒の身となる僧尼には、情をかくるは却つて佛罰。」櫻姫「すりや、御身をいとふは。」皆々「佛罰とや。」轟坊「おもへば不便な。」ト花子を見て思入。轟坊「毒龍諸恩念彼觀音。」ト唄になり、轟坊、下座へ入る。風の音、雨車、花散る。尾上「雨を誘うて花吹雪。イザ、姫君さま。」ト風音にて、最前の一卷吹き落される。尾上取つて、尾上「こりや最前の都鳥。エヽ、忝い。」ト懷中する。花子、おもひ入れ。花子「形見こそ、

櫻姬「ヤア申し、この神酒には。」ト手を押へる。轟坊「ハテ面妖な。神酒頂戴をなぜ止め召さる。」皆々「その御神酒には。」清玄「なにがどうした。」皆々「阿闍梨さまには、その御神酒を。」清玄「飲まぬは矢張叛逆か。」皆々「サアそれは。」清玄「但し食らふか。」皆々「サア。」ト此のうち花子、ツカ／＼と出て、轟坊の持つてゐる杯を取つて、ぐつと飲む。皆々驚き、關屋「清玄さまには、その御神酒を。」花子「頂戴いたしてござりまする。」轟坊「阿闍梨が代りに清玄尼が、神酒頂戴。清玄どのには、かれこれと申さるゝが、何と致した。」清玄「ム、、ハ、、、、、。甘口な云譯なれど、清玄が身を捨てて、破戒の身となつたれば、それで些とは腹が癒えた。」轟坊「合點のゆかぬ。清玄が神酒頂戴なしたるを、破戒なりとお云やるは。」清玄「さう云ふ阿闍梨のうつそりだ。最前婚禮の杯に、妹脊を結ぶ好き鳥と、鴛鴦の血潮を絞り酒に入れ、それを飲んだる清玄尼、云はずと知れた破戒の比丘尼。」轟坊「すりや、愚僧の代りに飲んだる神酒は、アノ鴛鴦の血酒とや。」トおほきに驚く。清玄、櫻姬へこなしあつて、清玄「これにつけても櫻……イヤ、櫻姬どのと、常陸之助どのの婚禮も相濟み、郡領どのもさぞかしよろこび……イヤナニ櫻姬どの、明日對面いたすでござらう。」ト唄になり、清玄思入あつて、向うへ入る。櫻姬、花子の側へ行き、櫻姬「申し、姊上樣、なんと致しませうぞいなア。」トこの時、下座より尾上出て、尾上「お供揃ひに取紛れまして遲れましたが、何かの樣子承りまして、尾上が當惑。清玄尼

清玄「ナニ阿闍梨どの、櫻姫の杯を受けるとは心得ぬ。出家たる身は女の手より、物を取ると五百生が間、手無きものに生まれるといふ。」轟坊「イヤ、この酒は當境内の鎮守の神酒、愚僧も隨分頂戴いたす。」松若「ナニ、この酒が神酒とや。」清玄「して、その鎮守は。」轟坊「櫻姫。」松若「ヤア。」ト思入。皆々「ナニ櫻姫の、御神酒とはえ。」清玄「珍らしい事を聞くものだ。櫻姫といふ神の名は、神武以來はじめて聞いた。」戸田「阿闍梨か蜊か知らないが、この場をむき身に云ひ抜けても、猿ほう眼で見抜いて置いた。生臭坊主め、馬鹿つくすな。」轟坊「いかに凡俗とはいひながら、知らずば云うて聞かさうか。」清玄「オヽ、聞かうワ。」轟坊「都、東山の清水を、武藏の當寺に移したれば、この石塚を清玄坂、上なるは櫻姫の宮。」清、戸「ヤア。」轟坊「即ち木花咲耶姫、富士淺間を勸請すれば、咲耶姫の宮、淺間坂、それを世の人誤つて、清玄坂櫻姫の宮の神水。」松若「ハテ、めづらしき方言を聞くものかな。この石塚をあやまつて、清玄坂と申すゆゑ。」櫻姫「上なる洞の櫻姫は、咲耶姫さまとや。」轟坊「當寺の鎮守は富士淺間、いまも武藏の高田在、練馬の道にあれば、尋ねて見やれ。」清玄「そんなら不義とも、叛逆ともいはれぬのか。」松若「詮議おしやれ。」戸田「サアそれは。」松若「慮外な下郎め。」ト戸田平を引捕へる。立廻りにて松若、懐より御朱印を落す。戸田平取つて、戸田「こりや御朱印。」ト取つて下座へ逃げてはひる。松若驚き追ひかけ入る。轟坊「神酒頂戴は阿闍梨が役。イザ。」ト杯を取り上げる。

下座より同宿二人出で、同甲「モシ、清玄尼さま、阿闍梨樣のお尋ね。」同乙「何やら仰せ渡される事がござりますゆゑ。」同甲「早うお連れ申して來よとの事。阿闍梨樣の御用でござりまする。」花子「阿闍梨樣の。」皆々「御用とござりますなら、早うお入り遊ばしませいな。」ト花子、いろ／＼あつて、花子「云ふに云はれぬ。」皆々「エ。」花子「なぜ春の夜の、月は朧であるぞいなう。」ト杯を打ちつける。唄になり、花子思入。同宿二人附いて奥へはひる。皆々「清玄さまには、どう遊ばしたのぢやしらぬ。」ト戸田平出て、戸田「ヤア、不義の兩人、詮議がある。動くまいぞ。」松若「不義の詮議とは。」戸田「未だ降參の願ひ相濟まざる常陸之助と、婚禮の杯は不義同然。こんな惡事を聞き出すは、おらが旦那の役目なれば、奴が代つて、二人を召連れ。」ト櫻姫をひき立てる。女形皆々押へる。松若、戸田平を取つて投げる。戸田「不義の科ある兩人を、引立てるを、なんで投げた。」松若「未だ降參を願ひ中なれど、比企の判官どのの內意にて、內祝言のこの杯。これでも申分あるか。」戸田「サア、それは。」ト清玄出て、清玄「その婚禮の杯は、それでも濟まうが、降參の願ひ相濟まぬうち、常陸之助と櫻姫に、杯さすれば入間郡領は、叛逆人の一味徒黨だ。」松、櫻「サアそれは。」皆々「サア／＼／＼。」清玄「このいひ譯はあるまいが。」ト下座より轟坊出て來り、轟坊「イヤ、その杯は婚禮の、取結びではござらぬ。」清玄「ヤア、なんと。」轟坊「その證據にはこの阿闍梨、櫻姫どのより、杯を受け申さう。」皆々「エ、。」

を、あやまつての殺生は、ぶてうはふなれども、鳥の代りに奉公を、遠慮さするには及ばぬわいの。」
霧島「エヽ、有り難う存じまする。」關屋「併しながら、御婚禮のお固めには、至極よろしいこのお酒。」
皆々「左樣なれば、御緣女樣から。」ト櫻姬、杯を取上げる。關屋、酌して、櫻姬飲んで松若へさす。
松若同じく飲む。此のうち花子、珠數を爪ぐり、いろ〳〵思入あつて、松若「初獻も濟めばたがひの約束。」櫻姬「みづからが御朱印を。」松若「大友家の重寶、牛王の御鏡。」ト雙方出す。この時、袱紗包の笛を落す。花子、これを見て、思はず立ち上り、眞中へ來て、取上げ見て、花子「この笛は。」ト松若、悔りして、松若「こりや某の。」ト手早く懷へ入れる。花子、落ちだる袱紗を取つて見て、合點のゆかぬこなしにて、松若にかくし、とつくり見て驚く。櫻姬「互のしるしに。」ト互に取りかへ、櫻姬、御鏡を懷へ入れる。松若、うまいトいふこなしにて、ニツコリ笑ふ。松若「これ取らうばつかりに……エヽ、忝い。」ト御朱印を懷中する。花子、いろ〳〵思入あつて、花子「いよ〳〵たがはぬ松若さま。」ト云はうとする。戸田平、清玄窺ひゐる。松若、花子顏見合はせ、松若「コレ……イザ、三々九度の。」ト杯をさし出す。關屋酌をする。花子思入あつて、花子「アモシ。」ト飲まうとする。みな〳〵驚き、
皆々「清玄尼さま、なんと遊ばしまする。」花子「道理こそ、思ふに違はぬ。」ト繪姿を出す。松若「その松若とやらは、叛逆人のおたづねもの。」花子「でも、見す〳〵證據の。」ト袱紗を出さうとして、思入つ

し、關屋、以前の鳥籠を出し、關屋「まだお放しは遊ばさぬ、この鴛鴦は比翼のもの、島臺がはりに。」七浦「なんと、斯うなされてどうでござりませう。この妹脊の鳥を、島臺にして置かうより、したしみ深い鳥の血酒を。なう、築地野さん。」築地「左樣でござりまする。何であらうと、お姫樣とお聟樣のお仲の好いのが肝腎。私どもなら蠑螈の黑燒で、斯う引著いてゐたうござります。」ト柏尾へ寄り添ふ。柏尾「おきなさんせ。おまへとわたしでは、和合神のやうで、額の寒山拾得だと申しませうぞえ。」築地「わたしを寒山拾得とは、アタ好かん。」霧島「鴛鴦は執心の深いもので、夫を慕ふこの鳥の血を飲むと、猶々妹脊離れず、したしみもあると申しますれば、御婚禮の御酒の中へ。」ト云ひ〳〵、鴛鴦を笄にて突き殺し、德利へ血潮を絞る。皆々驚き、皆々「エヽ。」關屋「これはしたり、霧島さん。その鴛鴦を殺さしやんしては、放生會のお妨げ。」皆々「きつい殺生さしやんしたな。」霧島「ほんにマア、心づかいで、ひよんな粗相いたしました。どう致さう〳〵。」ト花子驚き、花子「ナニ、鴛鴦を殺せしとや。ても殺生な。南無大慈大悲の觀世音菩薩。」ト拜んでゐる。七浦キッとなり、七浦「霧島さんとしたことが、花子の前樣が御剃髮にて、放生會を遊ばさるゝ、その鴛鴦を殺さしやんしては濟まぬ。お局樣やお中老樣へ申し上げて、御遠慮申しつけねばならぬ。」皆々「御遠慮しや〳〵。」トわざと立騷ぐ。花子「ハテ、大事ない、立騷ぎやるな。」三人「でも、放生會の、あの鴛鴦を。」花子「生けるを放つその鳥

の瀧の。」花子「水にて、つかへしこの咽喉が。」松若「速かに通りたるも。」花子「思へば心が。」松若「附きましたか。」花子「あの瀧壺の。」松若「冷水を。」花子「賴國さまが。」松若「口から口へ。」花子「ナニ口うつしに。」トちつとなつて、思入あつて、花子「死んで未來の松若さまにと、思ふに又もこゝろを附けて下されたは、生寫しの常陸之助さま。すりや、どう思うても離れぬ輪廻。アヽ、死ぬるにも死なれぬかいなア。ハアヽ。」ト思入あつて、「ウン。」とのる。下座より櫻姬、女形皆々奧女中とともに出て來て、花子を見て驚き、皆々「清玄さまには、なんとなされました。」松若「世を思ひ切り、舞臺より、死ぬる覺悟で飛び下りての氣絕。介抱いたして心の附きしが、また此のやうに。」皆々「清玄さま、お心が附きましたか。」ト花子心附き、花子「アヽ、淺ましや。迷ふまいと心を定め、死んで未來を助からんと、舞臺より身を捨てしに、死ぬに死なれぬ、矢張因果。」トこなしあつて、花子「アヽ、思ひますまい／＼、觀世音へ誓ひを立て、心がゝりの無いやうに、妹、杯事してたもひなう。」櫻姬「杯事、とはえ。」花子「其方と常陸之助さまと、三々九度の。」松若「すりや、婚禮の。」花子「めでたく爰で。」關屋「幸ひ爰にお持たせなされた、さゝえがござりまする。」トさゝえを出して、皆々「イザ、おめでたう。」ト三味線入り、禪のツトメになり、花子、思ひ切つたるこなしにて、上の方へ行く。此のうち戶田平、合羽籠をかつぎ出て來り、清玄と共に窺ひゐる。さゝえより錫の德利、杯を出し、みな／＼櫻姬の前へ直

の一巻は、おれの物だワ。」隅田「ところをおれが、物にするのだ。」ト一巻を奪ひ合ふ立廻り。風の音になり、この一巻を日覆へ吹きあげる。兩人驚き、兩人「ヤア〳〵、一巻を深山颪に。」惣太「これも、うぬゆゑ。」トありあふ傘を取つて打つて蒐る。立廻り。この傘を下へ落す。兩人よろしく組み合ひ、キット見得。誂へ賑やかなる鳴物になり、チヨン〳〵にて、この舞臺道具、一面にせり上げる。

本舞臺、元の清水の麓の道具になり、上の方へ音羽の瀧を押出し、この舞臺の下に花子、前へ扇を落し、氣絶してゐる。側に松若、立身にて花子を見てゐる。この見得にて一面にせり上げ、道具とまる。

松若「最前より花の下にて様子を見るに、覺悟とはいひながら、思ひ切つたる事致して、清玄尼には氣絶の體。」ト落ちたる扇を取つて見て、松若「この扇子の歌は、慥かに順徳院の御宸筆。綸旨同然。ムウ。」ト扇を懐へ入れ、花子を介抱して、松若「清玄尼どの〳〵……これ程介抱しても、心のつかぬは」ト當惑のこなし。しつぽりとした合方になり、松若、瀧壺の水をすくひ、保たぬゆゑ口に含み來て、花子へ口うつしに飲ませ、介抱して、松若「コレ、清玄尼どの。」ト呼び生ける。花子、心づき、松若を見て、恟りして、花子「ヤア、松若さま。」松若「ヤ……イヤ、常陸之助頼國でござる。」ト花子、松若をよく〳〵見て、花子「そんならアノ、死んで未來を助からんと思うたに。」松若「介抱いたして音羽

大ドロ〳〵にて道具とまる。ト日覆より魂下りて來て、花子の懷へ入る。煙硝火立つ。雨窗明るくなる。花子、目を覺し、

花子「ハテ合點のゆかぬ。迷ひの心を拂はんと、この舞臺にて普門品を唱へる中、ついトロ〳〵と現のやうに、所も變りて近江なる、野路の玉川、白萩の、花の盛りのその中にて、逢うたは焦れた松若さまと、破戒の身となり、妹脊の語らひ。」トあたりを見て、花子「爰は矢ッぱり、新清水の舞臺の櫻。そんなら妹の云號の、常陸之助さまが、松若さまのお姿繪に、よう似た〳〵とおもふ輪廻に、心が迷うて。」トぢつとこなしあつて、花子「さては今のは夢であつたか。エヽ、はづかしい。どうせうぞいなう。」トおもひ入れ。花子「心の曇りを晴らさんと、思ふに又も追ひくる煩惱、松若さまと初めて添臥しなした夢。とても生きてはゐられぬこの身。」トあたりを見廻し、繪馬に掛けてある紅葉笠を取つて、花子「この清水の觀世音へ願をかけ、舞臺より飛び下りても、願望叶ふその時は、身に恙はなしといへど、それには變り、この清玄尼は、舞臺より飛び、身を捨てて、死んで未來をお頼み申さん。オヽ、さうぢや。」ト思ひいれ。花子「枯れたる木にも花の咲く、觀世音の導きにて、必ず未來を助け給へ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。」ト合掌して舞臺前の櫻の中へ飛び下りる。舞臺の上へ、バタ〳〵にて、隅田平、一卷を持ち、惣太出てひつ捕へ、隅田「ハテ、うるさくも追ひ驅け廻るな。」惣太「知れた事、こ

し富田裂。」花子「エ。」トおもひ入れ。松若「その松若ぢやによつて、杯事をしようではないか。」ト茶椀を取り上げて酒をつぐ。花子「とはいへ一旦、佛に仕へし身にて。」松若「今さら我を。」ト酒を飲みにかゝる。その手を押へ、持ちそへて、それなりに右の酒を一口飲む。松若こなしあつて、茶椀を取つてグッと飲む。花子、顔見て恥かしきこなしにて、衣の袖を顔へあてる。これをキッカケに又、獨吟になり、此のうち松若、捨てぜりふにて、二重舞臺へ上り、こなしあつて、机のうへにある箱入の經卷を取つてならべ、また舞臺へ下りて、花子の衣をとり、帶の先をとらへ、二重舞臺へ引上げる。花子思ひいれあつて、兩人なまめかしきこなし。獨吟一ぱいにチョンと簾下りる。合方になり、下座より櫻ン坊、硯蓋を持ち、窺ひ出て來て、右の肴を舞臺前へ置き、簾の內の樣子を窺ひ、思ひいれあつて此方へ來る。此のうち蜻蛉出て硯蓋の上へとまる。櫻ン坊、八丁笠にて押へようとする。よき時分薄ドロになり、蛇出る。櫻ン坊、これに恐れ逃げて入る。大ドロ〳〵にて、屋體の內より誂への魂現はれ、日覆へ引上げる。道具バタ〳〵と變る。大ドロ〳〵にて、道具廻る。

本舞臺、眞中、右清水の舞臺を中程にして、高欄より上許り見せ、結構に仕立てて、舞臺前、櫻の梢ばかり、東西とも凄まじく櫻の花盛り。爰に花子の淸玄尼、花の帽子、紫衣の形にて、高欄によりかゝり、眠りゐる。

八丁笠の酒買ひ。慥かに狸。」 花子「エ、。」ト惘りして立ち上る。 櫻坊「びつくりさつしやりまするな。愚僧ぢや／＼、櫻ン坊ぢや。」ト笠を取る。 花子「ヤア、こなさんは。」 櫻坊「お師匠様が清玄さまへ、お經で氣が盡きようから、これを上げいとの云ひつけ。雨も隨分降るから肴をうんらいくうせいてん、酒に醉つたら、それこそ念彼觀音力。」ト合方になり、ちろりと茶椀を置いて、櫻ン坊こなしあつて下座へ入る。 松若「そんなら狸の化物ではなうて、御酒一ちろり、さて／＼粋な阿闍梨様。」ト花子へこなし。 花子「所欲害身者念彼觀音力。」 松若「コレ、其のやうにひぞり切らずと。」ト花子を捕ふるを、突きのけ、 花子「エ、、穢らはしい。」ト逃げるを、松若捕へてこなし。花子、松若を押退け、逃げようとして、よく／＼見て、ヂッと思入。ギックリとなる。あつらへの合方。 花子「なるほど、あなたはお姿繪の、松若さまによう似たお方。」 松若「ハテ、云號の松若ぢやもの。」 花子「妹櫻姫の聟におなりなされた、常陸之助さまの、お顏も矢ッぱり生寫し。」 松若「ヤア。」 花子「どちらが、どうやら。」ト松若の手を取り、キッとおもひ入れ。 松若「すりや染衣の身にて穢らはしいと云はれたが、俄に心の變つたは。」 花子「松若さまのお姿繪に、生寫しのあなたぢやもの。」 松若「ハテ、その筈、誠の吉田松若丸。」 花子「とはいへ、お果てなされし我が夫。」 松若「その疑ひを、晴らすはコレ。」ト赤地錦の袱紗を出す。花子、びつくりして、 花子「これをお持ち遊ばすからは。」 松若「たらちねの、云號せしその折に、われへ送り

尼と申します者でござりまする……念誦觀音力。」トあちら向いて經讀んでゐる。松若驚き、松若「その清玄尼どのなれば、俗の名は花子の前……某はこなたと云號の、吉田の松若丸ぢやわいの。」花子「エエ。」ト恟りしておもひ入れ。矢張見向きもせず、花子「何をマア。松若さまはお行くへ知れず。お果てなされてそれゆゑに、自らがこの剃髮。」松若「疑ひ深い。この松若を死んだとは。」花子「人を惑はす障化の業。エ、、穢らはしい。」ト構はず平舞臺へ下り、上の方にて空を見て、花子「雲も晴れたる眞如の月。南無大慈大悲觀世音菩薩。」松若「さてもつれない。三衣に似合はぬ。」ト思入あつて、おなじく下り來て、松若「このさかりなる萩をながめて、妹脊はなれず飛びかふ蜻蛉、それを捕へてこの蟲籠へ。これでも見さつしやれて、ちと氣晴らしをなさるがよい。」花子「ナニ、秋津蟲を蟲籠へ。エ、、殺生な。」ト合掌して、花子「南無大慈大悲觀世音菩薩。重罪五逆消滅自他平等即身成佛。」松若「この松若とは、云號でありながら、獨り即身成佛して、某を無間地獄へ落すのか。」花子「エ、。」ト經卷を持つて逃げようとする。松若、經の端を引ッ張る。花子驚き「アレ」と思入。松若「それ、經卷が破れるわいの。」ト經を枷に花子を無理にひき寄せ、松若「ともに成佛させて下されい。」ト思ひいれ。チリ〱の合方になり、下座より櫻ン坊、腰衣の同宿にて、おほきな八丁笠をかぶり、安下駄を穿き、茶椀とちろりを持ち、合方に合はせ、一寸法師のやうにして出て來る。兩人見て、「もはや雨はあがつたに、

に流れ澤山に、白萩の花盛り、よき所に竹牀几を直し、月出てあり、螢すさまじく飛びかふ。總て近江國、野路の玉川の體。大ドロ〱にて幕明く。

トどろ〱打ちあげる。獨吟になり、向うより松若、右の形を墨繪にしたる衣裳の心にて、庭下駄を穿き、蟲籠と銀の團扇を持ち出て來て、花道にて、

松若「あすも來ん、野路の玉川萩越えて、色なる浪に月宿りけると、その近江路の玉川は、鄙びたる所と聞きたるが、この白萩の花盛りといひ、風雅の東屋、月の宿りに螢の風情、ハテ、憎からぬ眺めぢやなア。」ト螢を追うてゐる。また獨吟になり、簾上ると、内に花子、さげ毛のそぎ尼、紫衣の形を墨繪にしたる心の衣裳にて、經机を前に置き、經卷を持ち、讀誦してゐる。花子「妙法蓮華經、觀世音菩薩。」ト雨車になり、月、雲に隠れる。松若、螢を拂ひながら。」松若「これはしたり、雨がほろついて來た。」ト云ひ〱本舞臺へ來て、松若「この野路の玉川に、珍らしい風雅の庵、主は尼御前。ア、聞えた。月のあかり、螢の光で經文を。」花子「邪魔なされて下さりまするな……普門品第二十五……。」ト構はずにゐる。松若「染衣の身にはきつい慳貪。ことに雨がほろついてまゐつたれば、暫く雨宿りを。」花子「アレ、また矢ツぱり妨げを。」ト一心に讀誦してゐる。松若、花子をよく〱見て、松若「これサ、御經讀誦の邪魔は致さぬ。して、こな樣は。」花子「今日剃髮いたしました。清水の清玄

拵へまゐつた一軸は似せ物。この上は、蓋箱ともに、密かに忍んで内陣へ。」戸田「心得ました。」ト一軸と二つの箱を懐へ入れる。向う、ばた〳〵とする。戸田「見咎められては一大事。」清玄「して、櫻姫をひッ拂ふは。」戸田「モシ。」ト囁く。清玄「すりや、入間の屋敷へしのび込み。」戸田「幸ひの合羽籠。」ト合羽籠を明け、中へ清玄を入れる。元庵出て、元庵「こりや此方の合羽籠。」トかゝる。戸田平驚き、戸田「こりやァやらぬ。」ト元庵を引退ける。「それを。」トかゝる立廻り。戸田「幸ひな片荷の重り、此奴を入れて入間の屋敷へ。さうだ。」ト元庵を三尺手拭にて引縛り、合羽籠へ入れ、やう〳〵かつぎ上げ、戸田「こいつは重いワ〳〵。」ト太鼓入りて雙盤にて戸田平下座へ入る。向う、ばた〳〵にて隅田平、一巻を持ち、惣太追ひ驅け出て來て引ッ捉へ、惣太「駄折助め。うなァ太い奴だぞえ。骨を折らした金剛草履の代も寄越さず、又その上に都鳥の一巻まで締めこの兎とは、土船もどきの泥坊野郎め。さうはならない。」隅田「樣子を聞けば、この一巻で吉田の殘黨集まる品。おれも入用だ。うぬに渡して堪るものか。」惣太「さう云や、うぬを。」ト一巻を取らうとする。雙盤になり、兩人一巻を枷に立廻り、よろしくひやうし。幕。時の鐘にてツナギ。引返し早幕。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、眞中に九尺の亭屋體、丸柱、本縁側、綺麗なる葭簾。舞臺前、花道共一面

隅田平一巻を持ち、向うへ、惣太跡を追駈けて入る。尾上「今の下部が一巻なれば、松若さまのお形見といひ、あづかり申したれば大切。併し隅田平が追駈け行きたれば、氣遣ひはあるまい。櫻姫さまにお怪我あれば大事。まづ／＼。」ト櫻姫、尾上下座へ入る。時の鐘、合方になり、下座より戸田平、頬冠にて出て來る。堂の上に清水清玄窺ひ出て來り。戸田「人目の無きをさいはひに、清水の内陣より、繪馬堂へ忍び込み。」清玄「戀の叶はぬ意趣ばらしに、奪ひ取つたる寶の箱。」戸田「まんまと首尾好く。」清玄「御朱印を。」ト清玄、箱の蓋を明けて見て、恟りし、清玄「ヤア、こりや御朱印ならぬ鯉魚の一軸。」ト此のうち戸田平、寶箱の蓋を明けて、戸田「こりやコレ、寶は無くて草履の片し。」清玄「ムウ、闇に紛れ取り違へたか。」兩人「エヽ、いま／＼しい。」ト戸田平、清玄と顔見合はせ、戸田「あなたはお旦那。」清玄「そちや戸田平。」戸田「すりや、最前の様子を。」清玄「殘らずこれにて承つた。」戸田「イヤ、無駄骨を折りました。」清玄「イヤ、無駄骨でない。身共が鯉魚の一軸も、櫻姫に渡してあれば、明日の内見を失敗らすは、幸ひ／＼。」ト邊を見て、以前の金剛草履の片しを取り上げ、清玄「この箱の中へ金剛草履を入れて。」ト箱より一軸を出し、中へ草履を入れる。清玄「一軸が紛失にて詮議になれば、盗んだ奴は草履の主。」ト一軸を投げやる。戸田「こりや出來ました。斯うして置けば御朱印も、一軸も盗賊は草履の主。併しこの鯉魚の一軸を。」ト一軸を取り上げる。清玄「大事ない。斯ういふ事もあらうかと、

は常陸之助賴國さま。」松若「尾上どの。」三人「ホヽヽヽ。」ト笑ふ。櫻姫「オヽ、恥かし。」尾上「モシ、岩藤どのの目に懸つては大事でござりまする。必ずともに。」松若「人目の恐れ。」尾上「人目千本吉野にあらねど。」松若「サ、その櫻は我が花と。」尾上「やがて眞の御婚禮。」松若「誓ひのしるしを。」櫻姫「後程きつと。」尾上「エ。」松若「忘れて給るなよ。」櫻姫「嬉しうござんす。」尾上「あの嬉しさうなお顏わいの。」

ト唄になり、松若扇遣ひして下座へ入る。このうち下座より惣太窺ひ出て、惣太「コレ、お中老さま、都鳥の一卷を取り上げて、褒美も寄越さず、どうする積りだよ。」尾上「褒美は追つての沙汰に及ぶ。」惣太「イヤ、あきれるワ。」櫻姫「姉上さまの大切に思召す一卷、違はぬといふしるしはこれ。」ト懐より最前の短冊を出す。尾上取つて、尾上「これを割符に。」ト惣太取つて、惣太「これをしるしに褒美をしつかり。」トふところへ入れて。惣太「イヤ、こんなまだるい事ぢやァ否だ。爰で直ぐさま褒美の金を。」尾上「ハテ、聞き分けの無い。」惣太「その一卷を、大方こなたが。」ト尾上の懐へ手を入れる。尾上「こりや理不盡な。」ト振り拂ひ、尾上「松若さまのお形見とあるゆゑ、滅多には返されぬ。褒美を取らす。」惣太「褒美もいらない。面倒なその一卷を。」トまた尾上の懐へ蒐る。都鳥の一卷を出す。立廻りの内後より隅田平出て來て、隅田「こりや、何とするのぢや。」櫻姫「尾上へ慮外いたす下部。」隅田「その一卷を。」ト惣太を突き廻し一卷を取る。惣太「それをやつては。」ト取らうとするを突き倒し、雙盤になり、

また松若と顔見合はせ、思はず花手桶を取落す。バラ〳〵と毀れる。皆々驚く。花子ツイと下座へ入る。女皆「なんの事ぢや。」ト都、淺茅續いて入る。鎌助「何だか、ねつから解らねえ。桶を落して水がこぼれると、ばた〳〵〳〵。」隅田「成程、おぬしが云ふとほり、水こぼれると、ばた〳〵と行かしやれたが。」ト花子の眞似をして、隅田「あれではどうやら、狂人の水こぼし。」松若「ハテ、合點の行かぬ。」櫻姫「姉上さまには、如何遊ばされたか。」關屋「わたくしどもには、とんと解りませぬ。」ト松若思入あつて、松若「何は格別、櫻姫どの、枕かはしたその上にて。」櫻姫「誓ひの約束御朱印を。」松若「それも暫くあの番屋で。」ト櫻姫、松若上の番屋へ入る。ト唄になり番屋の幕を卸す。皆々下座へ入る。隅田平殘る。下座より同宿、花子の金剛草履を持ち來り、同宿「清玄さまには、觀音堂へお入りあつて、香花をさゝげ、普門品を讀誦あれば、この佛足をお草履取のこなさまへ。」隅田「すりや、このお草履を。」同宿「たしかに渡しましたぞや。」ト同宿下座へはひる。三味線入りの禪のツトメになり、隅田平思入あつて、最前の箱を出し、草履片足を中へ入れ、片足を投げやり、隅田「斯うして摺りかへて、清水堂の御寶前へ入れて置けば。」ト云はうとして、隅田「うまい〳〵。」と思ひいれあつて下座へ行かうとする。下座より尾上出て來る故、隅田平下の方へ入る。番屋の内より松若、櫻姫出て來て身形を直し居る。此のうち尾上出て來り、在合ふ手桶の水を柄杓にて汲み、水をかける。三人こなしあつて、尾上「これ

く花の。」 皆々「お姿でござりまするわいなァ。」トこのとき花子、松若丸をちよつと見て、心得ぬこなしにて、 花子「それにお出でなさるゝお方は。」 櫻姫「あなたは。」ト恥かしきこなし。 關屋「櫻姫さまのお云號の、常陸之助さまでござりまする。」 花子「エ。」トおもひ入れ。 花子「これはお初にお目にかゝりまする。」 松若「さては、こなたが櫻姫どのの姉上、花子の前。承れば今日御剃髪あつて清玄尼どの、某、妹御とは云號の名はあれど、未だ婚姻濟まねば、兄妹とも申されず。併し俗緣を離るれば、こなたには身一つ。」ト花子をよく見て、 松若「ハテ、變つた折に對面いたしまする。」ト花子じつと思案する。 花子「そんならあなたが。」トおもひ入れ、誂への竹笛の合方になる。 花子「妹が云號の、常陸之助さまでござりましたか。」 松若「いかにも。」ト思入にて、 花子「ハテ、美しい。」トこなし。花子もぎつくりおもひ入れあつて、松若の顏をじつと見る。 同宿「モシ、阿伽のお水を。」ト花子心づき、花手桶を差出す。同宿、繩釣瓶にて井戸より水を汲み、花手桶へあける。此のうち花子、懐より以前の繪姿を出し、松若を見て、寸分ちがはぬといふこなし、大きに驚き、 花子「ハテ、よう似たる。」 松若「ヤ。」ト思ひいれ。 同宿「ハイ、お水を汲みましてござります。」ト花手桶を差出す。花子繪姿を懐へ入れ、花手桶を持つて思入あつて、ふたゝび顏を見ながら、じり〳〵とつけ廻し、花子上の方へ行く。珠數にてあたりを拂ひ、目を瞑り、 花子「南無大慈大悲の觀世音菩薩。」ト云ひながら思ひいれあつて目を明く。

路地は締りますと、云はれるこちとらとは、お月様とすつぽん程、違ふ思ひでじれつたい。」 關屋「ほんに辛氣なことでござりますわいなア。」 櫻姬「それ〳〵、煙草は辛苦を忘れ草と申しますれば。」ト煙草のんで居る。 鎌助「モシ、旦那、あのお煙管を。」ト取つてのめといふこなし。 松若「その辛苦晴らしに某にも、ドレ一服。」ト合羽箱に腰を掛け、櫻姬の煙管を取つて煙草をのむ。 櫻姬「これは憚りでござりまする。」 松若「未だ某降參の一埒、願ひの儀相濟まねば、表立たぬ事ながら、侍女腰元の志にて。」 淺茅「善は急げ、惡は延べいと申す事もござりますれば、丁度只今何や彼やの御首尾。」 綾瀬「客殿や庫裏では、人目があつて惡うござりますから、ちよつと最前わたしが見て置きました、氣の付かぬこの番屋。」 松若「すりや、誰憚らず。」 櫻姬「御婚禮のその前に。」 女皆「こりや內證の御婚禮。」 櫻姬「ホ、ホヽ。」ト恥かしきこなし。此のうち下座より花子、帽子紫衣、錦の袈裟の形にて、水晶の珠數を持ち、樒の入りたる花手桶を持ち、右の金剛草履を穿き、同宿二人、女中侍女四人附添ひ出て來る。
櫻姬「久方の長閑けき春の今日よりも、お慕ひ申せし姉上さまに、あはれ暫しは別れしも、飾りをおろしたまひしより、明け行く雲は紫の。」 花子「三衣のあかつき眞如の月、眺むる心の身となりしは。」
同宿「世を觀念の衆生濟度。」 花子「觀音樣へ奉る、阿伽の水汲み花摘みに。」ト下の井戸の方へ行く。
關屋「この井のもとへお手づから、お出でなさるゝ御有樣。」 隅田「思へば吹雪の櫻と共に。」 都「散り行

節季候ぢやない、せき切つて此方は待ちかね。みな下に居ろ〳〵。」ト女形皆々下に居り、綾瀬「ハイハイ。」ト辭儀をして、關屋「隅田平どの、戀のお取持ちに此のやうに、お辭儀してゐては、埒が明くまいぞえ。」隅田「なる程、こりやお辭儀なしに、据膳を食はつしやるがよい。」ト鎌助走り來て、鎌助「モシモシ、おらがお旦那、ござつたぞ〳〵。」隅田「常陸之助さまには、はやくこれにござれや。此方は、せきぞろ〳〵。」ト立騷ぐ。松若丸出て來て、松若「櫻姫どのには、これにござつたか。」隅田「あなたのお出でを、大抵此方はせきぞろで。」關屋「お待ちかね申したことぢやござりませぬ。」松若「承れば花子どのには、もはや御剃髪も相濟むとござるが、さだめて櫻姫どのにも、安堵いたされてござらう。」櫻姫「姉上さまのことを思へば、ほんにおいとしう存じまするわいなア。」關屋「申し、櫻姫さま、其のやうなことを思召しますと、なにや彼やのお心がゝり。そんな時にはお氣晴らしに。」綾瀬「煙草は辛苦を忘れ草と申しますれば。」關屋「あなたからお吸ひつけ遊ばされまして。」櫻姫「吸ひつけて如何するのぢや。」隅田「成程、お姫さまが吸ひつけ煙草を御存じなきは御尤も。こちとらがやうに、ずどんと放した鐵砲見世、煙草しめれば三々九度、やう〳〵に吸ひ付けたのを、呑むと其のまゝちぎりきな、路地の鐵棒音にぴつくり、歸りがけに又一服と、別れの煙草。うまい契りを煙草でばつかり、濟む身の上と、あなたがたとは、同一にはならぬ筈。」鎌助「どうで命を限りといふ、うまいところへ、もう

別なものぢやわいの。御殊勝な姫君さまに引替へて、お局さまの意地の惡さとした事が、お心好しの旦那さまを捉へて、云ひたいがい。そしてマア、いま竹刀打にもわたしが勝つたを、なんぢやの彼ぢやのと無理云うて、したゝかに叩きくさつて……これがほんの、くぼい所へ水とやら、腹が立つても仕樣はなし。アヽまゝよ。わしはどのやうになつても、旦那さまに何事も無ければよいといふものぢや。斯ういふ内、もう御歸館に間もあるまい。ドリヤ、お先へ行て、お歸りを待ちませうか。」ト唄になり、お初花道へかゝり、思入。雙盤になり、向うへ入る。矢はり雙盤にて道具廻る。

本舞臺、一面に元の淸水の道具。上の方に假番屋、幕張つてあり、下のかた石の井戸「ふくらう水」といふ建札。眞中に合羽箱、次に挾箱、そのうへに櫻姫腰掛け煙草のんで居る。關屋莨盆を差出して居る。侍女二人附添ひ、隅田平心を配つて居る。三味線入りの禪のツトメにて道具とまる。

櫻姫「常陸之助さまはまだかや。」關屋「待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うた物。」綾瀬「もうお出でなされさうなものぢやなア。」隅田「エヽ、ヽ、こじれつたい。おれなれば疾うに來て、ツイ、ちよん／＼の花見まで、露に濡るゝであらうのに。ドレ、ちよつとお迎へに行つて來よう。」ト下座の方へ行く。思入にて、「ヤアヽヽ、ござつたぞ／＼。モシ、櫻姫さま、常陸之助さまがござつた／＼。

皆々「すりや。清水の清玄さまとや。」 轟「放參の鐘を違はず剃髮あつて、一切衆生陀羅尼を唱へ、佛に仕ふる身となれば、中門の內の水は、都清水の寫し、一切功德に勝りたる清水、それへ參つて水を汲まれよ。」ト この時下の方より隅田平、以前の金剛草履を持ち出て來る。 隅田「清玄さまには、阿闍梨さまよりお授けあつて、佛足守護の金剛草履を、差上げまするでござりませう。」 轟「瑠璃金色の法の道は、その佛足にて步みをはこび、阿伽の水汲み花摘みて、觀音薩陀へ獻げられよ。なほ佛足なれば佛間より。」 隅田「これまで拙者も姬君の、お草履摑みし下部が名殘。せめてはこれなる佛足も、直々申して身の功德。皆々さま、御免下さりませう。」ト 同宿草履を受取る。此のうち 轟坊二重舞臺へあがる、皆々剃刀の盥を直す。 櫻姬「すりや、姊上さま。」 轟「清玄尼には、はや佛名。」ト 岩藤おもひいれ。 岩藤「鐘の響ともろ共に、あたら柳の黑髮を。」 尾上「おろし給ふと思へば、胸が張り裂くほど。」 皆々「櫻姬さま。」 櫻姬「皆のもの。」 皆々「おいとしうござりますわいの。」ト 花子思入、合掌して、 花子「南無大慈大悲の觀世音菩薩。」 皆々「南無阿彌陀佛。」ト 憂へのこなし。唄になり、御簾一面に下りる。隅田平下の方へ入る。みな〳〵思入あつて、岩藤、尾上、辭儀して入る。このうち下の杉戸よりお初出て、おもひ入れあつて、 はつ「ほんにマア、おいたはしいは姬君さま、花の蕾のお姿を、お變へなされて尼法師。下々であらうならば、お十九やそこらでは何のマア、後生どころか。上々さまのお心は、また格

ぢやと思ふ。お局さまぢやぞ……お歷々の中で、よもや〳〵と思うたに、物の見事に。」ト嬉しきこなし。これを隱して、 尾上「サア見事あなたのお相手にならうと思ふか。無禮者。」 はつ「御免なされて下さりませ。」ト思ひいれ。 櫻姬「末の者には似合はぬ、初とやらが手の內。尾上、目を懸けてやりやいなう。」 尾上「有り難う存じまする。岩藤さま、さぞお腹も立ちませうが、何を申すも、賤しい者でござりますれば、御料簡なされて下さりませ。」 岩藤「何のいなア、みんな此方が惡いゆゑ、お詫びには及びませぬ。」ト云ふ。尾上思入あつて、 尾上「アレ、岩藤さまのお詞を聞いたか。かならず詫びるに及ばぬとの事。其方が身に取つては、有り難い事ぢやに依つて、これに付けてもお上の御恩を忘れぬやうに、御奉公大事に致せ。お免しあらば身の喜び、早うお次へ立ちや。」 はつ「エヽ、有り難う存じまする」トお初思入あつて杉戶の內へはひる。放參の鐘鳴る。 岩藤「ありや放參の鐘。」ト音樂になる。上の御簾卷き上げる。花子坐り居る。下座より新淸水の住僧轟坊、黃衣の形にて、水晶の珠數と柄香爐を持ち、跡より腰衣の同宿二人、香合を持ち出て來て、 轟「花子の前には、かねて佛門に歸依あつて佛の御弟子となられしたれば、只今より受戒の身。」 僧一「佛說是普門品時。」 僧二「衣中八萬四千衆生。」 僧一「開發無等々。」 兩人「阿耨多羅三藐三菩提心。」 花子「思ひ廻せばたらちねの。」 櫻姬「かかれとてしも烏羽玉の。」 花子「我が黑髮の撫でずやあらん。」 轟「五重三脈五戒を保てば、即ち法名は淸玄比丘尼。」

立廻り、兩人きつと見得。これより三味線入りの白囃子になり、立廻りよろしく、はつ「これではお相手になられませうか。」岩藤「なか／＼味をやるわいの……ところを斯うして。」ト矢張右の鳴物にて又立ちまはり。はつ「これでは如何でござりませう。」岩藤「オヽ、出かす／＼。ところを。」ト身を躱して打つてかゝる立廻り。トヾお初、岩藤の小手をしたゝかに打つ。岩藤「ウム。」となる。お初直ぐに竹刀を打ち落さうとして、思入あつて、岩藤が持つたる竹刀をそつと取り、これを持つて立ちかゝる。敵役四人立ちかゝる。尾上「コレ。」と思ひいれ。お初こなしあつて右の竹刀をば岩藤が前へ置き、さがらうとする。この時岩藤心付き、竹刀を取つてお初を散々に打つ。「岩藤が手練の早速、なんと骨身に徹へたか。」はつ「イエ／＼、そりや御卑怯でござりまする。先を取つたる私の勝、御遠慮いたして控へたを、騙し打ちに。」岩藤「默れ／＼、默り居らう。口強情にこの場の云譯。たがひに武藝を顯はす立合ひ、何の遠慮も會釋もいらぬ。わが勝なら、なぜ私を打たぬのぢや。心根が不便さにあしらうて居たを、誠と心得付け入る無禮。打ち据ゑたは以後の見せしめ。その未熟の手の内、お相手なぞとは凄まじい。それで尾上が手練も知れた。もう四五年も稽古しや。どうしてわしに歯が立つものか。ホヽヽヽ。」はつ「慮外か未熟か、あなたの竹刀を打ち落しました上からは。」ト立ちかゝるを、尾上、つか／＼と行き、扇にて打ち据ゑ、尾上「慮外者めが。お二方樣の御前といひ、あなたをどなた

關屋「コレ、初、お二方さまの御前といひ、有り難いこの場の立合ひ、隨分共に心を付けて……サヽ、これへ、これへ。」トお初おもひ入れ。はつ「ハッ。」トもぢ〳〵思入。關屋「ハテ、何にも遠慮には及ばぬ。お局さまのお指圖といひ、サヽ、早く〳〵。」トお初思ひいれあつて立ち上り、本舞臺の方へ控へる。柏尾「幸ひ〳〵、觀音樣へ御奉納の繪馬の竹刀を。」ト二重舞臺へあがり、繪馬を取つて竹刀を眞中へ直す。岩藤「雙方ともに、支度しや。」初、霧「畏りました。」ト白囃子になり、兩人支度あり、二重舞臺へ式して竹刀を取上げ、色々立廻りあつて、お初、霧島をしたゝかに打つ、七浦、柏尾、築地野かかるを、立廻りあつて散々に打据ゑる。尾上こなし。お初一人づゝ塵を拂ふ。四人お初を睨みつけ、四人「よう酷い目にあはしやつたなう。」はつ「御免なされて下さりませ。」ト思ひいれあつて行かうとするを、岩藤「コレ、待ちや。」はつ「御用でござりまするか。」岩藤「其方の手の内、あんまり見事ぢやに依つて、わしが相手になつてやらう。」はつ「勿體ない、どうしてあなた樣と。」岩藤「そんなら尾上と立合はうか。」はつ「サァそれは。」岩藤「サア。」はつ「サァ〳〵。」岩藤「何とぢや。」はつ「ハイ、それ程までに仰しやりまする事なれば、憚りながらお相手に。」岩藤「すりや、立合ふか。」はつ「畏りましてござりまする。」岩藤「サ、支度しや。」はつ「ハッ。」ト白囃子になり、四人手つだひ、岩藤支度する。合方、眞中へ出て、岩藤「初は仕合者ぢや。」ト突然に打つてかゝる。お初手早く竹刀を持つて受け留め、

れが許して出たのぢや。慮外者めが。下らぬか。」はつ「ハイ、誰も許しはいたしませぬが、ちとお願ひがござりまして、それゆゑ無禮慮外も顧みず、これへ出ましてござりまする。」岩藤「そりや誰に願ひに。」はつ「あなた様に。」岩藤「ヤ。」はつ「唯今あれにて承りますれば、主人尾上を相手に、立合ひとやらんを、御覧なされたいとのお望み。御存じの通り尾上ことは、町人の娘ではござりますれど、お宮仕を致しますれば、少しはその心がけがござりまする。召仕のわたくしへも、小太刀の一手ぐらゐは、教へ置きましてござりまする。その名代と申しまするも、恐れ多い事でござりまするが、私をお相手に遊ばされますれば、尾上が手練も知れませうかと存じますれば、憚りながら、お相手になされて下されませうならば、有り難う存じまする。」ト思入ある。尾上もこなし。岩藤「アノ、部屋方者の其方へ、尾上が。」はつ「長刀の一手も、教へ置きましてござりまする。」岩藤「ムウ。」トおもひ入れ。築地「イヤ、岩藤さま、折角の願ひ、叩き据ゑて遣はされませ。」岩藤「こりやさう致さう。コレ初、心根が不便ぢや。其方が願ひ聞き届けた。叶へてやらう。」はつ「ナニ、おかなへなされて下さりまするか。」岩藤「イヤ、岩藤が相手はならぬ。相手にはわしが弟子。アノ霧島、コレ、大儀ながら打据ゑてやれ。」霧島「畏まりました……コレ、初や、其方は身を知らぬ者ぢやぞいの。」はつ「これは何方かと存じましたら、有り難う存じまする。」霧島「今に足腰の立たぬ様になるのを、有り難いとは笑止やな。」

り遊ばさるゝ折なれば、武藝の試合は。」トこの時御簾なかば下りる。「譬はば御簾のお透見でもなにと
やら。」トこの時下の方の杉戸を明け、お初出かゝり窺ひ居る。岩藤「イヤ、苦しうござらぬ。この經殿
に安置あるは、田村堂の觀音さま、大悲の利劍、千本の矢先と同佛でも、弓矢、木太刀の繪馬の奉納
物、御寶前での武の試み、尾上どの、立合はずば、御中老の役目が濟むまいがの。」七浦「尾上さまの
お相手なら、世間晴れて御前にて、一番勝負して見たい。」築地「私はこれでも、岩藤さまの一番弟
子、劍術柔術の大達人、譃をつきぢでない事よ。」柏木「いつぞは本まに汗かいて、どうぞ相手になり
たうて、何處も彼處もむづ〳〵と、毛槍すやりの早業早速。」霧島「長刀ならばわたしが得手もの、仕
事上手で相手には、きらひは無き達者もの。」四人「サア、立合うて御覧じませ。」尾上「サア、それは。」
四人「どうぢやぞいなア……エヽ、こゝへ出やしやんせ。」ト引ッ立てにかゝる。お初さつと前へ出て、
はつ「憚りながら、マア〳〵お待ち下さりませう。」尾上「ヤア、其方は初ぢやないか。」はつ「ハイ、左樣
でござりまする。」尾上「これはしたり、わがみ達の參る所ではない。殊にお二方さまの御前ぢや。さ
がりや。」はつ「ハイ〳〵。」尾上「早く下らぬか。」トおもひ入れにて云ふ。お初おづ〳〵立ち上り、花道
へかゝる。岩藤「コリヤ待て〳〵。」トこれにてお初、花道にとゞまり平伏する。「そちや尾上の召仕初で
はないか……部屋方者の身をもつて、何しに來たのぢや。コリヤヤイ、お二方さまのお目通りへ、た

そもじの様に發明で、この岩藤が指圖は、受けられさうなものかいなァ。尾上どのは歴とした、親御はしかも本町で名高い町人、塚本屋佐五右衛門とやらいふ、お表の御用を勤めて身上よし。その金持顔が鼻の先へ、ぶらり〳〵ぶら付いて居る、その顔に見えるわいの。なんぼ金持のむすめでも、お役向は御中老、この岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通りのことは勿論、萬一狼藉者が斬り入るか、又は盜賊などが御寢所近う入るまいものでもない。その時は役柄ぢやに依つて、女ながらも御前を固め、討取る器量が無ければならぬ御奉公ぢやが、尾上どの、定めし長刀の一手も、心得てござらうがの。」尾上「ハイ、その儀は。」岩藤「誰に稽古なされた。お發明ぢやに依つて、おたしなみがあらう。どなたのお弟子でござります。」尾上「サア、その御指南を受けましたは。」トつかへる。

岩藤「先生はどなたえ。御流儀はえ。眞影流か、但し眞刀流かえ。これいなう、人にばつかり物云はせ挨拶せぬのは、アノ、武藝に心掛は無いのかえ。イヤ、ほんに厚かましい者があるものぢや。コレ、その職に居て、その道を知らぬは、祿盜人ぢや。」トきつと云ふ。尾上むつとする。「アノ知行盜人と云ふわいなう。盜人々々、イヨ、盜人さまめ。サア、斯う云はれるが口惜しくば、今この所で、岩藤と立合つて御覽じやれ。」トまくしかけて云ふ。尾上思ひいれあつて、ぢつと俯向く。皆々おもひ入れ。

關屋「イヤ、お二方樣の御前、十種香などのお慰みならよろしうござりませうが、殊に唯今佛門にお入

を召され、七條のお袈裟に紫法衣、花子さまへ贈り參らせ、未の下刻は放參にて、鐘もろともに御剃髪、何かの御用意あるやうにと、仰せ渡されにござりまする。」ト花子の前へ直す。花子取つて戴く。

女吉「すりや、どうあつても。」　花子「法の門出が嬉しいわいなァ。」ト皆々ぢつとなる。花子懷より以前の繪姿を出し、「思へばお果て遊ばされし、松若さまの此のお姿繪、殿御の菩提に今日の剃髪。」トまた最前の都鳥の一卷を出し、「殊に最前この一卷、三惡道に迷ひ給ひし物語に、佛に仕へ、このお姿繪に廻向して追善供養。尾上、ちかう。」　尾上「ハァ。」ト合方になり、尾上、花子が側へ行く。花子「この都鳥の一卷は、まうさば松若さまのお形見なれば、大切にして、吉田家の菩提所へ納めてたもひなう。」ト一卷を渡す。待乳取つて三方に載せ尾上へ渡す。岩藤これを見て思入。尾上「お形見とあれば大切なる一卷。尾上にお預け下されまする段、冥加に叶ひ、有り難う存じまする。」ト岩藤むつとする。

岩藤「尾上どのは、果報者ぢやわいなう。」　尾上「エ。」トおもひ入れ。岩藤まへに出て、　岩藤「たとひ花子さまが其のお形見を、お預けあらうとも、先づ一旦辭退して、岩藤どのへと申し上げられさうなものぢやぞえ。御首尾の好いをかさに被て、局役の私を差措き、何ぢややら、當時お氣に入りの尾上どのでなければならぬやうに、局役は、有つても無うてもの事ぢや。隨分と御前よろしく、お勤めなさるゝがようござりまする。」　尾上「イエ〳〵、無調法な私に、何事に依らずお指圖を。」　岩藤「なんの、

女皆「こなさんは尾上さまの女中衆。」はつ「ハイ、初でござりまする。」築地「その初なら、お姫様の御用の邪魔せにやならぬか。」七浦「これも大方、尾上どのの云ひつけであらう。」四人「さうぢやあらうがのさうぢやあらうがの。」はつ「イエ、どう致して。マア、お邪魔は致しませぬ。どうぞ主人の尾上へ。」四人「エヽ、知らぬわいなう。」トお初を突きまはす。お初迷惑がりし思入。はつ「ハイ、どうぞお願ひ申し上げます。」霧島「部屋方者なら部屋方の樣に、お留守を大事にせねばならぬ身で、お姫樣のお出で先。」柏木「この淸水へは何しにおぢやつた。」はつ「ハイ、主人尾上が大切に致しまする九重のお守、それを忘れられました故、心掛りでござりませうと。それゆゑ持つて參りました。關屋さま、どうぞお屆けなされて下さりませ。」ト守を出して渡す。關屋受取り、關屋「そのおまもりは、私が屆けて上げませうわいなう。」築地「ハアヽ、そんならこりや、わたしどもが取次いでは、盜まれでもせうと思うて居るか。さう聞けば此方では知らぬ。」霧島「さうしてマア、わがみ達の來る所でもない所へ來て、何ぢや。」四人「立ちや〳〵。立ちやらぬか。慮外者めが。」はつ「ハイ。」ト下の方の杉戸へお初入る。奥にて、呼び「御剃髮の刻限。」ト呼ぶ。四人「ほんに部屋方者は、物知らずぢやわいなア。」ト琴唄になり、下の方より岩藤、三方に紫の法衣、錦の袈裟を載せて持ち、尾上引添ひ出て來る。此のうち御簾一面にあがる。結構なる衾の上に花子、櫻姫と竝び居る。皆々平伏する。岩藤「唯今阿闍梨樣よりも私

剛草履を出し、「佛足守護の金剛草履と名を付けて、花子さまが坊主になれば、これを穿かせ、色に迷へば越度となる。よし〳〵。」ト思入あつて、御朱印の箱を取り上げ、金剛草履と兩手に持ち、「その上にて御朱印の箱の中へ、金剛草履を入れて置けば、盜賊は花子の前で、過りは櫻姫、姉妹一緒に罪に取つて落すは、上々吉の分別、うまい〳〵。」ト思入、ゴンと時の鐘鳴る。隅田平恟りして、「措きやァがれ。時の鐘といふやつサ。」トチョン〳〵音樂になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、竹のふし欄間、御簾一面に上げおろし。見附金張附佛殿。爰に繪馬かけてある。平舞臺、下の方、杉戸口出入り、爰に奥女中大勢、各自角盥、湯つぎ、手拭を掛け、腰元、亂れ箱、鼻紙臺、何れも蒔繪にて、これを持ち、立ちかゝり居る。音樂にて道具とまる。

關屋「最早放參の鐘に聞もござんすまいから。」都「此のやうに花子さま御剃髪のお支度を。」皆々「急ぎますわいなァ。」ト唄になり、向うよりお初、著流しにて、袱紗包を持ち出て來て、はつ「どなたさまも、これにお出で遊ばされましたか。」ト築地野、七浦、ちろりと見て知らぬふり。築地「花子樣の御用が後れる。早う行かしやんせ。」トわざとお初の方へ寄り、行かうとする。はつ「ア、モシ、ちとお頼み申し上げまする。」ト七浦築地野の袖をひかへる。築地「エ、、忙がしいわいの。」トお初を突き退ける。

きつとした誓ひの印を遣はさう。」女皆「櫻姫さま、此方からもおしるしに。」ト櫻姫思入あり。此のうち隅田平出て來て、こなしあつて、牀几の上に寢腹這ひ、見て居る。七浦もどかしがり、七浦「なにも其のやうに、辛氣に思召す事はござりませぬ。こゝにある關八州の御朱印を。」女皆「滅相な、どうしてマア。」露島「ハテ、大事ござりませぬ。どうで姫君さまのお好きなされた、お聟樣の事なれば。」築地「それ〳〵、どの道入間家の御夫婦なり、誓ひの印に上げられても、矢ッぱり此方へもどす道理。」七浦「イザ、御朱印を。」ト箱を明けて差出す。櫻姫御朱印を取る。淺茅「こりや斯うなされては如何でござりませう。お疑ひの無い樣に、御内證に御婚禮のお杯でも、遊ばされたその上にて。」松若「云ふにや及ぶ。盡未來まで變らぬ夫婦。」櫻姫「オヽ、嬉し。」ト寄りそふ。四人「こりやモウどうも。」ト皆々こなし。隅田平、牀几より落ちる。皆々恟りして、女皆「エヽ、隅田平どの、恟りしたわいな。」隅田「お姫さまの色事で、とんとたまらぬ。」四人「御婚禮がお待遠なら。」女皆「もうこの上は合圖をさだめて、お屋形へお忍びの。」隅田「ハテ、じれッたい。それまでは待たれない。どこへなりと。」女皆「して、御朱印の。」隅田「箱の片付、下郎が合點、こゝ構はずと。」女皆「お出でなされませいなァ。」と祇園囃子になり、松若先に、櫻姫を突きやり〳〵、皆々石壇へはひる。隅田平思入あつて、隅田「かねて岩藤さまのお望みの通り、マァあれで色事の過りの上に、御朱印の越度。これからは、この草履。」ト以前の金

清玄の一軸も、共に內見でござれば、いま改めて、お渡し申さん。」ト箱を明け、一軸をあらためる。關屋「此方にても、御祈念は相濟みましたれど、なほも御寶前にて御祈り。」戸田「一軸お受取りあられませう。」關屋「ハア。」ト辭儀して、櫻姬に受取れと敎へる。櫻姬、清玄より受取る。清玄「して、觀音堂の內陣へは。」關屋「その一軸を、御大切に致されて、梅田どの、御案內。」梅田「畏まりました。」ト一軸を受取る。清玄「然らば祈念に。」皆々「清玄さま。」清玄「戸田平、參れ。」戸田「ネイ。」ト唄になり、清玄思入。梅田一軸の箱持ち、下座へ入る。皆々跡見おくり、女皆「邪魔は拂うた、櫻姬さま。」櫻姬「ほんに憎らしい。」女皆「あなたに惚れまうして、どうも斯うもなる事ぢやござりませぬ。」櫻姬「常陸之助さまには、好うこそ今日は。」松若「浪人のつれ〴〵、清水の花を眺めて心の樂しみ。併しながら某人の一埒、比企の判官どのの取持ちにて、鎌倉御所へ相濟まねば、おもはずも婚姻の延引。」鈍助「ハテ、小じれつたい。丁度逢うたは、明いた口へ持ちかけた旨い色事と思つたに、これぢやァ牡丹餅へ鹽を付けて食ふやうで、旨くないわえ。」女皆「サア、その御婚禮は、姬君樣にも、お待兼ね遊ばされて……今日の花見にお出でなされたこそ好い幸ひ。」築地「それ〳〵。マア、前祝ひにちよんの閒を。」柏木「物を買ふにも、約束の手附といふ事もあれば、ナア、皆さん。」七瀬「それが無ければ姬君さまにも、あなた樣のお心を、お疑ひあそばされまする。」ト松若思入あつて、松若「その疑ひの無い證據に、

て。」ト櫻姫思入あつて、櫻姫「はづかしいわいなう。」戸田「お旦那、アレ、お恥かしいと仰せられまする。」ト清玄衣紋を繕ひ、清玄「櫻姫どの、恥かしい事はござらぬ。こなたさへ水心あれば、此方は魚心。その上にては御親父郡領どのへ、申し入れたらよろしうござらう。この儀は定めて承知でござらうが。」櫻姫「エ。」ト合點のゆかぬこなし。淺茅思入あつて、淺茅「成程、御承知らしい事でござりませうぞいなア。」清玄「さういふ事なら、思ひの丈を筆に云はせて。」ト懐より文を出して、そつと櫻姫に渡す。取つて見て悔りして、櫻姫「思ふ君樣まゐる。焦るゝ清水清玄。」ト云はうとするを、清玄「エヘンエヘン。」ト云ふなと咳拂ひ、戸田「畜生め〳〵。」ト清玄の脊中を叩く。櫻姫「エヽ、穢はしい。」ト文を後へ抛り、松若の方へ行かうとする。皆々とめて、女皆「ア、モシ、それでは。」清玄「どうぞ色よい。」ト女形皆々思入あつて、女皆「サア、お返事やら御挨拶を……ほんに好う御參詣でござりましたなア。」トこの内戸田平この文を拾ひ懐へ入れる。清玄「某とても鎌倉御所より、預り奉る鯉魚の一軸祈念のため、持參いたして唯今參詣。」ト一軸の箱を出して見せる。七浦「此方にても關八州の、御朱印の御祈念の爲。」ト同じく御朱印の箱を出して見せる。松若見て、松若「見ますれば入間家の御朱印、清玄どのの一軸も、皆一對の蒔繪の箱。」清玄「實朝公武將宣下の折柄、家々の重器へ下さるこの箱、何れも笹龍膽の御紋散らしの同じ蒔繪……これ幸ひに御朱印を。」ト云はうとして、「明日こなたの館にて、

櫻。」清玄「ハテ麗かな。」奴二「景色ではごわりまする。」ト松若思入あつて、松若「ハテ、おもしろき祈念の樂。聞きしに違はぬ關八州の。」ト云はうとして、松若「我も暫く黄鍾調に、笛を合はせて慰まん。」ト懐より袱紗包の以前の笛を出し、調べる。櫻姫おもひ入れあつて、櫻姫「ハテ、合點の行かぬ。樂に合はする横笛は、何處であらん。」ト松若笛を調べながら、清玄も本舞臺へ來る。女形みな〳〵見て、淺茅「アレ、お姫さま、御覽あそばせ、深編笠でお顔は見えねど、笛を調べて。」ト櫻姫舞臺から見て、櫻姫「どうやら御風俗が。」都「若しやこの程よりお下りある、お云ひなづけの常陸之助さまか知らぬ。」女皆「ほんに辛氣な。お笠をお取りなさんせいなア。」清玄「ヤア。」ト編笠を取る。戸田「アレ〳〵、清水の舞臺に櫻姫さまが。」ト松若、笛を懐中して、松若「戀と花との盛りぢやなア。」ト編笠を取つて牀几にかゝる。清玄「ハテ、其許には見慣れぬ御仁。」松若「某ことは九州浪人、比企の判官どのの取持ちにて、鎌倉御所へ降參の者。」清玄「ムウ、このほど聞き及んだる、大友常陸之助賴國どのでござるか。」松若「いかにも。願ひ相濟むまでは當地に旅宿。」清玄「身共は清水平馬之助清玄と申す、鎌倉武士でござる。」ト牀几にかゝり煙草のんで居る。始終右の鳴物にて、石壇の上より、櫻姫、綾瀬、都、淺茅、待乳、築地野、霧島、柏尾、七浦は御朱印の箱を持ち出て來て、女皆「申し、お姫さま〳〵。」ト櫻姫嬉しきこなし、松若見て、松若「これは櫻姫。」ト言はうとするを、綾瀬「ア、モシ、櫻でそこらがまばゆう

早く取る。雙盤早めになり、隅田平石段へ逃げて入る。惣太きつとなり、惣太「うぬ、駄折助め。」ト追つ驅け石段へ蹈みかけ、思入あつて、惣太「いいワ、いま逃げても、取るところで取つて見せうワ。したが、草履は格別、粂の平内さまより渡された都鳥の一卷、吉田家の殘黨を味方に付けよと云ひつけられたが、あの一卷彼方へ遣つたが、剛氣に大事な物だと見える。これといふも、あの花子の前の美しいのにうツ惚れたばつかりだ。ア、、女にやァのろい奴よ。」ト思ひいれ。唄になり、惣太石段へ入る。清水舞臺の後にて、呼び「御祈念の刻限。」ト音樂になり、舞臺の上へ櫻姫、御朱印の箱を持ち、綾瀬、都、待乳、淺茅、各自篳篥、笙の笛、琵琶、羯鼓を持ち出て來て、櫻姫「入間家の御朱印御祈念の爲。」　女皆「樂を奏し奉りまする。」ト皆々樂を奏する見得。誂へ三味線入りの管絃になり、向うより松若丸、百日棒茶筌、衣裳袴にて、大小、熊谷の深編笠を冠り、扇を持ち、鎌助、草履を持ち出て來る。東の揚幕より清水平馬之助清玄剃立て大髻、袴羽織、大小にて、深編笠、扇を持ち、戸田平、笹龍膽の紋散らしの蒔繪の箱を三方に載せ、持ち出て來て、花道にとまり、松若「ハテ、咲いたりな花盛り、されば日本の花の王と、貴賤賞美をなすゆゑに、櫻を賦したる唐歌は無し。」　清玄「櫻は花の優美にして、全く春の暖氣を受けて、開くは仁の姿なり。」　鎌助「旦那のお供でこの奴も、お江戸櫻の花見とは、舞臺も花の新清水。」　戸田「おいらは構はぬこの跡の、酒屋で一杯青ツきり、ぐつと引ッかけ山

その菅菰で、草履を作つて穿かせる時は、鴛鴦の思ひにて、忽ち色深くなつて心が亂れるとの事。その菅菰で金剛草履を作つてくれろと頼むから、えつちらおつちら、阿曾の沼から菅菰を取つて來て作つてやつたに、その錢を寄越さないとはあんまりだ。それを彼これぢくねると、入間の屋敷へ踏んごんで、お局さまの頼みで斯う〳〵だと、草履の事を蒔き出してしまはう。」隅田「サア、そりやア。」惣太「但し錢を寄越すか。」ト隅田平思入あつて、隅田「よいワ、錢をやらう。明日とも云はず今こゝで。」ト錢を百出して「ソレ。」ト投げやる。惣太取つて、惣太「なんだ、金剛草履の錢がたつた百か。猿唐人めが。」ト錢を投げつける。隅田平きつとなり、隅田「これぢやア不足か。」惣太「知れた事だ。何か玉に使ふ金剛草履、百や二百で賣られるものか。」隅田「さうして、いくらだ。」惣太「百兩と云ひたいが、負けてやつて五十兩。」隅田「アノ、小判でか。」惣太「この金剛草履を作らして、今日坊主になる花子の前に、これを穿かせて心をば亂させ、何かの越度、それを囮にお局の、一物ありと睨んだる、眼は違はぬ金輪奈落、金剛草履の作人が、惡いことをば聞き出す、猿島惣太といふ足輕だ。五分でも引けを取るのぢやござんせぬ。」ト隅田平思入あつて、隅田「成るほど、さう云へば隱すにおよばぬ。お局岩藤さまの計ひで、花子さまを呼び寄せ、この清水で出家させ、この草履を穿かせて心が亂るれば、その上にて罪に取つて落すのだ。それだに依つて草履の代は望み程……べら坊め、勝手にしろえ。」ト金剛草履を手

ト懐より一巻を出し、惣太「その松若の幽霊どのが、僞りならぬ證據とあつて、渡してくれた都鳥の一巻とて、吉田の重寶、これで疑ひ晴らさつしやりませ。」ト一巻を差出す。關屋取つて花子へ渡す。花子「なる程、これがあるからは、松若さまには。」皆々「お果てなされて三惡道に。」花子「其のお迷ひを晴らすは、自らが剃髪して。」惣太「して、その一巻は。」尾上「お姫様へ差上げたれば、きつと御褒美は後程御沙汰。」惣太「必ず間違へて下さりますな。」岩、尾「左様なれば花子さまには。」花子「阿闍梨さまへかねての願ひ。」ト立ち上り行かうとするを、櫻姫ちやつと留めて、櫻姫「姉上さま。」皆々「まづお入りあられませう。」ト唄になり、花子先に綾瀬手を執り、櫻姫は關屋手を引く。岩藤尾上皆々附添ひ、石壇の上へ入る。隅田平行かうとするを、惣太とめて、惣太「コレ、待ちやれ。金剛草履を拵へさせ、その錢は如何する。」隅田「ハテ、そりやァ合點だから遣ると云ふに。」ト行かうとするを引つとらへる。惣太「また逃げべいと思つてか。錢が無ければ草履を此方へ。」ト隅田平の懐へ手を突込み、裂に包んだ金剛草履を引き出す。隅田「これを遣つてつまるものか。」ト引奪らうとする。立廻りにて草履をまへに置き、雙方より手を掛け、惣太「よく積つて見ろ。入間家のお局さまの頼みぢやァないかえ。」ト大きな聲で云ふ。隅田「コレ、靜かにしやれな。」ト押へる。三味線入りの禪のツトメになる。惣太「おれが居る忍が岡の辻番へ、われが來て頼むには、下野國阿曾の沼は、鴛鴦のたんと棲む池で、そこに生える菅

尾上「存じて居るなら、花子さまへお慰みに。」　惣太「抹香臭いわしが話を。」　皆々「申し上げてたもいなう。」ト時の鐘、合方になり、　惣太「先づ都には祇園、清水、智恩院、金閣寺御覧なら、好いたぼは選りどりのお前方より、お姫様へお話し申すは、有つた事の幽霊ばなし。」　女皆「どうやら聞かぬ先から、恐ろしい樣でござりまする。」　惣太「マア、有り難いのは高野山、上り下りの山の間が三里の餘、それから先が不動坂、そこが女人禁制で、奥の院は石塔だらけ、無名の橋を渡ると、向うが名代の蛇柳、丁度そこで日は暮れる。しよぼ〳〵雨で寂しい胴中、風に柳がザワ〳〵と、身の毛もよ立つ、柳の蔭から稚兒の幽靈、佛つくつて色蒼ざめ、申し〳〵と聲かけられ、恟り驚くまいか、氣も魂も飛んでしまつて、わしやア夢中。」　女皆「アレ、怖いわいなア。」ト皆々に執付く。　惣太「コレ、驚くな。某事は吉田の嫡子松若丸、いつぞや都で天狗に攫はれ、其ののち高野山にて、世を果敢なくも相果てたれど、修羅三惡道にまよひ居て、浮みもやらぬ亡者の身、何卒娑婆にて追善供養あるならば、成佛得脱疑ひなし、無緣の共方を頼む程に、某緣者の輩あらば、この事を告げてくれと、云ふかと思へば、忽ち消えて常の通り。なんと恐ろしい話ぢやアござんせぬか。」　皆々「エ、。」と恟りする。　花子「すりや松若さまにはいよ〳〵お果て遊ばされ、三惡道に迷ひ給ふとや。」ト隅田平せゝら笑ひ、　隅田「野郎め、譃ッ話は廢めにしろ。」　惣太「なる程、さう云ふであらうと思つた。譃でない證據といふは、これだ。」

先刻から見れば、いま坊主にならうといふ花子さまとやら、途方もない美しいものだなァ。」ト花子の方へ、づか〳〵と行くを、隅田平引退けて、隅田「野郎め、こりやァ何處へ參る。」惣太「知れた事。あのお姫樣にちよつと抱きついて。」ト隅田平を見て、惣太「ヤァ、こなたは草履取の隅田平だな。おらァ草履の錢を取りに來たのだ。」隅田「コリヤ〳〵、なにを云ふ。知らないぞ〳〵。」惣太「知らないもすさまじいわい。お局さまと言ひ合はして。」隅田「ハテサテ、つがもない事を云ふが、この隅田平は、知らない知らない。」ト云ふなとこなしにて、隅田「何事も呑みこんでゐる程に、草履の事も鼻緒の事も、必ず申すな、控へて居れ。」ト惣太に呑みこます。惣太「さういふ事なら、草履の事も云ふまいが。」ト花子へ思入あつて、惣太「その鼻緒、ぢやァない花子とやら云ふお姫樣、どうも美しいわい。」軍次「あなたは誰あらう、花子の前さまと申して、吉田の松若樣へ御婚禮あるお身なれど、その松若さまのお行方が知れぬ故、今日御剃髪あつて、尼におなりなされるのだ。」惣太「エ、、。」ト悔りして、惣太「あのお姫樣が坊さんに。ハテ、惜しいものだなァ。」ト花子へ思ひいれあつて、何か思案してこなしあり。「これをおもへば、大和當麻の中將姫も、こんな事であらうかい。」尾上「これなる下部は、當麻寺へ參詣して、中將姫のこと知つて居やるか。」惣太「當麻寺どころか、此のやうに草履を賣つて歩く、やとひ辻番の足輕だが、六十六部同然に、國々を歴巡つて。」花子「アノ、日の本の有り難い御寺をば。」

きながらへて、鎌倉どのへ召捕られでもなされては、恥辱の上の恥ではござりませぬか。」尾上「すりや、それが松若さまの。」ト繪姿を取つて見る。花子「尾上、これへ。」尾上「ハツ。」ト繪姿を差出す。花子取つて思入あつて、花子「云號の名はあれど、これまでお目にかゝらねば、お顔見知らぬ松若さま、惡名を受け給ひ、お尋ねの身とおなり遊ばされ、お姿繪にてお目もじ致しまするは、思へば〱、せんない浮世でござりまするなァ。」ト思入あつて、花子「せめては剃髪したうへで、お姿繪に御廻向を。」尾上「御殊勝な事でござりまする。」ト岩藤思入あつて、岩藤「アイヤ、申し、そのお姿繪に御廻向とは、お道理さまではござりまするが、お尋ねのお身を描きし事なれば、天下の科人、申さば穢れ。それを御廻向なさるゝを、御殊勝なことゝ云はしやんす、尾上どのの差出口、何にも知らいで、ホヽヽ。」トわらふ。尾上「エヽ。」ト思入。花子「イヤ、岩藤の詞なれど、剃髪すれば貴賤に依らず、廻向するのが佛のをしへではないか。」岩藤「エ。」ト思入。花子「光明皇后の例もあれば、のりのみちには穢れも無い。それを咎めて尾上にかれこれ。」ト云はうとして、花子「なんと、其の樣なものではないか。岩藤、軍次。」軍次「ヘイ、ヽヽ。」ト思入、岩藤こなしあつて、岩藤「花子さまは、鎌倉の尼寺ちかくお入りなされて、佛門のみちは、おいたはしいことなァ。」ト空嘯いて云ふ。花子繪姿を懷へ入れる。このうち惣太、煙草のみながら花子に見惚れ、思入あつて、惣太「ハテ、女中しうといふものは好いものだ。

それを、其のやうに仰しやりましては。」岩藤「なる程、それではわたしが無調法、こりや恐れ入りまする。その筈でもござりませうか。先岩藤殿は、お局頭の出頭で、松緑院と云うて今では御隠居、わたしはその姪でござりまして、お部屋子に上つて居て、段々と立身いたして、只今ではお局頭の岩藤、これと云ふも、伯母松緑院のお庇、何も存じませぬ無調法者、尾上どの、何かと宜しう、お指圖なされて下さりませ。」トわざと手をつき慇懃に云ふ。尾上「これは又、痛み入つたる御挨拶、なんの指圖を致しませう、私こそ、やう〳〵と。」岩藤「今度始めてのお中老役の尾上どの、こりや、さうありさうなもの、何にも知らいで物識り顔、流石は成りあがりの町人の娘。ほんにお里が顯はれるわいなう。」尾上「ハイ。」ト思ひいれ。岩藤「お二方には、この岩藤が附いてゐる。この上にも、ツベコベツベコベと口出しすると、中老役とは云はせぬ。以後は屹度嗜ましやんせ。」ト思ひいれあつて、「ほんに忠義と云へば、尾上殿の召使は、強う主人を大切に勤むるといふ評判、名は何とか云ひましたの。」尾上「ハイ、初と申しまする。」岩藤「オ、それ〳〵お初であつた。好い女子を置き合はさんしたの。」ト軍次思入あつて、軍次「これについても、ア、、姫君さまのお歌はお氣の毒なれど、松若さまにはお果てなさるが、お爲と申すもの。」尾上「そりや牛島さま、なぜでござります。」軍次「これ御覽じませ。」ト懐より松若の繪姿を出し、軍次「叛逆人の惡名なれば、このとほり繪姿を以てお尋ね。さすれば生

日なれば、隨分と心を付けられてよからう。」ト花子思入あつて、花子「かねての願ひみづからが、心の内はこの扇。」ト持ちたる金地の扇をひろげて見せる。岩藤尾上見て、岩藤「過ぎし日の暮るゝを急ぐ夕顔の。」尾上「花の便りを誰か問はまし。」皆々「その三十一文字は。」尾上「花子さまのお詠み遊ばされしを、勿體なくも順徳院の御叡聞に達し、あの扇へお書し賜はりし御宸筆。」花子「夕顔の、花は暫しの盛りにて、思へばこの身に適ひし詠歌。」ト尾上思入あつて、尾上「それに引換へ櫻姫様の、短冊のお歌は。」ト櫻姫懐より袱紗に包みし短冊を出し、櫻姫「九重に立つ白雲と見えつるは、大内山の櫻なりけり。」尾上「お七ッのときお詠みなされし、このお歌について、櫻町の中納言さまより、幼少には珍らしきと御賞美あつて、短冊を下され、お名もそれより櫻姫さま。ことにお歌のお心も、九重に立つ白雲とあるからは、入間家の御家督、思へば〱、おめでたい事でござりまする。」ト岩藤思入あつて、岩藤「尾上どの、お默り。」尾上「エ。」岩藤「こなさんは物知りぢや。和歌の心をよく御存じ。花子さまが御總領で、御剃髮のお望みゆゑ、お妹御の櫻姫さまへ御家督讓り、その御剃髮の無いずつと先から、櫻姫さまの御家督は知れてあるのかえ。」尾上「左樣ではござりませねど、花子さまへ松若さまを、お壻君にお取り遊ばさるゝ筈なれど、お行くへ知れねば姉君には、お妹ぎみへ御家督讓りあつての御剃髮、以前より御家督の事は知れませねど斯樣になりまする知らせの端でがなござりませうと申す事、

つたものでは、ござりませぬわいなァ。」岩藤「これは又しても皆の衆のざれ言、嗜ましやんせ。」ト思入あつて、岩藤「今日は御遊山とは申せど、大切なる清水詣で、花子の前さまには、入間家の御總領なれば、吉田の松若丸さまを、お聟がねとして御相續のお定め、ことに姫君より松若さまへお云ひなづけのしるしに、世にも稀れなる赤地の錦の、富田裂まで遣はされましたる御仲。そのおいひ號けの松若さま、お行くへ知れざる上、お果てなされしと、博士にも申し上ぐるに依つて、操をお立て遊ばされ、御剃髪のお願ひなれど、大殿さまにもお聞き入れなきゆゑ、いつぞやお家出遊ばされ、鎌倉松ヶ岡へお入りのところ。」尾上「扇ヶ谷には、花子の前さまのお乳の人の娘、綱女といふ者あつて、在所ながら深切の者にて、花子さまをお留め申しての御介抱、江戸表のお屋形にては、御一家さま方はじめ、岩藤さまにも御相談のうへ、御家督は櫻姫さまと相定まり、尤もお妹君には、大友常陸之助さまへお入りのところ、大友家滅亡にて、常陸之助さま御降參のお願ひにて關東へ御下向、これ幸ひと、お聟がねとしての御家督、それゆゑ鎌倉より、花子さまをお呼びむかへまうして、お願ひの御剃髪。」岩藤「櫻姫さまには、いよ／＼入間家の御家督と定まり、おいひ號けの常陸之助さまにも、近々降參のお願ひ相濟みますれば、御婚姻取結び。」ト梅若御朱印の箱を持ち、前へ出て 梅若「大切なる關の東の、八ヶ國の御朱印は、これに守護してござります。」岩藤「この清水の觀世音の、御寳前にて御祈念の今

らぬは云號の松若さま。」櫻姫「花の蕾のお方なれど、なさけなや御謀叛の、惡名を受けたまひ、お家出なされてその後は。」築地「身はほの〴〵と明け初むれど、櫻に曇る横雲の、お尋ねなれどお行くへ無う。」關屋「博士陰陽師に占はせ給ひしに、散り行く草のお命にて、御緣も桐ヶ谷なれば。」淺茅「鎌倉の松ヶ岡へお入りあつて、かねてのお願ひ。櫻も法の花なれば、花の紐解く法華經に、眞如の月の御方を、お迎へ申して今日の御剃髮。」待乳「御身はあはれ三衣にて、墨染櫻のお姿を、世に流れ行く音羽の瀧。」花形「新清水のお導師にて、紅粉黛の粧ひの、花の盛りの黑髮を。」梅田「おろし給ふはおいとしい。花のふり行く後の世を、お願ひあるは普賢象。」宮戸「法の門出の家櫻、殿御故には浮世をば。」綾瀬「淺葱櫻と思召し、未來を助かるお誓ひは、枯れたる木にも花の咲く。」霧島「觀音さまのこのお庭で、見る花よりもお團子の。」築地「臼でつきぢの石々より、強い男の杵先で。」柏尾「搗いてもらうて夜をこめて、有明櫻伊勢櫻。」七浦「ふだん櫻の好い殿御と、だかれて一重八重櫻。」皆々「花子さまにはその花が、お目に著かねど私どもは。」皆々「眺めに飽かぬぢや、ござりませぬかいなァ。」花子「花物云はねど香にぞ知る、早う染衣の身の願ひ。」七浦「さつても我折れ、いひ號けばつかりで、殿御を御存じないお姬樣ゆゑ、其のやうに御意遊ばしますれども。」築地「ちよつとにても御存じなれば、思ひは築地の島よりは。」柏尾「日本國が夜々の、睦言かごと思ひ出しても、首筋元がぞく〳〵と。」四人「たま

七浦いづれも箱せこ、日傘をさし、扇を持ち出て來る。次に奴隅田平、草履を持ち、石濱官藏、看板羽織にて、茶辨當、醫者藪垣元庵附添ひ、中間大勢挾箱を擔ぎ、合羽籠三荷、紺看板の定紋、侍二人、股立羽織にて大押へ。この行列順よく出て來て、中の開のあゆみを渡り、本花道へかゝる。ずつと跡より猿島惣太、汚き布子の拵へ、一本差しにて、草履大分竹にて擔ぎ出て來る。皆々本舞臺へ來て、關屋、庵崎、牀几へ毛氈を敷き、花子の前、櫻姫牀几にかゝる。皆々竝好く列ぶ。惣太、つか〳〵と行かうとするを、侍せいして、

侍「慮外者、控へぬか。」惣太「モシ〳〵、わしやァお局さまと草履取に用のあるもの。どうか逢はしてくださりませ。」侍「控へをらう。」トきつと云ふ。惣太「へイ、、。」ト恂りして跡へ寄つて居る。侍「お供廻りは、眞珠院の休息所に控へ召され。」皆々「ハア、。」ト行列の人數下座へ入る。岩藤「お二方樣へ申し上げまする。今日はお日柄も好う、空も長閑に春の麗か。その途すがらといひ、清水の花盛り、咲きも殘らず散りもせず、一入のお慰みと存じられまする。」尾上「草木心無しとは申しますれど、時を知つての花盛り、お氣晴らしに御覽遊ばされませう。」ト花子の前、櫻姫、櫻を眺め、花子「清水の千本の櫻みな咲かば。」櫻姫「うへおし人の見も榮えなん。」ト三味線入りの音樂になり、軍次「姫君樣には斯樣な景色を御覧あつて、お歌でも遊ばされませう。拙者なども憚りながら、眺めは盡きませぬやうにござりまする。」花子「牛島軍次の云やる事なれど、眺めある櫻木の、花は散りても根に歸れど、歸

ツカケに、ドロ〳〵、しつぽりした合方。平内、足駄を穿き、悠々と向うへはひる。チョン〳〵道具替り、眞中の杉を引上げ、引落しにして、杉の竝木櫻の大木になる。

本舞臺、三間の間、清水の舞臺、高欄つき喰作り、破風際より内は觀音堂、狐格子、唐戸附きの出入り。奉納の繪馬大分。この内に紅葉傘を掛けたる繪馬、象鼻、組み物總朱塗り極彩色。眞中の石段、中二階まで打拔き、平舞臺、上の方龍神の宮、鳥居、音羽の瀧、三筋本水にて瀧壺へ落つる仕掛け。こゝに枝垂櫻咲き亂れあり。處處に櫻の幹、吊り枝見事に、すべて淺草新清水の體。右のドロ〳〵と雙盤の音にて道具とまる。ト雨窗明るくなる。すぐに三味線入りにぎやかなる行列の鳴物になり、東の揚幕より、中間可助、牛島軍次、對の模樣羽織看板にて、緋のもんぱのゆたん、庵に木瓜の樣に入間と苗字の紋の付きたる挾箱を擔ぎ、二行に出て來る。次に絹羽織の先徒士六人、振つて出て來る。次に、模樣の看板羽織にて緋もんぱ紋付き袋入りの長刀を擔ぎ、その跡より花子のまへ、さゝぎ付きの廣振袖、裲襠衣裳にて誂への金地の扇を持ち、麻裃の侍一人、股立にて、朱の爪折、筒守の付いたる長柄を差掛け、きり禿のお小姓守刀を持ち、次に櫻姫、櫻の模樣、さゝぎ附廣振袖、裲襠衣裳にて、扇を持ち、これも麻裃の侍股立にて、朱の爪折、筒守の付きたる長柄を差しかけ、きり禿のお小姓、守刀を持ち、梅若丸、お小姓にて、三方に蒔繪の御朱印の箱を載せ持ち、腰元四人、定家文庫、莨盆二つ、その跡より岩藤、衣裳襠取にて、日傘をさし、扇を持ち、尾上、衣裳襠取にて、日傘をさし、扇を持ち、その跡より櫻姫の傅闕屋、奥女中淺茅、待乳、都、綾瀬外三人、留め袖。跡より奥女中築地野、霧島、柏尾

なる。すぐに松若、杉の枝を取り、松若「心變ぜぬ堅めのしるし。」ト枝を差出す。この時後へ求馬、菅笠を持ち、窺ひ出でて、求馬「お主の敵。」ト杉の枝を引奪る。松若それなりに、求馬を平内の方へ押しやる。平内引捕へ、杉の枝を取つて、平内「杉の文字は木扁に久し。」松若「まツこのとほり木扁を取れば。」平内「久しく合體。」求馬「うぬ。」ト又かゝるを平内、求馬を取つて投げ、平内「其のしるしには。」松若「この御鏡。」ト御鏡を出す。求馬「それを。」ト又掛る立廻り。平内「都鳥の一巻。」ト出して見せる。平内「慥かに預り。又の再會。」ト兩人懐中する。日覆にて大勢「ハヽヽ。」ト笑ふ聲する。松若「嬉しや魔道の彼の悦び。」トきつと思入。また賴國起き上り、賴國「思へば〳〵。」ト松若に掛るを、立廻りにて賴國の腹へ突つ込み、すぐにぽんと首を打ち落す。平内「常陸之助が首は、しるしの首塚に。」松若「我もこれより變名して、入込む方便の常陸之助。」平内「出來た。」ト求馬心づき、求馬「うぬ。」ト松若へ掛るを引捕へ、松若「我が手の内の擬勢の礫。」トまた求馬を投げやるを、平内取つて投げる。平内「ハテ、天晴な。」松若「またの再會。」ト谺になり、松若思入あつて下座へはひる。平内見送り、平内「ハテ賴もしい、若者ぢやなァ。」求馬「なんぢを討つて主人へ供へよう。」ト平内へ斬り付けるを、立廻りにて、平内「エ、數にや足らぬ働き立て。」求馬「觀念。」ト風の音になり、求馬、平内へ打つてかゝる立廻り。平内、求馬を斬つて捨てる。風の音雨車になる。平内、空を見て笠を取上げ、雨を避ける。これをキ

つて、直に源家を亡ぼさん、首領となれよと敕諚にて、楊柳笛を賜はれば彌の謀叛と心の定め。して、其方は、何人なるや。」平内「さては吉田の松若丸。」ト松若の懐へ手を突つ込むを振り拂ふ。立廻りにて平内は御鏡、松若は一巻を落すを、互に取替へ、取上げて、松若「こりや聞きおよぶ大友の重寶、牛王の御鏡。」平内「疑ひもなき都鳥の一巻。」松若「この御鏡を所持すれば。」平内「平家の殘黨、後藤兵衛盛長。」松若「扨こそ汝も鎌倉一家を。」平内「討ち亡ぼさん豫ての叛逆。」松若「して、過ぎ行く月日の年號は。」平内「承久三年彌生の頃。」松若「某魔風に誘はれしは、承久元年。」平内「すりや、三箇年のその間、世の盛衰とは云ひながら、松若丸を逆心と云ひ立て、北條家の讒言、家臣松井の源吾が惡事にて、少將惟貞横死の上、吉田の家は早滅亡。」ト松若きつとなり、松若「すりや北條家の讒言にて、家は滅亡。猶もこの上、鎌倉一家を討ち亡ぼして。」平内「平家の仇を報いん時節。この盛長と合體なさば。」松若「日頃の本望成就なさんは瞬く内。」ト兩人思入あつて、平内「ハテ心地好やなア。」トこの内頼國心づき、苦しみながら、頼國「エヽ、殘念や口惜しや。手柄始めに其方を討ち取り、惡逆無道の根を絶たんとおもひしに、不覺を取りしか。さては吉田の松若丸も、いよ〳〵叛逆、今某が冥途の道連。」ト松若へ斬り付けるを、松若「小癪な頼國。」ト立廻り、平内「小事は大事、おッ片づけよ。」松若「可哀や命の寐くされ時。」ト立廻りにて頼國の刀を引奪り、見事に斬つて捨てる。頼國またウンと

「こりや聞き及ぶ大友家の重寶、牛王の御鏡、いま手に入るは、我が大望の成就なさん時來れるか、エヽ忝い。」ト御鏡を懐中して冠りし鼎を取り、蠟燭の火にて邊を窺ひ、松若丸を見て、「さるにても、心得ぬは童が氣絶、形といひ、そぼろの樣、樣子ありげなこれなる男子、心を付けて。」ト風の音になり、平内、松若丸の側へ行かうとする。この時、松若丸「ウム。」と息を吹き返す。また凄き合方。平内、手水鉢の柄杓に水を掬ひ、松若の側へ行き、「この水飲んで心をつけよ。」ト松若、平内の持ちたる柄杓に手を掛け、水を飲まうとする。ドロ〳〵にて柄杓の水熱湯になり、燒酎火燃える。松若苦しむ平内驚き、「柄杓のみづの、熱湯に燃ゆる樣子は、ハテ、訝しい。」ト松若邊を見て、松若「して、この所は。」 平内「相州鎌倉、六本杉の天狗谷。」 松若「扨は下界の大日本、相州鎌倉、武將の住ふ在國なるか。」

平内「心が附いたか。」ト松若を介抱せうとして懐へ手を入れ、思はず都鳥の一卷を引出し、 平内「こりやこれ慥かに。」 松若「それを。」ト立廻りにて、松若丸、手早く引ッ奪り、懐中する。平内思入あつて、

平内「ハテ、心得ぬ童が有樣。今この所へ正丑三に時詣。望みある身の我なれば、おことが樣子、包まず語れ。」 松若「すりや某に。」ト三味線入りの谺になり、松若、牛石に腰を掛け、「望みある身とあるからは定めて聞きも及ばれん。四海を望む叛逆人と、疑ひかゝりし某は、吉田の嫡子松若丸、家出をなして本望遂げんと、思ふ折柄魔風に誘はれ、後鳥羽院の靈ましく〳〵て鎌倉一家義時親子に恨みあ

薩摩淨瑠璃「峨々たる巖、靉々たる雲、攀ぢ登る六根の、杉に魔風を誘ひけり。

ト、ドロ〳〵、誂への鳴物になり、粂の平内左衞門、かづらきのやうなる、さばきの鬘にて蠟燭を點したる鼎を冠り、御忌衣仕立ての異形の姿にて、附太刀、足駄を穿き、時詣りの見得にて、鐵釘を持ち、鐵槌をふり上げ、賴國をきつと見て居る。賴國、右の形にて刀に反を打ち、平内左衞門に詰めかけて居る。下の方に松若丸、右の形にて、牛のかたちの石に倚りかゝり氣絶の體。これを一面にせり上げる。鳴物打ちあげる。薄ドロ〳〵、凄き合方。

平内「某粂の平内左衞門と變名して、入間家へ入り込みしも、一度平家の世となさんため。いま鎌倉へ在番の折を窺ひ、毎夜々々の時詣り。この牛石を神と定め、卽ち魔所なる六本杉へ鐵釘を打ち、まだその上に一箇國に一首づゝ、首塚を築き源家調伏、今宵滿願の夜に當つて、妨げといひ、大事を聞いたる汝こそ、今首塚の標とせん。その首洗つて待つて居ろ。」 賴國「ヤア、烏滸がましき平内左衞門、この大友常陸之助が、鎌倉へ降人となつて下向の折柄、窺ひ知つたる平家の殘黨、其方を討取り我が手土産。それに何ぞや某を、首塚の標とせんとは不屆き者、今一刀に。」ト斬つて掛るを平内左衞門、立廻りにて附太刀を拔き、一討ちに斬りつける。賴國肩先の血潮胸へ滴り、ドロ〳〵にて、玉つきの御鏡現はれる。平内左衞門見て、平内「さてこそ所持なす怪しき御鏡。」ト取上げ、きつと見て、

も神祇官、殊に入間家へ養子の身、武將の榮華を見るに羨ましく、一度謀叛を企てて四海を掌握なさんずと、家出をなせしその折柄、叡山颪に誘はれて、何者なるか連れ行くと、思へば暫し放心して、あたりを見れば相模國の高山、或は富士ケ根、豐前の彦山、瞬くうちに日本國中、飛行自在は魔界の術、勿體なくも後鳥羽院、汝をこれへ連れ來りしは、魔道の望み、内裏の寶楊柳笛、魔術を以て取り得たれば、其方に與へて反逆の、囮となして大望成就、楊柳笛を授くると、思へば又も放心して、下界へ落つると思ひしが。」トあたりを見て、「まだ高山の雲中にて、杉の梢に止まりしか。正に下界は大日本。」ト我が著物を見て、「世間の年は早立ちしか、魔道の一日は世界の三年、これ三惡の苦しみならん。何にもせよ、我が念願の時來れり。ハ、ア、面白し〳〵。」トきつと下を見て、「この杉立の根本へ下りて、世の有樣を、ソレ。」ト又大ドロ〳〵、土石の音にて、松若丸舞臺前の雲の中へ飛び下りる。チヨン〳〵にてこの杉の梢の道具を段々とせり上ぐる。これに隨ひ、舞臺前の黑雲の幕、次第々々に引上げ、好き程にこの幕を切つて落す。

本舞臺、三間の間一面に杉の大樹、うしろ黑幕、鎌倉六本杉の體。上の方に新宮奉納の手水鉢、右の鳴物にて道具とまる。ト、ドロ〳〵打切る。

または物怪遮つて、魔風に誘ふ怪有なるか。何にもせよ、心ならざる雲立ちやなア。」ト大ドロ〳〵にて、この黒雲、幕の内へはひる。雨車。向うバタ〳〵にて諫早求馬、旅形、手甲、股引、大小にて、飛脚提灯を持ち出て來て、

求馬「若旦那常陸之助さま。」

賴國「家來諫早求馬、後れたがまゐつたか。」

求馬「只今のはやち風にて後れましたが、俄の風雨に驚きましてござります。」

賴國「殊に雲中に怪しき衣類の、見えたるは心得ぬ。」ト思入あつて、「親人常陸の大掾百連さまには、鎌倉どのへ御敵對にて家滅亡、某先非を悔いて降參の相願ひ、比企の判官どのの取持ちにて相濟み、その下向の途すがら此のあり樣、何はともあれ鎌倉へ急がん求馬、參れ。」ト大拍子になり、賴國、求馬、幕の引付へ入る。又ドロ〳〵、雨車、大石降る音、雨窗暗くなる。

本舞臺、三間の間、眞中杉林の梢、東西は立延びし杉の大樹、何れも本杉皮葉の茂り、舞臺前は黒雲の幕、手摺の樣にして、すべて杉立の梢魔所空中の體。眞中の杉の梢に吉田の松若丸、さらけ、おどろなる稚兒の鬘、振袖、衣裳にて、楊柳笛を啣へ、杉の枝を引執へ、疲れたる體。矢張り大ドロ〳〵、雨車、土石の音にて幕明く。

ト松若丸あたりをきつと見る。風の音、衍の鳴物になり、

松若「吉田の少將惟貞が嫡子と生まれ、幼年ながら禁庭の守護たり。我思ふに、吉田の家を承繼いで

替名

一清水平馬之助清玄	坂東鶴重郎
一石濱官藏	松本秀十郎
一中間可助	市川團兵衛
一牛島軍治 一辻番門平	澤村川藏
一醫者藪坂元庵	坂東吉治郎
一入間の妹姫櫻姫	松本米三郎
一櫻姫の傳關屋	山下萬作
一奥女中淺茅	岩井瀧三郎
一同　都	松本八十八
一同　待乳	岩井瀧治郎
一忍が岡の辻番猿島惣太	岩井瀧治郎
一入間の姊姫花子の前 後に新清水の清玄尼	岩井半四郎
一尾上召仕お初	同
一入間家の中老尾上	市川團之助
一同　綾瀬	岩井龜治郎
一	岩井粂三郎
一夜番人五五八	嵐五知藏
一大友の一法師丸	市村龜三郎
此の外捕手大勢	

第一番目三建目始まりと口上觸れあると、大ドロ〳〵にて、向う正面より誂への黑雲、振袖衣裳、稚兒の形を引攫へたる見得にて、花道の上へ羣り出づる。向うより大友常陸之助頼國、若衆形、著流し手甲、股引、紫の三尺帶、大小、旅形にて、菅笠を持ち、つか〳〵と出て來て花道にとまり、この雲を見てきつと思入。小太鼓の樂になり、

頼國「ハテ心得ぬ。今大友常陸之助頼國が、筑紫の果てより鎌倉へ下向の折柄、俄に吹寄るこの魔風、龍の吟ずる樣は見えねど、黑雲起つて羣立ちし内に、怪しき振袖の閃く樣子は、越路に吹立つ鎌鼬、

隅田川花御所染

狂言作者　鶴屋南北

第一番目　三建目

相州鎌倉六本杉の場
新清水花見の場

役人

一吉田の松若丸
一入間の局岩藤
一奴軍助
　市川團十郎
一奴隅田平　澤村四郎五郎
一新清水の住僧蘸坊　市川門三郎
一奴戸田平　中山門三
一奥女中七浦　嵐新平
一同築地野　坂東善治
一同柏尾　市川栗藏
一同霧島　桐島儀右衞門
一諫早求馬
一櫻姫
　市川米藏
一北條四郎義澄　助高屋金五郎
一大友常陸之助賴國　吾妻藤藏
一奥女中庵崎　同
一吉田の梅若丸　岩井松之助
一条の平内左衞門長盛　實は後藤兵衞盛長　松本幸四郎

隅田川花御所染

鶴屋南北

すな。」伯母、喜助「エ、忝い。」ト思ひ入れ、此の時物置より次郎助窺ひ出で、次郎助「萬次郎、奴を。」ト蒐る。喜助引捉へ貢の方へ投げつける。起き上つて蒐るを貢持つたる刀にて胴斬にする。皆々「あつぱれ見事。」貢「下坂の切味。」喜助「二つ胴の正銘。」貢「お二人様。」トたぢ〱となる、皆々介抱して、皆々「これ心を確かに。」若い衆「お迎へ。」ト下座より若い衆三人、奴にて出る。貢「サアお立ちあられませう。」今日はこれぎりと。

打出し。

油屋おこん
福岡貢

伊勢音頭戀寐刃　終

贋物を渡しをつたな〳〵。それ故に身が切腹、主殺しの大罪人め。」ト取つて放る。喜助「エ、情ない、この岩次が刀が則ち下坂の刀でござりますワイなウ。」貢「ヤ、、なんと。」喜助「申しお前様に預つた下坂の刀を、岩次めが盜み出して、己が刀の身を入れかへ、又彼奴が刀の身は下坂と爲かへ居つた事を、一寸見つけました所で、預けた刀遣せとおつしやつた故、どうも彼奴等がそばで譯は言はれず、取り違へた顏で岩次が刀を渡しました、拵へは岩次が刀、中の身は靑井下坂でござりますワイなう。」伯母、貢「ヤア、。」ト驚く。喜助「其の事を申し上げうと、あとから追つかけましたれど、間違うてお目にかゝらず、後へ戻つて見れば家内の騷動、コリヤ何でも鳥羽の伯母御様へと飛んで參りましたが、今一足遲かつたばつかりで、大事の〳〵御主人樣に御切腹をさせました。不忠者はコ、この下郎めだ、こいつが〳〵。」ト泣く〳〵握り拳にて我が手にて顏をさん〲に叩き、色々悶き泣く。貢こなし有つて突き込みし刀を引き拔き、貢「すりやこれが。」ト屹と見る。奥より左膳、萬次郎を伴れてつかつかと出で、貢が持つたる刀の手を持ち添へ、佶と見て、左膳「刃物は正しく砂流し。」萬次郎「これこそ靑井下坂の。」貢「スリヤ是れが、エ、忝い。」伯母「そんなら御兩所樣。」左膳「歸りし體にもてなし、裏路より忍び入り委細は聞いた。」萬次郎「此の刀を疾うに下坂と知るならば、貢に切腹はさせまい物。」ト左膳、貢が疵を見て、左膳「急所にかゝらぬ此の傷口、養生なさば命に別條よもあるまじ。氣遣ひ致

萬次郎様をあちこち捜す中、ふと見れば腰の物が變りある、南無三寶と立ち歸つて、喜助と萬野を捜せども二人とも行方は知れず。何でも客の腰の物ともしや取り違へはせぬかと、一々吟味する中、これ此の通り、こりやお紺が手管を以て騙り取られた折紙を取り返し、則ち徳島岩次といふは、伯父大學殿へ出入の町人藍玉屋喜多六、又今まで喜多六といふたは誠の徳島岩次、兩人入れ替つて伊勢路に逗留せしも、下坂の刀折紙とも奪ひ取つて、明日は國へ出立の樣子、告げ知らせしはお紺が働き、それも其の狀に委しく認めござります。」ト此の内伯母狀を讀んで恟りの科。「所に萬野めを見つけ、サア最前預けた刀を出せといへども、知らぬと爭論ふ故、是非なく持つたる刀にて打ちすゑる機に、鞘は碎けて只一刀に萬野が最期。それより彼の岩次喜太六兩人ともに腕を斬り落し、眞額きり割り、家内の者はさせじとよけるを狼狽へ、先方から肩先肋指脊中、みなかすり傷ながら夜中の騷動。騷ぐ間に家内を殘らず詮議すれども、口惜しや下坂の在所しれず。仕方つきて表へ、やれ人殺し盜賊と、所の者共立騷ぐを漸う切拔け古市を立ち退く所へ、神領に血をあやす穢れを流す大夕立、烈しき雷も構はばこそ、是れへ參つたは伯母者人、所詮運命つきたる某、申譯には腹かつさばき、死ぬる覺悟でござつたワイなウ。」ト泣く。向うばた〳〵にて喜助走り出で、貢が體を見て、喜助「ヤア貢樣、早まつた事をなされましたなア。」ト貢にとり付き泣く。貢喜助が首筋を取つて、貢「己ようも皆々馴れ合ひ、

貢兩手にて左膳と伯母の裾を引張り、兩人の顔を見て、伯母「出て行きをらう。」ト刀の鞘にて手を拂ひのける。左膳「人外め。」ト蹴飛ばす。獨吟になり伯母暖簾口へ入る。左膳萬次郎思入ありてむかうへ入る。貢跡に科あつて硯箱を取り出し、書遺かき、獨吟一ぱいに書き終ひ、覺悟極めたる科。以前の刀を取り出し、眞中へ坐り拔身を左の腹へ突き立つる、納戸より伯母走り出で貢に取り付き、伯母「ヤア貢腹切りやつたか。其方に凶事をさせまい爲、大小を取り上げて勘當したも、まこと色に耽る所存があらば、勘當受けたを幸ひに、立ち退くであらうと思ひの外、此の刀物は何處に有つたぞ、エ、情ない事して給つたナウ。」ト取りつく。貢科あつて、貢「伯母者人、大切な下坂の刀、萬次郎樣へお渡し申さうと思うて、二見の知音に行たれば、萬次郎樣は折紙の詮議にお出でなされお目にかゝらず。大方古市の油屋へと此の四五日が間、往て見ても〳〵間違うて跡へんばかり。漸う昨夜油屋へお出でなさるゝ事聞いたに依つて待ち合はす內、仲居の萬野といふ女、郭の慣ひなれば腰の物を預らうといふ。大切な下坂の刀ゆゑ預けまいといへば、歸れといふ。是非萬次郎樣を待ち合はさねばならず、所へ料理人の喜助が出て預らうといふ。此の者は親人の家來筋ゆゑ預けおいた所に、彼の萬野め、阿波の客に賴まれ、お紺と貢が手を斷らせ身請をせんと、お鹿といふ女郎と馴れ合ひ、この貢が金子を騙つたと無體をいひかけ、其の事よりお紺と緣を斷るやら、腹立に預けた刀を遣せと引手繰つてぼつこみ、

いふ事で其方ほどの人が、あの大事の刀を奪られた事ぢや。サアちやつと譯を云うてたも、譯はどうぢやいナウ。」ト貢は俯首いてぢつとこなし。左膳「ムウ斯程まで尋ぬるに一言の言分せぬは、扨は噂に聞き及ぶ古市の遊女に性根を奪はれ、茶屋狂ひの金子に手支へ、大切な刀を賣り拂うたな。」貢「イヤ全く左樣では。」左膳「左樣でなくば刀を出せ。」貢「サアそれは。」左膳「出さねば汝が放埒ゆゑ、なくしたに相違ない、見下げはてた不屆者。適れ事を爲損ずまじき者と思ひ、大切の儀を申し付けたは某が一生の不覺、ハテ是非に及ばぬ。」伯母「藤浪樣が今の樣に仰しやつても、言譯をしやらぬからは、そんなら愈遊所の拂ひに。」ト貢が胸倉をとつて、「エ、其方は見下げはてた人ぢやなう。兼々人の噂にも、古市へ通ふのおやま狂ひするのと聞いても俺は聞き流し、若い中は誰しもありうちと、何を聞いても知らぬ顏。よもや其の樣な大膽な事はあるまいと思ひの外、エ、マア淺ましい心ぢやナウ。」ト突き放し、貢いろ／＼科あつて親の刀に手をかける。左膳これを止めて、左膳「刀で切腹とは武士の行義、不忠不義の身でのぶとい奴め。」ト引つたくる。貢こなし有つて又差副にて死なうとする。伯母すぐに差副を引つたくり、伯母「この差副も親の魂、穢すことはマアならぬ。」ト貢いろ／＼口惜しきこなしにて泣く。「不忠者の貢、萬次郎さまへ申譯、伯母甥の緣斷つた。」ト件の大小を抱へズツト起ち、左膳「某とても主從でない。」ト萬次郎を引立て門口の方へ行く。伯母「御兩所樣。」左膳「さらばだ。」ト

其の下坂は。」左膳「どう致した。」萬次郎「コレあの折紙と一緒にして國へ歸にたいワイの。」貢「サアその。」トうじ〱いふ。伯母そばからあせるこなし。伯母「これ〱貢、今其方がいやるには、下坂の刀は先だつてから萬次郎さまへお渡し申しておきやつたぢやないか。」萬次郎「イヤまだわしや受取らぬ。」伯母「エ、。」ト左膳思入あつて貢がそばへ寄つて、左膳「貢、下坂の刀はド、どう致した。今聞けば萬次郎へ渡しおいたと、何とやら紛らはしい。下坂は何と致した。」貢「サア其の刀は。」伯母「どうしたぞいやい。」貢「サア。」萬次郎「早う出してたもひなウ。」貢「サア。」左膳「出さぬか。」貢「サア。」伯母「どうしやつた。」萬次郎「出して給ひの。」左膳「なぜ出さぬ。」皆々「サア〱〱。」ト三方よりとり巻き、左膳「又候や奪ひ取られたか。」トきつといふ。貢三人の顏見てこなし有り。貢「ハア、。」ト俯首く。三人顏見合はせ。三人「ホイ。」ト當惑。左膳貢を引付け、左膳「爰な狼狽者めが、騙り取られし折紙を取り返しても、肝心の下坂なくては役に立たうか。阿波淡路兩國の騷動、殿の瑕瑾、萬次郎は切腹といふ所へ氣か注かぬか。女ながらそれなる伯母が、古主の爲といひ樣々と心勞致し買ひ求めしと聞き及ぶ、女すら古主を大切に思ふ志。それに一旦請取りし刀、ド、どういふ仔細で奪ひ取られた、サア眞直にいへ、サアどうだ〱。」と突き放す。伯母貢に詰めかけ、伯母「今あなたの被仰る通り、國の騷動萬次郎樣のお身の上、それ知らぬ其方でもない。伯母が苦勞をして買ひ求めた事は是非がないが、どう

たにて左膳萬次郎に案内させ出て、門口へ入る。萬次郎「ヤア貢、爰に居やるか。」貢「萬次郎樣、左膳樣。」左膳「貢さて〳〵出來した〳〵。」ト兩人上へ通る。此の時表の物置より次郎助そつと出で、戸口に立聞きする。「夜前古市に於ての樣子、委細聞き屆けた。よくも德島岩次、藍玉屋喜多六、兩人共に討つて捨てた。併し今一人次郎助といふ奴、逃げ失せしとの事。奴等三人伯父大學がまはし者、一人にても國へ歸り註進させては、家老今田九郎左衞門の忠誠も水の泡。さるに依つて次郎助めは身が家來に申しつけ、見つけ次第に討ち放す手配。」ト次郎助聞いてぎよつとして物置へ逃げ込む。萬次郎「コレ貢、下坂の刀がそなたの手にある樣子、お岸に聞いたに依つて、藤浪樣と御同道まうしたワイの。」左膳「下坂の義につき心勞した伯母とは汝であらう。いまだ對面はせねども某は藤浪左膳。女ながら古主へ忠義を立つる志、過分々々。」伯母「これはマア有り難い御意に預りましてござります、これといふも貢、其方の忠義ゆゑ、オ、出來しやつた〳〵。」左膳「イヤモウ國へ對して大功ある福岡貢、萬次郎が爲には氏神も同然。貢が事は仇おろそかに思はぬがよいぞよ、貢オ、大儀々々。」ト扇にて扇ぎ立つる。貢術なきこなし。「シテ岩次を手にかけ取り返した折紙は。」貢「則ちこれが折紙でござります。」ト左膳取つて見て、左膳「なる程正眞の折紙、シテ下坂の刀は。」貢「サア其の刀は。」左膳「其の刀は其方が所持致して居るではないか。」貢「サ其の刀は。」萬次郎「コレちやつと出して給いなう。」貢「サ

食べかねて、お汁をかけた一膳限り。科人の牢舍の時、缺椀に一杯限り、其のこゝろで有らうがの。サァどういふ譯で人を殺した、樣子をいうてたも、其の樣子に依つて助かる術も有らう。何の樣子も云はず此の儘爰を出て、切腹する覺悟と見た故呼び止めた。貢、伯母に隱して死なうとは、そりや聞えぬ胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢやワイなウ。」ト泣く。貢打明けて云はうか、どうせうかと思案のこなし有つて胸をするゐたる體にて、貢「御尤もぢや、なる程委細を打明けて申しませぬは拙者が過り、如何にも人を害めましたが、何も氣遣ひはござりませぬ。其の樣子と申しますは先だつて萬次郎樣より下坂の折紙、騙り取つたる盜賊共が、夜前古市の油屋と申す遊所に居る事存じ、難なく折紙を取り返し、手向ひ致せし故殘らず斬殺し、卽ち取り返したる折紙これに御座ります。」ト懷より出す。伯母「ム、そんなら此の折紙を騙り取つた者共を切りやつたのか。オ、出來した〳〵、それなれば幾人斬つても大事ない。折紙さへ手に入れば其方に渡して置いた下坂に添へ、國へ持つていきやると、萬次郎樣は御歸參、其方も元の通り親の家名を引興すといふもの。そんならいよ〳〵下坂の刀は萬次郎樣へ御渡し申しておきやつたの。」貢「左樣でござります。」伯母「そんなら一時も早う此の折紙を持つて、萬次郎樣と一緒にお國へ持參しや。ア、嬉しやの、さういふ事とは知らず、もしやと思うて大抵案じた事かいなウ。」貢「左樣ならば直樣出立つかまつりませう。」伯母「大儀ながら然うしや〳〵。」ト向うばたば

ト飯椀を取つて喰ひかゝる、こなし有つて汁をかけ、がさ〳〵とかき込む。伯母「其の様に急いて食べるは大きな毒ぢや、靜かに食べや。」トいふ内貢喰ひ終ひ、貢「御馳走で御座りました、モウよろしうござります。」伯母「もそつと食べやいなウ。」貢「イヤ心急きに御座りますれば、モウ是れでよろしう御座ります。時に伯母者人に御無心がござります、この親人の差料は何卒拙者に暫くお貸しなされて下されませ。」伯母「オヽ改まつた事を云やる、親の物は其方の物、差して行きやいなウ。」貢「左様ならば申し請けます、エヽ忝い。最早萬次郎さまもお待ちかね、拙者はお暇。」伯母「そんならモウ行きやるか。」貢「伯母者人、おさらばで御座ります。」ト刀を差し表へ行かうとする。伯母こなし有つて、伯母「貢待ちや。」貢「イヤ心がせきますれば。」トまた行かうとする。伯母「それでモウいふ事はないか、死んでふたゝび物は言はれぬぞや。」トきつといふ。貢ぎつくりと立ちとまる。貢「エヽ。」伯母「死ぬるなら何故潔く伯母にも暇乞しては行かぬぞ。」ト貢つか〳〵ともどり、貢「なんと言はつしやります。」伯母「其方は人を殺さうがの。」ト貢ぎよつとして、貢「なんと。」伯母「知つたはコレ此の著がへ。」ト以前の袷を出し、「袖にも裾にも血潮のしたゝり。」ト貢ぎつくり。「なんと人を殺しやらうがの。」ト貢ホイとうつむく。伯母思入ありて貢が胸倉を取つて、「コレ貢、身にも命にも代へて大切に思ふ此の伯母に、なぜ物を隱してたもるぞいの。夜道を來るに丸腰といひ、著がへはびつたり血だらけ、据ゑた御飯を

著更へて帶をしめる。伯母貢が脱いだ袷を取り上げる拍子に、血の著きあるを見て吃驚の科あつて、貢に見せぬ樣に疊み片側へよせて、「オ、それで可い〳〵、」ても扨も親子とて能う似合うた事ワイの。それにつきそなたに見せる物がある、待ちや〳〵。」ト上の障子家臺をあける。内に毛氈を布き、此の上に刀掛に大小かけ、其の前に本膳燒物つけ供へ有つて、「コレ爰に飾つてあるは、そなたの父御の差料。昨日は五月四日、祖父樣といひ其方の二親の祥月命日の精進日、今日は又武家方に祝ふ端午の節句。ひとりの下女は親の許へ二三日私用あつていぬる。せめて心ばかりの祝ひ日と思うて、七時起きして私が手づから御膳の拵へ、所がらとて生鰹の燒物、この如く大小を飾り御膳をすゑたも、其方の武運、勝つて鰹の首途よし。夜の内におぢやつたれば朝飯もまだで有らう、祝うて此の膳に坐つて行きや、給仕は伯母がしませう。サア〳〵早う〳〵。」ト右の膳を取つて貢にすゑる。貢「左樣なれば私が自由に仕ります、モウお構ひ下されますな。」 伯母「イヤ大事ない、遠慮しやんな。お汁が溫うなつたで有らう、盛りかへて來て遣りませう。サアちやつと食べかけやいなウ、どれ〳〵。」ト汁椀を持つて入る。貢跡見送り、貢「何にも知らずと。伯母者人御赦されて下されませ。」トちやつと手を合はせ拜み、「親人のお差料とは幸ひ〳〵。」ト飾りある大小を取つて差副をさし、刀の傍におき膳にすわる。伯母丸盆に汁椀をのせ持ち出で、伯母「サア〳〵お汁も煖まつた、ちやつと食べや。」貢「ハイ左樣ならば。」

たが、夜路をおぢやつたは何ぞ過急な事で有らう、氣遣ひな事ぢやないかや。」貢「イエ／＼何にも氣遣ひな儀ではござりませぬ。」伯母「それに又夜の中におぢやつた樣子は。」ト貢ぎつくり塞り、こなし有つて、貢「イヤお案じなさるゝ事ではござりませぬ。めでたい事でござります。」伯母「何ぢや、めでたい事ぢや。」貢「左樣でござります。」伯母「ヤレ／＼嬉しや。今日は五月の節句、朝早うからめでたい事とは嬉しい。さうしてめでたい事とは何のやうな事ぢやぞ、ちやつと聞かしてたも／＼。」貢「サアその慶たいとまうすは彼の何、オ、それ、先日あなたより請取りました下坂の刀、萬次郎樣のお供仕りますわ。それ故一寸お暇乞に參りましてござります。」伯母「それは誠にめでたいが貢や、見れば其方の衣服はびつたり濡れて有る。さつきの夕立に雨具の用意もなしに滅相な、其の樣な物著てるはきつい毒ぢや、幸ひ／＼。」と簞笥へかゝる。貢件の拔身を見られうかと心遣ひのこなし。伯母引出より貢が紋附の單物、帶ともに出して、「コレ貢、この單物は其方の父御の定紋、そなたへ送つた記念の中で、せめて此の單物一つは私が方にとゞめ置いたは、朝夕兄樣のお顏を見る意。紋も幸ひ同じ事、サア是れを著更へてめでたう萬次郎樣のお供しや。ドレ／＼私が著せて遣りませう。」貢「それはお慮外、左樣ならばお借り申します。」伯母「オ、借るの貸すのと、親の物は子の物ぢやないかいナウ。」トいひ／＼著せかける。貢は帶を解く。此の時懷より折紙とお紺が狀おちるをちやつと隱し、

本舞臺三間の間二重舞臺、上の方折廻り障子家體、向う押入赤壁、納戸口橋がゝり、塗垂入口あり物置の體、いつもの所に門口、舞臺先ひら井戸、二重よき所に簞笥、右大雷大白雨にて幕開く。ト所々にて鷄の聲、向うより次郎助棧俵をかづき走り出で。花道よき所へ來る、夕立やみ俵を脫ぎ、

次郎助「ヤレ／＼恐ろしい夕立であつた。雷の烈しさ、ヤレ恐ろしや／＼。シタガそれより恐ろしいは貢の跡から追つかけてうせる樣に思はれて、滅多無性に逃げて來たが、爰は何處ぢや知らぬ。ア、任よ何處でも大事ない、夜通しに逃げたに依つて、からだが斑枝花の樣になつた。何處へなりと入つて少との間寐たい物ぢや。」トいひ／＼本舞臺へ來て物置を見つけ、「可いワ、こいつ物置さうな。暫く爰へ入つてぐつたりと遣らかさう、よし／＼。」ト戶をあけ入る。合方本釣鐘にて曉六つ鳴る、所々にて鷄の聲する。向うばた／＼にて貢右の形にて拔刀ひつさげ走り出で、本舞臺門口へ來て立ち止り、こなし有つて拔身を下に置き、草井戸の釣瓶を取り水を汲み上げ、刀の血を洗ひ、腕に著いてある血潮を洗ひ落し、頰かむりをしたる汗手拭にて刀を洗ひ、右拔身を拭き腰にさし、門口を密と開け內へ入り。二重舞臺へ上り、件の拔身を隱さうとする中、納戸より、伯母「誰ぢや／＼。」ト是れにて貢、そこにある簞笥の引出へ拔身をいれる、所へ伯母、「誰ぢや／＼。」と云ひ／＼ずつと出る。貢手早に簞笥をしめて伯母と顏見合はせ、貢「伯母者人。」伯母「貢、おぢやつたか。」貢「ハイ／＼。」伯母「今やつと夜が明け

返し　此の道具引く

奥庭の體、萩垣所々に石燈籠、植込手水鉢、卯の花ざかりの體、向うは美麗なる障子を閉てし緣先の體、此の道具止る。トお鹿ひつしごきの女郎にて、客袴を穿いたる侍にて、手を引き合ひ逃げ出で、捨白にてうろうろしてゐる、始終この内斬つた〳〵の掛聲、竹五郎裸體にて棒を振つて逃げて出る、跡より貢血刀を提げ追つかけ出る。

お鹿「ヤア貢樣か。」ト聲立つるを眞額を斬りわる、お鹿倒れる。客「ありや斬つた〳〵。」ト云ふを振返つて又斬る、客仕掛にて空竹破になる。竹五郎打つてかゝるを、是れも一刀にする。竹五郎胴切になる。貢あたりの手水鉢の水を汲み上げ息をつく。此の時お紺お岸逃げ出る、貢振返つて刀を構へる。二人こは〴〵顏を見て、お紺、お岸「ヤア貢樣か。」貢「お紺、今一人はお岸か。」二人「アイこりやマアどうせうぞいなア。」貢「下坂の刀を失うたれば言譯がない、モウ敗れかぶれ。怪我すれば悪い退いてゐろ。」二人「ぢやというて。」トよき時分、岩次慄ひながら窺ひゐて、岩次「うぬ。」ト後より抱き止める。立廻つて見事に斬りつける、岩次血紅にて顏を切られて見事に倒れる。お紺お岸貢に縋る、貢二人が顏を見てきつと思入、よろしく拍子。（幕）。幕のうち大雷雨車の音、これにてつなぎ早幕にて引つかへす。

貢刀を探しに奥へ行かうとする。次郎助萬野が死骸に躓き愕りして、次郎助「ヤア斬られて居るワ。」ト聲を立てる、貢振返つて斬り付ける。次郎助上の二階へ逃げ、貢羽織の裾を捕へ引下さうとする。次郎助階下にしがみつく、貢後よりあびせる。仕掛にて羽織ちぎれて脊中を斬られ、見事に落ちてはふ〳〵傷をかゝへて、障子を明けて向うへ逃げて入る。始終この内捨鉦、貢血刀を提げ障子を明けて、一間より客の刀を掛けし刀掛を取り出し、舞臺の行燈にて一々改める事あつて、然うでないといふ思入にて二階へ蒐る。岩次窺ひ居て貢を後抱きにする。立廻つて岩次が顋を斬り落す、岩次顋を抑へ倒れる。此の内二階より喜多六、下の樣子を見てぶる〳〵震へてゐる、貢二階へ上る。喜多六夜著を被つて、喜多六「あゝ助けてくれ〳〵。」ト震へてゐる。貢夜著を引取る。喜多六聲立てながら顏を出す。貢首を打ち落す、仕掛にて喜多六の首おちる。此の内始終川崎音頭の鳴物。貢二階より下りて來る。三階若い衆殘らず客の仕出しにて、狼狽へて向うへ逃げる。貢二階より奥の方へ往かうとする。佐助夜著を被て逃げ出で、貢を見て隱れうとする。貢引捉へる。佐助聲立てながら顏を出すを、貢見事に首を打ち落す。此の時釘貫の股引襦袢の男、棒を持ち出で貢に打つて蒐る。立廻つて此の棒を打ち落す。男逃げて鴨居へ手をかけ飛び上るを足を掴まへ、此の足を見事に斬り落し、血刀を振つて奥へ入る。やはり川崎音頭にてチョン〳〵。

替つて居たのに候。御心得の爲にもなり候はんと存じ申し上げ候。眞實縁を切る心にては御座なく候まゝ、必ず御心變らせ下さるまじく願ひ上げ參らせ候。ム、すりや彼奴等が身の上を聞いて報ざう爲、まつた此の折紙を取りかへさう許りにすげなう云うたか。お紺、さうとは知らず恨んだは俺が過り耐へてくれ、汝が志過分なぞよ。マア折紙は手に入つた。是れからは下坂の詮議、腹立紛れ氣のせく儘、そこへつけ込んで外の刀を渡し居つたは、大方萬野めが所業と極まつた。」ト貢こなし。此の時向うばた〳〵にて南の口より萬野走り出で内へ入る。萬野「ヤア此の刀を。」ト貢が刀へ手をかけるを止め、貢「萬野此方の腰の物も返さず、よう贋物を渡したなア。サア身が刀を出せ〳〵。」萬野「オオ何おいひぢやいな、お前の刀は喜助があづかつたぢやないかいな。其の刀はお客樣のぢや、此方へおこさんせ。」ト取りに寬る。兩方刀を引つぱり、貢「俺が刀から出しをれやい。」萬野「知らぬワイな。」貢「知らぬとはの太い奴の。」ト持つたる刀の鞘ぐち叩く。「出しをれ〳〵出しをらぬか。」ト散々に叩き据ゑる。仕掛にて鞘われて思はず萬野が脊中に傷の付きたる思入、萬野脊中を撫でて見て惘りして、萬野「ヤァ斬つた〳〵〳〵貢が斬つたワイな。」ト貢傷口を見て、貢「エ、これおもはぬ大怪我、怪我ぢやワイの怪我ぢやワイの。」ト思入。萬野「斬つた〳〵。」トこれにて貢性根をすゑ、ト萬野を一刀きる、萬野腕を切り落されア、と倒れる。此の時次郎助奥より羽織を被て、うか〳〵と出て來る。

ト方々を呼びわめき、「ムウ此の様に呼んでも二人ながら出て來ぬは。扨は二人共、件の奴等と一つになり、此方の心の急くまゝに、贋物を摑まし居つたのぢやワイ。」ト此のうちお紺二階の障子を明け、お紺「貢さん、ござんしたか。」貢「お紺。」ト下よりきつと見上げる。お紺「私やどう有つても侍は厭でござんす、書いておいた此の退狀、コレ取つておいて下さんせ。」ト卷紙の中へ折紙を入れて上より放る。貢とり上げ折紙を見て悔りし、貢「すりやこの。」トお紺びつしやり障子をさす。貢行燈の燈にて篤と見て、「コリヤ先だつて騙り取られた誠の折紙、エ、忝い。」ト懐へ入れ右の狀をとり上げ、「一人目繁く候故、退狀と見せ認め參らせ候。先程はお鹿づらと譯ある樣に申し、其の上金まで欺し取りなされ候樣申し候へども、更々お前に覺えのない事は私が能う存じ居り參らせ候。皆これは萬野とお鹿と馴れ合ひ、お前に惚れたといふも金を遣つたといふも皆謔にて、誠の事は阿波の客に賴まれ、お前に無實をいひかけ、顏の立たぬ樣にして、私に愛想を盡かさせ、お前と手を斷らせ、國へ伴れて歸なうといふたくみにて御座候。その事推量致し候故、態とお鹿づらが事を云ひ募り、其の上俄に侍は忌ぢやと難題をいひかけ、わざと緣を斷つた樣に見せかけ候故、阿波の客も心をゆるし、日外萬次郎樣の騙られなされた德島岩次といふ侍は謔にて、誠は藍玉屋喜多六といふ者にて候。又喜多六と申す者は德島岩次と申す侍にて、皆國元の伯父御の廻し者とやら、態と町人と侍が入れ

刀を打ちつける。萬野「大事ござんせぬ、これ喜助どん〳〵。」喜助「オイ〳〵。」ト出る。萬野「コレ此方も大概な事をしたが可いワイの。」喜助「何ぢやいの。」萬野「コレ岩次さんの刀と貢の刀と取違へて渡したぞや。」喜助「エ。」萬野「行てとり返してごんせ〳〵。」喜助「ようござります、私が一走り行てとり返して參りませう。」岩次「コリャ此の貢が刀を持ち行き、汝が麁相で御座るというて、此方の刀を取りかへて戻りをらう。」喜助「ハイ〳〵畏まりました。」皆々「早う〳〵。」喜助「オットまかしよとな。」ト刀をさし尻を褰げ、花道の眞中まで行き舞臺を見返り、皆々の顔を見て舌を出し、につこり笑ひ、癡呆めといふ科にて向うへ入る。萬野おもひ出したる科にて、萬野「アヽ、鈍な事をしたワイなア〳〵。」三人「何ぢや〳〵。」萬野「よう思へばあの喜助はモト貢が家來筋と、ちらりと聞いたワイなア。」三人「ヤア。」萬野「下坂の刀と知つて、取違へた顔で貢に渡しくさつたワイの。」三人「ヤア、。」萬野「よい〳〵、コリャわしが行てとり返して參じませう。」岩次「如何さま、此方の顏出しては後日の邪魔。」喜多六「追つかけうにも足も腰もふぬけ玉の樣になつた。」萬野「お前方は思ふ色樣を抱いて寢て待つて居なさんせ。」岩次「そんなら喜多六。」喜多六「我らは先へ御免々々。」次郎助「萬野、一刻も早う〳〵。」萬野「合點でござんす。」ト萬野は花道より中の間の歩道を南の口へ入る。喜多六は二階へ、岩次次郎助奥へ入る。是れより川崎音頭になり、向うより貢はしり出で、つか〳〵と内へ入り、貢「喜助、萬野、萬野々々。」

なるまい。」喜多六「オットそこはぬからぬ、吾等が味ようして措いた。」岩次、次郎「味よう出來たか／＼。」
喜多六「文殊が智慧をふるうた／＼。」兩人「出來た／＼。」ト萬野おくより大小を取つて來て、萬野「コレしてやつた／＼。」三人「何ぢや／＼。」萬野「先刻にお紺樣と貢と口說の跡が喧嘩になり、何が去ぬるというて預けた腰の物を遣せといふ所へ、喜助が持つて出て渡したは岩次樣のお刀。貢は狼狽へ眼で、岩次樣の刀を差いてツィと去にをつたワイな。跡に殘つたはコレ此の刀、こりや貢が差いて居た下坂の刀、何と手もぬらさず此方へせしめたは、めでたい事ぢや御座んせぬか。」ト是れを聞いて喜多六大きに仰天のこなし。岩次次郎助悅び、岩次刀を取り見て、岩次「なる程コリヤ身共が刀とは相違、スリヤ貢奴が取違へ、此方の刀を差いて靑井下坂を置いてうせたか。」次郎助「折紙といひ下坂まで手に入るといふは。」岩次「これも萬野がはたらき。」萬野「偉からうがな。」岩次、次郎「偉いワ／＼。」萬野「祝うて一つ拍たうかな。」三人「ヤアしやん／＼／＼。」ト是れにて喜多六皆々突き退けて、喜多六「エ、違うたワイやい／＼。」トもがく。三人「何が違うた。」喜太六「先刻にお前方の知らぬ間に、貢奴があづけた下坂の刀と此方の刀と二腰とも密と盜んで出て、丁度寸尺が合うたを幸ひ、貢が下坂の刀の身を此方の鞘へはめて置いたれば、其の刀の身は矢張此方ので、貢奴が取違へて差して去にをつたが誠の下坂ぢや。」
三人「ヤア、。」ト愕り。喜多六「折角ものした物を又元へ戻してのけた。」岩次「エ、忌々しい。」ト持つたる

かしやんせ、ようござんす。其の樣にお前の心にかけごが有りや、私が何程誠をつくしても何の役に立たぬ事、エ、辛氣な事では有るワイなア。」ト腹の立つこなし。此の内喜多六眞面目になる。岩次次郎助氣の毒がり、岩次「これさ喜多六、お紺が彼の樣に誠をつくすに、なぜ物を隱すぞい。其の懷中な袱紗包を出して見せて遣りやいの。」次郎助「心の變らぬうち、ちやつと出した〳〵。」喜多六「エ、二人ながら喧しい、コレ此の懷な袱紗包はかの折紙。」岩次、次郎「ヤア。」喜多六「ヤサア折ナア紙、をり〳〵かみ〳〵樣のおまもりぢやワイの。」岩次「オ、それなれば迂闊に出されぬも理かい。」お紺「よいワイなア、見せられぬ物を見ようといふは私が無理ぢや。喜多さん、わたしや請出される事は否でござんす、女房に成りやせぬぞえ、變改でござんす程に、さう思うて下さんせ。こんな所にゐると一倍腹が立つ、こちや二階へ往てドリヤ寢ようか。」ト行かうとする。喜多六抱き止め、喜多六「コリヤ待つてくれ、テモ扨も女郎に似合はぬ悋氣深い奴。大事の物なれども其方の疑ひばらし、袱紗ぐち渡す程に、爰で披けると若し萬一外の者が見ては大事ぢや、二階へ持つて往て、密と明けて見やいの。」ト渡す。お紺「そんなら二階へ往て。」喜多六「あけて見て疑ひはらしや。」お紺「待つてゐるぞえ。」喜多六「早う往きや。」お紺「アイ。」ト唄になり右の袱紗を持ち二階へ上る。岩次「時に喜多六、アノ折紙が有つても肝心の下坂がなくては明日の出立もならぬ。今夜中に貢奴を害して、下坂を奪ひ取る手短な思案をせずば

を片づけて、汝を女房にせうと思うた願ひが叶うて、此の樣に有り難い事はないワイ〳〵」ト お紺に抱き付く。お紺「頓とそれで樣子が知れたワイなア、そんなら愈私を國へ連れていんで、女房に持つて下さんすかえ。」岩次「そりや喜多六、お紺が方から女房に持つてくれるかと詞詰だぞよ。」次郎助「今までぴん〳〵したとは引替へて、お紺が方からせきが來たぞや〳〵。」喜多六「コリヤモウどうも耐へられぬワイやい。」ト お紺を抱きしめて、「岩次樣、この悦びに金はいくらでも續けます、お前もお岸を請出さつしやりませ。」岩次「そりや過分な。是れまで段々世話になる其方故、身共も遠慮致し居つた、さうして給れば身が戀も叶ふといふものだ。」お紺「イヤア喜多六さんえ。」喜多六「ヤア〳〵。」お紺「わたしやお前にまだ問ひたい事がござんすワイなア。」喜多六「何なりと問うたり〳〵。」お紺「外のことでも御座んせぬが、おまへの懷に入れて大事さうにして居やしやんす袱紗包、アリヤマア何でござんすえ。」喜多六「ヤ。あれか。」お紺「何やら書いた物さうな、一寸私に見せて下さんせぬかえ。」喜多六「イヤありや女子の見る物ぢやない。オ、さうぢや金毘羅樣の守ぢやワイの。」お紺「ても甚い謔々。」喜多六「何でなんで。」お紺「あの樣に肌身はなさず、大事にかけてゐやしやんすからは、アリヤどうでも色樣の起請とわしや思ふワイなア。」喜多六「ハテ滅相な。」お紺「さうでなか一寸見せて下さんせ。」喜多六「デモこれはどうも。」お紺「見せさしやんせにや、矢張起請ぢやな。」喜多六「なんのマア。」お紺「見せとむ無かお

り喜多六は町人。」喜多六「藍玉屋の女房にお紺とはきつしり鉼つた。」岩次「エ、爰な畜生め。」お紺「マアマア待つておくれいな、わたしや頓と合點が行かぬワイなア。藍玉屋喜多六様といふはお前ぢやないかいなア。」岩次「されば藍玉屋喜多六と、町人に成つてゐたには深い様子の有る事さ。」お紺「ム、そんなら阿波の御家中徳島岩次というたは。」喜多六「誠はお出入の町人、藍玉尾喜多六ぢや。」お紺「何の爲に其の様に、入れ替つてゐやしやんしたのぢやえ。」喜多六「これには段々謂因緣、藍玉屋喜多六が岩次様と入れ替つて、此の伊勢に逗留する其の譯は、アノ貢が古主今田萬次郎、殿の仰せを受けて青井下坂の刀を求めて此の伊勢へ出立、又俺們は伯父御大學様に賴まれ、其の下坂の刀を横合から引奪り、國へ歸んで伯父御の手から武將へ差上げさつしやると、大學様は上首尾殿は不首尾、其の過りで萬次郎めはレコさ、併し伊勢の支配藤浪は萬次郎とは緣者、もし氣どられては伯父御のお身の上、そこで阿波淡路と隔て、まだ萬次郎が岩次様を碌々に見知らぬを幸ひ、道中から入れ替つて此の喜多六が岩次様になり果せ、まんまと伊勢路へ入り込んだ所に、萬次郎が身の上を世話する貢め、此奴ぐるめに仕舞うてくれうと様々と手を廻し、大方十が九つ二人ながら命はないワ。時にアノ貢めを此の様に、意恨を含む元はといへばお紺汝ぢやて。逗留の中フト此の油屋へ來て、汝を見るとえらう惚れたに依つて、とつくりと萬野に聞けば、汝と深い馴染ぢやげな。それはモウ〳〵けたいが惡うて、うぬ貢め

紺出來した、よう貢を退いてくれたなァ。」お紺「そんなら今の樣子を。」岩次「寐た顏で殘らず聞いた。」喜多六「貢と今の詞づめ。」次郎助「えらいものぢや。」岩次「貢とさへ手を斷つたら、身共が請出し國元へ伴れ歸り、コリヤ德島岩次樣といふお侍樣の奧樣だ、悅べ〳〵。」お紺「オ、辛氣、今いうたをなんと聞かしやんしたぞいな。」岩次「ナニ聞いたとは。」お紺「わしやァノ侍は大嫌ひでござんすワイなァ。」岩次「サアそれは貢と手を斷るための僞り事ではないか。」お紺「イ、エ。」岩次「そんなら眞實侍は嫌ひか。」お紺「アイほんまに侍は嫌ひでござんす、申しお前も私を請出して女房にせうと思うてなら、侍を罷めにして。」岩次「ハテ變つた物好、お紺スリヤ此の岩次が武士をすてて町人にならば、愈〳〵そちや女房になるぢやまで。」お紺「町人にならしやんしたら女房になるワイなァ。」岩次「しかとさうぢやぞよ。」お紺「オ、くど。」ト岩次喜多六顏見合はせ、喜多六實は岩次「喜多六戀が叶うてさぞ滿足に有らうなァ。」岩次實は喜多六「岩次さま、お紺がァノ心底を見ては、コリヤモウ化の皮を顯はさねばなりませぬ。」岩次「オ、町人ならば女夫にならうとは、よい壺へ持ち込んだ汝が幸運。身共が指圖の通りよく岩次になり果せた、出來した〳〵。」喜多六「此の褒美には國へ歸りましたら藍玉を買ひ込んで、ずつしりと儲けます。このお願ひお前宜しう賴み上げます。」岩次「氣遣ひしやるな、伯父御大學殿は身共次第、其の願ひは聞き逹けて遣はさう。」喜多六「エ、有りがたう御座ります。」岩次「お紺、汝が望みの通

ざんす。ナァ岩次樣、さうぢやないかいなァ、これ寐た顔せずと起きいなァ。」ト岩次に凭れかゝつてこなし有り。貢これを見て、貢「可いワ、汝が侍きらひなら俺も町人は嫌ひぢや。忌な侍に今まで能う附合うてくれた、忝い、禮はゆるりと言はう。」トずつと立つ。お紺「そんならいよ〳〵是れ限りでござんすぞえ。」貢「念には及ばぬ勝手にしをれ。」ト紺が傍へ寄らうとする。萬野とめ、萬野「これ大事のお客の附いたお紺樣、指でもさして貰ひますまい、こなたの樣な無法物はモウ客にはせぬ、きりきり去んで貰ひませうぞ。」貢「オ、いぬる、假令居いというても爰にはゐぬ、先刻に預けた腰の物を遣せ。」ト喜助刀を持つて出で、喜助「オツトお預り申したは此の喜助、ちやつと差してお歸りなされませ。」ト岩次が刀を貢に渡す。貢腹立まぎれに引奪る。萬野「エ、歸ぬるものならきり〳〵歸んだが可いワイの。」ト表へ突き出す。お鹿「これ私を欺した譯立てさんせ。」ト貢に取りつく。貢「エ、知らぬワイ。」ト鹿を突き倒して羽織を引裂き舞臺へ打ちつける。唄になりつか〳〵と向うへ入る。喜助門口へ出で後を見送り、マアあれで可いといふ科あつて捨白にて奥へついと入る。萬野「ほんにマア酷い短氣者ではあるぞ。」お鹿「たうとう私をさゝほさにしくさつた。」竹五郎「サア〳〵お鹿さん、マア奥へお出で。」お鹿「私も奥で酒なと飲も。」萬野「よいワイな、私が白して遣るワイな、サアござんせ。」ト踊地になり、お鹿、萬野、竹五郎奥へ入る。跡合方、岩次そつと起き三人顔見合はせ、お紺がそばへ來て、岩次「お

女を欺し金を取るやうな貢と思ふかい。」お紺「イエ〳〵モウ何にもいうて下さんすな、聞きたう御座んせぬ。お前の方から隔てておいて、今更何いはしやんしても、私が耳へは入らぬワイなア。」貢「ササ、其の腹立も有理ぢやが、コリヤ正しうアノ萬野めが所業。というて女の事、云へば云ふ程馬鹿になる、何にもいふ事はない、追つつけ國へ歸ると元の身にたち返る、其の時其方を請出して武士の女房。」お紺「いやでござんす。」貢「ヤア。」お紺「お前國へ歸んで侍になると云はしやんすが、わたしや其の侍はきつい嫌ひぢやワイなア。」貢「ナニ侍は嫌ひぢや。」お紺「アノ私が父さんも元は侍、朋輩の讒言とやらで永々の浪人。常々いはしやんすには、コリヤ必ず侍と二世の約束すなと、呉々とのお詞、それぢやに依つて私や侍はいやでござんす。」貢「そんなら初めからなぜさう言はぬ、今となつて何で侍が忌になつた。」お紺「ハテ初めから云はうにもお前は御師、何時なりと私が身儘になつたら、御師を罷めさせまして町家住居、町人と女夫になれば父様のお詞も立つ、わたしや侍は嫌ひ、町人が可いワイなア。」ト貢こなし有つて、紺「ムウ鋸屑もいへばいはるゝと、出來ぬ事をいふはコリヤなんぞ急に思案が變つたな、そんならいよ〳〵女房になる事は忌ぢやな。」お紺「イ、エ忌ぢやないぞえ。ハテ侍を罷め町人にならしやんしたら、たとひ貧しい生活でも得心でござんす程に、町人になつて下さんせ。」貢「ぢやといふてそれがマア。」お紺「ならぬかえ、お前がならにや私も忌でご

竹五郎「いかさま、金儲けがないでもござりませぬ。」皆々「ハ、、、、。」ト貢を見て笑ふ。合方止む。貢「身不肖なれども福岡貢、女を騙り金を奪る所存はない、馬鹿な奴の。」トお鹿を取つて突き放す。お紺「イ、エ滅多に潔白には云はれますまい。」貢「そりやなぜに。」お紺「お鹿樣と譯もなし、金を借らしやんせぬお前が、何で今夜お鹿樣を呼ばしやんした。」貢「それもァノ萬野が。」お紺「さいなァ、今夜お鹿さんを呼ばしやんした許りで、お鹿さんと譯の有る無心狀を遣らしやんしたも、金を取らしやんしたも皆お前ぢや。」貢「ヤ。」お紺「とサア斯ういふ私から思ふもの、外のお方は猶の事。」貢「デモ。」お紺「それ程手詰の金ならマア私にいうてくれたがよい、僅かな金をあた見とむない。シタが所詮わたしに云うても埒は明くまいと思うての事かえ、そりやモウ不がひない私でござんすに依つて、さう思はしやんすも理でござんす。忝う御座んす、よう隔てておくれた、急度禮いふぞえ。是れから隨分お鹿樣を可愛がらしやんせ、何ぼ私への面當ぢやというて、同じ家の女郎を捉へ、何の態のとまだ其の上に金の無心。眞に見下げ果てたといはうか、殊に女郎は互に張のある者、欺されたの騙られたのと、大勢の中で聲山立てて、傍で聞いてゐる其の辛さ。ほんに餘りさもしい事さしやんしたと思や、口惜しいやら恥かしいやら、私や今爰へ消えたう御座んしたワイな。」ト科ありて泣く。貢「イヤサたとひどの樣な事が有つたとて、

をうか〳〵した事をいひぢやぞいな。おまへから受取つた金は、のこらず貢さんに渡したワイなア。」貢「やい〳〵萬野、どこに金を受取つたゝ」萬野「ソレお前に。」貢「ヤ。」萬野「エ、ぢやら〳〵と云ひないなア、お前があれ程受取つておきながら、ア、聞えた、お紺さんが彼處にゐなさるに依つて、それで其のやうにとほけかいなア、そりやお前無得心ぢやぞえ。折角お鹿さんが上げなさんした金を、取らぬとは、實にあんまりな白癡ではあるワイの。」貢「覺えもない貢に、汝等いひかけするのぢやな。」お鹿「覺えもないものが此の無心狀は。」貢「こりや俺が手跡ぢやないワイ。」萬野「サアノお前の方で人に書かして遣さんした事、私が知らうかいなア。」ト貢むつとして、貢「何と。」ト思入。萬野「ホ、、お前の言譯がないとて私が知らうか、サア腹が立つならどうなとさんせ〳〵。」ト貢に身體を突き付ける。貢つかみつかうとして色々こなし有つて氣を變へ、貢「女を相手にするは大人氣ない、此の禮は重ねていふ、萬野さう心得てるい。」ト胸を鎭めすわる。お鹿「萬野、今の一言でそなたの疑ひは晴れた、ほんに女郎が客を欺すはお定まり、それに女郎を欺すとは、アノこゝな茶臼男めが。」ト貢を睨みつける。喜多六「ハ、、皆聞いたか、俺們は阿波の田舍者なれど、藍玉を商ふお蔭で、三人で金も澤山に持つてゐる。此方が國でいふには、伊勢といふ所は無上に金を欲しがると聞いたが、お山を欺し金を奪るとは、ハテ伊勢といふ所は變つた事が流行るなア。」次郎助「取分け御師の中でうすい奴等は、錢金を見る

枕を持つて行く、岩次横になる。お鹿狀三本程持ち出で來り、お鹿「慥かな證據今讀んで聞かすぞえ。」ト文を披き讀む。此のうちお紺岩次に靠れ煙草のんでゐる。「ようぞや御文下され、淺からぬ御心もじの程うれしく存じ候。左樣に候へば、ちと〳〵手支へ候へば御無心ながら、金子五兩御遣し下され候はば山々悅び申し候、此の文には五兩、又此の文には三兩、又二兩と、ほんに文の來る度々に、無心をいうて遣さんせぬ事はないぞえ、其の度々に一兩も斷りいうた事はないワイな。」ト此の文を讀むうち貢お紺が顏を見る。お紺ツンと顏を背け煙草のんでゐる。貢いろ〳〵こなし有つて、貢「どれ。」ト文を取つて殘らず見て、「コリヤ俺が筆ぢやない、贋筆ぢや。」お鹿「エヽ。」貢「もとより金子の無心いうた覺えはない、一體コリヤ誰を賴んだのぢや。」お鹿「この仲介は仲居の萬野でござんす。」貢「萬野を爰へ呼べ。」お鹿「呼ばいぢやいな、萬野々々。」皆々「萬野々々。」萬野「アイ〳〵。」トいひ〳〵出る。貢萬野を引きつけ、貢「萬野マア下に居や。コレ汝が媒介でお鹿から文の來た覺えもなし、まして金を取つた覺えはないが、何であんな事を云はすのぢや。」トお鹿萬野を引きつけて、お鹿「コレ萬野、其方を賴んだは今や此の頃の事ぢやないぞや。先の月の差入、マア文を遣れと云やつたに依つて、恥かしながら書いて遣つたら直に返事が來て、其の次へコレ〳〵此の五兩の無心狀、それから後へ二兩三兩いうて來る度々に、皆そなたに渡したが、其の金はどうしやつた〳〵。」萬野「コレ〳〵お鹿さん、何

更知らぬ、覺えがないとはそりやお前卑怯でござんす、さもしいワイなア。」貢「ほんにマア正々しい事をいふワイ。」お紺「如何に私に當てつけぢやというて、お鹿さんを呼ぶとは、ほんに餘りの事で皆さん可笑しいぢやないかいなア。」喜太六「いかさま、蓼食ふ蟲もすき〴〵といはうか。」次郎助「よつぽどのへち物ぐらひ。」竹五郎「眞にコリヤ可笑しうござります。」皆々「ハ、、、。」ト笑ふ、鹿腹立てズッとお紺が傍へ往き、とんと坐り、お鹿「お紺樣。お前の眼からは成程をかしう御座んせう、アイ私が顏が皆樣も可笑しからう、したが何ぼう不器量でも、みん事人並に商ひもして通る、又きれる事も切れやんす、こりやコレ此の首で商ひするぢやない、寢間へ入つて肝心肝文、いふに云はれぬ所がある故、竟ぞお客に一度でもはかれた事はないワイな。其の大勢のお客さん方へ、無心のたら〴〵いひ探し、身著の著がへ櫛笄まで、工面のなるだけ爲つくして、眞に今までは私や貢さん故に、大抵不自由な目をしてゐる事ぢや無いワイなア。」ト貢鹿を引きまはして、貢「コレお鹿、大概なことは女子と思ひ聞捨にもせうが、大勢の中で貢に金を遣つたとは、コリヤ何時どういふ事で金を遣した、聞捨ならぬサア其の譯いへ〳〵。」ト急いていふ。お鹿「イ、エ譯をいはうより、慥かな證據はお前からおこさんした文を見せうかえ。」貢「オ、見よう。」お鹿「今取つて來る、待つて居さんせ。」ト奥へ走り入る。岩次「アア爰で又飲まうと思うたら、しゆんだ臺詞で理に入つた。コリヤ其の枕を遣せ。」竹五郎「アイ〳〵。」ト

い。岩様お前もさうで御座んせうなア。」岩次「ハテ滅相な、身共はあんな無茶はいはぬて。」喜太六「さうともさうとも、此方らが様に一人を此の様に守つてゐる者は少ないて。」次郎「ちよこ／＼顔を代へるも、亦面白からうかい。」竹五郎「イエ／＼あれも是れも、掃き歩くと帚客ぢやと異名をつけます。」三人「何ぢや帚。」ト貢が顔を見て、「ハ、、、、。」ト貢むつとしてまた科あり。貢「イヤコレお紺、このお鹿は俺が方から呼んだのぢやない、此の間から汝身に一寸逢はねばならぬに依つて、毎晩々々來て見れど、流連客で逢はれぬ故、今夜待ち合はして逢はうと思うて、萬野を頼み奥の舞を見せてくれといへどならぬといふ、酒一つ飲まうといや誰なと呼べといふ、呼ばねば今夜は去んでくれいと、逐ひ出す様にいふに依つて、是非なう誰なと酒の相手に呼ばうといつたら、此のお鹿を遣した、何にも譯のある事ぢやない、わが身に逢はうと、ホンノせう事なしに呼んだのぢやワイの。」トお鹿むつとして、お鹿「これ貢さん。」ト貢が胸倉を取つて、「お紺さんの前ぢやと思うて、そんな事言はしやんすと、皆様の聞いてぢや手前でなりと有様にいはにやならぬワイな／＼。」ト振りまはす。貢お鹿を又突き退け、貢「あり様にいふとは何をいふのぢや。」お鹿「云はいぢやいな、コレ皆様も聞いて下さんせ、私や此のお方に惚れました、アイ文つけました。其の時貢さん、なぜ否ぢやと云うて下さんせぬ。生中そもじの志うれしいの、イヤ近い中に逢うてしつぼりと話せうのと、可愛らしい返事しておきながら、今

マア、今改めてせりふせいでも可い事を、お紺様と譯をつけて私に逢うて遣らうといふて下さんした時の嬉しさ。どうなりとしてお氣に入らうと思うて、云うて遣しなさる度毎に、一度もたゞの返事を上げなんだは、ちつとなりと可愛がつて貰ひたさで御座んすワイなア。」貢「とんと合點が行かぬ、一體そりや何をいふのぢや。」お鹿「何を云はうぞいなア、一體お前に私が云うて上げた事、得心しておくれたぢやないかいなア。」貢「何をいの。」お鹿「いえ〳〵其の樣にしら〴〵しう云はしやんすな、お前の方から返事を遣さしやんしたぢやないかいなア。」貢「何日いの。」お鹿「たしかな返事を遣しておいて、今更そんな事いはしやんすとは、そりや酷い胴慾でござんす、胴慾でござんすワイな。」ト貢が膝にとり付き泣くを突き退けて、貢「樣々の事をいふワイ。」ト此の時奥より、岩次「サア來やれ〳〵。」ト岩次お紺が手を引き、跡より喜太六次郎助竹五郎ついて出て來る。これを貢見て、貢「お紺。」お紺「貢樣、痛うはでな事ぢやなア。」岩次「ハテそれを汝が構ふ事か、サア爰で飲まう〳〵。」竹五郎「サア〳〵お一つお上りなされませ。」ト皆々上のかたにて酒もり。貢「そんなら吾儕は家に居たか。」お紺「知れた事いなア。」貢「ム、家に居る者を、まだ戻らぬと、何の爲に萬野に譃をつかすのぢや。」お紺「わしや知らぬワイな、そりやお前の心からぢやワイな。」貢「おれが心からとは。」お紺「この間は爰にござんすお客様で、間違うて逢はぬを幸ひ、ちやんとモウかはりを呼んで、實に殿達ほど水くさいものは無

逢はす事はならぬ。といふ所ぢやが、金貰へば少しの中は知らぬ顔、舞の稽古のどさくさに、一寸逢うてござんせ、少とも早う。」ト お岸を門口へ突出す。お岸「そんならこな樣得心して。」萬野「ハテ私も粹のあがりぢやワイな。」お岸「そりや眞實かえ。」萬野「これ人の來ぬまに。」お岸「萬次郎樣に。」萬野「會うてござんせ。」お岸「嬉しうござんす。」萬野「ハテそれも金だけ、長うはならぬぞえ。」お岸「合點ぢやワイなァ、萬野どん。」萬野「行かしやんせ。」ト 踊地になりお岸向うへ走り入る。萬野金を數へながらいそ〳〵奧へ入る。上の方より貢出で、貢「この又萬次郎樣はモウ見えさうなものぢやが。」トいふ内奧よりお鹿、女郎のこしらへ、きつけしごきの形、手に紙を持ち出で、お鹿「貢樣どこへ行きぢやいな、マア下に坐りいなァ。」ト 貢の手を取り下におき、莨盆引寄せたばこ喫む。貢「お鹿、變る事もないか。」お鹿「アイようこそ問うて下さんした。」ト 吸ひ付けた煙管を貢に遣る、貢取つてのむ。「貢さん、きつと嬉しいぞえ。」ト 貢合點の行かぬこなしにて、貢「ム、そんなら萬野がこなたを。」お鹿「アイお紺樣といふお馴染のあるお前に、何の態のというたはみんな私が惡性なれど、どうも思ひ斷られぬ故、度々あげた文の御返事、見る度毎に私が嬉しさ、推しておくれいなァ。」ト 貢又合點の行かぬ科にて、貢「何だややらどぎ〳〵とをかしい物のいひ樣、こなたの方から狀の來た覺えもなし、此方から返事した覺えはないぞや。」お鹿「エ、。」ト 驚きたるこなし有つて氣をかへ。「ホ、、、ォ、笑止、私とした事が何の

んせいなア。」トお岸を引付ける。お岸「こりや萬野殿、どうしやるぞいの。」萬野「どうしやるとは、そりやお前の心に問はんせ。あの喜太六様が身請せうといふ今夜になつて、お前亡命せうとは、ほんにほんにづぶとい根性。此の事が親方の耳へ入つて見さんせ、江戸か長崎へ直に鞍替ぢや。そこを私が云はぬのは、誰しも女子は相互ぢやと思ふから、サアあの若衆めが事は念ひ斷らんせ〳〵。聞き入れぬとお前、女郎衆とはいはさぬ、親方に代つて私が斯う〳〵。」トお岸を惨く抓りたゝき色々あつて、―「サア念ひ斷らんせぬか。」お岸「これ萬野殿、こな様その譯知つてならば、何しに隱しはしやんせぬが、コレ何卒少しの中、知らぬ顔して下さんせ。情ぢや慈悲ぢや、何卒こな様の心一つで。」萬野「イイエなりやんせぬ、お前方を預つた私、生馬の眼を拔かうとは、そりやなりやんせぬ。喜太様の方へ御座んせ、身請があれば自と私等も祝儀にありつく、慈悲も情も徳を取らうが爲。サア思ひ斷つたといはしやんせ〳〵。」トこづきまはし。「エ、情の強い、コリヤ寧そ親方様の前へつれて行て臺詞せう、サア御座んせ。」ト引付けるを、お岸振切つて萬野を突飛ばし、又起きて蒐るを、お岸懐より包金の入りし楊枝差を出して、萬野が顔へ打ち付ける。「アイタ、、、お岸様、お前コリヤ擲ちさんしたのお前。」ト立ちかゝりながら金を拈り見て、「ヤアこりや金かえ。」お岸「これ少時の中ぢや、聞き分けて私を遣つて下さんせえ。」萬野「なる程、どちらへ廻つても金が欲しさに脊腹を揉みやす、萬次郎に

んす。」ト所作の切にて、三人こなし有つて奥へ入る。ト入れ違うて岩次わが刀と貢が腰の物と兩手に持ち窺ひ出る、跡合方。岩次「まだな事をいふ奴ぢや、此の刀の寸尺が丁度合うたが幸ひ、身を入れ替へておきや可い事を、馬鹿々々しい。」ト兩方の目釘を拔き刀の身を入れ替へる。此の時喜助そつと出かけ、此の體を見て恟りして又ちやつと退む。岩次刀を入れ替へて元の樣にして兩手に持ち、「貢めが去にをる時、其の先刻に預けた刀を呉れいと吐すワ、吾が物ぢやに依つて取つて差しをるワ。去に居つた後で、殘つたこれこの俺が刀の身は青井下坂、旨い〳〵。」ト唄になり、こなし有つて岩次二腰を持つて奥へ入る。ト引違へて奥よりお岸出で、お岸「先刻に貢さんに逢うて、萬次郎樣の事賴んでおいたなれど、今奥で彼の喜太六が、今宵中に私を身請するとの事。コリヤ所詮この家をそつと脫けて、萬次郎樣に逢うて何かの噺。それ〳〵確か主は大林寺の方に待つて居やしやんせう、さうよ〳〵。」ト身拵へしてそろ〳〵逃支度する、此の内うしろへ萬野出かゝり窺ひゐて、此の時門口にたち塞がり、萬野「お岸樣、こりや何處へござんす。」お岸「エヽ、こりや萬野どんか、そんならこなさんさつきにから。」萬野「何も彼も後で大概聞きました、コレお岸樣、お前アノ萬次郎が事を忘れかね、亡命して行く氣ぢやの。」お岸「アイこれ滅相な、そんな心ぢや無いワイの。」萬野「いえ〳〵さうで御座んせう、女郎衆のよしあし目利するが仲居の役、お岸樣爰へお出で。」トお岸うじ〳〵する。「お出でいなア、エヽ、來な

放埒ではないほどに、心遣ひは無用々々。」 喜助「ムウそんなら其の折紙を騙つた奴等が此の油屋に。」 貢「サァ確とは知れねど若しやと思ふはアノ。」ト囁き、「ぢやて。」 喜助「そんならアノ。」 貢「コレ大事の詮議、ひそかに〳〵。」 喜助「申し奥で一つあがりませぬか。」 貢「いかさま飲まうか。」 喜助「サァお出でなされませ。」ト賑やかなる所作の切になり兩人奥へ入る　やはり右の鳴物にて、奥より萬野、喜多六、次郎助うかゞひ出で、 萬野「申し今の樣子お聞きなされましたか。」 喜多六「貢が差して居る一腰が青井下坂、是れを盜めといはぬ許りの今夜の首尾。」 次郎助「この次郎助が盜んで、國元へ髙ぶけりと出かけうか。」 喜多六「いや〳〵それでは詮議の足がつく、どうしたもので有らう。」 萬野「そりや斯うせうワイな、私が盜んで爰を亡命、ハテ二三日も影を隱すワ。その中にお前方は國へお歸りなさんすワ、そこへ私が下坂を持つてお渡し申したら、何とよいぢやないかいなア。」 喜多六「さう手番がいけば可いぢやて。」 次郎助「萬野あぢよう遣るかよ。」 萬野「やらいでワイな、申し味よう遣つたら多量とおくれで有らうな。」 喜多六「そりや知れた事いやい。内外の事まで打明けて置いた汝が事、此方の望みが成就したら褒美どころぢやない、汝も阿波へ引取つて一生樂々と暮さすワイ。」 萬野「エヽ有り難い、それ聞いたら一倍精を出さねばならぬワイな。」 次郎助「そんなら貢奴が去なぬ中。」 萬野「イヤ滅多に去ぬ事ぢやござんせぬ。奥の舞のどさくさ紛れに遣りかけうワイな。」 喜多、次郎「早う〳〵。」 萬野「合點でござ

ましてござんせ、お紺様の代りに私がよい女郎様を世話してあげうか。」ト奥へ入る。喜助こなし有つて、喜助「いやァ貢様、憚りながら一寸申し上げたい事がござります。」貢「俺にか。」喜助「どうぞ一寸あれへ。」貢「オヽ。」ト合方になり兩人向うへ出て、「喜助何の用ぢや。」ト萬野出で後に密と立聞きしてゐる。喜助「ハイ、今改めて申し上げますは如何なれど、私が親共は貴方の御親父様に中間奉公、親旦那のお供して阿波より志州鳥羽へ御逼塞、それ故親共も奉公を退き、此の伊勢にわづかの生活。老病の枕許へ私を呼び寄せ、今福岡孫太夫の御養子、貢様は吾々親子が古主の若旦那、隨分かげながら意を注けて忠義を竭せと親父の遺言、此の事は貴方にも能う御存じの儀、申し出しましたは及ばずながら、此の様に每日每晚遊所へお出でなされましては、お身の禍ひを招く道理、もしひよつと貴方様の失策にもならうかと、古主を大切に存じますから、猪口才な私が御意見。貢さま、必ずお心に觸へられて下されますな。」貢「下ざまに似合はぬ古主を忘れぬ汝が意見、悪う聞かぬ忝い。其の心を存じ居る故、それ其の一腰も汝に預ける。何を隱さう其の一腰は、此の度本國阿州より今田萬次郎様へ、殿より御意を以て、求め歸れとある靑井下坂の刀。」喜助「エ、あのこれが。」ト萬野聞いて惘りしてツイと入る。貢「伯母者人の志を以て、貢が手に入れた此の刀を萬次郎様に持たせ、本國へお供申さうとは思へども、刀の折紙を騙り取られ、此の詮議をせう爲に每晚々々これへ來るのぢや。必ず

お遊びなさるゝならお腰の物を預りませう。」貢「アノ腰の物を。」萬野「オヽ此の里の習ひを知らぬ者か何ぞの樣に、ドレお預り申しませう。」ト貢の一腰に手をかけるを突退け、貢「イヤ腰の物は滅多には預けられぬ。」萬野「そんなら歸になされ。」貢「ヤ。」萬野「ハテ伊勢の茶屋で腰の物を預るは昔よりの事、それに預けられぬとあれば、此方もお客にはし難うござんす程に、早うお歸りなんせ。」貢「イヤサちつと爰に。」萬野「用が有るなら腰の物を預りませう。」貢「デモこの。」萬野「預ける事が忌ならお歸り。」貢「サア。」萬野「預りませうか。」貢「サア。」萬野「お歸りなさるか。」貢「サア。」萬野「サアサアサア、エヽ埒の明かぬ、きり〳〵歸んで貰ひませうぞ。」ト慳貪にいふ。貢ぎつくり思案のこなし。

喜助「イヤ其のお腰の物、私が預りませう。」貢「オヽ料理人の喜助。」喜助「貢樣、毎晩お出でなさるさうなが、私も此の間は流連のお客樣で、一向急がしうてえお目にも懸りませぬ。」萬野「これ喜助殿、そんなら此方が預るか。」喜助「ハテ貢樣も今でこそ藤浪の御家來なれ、元はお歴々のお侍樣と聞き及んでゐる。ぢやに依つて輕卒に女子のこなさんへお預けなさるまいと推量して、身こそ卑しい料理人の喜助なれども、男の端くれ、俺が預る。ハイ私がお預り申しますからは、お氣遣ひはござりませぬ。」貢「ムウ然らば其方に預ける、大事の一腰、麁相の無いやうに頼むぞよ。」喜助「しつかりと預りまして御座ります。」萬野「ドレそんなら小口の茶の間へやり申すやうに、喜助どん跡から連れ

で。」萬野「アイ、今日は芝居の初日で、お客と連れだつて見物に往かしやんしたが、戻りに大坂屋でたてててぢやといなァ。」貢「そんならお紺はまだ戻らぬか。」萬野「アイ、まだで御座んす。」トこなし有りていふ。貢「一寸お紺に會ひたいものぢやが、萬野、どうぞ吾儕の働いてくれぬかい。」萬野「そりやモウお馴染のお前樣の事ぢやに依つて、どうぞして上げたいけれどな、お客は阿波のお侍、モウモウねち客で粋といふ物は是れ程もござんせぬ。所詮一寸の首尾もなりますまい、マァ今夜はお歸りなさんせ。」貢「サアそんならお紺は、逢はれずば逢はいでも大事ないが、一寸こゝで待ち合はさねばならぬ事もある。コレ萬野、何と奥の舞の會を見ても大事あるまいか。」萬野「イエ〳〵そりやなりませぬ、奥のお客はせきせばいお方で御座んすに依つて、外のお客と座敷をひとつにしたら大抵喧しい事ぢやござんせぬ、舞の場へ顔出しやなどしておくれなえ、私らが迷惑するワイな、お前今夜中待つたとて、所詮お紺樣には逢はれませぬ程に、ちやつ〳〵と去になされ、一文にもならぬお客に附合つてゐるのも鬱陶しい物ぢや。」ト貢ムッとする科。「ホヽヽ、私とした事がひよかすかと、貢さん必ず氣に觸へておくれなえ。シタガ其の樣に爰に居たか、誰ぞ代りの女郎さんを呼ばしやんせ。」貢「そりやモウ如何なりともせうが。」萬野「ム、代りを呼びなさるか、オヽ能うお出でたなァ。そんならマァ酒でも出そワイな。」ト奥より銚子杯を運ぶ。踊地になり向うより喜助出で門口に窺ひゐる。「貢さん、

行かしやれ。」お岸「そんなら貢さん、必ずえ。」貢「ハテ承知致してゐるて。」佐助「サアお出でなされませ。」ト唄になり、お岸佐助奥へ入る。跡合方になり、貢跡見送り思入あり。貢「先だつて藤浪様のお心添を以て、仰せ下されし本國阿州の伯父御大學殿の謀反に加擔の武士徳島岩次、城下の町人藍玉屋喜多六、この者共密かに此の伊勢路へ入込み、萬次郎様に害をなし、殿より仰附けられし下坂の刀を奪ひ取り、萬次郎様の越度より殿を罪に取つて落し、阿波一國を押領せんと伯父御の謀計、折紙を騙り取つたも皆この手筋、引捉へて詮議とは思へども、何をいうても岩次といふ侍、喜多六といふ町人、兩人共に人相格好、藤浪様より聞いたとは拔羣相違、何にもせよ是れには仔細のありさうな事、其の上お岸お紺兩人共に身請して、明日は本國へ歸るとの事、もし彼奴らが伯父御大學殿の廻し者ならば國へ歸しては、先達より騙り取つたる折紙を、伯父大學へ渡すは必定、さすれば折角手に入つた此の下坂の刀も、折紙なくては何の詮ない鈍刀同然、其の折紙は正しう阿波の岩次といふ侍が。コリヤ今夜は爰を動かれぬワイ。」萬野「なんぢや貢が來た。どれ〳〵私が會うて斷りいはうワイなア。」トいひ〳〵奥より出て「オヽ貢さんお出でなされ。」貢「萬野、此の間は逢はぬの。」萬野「毎晩々々お出でる噂は聞いたれども、此の間は阿波のお客で頓と座敷が離れられぬに依つて、ようお目にかゝりませぬが、貢さんあゝお氣の毒や、今夜もお紺様はなりませぬぞえ。」貢「ム、そんなら矢張阿波の客

エお前が行かしやんした跡へ、萬次郎さんがござんして、私が折よう逢へばよし、又間違うたら却つて跡ばかり追うて居にやなるまい、まちつとの間待つて見やさんせ。」貢「いかさまそこも有るワイ。」お岸「どの道私に逢ひにござんす程に、ちつとの間待つて居てあげなさんせいなァ。」貢「そんなら然うせずばなるまいが、ァ、これ氣をもませる事ではあるぞ。」お岸「そりや道理でござんす、わたしも大抵氣のもめる事がござんす、貢さん聞いて下さんせ。あの奥へ來てゐる阿波の客がな、私もお紺さんも身請して明日は國へ作れていぬるというて、大抵煩い事ぢやないワイな。」貢「ム、すりやあのお紺も其方も身請して。」お岸「アイな。」貢「明日は本國阿波へ出立といふか。」お岸「アイ、何卒私もお紺樣も、いかぬ思案はあるまいかいな。」貢「ハテ搗てて加へて身請沙汰、ムウ。」ト手を組み思案する。奥より佐助走り出で、佐助「モシ／＼お岸樣／＼、奥で舞が始まるといつて、あの喜太六樣がお前をつれて來いと喧しくいうてゐられます。仲居衆は大取込、サア／＼早くお出でなされませ／＼。」ト無理に引張る。お岸「エヽ今行くワイな。」貢「ム、そんなら今夜は舞の稽古とやらが有るか。」佐助「ハイ左樣でござります、阿波のお客がお好みで奥座敷は大取込。サア／＼早くお出でなされませ。」お岸「そんなら私や行かねばならぬ程に、必ずあのお方が見えなさんしたら、今の身請の事を話して、よい樣にして下さんせえ。」貢「ハテ何もかも私が呑込んでゐる。客の氣に逢はぬやうに、マァ／＼奥へ早く

亭主「イヤ其の大金とは有りがたい。ときにをどりも始まりませう、サア〳〵大座しきへ御來臨々々。」次郎助「イヤ又おだて居るか。」亭主「サア〳〵お出でなされませ。」ト華やかなる所作の切になり、此の人數殘らず奥へ入る。此の鳴物を假りて向うより貢、黒き紋付の袷小袖、黒縮緬の單羽織、件の下坂の刀を差して足早に出て來り、門口へ來て内を窺ひ、貢「ハテ此の樣に毎日毎夜尋ね歩くに、如何に若いというて、彼の萬次郎樣はどれへ御座つたやら、若しひよつと今夜あたり、此の油屋へござつたか知れぬ、何でもあのお岸に會うて、さうぢや〳〵。」ト内へ入る、あちこち窺ふ。奥よりお岸出て來り、お岸「貢さん、能う御座んしたなァ、お前萬次さんに會うてかえ。」貢「イヤ今にあはぬが、シテ萬次郎樣は。」お岸「アイたつた今ござんしたワイなァ。」貢「シテ何處へござつた。」お岸「あいなァ、もそつと先刻がた御座んした故、此の間からの荒ましを搔摘んで話す中、アノ意地惡の萬野が來て、それ故士の姿を見せまいと、大林寺の裏門の方へちつとの間、遣り申しておいたワイなァ。」貢「ム、そんならアノ大林寺の裏門へ。」ト行かうとする。お岸「待ちいなァ、まだ何やかや言ひ殘した事もあり、萬次郎樣も私に用の有る樣子、是非〳〵おつつけ戻つてござんせうワイな。」貢「ハテ其の樣に便々とした事ぢやない、知つての通り下坂の刀手に入つたに依つて、早うお渡し申さうと、此の樣に捜して歩くのに、エ、此方の思ふ樣にもないお方ぞや。マァ一走り大林寺まで行てきようワイの。」お岸「イエイ

ん方も氣儘には困るワイな。」　亭主「いや、モウ始まる段ぢやござりませぬ、何ぢややら江戸の藝者衆が大勢見えられて、面白い事が有るげにござりまする。其の後が例の伊勢音頭、今夜は甚う賑やかな事でござりまする。」　岩次「イヤ身共は其の伊勢音頭が望みぢや、國元への土產にコレお紺、汝が手で文句を書いてくれぬかいやい、サア〳〵一緒に奥へ往かう。」ト、お紺が手を取る。お紺すげなう振放す。岩次憤として、岩次「ヤイ身が手をなぜ振りきつた。」　お岸「ハテ是れはどうでござんす、お前程な粹樣が、何をマア其の樣に顔色かへて、ソレ萬野どん、お腰の物預らんせ。」　萬野「ほんに然うであつた、お腰の物は私がお預り申しませうワイな。」ト岩次が大小へ手をかける。岩次「デモ餘りたび〳〵。」　お岸「ハテお紺樣も酒機嫌さうな。常の氣質を知りながら、エ、マアお前も機嫌直しなさんせいなア。」　岩次「お岸が挨拶、野暮と見らるゝも殘念、ソレ萬野、大小預けたぞ。」ト岩次大小を萬野に渡す。萬野「ハイ〳〵確りとお預り申しました。」喜多六「何だか氣の爲かして、一座の三人がみんな振られる樣に見える、こいつ女郎共が言ひ合はせて田舍客だと思うて馬鹿にするな〳〵。」　お紺「ハテ喜多六樣、又お前酒が過ぎたぞえ。何ぞと云うと氣短に、お前も野暮を罷めさんせ。」　次郎助「あれさ、どうでも手前たちは言ひ合はせて嬲ると見えるよ、ねエ岩次さん。」　岩次「ハテ嬲られても可いワ、此方はまた大金を撒き散らして見せ附けて遣るワイ。」

しい、サアつけ。」萬野「サア〳〵酌しやんせうワイなア。」ト踊地になり、向うよりお紺はでなる前垂衣裳、古市女郎よそいきの形にて出てくる。跡より羽織大小國侍のこしらへにて岩次出で來り、花道にて、岩次「オ、イ〳〵、マアお紺靜かに行きやいなウ。」お紺「イ、エわたしや早う歸んで、舞の稽古が見たうござんす。」岩次「サア見たくば一緒に見るワイの、そなた許り行かうとは胴慾な、なぜ手を引き合うてはくれぬぞいやい。」トお紺が手を取る。お紺ふりきり、お紺「それぢやというて、往來の人が見て笑ふワイな。」岩次「何のマア、客が女郎と手を引き合うて行くを誰が笑ふものか。殊に夜に入つてあれば、誰も笑やせぬ、遠慮なし〳〵。」お紺「それぢやというて、わしや恥かしいワイな。」トつんとして舞臺へくる。岩次「コリヤ〳〵待つてくれ〳〵。」トいひながら兩人矢張鳴物にて内へはひる。

お岸「ヤアお紺さん、戻らさんしたかいな。」お紺「舞の稽古が始まらうと思うて、急いで歸つたワイな。」喜多六「オ、岩次樣か。」次郎助「今お歸りなされましたか。」岩次「オ、サ舞とやらの稽古があると聞いた故急いで戻つて來た。有樣はお紺とこつそり大坂屋でしげらうと思うたワイな。」萬野「イヤモウ油斷のならぬ岩さんの惡性。お前の打込ましやんしたも理、お紺さんが他所行の前垂姿、女子の私らでさへ耐へられぬ。コレお紺さん、お前マア岩さんの傍へお出でいなア。」お紺「コレ萬野どん、岩さんの傍へ行てよければ私が行く程に、あんまり指圖して下さんすなえ。」萬野「オヤどうせう、どの女郎さ

二文貰はにやァならねえ、俺はそれが不便だからよ。」次郎助「いか樣、乞食をするは見るやうだ、そんな可危い奴にくつついて居ようより、金持に請出され、御新造樣奥樣といはれる方が、俺はマア可からうと思ふよ。」お岸「これ次郎助さん、喜多六さん、お前方は何といはしやんす。あの萬次郎さんは浪人ぢやに依つて、このお岸をも袖乞ぢやの乞食ぢやの謂はしやんすのかえ、そりやモウ愛しい男のためなれば袖乞非人は愚かな事、命にかゝるも色の習ひ。なんぼ果敢ない古市の女郎ぢやというて、京大坂のお山さん方と心は同じ事、女郎が金で自由になるものぢや御座んせぬ、憚りながら慮外ながら油屋の岸で御座んす。モほんに親方さんの意見でも、遣手衆の小刀はりでも、いやな客衆を振るのは女郎の常。身貧なお方を合點で、色戀するのも勤めのならひ。お前の身請は、アイわたしや忌でござんすワイなア。」喜多六「その忌といふのを大金で身請するワ。」お岸「アイ、わたしや必と忌ぢやぞえ。」喜多六「エヽ此奴は。」ト立ちかゝる。三木藏萬野止めて、亭主「マア〱お靜かになされまし、身請とあれば私が福德の三年目、何しに否やを申させませう。」萬野「ハテマア仲居のわたしが圓うしやんす、圓い序に大杯でお始めなさんせ。」喜多六「是れからは寧そ振られついでに暴飲と出かけべえ、丼を持つて來い〱。」次郎助「それ〱暴れ飲に、家體骨へ連尺をつけて飲むが可い、俺はいつそ水瓶で飲むべい。」喜多六「サア〱飲むぞ〱。」亭主「暴れのみとはチト亭主は迷惑でござりまする。」喜多六「喧

飛びが可からうとわしや思ふワイなア。」萬野「それであの螢が。」お岸「おいなう。」萬野「なるほど、役にも立たぬ彼の螢、まごついたら其の身の難儀、こがれ〳〵て今の螢が。」お岸「ヤ。」萬野「命冥加な螢めぢやなア。」ト踊地になり、喜多六町人の形、すこしくだけたるこなし。次郎助三木藏ついて奥より出で來り、喜多六「これ萬野、先刻から座敷を明けて、あの岸は何處へ行つてゐるのだ。」萬野「さいなアお岸さんは、今爰で碌でもない螢を見て、コレお岸さん、あんな螢に構はずと早う喜多六さんの側へ行かしやんせいなア。」トお岸を喜多六がはうへつき遣る。お岸「喜多六さん、私や今戻つたワイなア。」喜多六「そんなら芝居見物から今まで暇どつてゐたのか。」お岸「アイ岩次さんの座敷で大きに酒を過して居たワイなア。」喜多六「ほんに岩次さんの座敷なら可いが、俺は又ならず者の萬次郎めと、どこぞ密りどれ合うてゐるで有らうと思つた。彼の萬次郎といふ奴は、二本差しても風來者、この藍玉屋の喜太六樣は、町人でこそあれ阿波一番の大金持、應とさへいへば直に身請だ、なんと次郎助さうぢやねえか。」次郎助「さうとも〳〵、其の金持に請出されるとは其の身の出世といふもの、其の出世は手前はいやか。」お岸「いやで御座んす、此の岸はアイ嫌ひで御座んすワイなア。」喜多六「その忌といふのが矢張萬次郎奴への心中か、小胸がわるいワ。コレあんな奴にくつ附いてゐるとナ、どうで仕舞は碌な者にやアならねえワ。彼奴は高が素浪人、浪人者の女房になればお主も袖乞、人の門へ立つて一文

トいひながら出て來る。是れにて萬次郎門口へ出て行かうとして行きかねて門口に彳みゐる。萬野ちよつと是れを見つけ思入。「これお岸さん。」トおほきな聲にて呼ぶ。お岸「エ、萬野どん、恟りしたワイの。」萬野「エ、お前こゝにマァ何をしてぢやいなァ。」お岸「サァ私やあの、ォ、それ〳〵螢が飛んで來てぢやに依つて、あんまりしをらしさに詠めてゐたワイなァ。」萬野「ムウ螢が來たかえ。」お岸「アイ。」萬野「なるほど、晝は顏出がならぬ身のうへ、夜になるとうろ〳〵して、飛んで來る螢めが。」ト萬次郎を尻目にかけて、「コレお岸さん、あんな蟲を見ずとちやつと内へ入らしやんせ、女郎の甘味を吸ひにうせる螢めが。」ト萬次郎憤とする。お岸顏にて抑へる。「何ぢや〳〵、其の面何ぢや。夜になると毎々と人の門口へ飛んでうせて、女郎の甘味に吸ひにうせると、引つつかまへて蹈みにじりつけくれるぞよ。」ト萬次郎腹立つこなし。お岸もこなし。萬野「何をびこしやこする、おれが又引摑まへて。」ト行かうとする。お岸萬野をとめて、お岸「これ萬野どん、モウ螢は飛んで行たワイなウ。」萬野「エ。」お岸「先刻のとき飛んで行けばよい事を、ちやつと大林寺の方へ飛んで往つて、また後に爰へ飛んで來たが可いワイなウ。」萬次郎「ホツ。」ト溜息、時の鐘になる、頬被して悄々とはひる。お岸そつと門口を窺ひ見て、お岸「オ、嬉しや螢は飛んで行たワイなァ。」萬野「コレお岸さん、お前螢の飛んだが嬉しいかえ。」お岸「アイ可愛らしいあの螢、門口を飛び歩いて、ひよつと惡戯な子供衆に捕へられ難儀せうより、高

さんしたなア、サア〱こゝへ御座んせいなア。」ト萬次郎内へ入る。萬次郎「イヤモウ俺も其方に會ひたうは思へども、日外別れてから今に貢の世話に成つてゐるワイの。」お岸「何を譃ばつかり、この四五日は何處へ行かしやんしたやら、お行方が知れぬと云うて、貢さんは大抵案じてぢや御座んせぬ。そしてマアお前、彼の刀の事を知らずであらうな。」萬次郎「刀の事とは、アノ下坂の事か。」お岸「アイそれが貢さんの手に入つたワイなア。」萬次郎「ヤアそりやア忝い、俺が四五日二見村へ戻らぬも、騙られた折紙と下坂の事について、鳥羽三界まで往つて今歸りがけ。シテマアどうして刀が手に入つたぞいなウ。」お岸「さいなア、四五日以前、あまりお前の便りがない故、貢樣の所へ訪ねて往つて、始めて遇うた主の伯母御、其の日は取分け貢樣の色々と御苦勞、鳥羽の伯母御樣の働きで、下坂は主の手へ渡つて、早うお前に悅ばさうと、大抵探ねてぢやないワイな。」萬次郎「エヽそりや忝い、それに就いても騙られた折紙が。」お岸「サアそれも主を賴んで詮議して貰ひなさんせいなア。」萬野「お岸樣お岸樣。」ト奥にて呼ぶ。お岸「アレ〱惡い所へ萬野が聲、お前の姿をあれに見せては。」萬次郎「何處ぞへ隱れうかいの。」お岸「お前を見つけたら又喜多六に惡う告げるであらうほどに、斯うしなさんせ。お前は大林寺の裏門へ廻つて居て、もそつとしてから來て下さんせ。」萬次郎「そんなら行く程に、貢殿がおぢやつたら待たしておいてたもや。」お岸「合點ぢやワイなア、」ト又奥より。萬野「お岸さん〱。」

ござりませう。」次郎助「それは珍らしからう、機嫌直しに其の江戸の囃子を聞召して、喜多六が座敷で酒にせう。」佐助「それが可うござりませう。」次郎助「そんならお岸の君も俺と一緒に。」お岸「マア先へござんせいなア。」次郎助「アレどうでも俺には女の相性が惡いさうな。」皆々「サアお出でなさりませ。」

ト踊地になり次郎助、萬野、三木藏、佐助、竹五郎、わや〳〵いうて奥へ入る。お岸殘つて跡合方。

お岸「ほんに此の萬次郎さんは、何故ござんせぬ事ぢややら、貢さんが折角尋ね索めさんした下坂の刀とやら、お渡しなされたう思召しても今に來て下さんせず、こりや寧そ萬次郎さんの所へ一筆書いて遣るが可からうワいな。」ト硯箱卷紙を取り出し書かうとして、「ほんに萬次郎さんは二見村に居やしやんすとのこと、文は折角認めても、何處を的所に遣られもせず。いつそ貢さんの所へ行て、會はしやんしたか一寸便りを聞いて來ようか。イヤ〳〵貢さんの所へ行かうと思うても、あの奥に來てゐる喜多六が、身請せうのなんのというて、それがしみ〳〵わしや煩い、身請の沙汰を眞實聞くが辛いに依つて、今日も一日無理酒で、心で心を散らして見ても、どうも彼の萬次郎さんの事が苦勞になつて、身請の事を知らせたいにも主の在所。エ、モウ辛氣な事ではあるワイなア。」ト辛氣なることなし。しめやかなる唄になり、向うより萬次郎著ながし一本ざし、頬被にてうか〳〵と出で來り、内を覗いて、

萬次郎「ヤそこに居やるはお岸ぢやないか。」お岸「ヤ萬次郎さん、今も今とてお前の噂、能うマア來て下

お岸「それ見やさんせ、持病の癪で寝ることは彼の子ばかりぢや御座んせぬ、この私でも今にも癪が起つて見やさんせ、上のお客と有らうが、親方の御意で有らうが、ハテ病には勝たれやせん。客に逢うて癪を起すは女郎の常、あの子において作病ぢやござんすまい。アイ此の岸が證人に立つワイなア。」次郎助「そもじがそれ程に云ふ物を、俺だといつて遊ばで歸らうといふ物か。併し又斯ういつたら旦那がおれを、のろく見るであらうの。」お岸「何のマア、誰がお前を野暮ぢやといはう。お前は粋の骨頂ぢやワイナ。」次郎助「ナニ梅漬ぢやあるめえし。」竹五郎「何を仰しやります。」お岸「しかし御機嫌が直つて、私もマア落ちつきました、ナウ萬野殿。」萬野「アイナ、ぬしに腹を立てさしまして、私や大抵案じた事ぢやござんせぬ。シテお岸さん、喜多六さんは御寝なつてかえ。」お岸「おいの、喜多六さんは酒が過ぎて御寝なつてぢやワイの。」次郎助「それ／＼さういふ色みでもてる客があるに、俺ばかりは振りのめされる。コレお岸ばう、そもじは追つつけあの喜多六が身請して國へ行くとの事。何と嬉しいか。」お岸「エ、それが何の嬉しからうぞいな。」次郎助「いよ／＼ひぞるのめ／＼。ハ、、、時に岩次さんにお紺ばうは、まだ芝居から歸らぬか。」萬野「アイ芝居茶屋の大坂屋で飲んで居やしやんすとの事ぢやワイなア。」次郎助「ハテもう歸りさうな物ぢやの。」亭主「イエモウ今にお歸りで御座りませう、取りわけ今夜は江戸から登つた藝者衆が、今夜は面白い舞の囃子がござりますから、モウ今にお歸りで

向うへかゝる。捨白にて皆々次郎助を止める。花やかなる出の唄になり、向うよりお岸古市の女郎の拵へ、酒に醉ひたる科、若い者竹五郎の肩に凭れ、駒下駄を穿き、華やかなる模樣の前垂をしめ、花道中ほどまで來り、次郎助かへる〳〵の捨白にて、これに行き逢ひ、次郎助「ヤアお岸ぢやアねえか。」お岸「次郎助さん、門中をわや〳〵何でござんす。」萬野「お岸樣お聞きいな、次郎助さんが又例の歸る歸るで、私が止めるを聞かず、振切つて行かしやんすのぢやワイなア。」お岸「ハテ又毎度の野暮を云はしやんすのかえ、マア〳〵私と一緒に歸つておくれいなア。」次郎助「イヽヤ俺ア歸る〳〵。」ト行くを止める。お岸「ハテマア來て下さんせいなア。」ト鳴物の切にて此の人數皆々本舞臺へ來る。萬野「こりやお岸さん、例の酒機嫌ぢやな。」竹五郎「お岸さんは今まで、岩さんやお紺さんと芝居がへりに、何時もの茶屋で大酒さ。」お岸「それ〳〵私や今まで松坂屋の奧二階で、岩さんに交際うて、さいつ抑へつ飲んだと思はんせ、そこへ又鄰座敷の客衆がつけこんで、サア一座が殖えたと思はんせ。翌の日まで飲み續けても果てしがつかぬと思ふから、今宵舞の稽古があるを幸ひ、喜多六殿に幕を通して、旦那さんからの迎へぢやと漸う拔けて來やんしたが、次郎助さん、何でマア聲高に腹立てさんすのぢやぞいなア。」次郎助「ハテこれが腹を立てずに居られるものか、相手のお絹めが、何だか惡しく爲やアがる故、俺ア歸るといふのよ。サア〳〵歸るぞ〳〵。」萬野「イヤモウお絹樣は例の持病で寢てぢやワイなア。」

一福岡　貢　　　　　　　一伯母　お峯
一若い衆　大ぜい

本舞臺三間の間、上の方に中二階、障子たてきり、正面半舞臺にて美麗な障子をたて、伊達染の長暖簾をかけ、所々に油屋といふ掛行燈、障子の裏には引戸の戸棚、この中に刀掛、刀大分掛けてあり、門口にも家名を記せし掛行燈、すべて古市女郎屋の體、こゝに次郎助町人の形、萬野仲居のこしらへ、三木藏亭主の形、佐助若い者にて次郎助を宥めてゐる。所々に燭臺銚子杯を取り散らし、此の模樣よろしく踊地にて賑やかに幕明く。

三木藏、佐助「マア〱旦那、お靜かになされませ〱。」次郎助「忌だ〱、俺を田舍者だと思つて馬鹿にしてゐる。俺が合方のお絹が一向座敷に居をらぬ、さう惡しくされては一座の前へ顏が立たぬ。モウモウ歸るぞ〱。」萬野「ハテ其の樣にお腹をお立てなさんすな、お絹樣の癪が大抵強い癪ぢやござんせぬ、それ故些との中、內所で鍼してで御座んす、お客を宥めるは仲居の役、私がおわび申しまする。マア御料簡なさんせいなア。」亭主「それに亭主の私までが出てお謝申しまする、何卒御料簡なされて下さいませ。」佐助「モシ旦那、御機嫌直して一つ上りませ。」次郎助「イヤモウ家內中が其の樣に止める事なら料簡もしようが、いつも〱お絹が癪も久しいものだよ。」佐助「ハテ御持病なら致し方がござりませぬ。」次郎助「したが俺は斯う言ひ出しては、少とでも言ひ條も立てにやならぬ。マア〱今夜はかへしてくれ〱。」亭主「ハテマアお機嫌をおなほしなされませ。」次郎助「イヤ歸るぞ〱。」ト

貢「それで死骸に言分はない。」彦太夫「イヤモしがいお世話でござりました。」□○△「然らば私等も用はあるまい、コリヤとんだ太々にあつた事だ。」金兵衛「サア其方の諸埒がついたなら、俺が刀の代金は。」伯母「それ刀の代金百兩。」ト百兩投げ出す。金兵衛取つて、金兵衛「ヤレ嬉しや。」お岸「其のお刀が手に入れば、萬次郎樣の歸參も叶ふ。」伯母「片時も早う此の刀を。」彦「萬次郎樣へお渡し申して。」伯母「詮議の目的は德島岩次。」庄太夫「エ、これ伯母めが。」ト立ち寬る。伯母「蘇生つたら密書の文體。」庄太夫「ヤ。」伯母「一々讀んで詮議をせうか。」庄太夫「そんなら又死んだ。」トばつたり倒れる。貢「いかいたはけな。」庄太夫「思へば〳〵。」伯母「彦太夫樣。」彦太夫「エ。」伯母「いかい御馳走。」幕。

三幕目　古市油屋の場／返し伯母内の場

一若い者　半次	一亭主　三木藏
一同　竹五郎	一客　次郎助
一同　佐助	一藍玉屋喜多六實ハ德島岩次
一仲居　萬野	一今田萬次郎
一女郎　お岸	一德島岩次實ハ藍玉屋喜多六
一同　お紺	一藤浪左膳
一同　お鹿	一料理人　喜助

外へ詮議はかゝらぬ筈。」貢「ハテ死んだとあれば是非に及ばぬ、御師を害めた言譯は、此の密書を持つて、後の事は俺がする、穢れた亡者は土地に置かぬが所の作法、イヤナニ禰宜達、庄太夫が彼の死骸、國境の山へ持ち行き火葬にさつしやい。」ト庄太夫恟り。禰宜「それが可い、幸ひわれ等は白帳で。」皆々「葬禮を立てませう。」講頭「社杯は則ち施主。」皆々「サア／＼葬禮を始めませう／＼。」ト皆々立ち上る。庄太夫慌てて彦太夫が裾を引き色々こなし、彦太夫色々あつて、彦太夫「ア、これ／＼滅相な、たとひ死んでも二十四時は見合はすがお定まり、火葬も土葬も外ではさせぬ、伯父ぢやワイの一家ぢやワイの。」伯母「イエ／＼なんぼ御一家でも、法式は破られまい、コリヤ矢張火葬が可うござんせう。」ト庄太夫術なき科、彦太夫うじ／＼する。貢「ハテ亡者に未練はかけぬもの、一刻も早く持ち出した持ち出した。」皆々「心得ました。」貢「氣の毒ながら所の作法、ドレ其の死骸を。」ト立ち寄るを彦太夫とめて、彦太夫「ア、これ待つた、彼の死骸買ひませう。」貢「何と。」彦太夫「サア死骸さへ買ひ取れば火葬も土葬も此方の勝手、ぢやに依つて買はう。」伯母「成程コリヤ有理なお詞、死骸さへ買ひ取れば密書の詮議にも及ばぬ道理、とかく浪風立たぬ樣に、この佛は賣るが可からうワイの。」貢「いかにも佛は賣りませうが、亡者の價は金百兩。」彦太夫「アノ死んだ男を百兩とは、そりや又餘り。」伯母「高くば矢張火葬々々。」彦太夫「ア、これ氣の短い、きなかも値切らずそれ百兩。」ト金を渡す。伯母受取り。

出す。お岸「女郎の文か知らねども、私が拾つて伯母樣へ。」ト取りに寬る。貢ひき廻して當てる。庄太夫たぢ〳〵として上の方へウンと倒れる。庄太夫「南無三それを。」ト取りに寬る。貢早う讀んで見や。」ト手紙を渡す。貢取り上げ、貢「密書を以て申し入れ候、かの青井下坂の刀所持致す山田の町人、國遠致し行方相知れず候間、見合ひ次第かの刀を奪ひ取り相渡さるべく候、首尾なり候上は、國許の伯父大學殿へ申し達し、武士に取立て申すべく候。庄太夫殿へ岩印。ムヽ、先月二見の浦にて手に入つた文體。ムヽ、國許の伯父御大學殿、コリヤ詮議の蔓に取り付いたワイ。」ト此の内庄太夫心づき顏を上げこれを聞いて、ちやつと又氣のつかぬ思入、金兵衛うじ〳〵する。彥太夫科あつて、庄太夫「下坂の刀返しませう。」伯母「御得心が參りましたか。」彥太夫「密書の譯は知らねども縺れの來さうな此の刀、元へ戾せば出入は五分々々、ぢやに依つて賣らうといふのぢや。」伯母「さう無うては叶はぬ所、サア紛失の百兩。」ト彥太夫金を取り刀を渡して、彥太夫「かうすれば彥太夫に言分は有るまいな。」金兵衛「金が濟めば下坂は俺が刀。」ト取りにかゝる。貢引きまはして、貢「イヽヤ此の場の落著、詮議のかゝつた庄太夫、何も彼も彼奴にほざかせ。」ト庄太夫目がけかゝるを彥太夫へだて、庄太夫「イヽヤ庄太夫にせんぎはない。」貢「ヤなんと。」庄太夫「アノ庄太夫はたつた今死んだ、くたばつた。」貢「なにがどうだ。」彥太夫「胛腹の當身で正氣を失ひ、アレ彼の如く目を見つめて死んで終つた、密書の宛名が死んだれば、

扨こなたが何にも知らぬワイの、此のお祓の中にはさいぜんの百。エ、これ鈍なことで術ない〳〵、どうも此のお祓は遣られぬ〳〵。」伯母「たつてならぬと仰しやるからは、此のお祓に申しぶんでもござりまするかえ。」庄太夫「サアそれは。ア、これ申しぶんはなけれども、どうもこれは遣られぬ〳〵。」伯母「是れはしたり、お名さへ正直庄太夫さま、よもや胡亂もござりますまい。」庄太夫「なんの胡亂が。」伯母「サアそれぢやに依つて持つて歸るので御座ります。」庄太夫「サアそれぢやに依つて渡されませぬ。」伯母「ハテお渡しなされまし。」庄太夫「イヤ遣られぬワイの。」トいろ〳〵揉み合ふ拍子に、お祓の中よりみだけ小判ばら〳〵とおちる。伯母「ヤお祓のうちから多くの金が。」庄太夫「それを。」ト蒐るを伯母支へる。貢手早く金を集め。貢「こりやこれ凡そ百兩餘り、此の裏に入れて有つたは。」ト庄太夫に目を注け、「はてなァ。」庄太夫「そんなら先刻の金を彼の中へ、エ、、。」ト肝を潰し、庄太夫色々術なき科、貢金を紙に包み伯母へ渡す。伯母「これも矢つぱり伊勢の神隱し、金子が出れば太々を買ひ取るにも及びませぬ。彦太夫樣、唯今の刀改めて此方へ質請け致しませう。」庄太夫「イヤこれは。」庄太夫「伯父貴一旦買ひ取つた刀、戻す事はなるまいぞ。」庄太夫「オ、戻す事はならぬ〳〵。」貢「金にかへて下坂の刀を欲しがる庄太夫、汝が胸にも一物がなけりや叶はぬ。」庄太夫「ハ、、我が心に引較べ、一物も二物もナニ有る物か。名さへ正直庄太夫。」伯母「その正直なこな樣の懷中から、落ち散つた此の手紙。」ト手紙を

ば此の刀。」金兵衞「これそれを。」ト心遣ひ、伯母制して、伯母「すこしの中お待ちなされて下さりませ。お渡し申しませう。」彥太夫「たしかに受取つた。」ト刀を受取り、伯母「斯樣に致しますれば、アノ貢に盜賊の惡名はござりませぬぞえ。」彥太夫「何の有らう、疑ひは晴れました。」お岸「伯母樣のお世話で貢樣の惡名は霽れたなれど、萬次郞樣のお身の上が案じられて、私やどうもそれが。」金兵衞「案じるは此方も同じ事、アノ刀を質に置き其の代金はどうするのぢや。」伯母「サア唯今と申しては御座りませぬ。先程も申す通り二三日の所をどうぞ。」金兵衞「イヤハヤ悃れた女だ、俺が方へ金も濟まさず、見る前で質におき、そつちの勝手は可からうが、こつちの勘定が合はぬ。モウ破れかぶれだでんどへうせろ。」伯母「何れへなりとも參りませう。」金兵衞「ハテふてくさりな女だ。」彥太夫「こつちに居ては係りあひだ、サア〳〵早く歸らつしやれ。」伯母「イヤモウお指圖なくとも歸ります、左樣ならばドリヤお暇申しませう。」ト、正面に飾りおきし金の匿してあるお祓を取り行かうとする。庄太夫うろたへ伯母を引きとめ、庄太夫「ア、これ〳〵それをどうするのぢや〳〵。」伯母「ハテ太々を讓り受けました上からは一萬度のお祓、私がまうし受けて歸ります。」庄太夫「エ、滅相な、それを遣つて耐るものか。」伯母「ホ、、、太々の施主がお祓を持つて歸るのに、また遣るまいとはコリヤどうで御座ります。」庄太夫「イヤサ有理なことだが無理といふものだ。」彥太夫「コレサ庄太夫、お祓の三つや四つ遣つて仕舞やれ。」庄太夫「ハテ

儉なされて下さりまし。」ト色々金兵衛を宥める。金兵衛不承々々控へる。伯母刀を彦太夫が傍へ持ち行き、「彦太夫様、ちつとお目にかゝりたう御座ります。」彦太夫「ナニ俺にか。」伯母「御苦勞ながら。」ト庄太夫片側へ寄る。彦太夫前へ出で、彦太夫「何で御座るな。」伯母「唯今お聞きなさるゝ通りのしぎ、主人孫太夫様よりお留守を預かるお前様、スリヤ主人も同然、紛失の百兩たんぞく致す間の質物をお取りなされて下さりまし。」彦太夫「何質物とは。」伯母「此の刀は則ち青井下坂の正銘、判金五十枚の折紙、お聞きもあらんが彼のお方より所望して申し請けまする刀、大切なる品なれど、寶は身の差合。どうぞ此の刀を質物にお取りなされて、今日の太々をお讓りなされて下さりまし。」貢「アイヤ伯母者人、其の刀を渡しましては。」ト金兵衛もハア／＼と思入。お岸「萬次郎様の歸參も叶はず、というて此の場の手詰。」貢「ハテ身に覺えなき惡名受けても、其の品ばかりは。」伯母「ハテ惡い合點、マア控へて居や。彦太夫様、どうぞ此の刀を。」彦太夫「なりませぬ、名作は大名道具、社人の家に要らぬ物。百兩の質に取る事は否でござる。」ト庄太夫聞きつけ、庄太夫「コレ／＼伯父貴、青井下坂とあれば、アノ岩印から賴まれた註文。ナア明いた口へ持ち込んで來た代物、コリヤ太々を賣る方が可からうぞえ。」ト彦太夫思入あつて、彦太夫「ム、さうぢや、下坂に相違がなくば質物に預り、太々を賣りやりませう。」伯母「いよ／＼此方へ讓り受けまするぞえ。」彦太夫「ハテ此方に相違はござらぬワイの。」伯母「左様なら

養子、末々は妾と女夫の約束、スリヤ貢樣は此の家の跡とり。父樣の金は貢樣の金も同然、わが物をわが遣ふに盜人といふ法はないワイの。」庄太夫「如何さま是れは道理、もつともな。」彦太夫「これさ何も其の樣に脆くなる事は無いワイ、此の家の留守中は俺が預つた此の彦太夫が主人も同然。貢めが聟約束が有らうが、盜人と知つて親類の俺が聟には取らぬ。四も五もいらぬ榊は俺が預つた、きり〱呵責め。」庄太夫「合點だ。」ト彦太夫は榊を引きつける。伯母拾ひし手紙を下の方にて見てゐる、庄太夫貢を引きつける。伯母「マア〱待つて下されまし。」トとめる。庄太夫「コリヤ伯母御、俺を止めて言譯でもあるか。」伯母「サア申譯はござりませねど、緣に繋がる貢が惡名、此の場のあかりを立てたう存じまするから。」庄太夫「そこで止めるか。」伯母「アイ。」庄太夫「シテ惡名を消す仕樣があるかえ。」伯母「アイ賣つて下さんせ。」庄太夫「賣れとは何を。」伯母「サア原の起りは太々執行、此方へ買ひ取れば金の行端も盜人の吟味も及ばぬ道理、ぢやに依つて今日の太々を私が方へ賣つて下さんせといふ事でござります。」庄太夫「コレ〱お伊勢樣の奉納の太々、端金ではいかぬ事、しかも今日は六貫目の太々、小判で百兩、此方の方へ買ひ取らうといふ金があるか。」伯母「なる程其の金辨へませう。」庄太夫「アの百兩の金をや。」伯母「ハイお目にかませう。」ト袱紗より刀を取り出し科、金兵衞肝を潰し、此の刀に手をかけ、金兵衞「コレ〱此の刀どうするのぢや。」伯母「サ、何事も惡い樣には致しませぬ、少しの間御料

やならぬ、サア〳〵早く連れて行け。」金兵衛「合點で御座ります、サア女奴うせろ。」ト伯母をひき立てる。庄太夫貢を引付け、庄太夫「サア百兩の有所をぬかせ。」金兵衛「騙つた刀を戻さぬか。」庄太夫「在所を吐せ。」金兵衛「刀を戻せ。」ト兩人して伯母貢を散々にこづきまはす。此の時上の障子を明けお岸出ようとするを貢見て、貢「アこれ出ては悪い、思ひがけなき災難に此の場のしだら、それに其方が爰へ出ては何かの妨げ、此の場には御座らねど萬次郎様のお爲にも悪い程に、必ず〳〵知らぬ顔して爰へ出まいぞ。」ト是れにてお岸障子の陰に窺ふ。庄太夫「サア是れから金の詮議、血筋の伯母にも疑ひ掛つた。二人ながら詮議は俺が。」ト伯母貢を引きつけ、有合ふ棕梠帚にて散々に打つ。お岸耐へかねて此の間へ駈け出で、庄太夫を止め、お岸「マア〳〵待つて下さんせ。」庄太夫「ヤアわりや先刻の伯母が妹と云つた女、まだ歸らずにうせ居つたか、汝も血筋だ疑ひが三分一かゝつて有るぞ。」お岸「どうしてマア私がそれを。」庄太夫「知らざア退いて見物しろ。」お岸「ぢやというて此の難儀をどうしてマア。」庄太夫「エエ面倒な。」ト突き退け貢へかゝる。此の時庄太夫懐中より以前の手紙隕ちる。お岸拾ひ、お岸「庄太夫殿へ、岩印。」ト思はず讀む、伯母聞いて、伯母「コレ。」ト抑へてお岸が持つたる手紙を取り懐中する。庄太夫これを知らずに貢へ蒐る。此の時榊走り出で庄太夫に縋り、榊「コレ庄太夫、貢様は盗人ぢやないぞ。」庄太夫「何を娘子供の知つた事ぢやない、退いてござれ。」榊「イ、ヤ退くまい、貢様は父様の

ゐる此方、盗人といふたがあやまりか、但し盗まぬといふ證據があるか。」貢「サア證據は無けれども全く此の身に。」庄太夫「此の錠はどうして持つて居さつしやる。」貢「サアそれは。」庄太夫「金盗んだか。」貢「全く以て。」庄太夫「シテ此の錠はどうして。」貢「サアそれは。」庄太夫「サア〳〵どうだ。」ト貢當惑する。「ハヽ、外の者を欺すとは違ふ、何もかも早う白狀して終はつしやれ、爰な大盗人め。」ト貢伯母が方へ心遣ひあつて、貢「ハテ思ひがけもない此の場の災難、これといふも子孫までも刀の祟り。」彦、庄「ナニ刀。」貢「ハテ是非もない物ぢやなア。」金兵衛「イヤハヤ思ひよらぬ所へ來て怖い事を聞いた。それ程盗みをする貢が、騙者の伯母の仲人に入らうとは確かな請人、騙者の請に金盗人、こんな確かな事もあるまい、イヤモウ餘り惘れて物が云はれぬ。」彦太夫「これ〳〵お主は何處から來た、何者だ。」金兵衛「ハイ儕は金兵衛といふ山田の町人、こゝに居る貢が伯母に百兩の刀を騙られ、此のお家へつけこんで詮議に參つたところ、今の金の紛失を聞いて、いやモウお氣の毒に存じます。」彦太夫「ア、そんならアノ伯母めが百兩の刀を騙り、それを附けこんで來たといふのか。」金兵衛「左樣でござります。」彦太夫「扨々重ね〴〵のぶとい奴等、騙りをして此の家に落ち込み、後を託つた俺にまで、どんな難儀をかける相談にうせ居つたも知れぬ、思へば〳〵恐ろしい事。これ〳〵庄太夫、其の貢めを呵責んで金の有所を吐かせろ。金兵衛とやらは其の伯母を何處へなりと連れて行け、此の家の關係合になつち

ぬと申さう、其の樣に疑はるゝなら可うござる、儕も身晴ぢや、どの樣な誓言でも立てませう、ハテ挍味な物のいひ樣をする人ぢや。」庄太夫「ハテ腹が立つなら堪忍さつしやい、儕は又貴樣の爲を思うて下から出て此の樣にいふのぢや、よう御座る、是れからは親でも子でも兄弟でも、蛇の目を灰汁で洗うた樣に詮議して見せう、其の時後悔さつしやるな。」貢「何しに、儕も身晴、どの樣な事でもして見せませう。」庄太夫「その詞反故にさつしやるな、貢殿、コリヤ貴樣の所持の品ぢやござらぬか。」ト懐中より以前の紙入を出して見せる。夫「如何にもそれは儕が紙入でござるが、それがどうぞしましたか。」庄太夫「これが貴樣の紙入なれば、こゝな貢の大盜人め。」貢「ナ、、、、なんと。」庄太夫「サア斯う恥をかかすまいと、物事圓ういへば乘上りのした盜人根性。簞笥の錠を捩ぢ斷り百兩の紛失、其の簞笥の傍に落ちてあつた此の紙入。餘り古風の樣なれど詮議は詮議、持主の貴樣に疑ひがかゝる。ハテ神は見通し、大神宮樣がないと思ふか、天命は遁れぬもの、サア百兩の金爰へ出せ。」貢「スリヤ其の紙入が奥の間に落ちて有つたに依つて、貢を盜人ぢやといふのか。ハテ貴樣も淺はかな詮議の仕樣、紙入が落ちて有らうが、盜みさへせにや此の身は潔白。」庄太夫「イ、ヤ潔白とはいはれまい、コレ此の紙入の中に捩ぢ切つた錠が入つて有つた。これでも貴樣は潔白か。」貢「ナニ捩ぢ切つた錠が其の紙入の中に、ドレ。」ト寄らうとするを庄太夫突廻し、庄太夫「どつこい滅多に寄るまい、捩ぢ切つた錠持つて

庄太夫、曇り霞みのない俺ぢや。シタガ人一人落すは罪ぢやけれど、大勢の人に疑ひかける位なら、ア、せう事がない、小の蟲をころして大勢を救はずばなるまい。ア、これ嫌ながら共吟味せざなるまい、コレ貢殿、一寸爰へ來て下され。」貢「アノ貢に何ぞ用がござるか。」ト庄太夫が傍へ來る。庄太夫「貢殿今聞かつしやる通りぢや、伯父彥太夫殿が金の見えぬで大勢へ疑ひかけて御座る。マア第一甥の俺からして疑ひ掛つてある、濟む事なら是れなりに濟まさうと思つたが、共吟味とあれば是非がない、サア荒立てぬうちに早ういうて終はつしやれ。」貢「コレ言うて終へとはソリヤ何をいふので御座る。」庄太夫「ハテ斯う和かにいふからは何の隱す事はない、惡氣ではあるまいがコリヤ誠に間違といふ物。太々の百兩、定めて貴樣が側へ仕舞つたので有らう、伯父貴の氣休め、有所をいうて終はつしやれ。貢「是れさ庄太夫殿、スリヤ見えぬといふ百兩の金を、俺が盜んだといふのか。」庄太夫「これはしたり何盜まうぞいの。貴樣今日は此の樣な取込ゆゑ、其方が側へ仕舞はれたと見える。それぢやに依つて仕舞所を早ういうて、皆に落著かせるが可からうといふ事いの。」貢「庄太夫殿、ハテ扠こなたは味な物の言ひ樣、百兩の金の行場、一向存ぜぬ貢に、無理に此方は仕舞所を知つてであらうとは、コリヤ物和かにいひかけて俺を盜人にするのか。」庄太夫「是れはしたり勿體ない、さういふ事では微塵もない、面々の身晴故、いひ難い事も此の樣に打ちわつて。」貢「默らつしやれ、知つた事なら何しに存ぜ

講頭も一緒にわや〳〵と出で、講頭「そんなら先程差上げた百兩の金子が紛失したかな。」彦太夫「そこ許から受取つた太々の百兩、奥の簞笥へ入れて置いた所、此の取込に何奴か盜みました。何だか今日は怪しい奴が入込む故、こんな事が出來ようと思つた。」口「役目で來た此方等も、金紛失と聞いては各人の身晴、どの樣な詮議でもさつしやるがよい。」今「さうとも〳〵、彦太夫殿はやく吟味して、此方共の身の垢をぬいて下されい。」皆々「さつしやれ〳〵。」彦太夫「ハテ此方衆より、孫太夫より留守を預つた此の彦太夫が潔白を立てにやならぬ、其の吟味の仕樣は。」ト茶椀に水を入れ持つて來り、「これからは此の茶椀の水へ、御鬮を灰にして一人づゝ飮んで貰はにやならぬ、盜んだ者は忽ち血を吐くと、コリヤ言はいでも知れた事。まづ差詰俺が甥の庄太夫、御鬮を燒かば汝から先へ飮まさにやならぬぞ。」庄太夫「エ。」ト恟りして、「コレ伯父御、お前マア無理をいはんせ、それを俺が飮んで可いものか、知らぬ事ではなし、お前もソレ先刻にあれ程。」彦太夫「コレ〳〵何をうか〳〵といふ、ハテお主に先へ飮まさねばならぬ程に汝から飮め。俺が甥の庄太夫に飮ませるからは、贔屓偏頗の沙汰はない、誰にでも飮ませる。爰へ來てゐる客人でも、貢は勿論飮まさにやならぬ、汝一人疑やせぬ、此の座に居る衆は皆々疑ひが掛つて有る。ぢやに依つて面々の身晴、共吟味にナアそれ、急度ナア合點か。」ト目顏で知らせる。庄太夫呑込み、庄太夫「なる程飮みませう、どの樣な事でもして見せませう、ハテ名さへ正直

聞いて下さんせ、兄様は死なしやんしても家を絶やさぬ鄕士の家筋、何の非道な事しませう。鳥羽の家へ歸つてから、衣類著そげを代なしても此方樣には損はかけぬ、腹は立たうが其處を偏に料簡して私が歸るまで待つて下さんせ、コレ拜みます、拜みますワイなア。」金兵衞「否ぢや〳〵待つ事ならぬ、でんどへうせろ。」ト引立てる。貢金兵衞を退け、貢「コリヤ金兵衞とやら、金濟まさう。」金兵衞「ナニ金濟ます。」貢「如何にも、アノ下坂の刀質に取つたあやの拔けぬ山田の町人、必然詮議を。というてはサア物がない刀の代金、この貢が遣はさうが、それも今というては出來ぬ、一兩日中にきつと調達して渡さう程に、今日の所は料簡して。」金兵衞「コレ〳〵貴樣の顏で一兩日は愚か、半日でも待たれぬワイの、帶刀はして居ても、こな樣の身分はこゝの食客同然、殊に此の女の甥といふこと、伯母とぐるで大金になる彼の刀を騙るのか、エ、爰な相盜奴。」ト貢むつとして立ち蒐る。伯母とめて。「何ぢや何ぢや、耳くじり拈くつて此の金兵衞を切る氣か、面白い何處を斬る、サア斬れ、斬らぬか。何ぼ御師でも町人を騙つて、其の上に人を斬るといふ事が神道の法にごんすか、それとも金濟ますならサア百兩今受取らう。」貢「サアそれは。」金兵衞「金がなくば代物返せ。」伯母「サアそれは。」金兵衞「サアサアアサアどちらへなりとも返事を吐せ。」ト此の時奥ばた〳〵にて、彥太夫「サア〳〵〳〵大事ぢや〳〵、太々の金が紛失した、家内の者一人も動くまいぞ。」ト奥より云ひながら出る。跡より庄太夫禰宜大勢，

それならば料簡して遣る、事によると汝ゆるさぬぞ。」金兵衞「コレ〳〵滅多に麁相いふ樣な男ぢや、ない、山田では人も知つてゐる胴脈の金兵衞。騙者といふは外でもない、下坂の刀を彼の女に賣つた所が、刀は彼方へ捲上げ代金を濟まさぬワ、それで騙者といふたが過りか。」貢「スリヤ何といふ、あの下坂の刀は。」ト伯母へ思入。伯母「なる程、騙者といふに無理はない。其方に忠義が立てさせたいばつかりに此の刀を。」ト貢こなし。金兵衞「コレ〳〵今聞けば此方樣、この女子を伯母ぢやといふが、そんなら伯母甥いひ合はして此の金兵衞を衒るのか。」貢「何で私が。」金兵衞「何ぢや〳〵顏に筋ばらんすな。もと彼の刀はさる侍から質に取つた代物、日限がきれたに依つて刀は流れ物、賣渡しに持つて往たを、聞けば俺が逃げたのふけつたのと云ふげな。ナニ盜み物ではあるまいし、質物の流れを賣るに何處から點のうちては無い筈。鳥羽の城下で求めたい者があるといふ故、尋ねて往て相談極め百兩に値が出來て、それ〳〵其の女が百兩で買はうといふたが女の事、コレ怪しいと思つた故、近所で聞けば鄕士の家筋、相違もあるまいといふ人も有る故、如何樣と陷つて大枚な代物を預け、あくる日どうぢやと往て見た所、家内の奴等が留守ぢやといふ故、それから五六度も足を運び、擧句の果ては亡命同然。何でも此處らに緣者があると聞いた故、御師の家を一軒づゝ嗅ぎ歩いた所が、見つけたは俺が幸運。サア金渡すか但し代物返すか、どうするのぢや。」伯母「サア有理ぢや道理ぢやが爰を能う

し此の刀、今此の所で祖父親人にも御對面を致す樣に存じられて。」ト刀をつく〴〵と見て愁への科あつて、「伯母ぢや人のお志、エヽ忝う存じます。」　お岸「今あなたのお話で始めて聞いた刀の譯、其のやうな怖い物を、もし萬次郎樣の手に渡つて、彼方のお身に凶事が有るまいかと、私やそれが案じられますワイな。」　伯母「ハテわつけもない、其の萬次郎樣も御主よりのお指圖で、刀を詮議のお役、今もいふ通り持つ人に依つて又立身出世の方も有る、誠に性に合へば其の身の德になる事もまゝ有るとの噂でござんすワイなア。」　貢「なる程一合も取つた身が浪人するも此の刀。」　お岸「立身出世も此の刀。」　伯母「まことに持つ人に。」　三人「よるものぢやなア。」トかすめたる以前の神樂になり、向うより金兵衞、合羽町人の形にて出で、　金兵衞「オヽたしか向うの家ぢや、オヽあれぢや〳〵。」ト門口へきて、「ハイ少とお賴み申しませう〳〵。」トあわたゞしくいふ。是れにて貢お岸へ囁き上の障子屋體へいれる。伯母刀を袱紗に包み片脇へ隱す。金兵衞表を叩く。　貢「ハテ仰山な、誰ぢや。」ト云ひながら門口を明ける。　金兵衞「ハイ私はちとこゝなお家に尋ぬる物が有つて。」トいひながら伯母を見つけ、「ヤア見つけたぞ〳〵。」トこれにて伯母逃げうとするを捉へ、「コリヤ逃がさぬワ、俺を見て逃げうとは然うはさせぬ、大騙者の衒妻め、でんどへ引摺つて汝。」ト伯母を引立つるを貢支へて、　貢「コリヤ何するのぢや、伯母者人を騙者ぢやのイヤでんどへ連行くのと麁相をいふな。コリヤ大方人違ひであらう、

と聲をかけ、尋常に討ち課せ、邸へ歸つて祖父樣娘子供に暇乞ひ、命にかへし此の下坂、必ず人手に渡すなと、腹へぐつと押し立てて右の脇腹一筋に、唯一言の義によつてお身の上を果されたワイなう。サア汝の父が俺の爲には兄樣、其の節よりお暇たまはり、志州の鳥羽に緣を求め、鄉士となつて暮す中、兄樣の御病氣。貧苦には迫れども遺言なれば此の刀、飢ゑ死ぬるとも放さじと、藥も飮まず祖父樣の三囘忌、五月四日の月日も變らず御臨終。悲しいとも辛いとも、情なやお袋樣も又泣死。後に殘るは伯母と其方、まだ九歲の頑是なし。三年に三人まで同じ月日に死ぬる事、不思議と思ふ氣が注いて、刃物の合性見る人に刀の目利を賴みし所、祖父樣も父樣も同じ水性、刀は砂の流燒、土剋の水と相剋する故、以ての外の不吉の刀、これを其の儘持つならば子孫まで祟るとの鑑定。力及ばず捨賣に代なし、其方は此の家へ養子となし、まはり〳〵て十七年、古主のために此の刀を探ぬると聞きしも幸ひ、心をつくして買ひもとめ、持つて來たは伯母が寸志。靑井の血筋は代々祟る此の刀、手に觸れると、はや些細なれども今の難儀、親祖父の命を絕ち、子孫まで零落れしは皆これ故と、科ない刀に怨みが懸り、折つても捨てたい心なれど、今では古主へ忠義の刀、善ともなり惡ともなり、吉凶は持つ人にもよる刃物の因緣、此の身の懺悔、樣子といふは此の通りでござるワイなう。」ト貢お岸思入あつて、

貢「ア、家に祟る刃物の由來、承つたは唯今が始めて、とはいふものの祖父の魂籠められ

の事ぢやござんせん、コレ貢ぢやつと其方に見せる品があるコレ。」トずつと立ち門口を閉める。合方になり、持つて來たる刀を貢の前に置き、「コレ貢、此の刀見知りがあらう、改めて見や。」ト貢袱紗を取り一寸見て、貢「緣頭目貫まで世の常ならぬ拵へ。」ト拔きかけ、「ム、燒刃は則ち砂流し、無銘なれども疑ひもなきコリヤこれ靑井下坂の刀、先頃山田に於て左膳樣より仰せ渡され、尋ね索むる此の刀、伯母者人にはどうしてお手に入りました。」ト鞘へ納める。伯母刀を取り思入あり。伯母「此の刀につき悲しい話の一通り、お岸殿も聞いて下され。吾々は元阿波の家中、先祖は靑井刑部とて貢が爲には大祖父樣、百五十石もお取りなされたお方、同家中濱田十平といふ千石取の旗頭、祖父樣とは無二の入魂、ある時他所より賣りに來りし此の刀、疑ひもなき下坂故祖父樣のお目に止り買ひ求めたい志、かの十平も望みを懸け、代物を問へば判金五十枚の折紙、當座の興とは云ひながら、十平が麁相の一言、小身者の靑井刑部、其方が風體にて此の刀を求むるかと、ふと云ひしが互の運のつき、苦笑ひして其の場は濟みは濟んだれど、取沙汰は國一ぱい、いはれぬ刑部が齒も立たぬ刃物好み、高知の十平と張合うて、人中で恥辱を受け、あれでも武士か侍かと、口々譏るを祖父樣のお耳に入り、此の刀買はいでは一分立たぬ武士の意地、武具馬具衣類夜の物まで代なして、極めの價に買ひ求め、靑井の名前を其の儘、靑井下坂とこれを號け、明くれば五月四日の朝、登城の道に待ち受けて、十平やらぬ

つて廻つて娊娣の、謂れ因緣故事來歴を初めて聞いた、ナウ伯父御。」彦太夫「なる程潔白な言譯、マアそれならそれにもして遣らう。モシ萬次郎とやらの相方の女郎なれば、先刻に阿波から手紙、ナウ庄太夫、この儘捨てては措かれまい。」庄太夫「ハテあれ程にいふものを聞き入れぬも無得心。僞りいへば神の御罰、ハテ神は見通しでござります、ナウ伯母御。」伯母「なる程左樣でござります、そんならお疑ひは晴れましたかえ。」庄太夫「オヽ貴樣の言廻しで疑ひは晴れた。貢に用があるならば、爰でゆるりと話さんせ、サァ伯父御奥へ往かうぢやないか。」彦太夫「如何樣さうしませう、無駄な事に氣を揉んだワイの。」伯母「左樣ならばお二人樣。」庄太夫「伯母御話して行かんせ。」ト歌になり彦太夫庄太夫思入あつて奥へ入る。跡合方、貢こなしあり。貢「伯母者人、久振でお目に懸り、樣々の事に御苦勞かけました。何を隱しませう此の女中は、左膳樣から頼まれました若旦那、モウ身に引受けてお世話申す萬次郎樣の相方、古市の。」お岸「油屋に勤めしやんす岸といふ女郎でござんす。久しう其の萬次郎樣にお目にもかゝらず、貢樣に遇うて委細を聞かうと、此の家へ來る事は來たけれど、古市の女郎が貢樣と懇意に話するにも人目へ遠慮、それ故主の伯母ぢやというて居いと被仰る故、お前のお名を騙り、疑ひ受けて今の難儀、誠の伯母樣に逢うて私や面目なうござんすワイなア。」伯母「何のマァ其の言譯には及びませぬ。兼々聞いた萬次郎樣とやらのお相方、お岸樣とはお前かえ。今日私が爰へ來たも外

い言譯、殊に太々の取込、コリヤ大方こんな怪しい女を引込み、講中の懸金でもしよしめる目算であらう。庄太夫、奥へ連行き急度吟味しやれ。」庄太夫「心得ました、サア二人共にうせろ。」トこの時伯母中へ入り二人を圍ひ、伯母「マア〳〵お待ちなされて下さりまし。」庄太夫「エ、邪魔な、女の知つた事ぢやないぞ。」伯母「アイヤ〳〵譯は存じませぬが、其處にゐる女子は何も怪しい者ぢやござりませぬ、アリヤ私の妹でござります。」庄太夫「ヤ。」お岸「アこれどうして私が。」伯母「ハテ其方は儕が妹のお雪ぢやワイの、どうしてマア爰へはおぢやつた。モシお二人樣、麁相なされますな、此の子は私が妹でござりますワイなア。」庄太夫「ナニ貴樣の妹だ。」伯母「ハイ妹でござります、ハテ妹ぢやといふに、此の子とした事が何を浮々と其方はマア姉の顏を見忘れてか、不調法な子ではあるぞ。」ト色々思入する。お岸呑込みたるこなし。お岸「アイほんに姉樣でござんしたもの、とんと見忘れ申しましたワイなア。」彥太夫「妹ぢやといふのか。」伯母「アイお聞きなされまし、鳥羽を出ました時は妹と二人連、往來の衆の仇口にも、どうでも彼は親子ぢやと申しました、謂うたも道理此の子と私は腹異りの姉妹、年は十五の相違、貢が爲には伯母なれど年は甥より五歲下、伯母甥の好みとて親しう話すを知らぬ目では、アリヤ大方古市の女郎であらう、其の萬次郎樣とやらの相方か、但しは貢が深間の女郎か抔と思はしやんすも無理ぢやござんせん。全くコリヤ間違ひ、私が妹に違ひござりませぬワイなア。」庄太夫「ハテも

かした、サアそれ吐して終へ。」お岸「エ、これ滅多な事さんすな、わしや貢が伯母に違ひはないワイなア。」庄太夫「まだぬけ〳〵と、吐さにや汝を。」ト立ちかゝる。後より貢つか〳〵と出で、貢「コリヤ庄太夫殿、伯母御を捉へて何とさつしやる。」彦太夫「コリヤ貢、お主も同じ樣に俺等が目を拔くのか、まこと貴樣の伯母といふは志州の鳥羽、其の伯母が來てゐるワイやい。」貢「ナニ、鳥羽の伯母御が。」お岸「アノ來て居やしやんすかえ。」伯母「そこに居るは貢ぢやないか。」貢「ヤ伯母者人、マア思ひがけない能うござりました。」ト當惑。庄太夫「どうぢや貢、汝が伯母に違ひあるまい、それに此の女を伯母ぢやの何のと、伯父御や俺を明盲にするのか。これ此の女は萬次郎とやらが馴染んでゐる古市のお岸といふ女郎、汝も同じ樣に古市へ通うて、お紺とやらいふ賣女奴とどれやつてうせるげな、其のやうな放埓者を此の家の娘に妻せ、跡式を遣らうとは、アノ孫太夫樣も大きなうつそり、取りわけ今日は太々のある大切な日に、女郎を引込む貢、サア此の女はお岸とやらであらうがな。」貢「アイヤ全く其のお岸とやらでは御座らぬ、滅多な事をいふまいぞ。」庄太夫「お岸でなくば汝が馴染んでゐる油屋のお紺か、それなれば猶以て座敷を穢す天罰しらず、神道の法に行ふ、サア女め此方へ來い。」お岸「ア、是れ私や貢と譯のある者ぢやない、なる程こな樣のいはんす通り、私やアノ古市の。」貢「ア、これさいうては却つて萬次郎樣のお身に。マア〳〵何事も控へて居さつしやれ。」彦太夫「何ぢややら貢が怪し

れより一萬度のお祓を見て、思入して包金の封印を切り、みだけ小判のまゝお祓の中へかくし、捨白にて元の所へ直して置く。伯母門口にて此の樣子を見てゐる。庄太夫このお祓に色々心遣ひの思入してゐる。 伯母「お早うお頼み申します。」 庄太夫「ドリャ取次いで遣りませうか。」ト奥へ行く。 伯母「心得ぬ今のそぶり、正しうあれなるハテなア。」ト思入。奥より彦太夫出で、 彦太夫「ハア、貢が伯母御が來たとは合點が行かぬ、先刻にも來たが、又伯母が來たさうな、ハテ今日は能う伯母のとれる日ぢや。」トいひながら門口へ來て、「マア／＼是れへ入らしやりませ。」 伯母「左樣なら御免なされまし、承れば孫太夫樣はお留守との事、シテ貴方樣は。」 彦太夫「拙者は孫太夫が弟彦太夫と申す者、合點が參らぬは先程も貢が伯母というて女中が見えられ、アレ彼の一間で今話最中、又候伯母が見えたとは、葛の葉吹きかへる菅丞相の木像か、ハレ面妖な。」 伯母「何と仰しやります、私より先へ貢か伯母ぢやというて參つた者がござりますかえ。」 彦太夫「あるとも／＼、そんなら先刻の伯母奴は衒りであらう、ドレ奥へ往て此の詮議を。」ト奥にて、 庄太夫「イヤ其の衒りの伯母、私が詮議して進ぜう、女奴うせろ。」ト障子の裏より庄太夫お岸を引く。「ヤイ賣女め、汝貢が伯母ぢやとアノ伯父御を騙し、貢奴に會ひにうせたは、大方萬次郎とやらが事を頼みにうせたので有らう、彼奴が事は阿波の大學樣からお頼みでけちを附けねばならぬ調市め、マアそれは扨おき、あのマア年寄つた伯父御を何で伯母ぢやと僞りぬ

彦太夫「それなら其の下坂の刀を手に入れて渡しさへすりや。」庄太夫「御師の跡式取らうより、一足とびに知行取。」彦太夫「どうぞ其の刀を手に入れたいものぢやなア。」ト此の時庄太夫、貢が落し置きし紙入を見つけ取り上げ、庄太夫「コリヤこれ貢奴が紙入、もし百兩の詮議があれば、その盗人を彼奴にぬり附くる、この紙入がよい品玉。」彦太夫「なる程コリヤ出來た。」トこの時奥にて神樂始まる。「アリヤかへし申しの神樂の音。」庄太夫「あのどさくさに何かの手番ひ。」彦太夫「ぬかるまいぞ。」庄太夫「合點ぢや。」と思入あつて彦太夫奥へ入る。庄太夫殘りこなしの中、この鳴物をかへて向うより伯母お峯、著流し抱帶綿帽子にて、袱紗に包みし刀を持ち出で來り、すぐに本舞臺へ來て門口に窺ひ、此の中庄太夫紙入を懷に入れ、件の狀と百兩の金を兩手に持ち、此の狀の文言の通り、刀さへ手に入れば出世の小口、こちらの手には百兩、手紙の通りにさへ行けば大きな出世、これが正眞の兩の手に味いものの摑みぐひとは今この時ぢや、うまい〳〵。」ト悅ぶこなし、門口より、伯母「ちとお賴み申しまする。」庄太夫「どうれ。」ト仰山にいふ。伯母「ハイ孫太夫樣は御在宿でござりますかな。」庄太夫「イヤ孫太夫は江戸へ往かれて留守でござりまする。何の用で何處から御座りました。」伯母「ハイ私は志州の鳥羽に居ります貢が伯母でござります、この通りお取次なされて下さりまし。」庄太夫「エ、あな面倒な、可い取次いで遣りませう、待つて御座れ。」トいひながら二色を持ちうろ〳〵して、手紙は懷へ入れ、そ

ござるワイの。」貢「否モウあの樣に見ゆれど、年は六十七でござります。」彥太夫「ハテ年よりは若い事でござる、幸ひ今日は太々でござる、コレ貢、伯母御を奧へ伴ひ御酒でも上げやいの。」貢「イエ〳〵伯母御はモウ下戶でござります。」お岸「アイ酒より何より、わたしや萬次郎樣に會ひたう御座んす。」彥太夫「ナニ萬次郎。」貢「アイヤ伯母御は下戶ぢやに依つて、酒よりは饅頭がよいと言はつしやるので御座ります。」彥太夫「ハテ下戶といふ者は。然らば煮花でもしかけさつしやれ。」貢「畏まりました、サア伯母御。」お岸「貢樣。」貢「これはしたり。マアござれ。」ト合方になり、貢お岸を伴ひ上の障子家體へ入る。彥太夫「扨あの伯母奴は六十七には若い事ぢや。七十になる此の伯父も、あれを見て謀叛が萌して來たワエ。」ト正面の襖を明け、庄太夫百兩の包を持ち窺ひ出で彥太夫を見て、庄太夫「伯父御爰にござりましたか、今奧で講頭の油斷を窺ひ、してやつた太々の百兩。」彥太夫「コリヤ靜かにしやれ、俺が兄なれど爰の孫太夫が有德、其の跡式を俺が甥の其方に繼がせ、娘の榊と妻せて、われが望みを叶へて遣らうと思ふ所へ、志州の鳥羽から養子にうせたアノ貢め、彼奴が有つては何かの邪魔、彼奴に越度を拵へて此の家をぼいまくつて仕舞へば、その跡式は心の儘。」庄太夫「それに就いて此の程德島の岩次といふ阿波の侍が、この伊勢路で質物に入れてある靑井下坂、詮議して手に入れてくれいとの賴み、その褒美には直に侍に取立てうと賴んで遣した此の手紙。」ト懷より一通を出して見せる。

見村へ伴れて往て逢はせて下さんせ。」貢「ハテ忙しない、今日は太々で大きに取込んでゐるワィの。」ト此の内奥より、彦太夫「貢どこへ行て居やるぞ、貢々。」ト呼びながら出で來り、「ォ、爰に居やつたか扨今日はめでたう太々も納まり、こんな悦ばしい事はない。悦びに一つ奥で飲みやらぬか。」貢「ヘエそれは有り難うござります、私はちと是れに用事がござります。」彦太夫「ナニ用がある。」トお岸を見て、「こなさんは何方から御座つたお女中ぢや。」お岸「アイ私やァノ古市の。」貢「ア、これ伯母御、なァそれ今いうた通り、私が伯母ぢやほどに、ソレ伯母御をわすれまいぞ。」ト思入にて知らせる。お岸「アイ成程、わたしや伯母ぢやさうに御座ります。」彦太夫「ハ、ア伯母御でござるか。」貢「なる程かね〴〵お前へもお噂まうした鳥羽の伯母でござります。」彦太夫「其の又伯母御が何用あつて御座つたのぢや。」お岸「サア私がサァ此の伯母が參りましたは。」彦太夫「何用でござる。」お岸「サァその用は。」ト支へる。貢「イヤ伯母御が見えましたは、アノそれォ、鬼の腕が見たいと言つて。」彦太夫「ハテ羅生門ではあるまいし、卵のうでたは有らうが、鬼のうでたがナニあるものか。」お岸「今日この伯母が來やんしたはァノ萬次郎樣。サァ孫でもなし、ホンニ甥、其の甥のあの人に會うて聞きたい事もござんす、そして爰の親御樣へ禮も言はうと、それで態々寄つたので御座んす。でござるワィの。」彦太夫「ようぞや〳〵、シタガ折悪い兄孫太夫の他行、會はつしやれいで殘念でござらう。ハテ伯母御にしては花やかな形で

あるに依つて大勢の人ごみ、萬一又お前を俺が合方のお紺とはき違へて、惡う氣取らねば可いが。オオよい事がある、俺が伯母御は鳥羽に居らるゝ、それを幸ひ、お前を誰ぞ問うたら俺が伯母ぢやといふ程に、其のとほり口を合はせておくがよいぞや。」お岸「それなら私やお前の伯母さんになつて話するのかえ。」貢「左樣々々、サア〳〵お煙草、よう御座りました、サア〳〵此方へ通らつしやりませ。」ト上へ通し煙草盆出す。お岸「エ、其の樣に慇懃にいうておくれないなア。」貢「ハテ伯母貴ぢやものハハ、、、シテ今日は何の話でござつた。」お岸「さいなア、私が今日爰へ來やんしたは、アノ萬次郎樣の事、久しう便り音信もなし、主の事はお前が身に引請けて世話なさんすに依つて、お紺樣と相談してお前を賴みに來やんした。何卒萬次郎さんに會はせて下さんせ、主に逢はねば私や死んでなりと仕舞ふワイなア。」貢「これはしたり滅相な、お前も概畧譯を知つてではないか、萬次郎さんが尋ねさつしやる刀も漸う手に入つたる所、若氣の至り惡者に欺されて、質に置いた靑井下坂、預つた奴が今に行方が知れぬ故の御逼塞。仔細あつて主の事は左膳樣から預り、二見の浦にお匿ひ申して置く物の、今では不自由なお身の上、お前の所へ中々通はつしやる事も出來ぬは有理。したが其の刀が出れば其の時は、私が世話して女夫にします、必ずきな〳〵思はぬがよい。勤めをする者の樣にもない、ア、野暮な子ではあるワイのハ、、。」お岸「そんなら必ず世話して下さんせえ、ならう事なら今日その二

ました。」お岸「そして貢樣のござんす所は此邊かえ。」幸八「アイ慥かに向うの家でござりました。」お岸「そんなら幸八樣。」幸八「ハテ家來に樣は御無用さ。」お岸「眞にさうぢやワイな。」幸八「サアお出でなさいまし。」ト矢張右の鳴物にて兩人舞臺へ來て、幸八内を窺ひ、「もしチトお頼み申します〳〵。」貢「オイオイ誰ぢや〳〵。」ト奥より著流し一本差にて出で、「御案内とは誰人でござります。」幸八「さう被仰るは貢樣かえ。」貢「汝はいれかたの幸八ではないか、何と思うて。」幸八「ハイ用があつて參りました。その用と申すは、お前樣のお世話なされます萬次郎樣の深まのアノ。」貢「エ、お岸殿を連れて來たといふのか。」幸八「ハイ左樣でござります。」貢「シテ何處に來て居らるゝ。」お岸「貢樣、此の間は久しうお目に懸りませぬ。」貢「オ、よう御座りました、見れば一廉のお內儀風、否又萬次郎樣の御新造というても恥かしからぬ姿ぢやワイの。」お岸「エ、又弄らんすかいの。」幸八「時に貴方のお目に懸つて私も落著きました。定めて若旦那の事でお頼みもござりませう、私は出直して又お迎へに參りませうかい。」お岸「眞にさうして下さんせ。」貢「なるほど此の子も俺に會うて話もあらう、俺が預る程に後方迎へに來てたも。」幸八「ハイ左樣致しませう、お岸樣ゆるりとなさいまし。」お岸「アイ大儀でござんした。」幸八「ドリャ往て參りませうか。」ト合方になり、幸八は引返して向うへ入る。貢「サア〳〵マア此方へ入らんせ〳〵。」お岸「誰も呵り人はないかえ。」貢「誰も呵る者はないが、折惡う今日は太々が

る。此の内榊は遁れ奥へ逃げ込む。兩人跡にて色々揉み合ひ、禰宜漸う跳ね返し起きるを、庄太夫又抱き附き禰宜を見て悸り。庄太夫「ヤア榊樣だと思つたら汝であつたか、エ、忌々しい。」禰宜「これ庄太夫樣、人に得心もさせずおつ轉ばして遁をいく氣か、私も昔は情しりぢやワイな。」庄太夫「エ、忌々しい、汝は何時までも居せろ。」ト踏み付け奥へ入る。禰宜「エ、何も知りもせぬ物を、能う惨い目に逢はせたな、念者になる氣かコレ庄太夫樣、色よい返事をせう、庄太夫樣ォ、イ〳〵。」ト腰を擦りながら奥へ入る。ト三味線入の神樂になり、向うよりお岸、著流し抱帶日傘をさし、幸八紺看板を被て一本差にて從き出で、幸八「申し〳〵お岸樣、さうお仕立てなされた所はいやモウ町の御新造はそこのけ、古市の女郎衆とは見えませぬ。」お岸「サア其の樣に見えればよいが、此の間中からこな樣も知つての通り、萬次郎さんは何かお身の過ちが有つて二見村にお忍びなさんすとの事、主を世話なさんす貢樣に逢うて萬次郎樣の安否が聞きたさ、家の首尾は仲居衆に賴み、斯うした姿で忍んで來る事は來たけれど、何卒貢樣に會うて萬次郎樣のお身の上が聞きたうござんすワイなア。」幸八「イエモウそれは氣遣ひは御座りませぬ、日頃からお前と中のよいお紺樣と深う言ひ交して御座る貢樣、何しに袖にもなされますまい。殊に今日アノ御師殿の所に、太々があると聞いたに依つて、そこでお前の形を然う拵へて、私も黑鴨の形をしてお供をして來ました。何でも若旦那の事を主に會つて篤りとお賴みなさい

入る。正面の唐紙を明けて榊逃げて出る。庄太夫おはへ出で。舞臺を追ひ廻し榊に取り付く。榊「エエあたしつこい、悪戯しやると父様に告げて、聞く事ぢやないぞや。」庄太夫「サア其の告げるといはんす親御孫太夫殿は、江戸へござつた留守の中、留守事に此の正直庄太夫が悪い事はしませぬ。」榊「エエモウつつと忌ぢやといふに。」庄太夫「ハテ悪い合點ぢや、何程俺を嫌うても、あの貢殿はお前を忌がつて居るぞえ。」榊「そりやマア眞の事かいなア。」庄太夫「それ〳〵貢が事といふと、忽ち顔色が變るも無理ぢやない、こゝの親御がアノ貢を此の家の養子にして、お前と妻すつもり。あの貢殿は元阿波の侍、零落れてから鳥羽の親戚へ引取られ、今では此の家の養子、何程お前が女夫になりたう思うても、古市のお紺といふ女郎に深う馴染んでゐるワイの。」榊「エ、そりやマア眞かいの〳〵。」庄太夫「眞の譃のと何僞りをいふ者か、それに彼の貢、心安うする萬次郎とやらいふ侍の落零。是れも古市のお岸といふ女郎と死ね殺せといふ間、貢と萬次郎二人連立つて、古市へ毎晩〳〵通ふ事、お前知らんせんがいの。」榊「眞に然ういふ事なら私やどうせうぞいなア。」庄太夫「どうもかうも要らぬ、あの貢めが面當に俺が女房になりなさい。マア一寸手附に爰でちよこ〳〵と。」ト取り付くを榊振放し、榊「アア又かいの忌ぢや〳〵。」ト逃げ歩く。奥より、禰宜「庄太夫樣々々々、伯父御樣がお呼びなさるゝ。庄太夫樣々々々々。」ト呼びながら出て來る。庄太夫捨白にて榊を追ひ廻し、取違へて禰宜をおつ伏せ

太夫殿を捉へて、チト愼んだがよいワイの。」ト舞臺へ來うとする袖をひかへて、榊「コレ貢さま、あの庄太夫とじやらつくとは、ソリヤお前聞えぬワイなア。」貢「それを今いふ事が、マア放さつしやれ。」榊「イ、エ云はにやならぬワイなア、鳥羽から養子にござんしたお前、末々は私と女夫にすると父様のいひつけ。」貢「ハテそりや言はいでも知れてある事ぢやワイの。」榊「そんなら女夫ぢやぞえ。」貢「オオ女夫ぢや〳〵。」榊「オ、嬉し。」ト取り付かうとする。皆々「オ、〳〵〳〵。」ト祝詞あげる。庄太夫「貢殿貢殿、何處へござつた、貢殿々々。」貢「オ、〳〵。」ト舞臺の方へ來る。庄太夫「貢殿々々。」貢「オ、〳〵。」ト返辭を祝詞のやうに合はせ舞臺へ戻り元の座に坐る。榊も舞臺へ來る。ト庄太夫止め。庄太夫「これはしたり榊樣、まだいひ殘した事がある、鳥渡此方へ。」貢「庄太夫殿々々々々。」庄太夫「オ、〳〵。」ト返辭と祝詞と又ごつちやになり、矢張庄太夫榊にしなだれる。ト彥太夫隔て、彥太夫「撒錢撒錢。」講頭「ハツ。」ト葛桶より錢を出し撒く。禰宜皆々競り合うて是れを拾ふ　講頭唐紙の内へも錢を撒く事、此の内はやめたる誂への神樂、禰宜皆々錢を拾うて袂へ入れ、我勝に騷ぐ。庄太夫みなみなの拾ひし錢を引奪り逃げようとする。皆々追はれ歩く。此の間に貢は榊を伴れ奥へ入る。庄太夫皆々と摑み合ひ、彥太夫これを止める、捨白ごつちやになり殘らず奥へ入る。彥太夫殘り、金包の三方を持ち、しかつべらしく、彥太夫「是れはしたり、皆鎭まらぬか、鎭まらつせえ〳〵。」ト續いて奥へ

彦太夫「これは御執行めでたう存じます。」講頭「何方も御苦勞に存じます。」彦太夫「主孫太夫は御長官の用事につき江戸發足の留守中、手前ことは孫太夫が弟、猿田彦太夫と申す留守を預る名代でござれば、亭主同然に御用仰せ付けられませい。」講頭「これは〳〵、久々太々も忘りまして、其の上當年は講中が殖えました故、銀六貫目の太々、則ち百兩持參仕りました、宜しう賴みます。」ト三方の包金を出す。彦太夫取つて、彦太夫「御奇特に存じます。太々を始めるでござらう。」ト立つて三方を前に置き、彦太夫もとの座へ著く。庄太夫立つて神前へ辭儀して、洗米をそこらへ撒く。禰宜皆々「オ、〳〵オオ。」ト祝詞になる。トこれより太々神樂になり、皆々後向きになり、オ、〳〵といふ。唐紙の彼方には鈴の音、御巫神樂を舞ふ事奧深に聞かせる。此の内庄太夫はそろ〳〵立つて榊を引張り花道へ連れ行く。榊「ア、これ又惡い事しやるかいの。」庄太夫「何の惡い事があらう、何日ぞは〳〵と思うてもアノ貢殿が邪魔になつてどうもならぬ。皆は太々で夢中になつて居る中。」榊「エ、あた執著い、忌ぢや忌ぢや。」庄太夫「どつこい〳〵、返事聞かせ給へ橋、抱いて寢たらば葭屋橋。」彦太夫「オ、〳〵〳〵。」皆々「オ、〳〵〳〵。」ト此の內無理に榊をこかす。貢「榊殿、庄太夫殿、榊殿、庄太夫殿。」ト呼び〳〵花道へ來て引分ける。庄太夫「オ、〳〵〳〵。」皆々「オ、〳〵〳〵。」ト返事と祝詞とごつちやになり、庄太夫戻つて來り、オ、〳〵と彦太夫傍へ坐る。貢「これ榊殿、此方も晝中に庄

れにて一度に明るくなる。貢「アリヤ日の出。」ト丈五郎を踏み附け大藏を捻ぢ上げ、片手にて狀を開き急度見て、「宛名は德島岩次殿へ大學より。」ト兩人振解き、それをと蒐るを見事に投げ退け、「讀めた。」ト思入。この仕組よろしく。

拍子幕

二幕目　孫太夫内の場

一講頭利根右衞門　一猿田彥太夫
一胴脈金兵衞　一娘榊
一油屋女郎お岸　一壻貢
一正直庄太夫　一伯母お峯
一いれかた一人　一禰宜大勢

本舞臺三間の間、南の方へ筋違に見せ、正面とも紗綾形の唐紙、ふりよき竹二本、注連を張り、唐紙の内太々神樂の模樣、禰宜大勢烏帽子白張にて後向きに列び、彥太夫かす毛親仁の御師にて、裝束は指貫折烏帽子、中啓を持つ。庄太夫同じく裝束の形にて、貢も同じ裝束、舞臺よき所に居列び、講頭麻裃にて、三方に百兩の包金を載せ、能き所に控へる。榊、千早緋の袴、振袖の巫女にて能き所に控へ、一體太々の見得、誂への鳴物にて幕開く。ト彥太夫拍子を打ち、南方に向ひ拜み、それより講頭が傍へ來て、

大藏「萬次郎此處に在せたか、奴。」ト斬つて蒐る。貢見事に引付け、貢「萬次郎樣に斬り付けし狼藉者、うぬ詮議のある奴ぢやワエ。」 大藏「何を小癪な。」ト又斬つて蒐る、立廻り。萬次郎この内提灯持つて徘徊いてゐる。此の時林平丈五郎、狀を奪ひ合ひ摑み合ひ出る。萬次郎見て、萬次「ヤア林平か、今の狀の片破は。」 林平「其の片破は此奴が持つて。」 丈五「何を。」ト立廻りの內、貢大藏を見事に投げ退け、丈五郎が持ち居る狀を奪ひ取り、丈五郎を見事に投げ退け、貢「スリヤ此の狀が宛名の所。」 林平「如何にも。」 貢「萬次郎樣提灯を。」 萬次「合點ぢや。」ト提灯を差出す。丈五郎提灯を切つて落す。大藏貢へ蒐る。何れも闇がりの模樣。貢「萬次郎樣、危うござりまするぞ。」ト丈五郎は狀を奪らうとする、大藏萬次郎を斬らんと窺ひゐる。貢萬次郎に怪我させまいといふ思入。林平二人を引捉へんと互に探り合ひ、危き立廻りあつてトヾ貢大藏丈五郎を捕へる。林平萬次郎と探り合ひ、 林平「若旦那か。」 萬次「林平。」 貢「僕殿、こゝは危い、お供して早うござれ。」 林平「合點ぢや。」ト浪の音にて林平萬次郎に引添ひ向うへ走り入る。大藏丈五郎、それをと行かうとする。貢兩人を一寸當てて、貢「萬次郎樣はモウござりましたか、やれ嬉しやそれで落著いた。これ何卒宛名が讀みたいものぢやが。」ト狀を色々透し見る。此の時曉六時の鐘、方々にて鷄の聲する、空に烏夥しく飛ぶ。此の時兩人心づき起き上り、丈五、大藏「うぬを。」ト組み付く、立廻り。此の時正面の岩の前面へ紅絹張一ぱいの朝日半分出懸る。是

貢「モウあれが七時半、夜の明けぬ中に參りたいもので御座ります。モウ道々も申す通り、御朋輩の大藏丈五郎など心の知れぬ奸者、必ず此の上御油斷なされぬが可うござります。」萬次「サア今更思ひ當つた、下坂の刀質入させしも正しく伯父御よりの言附、何卒首尾よう下坂の刀を。」貢「ハテ私が詮議して出します、お氣遣ひなされますな。サア／＼お急ぎなされませ。」ト往かうとする、向うより丈五郎ちぎれし狀を半ぶん持ち逸散に驅け出で、貢に行當り萬次郎が顏を見て、丈五「ヤア萬次郎か。」萬次「丈五郎ぢやないか。」丈五「コリヤ耐らぬワ。」ト逸散に下座の方へ入る。貢「何ぢや頓と狂氣の沙汰ぢや。」ト跡見送りゐる。萬次「これ／＼今の奴が下坂を質入させた丈五郎ぢやワイの。」貢「アノ今のがはてなア。」トいふうち向うより林平逸散に出で、又行當り顏を見て、林平「萬次郎樣か。」萬次「林平。」林平「今こゝへ丈五郎めは參りませぬか。」萬次「たつた今この道筋へ。」林平「刀の手がゝり此の一通。」ト萬次郎に渡し追つかけんとする。萬次「これ／＼そして樣子は。」林平「それ言つて居る間はござらぬ、汝丈五郎め。」ト逸散に下座の方へ走り入る。貢「何の事ぢや、これも半狂氣の沙汰ぢや。」萬次「マアマア其の狀讀んで見やいの。」貢「畏まりました。」ト萬次郎提灯を取り燈火を見せる。「飛札を以て申し入れ候、愈其の御地にて下坂の刀手に入り候はゞ、早速歸國あるべく候。跡はやぶれて宛名はなけれど詮議の手がゝり、コリヤよい物が手に入りましたワエ。」ト懷へ入れる。大藏走り出で逡巡ひて、

二見村には私が知音もござりますれば、當分あの方へお預け申し、必然私が御歸參致させます、お氣遣ひ遊ばされますな。サア萬次郎樣、夜の明けぬ中早うお出でなされませ。」萬次「左膳樣、隨分御無事で。」左膳「堅固で居やれ。」ト時の鐘になり、貢「サアお出でなされませ。」ト小提灯を提げ、萬次郎尾いて花道より中の間の歩道を通り南の口へ入る。左膳殘りゐる。ばた〳〵にて林平狀の裂れし半分を持ち、逸散に出て左膳を見て、林平「左膳樣か。」左膳「慌しい、林平何事ぢや。」林平「唯今伯父御より內意の密書、丈五郎奴が所持致し居つたを見屆け、引奪らんと致す機み、引裂つてはござれども密書の斷片、イザ御覽下されませう。」ト渡す。左膳見て、左膳「宛名は無けれど若しや刀の手懸にもならん、萬次郎へ追つつき手渡し致せ。」ト林平へ渡す。林平「シテ萬次郎樣は。」左膳「貢が供して二見村へ。」林平「心得ました。」ト行かうとする、後より大藏拔打に、大藏「左膳め覺悟。」ト斬つてかゝる。左膳立廻つて大藏を引付け、左膳「早う行け。」林平「ハツ。」ト逸散に向うへ入る。左膳大藏と立廻りの見得にて、

返し

向う奧深に二見の浦の景色、注連を張りし二見の岩、東西の窗を下し闇の仕組、七つ半の鐘聞ゆる。かすめたる波の音、向うより貢提灯を提げ、萬次郎つき出る。

何事でござるな。」　大藏「兼て貴殿我々當所へ立越え、萬次郎めを馬鹿者に仕立て失策らせる手段、唯今お國より飛脚到來、宛名を見れば伯父御樣より德島岩次へ内意の御狀、飛脚その狀これ。」　飛脚「ハツ慥かにお渡し申しましたぞ。」ト旅狀箱を丈五郎へ渡す。　丈五「兩人慥かに受取つた、此の由伯父御樣へよしなに申してくりやれ。」　飛脚「畏まつてござります。」ト引返し向うへ入る。　丈五「否ナニ大藏殿、最前騙り取りし折紙の樣子、彼の左膳めが吐すには、萬次郎が親九郎左衞門を蟄居させん爲、倅萬次郎を馬鹿者に仕立て、下坂の刀捲き上ぐる手段も、皆あいつが堪をつけ、朋輩の我々を伯父御よりの犬なりと氣取つたれば、所詮生けてはおかれますまい、貴殿は殘つて彼の左膳奴を、コレ。」ト囁く。
大藏「呑込んだ、どつさりばつさり」　丈五「コレ、ござれ。」　大藏「合點だ。」ト奥へ窺ひ入る。　丈五「これからは此の伯父御の御狀、德島岩次へそれ。」ト往かうとする。林平立聞きゐて、此の狀ひつたくり往かうとする。丈五郎武者振りつき、「ヤア奴ア林平め、そんなら樣子を。」　林平「何も彼も聞いた、詮議のある狀貰ひましたぞ。」　丈五「それ聞かれちやァ百年目だ、死つて仕舞へ。」ト拔いて斬り附ける。たち廻りあつて丈五郎林平を當て、狀を持ち向うへ走り入る。林平跡よりほつかけ入る。合方時の鐘にて奧より萬次郎左膳貢、小提灯を持ち出で、貢「左やうならば左膳樣、何か宜しうお頼み申し上げます。」
左膳「何事も身共が承知致して居る、否仰貢、萬次郎事必ず頼んだぞよ。」　貢「お氣遣ひなされますな。」

貢「その黒上主鈴といふ御師は、伊勢中にはないが、大方それは衒者であらう。」萬次「サア其の衒者奴が持つて居た故、ツイ此方の折紙を出して見せたれば。」貢「さては其の時の浪人者も同類で、摺替へられたに違ひはあるまい。」林平「さうぢや。」ト花道へ行かうとする。貢「コリヤお待ちなされ、何處へ御座る。」林平「ハテ知れた事、衒者の詮議。」貢「ハ、、其の衒者が、詮議に來るで有らうとて待つては居らぬ、マア控へてござれ。」林平「エ、。」トこれにて控へる。左膳「金銀に目をかけず、刀の折紙を望むからは、下坂の刀を望む者の爲業に違ひない、其の書狀は先だつて大學が家來、徳島岩次といふ奴、當地へ入込みしと九郎左衞門が知らせ。察する所手を廻して下坂の刀を奪ひ取り、萬次郎に罪を拵へ、親九郎左衞門に蟄居させん謀計と見えた。」貢「シテ其の徳島岩治といふ奴御存じで御座りますか。」左膳「年の頃は二十八九、中肉に色黒く、口早に物いうて、確か眉の上に黑子が有つたと思うたワイノ。」貢「可し、それさへ聞いておけばモウ可う御座ります。」左膳「今聞く通り大學よりも當所へ犬を入れおけば油斷はならぬ、まだ外に談ずる仔細もあれば。」貢「爰は端近奥へ參つて。」左膳「申し談ぜう、兩人奥へ來やれ。」ト唄になり左膳萬次郎貢奥へ入る。林平殘る。時の鐘。直に向うより大藏先に若い衆一人、紺看板の飛脚にて狀箱を持ち出で門口に窺ひ、大藏「栗原丈五郎殿お居やるか、鳥渡御意得たい。」ト呼び立てる。これにて林平かけをする。奥より丈五郎出で、丈五「慌しい安達大藏殿

り、萬次郎を匿ひ右の刀を詮議し出し、歸國させくれなば某が志も相立ち、妹に列なる萬次郎は古主の片破、身共へ忠義頼むといふは此の事ぢやワイやい。」貢「私をお見立てなされ、大事を明して御主人のお頼み、身は醢になりましても、下坂の刀を探ね出し、萬次郎樣を歸國致させませう、お氣遣ひなされますな。」左膳「まづは安堵、然し鎌倉の首尾相知れるまでは、何事も大學へ聞えては一大事、必ず他言致すな。」貢「何しに他言致しませうぞ。」左膳「萬次郎參れ。」萬次「ハッ。」ト奧より萬次郎出る。左膳「萬次郎、あれに居るは福岡貢とて身が家來、其方にも由緣の者、刀の事も貢を頼み取返し歸國致せ。」貢「扨は貴君が萬次郎樣で御座りまするか、私が、マア話は追つての事。シテ其の刀は何者へお預けなされましたナ。」萬次「サア私は知らぬが家來の計らひにて山田の町人に預けたが、其の者が出奔して行方が知れぬ故、折紙ばかり此方にあるワイノ。」貢「シテ其の折紙は持つて御座りますか。」萬次「林平、最前の折紙を出してたも。」林平「ネイ。」ト折紙二枚貢へ渡す。貢披き見て、貢「コリヤこれ二枚の折紙。」左膳「ナニ二枚あらう筈がない、ドレ見しやれ。」ト改めて、「ヤアこりや二枚ながら贋物ぢやワ。」林平「ナニ其の折紙が二枚ながら贋物でござりまするか。」貢「一體どういふ事で折紙が二枚あるので御座ります。」林平「さればの儀でござります、下坂の刀詮議せうと思ふ矢先、黑上主鈴といふ御師、下坂の刀を浪人共に賣らうと申すを聞き附け、其の刀を賣つてくれいと望みし所。」

び國へ歸らぬとは氣遣はしい、何故の儀でござります。」左膳「貢、其方や何故それを尋ぬるぞ。」貢「何を隱しませう、私が親は元今川九郎左衞門樣の御家來の由、過ぎ逝かれし母の噺、仔細あつて幼少の時分、志州の鳥羽へ引越して人となり今福岡孫太夫殿の養子の私、則ちお家へ御奉公、その貴方のお妹御は古主九郎左衞門樣の嫁君、彼是重なるお主筋、案じますのも此の故で御座ります。」左膳「ハテ思ひがけない汝が身の上、始めて聞いて驚き入つた。然らば古主といひ今某が緣のある九郎左衞門が家の爲、身が賴む一大事、何によらず勤めるか。」貢「これはお詞とも覺えませぬ、御主人の御意と申し、殊に古主の爲とあるからは、一命に拘はりまする事なりとも。」左膳「確とさうか。」ト貢小柄を拔き我が刀にて金打する。「出來した、其の魂を見るからは申しつくる其の仔細、これを見よ。」ト貢が持つて來たる狀を出して見せる。貢拔き見て愕り、左膳四邊に心を注ける。貢「スリヤ阿波の伯父御大學殿の野心によつて。」左膳「サア其の如く國を押領せんとの謀圖、禍ひを除かんと參宮の體にもてなし、九郎左衞門には鎌倉に下り、伯父大學を押籠め隱居の願ひ、汝が親孫太夫を鎌倉表へ遣はせしも一家の某、御前體を首尾よく致させんと、內緣ある評定衆へ密事の使、サ賴みといふは爰の事、右萬次郎は忠臣の家を續ぐべき身なれども放埒にて、一旦手に入れし下坂の刀を質物に入れし不所存、其の刀の持主相知れず、某匿ひおいては家中の思はく他門の聞え、何とぞ其方某になり代

有り難う御座ります、又お通りの節お頼み申します。」ト捨白にて駕籠を擔ぎ向うへ入る。貢門口を入る。貢「ちと頼みたいぞや〳〵。」ト奥へ向つて呼ぶ。奥にて、左膳「アレ店に案内があるぞや、女子共はお居やらぬか、ハテ泊りが多いから皆座敷へ出てゐるさうな。」ト莨盆をさげ著流し大小にて出で貢を見て、「ヤ其方は貢でないか。」貢「左樣仰せらるゝは左膳樣で御座りまするか。」左膳「オヽ其方の歸りを相待つて居つたワエ、サア〳〵是れへ〳〵。シテ申付けたお客人は對面してお來やつたか。」貢「さればの儀で御座ります、仰せの通り松坂まで參り居つたる所、未だお出でもなく、それ故津の本陣まで參りしが、はやお立ちの所、則ちあなた樣の御書面を渡し、お返事を受取りまして立ち歸りました、則ちお客人は直樣本海道へお越しなされまして御座ります。」左膳「ム、スリヤ本海道へお越しとな、シテ返書持參おしやつたか。」貢「ヘイ〳〵則ちこれが御返書。」ト懷より手紙を出して左膳へ渡し、左膳「まだ外に口上とは。」貢「ハツ此の度伊勢參宮といひ立て、鎌倉へ參り直訴致す思案一決、其の上この願ひ叶はずば再び國へ歸らぬ心底、萬次郎事、殿の御意を承け靑井下坂の刀を其の地へ索めに參り今に歸らず、若し身持惰弱もあらば某に成代り、萬次郎を勘當なされ、下坂の刀は貴殿御詮議なされ下されよとの御口上でござります。」左膳「ハヽア適れ道は阿波の家老、今田九郎左衞門程ある。義心といひ忠心といひ、ハテ阿州殿には良い家來を持たれたな」貢「藤浪樣、今度の願ひ叶はずば再

行け。」ト牛藏金をいたゞき下座へ入る。「先づ一方は方附いた、シテ刀の持主未だ行方が知れぬかな。」
丈五「胴脈の金兵衛といふ奴に預けておいたが、一向行方が知れませぬ。」岩次「何でも遠くへ行かう筈がない、金さへ遣れば取戻さるゝ彼の刀。シテ阿波からの便りはなかつたか。」大藏「追々飛脚到來上の儀。」岩次「下坂の刀此方の手に入れば、國家は皆伯父御のもの、其の節身共は立身出世。」丈五「この丈五郎も其の尾に取り附き此の身の出世。」大藏「祝ひ事に一つしめうか。」ト岩次郎あたりを見廻し、
岩次「コレ内密で打ちませう。」ト指の先にて三人手を拍つこなし。

返し　時の鐘にて此の道具ぶん廻す

三間の開平舞臺にして、下の方に格子をはめ、門口する物、上の方障子屋體、所々伊勢月詣の札かけてある。道具とまる。トてんつゝにて向うより若い衆二人、いきせきと駕籠舁にて出て來り門口へ來て、
駕籠「ヤレ打附いたぞ、モシ旦那叶屋はモウ爰でござります。」棒組「ヤレ〳〵お急ぎ故大汗に成つたワイ、旦那參りまして御座りますぞえ。」ト草履を直す。垂を上げ貢大小三尺手拭にて駕籠より出で、
駕籠「旦那早う參つたではござりませぬか。」貢「オ、大儀々々、存じの外早う參つた。」ト懷より四文錢二百目出し、「コリヤ極は二百なれど殘りは酒代ぢや、サア持つて行きやれ。」棒組「ヘイ〳〵是れは

と聞いた故の思ひつき、是れといふも一人の母者人が大病、人參代に差閊へてからの騙り事、どうぞ御料簡なされて下されまし。」 岩次「まだ／＼汝太い奴の、眞二つに。」ト斬らうとする。萬次郎止め、萬次「マァ／＼お待ちなされまし、憎い奴とは申しながら親への孝とあれば、命は助けてお遣りなされまし。」 牛藏「ハイ／＼命ばかりはお助けなされて下さりませ。」 岩次「うぬ憎い奴なれど、若いお侍の御挨拶に面じ免してくれる。扨々貴公のお蔭ですでの事、騙らるゝ所を免れました、サア此の折紙は二枚ともに貴公へお返し申す。」ト折紙を渡す。林平請取り、 林平「イヤナニ若旦那、左膳樣も嘸お待兼でござりませう、ちつとも早うお出でなされませ。」 萬次「なる程さう致さう、ナニ御浪人、あの者の事は幾重にも。」 岩次「ハテ彼奴が事はお構ひなく、御用とあらば少しも早う。」 萬次「左樣ならば御浪人重ねてお目にかゝりませう。」ト唄になり、萬次郎林平下座へ入る。 岩次「サア汝にはまだ詮議がある。うせう。」ト主鈴が首筋捉へ引きつける。 牛藏「ア、お赦しなされて下さりませ。」ト主鈴を連れ行かうとする、下座より丈五郎出て來る。ト顏見合はせ、 丈五、大藏「首尾は。」 岩次「コレ。」トあたりを見まはし、「まんまと折紙はすりかへた、コレ。」ト出して見せる。 丈五、大藏「旨い／＼。」 岩次「なまの牛藏太儀であつた。」 牛藏「モウ可う御座りまするか。」ト衣裳を脱ぐと襤褸になる、小袖も大小も一緒に引括り擔げる。 岩次「ソレ骨折代。」ト金を投げてやる。 牛藏「ア、有り難い、こんな用なら何時なりと。」 岩次「早く

又あなたは御得心かな。」牛藏「いやモウいづれへ遣はしても構ひはござらぬ。」林平「然らば其の刀一寸拜見仰せ付けられませ。」ト主鈴刀を林平に渡す。「お旦那これ御覽なされい。」ト刀を渡す。萬次郎取つて見て、萬次「ア、これ〳〵下坂の刀でないワイナウ。」牛藏「ア、これ〳〵麁相仰せられな、下坂の刀に相違御座らぬぞ、違ひない證據は慥かな折紙、これ見さつしやれ。」ト折紙を出して見せる。林平「ナニ折紙、ハ、、其の折紙は此方に所持致して居るワ。」牛藏「ハ、、下坂の折紙が二枚あらうか、馬鹿な事を。」萬次「いや〳〵其の折紙は俺が爰に持つてゐる、なんと是れでも爭論ふか。」ト折紙を懷より出して見せる。岩次「ドレ見せさつしやれ。」ト取つて兩方の折紙を較べ、「誠に寸分違はぬ折紙、いづれが贋とも正眞とも、ハテよく似せたものぢやなア。」林平「シテ此の下坂の刀は何時頃より所持なさるゝ。」牛藏「三年以前より手前が所持いたして居るワ。」林平「それで化の皮が顯はれた、此の春當所の支配より詮議して手に入れた下坂、人手に渡したは先の月、年月相違したアノ爰ないつはり者めが。」

牛藏「スリヤ當所の支配人を知つて御座るか。」林平「知れた事だワ。」牛藏「南無三しまつた。」ト逃げようとするを捉へ、岩次「待て汝、憎い奴の、既に五十枚騙らうとひろいだ大盜人、汝が樣な奴はかう〳〵かう。」ト折紙を懷へ入れ主鈴をむねうちにする。此のとき供の草履取、逸散に下座へ逃げて入る。

牛藏「ハイ〳〵御赦されて下さりませ、ふとした出來心、貴方が佐野屋に御座つて刀をお求めなさるゝ

にて草履取つれ出る。向うより岩次著ながし深編笠浪人者にて出て來り、舞臺よき所にて行き逢ひ、牛藏「アイヤ〳〵卒爾ながら、そこ元は山田の町人佐野屋善兵衛方にお泊りなさるゝ御浪人では御座らぬか。」岩次「いかにも左樣で御座る。シテ其許は誰方で御座るな。」牛藏「拙者は長官の支配下黑上主鈴と申す御師で御座るが、貴殿名作の刀をお求めなさるゝと有つて、手前所持の下坂の刀を判金五十枚に所望致させくれよとの、佐野屋善兵衛段々の賴み故、唯今持參仕る所で御座る。」岩次「それは幸ひ、シテ其の下坂の刀所持して御座るか。」牛藏「如何にも唯今これに所持致して御座る。」ト此の臺詞を聞いて萬次郎思入あつて、林平にあの刀をとり返してくれろといふ科、林平呑み込む。岩次「然らば宿元へ同道致して金子に引換と致さう。」牛藏「左樣いたさう、サアお出でなされ。」岩次「然らば御免、お先へ參る。」ト兩人臆病口へ行かうとする。林平「アイヤ〳〵御兩所ともちよつとお待ち下されい。」岩次「手前の事かな。」林平「いかにも左樣で御座ります。」岩次「なんぞ用でも御座るかな。」林平「別儀でもござりませぬが、其の靑井下坂の刀御求めなさるゝとの儀、其の刀はもと手前主人が遠國より參つて求めましたが、ちと仔細ござつて人手に渡り、今その刀を外へ遣つては主人の一命にも拘はりまする、何卒お刀所望させては下さりますまいか。」岩次「ソリヤ心易い事、拙者は此の刀に限らず名作でさへあればよい、御入用ならば隨分御勝手になされい。」林平「お聞き屆け下されて先づは大慶、シテ

林平「屹度下郎がお供申します。」お岸「萬次郎様。」萬次「お岸待つてゐや。」萬野「サァ御座んせいなァ。」ト三味線入の馬士唄になり、お岸先に皆々向うへ入る。跡に萬次郎林平殘る。林平「モシ〳〵若旦那様、マァ何はさし措き下坂の刀の事、折角お手に入つたれど、アノマァ刀は何者へお渡しなされました。」萬次「サァ折角刀を尋ね出し、買ひ取るは買ひ取つたが、茶屋の入用に差詰り、山田の町人金兵衛とやらいふ者に、少々の開質物に預け置きしに、其の金兵衛より此の程行方の知れぬので、それ故に國元へ歸らずにゐるのぢやワイノ。」林平「そりやァ大事だ、そんな事なら早く私に仰しやれば可い事、この林平も下坂がお手に入つたと聞いて早速お迎へに參り、御歸國を勸めるのにお歸りのないは、ァノお岸殿に迷うての事かと思つたに、そりやァマァとんだ事をなされました。僅かの金に大切の品を心の知れぬ町人に預けるとは、如何にお若いというて、ア、困つた事をなされたなァ。」萬次「サア俺も此の頃はそれが氣になつてならぬワイナウ。然しながら下坂の折紙はコレ大切に持つてゐるワイナウ。」ト折紙を懐より出して見せる。林平「まだしもそれをお放しなされませぬがお幸福、何ぼ刀を持つて參つても折紙がなくば前方も疵物。ソリヤお案じなされまするな、大方今に刀が戻つて參るで御座りませう。ア、それにつけても晩程左膳様にお會ひなされて、ア、これ其の御返答が、ハテ困つた物だナア。」ト長牀几に腰を掛け兩人思案してゐる。合方になり臆病口より牛藏、小袖繼裃御師の形

お待ちなさるゝとおつしやつたれば、是れから直にお出でなされずばなりますまい。」お岸「そんなら今夜は貴方の御用で、山田の旅宿へお出でなさんすかえ。それでは私やどうも少と心の濟まぬ事が有るワイなア、ナウ萬野殿。」萬野「サイなア萬次郎樣を今宵お作れ申したいが、今の樣なお約束では無理にとも申されますまい、何事も御用をお仕舞ひなされ次第來てお上げなさんせ、待つて居りますぞえ。」林平「ハテそりやわしが吞込んでゐるワさ。」お岸「イエ〳〵林平殿が然う言はんしても、こんな事を幸ひに、又外へお供さしやんせうも知れぬ、滅多に油斷はならぬワイなア。」萬次「ハテ疑ひ深い、それ程に思はばナウ二人の衆。」丈五「イヤモウ用事仕舞次第、其許が所へ連れて行く。其の請合は我我二人、山田の旅宿へ尾いて行き、歸りは直に三人一座。」大藏「成程丈五郎殿の云はるゝ通り、身共も萬次郎殿の傍を離れず、用事終へば直に推しかける、それを樂しみに待つて居給へ。」お岸「そんならお二人樣、必ず主を連れ申して下さんせえ。」丈五、大藏「ハテ承知致してをるワ。」萬野「あゝいふお請合が有るからは、氣を丈夫に持つて待つて上げさんせ。左や右いふ中日も暮れかゝる、直に歸らうぢや御座んせぬか。」佐助「さうしやんせう、サアお岸さん、そろ〳〵參りませう。」お岸「そんなら私や行く程に、萬次郎樣、晩程違へず來て下さんせえ。」萬次「ハテ違へる事ぢやないワイナウ。」丈、大「其の請人は我々二人。」萬野「ハテお侍に二言はござんせぬ、ナウ林平樣。

は。」ト聞へる。林平「アイヤ恐れながら其の刀の儀、詮議のため當所へ立越えられまして御座ります。當國松坂邊に手懸りござる噂を承り、何卒早速相知れます樣にと大神宮へ日毎の參詣。お聞きなされまし、其の加護にや下坂の刀手に入りまして御座ります。」左膳「スリャ其の刀が手に入りしとな、其の禮參として大神宮へ日毎の參詣とはよい心掛、然りながら道連とはいひながら艶な女中、その心願ある身で往來繁き此の邊に、婦人に交はる酒盛抔は無用に致すがよい。ハテ人の口には戸が閉てられぬ、どの樣な風說を受けうも知れぬ、コリャ林平、其方附添ひ何か心を附きやれ、ア、不埒千萬、刀手に入るからは急ぎ歸國をしやるが可からう。」林平「ヘイ畏まりまして御座ります。」ト萬次郎と顏見合はせ思入。左膳「身共事は山田上町叶屋方に旅宿致す、まだ申し聞かす儀もござれば、後方儕が旅宿へ尋ねてお來やれ、必ず共に待ち申すぞ。」萬次「畏まりまして御座ります、左樣ならば左膳さま。」左膳「萬次郎、後程會ひ申さう、何れも是れに、家來供せい。」ト唄になり左膳家來つれ下座へ入る。皆皆思入。萬野跡見送り、萬野「ヤレ〳〵飛んだお方が御座んして、折角面白う飮まうとした酒を、燗冷しにしたワイなア。」お岸「そんなら常々お噂の有つた左膳樣とは、彼方の事でござんしたかいなア。」萬次「モウ〳〵思ひもつかぬ所へ小舅殿が見えられて、びつしよりと汗になつた。其の上何やら用事が有る、旅宿へ來いと云はれたが、ア、これいなずばなるまいワイノ。」林平「いやモウ物堅い左膳樣、

る。」萬野「サアお岸さん、若旦那の御機嫌が直つたから、お前一つあがつて主へおさしなさんせえ。」お岸「そんなら御機嫌が直つたかえ。」萬野「直つた段かいな、サア一つ飲ましやんせ。」林平「ドリヤお酌致さう。」ト林平酌をする。お岸杯を取り上げる。ト唄になり向うより左膳野袴打裂羽織大小にて、若い衆一人草履取にてつき出で、直に本舞臺へ來て皆々の樣子をためらひ見て、佐膳「それに居るは萬次郎でないか。」萬次「左樣仰しやるは左膳樣。」丈五郎「ヤア爰へはどうして。」佐膳「これは何れも是れにお居やるか、ハテ變つた所で御意得ました。」ト上の方へ通る。林平思入あつてお岸を隱す。お岸林平が後に控へる。萬次「これは〳〵、左膳樣には存じよらぬ所でお目見え仕ります。見ますれば御家來衆も輕々しく、何れへ御越しなされまするな。」左膳「如何にも、身共此の邊を徘徊なすも主人の仰せ、鎌倉の三老時政殿、諸國巡見にお越しあると關東よりの知らせ、それ故主人の支配内、地頭代官の者共、邪曲の計らひあつては國の名折と、主命を受け藤浪左膳竊かの巡見。朋輩衆も打交りての酒宴の樣子、殊には艶なる婦人抔も見ゆるが。ア、これは何か道連か。定めし道連といふ樣な事で御座らうな。」丈五「如何にも、吾々は萬次郎殿同道にて大神宮へ參詣、此の女は則ち道連でござるて。ナウ萬次郎殿、ナ、ソレ道連ナ、アいや道連でござつた、ハ、、、。」萬次「成程この女中は道連の人で御座ります。」左膳「身共も道連と見受けた、シテ青非下坂の刀はどうぢや、手に入つたか。」萬次「サア其の儀

又林平も林平ぢや、何の役にも立たぬ事を話し散らして、折角面白い趣向を、お岸が今の白で吾もアノ左膳樣の事、エ、又思ひ出したワイなア。」林平「サア私はツイ一寸申した許り、お氣に違ひましたれば、幾重にも御堪忍なされて下されまし。」お岸「イエ〳〵、主の知つた事ぢやござんせぬ、私が林平殿を欺してお國の樣子を聞いたのでござんす、主に科はござんせぬ、いうたが惡くば堪忍して下さんせいなア。」萬次「イヤ〳〵何ぞといふと國の事を聞きたがるは、大方私に愛想が盡きたのであらうワイなう。」お岸「エ、何でお前に愛想がつきようぞいなア。」萬次「否々愛想がつきたで有らう〳〵。」お岸「イエ〳〵、わたしや愛想は盡きんワイなア。」萬次「いや〳〵つきよう〳〵。」お岸「イエ〳〵つきぬつきぬ。」ト互に煙管にてつゝき合ひ、みな〳〵氣の毒がる。萬野此の間へはひり、萬野「ア、申し申し何のお前に愛想が盡きませう、盡きぬといふ證據は、愛想は築地が中へ入りやんした、爰を圓くするのが仲居の役、サア〳〵中直りの酒にさんせいなア。」大藏「それがよからう、サア萬次郎殿、機嫌直して酒にさつしやい〳〵。」丈五「ドリヤ身共がおあひ仕らう、先程より駕籠舁の眞似をして、殊の外氣鬱致した。武士が酒手もねだられまい、酒代の代りに機嫌直して貰ひませう。」林平「それが可うござりませう、下郎がお酌致しませう。」佐助「御機嫌を直して若旦那、お一つお上りなされまし。」萬次「エ、料簡ならぬ所なれど各のお取持、然らば機嫌直しませう。」丈五「それで吾々も大慶に存ず

體嬉しい事ぢやござんせぬワイなア。」大藏「サアそもじに道中させるも、萬次郎殿が晩の睦言を思ふから、それに駕籠では物がない、こから確乎と歩いて、晩の本練といふ所はどうぢやな。」萬野「エ、好かない、無駄をいはんすかいなア。」お杉「これ〳〵お前方は、私らが店前に立つてゐさんしては、錢を貰ふ邪魔になるワイなア。」お玉「ちつと脇へ寄つて貰ひませうワイなア。」佐助「成程コリヤ此方が心が注かなんだ、これ〳〵花たち店を塞げた其のかはり、錢は確乎投げてやる、サア〳〵受けたり受けたり。」萬次「コリヤ佐助、錢投げる事はどうぢや、彼が噂のあるお杉お玉といふ物貰か。」佐助「ハイ左樣でござります。」萬次「然らば身共が持合はせた小粒なりと投げて遣りませうか。」杉、玉「そりや有り難うござります、サア〳〵早うお投げなさんせいなア。」萬次「そりや投げるぞ〳〵。」ト懷より小粒を投げて遣る。我がちに拾ひ、お杉「ヤレ有り難や、お錢と違うて山吹色の此のお金。」お玉「運直しに酒なと飮まうかいな。」ト三絃を抱へいそ〳〵と下座へ入る。あと合方。佐助「いやはや慾ばつた奴等だ。」お岸「申し萬次郎さん、今さら改めて私が申す事ぢやなけれども、お前樣は何やら大切な品を御詮議なさんすとの事、其のお役の身を以て此の樣に遊興に許りかゝつてお出でなさんしてはお國への聞え、聞きやお前の奧樣の親御樣は物がたいお方と、あの林平殿の話、ひよつとお身の難儀にでもならうと、私やそれが大體案じられるワイなア。」萬次「ハテ譯もない、役にも立たぬ事を案じぬ者ぢや、

樣が駕籠を舁くとは、イヤモウ狼狽へたお釋迦樣も知らんせんワイなア。」佐助「それさ、古市から此の相の山まで僅か許りの道程を、百里も道中する樣なお岸さんの道中姿、お慰みも多いに、道者の御趣向とはイヤモ耐つたものぢや御座りませぬ。」林平「如何に御趣向だといつて、若旦那が駕籠の眞似なして、お岸樣を駕籠に乘せ舁き歩くとは、是れが誠に戀の重荷とやらで御座りませう。時に暑くろしい駕籠にばかり御座つては氣が晴れますまい、サア〳〵駕籠から出し申さつしやいサ。」萬野「ほんにさうしやんせう。サアお岸樣、爰へお出でいなア。」丈五郎「ドリヤ身共がお草履を直さうか。」ト紅絹の緒の草履を直す。お岸舞臺へ出て來る。此の人數みな〳〵長牀几に腰をかける。お岸「ホンニ萬次郎樣を始め、お二人樣も嘸しんどう御座んせう、モウ爰は何處でござんすえ。」丈五「ハテ爰は其許と萬次郎殿と、しつぽりと相の山、お杉お玉が店の前だワナ。」萬次「又口合をいふかいやい。時にお岸其方も駕籠の裏で氣詰りであつたであらう、俺も舁きつけぬ駕籠を舁いたで、モウ〳〵疲勞うて〳〵。コレ〳〵林平、酒を持て〳〵。」林平「ネイ〳〵、サア〳〵よい見はらしで一つあがりまし、お岸さんも嘸お氣鬱でござりませう。」ト提重を持ち行く。お岸「いゝえいなア、私や此の伊勢の古市に勤めはしてゐれど、つひに身まゝに道中した事は御座んせぬ。京大坂からもおやま樣方が、參宮さしやんすを見る毎に、羨ましう思うた許り、今日この樣に道中の眞似事をするも、萬次郎樣の恩ぢやと思や、大

形にて古き三絃を彈いてゐる。かすめたる大拍子の神樂にテンツヽをかぶせたる鳴物にて幕開く。ト左右より若い衆、伊勢參の旅人の仕出し大勢出で、捨白にてお杉お玉へ錢を投げて遣る事いろ〳〵、始終相の山の模樣よろしく東西へ別れ入る。ト此の時鳴物替つて。

唄「花が人呼ぶ浮氣の花が、浮きうかるゝ浮氣の花よ、おれ込ぢや合點ぢや、かた山ぢや合點ぢや、下戸は酒手で荻の花、おれ込ぢや合點ぢや。」ト戻り駕籠の出唄になり、向うより大藏著流し侍の形頰被をして裾をからげ脚絆を穿き、中拔草履にて、駕籠舁の眞似をしたる拵へ、丈五郎同樣にて四手の駕籠をかつぎ、此の内にお岸を浴衣がけの旅出立の女郎にて煙管を持ち乘せてゐる。萬次郎著流し意氣地なき形にて三尺手拭をしめ頰被にて息杖を持ち、後肩丈五郎と代つて駕籠を舁き上げ、二足三足歩んでは、又丈五郎へ渡す仕組、萬野仲居にて是れも浴衣がけ、竹の先へ火繩を附けたるを持ち、佐助若い者の形にて女菅笠を二つ持ち銜へ煙管、後より林平、ねぢ切奴の拵へ、柹色の脚絆草鞋にて三人前の大小を手拭にて結び、是れをかつぎ提重をさげ、此の人數出て來る。駕籠を舁きし三人、肩の痛い科、やう〳〵本舞臺へ來てよき所へ下し、大藏「ヤレ〳〵舁きつけない駕籠でおほ汗になつた。」丈五郎「それ〳〵、身共の肩がめき〳〵いひます。」萬次郎「イヤモウ取分け此の萬次郎は、終に駕籠を舁いた事がない故、しんどうて〳〵ならんワイノ。」萬野「さうで御座んせう、お二人樣は格別、萬次郎

油屋おこん
福岡貢
伊勢音頭戀寐刃

作者　近松徳三

一幕目

相の山の場
返し山田旅宿の場
返し二見浦の場

一今田萬次郎　　一物貰ひお杉
一若い者佐助　　一同　お玉
一安達大藏　　一黑上主鈴 實はなまの牛藏
一栗原丈五郎　　一奴林平
一仲居萬野　　一古市女郎お岸
一德島岩次　　一藤浪左膳
一福岡貢　　一若い衆大勢
一駕籠舁二人　　一飛脚
一仕出し

本舞臺三間の間一面の杉林、上の方に勢州相の山といふ榜示杭、眞中に藁葺の小屋、此の内にお杉お玉浴衣の

油屋おこん
福岡貢 伊勢音頭戀寢刃

近松德三

五大力戀緘 終

三五兵衛が切首と、右の血刀を菊野が首に供へ、源五「菊野、そちが志忘れぬ、今こそとつくりと禮をいふ。遺恨ある三五兵衛を始め、仇ある奴等は皆斬り殺し、其の刀の血潮は手向の水、首は供物、草葉の陰から快う受けてたもれ、南無菊野頓生菩提。」ト廻向する。橋がゝりより千島萬太郎、出石宅右衛門、供の侍大勢、丸屋仁兵衛も供に出て、宅右「源五兵衛殿、樣子承つて則ち萬太郎樣これへ。」萬太郎「源五兵衛、そちや偉い事をしたなァ。」宅右「心ならずこの家主も。」皆々「驅けつけました。」源五「お悅び下されい、紛失の猛虎の劒、首尾よう詮議し出し、則ちこれに。」ト右の刀を萬太郎にわたし、「盗賊は三五兵衛、則ち死骸これ斯くの通り、此の上は一刻もはやう萬太郎樣は御歸國。」ト首を見せ、宅右「出かされた源五兵衛殿、此の上は以前の通り千島の家中。」源五「イヤ拙者人殺しの科人。」ト腹切らうとするを、宅右衛門とめて、宅右「腹切るには及ばぬ、劒詮議の功に依つて與五平が身の上、貴殿も諸共。」源五「デモ。」ト又腹切らうとする。ト寐鳥いろ〳〵にて、菊野が首源五兵衛が手に吸付きとめる。源五兵衛振拂はうとしても動かず。これを見て、皆々「アレ菊野の首が。」源五「とゞめる切腹。」皆々「それ程までに。」ト源五兵衛思入あつて首を取り上げ、源五「チエ、、、。」ト首を抱きしめよろしく幕。

オ、道理ぢや〳〵、それで跡形もない戯言、現在菊野が敵は汝、身共が取つて遣らうワイ。」ト脇差を抜いて蒐る。源五兵衛立廻りにて右の脇差を叩き落す、三五兵衛刀を抜かうとして、ちやつと飛び退き科ある。源五「三五兵衛、なぜ抜かぬ、刀を抜いて身共を斬らぬか殺さぬか、サア〳〵どうぢや。」ト體を突きつける。三五兵衛柄に手をかけ、三五「エ、これ切らうと思うたが、言はば菊野は他人、何の好みもない、敵を討つても詮ない事、こりやモウ廢しにせう、助けてやらう、ハテ命冥加な奴ではある。」ト科あつて行かうとする。源五「イヤ其方がたすけても、此方より。」ト源五兵衛切りかける。三五兵衛すり抜ける。立廻りよろしく有つて、トゞ是非なく源五兵衛まくり切にする故、刀を抜きはなしチヨン〳〵と打ち合はせ、見得になる。トどろ〳〵にて柳の葉散る、仕掛にて風起りし體、合方はげしく。三五「ヤア彼れは。」ト一寸立別れ又打ち合はして、源五「思ひがけなき此の有樣。」三五「誠にこれは。」源五「それ虎嘯けば風騒ぐと、時ならず柳の葉を散らし、動搖するは。」三五「魔風疾風の風にもあらず、最早七つ寅の刻。」源五「虎に寅の勢ひ増し、陽氣を發つは劒の奇瑞に極まつた。」三五「何が何と。」源五「最早叶はぬ此の劒。」三五「イヤ汝を先へ。」ト又これより立廻り宜しく有つて、トゞ刀を捥ぎ取り、源五兵衛、三五兵衛を切り殺し、首引切る。これは自身の刀にて。三五兵衛が刀は篤と清めて鞘に納め、腰の風呂敷をほどき、菊野が首を取り出しよき所に直す。本首なり。源五兵衛科あつて、

に認めて、國へ知らせし故、家來與五平が上つて其の樣子相知れた。」三五「コリヤ身共を恨むる事はない、檜山の火刃の鏽、其の身の越度ぢや、大馬鹿者奴。」ト又行かうとする。源五兵衞ひき廻して入替り、源五「イヤ滅多には動かさぬ、待たうてや。」三五「イヤ浪人者に身共は對手にならぬ。」源五「なんと。」三五「汝は浪人者ぢや、扶持放されぢや、エ、穢らはしい、こりや牢人は字さへ淺ましい、穴冠に牛か午かと人に謂はれて、ム、ハ、、、、ハテよく適つたものぢやなア。」源五「イヤ縱ひ浪人であらうが扶持放されであらうが、爲かけた劒の詮議、三五兵衞こま言吐かずと、猛虎の劒を身共に渡せ。」三五「ヤなんと。」源五「汝帶する其の刀は猛虎の劒に相違はあるまい。」ト手をかける。三五兵衞振りはなし、三五「イヤ兩腰ともに親重代、猛虎の劒とは覺えはないぞ。」源五「ハ、、、、ハテ親重代とは事をかしや、先だつて琉球國より送りし劒、大殿御病氣の中人知れず紛失、ハテ心得ずと奧樣のお指圖にて此の度の嚴命、右の劒を差上げねばならず、所に其の詮議の役目は其方身共に仰せつけられしは、深き御賢慮あつての儀と、それを察して汝が心にかけし菊野に吩咐け、實否を糺さんと樣々と心を盡したわやい。」三五「心を盡した菊野を何故手にかけた。」源五「それも汝が計らひ、劒を取返し菊野が敵も取らにやおかぬ。」三五「イヤしやらくさい奴、汝が嫌はれた腹立に菊野を殺し、其の敵は身共とは血迷うたな、コリヤ其の筈ぢや、性根もすわらぬへろ〱武士、狼狽へるは尤もぢや、

りいろ〳〵苦しみ、ばつたり仆ける、三五兵衛こなし。三五「モウ此のうへは。」ト尻引褰げる、チヨンチヨンにて又道具まはる。ト見附一面障子家體、やはり踊三味線にて道具とまる。ト障子の内にてばつたりと陰打つ。ト障子引拔にてぱつと血潮かゝる。ト兩方の障子より伴左衛門、幇間作治もすはうにて出て、ばつたりこける。源五兵衛障子を開き、血刀を提げ三五兵衛をうろ〳〵尋ねまはり、臆病口の障子の内へ入ると、仲居始め今の役人、段々と逃げて出る。内より廻女子或は親方迎へに來て、連れて去ぬる。樣々立ちかゝりて宜しく有り。少し引廻し、チヨン〳〵にて又道具まはる。

造物一面に高塀、後に二階座敷を見て、臆病口の方に大木の柳の釣枝、正面に三五兵衛尻褰げにて傘をすぼめ顏をかくし、橋がゝりへ行かうとして居る。刀の鐺を源五兵衛蹲うて持つてとめてゐる。この見得よろしく、又雨車合方にて道具とまる。

源五「マア三五兵衛、顏を隱しても滅多にや逃がさぬ、源五兵衛が用がある。」ト三五兵衛ぢつと傘をひろげ、科あつて立ち上り、三五「源五兵衛、身共に用とは何ぢや。」源五「イヤ外の事でもない、此の度の御用は、其方身共におほせ付けられた猛虎の劍、その詮議をせにやならぬ。」三五「何の浪人の其方が。」源五「如何にも其の劍を差上げてお國へ歸參。」三五「何處へ歸參する、奴が放埒は先だつて國元へ相知れ、御器の實はとうに上つてあるワイ。」源五「サア身共が身の上を、汝がある事ない事を大仰

まり首さん〳〵といふに依つて、ツイ首さんになりやんした。」 伴左「こりや〳〵汝等も人を欺すとあの通りぢや、用心せい〳〵。」 皆々「オ、怖、私等は忌いなァ。」 伴左「これはしたり、三五兵衛先生、先程よりどうかお氣の滅入つた樣子にて、御酒も進まず、エ、扨は菊野が事故。」 三五「サアぞつこん惚れぬいて居る菊野、死んだと聞いて餘り快くはないてや。」 伴左「日頃に似合はぬ、そりや何うした物でござりまする、大將に似合はぬ〳〵、三五兵衛樣、併しお悦びなされい、源五兵衛めは、最前當所の代官へ召捕られたと承つたが。」 三五「まだしもそれで少許ばかり胸が開けた樣な。」 幇間「そこへつけ込むいさめの神樂、道具廻しか獅子廻しは如何でござりまする。」 皆々「コリヤ可からうワイの。」 幇間「そんなら獅子は何處ぢや。」ト砧になり、皆々獅子廻しにて騷ぐ。所へ向うばた〳〵にて、彌助大肌脱本すはうにて手を負ひ走り出て、本舞臺皆のゐる眞中へ來てどつとこける。皆々ヤアと惘り。三五兵衛立ち寄り、三五「ヤア〳〵汝や彌助でないか、何故その如く手負になつた。」 伴左、皆々「彌助々々。」 彌助「三五兵衛さま、源五兵衛奴がこの樣に、まだ〳〵お前を搜して居る、必ず油斷さしやりますな。」 三五「スリヤ源五兵衛が。」 伴左「菊野を殺して死暴れぢや。」 幇間「申し三五兵衛樣。」 三五「さうぢや身共は密かに裏道より。」 幇間「お駕籠を申付けうか。」 三五「イヤ却つて駕籠は目に立つて悪い、コリヤ。」ト伴左衛門に囁く。 伴左「合點でござりまする。」 三五「早く〳〵。」ト伴左衛門は奥へ入る。彌助は立ち上

ての死罪、一旦そちが繩目に逢ふとても、彼の劒を今宵中に詮議仕出して身も直に。」與五平「イヤ義を見てせざるは勇みなしとやら、必ず今の。」源五「汝の志が過分な故。」與五平「これ拙者が事はお構ひなくとも、劒の御詮議。」源五「スリヤ與五平。」與五平「御主人。」源五「暫しが其の中。」與五平「此の身は死罪。」源五「イヤ身共が。」與五平「ハテかはりに爲つて。」源五「あの千日で。」トこなしあつて、與五平「お目にかゝりませう。」ト唄になり、與五平こなし有つて、代官引立て向うへ入る。源五兵衞後見送り、ほろりと思入あつて、トぢやん／＼／＼と七つの半鐘鳴る。源五「アリヤモウ七時、此の上は三五兵衞に、ム、。」ト立ち上り風呂敷を出し、右の首を包み、腰へ確乎と捲き、刀を抜きて蒲團にて最前の血をぐつと拭かうとして、菊野が事を思ひ、右の血を吸ひ、跡を蒲團にて拭き、鞘へ納め、「松坂屋は確かに蜆川の南側、さうぢや。」トきつとなる、チョン／＼にて道具廻す。踊三味線になる。是れより、

造物　松坂屋の座敷の模様になり、三五兵衞、伴右衞門、作治帮間にて、小春、萬世、房野、藝子にて三味線彈き、皆々酒飲み騷いでゐる。やはり太鼓入踊三味線にて道具とまる。

帮間「ア、旦那、向ひ側には人殺しがあると云うて騷いでゐる、こちら側には又色酒でこの大騷ぎ、川一つ隔てて、同じ騷ぎやうでも又違うたものぢや御座りませぬか。」房野「ホンニ菊野さんが殺されさしやんしたげな、何といとしい事ぢやないかいなァ。」小春「北の新地で首さんを、滅相な。」萬世「あん

た樣のお詞、何ぼう狀には女房とはしてあれど、菊野はやつぱりたはれ藝子、スリヤ下手人、その下手人になつてこなた樣には劍の詮議、こりやこれお家にかゝる一大事、すりや輕擧に此方樣の御身に凶事があつては、千鳥の家まで退轉仕りまするぞや。」源五「ム、。」與五平「ちやに依つて菊野を殺したは與五平。」源五「ヤ。」與五平「申し御不承ながら、此の位な忠義は何卒立てさせて下さりませ。」源五「其方といひ菊野まで。」與五平「知らぬが因果。」源五「因果か。」與五平「思へば神ならぬ身は是非におよばぬ。」ト兩人思入。橋がゝりより人音することなしあつて、源五兵衞、首を蒲團の下へかくす。與五平身繕へする所へ、代官家來大勢來る。代官「勝間源五兵衞の借宅はこれか。」捕手「左樣でござりまする。」代官「そりや。」捕手「ハツ。」ト捕手ばら／＼と入る。捕手「人殺し腕まはせ。」ト取捲く。與五平こなしあつて、與五平「待ち受けて居る、お代官樣、櫻屋の菊野といふ藝子を殺したは、千鳥の家來與五平、サア寄つて繩をかけられませ。」ト腕まはす。代官「イヤ／＼藝子を殺したは慥かに勝間源五兵衞と、訴人あるに、それに與五平とは。」與五平「イヤお代官樣、凡て命を惜しむは人間の習ひ、それに科人と名乘つて出る拙者、命づくに僞りを申さうか、但し誠の人殺しを此方にはお助け下さるか。」代官「イヤサそれは。」與五平「サア與五平に繩かけた。」代官「自身に名乘れば相違はあるまい、捕つた。」ト繩かける。源五兵衞こなし有つて、源五「ハア、四海の政道私なし、科極まれど一應は吟味を遂げ、其のうへに

上げ、御腹立たせ察しまゐらせ候。これは貴方樣お國元の兄御樣、渚樣とやら申すお姫樣を御同道にて、この御方樣と祝言さゝねば、源五兵衛樣の命にかゝはる事故、緣斷つてくれいと段々のお頼み、そこを乘け込み三五兵衛がいろ〳〵と申し、最前の退狀も三五兵衛が書かし、思はぬ愛想づかし候も皆々義理詰にて、三五兵衛には身を任し申さず候まゝ、必ず〳〵お腹立てさせ下さるまじく候、猶又仰せの事いろ〳〵尋ね候へども、一向々々申さず候處、先程伴左衛門參り候へば、我が刀を教へ何やら囁き刀を篤と見申し候間、三五兵衛が刀を御詮議なさるべく候、彌助も深切に見え候へども、三五兵衛とひとつ心に候まゝ、左樣に思召さるべく候、右何か參じ申譯致したく候へども、今宵は宿元を出し申さず候ゆゑ、文にて御詫び申し上げ候、委細は明晩參じ申譯致しまゐらせ候。何事も堪忍々々、急ぎゟしつ今日、こちの人源五樣參る、女房菊より。」ト與五平此の內一つ〳〵ぎつくりとする、思入ありて段々愁へのこなし、首ひき寄せ、「こりや此の狀をなぜ先へ見せなんだぞ、エ、。」ト泣く。與五平もきつと起き上り、與五平「さうぢや。」ト思入あつて驅け出さうとする。源五「こりや與五平、汝や何處へ行く。」與五平「人殺しの訴人。」源五「ヤ。」與五平「ハテ菊野を殺したは私と、我とわが身を訴人して命を棄てまする。」源五「何と。」與五平「サア企計のある三五兵衛とも知らず、拙者が頼んだは此の身の過失、又今の狀を聞けば聞く程、どうも恁うもいひやうも、思案も胸に迫つて、コ、此の上のお情には、最前こな

ひ送りしは、これ菊野が意趣許りでなく、身共が氣ぶさい、そこを察して菊野に賴みし詮議の綱、よもやと心見定めしに、俄に變じた最前の時宜、誓ひを立てし三味線の、五大力も書き直し剰へ破つたは、誠に三五兵衞と枕を交し此の事を明したと、おもひ詰めて身共が手にかけた。」ト首を引寄せ、「この菊野を馬鹿正直な汝が賴みを幸ひに、三五兵衞が計らひとは知らなんだワイやい。」與五平「エ、そりや誠の武士と思うた三五兵衞は。」源五「惡事の段々、うぬを僞つたのぢや。」與五平「ヤ、エ、。」ト大いに吃驚、ヤア／＼と驚くこなし。「初めて聞いた此方の心底、大切な劍の詮議を吩咐ある菊野とも知らずに、三五兵衞が差圖を、眞請にしたは此方の爲ぢや／＼と思うた事は、却つてお身の非事、劍の實否も菊野はコレ。」ト首を見て、「拙者が兄と僞つて、無理に緣を斷らした故、大事を明かしたと思召してこの樣に、こりや何うせう何とせう、樣子を聞けば聞く程、こりや皆拙者が三五兵衞に騙されたのぢや、欺瞞られたのぢや、エ、。」と髮の毛を搔き搚つて、體を叩き泣く、いろ／＼思入、科あつて、「エ、ひよんな奴を賴んでこの後悔、思へば下主の智慧で有つたかいナア。」ト體をたふし、色々あつて大泣き。源五兵衞も科あつて、源五「エ、これ憎い奴とも思はれぬ身共へ忠義、これにて菊野が心底も。」ト思入あつて炭櫃の下より、最前のひき裂いた狀を取り出し、繼ぎ合はせならべて見て、與五平に構はず狀を讀む。「心ならず候故文にて申し上げ／＼。誠に先程は心に思はぬ愛想づかしを申し

様三五兵衛樣のお目に懸り樣子を申したれば、則ち此方のお差圖で、互に上り詰めて居る戀中、百萬陀羅の意見せうよりは、菊野に逢うて斯う〳〵して、緣を斷らすが捷徑と、お國の上布煙草まで、土產にやれとそれ〴〵にお心をつけられ、菊野さへ思ひ斷らせば、自然と此方の心も直り、御無事でお國へ歸られると、横目と僞り役人を拵へ、此の與五平めはあなた樣の眞實の兒と僞り、菊野に逢うて段々と賴み、否といふのを無理矢理に、往生づくめに緣を斷らしたのぢやワイの。」源五「ナニ何といふ、アノ三五兵衛と相談にて。」與五平「こなたに知らさず緣を斷らした。」源五「アノ最前の時宜何もかも。」與五平「三五兵衛樣のお指圖。」源五「ヤア。」與五平「菊野に心をかけた體に見せ、段々とのお志。」源五「スリヤ彌三五兵衛が。」與五平「此方の心とは雪と墨。」源五「ヤア〳〵扠は。」ト與五平が胸倉を取つて引寄せ、「コリヤ三五兵衛に欺瞞られたワイやい。」與五平「なる程、これ此方を欺したのも、やつぱり此方の爲を思うてぢや。」源五「コリヤ。」ト又領髮を取つて引付け、「奴は樣子を知らねどもな、此の度のお役目は、三五兵衛と同道にて、當所へ上りし抑より、萬事につけて心得ぬ彼が心底、猛虎の劍の詮議は、外よりは彼奴をと心を付くる折柄に、菊野にうつ惚れ萬太郎樣をたらし、樣々と口說けども菊野は忌がり、身どもを無理に相方と賴むを幸ひ、劍の實否はこの手筋にてと、存じついた其の席にて、身共を打擲剌へ、今浪人となつたも彼奴が爲業、殊に國へも身共が事を、惡し樣にい

へ相知れ、親御源次兵衛樣のお腹立、まことお手討とも言うて御座る、この與五平めが段々お願ひ申しまして、お氣遣ひなされますな、下郎めが大阪へ上つて、若旦那源五兵衛樣に御意見申して、お心をお改めさせ、洗ひ上げた元の武士にして、歸國仕りまするで御座りますると申し上げたれば、親旦那にも俄に御立腹のお顏もかはつて莞爾と、與五平出來した、遉は譜代、其方倅に篤と意見を加へ、心を改めさせ連れて歸つてくれ、身共とても年寄つて、今役に立つべき倅めを、萬更手討にしたい事はないと、眼の内潤んで被仰つたを、知らぬ此方は名告つて出て、剩へ言ひ交した女を手にかけ、其の科で、これ。」ト火燵櫓を教へて「あの樣に若旦那源五兵衛樣には、大阪の千日で獄門に懸つて御座ると、國へ歸つて親旦那に、これ申し上げられるものと思うてゐやしやるか、源五兵衛樣イヤ若旦那。」源五「ム、なる程、樣子を知らねば國許の親人を始め一家中汝とても、只菊野が色香に迷うて、身持放埒と思ふも道理、又このごとく討ち放したも、女の心が變つた腹立と存ずるであらうが、何を中々さういふ源五兵衛ではない、これには言ふに言はれぬ、お家の爲になる深い思案が有つての事。」與五平「ヤレ〳〵さうとは見えぬ、どう言つても菊野に迷うて居やしやる、これ此方にかはつて三五兵衛樣の御心底は賴もしい、如何に朋輩の好みとて、それは〳〵御親切な適れのお侍、お國許へも此方の身の上をお知らせ下され、其の御狀が著すると否や、親旦那の仰せにて、拙者は大坂へ上り、直

あるか。」與五平「不便や菊野を、短氣な事をさつしやつたナウ。」ト泣く。源五兵衛科あつて。源五「可いワ噂があればモウ隱すに及ばぬ。」ト又立上り火燵を引捲り、炭櫃を退け下より以前の首を出し、「與五平、こりや是れを見い。」ト與五平が傍に置く。與五平一目見て、與五平「南無阿彌陀佛々々々々々。」ト心意氣の愁へ。源五「何と憎い女郎めぢやないか。」與五平「エ、。」源五「與五平、親人へ忠義を忘れな、頼んだぞ。」ト急度いひ行かうとするを、與五平引止め、與五平「これ〱源五兵衛樣、こなたは何處へ行くのぢや。」源五「知れた事、言ひ替しても菊野は賣女、身共は浪人、女郎めをぶち放した科人、名告つて出るワイ。」ト行かうとするを、無理やりに抱き留め、與五平「イヤ〱そりやならぬ。」源五「面倒なぜ止めるのぢや。」與五平「アさうさすまいために此の草鞋三度笠、路銀も持つて來たは、此方を夜の中に立退かさうと、狼狽眼で驅け付けたのぢやワイノ。」源五「ハ、、、、遉は下郎、身共も勝間源五兵衛、卑怯未練に逃げ隱れせうか、千島の家風を知らぬか、癡呆者めが。」與五平「イヤ癡呆といふは此方の事。」源五「何と。」ト落ちてある裸人形の首を取り上げ、火燵の櫓を取つて其の上に載せ、此方へ來て、與五平「ありや何ぢや。」源五「ヤ。」與五平「假にも忌々しい獄門首。これ千島の家風と自慢して、お家のお名を下し、親御の恥辱を思はぬ心か。エ、情ない源五兵衛樣。この與五平は幼い時から御奉公申し、親御樣諸共譜代の家來ぢやぞえ、此の度大坂へ上つたも、此方の身の上、一部始終お國

ト内にてどん／＼と靜かに早太鼓、道具の知らせまで打つてゐる、チョン／＼を切掛に合方、本釣鐘にて幕開く、ひやうばん／＼にて切。

造物初手の貸座敷にて、平舞臺に行燈を點しあり。向うより源五兵衞、初手の形にて矢張傘さし出て來て、本舞臺へ來て表の戸を明け、ずつと二重舞臺へ上り、燈火を掻上げ、足許にある最前の裸人形を見て踏み碎く。首ころりと落ちるこなし有つて、菊野が首を捥ぎ放し、又手を放し、持つてゐる狀を寸々に引裂き、二つの蒲團櫓を除け、菊野が首腕狀もろとも炭櫃を引出し、其の下へ打込む。この中始終合方、釣鐘荐りに撞いてゐる。源五兵衞よろしく有りて、火燵を元の通りにして、其の傍に坐して思案する。よき所へ與五平、草鞋三度笠持つてうろ／＼出て、ずつと内へ入る。源五兵衞を見て、

與五平「エ、嬉しやまだ内に御座るかいの。」ト悅ぶ。源五兵衞透し見て、源五「ヤイ／＼汝や家來の與五平でないか。」與五平「源五兵衞さま。」ト傍へ行かうとして、ちやつと表の戸を締め、科あつて、つか／＼と源五兵衞がそばへ行て、「まうし是れを穿いて。」ト草鞋をわたし、「此の笠で顏を隱して。」ト右の通り懷中より金を出し、「少々路銀も用意してある、サア／＼夜の明けぬうちに、一先づこゝをちやつとちやつと。」源五「馬鹿め何をするのぢや。」與五平「何をするとは落付きすぎる、かういふ閒も召捕りに。エ、これナウ立退く用意さつしやれませいナウ。」源五「ム、さては何ぞ樣子を聞いたか。」與五平「聞いた所か曾根崎新地は、上を下へとまぜ返して居る、ぢやに依つて此方を。」源五「スリヤ源五兵衞が噂が

幸ひ〳〵。」ト硯を取つて來て、「こゝに硯がある、其の樣子を書いてやらしやんせ、お輕に確乎と持たしてやるワイなア。」菊野「そんなら文を書かうかいなア。」女房「夜の更けぬうち早う。」菊野「文よりは直に逢うて。」女房「ハテそれでは惡いワイなア。」菊野「エ、辛氣な、よう文を書く事ではあるぞ。」ト下に居て文を書きかける。ト女房こなし有つて、女房「ドレわしやお輕を爰へ遣さうか。」ト誂への唄になり、お崎奧へ入る。菊野思入あつて狀を書く中、向うより源五兵衛尻からげ、袖にて雨を覆ひ出て來る。この唄の中本舞臺へ來る中、菊野狀を書き終ふ。源五兵衛内へツヽと入る。菊野「源五兵衛樣か、これ。」ト取りつくを、それなりにぐつと引寄せ、刀を拔いて搔首にする、すはうにて菊野が首、狀を持つてゐる手諸共に、源五兵衛が袴に取りついてある。それなりに構はず死骸を蹴仆す時、橋懸りより彌助、高下駄傘にて出て來て入り蒐り此の體を見て、ぶる〳〵顫うてゐる。源五兵衛、彌助を見て内より血刀を差出し、顏にて拭けと敎へる。彌助怖々手拭にて拭く。源五兵衛刀を鞘に納め、彌助が履いてゐる下駄を又直せといふ仕方、彌助始終怖々下駄を直す。源五兵衛右の下駄を履き、傘を持つて花道へしづ〳〵行きかゝり、彌助こなしある、此の内始終雨車。源五「翠帳紅閨に枕ならぶる妹脊中も。」ト謠を謠ひ、靜かに向うへ行く。彌助顫ひながら、彌助「人殺しぢや〳〵。」ト叫る氣でも聲の出ぬ思入。源五兵衛戸屋の際にてふりかへり、平舞臺をちよつと見る。宜しく幕。

ともに早う。」兩人「お暇まうしまする。」ト先へ入り、與五平こなしあつて少し立ち戻り、花道にて、與五平「御朋輩の好みとて、段々の。」三五「ハテ。」ト仕方、與五平思入あつて、與五平「何かは緩りと、さうぢや。」ト向うへツイと走り入る。始終このうち合方、三五兵衛もこなしあつて、三五「モウ餘程夜が更けたさうな。」ト菊野が傍へ行きて「菊野、必ず明日の晩、合點か、身共も歸らず、居續けで待つて居る、どりや奥へ往て又飲まうか、お身も來やれ。」菊野「マア〳〵先へ往かしやんせ。」三五「然らばお先へハヽヽヽ。これ早うおぢやえ。」ト唄になり、三五兵衛奥へ入る。菊野立ち上り色々科あつて、門口へ驅け出さうとする、所へ女房お崎つか〳〵と出て、表の戸をしめる。女房「菊野さん、何處へ行かしやんす。」菊野「お崎さん、どうぞ老松町へ鳥渡やつて下さんせいなア。」女房「イエ〳〵お前を何處へも出すなと、さい前のお客や三五兵衛さまの吩咐、それに老松町へ行かしやんすは、惡からうぞえ。」菊野「それでも逢はねばどうも氣が濟まぬワイな。」女房「サア私も氣が濟まぬは最前の時宜、源五兵衛樣が嘸腹立つて御座るで有らうと案じてゐます。これも三五兵衛樣とお前の樣子、態と知らすまいと思うた故、それはさうと菊野さん、お前は又源五兵衛樣を、眞實に退くのかいなア。」菊野「何のマア、ちつと譯があつての事なれど、マア緩りと、これまうし拜みます、一寸遣つて下さんせいなア。」ト此の内雨車になる。女房「それでもアレ〳〵雨も降るし、今夜は廢しにして、氣の濟まぬ事があるなら、

與五平「お國への歸參。」 三五「身共も亦。」 皆々「この樣なめでたい事が有らうか。」 菊野「この樣な悲しい事が有らうかいなア。」ト泣き落す。 三五「これ〱、この上は一時も早く渚殿を。ナア御合點か。」ト與五平もこなし有りて、 與五平「なる程、御祝言を取急げば身共はお暇、菊野、禮はゆつくりと、お二方の旅宿へ。」 三五「それが可い〱。」 與五平「然らば渚樣、喜平太樣。」 兩人「そんなら旅宿へ。」 與五平「お供仕らう。」ト科あつて、菊野を見て又たち寄り、「菊野、きな〱と思ふまい、藝子に似合はぬ、其の樣に泣いて、ア、愚癡な、これ身共が請合ひ、こちらの身分さへ納まれば、先程もいふ通り、又如何樣とも、それを樂しみに必ず煩はぬ樣にナ。とはいふものの一筋に思ひ込んだを。」 三五「これ。」ト與五平思入あつて、 與五平「ム、又逢はう。」ト合方になり、與五平、渚、喜平太をつれ門口へ出て、花道へ行き半ばにて立ちどまり、科あつて、 喜平太、渚「申しまんまと首尾よう。」 與五平「三五兵衞どのの指圖にて二人をたのんだ。」ト懷より紙入を出し、金一兩出し、「二人をたのんだ雇賃。」ト二分づゝ渡す。 喜平太(實はかご舁)渚(實は仲居お浪)「忝い、雇はれ仲居のお浪もお國の娘御。」 お浪「駕籠の太郎助殿が横目の役。」 與五平「按配よう行つた上は。」 兩人「元の姿に。」ト花道にて手早く上著を脫ぐ、二人共に世話形になり、與五平も衣裝羽織を脫ぎ、若黨の形。 與五平「これも御主人源五兵衞樣を大切に。」ト此の內本舞臺より三五兵衞門口へ出かけ、見てゐて手をたゝき、仕方にて早う去ねとこなし、與五平これを見て、「これお二人

菊野が身共へ。」菊野「これいなア。」ト言はうとして、二階を見て、又與五平科ありて、「サアこの三味線の。エ、胴慾な。」ト思はず持つてゐる煙管にて三味線を叩く、皮やぶれる、三五兵衛引きめくる。三五「忝い。」ト懐へ入れる、菊野も心づきはつとこなし。源五「三味線は藝子の魂、こりや誠に。」彌助「モウ破れかぶれぢや。」ト行かうとするを、源五兵衛又とめて、源五「ム、是非がない、身どももふつつりと思ひ斷つた。」ト立ちあがる。菊野「イエ／＼それでは。」トこなし有るを、三五兵衛だき止め、三五「これ源五兵衛も思ひ斷つたと／＼。」ト二階へかけていふ。菊野エ、と泣く。「サア是れからは誰はばからず菊野は身共が女房にしても、點の打人はあるまい／＼。」彌助「イヤ有るこの彌助が。」トまた摑みつきに行くを、源五兵衛きつと止めて、源五「コリヤ遊里の女は、あゝしたものぢや。」彌助「デモ見す／＼。」ト又きつとなるをこなし、源五「ハテ人ではないワイ。」ト唄になり、源五兵衛思入あつて、彌助を止めながら向うへ入る。菊野こなし有つて、つか／＼と驅け出さうとするを、與五平下りて來て、與五平「菊野、忝い／＼。」菊野「イ、エ唯一言源五兵衛様に。」三五「モウ可い／＼、心底見えた。」菊野「サア其の心底を。どうせうぞいなア／＼。」トうろ／＼する。與五平は無上に悦び、與五平「これで源五兵衛が身の納まり、渚さま喜平太様も、早くこれへお出でなされて、菊野にお禮を仰しやれ。」ト兩人も下りて來て、喜平太「菊野殿忝うござる。」渚「奥様のおほせ付けられた身共が役目も相立ち。」

る。菊野「エ、なんぢやいの、彌助どん、何も知りもせいで、これいなア。」ト源五兵衞にかけて、「段々樣子のある事、そりやお前も合點が行くまい。」ト二階を見て、「サア合點して退いてくださんせ、私や斷然と思ひきつて居るワイな。」源五「そりやどうなりと其方が心任せに致してくれうが、又身共も賴んだ。イヤ其方が賴んで斯うなつた源五兵衞、身にも命にもかへぬ大切な、アイヤ大切な金銀を打込んで、其の金の威光で口說き落す事も、何程もある格、身共は又其の大切な、サア金銀が拂底ゆゑ、菊野大切な金銀がない、それ故汝に迷うてゐる、それを首尾よう、イヤ三五兵衞と中よう添ひとげなりと、どうなりと。」菊野「アイそりやお前の教へ。イヤお前の教への通り。」ト與五平にかけて、「教へられぬワイなア、私や三五兵衞樣に、ナアお前に。」ト科あり。彌助「コリヤマア釋迦でも耐へられぬ。源五兵衞さま、お前が料簡さつしやりましても、どうも此の彌助が、寧そ。」ト摑みかゝりに行くを、源五「ハテさて其の樣に立騷がいでも言ふ事は云はれる、マア鎭まつてゐるよ、大事ないワイ。」彌助「エエこれ。」トこなし。三五「源五兵衞殿、お腹が立つなら右いふ通り、身どもを御存分に如何とも〳〵。」源五「三五兵衞殿、いよ〳〵菊野と。」三五「互に心底打明けてしつぽりと。」源五「あの心底を。」菊野「イイエさうぢや。」ト寄らうとするを、三五兵衞ひき廻し、最前の三味線を見せ、三五「これ起請がはりの此の三味線。」ト源五兵衞これを見て、源五「三五大切、ム、こりや五大力を直して。」三五「三五大切と

堀の富田屋に於て、身共が打擲いたした通りに存分に召され、手向ひも致さず、一言の申分も御ざらぬ。」源五「そりや何故に。」三五「菊野故。」菊野「イエ〳〵それ最前わたしに。」三五「ハテ默つてゐや、大事ない〳〵、武士の身の上なれど、和女ゆゑなら何とも思はぬ、結句かまひ立すると、なほ源五兵衞殿がお腹が立つワイ。」菊野「エ、さうぢやない、わしや源五兵衞さんに。」トこなしある。此の中兩方の中二階を開く。東の方には與五平、西の方には最前の娘渚、喜平太をつれ、樣子を聞いてゐる。」三五「これ。」ト菊野に與五平を見せる。與五平こなし、菊野思入。菊野「サアどうも有樣には。」源五「菊野、先ほど大身の客ぢやというて、駕籠までも釣らせ迎へに來たは、其の三五兵衞殿か。」菊野「否々そりや外に。」ト與五平を見る。與五平こなし有つて、三五「イヤなる程、外の客ぢやというて呼び寄せたは此の三五兵衞、漸う菊野も今夜は得心致した。」菊野「何のマア私は。」ト與五平二階より拜む。「サアどうも、言ふに言はれぬ義理といふ枷がかゝつてな。」三五「口說き落してたつた今新枕。」源五「ヤ。」彌助「アレ新枕ぢやといな〳〵、エ、これ源五兵衞樣、どうしたものぢや、彼いふ事を聞いては、俺でさへ胸がぐら〳〵煮えかへる樣なワイなア、これが又娼妓なら千人萬人の中に誠を立てるは唯一人、其の一人はと思ふ事もあれど、藝子だてら餘り無茶ぢや、同じ家中の御連中に、これ見よがしに、如何に三五兵衞樣が粹ぢやというて、あんまりな爲方ぢや、どうも濟まぬ〳〵ぞ。」ト舞臺を叩いてにえ

いでも是非今宵は泊るといふに。」トいひ／＼出て源五兵衛を見て、わざと吃驚のこなし。「ヤア悪い所へ源五兵衛殿。」源五「これは三五兵衛殿。」皆々「ひよんな場合になつたワイの。」三五「ハテ大事ない、酒にせう／＼。」亭主「ハイ／＼可うござりませう、それお銚子／＼。」女房「それ何ぞ肴を調へさしやんせいな。」仲居「マア息つぎにお煙草を。」と莨盆を持つて行く。小絲「火があるかいな。」亭主「早う肴を調へて上げませう。」仲居「お前方もちやつとお三味線を取つてお出でな。」女房「燭臺を持つておぢや、早う上げねばならぬぞえ。」トこの樣に聒しういひ／＼亭主、女房、仲居、子供、わや／＼いうて奥へ入る。源五兵衛こなし有つて又下に居る。彌助もこなし有つて、彌助「テモきつい請の違ひやう、餘り現金な奴等ぢやな。」ト矢張力みゐる。三五兵衛こなし有つて、三五「菊野々々、こりや來やれ、何を、髱を直さいでも可いワイ、帯をするのに遲々と埒のあかぬ。」トいひ／＼障子家體より、菊野を無理につれて出る。菊野前帯の解けたなりにて、源五兵衛を見てハッと思入。三五兵衛傍へ突きやる。三五「ハテ其のやうに恥かしい事はない、ハテ初心なものであるワイ。」彌助「アレ／＼彼の態を御覧じませ。」源五「菊野、そちや何ぢや、そちや彼の一室で今まで寢て居つたか。」ト菊野物言はずに思入あり。三五兵衛こなし有つて、三五「イヤ／＼源五兵衛どの、菊野に何にも仰せられな、サア存分にさつしやれ。」源五「ヤ。」三五「蹂躙りなりと擲ちなりと、この三五兵衛を心任せに、こりやこれ日外こなたを、道頓

せ。」ト肩ぬぎになり、じやうらく組んでやかましういふ。源五「彌助モウ〳〵可い、なにも言やんな、高で女ぢや。」彌助「デモあんまりお前を踏み付けましたさかいで。」源五「サア〳〵可いてや、こりやお崎、亭主十兵衛を呼べ。」女房「ハイ〳〵申し〳〵こちの人、ちやつと御座んせいなア。」亭主「オ、〳〵何ぢや、騒がましい、女房ども何ういふ事ぢや。」トいひ〳〵出る。女房「ソレ來てぢやワイなア。」ト源五兵衛を教へる。亭主「ほんに源五兵衛樣。」源五「外の事ではないが、先達身共が拂ひ殘り、此の家に借は如何ほど有つたの。」亭主「ハイそれは確かコウツ一兩二分で御座りませう。」源五「ム、一兩二分。」彌助「源五兵衛さま、二兩ござりまする、お使ひなされませ。」ト投つてやる。源五兵衛取つて、源五「彌助、この金子暫く借用して苦しうないか。」彌助「其の金で面はらしやりませ、大事ござりませぬ、一體お前は結構なさかいぢや。」ト此の內源五兵衛金の包を開き、源五「これに金二兩ある、一兩二分引いて、跡二分は家內へ祝儀に取つておきやれ。」亭主「ヘエそれは有り難う存じまする、慥かに請取りました。」源五「彌助、身共はモウ歸らうワイ。」彌助「エ、。」亭主「モウお歸りなされますか、ようお出でなされました。」女房「表を締めてモウ寢ようかいな。」彌助「お前それでは菊野さんに。」源五「何の逢はいでもよい、又翌の晩に出直して來るワイ。」ト悄々行かうとする。亭主「それぢやつと掃き出しておきやえ。」ト彌助マア〳〵と有つて、しか〴〵止める中、障子家體より、三五「ハテ扨何の歸らう、さうとめ

ト女房も共に呑み込ます。彌助「現在居てぢやのに、あんまりな。」源五「可いワイ、彌助、去んだら去んだにしておけ。」トこなし有つて下に居る。「お崎、煙草盆貸してくれぬか。」女房「アイ奥や二階へ皆出てある、お輕空いてあるかいの。」仲居「イエ〳〵皆ふさがつて御座りまする、それに臺所に火もなし。」彌助「こりやモウ見る事聞く事が、むかついてくるワイ。」源五「ハテ火がなければ煙草も呑むまい呑むまい、其のかはりに何でも大事ないが、彌助に飲ましたい、酒一つ飲まうか。」女房「イエ〳〵肴は何にも御座りませぬ。」源五「肴がなくばツイ鮓でも大事ない。」仲居「まうし鮓は最前取りにやりましたら、もう切れたと言ひましたワイなア。」源五「ムウなんなら酒も飲むまい、こりや〳〵小絲、房野、どうぢや少許こゝへ來てくれぬかい、せめては汝達なと話相手に。」女房「イエ〳〵この子達は、まだ奥のお客を仕舞はずぢやワイなア。」小絲、房野「源さまモウ去にんかいな。」ト彌助地鞴太踏んで、「モウ氣體が惡いぞ、忌々しいワイ、何て爰な茶屋はお客を潰すのぢや、こりや何か源五兵衛樣があてゝあるさかい、請が惡いのぢやな、イヤ拂ひをさつしやれぬに依つてかいやい、いとしぼさうに如何に今浪人ぢやとて、さうは見せつけぬものぢやワイ、これも大方菊野樣が退いたに依つて、届けてあるのぢや有らう、エ、今までの義理を知らぬか、可い大事ござりませぬ、其のかはりに俺が拂はう、オ、この彌助が廻しこそして居れ、金は此の通りぢや。」ト最前の二兩の金を出し、「何程なりと取れ、取りさら

源五兵衛構はず、源五「ハテ可いワイ、菊野が心は身共は存じて居る。」彌助「アレ又そんな緩い事をいうてぢや、菊野さんは疾うに魂が反つてあるワイな。」源五「魂が反つたとは。」彌助「ハテ心が腐つて、モウお前が厭になつたのぢや、其の證據は、これ此の退狀で御座りませぬか。」源五「そりや何ぞ譯だ有らう、身共がとつくりと言うておいた事も有り、今更どうして彼が心がかはるものか。」彌助「ア、お前に金を持たせたいなア、能いお客ぢや、うか〳〵と瞞されるも知らず、お前の鼻毛で菊野さんの下くゞりが出來る、エヽ、齒痒うて〳〵、お侍に似合はぬ、あんまりかひ性がござりませぬぞえ。」
源五「ハテ扨其の樣に苛々いはずと一つ飲まう、來やれ〳〵。」ト彌助やはりしか〴〵ありて、本舞臺へつれ立ち、ずつと內へ入る。所へ女房お崎、仲居おかる、藝子小絲房野皆々出て、女房「エ、源五兵衛樣。」ト吃驚のこなし。源五「こりやお崎けたゝましい、お崎なんぢや。」女房「イヤ能うお出でなされました。」ト皆々こなしある。源五「菊野はどうぢや、來て居るか。」女房「アイ、いゝえ。」源五「どうして來ぬな。」彌助「イエ〳〵來て御座りまする、お崎樣譃らしい、最前俺が送つて來た、今夜は爰の揚、しかも跡付にまでしてあるもの。」女房「サアそれは。」彌助「見す〳〵の事をいうてぢや、氣の惡い奥にで有らうがの。」女房「イヤ菊野さんは、確かに最前去んでぢや有つたと思うたが。」小絲「イ、エ奥にぢやワイな。」女房「エ、これ。」仲居「眞に去んでぢや有つたを、お前方は知らしやんせんのぢやワイな。」

かさうとする。菊野「滅相な、此の三味線に何を書くのぢやぞいなう。」三五「ハテツィ斯うぢや。」ト無理矢理に三の字を上へつけ、力といふ字に扁を附けさす。「斯うすりや可いぢやないか。」菊野「これは五大力。」三五「三五大切、ナント身どもに乘りかへるといふ、汝が起請同然ぢや。」菊野「ほんに三五大切と。それでは。」三五「滅多には消さぬ。」ト三味線を片側になほし、「此の上は。」ト手を取つて連れて行かうとするを、菊野「どうするのぢやぞいな。」三五「ハテ得心ぢやないか。」菊野「サァ得心は得心ぢやけれど、ほんに今夜はお前も知つてぢや通り、氣がもや／＼して、どうやら辛氣なに依つて、何卒明日の晩に。」三五「ム、そりや明日の晩に逢ひなう。」菊野「サア／＼此方は明日の晩に極めておいて、お前の大事を。」三五「イヤさう味うは乘れぬワイ。」菊野「イ、エイなァ氣のわるい、まだほかに何やかや尋ねたいことがあれば。」三五「幸ひあの一間で。」菊野「話すばかりぢやぞえ。」三五「帶紐解かずにか。」菊野「雜魚寢するは藝子のならひ。」三五「そんなら菊野。」ト手を執つて。菊野「アレやつぱり忙しなう。」三五「デモ聞く事があるぢやないか。」菊野「それぢやに依つて。」三五「マアおぢやいなう。」ト無理に菊野をつれて障子の内へ入り、是れよりしつぽりとした長唄になる。向うより源五兵衞、彌助最前の狀をひろげ見せながら、彌助「源五兵衞さま、おまへどう思うて御座りまするぞ、かういふ退狀を見ては、濟みますまいぞえ／＼、この彌助でさへ腹が立つて／＼なりませぬワイなァ。」トいひ／＼出て來る。

段思うて下さんすお前、寧そ面あてに。」三五「ヤァ〳〵。」菊野「とサア思うてはゐるけれど、若し女夫になつてお國へ行た折、同じ家中で朋輩の源五兵衞樣と、顏見合はさねばならず、それも一旦退いたに依つて、私や構はねど、お前はどうも味なものぢやないかいな。」三五「否々そりや氣遣ひはない、殊によると身どもは國取大名になる。」菊野「エ、。」三五「サア今までの樣に、千島の家中ではゐぬ、途方もない出世をして見せる、もしまたそれが行き損うても、どんな事があつても源五兵衞が。」ト言はうとしてチャツと、「サア源五兵衞とは顏は合はせはせぬ、一ツにも居ぬワイの。」ト菊野思入あつて、菊野「そりやマア耳寄な事ぢやなァ。」三五「耳寄どころか浮み上る事ぢやて。」菊野「サアその浮み上る出世、お前が大名にならしやんすといふ、何ぞ慥かな事があるかえ。」三五「ある〳〵、定木判木で押したといはうか、石橋を叩いて渡るより丈夫さうなことぢや。」菊野「サア其の譯はどういふ事ぢやえ。」三五「其の樣子はこん度の御用。」ト言はうとして、「イヤ滅多には言はれぬ。」菊野「そんなら謊ぢやな。」三五「イヤ僞りではない、大眞實。」菊野「さう言うてやつぱり私を欺さうとは、テモ怖い三五兵衞樣ではあるワイな。」三五「イヤ菊野、身共が出世するに違ひはない、其の譯は滅多に言はれぬ大事の事、それが聞きたくば。」ト手を執つて、「サァ思ひがかなうた上でいうて聞かさう。」菊野「そんならそれに違ひはないかえ。」三五「何の違ひがあらう、汝も違ひがなければ幸ひこの三味線へ。」ト筆を執らせ書

五兵衛どの。」三五「伴左早く〳〵。」伴左「ハッ。」ト唄になり、伴左衛門引返し橋懸りへ入る。所へ奥より菊野、最前の三味線さげ、酒に醉うた體にて。菊野「オ、三五兵衛樣、まだ爰にかいなァ。」三五「菊野、三味線を持つて、醉うたな〳〵。」菊野「心は醉はぬけれど、むしやくしやするので。」トこなし有つて、三五兵衛三味線を取り見て、三五「其の三味線には惡戲がき。」菊野「エこれかえ。」三五「五大力とは。」菊野「コリヤ歌の外題、今日晝餘所の藝子樣に敎へて貰うた五大力、古い歌なれど、とんと知らずに居たワイなァ、それを忘れぬ樣に彈かうと思うて、滅相な見やしやんせ、三味線へ書いておいたワイな。」三五「五大力とは、エ、住吉ぢやなァ。」菊野「實に住吉や淺澤の、尊き寺と聞くからに。」ト唄に紛らす。三五「菊野、源五兵衛を退いた汝の心は。」菊野「サァさつぱりとしたワイな。」三五「何を譃らしい、やつはり心が殘つて有らうが。」菊野「そりや萬更殘らぬでもないワイなァ、丁度殿達でもさうぢやけな、何ぞかはりが出來るまでは、どうしても思うてゐるものぢやといなァ。」三五「ハアあの代りの出來るまで。」菊野「私が樣な者は大體の事では。」三五「イヤ出來る。」菊野「エ、。」三五「早速今爰で出來てある。」菊野「そりや何を言はしやんすぞいな。」三五「菊野、一體この三五兵衛は汝に、イヤこりや言はずとも、これまでとつくりと合點の筈、一旦武士の意氣づく、思ひ斷つたといふものゝ、源五兵衞さへ薩張と譯が立つたからは、身共が意に隨うても大事あるまいがな。」菊野「サァ私もこれまで段

呼ぶは誰ぢや。」トいひ〳〵出て、「ヤァ三五兵衞樣、今の首尾は可うござりますか。」三五「大極上々、まんまと離縁狀は、これこの如く書かしたてや。」彌助「そんなら菊野が得心して。」三五「往生づくめ、何と氣味がよからうが。」彌助「イヤけうといもので御座りまする。」三五「彌助大儀ながら其方は、これを菊野が渡したと、源五兵衞に屆け、先だつていひ合はせた通り、とつくりと合點か。」ト狀を渡す。彌助取つて、彌助「お氣づかひなされますな、一たん請合うた此の彌助、さゝものぢや御座りませぬ。」三五「忝いこりや。」ト紙入より小判二兩出し、「些少ながら其の狀の飛脚賃ぢや。」彌助「こりや二兩では高い飛脚賃。」三五「大事ない、取つておけ。」彌助「マア忝い、そんなら此の狀はやう源五兵衞へ。」三五「それが肝心。」彌助「一走り往て參りませう。」ト唄になり、彌助狀を持つて向うへ走り入る。三五兵衞跡見送り、三五「是れからが理詰で、菊野が身共に靡かにやならぬ。」トうまいと言うて科、橋懸りより磯谷伴左衞門、二幕目の侍にて出て來て、伴左「これは三五兵衞殿、先程より松坂屋に相待ち居りました。」三五「伴左衞門、先だつてお身に申し合はした、これこの。」ト我が刀を敎へ囁く。「ナ、千里一飛出世のあだて。」伴左「サア其の儀に就いて、拙者方より手筋もあれば、これ。」ト伴左衞門又三五兵衞にさゝやく。三五「如何にもそれは祝著、萬事はとつくと後程。」伴左「然らば松坂屋に相待ち居る。」三五「大分機先がよし、おつと今宵は身どもが立ぢや、松坂屋で戯けめされ。」伴左「それは忝い、三

う。」三五「一寸遠ざかり〳〵。」菊野「申しそれで可いかえ。」與五平「サア承知々々。」三五「一寸遠ざかり〳〵。」二人「モウそれでは可からう、恐惶謹言、イヤそれではない、めでたく〳〵。」菊野「何のめでたいことが有つて、ツイ〳〵でよいワイな。」三五「そりやどうなりと、時に宛名は、確りと勝閧源五兵衛樣參る、櫻屋菊野判。イヤ判には及ばぬ、ドレ〳〵。」ト取つて篤と讀んで與五平に見せる。與五平仔細らしく見て、「これで可からうかな。」與五平「大かた可からう。」ト三五兵衛取つて篤と封じ、三五「サア表書をして急用。」菊野「何の遲うても大事ない事を。」トよろしく書く內、與五平三五兵衛顏見合はせるこなし。「さうして此の文は、誰に持たせて遣るのぢやえ。」三五「そりや身どもが密かに遣はす者がある。」ト狀を取り、菊野「申し兄御樣、お前のお賴み、源五兵衛樣の御身の上、どうぞ無事にと思ふから、彼の通りの文は上げるものの。」與五平「これそなたの御恩は一生忘れぬ。」菊野「ア、癪がさし込んで來たワイな。」與五平「ヤアそれは。」三五「これ〳〵そこを弱つては。」ト與五平にかけていふ。「菊野、酒で押せ〳〵、御舍兄も心のつかぬ、奧へ伴ひ憂さばらしに一つお侑めなされい。」與五平「イヤ何菊野、サア大事ないワ。」菊野「こりや醉はにやどうもならぬワイ。」三五「オ、それが可い〳〵。」ト騷ぎ唄になり、與五平こなし有つて、菊野を伴ひおくへ入る。三五兵衛殘り、いろ〳〵思入あつて、「時に此の狀を、幸ひ彌助が來て居るはずぢやが、彌助々々。」ト呼ぶ。奧より彌助「オ、〳〵おれを

兵衛へ離縁状を書いて遣りや。」菊野「エ、。」三五「ハテかういふ時宜を微塵芥子程も知らさぬが秘密、何かなしに厭になつて退いて仕舞ふといふ一通りの離縁状を。」與五平「こりや書いたものでなければ、弟めが得心致すまい。」菊野「そんならあの離縁状を書くのかえ。」三五「縁斷つたといふ確かな證據。」菊野「どうやらそれでも。」與五平「ハテ一旦國へ立ち歸つた上では、身共が呑み込んで居るワイ。」菊野「もし源五兵衛さまが誠に。イヤアノ縁斷るのぢやに依つて。」三五「離縁状が肝心。」ト菊野思入あつて、菊野「わたしや胸に痞へて、どう書いてよいやら、一向書けぬワイな。」三五「そんなら身共が言うてやらう、仰書にしたがよい。」與五平「三五兵衛樣、お世話ながら、弟めが、ナ、篤りと得心致す樣に。」三五「承知でござります、サア菊野。」ト菊野筆紙を取り上げて、これより仰書にかく。三五「マアそこへ一寸一筆申し上げ〳〵、是れまではそもじ樣の段々の御しんの程、嬉しく存じ〳〵へども、何ういふ事やら俄に秋風、頓と忌になり申し候、七里けんぱい此の上は、必ず〳〵逢ひに來ておくんなえ。」與五平「なる程。」菊野「これでは。」三五「ハテとつくりと聞えるやうに書かぬと、源五兵衛が爲にならぬ。」與五平「左樣々々。」ト菊野始終こなし有つて、菊野「さうして何うぢやえ。」三五「逢ひに來ておくれなえ、もはや私は斷乎と思ひきつて居るワイの、ォ、好かんォ、嫌ひ、縁斷つたぞえ。ア、是れではどうやら可笑しい文句ぢやなァ。」菊野「エ暫く遠ざかり〳〵でよいワイな。」與五平「イヤ〳〵暫くでは惡から

て縁斷つてやらねばなるまい。」トいひ〳〵内へ入る。與五平「ヤア三五兵衛さま。」三五「御舍弟の樣子は承つた、段々の御心づかひ推察して、何とも氣の毒千萬。」與五平「忝う存じまする。」ト菊野、三五兵衛を見て思入有つて、菊野「なる程、得心して縁切りませう。」三五「ヤ。」菊野「サア〳〵色々思案をして見れば、源五兵衛樣の御身の爲になる事なら、最前から兄御さんのお賴み、わたしや能う合點が行きましたワイなア。」與五平「ヤア〳〵そんなら眞實得心して。」菊野「アノ私が退けば、親御樣の御機嫌も直り、諸樣とやらと夫婦にならしやんす、源五兵衛樣のお身の納まりとあれば、兄御樣のお賴みの通り、縁を斷ります退きます、かういふ心の中を、推量して下さんせいなア。」ト菊野いろ〳〵思入あつて、與五平「オヽ、道理ぢや〳〵、よう得心して給つた、それでこそ源五兵衛も命は助かる、身共も悅び、忝い〳〵。」三五「菊野出かした、遉は里に育つた故、物事辨へ有つて、三五兵衛感心々々、身共一旦汝に心をかけ、富市の時宜、何でも源五兵衛めをと思うたが、又得心して見れば竹馬の朋友、武道にかゝる義理でもなく、高で色の道、當つて碎けと、今ではさつぱりと思ひ斷つて、左右源五兵衛が爲になる事なら倶々に世話する。これさ御舍兄、とてもの事に菊野が思ひ斷つたといふことを、源五兵衛に見せずば、諸殿と滅多に夫婦にはなるまいぞや。」與五平「なる程左樣、併し色里の事は不案内の拙者なれば、宜しうお指揮を。」三五「然らば菊野。」ト硯卷紙を取つて來て菊野にあてがひ、「源五

は和女を頼む。どうぞ源五兵衞と緣を斷つて貰へば、弟が心も自然と直り、なぎさ樣と祝言して、國へ歸れば親人の悅び、腹切る所か出世の御加增、サアそれぢやに依つて菊野、和女に此の兒が別けての賴み。」菊野「緣を斷れとは、そんな胴慾な事。」與五平「どうぞ得心して。」菊野「源五兵衞さまに言ひ交したは、まだ間はなけれど、大分譯のある事ぢやワイな。」與五平「サアどうぞ譯がなけりヤ、言ひかはされまい、そりや身共が聞かいでも知つてるが、菊野、言ひかはした源五兵衞が、和女よもや憎い事はあるまいがの。」菊野「知れた事、憎うて人に惚れる物かいな。」與五平「その可愛源五兵衞ぢやに依つて、身共がいふ通りに緣を斷つてたも。」菊野「退く事はなりませぬ、否でござんすワイなア。」ト立ち上り奧へ行かうとするを引止め、與五平「待つた菊野、そちが源五兵衞と緣を斷らねば、親人の手に懸つて死ぬる、又緣を斷れば命は助かり出世するが、その善惡は心一つぢや、諄うは言はぬ、どちらへなりと返事聞きたい。」菊野「サア思ひまはせば廻す程、一旦を離別ねばならぬ譯なれど。」與五平「それ程合點が行てあるぢやないか。」菊野「ぢやというて。」與五平「ハテ源五兵衞の身が納まつた上では、有る緣ならば手かけ妾になりと。」菊野「エ、。」與五平「又其の時は相談の上仕樣もあらう、是れが眞の憂世の義理と情、念ひ斷つて。」菊野「そんなら一旦源五兵衞の身が納まつたら。」與五平「身共が請合ひ。」ト此の時三五兵衞橋懸りより出かけ、最前より樣子を聞いてゐて、此の時、三五「菊野、こりや得心し

つて貰ひたい。」菊野「エ、。」ト大きに恟りして、「ヤ始めて逢うた兄御さん、私になり入つて頼みたいといはしやんしたは。」與五平「弟と縁を斷つて貰はう爲。」菊野「そんなら今の許嫁の渚樣とやらと。」與五平「なる程、女夫にせねば、弟源五兵衞命がない。」菊野「エ、、、そりや何で、どういふ譯で。」與五平「此の度の役目首尾よう仕課せ歸國すれば直に祝言、渚樣と夫婦になれば源五兵衞が身の大慶、親兄弟も一家中も面目、殊に主命重き仰せ、時に源五兵衞は此の大阪で逗留の中、菊野、そちと言ひかはして役目も疎畧、剰へ愚かしい萬太郎樣の御機嫌を損ひ、身持さんぐ\と國許へ相知れ、親人の御立腹、不屆至極の源五兵衞、國へ呼び寄せ手討にせんと老いの一徹千島の侍、とめてもとまらぬ氣強いお性質、そこを彼の渚樣が、段々親人を宥めて、どうぞ祝言したい、夫婦になりたいとお詫に、道の親人もお主筋なれば、漸うと得心して、奥樣よりの付人にて、横目の喜平太殿が渚さまを同道、身共もろともに大坂へ上つたは、源五兵衞に篤と意見を加へ、なぎさ樣と夫婦にせねば、親人の御機嫌よりは、御主人への申譯、さもなければ源五兵衞は手討に逢ひ、命を失ふ許りでなく、親人も身共も腹を切らねばならぬ時宜、さすれば是れまで千島の家中にて、數代續きし勝間の家も退轉、其の元はと言へば菊野、そちに源五兵衞が迷うた許り、親兄弟から世の人々、一家中の迷惑、たとひ死んだ後でも、阿房の馬鹿者、人でなしと笑はれるのが口惜しい、そこをとつくり合點して、氏神より

菊野が下の方へ坐る。菊野始終合點の行かぬ科。　菊野「申し貴方方はえ。」　喜平太「イヤ身共は千鳥の家中、喜集院喜平太と言うて、萬事横目役を相勤むる者。」　諸「わたしは又渚というて、萬太郎樣は從弟同士。」　菊野「何の事やら頓と合點が行きませぬワイなア。」　與五平「菊野、合點の行かぬ筈、身共はこれ何を隱さう、其方が深う言ひかはして居る勝間源五兵衛が眞實の兄。」　菊野「エ、、そんならお前は源五兵衛樣の。」　與五平「サア兄の身共が遂度來ぬこの茶屋へ來て、そちに逢うて折入つて賴みたいといふのは、あの渚樣の事。」　菊野「エ、。」　與五平「イヤ大切な國元のお役人、また渚樣にも。」ト思入あつて、「御兩所共に、菊野に一寸でもお逢ひなされたら宜しう御座りまする、此の上は拙者が取計らひ仕りまする間、矢張アノ二階へお越し下さりませう。」　喜平太「然らば身共は渚樣を作ひ二階に相待ち居る。」　渚「とかく宜しう賴むぞや。」　與五平「畏まりました。」　渚「そんなら。」ト矢張合方にて、渚喜平太をつれ、菊野こなし有つて、元の二階へ上る。與五平こなし有つて、又菊野が傍へ來て、　與五平「菊野、あのお侍はお國の横目役、又なぎさ樣といふは、聞いての通り萬太郎樣の從弟、御家門のお娘御、源五兵衛が爲にはお主筋、其のなぎさ樣と奧樣のお指圖にて、源五兵衛と許嫁。」　菊野「エ、そんなら今のお娘御は、源五兵衛樣と許嫁でござんすかえ。」　與五平「なんとみやうがに叶うた有り難い事ではないか。」　菊野「なんのそれが。」ト思入有つて、「存じませぬワイなア。」トこなし。　與五平「菊野、源五兵衛と緣が斷

の菊野と名に立つも理、身共も初めて逢うて、此のやうな嬉しいことはない。」トこなし。「ほんにそれ。」ト風呂敷包を取り上げ、一つ／＼出し、「是れは粗末ながらお國の名物上布、こちらは國分煙草、かう近づきになる印までに、身共が土産ぢや、何卒貰うて下されうなら千萬喜びまする。」菊野「これはマア始めてお目にかゝりました私へ、結構な此のお土産、忝う御座りまする。そんなら貴方は。」與五平「千島の家中。」菊野「エ、。」與五平「イヤ此方にチト折入つて頼みたいことがある。」菊野「アノ私に。」與五平「如何にも。」ト菊野こなし有つて、右の二品を與五平が傍へ持つて往て、菊野「マア此のお土産はお返し申しまする、私も藝子、ちと譯が有つて縱ひ誰方でも。」與五平「否々身共が頼みたいといふは、全く色がましい儀ではない。」菊野「それでも何うやら。」與五平「イヤ此の家の花車、菊野にちと話があれば、皆をつれて暫く爰を。」女房「ハイ／＼合點でござりまする。」皆々「粋を通して。」女房「どりや奥へ參りませう。」ト合方になり、皆々奥へ入る。跡に與五平菊野殘り、與五平土産物を又菊野へ差遣はし、與五平「菊野、今もいふ通り、これは身共が志ぢやほどに、是非其許に。」菊野「義理をかけるはお客の常、高で藝子の私に、お侍さんのお頼みとは。」與五平「なる程道理。」ト思入あつて上手の中二階へ向ひ、「お二人とも苦しうござりませぬ、サア／＼是れへ／＼。」ト中二階より渚、振袖娘の形にて、喜集院喜平太、羽織野袴、目附の形にて、兩人出て來る。與五平まづ／＼と渚を上手へ直し、

つ上れいなア。」與五平「イヤ〳〵さう酒飲んでは、言ふ事が言はれぬ。」皆々「菊野さんに甚いこりやうぢやな。」與五平「行李か葛籠か知らぬが、何でも菊野に逢はうと、最前から、ア、待たるゝ身より待つ身になるなとは、よう言うたなア。」ト待つはつらいの唄になり、むかうより菊野駕籠に乘り、彌助ついて出で來て、彌助「サア〳〵まうし、是非ならぬ菊野さんを、この彌助が働きで貰うて參じました。」女房「それは忝い、彌助殿きつと恩に著る、待ち兼ねてござる、ちやつと菊野さんを。」彌助「合點でござりまする。」ト駕籠を内へ入れ垂を揚げる。菊野「お崎さん、約束は内方ぢや有つたかいな。」トいひいひ出る。女房お崎立ち上り、女房「アイ〳〵、お前一寸なりと逢ひたいと待ち兼ねてござる、ちやつと向うへ往きいなア。」ト勸める。菊野こなしあつて、菊野「三五兵衞樣かと思うたら、さうでもないさうな。」トこちらへ坐る。小絲「菊野さん、老松町かえ。」菊野「アイ老松やら老梅やら、頓と分らぬワイなア。」與五平「心を盡した效有つて、菊野殿のお出で、忝い〳〵、サア〳〵これへ〳〵。」トこなし有つて、皆々しか〴〵ある。彌助「お崎さん、菊野樣を貰うて來た代りに、何ぞよい肴で。」女房「酒所か、新造樣でも私が立てるワイなア。」彌助「そりや忝い、そんなら臺所で重兵衞樣と一緒に飲みかけうか。」トいひ〳〵奧へ入る。此の内與五平杯取り上げ、與五平「始めてなれば菊野、こなたへ御慮外申さうか。」菊野「ハイ戴き申しませう。」ト杯を取り上げる。與五平「扨々聞いたよりは美しい、樓屋

三幕目

造物平舞臺、見附三間の間、眞中より上手へ障子家體、長暖簾、東西に中二階折廻り障子、毎もの所に門口、出來島屋といふ掛行燈かけ、右平舞臺に菊野、小絲、房野、藝子にて三味線彈いて居る。與五平著附羽織、田舍武士にて鉢を叩き拍子取つてゐる。お崎女房の形、お吉仲居にて酒を侑めてゐる。この模樣萬歲の唄にて幕開く。

仲居「サア〳〵お大盡樣、一つ上らんかいなア。」　女房「あなたは萬歲は酷うお氣に入りましたかな。」

與五平「如何にも〳〵、國許へ來る萬歲とは違うて、藝子の謳ふ萬歲は、中々面白いワイ。」　小絲、房野「そんならお前は大和で。」　與五平「滅相な、俺は西國九州者だ。」　小絲「それでも國許の萬歲より面白いと言はしやんすで。」　房野「それで大和かといふ事いなア。」　女房「何のいなア、貴方は九州の千島家の御家中。」　仲居「源五兵衞樣や、三五兵衞樣も一緒のお國、それで菊野樣を御註文で、今夜の約束ぢやワイなア。」　與五平「それ〳〵肝心の身共の望みの菊野は何うぢや、なぜ遲い、畢竟菊野に逢はう許りに、飮みともない酒を飮んだり、藝子を呼んだり、早う逢はしてくれぬ事かい。」　女房「サーなア、菊野さんに逢ひたいと仰しやるゆゑ、廻しの彌助を賴んで、今夜は是非こちらへ見える樣にしておきました。」

與五平「さういふ事なら一時も早う何卒。」　仲居「イヤモウ追つつけ見えませうワイなア、それまでまア一

親方のかうけに、又どうなりとも致しますれど、一遍戻つてさへおくれると、さしもの私も降参でござりまする。」彌助「一遍戻つてさへおくれると、

歸つたがよい。」彌助「一遍戻つてさへおくれると、又どうなりとも致しますれど、親方のかうけに、さしもの私も降參でござりまする。」源五「主と病には是非がない、歸つたがよい。」彌助「エ、旦那が彼の樣に仰しやつてぢやワイな。」菊野「そんなら歸なにや惡う御座りませうかいな。」源五「オ、さうしやれ、彌助が術ながるぢやないか。」彌助「目立つては惡いと、駕籠もたせて來ました、サア駕籠の衆、早う頼みますぞえ。」ト駕籠舁ハイ〳〵と舁き寄せる。菊野腹立てながら駕籠に乘る。菊野「モシ七時時分に來る程に、叩かしておくれなさんなえ。」源五「そりや合點して居る、彌助大儀。」彌助「ハイ〳〵旦那モウお休みなさりませ。」ト此の内に駕籠舁き上げる、彌助三味線箱持つ。菊野「モシ眞實に來る程にツイ起きなされや。」源五「サ、可いてや〳〵。」菊野「オ、辛氣。」彌助「サア早う遣つて貰はうぞや。」ト唄になり、菊野駕籠に垂を下し駕籠は向うへ入る、彌助跡に隨き入る。源五兵衞跡見送り思入あつて、源五「ア、若輩な女に稀な者、一大事を打明し頼んだれば、心得ました仕課せませうと請合ひ、其の上三味線に五大力と書き、誓ひまで立てるとは、ハテ氣性な奴ぢやなア。」ト感心のこなしよろしく有つて、チヨン〳〵にて。

堅う、心の誓ひは五大力。」源五「外へ大事は漏らさぬといふのか。」菊野「アイお前のお頼み、三五兵衛が胸の裏。」源五「首尾よう聞いた其の上で。」菊野「やがて逢はうぞえ語ろぞえ。」源五「マァそれまでは暫しの中。」菊野「別れのやうに思はれて。」源五「ナニ馬鹿な事を。」菊野「をしき筆とめ〳〵ぢやな。」ト兩人思入、科ある。ト向うより彌助、駕籠一挺つらせて、急がしさうに走り出て、門口の戸を敲き、彌助「菊野さん〳〵。」菊野「彌助殿、何の用ぢやえ。」彌助「何ぢやあらうと一寸明けておくれ。」菊野「エエけたゝましい何ぢやぞいなァ。」といひ〳〵門の戸を明ける、彌助入る。彌助「何ぢや所ではござりませぬ、最前宅へ歸んだところが、親方が私を呼びつけて、今夜は菊野を是非とも大重へやらにやならぬ、汝が働きで今夜あげを貰うて來いと言はれました。」菊野「さうぢやと言うて、今時分から他へ往く事は、こちや忌ぢや、どうなりと言うて下さんせいなァ。」彌助「それに如才があらうか、ちよぼくさ言うても一向きかぬ鐵挺親父、その上お前が爰に居てぢや事を、感づいて居る樣子、若し爰へ親方が來をると、重ねてからの爲にもならぬと思ひ、それで迎へに參りました、今夜の所は私に免じて、どうぞ戻つておくれなされませ。」菊野「イエ〳〵何ぼうお前の言はんす事でも、今頃は歸ぬる事は。コレ拜むワイなァ。」彌助「イヤ此方から拜みます、さうでないと中に立つた柱で、迷惑なは私一人、何とせう知らぬ。」ト術なきこなし。源五「彌助があの樣に云ふを、片意地は惡からう、今宵の所はマァ

におのれが底意に深き企計ありと親人の仰せ、それ故わざ〳〵罷り上るこの源五兵衛、さりながら是れぞといふ證據もなき故、迂闊に詮議もならず、もし荒立てて詮議なさば、却つて劒を破却するか、人手に渡らば。デは合點がゆくまい、萬一其の劒を打折るか、又は海川人の知らぬ所へ沉めて仕舞へばお家の大事、サア客を拵へてたもといふは爰の事、下地から惚れて居るこそ幸ひ、何卒三五兵衛が口から言はすか、これぞといふ證據になるべき書いたものといふか、又は少しにてもそしり走り、そなたが聞き出して給るならば、それを手蔓に詮議し出し再び歸參、それ故頼むといふは爰の事ぢやワイなう。」ト菊野思入あつて、菊野「よう云うて下さんした、それ程の大事を打明けて下さりまする貴下の心は、起請誓紙を貰うたより嬉しう御座りまするワイなア。」源五「すりや合點がいたか。」菊野「アイ合點が行たが、意氣張の強いアノ三五兵衛、ついした事では。」源五「打解けさするはそなたの働き。」菊野「命に代へて。」源五「スリヤ帯紐解く氣ぢやな。」ト こなし菊野思入有つて、三味線箱と硯を持つて來て、三味線を出し、裏皮へ五大力と書く。ト五大力の唄になる、書き終ひ、菊野「これ見ておくれなされ。」ト見せる。源五「ム、すべて女の人手に渡す文の封じに、開かすまいと認める五大力。」菊野「さいなア、お侍様の魂はお刀。」源五「町人の魂は算盤秤。」菊野「藝子の魂は三味線、その三味線の封じ目

よう覺えて居りまする、何ぼう卑しい勤めの身でも、このお人より外は一生連添ふまいと、心に錠を卸したからは、小町の女中樣や、お屋敷の姫御前も同じ事、お前さんより外に肌觸れまいと思うてゐる私に、客をこしらへてくれいとはえ。」　源五「合點は行くまい、其の委細といふは、源五兵衞が身に取つては大切な事なれど、心底見拔いたそなたぢやに依つて。」　菊野「イ、エ聞かしてくださんすな。」　源五「なぜに。」　菊野「サァお前の身に大切なる事を、私が聞いた其の跡で、何處からどう廻つて、主の大切な事を他外の人が言ふまい物でもない、其の時にはさすが勤めの身、もしや私が口から漏れたやうに思うておくれなされはせまいが、どうも私の心が濟まぬワイな。」　源五「其の誠を聞いたからは、どうあつても客を拵へて貰ひたい。菊野、客をこしらへて貰ひたい。」　菊野「私が心を見屆けた上、どうあつてもと言はしやんすは。」ト思入あつて、「可うござります、如何にもお客拵へませう、たとひ何の樣な忌なと思ふ人にでも。」　源五「帶解くか。」　菊野「イ、エ。」　源五「ヤ。」　菊野「帶紐解いて抱かれて寢る事が、お客を拵へる事でもあるまい、縱ひ帶紐解かいでも勤めの一得、口先許りであのの物のと言ひ紛らし、手管といふはお侍さんの謀計ぢやワイなァ。」　源五「ム、面白い、其の手管ではよもや仕損じはせまい、その客といふは三五兵衞ぢや。」　菊野「エ、。」ト合方になり、源五兵衞こなしありて、源五「かうばかりでは合點がゆくまい、一通り聞けや、身共と三五兵衞が大坂へ上つたは、千島のお家

ざります、イヤよい次手に仲人は宵の程。」家主「更けぬ間に我等もお暇申さう。」源五「左樣ならお歸りなされい。」菊野「彌助殿、ようごんしたえ。」彌助「菊野さん、これから跡でしつぽり。」家主「火の用心を。」ト源五兵衛、菊野を見て彌助と顔見合はせ、二人「ようなされや。」ト表へ出る。家主仁兵衛は橋懸りへ入る。彌助は花道よき所にて、彌助「此の金が一兩二分。是れから此方の目論見が、コウツ、兩方摑む鎹儲け。」トうなづく。チャント唄になり、彌助向うへシイト入る。源五兵衛菊野そこらを片づけ、源五「菊野、今日遣はした文、屆いたであらうな。」菊野「アイたとひ文は參じぬと言うても、毎晩來る事は知れてあるぢや御座んせんかいな。」源五「イヤ改まつた事ながら、日外ふとしたことが緣となり、それから身共を如才もなく、大切に致しくれる其方、なか〳〵禮のいひやうもない、過分なぞや。」菊野「オ、可笑しやの、お前樣が嫌がりなさるを無理無體に、此方から賴んで斯うなつた事、何のお禮に及びませう、心の屆きしだけは御不自由はさせまいと思うても、知つて居なさる通り座敷一通りの私、お客というてはこしらへねば辛氣な事ばかり、其の上却つて今の樣に、お前樣に心遣ひをさせまして、言譯もない事。それはさうと、私をよびにおこしなされた其の用といふはえ。」源五「別儀でもない、他に語らぬ一大事の事を。」菊野「エ、。」トこなし。源五「いやであらうが何卒客をこしらへて給らぬかといふことぢや。」ト菊野思案して、菊野「姫御前の敎草は、稚さい時に寺小屋で聞いて、

座敷、居くろめる樣にさつしやりませ。」菊野「ほんに見かけによらぬ氣の輕いお家主さん。」彌助「お持たせの入花で、家移り茶漬はどう御座りませう。」源五「ハ、、、、コリヤ面白い、酒宴の宿這入り。」彌助「混雜になつた此の座敷。」家主「強者の交はり。」ト菊野を指さして、彌助「賴みある中の茶漬かな。」ト謠ふ。皆々「ハ、、、、。」家主「どれ〳〵我等も相伴せうかい。」ト酒をのむ。彌助「時に宵から餘程の間ぢや、俺が影が見えると菊野樣の爲にならぬ、私はモウ歸りますワイ。」菊野「そんならさうして、又明日の朝每時の樣に駕籠遣して下さんせや。」彌助「そりや吞込んでをりまする。」ト菊野をこちらへ連れ來て、「宵から言はうと思うて居ましたが、場合が惡うて言ひそゝくれて居ました、今夜身印が。」ト指五本見せる。「これだけ御座りまするが、可いかえ。」菊野「そりや二三日の中に。」彌助「サアその二三日がもちやつかうかと思ふのぢやが。」源五「彌助々々、何ぢや。」彌助「イヤ〳〵何にも旦那のお聞きなさるゝ事ぢや御座りませぬ。」源五「一寸聞いた所が、菊野が身請さうな、是れに金子が一兩二分、それでよい樣に。」ト投つてやる。彌助「イエ申しそれでは。」ト氣の毒なるこなし。源五「ハテ扠身共次第にしておいたがよい。」ト彌助金を取つて、「ヘ、、、、とつとモウこんな事を貴方のお耳へ入れると、菊野樣が大抵氣の毒がつてぢやござりませぬけれど、私も此の間は振廻しが惡うて、ツイハ、、、、そんならマア、是れをお預り申しませう。」源五「然らばそれでよいか。」彌助「可い段か、よう過ぎてご

平次せずと、手酌でそろ〳〵遣りかけう。」ト彌助筒茶椀にて酒を呑む。菊野そこらを尋ねて窗の引繩に括り付けし香の物を心づかず、顏に行中り慴りする。菊野「アレエ、。」ト飛退く。兩人も吃驚。源五「何ぢや〳〵。」彌助「何で御座りまする、吃驚するワイなア。」菊野「それでも誰やら冷い手で、わしが顏を撫でたワイなア。」ト源五兵衛笑うてゐる。彌助「何を云ひなさるやら、誰がマア冷い手で顏を撫でてよいものか。」トいひ〳〵右の香の物を見て。「ハア、よめた、もし今の正體は。」ト右の香の物をぶらつかし、「ソレで御座りまする。」菊野「モシありや何ぢやえ。」源五「香の物の化物、ハ、、、鼠の政道に難澁致し、引窗の紐に括り付けておいたのぢや。」彌助「この香の物は如何なる科にや繩目の恥、さぞや苦痛であらうなう。」ト笑ひながら香の物を下す。菊野取つて見て笑ふ。此の前より家主仁兵衛、片手に小提灯。又片手に土瓶さげて來て内へ入り掛り、この體を見て門口に窺うて居る。彌助手酌にて引受け飲む。彌助「イヤモウかうした所は、とんとお二人の宿這入り見るやうな、さらば祝うて私が。」ト表より、家主「泉は其の儘、盡きせぬ宿こそ目出たけれ。」ト謠ひながら内へ入る。皆々見て、菊、彌「もしあなたは何處から。」源五「お家主樣ぢや。」家主「最前から表へ來かゝり、あんまり物が騷ぐので、何事やらかすと思うて立聞きしてゐれば、宿這入の藝子、そこで我等が祝儀の小謠、つきせぬ宿へ茶の入花、女中ソレ中よう添ひとげる所の名は老松町、物事丸屋仁兵衛が

菊野「マア此方へ出さうかいなア。」ト懷の延紙にて持ち添へ、蛸を引上げ難儀なこなし。「こりや何うせうぞいなア。」 源五「待つたり〳〵、蛸のおき所は。」ト刀掛を見て引寄せ、刀をのけ、「ソレ爰へ引上げたり。」 菊野「アイ〳〵。」ト蛸を刀掛へ引つかける。源五兵衞鯛を抓み上げ、 源五「この鯛はどうせうどうせう。」ト置所に困りし體にて、「オ、有るぞ〳〵、菊野、その挾箱の中に膳があらう、持つて來やれ。」 菊野「アイ〳〵。」ト挾箱より茶椀飯櫃を載せた膳を取出し、 源五「飯櫃を除けて、此の鯛をかう直すのぢや。」ト膳の上に鯛を置き、 彌助「見りや飯も有り、貴方は御酒は上らず、此の肉で御飯上りませぬか。」 源五「イヤ〳〵最前家主殿が持つてわせられたれど、望みにない故取片づけておいたのぢや。」 菊野「そんなら何時お前樣は飯を上つたえ。」 源五「今朝茶漬たべた儘ぢや。」 菊野「その樣になさるとお毒でござりまする、些少ばかりでも上れいなア、ドレ私がお給仕致しませう。」ト三味線箱の風呂敷を前垂にして、茶椀に飯を盛り、鯛を載せて膳をする。 彌助「菊野さんの給仕、コリヤ忌でも上りませねばなりますまい。」 源五「然らば身共は、御飯頂戴仕りませうの、イヤ最前家主の持つてわせられた香の物が、其處にあらう、取つておぢや。」 彌助「イヤそりや私が。」ト立たうとするを、 菊野「彌助殿、さうしておいで下さんせ、こゝへ來てこんな事するのが、俺が樂しみ、お前は退屈にあらう、酒でも飲まんせいなア。」 菊助「如何樣、源五兵衞樣の傍で世話女房するのがお前樣の樂しみ、そんなら私は左

源五「やれ〳〵じゆつない目をさした事で有つた。」 菊野「わたしも眞似はしんどうてならぬワィなア。」
彌助「菊野さんの婆で、ハァ〳〵思うて汗をかいてのけた。」 菊野「併しまんまと瞞して去なした、戻つて來てぢやあるまいかいなア。」 源五「イヤ〳〵瞞して去なしたと思ふは不覺、いま歸りがけに言うた一言では、萬更覺らぬでもない。」 彌助「左樣でござりまする、派手な借錢乞と、すこし狂言を殘して去なれました。」 源五「彌助、そりや何ぢや。」 彌助「瀧の水一瓶、われ等がお見舞。」ト股ぐらより德利を出し見せる。源五兵衞取つて見て、源五「これはかたじけない、併しこりや內から燗でもして來たか。」
彌助「イヤ〳〵冷でござりまする。」 源五「それに又この溫りは。」 彌助「ハ、、、聞えた、最前入る時に隱し所に困り、私が酒藏へ忍ばせ置きましたが、そんなら私が精分の強いので燗が出來たので御座りまする。」 源五「オ、道理で可笑しい歩きやうぢやと思うた、菊野が燗なら猶以てよからうな、ハ、、ハ、まづ酒は出來たが、肴は何處から出ようぞ。」 菊野「彌助殿、わしが箱下さんせ。」 彌助「ハイ〳〵。」トこかげより出し、引提げて來ようとする。 菊野「これ其の樣にすると惡いワイなア。」 彌助「オツトこりやあやまつた。」ト三味線箱を目八分に構へ、菊野が前へ持つて來て、 菊野「瀧の水は彌助どの、お肴は私が進上ぢやワイな。」トいひ〳〵風呂敷を取り、蓋をあけ、中に延紙を敷き、三味線の上に大きなる鯛と蛸を載せてある。源五兵衞見て、 源五「鯛の濱燒に蛸の櫻煮、これはきびしいお持たせぢやな。」

促に、拙者も困り入り居りまする。」宅右「イヤモウ家主の結構に女房のわゝしいは今時の流行物で御座る、ハテ苦々しい儀で御座る。」彌助「イヤ〳〵苦々しからうが甘からうが、此方樣には構はぬ、親父の結構人と母者の爪長と、此家の事で毎日々々の夫婦喧嘩亂騷ぎでえす。」菊野「こちの主の樣な臺詞なしでは世帶がつまらぬに依つて參じやんす。」彌助「是非とも今夜は算用して下さりませ。」源五「なる程段々の御道理の申し分、併し手前も少々工面致し居れば。」彌助「エ、工面と言うたら、無心でござりませうがな。」菊野「これいなア無心をあてにせぬがようござる、今時のお客は惡洒落で、一向あてにはならぬワイな。」トいふを、源五兵衞彌助いろ〳〵紛らす。菊野心づきて、「イヤ惡洒落な事いはずと、サア早う譯立てて下さんせいなア。」彌助「折角親子づれで來たからは、算用して貰ひませう、源五兵衞殿、どうでござります。」ト思入。源五兵衞こなし、宅右衞門氣の毒なる體にて、宅右「イヤ最前より餘程の長座、拙者最早お暇申さう。」ト立ちあがる。源五「これは折角お越し下されしに、よからぬ事をお聞かせ申し、氣の毒千萬に存じまする。」宅右「何の〳〵、唯今の御身分では有るべき事、御遠慮は御無用々々々。」ト立ち上る。源五「然らばモウ御座りまするか。」宅右「近日お尋ね申しませう。」源五「よくお出でなされました。」ト宅右衞門表へ出る、皆々こなし。宅右「家主の内方にしてはどうか。」ト菊野を見る。「大坂は繁華ほどあつて、借錢乞まで派手なものぢやなア。」ト唄になり宅右衞門入る。

かな。」トいひ／＼腰をかゞめ入る。彌助「何でも今夜はお目にかゝらにやなりませぬ。」ト後より彌助入る。源五兵衞兩人を見て驚くこなし。菊野「イヤ／＼なんにも吃驚さつしやるな、高で借錢乞で御座んす。」ト源五兵衞へ呑込ます。彌助「オヽ、母人の言はるゝ通り、何も彼も算用して貰はにやなりませぬ。」菊野「オヽさうぢや、息子のちよち兵衞がいふ通り、爰へござんしてから三十日餘りの座敷代、ナウさうぢやあらうがの。」ト彌助へこなし、彌助又そればかりぢやない、米代も有ると、飯喰ふ眞似する。菊野「オヽさうぢや飯代」ト又彌助を見る。彌助味噌摺る眞似する。菊野「おむし代。」ト彌助を見る。彌助木をわる眞似する。「木代、さうして又。」ト彌助を見る。彌助醬油の仕方は出來ぬ故、困つたる思入、菊野も困りし科にて、「さうして又、アノそれ、オヽさうぢや、二十四日二十五日の天神樣の約束庚申さん初午の日柄も無茶苦茶にして貰つては濟まぬに依つて、何ぢやあらうと今夜中にせりふして下さんせにやなりませぬ。」ト思入あり。宅右衞門こなしある。宅右「イヤ源五兵衞殿、最前のお家主は甚だの深切、それに引つかへ内方は、ハテ嚴しい催促でござる。」ト源五兵衞思入あつて、源五「そりや其の筈で御座る、この内方は家付の後家でござる、それであれ少し腰も屈んでござる、卽ち後に居らるゝ御子息といふは、この御家御の實子でござります、所へ仁兵衞殿がにじり込みましたとの事、御覽の通り仁兵衞殿は甚だの結構人なれども、内方は生まれついての爪長でござれば、斯樣に度々の催

立てる。源五「右縁組の儀は私、不承知で御座る、と申すは御家門の息女を妻女に申し受けましては、源五兵衛は女房の蔭で立身致したなどと申しては、武士道が立ちませぬ、それ故婚禮の杯は、其の儘等閑に致し、右の御用につき出坂取急ぎ打過ぎまする。」ト菊野、よし〳〵とうなづく。宅右「さるに依つて御歸參の上は、早速御祝言の杯をなさる〻が、御親父への御孝行かと存じまする。」源五「委細畏まりまして御座る。」ト菊野これを聞き腹立てるこなし、血相して入らうとするを、彌助「申しお待ちなされ、腹の立つは尤もぢやが、お前が今入つては源五兵衛樣の爲にならぬ、それより彼の毛才六を去なした後で、存分言うたがよう御座りませう。」菊野「ほんにさうぢやなア、したが何うしたら去にくさらうぞいな。」彌助「何うというたら。オヽよい思案があるぞ、幸ひの其の頭巾で顏を隱し、お前は家主の婆になつて、家賃から米鹽まで、仕送りの催促がよう御座りませう。」菊野「滅相な事いはんす、遂度そんな事がないワイな。」彌助「そこは私がお前の息子になつて。」ト菊野に囁く。菊野「そんなら無茶苦茶にいふ程に、よき樣に賴むぞえ。」彌助「そりや呑込んでをりまする、マア帶も前へ廻してカウ腰を屈めて入るのぢやぞえ。」ト婆の樣にして見せる。菊野笑ひながら帶を前へ廻し身拵へする。彌助酒德利の置所に困り、思入ありて德利を股間へ隱し、紐を括りつける科、三味線箱を後へ隱す此の間には源五兵衛宅右衛門よろしく、よき時分に、菊野「ゆるしやりませ、源五兵衛樣は内に御座る

居難い、幸ひ土瓶を持つて歸り、熱い茶と汲みかへて參じませう。」　源五「これは〳〵重々の御苦勞。」
家主「イヤ申し貴方、ゆるりとお話しなされませ、源五兵衞樣、後程お目に掛りませう。」ト唄になり、仁兵衞土瓶を提げ橋懸りへ入る。この唄をかりて向うより菊野、著流し袖頭巾、跡より彌助、木綿やつしにて三味線箱と酒德利を、振りかたげにして出て來て、花道よき所にて、彌助「菊野さん、每晚每晚見る顏、ちつとやそつと遲いというて大事か、其の樣に走らずと、靜かに步いたが可うござりませう」　菊野「彌助殿何を言はしやんすやら、此方や急きやせぬけれど、お前が遲いのぢやワイな、堪忍して下さんせ。」トこんな事いひ〳〵平舞臺へ來る。宅右衞門源五兵衞しか〴〵ある。宅右「シテ其の御詮議の筋は、まだ手掛りも御座らぬか。」　源五「イヤ其の儀も少し心當りが御座れども、並々ならぬせんぎの品故、甚だ心を痛めて居りまする。」　宅右「それにつけても此の度お國の一件、伯父御の惡心、家中の内にも惡人の輩は殘らず滅亡致し、殿樣のお血筋に御家督と相極りながら、彼の今一品の劍が出ねば、足利殿より御免許も御座らぬとあれば、此の儀御承知で御座らうな。」ト此の内菊野表より窺ふ。源五「なる程、承りしお國の一件、それ故毛頭油斷は仕らぬ。」　宅右「まだ其の上に先達、貴殿とお許嫁ある殿の御家門、井上氏の御息女渚殿、此の度貴殿の儀を御聞き及びあつて、甚だお案じなさる由、お目附甚五右衞門殿の噂、お痛はしう存ずる故、次手ながらお咄し申す。」ト菊野これを聞き腹

から、御歸參の節返濟なされ、併し申さぬ事は聞えぬ、切米では請取りませぬ、矢張正金で返濟さつしやれ、此の金をお渡し申さうと存じ、一寸參つたので御座る。」ト右の金子、源五兵衛が傍に置く。思入あつて、源五「朋友の交りは筆墨のごとしと申すに違はず、不所存な拙者をお見捨なく、忝う存ずる。しかしお氣遣ひ下さるな、これに居らるゝは、卽ち老松町住人丸屋仁兵衛と申す、この人のお世話になり、此の座敷も自分の掛屋敷でござるを、豫め取繕ひ當所の住居、鹽味噌薪に至るまで、段々の深切、詞にも述べられぬ時宜、それ故隨分心易う暮しをりまする。」宅右「委細承つて安堵仕つた、ム、然らばそれに居さつしやるが家主殿で御座るか。」家主「ヘイ左樣でござりまする。」宅右「扨々世には賴もしい人もあるもので御座る、拙者また不禮の段御免下されい。」家主「これは〳〵痛み入りまする。イヤモウ家主ではござれども、折々は奴になり飯炊になり、又或時は源五兵衛樣の按摩もしまする、お求めなされてずんど御損のない家主でござりまする。」宅右「唯今の樣子承り、御不自由はあるまいなれど、これは拙者が志、平に御用立下されい。」源五「左樣あるを無下なう御返濟もいかが。」宅右「御遠慮は御無用。」源五「然らば暫時借用申しませう。」ト右の金子を懷中して、「斯樣に貴公のお世話に相なりまするに就きましても、何卒歸參の儀を願ひ居りまするが、今に於てかのせんぎの。」ト言ふを宅右衛門、家主へこなし、家主思入あつて、家主「イヤモウお侍同志の交際は、氣の張つて

「イネイお通り下さりませう。」宅右「然らばゆるしやれ。」家主「ネイ〳〵、斯うお出で下さりませう。」ト源五兵衛宅右衛門顔見合はせ、源五「これは宅右衛門殿。」宅右「源五兵衛殿、其の後は打絶えまして御座る。」源五「先づ〳〵。」ト宅右衛門しか〴〵ありて上の方へ坐る。「扨お懐かしく存ずる、何よりお話し申さうやら、まこと日外ふと致した事で、唯今のこの體、面目次第もない儀で御座る。」宅右「誠に手前も其の座に居合はしながら、萬太郎様のお詞をかつて、三五兵衛の傍若無人、なんと申さう詞もない儀、それ故其の儘に打絶えまして御座る、其の段御免に預りませう。」源五「これは〳〵御挨拶、忝う存じまする。」ト此の挨拶の中に、宅右衛門煙草いれを出し、煙管に煙草をつぎ、吸はうとして火のないこなし。源五「お莨盆に火がない、可内なぜ火を入れぬ。」家主「ネイ〳〵。」ト火がないゆゑに困つたこなしにて、火打箱を見て、取つて來てせはしなく火を打ち、「さらば一服召上がられませう。」源五「切火とは能く氣が注いた。」宅右「召使は甚だ綺麗好きと見えまする。」ト家主、あたりの筒茶椀に茶を汲んで持つて來る。宅右衛門源五兵衛しか〴〵挨拶あつて、源五「シテ其許夜分にお出で下されたは、御用向でござるかな。」宅右「イヤ〳〵さして用事と申すでも御座らぬが、日外の砌よりお屋敷へお立寄りも叶はず、三十日餘りの御難儀、何か御不自由にあらうと存じ、みつぎと申すではないが。」トいひ〳〵紙入より金包を出し、「これに金子一兩二分、然も小粒で六切御座る、これを用立てませう

ハ、、どれ火を燈してあげませう。」ト唄になり、家主火打箱を取寄せ、火を打ち行燈へ點し、兩人しかじか捨白あるべし。ト橋懸りより出石宅右衛門、羽織袴にて來る。門口へ來て、宅右「今教へてくれたは確かに此の家ぢやが、頼みませう〳〵。」家主「日が暮れてあるワイ、どうれ〳〵。」宅右「イヤちつと物がたづねたう御座る、この邊に先月から借家致さるゝ、勝間源五兵衛殿と申す仁は御座らぬか。」ト源五兵衛これを見て、源五「いや〳〵どうやら聞き馴れた聲でござる、以前の朋輩どもであらう、仁兵衛どの、御苦勞ながら口上請取つて下されい。」家主「合點でござりまする。源五兵衛殿はこれで御座りまする、何處からござりました。」宅右「然らばこれで御座るか、手前儀は出石宅右衛門と申す者でござる、源五兵衛殿御在宿でござらば、一寸御意得たいと言ひ入れて下され。」家主「ハ、、、暫く待つて下さりませ。」トこちらへ來て小聲になり、「留守つかうて去なしませうか。」源五「イヤ〳〵彼の仁は拙者日頃から昵懇の朋輩どもでござる、苦しう御座らぬお通し下されい。」家主「そんなら通しませうか。」トいひ〳〵羽織を脱ぎ尻をからげる。源五兵衛見て、源五「仁兵衛殿、仰々しいそりや何をさつしやる。」家主「以前の朋輩衆が尋ねて在せたに、一僕が無くては濟まぬ、そこで我等假の可内と化けたぢや、遠慮なしに遣はつしやれ。」ト奴の樣にして門口へ來て、「どうれ。ネイ〳〵、これは〳〵宅右衛門樣でござりますか、ようこそお出で下さりました、主人源五兵衛宿に居ります、此方へ、ネ

らぬなどと、苦にせぬがよう御座りまする、一文半錢取らいでも大事ない、これ何處ぞ漏るなら直してあげませう、其の内にも歸參ある樣に、及ばずながら私も神佛に祈りませう。」源五「千萬お志忝う存じまする。」家主「かれ是れいふ中暮前、夜食も大事あるまいとおもうて持つて來た。もし香の物も出し立ちや、上りませぬか。」源五「イヤ〳〵まだ空腹にも御座らぬ、後程食べます、膳部は其の儘片寄せて下さりませう。」家主「ハテ後は後の事、マア一膳上りませ。」トいひ〳〵其處等を見まはし、「南無三、大和風呂に火が消えたさうな、さうして土瓶は何處に御座りまする。」トいひ〳〵そこらを探す。源五「イヤ〳〵お騷ぎあるな、土瓶は茶がわるうならうかと存じて、用意致しておきました。」ト日向につりあり。家主「こいつは理窟ぢや、どれ〳〵。」ト土瓶をいろうて見て、「エ、しやん〳〵と冷え盡つてあるハ、、、、。」源五「イヤ〳〵餘寒嚴しうても最早二月、逆上致して惡いから、隨分火のないがよう御座る。」家主「デモ古い茶では毒ぢや、そんなら明けて來て上げませう、併し其の間飯櫃や香の物を爰に置いたら鼠が喰ひませう、どこぞへ片づけて置かうにも膳棚はなし、どうしたら可からう。」源五「それは拙者宜しう取計らひませう、此方へ遣はされませ。」ト香の物を取り、引窗の細引に括りつけ、膳と飯櫃を挾箱へ入れて、「かう致しおけば鼠の引く氣遣ひはござるまい。」家主「出來た、香の物が八幡場のお子をやつてゐるので、內は眞の闇ともなりにけり。」ト淨瑠璃にていふ。「ハ、

い時に來たらこそ、用でも有つて參られねば、どうさつしやる。」源五「イヤモ貴公がお出で下されずば其のまゝに捨て置き、日が暮れうが初夜にならうが、打遣つておきまする、何處ぞでは歸ります。」家主「ハテ悠長な事をいふお人ぢや、彼奴等は米貰ひもあり、又中には手許にある物を引つかけて行く晝鳶もござる、無用心なお人ぢや。」源五「イヤ〳〵たとひ何ぞ盜つて歸つても苦しう御座らぬ、拙者が物とてはこゝに御座る大小と、そちらの空挾箱ばかり、この蚊帳呉蓙に至るまで貴公のお世話で借りました、其の外は丸行燈、大和風呂、火打箱、煙草盆、是れぢやと申して皆其許のもの、取られてからが手前何とも存ぜぬ。」ト此の内家主こなしにて横手を打ち、家主「ハァ、遉はお侍程あつて、諂ひのない、扨々さつぱりとしたものぢやなア。」源五「ハ、イヤ座興は格別、殊に不圖致した御緣で其許のお世話になり、二月越に三十日餘り、家賃と申し殊に朝夕まで斯樣に自身にお運び下さる段、御深切と申さうか、お禮の申し樣も御座らぬ。私儀身不肖ながら千島の家中勝間源五兵衞、兩手を突いてこの通り當座の御禮、首尾よく歸參も致さば、唯今の御恩は急度謝しませう、千萬忝う存ずる。」ト辭儀する。家主迷惑さうにして、家主「サアお手上げられませう。これはマア改まつた御禮に痛み入りまする。愛緣より奇緣とやらいふもの、お前樣の事と言へば、倅が事より大切に存じまする。二月は愚かこの上四月五月、乃至一年でも二年でも、ゆつくり思うて御座りませ。又座敷代を遣らねばな

かうよりモウ行け〳〵。」〇「旦那さん其の樣に言はずと、煙草なりと遣つて下されませ。」家主「此奴
樣々にねだりかける。こりややい一體汝等は目が明いてあるかないか、この門口の書附が見えぬか。」
トさげ板を教へ、「偏屈者借錢乞物貰ひの者無用と、しかも假名で書いてあるぞよ、これが汝等の目に
懸らぬか。」〇「懸つても懸らいでも、こつちや貰ひさへすりや可いのぢや。」家主「サアそつちは貰へ
ば可からうが、こちらは與らねば可いぢや、何ぼうなりと喋舌れ〳〵。」〇「エヽ忌々しい、錢になら
ぬ所でてん〳〵天滿の神子の。」〇「あつたら所で破太鼓を叩かうより、テン〳〵天滿の神子の振袖。」
ト兩人踊りながら橋懸りへ入る。家主跡を見て、家主「神子どのもお神樂が上らぬので、踊り舞うてゐ
られた。イヤ内にござりまする。」ト戸を開ける。源五兵衛「誰ぢや〳〵。」家主「誰というたら丸屋仁兵衛
家主でござりまする。」源五「これは〳〵お家主樣、ようお出で下さりました。」家主「イヤ〳〵矢張其の
儘、私への御遠慮御無用。」トいひ〳〵源五兵衛がそばへ坐る。源五「唯今表で何やら聒しう申して居
つたが、何事でござりました。」家主「イヤ何と申したら、これの門口で物貰ひと拙者少々挑みまして
ござる。」源五「ホヽシテ物貰ひは歸りましたか。」家主「鶴の一聲、去ねというたら逃げて去にました。」
源五「最前から門口で聒しう申して居つたれども、貴公のお出で下さる時分にお目にかゝらば、歸して
下されうと存じ、打ちやつておきました。」家主「ハテこな樣は不精なお人ぢやナア、けれう手前がよ

二幕目

造物一面の平舞臺、見附赤壁、唐紙押入納戸口、上手の方筋違に障子家體、橋懸り、いつもの所に門口、さげ板にして「偏屈者借錢乞物貰ひ無用」といふ書附あり。右舞臺上手に挾箱一つ、大和風呂、丸行燈直しあり。源五兵衞著流しにて呉蓙を敷き、蚊帳の内に枕をして本を讀んでゐる。傍に刀掛に二腰ともに掛けてある。門口には物貰ひ、一人は裸身にて汚れたる白張を著て、女形の張鬘を著、土の鈴を持ち踊つてゐる、一人は乞食の形にて、破太鼓を叩いてゐる。この見得在郷唄にて幕開く。

乞食○「テン〳〵天滿の神子の振袖、鈴を袂に控へた。」トいひ〳〵太鼓叩いてゐる。同○「控へたぞやさし、振袖鈴を袂に囃した。」トこれにて兩人聒しう言うて、この間に橋懸りより家主丸屋仁兵衞、著附羽織にて日光膳に種々取載せ、これを持つて出る。家主「ヤイ〳〵汝等は爰を何處ぢやと思うて、てん〳〵天滿をやつて居るぞ、通れ〳〵。」ト是れにて兩人踊をやめ。○「アイ聞いたか、内から何とも言はぬに、表から通れとは、こいつ新らしい。」○「表から通れといへば、差詰内へ通らにやならぬ來い〳〵。」ト兩人内へ入る。家主「コリヤ〳〵待ちをれ、内へ入つても借座敷の事なれば何にもない、コリヤ見い、飯まで此の樣に持運ぶ事ぢやに依つて、米は固より錢一文もない、役に立たぬ所で口叩

の猛虎の劍、一時も早うせんぎし出し、歸國せよとの源次兵衛樣の御狀。コリヤ源五兵衛に見せるに及ばぬ、返事は則ち唯今奥にて認めおいた此の狀、國許源次兵衛殿へ、大儀ながら引返して屆けてくりやれ。」正平太「スリヤ此の狀をお返事と申し、源次兵衛樣へ渡せば可うござりまするか。」三五「如何にも、確乎と渡してくりやれ。」ト此の時上手の障子家體の內にて、菊野「申し源五兵衛樣、なぜ其の樣にすげなうさしやんすぞいなァ、エ、もそつと此方へ寄りんかいな、オ、辛氣。」トこれを聞いて三五兵衛、現の樣になり、聞耳立ててゐる。正平太は知らずに思入あつて、正平太「然らば三五兵衛樣、この御狀きつと源次兵衛樣へお屆け申しませう間、源五兵衛樣へ宜しく仰せ上げられ下さりませう、隨分貴方樣にも御機嫌よく、何卒首尾よう萬事相調へ、御歸國を相待ち居りまする。」トこんな事挨拶してゐる。三五兵衛一向耳へ入れず、障子家體の間へしづ〳〵聞耳ながら來る。正平太いろ〳〵挨拶しても、三五兵衛挨拶せぬゆゑ、段々三五兵衛について同じく來る。正平太「三五兵衛さま〳〵。」ト何ぼう言うても聞き入れず、同じ障子の內を覗かうとする。障子の內の燈火、內にて吹き消す。正平太このとき、「申し三五兵衛樣。」ト大きな聲して云ふ。三五兵衛吃驚し、ぐんにやりとなる、この途端にて。

源五「イヤモウそれには及ばぬ事。」お市「及ばぬでは菊野様の氣が濟まぬ、サア／＼ちやつとお出でなされませいなア。」ト源五兵衛を無理に立たす、源五兵衛菊野を抱へながら、勿怪な顔にて立ち上り、源五「そんなら此の儘で行かうか。」お市「サアお出でなされませ。」ト突きやる。源五兵衛ひよろ／＼として止り、源五「ア、儘よ、今までは主人持、今宵からは浪人の源五兵衛、明日の晝までゆつくりと。」ト菊野と顔見合はせ思入あり、唄になり、お市、源五兵衛を突きやる。源五兵衛臆病口の障子家體へ入る。お市あとをながめ、菊野が置いて行つた鏡袋と延紙を取上げ、わが懐より紙を出し一緒にして、お市「女中と違うて藝子様は、これだけ世話が多い。」ト鏡袋延紙を障子家體へ投り込み、びつしやりと障子さし、息をつぎ思入ありて奥へ入る。橋懸りより奴正平太、ぶつ裂羽織股引大小にて狀箱を持ち出て、正平太「笹野三五兵衛様はどれに御座る、お國許より火急の御狀でござりまする、三五兵衛さま／＼。」三五「ナニお國許より火急のお飛脚とは。」トいひ／＼出て正平太を見て、「これは／＼正平太。」正平太「三五兵衛様、お國許勝間源次兵衛様より貴方様と御子息源五兵衛様への此の御狀。」ト狀箱を出す。三五「身共もお國許へ書狀遣はさうと存ずる所へ、幸ひ／＼。」ト狀箱を取つて披き見て、「ムムコリヤこれ大殿修理大夫様を毒害致し其の上お家を押領せんとせしは、伯父御兵部卿江本丹藏と相知れ御成敗は今川大炊様、跡目相續の儀もお家の血筋助作殿、萬事納まり御目出たにつき、彼の紛失

にある間はせめて私を女房に、イヤ女房は過ぎる飯焚ぢやと思うてお側に置いて、エ、申し。」お市「けうとい物ぢやワイなア、いひ合はせ色事を、底心からの惚れやう、遉は北の藝子様程あつて、たてひきが格別ぢや、よう惚れた、指は愚か腕でも首でも斬つて上げいなア、能う惚れたなア。」源五「イヤこれお市、其の様に傍から囃立てな、身共が承知やら不承知やら知れもせぬもの、指一本でさへ迷惑致しをるに、腕や首を貰うてどうするもので。」菊野「そんなら私が惚れたがお氣に入りませぬかえ。お氣に入らぬは初めから知れてあるけれど、外にお禮の言ひ様がなさに、折角斬つた指も仇事ぢやと言うて、私ゆゑに其の御身にさせまして、此のまゝではどうも。得心して下さんせねば寧そ。」ト源五兵衛が刀に手をかける、宜しくとめる。源五「待て菊野、それでお主の眞實が見えた、源五兵衛承知した。」お市「菊野様、承知ぢやといな。」菊野「そんなら眞實に承知しておくれたかえ。」ト源五兵衛、菊野が手を執り、源五「親が滿足に生み付けた五體の指まで斬つての汝が禮。承知した。」ト指を懐へ入れる。お市「菊野様、今のを見なしやんしたか、指を戴いて承知ぢやといな。」菊野「源五兵衛様、何も申しませぬ、エ、忝うござんす。」ト源五兵衛に寄り添ふ。源五兵衛思入。お市「おつと其の手を放すまいぞ、雨降つて地固まる、縁を結ぶは此の常陸帶で。」ト前垂を外し、紐にて菊野を源五兵衛が身體へぐる／＼巻きにする、源五兵衛迷惑なこなし。お市「サア源五兵衛様思ひよらぬ新枕、アノ北座敷へ。」

な者になつたなァ、さうしてマァ仕舞はどうせうと思うてぢやえ。」源五「ハテよいワ、斯樣な難儀になつたら頼まれまい、又難儀にならぬ事ならば頼まれうといふ樣な、二筋な頼まれやうはせぬ。菊野何にもきな〳〵思ふ事はない、御前を遠ざけられたというて、さしたる失策でもない、又御機嫌の直る事もあらうわサ。」菊野「わたしを案じさすまいと、何程其の樣に仰しやつても、三五兵衛づらのお傍に居る中は。」お市「ほんにさうで御座んす、源五兵衛樣の御難儀も、元の起りは三五兵衛樣がお前を口說かしやんしたを、得心せぬ故とは見す〳〵知れてありながら、さうとも言はれぬ最前の時宜。」菊野「それぢやに依つて、このお禮のいひ樣は。」お市「思案極めておかしやんしたかえ。」菊野「其の思案は。」ト邊の枕を取つて來て舞臺に直し、源五兵衛が刀を拔き指を斬る。兩人恟り。源五「これは何事をした。」お市「痛みはせぬかえ。」トいひ〳〵兩人よろしく介抱する。菊野「イエ〳〵大事でござんせぬ。」ト思ひいれありて邊の指を拾ひ、紙につゝみ源五兵衛が前におく。「これ取つて下さんせ。」源五「ヤ。」菊野「賤しい私に頼まれた事、忌とも言はず聞いておくれなされた其の上に、お屋敷の住居さへ叶はぬやうにした元の起りは淺はかな私から、今更何とお禮の言ひ樣がなさに、眞實惚れたといふ心の誓ひでござんすワイなァ。」ト源五兵衛思入あつて、源五「最前頼まれたは僞りなれど、其の禮の言ひ樣がなさに、指まで斬つて。」菊野「アイお國には歴乎とした嫁御さんのある事も聞いて居ますけれど、大坂

して下さんせ〳〵。」ト源五兵衛を拜み泣く。三五「ハ、、、、何といづれも、色男といふものは女の不便がるもので御座る。」三人「左樣で御座る。」トこちへ參る。三五兵衛入替つて源五兵衛が傍へ行き、三五「源五兵衛、女故に打擲せられ、本望であらうなア、菊野、そちも嬉しからうな。萬太郎樣大切な役目を受けながら、遊所の女に魂を奪はれた源五兵衛、お國への聞え、暫く御遠慮仰せ付けられずばなりますまい。」萬太郎「如何さまさうぢや。ヤイ源五兵衛、大事の用に登つて居ながら、散々の身持、國への遠慮、身が目通りへは暫くかなはぬ。」菊野「そんなら源五兵衛樣は。」三五「暫く御前へは叶はぬワイ。」トきつといふ。菊野心意氣あつて三五兵衛の傍へ行かうとするを、源五兵衛コリヤと引廻してとめる。菊野、源五兵衛を見て泣き落す。三五「イヤ最前より由ない事で座敷の不興、萬太郎樣所をかへて飲み直さうで御座りませぬか。」萬太郎「それも可からう、そんなら是れから亭へ往て、藝子どもには三味線鼓弓、我等は夜弓と出かけう。」三人「これは一興でござりませう。」萬太郎「サア皆來い。」三五「御前の御意を申す三五兵衛とて、殊に御意ぢや。」ト扇にて源五兵衛を打く。菊野、源五兵衛思入あつて、三五兵衛じろりと見て、「ハ、、、。」ト唄になり、この一件殘らず入る。跡合方、源五兵衛菊野殘る、皆々入つて仕舞ふ。お市が障子家體より出て、兩人の傍へ來て菊野が袖を控へ、お市「最前からの樣子は、皆聞いて居ましたが菊野さん。」ト菊野、お市を見る。お市は源五兵衛を敎へ、「お氣の毒

御無用とお止め申すのさ。」萬太郎「ヤアそんなら菊野は汝が情婦か、我折れ。」ト少々氣味惡きこなし、三五兵衛大事ないと押へる心にて、三五「源五兵衛、愚かしうても萬太郎樣は御主人の片破、其の御主人の前とも憚らず、菊野はお身が合力といふからは。」源五「金輪際いづくまでも。」ト菊野が手を持ち引寄せる。三五兵衛きつとなつて氣をかへ、三五「御覽なされましたか、ハテほてくろしい儀ではござりませぬか。」萬太郎「ハテほてくろしい儀で御座る。」皆々「御主人を蹈み付けて、餘りと言へば法外千萬。」三五「萬太郎樣の惚れてござる菊野を、横取りした源五兵衛。」ト打擲する事をして見せ、「惡い奴ぢやござりませぬか。」萬太郎「惡い段か、俺が伽せうといふ菊野を横取りした源五兵衛、皆寄つて擲け擲け。」三五「ハツ何れも萬太郎樣の御意ぢや、源五兵衛を打たつしやれ。」ト三人はつと源五兵衛がそばへ行き、扇を持つて、三人「御意ぢや〳〵。」ト源五兵衛を散々に打つ。菊野驚き源五兵衛に取付き、菊野「源五兵衛樣、思ひがけない此の樣子、かうならうとは知らず、由ない事を頼んで。」ト言はうとするを、源五兵衛、菊野を引きつけ、源五「コリヤ何にも言ふな、言譯するもかうならぬ先の事、一旦侍が頼まれては擲たれても立て通すが千島の國の氣性ぢやワイやイ。」菊野「ぢやと言うて見す〳〵。」源五「サア見す〳〵知れた二人が開を、御存じない萬太郎樣はお腹の立つは御尤も、それぢやに依つて擲たれても何ともないワイやい。」ト菊野を突きやる。菊野「エ、。」ト身を震はし源五兵衛を見て、「堪忍

たがよい、なんとお伽がよう御座りませうが。」萬太郎「お伽がよい〳〵、マアちよつと爰でお伽をして見よ。」ト菊野に寄添はうとするを、菊野「申し惡戲なさんないなア。」ト突きやる。萬太郎「三五兵衞、ねつからお伽さゝぬぞよ。」三五「サ、よくござりまする、暫くお控へ下されませう。菊野、イヤサ萬太郎樣がお心おかけなされた其方、なぜお請け申せぬぞ。」菊野「御大身であらうがお大名であらうが、人といふものは心意氣ばかり、愚かしい萬太郎樣をたらしこみ、三五兵衞樣、お前マアさもしい。」ト源五兵衞煙草のんでゐる、咳拂ひして紛らす。「イヤさもしい妾等、お大身とは釣り合はぬワイなア。」三五「スリヤいよ〳〵萬太郎樣のお心に隨はぬか。」トおれがいふ通りを言へと萬太郎へ敎へる。萬太郎合點して、萬太郎「スリヤ彌萬太郎樣のお心に隨はぬか。」ト言て三五兵衞を見る。菊野やはり默つてゐる。三五「しぶとい女め。」ト矢張萬太郎へして見せる。萬太郎「ほんにねつから物言はぬな、何ぼう物言はずとも、身請して國許へつれ歸り、われと一緒に御隱居とは何うあらう。」三人「どうぢや〳〵。」三五「こりや屈強な思召し、あなた樣と一緒に押込隱居、それとも忌か、菊野どうぢや。」ト此の間源五兵衞始終煙草のんでゐて、この時、源五「イヤ憚りながら菊野が儀は、たとひ身請なされてもお心には隨ひませぬ。」ト向うへ出る。左十郎「ム、萬太郎さまが身請なされてもお心に隨はぬとは、源五兵衞殿シテ其の樣子は。」源五「イヤ外でもない、菊野は拙者が合方。」三五、三人「ヤア。」源五「それゆゑ身請は

萬太郎樣のお召しなさるゝ、是れへ參れ。」ト菊野聞かぬ顏にて、源五兵衞、早枝、皆々と酒宴の體。これは都て大座敷にて、兩方へ別れて居る座敷の模樣なり。左十郎「菊野、最前から萬太郎樣のお召し、これへ來やれ。」伊平太「そちらの座敷ばかりに、へばり附いて居らずと、早く來やれ〳〵。」皆々「早く來やれ。」トやかましういふ。菊野思ひいれあつて、菊野「オヽ、やかまし、そちへ來いなら往くけれど、爰にも杯が縺れてある、もちつと待つておくれ。」トきつといふを、源五「これはどうしたものぢや、たとひ如何樣な事があらうとも、萬太郎樣のお召しとあれば、早く往て御機嫌に入るやうにしやれ。」菊野「そんなら往ても大事ないかえ。」源五「大事ない〳〵。」菊野「お前の許しならドレ往かうかいなア。」ト立つてこちらへ來る。左十、伴左、伊平「ヨウ〳〵源五兵衞殿のいふことは聞きなり樣々。」トおだてる。菊野「オヽ、可笑し、一向煽動てゝぢや、お徳さん、早枝さん、お前も爰へお出でんかいなア。」お徳「それでも俺等に呼ばしやんせぬに依つて、遠慮して往かぬワイ。」早枝「北の首さま程あつて、言うても御繁昌ぢやなア。」源五「ハテ扨お身達もその樣におだてゝ悄氣らすないやい。」トこなし。こちらの方には、三五「イヤ萬太郎樣、この菊野が儀は、如何取計らひませうな。」萬太郎「如何というたら、よい樣に取持て。」三五「ハツ然らば其の通り申し付けます。ナニ菊野、これにお出でなさるゝ萬太郎樣、日外より其方を甚だの御執心、御大身に身を任せば、そち達の果報といふもの、有り難いと思うてお伽申

何卒御免な。」伴左「ア、すりや菊野が詫事は其許よりさつしやるか、ハテ變つた所から御挨拶でござるな、ハテ御深切な儀でござる。」ト口々喧しういふ。三五「これは何れも騒がしい、お靜まりなされいお靜まりなされい、源五兵衛殿ぢやと言つて、藝子の挨拶をいたされまいものでもない、ナア菊野。」菊野「左樣ぢやさうに御座りまする。」ト素氣なくいふ 源五「これさ菊野、左樣にすげなう言はずと、萬太郎樣 各方の御機嫌直し、わつさりと一つ飲みやれ。」菊野「アイそんなら此の 杯で思獻にせうかいな。」伴左「思獻とは可からう、一つ注げ〳〵。」トおとは酌する。菊野酒を飲む中に、三人「おもひざしとは何處へ行かうぞ。」ト口々にいふ。菊野飲み終ひ、菊野「宅右衛門樣、御慮外ながら上げうぞえ。」ト敵役皆々顏見合はせ、伴左「出石宅右衛門殿へ、菊野が思ひざしとは、よう〳〵宅右衛門さま〳〵。」トほめる。宅右衛門最前より片隅へ寄つてゐて、此の時、宅右「これは〳〵伴左衛門殿、お褒めのお詞有り難う存ずる、拙者先程より餘り 杯が廻らぬ故、煙草許り喫んで居つた、菊野公の思ひざし、さらば一つたべようか。」トいひ〳〵こちらへ出て、千代「ドリヤ私がお酌致しませう。」トこちらにて酒盛になる。三五「何と萬太郎樣、あれに居ります菊野、あなた樣に少し氣のあるやうな體ではござりませぬか、御前には何と思召されまする。」萬太郎「何をうそらしい。」ト恥かしき思入。三五「イヤ〳〵眞實でござりまする、何かさしおきこれへ呼びませうか。」萬太郎「來るなら呼んで見い。」三五「ハツ。菊野、

源五兵衛殿。」皆々「源五兵衛殿々々々々々。」ト呼立てる。橋懸りの障子の内より、源五「ハッ〳〵。」トいひ〳〵手拭にて手を拭きながら出て來て、伴左「貴殿にはどれへお出でなされた。萬太郎樣のお待兼で御座る。」源五「イヤ失禮ながら暫く醉面、眞平御免下さりませう。」トいひ〳〵よき所へ坐る。三五「萬太郎樣へ申し上げませう、源五兵衛がこれへ參りました。シテ御用はな。」萬太郎「其の用は己や知らぬ汝や覺えぬかい。」ト此の内後の襖明け菊野出て來て、そこら見まはし早枝お德が傍へちやつと坐る。三五兵衛皆々これを見て、伊平太「見つけたぞ〳〵、菊野、わりやどれへ參つたぞ。」菊野「私やどつこへも行きやせぬもの、何いひなさるやら。」伴左「何處へも行かぬものが、襖の彼方から何で出て來た。」左十郎「源五兵衛どのが出て來ると、其方がこちらから出て來るとは、どうやらをかしい樣子だぞよ。」三五「菊野、わりや何處へ行て居つた、有樣に言へ、ハッ萬太郎樣、有樣に申させませうな。」萬太郎「オオ白させい。菊野、わりや何處へ入つて居た。有樣に言はぬと泡盛で言はすぞよ。」伴左「泡盛とはようございます、サア是れで飮め〳〵。」ト大きなこつぷを菊野の前に置く。菊野むつとして洋杯を取上げ、菊野「おとはどん、一つ注いでおくれい。」トおとは酌する。菊野飮まうとするを源五兵衛とめて、源五「待て〳〵、モウよい。イヤなに各、菊野が座敷脫けて居つたは斯うで御座る、拙者暫く醉面の間を介抱頼みました、それ故お座敷の事を缺き、申譯もない時宜、彼奴が不調法は私にめんじられ、

市様、一寸でも來たからは何卒歸なしておくれ。」伴左「イヤ〳〵たつた今來て、去なうとはならぬならぬ。」ト お徳向うへ出て、お徳「申しいなァ、今夜許りは何卒私に預けて、去なしてやつておくれなされ。」小傳「其の代りに姫御前の、得舞はぬ舞と踊を二人してお見せるワイなァ。」ト この中小傳、綾に囁き、お鹿がしてる緋縮緬の抱帶取つて來る。綾は舞子の日傘を取つて來て、右のひしごきを傘のぐるりへ卷き、小傳綾上著を脱ぐ、下の白無垢を括りにてぐつと裾をからげ、おとはおかるが前垂を取つてしてゐる。お千代これを見て、舞子の手拭を頭へ卷き、これを見て舞子の扇を持ち、右の日傘を取り雙方へ竝び、小傳、綾「住吉樣の四社のお村で扇を拾うた、ハレヤァ。」ト住吉踊をいろ〳〵ある。トヽ。綾「これから淡然約束のぬけそ踊が所望ぢやが合點か。」小傳「オ、さて合點ぢや。」ト是れより雀踊の三味線になり踊り。小傳「綾さん。」綾「小傳さん。」兩人「サツサ。そつとせい。」ト兩人踊りながら橋懸りへ入る、皆々笑ふ。おとは「あの子達でなければ、何時でも笑はぬ程にの、お千代どんお杯をまはさんかいの。」ト酒盛になる。伴左「時に最前から源五兵衛殿が見えぬが、どれへ參られた。」三五「誠に源五兵衛殿は何をして御座る。ハツ萬太郎樣、源五兵衛が居りませぬが、これへ呼びませうか。」萬太郎「ホンニ最前から見えぬ、これへ呼べ〳〵。」三五「ハツ〳〵。源五兵衛殿はどれに居やる、萬太郎樣のお召し、源五兵衛殿

酒盛の體、藝子お德、早枝三味線彈いてゐる。舞子おかの、お鹿、派手なる事を舞うてゐる、この見得この唄にて道具とまる、兩人よろしくあつて舞ひ納める。

皆々「よう〳〵、出來ました〳〵。」 伴左「萬太郎さま、彼等に御褒美のお詞をくだしおかれませう。」 萬太郎「遣はさう〳〵、ヤイ蜆貝、二人ともに爰へ來い、今の褒美は俺が持合はせの。」ト兩人の手を持ち、「琉球芋を遣らう。」ト引寄せうとする、突飛ばし、 舞子兩人「こちやそんな事知らぬワイなア。」トぴんしやんして此方へ來る。 萬太郎「この國の名物を知らぬか、エヽ、汝等はきつい馬太郎ぢやなア。」ト橋懸りより富田屋彌吉出て、 彌吉「小傳樣も綾樣も、どうやらかうやら一寸伴れて參りました。」ト此の中橋懸りより小傳、綾、藝子の扮裝にて出て來る。皆々見て、 千代「これいなァお前方でせうらいになつてる、よく來ておくれたなア。」 小傳「みな堪忍しておくれ、今夜は綾ばうも私も河作の揚ぢやワイなア。」 綾「來難い所ぢやけれど、おすま樣に呑み込ませ、一寸來たといふ樣なものぢや。」 お德、早枝「小傳樣、綾樣、爰へお出でいなア。」ト皆々捨臺詞にて小傳綾よき所へ坐る。 伊平太「二人ともに今夜は是非歸るか、然らばこれでぐつと飲め。」ト茶椀出す。 綾「伊州樣、又龍かいな。」 伊平太「龍であらうと蛇であらうとサア〳〵飲め。」ト酒をつぐ。 綾飲んで、 綾「左十樣上げますぞえ。」 左十郎「イヤ〳〵押へよ押へよ。」 小傳「そんなら私が聞せう、おとは殿注いでおくれ。」トおとは酒をつぐ、小傳飲む。 綾「お

三五兵衛様へ手見せの働きは。」ト最前の狀を取り引破り、「これで今夜の工面はがらり。」 三五「出來した。」 菊助「是れから有る事無い事、見る目かぐ鼻の私。」 三五「身共は奧へ入り、かの馬鹿人形を遣うて、そろ／＼娯しみませう。」 左十郎「誠に三五兵衛殿のからくり。」 三人「水銀のしかけよう。」 三五「細工はりう／＼、さらば仕上げをお目にかけう。」ト唄になり思入あつて皆々入る。跡合方になり、臆病口より菊野、奧よりお市出て、兩人顏見合はせ、 お市「菊野さん、最前は工合よういたぢやないかえ。」 菊野「お市樣、お前までいろ／＼の世話。したが源五兵衛樣があの樣に言うて下さんしたので、三五兵衛樣の方は病脱けがしたワイなア。」 お市「さつぱりとしたやうなけれど、意地の強いお屋敷樣の御氣質。」 菊野「ほんにさうぢやワイなア、萬一源五兵衛樣の大事になるまいかなアお市樣。」 お市「一つ叶へば又二つ、菊野樣。」 菊野「辛氣な事ぢやなア。」トよろしくチヨン／＼にて。

返し

造物平舞臺、一面の筋違に赤壁、大牀の間掛物あり。臆病口の方に一間の障子家體。橋懸りも一間の障子家體。それより奧の方へ筋違に大襖、これに好みあり。右平舞臺上の方に千鳥萬太郎、笹野三五兵衛、出石宅右衛門、市塚左十郎、仲居おとは、おかる、酒盛の體、下座の方に磯谷伴左衛門、安松伊平太、仲居千代、舞子お鹿

源五兵衛樣は元より、あの子にさういふ事があつたら、彌助が知らぬといふ事がござりませぬ、どういふ事で源五兵衛樣と、譯のある樣に仰しやりまするぞ。」　三五「譯のあるといふは、菊野源五兵衛兩人が口から、斯樣々々でござると唯今ほざいたワ。」　彌助「エ、そんなら菊野樣と源五兵衛とが、一向惘れるワイ、今日も明日も明後日も、明後々日も醒め果てた。」　伴左「しからば其方は實正知らぬか。」　彌助「藝子樣の色事を、廻し男に隱すとは。」ト小判の形をして見せる。「ソレを離れまいとおもうて、テモ吝嗇い源五兵衛樣、こりや餘程まうけ損うたワイ。」ト三五兵衛紙入より小判包を投り出し、三五「それ取つておけ。」ト彌助右の金を取り上げ、彌助「このお金は。」　三五「菊野を取持つ骨折代。」　彌助「そんなら貴方も菊野樣に。」　三五「ぞつこん惚れて惚れぬいてゐるこの三五兵衛、これまで樣々口說いても取合はぬこそ道理、腐り合うた兩人、どうも身共武士が立たぬ、菊野を身共に取持たば、まだ其の上に如何程でも、金子は愚か望み次第。」ト彌助思入あつて、彌助「ようござりまする、源五兵衛樣を退かして、菊野樣を取持ちませう。」　三五「汝その詞に違ひはないか。」　菊助「廻男冥利、下駄さげぬ法もあれ。」　三五「いよ〱確と取持つか。」　彌助「櫻屋の彌助、私が賴まれたからは、一寸もあとへよらぬが、總體北の廻男の習ひでござります。」　三五「小氣味よい奴だなァ。」ト奥にて鳴物入山姥のとまりになりて、奥にて大勢「ヨウ〱出來ました〱。」　彌助「奥の舞、山姥の山巡り、我等は又此のお金でナ茶屋巡り。」

ならぬワイ。」彌助「それはお前樣、中々無理でございます、何程お客が大事でも、親の病氣を構はずと座敷が勤めて居られませうか。その樣に仰しやらずと、どうぞ今夜の所は。」三五「ならぬワイ。奴は大方菊野が開きをひろぐな。エ、聞えた扨は源五兵衞と菊野が中の世話やいてをるか。」トきつといふ。彌助ハイ〳〵と身を縮める。伊平太「それ故四の五のと申すので御座らう、寧そぶち殺して。」ト刀に手をかける。彌助飛びのき、彌助「エ、申し〳〵こりやマア何でございまする、最前聞いて居れば、源五兵衞樣と菊野樣が中を世話やくの何のと、合點が參りませぬ。」三五「此奴しら〴〵しい、面に似せぬ太い奴だ、菊野と源五兵衞が中を、奴が知らぬといふ事はない、何時からの事で何處で出會ふ、有樣にぬかしをらう。」彌助「ハイ、、、、。」左十郎「吐し樣が違ふとうぬ痛い目をするぞよ。」伴左「痛い目が望みなら、如何樣とも療治して吳れう。」左十郎「それが忌ならきり〳〵と吐し居らう。」ト三人きめる。此の彌助始終びく〳〵としてゐる。彌助「エ、申し〳〵、とつとモウ其の樣に口々に言うて、狼狽へさせて下さりますな、お侍樣にかう取捲かれては、何ぼう肝玉の太い私でも、何やら夢中で御座りまする、其の樣に言はずと私がいふ事も聞いておくれなされませ。」伴左「吐す事があるなら是れへ來てきり〳〵吐せ。」ト彌助氣味惡ながら眞中へ出て、彌助「譯といひまして御座りませぬ、菊野さんは評判の石部金吉、これまで方々のお客が、色々と言うてぢやけれど、その方は大嫌ひでございます、

玉に使ふは適れの御思案。」 三五「併しながら一筋ではいかぬ源五兵衛、まさかの時はこれ。」ト皆々に囁く。 三人「心得ました。」ト思入。此の時橋懸りの門口より彌助狀を持つて戻つて來て、 彌助「どうぞ座敷の工面がよければよいが、仲居衆に逢ひたいものぢやが。おとは樣お千代さん。」ト奧を見て呼ぶ。 伴左「ヤイ／＼仲居どもを呼ぶは何者ぢや。」 彌助「私は北の櫻屋の者でござります。」 伴左「櫻屋といふは菊野が家でないか。」 彌助「ハイ左樣でござります。」 左十「是れは狀を持つて居るか、何用あつて參つた。」 彌助「ハイ此の狀菊野樣に急な用があつて。」 伴左「何だ菊野に用があつて、狀を持つて來たとは合點がゆかぬ、其の狀これへ持つて來やれ。」 三五「伴左衛門殿、其の狀これへ取つて來やれ。」 彌助「こりやあ貴方方の御覽なさる樣な狀ぢやござりませぬ。」 伴左「ハテ扠此方へ遣せ。」ト狀を引つたくり、彌助を引きのける、彌助氣味惡き思入。伴左衛門狀を渡す。三五兵衛披き見て、 三五「急ぎ申し入れ候、私事今晩は殊の外氣分あしく候間お市樣へ斷り申し、座敷の首尾あしからぬ樣にして、此の文屆き次第早々御歸り待ち入りたく／＼かしこ。菊野殿へ、母より。何と何れもお聞きなされたか。」 三人「怪しい狀にござります。」 三五「母親の病氣というて、一寸も早う歸らうといふ菊野めがこしらへ事、大概知れた事ぢや、ヤイ此の狀は僞りであらうがな、菊野が揚の客といふは此の三五兵衛ぢや、母親が病氣であらうが、今夜中は歸さぬ、さう思うて居れ。」 伴左「今夜中は愚か、今月中も居續けだ、歸る事は

引き、臆病口障子の中へ入る。跡に三五兵衛奥を見てゐて口惜しき科、お市と顔見合はせ、煙草吸ひ付ける。お市思入。ト奥より左十郎、伴左衛門、伊平太つか〳〵出て、三人「三五兵衛殿。」三五「いづれも。」左十郎「日頃から毛蟲と思うた源五兵衛が唯今のしだら。」伴左「我には最前菊野が口から承つたが、よもやと思ひ窺ひし所。」伊平太「唯今の仕儀を見て。」三人「惘れはてました。」トお市最前より氣の毒なこなし。お市「ホヽヽ、何と誰方もお聞きなされましたか、菊野樣とした事が、何隱さいでもよい事を、隱して貴方にもお腹を立て、イヤお腹はお立てなさるまいけれど、私までも大體惡い事ぢやござりませぬ。イヤかうなされんかえ、菊野樣への面當に、南地の首樣をお世話申しませう、誰が可からうぞ、京扇屋の宮樣か住吉のきとく樣か、鹿樣にせうか、ほんに藝子樣の事はおとはがよう知つてゐる、奥へ行て尋ねて參じませう、誰樣がよからう。」ト紛らす科にて奥へ入る。始終合方。三五兵衛煙草のみ終ひ、三五「各方もお聞きの通り、面目次第も御座らぬ。」左十郎「三五兵衛殿、こりや御思案なされずばなりますまい。」三五「思案というて外にはない、身共を今まで馬鹿にした女め、其の上今の如く是れ見よがし、兩人が今の有樣、この返禮は身共が胸に。」伴左「して其の御思案は。」三五「生得愚かな萬太郎樣、何事も身が言葉次第、あの馬鹿物を蕩しこみ、源五兵衛めに恥辱を與へ、菊野めが泣顏をたつた今見せませう。」伊平太「なる程、貴殿のお詞次第で如何樣ともなる馬鹿殿の萬太郎樣、

であらうと彼處であらうと、言はぬが祕密、何とけうとい物かく〳〵。」　菊野「お市樣、これまでお前に隱したのは、三五兵衞樣を始めお屋敷は皆内方へお出でるによつて、それで隱した程に堪忍しておくれえ、三五兵衞樣も其の誇りに、お慮外ながら私が急度よいのを世話して進げう程に、今までの事はとんと川へ流しておくれえ。」　源五「それいふに及ばぬ事、左樣な事根葉にもつ三五兵衞殿ではない。イヤ何こゝな粹め、唯今菊野が申す通り、何れなりとも餘の藝子をとり〴〵お世話申さうから、菊野の事はさつぱりと思ひきつて遣はされたが、可ささうなもののやうに。」トこの樣な事いふ中より、三五「默らつしやれ〳〵、エ、喧しいワイ、最前からほひ〳〵と、住吉街道の物貰ひ見るやうに喧しい和郎だ。身不肖ながら國許よりお指圖を請け、大切な詮議に參つた身共、其許の樣な賣女藝子に魂を奪はれる樣な侍ぢやないぞ、餘り身共を馬鹿にさつしやるな。」ト不興なる體、三人顏見合はせ思入。源五兵衞氣をかへ科あつて、源五「三五兵衞殿御免なされい、拙者餘程喰べ醉ひまして何を申したやらとんと存ぜぬ。暫く御免を蒙つて醉ひざましと致したい。サア菊野、いつもの樣に介抱頼む。」トいひ〳〵菊野が手を執り臆病口の方へ行かうとする。この前よき所より奥にてきざすを唄うてゐる。三人「源五兵衞菊野、スリャいよ〳〵兩人は。」ト此の時奥にて、唄「あれ蟲さへも番ひ離れぬ揚羽の蝶。」ト唄ふ。源五兵衞思入ありて、源五「つがひ離れぬ我々二人、三五兵衞殿後刻。」ト唄になり菊野が手を

はした所が、色がましい者はないと承つて居る。」源五「サ、そりや大きな御料簡ちがひ、確とした深間があれば、所詮貴公のお心には、ナア菊野。」ト菊野こなし、三五兵衛少々急いたる心意氣にて、三五「そりや聞きことでござる、シテ深間といふはなにやつで御座る、御存じならばお聞かせなされ。」源五「成程、左樣御意あればお咄し申さう、菊野が深間といふは。」三五「深間といふは。」源五「面目ないが身共ぢやてハ、、、、。」ト扇にて顔かくす。菊野嬉しさうに此方向く。三五兵衛惘れたる體にて、三五「何と言はつしやる、菊野が深間といふは、源五兵衛殿その許か。」源五「餘人へ必ず御沙汰御無用に存じまする。」ト三五兵衛おもひいれ。三五「イヤ／＼そりや嘘だ／＼。手前菊野に執心だと聞いて、忌がらさうと思うて、愚弄らうとしやるのか、嘘だ／＼。」菊野「イ、エ嘘ぢやござんせぬ、源五兵衛樣とは疾うから譯があるけれど、誰にも知らさぬおもひ合ひ、お前がいろ／＼というてお呉れるを、すげなう返事したは、かういふ譯がある故で御座んす、三五兵衛さま、必ず腹立てて下さんすなえ。」三五「ム、然らばいよ／＼菊野が。」源五「疑はしくば證據をお目にかけう、サア菊野、かうばれるからは苦しうない、爰へ來い／＼。」菊野「そんなら行ても大事ないかえ。」源五「三五兵衛殿は粹ぢや、大事ない大事ない。」ト靠れかゝつてゐる。三五兵衛これを見て憤とする科。お市「ほんに是れはマア、思ひがけないに依つて、最前から挨拶にも出ませなんだ、何時の間に何處で出來たぞいなア。」源五「何處

よい物か、堅いといふは。」ト刀を見せて、「この手前、拙者とても同じ人間、貴殿ぢやと申して萬更お嫌ひではあるまいと存ずる。」 三五「イヤモウさう言はれては一言もない、大好物でござる、ハ、、、ハ。」 源五「さう見える〳〵。時に其の大好物のお馴染があらうが、拙者には何故お隠しなさるゝな。」 三五「アイ隠すではないが斯うでござる、舊冬までは馴染の女郎もござつたれども唯今ではチト外に。」 ト菊野を見て思入。「イヤサ外に存じ寄りの女が有つて、彼の馴染の女郎も何時しか遠ざかりました。」 源五「ハテそれは御執心な儀でござるな。」 三五「時に其の執心の女めに、手を入れ足を入れ段々と口説きますれど、今に於て得心致さぬ根強い女め、拙者も殆んど困り入つて居るて。」 源五「シテ其の女めは、やはり侍女の類でござるかな、いはづしやれ〳〵。」 三五「さう問はれてはどうか言ひ難い様なれど、てんぼの皮言うて退けう、必ず笑はつしやるな、身共が執心の女といふは。」 源五「女といふは。」 三五「こゝに居る。」 源五「こゝに居る。」 三五「菊野めで御座る、ハ、、、。」ト扇にて顔かくす。菊野ぴんとしてあちら向く。お市源五兵衛思入。 源五「ハア扨は貴殿の御執心といふは菊野でござるか、ようよう菊野様、惚れられさま〴〵。」 三五「おだてさつしやるな〳〵。所に彼め、ハテ意地強い奴、様々に口説いても、今に於て其の返事致さぬ。」 源五「イヤそりや其の筈の事、かれには急度した深間が御座る、貴殿には御存知ないか。」 三五「イヤ〳〵彼女事は、北の新地は勿論、當所新町まで篤と聞き合

三五「ハテ源五兵衛殿が、お身がこれに居つたというて、何の大事があらう、マア下にゐやれさ。」ト手を持つ、お市中へ入る。お市「これ菊野樣、あの樣に被仰る程に、マア下に居いなア。」ト菊野を無理に下におき、「申し三五兵衛樣、私をお尋ねなされたは、急な御用でござりますかえ。」三五「なる程汝を尋ねたは。」ト菊野を見、又源五兵衛を見て、「イヤさして急な用でもない。」トこなしある。源五「お市を尋ねなされたは、扨はお馴染とやらの御用向かな。」三五「これは源五兵衛殿は酒機嫌のしるし、つひにない洒落詞をやらしやる、ハ、、、、時に源五兵衛殿、手前その許大切なる御用につき、當所の屋敷へ參り、方々の遊所へ立ち寄りまするも、彼の大切なる一品を。」トいはうとする。源五兵衛邊を紛らすこなし、三五兵衛も思入あつて、「サア彼の大切に致す萬太郎さまが、奥方住の江御前の御舍弟なれば、吾々が守護致し、當所に御逗留なさるゝも、下世話でいふ智慧付けの爲、拙者を乳母の樣に思召して御座るゝは、氣の毒なもので御座る。」源五「生得愚かしいお產まれ、不斷お傍に御座る貴殿、御心配の段推察仕つてをります。」三五「これは〱御挨拶、それに就きましても遊所へ御出での砌は、みめよき女を御覽なさると困つたものでござる。」源五「イヤイヤこれは三五兵衛殿のお詞とも覺えぬ、賢愚ともに色情は計られぬものと承る。」三五「ハア然らば其許のやうな、四角四面な偏屈な仁でも、色は棄てられぬものでござるかな。」源五「捨てられて

つぱりした、最前源五兵衛様が否と被仰つた時は、こりやマアどうならうと大抵案じた事ぢやないワイなア。」菊野「さいなア、私もひよんな事言ひ出し、後へも先へも行かなんだに依つて、寧そ驅落せうかと思うたワイなア。」源五「ハ、、、、、、客にくどかれ返事に困り、驅落せうとは。じとのない所か、流石貴女の派手と思はれる。ハ、、、、イヤ菊野、汝が頼み事諾いて遣はしたから、又身共が頼み事も聞いて貰はねばならぬが合點か。」菊野「そりやモウ何でも聞くに依つて必ず今のことを頼むぞえ。」源五「サ、よいてやく。」ト此の内奥にて、三五兵衛「お市く、お市はどれに居る。」トいひく出て來る。三人思入あり、宜しく座を改め、この中笹野三五兵衛奥より出でお市を見て、三五「お市これに居るか、最前から尋ねをつた、源五兵衛殿もこれに御座るか、菊野もこれに居つたか。」菊野「アイ。」源五「イヤ三五兵衛殿、御存じの通り拙者一醉もたべませぬ故、萬太郎様がお好きの泡盛、こみ付けられて甚だ酩酊、漸う醉ひを醒さうと思うて、失禮の段御免下されい。」三五「なるほど酒參らぬ其許、泡盛は切なう御座らう。然らばこれにて御休息なされ、萬太郎さまの御前は、身共よろしく取計らひませう。」源五「それは忝う存じます。」トこなし、菊野立つて奥へ行かうとする。三五「菊野待て、そちやどれへ行く。」菊野「アイ御座敷が寂しからうに依つて。」トまた行かうとするを、三五「ハテさて座敷には藝子ども、仲居も居れば可いワサ、お身はこれに話しやれ、ハテマア下に居やれ。」菊野「源五

うが、そこを何卒堪忍して、今言うた樣に表向の所はマア色ぢやというてさへお吳れなさるとよい事ぢや程に、藝子一人助けると思うて、申しこれぢやワイなア。」ト拜む。源五「これは又迷惑千萬な、藝子といふは僞り、誠は敵討の助太刀してくれいといへば、二言とはなけれど、どうもはや今の樣なこつ恥かしい事は。」ト菊野が形を見て、「餘り馬鹿らしい。」菊野「サアさうでは御座りませうけれど、賴まれておくれなさらぬと、どうも今夜は座敷に居られませぬワイなア。」お市「如何さま、最前の樣に皆さんへ言はしやんした事が、譃ぢやと知れたら、三五兵衞樣が猶聞いてではあるまいし。」菊野「それぢやに依つてこの樣におしつけて賴むのぢやワイなア。」お市「申し物いはぬあの子が、これほどに賴んでぢやこと。」菊野「どうぞ聞き入れて。」兩人「おくれなされませいなア。」ト源五兵衞思入あつて、源五「ム、すりや今夜の所が拔けられぬから、どうあつても押付けての賴みか。」菊野「アイ貴方樣より外に。」お市「この棒はききませぬワイなア。」源五「これはまた迷惑千萬、よいわ兩人がたのみ、どうなりと致してくれう。」菊野「エ、そんなら賴まれておくれなさるかえ。」お市「得心してあげなさるかえ。」源五「サア賴まれてやるが、表向ばかりぢやぞ。」菊野「アイ、三五兵衞樣の手前を、譯のある分にさへ言うておくれると可いワイなア。」源五「サアそれで可い事なら、どうなりとも言うて遣はす。」菊野「そんなら彌さうぢやぞえ。エ、嬉しいお市さん、とんと痞がおりたワイなア。」お市「わしまで氣がさ

というたら、此の後三五兵衞樣も言ひ出す事はあるまいと、思うて言うた彼の子の頓智、御迷惑はあなたお一人。」菊野「常から物堅い貴方、この樣な自墮落な事、お忌であらうが、三五兵衞樣がお國へお歸りなさるゝまで、表向の色になつて、私が難儀を救うておくれなされませ、其の代りにいやらしい事は爲や致しませぬ。申し源五兵衞樣、一生御恩に被る程に、皆樣の手前は今賴んだやうに、譯のある樣にして見せてお吳れなされませ。」トぐづ〳〵いふ。源五兵衞思入あつて、源五「辰巳屋の口上はハテ變つた口上な。菊野は未だ若輩な事なれば、前後の辨へなく、唯今の樣な儀言ひ出さうとも、お市までが同じ樣に藥袋もない事をいひ出す、何ぼう表向でも內向でも、身共は大切な御用を蒙り、大坂へ罷り越して居る身分、殊にか樣なむくつけな侍が、若輩な女を捉へて抱いて寢たの、イヤ色ぢやのと、エヽ馬鹿な事いふワイ。」トお市思入あつて、お市「それ見やしやんせい、大方からであらうと思うた、菊野樣、お前どうせうと思うてぢやえ。」菊野「どうと言うて賴みに思ふ源五兵衞樣は、お忌ぢやと仰しやる、詰らぬものになつたワイなア。」お市「詰つても詰らいでも。」ト源五兵衞を見る。源五兵衞向う見てゐる。「どうも仕樣がないもせぬもの。」菊野「無いではすまぬ。」ト源五兵衞を敎へる。お市も源五兵衞を敎へ、たのめといふ科見せ、「濟まぬワイなア。」ト色々氣を揉む。菊野思入あつて、菊野「私が身の切なさに、源五兵衞樣のお身に心もつかず、ひよんな事いひ出して、嘸お腹が立ちませ

菊野に今の事を言へと云ふ仕方する、菊野いや〳〵お前言うてくれいといふ仕方、兩人よろしく有つて、思はず源五兵衞と顏見合はせ、お市「ホ、、、、。」菊野「ホ、、、、。」兩人「ホ、、、、。」ト氣の毒さうに笑ふ。源五「何の事だ、さしてをかしくもない事を。エ、辰巳屋の使は玄關へ廻つたか、ドレ。」ト奥へ行かうとする。お市、源五兵衞が袖を控へ、お市「イヤ其のお使の口上は、菊野樣が聞いてござりまする、これ爰へ來て今の口上をとつくりと言はしやんせいなア。」源五「ム、菊野が其の口上を請取つてをるか、何の事ぢや早く言やれ。」菊野「サア其の口上は、アノ。賴まれておくれなされませ。」源五「何をいふ、辰巳屋からの口上が、賴まれてくれいとは何事ぢや。」菊野「サア其の譯は。マア下に居て聞いておくれなされませいなア。」ト合方になり宜しくありて、「奥へ來て居やしやんす三五兵衞樣が、疾うから私に惚れたの何のと言うて下さんすけれど、どういふ事やら私や三五兵衞樣が嫌ひで嫌ひでならぬワイなア。それで今まで斷りいうても、爰に居やしやんすお市樣や、奥にござんす伴樣や左十樣までを賴んで、退引ならぬ今夜の切端、得心せぬは外に情夫でもある樣に、問ひつめられて詮方なさ、如何にも深う譯のあるお方といふはナ、源五兵衞樣で御座んすと言ひましたワイなア。」トこなし。お市「わたしも爰にゐる所で、左十樣や伴樣へ、貴方と譯のあるといふ返事は、ハツト思うて後で聞けば、三五兵衞樣を始め皆樣も、常から貴方を怖がつてござるに依つて、源五兵衞樣と譯がある

やなア、そんなら源五兵衛樣に話して來うワイなア。」お市「ア、これいなア、立ちながら話もなるまい、殊に座敷に御座る所を、お前が呼んでは目に立つ。お千代、吾身ちよつと源五兵衛さんを呼びましておぢやいなう。」お千代「アイ〳〵。」菊野「これお千代殿、マア今の事は何にも言はずに措いて下さんせえ。」お千代「菊野樣、富市のお千代、そんな事知つてゐるワイなア。」ト奧にて潮來節を唄ふ。お千代奧へ入る。お市菊野しか〴〵あるべし。ト奧にて、源五兵衛「辰巳屋からの使とは、何用ぢや知らぬ。」トこの樣な事いひて出て來る。「お市、辰巳屋から身に逢ひたいとは何者が來てをる。」トお市思入あつて、お市「ハイ辰巳屋のお使はお使でござりまする。」源五「何をいふぞい。是れは菊野、最前から座敷に居らぬと思うたが、何事であるぞ、萬太郎樣を始め三五兵衛殿もお尋ねなされた、早く奧へ行きやれ。」菊野「ハイ參じますは參じますけれど、お市樣、今のをなア。」ト科ある。お市「サア今のをなア。」ト思入。源五「ハ、、、何ぢややら、兩方から今のをなアとは何の事ぢや。」お市「サア今のをなアと申しましたは、オ、それ、辰巳屋からのお使の事でござりまする。」源五「サア其の使に早く逢ひたい、どれに居る。」お市「サア其の使は。」源五「其の使は。」お市「サア其のお使樣は爰にでござりまする。」ト菊野を敎へる。菊野「お市樣、つゝとマアなに云ふぢやいなア。」ト思入。源五「何ぢややらとき〴〵と、エ、こりや身共を嘲弄るな、よい機嫌な者共ではある。」ト苦笑ひする。兩人氣の毒なこなし。お市、

三五兵衛樣に。」伊平太「そりや間を見合はせての事に致しませう、サア／＼お出でなされませ。」ト合方になり、三人奧へ入る。お市菊野を向うへつれて出で、お市「菊野樣、何程お前が誠らしう言はしやんしても、どうも私や合點がゆかぬ、源五兵衞樣はお屋敷中でも物堅い噂、こつちへお出でなされても遂ぞ新造樣ひとりお呼びなされた事も、其の上彼方の奧樣といふはお國のお血筋、急度したお家柄、御祝言はなけれど、それさへお嫌ひなさるゝ彼方、また何ぼお前が隱しても、源五兵衞樣と譯のある事なら素振目遣ひ、萬更私ぢやというて知らぬ事はない、三五兵衞樣への返事がなさに、ツイ言はしやんしたので有らうがな、私に何の匿す事はないワイなア。」菊野「お市樣、北と南は隔てもあれ、聞き及んだお前の深切、日外からお屋敷樣で内方へ來る私、馴染もない者を可愛がつて下さんすお前、何の隱しませうぞいなア、御推量のとほり三五兵衞樣が執う口說かしやんすのが忌さに、返事に困つて源五兵衞樣に譯あると言うたのぢやワイなア。」お市「大方さうぢや有らうと思うた。さうして其の樣子は源五兵衞さまに話してあるかえ。」菊野「何のいなア、今の樣に言はれたに依つて、日外から三五兵衞樣も氣味惡がつてぢや源五兵衞樣、それでツイ言うたのぢやワイなア。」お市「滅相なお方ではあるぞ、さういふ事を源五兵衞樣に言はずに措いて、若し三五兵衞樣が直にお尋ねなされた時には、變なものにならう程に、今の樣子を源五兵衞樣に話しておいたが可からうぞえ。」菊野「ほんに然うぢ

御座るさかい、譃は吐かれぬ。お前の返事は無いに依つて、どうやら私がすてて措くやうで濟まぬワイなア、外にどうかう譯があるか知らぬけれど、それはそれ、これはこれとなりさうな事ぢやぞえ。」トこの間菊野思入ありて、菊野「サア其の事は、どんな事が有つても言ふまいとは思うてゐるけれど、言はねば三五兵衞樣、お前方やお市樣が濟まぬ樣な口振さうぢやに依つて、言ひます程に、必ずばつとならぬ樣にしておくれや。」お市「そりや私が呑込んで居る、さうしてお前のきつしり樣の名は何といふぞえ。」菊野「サア其の方は千島のお屋敷、源五兵衞樣でござんすワイなア。」皆々「ヤアヽヽ。」ト思入。三人「早う聞かしてくれいナウ。」菊野「常住お前方と一座しても、一寸見つけられぬやうにするのは、大抵氣の揉める事ぢやないワイなア。」左十郎「何れもお聞きなされ、千島家の御家來勝間源次兵衞殿の御子息、我々が毛蟲殿。」伴左「日頃から四角四面な源五兵衞殿、かやうな遊所などへ參る樣な仁ではないが、愚かしい萬太郎樣に、世俗の儀を御覽に入れん爲、斯樣な所へも折々の鬱散。」伊平太「左樣で御座る、チンプンカンで我々へも意見なさるゝ源五兵衞殿が。」菊野「其の偏屈な堅くろしい、几帳面なお方が、一向可笑しいものぢやワイな。」左十郎「スリヤ源五兵衞殿がお身の情夫か。」三人「興がさめる。」ト奥より仲居お千代出て、お千代「申しヽヽ貴方がたは見えぬと言うて、萬太郎樣がお尋ね、ちやつとお出でなされませいなア。」左十郎「萬太郎樣のお召しならば、參らずばなるまい、又この樣子

身分なり。」左十郎「菊野が應といへば幸福といふものぢや。」お市「サアそれは私も色々というて見ますけれど。」トぐづ〳〵いふ。左十郎「市左衛門、お市ばかりに言はずと、其方がなぜ媒介たぬぞ。」亭主「イヤモウ私は色事の方は、人に勸める事も大不調法にござりまする、いや申しかれ是れいはうより、寧そ菊野樣を呼んで、直に被仰つて御覽じませぬか。」左十郎「いか樣それがよい、市左衛門、座敷の間を見合はせ、呼んでこい〳〵。」亭主「ハイ〳〵左樣致しませう。」お市「イヤモ今時はお客樣方が、惡洒落なによつて、私等よりしつかり言うても、賢いお子達で御座りまする。」伴左「然らば我々が菊野へ直に申した上で、お市呑み込んでをるか。」ト此の内菊野奥より出て、菊野「お市さん、私をお呼びなされたはお前かえ。伴樣、伊州樣、左十樣にかう座敷をぬけなさつたなア。」伴左「イヤ座敷は拔けぬ、菊野、お身に用があつて。」三人「これへ呼び出したのさ。」菊野「ム、お前方は俺への用と仰しやるは、先日からお市樣に聞いた三五兵衛樣の事かえ。」お市「菊野樣、彼方がたも色々と仰しやる事ぢや程に、何卒よい樣に返事しておくれいなア。」菊野「サアお前が段々言うてぢや事なれば、あいと云ひたいけれど、どうもならぬ譯があるワイなア。」亭主「どうもならぬ譯といふは、外に色があるといふのか。」左十郎「北の新地でとつくり聞き合はせた所に、汝に深間はない、今時の藝子に似合はぬ甚だ堅いものぢやと聞き及んで居るさ。」お市「菊野さん、あの通りぢやワイな、河治や三丸屋でとつくりと聞いて

話でござりました。此の狀を見て北へ去んで來てくれいとは、アノ子にくさじの曰くはなし、何ぢや知らぬ。」ト合點行かぬながら、狀を披き向うへ持つて出て、菊野「今夜は去ぬる程に、何となりとも場合をして貰うて下さんせや、きつと〳〵頼むぞえ、彌助殿。」彌助「又なんぞ癇癖に觸つたか知らぬ。」ト狀を懷へ入れて、「おとは樣、私は北へ去んで參じますさかい、菊野樣に此の通りを言うておくれなされませ。」おとは「そりやおまへ御苦勞ぢやな、そんなら去んで上げておくれえ。」トいひ〳〵入る。武助「彌助殿、アヽ今から北へは大儀なものぢやナウ。」彌助「イエさうもござりませぬ、したが更けぬ中ドレ〳〵往てかう。」ト橋懸りの方へ行きかけ、「北へ往て來る程の間に、難地へ往てこまさう。」トこの樣な事いひながら門口へ出て行く。始終踊三味線、奧は方々にて手を叩く。彌吉「これ〳〵喜兵衞、左十樣のお好みで、例の芋鮹汁ぢや、早うこしらへてたも。」喜兵衞「南無三、吸物の工面が違うた、可いワ、仕かけておいたのは後へ廻せ。」ト庭の方を見て、「龍助、急に鮹洗うてたも。ドレ拵へうか。」トいひ〳〵料理場の方へ入る。彌吉、武助もついて入る。ト奧より市塚左十郎、磯谷伴左衞門、安松伊平太、三人して市左衞門お市をつれて出る。三人「兩人とも一寸來やれ〳〵」ト向うへ出る。お市「申し何で御座りまするぞいなア。」伴左「何とは知れたこと、三五兵衞殿がよく〳〵に思はつしやればこそ我々への頼み、菊野が返事はどうぢや。」伊平太「三五兵衞殿は御年輩といふでもなけれど、御大身の御

サア行ておくれ。」トこんな事いひ〳〵菊野、お德、早枝、お鹿、おかの、お駒、皆々奧へ行く、仲居お千代おとは三味線箱持つて跟いて入る。お市しか〴〵ありて臺所へ來て、お市「喜兵衞お吸物の引替はよいかえ。」喜兵衞、菊「ハイ可うござりまする。」トいふ中獻立の貼紙を見て、お市「御膳までの間に、お屋敷から來た泡盛を出せと仰しやつたぞえ。」武助「ハイそりや燗場へ吩咐けておきました、時にお供の方は理窟にしてくれいと被仰つてでござりまする。」お市「そりや毎時の樣にしておきやいなう。」武助「今夜のはお振舞竝ぢやに依つて、些と氣をしてくれいと仰しやつてでござりまする。」喜兵衞「とつとモウ今は理窟でよい樣な事もあり、又惡い事もあるぢや。」ト天窗をかく。お市「それぢやと言うて、又喧しいとわるい、武助よい樣にしておきや。」トこの中奧にて手を叩く。「それお手が鳴る、子供は居やらぬかいなう。ハイ、、、。」ト返事しながら入る。彌吉も返事して入る。踊三味線にてまはし男彌助、木綿やつし半合羽廻しの他行の拵へ、捨白にて橋懸りの入口より入つて來る。武助「彌助殿戻らんしたか。」彌助「ハイ芝居は先刻に果てたけれど、太左衞門橋の彌吉に逢うてそれで隙が要りました。」武助「菊野樣が用があると言うてぢや有つた、おとは殿に聞いて上ぎよ。」おとは殿〳〵。」ト呼ぶ。奧よりおとは狀を持つて出て、おとは「アイ〳〵。オ、彌助殿、最前から待つてゐた。菊野樣がいうてぢや事には、此の狀を見て大儀ながら北へ去んで來てほしいと言うてぢやあつたぞえ。」彌助「そりやお世

こは「さうして菊野樣は何處へ行てぢやえ。」お德「菊野さんは何やら用があるというて、小座敷の方へ往てぢやあつたワイなう。」お鹿「何ぞ用なら呼んで來うかえ。」こは「イエ〳〵大事ない、お前方は座敷へ行く拵へしなえ。」お駒「座敷へ行くは面白けれど、左十郎樣の髭で擂附けられるのが嫌ぢやワイなア。」トこの中奧よりお市、花車の扮裝にて中の間へ出て來る。お市「おとは、お千代、何處に居やるぞいなう。」ト皆々を見て、「二人ながら此に居るかいなう。早枝樣、お德樣、ちやつと拵へて行ておくれいなア。」早枝「サアさう思うて私もお德樣も、顏出してゐるワイなア。」お德「菊野樣も一緒に座敷へ行くかいなア。」菊野「アイそりや今行くけれど、わしや此の狀が北まで持つて行て貰ひたい、彌助殿呼んでお呉れんか。」ト武助臺所にてこれを聞いてゐて、仕切の唐紙をあけて、武助「彌助殿は芝居を見てくると言うて出てでござりました。」彌吉「戾られたらお前へ知らせうかえ。」菊野「エ、つゝとモウ、急な用があるのに、爰に居てくれたがよい。おとはどん、お前に賴んでおく程に、戾らんしたら此の狀渡しておくれえ。」こは「アイ〳〵、わたしが必然渡すワイな。」ト狀を受取る。菊野「急用ぢや程に、間違はぬ樣に早うしやと言うておくれ、賴んだぞえ。」千代「サア皆早う座敷へ來ておくれいな。」菊野「アイアイ、サア皆お出でんか。」お德「菊野さん、おまへ顏拭きんかえ。」菊野「わしやこの形でよいわえ。」早枝「どうでも北の首さんぢや、生地でも目立つワイな。」菊野「こちやいや、おだてゝぢや。」仲居「サア

ぞ。」奴皆々「それが可い〳〵。」トこんな事言ひながら、奴皆々入口へ入る。路次は内よりしめる。

返し

右の道具門口より西へ引いてとる、東は觀音開きにて、西手の門口を橋懸りの切幕の所へ行くやうにして、門口の出入になる。

造物二重舞臺、三間の間より上手は見附障子、この三間の間の所に見切の唐紙、これは綟子張、下手の方は臺所の見得、膳組土竈、欄間の所に獻立の書附貼つてあり、よき所に大きなる八方、すべて臺所中の間の見得、方々に丸提灯、右中の間にはお德、早枝藝子の扮裝、お鹿、おかの舞子の形、お駒振袖娘、この五人指角力がき引きのやうな事して遊んでゐる。臺所には喜兵衞料理人にて、金杓子を持ち立つてゐる。武助木綿やつし、彌吉息子の形にて、そこらを手傳うてゐる。この見得騷ぎ唄にて道具納まる。

喜兵衞「お吸物の下をもつと焚いて貰はう。」肴屋「オットせう。」喜兵衞「鳥治へ往て最前の鶴を早う持つて來いというて下さんせ。」男「合點ぢや〳〵。」ト橋懸りの方より門口へ出て行く。これは臺所の模樣立ちかゝつてのいひ合はせにあるべし。ト奥よりお千代、おとは、仲居にて出て來る。とは「サア〳〵お德樣、早枝樣、どなたもお出でなされたぞえ。」千代「おかの樣もお鹿樣も、一緒に臺所へお出でお出で。」早枝、お德「モウ皆樣お揃ひなされたかえ。」千代「こちの旦州は短氣ぢや程に早う拵へて居いえ。」

一代官半十郎　源藏　　一女房おさき　柏崎
一幇間作治　長六　　一喜集院喜平太　宗三郎
一市塚左十郎　宗三郎

造物平舞臺一面に格子、眞中に大きなる入口、内に富田屋といふ暖簾かけあり、西の方客路次、右路次口に富田屋亭主市左衞門、著附袴にて手燭を持ち辭儀してゐる。千島萬太郎、著附羽織おろかしき若殿の扮裝、笹野三五兵衞、勝間源五兵衞、藝妓小傳、出石宅右衞門、市塚左十郎、磯谷伴左衞門、安松伊平太、皆々著附袴羽織、藏屋敷侍の扮裝にて立つてゐる。これ等一人づゝ、奴紋附の箱提灯を持ち隨いてゐる、これは富田屋の路次へ入りかけてゐる見得。幕の中にて芝居矢倉太鼓しころの鳴物にて幕開く。

亭主「毎度ながらお越し下されまする段、有り難う存じまする、これよりお通り遊ばされ下されませう。」三五兵衞「市左衞門御案内申すか。」亭主「へイ／＼。」三五「萬太郎様まづ／＼。」若殿「皆來い／＼、案内せい。」ト亭主市左衞門先へ案内して入る、若殿萬太郎ツイと入る。笹野三五兵衞皆々へ一寸目禮して、三五「源五兵衞殿、いづれも。」皆々「まづ／＼。」ト同じく目禮する、三五兵衞先へ段々に思入あつて路次へ入る。矢張家來つれて入る。ト橋懸りより肴屋、肴籠抱へ忙がしさうに出る。肴屋「えらいもの忘れておいて、すつでの事に料理人に眼玉貰はうとした。」トこんな事いひ／＼門口へ入る。ト路次より奴提灯を持ち、殘らず出て來て、奴○「先づ旦那は片附いた。」奴△「これから寛りと寐てくれう

五大力戀緘

役人替名

一千島萬太郎	坂東重太郎
一廻し男彌助	中山文五郎
一篠野三五兵衛	片岡仁左衛門
一若黨與五平	嵐三五郎
一藝子菊野	芳澤いろは
一仲居おかる	吉藏
一安松伊平太	眼兵衛
一磯谷伴左衛門	駒藏
一舞子お鹿	菊三郎
一舞子おかの	槌松
一娘渚	永藏
一藝子ふさの	駒太郎
一藝子小絲	芳澤國松
一同小春	山下國松
一仲居とは	五郎市
一富田屋喜兵衛	源藏
一富田屋武助	長六
一出石宅右衛門	中山粂藏
一藝子綾	中山文五郎
一富田屋お市	三桝德次郎
一勝間源五兵衛	尾上新七
一富田屋彌吉	大治郎
一仲居お吉	吉藏
一出來島や十兵衛	眼兵衛
一丸屋仁兵衛	三保吉
一藝子萬世	菊三郎
一藝子早枝	永藏
一藝子小傳	三八
一娘おこま	駒太郎
一藝子お德	芳澤國松
一仲居千代	源之助
一富田屋市左衛門	新藏

五大力戀緘

並木五瓶

遊軒、花滿一家へ下し賜はる間、年來のかたき、嬲りごろしに致すべき者なり。」與、小市「仍つて御書如件。」皆々「サア遁れぬ所ぢや覺悟せい。」ト又見得になる。是れより道具又々廻る。ト右の辨之作源八總角立して居る。是れより道具四五遍も早う廻る。ト見得好く右の屋敷の所にて道具とまる。立廻り有つて、遊軒を縫之助みゆき兩人して殺す、橋懸りより源八、總角走り出る。縫「兒者人の敵。」みゆき「夫のかたき。」兩人「おもひ知つたか。」源「辨之作も打止めました。」與「出來した〳〵、是れより禁廷へ奏聞せん。」みゆき、縫、總「是れと云ふも與三右衛門樣のお蔭。」與「お敕使樣は。」木「先達お歸し申しました。」與「出來した、敵討は濟んだ、まづ此の場は目出たいお立ち〳〵。」ト打出し。

三十石艠始 終

車の樋口より拔出るを、源八、總角兩人致し、川の中にて敵討、天道合ざんを行馬となし、小舟を以て取卷き、いかな〳〵動かしは仕らんぞ。」遊「ナニ辨之作だ。」ト往かうとする、見得になる。遊「寄つたら蹴殺すぞ。」與「動くな。」ト是れより道具舞臺一面に廻る。此の内皆立廻り。

道具一面の城、前に水車あり、三十石小舟數多、皆々高提灯にて取卷く、眞中に官翁實は辨之作襦袢、源八襦袢、總角白無垢にて立廻り、此の内道具廻りあり。

又元の座敷になる、右の見得にて遊軒を與三右衛門、みゆき、木幡、縫之助取卷き元へ戻る、向うより小市、御書を持ち出る、道具止る。

與「ヤァ小市か。」小市「ハッ。」與「首尾は。」小市「御書。」與「一方より讀み上げい。」ト與三右衛門、小市兩人にて讀む。小市「花滿憲法儀は鎌倉の名代として大内に於ての無禮、禁裏を騷がしたる科に依つて、一家殘らず滅亡す。」與「然るに吟味を遂げ尋ぬる所に、川浦遊軒が惡心の上、憲法が妻女御幸とやらんに戀慕し、御杯も遊軒打破りし由、悉くなれ合ひたる者どもより白狀、憲法に科無き條一決せり。」小市「且又花滿一家紛失の切手差上げし上、淀川上り舟の工夫訴へたる功に依り、昔の所領安堵、加增として家中人別に三十石づゝ御加增せしめ、日本廻船の要と致すべき者なり。」小市「此の度七里半の堤川中へ築き候事、王城へ近道を付けしは謀叛の萌しと評定極まり候事。」與「且又川浦

となされまする。」遊「山が轉げて來ても敕使の添人、花滿一家與三右衞門が首取つて追付行く、ひとの見ぬ間に急げ。」宮「ハツ。」ト走り入る。みゆき氣味合あつて遊軒が傍へ行く。遊「みゆき、わりやこゝへ何しに來た。」みゆき「わたしやお前に逢ひに。」遊「なんぢや身共に逢ひに、ハテ好く來たな。」みゆき「先刻には憎い奴ぢやと思はしやんせうが、わたしや今では憲法樣の事は思ひ出した事も無い、お前の事ばつかり思うて居るのに。お前胴慾ぢやぞえ、たゞし又私に惚れたと云はんしたは譃かえ。」遊「スリヤ憲法への貞心捨てて、遊軒が心に隨ふか。」みゆき「サア其處が去る者は日々に疎し。」遊「いかにも伽さして遣らう、身が氣に入る樣に伽はせまい。」みゆき「サアお氣に入らうか入るまいかは知らねども、マア恁う。」ト切り懸けるを止めて、遊「此の樣な伽の爲樣では、些と間に合はぬ。」みゆき「そんなら恁う。」ト又切り掛ける、見得よくとまる。縫之助又切り懸ける。遊「扠は汝も入込んだなア。」遊「みゆき樣の媒人を致しませう。」遊「媒人ならば幾人でもさしてくれう。」木「私も媒人致しませう。」遊「幾人でもさせませう。」與「拙者も媒人致しませう。」遊「幾人でもさせませう。」みゆき「お伽致しませう。」ト又切り懸ける、見得あつてとまる。與「コリヤ大内から御沙汰も無い中に、傷付けると家が立たぬぞ。」木「心を靜めてお伽をさしやんせ。」ト是れより立になる。攻太鼓になり立廻りあつてとまる。遊「あの攻太鼓は。」與「さのみ驚かつしやる事は無い、將監を討つて立退いたる辨之作、今宵水

木「與三右衛門殿、首尾好うござりまするか。」 縫、みゆき「これは。」 木「みな與三右衛門殿との相談。」 與「川浦遊軒方に辨之作匿まひ置く事、草を分つて詮議すれども知れぬこそ道理、あの宮翁七十有餘の老人が、人無き所で様々の氣丈、察する處遊軒が家の秘藥、戌の年戌の月戌の日戌の刻に誕生したる女の生血と、血筋の白髪を合はせ飲ましたに極まつた。」 縫「まつた源八が娘のお松は行方も知らぬ浪人が生膽を取り、殊に親茂治兵衛が白髪まで。」 みゆき「スリヤ其の時の浪人は。」 縫「辨之作であつたナ。」 與「是れを消さうには亥の年亥の月亥の日亥の刻に誕生したる女の生血に猫柳。」 みゆき「スリヤ先刻のきてふどのの生血を。」 與「犬死でない妹が最期。」 三人「追付知れる辨之作。」 與「急く處で無い、心を沈めて來い。」ト皆々入る。唄になる。遊軒出て、 遊「大抵の奴ではないわいやい。」ト奥より宮翁若い男にて出る。 宮「倅扨々お上にも殊ない御機嫌只今。」 遊「ヤイ〱汝が其の身振は何だ。」 宮「倅身共が身振が何とした。」 遊「汝が顔水鏡で見をらう。」 宮「倅とした事が、扨々何とした。」ト老爺がたの臺詞にて手水鉢にて顔を見て、 宮「ヤアこりや遊軒様、私は何時の間に此の様になりましたなア。」 遊「最前の茶をふか〱喫らうた故ぢやわい。」 宮「與三右衛門が計略に乘つたか、エヽこりやマア如何したものであらうナ。」 遊「もう儕は此の屋敷には置かれぬわい。」 宮「遊軒様、如何ぞ好い思案は有るまいかナ。」 遊「表門は番人あり、幸ひ水車の樋口、人の見ぬ間に急げ。」 宮「私は私ぢやがお前は何

や花満一家の肩持つて、遊軒を討たさう〳〵とすれど、御敕使の添人關白一の人も同然、何奴も這奴も身に指でもさすと胴と首との生別れだぞ。」ト縫之助みゆきにあてて云ふ。　遊「コリヤ早いぞ〳〵、サ大内より御沙汰の無い中は早、イザ早う御機嫌をお直し下さりませう。」　遊「うぬ。」ト與三右衛門を切らうとする。　辨「コリヤ〳〵遊軒、一旦の腹立はあれども、官翁が身に凶事無い事、もう料簡してやれ。」　遊「這奴蹈みのめせ。」ト砂場へ蹴る。侍、與三右衛門を蹈む。　遊「もう可い〳〵、是れより拙者が手前で茶を差上げませう。」ト官翁を見て、　遊「親人何さつしやる。」　官「何かは知らぬが、いかう痒い事ぢやてい。」　遊「お敕使には先づ奥へ。」　辨「方々參れ。」　遊「仕丁ども休め。」　官「いかう痒い事ではある。」ト唄になる。辨の中將、遊軒、官翁入る。　みゆき「コレ與三右衛門の大腰拔、今のは何ぢや、今の樣に蹈み打擲に逢うても、こなさんは無念にはないか、エ、此方はなう、爾ういふ此方の心底とは知らず、今まで敵討を延ばしたが殘念なわいなう。」　縫「今まで敵討を延ばしたは、遊軒が怖さであつたナ、エ、爾ういふ心とは知らないで便りにしたが殘念なわいなう。」　みゆき「もう頼みの綱も切れ果てた、是れより奥へ蹈込み遊軒に繩打つて、禁廷よりお赦しの出るまで、命を取らねば事は濟む、サア縫之助樣お出でなされい。」　縫「ソレ一時も早う。」ト此の内遊軒聞いて居る。　與「ヤレ待て、遊軒ばかりは搦めうが、辨之作は何とする。」　縫、みゆき「何と。」　與「女房木幡首尾はもう好い、起きた〳〵。」

は、重罪人で無いか。」官「スリヤ木幡が其の茶を飲むや否。」遊「覺えがござるか親人。」官「微塵も覺えは無い。」與「覺え無い者が、木幡は如何して死んだ。」官「サア夫れは。」與、官「サア〳〵〳〵。」與「如何ぢや。」官「是れは又迷惑な事ではある。」與「覺え無いのが實ならば、此の茶の毒味してさつぱりと言分さつしやれ。」官「成程此の通りで了へば逆礫付は知れた事、いかにも此の茶飲みませう。」與「七轉八倒して早く斃死つて了へ。」官「飲むは飲むが、さりとは合點の行かぬ。」與「ハテ未練、早く飲まつしやれ。」官「身の言譯、今飲みまする。」與「まだしも覺悟、正しく鴆毒に極まるからは、死體は逆礫付ぢやと覺悟しをらう。」ト官翁茶を飲み、　官「與三右今茶を飲むが否や、一段と快い、是れでも毒に極まつたか。」與「ハ、、、死際の世迷言、要らざる事云はずとも、早く斃死つて了へ。色も變らずサ正しく毒藥なればこそ女房が此の有樣。」官翁は麗々とハアハツ。　遊「與三右衛門、手前官翁は御敕使へ毒は盛りませぬぞ。」與「ハツ。」ト官翁、與三右衛門を引捉へ、官「ヤイ汝や何と言うた、身共は何者だと思ふ、川浦遊軒が親、禁廷のお茶の根元とも云はるゝ官翁に向ひ、毒を盛つたと云うたぞよ。」與「ハツ、モ與三右衛門が一生の過り、眞平御宥されて下さりませう。」ト此の内官翁痒い思入あり。　官「まだ〳〵、どの頤で吐した、汝が樣な奴は手討にする。」ト切らうとする。遊軒止めて、遊「コレお年寄の氣を揉まれまするな。」官「オ、〳〵。」ト官翁又老爺形になる。　遊「與三右衛門、わり

へ。」與「往け。」小市「ハツ。」ト走り入る。與「コリャ妹、犬死とばかり思ふなよ、其方が命は敵討の詮議の種になるぞよ。」喜「兎角小市殿のことを、さらば。」ト死ぬる。みゆき「コレ〳〵短い縁であつたのう。」ト與三右衛門柳を取つて、與「ゑのこ柳。」トきてふが血潮を柳に塗る。みゆき「是れは。」與「詮議の種ぢや往け。」トみゆきを伴れ入る、唄になる、縫之助橋懸りより出る。縫「いま小市が云うた通りなれば、今宵のうちは。何を云うてもみな與三右衛門殿に。ソレ。」ト奥へ行かうとする。みゆき出て、みゆき「縫之助様か。」縫「みゆき様。」みゆき「弟にお逢ひなされましたか。」縫「委細残らず承りました。」みゆき「可哀しやきてふ殿は。」縫「コレ泣いて居る所で無い、禁廷へ奏聞の早打、遊軒が耳へ入つては。」みゆき「氣遣ひなされまするな、門々は堅めさせ、殊に水車の樋口より抜け出でまいものでも無いとあつて、天道合ざんを以て取巻き、伏勢がござりまする。」縫「エ、忝い、則ち源八おふねを遣はし置いたれば、氣遣ひはござらぬ。」トバタ〳〵になる、皆々入る。官翁を與三右衛門追うて出る。與「動くな。」官「まつた、官翁には何科あつて取巻く。」與「科は其の身に覺えがあらう。」遊「仕丁ども引け。與三右衛門、親人には何科あつてとりまき召さるゝ。」與「官翁は重罪人。」遊「重罪人とは。」與「木幡が死骸を持て。」侍「ハッ。」ト木幡死骸戸板にて持ち出る。與「今日敕使へ茶を差上げる官翁の手前、何とも心得ぬと、取上げ見れば此の如く紫の泡、察する處毒薬、女房が毒味其の儘死したる

に杯。」　喜「エ、忝い。」ト飲む。　與「みゆき殿其の杯是れへ。」　みゆき「アイ。」ト又引いて來る。與三右衛門つく／＼見て唄になり、　與「ハ、、、ア、、　神なるかな妙なる哉、唐土のくわてきは、柳の葉に蜘のとまり水に浮みしを見て舟を造る、今與三右衛門は花生の杯を見て、夜舟の覺りが開けた。」　みゆき、小市「エ、何と。」　與「此の花生を今一度。」トみゆきを向うへ引いて、　みゆき「慿うすれば。」　與「淀川は水早く、五日七日の中に中々船にて上る事思ひも寄らず、七里半の堤を七曲りの中へ直に付け、王城に近道拵へるは、遊軒が心に深い工みあらんと思へども、何を云うても大内の仕官、敵討も家國も此の上り舟の工夫こそと、思ひ暮しは此の年月、其の通りに舟に綱を付け川端を引き上らば、米穀萬事運送は思ひの儘、船にて自由は艪と櫂と、帆を巻く許りに凝つたるか、綱を付けて引くといふ、僅かな事に心付かざるは、燈臺元暗し、祕事は睫毛であつたよなア。」　みゆき、小市「スリヤ此の通りの工夫では。」　與「重罪たりとも科を赦し。」　みゆき「所領重緣昔の通り。」　與「大内への使は小市。」　小市「ハッ。」ト内へ入る。　みゆき「ソレ上り舟の工夫。」ト花生をやる。　與「ソレ高札、今こそ御朱印。」ト小市取つて、　小市「追付たち歸りませう。」　與「辨之作が行方も、大方今宵知れるであろ。」　みゆき、小市「エ、。」　與「此の一書は遊軒が積惡を言上申す豫ての認め。」ト書物出してやる。　小市「きてふ然らば。」　與「表門は氣遣ひ無し、水車の樋口より抜け出るを油斷すな。」　小市「若殿にお報らせ申さう。」　みゆき「一時もはやう大内

の聞えを憚り勘當は致した、未來に遠慮は無い、妹勘當赦したぞ。」喜「エ、。」與「小市、きてふは未來の妹、改めて與三右衛門が媒人、連添うてたもるまいか。」小市「此の世こそ敵の娘、未來は結ばいで何と致しませう、必ず〳〵冥途は女房ぢやぞ。」喜「其の詞を聞いたら思ひ殘すことはない、未來は一ツ蓮でござんすぞや。」みゆき「せめて此の子の末期に杯。」與「イヤ〳〵、顔を合はせばやはり敵。」みゆき「ぢやと云うて可愛さうに。」ト與三右衛門釣花生にゐのころ柳を生けあるを取つて、きてふが血を入れてくさりを片々はづし、與「血肉を啜つて因縁を引くといふ、其方も未來永々小市と緣を引く杯。」みゆき「私は則ち待女郎。」與「杯に手を差さねば、敵の娘の媒人といふでも無い、ソレ其の鎖で。」みゆき「緣の鎖の引く杯、取次もせず手も差さず、鎖で引くが二世の結び。」與「息引かぬ内早う。」ト唄になり、みゆき其の鎖を持ち門の外へ引いて出る。與三右衛門手燭を持ち、此の中に遊軒下座の家體にて官翁に囁き入る。官翁鐵砲にて與三右衛門を覗ふ。みゆき「小市、二世の杯。」小市「是れがきてふが血潮。」トぢつと泣いて飲む。與「陰中の陽陽中の陰、コレ此の雪も内に陽有つて燃ゆる事、陰の凝固る證據、水は火を消し雪は火をかふ、人間も先づ其の如く、雪の火を取る露雫と諦めて未來を樂しめ、是れが門火。」ト梅の直枝へ火を點ける、雪段々消えて燃え行く、官翁銀砲の上へ水落ちる、官翁鐵砲打付け入る。小市「然らば慮外ながら。」トみゆき鎖を内へ引いて入る。唄になり、みゆき「コレこゝ

せい。」皆々「まづお入りなされませう。」ト唄になる。辨の中將、遊軒、官翁入る。與三右衛門、みゆき殘る。きてふ泣いて居る。みゆき「なにを云うても敕使の守護、家の破滅をおもうてエ、口惜しい。」喜「折角思ひ思うて付け覘うたに、爲損じ剩へ。」小市「女房去つた、二世までの縁斷つた。」喜「コレイナそれは。」ト行かうとする。みゆき「コレ待つた、遊軒が娘、弟小市に顏合はすまいぞ。」小市「假令どの樣なことがあつても顏合はせぬ金打。」ト表にて金打する。喜「エ、。」みゆき「可愛い夫の武士を捨てさすか。」喜「サア夫れは。」小市「不忠不義の名を取らすか。」喜「サア。」みゆき、小市、喜「サア〳〵〳〵。」小市「如何ぢや。」喜「ハツ。」ト泣く。みゆき「とは云ふものの可憐しや〳〵。」ト與三右衛門は官翁が事思入、きてふ與三右衛門が刀にて自害する。みゆき「ヤアこりや自害しやつたか。」小市「ヤア。」與「内へ入ると不孝になるぞ、きてふ爾う無くては道は立つまい。」喜「私程因果な者は無い、夫に添ひたいばつかり、兄樣には勘當受け、嬉しやとも〳〵敵を討つて、女夫にならうと思ひの外、敵といふは父樣、どの樣に添ひたう思うても、小市樣の武士の廢る事なら、必ず入つて下さんすな、もう此の世で顏は見ぬ、魂はお前の女房ぢやぞえ、此體は遊軒が娘、せめては敵の肉縁を慿う。慿う抉つたれば、もう心は晴れました、此の世の念は切つた程に、せめて未來で女夫になつて下さんせえ。」みゆき「夫れ程までに弟が事思うて居る其方、因果とて惡縁。」與「天下のお咎めある花滿憲法に一家となる事、上へ

みゆきに斬り懸ける、立廻りにて止め、みゆき「こりや何とする。」鴈「切味試みる。」ト立廻りにて輿三右衛門鴈平を見事に斬る。　宮「輿三右こりや何とする。」輿「何とも致さぬ。」宮「敕使守護の家來を斬るからは、覺悟であらう。」輿「此奴斬つても苦しうない。」宮「苦しうないとは。」輿「不義者でござる。」宮「不義者とは。」木幡「其の證據はこゝに居りまする。」ト木幡出る。遊「不義の證據見ませう。」木「不義の證據は此の文、あの鴈平めが私に惚れて此の付文、宮翁樣お前も最前御存じ、但し此の文封を解いて、内の名を改めませうかナ。」宮「ア、コレ〱、成程最前身共も居つた、家來鴈平めが此方に不義を働く、さて〱憎い奴と思へども、倅が歸つたら手討にもと存じて居つた、輿三右能く斬り召された、此方の手に懸けるは鴈平めが仕合さ。」木「爾う仰しやれば此の文の、封を解くにも及びませぬ。」宮「憎い鴈平め。」　輿「ハテ斬れたわ、右手の脇より肋を懸けてすつぱり、天晴の業物、鏽には寄らぬ物でござります。」ト遊軒に渡す。遊「いかいお世話でござる。」ト不承々々に取る。輿「愈女はお傍の伽。」喜「父さんどうでも。」ト又寄る。遊「此奴虎の子を飼ふやうな娘。輿三右殿、此の女めを確と此方に預けたぞ。」輿「預りました。」宮「倅、序に其の虎の子も。」遊「ハテ何程の事がござらう、遊軒親子は些とでも、指さす奴があると、輿三右殿の身の上。」宮「それで落著いた。」辨「サアみな奥へ參れ。」遊「最早お茶の湯の刻限、間もござりますまい。」輿「女房御案内申せ。」木「サアかうお出でなされま

刀賣りまするでござりまする。」遊「いかにも買ひませう、一旦心懸けましたる女、寢間の伽させう、みゆき爰へ來い。」みゆき「ハイ。」與「お召しなさる、行儀よくして參れ。」トみゆき思入あり傍へ行く。みゆき「御用でござりまするかナ。」遊「汝さへ寢間の伽せうならば、心許して寢間の伽さしてくれう。」ト斬り懸ける、與三右衛門みゆきを引退ける。遊「こりや何さつしやる。」與「何となさるゝ。」遊「此方へ求める小太刀、鋒先の鏽びて切味心許ない、女めを試しまする。」與「ちつと御麁相かと存じまする。」遊「何が何と。」與「此方は敕使守護の役、血をあやしても苦しうないか。」遊「尤も、親人ソレ。」官「合點ぢや。」トみゆきに斬り懸る。立廻りの中、與三右衛門扇にて打ち落す。官「與三右、こりや何とする。」ト手酷く云ふ。與「年に似合はぬ岩丈な事な。」官「サア何と被仰る。」ト急に老爺方にて云ふ。與「貴殿には敕使へ茶をさし上げる役目、血に鏽びたる刀を持つさへあるに、女をためし召さるゝか。」官「サア夫れは過りました。」與「過りもあやまりも、御老體には似合はぬ近年の過り。」官「ウム。」トきめる。遊「親人、お年寄のお引きなされい。」ト官翁よぼ／＼下に居る。遊「與三右殿、何にも御敕使前で、血をあやさうと致したは、親官翁が無調法、夫れとても手前無調法でござる。」與「イヤ謝らせうと申すではござりませぬ。」遊「イヤあやまりましてござる、あやまりもあやまり近年の大あやまりでござりまする。」喜「父さんおまへ。」ト斬りにかゝる、遊軒止めて、遊「鴈平女めを試せ。」鴈「ハッ。」ト

申し上げくれうと、次に控へさせ置きましてござる、何と御覧遣はされまいか。」遊「身共に小太刀が賣りたい。」與「親子共にお目利の上手と承り及びましたか存じませぬ。」鴈「最前女の非人めが、旦那に刀を賣りたいと願ひまする、何とやら合點の行かぬ奴でござります。」遊「ドレ其の刃物見せうかい。」與「御覧なされませい。」ト渡す。遊軒拔いて見て、遊「こりや疑ひも無い眞の御太刀。」與「其の鋒先の血。鏽を賣りたいと申しまする。」遊「買ひませう、其の賣主は何處に居まする。」與「小太刀の賣主是れへ參れ。」みゆき「ハッ。」ト著流しにて出る。遊「わりや憲法が女房みゆき。」みゆき「遊軒様、お久振でお目にかゝりました。」遊「遊軒を厭ぢや〳〵と嫌うたが、今思ひ知つたであらうナ、而してマア久しう見ぬうち強う窶れたナ。」みゆき「エ、。」ト與三右衛門止める。「昔が今の氣であらうなら、流浪は致しますまいと、悔んで居りまする。」遊「與三右殿、御幸を此の屋敷へ引込んだは、扨は此の遊軒を。」與「お寢間の伽が致したい願ひ。」遊「ヤ、、、何と。」與「意氣地を立てまするも身が可愛さ、野心無いと申す證には、賣りました眞の御太刀、價には妾になりと、以前の好みが受けたい彼が願ひでござる。」遊「スリヤ憲法への貞心を捨てて。」みゆき「お恥かしながら、何處へ執付く島も無い此の身、昔の好みを思召し、お傍でお伽が申したさ、お前に逢ひたい。逢ひたい〳〵と思うて居りましたが、マア健康でお嬉しうござりまする。」遊「アノ此の遊軒が傍で。」みゆき「御奉公が申したさ。」與「夫れ故

が手ぢや。」喜「エヽ。」遊「鬼やらひの節會の夜、はしたの女に手を懸け懷胎したるは其方、母は些少の過りあつて大内で追放、其の後娘誕生したれども、母は當座に死んだるゆゑ、守袋を證據に方方とたづねて居たが、ハテ健康で居たなァ、其方とおなじ守袋見よ。」ト出す。きてふ合はせ見て、喜「ヤァしつくり合ふからは、そんならお前はとゝさん、お前が父さんなれば。」ト小市と顔見合はせ、喜「ヤァお前は。」ト小市隱れる。喜「父さんなれば。ハア。」ト大泣き。與「淀堤に由ある守袋を添へ捨てあつた故、拾ひ上げた妹は、遊軒殿の娘であつたよナ。」喜「夫への功、憲法樣の敵、一太刀恨まうと思うたに、敵は父樣、スリヤ小市殿と。こりやマァ何とせう〳〵。」ト泣く。與「御敕使へ鐵砲を打ち懸けたれば、所詮命は無いと思うて居よ。」喜「それ、父さんにもせよ夫の仇。」ト切懸くる。遊「ハテさて、スリヤ憲法方の奴と腐り合うたナ。」喜「夫への面晴ぢや。」ト立廻りあつて當てる、ウンとのる。宮「是れは。」遊「藥でも遣つて下され。」ト宮翁藥飲ます、きてふおき、喜「エヽ。」ト泣く。遊「世になきものの蚯蚓め等には、遊軒が娘は添はさぬ、追付け好い壻取つてやらう。」ト宮翁目で知らす。宮「ウン爾うとも〳〵。」ト領く。與「遊軒殿、手前が召抱へましたる新參の腰元がござるが、其許樣を戀ひ佗びまして、何卒お伽と申すも慮外、お茶の給仕になされて下されと望みまする、幸ひ持ち傳へましたる太刀一口、是れをお買ひなされて下さるまいか、夫れを橋渡しに致したいと申す故、宜しう

太う少ないものでござる。」與「それはモウ此方のお智慧に及ぶ程の者はござらぬ。」遊「イヤ／＼強ち斯樣な者が無いとも申されぬ、二人ござる。」與「それは誰でござる。」遊「ハテ一人は拙者、今一人は世間の人を一人に致して、ハ、、、、。」與「いか樣仰しやれば左樣なもの、見ますれば御敕使樣には徒步をお步ひなされ、此の乘物はナ。」與「鴈平、其の乘物の內に居る者是れへ引出せ。」鴈「畏まつてござりまする。」ト內より喜蝶腰縄にて出る。與「其方は。」喜蝶「お恥かしうござりまする。」官「倅、見れば女、仔細は如何ぢや。」遊「只今片沼を歸りまする所、御敕使と拙者が眞中へ、鐵砲を打ち懸けました。」與「ハテ夫れはひやいな事ナ。」遊「早速邊を吟味致させました所、彼奴が鐵砲所持致す故、直に捕へて參つた。」與「ハレ危い事ナ。」遊「女の手業に斯樣の事仕るは、一人の工みではあるまい、同類があらう、有樣に白狀せい。」喜「狙ひ濟まして本望遂げうと思うたに、エ、爲損じて口惜しいわいやい。」ト懷劍にて切り懸ける、腕首執へ、遊「與三右殿、此の女見知つて居やつしやるか。」與「イヤつひに見た事も無い奴でござりまする。」遊「アノ現在の妹を。」與「妹にもせよ、一旦勘當致したれば他人、他人なれば見知らう樣はござりませぬ。」遊「ハテ氣散じな事ぢやな。」官「倅、總體此の間は夜寐惡い、用心しやれ。」喜「遊軒。」ト又突きにかゝる。遊「コリヤ親を斬るか。」喜「親とは。」遊「最前捕へし時、肌を探せば臍の緒の書付、亥の年亥の月亥の日亥の刻の誕生息災延命と書き付けたは拙者

たか。」遊「イヤさして辛う面倒いこともござらねど、どうでも土砂を津の國尻無川へ流し込みまする故、思ふ樣に行き兼ねまする故、北山の木を伐らします筈でござる。」與「ハァ、御工夫が出來ましたかナ。」遊「餘り水早くて土を保ちませぬ故、北山の木を殘らず伐りますると、雨は直に山へ落ち、山の土は一雨々々に淀川へ流れまする所へ、藪をとつて流しますると、彼の竹の根がしがらんで流れまする中に、右の山土が流れて參りますると、竹の根へ挾まれ、此の竹が川中へ土臺となりますると、自然と川が埋れまするうちに、堤を築きまする算用でござる。よくしたものでござるてや。」與「したり、あの早き川瀨、登り船さへ突流される故、行かぬ事と存じたに、川中へ堤を築くとは、其の意を得ませぬとばかり存じたに、今のお話驚き入りましてござる。」官「イヤコレ與三右殿ばかりは左樣に仰せられるな、倅遊軒が工夫致した堤の事、惡からうと此方一人遮つて申し上げたぢやないか、夫れに今更追從らしい。」遊「コレ〳〵年寄だてら、そりや何を云ふのぢや、與三右殿ぢやというて、追從も云はつしやれいで何と致さう、當時此の遊軒に追從せぬ者は、雪で造つた是れ此の猿松、晴與三右。」與「左樣でござりまする。」遊「今度の堤の儀も、かれ是れ小智慧の有る衆が、遊軒を嫉んで申し上げた故、暫く差控へて居る中、高札ぢやの何ぢやの、川の山のとやつて見ても、サ一人も是れぞ好い事といふ者が無い故、せう事無しに又遊軒に仰せ付けられた。爰を思へば世間に智慧の有る者は、

なる、みゆき疊を上げる、與三右衞門まへ立つうちに飛び退く。みゆき「此の手練ではナ。」與「見事、所を透さず恁う。」ト手裏劍打つ、駒下駄にて受留め。みゆき「是れでは何とござりませうナ。」與「緊りと抱へたぞ。」みゆき「エ、忝い。」與「奥へ往て休息せい。」みゆき「ハッ。」ト唄になりみゆき入る。與三右衞門鴈平を引起し活を入れる。鴈平起きて、鴈「ウ最前の女めは。」與「鴈平氣が著いたか。」ト鴈平愕り。鴈「與三右衞門樣でござりまするか。」與「遊軒殿のお歸り、迎へに出い。」與「ナァイ。」ト橋懸りより敕使辨の中將、跡より川浦遊軒長袴、乘物釣らせ家來附き出る、奥より官翁出る。官「是れは辨の中將樣、只今お歸りなされましたナ。」辨「官翁茶の湯の用意は可いか。」官「ハッ。」與「遊軒殿、只今お歸りでござりまするか。」遊「やうやく只今でござる。」與「先づお通りなされませい。」ト辨の中將上座へ直る。官翁、遊軒、與三右衞門竝よく竝ぶ。與「今日は御敕使樣、徒歩をお歩ひ遊ばされ、其許樣萬事御苦勞。」遊「イヤ左のみ苦勞な儀もござらぬが、貴殿には珍客が參つて、嘸御退屈にござりませう。」與「是れは御勿體ない。」辨「官翁、其方がいうた細工は出來たか。」官「ハッ鴈平まうし付けた細工は出來たか。」鴈「へィ疾く仕り置きましてござりまする。」ト官翁傍へ猿を持ち行く。官「中中好い細工ぢや、何と御覽じましたか。」與「御幼稚にお渡りなさるゝ故、さぞ道草でござりませう。」遊「イヤモ御覽じつけられぬ民家の手業、一段と好いお慰みでござる。」官「倅、淀川筋の巡見し召され

りの切手とり返したればとて、其の儘に家國が納められうと思ふかヤイ。」みゆき「スリヤ其の切手を差上げても。」小市「家國は立ちませぬか。」與「木幡其の高札を是れへ持て。」木「ハア。」ト高札持ち行く。與「縫之助、家國を納める功は是れぢや。」縫、みゆき「是れとは。」與「淀川筋水早き所、船にて往來する工夫致す者あるに於ては、重罪たりとも科を赦し、褒美は望みたるべきものなり。」ト向うより、「遊軒さまのお歸り。」みゆき、縫、小市「なに遊軒が。」ト行かうとする。木「コレ御敕使の守護でござりまするぞ。」みゆき「スリヤ其の切手は。」與「與三右衛門が預つた。」縫「館の内は取巻いて。」小市「一人も動きませぬぞ。」木「敕使守護の役目も了ひ。」みゆき「辨之作が所在も知れ。」縫、小市「再び本地に立歸る。」與「今宵の内に時節があらう。」木「マア夫れまでは腰元みゆき。」與「女房、著類も著せ替やれ。」木「女中奥へ。」みゆき「ハア。」縫、小市「みゆき樣。」みゆき「皆も短氣を出すまいぞ。」縫、小市「ハア。」ト木幡、小市入る。みゆき、與三右衛門殘る。與「ナニ腰元みゆき、大切なる敕使守護の遊軒殿、隨分無禮の無い樣に。」みゆき「時節までは屹度おあづけ申しまする。」與「夫れが可い〳〵、ナニ御幸、若し又時節に及んだ時、其方が手の内。」トみゆき簪にて松へ手裏劍打つ、小鳥飛び去る、鳩一羽落ちる。みゆき「豫て手練は致しました。」ト見せる。與「見事、女に稀なる手の内、併し欺すに手なし、思ひ懸け無い處を恁う。」ト打ち懸ける、莨盆にて受け、みゆき「こりや何となされます。」與「若し敵が恁うせば。」ト立廻りに

與「否そりや叶はぬ。」みゆき「そりや又何故でござります。」與「此の度男山八幡造營に付き敕使のお成り、守護する役は川浦遊軒、與三右衛門がお宿申し御馳走申す中に、些とでも過ちあれば朝敵同然、與三右衛門が手にあるうち、敵討はなるまい。」木「スリヤ此の女中は。」みゆき「花滿憲法が女房御幸。」與「將監を討つて立退いた辨之作は、所在が知れたか。」みゆき「遊軒は高位の交はり、せめて辨之作なりともと、さま〴〵に尋ねても。」與「知れまいナ、知れぬ筈ぢや、辨之作は遊軒が隱匿うて居るぞよ。」みゆき「エ、。假令朝敵にならうと儘よ。」與「家が大事か敵が大事か。」みゆき「イヤ何と。」與「敵を討つも先祖へ孝、其の家國を立てる功があるか。」みゆき「サア夫れは。」與「敵を討つて先祖を潰すか、こな不孝者めが。」縫「其の家國を立つべき功は爰にある。」みゆき「縫之助樣。」縫「與三右衛門樣、お久しうござりまする。」與「縫之助、家國を立つべき功があるとは。」縫「天下より預り奉る關西往來の切手、詮議仕つてござりまする、お受取り下され。」與「いかにも相違無い切手、慥かに受取つた。」縫「いよいよ家督の儀は。」與「立てられまい。」みゆき「敵討は。」與「なるまい〳〵。」縫、みゆき「何故な。」與「何故家は立てぬ。」縫、みゆき「サア其の切手で。」與「花滿憲法ことは鎌倉の御名代、大内へ參内し大切な御用を爲損じ、禁裏を騷がしたる科、重類を絶やせとの仰せなれども、勘當の者どもにお祟り無いは時の憐愍、川筋普請の事も徒らに、大切なる預りの切手まで盜まれ、科に科を重ねたる花滿一門、假令預

りましたかナ。」與「非人の身として刀を携へ、城外に徘徊すれば咎める筈、何故又大手先にはうろたへ居るぞ。」みゆき「ハイ此の刀が賣りたうござります。」與「なんと。」みゆき「斯樣の身と衰へ所々に流寓ひまするが、與三右衞門樣はお情深いと承りまして、此の刀を買うて貰ひませう爲。」與「アノ其の刀を。」みゆき「ハイ。」與「イヤそりや身共ではあるまい、外に買うて貰はうと思ふ人があつての事であらうがな。」みゆき「エヽ。」與「敕使守護の高家には相應の小太刀、買うて貰はうと思ひ、與三右衞門に取次を賴むのか、爾うであらうがナ。」みゆき「お目立ちまする通り外へ持つて參られませぬ此の刀、目指す處は。」與「遊軒殿か。」みゆき「ハイ左樣でござりまする。」與「爾うありさうなものぢや。」鷹「ハハヽヽ、見れば鋒先には血にて鏽腐つてある鈍物、旦那遊軒さまに賣らうとは、こな大騙賊めが。」みゆき「莫邪が刀も持手の手の内、刀の鏽も見苦しけれど、血汐の無念の血の落さぬが、すぐなる心の亂れ燒、些とお目には入りますまいけど、すはと云はば何方でも何奴でも斬りかねぬ業ものでござります。」與「見事々々、爾う見ゆる／＼。」ト此の閒縫之助、小市出て見て居る。鷹「頤の過ぎたどら乞食め。」ト立廻り鷹平を當てる、見得あつて止る。與「その刀是れへ持て。」ト見得あつてみゆき與三右衞門に渡す。篤と見て、「鋒先の血、さぞ無念であらうナ。」木「女中、シテあの刀の價は。」みゆき「金銀に望みはござりませぬ、其の價は。」與「身が屋敷に奉公ののぞみか。」みゆき「ハイ左樣でござります。」

まするえ。」與「サア此の樣な雪の夜には、得て盜賊押込などの徘徊する物ぢや、ヤイ目に懸らばナ命がないぞ、サア時節を待つて、見付けられぬ樣に隱れたら可からう。サア何者も此邊に居らねども、大方雪に隱れさうなものぢや。」ト縫之助小市囁き又隱れる。木「何がいナ。」與「アレ／＼庭の樹木が大方雪に隱れさうなもの、オ、夫れが可い／＼、ハテ入込んだなア。」ト橋懸りばた／＼にて、鴈平「サア非人め出さぬか／＼。」みゆき「アイ何にも隱した物はござりませぬ。」鴈「まだ／＼うぬが、今隱した物出さぬか／＼。」木「ヤイ鴈平、聲高なそりや何事ぢや。」鴈「只今旦那を迎へに大手先へ參りましたる所に、此の非人めが何やら合點行かぬ面構へにて御城内を窺ひまする、篤と心をつけますれば刃物を隱し持ち居りまする、夫れ故の詮議でごわりまする。」木「非人の身として刃物を隱し持ち居るとは、ハテ合點の行かぬ。」鴈「サア非人め出せ。」みゆき「何にも隱した覺えはござりませぬ。」鴈「出さねば恁う。」ト少し立廻りにて、みゆき刀ひらりと拔きさし付ける。みゆき「隱されるだけは祕みますれども、斯樣にお目立ちまする上からは、祕みませう樣はござりませぬ、いかにも御覽の通り、恁く非人の身となり下りましても、家に傳はる此の刀。」ト少し見得あつて、鴈「但し又非人は刀を所持致しまする事のならぬ者でござりまするかナ。」與「非人の女是れへ參れ。」みゆき「ハイ。」トつか／＼出で、「與三右衞門樣。」與「ヤイ／＼女、つひに見た事も無い見苦しい女、必ず麁相云ふな。」みゆき「ハイ、御用でござ

の身はハテ變つた身ぢやなァ、宮翁殿何と茶の湯にも斯樣の物が要る事でござりまするか。」宮「お花畠の茶の湯の稽古致さねばならぬ。」與「イヤ宮翁殿、此のつれない君とは如何いふ君ぢや承りませう。」宮「イヤ與三右殿、大切な御敕使饗應の茶の湯、殊の外取込みまする、後程お目に懸りませう、ハァぢやて〳〵〳〵。」與「イヤコレ此の無情い君は如何ぢやぞいなう。」宮「ハァぢやて〳〵。」ト云ひ〳〵奥へ入る。與「ハァ、、、、。」ト此の内門の際に縫之助、小市出て聞いて居る。木「テモ扨もマア好い氣味な事でござりましたわいなう。」與「されば〳〵、年には寄らぬものぢやてなう。」木「左樣でござりまする、イヤア其の文私に下さりませ、今一度耻搔かしてやりまするわいの。」與「イヤ廢しにしやれ、遊軒殿の耳へ入つても可くない事ぢや、廢しにしやれ〳〵。」木「イエ〳〵左樣ではござりませぬ、云はねば私が胸が濟みませぬわいなア。」ト與三右衛門兩人を見て、與「ハテ味に入込んだな川浦遊軒は淀川筋に七里半の堤を築き、往來自由の普請承ると雖も、川筋を船にて往來する工夫致す者あるに於ては、重罪たりとも科を赦し、恩賞は望み次第との仰せ、與三右衛門承り其の高札、サ家を立つべき綱もと樣々に心は盡せども、遊軒が計らひにて獅子飛を切り落したれば、淀川筋の水高うして、中々船にて往來する事思ひも寄らぬ、サ家を立つべき功も無くして、敕使守護の遊軒に刃向ふは朝敵も同然、與三右衛門が城にある内は叶はぬ事〳〵。」木「イヤ申し、夫れは何事を御意なされ

し先刻にから如何もなる事では。」與「コレ〳〵奥へ今日は遊軒殿の御親父官翁殿、御救使へ茶を差上げらるゝ、かこひの花も念入れよと吩咐けたが。」木「イヽエイナ、先刻にからあの老爺めが。」與「ハテ扨人には目も耳も無いと思うて居るか、何事も聞いても居る、又知つても居るわいなう。」木「スリヤ先刻にからの事はよう御存じ。ハヽヽヽ、わたしや御存じあるまいかと思うて、ひよつとお疑ひでもあらうかと存じまして。」與「ハテ女といふ者は、味な處へ氣の廻るものではある。」ト官翁そろ〳〵入らうとする。與「イヤ官翁殿でござりまするナ。」官「これは〳〵與三右殿、此の間はいかいお世話になりまする。」官「イヤ其許には今日は御苦勞にござりませう。」官「左樣にもござらぬてや。」與「イヤ官翁殿、手前共は篤と存ぜぬ事ながら、茶の湯と申すものも、樣々手前のある事さうにござるナ。」官「何とござるやら。」與「先づ慥う手を上げまして、其處を慥う緊め付けますか、是れに挨拶がござる、其の挨拶には其の樣に年は取つたけれども、いでさらば力づくと云へば、若いもの五六人前も働く、人が何と侮つたとて、此の力瘤で此の力瘤で〳〵、ハヽヽヽ。」官「イヤ與三右殿、手前左樣な茶は存じませぬ。」與「官翁殿其許にはもうお幾歳におなりなされまする。」官「拙者七十六に罷りなりまする。」與「七十六。七十六で五六人前とは、ハテ達者な事でござるナ。」官「何とござるやら。」ト與三右衞門狀を拾ひ取り、與「情ない君樣參る及ばぬ身より、情ないとは獨旅のことか、及ばぬ身、此

宮「マァ一寸立たつしやれ。」木「アイ〳〵。」宮「其の兩手をぐつと上げた〳〵。」木「アイ恁うでござりまするかえ。」ト手を上げる。宮「ソレ〳〵爾う手を上げた所を恁う緊め付けたものぢや。」ト戯る。ふり放し、木「あなたとした事が、こりや何事をなされまする。」宮「ハア茶を教へてやりまする。幸ひ四邊が靜かなれば、此邊で一服呑みませうか。」木「是れはマァあなたとした事が、ひよつと人に知れたら何となされまするえ。」宮「何の人に知れる物で、此の間より何處ぞでば〳〵と存じて居つた、此方へ心中と存じ、此の文認めて置いた、是れ見て返事下され。」ト狀を懷へ捻ぢ込み傍へ寄る。振放し、木「是れはマァ、お前樣は御本性でござりまするかえ、さうして好い年をして。與三右衞門といふ夫のある身の上でござりまするぞえ、夫れにマァ。情ない君樣參る及ばぬ身より、ォ、厭らし。」ト投げ付ける。宮「年寄々々と云うて貰ひますまい、此の樣に年は寄つて見ゆれども、いでさらば爰だと思へば、若者五六人前も働くてや、無情い君よ、幸ひ四邊は靜かなり、爰らあたりでも隨分」ト又戯る。木「放さぬのか放さぬか。」宮「放さぬ〳〵、私や何ほうでも放しやせぬ。」木「年寄だてら力が強うてとても叶はぬ。」宮「この力でまさかの時を推量なされい。」木「申し遊軒樣へ申し付けるぞえ。」宮「遊軒は愚か、與三右に云うても大事ない、如何したとて放すものか。」ト與三右衞門最前より出て聞いて居て、宮翁を執つて抛る。宮「是れは強い力ぢや、其の強さでは。」ト見て恟り。木「エ、好い所へ、申

寄つて久しく蹲つて居れば、腰も膝もめり〳〵と、ア、いかう冷えまするて。」木「左樣でござりませうとも。」宮「ちとそれへ參つて寛ぎませう。」木「サア是れへお出でなされて、御休息なされましたが可うござりまする。」宮「左樣致さう、さて〳〵草臥れた〳〵。」ト向うへ出る。木「お道理でござりまする。」宮「イヤ又恁う見渡した處は如何も云へぬ。」ト若い臺詞にて云ふ、木幡と顏見合はせ。宮「イヤなに御內所、此方の夫與三右衞門殿の、いかい心遣ひになりまする。」トおやぢ方にて云ふ。木「これは〳〵御挨拶でござりまする、夫與三右衞門殿は天下より此の城を預り居られますれば、天下の御用は則ち手前の勤め、さのみ氣苦勞にも存じませぬが、御敕使樣のお供なされまする遊軒樣お前樣、嘸氣苦勞に思召しませうナ。」宮「倅遊軒がことは、淀川筋巡見致さねばならぬ故、さのみ屈託にもござらねども、どうで參らねばならぬ身の上、又身共が事は茶に事慣れたとあつて、御敕使へ茶を差上げる樣にとの事、高位高官に差上げるは、イヤもう氣が張つてなるものではござらぬて。」木「左樣でござりませうとも、去りながら茶に妙のあるお前故、高位高官にもお附合なされまする。ほんにマア私等も姫御前ではござりますれども、茶の稽古致したうござりますわいナ。」宮「夫れは好い心懸け、ちと稽古さつしやれ敎へて進ぜう。」木「そんなら敎へさつしやれて下さりませうかナ。」宮「いかにも敎へて進ぜう、併し茶といふものは、いかうむづかしい物でござるてや。」木「左樣でござりませう。」

す、身共は旦那遊軒様の御意で猿を拵へて居る。おのいらが差配は頼むまい、がた〱頤利くと頤引裂いて了ふぞよ。」雁「わりや見事頤引裂くか。」雁「望みなら引裂いて遣らうか。」今「引裂かるゝなら引裂いて見よ。」雁「引裂いて見せう。」ト聒しう云ふ、小幡裲襠にて奥より出る。縫之助、小市囁き入る。木「ヤイ〱騒がしい何事ぢや。」雁「さればでござりまする、此奴らが私めが事をがいに誹ります、夫れ故喧嘩でござりまする。サアうぬ等何とか云うて見ぬか。」木「ヤイ〱仲間ども、此の度八幡御造營に付き、禁廷より御敕使がお立ちなさるゝ、其の守護として川浦遊軒様、親御官翁様此の所に御逗留、萬事麁相の無い様に吩咐け置いたが、若し過失あつては夫與三右衛門殿の無調法になるが、嗜め〱。」奴二人「段々誤り入りましてござります。」雁「何とえらいものであらうがナ。」木「其方達は了うたら休め〱。」二人「ない〱。」ト入る。官翁「雁平々々」雁「ナアイ。」官「倅遊軒はまだ歸らぬか。」ト愚癡なる老爺方の臺詞にて云ふ。雁「今日は旦那遊軒様には、淀の景色御遊覽とあつて、御敕使諸共お出でなされてござりまする。」官「然らば追付け歸るであらう、汝ははやく迎へに行け。」雁「ナイ〱、小幡様、お迎へに往て參りませう。」木「大儀ながら早う往てござれ。」雁「ナイ〱。」ト入る。木「是れは〱官翁様にも、冷えまするのに其の様になされずとも、マア些と御休息なされましたが可うござりまするわいナ。」官「何ぼ冷えても爐のたぎりで、差して屈託にもござらぬが、年

第四幕目　淀屋三右衛門屋敷の場

役人替名

一敕使辨の中將　粂松
一奴鳫平　貫藏
一與三右衛門女房木幡　才藏
一みゆき　大吉
一縫之助　三十郎
一小市　東助
一仕丁、侍等數人

一傾城總角　金作
一與三右衛門妹きてふ　小伊三
一はたの宮翁（本名辨之作）　治郎三
一神道源八　文七
一川浦遊軒　大五郎
一淀與三右衛門　四郎五郎

〇

造物向う金襖二重舞臺、家體入込大名屋敷の體、好みあり。橋懸りに城の櫓少し見える。中門は橋懸りに縫之助小市、白き兜頭巾裝束にて窺ひ居る。高札あり白梅盛りの體。總一面に雪降りの體、棒の官翁下座の家體に總白髪茶を立てて居る、向うに奴鳫平雪にて猿を造り居る。琴唄にて幕明く。奴二人竹帚にて掃除して居る。

奴〇「ナントやか内、甚に冷たい事ではないか。」　奴△「冷たい段か、おけすへから腦頭まで縮み上る樣なわいの。」　〇「此方も遊軒樣の奴なら、此の樣に冷たい目はすまいものを。」　△「したがあの樣にほだえかくると機嫌を損うて、えては笠のだいが落ちるものぢやてや。」　鳫平「ヤイ／＼汝等はソリャ何を吐

「昔の意趣があるなら、汝が存分にして、跡で御朱印の所在を云うてくれ、頼む〳〵。」平「オ、可い推量、スリャ俺が存分になるか。」源「源八も武士だ、二言は無い。」平「そんなら奴を憑う〳〵。」ト蹴倒し蹈み付ける。源「サア存分になつた、云うてくれサ。」平「イヤ〳〵まだ這様こつちやない、ずつとえらい事がある。」源「まだ存分にならざ、サア如何樣ともせいサ。」平「奴を憑うして〳〵。」ト下駄にて顏を蹴り蹈み付け唾を懸ける。「われは武士でないか、顏を灰吹にされても無念には無いか、へ、、、、、、張合の無い奴。」源「ハテ抵抗せぬと云ふからは、なんの構はう、存分にしてくれ。」平「まだ存分にや爲足らぬ。」源「まだ存分にや爲たらぬか、此の上の存分は。」平「汝を存分には憑うする。」ト切り懸ける、傘にて留め、源「其の存分許りは得ならぬ。」平「ならねば憑うぢや。」ト立になり源八、平太が衣裳の紋を切る。朱印出る。ト平太拋る、柳の枝へ懸る、高塀よりおふね見て居る。源「ハテ變つた所に隱しをつたな。」平「平太が定紋は、何時でも御朱印ぢやと思うて見よ。」源「もはや御朱印の所在が知れるからは、此の儘では置かぬ覺悟せい。」平「最早あれが出たらしよ事が無い、奴を殺す覺悟せい。」ト唄になり、是れよりどろ〳〵になり、つまり平太を殺す、曉六つの鐘鳴る、岩乘搦みの駕籠の繩を切り、内より縫之助、總角出る。縫「源八。」源「若殿樣。」ふね「ソレ往來の御朱印。」源「忝い。」平「それを。」ト源八ポンと切る。源「御座りませ。」ト幕。

言吐すと首が飛ぶぞ。」平「コリヤ〳〵。急の道、駕籠の損じ賃は如何程なりと遣はす、早くやれサ。」昇「左樣なら可うござります。」ト向うへ往かうとする、向うより源八駕籠の鼻を押戻し本舞臺へ來る。平「源八か。」源「平太か。」侍「うぬ。」ト提灯切り落す。皆々逃げ入る。花道へ追うて行き本舞臺へ戻る。源「其の後は逢はぬが、最前はいかい世話であつたなア。」平「汝がこゝへ來たは、二人の奴等取返しに來たか。」源「マア那樣もの。」平「いかにも戻してやろ。」ト駕籠の傍へ拔いて差付ける。源「コリヤ〳〵逸まるな、麁相すな、汝には只一言云ひ聞かす仔細がある。逸まるなマア待てサ、是れ此の一通は最前其方が懐中より落せし一通、此の内に、往來の御朱印は其許の所持なさるべくとあるからは、其方が手にある筈、此の往來の御朱印、若殿の御手よりお上へ差上げねば、盗賊の惡名が拔けぬ、汝も以前お主の事ぢや、私同士の意趣に主の大事は替へられぬ。爰を何卒聞き分けて、其の御朱印の所在を云うてくれ、武士が手を下げて賴む、聞き分けてくれいサ。」平「汝はおぞい者ぢやな、爾うやはらで出たら返してくれうと云ひたいがならぬ、儕には常から意趣のある奴ぢや、いかにも往來の御朱印は俺が手にあるが、返す事ならぬと云うたら、汝切らざなるまい、切つては水の泡、そんなら助けて置いて云はさうと思ふか、此の平太が目の黑い内は金輪際云ふ事ならぬ、サア切れ〳〵、サア切れ拔けヤイ。」源「ハテ扨今云ふ通りの所存、何の爾ういふ氣は無い、抵抗せぬといふ證據。」ト刀拋り出し、

より源八出る。 源「鼠殿、女房共。」 ふね「まんまとお前に仕立ててやりました。此の一通は最前平太が懐から落した一通。」ト源八讀んで見て、 源「スリャ此の一通があるからは、御朱印は平太が所持して居るか、此の樣子を若殿樣へ。」ト長持の錠を捻ぢ切り明けて、 ふね「ヤア此の長持の内が切り拔いてござんす。」 源「内が切り拔いて有るとは合點の行かぬ。」ト花の非出で、 花「コレ〳〵おふね殿や、こなさんが平太の傍に附いて居よと云はんした故、引添うて居たればの、總角樣を引連れて裏道から逃げて去んだ。」 源「ナニ總角樣を引連れて去んだとあるからは、若殿樣も平太めに出し拔かれたか無念なア。」 花「まつと先でござんした。」 源「程は行くまい。」 茂「壻殿。」 源「女房共。」 ふね「是れが近道。」 源「合點ぢや。」ト尻褰げ入る。唄になるト、

返し

造物向う黑御簾、柳の幹あり、東大臣柱に出口の門あり、雨降りの體。侍提灯燈し駕籠一挺總角、縫之助乘せ出る。跡に平太合羽傘足駄穿き出る。

昇夫「申し旦那、どうぞ桐油を懸けさして下さりませ。」 侍「大事の急の用事でお歸りなさるゝに、小

の事、家來ども其奴縛れ。」侍「腕廻せ。」權「滅多無上に廻せ〳〵と何の事ぢや。」記「卑怯な源八、是非あらがふとてもあらがはせぬ確かな證據があるぞ。」權「證據、面白い。」記「家來共最前の繪圖を出せ。」權「何ぢや繪圖ぢや、サア合はして見た〳〵。」ト家來繪圖を出し合はせ。記「年の頃三十年、眼小さく。」侍「寸分も相違はござりませぬ。」記「うぬ是れでもあらがふか。」權「ア、コレ〳〵〳〵何の事ぢや。」記「右の腕には鐵砲傷あり。」侍「出せ。鐵砲傷が確りとござりまする。」記「左の腕にはみふね命と入痣あり。」侍「御ふね命と確りとござります。」記「其奴縛れ。」侍「畏まりました。捕つた。」ふね「コレこちの人、入痣から顯はれたかと思へばわしや悲しい。」權「何吐す。」記「家來ども引立て。」侍「うせう。」與「コレお家さん旦那さんに。」茂、ふね「シイ。」與「今の佛さんの命日には、何ぞ旨い物を拵へて進ぜてくださんせえ。」茂、ふね「かはいや。」ト茂治兵衛、おふね顔見合はせ。「お痛はしやなア。」記「ソリヤ兩人を引立てい。」ト唄になり、侍「うせう」茂「ハア、。」ト泣く。權「うぬら。」侍「きりきりうせう。」權「マア〳〵待たんせ、コレわりや俺を太郎に懸けたなア。」侍「うせう。」記「うせう。」權「マア〳〵待て、よう山を見せなんだな。」侍「ハテ、うせうてや。」ト花道へ入る。茂治兵衛、おふね跡見送り、茂「まんまと是れで遁れた。」ふね「コレ是れは最前平太郎が懐より落した一通。」ト茂治兵衛讀んで見て、茂「是れはマア結構な物拾やつたの。」茂、ふね「ア、嬉しや〳〵。」ト兩人拜む、押入

入る。記内家來大勢連出て、 記「平太郎樣、平太郎樣は何處にござります。」ト屏風の内を見て、「ヤアうぬは最前の遣手、誠は源八が女房ぢやよな、ソリヤ家來ども。」侍「やらぬぞ。」權「ア、コレ〳〵、やらぬとは何の事ぢや、一ツも覺えは無いが何の事ぢや。」記「ヤア奴は神道源八ぢやよな。」權「イ、エ神道ぢやござりませぬ、門徒でござります、喃女房共。」記「うぬ其の女と共々寢て居るからは源八に違ひは無いぞ。」權「コレ〳〵こちの人、女房は女房ぢやけれど、たつた今ぬく〳〵の女房ぢや、云譯をして給いなう。」 ふね「コレ〳〵お前は源八ぢや無いワサ、源八ぢやないさかいで、何處へ出ても源八ぢやないと云拔けて下さんせ。」記「女房が云ひ敎へるから、愈源八ぢやソリヤ。」侍「やらぬ。」ト内より茂治兵衞、與九郎に繩かけ出る。茂「ハイ舅の者でござります。」ふね「ア、コレ〳〵父樣、お前は三代相恩のお主に繩懸けるとは、大惡人ぢやなア。」茂「コリヤやい、今時は名を取らうより德を取れぢや、夫れ故縫之助殿に繩懸けて渡す、そんなら此奴が源八か。」ふね「ア、コレ〳〵、お前の口から主を源八かと云はしやんしたからは、もう顯はれたかハア嬉しや。」權「何の事ぢや。」與「コレ〳〵源八、此の樣な淺ましい縫之助が姿と思うて、見限つてもう叶はぬ、三世のきえんを結べいヤイ。」權「何の事ぢや、こりや皆氣が違うたさうな、阿呆め、うぬは那樣ことを何處で習うて來をつた、祭のばんじりに雇はれたと思うてけつかるさうな。」記「縫之助最前は能く贋者を摑ました、夫れは追つて

サアサアお突きなされ〳〵、とんと鳴神が呆れる。」ふね「そんなら御ふね命と彫るぞえ。」ト合方、此の内、權九郎色々思入あるべし、此の間ほり〳〵臺詞云ふ。ふね「お前は大分強いわいな、アハヽヽヽハ。」權「何の此の位の事は朝飯の茶漬ぢや、私がまへ喧嘩したが知りやるまいの。」ふね「イヽエ知らぬわイナ。」權「何が大勢、向うは拔身を持つて俺に切り懸る所を、手を出すは邪魔ぢやと思うて、天窓でかう受けたぢや。」ふね「ハテなア。コレ爰が大事の辛抱所ぢや、かう〳〵〳〵して係うするともう可い、扨も仰山な。」ト早う突く。「ソレ見やんせ好う出來た。」權「ムウもう終ひか、おれや又まだ些と長いものかと思うた、サア約束の通り。」ト奥の一間へ入り唐紙を締める。ふね「マア〳〵待たんせ、まだ肝腎の事があるわいなア。」權「まだかいナ。」ふね「ハテ祝言の杯せねば、馴合女夫になるわいなア。」權「杯はあとへ廻す。」ふね「幸ひ爰に酒がある。」ト火鉢の燗鍋に手を添へて、「オ、あつ、是れはきつう通つたさうな。」權「何の熱い事があろ。」ト取りにかかる。「あつゝ〳〵オ、あつ。」トおふね鼻紙に挾み酒をつぎ。ふね「サア私から獻すぞえ。」ト權九郎受けて手へかゝる。權「あつあつゝ。」トおふね燗鍋を權九郎が右の肩へあて、二人ながら轉ける、色々可笑味あり。ふね「サア是れで可い。」權「フウかたみうらみのない樣にしたものぢやな。」ふね「コレ此の羽織を著やんせ。」ト源八の羽織著せる。權「何ぢや可笑しい物著せやるの。」ふね「是れでとんとこちの人。」權「女房共。」ト連立ち屛風引きながら

引かうか股突かうか、そもじ故なら如何なりとするわいなう。」ふね「イエ／＼那様仰山な心中は要らぬ、お前の體へごくいが打ちたい。」權「何のごくいとはや。」ふね「ハテお前は人に勝れて好い男、若し餘處の女子が惚れると腹が立つ。それでお前の腕へ入黑子をしたい。」權「ムウ入黑子は夫れは心易い、明日でも内でして來う。」ふね「ア、那樣水臭い、爾う云うて欺そてな、もう／＼心底の知れた、ドリヤ奥へ往て。」ト往かうとする。權「ア、コレ／＼氣の短い、するわいなう。」ふね「そんならサア爰へごんせ。」ト硯箱出し、權「何とする。」ふね「ハテ知れた事おふね命。」ト唄になり左の腕に書きにかゝる。權九郎身を縮める。「ハテ臆病な、まだ書くのに何の痛い事であるぞいナ。」ト御の字を書く。權「ア、コレ／＼、そりや御の字ぢや、ついいつものおの字を書きやいなう、文盲な人ではあるほどにの。」ふね「お前は強う私を安うさんすの。」權「何故に。」ふね「ハテ私はお前の女房、女房ぢやに依つて御の字を書くのぢや。」權「扠は我等が爲の御ふねといふ心か。」ふね「アイ。」權「もつとも。」ト書く。ふね「是れで御ふね命、ア、針がない鈍な事ぢや。」權「針が無くば明日の事。」ト權九郎がねつけのさすがをおふね見て、ふね「イエ／＼幸ひ好いものがある、此の小刀で。」權「ア、コレ／＼、如何に女子の物を知らぬというて、小刀で入黑するといふ事があるものか、神武以降忘物ぢや。」ふね「そんなら措かんせ、ドリヤ奥へ往て。」權「ア、是れさても氣の短い、サアそんなら入黑した跡は今のぢやぞや、

「おふね〳〵コリヤ。」ふね「エ、權九郎さんか。」權「權九郎さんぢやが、今汝はおれに逢ひたいと云うておこしたが、何ぞようがあるか。」ふね「アイ。」權「何の用ぢや。」ふね「權九郎さん。」ト思入あつて、「強う冷えるなア。」權「かまふな。」トぜうらくかく。ふね「ドレ火鉢上げよか。」ト火鉢をそばへやる。權「つひどない事ぢや、ドレあたつてこます。」トおふね色々思入あり、權九郎見るやうで見ぬこなし。ふね「ア、コレずつと冷えるけれど、滅多に火鉢へもあたられず。」權「コレ爰へ來てあたつたが可いわい。」ふね「大事ないかえ。」權「何の誰が呵る者があつて。」ふね「そんならあたろ。」ト傍へ寄る。權「オオさむ、テモ寒い事ぢや。」ふね「權九郎さん、酒飲まうぢやあるまいか。」權「飲まう〳〵幸ひこゝにある。」ト酒銚子を取つて、「燗にやる事は面倒な。」ト火鉢の上へ懸ける。ふね「權九郎さん、お前はアノ私に何の彼のと云うて下さんすは、マア定か譃か夫れが聞きたい。」權「譃かとは曲がない、もう〳〵もう〳〵天邊から足の爪先へこたへて。」ふね「イエ譃ぢや譃々、よう私がうか〳〵と乘らうかいなア。」權「ほんに〳〵強いほんに。」ふね「云はしやんすな、お前がほんのことなら、私はほんの男があるといふ名ばかりで後家同然、言ふ事聞かいで何とするもので。」權「それは夢では無いかいなう、そんなら御意の變らぬ内に早う〳〵。」ふね「ア、忙しない、まだ些と云はねばならぬ事がある。口でばかり爾う云はんしても、男の心と飛鳥川と、よう云ふぢやないかいなア。」權「そんなら心中見せうか、腕

とおりや死ぬるぞや。」總「サァ夫れは。」平「オ、死にたくばいつそ打殺して。」ト引廻す。おふね總角を突放し、縫之助を中へ圍ふ。ふね「ソレ總角さんを渡します。」平「ヘ、、、、餘程こたへたさうな。」ふね「引替にするからは、云分はござんすまいがナ。」平「總角さへ渡せば何奴も此奴も緩めてやらう。」ト長持へ縫之助を引立入れ錠卸す。兩人「是れは。」平「まだ強ばつて居る總角、ウンと言はした上で此の鍵渡さう。」ふね「總角さん常磐御前を知つてぢやあらう。」總「わたしや死ぬると云うても」平「抱かれて寢ぬとたつた一突き。」ト刀逆手に持つ。ふね、總「ア、コレ。」平「ウンといふか。」總「サア如何なりと。」ト泣く。平「奥へ往て抱いて寢よう。」ふね「其の上で其の鍵も。」平「欲しくばやらう、うぬ。」ト源八方へ往かうとする、おふね枷になる。「ハテ命冥加なうじ蟲め。」ト平太、總角を引立て奥へ入る。唄になり源八奥へ驅け込まうとする、おふね執付き、ふね「コレ今奥へ行くと總角殿に凶事が出來る、殿樣が生きてはござらぬぞや。」非人「お尋ねの源八見付けたぞ。」ト走り入る。源「南無三。」ト往かうとする。「コリヤもう網を張つたわいなう。」ふね「こちの人私が思案は。」ト囁く。源「出來た、そんなら俺は。」ト囁き入る、與九郎出る。與「お家さんアノ、ヤァお前は旦那さん。」ト口に手を當てお舟囁く。「ウン／＼呑込んだ。」ふね「とつさんに早う。」ト紙入ひろふ。「こりや最前平太が懐からおとした紙入、此の一通は。」ト讀んで見て戴き居る。權九郎出る。權「お舟／＼、何處へ往た。」ト出る。

無い何處へか隱した、サア眞直に。」ト平太、縫之助が首筋執つて捻ぢ付け、平「うじ蟲めがうぬ、おのい等が手に觸る所に置いて可いものか、川浦平太は一國の大名、其の大名の懷中を家搜しして、うぬ盜みをひろぐか。」ト捻ぢ付けて振り廻し、「此のやうにされたら、何處ぞの溝蟲めが面を出しさうなものぢやが。」　ふね「御朱印の知れぬ内は、滅多に顏も出されまい。」平「總角心に隨へヤイ。」總「エ、此方はなう。」ト泣く。　平「ヤイ溝蟲め、やいうぬが總角に腐り付いてけつかるゆゑ、身が戀の妨げ、どこぞでは〳〵と思うて居たが、爰へ出たは百年め、思ひ斷りました總角を上げませうと、吐しをらう吐せやい。」ト色々にじり付ける。ふね「出まい〳〵、ハテ總角さん出やしやんすな。」平「出たが最期しやぶりとから竹割ぢや。」縫「エ、汝はなア。」平「汝とは〳〵、エ、生白けたしやつ面、こゝを打つて遣らう。」ト縫之助が眉間へ傷付ける。總「ア、コレ。」トおふね留める。平「出たが最期、朱印は消えて了ふ、出て見ぬか、コレ慿うするが出て見ぬか。」トこづく。「ハヽヽヽ好い人質が出をつた。總角厭なら抱いて寢ようとは云はぬ、其の代りに此奴をつまみ殺すぞよ。」總「サア夫れは。」平「出さうなものぢやがナ。」縫「コレ〳〵必ず俺を庇うて、此奴が心に隨うて給んなや。」平「吐した面はいの、此の樣な目に逢うてもまだ頤の減らぬ、すそびんばふのはつた二才めが、骨も皮もごた〳〵になるやうに、うぬを慿う〳〵。」ト捻ぢ廻し色々あり、無理に蹈み付ける。縫「もういつそ。」縫「隨がやる

れた鼠同然、彼處の隅爰の押入の陰に隠れ廻るのら犬めが。」ふね「サア犬と云はうが猫と云はうが、爰へ出ては彼の衆、イヤサ主に別れて彷徨ふ様な、人が何の此邊に居てたまるものか。」平「イヤいふまい關口平太神道源八と、互に兵術を爭ふ程の奴が、うぬが主の國を横領せられて、あんけらひよんとしてけつかるはどう腰拔め、爰へ出て平太へ鬱憤を云はぬか、アノ篦棒めが。」ふね「サア腰拔と云はれうが何と云はれうが、大切な願ひがあるぞえ。」平「爾う吐すは平太が所持して居る廻船の御朱印の事であらう。」ふね「エヽ。」平「そりや世話燒くな、俺が持つて居る。」ふね「エヽ。」平「可愛や、どの様に働いても知れぬ所に、たぼ〳〵して置いた、平太に一寸でも傷が付けるが最期、朱印は天へ飛んで了うて、マア此の界には無いぢや、ようしたものか、爰へ出て平太と勝負して取返さぬか、取返して見ぬか、こりや何ぢや、ハア飾つた二ツの位牌は左右衛門と將監が位牌かェ、あた忌々しい。」ト蹴飛ばす。ふね「サア〳〵、爰をぢつと耐へねば役に立たぬ、是れはしたり總角様どうぢやいナ。」平「ヤイ奴が主の位牌ぢやぞよ、其の位牌を平太が蹈み躙るが、無念にはないか、口惜しうはないか、口惜しくば爰へ出て平太と勝負せい、出あがらぬか青蠅めが。」ト縫之助中二階より走り出で、平太が胸倉執り、縫「ヤイ汝が爲にも主の位牌を土足に懸けて、恩知らずめ、さうして御朱印も汝が盗んだナ、サア出せ、汝出さぬとて出さずに措かうか。」ト平太默つて居る。懐を捜し、「こりや懐には

と未來へなるものぢや、其方に別れて私や何とせう。お松、も一度物云うてたも、知らぬ事とて殿樣に、逢ひたい〳〵と云うて暮したを、逢はしたら可かつたもの、お松堪忍してくれいこらへてたも、かはいや〳〵。」ト大泣き。　總「今までは心中を、立てる〳〵と思うたが、女の意氣地はお松樣お前に負けた、未來は必ず女夫になつて下さんせ、いとしや〳〵。」ト此の臺詞の內橋懸りの屛風開く。平太卒塔婆を持ち聞いて居る。　源「泣いたとて悔んだとて歸らぬ事、兎にも角にも殿の御先途を見屆くるこそ娘が追善ぢやかや。」　ふね「アイ。」　縫「せめて佛間に廻向がしてやりたい。」　源「憚りながら夫れは望みまする所でござりまする。」　ふね「あの子が肌身に付けた著物、せめて貴方の手で。」ト渡す。縫之助取つて抱き緊め。縫「可愛や〳〵。」ト平太と顏見合はす。おふねちやつと源八を押入の內へ入れる。縫之助は中二階へ上る。おふね思入あり、屛風の方を見る。平「エ、。」ト卒塔婆を蹈み折る。總角を引捕へようとする。ふね「こりや何さしやんす、揚詰の內は指も差させぬと云ふのに、物覺えの惡いおさんではある程にの。」　平「汝は男に生まれ勝つた者ぢや、出來すわいやい。」　ふね「其の樣にもござんせぬて。」　平「神道源八が女房。」　ふね「エ、。」　平「夫が逃げ廻る故、嘸不自由にあらうナ。」　ふね「ハ、、ハ、一ツも覺えの無い事を。」　平「わりや源八が女房ではないか。」　ふね「源八とやら源七とやら、那樣者は存じませぬ。」　平「へ、、、知らぬであらう、何處ぞ其邊に居さうなものぢやが、正眞の猫に追は

は何の事ぢやいな。」總「殿さんお前までがどうでござんすぞいなア。」ふね「此の著物はお松が、血だらけになつて、こちの人、たつた今まで無事で居たお松が。」縫「俺が事を思うて、今まで姿を見せたのは、幽靈であつたわいなう。」ふね「エヽ。」源「其方が身の上娘が事、與九郎が話で備に聞いた、何者とも知らず渡場に於て、娘が生膽を取つたとある、戌の年戌の月戌の日に誕生したる女の生膽に、白髮を合はせ用ゐれば、忽ち白髮となつて相變るとあり、正しく敵の所爲、其方にも此の事云ひ聞かさんと來て見れば娘が面影、殿の事を戀慕ひ、未來の緣を結んで貰ひたさに、此の世の緣は總角殿、子に迷はぬ親は無いわいやい。」縫「夫れ程にまで俺がことを思うてくれる志わすれ置かぬ。此の世は僅か未來では、永う夫婦になつて遣らうぞよ。」ト總角泣く。おふね振袖を持ち色々身に添へ泣く。ふね「母樣、傾城になつて居るのに、此の櫛は小さうて惡い、もそつとむねの高いのを買うてくれいと云うたを、何を榮耀らしい、母も此の樣に金遣ふのは大抵苦しい事か、忠義にする勤め奉公、榮耀者と呵つたれば、殿樣が今でも見えた時に、わたしや惡うござんす、何卒すゝきの兩ざしを買うて下さんせ、殿さんは此の樣な風がお好きかいなアと、死んで居ながら修羅の迎へは苦にもせず、經念佛の一遍も聞かず、粧ひ化粧や頭髮の飾り、唄三味線を心懸けたは、殿樣に添ひたい〳〵と、思ふ心の念力であつたか、我が身の子よりも可愛うて、ついぞ肌を放した事も無いもの、姉さんへの言分は、何

御免されて下さりませ。」ト二階の障子明く。中二階にて茂治兵衛鉦打つて廻向して居る。ふね「姉さん嘸其の時は口惜しい最後でござんせう、お氣遣ひなされますな、身醢になるといふても、殿様の仇お前の敵、追付け討つて修羅の苦患を助けませう、お松が事は氣遣ひせずと、草葉の陰から見て下さんせ、其の代りには源八殿は貸して下さんせ、未來は三人一つ蓮でござんすぞや、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」縫「よその無常を告げるやら、心寂しき一ツ鉦。」源「幸ひの追善供養、サア總角様二世までの固めの杯、殿の位牌の前で縫之助様と夫婦の杯。」總「エ、夫れではお松様が。」源「其の松めが事を、志に預つた故の祝言、此方は本妻。」ふね「其の代りには、お傍になりとも娘が事を。」源「祝言の謠はあの念佛。」ふね「お酌致しませう。」ト唄になり祝言する。源「御朱印の盜賊は、慥かに平太とは睨んだれども、何を是れぞといふ證據も無し、迂濶にかゝらば御朱印を、土灰にもなさば永々お家は埋木、見出すまではと今日まで郭へ入込めども。」ふね「慥かに是れぞといふ證據も無し。」源「女房、序に此の戒名に廻向して置け。」ト戒名を出す。ふね「山巖喜響信女、此の戒名は。」源「娘松が戒名。」ふね「エ、。」源「お松は死んだわいやい。」ふね「エ、。それに又先刻に父様が。」ト二階より茂治兵衛顏出し、茂「聟殿。」源「舅殿。」茂「先へ來て居やつしやるの。」源「疾く參つた。」茂「胸に詰つて。」ト思入して、「其處へ云うて下され。」ト著物を抛る。障子びつしやりと閉す。ふね「コレイなア、お松が死んだと

アそんなら殿さん。」ト常磐木囁く。 常「エ、アノお前、イエ／＼夫れでは。」トまた囁く。 總「眞實。」
常「眞にかえ。」 總「なんの神懸けて。」 常「エ、忝うござんす。」ト唄になり常磐木を屏風の中へ入れ。
總角屏風引廻し、おふねと顏見合はす。おふね物云はずに拜んで居る。 總「是れ程は女の常ぢや、堪忍して下さんせ。」 ふね「子程可愛い者はござんせぬ、料簡して下さんせ。」 總「イエ／＼私が心の狹いから、嘸蔑視ましやんすであらう。」 ふね「身勝手な者ぢやと、怨んでござんすであらう。」 總「手を合はせて拜みます。」 ふね「イエ／＼私が。」 總「イエ私が。」 兩人「堪忍して下さんせ。」ト源八、縫之助を連れ出る。 源「女房おふね。」 ふね「ヤアこちの人。」 總「ヤア殿さん。」 源「始終の樣子は皆聞いた、いかい苦勞をするなア。」 ふね「お前に其の詞を聞くが氣附人參、好う來て下さんした。」ト執付く。「何時の間に爰へござんした。」 縫「聞けば聞く程、果敢ない浮世ぢやなア。」 源「豐入院殿龜山大居士、豐壽院殿角山大居士、今日は左衞門樣の御命日、將監樣の御逮夜。」トおふね源八が手をまくり、 ふね「みふね命、姉樣も今日が逮夜。」 源「心許りのせめては營み。」 ふね「今日の命日、人に隱して料具も爰に。」ト唄になり位牌を飾る。其の前に縫之助を直し、おふね硯蓋に菓子餠を供へる。此の間唄。 源「嘸御無念にござりませう、追付け敵討つてお家を再び取立てませう間、今暫く草葉の陰でお待ちなされませ。」 縫「其の時都に居りませうならば、叶はずとも遊軒を一太刀恨みませうもの、何事も不孝の段は

くよく先の世で縁を引いた中か、結ぶの神樣の結び樣に念が入つたものでがなあらう。」ト此の臺詞の中に千代鶴、八重菊松代出て屛風を引き牀を取る。花の井、みちとせ、千代菊出る。花「總角さん。」總「好う來て下さんした、二階客はもう濟んだかえ。」花「アイ皆奥の座敷へ往て、二階には常磐木さん一人轉寐してござんす。」總「そんならお前方を賴む、奥の客へ好いやうに間を合はして、常磐木さんを爰へ呼んで下さんせ。」各「そんなら爰へおこすかえ。」總「賴んだぞえ。」松、千「アイお牀は可うござんす。」總「コレ。」ト皆々囁く、呑込んで入る。總角長持の錠明ける。縫之助色事師の形で出る。總「太夫か。」縫「殿さん。」ト物云はずに行燈の火を手燭へ燈し、暗がりにする。平太後へ出て暗うなる故氣をつける、久馬出る、是れに囁く。ト是れより平太探つて橋懸り牀の取つてある所へ行く、源八立役の形にて才兵衞が口を押へ出て、同じく牀の際へ寄る。總角縫之助點頭き合ひ連立牀の傍にて、總「待つてござんせ。」縫「早うおぢや。」ト總角元のところへ戻る。久馬牀の傍へ探り寄る、平太縫之助を執へる。コレといふ口へ手を當てる。各「平太樣御首尾は。」平「ソリヤ。」ト久馬に渡す。久馬縫之助を縛る。所へ源八、才兵衞を突出し縫之助をとる。久馬、才兵衞に猿轡を箝め縛る。源八は縫之助を伴れ探つて内へ入る。平太舌舐りして、是れより色々思入あり樣々あるべし。所へ中二階より常磐木を連れ出る。常「總角さん今云はしやんした事は。」ト口に手を當て、總「コレ。」ト總角囁く。常「ヤ

や。」ト七首にて死なうとする、與九郎おふね止める。ふね「コレ待つて下さんせ。」茂「エ、いつそ打割つて云ひたい、云ひたいけれど。」與「云うたら消えさんすであらう、お家さん逢はして下さんせいなう。」總「逢はさいで何と致しませう。」ふね「總角さんか。」茂、與「今の様子は。」總「みんな聞きましてござんす、おふねさん何にも申しませぬ、エ、。」ト拜み泣く。ふね「此の仕儀ぢや程に何卒。」總「假令どの様な事があるというても、是れがマア如何默つて居られませう。」茂「兎角好い様に。」總「お松さんは本妻私は妾、二人して中好う添ひますわいな。」ふね「有様は親の口から言ひかねてをりました、何卒そんなら。」總「直に爰に寢さしまする。」ふね「エ、忝い。そんなら父さん與九郎も、ちつとの間奥へ。」茂「行くなと云うても行かねばならぬ、阿呆來い。」與「アイ。」ふね「まだほんの懐子、お前をたのむぞえ。」總「そりや氣遣ひさしやんすな。」與「何時消えうも知れぬ。」茂「コリヤそんなら案内してたも。」ふね「小座敷へお供致しませう。」與「佛壇のあるところへ。」茂「コリヤ。」ふね「いかさま、義理といふ其の義理こそは義理ならめ、義理の上越す義理もあるまじ。」茂、與「南無阿彌陀佛。」ふね「サアござんせ。」ト唄になり、おふね、茂治兵衛與九郎を伴れ入る、あとにて總角思入あつて手を敲く。禿「アイ、、、。」ト總角囁く、禿松代入る。總「今までは私より外に、一生女房は持たすまいと思うて居たが、しかも私が牀取つて寢さねばならぬといふも、お松さんと殿様との中へ、よ

なと見せて樂しましてやるのぢや。」茂「あんだらめ、汝やおれが逢ふとつい消える。」ふね「何がえ。」
茂「サァそりやあの、二階の客が座敷の興が醒める、消える、些との間なと消えぬ樣にしてくれをれ、
エ、阿呆め。」ふね「其の樣に思うては疾病が出る、今でこそ此の樣な淺ましき形になつて居れど、追
付け殿樣を御世に出して、娘も歴乎とした壻を取りますわいナ。」茂「何ぢや娘に壻を。」ふね「アイ。」
與「ワァ。」と大泣き。ふね「何を泣く事があるぞいやい。」茂「娘其方に無心がある、聞いてたもるか。」
ふね「父さんとした事が改まつた、何なりと云はしやんせいナ。」茂「餘の事でも無い、お松が願ひを聞
いてたも。」ふね「お松が願ひとはえ。」茂「如何に忠義なればとて、逢はさぬとは餘り酷たらしい、一
生の俺が頼みぢや、何卒殿樣に逢はしてやつてたも。」お松よ氣遣ひするな、汝が心に入つた樣に祖父
がしてやらうぞよ。おふね頼む頼むわいなう。」トおふね俯向いて居る。與「コレお家さん、こなさん
の前のお家さんが死なんしてから、うづくかして旦那をしじう甜めさんしたぢやないか、コレ物心覺
えてからは堪忍のなるものぢやない。」茂「コレ孝行は外に無い、何卒殿樣と孫と寢さしてやつて下さ
れ、頼むわいなう。」與「私が一生の恩に被せう程に、お松さんの嬉しがらんす樣にして下さんせ。」
茂、與「拜むわいなう〳〵。」ふね「お前より私が逢はしてやりたさは、どれ程にあらうと思うて居さつ
しやんすぞいなう。」茂、與「そんなら逢はしてやる氣か。」ふね「如何も義理が立ちませぬ。」茂「爾うち

めぢやとばかり思はしやんすな、殿樣に逢ふを賴みにして居やるわいなァ。」茂「何ぢややらどき〳〵と譯が知れぬ、其方は娘が事を知つて居るか。」ふね「常住傍を離さぬもの、知つて居いで何と致しませう。」茂「猶どき〳〵として譯が知れね。」與「コレお松さんはな。」ふね「アノ中二階に居るわいなう。」茂「ヤアお松は二階に居る。」ふね「又案じたものぢやござんせぬ、客に揚げられあの二階に。」茂「二階に。」ト二階に三味線唄をうたふ。ふね「アレあの聲がお松でござんす。」茂「ヤァお松か。」ト見る。二階にがきの影法師映る。皆々「ヨイヨ〳〵。」與「ヤアあの影は。」ト茂治兵衞、與九郎が口を押へぢつと泣く。ふね「つねよりは達者にござんす。」茂「そんなら殿さまを慕うて。」ト思入あつて。「可愛や〳〵。」ふね「總角殿に勤めをさすと、生きては居ぬと殿樣の御短氣、お松が身の代で今日までは總角殿を人に逢はさず、我が娘の戀の取持して、總角殿をそでにする、末の出世を娘でするると世間の口の端、總角殿の妬み、源八殿まで忠義の立たぬ悲しさに、折角逢はうと思うておぢやつた娘なれども、隱し祕んで逢はせぬも義理詰、殿樣はつい傍に御座る事も知らずに、逢ひたい〳〵と云うてゐる心根可愛うござんす。」茂「そんなら殿樣には逢はさぬか。」ふね「アイ。」茂「可愛や〳〵。」ふね「侍には何がなつたものぢやぞ。」ト與九郎二階へ行かうとするを茂次兵衞引戻し、茂「何處へ行く。」與「私は常々殿樣によう似た〳〵と云うて、私ばつかりを廻して居やんした、今の譯を聞けば可愛さうに、せめて俺が顏

も能う來て下さんした、文を遣らうにも便りは無し、定めて郭へ來て、跡で憎い奴ぢやと呵つて居さしやんしたであらう。」茂「イヤモウ憎いやら悲しいやら。」與「譯のある事ぢやごんせぬ、コレお松さんはなア。」茂「また吐すか待ちをらぬか。」與「へ、、、、お松さんはお松さんぢや、ア、。」ト泣く。ふね「尤もでござんす道理でござんす、お前の心にも姉のみふねが居たらば恁うではあるまい、生さぬ中ぢやに依つて、郭へ賣つたかと思はしやんせう、なんの眞實の娘より可愛もの、假令此の身を刻まれるというても、あの子を放して可いものか、皆お主の爲ぢやと堪忍して下さんせ。」茂「其の樣に可愛がつてくれる程、俺や身も世もあられぬわいやい。」ト泣く。ふね「コリヤ與九郎、何も彼も汝がよう知つて居るぢやないか、何故父さんの篤りと合點の行くやうに、云うて聞かしてはくれぬぞいやい。」與「さいなア、云うて聞かしたけれども、エ、コレ俺より、泣くなと云ふ此なさんが、たんと泣かんすわいの。」茂「何吐す、おりや泣きはせぬわい。」與「夫れでも涙がちよろ〳〵出るわいなア、年寄といふ者はこたへの無いものぢや。」ふね「したが氣遣ひして下さんすな、娘も達者に勤めて居りまする。」茂「ヤ。」ふね「私が傍に附いて居るに依つて、風邪一ッ引かしはせぬ程に、夫れを腹癒に、お前に知らせずに郭へ來たは、料簡して下さんせ。」茂「ヤア〳〵〳〵何ぢや孫は達者で居る。」ふね「アイ、しかも郭へ來るはあの子の望み。」與「其の譯も篤りと咄しました。」ふね「夫れぢやに依つて、辛い勤

して、變つた身の上ではある、したがもう百兩は皆になつたが、夜半までに身請の相談、こりや如何せう知らぬ。」ト二階にて多勢の聲する。　才「是れはもてる物ではないわ。」△「常磐木樣は、どうやら持てぬ顔付ぢやわいなア。」　花「常磐木樣の三味線が聞きたいわいナ。」　才「こりや好うござりませう。」常「わしや得う彈かぬもの。」　花「なァに此の中歌うて居やしやんした、わしや知つて居る。」　ふね「ムウもうしんしやくか、あんじたものではない。」　花「どうでも聞きたいわいナ。」　才「サア／＼所望ぢや所望ぢや。」トかけ畫にて三味線引く。　ふね「ハアたうどう唄ふ／＼、怯ず臆せず屋敷で敎へた三味線は女子の嗜み、郭の客の慰みに間に合ふといふは、正味の雙六ばんてよこづち、茶臼が莖のおもしぢやまで、イヤ／＼這樣に云うてゐても埒が明かぬ、時に此方の身請の事は、かうッ。」トおふね色々思入ある所へ茂治兵衛、與九郎伴れ風呂敷をおひ驅け出る。　茂「慥かに此邊ぢやと聞いたが。」　與「格子のある所ぢやと云うたが、爰でごんす。」　茂「爰ぢや／＼、コリヤ必ず泣えな、何にも云ふな。」　與「何の云うてたまるもので。」　茂「そんなら可い、アイ誰ぞ賴みたうござります、爰の家にお舟といふわろがあるか、一寸逢はして下さりませ。」　ふね「アイ誰ぢや、此方へ入らしやんせ。」　茂「入つても大事ござりませぬか、御免されませ。」ト内へ入る。　ふね「何處からござんした。」　茂「イヤ私は些と。」ト顔見合はせ、「お舟か。」　ふね「父樣。」　與「お家さんかえ、エ、。」ト泣くを茂治兵衛睨む。「泣かぬぞ／＼。」　ふね「で

ます、厭といふと口へ注ぎ込む。」ふね「ハテ仰山な酒盛ぢやなァ。」平「ハテ總角を借らうとは云はぬ。汝も俺が揚げて置いたに依つて、燒いて食はうが此方の儘ぢや。」久「肴には此の切炭をほゝばらさうかい。」ト火入れの火を挾む。平「是れは出來したサァ飲め。」常「そんな無理な事を。」平「飲まぬか。」久「食へヤイ。」總「コレおふね殿、あれ見やしやんせいなう。」常「詫言して下さんせいなァ。」ふね「飮んだり飮んだり、飮まにや持てぬて。」ト寐言の樣に云ふ。平「ドレ喫はしてやらう。」ト總角鉢を取つて常磐木を引退け、總「貸しますでござんせう。」平「貸すか。」總「貸すわいなァ。」平「貸せば可いて。」總「貸さう程に、もう常磐木さんは堪忍して下さんせ。」才「サァ埒が明いた。」久「是れから奥へ往て、彼の奴も詮議致しませう。」平「奥へ往て一ッ飮まう。」才「サァお出でなされませ。」權「あたほこしもない。可い、俺も奥へ往て小びつちよを對手にして飮んでこまさう。」常、幸「旦那私も參じませうか。」權「勝手にしをれ。」才「サア總角來い。」才「サァお出でなされませ。」ト唄になり、平太、總角を伴れ入る。久馬常磐木を伴れ、其の外皆々入る。お舟寐て居る、權九郎才兵衛にいろ〳〵可笑しき思入、才兵衛驚き、才「アツ、、、、エ、權九郎さんお前の其の形は何ぢやえ。」權「用場はないか。」ト入る。才兵衛も入る。おふねそつと起き思入あつて、ふね「ア、浮世ぢやなァ、神道源八が妻や子が、如何にお主のためぢやとて、前垂姿で酒浸しになつて、娘は傾城、其の娘を賣つた身の代で、太夫を揚詰に

し、ふね「誰ぞ助けて欲しいなア。」喜「オット我等。」幸「まんがちな。」かぢ「イヤ私が助ける」ト競り合ひ三人寄つて飲み、喜、幸、かぢ「壹兩づゝ有り難い。」才「見落しの一分は我等。」權「ヤア汝はけうといものぢやナ。」ふね「權樣お前の樣なひぢりかすりを商賣に、人を痛めて金儲けする者が、郭穿鑿はやアすぎ候ぢや、私がきつと太鼓を持つ程に、私相應の大盡におなりなされねば、諸事粋とは申し惡い、粋にならんせ、戀のしやうが餘り野暮な、そうたいの客さんが後家茶屋へ行くもよい、仲居のある茶屋へ行くも揚屋の遣手はしたまでだてな所へ、コレなア如何に相方が見えぬというて去なうとはどうぢやいなア、お前は貴方にばつかり可愛らしうて、其の樣に堅い殿御を誰も持ちたいなアと、じやらじやら云ふやら、昨夜の口舌がどうで悋うでと、はでに咄も縺れるに依つて、ツイ座も長うなる。其の折節は一寸どうやら可愛らしい事が、せき／＼になると茶の間で寢るか、起番の夜は廊下に待つて居る樣に、色は心の外ぢやわいなア、其のはてもなしに私を口說くとは、役に立たぬてんがうぢや、今の一分でとんとお脈が上つたぢや、爪長屋とはようづけさんした。」權「サア夫れは。」ふね「旦那くわつくわ。」ト脊中を敲く。皆々「ワアイ言ひ負けて好い氣味ぢや。」ト權九郎しよげになる。ふね「いかう醉うた／＼、足揉め／＼。」ト寢轉ぶ。喜「アイ／＼。」ト揉む。平「サア常磐木獻いた程に是れで一ツ飲め。」常「イヱ此の樣な鉢で。」平「つひに飲まぬのを盛り殺すが此方の手ぢや。」久「飲まいでも飲

しお赦し。」ト權九郎おふねが傍へ往て、權「コリヤおふね。」ふね「ヤアお前は、」ト見て、「エ、又取違つた程にの、あた厭らしい此の顏わいの。」ト顏を突く。權「コリヤ〳〵身鯨か何ぞのやうに、指でねなすなえ、サア返事は如何ぢや。」ふね「とんと厭、極上箱入飛切の厭ぢや、味なことなア。」ト笑ふ。權「イヤこりやげらつくな、可笑しうないぞ、邪でも非でも抱いて寢る程に爾う思へ。」平「揚詰の總角そんなら借らうかい。」ふね「一寸貸す事もならぬぢや、コレ此方へモそつと寄つて貰ひませう。」ト總角をだかへて、ふね「私が是れ程に思うて居るのに、殿さんに逢ひたい〳〵とは、揚詰の此のお客の手前へ、些と無遠慮ではあるまいか、思ひ出して貰ひますまい。」平「貸す事もならぬぢやまで。」權「どうでもならぬぢやまで。」ふね「何と飮み直さうぢやあるまいか。」かぢ、幸、茂「可うござりませう。」平「記内一つ飮まうぢやないか。」久「才兵衛お杯を持て。」權「俺も飮まう、おふね大盡はわりや遣手ぢやないか、俺が座敷を持て。」ふね「ほんになア、とんと商賣を忘れた程に、アイ權樣ちとお相手致しませう。」久「さらば常磐木獻さうか。」常「イ、エわしや酒はきらひでござんす。」久「下戸か。」常「アイ。」平「下戸とは面白い。」權「客が飮めと云ふに飮まぬか。」ふね「權樣遣手といふ者は欲しがる者ぢやといふがお定まりぢやが御存じかえ。」ト權九郎紙入より壹分出し鉢の中へ入れ、權「偉いものか、小判ぢやない壹分、サア飮め〳〵、醉ひ潰れさして置いて、おとゝつてしめる飮め〳〵。」トおふね金二兩出

る、皆々次第に坐る。　常「おふねどんござんしたか、待つて居たわいナ。」　ふね「イヤ常磐木の變らぬ色は酒が足らぬか、其の色の靑さでは持てぬ、大方やいとが足らぬものでがなあらう、こなさんは灸を絶やすと惡い性ぢやのに、何故吩咐けて置いた通りに、四火患門をすゑて貰はんせぬぞ、私が附いて居ぬに依つて、夫れぢや又お腹が痛うはないかドレ〱。」ト往かうとする。　久「コリヤ何する、今宵は身共が揚げた太夫、指さす事も成らぬ。」ト突き飛ばすを、ふね「ホイ我が物ならぬ情なさ、可し可し構ふ事も無し酒持てよ。　千、松「アイ、、、。」ト銚子杯を持つて來る。　ふね「口が惡い水一つくれ。」喜「畏まりてござりまする。」ト差出す。おふね幸助が脊中へもたれ居る。　ふね「ア、さつぱりと是れで飲み直されるぞ。」ト平太總角が手を執り、平「奥へ往て抱いて寢るわい。」總「どの樣に云はしやんしても。」　平「縫之助に心中立てるのか。」　總「いつやらからふつゝりと便りも無し、文も屆かぬか音信一つさしやんせぬ、聞えぬぞえ殿さま、死出の山も三途の川も、手に手を執つて行く約束ではないかいなア。」　常「死出の山も三途の川も手に手を執つて行くと、羨ましい事ぢやナ。」　平「エ、いけしぶとい、よう此の樣に仕込みをつた、千も萬もない來い。」ト引立てる。おふね割つて入り、ふね「何なさるゝ。」平「伴れて往つて。」　ふね「ちつとなるまいかいナ。」　平「何故。」　ふね「何故とはつらい、たつた今お侍さんが、常磐木は揚げて置いた、太夫に指さすなと呵らしやんしたぞえ。」　平「や。」　ふね「ちつとお赦

に金三兩。」かぢ「ヤァ、。」幸「何ぼ呵られても、おふね大盡でなければ夜が明けぬ。」かぢ「エ、そんなら俺も往たら可かつたもの、あたぼこしもない一生の損ぢや。」總角「コレおふねどの、其のやうに酒が過ぎて、身も世もたまるものではない、些と控へて下さんせ。」ふね「是れは太夫す、お志の段申し上げう詞もない穿鑿でござんす、此方すこしも醉はぬでござんす。」總「でも道々も、それは〳〵危險うてなる事ぢやないわいなう。」かぢ「イヤおふね殿、總角樣を一寸借りましたいといふお客がある、一寸貸して下さんすまいか。」ふね「私が揚詰の太夫すを、借りたいといふ客があるか。」才「コリヤおふね、太夫を買ふは金でする事ぢやに依つてせう事がない、お客があるのに大枚の給銀取つてる遣手が野良かはいて濟むか。」ふね「濟まぬでござんす、親方樣屹度あやまり奉つたぢや、ドレちつとまた此方の商賣ぢや、お客樣の座敷を取持つて。」ト、行かうとしてひよろ〳〵する。總「ア、コレ危いわいなう。」ト抱かへる。花「おふねどの、この中云うた平さんといふのは、彼のさんぢやぞえ。」總「何ぢや平さんとは。」ト見て、「ほんにまた來んしたかいなう。」平「しぶとう逢はねばしぶとう通ふ、揚詰の大盡おふねといふ遣手はそちか、ちかづきになりたい。」久「お召しなさるゝ、爰へ來てお伽申せ。」ふね「平さんとは豫てお噂在原の平樣ぢやな、太夫す、だんない行かんせ、私も近附にならう。」總「イヤ夫れでも。」ふね「ハテナ私がだんないと云ふからだんないわいなア。」ト本舞臺へ來て眞中へ直

奴と見た日は違ふまい。」記「左様でござりまする。」ト常磐木内へ入る。平太、記内に囁き橋懸りへ入る。平「亭主何者ぞ内に居るか。」才「ハイお客がござりまする。」權「イヤア常磐木は是れぢやな、可いよい。」平「ソレ。」久馬「畏まつてござりまする。」ト權九郎が顔を見て、「ホウコリヤ違うたわ、能く似た處もあるが、ハテ馬鹿な面だなア。」ト突き倒す。平「誠に横顔を見れば、其の儘ぢや。」梅「アレお舟殿が又例の酒に醉うて戻らんすわいなう。」かお「眞になア、エ、あの形わいなう。」才「太夫様方や禿を、何ぞ己が使ひ者の様に申す、お舟が參ります。」平「總角もござるか。」久「參ります／＼。」權「直に口說いてこまさうワイ。」久「直にお口說きなされませ。」ト平太に云ふ。才、かお「さらば戀の捌け口を見ようか。」ト向うより傾城總角道中して出る、おふね赤前垂仲居の形、酒に醉ひたる體しどけなく、笹に色々櫛、笄、莨入、小判、鏡、守袋を付け、此の笹を持ち出る、幇間喜作、幸助皆々欲しがり取巻き出づる。右すりがね三味線鹿踊なり。ふね「誰に。」花の井「私に。」ふね「わしの子にや遣らぬ。誰に。」千、松「俺に。」ふね「折れたもんにや遣らぬ。誰に。」喜、幸「はなに。」ふね「はなれぬもんにや遣らぬ。」ト花道にて色々あつてひよろつく。皆々笹を持ち引挘る故轉ける、皆寄つて引起す、花の井肩へかゝる、囃子止る。ふね「面白い／＼。」才「喜助惣作、又おふねを引張つておちよばいか、餘り煽動て貰ふまいぞ。」かお「さうして今日は何ぞ貰はしやつたか。」喜「しやつたの段か、マア一寸莨入五つ

權「揚詰なら貰ふわい。」才「先は歴々のお侍様でござりまするぞえ。」權「侍が何ぢや怖うないぞ、うぬは襟につくか。」才「爾うでは無けれど。」かぢ「そんなら先のお侍様と御相談になされませ、禿衆迎へに往かつしやれ。」ト此の間に吹替の源八、頭巾被て向うより來る、記内跡より隨いて出る、此の内へ入る。　千、松「アイ、、、。」ト向うへ入る。　梅「アレ／＼常磐木さんが、平さんと連立つてござんすぞえ。」才「サア是れからは、お前の存分にお貰ひなされたが可うござりまする。」權「儕に指圖受けいでも、こりや腕づくにこまさう、穴なし汝も呑め。」かぢ「サア一ツ上りませ。」トぬめりになり向うより常磐木道中して出る、禿八重菊附き、跡より闕口平太衣裳羽織、侍伴れて出る。平太「コリャ／＼常磐木、もそつと靜かに歩け。」常「爰に消え彼處に結ぶ水の泡浮世に捨つる身こそをしけれ。」平「兎角此奴は小ませた事ばつかり吐す。コリャ汝が此の樣に辛い勤めをするは皆母めが根性からぢや、總角が手に入るまでは、存分に慰む程に爾う思へ。」かぢ「エ、ひら樣、常磐木樣も好うお出でなされました。サア／＼お入りなされませ。」常「先へ行くぞえ。」平「コリャおかぢ、また取逃すな。」かぢ「合點でござりまする。」才「扨平樣待兼山の郭公、サアお入りなされませ。」平「今夜は意趣返しに、儕も酒攻ぢや程に爾う思へ。」ト記内出る。　記「平太殿。」平「記内最前の奴は。」記「跡先へつけましてござりまするが、氣取りましたか此の内へ付込みましたる故、お出でを相待ち居りまする。」平「慥かに彼

杯云うて見る氣ぢやけれど、威勢におそれて能う申しませぬて。」かぢ「どうぞ手に入れて上げませうと思うて、才兵衞さまといろ〳〵相談をして居ります、もそつとお待ちなされませい。」茂「サアおれもほつと待退屈したに依つて、マア蟲ころしにあの新造を呼んだ所が。」皆々「振らしやんしたかえ。」權「イヤ振りはせぬ。」才、かぢ「それでもお前。」權「サア咄をしても、付穗が無く、夫れからワア〳〵ほえる、夫れから方々逃げまはるに依つておはへて來たのぢや、何と俺がのが無理か、女郎が無理か、俺が無理ぢやあるまいがな。」梅「其の樣になうてさへあだ憎てらしいこな樣に、きく者はあるまいと思うたにオヽ怖。」松、千「こちらはいやぞ。」かぢ「こりや太夫樣のが尤もぢやわいなう。」才「定めて其の位なら天晴のことぢやなア。」權「俺もやけむちやぢや、おふねが手に入らねば、女郎どもや禿どもを。」才「是れは迷惑でござりまする。」かぢ「私等も如才はござりませぬ、如何して見ても往かぬに依つて、彼のお舟が娘の常磐木樣も、お前に呼ばしていぢり立てさすと、娘の人質に取られたもんぢやに依つて、厭ながら手に入らねばならぬ、此の思案は如何でござりまする。」權「出來た、夫れぢや夫れぢや。」才「ア、待つたり〳〵、其の常磐木はひら樣といふ大盡の揚詰、是れも總角をアノお舟が揚詰にして放さぬに依つて、其の人質に買はつしやるのぢや、外へはやられぬてい。」權「此奴が〳〵、ひらにもせよ壺にもせよ、銀出して太夫を買ふに何を吐す事がある。」才「でも揚詰でござりまする。」

ぢや爾うぢや意見しや。」かぢ「コレ花の井さん、こなさんはマァよう〳〵此の頃仕立で間も無いに、お客を振るといふ事が有るものか、何で振らしやつた。」トつめる、花の井泣く。梅「コレ〳〵其の様に荒うさつしやるないのう。」千、松「泣かしやんすわいなう。」かぢ「構うて貰ひますまい、太夫様がたの不勤めは、遣手が折檻せにやならぬ、サア如何いふ事で振らしやつた。」玉「振りはせぬわいなう。」権「イヤ〳〵振つた〳〵。」かぢ「振つたのか。」玉「なんの私が振らう、あうたわいなう。」かぢ「あうた。其のあうたものが彼の様に仰しやりまする筈が。」玉「逢うたは逢うたけれど、つゝともう。」ト泣く。かぢ「権九郎様あはれましたかえ。」権「オ、あうたはあうた。」梅「ソレ見さしやつたかの。」才「お逢ひなされましたら、其の様にお腹をお立てなされる筈はござりますまいがな。」かぢ「何ぞ外に悪い事がござりまするかえ。」権「オ、ある、自體此の間からあの遣手のお舟に惚れて居るに依つて、汝等を頼んでも、イヤすつたのもぢつたのと云うて埒明かぬ、おふねめはこはばる、五日も八日も此の様に流連うたして置いて、おのい等は俺を太郎にかけるのか。」才「全く左様ではござりませぬ、あのお舟が娘を私所へ取りましたに依つて、其の目代に遣手奉公に参りましたが、かの蟲付の總角を揚詰にして、ちよつといらはしも致しませぬ、外に結構な身請のお客があつて遣らうと思うても、金銀をぱつぱつと蒔き散らかして、郭中を靡けるに依つて、太鼓遣手まで皆お舟が幕下に屬致して、私も力一

人替名

一權九郎　文七	一常磐木　松之丞
一神道源八　文七	一總角　金作
一茂治兵衞　新九郎	一遣手おかぢ　文十郎
一おふね　喜世三	一記内　彌平次
一久馬　友藏	一關口平太　大五郎
一鶉籠	一侍　大勢
一非人　一人	

○

造物總二重舞臺、向う長暖簾まいら戸、下座中二階、橋懸り本大格子、寶來屋といふ行燈懸り、騒ぎ唄にて幕開く。權九郎喚いて居る、才兵衞、お梶詫びて居る。梅の、八重菊、松代、千代鶴、孰れも傾城の形。

かぢ「マアお待ちなされませい。」權「けたいなぞ〳〵。」梅「權九郎樣突出しの太夫樣ぢやに依つて、どうで氣に入らぬ事もあらう、其の樣に云うた物でもないわいな。」松、千「マア堪忍さしやんせいな。」才「まだちひさい太夫殿のことでござりまする、わるい事があるなら、遣手のおかぢに呵らせませう。」かぢ「私が篤りと意見致しませう程に、マアお待ちなされませ。」權「コリヤやい、金出して買ふにすつたのもぢつたのと、此の權九郎遂に女郎に振られた事が無い、ちつぽけな形をしくさつて、大ばつたの男を能う振つたな。」かぢ「成程御尤もでござりまする、私がお腹の癒る樣に致しませう。」才「爾う

ント誤つた。」舟「ア、其の樣にいはんすなら料簡しよう。」才「サアそんなら娘駕籠へ乘りや、アノ垂を上げてくれいか、ドレ上げてやりませう。」トお松を駕籠へ乘せ歸る。舟「そんなら私は跡からゆく程に、皆さん賴むぞえ、追つつけ跡からゆく、機嫌ようい きやえ。」才「娘が上氣したかして、顏が赤うなつた。」ト向うへ入る。舟「追付ゆくほどに待つてて居や。ア、女といふものは早う智慧づく物ぢやなア、昨日や今日まで子供のやうに思うて居たが、いつの間にやら殿樣と。」ト淚をこぼし、「可愛やなア、神道源八が女房や娘が、僅かな身の代に傾城の奉公、ア、又愚癡な事いうた、こんな事いうてまで、ドリヤ往にませう。」トよろしく幕。

第三幕目　揚屋の場

役

一幇間幸助	新藏	一禿松代	小吉
一同喜作	春五郎	一同千代鶴	大藏
一揚屋才兵衛	友十郎	一同八重菊	小源治
一與九郎	三十郎	一傾城玉の井	新四郎
一縫之助	三十郎	一花の井	市松

茂治兵衛が襟を持ち井戸にむかひ、　與「戊の年戊の月戊の日、スンヘンヘンスンハラメンスンキヤウキヤウ、ハテ變つた寐言もあればある物ぢやなア。」茂「エ、あはうめ、何うやら胸さわぎがしてゐるい、お松はどこに居る。」與「ホンニお松さんは道中教へてゐたが、何處へやら消えさんした。」茂「エエ何ぬかすやら、尋ねをれおまつよ。」與「お松さん。」茂「まつよ。」與「まつよ。」茂「もちつと大きな聲で呼べ、ヤイお松よ。」與「おまよ。」茂「まつよ。」與「お松さん。」茂「まつよ。」與「ア、是れ小屋の内が血だらけぢや。」茂「ヤア〳〵。」與「それお松さんが殺してある、きもとやらいふものを取つたさうな。」茂「そんなら今の侍が孫の敵ぢや。」ト尻からげ花道へ入る。與「ア、これ俺一人殘して、コレおれも往かう親父さん。」トお松の死骸をかたげ向うへ入る。與「コレ親父さん、イヤ親父さん〳〵親父さん。」ト才兵衛お舟皆々出る。才「サア〳〵事が濟んだ、證文取つて金渡す。」舟「いかいお世話お松や〳〵、是れはしたり何處へ往たやら、コリヤ小屋の邊は血だらけ。」才「コリヤさうはさせぬわ、證文して金受取るとふけらかしてしまふ、其の手は食はぬ其の金此方へ。」舟「イエ其の金を。」才「男どもそいつ蹈みのめせ。」男「合點ぢや。」トよつて蹈む。ドロ〳〵にてお松出る。松「コリヤ母さんを何とする。」舟「ヤお松か、何處へいて居やつた、フンもう郭へゆく事がいやになつたか。」松「それで戻つたのでござんすわいな。」舟「是れでも遁したのでござんすか。」才「イヤもう近年の誤り、ト

へ逃支度して、「何の、命投げ出して置いてするわい。」 町人「はてもうよいわいなう、料簡して往きやいのう。」 權「構ふない、挨拶するとわいら相手ぢやぞ。」 町人「構ふな〱。」 權「サア 侍怖さうにせんと爰へこい、高が命一ツぢや、わりや何で挨拶する、おのれを。」ト町人に投げられ。「もう聞かぬ。」ト逃げては、「爰へ來い、何奴でも相手ぢや。」ト遁げて、「コリヤ 侍、卑怯なこゝへ來い。」トやかましくいうて町人共向うへ入る。 茂「お前樣は神樣か佛樣か、見ず知らずに私に大枚のお金を下さりまして、あはうよお禮申せ。」 與「たんとの金を唯くれるといふ事があるものか、嬉しうござりまする。」ト辨之作、茂治兵衞が白髮を切り、火にくべて小屋の内より壺を出し合はせてのむ。 辨「戌の年の戌の月戌の日の戌の刻。」ト戴きのみ、ウンと氣を失ふ。 茂「ア、是れお侍さま〱。」 與「ア、是れ申し申し〱。」 茂「これはマア何の事ぢや、お侍樣〱。」 與「なんぢややら、いぬ〱いはんしたが、まちん呑まんしたさうな。」 茂「お侍樣、お氣が付きましたか、あはう水々。」ト井戸の水汲み呑ます。 辨「ウ、ン。」 茂「お侍樣お氣が付きましたか、ヤアお前のお顏は。」 辨「おれの顏が何とした。」 與「其のお前の顏は。」 辨「身共が顏がどうした。」ト草井戸にて見て、「戌の年戌の月戌の日戌の刻に誕生の女の生膽に、血筋の者の白髮を合はせ用ゐれば、相好變ると遊軒殿の祕傳、ハテ變つた妙藥もあればあるものぢやなア。」 茂「エ、。」 辨「緣あらば重ねて。」ト向うへ走り入る。 茂「なんの事ぢや。」ト與九郎、

權「受取らいぢや。」與「權九郎證文から先へおこせ。」權「忙しない、金あらためる待ちやれ。」與「證文おこせ。」橋「まだしも似せ金ではない、ソリヤ證文。」與「おつとせう。」茂「おれが手か改めて見よ。」與「お前の手もなにも、いの字が兩方へ別れてある。」茂「阿房めが。」町人「權九郎金請取つたらモウ往にやらぬか。」權「こなた衆はいろ／＼世話をするの、年寄る筈ぢや、おれが足でおれが去ぬる、構うて貰ふまい。ア、世間にはあはうなものがある、近付でもないものに、五十兩といふ金を遣る、いかい癡呆ものぢや、長生すれば色々の事を見るわいやい。」ト花道の中程までゆくと、辨「コリヤ待て。」權「何ぞ用があるか。」辨「我は何ぞ忘れたものはないか。」ト權九郎捜して見て、權「なんにも忘れたものはない。」辨「金を返すからは云分はあるまいナ。」權「誰ぞ云分があるといふたか。」辨「最前はなぜ親父殿を打擲したぞ。」權「何ぢやい／＼、埒の明かぬ事いふないやい、そんな強請喰ふのぢやないぞ、金貸して食てゆく權九郎ぢや、返せば云分はない、返さぬさかいでぶつたが何とした。」ト本舞臺へ戻る。辨「さつきには金返さぬさかいで打擲したが、今は金返したさかいでわれをかう／＼。」ト胸打ちくはす。權「イオおさむ、いかに差いたと思うてひらめかすな、何でぶつた、なんでたゝいた。」辨「返したに依つて我をかう／＼。」ト又たゝく。權「イヤもう生きても死んでもぢや、侍、われはひよんな者と出入仕掛けた、不仕合なものぢや、喧嘩して生きてもどつた例のない男ぢや。」トあと

遣はし申し候所實正なり。なんと是れでも物いふわいやい。」與「權九郎め。」權「なんぢや。」與「なんでもない。」茂「權九郎それは尤もぢやが、マア二三日待つてたも、お舟も今は男を持たしたに依つて私が儘にもどうもならぬ。」權「何ぢや、娘に男持たした、親父、證文に書き入れて男持たしたというて濟むか、太い奴ぢやなア。」ト草履にて叩きかゝる。皆々取支へる。町人「マアようござる、もし疵でも付いてはわるい、もう料簡さつしやれ。」茂「權九郎いかに手にあうたものぢやというて、胸ぐら取つてわりや何うするや。」權「イヤ斯うするわ。」トたゝきかゝる。後より辨之作權九郎を投げる。權「イヤ親父、わりや味やるな、腕づくならこい。」ト辨之作が顔を見て、「ヤア今のはお侍か、わりや何でおれを投げた〳〵。」辨「年寄にもし怪我でも有つてはわるいと思うて、引退けたが何とした。」權「ヤイわれが引退けやうは、えらい引退けやうぢやな。」ト摑みかゝる、顔をたゝく。權「アイタ〳〵アイタ。」トそこら搜す。町人「なんぞ落したか。」權「目の玉はそこらにないか。」與「おつとあるぞ、梅干の種ぢや。」辨「これ親父、こなた彼のべラ坊に金五十兩借つて居るか。」茂「ハイ。」辨「それ返して了はつしやれ。」ト金をやる。茂「エ、スリヤ此の金を私に下さりまするかえ。」與「あの只かえ。」辨「いかにも。」茂「お前は神樣か、佛樣か、うぶすな樣か、有りがたうござりまする、コレ皆の衆、悦んで下され。」町人「オ、出來しやつた、はやう返してしまはしやれ。」茂「コリヤ權九郎、金返す受取れ。」

サアござれ。」舟「これお松、私はあなたと、些と往て來る程に、どこへも往かずに待つて居やや、與九郎よ氣を付けいよ、サアお出でなさんせ。」ト入る。松「早う戻らしやんせえ。」與「お松さん、アノ是れから常住殿さんの顔見て嬉しからうナ。」松「私や嬉しいわいなう。」與「郭へゆくと道中せんならんがお前知つてか。」松「イ、ヤ知らぬわいなう。」與「おれが教へてやろ、マア斯うつまをとらんせ、斯う足を向うへ斯う。」松「ズントようせぬわいなう。」與「ハテ不器用な人ではある程にの。」松「かうかや。」與「わしが跡から見てござんせ。」ト此の間にうしろより辨之作、お松をつれ小屋の内へはひる。松「ハアこれ。」ト權九郎敵役のなりにて出る、町人三人つれ出る。茂治兵衛親父の形にて出る。町人「サアよござるわいなう〳〵。」權九郎「コリヤ老耄め、代官所へつれゆく、サア來い。」町人「コレ權九郎、其のやうにせずといやいの。」茂治「コリヤ權九郎、いかに貸したが強いというて、其の樣にせぬものぢや、ハテ借つた金返す、マア二三日待つてくれい。」權「いやぢやわい、今日の明日のと何時まで待つのぢや、サア今受けとつた金わたせ。」町人「これ權九郎、貸した〳〵といやるが證文でもあるかや。」權「わり樣たちは、人に金を貸した事がないによつて、其の樣な事いふわいのう。金貸して證文とらいで濟むものか。」與「コリヤ權九郎め。」權「なんぢや。」與「なんでもない。」權「一札の事、一金五十兩なり。右の金子御入用次第急度返辨申すべく候、若し間違ひ候へば、娘お舟を其許へ女房に

は彼は男氣なものぢやと存じて譽めるものもあらうが、桶伏の桶から金は出まいし、父親ぢやもの子ぢやもの、何の一所に居たというて、あの子の爲にこそようあれ、何のわるい事があらう。」才「ア、これ〳〵、御苦勞ながら奉公に、お出でなされて下さりますと悦びまする、どうぞお出でなされて下さりませ。」舟「イエ〳〵無理にいかうとはいはぬぞえ。」才「ア、きえたい、何卒お出で下さりませ。」舟「そんなら談合いたしませう、さうしてマア彼の子の給銀は、揚代さし引きして五十兩受取るが、私が給銀はなんぼよこさんすえ。」才「一年に二兩二分。」舟「アノたつた二兩二分。」才「そんなら三兩。」舟「アノ三兩。」才「イッソ飛んで五兩。」舟「安いもんでござんすな、そんならかうつ、イッソ大坂の新町へ談合せうか。」才「ア、これ〳〵そんなら何程。」舟「マア五十兩。」才「エ、。」舟「ドリヤ一走り往て來う。」才「ア、これ〳〵出す〳〵、五十兩出す。」舟「イヤ無理にとはいはぬぞえ。」才「だれが無理にといふぞいの、娘を五十兩でよい奉公人取つたと思へば、勤めをせぬ者を五十兩とは。」舟「高いかえ。」才「イ、エ安いものぢや。サアざつと埒が明いた、幸ひ此の在所にこちの入判がある、證文認めて金渡しませう、一走りござれ。」ト此の間に辨之作出て聞いて居る。舟「そんならさう致しませう。」才「してあの子は幾歳ぢや。」舟「十六で戌の年でござんす。したが彼の子の戌の年は不思議な生まれ、戌の年の戌の月の戌の日の戌の刻に生まれた戌の年でござんす。」才「それは不思議、出世しませう、

ぢや。」才「ソレそこに、目の前に。」ト與九郎捜す。與「ハテめんえうな、私が目には見えぬ。」才「ハテ其の娘郭へさへやれば五十兩、ナント目の前にあるではないか。」舟「さればいなア、あの子にはチト義理のある子なり、まだほんのまゝくおうて。」才「イヤサよい比合でござんすて。」與「まだ去年まで溝でしゝやつたもの。」松「母さん私を郭へやつて下さんせ、私や郭へいきたうござんすわいなア。」舟「何をいやるやら、郭へいけば芝居と違うて苦しいものぢやぞや。」松「私や郭へいて常住殿樣の顏が見たいわいなア。」舟「ナニ郭へいて殿樣の顏が見たい。」松「アイ是れ見て下さんせ。」ト守袋の起請を出す。舟「そんならば殿さんと。」松「アイ。」舟「そりや誰が世話して。」與「私が中へ入つて。」ト思案して、舟「そんならわが身は郭へいきやるか。」松「アイ。」舟「才兵衞さん、そんならさうして下さんせ、併しチトお前に無心がある。」才「娘さへ來る氣なら、なんなりと聞きませう。」舟「私も一緒に奉公にゆきたうござんす、仲居になりと遣手とやらになりと、一緒に置いて下さんせんかえ。」才「イヤそりやならぬ、それでは始めから蟲つきぢや、總體子飼の奉公人でも、ちよこ／＼親が來ると根性がわるうなるものぢやに依つて、そりやならぬ。」舟「そんなら此の相談も止めに致しませう。」才「そんなら金受取らう、金渡せ。」舟「金はござんせぬ。」才「すへるな／＼。」舟「ハテ嫌なら縫之介樣を連れていて桶ぶせにしたがよい、が世間にはあはうなものが澤山ある、そりや桶ぶせにしたら、さりと

事あしく候、宜しく頼み入り〳〵、尚々娘の事も宜しく頼み入り〳〵めでたく〳〵、五月十七日。」
「さては郭へ入りこみ、御朱印の詮議を私にせいといふのか、ア、何うして往たらよかろ知らぬ、まて。」ト思案する。橋懸りより與九郎、黒羽二重の衣裝編笠被て來る。ト跡より揚屋才兵衛、男二人つれて出る。才「男共キリ〳〵ひつたて〳〵。」トお舟とめて、舟「何うなされます。」才「ハテ知れたこと、郭へ連れて行て揚代の濟まぬものは揚代の法に行ふ。」舟「イエ〳〵やることはなりませぬ、なぜといはんせ、揚代の替りに身請をして、總角樣を郭へやつたぢやないか。」才「さればいやい、總角も前の總角なら戴いて居るけれど、此の縫之介といふものが有るゆゑ勤めはしならず、それで縫之介をつれて往て桶伏にしたらば、總角が勤めを大事にするであろと思うて。男共ひつたて〳〵。」ト皆々かゝる。與「ハア、、、、。」ト笠を取る。あはうなり。與「これお家さん、殿さんが舟へ乘らしやる所を捕へて、何のかのといふに依つて、殿樣の著る物を著ておれが化けた、何と智謀の程見て置け、きついか。」才「扨は汝がふけらしたな。」舟「コレ才兵衛さん、マア其のやうにいはずとも、モチット待つて下さんせ、金の工面。」才「おつと皆までいふまい、金の工面所か、權九郎樣に五十兩といふ金借つて、今日の明日のと日延べ、代官所へ斷るというて居らるゝ、それに金どころか、ついそこらにも、金がぶらついてあるにな。」舟「そこらあたりに金がぶらついてあるとはえ。」與「拾ひたいものぢ

も斷うまゐれ。」　皆々「罪人とは。」　舟「ハテ救世の舟へ來いといふ事ぢや。」ト與九郎臆病口へはひる、皆々入る。ト橋懸りより飛脚一人出る。飛脚「もし女中さん、チト物が尋ねたうござりまする。」　舟「ハイ何でござりまする。」　飛「此の邊に渡守の茂治兵衛といふ人がござりまするか。」　舟「ハイついそちらの方を横へ取つてござりますと、角の家がさうで御ざります。幸ひ私は其の内の者でござんすが、何の御用でお出でなされましたえ。」　飛「それは幸ひでござります、そんならお前に上げませう、私は飛脚でござります、此の狀を屆けまする。」　舟「ハイ、お舟どのまゐる、是れはむかうの名がござりませぬ、何れからお出でなされましたえ。」　飛「イヤお舟殿に渡すと、先に知つてぢやといふてでござりました。」　舟「そんなら慥かに受取りましてござります。」　飛「イヤもう參じませう。」ト入る。　舟「マア寄つてお茶でもあがつてお出でなされませいな。是れはしたり、よい所で逢うた、ハテ合點の行かぬ事ぢや。」　松「ドレ見せさんせ、コリヤ父樣の手ぢやわいなア。」　舟「ホンニさうぢや、そこらへ氣を付けてたも。」　松「アイ。」ト封を切り、

舟「一筆申し入れ〳〵、愈御無事に候や、然らば今に御朱印の在所も知れず承り候へば又々總角殿にも揚錢の替りに郭へ參られ候由定めて平太が郭へ通ひ候はんまゝ、其許面を見知らぬを幸ひに郭へ入込み御朱印の詮議なさるべく候、直に詮議致し候ては前の意趣ある平太に候へば、面合はし候

與九「コリヤ〳〵わいらは何をぬかす、役に立たぬ事ぬかすな首が飛ぶぞ。」 皆々「ハアイ。」 與九「頭が高い下にをれ。」 皆々「ハア、、、、。」 與九「俺は所の代官ぢや、聞けば汝らは源八樣をわるうぬかしをる、此のまゝではゆるさぬぞ。」 皆々「イヤもう何にも存じませぬ、御許されて下さりませ。」 與九「以後は屹度たしなめ、憎い奴の。」ト皆々頭を上げ與九郎が顏を見て、 百「ヤイおのれ、あはうな面をして代官ぢや、ようおいらに辭儀をさせをつたなア。」 與九「オ、おりやこゝな渡ぢや、一ぱい食はしたハ、、、、。」 皆々「汝此の儘では堪忍ならぬ。」トせり合ふ。橋懸りよりおふね、やつしの形、おまつを連れ、辨當持つて來る。在鄕歌。 おふね「ア、是れ〳〵何ごとかは存じませぬが、愚かしいものでござんす、料簡してやつて下さりませ。」 與「おいへさんか、私が一ぱい食はしてこましたを腹立てて。」 お舟「阿房よ、皆もう料簡して下さりませ。」 皆々「そんなら料簡してやろはやろ、渡をわたしてくれ。」 與「それ見たか、いやでもおうでも誤るわサ。」 お舟「これ與九郎そなたの誂への辨當持つて來たぞや。」 與「おつとしよ、芋焚いて下さんしたか。」 舟「何うした事やら、お松は我がいふ事を。」 與「聞く筈、さらば對面致さうか。」ト辨當を明けようとする。皆々「先刻にから待つて居る、飯を食はずと渡してくれいやい。」 與「喧しい、食はぬ先から咽がにつまる。」 舟「皆樣を渡して來てから食やいなう。」 與「そんならお家さん、お前に預けて置く、犬に取られて下んすな。」 松「オ、早う往ておぢや。」 與「罪人ど

役人替名

一才兵衛　友十郎　一與九郎　三十郎
一辨之作　治郎三　一おまつ　松之丞
一茂治兵衛　新九郎　一おふね　喜世三
一權九郎　文七　一飛脚、町人、百姓、仕出し

○

造物一面の黒幕、眞中に渡津場の小屋、橋懸り松原、高札立てあり、砂舞臺に草井戸、在郷唄にて幕ひらく。と仕出し三人出る。

百姓「しんどい休め〳〵。」仕出し○「何ぢややら、よう〳〵爰は源八の渡、もう今から休んでどうなるもので。」△「それ〳〵ま些と歩め〳〵。」百「なんぢや高札が立つてあるわ。」○「ドレ〳〵。」ト讀む。○「一、淀川筋水早く落ち候故、舟にて登る工夫致すものあるに於ては、重罪たりとも其の咎を許し、褒美は望み次第たるべき者なり。」△「ムウそれでおれも讀めた。」百「こゝをどうして源八の渡といふぞ。因緣のありさうな事ぢや。」○「是れは平太といふ人と、源八といふ者として渡舟、堤のあらそひがあつたが、源八は負けて平太が兩方ながら普請受取つたげな。」△「人にさしてもやつぱり源八の渡といはすは、ふとい奴ぢやナ。」兩人「さればいなう。」ト小屋の內より與九郎、阿房のなりにて出る。

騷がしたゆゑ、左衞門はくたばつてしまうた。」源「ナニ兄遊軒とぬかすからは、さてはおのれは川浦遊軒の弟よな。」平「重罪の左衞門、部類眷族一人も殘らず、ぶち殺せとの上意、此の屋形は兄遊軒に下され、此の平太が押領するわやい。」源「ヤア人もおほいに遊軒に屋形を押領しられたか、エ、。」平「無念なか、オ、悲しいはず〳〵、みゆきは兄遊軒が心を掛け居れば都へおくり、總角は身が女房、喜蝶も手かけにする、縫之介もあとからやると、くたばつたら左衞門に、此の平太が傳言したとぬかせ。」源「エ、遊軒こそ手に入らずとも、おのれを打殺して主人への土產、遊軒もあとからやる、半座をわけておきをらう。」平「なぶり殺しぢや覺悟ひろげ、南無阿彌陀佛。」ト立廻りある處へ、與三右衞門つか〳〵と出で、平太を突きのけ、與「源八苦しうない早く立退け。」平「でも鎌倉の咎人を。」與「縫之介みゆき事、將監勘當致したる事紛れなき自筆ゆゑ、助け遣はす條件の如し、勘當の者どもお崇りない有り難い敕書。」平「でも左衞門が重類を。」與「勘當は寅の一天、家沒收は卯の上刻。」平「イヤなんと。」與「かかる願ひをせんために、種々に心をくだいたわいやい。」源「ぢやというて御主人達は。」皆々「皆こゝに居るわいなう。」ト花道より出る。源「ヤア。」與「家來を廻し細工はりう〳〵。」平「四人の奴ら。」與「敕定を背くとたつた一打。」ト種が島構へる。源「エ、お心ざし忝い。」與「其の手疵では心もとない。」源「かくの仕合。」ト手水鉢を切る。與「出來した。」平「うぬ。」與「いけ。」ト幕。

衛門様の血しほぢやがや。」トみゆき身を顫はして睨む。　源「モウよい〳〵、サア〳〵立たそ〳〵、左近そちらへもかゝれいやい。」トみゆきすがる。　源「若殿さま御用意、金がござりませうな、お枕金ござりまするか。」　縫「イ、ヤねつからない。」　左「イヤア源八殿、もし要らうかと存じまして用意の金子を。」　紋「僅かなれども私も。」ト源八取つて、　源「ハア栴檀は二葉よりと、まだ年はもゆかぬに、流石は武士の子程ある、よいこゝろがけ。これ殿様、御枕金と申すものは、斯様な時にほか入りませぬ、それにマアねつから無いとは餘りな。高垣のはうへ行くがよからうか。」ト矢あまた射かける、紋之丞死ぬる、皆々惘りする。　源「モウ絶體絶命ぢやわいなう。」ト捕手あまた出で、見事なる立あり、追うて入る。ト黒裝束の侍一人づゝ出で、五人を一人づゝ肩げ入る。此のあひだ始終ばた〳〵、いろ〳〵立あるべし、源八手負ひ出て色々思入あつて、　源「縫之介様、みゆき様。」　新「やらぬぞ。」ト新治くわへめんにて死ぬる。　源「みゆき様。」　三「やらぬぞ。」ト足を斬られ死ぬる。　源「斯やうに尋ねても御行方の知れぬといふは、敵方へ奪取られたか、エ、無念やナア。」　侍「やらぬぞ。」ト兩人斬られ死ぬる。鐵砲撃つ。　源「ヤア飛道具を持つて卑怯な、何やつぢや。」ト平太鐵砲持つて出る。　平「今汝が右手の腕を撃ちかすめたは、おのれに委細をいひ聞かせ、あとにてなぶり殺しぢや覺悟せい。」　源「さては今の鐵砲はうぬであつたよな。」　平「左衛門は鎌倉の上使をしくじり、其の上兄遊軒に手を負はせ、大内を

ト紋之丞左近出る。　紋「三百人ばかりの人数にて出口を塞ぎました。」　左「承れば屋形を闕所仰せ付けられ、若し狼藉も致さうかと、用心の遠攻ぢやと申しまする。」　源「推量の通りモウ叶ひませぬ。是れが左衛門様が、禁裏で騒動をおやりなされ、切腹なされた其のお祟りと見えまする。兩人旅の用意せい。」　左、紋「ハア。」　源「サア〳〵是れはしたりどうでございまする。」　縫「どこへ行くのぢや。」　源「どこというて、マア宛なしに出るのでござります。」　皆々「さうして爰はえ。」　源「天下よりの仰せ付けられ、明けて渡さにやなりませぬ。」　みゆき「そんなら明けて渡すか。」ト源八が顔をぢつと見て、みゆき「エ、腑甲斐ない。」ト泣く。　みゆき「エ、男になりたい〳〵。」　縫「そんなら此の屋敷に籠る所存はないか。」　源「アア是れ壁に耳天に口、我々同士の意趣ならば、いかやうにもなりますれど、天下へ弓引くと朝敵、朝敵となればたとひ後日にいか程の大功なすとても、再び相續は叶ひませぬぞや。サア〳〵共々にお諫め申してサア〳〵〳〵。」　みゆき「ハッ。」ト取亂して泣く。　喜蝶「お道理でござりまする。」　總「マアお立ちなされませい。」ト泣く。　源「ア、是れ〳〵とも〴〵諫め、エ、何をきよろ〳〵。」　縫「イヤ此の草鞋は右へはくのか左か、根つから知れぬもの。」　源「どちらなと穿いたがよいわい。」トみゆき足の立たぬ思入、源八みゆきを引起し、　源「これみだい様、お前には川浦遊軒、熊本辮之作といふ二人の敵がござりまするがや。」　みゆき「イヤ、。」トみゆき屹度する、其の顏へ刀さしつけ。　源「これ此の血しほは左

死ぬる。皆々「是れ申しこれはア、、。」源「スリャ御朱印も辨之作め汝。」ト花道の方へ驅け出す、向うよりみふね包を脊負ひ走り出で、血みどろになつて源八に行き當る。源「ヤ女房みふねか。」みふね「御家の大事ぢや〳〵」ト轉ける。皆々「ヤアみふねか。」ト源八ゆかうとする。みゆき「コリヤ源八、みふねが此の形、家の大事ぢやといふがや。」小「是れマア何ぢやしらぬが、大事やといふなう。」ト源八驅け戻り、みふねを起し呼び生けて、源「コリヤ女房、氣を靜めて物をいへ、源八ぢや〳〵。」みふね「是れ此の切先の血を見て、源八に無念なといへと。」トのる。源「コリヤ〳〵跡も先もいはいでは合點がゆかぬ篤りといへ、左衞門樣が此の切先の血を見て、無念なといへとか。」みふね「眞の太刀此の土器それ。」ト風呂敷放り出し、ウンとのり死ぬる。源「何ぢや〳〵、みふねヤアイ。」ト色々して、「もうコリヤ息が絶えたか。」皆々「ヤア。」源「マア包の中を」ト解く。みゆき「ヤア、こりや夫左衞門樣の御首ぢや。」皆々「ヤアナニ左衞門樣の、ハア。」ト遠攻になり、皆々恟りする。源「兩人遠見せい。」紋、左近「畏まつてござりまする。」トはひる。是れより思入樣々あつて、源八土器の破と太刀とを見て思案。みゆきは首に取付き取亂し泣く。源「聞き傳へたる天杯の土器眞の太刀、此の血を見て無念なといへと左衞門樣が、切腹なれば、ソレみゆき樣に戀のかなはぬ意趣、遊軒が大内の。」ト思入あつて、花道の方を睨みつけ、「エ、さぞ御無念にござりませう。」トみふね方に向ひ、「出來したうい者ぢや、よく知らせたな。」

たゝき出せ。」皆々「エ、。」與「とてもの事にさう〳〵たゝき出したがよからう。」將「奥へいてみゆきめを引きずり出し、一緒にうせう。ナニ與三右衛門殿是れにござりませう。」トはやる、七ツの半鐘。

縫、總、源「與三右衛門樣、コリヤマァ何うでござります。」與「もはや七ツ時、六ツまではたつた一時、用意の乘物。」侍「ハア。」ト乘物八人して舁き出る。與三右衛門乘る、花道の方へゆく。皆々「これは。」與「明六ツまでに屋敷を立退け、將監殿には覺悟なされといへ、狼狽へて此の場に居ると命がないぞ。」侍「エイ〳〵〳〵。」ト早打の如く舁きはひる。皆々呆れて居る。皆々「コリヤ何うぢや。」トみゆき長刀にて辨之作を追掛け出る。立廻り有つて、みゆきが長刀を打落し、引きかたげうとする、源八辨之作を取つて投げる、立あつて辨之作逃げて入る。將「辨之作の主殺しめ。」ト手を負ひ出る。皆々「ヤア將監樣。」源「南無三寶コリヤどうして手を負はしやつた。」みゆき「家來、辨之作が豫て川浦遊軒に頼まれ、私を口說いたが、今度の御使者に左衛門樣の御供、それに今宵忍び入り、私を連れ立退かうとするを支へなされたれば。」源「此の通りの深手か。」ト狼狽ゆる。將「おいの。」源「おのれ辨之作め。」ト行かうとする。みゆき「源八まて、將監樣のお命が危いがや。」ト源八戻る所へ紋之丞出る。紋「今まで家中揃ひ居りましたが、屋敷人ぎれは一人もござりませぬ。」皆々「ナニ一人も居ぬか。」左近「其の上廻船往來の御朱印が紛失致しましてござりまする。」皆々「ハア。」將「ナニ廻船往來の御朱印が。」ト

い。」將「源八勘當ぢや出てうせう。」源「ナニ勘當とな。」與「先づさつぱりと勘當がよからう。」將「對面これぎり、うせう。」源「ハツ。」與「序に申すが、みゆき殿はもと舞子となり、是れもつて遊女、序に是れも勘當して了はつしやつたがよからう。」將「一人たんれいなれば一國亂をおこす。」與「一人も置かぬが政道。」將「いふに及ばぬ、みゆきも勘當ぢや。」皆々「エ、。」與「妹おのれも勘當ぢや。」ト突きやる。喜「エ、。」與「妹、おのれが不義も知つて居る、勘當ぢや、うせう。」喜「なんにも申しませぬ。怺へて下さんせえ。」小「そこら中が勘當だらけになつた。」與「イヤ勘當なされずば、御上へ此の事噂あらば家の疵、勘當とはいつちよい思案でござる。」將「倅めゆゑに妹御を捨てさせまする段、なんばう氣の毒に存じまする。」與「イヤもう手前などは勘當致せば七生までの勘當。」將「手前とても七生までの勘當。」與「併し一旦は左樣仰せらるれども、指が穢いとて切つては捨てられぬ俗の譬へ、少し此の勘當與三右衞門會得仕らぬ。」ト將監書く。將「これを宜しく申し上げて下されい。」ト一通認め出す。與三右衞門取つて、與「一、倅縫之助事、身持放埓、又みゆきは遊女なる由詮議の上不屆至極、夫れ故七生までの勘當致し申す所實正なり。此の儀鎌倉へも御披露願ひ入る者なり。正月晦日、花滿將監、同じく左衞門。成程此の通り言上仕りませう、とてもの事に刻限をお書き入れなされい。」將「心得ました。」ト書く。與「是れでまがひなき勘當、御家の格式は立ちました。」將「家來共門前より

皆々「いえ是れは。」將「いふまい慥かに聞き屆けた。」與「將監殿此方には先祖より、家中には不義法度の固い掟と承つたが見ると聞くとは大違ひ、妹喜蝶の婚禮の夜に傾城遊女を引込み、館は揚屋同然、是れで濟みまするか將監殿、急度御返答を承りませう。」將「さて〳〵いはう所もない憎い奴等、源八おのれも同じ穴の狐ぢやな。」源「與三右衞門樣、是れはどうでござりまする。」縫「與三右衞門殿、此の者は御自分樣の妹喜蝶殿でござります。」與「だれが、つひに見た事もない女、郭の傾城賣女めに與三右衞門近付は持ちませぬぞ。」總「イ、エイナア、お前が妹喜蝶ぢやと、私を連れてござんしたぢやないかいな。」與「やい〳〵何をぬかす。」ト喜蝶綿帽子を取る。縫、總、小「ヤア是れは。」與「宵より婚禮を待つ所に、延引するこそ道理、コリヤ何ぢや將監殿、淀與三右衞門は武士でござるぞ、妹を揚屋同然の屋形へ嫁入は得させせますまい、傾城ゆゑ妹めは廢りました、淀與三右衞門が武士の立つやうの御思案が承りたい。」皆々「なんのことぢや。」將「成程御尤も、返す〳〵も不所存者の倅め、勘當ぢや。」皆々「エ、。」將「七生までの勘當ぢや、早く出て失せう。」縫「ハッ。」與「成程御尤も、勘當さつしやれずばなりますまい。」源「憚りながら與三右衞門樣、お前さまが。」與「將監殿、武士が知行をくれ、召抱へるもまさかの用に立てん爲、夫れに家中へ指南もする身を以て、滿座の中でぶちすゑられたは、さし當つて祿盜人、こいつらは何うなされまする。」將「御尤も。」與「序に勘當なされずば成りますま

苦勞を物語して、兄弟の名乘をしたわいなア。」縫「それで讀めた、兄左衛門どの、堂上方の娘を妻に貰うたとばかり、親の名もいはず委細は追つて知れうというて暮さつしやつたが、そんなら舞子といふ事を隱さうためでおつたか。」源「そりや私に竊かにお話でござりまする、みゆき樣の舞子のときの名は大吉と申しまする。」小「いかにも元の名は大吉といふ舞子で有つたげにござりまする。」縫「是れはしたり。」總「そんならお前も此のお家の一家ぢやわいなア。」小「ア、一家にしては薄いものぢや。」源「さて最前聞いてをりましたが、コリャやつぱり傾城の總角どのでござりまするか。」縫「オイなう。」源「何ぢややら入組んだ樣な譯ぢやがどうでござりまする。」縫「サア己も合點が行かぬ、高が此の小市は喜蝶といひ交して居る、おれは太夫へ添ひたし。」小「そこで縫之助樣と相談して、高は喜蝶を去らして連れていぬる約束して置いた所が是れぢや。」縫「マア何ういふ仔細でおぢやつた。」總「さいなアお前の金は來ず、其の間に身請の客の埒が明いて行かねばならず、死なうと思うた所に、其の客といふは思ひがけもない與三右衛門樣、何であらうと己が妹の喜蝶ぢやというて連れてゆく、いふやうにせいと俄に拵へてつれてござんしたわいなア。」源「したが扨は喜蝶殿も縫之助樣も、いひ交した者のある事を知つて、圓う納めうといふ與三右衛門樣のお志、仇に思はつしやりまするな。」總「エ、忝い。」將「樣子は殘らず聞き屆けた。」總「ヤア親人樣。」將「そこに居るは島原の傾城總角ぢやな。」

いぢや。」ト傍へ坐る。弟子皆々袖引き合ひ氣の毒なる思入。平太そろ〳〵起きて刀を差し、徐かに塵を拂ひ。　平「どんな事が有つても勝つ所で勝ちさへすればよいぢや。源八なか〳〵手利ぢや、ようぶつた何にも云はぬ。此の禮は重ねて屹度いふぞよ。」　源「關口平太、神道源八何時なりとも承らう。」平「いはいでならうか。」　源「聞かいでならうか。」　平「どうで遲いか。」　源「はやいか。」　平「禮いふ所が。」源「互のせつぱ。」　平「しつかりと。」　兩人「忘れなよ。」　ト唄になり、平太みな〳〵連れてはひる所へ、縫之助總角出る。　縫「源八出來しやつた〳〵。」　總「大體氣味のよい事ではなかつたわいなア。」　源「何アノ位の事に屈託する者ぢやない、マア證文を戻しませう。」トやる。　縫「こいつにかゝつて樣々の目にあふ事ぢや。」トやぶる。小市奥より出る。縫之助行き當つて、　小「ワアイ、イヤもう歸ります。」　縫「小市ではないか。」　小「縫之助さん、ヤこなさんは〳〵、よう酷い目に逢はしたぞよ。」　縫「イヤもう背中に腹ぢや堪忍してたも。」　總「小市さん、お前はどうして繩を解いて戻らんした。」ト將監、與三右衛門喜蝶に綿帽子著せてつれ出る。　縫「ほんにどうして繩はとけたぞ。」　小「サア變つた事ぢやないか、あのみゆき樣といふはおれが姉ぢやわいなア。」　縫、總、源「ヤア、、、、。」　小「わしが親は禁裏の諸太夫で有つたが、仔細あつて浪人の尾羽うちからして、姉は舞子に賣られる、私は奉公に往て今此の形、最前の守袋に生まれ年月が書いてあつたを見て、幼顏が殘つてある、小さい時の話、親達の事、憂き

いナ。」源「夫れもやり兼ねはせぬて。」平「ハ、、、やり兼ねずば最前御前でナゼやらなんだ、そこらが口は調法で貧乏隠しの段ぢや、コリヤ〳〵よい事いうて聞かさう、己と勝負せい、乃公にちつくりでも打勝つたら、コリヤ我が望む證文をやるわ、其の替りに腰を叩き歪める、事によるとぶつて〳〵ぶち殺さうも知れぬぞよ。」源「打勝つたら其の證文とるぞや。」平「ハ、、、もう慾になつた、よいわコリヤ證文は爰にあるわ、マアちよつとマア〳〵、ひゞくれのさき蚤のきん玉の斧で破つた程でも、竹刀の先が、平太身體へちよつと當つたら直にこれをやるがけうといものか。」源「力一杯やつて見ようわい。」平「オ、出來す〳〵。したが思ひよらぬ所をかうぶちかけると。」源「かう止めるでありさうなものぢや。」平「よつ程ようなつたわいやい。又爰を外してかうやつたら。」源「かうして防ぐぢやてや。」平「えらいものぢや。所をかう付込んだら。」源「斯うして。」ト是れより立色々ありて、源八平太をぶちのめす。源「かうぶつた物ぢや。マア此の樣なものぢや、どなたでも何奴でもマアこんな物ぢや。」ト弟子ども氣味わるがる。「ドレさらば證文を。」ト取る。平「コリヤそれは。」源「何ぢや、竹刀がちくとでも當つたら證文やらうと賭づくぢやないか、約束ぢやに依つて取つたがなんと。」平「よう取つた、けうとい物ぢや、其のけうとい所を又かう。」ト拔いて斬つてかゝる、立廻りありてぶちすゑる。

源「まだ望みならかう〳〵、いくつでも氣に入つたやうにぶつてやるほどに、さう心得て居たがよ

て、わざと立合の勝負に負けてやつたといふのか。」源「イヤ全くさうではない、それはそれ是れは是れ。」平「だまりァがれ、うぬは太い奴ぢやなア、いけもせぬ立合に打ちのめされたが面目ないに依つて、物にかこつけて云ひくろめるのか。」源「さうではない。」平「ならぬ、ぐつとならぬ、大べら坊めが、面の皮の千枚で、また此の平太にずはら〳〵とものをぬかすな、皆弟子が落ちたが恥かしうないか、此のおとがひで、此の面で、よう悪たいを聞くなア。」ト指で突く。平「せめて無念なとおもふ根性があらば、きんたまでも踏まへてくたばれ、アノおほどろばうめが。」ト顔をはる。源「源八邪でも非でも、貰ひかゝつたものぢや、もらはにやならぬほどに、さう心得てゐやれ。」平「ハヽヽ、皆聞きやれ、あゝいふ頤ぢや。」十、新、清「今の様に打たれても。」皆々「恥かしうないか。」源「忠義の恥かしめは韓信も股をくゞる、強うても負けるもあらうし、弱うても勝つもあらうし、そこは千差萬別ぢやとおもうたがよい。」十、久「おもしろい。」十「つようて負けるならば、其の強い所へチトお見舞まうさうかい。」源「何時なりと御出でなされ。」久「其のそつ首をかう。」ト打ちに懸り、十内同じく打掛る。竹刀打にて二人を打ちすゑる。源「マアざつとこんなものぢや。」新、三「さういふ所を後からかうと。」ト又かゝるを立廻りあつて打ちすゑる。源「何人なりとお出でなされ。」平「コリヤ出來た、けうとい物ぢやが、それは皆とり〴〵の猿を見る様なわろたち、ひやうりでやられもせうが、先生はいかぬて

と申さうか、盲目蛇に怖ぢずと申さうか、面の皮の厚いと申さうか、身の程を知らぬと申さうか、けち太い腰骨も痛むであらうが、それは手前が打ちたうて打つたのぢやない、貴様のけち太いから叩かれたのぢや。かの水を浴びて居る物を、足首を泥鼈めが食らひ付いて引込まうとするを、引捉へられて料理せらるゝと同じ事ぢや。したが面の皮の厚いのは零落れた時の甚う多足になるものぢやげな、かうさつしやれ、もう兵術は止めにして辻坊下の豆を切る鎌の曲か、それ今の鍋でもかぶる太夫になつたがよい、ハ、、、、。」源「イヤもうお差圖受けまして、何なりとも稽古致さにやなりませぬ。時に平太どの、先づ御師範の印可はとらつしやる、渡、堤ともに淀川の普請は受取らつしやる、先づ言ふこどろのない、これで其許の十分になつたと申すもの、時に其の替りにちと其許へ御無心の筋がござる。」平「無心とはな。」源「餘の儀でもないが、物ぢやて。」平「ヤ。」源「へ、、、物ぢやて、其の物を下されまいか。」平「ヤ。」源「わが身にも主ぢやないか、難儀さつしやる事ぢや、又あればかりが女子でもござるまい、サもう貴殿の十分になつたからは、餘の事はいかやうにもなりさうな事ぢや程に聞き分けて。」平「これ／＼源八、何ぢやと思へば物ぢやをば返しくれいか。」源「サア夫れをどうぞ。」平「ならぬ、ずんとならぬ。」源「サアなるまい、さう見たに依つて貴様を十分に納めた忠義者ぢやに依つて。」平「ヤア。」源「其の志を酌みわけて。」平「ヤイ／＼そんなら何か、その物を貰はうと思う

にもない事を教へ込んで、きうせん筋へ固つたに依つて、一人々々本街道を教へて、眞人間にしてやらうと思へば、ア、世話やの〳〵、滿足に教へてやらう。」皆々「有りがたう存じまする。」平「皆仕合なわろたち、有卦に入つたやうなものぢや。」皆々「左樣でござります。」平「ドレ弟子師匠の杯致さう、奧へござれ。」皆々「ハア。」ト行かうとする。源「イヤ關口平太ちよつとお目に掛りたい。」平「拙者に。」源「成程。」ト兩人向うへ出る。平「用とは何でござる。」源「ハ、、、、イヤもう日比は手前も己やれ、いでと思はば樊噲項羽でも一握りのやうに存じたが、なか〳〵參るものではない。最前その許の働き微妙の構へに、寄りつかゝる事ではござらぬ、向後手前も御指南を受けませう、門弟になされて下されうならば忝う存じまする。」平「ハテいつにない利口な御挨拶で痛み入りまする。」源「イヤもう甲乙を見ますれば天と地と申さうか、富士の山を蟻がせゝるも同然、及びません〳〵。」平「イヤ又其の樣にもござらぬて。」源「イヤサ及ばぬと申す證據には、目の前で弟子衆が、其許へ破門致されたを何とも申さぬ、又各の前でかく申すが、此の後從ひまする性根でござる。」平「是れは痛み入る御挨拶、左樣に仰しやれば此の後睦まじう致し、互に申し語らひませうと申したらよからうが、いやぢや、貴樣は大きな蠅くらひぢやの、此の間から兵術は天下に我ばかりのやうに、いかに頤に細工のよい蝶番があるというて、人も多いに此の關口平太と立竝んで爭ふといふは、膽のたばねの丈夫な

物があるぢや。」皆「エ、。」平「ものぢやて。」ト縫之助睨む。源八顔でとめる。小「とんと壺ぢやて。」
みゆき「縄付引立てい。」皆々「うせう。」ト唄になる。
平「ア、どいつもこいつも精出して祝言しあがつたがよい、追付おもひ知らしてこまさうぞ。したが何と、日比には口聞いても今のを見られたか。」十内「イヤもう見ぬ事は話にならぬ、常の頤とはうらはら、イヤもう驚き入りましてござりまする。」三平「あの又たゝかれた時のざまといふ物は、かゝつた形ではござらぬ。」伸之進「彼の後足を殴られた時は、病犬が水道へ轉け込んだざまぢや。」平「イヤ拙者もちくと骨も折れうかと存じたが、根からはい猫を嬲るやうな、あれが腕なしの振りづんばいでござる。」角兵衛「源八殿、今日の勝負はわれらも摩利支天へ立願をかけまする程の儀、こなたもかねて高言を吐いて置いたぢやないか。」新治「イヤ是れお待ちなされ、百萬だらいうたというて、負けてしまうて、何の役に立たぬ事ぢや、各々方は存ぜぬが、手前はズント思ひ切りました。」角「拙者も是れからよい師匠取りをして、武藝を勵まにやならぬ、何れもは何と思召す。」皆々「我々も左様でござる。」角「源八殿、向後師弟の縁を切り、指南は頼みませぬぞや。」新「指南上げましたぞや。」角「平太殿此の列の者一人も殘らずお弟子になりたう存じまする。」新「向後弟子になされて下さりませうなら、有り難う存じまする。」平「オ、こりや皆利口になられた、それでちつと米食ふ武士の樣な、ア、したが祿

平「せきせき御通ひ下され候御心ざし、御嬉しく御座候へども、此方にちと〳〵さし構ひ御座候まゝ、ぜひぜひお思ひ切らせ下さるべく候、此の後御返事も申さず候」と、ひら様〳〵、あげまきより。此の状と此の起請の寫しが同筆、是れが傾城といふ證據。」みゆき「ドレ其の状こゝへ。」平「御覽じませ。」トみゆき取つて、みゆき「ほんになう、コリヤ紛れもない同筆ぢや。」ト引裂く。平「オ、これソリヤ何うなさります。」みゆき「どうもせぬ破つたのぢや。」平「それを破つては。」與「平太、妹を傾城といふには又何ぞ證據があるか。」平「證據は。」與「ドレ證據は。」平「みゆき樣何で破らしやれた。」みゆき「破つたは其方が爲ぢや。」平「けぶけれんな事を仰しやるが、何うして爲ぢやな。」みゆき「家中一統に郭通ひは御法せき、それに、平樣」とあげまきとは、そちや法度を背いて郭へ通うたか。」平「サそれは。」平「破つてやるは其方が爲ぢやわいやい。」平「ハア。」ト口を開く。與「平太妹は傾城か篤と見い。」平「見す〳〵傾城の。」みゆき「顏を見知つて居れば郭へ通うたのぢやな。」平「サそれは。」與「近付かとく見い。」平「イヤ近付ではござりませぬ。」與「こな慮外者めが、急度捕へて糺明する奴なれども、妹が一世一度の祝言の夜、今は免す以後急度嗜め。」平「壺被つたやうな。」小「どこも壺がはやる。」みゆき「サア構はずと奧へお出でなされませ。」與「妹おくへ。」總「アイ。」平「ア、何程壺かぶつても、まだこつちにはよい

禮して、それより竹刀打にかゝる、雙方の弟子より掛聲、此の立さまぐ\あるべし。つまりに平太源八を打ちするゑる。皆々「ヤア平太殿お出來しなされた。」與「平太、適れの手のうち、見事々々。」將「出來した、是れは花滿の家の印可、師範たる者に讓るが古禮、淀川往來の普請も其方に云ひ付けるぞ。」ト印可を左近取次ぐ、平太取る。平「有り難うござりまする。弟子衆悦ばつしやれ。」皆々「お手柄申さう樣もござりませぬ。」平「ヤァきつう骨の折れる事もござらぬ、たまりに控へて居る百姓共へも、此のとほり申して聞かして歸したらよからう。」左「畏まつてござります。」ト入る。將「是れで追付普請も成就致さうと存じて氣が休まりまする。」與「左樣でござりまする。」將「サア奧へ參つて祝言の杯致さう、與三右衞門樣お出でなされい。」與「追付まゐりませう。」將「みゆき皆ひき連れておぢやれ。」みゆき「畏まつてござりまする。」ト入る。將「紋之丞まゐれ。」紋「ハア。」ト將監つれ入る。與「源八は定めて殘念に思ふであろ、併し天災不定というて、大丈夫の氣にかけるものでない、主人の馬の眞先が肝要ぢや。サァ縫之助殿、奧で祝言の杯致さう。」平「イヤなりますまい。」與「なぜ。」平「部屋住ながら一國の大名、傾城を女房にする事はなりますまい。」與「傾城とは。」平「何もかも承つた、與三右衞門樣、餘りなされやうが粹過ぎていやぢやわいの。」與「與三右衞門が何がどうした。」平「此方樣の妹御というて嫁入した此の女は、總角といふ島原の傾城さ。」與「與三右衞門か妹を傾城といふには、何

ました、則ち是れにござります。」與「妹自筆で一筆書け。」總「ハイ。」ト左近硯箱持つて行く。總角書く。與「久馬見やれし。」ト久馬見合はす。久「コリヤ拔羣の相違。」與「夫れでさらりと詮議は濟まうが。」久「ムウ。」トこゝのツの半鐘打つ。左「子の上刻でござりまする。」ト花滿將監出る。將「子の上刻か。」紋、左「左樣でござりまする。」與「將監殿、かの勝負唯今でござりまするか。」將「唯今でござりまする、幸ひ皆これに居るわ。」與「見物仕りませうかい。」將「雙方ともに呼び出せ。」紋「ハア。」ト竹刀しなへを向うへ直し、紋「關口平太殿。」左「神道源八殿。」紋、左「立合の刻限でござるぞ。」平、源「ハア、ッ。」ト雙方より弟子多勢連れ出る。將「源八平太、改めて申し聞かすには及ばねど、鎌倉より仰せ渡された淀川普請、兩人に申し付けたれども、互に意趣を拒んで延引する故、鎌倉への聞え御朱印を預る此の家の疵になる、夫れゆゑ竹刀打の勝負、勝つたる方へ家の師範、淀川筋の役目一時に申し付ける、左樣心得い。」兩人「ハア。」與「源八平太が爭ひは承り及んだ、堤も築かず渡も渡さず、さし當つての難儀は當家でござりまする。」將「左樣でござりまする。」みゆき「凡そ二三年も普請放つてござりまするゆゑ、誰いふともなしに源八の渡、平太の堤と申します。」縫「大切な勝負ぢや、打負けぬやうにしやれ。」ト平太を見て睨む。平太總角を見る、嫌がる。平「エ、ウ、ン〳〵。」紋、左「雙方共にお立合なされい。」ト是れより身繕ひする、弟子兩方へ別れ急度見て居る。兩人立合ふ。是れより兩人將監方に目

たかつておれを獨りはね出しものにしたわ、アイ、あの喜蝶と申しますはあれは島。」與「そいつく〻れ。」十内「捕つた。」ト小市を縛る。小「是れは迷惑な。」與「大騙りめが、何もぬかすな、ぢつとして居れば事により歸してくれまいものでもない、いらぬ頤を利くと、直に首が飛ぶぞ。」小「アイ〳〵、何にも物は申しませぬが、是れは又迷惑な事ではある、覺えてござりませえ。」みゆき「合點のゆかぬ事ばかりぢや、とくと詮議しや。」十「大騙りめ、おのれ仔細のあるやつぢや、先づ懷中をせんぎして。」小「何うなとなされませ。」ト十内懷中を搜し、十「さして仔細もない。」ト守袋を取り、小「何の爲に。」十「懷中に此の守袋がござります。」ト渡す。みゆき守を取つて、みゆき「これは。」十「なんぞ仔細がござりまするか。」みゆき「與三右衛門樣、あの繩付には些と詮議致したい事もござりまする、私にお預けなされて下さりませ。」與「イヤ此の館へ仕掛に參つた騙りめ、いかやうにともなさりませう。」みゆき「そんなら預りましてござりまする。」與「いかやうとも〳〵。」みゆき「ソレ片脇へ引据ゑて置け。」十「サア立たう。」小「立たう、何の事ぢや、一つも合點がゆかぬ。」縫「與三右衛門樣何も申しませぬ、エ、有り難うござりまする。」小「何の事ぢや。」與「いよ〳〵妹めが儀を賴み存じまする。」縫「千年も添ひまするでござりませう。」小「壺被つたやうな。」久「イヤ與三右衛門樣、少し詮議が殘りました。」與「みどものの。」久「何とやら氣味のわるい物のいひやう、最前あの男めが、いひかはした證據と起請を出し

みゆき「浪人まつた。」十内「御意ぢや待たう。」小「ハイ。」みゆき「喜蝶さん、お前はいひ交した覺えは有るまいなう。」總「めつさうな、其の樣な事が有つてたまるものでござりまするか。」みゆき「お侍、いひ交した覺えがないと有るからは、約束の通りそなた騙りぢやぞや。」小「えゝ。」與「二腰を差しながら、一國の大名に無實を云ひかけ、それ儘にしておかうか、身が妹を何ういふのぢや。」小「ハイ。コレ縫之助樣、よいやうに云うて下さりませいのう。」與「縫之助樣、いかう馴れ〳〵しい物のいひやうする浪人ぢやが、部屋住なれど左衛門殿の舍弟、彼等しきの素浪人に、知る人あらう筈がない、ハテ知る人なれば妹喜蝶がな、何や彼やさし構ひになりさうなものぢやなァ、よもや知る人ではござるまい。」小「イエ〳〵知る人の段ぢやない。」縫「ヤイ〳〵、竟ぞおのれ見た事もない奴ぢやが、何故騙りをいうて來た、まつすぐにいへ。」小「それは何ういふのぢやいなァ。」縫「何者に頼まれたか有樣にいへ、いはぬと骨を拉いでも言はさにや置かぬぞ。」小「イヤ是れもすさまじいわ、コレお前頼んで私に斯うせいと。」縫「ヤイ〳〵そりや何をぬかす、エ、聞えた、扨はおのれ身が熱うなつたによつて、樣々僞りをいうて、此の場を遁れう〳〵とする大盜人め。」小「是れはきようがる、いかに面々許りすつくりと旨い目に逢うたというて、コレ主はぬしとも思ふが、此方がしゝらしんとして居る所ではないわいの。」總「よう私にいひ掛けをしに來てたな、何うやら怖い男では有るわいなう。」小「さう〳〵寄つて

どうぢや。」總「もう〳〵縫之助様、妾や淀與三右衛門が妹の喜蝶でござんす、嫁入して來てお前の女房ぢや程に、かはいがつて下さんせえ。」縫「是れはマア夢ではないか、與三右衛門様どうでござります。」與「イヤこれ縫之助殿、御親父將監殿と縁組いたした喜蝶はそれでござる、不調法ものでござれども、此方を戀ひこがれまする故、取急いで嫁入致させた、天下晴れて夫婦にするのぢや程に、必ず粗相のないやうに頼み存じまする。」縫「ねつから合點がゆかぬ。」小「おれも合點がゆかぬ。」與「但し不得心にござるか。」縫「めつさうな、これが不得心でたまるものでござりまするか。」與「然らば添うてくだされうか。」縫「添はいで何と致しませう。」小「何のことぢや。」みゆき「お侍サア喜蝶殿の出やしやんした程に、詮議さつしやれ。」小「いえ〳〵、コリヤ喜蝶ぢやない、本の喜蝶を呼び出して下さりませ。」總「これ〳〵粗相いはしやんすな、淀與三右衛門が妹の喜蝶は妾でござんする。」小「何を此方は、喜蝶ではないもせぬもの。」總「きてふでござんす。」小「何程でも喜蝶ぢやない。」總「喜蝶ぢや〳〵。」小「喜蝶ぢやない〳〵。」トせり合ふ。與「妹、何をせり合ふ事がある、ひかへて居いサ。」みゆき「お侍、其の喜蝶殿とはいひ交しては居やつしやらぬか。」小「イ、エ、こりや何うぢやいなア。」縫「何うぢやの斯うぢやのといふ事はない、俺や嬉しうてたまらぬわい。」小「各自ばつかりうれしがつて。」久「不義ではないの。」小「ちよつと往んで參じませう。」

みゆき「ハテそれは合點が行かぬ。」トいひ〳〵出る。みゆき「與三右衛門殿。」與「扨今日は種々の御馳走、將監殿にも殊ない御悅び、こなたにも別して御取持ちでござる。」みゆき「イヤもう風情もない仕合でござりまする。」與「時に今奥で承れば永介とやら、妹喜蝶にわけが有るとやら、其の浪人はあれか。」小「いかにもえらふ永介は身共さ。」みゆき「お覺えがござりますか。」與「ハテ藥袋もない、淀與三右衛門が妹に其の樣な事が有つてよいものか。」縫「與三右衛門樣、何とやら私も心悪うござります、喜蝶殿をアノ侍におあはせなされましたらばようござりませう。」小「オヽ逢はう〳〵。」與「ハテ貴殿の面晴に、逢ひたくば逢はしてやらう、妹喜蝶あの侍にあへさ。」嫁「アイ。」ト縫之助の傍へゆく。縫「コレ大事ない、なにもかも諸事は味よう吞込んで居る程に、ちやつと傍へいて、すつぱりと有樣にいはつしやれ。」小「喜蝶か合點がゆくまい、何であらうと餘の筋はいらぬ、云ひ交して居る事を、すつぱりといひさへすりやよい、サア言うてしまへ。」トふり切つて縫之助傍へ行く。縫「ハテ扨何であらうと有樣にいひさへすりやよい、ちやつといはつしやれ。」ト突きやる。小「諸事は跡で知れる程に。」ト又縫之助方へくる。縫「ハテ扨面妖な。」小「怖い事はないわいのう。」トつれて來る、もぢ〳〵する。縫「マア此の帽子を取つて。」ト取る。總角なり。總角「縫之助樣。」縫「ヤアわがみは。」小「ヤアこなさんは。」與「與三右衛門が妹喜蝶、曇霞のない妹でござる、とつくりと詮議なされい。」小、縫「コリヤ

直筆の二世も三世も言ひ交した起請が證據、是れを見い。」縫「誠にコリヤ起請、皆粗相すな、慥かな證據が有るわ、荒立てると此方の武士が立たぬぞ。」小「何と是れが證據になるまいか。」皆々「ハテナア。」久「イヤ〱其の起請は僞物であらうも知れぬ。」小「千も萬もない喜蝶を爰へ出せ、喜蝶に逢うて喜蝶が身共を見知らぬといふたらば、身共は騙りぢや、又いかにも女夫でござるといふたらば、縫之助貴樣間男ぢやぞよ。」縫「面白い、喜蝶を呼び出して詮議する、左近喜蝶を爰へ引きずつて來い。」左「畏まつてござりまする。」みゆき「左近まて〱。」縫「なぜお止めなされまする、是れへ呼び出し詮議致しまする。」小「早う出せ〱。」みゆき「まてマアまていやい、縫之助樣、喜蝶を爰へ呼び出して、もし覺えがないと云はしやんすればよけれども、もしいかにも私が夫でござると云はつしやると、甚う詮議がむつかしうなつてくるぞえ。」縫「何の難しい事はござりませぬ。」みゆき「むづかしいわいなア、ア、氣の毒な。」小「何の氣の毒な事がある。」縫「大事ない左近、早う連れて來い。」左「畏まりました。」ト入る。久「ウム紋之丞、そちは此の通りを與三右衛門樣へ委細に申し上げて、是れへお出でなされといやれ。」紋「畏まりました。」小「だんない與三右衛門怖うないぞ。」みゆき「コレお侍、大事のことを云うてござつたが、いよ〱夫れに相違はないかや。」小「えらふ永介武士でござる。」ト小市縫之助目くはせするところへ、嫁綿帽子白無垢にて、淀與三右衛門裃にて、紋之丞、左近付き出る。

ナ。」小「成程えらう用がござる、ちよつと夫れへ出やッしやれ。」縫「拙者にナ。」小「いかにも。」ト向うへ出る。縫「御用とはナ。」ト小市取繩を出したぐる。小「縫之助腕廻しやれ、異議に及ぶと蹈み付けて繩かける、返答は何と。」縫「まて〳〵つひぞ逢うた事もない奴が、此の縫之助には何誤りが有つて繩掛ける。」小「わりや不義者ぢや。」縫「不義とは。」小「ヤアしら〳〵しい、身が事は八幡の邊に蟄居する、えらふ永介といふ浪人ものさ。」縫「其のえらふ永介が何故繩をかけうとはいふ。」小「今宵此の館へ嫁入して來た淀與三右衛門が妹喜蝶は、身共が夫婦の契約をして居る所に、其の主のある喜蝶を嫁にとるは不義密夫。スリャ身は先の馴染、汝は後のなじみ、不義間男といふが、此のえらふ永介が誤りか、返答は有るまいがなア。」縫「スリャ嫁入して來た喜蝶とそちは懇して居るか、スリャ被せられたな。」久「まつた何とも合點の行かぬ、お聞きなされましたか。」みゆき「淀の城を預る程の與三右衛門、男のあるものをよもや緣組なされう筈がない。」久「コリャ聞えた、扨はお大名の緣組を見かけて強請り込み、金錢を貪りに來たかたりものぢやな、侍衆こいつ引きださつしやれ。」十內「大かたりめ。」ト立ち懸る。小「聊爾せまい、聊爾すると腕に覺えは有明櫻、はら〳〵はつと散りめされうか、お笑止な一ッのあんどを蹴破つて、明日の晩から事を缺かすぞ。」縫「ア、ラをこがましや、いかに永介、喜蝶と汝女夫ぢやといふには、何ぞ慥かな證據があるか。」小「證據のない事をいはうか、喜蝶が

縫之助様。」縫「それへ參りまする、賴むぞや〳〵。」トいひ〳〵入る。源「追付私が、せうどもないこと仕出さつしやれた、急に取返さねば大事になる。時にかうづ、是れでは戻しをりさうなものぢやが。」ト思案して、「かうつ。さうぢや。」紋「源八殿々々々々お召しなされまする、源八殿。」源「それへ參ります、ア、まゝよ、さうせずばなるまい。」ト小首傾け入る。唄になる。ト橋懸りより小市尻絡げ奥へ忍びこみ、小「イヤサ申す事は申さにやならぬてや。」侍「無禮な侍がある。」小「逢はにや置かぬ〳〵。」トせり合ひ出る。久馬みゆき紋之丞出る。久馬「奥へひざくが何ぢや。」十内「イヤ此の侍が若殿縫之助様に逢はうとお座敷へとほりまするゆゑ、右の仕合でござりまする。」久「お聞きあられましたか。」みゆき「どうやら見た様なお侍、何の用があつて此の屋敷へは參つた。」小「然ういふ女性は誰方でござる。」久「花滿左衞門の奧方サ。」小「奧方でも口方でも大事ない、縫之助殿に逢へば樣子の知れるものでござる。」みゆき「縫之助殿にあへば樣子が知れる、縫之助樣をよびや。」久「縫之助樣々々々々。」ト縫之助出る。縫「何ぢや何事ぢや。」みゆき「あの侍がお前に逢ひたいといはれまする。」縫「ヤ來たか、先刻にから。」小「ウ、ン〳〵。」縫「ムウ、貴殿には終ぞお目に懸つた儀もござらぬが、手前縫之助でござる。」小「扨は御自分が縫之助殿でござるナ、つひぞお目に懸らねば近付であらう筈もなし、近付でござらねばつひぞお目にかゝらうやうもなし、近頃無念殘念の對面を仕るなァ。」縫「して御用とは

の身體の一大事になる事ぢや、篤りと思案して下さりませい、下さるであらう、遅なると物ぢやて。」縫「おのれ。」ト平太寄つて當てる。平「物ぢやて、イヤハヤ結構なものぢやて。」ト入る、唄になる。ト縫之助起きて無念のこなし有つて大小差し、身繕ひして切り込まうとする。神道源八出で、源「お待ちなされませ、お待ちなされませ。」縫「イヤ退け〳〵、聞かぬ〳〵」源「マア待たつしやりませ、遂にない血相して、何處へお出でなされまする。」縫「平太めを切つておれも腹切る。」ト行かうとする。源「サアようござります、最前からの樣子は物陰から見てをりましたれど、日頃意趣ある平太、私が出てはなほ意地つようなりをつて、お身の妨げにならうと、態と控へてをりました。」縫「源八モウ堪忍がならぬ。」源「さればサ彼方は拔きさしのならぬ證文を持つてをれば、お腹も立てられまする程事の破れになつて、お家に疵が付きまするがや。」縫「というてあれを。」源「取返して上げませう。」縫「ヤ。」源「取返しさへしたら手の下の罪人どうせうと儘、私次第になされませ。」縫「そんなら取返してたもるか。」縫「おまへは何も知らぬ顏で、美しうしてござりませ。」縫「イヤもう取返してさへたもればよい。」源「其の事を必ず色目にもお出しなされますな。」縫「合點ぢや〳〵。」ト内より、みゆき「縫之助樣、縫之助樣、將監樣がお召し遊ばす、縫之助樣。」縫「ハイそれへ參りまする。」源「ちやつとお出でなされませ。」縫「そんなら賴んだぞや。」源「私が呑込んでをりまする。」ト内より、みゆき「縫之助樣

者に惚れるさへあるに、何ぢや郭へ通うた、大方其の位なら、常の客のやうな顔でかつて取つたも知れまい、汝はく／＼よう己に向つて、起請をおこせのくれいのと、そんな事よういふなア。」平「ハテ惚れたものぢやに依つて下さりませい、惚れる事はなりませぬかな、ドレ起請を下さりませい。」縫「まだまだならぬ、今度からそんな事いひ居ると、手討にするぞ大盗人め。」平「サア／＼ようござります る、それ程お腹の立つことなら貰ひますまい。」縫「なんの爲に。」平「ア、そんならせう事もなし。」ト立つて往かうとする。縫「コリヤ待て今の證文おこせ。」平「アノ此の證文を、ヤレ折角此方へ取つたものを、マア止しに致さう。」縫「ヤイ其の證文持つて居てどうしをる。」平「何うも致さぬ、大切な廻船の御朱印を書き入れた證文ぢやによつて、物ぢやて。」縫「ヤ。」平「物ぢやて／＼、太夫が起請くれてさつぱりと退いてしまつしやれば上げます、いやぢやと云はつしやると物ぢやて。」縫「そんなら汝いふ氣ぢやな。」平「何のお主の難儀になる事私が申しませう、總角さへ下さるれば申しませぬ、起請下さりまするか、下さりますであらう。」縫「エ、おのれはナア。」平「下されますか。」縫「ならぬわい。」平「ならずば物ぢやて。」縫「おのれそれを。」ト取りに掛るを突き飛ばす。縫「モウおのれ。」ト拔いて切りかゝる、刀もぎ捨て、平「ものぢやて。」縫「エ、汝を。」ト又小刀を拔いて切りかゝる、もぎ取つて捨て突き飛ばし。平「下さりませぬか、否ならものぢやて。」縫「おのれ。」ト捕まへ、平「此方

證文へ書き入れさして、うぬ、表むきで詮議すると首が飛ぶぞよ。」太「アイタ〳〵。」平「此の證文は闕所だ、命から〳〵去ぬるを有り難いと思うてうせう。」ト投る。太「コリヤまた餘り。」平「イツソ打放してのきよ。」太「ア、御許されませ。」ト遁げてはひる。縫「てもよい所へよう來てくれたなア。」平「お前もお前ぢや、上樣よりお預けなさるゝ所の、廻船往來の御朱印は大切なお家の柱、此のやうな事が聞えるとお國の大事になりますが、ア、藥袋もない。」縫「おれもさうは思うたけれど。」平「こなたは一向夢中ぢやで。」縫「サア今の證文早うたも。」平「此の證文をくれいか。」縫「オイなう。」平「縫之助樣、此方に平太めが一生の御無心があるが聞いて下さりませうか。」縫「イヤもう今の難儀を救うてたもつたわが身、何なりとも聞くわいのう。」平「先づ以て有り難う存じまする、別の儀でもござりませぬが、お前の深うい交してござる島原の傾城總角、私に下さりませい。」縫「ヤ。」平「モウぞつこん惚れぬいてをりまする故、郭へ通ひましても、お前と腐り合うて居るゆゑ、ねから手に廻りませぬ、お前が主ぢやに依つていはれもせず、忌々しう思うてをつたが、幸ひの所ぢや、私にさつぱりと下されい、總角が起請を持つてござるであらう、ドレ下されませい。」縫「平太、われは氣が違ひはせぬか。」平「何がどう致しましたとえ。」縫「イヤもう興もあすも覺めはてた奴ぢや。」平「なんにも覺める事もないがな。」縫「ヤイ太夫と深う馴染んで居るは郭中にかくれはない、其の主の思ひ込んで居る

マア何うするのでござりまする。」縫「サア〱尤もぢや、けれど其の御朱印の事は、急なに依つてつい書き入れたのぢや、中々わいらに渡す物ぢやない、金は追付濟まさうほどにモウ二三日。」太「ヤこれこれ、其の大事の物を書き入れさして置いたがこちのこみづぢや、千も萬もないからよござりまする。」トいかういふ。縫「わりや何處へ行く。」太「奥へ往て親御樣に此の證文を見せて、金受取りまするわいの。」縫「それをいうて堪るものか。」太「サア嫌なら二百兩の金今受取りませう。」縫「サア二百兩の金は。」太「金がなけりやアイ若殿樣に御朱印を。」縫「シツ〱ヤイ大きな聲すると爲にならぬぞ。」太「ヤア切刃を廻して切る氣か。」縫「さうではなけれど。」太「御大名の弟御が町人に金を借りて殺しても大事ないか、切られませう。」縫「其の樣に沒義道に物をいふなやい。」太「奥へいてめつきしやつきする。」縫「それをいうて。」ト取付く。太「ハテ面倒な。」ト突き飛ばす。立廻りある所へ關口平太取つて放り、當てる。縫「平太か、よい所へ來てくれた。」平「サア〱ようござります。」縫「彼奴マア。」ト平太、太郎右衛門が懷中の證文を取つて懷中へ入れる。」ト太郎右衛門起きて懷中色々さがし、太「コリヤ手酷い目に逢はしたはわれか。」平「われかとは素町人の分でうぬ〱。」ト睨む。太「イヤサ強い顏すない、今の證文はどこへやつた。」平「おれが取つた。」太「ヤア其の證文を。」ト取りに懸る、手を捩ぢ上げる。太「アイタ、、、。」平「大盗人めが、御朱印々々と澤山さうに、大切な物を

が。」みゆき「エ、およそな聟様ではある、ドレ私も喜蝶様の顏見て來う、けうとい縹緻ぢやげな、エ、あやかりものめ。」ト脊中をたゝき入る。縫「ホウ何のあやかり物な事があろ、よもや小市めに如才もあるまいが、辨之作はモウ太夫が事をいうて寄越しさうなものぢやが。」ト山家屋太郎右衛門町人の形にて出る。太「縫之助樣に逢ひさへすりやよござりまする。」侍「ぢやというて不作法な、何處までうせる。」太「サアようござりまする。」侍「憎い奴の。」縫「コリヤ〳〵待て〳〵、汝は京都の町人山家屋太郎右衛門ぢやないか。」太「縫之助樣お前は。」縫「コリヤ四邊へ目を利かせい、コリヤ此の者には用事がある程に、苦しうない次へ行け。」侍「畏まつてござります。」ト入る。縫「よう來たなア。」太「よう來たなア縫之助樣、コリヤどうなされまする、何うして下さりますのでござりまする。」ト關口平太聞いて居る。縫「コリヤ聲が高い、聞えるわいやい。」太「イヤ聞える樣にいふのでござりまする、お前が郭通ひの揚代に詰つて、どうもならぬ程に金二百兩貸せと仰しやる、大盡金は一文もなりませぬというたれば、金は濟ます違ひのない證據に、お上から預りの廻船往來の御朱印を預けうというて、コレコレ此の證文、右二百兩の金子來る晦日までに相濟み申さず候はば廻船往來の御朱印其方へ質物に差入れ申すべく候所實正明白なり。」縫「大きな聲をすないやい。」太「かういふ證文を書いて置いてモウ幾月になりまする、今日はやらう明日は渡さうというて、御朱印もおこさず金もおこさず、こりや

平「イヤ重々不調法。」平「イヤ手前が。」源「イヤ手前が。」兩人「ハ、、、、。」久馬「長柄の百姓共、わたし舟の大工共、其方達も子の刻までは溜りへ參つて控へてをれ。」大工百姓「畏まつてござりまする。」百「ドレたまりで待つて居よう。」大「そんなら待つてをりまする。」大「源八さまの勝に極つて有る。」百「平太樣の勝に極つた。」大「サアみなござれ〳〵。」ト兩方へ入る。左、紋「イザ先づ奥へお出でなされい。」源、平「各も奥へ。」△皆々「ハア、、、、。」源「平太殿。」平「源八殿。」源「勝負は子の刻。」平「後刻。」源、平「御意得ませう。」ト唄になり、侍を連れ雙方へ入る。みゆき「左近紋之丞懸物みな取片付けい。」兩人「畏まつてござりまする。」ト入る。花滿縫之助出る。縫「扨も〳〵急に來た程にの、エ、みゆき樣。」みゆき「縫之助樣、もう嫁御は見えたかえ。」縫「見えた段か與三右衞門が附いてをられ、親父樣と目出たい盡しの咄、まぜかへして居る。」みゆき「そんなら又お前も、ナゼ嫁御の傍に居やしやんせぬぞいなア。」縫「何をよい氣らしい。モウ來さうなものぢや。」みゆき「誰がいな。」縫「イヤサよもや彼奴も、あれ程に稽古した事ぢやによつて、來ぬといふ事はない筈ぢやが、エ、此方の身請もエ、つゝと俺ばつかりに氣を急かしをる。」みゆき「お前もきよろ〳〵と嗜ましやんせ、女子といふものはさうしたものぢやないぞえ、祝言の夜さりは、大體恥かしい怖いものぢやない、それでもあたまから壻のしなつこらしう物いふは甚うせるになるものぢや、そばに居てやらしやんせ。」縫「モウ來さうなものぢや

れに源八が渡成就する事を憎んで堤を築かず、渡さへ渡さずば堤の往來叶はぬと、互に拒み、兵法の流儀、私の宿意に主の用事を缺かすさへあるに、今宵は何ぢや、縫之助樣へ淀與三右衞門樣の妹喜蝶殿を婚禮の最中、夫左衞門は鎌倉の使者に京都へお上りなさるゝお留守の内、親殿將監樣も今宵の婚禮、わしまで上下に氣を付けるに、もし口論に及んで、雙方の武士が拔き放したら何とする、目出たい夜も家中に亂を起して主をのろふのか。」源、平「イヤ全く。」みゆき「殊に廻船往來の御朱印を預る此の屋敷、淀川往來の普請延引に及ぶゆゑ、今宵子の刻に兩人立合の勝負を決し、打勝つた方へ一人に云ひ付けいと親殿の仰せ、兵術も役目も打勝つた方が承る筈でないか、それに家中を騷がすは、主を蔑にする不屆者、但し左衞門樣のお留守の内と見かけての我儘か。」平、源「サアそれは。」みゆき「不所存者めが。」源、平「段々誤り入りましてござりまする。」みゆき「目出度い祝言の夜なれば、聞き捨てにして今は恕す、皆以來は嗜め。」源、平「ハア。」みゆき「子の刻までは魚と水の交はり、上下にも篤といひつけて、將監樣の御機嫌を伺や。」源、平「畏まつてござります。」文「誠に主人といふ重石がなくば、つい口論にも取結びませうもの、武骨の段は御用捨下されませう。」平「イヤもう時の彈みで、ふら〳〵と過言を申した、御料簡なされて下されい。」源「イヤもう今更面目次第もござらぬ。」平「結構な流儀を輕蔑致したは、下拙が誤りでござる。」源「イヤ手前から手を突きまする。」源「いや手まへが不調法。」

兩人向うへ出で、 平「なんと神道流は關口流よりはよい物かなア。」 源「サアレバ何れもは何と思しめす。」○皆々「イヤ拔羣のちがひでござる。」 源「あのとほりでござる。」 平「へ、、、、雀どもが轉るわ。」○皆々「雀とは。」 平「イヤ貴樣達の事ぢやない、雀の事サ、ごくにも立たぬ事を貧乏雀共が、ア、不便な事ぢやノウ何れも。」△皆々「不便な事でござる。」 源「ハア烏がなくわ。」○皆々「烏とは。」 源「イヤ各方の事ぢやない、烏めが事ぢや、扨よう啼く烏ぢやござらぬか。」○皆々「よう啼きまするて。」 平「ヤイ雀ら、アノ猿と云ふものはナ、己が面の赤いゆゑに、箔のぬつた佛の顏を見て笑ふといやい。」 源「アノ蟹といふ奴はナ、己が横に行くに依つて、直に歩く人間をわらふといやい。」ト平太が方をこづく。平「オ、澁い柹めは甘い柹の人に食はるゝを笑ふといやい。」 源「磔が獄門を見て、足がないというて笑ふといやい。」 平「スリヤ獄門の鹽梅、よう知つて居るか。」 源「知らずば些と知らさうかい。」 平「知らうわい。」 源「知らさうわい。」 平、皆々「知らうわい。」 源、皆々「知らさうわい。」ト兩方よりやかましういふ。 みゆき「雙方共にまてといふに待たぬか。」 左近「御意を背くか。」 みゆき「女子と思ひ侮つての仕方か。」 源、皆々「ハア。」 みゆき「源八平太それへ出い。」 平、源「ハア。」 みゆき「そち達は主人の禮儀を知つてをるか、イヤ知りやせまい、そち達兩人は兵術の御師範も、貴き身をもつて鎌倉より仰せ渡された淀川の誓請の儀も、かたみ怨みのないやうに、源八には渡、平太には堤と仰せつけられたではないか、そ

悪い方を指南受けるは、何うしたものでござるぞいなう。」平「イヤもう何うの斯うのと申して、マアいうて見れば生まれ付いた福と貧乏との違ひでござる、ハ、、、、。」△皆々「ハ、、、、。」源「人間は水と見れど天人は瑠璃と見る、又餓鬼は炎と見る。劍術も其の通り、邪を以て向はば、流儀よくても刃金なまれば無刀も同然、正道を胸に納め、道を以て向ふを神道流、かの同じ目明でも、いろはも得書かぬ者を文盲と申す程に、各も隨分流儀に眼を見開いて居たがよい。」○皆々「ハア。」久馬「源八殿其方のお弟子は文盲ではござらぬか。」△皆々「ちつと眼が開きましたかな。」源「イヤもう四書五經詩文章位は心得てござる。」△皆々「シテ外のはナ。」源「ハテよその文盲さ。」○皆々「さやうでござりまする。」平「みなよく聞かつしやれ、アノ大鵬でござる、兵術に取つては片羽がひが九萬里づゝ伸びまする。」△皆々「左樣でござりまする。」平「其の大鳥の前で雀侍が、ちやらくちや／＼と、ハ、、、、。」△皆々「ハ、、、、。」源「アノ烏といふ奴は、月などが冴えると夜が明けたかと思うて、ガア／＼と吼えまする、是れをあはう烏といふ。さてからすどもがガア／＼よう啼くぢやござらぬか。」○皆々「左樣でごりまする。」源「魚の腸でも引つかけさせて往なしたらようござらう、ハ、、、、。」○皆々「ハ、、、ハ。」平「どれ烏の因緣承らうか。」ト立つ。△皆々「お聞きなされざなりますまい。」源「烏の因緣聞かうとあるに、雀の因緣聞かいでもつまらぬものぢや。」ト立つ。○皆々「コリヤお聞きなされませい。」ト

△皆々「餘りと申せば。」平「ハテちやは〳〵言ふなら、言はして置いたがよい。」左、紋「雙方共にお引きなされい。」ト引く。大「汝らもかしましくいふなサ。」百姓「お國へ直に參りましたも、堤の普請をはやうして貰ひませぬと、又しても淀川の水がくゑこんで田畑が流れて、南長柄の百姓は乞食になりまする、源八樣と意地づくをお立てなされまするは、私共の迷惑でござりまする。」平「ハテ扠最前からの事を聞かぬか、儕等が其の泣きごとを吐すによつて、今宵竹刀打の勝負して、打勝つた方へ堤も渡もかためて取る、むねのわるいことを片付けて、追付ばた〳〵と普請して取らす、暫く待つてをれサ。」百姓「ハイ何卒賴み上げまする。」源「ヤイ大工共、わいらも難儀であらうが、今聞く通り意地づくに隙どる渡の普請、今宵のうちに何方へなりともかためたらば、急に取りいそいでいたしてくれう、暫くまて。」大工「ハイ先刻にから承りまして、何卒お前の利潤になりまする樣に致したうござります、私共大工も仕掛けて今に放つてござります故、棟梁受取りました私一人の迷惑でござりまする。」源「追付善惡が知れる、待つてをれ。」平「ハ、、、、、何やらしやうにもならぬ事を、いかさま盲目千人目明千人だの、日本開山の關口平太が弟子になるといふは、其元たちの目があいてあるといふもの、割木をもつて狗子追はへ歩くやうな事いうて信仰するは、大きなべら坊といふものさ。」△皆々「左樣々々でござりまする。」久馬「平太殿善惡は小口からでも知れさうな物でござるが、現に善い方をしらずに

大工「どうなされてくださりまする。」百姓「どうなされてくださりまする。」△皆々「ぬけ。」○皆々「ぬけ。」左近「待つたまたつしやれ。」ト喧しういふ、此の見えにて幕開く。みゆき「わしがこゑを掛けるに待たぬか。」ロ「奥様の御意ぢやが鎮まらぬか。」左「善にもせよ悪にもせよ、奥様が待てと聲をおかけなさるに、尾籠の振舞却つて越度でござらうぞ。」紋之丞「源八殿平太殿の詞も出されぬに、ちと我儘かと存じまする、控へさつしやれ。」△皆々「ぢやと申して。」紋「御意でござる。」百姓、大工「どうなされて下さりまする。」久馬「喧しい引かぬとくゝし上げるぞ。」左「汝らも囂しい控へぬか。」百姓大勢「はい。」平太「これこれ弟子衆、何をざわ〳〵といふ事がある、關口流神道流何方がよい何方が悪いといふ事は、今取りだちをする子供まで知つた事、貴様達がわや〳〵いうても、勝つ所で勝たにや役に立たぬ。仰せ渡された刻限に、竹刀打ちの勝負を決し、打勝つた者に渡津も堤も、淀川筋は皆平太が普請、お手前たちがざわ〳〵いふと、何ぞ後の勝負が危いやうにも人が思うてわるい、控へさつしやれ。」源八「是れ是れ弟子衆、御前もこゝにござるに不作法な、何うした事でござる、仰せ付けられた竹刀打ちの勝負、刻限までは餘程間がある、神道流か關口流か、印可を申し受けた方が渡津堤共に淀川の普請承る、まだ勝劣も知れぬうちに、ざわ〳〵とかしましい、控へさつしやれ。」○皆々「餘りと申せば。」源「ハテ理非は勝負にあるわさ。」平「かしましういふとかさから出るやうでわるい、みな控へさつしやれ〳〵。」

第二幕目　劍術仕合の場

役人替名

一吉川紋之丞　菊松
一志賀左近　吉太郎
一彌五原三平　清藏
一吉川十内　友藏
一まき山新治　新藏
一山家屋太郎右衛門　彦十郎
一花滿縫之助　三十郎
一傾城總角　金作
一みふね　喜世三
一津田伴之進　春五郎
一志方角兵衛　友十郎
一玉淵久馬　東九郎
一ゑろふ永助本名小市　來介
一喜蝶　小伊三
一關口平太　大五郎
一神道源八　文七
一奥方みゆき　大吉
一花滿將監　介十郎
一熊本辨之作　治郎三
一澁輿三右衛門　四郎五郎
一侍、百姓、舟大工、門弟大勢

○

造物向う一面の金襖總二重舞臺、君は千代ませの謠、二重舞臺の中に奥方みゆき立つて居る東の方に神道源八、西の方に關口平太社杯にて手を組みをる、玉淵久馬社杯にて竝び居る、雙方の武士大勢社杯にて反打ち詰合ひをる、志賀左近、吉川紋之丞眞中へ這入り止めて居る。源八方に舟大工、平太方に百姓大勢竝び居る。幕開く。

へて指圖を待て。」三「有りの儘に言上せば、理非は立つても大内を騒がせた咎、もしお國を沒收せられば、奥様縫之助様は門前拂ひ、親殿様は何處の大名へぞお預け。」憲「花蒲の家は斷絶。」三「憲法様お國も城も身のなる果て。」憲「エ、無念なはやい。サア介錯せい。」三「ハッ。」ト後へ廻る。憲「此の腹へ突込んだる刀を源八にわたし、遊軒を打漏らしたを無念といへ。關口平太は遊軒が弟ぢやぞよ。」み「エ、。」憲「あれら風情に目はかけな、志す恨みは川浦遊軒一人ぢやぞよ。」み「畏まりました。」憲「介錯。」み「エ、。」ト首斬り、是れより裝束に包み、右の太刀土器を包み脊中に負ふ。此の間侍下座、橋懸りより、槍を持ち狙ふ。みふね尻目にて屹度見付け、思入あつて、知らぬ風にて態と槍先へ向ふ、兩方そろ／＼付け寄つてみふねをはさみ一時に突く。みふね開く、兩人芋ざしになる、又突きだす、みふね斬り倒し行かうとする、圖書熊手にてみふねを引つかけ立ある、圖書長刀に懸り首場の中へ飛ぶ、山口又立ちふさがる、顔を斬る、くわへめんにて死ぬる、此の模様の立ありてみふね向うへ走りはひる。與三右衛門始終見て頭巾を取り、みふね遙かに眺め思入あつて、圖「ハテナア。」ト手を打つ。よろしく幕。

に入れう。」圖「關白樣へ伺ひませう。」ト走り入る。半素袍につゆ取つた侍、掛烏帽子にて長道具を持ち八人憲法を取卷き出る。憲法冠著ながら裝束をまくり大立あるべし。圖書中將等掛る。立あつて、憲「卑怯な川浦遊軒、出ぬか〳〵出やァがらぬか。」ト遊軒尋ねる內、右の人數取付く事あるべし。此のうち遠攻め。大勢組付くを斬り倒し井戶へ入る。侍「南無三寶、空井戶へ取逃した、水門を搜せ搜せ。」トみな〳〵はひる。道具一面の總築地になる。淀與三右衞門花道より早馬にて出る。與三「憲法は空井戶へ逃げ込んだとある、拔道は此の水門。」ト窺ひ居る。憲法むかうの水門より出る。邊を見て、是れより冠裝束脫ぎ、前に眞の太刀土器を置く。與三右衞門隱れて見て居る。憲法身づくろひして腹へ突込む所へ、みふね鉢卷大小にて出る。憲法見て恟り。みふね「ヤァ憲法樣か。」鍔「神道源八が女房みふねか。」み「まそつと早う驅付けたら、やみ〳〵と御生害はさせますまいもの。」憲「イヽヤ悔むな、大內を騷がしたれば牛裂き釜入りにも遭ふべき身體、切腹するは我が本懷。」み「委細の樣子は承りました、川浦遊軒が奥樣にむたいの戀慕、それ故の邪。」憲「無念は無念とこたようが、眞の太刀天杯の土器は此の通り、鎌倉への申しわけ、どうも堪へられぬ。」み「併し遊軒を打漏らしなされてさぞ殘念にござりませう。」憲「シテ遊軒は。」み「疵養生に二條の館へ歸りました。」憲「エヽ。」ト殘念がる。み「お道理でござりまする。」憲「そちは身が首に此の天杯眞の太刀を添へ、鎌倉へ有りの儘を訴

無念にござりませう。」仝「ドレもう貰ふ樣にしてやらう。」ト蹴る。圖「俺も貰うてやらう。」ト蹴る。中「あばらて貰うてやらう。」ト蹴たふす。憲法思入。遊「もうやるぞ〳〵。」憲「どうなりとなされませい。」遊「オ、何うなりとせうわい〳〵。」ト蹴倒し踏む。憲法遊軒が側へ行き。憲「サアもう大概腹が癒えたであらうなう。」遊「オ、其の位にしたらモウよい、今こそ土器やらうと云うたらよからうがならぬ。」憲「此の樣にしてもならぬか。」遊「コリヤ是れでもならぬ。」ト狀を出す。憲法讀んでびつくり、憲「スリヤ此の狀を見たによつて。」遊「うぬが絶體絶命ぢや、土器もかうぢや。」ト打破る。憲「モウさうすりや是非に及ばぬ。」ト遊軒を一かせ斬る。皆々「ヤア斬つたわ〳〵。」ト少し立廻りあつて、追ひ廻す。憲法冠をしめ直し、裝束まくり上げ、用意して又きりに懸るをいろ〳〵有つて追ひ込む。道具元へ戻る。と大内ざわ〳〵仕出し、いろ〳〵逃げ廻る。中「サア〳〵大體の中ではないぞ。」圖「中將樣中將樣。」ト圖書、中將行き當り、中「遊軒は何とした。」圖「遊軒殿は今出川口より二條の館へ送りました。」中「女中方や上樣は何とした。」圖「皆關白樣のお指圖で、夜のおとゞへ入れましてござりまする。」中「淀伏見ぜゝの屋敷へも早打つかはしたれば、追付加勢が來るであらう。」圖「いやモウ淀與三右衛門早打でおひ〳〵驅付けまして、日の御門までまゐつたれど、迂闊にもえ入らず、御門に待つてをりまする。」中「膳所の火消屋敷へも追々に驅付ける。憲法がもし手に餘らば、與三右衛門を加勢

が遊軒殿、是れは又餘り酷いと申すもの、たつた宵までは式禮作法殘る所もなう念ごろに指南して、今更此の樣になさるゝは、なんぞ一物あるのでござらう、淀川筋通路の儀も、貴殿の教への樣に七里半の堤築く事を自筆に認め、天奏へさし上げたれども、今に何の御沙汰もなし、此の樣にわるう横に出さつしやるといふは。」 皆々「横にとは〳〵。」 憲「サア横と申すは拙者が事、遊軒殿、私は絞り首に逢ふとても厭ひは致さぬが、天杯の土器と眞の太刀は鎌倉へ納めねば末代鎌倉將軍の疵になりまする。爰をどうぞ聞きわけて下されい。」 遊「オ、笑止な事ぢやなァ、いかにも天杯土器は二枚、一枚は遊軒が持つて居る、これ雲の内に關白の御判をすゑられたのは是れぢや。」ト土器出して見せる。「欲しかろ、さつきに土器割つて置いたも身共ぢや。」 憲「成程よく〳〵腹の立つ事があるものでがなあらう、いかやうになと腹の癒える樣にした上で、其の土器を下さりませ、賴みます是れ遊軒どの賴みまする。」 遊「これ皆御覽じ、此のほえる面はいなう。」 關「其のほえ面へ笏ふるまはう。」ト笏でたゝく。中「ドレおれがのも一つ喰はさう。」ト又叩く。 △「俺も喰はさう。」 ×「これもくらへ。」 皆々「是れを是れを〳〵。」ト皆々憲法を散々にたゝく。憲法きつとなる。 皆々「何ぢや〳〵。」 遊「無念なか。」 憲「何の此の位な事が無念にござらう。」 遊「夫れならば又土器やるまいものでもない。」 憲「どうぞ下さりませい。」 遊「オ、やらう。」ト柄にて叩く。憲法見て悔り、額血少々流るゝ。 遊「無念なか。」 憲「何の

軒殿段々御造作お禮はゆるりと申さう、差當つて土器が破れました、すぐに鎌倉へ下しませねばならぬ彼の替土器をどうぞ所望させて下され、夫れ程の事は相違なうなされ下され。」中「替土器とは何の事ぢや。」憲「ハテ此の間から教へさつしやれた替土器。」中「天杯は其の儘で鎌倉へ遣はしあの方で頂くものぢやが、ア、天子のお上りなされた土器は捨てて了うて、下々から飲む杯を鎌倉へ下すか。」憲「イヤさやうではなけれども。」中、遊「あはう盡したら鎌倉まで祟りが行かうぞよ。」憲「ハ、アよう思へば是れは何ぞ足らぬ物があるによつて、俄に此の樣になされたと見える、後日謝禮はいかほどでも致さう程に。」中「コリヤ〳〵〳〵何ぢや、謝禮とは天子の土器は塵芥場へ捨てて、金で買うていぬる杯を鎌倉へやるのか。」皆々「金で買はうといふのか〳〵。」憲「イヤ全く左樣ではござりませぬ。」中「まづ第一見た事もないざまで、大柄さうに遊軒殿と、餘り大柄にぬかすと、青侍に云ひ付けておとがひ蹴はなすぞ。」憲「夫れは又あまり。」中「餘りとは〳〵。」皆々「餘りとは〳〵〳〵。」ト此の間に遊軒出て上の方へそろ〳〵歩み立て居る長裃にて、憲「サア〳〵成程どなたも〳〵、お近付ではござりませぬが、うや〳〵しい大内へはひり、少し逆上せましたか、轉顚致したさうにござります、まつぴらごめん下さりませう。」中「さういへばまだしもぢやが、けふの無禮式法は皆破れた、後日にお咎め行くほどに、さう思うて居よ。」憲「斯うなる上からは後日のお咎めは覺悟の前でござる。

ざりまする。」 中「不調法千萬な、天奏に受取つたもの一人もない、ぢきに持つて上るはしれた事、不念法外な。」 憲「ハッ／＼。」ト此の内より無念のこなしある。 中「天杯頂戴。」 憲「ハッ。」ト中將三寶に大土器のせ、みすの内より持ち出で、憲法が頭の傍へ置く。土器破つて置く。憲法土器取上げる。破つてある故ちやつと膝へ入れる。 中「此の度の使甚だ法外の至りなれども、其の儘にさし赦す。下れ下れ。」 憲「ハッ。」ト憲法階を下り、少し思入あつて、跡ふり歸りゆく。向うより青山、山口立塞がる。通さぬゆゑ附舞臺の方へゆく。また岩倉、高尾立塞がる、其の外皆々憲法をまん中へ取巻く。

憲「コリャいづれも方は何となさるゝ。」 山「イヤ何ともせぬ、大納言の兼官で大内へ來るからは、歌もなるであらう、ちつと所望しようかい。」 憲「イヤ武骨者でござりまする。」 倉「ハア歌はいかぬか、歌よむ術をしらいで大納言の兼官するとはふとい奴ではあるわいのう。」 高尾「面の皮の厚い奴ぢや。」 岩倉「イヤあついものぢや。」ト皆々よつて憲法が顔をこづく。 憲「どのやうになされても知らぬ事は存ぜぬ、が中將樣圖書樣、コリャ又遊軒殿も酷いしようぢやぞや。」 中「酷いとは。」 憲「イヤサ宵までは。」 中「よひまでとは、上使が宵に公家と對顔しても大事ないか。」 憲「イヤサそれは。」 中「大事の上使が天子へお目見えせぬ内に、我等へ内通しても大事ないか。」 皆々「逢うたがぢやうか、宵までとは宵までとは」 憲「イヤサ遂にお目には懸りませぬ。」 皆々「其の筈／＼。」ト憲法遊軒が傍へゆき、 憲「遊

らに居る。憲法みす低う懸りあるを揚げ行かうとする。圖「コリヤ〳〵御簾上げる事はならぬ、くゞれ潜れ。」憲「さう仰有るは圖書樣か、餘りみすが低うござります、モそつとお上げなされて下さりませい。」圖「ヤイ〳〵みす上げいとは慮外な奴め、大内の事さはいするか。」憲「差配は致しませぬが、此の約束では。」圖「約束とは何が約束、御簾へ手をさへると、後日に鎌倉へ急度まうし付けるぞよ。」憲「ハア。」ト憲法思ひいれあつて、みすの内へ潜る處、圖書冠の纓を以て引く。冠落つる。圖「不吉もの、冠落した天奏へ申し上げる、待つて居ろ。」ト走り這入る。憲法是れより思案して胸を極める思ひいれにて冠を著て、しを〳〵とゆく。紫宸殿の道具引出す、圖書、中將、公家四人、遊軒居る、憲法階の側へ來る。中「鎌倉の使御座どころぢや。」憲「ハア。」ト中將顏を見てぎつくりする。中「御座近うあがらつしやれ。」憲「ハア。」ト又階を渡る、向うのみす少し上る。中「出御。」皆々「シイ。」ト辭宜する。中「毎度の格にまかせ御太刀を下さるゝ、頂戴。」憲「ハツ。」ト中將みすの内より黄金作の太刀出す、鞘を殘して身ばかり出す、憲法見て恟りして柄の方より取る。圖「玉座が近い、白刄をかくせ隱せ。」憲「ハツ〳〵。」ト袖の下へ入る。中「頂戴のもの隱す事緩怠。」憲「ハツ。」ト出す。中「眞劍狼藉。」ト憲法腰へ差さうとする。中「天子の下されもの腰に差す慮外もの。」憲「ハツ〳〵。」ト憲法思案して襟を裂き白刄を隱す。中「古格の獻上ものはどうぢや。」憲「先達天奏方へそなへ置きましてご

ら斯うせいと云ひ付けたか。」 憲「イヤ眞つ平不調法でござりまする。」 青「後日に屹度云ひ付ける程にさう思へ。」ト行かうとする。 憲「イヤ申し夫れは。」 青「エ、。」ト突き飛ばし這入る。憲法思入あつて、

憲「遊軒殿はどこへ往かつしやつた。」ト岩倉宰相通る。 憲「申し〳〵。」 岩「なんぢや〳〵。」 憲「紫宸殿へはどうさんじまする。」 岩「ハ、、、大納言の装束を著て、紫宸殿を知らぬとはハ、、、、。」 憲「イヤちと便りにする人を見失ひました、敎へて下さりませ。」 岩「紫宸殿はかう行くのぢや。」ト頤ぐるりと廻す。 憲「どう參じまする。」 岩「さう行くのぢや。」 憲「どう。」 岩「さう、エ、どんな。」ト笏で頤つき這入る。 憲「何を云つても便りにする人が居ぬによつて。」ト憲法思入ある。中將出づるを見つけ、

憲「イヤ石橋中將樣ではござりませぬか、夜前はお目に。」 中「ヤイ〳〵こりやわれや誰ぢや。」 憲「ハテ私でござりまする。」 中「私とは、聞けば鎌倉よりの使とあるが、武士に心安うものいはるゝ覺えない、夜前とは何の事ぢやしらぬぞよ。」 憲「成程御尤も、つひにお目にかゝりました事もござりませぬがちとお尋ね申し上げたい儀がござりまする、紫宸殿へはどれから參りまする。敎へさつしやつて下さりませ。」 中「紫宸殿はわが足の向く方へゆけ、大たはけめ。」ト下座の方へゆく。憲法呆れて居る。

憲「コリヤ餘程喰ひ違つたわいのう、併し石橋中將樣が斯うゆかれるからは、此方が紫宸殿であらう。」ト見て、「櫻と橘が見える、斯うぢや〳〵。」とゆく。是れより引道具御簾のある所へゆく。圖書こち

てんぢや。」遊「先へ廻つて。」圖「今出川口の門からござれ。」ト兩人はひる。

返し

造物一面の築地公家門の體、橋がゝりより雜式二人、其の跡へ仕丁黑裝束の公家二行に竝ぶ、其の跡へ對黑裝束にて花滿憲法出る、其の跡へ諸太夫二人、仕丁多勢靜かに出る、西の方公家門にて立留る。

先公家二人「おかげで四位の侍從に兼官致し有り難う存じまする。」憲法「町支配の御兩所御苦勞、取分け槇田佐衞次殿御苦勞。」新公家「鎌倉より京都御館を預りをりまする武家に納言の兼官有り難う存じまする。」ト四人目禮する。雜式より段々門の内へ入る。ト公家門引道具にて、大臣柱ともに東へ引込む、花道より兩方へ御簾の掛りたる屋體せり上る、舞臺所々に御簾かゝりたる御殿引出す、花道より憲法一人出る、山口右辨むかうへ行き、すれ違ひけつまづく。山「不作法なやつの。」憲「御免なされませい。」山「汝やたれぢや。」憲「イヤ御免なされませい。」山「見しつたぞ覺えてるよ。」ト云ひ捨てにして右辨はひる、憲法本舞臺へ來る、青山侍從つか〳〵と行き當る。青「アイタ〳〵。」トこける。憲法抱き起し、憲「是れは不調法な、御料簡下さりませい。」青「ヤイ汝や見馴れぬ者ぢやが誰ぢや。」憲「私は鎌倉よりの上使。」青山「ムウ侍が禁中へ來るに、疊ざはりの作法も知らずに來るか、但し鎌倉か

う。御中し越しの通りあの文にてはいかな遊軒も腰を打ちぬき申すべく、御上使の首尾もよく致し候はんと存じ〳〵、跡は思召しの通り上使の役目さへ御しまひ候はば、遊軒を引出し、赤恥を御かかせなされ候御事、御尤もに存じ候、いつたい慾深き佞人にて候間その御心得、また國へ御歸りの節早々辨之作を逆磔に御上げ御尤もにそんじ〳〵。「ヤア。」ト顫ふ。「御機嫌にて早々御歸國まち入り〳〵、火中へ、花滿憲法さままゐる、みゆきより。」圖「そんなら花樣は、はなみつの花であつたか。」中「こりやどうぢや。」ト右のうち遊軒腹の立つこなしいろ〳〵あり、辨之作が持つて居る金を引つたくる。辨「これは。」ト遊軒だまつて懷へ入れる。辨之作思ひいれ。辨「ウヌ〳〵。今までくれた金はかたられたと思うて濟ます、うせう。」ト辨之作鐺を取つて、辨「まつた。」遊「ものぬかすと打ちはなすぞ。」辨「成程御立腹は御尤も、今まで此方樣を僞り、金錢をかたり取つたかとの思召し、どうも濟まぬ、サア打ちはなして下さりませ。」ト遊軒ふり返り切らうとする。遊「ぶちはなすぞよ。」辨「今の狀の文句、國へいねば逆磔、どちらでものがれぬ命。」遊「にツくい憲法め。」辨「彼奴らには構はぬ、大恩はこなたさま。」ト遊軒思入。遊「もう何時ぢや。」圖「おつ付け夜が明けまする。」辨「己それ程に思ふならば云ひ付ける用がある。」辨「何なりとも。」遊「コリヤ。」ト耳語く。辨「畏まつてござりまする。」遊「いけ。」ト辨之作はしりはひる。圖「遊軒殿。」中「其方が心は。」遊「これ。」ト兩人に耳語く。中、圖「がつ

遊、中「さらば聽聞仕りませう。いよ〳〵御きげんよく御わたりなされ候と悦び〳〵、さ候へば辨之作に文遣はし候、大方御覽も候はんと存じ〳〵。見たく〳〵。隨分いやらしく書きつらね〳〵ゆゑ、お前が御覽なされたらばお笑ひ草とぞんじ〳〵。」遊「隨分いやらしいのがよい、なんの笑はうぞいなう。」中「てもきつい好きぢやなア。」圖「まへ方京にをりし時分より、いろ〳〵口說き候へども、身しんたえて遊軒はいやにて候故、七りけんぱい願籠めいたし候かげにて、お前樣と連添ひ朝夕ありがたくぞんじ〳〵。」辨「ヤア。」遊「モ一度讀んでみい。」圖「身しんたえて遊軒はいやにて候ゆゑ七りけんばい。」中「どれ。願ごめいたし候かげにて、おまへ樣とつれ添ひ朝夕に有り難く存じ〳〵。何のことぢや。」ト狀を辨之作の前へはふる。遊「大事ない其の跡ずか〳〵とよめ。」辨「ハイ。」遊「よめいやい。」辨「ハイ。」ト辨之作氣味わるさうによむ。辨「所にまた〳〵家來辨之作を賴み、種々と口說き申し候、遊軒はべら坊とも阿呆ともぞんじ候が、辨之作めが仕方、より〳〵手討とぞんじ居り申し候ところ。」遊「サア跡を讀め。」ト氣色だつていふ。遊「ハイ。」トうじ〳〵する。遊「よめいやい。」トぐつといふ。中「讀んで了へやい。」ト引つたくり讀む。中「惡緣ちぎり深しと、今度の御上使遊軒に大內の作法御習ひ、諸事御賴みなさらねばならず、私に遊軒への文遣はし候樣に、こま〴〵仰せ下され候故、筆も墨もけがれしやうに存じ候へども、阿呆が氣に入る樣に道ならぬ文遣はし申し候。」圖「ドレちつと讀ま

参りました。」縫「エ、早う戻れであらう。」ト狀を見る。侍「イヤわざ〱の飛脚で参りました、竊かに御覧なされませい、跡は火中なされとの儀でござる。」縫「はてなア六ケしいなんぢや、花樣まるる御存じ。」ト遊軒とり、遊「よし〱覺えある〱。」縫「花さま御存じ、覺えがございますか。」遊「人に見せなといふ筈ぢや、コリャもう夕を脫いて花樣ぢやわいやい。」辨「しやれるわ〱。」中、團「いまのか今のか。」遊「今のとも〱。」縫「お前のか。」遊「世話をやく根本根元ぢやわいやい。」小「サア早う往かうぢやあるまいか。」縫「いなう〱。」辨「追付身うけしてやりませう。」縫、小「結ぶの神樣有り難うございまする。」遊「これは御慇懃の御禮痛み入ります。」トしかつべらしくいふ。才「サア太夫樣方お出でなされませい。」皆々「後から戻らしやんせえ。」團「お歸りかいなア。」中「さらば。」辨「ようお出でたえ。」ト唄になり、縫「是れは見なれぬお方でござる。」ト歩きながらいふ。小「拙者はでんつく彌五右衛門といふ浪人ものでござる。」縫「ハヽ、コリャえい〱。」小「不義もの遁れまい。」縫「まつた不義とは何を以ておいやる。」小「ヤア旨い〱。」ト臺詞、花道の眞中に立ちどまりいふ。いろ〱こなしあり、舞臺よりほめる、みな〱入る、合方唄になる。辨「サア是れから戀君の文が承りたい。」遊「さつきの狀の上に、引續きておこしたはじつが來たわいなう。」中「エ、あやかりものめ。」團「ちつともあやかる爲ぢや、われら讀みかけうか。」遊「ひけらかすではないが、聲を上げて讀んでくれ。」

かなか器量のものぢや、すつかりとよう云うた、其のかはりには、添はれるやうに思案してやらう。」 小「エ、。」 縫「去るやうの分別がござりますか。」 遊「ある〳〵。」 皆々「どうでござりまする。」 遊「小市汝は人の見知らぬを幸ひに武士になつて、縫之助殿の國へ往つて祝言の中へねだりこめ。」 皆々「さうして何うぢやな。」 遊「玆にあるぢや、まづ汝がいふには、手前は何の 某と申すもの、則ち淀與三右衞門が妹喜蝶は二世までといひ交してをる 某、夫のある者娶るは不義者、間男ぢやと強請りかけるのぢや。」 皆々「面白い〳〵。」 遊「そこでこなたが、扨は左樣か、其の樣なみだらな女を女房にもつて悪名とる事ならぬ、去つたといふ。」 皆々「去らにやならぬ。」 遊「かぶせ物しられた事ぢやに依つて、親將監殿もぐつとも云分ない、さつぱりと去つてしまへ、其の跡が驅落、與三右衞門ぢやといふて、指がきたないとて斬つても捨てられず、夫れなりにしてしまへば、何と夫婦になられるではないか。」 皆々「したり。」 辨「智慧もあれば有るものぢや。」 縫、小「是れより外に思案はないぞ。」 縫「何かに付けて結ぶの神さま、忝い。」 遊「拜まつしやれ〳〵。」 縫「さて汝は 侍 になつて來るか。」 小「まゐります る。」 縫「よう仕組して往かざなるまい。」 小「やるものぢやござりませぬ、若殿縫之助樣に一寸逢はうなどとくらはすぢや。」 縫「さうぢや、コリヤみち〳〵云ひ合はさざなるまい、でたらめにやつて見ようかい。」 小「でたらめ〳〵。」ト侍一人出て、 侍「旦那これにござりまするか、みゆきさまより御狀が

らお暇申して國へ歸りませう。」縫「イヤもう今日ほど嬉しい事はない。」遊「しからば諸事は先達申した通り、明朝大内でお目にかゝりませう。」憲「いよ〳〵頼み存じまする。」遊「イヤもう一面に味方さ。」憲「あなた是れにござりませい。」中「オ、明日逢ひませう。」圖「明日々々。」憲「郭の者ども大儀ぢや。」皆々「ようお出でなされました。」憲「紋之丞、サア供せい。」紋「ハア。」憲「明朝御意得ませう。」ト七ッの鐘なる、憲法入る。遊「サア〳〵郭の者共をつれて、縫之助も歸らしやれ、國許に將監殿が待ちかねてゐられう。」縫「そんなら身請の事お頼み申しまする。」辨「私が呑込んでをりまする。」縫「つゝと此の嫁入はひよんな事ではあるぞ。」ト小市出て、小「申し旦那。」縫「小市か。」小「其の嫁御を何卒お去りなされて下さりませ。」縫「ヤア。」小「私は喜蝶樣と云ひ交してをりまする。」皆々「ヤア。」小「あの子も往きともなし、お前も持ちともなし、去つてさへ下さりますれば、私は首が落ちても添ひまする、胴をすゑましたのでござりまする、御得心なくば、いつそ爰で殺して下さりませい。」辨、圖「サアえらい事いひ出した。」小「お大名の嫁御に疵付けました、殺して下さりまするか去つて下さりまするか、返事なされて下さりませい、爰は動きは致しませぬ。」縫「よう念比してくれたなア、いかにもやらうと云うても親父が得心せねばやらうともいはれず。」辨「きつう思ひ込んだ顔付ぢや。」小「命は捨ててをりまする。」圖「不便な事ぢやなア。」縫「遊軒どうぞしやうはあるまいか。」遊「イヤな

いひかねて居りまする」中「才兵衛これから居續けぢやぞ。」才「何程なりともお出でなさりませい。」圓「エ、慾面のひッぱつたやつぢや。」遊「コレ縫之助殿氣の細いどうした事ぢや、ソレ五百兩」ト投り出す。縫「エ、。」遊「明後日は嫁御の輿が入るとあつて、家中が迎へにまゐつて居る。將監殿の機嫌の損ねぬよう早う歸らしやれ、太夫は跡より身請してやるわいなう。」縫「スリャ身請して下さりますか。」遊「辨之作五百兩くるわへ持つていて、總角が身請して國へ連れてゆけ。」縫「エ、忝うござりまする。」辨「若殿お嬉しうござりませう。」縫「嬉しい段か生々世々、此の御恩忘れおきませぬ、有り難うござりまする。」遊「まだ／＼金は何程でも用に立つ、もう一家同然ぢやわいなう。」縫「日本晴がしたやうな。」中「此の勢ひにどつと呑みあかさうではあるまいか。」才「か程小判の山をつくからは、太夫樣方を引連れて、すぐに郭へ押しかけ山の郭公。」辨「たつた今まで惡體を吐きくさつた大泥坊めが。」ト侍一人出て、「花滿憲法樣に、追付七ツでござりまする、お歸りあられませう。」遊「憲法殿憲法殿。」ト憲法出る。憲「最前より一ぺん尋ねてをりました。」遊「イヤもう貴樣は念を入れて稽古なさるゝ事はござらぬて。」憲「オ、迎ひに來たか。」侍「ハア。」憲「私はモウ參じませう。」遊「お出でなさるゝか。」憲「弟、どなたも皆送つて行け。」中「イヤ／＼夫れには及ばぬ、おれも直に跡から參内する。」圓「明後日嫁御がお入りある直に歸らしやれ。」憲「いかさま親共より度々の使でござる、そんな

辨「やるといふのに。」才「サァ今貰はう、あるかえ、有るまいが。頭から斯うなるを知つてゐるに依つて、マァ第一お公家を客にする事は否ぢやと云ふのに、何もかも引受ける、大事ない何のと言うておいて、毎日太夫樣を揚げてこなさん達三人で外の客をせぬによつて、身上は上つたりぢや、今日の明日のと引きずられて、橋の寮へこい合點ぢや、來て見ればどこへ金、首筋押へて戻らにやならぬ、わたさつしやれぬと代官所へ斷るぞや。」辨「其のやうに大形にいふ事はないわいやい。」才「イヤいふ、石橋中將樣と圖書樣と辨之作樣とぢやと。」圖「辨之作コリヤ何うするぞいやい。」辨「モウ料簡がならぬわいやい。」ト刀を拔く、皆々止める。才「何ぢや斬るのか、斬られう／＼。」辨「おのれ眞つ二つに。」才「斬つて貰はうわい。」ト川浦遊軒出る。遊「まて。」辨「イヤお退きなされませ。」遊「まて何も皆聞いた。町人の無法者を相手にして不調法ものめが。」才「イヤ遊軒樣、町人の無法者とは。金受取らうといふがどうして無法者ぢや。」遊「二百兩ある受取れ。」才「オ、受取らいでは。」ト遊軒才兵衛をむね打ちに打ちすゑる。才「アイタ／＼。」遊「身の程を知らぬ奴、おのれ高位を客にした事を知らぬ顏なれば其の通り、うぬが口から申し上げると、うぬが首が飛ぶが、うぬ最前のやうな事、今一言いうて見よ、ぶち放すぞ。」才「アイ／＼あやまり入りましてござります。」遊「金は身が續ける程に、辨之作何方へなりといけ。」辨「ア、有り難うござりまする、今まで段々お金を貰ひましたに依つて、

様にしてなりと。」ト花車一人出る。花車「總角さん、先刻にから駕籠を待たして置いたが、何をしてござんす、今夜中に往なねば、身請の時が切れると又叱られる、ちやつと戻らしやんせいなう。」總「エエ欺された、私やモウ往にやせぬ。」花「往ないでつまるものか、太夫さん方明日は身請の總揚ぢや程に、早う戻らしやんせ、サア〳〵早う〳〵。」遊「コリヤ杉ぢやないか、マア待つてくれ、太夫はおれが身受するのぢや程に、ちつとの間。」杉「申し〳〵是れ申し、いつぞやから揚代の算用もせずに置いて、私らへの紙花もくれずに、五百兩といふ身受の金が出來るもので。」縫「さればいやい、金はナ。」杉「いえ〳〵〳〵、お前ぢやというては親方が身顫ひ立てて忌がる、待つことはマアなりませぬ、身請なさるゝなら、今夜中に五百兩の金を持つてお出でなされませ、サア太夫樣ござりませいなう。」總「殿樣モウ逢ふことはござんすまい、さらばでござんす。」縫「コれ夫れをやつては。」杉「ア、なりませぬといふのに。」縫「さいやい。」杉「金はナ。」縫「サア金は。」杉「金持つてお出でなされませい、サアござれ、コレござれといふのに。」縫「ハテ是れは何うもならぬわいやい。」皆々「申しどうで生きて居る氣はござんすまいぞえ。」小「ア、何處も色事の生粋ぢやなア。」ト辨之作、石橋中將、圖書、才兵衛出る。辨「其の樣にいふ事もないわサ。」才「イヤいはにやなりませぬわいなう。」中、圖「サアよいわいやい。」才「イヤようないわいなう、コリヤ何うして下さりまする。」小「また一組はじまつたわ。」

出でなされませい。」喜「來てたもや。」ト小市にいふ臺詞、記内間違うていふ事あり。記「お供仕ります
る。」喜「必ずおぢやえ。」記「是れはしつこい、お供致しますワイなう。」ト總角縫之助皆々出る。總「ご
ざんせござんせ。」縫「何ぢやいやい。」小「そりやモ一口始まつたわ。」總「何でお前は女房持たんす。」
縫「誰がいやい。」德「アノ喜蝶さんは云號で、淀から嫁入さしやんすを、今まで私によう祕して居さん
したなう。」子供「さうぢや〳〵急度云はんせ。」縫「其の樣に煽ててくれな。」總「イヤ煽てる事も何もい
らぬが、急に身請の客があつて今日か明日かには埒が明く筈、夫れではどうもならぬによつて思案し
て下さんせ、と云うて置くのに構はずに、放つて置かしやんすに依つて、遣手の杉がモウ今夜のあけ
までに身請の相談が出來た、早う戻れと今迎への籠が來てあるわいなア。」縫「ヤア。」總「ヤア所が、
モウ私に飽きが來たによつて、喜蝶樣を女房に持つて、身受のあるを幸ひ、私を突き放すのぢやな、
お前許りはさういふ心ではあるまいと思うたに、こちや聞かぬ〳〵エ、、、。」ト抓る。子供「さうぢや
さうぢや、ぐつと云はんせ〳〵。」縫「さいなう、己も其の事に如才はないけれども、兄貴の御上使で
金の向きは叩き上げて、掛屋へ云うてやつても根から取合はぬが、氣遣ひしやんな、夜明に金拵へて
身請する。」總「イエ大事ござんせぬ、高が彼地へ往たら死ぬる分の事ぢや。」縫「其の樣に短氣にもの
を言やつてはどうもならぬ。」總「いえ〳〵何うなとお前の心次第にさしやんせ。」縫「さいなう、どの

此方がやうなものぢやと思うてけつぶすのか、さう旨うは乘るまいわいなう、と斯ういふと腹が立たう、私やとうから疑うてるやせぬわいなう。」喜「そんなら疑ひは晴れましたかや。」小「お前の心は私がよう知つてをるもの。」喜「それに人を術ながらしくさつて。」小「よう術ながらしくさツたなア。」ト寄り添ふ。小「時に嫁入の事はひよんな事ぢやなア。」喜「どうぞ思案してたもいなう。」ト記内出る。記「喜蝶樣々々、コレ喜蝶樣。」喜「オ、何ぢやいなう。」記「何ぢや所ぢやござりませぬ、與三右衞門樣からお人が參りましてござります、ちと仔細があれば一兩日の内に輿を入れねばならぬ、喜蝶を早く歸してくれいと、お迎へが參つてござりまする、お供廻は表に待たせ置きました、拙者がお供仕りまする、サア／＼お出で遊ばされませい。」喜「さいなう往ぬるわいなう。」記「若殿樣も夫れ故に急にお國へお歸りなされねばならぬ、御供廻の用意はよいか。」橋懸りより「ハア。」喜「これは又急な嫁入ではある。」記「何が急な事がござりませう、殿樣もお前も御婚禮は御一緒になされねばなりませぬ、斯樣におめでたい事はござりませぬ。」ト、此の内喜蝶小市の傍へより、喜「何うせうぞいの。」小「サア何うしようとて、マア一旦は嫁入なされずばなりますまい、其の思案といつぱ。」記「ヤイ／＼汝は帮間ぢやないか、御寮人の傍へ寄つて嫁入なされずばなりますまいとは汝が指圖受けぬ、びらしやらした事があると汝が首が飛ぶぞ。」小「ハイ／＼。」喜「便りを待つてるぞや。」記「何の便りを、サアお

アそこを日の御門にして、此方へかう廻る、と兩方へ雜式が出る。此方へお出でなされい。」ト敎へる。うち、始終かげをうつ、あとめりやすになる。 進「扨さう〳〵しうて物音も聞えませぬ、奧へ往て竊かに申しませう。」 喜「左樣がようござりませう、いはば今晩が總稽古ぢや。」 進「たとひ總稽古がないとても、始終手前がひつ添うて居るから、氣づかひのきの字もござりませぬ、サア〳〵御出でなされい。」 喜「マア〳〵御出でなされませい。」ト入る。唄になり、喜蝶小市が胸ぐら取り出る。 小「エ、はなさつしやりませいなう。」 喜「イヤはなさぬわいなう。」 小「コレお前は近江國縫之助さまへ一兩日のうちに嫁入なされますぢやないか、そんなら主あるお方ぢや、太鼓持風情がそばへおよりなされますな。」 喜「エ、其方はなう。」 小「おつと口舌は筋ばかりいうたり。」 喜「去年の正月智恩院の御忌に參つた時、わらは忍びの徒歩まうで、戀に上下の隔てはない、可愛らしい男ぢやと思うたが、戀の始め。」 小「淀へせき〳〵かよふにも、よつぽどに思はにや行かれぬ、大ていや大かたの事ではござりませぬ。」 喜「それぢやによつて今度京都へ來たも、見舞といふは附けたり、其方の顏見にきたのぢやわいなう、緣組も何も兄さんがさしやんした、私や何にも知らぬわいなう、何うした物であらうぞ、思案して貰はうと思うて、胸は板になつてゐるわいなう、夫れ〳〵今のやうな事、ようも〳〵いはれたなう。」ト泣く。 小「何程泣かしやましても其の手はくはぬ、コリヤ下地から知れてある事、態とはなうて高が

切り落しました、拙者が何とも申さぬに、誰が何と申しませう。」憲「サア二筋に川がなりましては、また水が緩漫みまして、土砂がとまつて埋れませうと存じて。」遊「ハテ川が埋れたらなんのこと、その元の御川にさへ立てば、みな埋めても大事ござらぬて、明朝すぐに天奏へ書付をお出しなされい、手前よろしく申して手柄にさせませう。」憲「兎角よろしく頼み上げまする、明日持參いたしませう。」遊「式禮は昨日御指南申せしとほり、鎌倉の御名代なれば、門より內は大納言の兼官でござる、裝束お著けなされたか。」憲「夜前石橋中將樣がお著けなされてとくと承知致しましてござる。」遊「あの圖書などが非藏人の役で、御簾を卷き上げまするに、得てしくじらさうと思へば、やう／＼疊から二尺ばかり上げて置きまする、御簾へ冠をあてぬが故實ゆゑ、四ツ這にはなられず、いやはや態とした事が。」憲「明日は高う上げたいものでござるが。」遊「いやその許のは御簾一はいに上げまする、邪魔にもならばひきちぎつてなりと置きませう。」憲「眞の太刀土器拜領はやはり紫宸殿でござるナ。」遊「いかにも天杯頂戴の時是非かの土器が破れるものでござる。」憲「直に土器を鎌倉へ早飛脚で遣はしまする、自然破れましては。」遊「サそこでござる、その通りの土器は二枚ござる、一枚は拙者が持つてをる、天杯頂戴して鎌倉へ下すは身共が替の土器御下しなされい、破れても少しも苦しうない、同じ土器でさへあれば、ほんの京都鎌倉との儀式をするのサ。」憲「左樣なれば重疊の仕合でござる。」遊「マ

ずも憲法樣に受出され、國へ參じ候へども、すかぬ事故つひに傍へ寄つた事も御座なく候。」 遊、憲「なんとなんとあとは〳〵。」 辨「お前の志嬉しいと思ふ魂が、現にも通ひし可愛さは舊にまして早う夫婦になりたいと存じ候。」 遊「サア堪らぬ〳〵。」ト又讀む。 辨「どうぞ表向のわけ御立て下され、御へんもじの程待入りこがれ〳〵、花々樣御事今はいうけん樣まゐる、こがるゝ身より、サアこがるゝ身よりぢや、ハツ。」ト狀をはふる。遊軒頂く。 憲「よう花々さま。」ト遊軒狀を顏にあて恥かしがる。 遊「さま〴〵と今までは疑ひましたは、眞平ごめるされませう、もう〳〵神八幡そこ元の事なら命でも進上いたす。」 憲「それは忝う存じまする、さつぱりと進上いたす。」 遊「手をつきまする。」 憲「ハテきつい嬉しがりな。」ト内にて多勢、「やらぬぞ。」 圖、中「どつこい。」ト立ちて所作の三味線太鼓鳴る。内より、 才「辨之作樣々々々々。」 辨「オイもう所作になつたさうな。私は一寸參りまする。」 圖「往てこい往てこい。」 才「辨之作樣々々々々。」 辨「オイ〳〵まて〳〵、合點のゆかぬ女めが振舞。」ト臺詞いひいひ入る。 遊「扠淀川の事はかうなされい、彼の川筋のまん中へ、眞直に堤を築くと、十三里の所がさし渡しになされて、七里半に京大坂の通路がなりまする、もう渡ぢやのなんのと、面倒い事は打棄つて、其の利法を申し上げさつしやつたらば、莫大の御褒美でござらう。」 憲「サア其の儀を存じつかぬでもござらねども、川の眞中へ堤をつく事は御咎めがあらうかと存じて。」 遊「ハテ扠淀川は手前が

場。」兩人「それまでは、さらば。」ト跡めりやすになる。辨之作書拔持つて出る。辨「とんとモウ結び際でござりました、ア、しんどい役ぢや。」遊「辨之作逢ひたいといふは餘の事でもない、内々そちに口說いてもらうたみゆき殿の事。」辨「ア、申しこれ〳〵。」トいひ消す。遊「大事ない〳〵。」辨「夫れでも憲法樣が。」遊「一ツも苦しうない、憲法殿に貰うたてや。」憲「さても辨之作に今まで口說かしたのぢやなァ。」遊「面目次第もない。」憲「こゝなすつぱの皮め。」辨「ウ、主人憲法樣には御合點でござりますか。」遊「我が取りもちは俺が爲ぢや、出來した〳〵。」辨「夫れでよめた、申し遊軒樣お返事が參りました。」遊「ヤァ。」辨「折を見て渡しませうと存じて、ぢつと持つてをりました。」憲「今まで見せぬといふ事がある者か。」遊「ちやつとくれ〳〵。花夕樣みゆきより、昔の花夕をまだ覺えてゐてくれたかやい。」憲「花の夕とは厭な變名ぢや。」遊「エ、弄らしやるないなう、辨之作讀んでくれ。」辨「主人の前では餘り。」憲「エ、氣の弱い、其の根性で今までよう取持つた、大事ないわいやい。」辨「それもさうかい。」ト讀む。辨「とくより御返事と存じ候へども人目の關にさし控へ〳〵、誠に御無事の樣子、風の便りに聞きまし嬉しさの御事に候、數ならぬ身を左程まで思召し下されし御事、御嬉しさ限りなう、飛び立つ許りにて御座候。飛び立つ許りでござります。」憲「飛び立つ許りぢや〳〵。」遊「許りで許りで。」ト辨之作又讀む。辨「前方つれなく申せしは、殿御の心の飛鳥川、とくと見申さん爲、思は

御内室の事で。」ト口の中にていふ。内よりどろ／＼。 圖「エ、口惜しや腹たちやなア。」トどろ／＼にて合方になり、めりやす。 寃「エ、狂言の稽古をし居るぞ、物音がしれぬ、もそつと大きな聲でお聞かせ下されい。」 遊「イヤサ大きな聲もし悪い、御内方のみゆき様の事さ。」 寃「エ、みゆきが事な、サアお望みならば進ぜませう、といふたぢやござりませぬか。」 遊「恥をいはねば理が聞えぬ、みゆき様はもと此の京都の舞子、恥かしながら拙者命も身も投げうつて惚れましたれども、イヤすつたのもぢつたのと申す内、こなたが國許へ伴れて歸らしやつたといふ事を聞くと、其の時はきつう遺恨を含みました、今度大内への御上使、何でもしくじらせてくれうと思ひの外、みゆき様をやらうと仰有る、夫れで頓と腰が拔けて、扨つきあつて見ればきつい粋、けうといものぢや。」 寃「そんならみゆきをやらうと申したを、まだ虚言ぢやと思うてござりまするか。」 遊「イヤ譃とは思はぬけれど、又女房をくれうと申す事ぢやによつて。」 寃「愚癡ぢや、きつい愚癡、一たいマア表面は女房で、ついぞ一所に寢た事もない。」 遊「譃、けうとい譃、女房に持つて一所に寢てたまる者か。夫れは今度の事があるに依つて身共への。」 寃「否々眞の事／＼。」 遊「眞の事か。」 寃「ア、疑ひ深い。」 遊「そんなら問ふことがある、辨之作々々々々々々。」ト内より、 辨「三種の神器を此方へ渡せ。」 小市「ならばとつて見よやい。」 辨「其の寶劍を。」トばた／＼陰にていふ。 寃、遊「辨之作々々。」ト呼ぶ。 辨「ハイ／＼。」 小「勝負は戰

りますo」縫「オ、早う往んだがよからう。」喜「イエ〳〵私や矢張こゝにをりまする。」小市「イエ〳〵早く御歸りなされて、嫁入の拵へなされたがよからう。」喜「わしや往にやせぬ、いやぢやヮイなう。」總「往んで貰はうぞえ、こゝらあたりに居て貰ふまいぞえ。」小「サァ〳〵往んだ〳〵。」喜「構やんな、私や往ぬ事は否ぢや〳〵、やつぱりをる。」總「いやおくまい。」縫「我がまた何で其のやうに。」總「ちたいこなさんが。」喜「わが身は私を。」小「こなたはマア。」ト四人爭ふ、皆々とめる。記「これはマァ何でござる。」縫「是れは。」記「何でござりまする。」縫「やつぱり狂言の稽古ぢやヮイやい。」記「稽古ならばもそつと靜かにしたいものナ。」憲「是れは何をさば〳〵と、喜蝶もゐたくばもそつとゐたがよい、稽古ならば奥へ往てしやれ。」中將「サア皆奥へ往かう、縫之助奥へおぢやいなう。」縫「そんなら奥へ往つてこまそ。」喜「わしも往かう。」小「俺もゆく。」總「申し〳〵。」縫「勝手にせい。」四人「エイエイ〳〵〳〵。」トせり合ひ入る。圖「何の事ぢや、俺も奥へいてこまそ。」才「俺も奥へ往てこまそ。」辨「俺も奥へ往てこまそ。」ト才兵衞、記内、辨之作入る。中「どりや奥へいて稽古せう。」圖「御兩人これにござれ。」ト皆々入る。憲「ハテさう〴〵しい。」遊「イヤ淺間が嶽見物でござらう、扠憲法殿、唯今禮式を御指南申すによつて申しまするが、今の儀はどうでござる。」憲「今の儀とは何の事でござる。」遊「ハテ夫れ内々申した彼の事な。」憲「エ、夫れは何時なりとも掛屋方より。」遊「イヤサ金でなしに

ば生害にも及びまする、外に致し様もなし、お上へ對しては延引に及びまする、脊中に腹とやら、何れ一人はすてねばなりませぬ、何とも困つた物でござりまする。」遊「其の平太と申すは拙者の弟でござる。」憲「ハテナア。」遊「拙者は算術に妙を得ましたる故、大内に相勤めまする、弟めは武藝に心掛けまする故、其許のお屋敷を勤めまする、狀通の使ばかりを致しまする。」憲「左樣とも存ぜず、粗相な儀申しましてござる。」遊「なんの〳〵、此の上は平太源八兩人にはお構ひなくとも、關西往來を致しまする用には、拙者割出し置きましてござる。明日參内の折から書付を以てさし上げさつしやつたらば、こなたの拔羣のお手柄になりませう、拙者がよろしう仕りませう、お氣づかひなされますな。」憲「是れは餘りのお志、然らば宜しうお賴み申しまする。」縫「然らば中將樣、また跡の狂言の稽古、此の間に奧でいたしませう。」中「さうしよう〳〵。」憲「喜蝶、コレサ喜蝶、何をうつかりとして居る、河原町の屋敷から送らさう、早う往にやれ。」ト喜蝶小市耳語き居る。喜「イヤ私はもそつと居りませう。」記「お前が左樣仰有るは、殿縫之助樣に名殘を惜しまつしやれてか、殿にも一兩日の內にはこの方のお國へお入りなさるゝ、マァお歸りなされたがようござりまする、ナァ縫之助樣。」ト縫之助總角と話して居る。縫「オ、何ぢやいな。」記「何をなされてござりまする。」縫「イヤ是れは何を、ォ、跡狂言は淺間が嶽、其のけいこしてるのぢや。」辨「イヤ申し喜蝶樣を淀へ歸しませうと申す事でござ

憲法、昔から使者にたつた首尾のよい天上はわが身であらうワイなう。」寔「夫れは有り難うござります。」遊「ちつと口廣い申し分ぢやが、大内の事は立てうと伏せうと拙者が儘でござる、しくじらさうと思ふと、是れに中將樣がござるが、夫れは〱酷い目に合はせまする。」寔「兎角遊軒樣宜しくお指圖を賴みまする。」遊「拙者が其許の領分、獅子飛を切りおとし、淀川へ流しました故に、五畿內とも水損とんとござらぬ、其許には關西往來の朱印を頂戴してござるゆゑ、定めて往來の御工夫でござらうなう。」寔「サア其の儀に就きまして、私家內の騷動、記內一通り話しやれ。」記「否モウ遊軒樣が獅子飛をお斬りなされてより、湖は淀川へ落ちまする、唯今までよりは十倍の水の早さ、艪を立てましても櫂を立てましても、一向舟は上りませぬ故、長柄堤に舟を拵へ、あれより往來致させまするつもり、主人存じ付きましてござる。」寔「時に家中に關口平太、神道源八と申して屈強の若者二人ござりまするが、兩人ともに兎角火を擂つて中がわるうござりまする。」中、園「ハテなア。」記「それゆゑ源八方には渡を渡したらば、平太方の堤が成就致しまするゆゑに、渡普請を引延ばしまする、まつた、平太方には堤を築かば、源八方の渡が自由致しまする故、堤の儀を引延ばしまする。兩方挑み爭ひますから、自由に普請成就はいたしますまいと存じまする。」寔「此の兩人の中のわるいは、兵術の流儀を爭ひまする故でござりまする、なれども武士の身では不屈な儀とも申されず、一方に片付きますれ

たれば、役人共に逢うて何がいぢつてこました、此方がやうな公家はさむしい、ちつと遊ばねばたのしみがない。」寧「最前ちらりと見れば、淀の城預り與三右衛門が妹の喜蝶でないか、此の東山へは何うしてお來やつた。」喜蝶「アイお前は今度鎌倉より室町様へ、御參内にお立ちなされまする、定めし道中何かと御苦勞にござりませう、殊に縫之助様もお供に上京なさるとある、ちよつと御見舞にゆけと、兄與三右衛門殿の云付けられまして、河原町へ參りましたれば、此の東山へお出でと承りました。」寧「見舞に來た所を直にひつ捕へて狂言に遣うたぢやまで、酷いものぢや。」縫「何のむごい事がござりませう、郭の者さへ呼びよせまするもの、コリヤ貴方への御馳走でござります。」寧「ぢやと云うて、明日か明後日此方へ嫁入する大事の花嫁を、ハヽ、イヤ御引合はせ申しませう、是れは喜蝶と申して、淀與三右衛門が妹でござります、則ち弟縫之助と娶せまして、一兩日のうち此方の國へ嫁入いたしまする、箱入の娘を狂言に出して御目に懸けました。」遊「イヤハヤもう此の間から種々の御馳走、今日は祇園町、明日は島原のと御馳走にあきみちましてござる。」寧「さやう仰有つて下さると結句迷惑に存じまする。」岡「いやモウ拙者も山岡新田開發ぢやの、錢座名目錢などさま〴〵のねがひを取次ぎ致しましたれども、此の様な御馳走に逢うた事はござりませぬ、其の代りには中將様、明日の儀を宜しうなされて遣はされませい。」中「さらいでよいものか、諸事金でふいてある物、イヤナニ

ぢやござりませぬ。イヤ夫れはさうと、太夫樣がたの唐子踊、みな出來ました〳〵。」○「ほんにこちの兄樣はようものをいはんす、私やモウ恥かしうてなるこつちやなかつたワイな。」き「何をぬかすやら、千代菊さんや禿どもをみやい。」傾城花浦「いやモウ餘りほめて下さんすな、冷汗が出るワイなア。」同△「モウ今度の狂言は、かるい役に使うて下さんせ。」記「ひよつと若し仕損はうと存じて、手に汗を握りましてござります。」團「扨かの辨之作が敵役はしぶとうてえらう可い。」辨「何圖書樣のいやがらすやうなこと仰しやりまする。私が主人縫之助殿さへなされますもの、己やれ當てゝくれうと存じましても、とんと出ると夢中でござりまする。」團「いやわれはわれとも思ふが、中將樣にはいつの間に稽古なされました。」中將「何とえらいものであらうがな、自由に芝居は見にゆく事ならず、茶屋へ往て役者を招びよせ、芝居事ばかりはさすものぢやないて。」記「總じてお前樣は常平生に、斯樣な遊所へお出でなさるゝ事はならぬでござりませう。」中將「イヤもう近年は役人どもが詮議してどうもならぬ、それを無理に遊びにゆくと、おいらには得構はず、先の茶屋へ祟りをるに依つて、いつぞやの樣に川東のものになるてや。」憲「イヤをり〳〵には、チト遊興にお出でなされたがようござりまする。」遊「いやモウ貴方がたを手ばなしますると、一向方圖がござりませぬ。」中將「あれ御所の内から彼のやうに云ふによつて、外の者はなほいふが、憲法聞いてたも、此の間も和泉式部の梅山が所へ楊弓にい

線太鼓入、皆々おひ込みおうて出て敵役を押へて、縫「國の敵覺えたか。」小「若殿めでたうお國入り、先づ此の場はおたち。」

トわき幕になる。内よりしやぎり太鼓、みな〳〵道具片付ける。内に打ちませうしやん〳〵と手を打ち黑幕引くと一面の障子屋たい揚屋の座敷の體、殘らず衣裳著流し、東山はしの寮座敷のてい。向うより川浦遊軒、花滿憲法出て、

憲「出來た〳〵、けうといものであつた。」遊「イヤモウけうといの何のと、かやうなものではござらなんだ。」憲「お銚子わつさりと是れで一ッ呑みませう。」遊「さて〳〵皆々きつい名人、わけて縫之助殿はなか〳〵あぢをおやりなさるゝ、本の役者と見えまする。」憲「弟はえらうようござりまする、ハヽヽヽ。」遊「今の妻菊になつたは傾城の總角ぢやな。」總「オヽ、恥かし。」遊「なんの恥かしい事はない、身は禁裏の御用相勤める、川浦遊軒といふもの、折々は郭へ行くであらう、よく見知つたがよいぞよ。」總「かね〴〵お名は噂してをりやんす、ちつと郭へもお出でなさんせえ。」才兵衛「イヤもうやつて見ようとおもへども、サア狂言にかゝるがいなや、一口もいける物ぢやござりませぬ、小市々々。」小市「エヽ。」才「貴樣は太鼓持程有つて、面の皮が厚うてえらうえい。」小市「何を才兵衛さんのいはんすやら、私やモウお前のばち〳〵とものをいはんすやうに云つて見ようと思うても、ねからいくもの

縫「ムウ扨は先年勘當したる、谷坂兵内が倅和田右衛門であつたよな、勘當ゆるさいで何とせう、隨分忠義を勵んでくれよ。」小「エ、有り難うござりまする。」總、喜「樣子は殘らず承りました。」ト兩人出る。縫「ヤア二人の衆か。」喜「たとひいかやうに思召しましても、姫君樣をお心根不便と思召し、お止まりなさらねば武士の道は立ちませぬ。」總「其の上お前が國へお入りなされませぬゆゑ、後室樣の惡心、里の子戸根五郎樣を世に立てんとさま〴〵の企み、お前のお心一ッで國が亂れまする、サア何と。」縫「成程姫の心といひ、あやまつて、姫と夫婦になつて此の家國を治めうワイの。」總「スリヤ御得心でござりまするか。」花「エ、嬉しうござりまする。」小「若殿御得心の上からは、御祝言の壽き御祝儀御祝儀。」トすりがね太鼓。「女房よんだ川へほつこめ。」ト辨之作家來多勢引連れ、水あぶせのなり、もみの頭巾にて手桶持ち出づる。縫「戸根五郎樣、心得ぬてい何故これへお出で。」縫「何故でもない、若殿藤太郎殿と姫と祝言めさるゝと聞いたによつて、祝うて水をさし上げる。」縫「まつた藤太郎是れにをりまするぞ。」辨「さう見たによつて家來共。」侍「女房よんだ川へほつこめ〳〵〳〵。」小「まつた最前より若樣を附け廻し何とする、寄つたら爲にならぬぞ。」辨「よい推量、姫と夫婦になつて家を繼がうと思うた所に、思ひよらぬ藤太郎、打殺して家國治める、早く殘らず腹を切れ〳〵。」小「さう有らうと思うた、遁れぬ所覺悟せい。」辨「家來ども合點か。」侍「畏まつた。」トみな〳〵立になる、三味

する、エ、今の内に落したさうにござります、此方へ下さりませ。」花「此の守袋にて藤太郎樣參る陸奥と書いてあるから、そんならお前は藤太郎樣ぢやナ。」縫「夫れをしつた此方は。」花「云號の生駒姫でござんすワイなア。」縫「南無三寶。」ト逃げんとする。花「それをソレ止めてたも〳〵。」皆々「マアマアお待ちなされませ。」花「エ、聞えませぬ藤太郎樣、お前がお館へお入りなされませぬ故、母樣がさま〴〵の惡逆、お前をのけて私や外に男を持つ氣はござんせぬ、是れほどに思うてゐるものを、胴慾なお心入でござりますなア。」縫「身持放埓ゆゑに國を出奔して、所々方々とさまよふうち、言ひかはした陸奥も死ぬる、何面目に妹脊山の家へ世繼に入らうぞと、心は出家になつて居る、なに面目にと存じたに、恥かしい對面をしますワイなう。」花「かうお目に懸りますからは、何ぼうでも離しは致しませぬ、お止まりなされて下さりませ、但し死にませうか。」縫「サアそれは。」花「死にませうか、サア〳〵〳〵。」皆々「何うでござりまする。」圖「扨は櫻木藤太郎殿ぢやよナ、此の通り戸根五郎樣へ注進。」トかけ出る。小市圖書を切り止め刺す。皆々「これは。」小「御不審御尤も、私儀は先年御勘當を蒙りし谷坂兵内が倅、和田右衞門と申す者でござりまする。若殿出奔なされたと承り、所々方々を尋ね廻り、何卒勘當お詫の願ひ、父が存念を立てんと存じて、若殿とも存じませず、唯今附添ひをりまして、ござるも武運を開くべき瑞相、何卒昔の勘當御赦免下さりませうならば、有り難う存じまする。」

出る。縫「サア〳〵評判の力持ひやうばんの〳〵。」圖「コリヤ〳〵姫君への慰みに、曲持を致してお目にかけい。」縫「畏まりした。」侍「お氣にさへ入れば褒美はいか程でも下さるゝ、早く〳〵。」縫「東西東西、是れまで力持は幾多ござれども、重い物を差上げます許り、此の度は曲差でござりまする、ハリトウ、。」ト輕業の三味線になり、小市後にて使ふ。圖「よいよ〳〵。」縫「と留めました處が野中の一本杉、返して參りますとあまの釣舟、ハリトウ〳〵。」ト三味線にてとめる。「御はうびにどつと褒めた。」圖「よいよ〳〵。」縫「是れより山がらの餌おとし、鶯の谷渡り、あなたこなたへ通うて參る、ハリトウ〳〵。」ト是れよりいろ〳〵樽を使ふ、ト種々をかしき事あるべし、縫之助女形にぬれる、小市一人にて曲持してゐる、圖書悔りして反打ちにらむ、小市三味線に合はせ顫ひ〳〵樽をつかふ、力持女形に突き飛ばされ、圖書に抱きつく。圖「何ひろぐ大盜人め。」縫「ご免されませう〳〵。」ト橋懸りへ逃げる。圖「おのれらは人をうつけにした奴ぢや。」縫「力持でごんすワイの。」圖「まだ〳〵めんえうふしぎな事をすると思へば、後から黑いものを著て遣ひをる、あれで何でもなる筈ぢや、大盜人めが、こゝには叶はぬ出てうせう、うせぬか、まつ二ッにするぞよ。」縫「アイ〳〵さつぱりとしくじつた。」花「これアノ男にちよと尋ねたい事がある、爰へ招んでたも。」圖「お召しなさるゝ、ずつと出ませい。」縫「ハイ〳〵御用でござりますか。」花「此の守袋は其方のか。」縫「ハイ私がのでござりま

れた事を企む奴らぢやによつて、事顯はれたらコリヤ後室樣の云付ぢやと、自らに讓らん爲であらうがナ、怖いやつぢやなア。去りながら身に取つて覺えのない事、必ず疑うてばし下さるなや。」喜「そりやさうありさうなものぢやてや。」ト兩人顏見合はせ、紋「こりや〳〵兩人、餘り強う詮議して、姉樣某を不孝ものに致すなよ。」花浦「兎にも角にもみづからがある故、多勢の難儀、さらば。」ト自害せうとする、靫負留める。圖「おまちなされ妻菊どの、姫君樣が自害なされますと、忠臣かへつて不忠となりますぞ。」記「オ、さうぢや、強う詮議すると姫は死ぬる、そちは主殺しとなるがや。」總「エエ槇戸さん、コリヤまあ何とせうぞいナ。」喜「現在しれてあることを、ハテ仕合な後室樣ぢやなア。」記「やれ嬉しやの。」ト侍走り出て、侍「まうし上げまする、珍らしき棒のし力持を致しまする、中々面白い事でござりまする。お姫樣のお慰みにと存じ、ひかへさし置きましてござりまするが、返しませうか、いかゞ仕りませう。」圖「幸ひ〳〵、姫君のよいお慰み、是れへ通さつしやい。」侍「ハア。」圖「靫負之丞樣後室樣には奥へお入りあられませう。」記「オ、足許の明るいうちに奥へ行きませう。」喜「エ、仕合な。」記「コリヤたつていふと姫は死ぬるぞや。」皆々「先づお入りなされませう。」ト神樂になり、みな〳〵はひる。花浦唐子殘りゐる。子供「アレ今の力持がくるワイなア。」子供「ほんになア。」ト輕業の三味線になる、ト縫之助力持の形、小手脚絆にて樽をかたげ、其の後に黑き衣裳を著け小市

總「ちよつとお目にかゝりませう。」中「身どもにか。」トむかうへ出る。「何のやうぢや。」總「繩懸ける、手をまはしや。」中「だまれ、此の玄妙院には何の咎あつて繩かける。」總「いふまい里の小戸根太郎と同腹になつて、お家を呑まうとする大惡人、遁れぬ覺悟。」喜「黑い此の目でにらんで置いた。」中「此の玄妙院には惡逆といふ何ぞ證據があるか。」總「神主右京、さい前の箱是れへ。」圖「ハア。」ト神主右京箱を持ち出る。總「此の箱覺えがあらうがの。」中「此の箱を。」ト立廻り有る。總「掛け奉る願主玄妙院。」中「もう汝を。」ト切り懸ける、箱にて受ける、箱しかけにて破る、中より藁人形願書出る。總「ソレ槇戸さん。」喜「合點でござんす。」ト願書を取る。才「夫れを。」ト槇戸にかゝる、たちまはりあつて軍藏をおさへ、喜「敬つて申す願書、櫻木藤太郎を三七日の間に命を取りたまへ、玄妙院是れを承る、願主何某。」才、中「夫れを。」ト立廻りあつて、二人を見事に押へ括る。記「扨々、大切な玄妙院になぜ繩を懸けたぞ。」喜「後室樣、あまり賢人だて仰しやるな、若殿樣のろうた玄妙院、夫れに組する軍藏、繩かけたが誤りか。」圖「スリヤ御詮議を其許がなさるゝぢやまで。」喜「急度いたしてお目に懸けませう、此の詮議したら、此の某と書いてある、願主も大かた知れさうなもの、ナア後室さま。」記「されば。」ト氣味わるくいふ。總、喜「サア有樣にいへ。」中「知らぬ。」總、喜「しらねば斯うぢや。」ト刀の鞘にてこじる。兩人苦しき思入。記「やれまて〳〵、エ、憎い奴らぢやなア、此のやうな大そ

うては下さんすまいと思うて、私や悲しうござりますワイな。」今「なぜ其のやうに思召します。其のお氣をおいさめ申しませうため、皆も神慮を祈りまするでござりませぬか。」紋「それ〳〵主水が申しまする通り、皆神慮を祈りまするも、御氣色がわるうござれば母樣への不孝、姉樣なぜお氣をいさめさつしやいませぬ。」記「いやモウとかく姫の歎きやるが悲しき故、先だつて玄妙院を頼み、祈禱を誂へ置いたが、玄妙院は怠らず祈禱をしやるで有らうの。」中「仰せの通り、三七日が間壇を飾り、大聖不動明王に祈りをかけ、姫君安全家繁昌の御祈禱を致します。」記「オ、大儀々々。」才「イヤ何ぼう若殿の行方が知れても、傾城ぐるひに國を出奔する程の大たはけ、何の神も納受ござらうぞ、コリヤやはり玄妙院の勸めの通りになされたがよからう。」總「軍藏殿今のお詞のはし、何とやら藤太郎樣を蔑したる一言、何うすればお家が治まりまするな。」才「妻菊女の知つた事でない、すッこんでるやれ。」總「外記之進が娘妻菊、申すことは申さねばなりませぬ。」才「いうて聞かさう、若殿が此のお家繼がさつしやつたというて、役に立たぬ藤太郎殿、さつぱりと緣を切り、後室樣の里の子、大藏樣をつがすが上分別さ。」總「そりやどなたの御捌きで。」中「此の玄妙院が申し上げた。」喜「玄妙院殿、スリヤこなさんがお家の指圖さつしやるのぢやの。」中「御家が大切さに申し上げたがなんとした。」喜「妻菊さん。」總「槇戸さん。」喜「モウ詮議せにやならぬワイな。」總「大方樣子が知れて來た。」喜「玄妙院殿。」

り紋之丞花浦唐子大勢太鼓にて踊り出る。跡より總角喜蝶ふり袖にて、喜蝶は烏帽子釣鯛持ち恵比須の心にて出る。總角は唐子打連れ、はうろく頭巾、袋かたげ槌を持ち、大黒の形にて、少しえびす大黒三社の様な歌にて

所作事有りて仕舞かぐらになる。ト

内より「後室樣のお入り。」喜「いざお入り遊ばされませう。」ト記内後室のなり、中將は山伏玄妙院、才兵衞上下にて出る。花浦紋之丞上へ通り次第に竝ぶ。總「後室樣には御參詣でござりまする。」記「一家中のもの大儀にこそあれ。」ト圖書神主の形にて出で向ひ、圖「後室樣若殿樣姫君樣御參詣でござりまするか。」紋「神主右京今日は神事勤め大儀にこそあれ。」圖「ハア。」喜「誠に今日の御神事、私共まで斯樣な悅ばしい儀はござりませぬ。追付け御願が成就致しませうと存ずる故、たゞ〳〵御目出たう存じます。」總「槇の戸さんの云はしやんす通り、わけて此の度の御神事は、一しほ神も納受と存じまする、若殿樣の御行方も追付け知れませうと存じまして、お目出度う存じまする。」記「誠に此の妹脊山の家の事は、外に竝びなき歌道の家、櫻木の家の藤太郎殿を壻に取り、是れなる生駒姫に娶せ、家を繼がせんと思ひし所に、藤太郎には傾城狂ひに身持放埒、其の上國を出奔なされたとある、何卒行方を尋ね出し、家を繼がせん爲神いさめ、皆も神慮を仰いでたも、賴むぞよ。」花「郭通ひなさるゝとあつて悋氣する氣はなけれど、見ぬ戀にあこがれた藤太郎樣、なんぼう神樣を祈つたとても、自らに添

三十石艠始

狂言作者　竝木正三

序幕　御殿の場

役人替名

一傾城花浦　市松
一揚屋才兵衞　友十郎
一やりて杉　文十郎
一淀與三右衞門　四郎五郎
一小姓紋之丞　かつま
一志賀左近　吉太郎
一與三右衞門妹喜蝶　小伊三
一傾城總角　金作
一花滿縫之助　三十郎
一幇間小市　來助
一圖書　岩五郎
一熊本辨之作　次郎三
一記內　彌平次
一石橋中將　貫藏
一川浦遊軒　大五郎
一花滿憲法　新九郎
一みふね　喜世三
一其の外仕出し

○座敷狂言

造物三間の間に社壇一面の玉垣、前に櫻幕引くと太鼓打ち懸る。面白や三保の津の波といふ歌になる。向うよ

三十石艠始

並木正三

止めて、高衡「是れこそ正しく友切丸。」泰衡「どつこい。」ト立廻り有つてよいほどに高衡引つたくつて姉輪に渡す。のこらず見えになる。秀衡「義經公のおたち。」秀衡、高衡、姉輪、平次、家主、下部島助「目出たい〳〵。」姉輪「まつ今日は是れぎり。」目出度く打出し。

御ひいき勸進帳 終

連枝の血筋を思ひ、義經公を助け奉らんと、鎌倉表より出立の砌から、似せ首を請取るは重忠が豫ての忠臣、夫れとも知らず某を姉輪平次と一ばいくつたか。」秦衡「えゝ口惜しい。」姉輪「似せ首を請取るはこつちの勝手、似せ首を訴人する天命知らずめ、身替りを請取るは狂言の趣向、夫れをうぬらァ知らないか。」秦衡錦戸「さァそりやァ。」姉輪「ァ、つがもねえ、さあ義經公と岩手姫を、とりこになしたとぬかしたは、よもや僞りでは有るまい、有りやうに白狀ひろげ。」秦衡「畠山重忠、姉輪平次となつて助ければ、伊達次郎が手だてをめぐらし、とりこになしたる兩人、義經も岩手姫も、やれ矢ぶすまにかけろ、えゝ。」若衆「觀念。」ト是れをきつかけに障子を引き上げる。義經岩手うちかけを持つて防ぎ居る。秦衡「さあ義經も岩手姫もとりこになした、生死の界是れでも重忠云譯あるか。」錦戸「矢を切つて放さうか。」姉輪「さあ夫れは。」皆々「さあ。」姉輪「さあ。」皆々「さあ／＼／＼どうだえゝ。」姉輪「今こそ重忠が日頃念じ奉るまりし天の奇瑞を見せしめたび給へ、奇妙ちやうらい／＼。」ト刀を拔いて此の中にわつて入る。矢先を切つて切り落す。立廻りにて秦衡錦戸をつきのけ、義經岩手を家主島助が手に渡して、姉輪「義經公、岩手姫樣兩人お供仕れ。」家主島助「畏まりました。」秦衡「夫れやるな。」皆々「やらぬわ。」家主島助「どつこい。」ト立廻りになる。秀衡高衡最前のなりにて出で來て、秀衡「義經公には御安泰か。」高衡秀衡「有り難い。」トよろこぶ。秦衡「觀念。」ト秦衡高衡へ斬りかける。秀衡しやんと

秦衡「なんとだ。」姉輪「姉輪平次は似せ首を請取りに來た。」ト姉輪花道の中にすわる。錦戸「おきやアがれ、似せ首を請取りに來たとは合點の行かぬ、やれ景宗ともにやるな、えゝ。」奥にて「はあゝゝ。」ト奥より若い衆大ぜい侍の形にて出で、兩方よりとりまき、若衆「やらぬわ。」秦衡「姉輪平次にせ首を受取つても云譯あるか。」姉輪「兩人まゐれ。」家主島助「かしこまつて候。」ト家主島助、ついに裃の上下萌黄の小袖股立を取つて、大小をさし切幕より出る。兩人「御用でござりまするかな。」秦衡「やあ其方は身が家來、最前の町人こりやどうだ。」家主「主人畠山莊司次郎重忠、豫てまうし付けられたには、秀衡親子心々の五人の兄弟、もしや野心も有らんかと隱し目付の我々兩人、四相をさとる重忠の家臣本多次郎近常、なんと肝がつぶれるか。」島助「まつた某も窺ひより、家來と成つて入り込みしも、友切丸の行方、まつた義經公逆意あらざる含狀、主人重忠差圖にて、斯くは入り込みし奴の島助、誠は半澤六郎成清だ、お見知りなされてくんざりませう。」家主「本多次郎近常。」島助「半澤六郎成清、主人の御用を聞かんため。」兩人「是れまで推參仕つた。」錦戸「いやア。」秦衡「兩人ながら重忠の家來とか、こりやアどうだ、本多次郎、半澤六郎、此の兩人を家來と云ふ、姉輪平次が本名は。」姉輪「當時鎌倉において三老の席に列る畠山莊司次郎重忠なるわ。」秦衡「何がなんと。」ト討つ。姉輪「やつと參つたな、賴朝公の耳をねぶる梶原平三景時、もし此の時手に向はば義經公の御身の仇となるべきと、御

してよ壺の石ぶみ、陸奥の岩手姫樣。」秀衡「忍の前岩手忍は。」高衡「えぞ知らぬ。」姉輪「書きつくしてよつぼの石ぶみ。」兩人「なんと。」姉輪「今ぞ誠の約束の刻限、さあ兩人の首を請取るべいか。」ト障子を引き上げる。姉輪以前のなりにて出で、秀衡「契約のとほり義經公の御首、姉輪平次、御渡し申さう。」高衡「岩手姫の御首景宗へ御渡し申さん。」三人「いざ。」ト秀衡高衡姉輪へ首を渡す。姉輪「道を守る秀衡清衡より大恩を思ひ、討つまじきと思ひしに、兩人の首見事に打つた、でかし召された。」秀衡「すりや此の首が」姉輪「義經岩手姫。」高衡「しかと左樣な。」姉輪「いかにも。」高衡「えゝ忝い。」姉輪「お暇まうす。」兩人「御上使御苦勞。」ト秀衡高衡奥へ這入る。姉輪首桶を抱へ行かうとする。うしろへ泰衡錦戸出で來て、錦戸「まつた。」姉輪「姉輪平次を何で留める。」泰衡「鎌倉よりの上意には、義經公岩手姫が首打つて來れとの嚴命でないか、其の首はまつかいな贋もの、贋首を持つてかへつて、姉輪平次武士が立つか。」錦戸「五分もすかない顏をして、ふきかへをくらつちやア、姉輪平次は武士がたつか。」泰衡「それ其の首は贋物だ。」姉輪「なんだ似せ物だ。」泰衡「おつかぶせだ。」姉輪「おつかぶせとは何の事だ、おつかぶせははやらないわ、贋物をくつてつまる物か、義經公岩手姫の首に相違はない、さらばだ。」ト、姉輪つか〳〵と花道の中まで行く。泰衡「姉輪平次まて。」姉輪「まだ留めるか。」泰衡「義經も岩手姫も伊達次郎が虜にした、目前たしかな證據が有つても、夫れでも誠の首か。」姉輪「さあ夫れは。」

心付くより大酒に長じ本性を失ひし、酒の名に寄る和泉三郎、親兄弟にも見限られ、かかる折柄お役に立ち、日頃の不孝の云譯せんと思ひ詰めたる武士の一心、忠義にこりし其方まで、今日まで隔てて忠衡は、皆我が君への忠臣ぞや、今までは此の兄を元吉四郎は恨みつらん、兄が詫びする堪忍せい。」ト苦しき科あるべし。高衡「勿體ない兄者人の御一言、某 君の御身替りに立たんず物と思ひしに、運盡きしか情なや、そこ許樣は此の日頃の願ひ叶うて、我が君の御身替りに立てるとはお羨ましう存じまする。此の高衡は二親へ、不孝の罰が今日の今、お主の役にようたたず、夫婦二人が赤恥かき、存へて居る胸中、これ兄者人忠衡殿お免し成されて下されい。」和泉「いや左にあらず、又ながらふるもお主のため、さあ寄つて介しやくおしやれ。」高衡「さ夫れは。」和泉「苦痛をさせるは兄への不孝、氣おくれするは卑怯で有らう。」高衡「さは去りながら弟の身で、現在兄の介しやくは、何と刃があてられう。」和泉「苦痛させるは不孝で有らう。」高衡「さあ夫れは。」和泉「とく／＼介しやく／＼。」高衡「さあ夫れは。」和泉「さあ。」高衡「さあ。」兩人「さあ／＼。」和泉「なんと。」高衡「是非に及ばぬ南無阿彌陀佛。」ト和泉が首を斬り、すぐに高衡其の首を首桶へ入れ血刀をふいて居る所へ、おくより秀衡以前の忍が首を桶へ入れ持つて出で、秀衡「元吉四郎高衡。」高衡「親人樣。」秀衡「岩手姫の御首。」高衡「義經公の御首。」ト一度に首桶の蓋を取る。おもひ入れ有るべし。秀衡「陸奥の岩手忍はえぞ知らぬ。」高衡「書き盡

我が君様を、寄せくる人の物音か、是れに附いても義經公の御身の上、此の繩切つてお供せん、さうぢや。」ト身悶えする。大どろ〳〵にて燒酎火もえていましめの繩を燒ききる。おもひ入れして忍奥へかけ込まうとする所へ、ばた〳〵にて秀衡出で、忍を引戻し取つておさへ、首を斬り袖につゝんで這入ると、和泉三郎出でてねたばを合はする。奥より高衡此の體を見て、直に舞臺へ出て、立ちまはりにて引留める。高衡「こりや兄者人、貴様はどこへござるのだ。」和泉「義經の首打ちに。」高衡「なにがなんと。」和泉「鎌倉表より姉輪平次景宗が、御二方の首請取らんと、あれあのごとくにとり圍む、是非に及ばず主人の首、和泉三郎忠衡が討ち奉る心底ぢや。」高衡「すりやおかくまひ申したる義經公の御首を。」和泉「物の見事に討ち奉る。」高衡「其の心底なら忠衡殿、兄者人とて用捨はせぬ、主人に刃むかふ人非人、元吉四郎が相手にならう。」和泉「こしやくなやつの、其處立ち去れ。」ト立廻りあり。高衡「主君は討たさぬ。」和泉「さまたげするな。」ト立廻りあつて、高衡「すりやどう有つても。」和泉「義經公を。」高衡「義經公を。」ト立ちまはり有つて、和泉「まつこの如く。」ト立廻りの内、和泉諸肌ぬいで、切腹する。高衡驚き立廻り、高衡「やゝゝゝ忠衡殿此の體は。」和泉「さのみ驚くことなかれ、豫て覺悟の御身替り。」高衡「何がなんと。」和泉「慮外な、下れ。」高衡「はゝゝはァ。」ト飛びさつてうやまふ。しのび三重になる。和泉「秀衡五人の子有り、心の忠不忠兄弟心を一にせずんばまさかの時の妨げと、

女氣の、思ひかへ〳〵おゝさりながら、」ト相の手。忍「情ない我が君樣、我が身の上を思ひ思うた義經公は父上に隔てられ、お宮仕もゆるされず、剩へ斯樣に繩目に懸る女子のはぢ、いかなる因果な身の上ぢやなァ、思ひ切らうと思うても、思ひ切られぬ忍が心を思ひやり、義經公には露程も可愛と思うて下さんせいなァ。」ト泣き出す。「我が身の由緣薄紅葉、涙の露の亂髮、亂れそめにし陸奥の、誰が手をふれん賤が錦木。」ト唄きれる。此の內雪次第に降り積る。忍苦しきこなし種々有るべし。とゞ釣鐘の繪圖をきつと見て、忍「此の撞鐘をつく〴〵と見るに付けても妬ましや、初夜に殿御を待ち初めて、後夜に逢瀨の睦言を早曉もきぬ〴〵の、鐘に急かるゝうき思ひ嬉しいに附け悲しいにつけ、妾が殿御義經公、岩手姫とはそはさぬ〳〵、女の思ひが有る者か無い者か、今に思ひ知らせうぞ、義經樣に逢ひたい、我が君樣のお側に居たい、戀しゆかしと思ふ身の、積り〳〵て降るならば、今降る雪と諸共に、消えなんものを此の命。まなごの莊司が娘にも、やはか劣らん此の忍。」忍が思ひを思ひ知れ。」ト色々こなし有つて、忍此の鐘の繪圖を蹈むとごんとなる。どろ〳〵にて此の繪圖の上燒酎火もえる。忍きつと思入して「今おもはずも此の鐘を、蹈めばふしぎや鐘の音の、夫れか有らぬか聞えしは、忍が心の通ぜしか、ても恐ろしい物ぢやなァ。」ト忍また繪圖を蹈む。又ごんとなる。是れをきつかけにて方々にて遠ぜめのなりものする。忍急度思入して「さては思はずひゞきたる、鐘を合圖に

成らぬぞえ、岩手姫樣と義經公と一所に置く事は、どこがどこまでもならぬ〱。」秀衡「成らぬとぬかせば足手まとひ、おのれは秀衡がまづ此くの如く。」ト忍を高手小手にしばり、梅の幹へくゝり附ける。秀衡「すこしも苦しうござりませぬ、いざ岩手姫樣義經公と御一所に、秀衡がお供仕りませう。」忍「是れ申し父上樣、ようも〱此のやうに、情なくもいましめて、忍のまへは我が君を思ひこがれて死ねよと云はぬ許りのお心が、むごいわいな〱。」トなき出す。義經「忍の前不便とは思へども、皆義經を大切に、事を計らふ秀衡が志。」岩手姫「女子心は女子が知る、夫れとは知れど此の身にも、任せぬ物はうき難儀、堪忍して下さんせ。」秀衡「己其の戀にこりし其の片意地は、親の秀衡存じて居る、是れ此の三井寺の鐘の繪圖。」ト取つて忍が前におき、「昔紀州にまなごの莊司と云ふ者あり、彼のもの一人の娘を持ち、此の秀衡も左の通り、其の頃奥州より熊野へ渡りつる山伏有りしが、其の山伏も義經公、某そちを寵愛の餘り、幼い時に云ひ聞かせし、夫よ妻よが仇と成り、嫉妬に沈むが情なや、道成寺の云ひわざを、我が身に引いて思ひ切れ、夫れが我が子へ父が教訓、お二方には先づお入り成されませう。」ト是れより誂への唄になり、義經岩手姫秀衡這入る。

長唄　湖出市十郎　三味線　杵屋六三郎　同　喜三郎　めりやす　錦木

「爰は山陰森の下、月夜烏はいつもなく、我は戀故なき明す、ひさげの水の沸き返り、胸に迫るも

下されませい。」秀衡「幸ひ〳〵忍の前、某は義經公の御供申して立退けば跡にまします岩手姫樣、其方お供仕り、光堂まで立越えさう〳〵。」忍「はい〳〵箇樣な時こそ御奉公、女子は女子同士のお供、是れからすぐに參りませう。」秀衡「でかした〳〵、義經公には忍の前へお詞をくだされませい。」義經「秀衡父子の心遣ひ、何から何まで忘れは置かぬ、忝い〳〵。」忍「そんならあなたには、父秀衡も私も、大事にかけますると思召しまするかえ。」義經「そりや思はいでなんとせう。」忍「有り難うござります。」秀衡「忍の前はやうお供して立退かぬか。」忍「あい〳〵、去りながら父さんへわたしやお願ひござんすわいな。」秀衡「此の場に成つて願ひとは。」忍「其の願ひは。」秀衡「なんと〳〵。」忍「其のお願ひはあのな岩手姫さまのお供をば、父さんお前遊ばして、義經公のお供をばどうぞわたしに成させて下さんすまいかえ。」秀衡「たはけづらめ、義經公のお供をなんの己らが願ふ事、きり〳〵岩手姫樣のお供を致せい。」忍「いやぢやわいなア。」秀衡「そりや又なんで。」忍「なんでとは父さん野暮なこと許り云はしやんす、あの義經公のおいとしらしいお供はわたしがよい役目、朝な夕なのお宮仕へ、又はお寢間のお伽夫れが男が成る物かいなア。」秀衡「夫れはおのれ何をぬかす、かかる急なる折によいきげんな、すりやどう有つても岩手姫樣の御供はせぬか。」忍「堪忍して下さんせ。」秀衡「えゝおのれ、いざ義經公には岩手姫樣諸共に、お立退き有つて然るべう存じ奉りまする。」忍「いえ〳〵そりや

朝へ告げ知らせんと、認め置きたる含み状。」ト懐中より出し岩手姫へ渡す。義經「そなたも跡より未來へおぢや、半座を分けて待つほどに、未練殘さず最期々々。」岩手姫「あなたの仰せまでもなく、妾も豫て無き身ぞと認め置いたる書置、さはさりながら經若丸、種腹かしたも名許りにて、千代もと祈るかひもなく、たゞ一時の親子の縁、露よりもろき命かと、思へば〱夫れが悲しうござんす。」ト泣き出す。義經「よし夫れとても前世の約束、兼て無き身と思はずば、此の世に心の殘るべき、斯くなり果てし此の義經。」岩手姫「妻子も同じ死出の旅。」義經「死ぬる許りが誠なりけり。」岩手姫「我が君樣。」義經「岩手姫。」岩手姫「思へばはかない。」義經「えにしぢやなァ。それ。」ト小刀へ手をかける所へ、奥より秀衡羽織衣裳にて出て來て、義經をとめる。秀衡「先づ〱お待ちなされませう。」義經「其方は。」秀衡「藤原秀衡、義經公御生害には及びませぬぞ。」義經「何がなんと。」秀衡「必ずやお急きなされまするな。」ト云ひながら、岩手姫を引立て外へつき出し、門口しやんとしめる。岩手姫「合點の行かぬ秀衡殿、自ら許り此の體は。」秀衡「左樣成されて御座成されば義經公の皆御爲。」ト云ひながら、義經が傍へ來て、「いざ我が君さまには、此處よりお立退き有つて御尤もに存じ奉りまする。」義經「すれや某を。」秀衡「お落し參らする秀衡が豫ての所存、委細の事は奥の一間で申し上げん、いざ〱。」ト義經をむりやりに引立てると、はやごしらへにて、忍ばた〱と出て來て、義經をとめて、忍「まづ〱お待ち

つて男でもない、所詮ほれたを負けにして犬とでも猫とでも云へ、いやでもおうでも抱いて寝る、きりきり己と奥へこい。」ふゆ「いやぢや〱、いやぢやわいなア。」泰衡「いやとぬかしやアかう〱。」トお冬を峯打にする。高衡無念がるこなし有つて、側へよらうとする。家主高衡がえりをとつて下に引きする、家主「動きやアがるな野郎め、罰があたるを合點して、うぬを存分にせにやア成らぬ、ようもようも今までうぬが女房を妹にして、此の家主をよくもしかにかけやアがつたな、己を一ぱい喰はせたかよいか、是れか〱。」ト高衡を打擲する。高衡が額を下駄にてぶちこはす。高衡きつとして、

高衡「こりや高衡が生つらに。」家主「疵が附いたわえ。」高衡「もう料簡が成らぬわえ。」家主「何を〱。」

泰衡「はゝゝよい態、元吉四郎がしやつ額へ疵が附いちやア、ざつと義經が身替りにはたたれまい。」

高衡「何がなんと。」泰衡「岩手姫の身替りにあてておいた此のお冬、伊達次郎が女房にすれば、是れで思ひ殘ることはあるまい。」高衡「なんと。」ト詰めよる。泰衡高衡をおさへて、泰衡「右と左に四郎とお冬、是れを肴に一ぱい呑まう、ナニ佐七とやら身に續いて奥へまゐれ。」ト唄になり、お冬高衡を引立て、家主を連れて泰衡這入る。奥よりばた〱にて、幸四郎義經にて出て來る。跡より岩手姫抱子を抱へて出て來る。義經「岩手姫、今も今とて聞きやる通り、はや義經が身の上にかゝる大事の一世の浮沉、淺ましき最期を遂げんより、經若丸を刺し殺し、いさぎよう自害して身に誤りのなき由を、兄頼

たぞ。」高衡「是れはどうでえす、兄者人あのお冬儀はちと仔細あつて世間憚り、おやぢ様思召しを差加へてござれども、元吉四郎高衡が女房、妹と申したは偽りでござる。」ふゆ「まだろく〳〵にお目に掛りませねども、常々のお噂ぬしの厄介、はいまあ女房の樣なもの、お見知り成されて下されませ。」泰衡「そなたが云はいでも三年跡から見知つて居る。無理合點でほれた泰衡が女房になれ、いやでもおうでも抱いて寝る、さあ某へお冬をくれろ。」高衡「いかに邪を好めばとて現在の弟此の高衡が女房を。」泰衡「女房とは云はさぬ、後日の證據は書いた一札、妹を引取つたと自筆に書いたぞ、又其の上に家主に渡した十五兩の金子、上包の書付は帶代。」高衡「なんと。」泰衡「帶代として十五兩請取つたからは、いやおうは云はさない、但しは今の金を返すか、妹ぢやァないか、ぬきさしのならぬ樣にがんぢがらみの此のお冬、身が女房に貰つたぞ。」高衡「さあ夫れは。」泰衡「妹と替へた此の引取り、お主やァ忘れはせまいがな。」高衡「さあ夫れは。」泰衡「さあ。」高衡「さあ。」兩人「さあ〳〵。」泰衡「なんと。」高衡「はい。」泰衡「さあおぢや。」ふゆ「何のこつちやいの手をつけて下さんすな、いかに邪な生まれ附きぢやとて、現在の弟嫁、まんざら知つた此のお冬を女房にしようとて、金貸して夫れでも夫れが武士かいな侍かいな、男かいな、さもしい卑怯なふがひない胴慾なお心でござんすなう。」ト泣く。泰衡「是れかゝァ、此の伊達次郎泰衡は、そなた故にやァ武士でもない侍でもない、夫れだに依

たいて居る所へ、奥より泰衡、上下衣裳にてさい前より見て居てつか〳〵と出で、家主をなげ、峯打に打ちすゑる。泰衡ふところより金を出し、包上書をして懐中してゐる。泰衡「身動きすると命がないぞ。」家主「なんだ此の侍は人をめつぽふかいにぶちすゑたが、どうするのだ〳〵、相手が面白いぶたれべいた〵かれべい。」ト泰衡が傍へ行く。泰衡「す町人の分として慮外を働く不屆者、斬り下げるは安けれど、鎌倉よりの上使のお入り、夫れ纔かの金子。」ト高衡へなげて渡す。高衡請取りいたゞき、高衡「さあ先達よりかり請けたる金子返濟する、きり〳〵持つてうせう。」家主「うせいでは〳〵、金さへとればうせいでは、さらば我等うせませう。」ト家主立つ。高衡泰衡が側へ行き、高衡「どうもお禮の申し樣がない、日頃親人にもそこ許樣にもお氣に叶はぬ四郎高衡、唯今の難儀を見かね金子をお貸し下さるとは、誠に親は泣きよりぞや、誠に有り難い〳〵。其方が金子勝手次第に持つてうせい。」ト家主に打ち付ける。其の金を取つてにこ〳〵わらひして、家主「切りくづなしに十五兩、家主の佐七が受取つた。」泰衡「其方が金子請取つたからは、此方に係合はないぞ。」家主「左樣々々。」泰衡「かゝり合ひがなければ身が女房、さあ泰衡と一緒におぢや。」ト、泰衡ふゆが手を取る。ふゆ、高衡肝をつぶす。ふゆ「え〵。」泰衡「さあお冬きり〳〵おぢや。」ふゆ「泰衡樣とした事がめつさうもない、私や誰ぢやえ。」泰衡「知れた事四郎が妹、身が婦妻に申し受けても苦しうない、某が奥にする、泰衡がかゝアに貰つ

ふゆが手を取り連れて行かうとする。ふゆびつくりして、ふゆ「大屋さんどこへ行くのでござんすえ。」家主「しれた事、十四兩二分の金の替りに鹽釜へ連れて行つて、そなたに勤めをさせる。」ふゆ「えゝ。」家主「さあ歩んだ〳〵。」高衡「まあ待つて下さりませ、すりや金のかはりに妹をあの鹽釜へ。」ふゆ「勤奉公に出すといなァ。」高衡「そりや又あんまり。」ト高衡、ふゆ顔をふつと見る。是れより身替りに立てやうと思ふ心に俄になる。種々とふゆを見て、高衡「よい所へお冬よう戻つてくれたなァ。」ふゆ「なんのこつちやいの、思ひ出した樣によう來たの惡う來たのと云ふ事がある物かい。」家主「さあお冬殿挨拶さつしやい〳〵。」ト連れて行かうとする所を高衡家主を取つてなげ、高衡「ならないぞ、妹お冬をやる事はならぬ、借り請けた金は、こりや相對、身が妹を勤奉公させようとは惡いやつの、さあきり〳〵と歸りをらう。」家主「りきむわ〳〵、金を借りて世話をして、雪の中へぶち込まれて、どうやらわしが損だけれどもせう事がない、金さへとれば一分がたつ。さあ貸した金をたつた今受取るべい。」ト高衡がむなづくしを取る。高衡「さあ夫れは。」家主「金を請取るべいか、金が出來ざァいつその事に、うぬを己がかうしてくれべい。」ト高衡をつき倒す。高衡起き上つて腕まくりをする。家主「ふとい野郎ぢやァないか、金を返せ〳〵。」と高衡を蹈みのめす。ふゆ見かねてそばへより、ふゆ「是れナァ佐七さんそりや又お前あんまりであらうぞえ。」家主「あんまりとはなんだ、あんまりとはこいつが事だ。」トた

が身の上、勘當受けてしまつた位ならば、今まで何しに靜乎して居ませう、稼ぎ次第のかぬかさんまい、親と云ふ字に繋がれまして、かう致して居るが此の胸はどの樣にござりませう、御推量成されて下されませ、今少しの所お家主樣、何卒お待ち成されて下さいませい。」家主「是れ夫れを聞くまいと思つて、どうかうさげ重に出ろ〳〵と家主の己が勸めるを聞かずに、外聞が惡いの恥かしいのとりきんだ事許り云うて、さあ金の段になつて三文も出來るか、是れ地獄々々といま〳〵しい樣なれども、地獄の沙汰も金次第、一時轉びァ猿が餅一分づゝ取る旨い商賣、世話して貰うて金貰うてよい事だと思へばこそ、此の家主の佐七が勸めたぢやァないか、夫れをも聞かないで借りた方を待つてくれろとは餘りふとい挨拶許り、料簡はならない、十四兩二分六百たつた今よこして貰はう、きなか缺けても請取らないよこして貰はう〳〵。」高衛「さあ夫れは段々の御深切でござれどもどうも其の樣な儀は。」家主「ならざァ金を返して貰はう。」高衛「さあ其の金子の儀は。」家主「出來ないか。出來ざァよい、出來ない物を無理やりに、家主をしてゐる佐七、其の位の事を聞き譯ないでもない。」高衛「左樣ならばお聞き屆け下さりましたか、是れは〳〵。」ふゆ「まあ〳〵そこは雪風寒さにござります、どなたも此方へお這入り成されませいなァ。」高衛「えゝ氣の附かぬなぜお茶でも上げぬ、お煙草盆を持つて來い。」ふゆ「あい〳〵。」トふゆ茶を汲んで家主へ出す。家主「かまはつしやるな〳〵、さあお冬挨拶しやい。」ト

にさうだと云つて、此の雪の降るのに店を立てると云ふ様な。」トむつとする。此の内うしろへ家主來て、家主「邪見な男、さぞ貴様はがうたらだんべい。」高衡「是れは〳〵お家主様そこ許様に對して、一言も云譯はございませぬ、やれ〳〵此の寒いのにようござりましたの。」ト大笑ひ。家主「是れさ〳〵、追従らしいけいはく笑ひ置いて貰はう、サア屋賃の勘定どうするのだ、其のほかに懸合おれが引請けてやらにやァならない。」高衡「左様々々私方から致し方が悪さに、其許にお腹を立たせまする、段段御無沙汰に成りましたが拙者儀も。」家主「是れ〳〵久しいもんだ、貴様の妹を店に置いて世間までふさげた此の家主、サア何はともあれ妹を渡すからは引取りを書いて貰ひませう。」高衡「おゝ書きませいでは、一寸書いて進ぜませう。」ト硯箱を出して書くうちも、身替りのこと案じる思入有るべし。高衡「一つ我等妹借屋を借り置き申し候所、我等方へ慥かに引取り申し候以上佐七殿へ四郎高衡。」と書いて渡す家主受取つて改め、家主「よし〳〵是れでよし、貴殿の方へ妹を渡してしまへば、まあこつちに懸合はないと云ふものだ。是れからが又金づく、家賃を貸す大屋こそ多けれ、月々六百づゝの屋賃を十六箇月やがて一年半と云ふ物貸し置いて勘定が九貫六百、是れがまづ一兩二分六百よ、其の外に米味噌炭薪小遣一切立て替へて置いた、其の勘定が十三兩に一兩二分と六百二口〆十四兩二分六百、さあ、たつた今拂つて貰はう。」高衡「大屋様是れは又お前どうでござりまする、御存じの通りの拙者

いなア、陰のことならせう事もござんせぬ、現在目の前で云はれてはわしもお前も立たぬわいなア。」 家主「何の立たぬ事が有るものでござる、高が獨身で喰ふや喰はずに居ようより、大屋がすゝめて地獄に出ろと云ふ事を聞かぬ故、そこで店に置かぬのだ、何もかも云ふ事がない、貴樣の店請人へひき渡してやれば事が濟む、二人の衆大儀ながら其のがらくたこつちへ持つて來て下さい。」 若衆「合點でえす。」 家主「是れ貴樣先へいつて、仙臺のきため町家主の佐七が來たと云つて下さい。」 ふゆ「あい〳〵。」ト舞臺へ來て高衛を見付け、「申し〳〵四郎さま、私はお前に逢はねばならぬ用があつて、爰まで態々來たわいなあ。」 高衛「どの樣な用か知らぬが女の身で、此の雪の降るのに何しに來た。」ト云ふ内も奥を氣遣ふ心持有るべし。 ふゆ「外の事でもないがお前の知つていやしやんす通り、きため町の裏店を借りたは畢竟、お前と一つに居る事が成らぬによつて、わたしをお前の妹分にして、まあ當分居た樣なものなれども、何かに附けて自由にならぬお前の身の上、大屋さんがやかましう云つて、たつた今店を明けいと云はしやんして、私を連れてござんしたわいなア。」 高衛「そんならなんと云ふぞ、此の元吉四郎は勘當同前なこんな態の身の上、錢一文も才覺も出來ぬに依つて、きため町の店を借りて置いたが、あの家主の世話にばつかり成つてゐるに依つて、そこで大方大屋もむつとして店をたてたと云ふ事か。」ト此の内も身替りの事を案じる思ひいれ有るべし。 ふゆ「あいさうぢやわいなア。」 高衛「いか

叶うたる忠義の手だて、夫れ〳〵。」ト悦んで、又思案して、「某が首を御身替りに立てば、あなた方のお供する命が外になけりやァならぬ、えゝいま〳〵しい事だなァ。」ト無上にぢれて下に居るとてんつゝに成り、花道より家主火事羽織を著たるやつしの形にて越後頭巾をかぶり、懷手して出てくる。跡よりおふゆ木綿袷木綿帶のなりにて風呂敷包を提げて出てくる。跡より若衆、障子疊下駄とたらひはうろくと鍋を一つ兩がけにしてかついで出る。跡より今一人若衆行燈と味噌桶と火燵やぐらと蒲團を一つに兩がけにして擔いで出る。花道の中程にて、家主「日傭の衆々やつと來ました、扨々店だてと云ふものは家主の世話な物でござる、此のお内儀を引渡した許りで濟めばよけれども、まだ〳〵店賃の勘定近所の買ひがゝり、己が方へ引受けてきたに依つて、此方のかたが附かねば此の人を渡して、引取りを御亭主の前から取つてしまつた跡が又錢づく、貴樣たちの日傭代も先で取つてやりませう程に、大儀ながら其のがらくたを持ち込んで下さい。」若衆「どうで爰まで來た物だに依つて、先まで行つてやりませう、私らは同じ日傭でも此のお内儀とは鄰同士、折角馴染みましたに氣の毒な事でござります。」若衆「夫れ〳〵附きあつて見れば心立てもよい人だが、どの樣な事が有つて店立てをくはつしやるか、氣の毒な苦々しい事でござる。」家主「聞いて下さい、わしも門前ぢやァ云ひ惡い事だが、是れ此の人は秀衡樣の若殿の内に元吉四郎。」ふゆ「あゝ申し〳〵大屋さん、其の樣な事は人も聞くわ

うが、たゝかれうが踏まれうが、なんでも貴様のおほせ次第、候べく候にやつて捨てるぢや。」泰衡「取りとめない三郎殿の挨拶、夫れにも一物あつての事か。」和泉「ないぢやわいの。」高衡「置かつせい。」和泉「置けと云へば置けぢや。」泰衡「面白い、和泉三郎忠衡は善とも悪とも片附かず、四郎高衡は義經公の首討ち落す心よな。」高衡「おんでもない事。」泰衡「確と左様な。」高衡「おんでもないこと。」和泉「助ける心うつ心。」泰衡「云ふが誠か。」高衡「云はぬがうそか。」和泉「親にも。」高衡「子にも。」泰衡「兄弟にも。」和泉「夫れともあかさぬ心と。」泰衡「心。」高衡「心々の二人の兄き。」泰衡「元吉四郎。」和泉「後に逢はう。」ト唄になり、和泉泰衡思入、見送りて、高衡「兄弟五人の其の内に錦戸太郎國衡殿は、惰弱不才の生まれつき、次の伊達次郎泰衡殿は、邪智佞人、和泉三郎忠衡殿は柔弱にして胸中知れず、かく云ふ四郎高衡は無骨短慮の生まれ附き、兄弟中是れ程に整はずして、そもやそも、是れで主君へ忠義が立てられうか、時も時とて姉輪平次、御二方の御首受取らんと、のつ引きならぬ手詰の難儀、命にも力にも思ふ親玉は、此の場の敵に廻られちやア、假令やたけに早つても、心許りで齒は立たず、とはいへ其の儘さし置いては、義經公の御大事、岩手姫様の今の御難儀、いい料簡がほしいなア。」ト思入して膝を打つて、「よい料簡が出たぞ〳〵、手もなく義經公、岩手姫様のお身替りに、かく云ふ四郎が首と、あの女房お冬が首揃へて出せばお二方、さうして置いて貴方方々、お供申して立退くが、身に

ア。」ト思入して和泉が側へ行き、「兄者人和泉三郎忠衡殿、そこ許樣の御心底は、義經公を御助けなさるゝお心か。」和泉「いかにも義經公をお助け申す心底ぢや。」高衡「いや〳〵お隱し成さるゝな、左樣に仰せられても、義經公を貴殿討たるゝお心で、三郎殿にはござりませうがな。」和泉「いかにも義經公を討つ心ぢや。」高衡「いや〳〵左樣には仰せらるゝが、義經公をお助け成さるゝお心でござりませうがな。」和泉「いかにも御助け申す心底ぢや。」高衡「置かつしやい、義經公をお助け申すお心かと云へばいかにも、御首討つ心かと云へばいかにも、彼方を聞いても此方を聞いてもいかにも〳〵、夫れぢやア兄き貴殿の胸中はどちらか別らぬが、夫れでも武士の本意が立つか。」和泉「たゝぬでえす。」高衡「なんと。」和泉「和泉三郎忠衡が心底、どうして其方達に云ふぞ、義經公の御首討つかと問はれて、討つ事成らぬと云うたら、鎌倉殿の鎌倉風吹かせて、二心ぢや弓引く心ぢやのと、思はぬ事を目くじら立て、耳やかましう云ふで有らう。又討つ氣ぢやと云うたら、先祖淸衡殿より大恩請けし秀衡親子、義經公の首討つたは主殺しぢやの不忠者ぢやのと、箸の上げ下しに云はるゝ事なら、是れもうるさい事ぢやに依つて、討つかと云へば討つ、討たぬかと云へば討たぬ、お身替りを立てようと云へばそりやよからう、蝦夷三界へ落しまゐらせうと云やればよからう、人が何云うても和泉三郎は背かぬ、高が裸體で物を落さぬやうなもので、身上のかんかたらず、體に疵がつかず、わるう云はれうがそしられ

杯に對へば違ふ心かな。」ト此の紅葉狩のうたひを唄ひながら、生酔のこなしにて、段々に西の方へ行く。泰衡是れをぢり〳〵つけて、泰衡「心の知れぬ和泉三郎、生酔の化を顯はして、本性をあかせ。」和泉「さあ夫れは。」泰衡「さあ。」和泉「さあ。」泰衡「さあ〳〵なんと。」和泉「さゞ波や〳〵、しがから崎の松の上葉を、さらり〳〵とさゝらのまねを、珠數にてすればさゝらより、猶手口しする物、今は助けてたび給へ。」ト其の内種々鼓をかせに立廻り有るべし。程よき程に高衡奥より出で此の中に隔てる。立廻りにて三人急度見えになる。高衡「まづ〳〵待つて貰ひませう。」兩人「其方は。」高衡「元吉四郎高衡でござります、兄ぢや人。兄者人兩方共に必ずおせきなさるゝな。」泰衡「元吉四郎、伊達次郎は汝に挨拶はないわえ。」高衡「拙者に御挨拶ないとは。」泰衡「伊豫守義經公、岩手姫も、わりや助ける心だらうがな。」高衡「さ夫れは。」泰衡「但し義經も岩手姫も首ぶち落して、姉輪平次へ渡す氣か。」高衡「さあ夫れは。」泰衡「どうだ。」高衡「元吉四郎高衡は親にも兄にも見限られ、世に捨てられし一本立ち、誰にも彼にも頓著ない、兄頼朝の命に違ひ、かゝらうしまもない義經を、主君と頼むはたわけの至り、窺ひよつて高衡が、御首振つて打落し、姉輪平次へ手渡しせば、お釜を起す一もとで、あくまで敵になる心、して又兄きの心底は。」泰衡「伊達次郎泰衡は、道を守つて信義を立て、どこがどこまでも、義經公も岩手姫をもお助け申す心底だ。」高衡「すりや義經公を。」泰衡「泰衡が御助け申すわ。」高衡「はてな

ならず。」ト三勝を唄ひながらよろ〳〵して、姉輪が捨てたる反古を拾ひ、あたりを見ながら銚子の酒を手水鉢へ明けて、引きさいたる手紙をだん〳〵水手鉢の中へならべ、うへより鼻紙をかけて引上げる。是れにて悉く工み現はるゝ。和泉「何々、かね〴〵申し合はせ候義經岩手姫、高館へ入り來り候はば早速申し達すべく候、其の折柄兩人の首御持參成され候はば、貴公樣の御手柄にも相成り申すべく候、右の段梶原殿へも宜しく賴み入り候、月日姉輪平次殿へ泰衡。」ト讀んでびつくりして、「すりや先達より鎌倉表へ此くの如く內通せしは、我々が兄伊達次郎泰衡殿か、よもや〳〵とおもひしに、我が身の內に敵有るとは恐ろしとも危しとも、義經公の御身の大事、ほい。」ト思入するうち、後へ泰衡出てむにむざんに切り附ける。和泉有り合つたる鼓を持つて、しやんととめて、和泉「こりや泰衡殿には、拙者をなんと成さるゝな。」泰衡「後に聞く人有るぞとも、知らぬはおことが絶體絶命、大酒に性根を亂せしも、裏から裏へ廻らん爲の、手術とも知らぬ我々が、うつかり姉輪平次が引きさいたる、今の一通を見られちやァ、縱令汝が親にもせよ、助けておいちやァ某が、梶原殿へ云ひ交したる一分立たず、さあ速かにくたばつて。」ト立廻り有つて、「しまへ。」ト切附ける。和泉見事に請け留めて、また生醉のこなし有つて、和泉「おせきなさるゝな兄者人、我等醉うてえす、憚りながら急度醉うてえす。」泰衡「何が何と。」和泉「さなきだに人心亂るゝ節は、竹の葉の露許りだにかけしとは思ひしかども

姉輪「其のつらはなんだ。」ト高衡を足にかける。高衡「最前から事を控へてじつと心でこらへて居れば、姉輪平次陪臣の分として、元吉四郎高衡をよう土足にかけたぞよ。」姉輪「足にかけたがなんとした。」トける。高衡すぐにそりを打つてつめ寄る。姉輪ぱつたり下にゐる。高衡「土足にかければ手は見せぬぞ。」姉輪「姉輪平次は上使だぞ。」高衡「何がなんと。」姉輪「伊豫守義經公、北の方岩手姫、秀衡館に隠れ居るよし、見とゞけて首引つさげて立歸れと、重き役目を蒙つたる姉輪平次は上使だぞ。」高衡「なんと。」ト詰め寄る。姉輪「えゝ此の野郎は疊ざはりの悪い、じたばたひろぐな、ほこりが立つわえ、ええばかなつらだ。」ト扇で高衡のみけんをくらはせる。すぐに高衡詰めよる。襟を姉輪引きつかみ立上つて、姉輪「またしてもくきつぱをまはす元吉四郎、姉輪平次が云分有る、動きやァがるな、さあ秀衡、義經、岩手姫かくれ居るに相違はない、首討つて出せ、返答はなんとだ。」秀衡「さあ其の儀は。」姉輪「なんと。」秀衡「上使のお請暮六ツ時の鐘を合圖に。」姉輪「暮六ツ時の鐘を合圖に。」秀衡「急度返答仕らう。」姉輪「先づ夫れまでは元吉四郎を預けたく。」ト突放す。寄らうとするを、秀衡きつと留めて、秀衡「こりや御上使へ對して慮外者め。」高衡「えゝ口惜しい。」姉輪「泰衡案内。」泰衡「まづ御入り成されませう。」ト唄に成る。姉輪、國衡、泰衡、秀衡、高衡、島助、總助、這入る。雪段々降り積る。此の唄の内、和泉そろ／＼起き上り邊を伺ひ、和泉「金の替りに女房になれど、せがみ立てられ返事も

つた。」姉輪「こゝな二才やらうめ、かはつた所へうしやあがつて、姉輪平次が利腕へ取りついたか、どこから飛んでうしやあがつた、やぶ蚊め。」高衡「此の家のあるじ藤原秀衡が心にちがひ、とても武士には成るまいと、子を見ぬいたる親の目鏡、今は長屋の奥住居身をかへり見ず、此所へ和泉三郎が弟に、元吉四郎高衡と申す、兄弟五人の其の一人、役にも立たぬやぶからし、やぼなやぶ蚊でござりまする。」姉輪「扨は五人の兄弟の内元吉四郎とはわが事か、何だわれは吹きぬきの布子一つ、むさいきたない其のなりで、姉輪平次景宗が前をも憚らず、いけあつかましくうしやあがつて、夫れのみならず、武士のきき腕に取りついてなんとひろぐ。うぬらが様な二才やらうめに、けちを付けられて間しやくに合ふものか、ばかなつらな。」ト姉輪高衡をつきのける張合に、姉輪がふところより一通を落す。高衡とつて、高衡「なに姉輪平次景宗殿へ泰衡より。」トよむ。姉輪ひつたくり、ずた〳〵に引きさき、高衡を足げにして其の一通をまるめてうちやる。姉輪「なんだ此のほぐがどうした、某かたへ泰衡より、旅行の挨拶を書いたる此の一通、あたぶさ法な、わいらが引きたくつてどうせうと思ふ。」高衡「さあそれは。」姉輪「誰だと思ふ姉輪平次、關東そだちの武士のきつする、まだひよめきもかたまらぬ様をして、いいかと思つて某を、疑ひらしいつら魂、赤いわしへそりをぶつてどうせうと思ふえゝ。」ト高衡をかる〴〵と引寄せてこづきとばす。高衡無念のこなし色々有るべし。高衡「推參な。」

らう。」泰衡「すりや其元のお薬で三郎が酔ひをさまし召されうとや。」姉輪「如何にも。」泰衡「然らばよろしう頼みぞんずる。」ト泰衡ひかへると、姉輪立つて大はんとの火鉢を持つて、和泉のまへに寄り、姉輪「和泉三郎忠衡聞きしに増るあつぱれの武士、姉輪平次篤とお近付に成りませう。」和泉「こりや有り難い、拙者生まれ付いて未熟な事が嫌ひ〳〵、石部金吉金兜、酒などたべる物を見ますと七りけつぱい、中々風上へも置けぬ、我等生得嫌ひでえす、急度嫌ひでえす。」姉輪「お頼もしうござる、左様ならば、武士の心がけ兵法の御稽古御手練の程がちと拝見致したい。」和泉「拙者が手練御所望とな、何より以て安う候、是れ〳〵武士の嗜み此の三味線、まさかの時は是れがなければ役に立たぬぢや。」姉輪「三味線で人が切れるかな。」和泉「切ればこそきぬたの手。」ト和泉三味線を取つてきぬたの手を引き、下座にて地をひく。和泉が顔を姉輪急度見て、はんとの火を挟み、和泉が膝へ乗せる。夫れにもかまはず三味線を引き、酔ひたるこなし色々有るべし。しかけにて膝の上にて火もえる。姉輪「和泉三郎、是れでも正氣は付かないか。」和泉「どうもいへぬ〳〵。」ト餘念なくねてしまふ。姉輪「いかなる亂酒も聞き及びしが、燒けたゞれよと景宗が膝に置きしは烈火、夫れをもこたふる和泉三郎、すりや本性は酒に奪はれたわいな。所詮此の樣なる腰のぬけた侍を、姉輪平次かう〳〵。」ト、姉輪刀を抜いて和泉をむね打ちに打ち据ゑると、高衡小かげより飛んで出で姉輪がきき腕をとつて、高衡「ま

らば上下お目に懸けよう。」トいろ〱立ち上り生醉のこなし有つて、肩衣前後にきる。島助、總助、氣の毒がるこなし。脇差をさし刀と三味線と取りちがへ、よろ〱して秀衡が前をとほり、姉輪が前へ手をついて、和泉「我等秀衡が三番息子、和泉三郎忠衡、和泉三郎忠衡。たゞひら參上仕つてござる、そこ元が梶原平三殿の御家來姉輪平次、承知致した、急度承知致したでえす、さあ御一所に參らう、上下で女郎買、こりや面白い、誰ぞ駕籠を二丁拵へさせい〱。」トよろ〱立ち懸る。泰衡すつと立ちて和泉が襟をとつて引きする。泰衡「すでに三百六十日日々醉ひて泥の如し、和殿の樣なる醉ひどれは武士の家には捨てばつつけ、三國の英雄と呼ばれし關羽詩文にひじりとよばれたる李白、大酒に性根を奪はれまんご末代噂に懸るくたばりざま、そでない死をけんとうに酒を食らふか戲者め、大切なる上使の前、醉ひをさまして本性になれ、伊達次郎泰衡が折檻の爲にだんびらもの、正氣が付かねば氷の刃をたつた今、ソレ。」ト和泉が前へ刀を拔いて突き付け、ためす思入有るべし。泰衡「いつそ一思ひに失れ。」姉輪「やれはやまり召さるな、伊達次郎。」泰衡「でも兄弟の好みを思ひ、みちのく武士の魂を、貴殿へ御目に懸けんため。」姉輪「秀衡殿の血筋にも、そこ元の樣なる萬事にさとる勇士も有り、また醉ひどれの和泉三郎、姉輪平次がまのあたりに正氣を付けてお目にかけう。一刀に討つて捨てば流石に惜しき人品骨柄、姉輪平次が能きにいたはり、大酒の醉ひを醒す妙藥師の藥を進上仕

り和泉長上下にて、鼓を枕としてたわいなく寝て、其の儘にて疊共に島助、總助、釣り上げて出で來てすぐに舞臺へ和泉を下して、島助「和泉三郎樣へ申し上げまする、御上使の前秀衡公のお側御本性にお成りなされませい。」和泉「喧しいわい、捨ておいてたも〳〵。」島助「夫れでは御前が濟みませぬぞ。」總助「忠衡樣御心をお付け成されませい、鎌倉表より義經公の儀に付き、姉輪平次景宗樣、御上使にお立ち成されて此所にござりまするぞ。」島助「梶原殿の御名代として姉輪平次殿お出でござりまする。」和泉「なんと云ふあの梶原が。」皆々「お心を付けられい。」ト立つうち和泉鼓を打ちながら、和泉「そもそも景時が其の讒言のみな上を思へば、渡邊や霞がくれに滿潮の、逆櫓を立てんと浮舟の、梶原が申す事よもしゆんきにや候はじ。」ト和泉此の跡をうたひながら、鼓を打ち起き上り、生醉のこなしいろいろ有るべし。和泉「また酒々、誰ぞ銚子を持つておぢや〳〵。」秀衡「和泉三郎忠衡。」和泉「忠衡とはおうへいでえすの、さう云ふは誰ぢや。」秀衡「其方が父秀衡、倅氣を付けまいか。」和泉「やゝ和泉三郎が父とは鼓のちゝつぽゝ、是れから我等鼓のならひを打つてお聞かせ申さう。」秀衡「情ない亂酒、姉輪殿は鎌倉表よりの御上使、斯かるみだらな有樣失禮とや云はん無禮とや云はん、さ心を付けて行儀を正し御挨拶申せ。」和泉「いかう親父も醉はれたさうな、我等微塵も醉ひは致さぬ、去るに依つて舌の廻る事饒獨樂も素足、御上使お入りと有らばさらば上下も著仕らん、和泉三郎忠衡醉はぬでえす、さ

ト姉輪、扇にて國衡を打ち付ける。刀を取りあげる内に、ひた打ちにたゝき落す。國衡赤面してあたりを見廻し、國衡「面目次第もござらぬ。」姉輪「して御次男は何處でござる。」泰衡「拙者が則ち秀衡が次男、伊達次郎泰衡でござる。」姉輪「御舍兄とは事替り中々健かなる生立ち、定めて御手跡などようござらう。」泰衡「少し許りは唐やうのにじり書。」姉輪「左樣ならば歌なぞは。」泰衡「よいと申すは如何でござる、少し許りは其の道も。」姉輪「軍學は。」泰衡「七歳の時より。」姉輪「馬は。」泰衡「生得好きでござる。」姉輪「定めて劍術槍術共に。」泰衡「お相手に成りませう。」姉輪「さ其の御相手には。」ト姉輪平次手裏劍を打つ。泰衡中にて受留め、泰衡「こんな者でござる。」姉輪「中々あぢをやらるゝ。して三男の和泉三郎忠衡殿とやらは如何でござる。」秀衡「其の三男の三郎儀は、今朝より申し付け置きたるに、未だ此所へ參らぬとは不屆き千萬、なに島助同道致せ。」島助「畏まつてござりまする。」秀衡「早うはやう。」ト云ふ內、島助花道へかけて這入る。すぐにとつて返し花道の中程にて、島助「秀衡樣申し上げまする、和泉三郎樣にはいつもの如く大酒の上、お次に大いびきにて御寢みなつてござりますれば、何申しましても一向たわいはござりませぬ。」秀衡「惡いやつの、其の分に差置かれぬ。假令酒に性根を奪はれても苦しからぬ、上使の御前が相濟まぬ、總助も次へ參り三郎を此所へ連れ參れ。」總助「畏まりました。」秀衡「兩人ともにはやう〳〵。」ト秀衡急いで云ふ。島助、總助、立つて這入ると、花道よ

方三代が間、六郡を管領し繁榮を極むる事全く源家の御厚恩、爭でか是れを謝すべきや、逆意などとは汚らはしき秀衡が家の瑕瑾、是れのみならず、義經公を又圍まひ置きしなどとは思ひも寄らぬ世の人口、申譯は追つての事、差當つて御上使の趣委細承知致してござる。」姉輪「承知の上は鎌倉殿へ速かに其の言譯を立てらるゝとも、又籠城に及ばれて討手の勢を待たるゝとも、二つに一つの御挨拶を姉輪平次が承らう。」秀衡「御請け致すまでは、長途の勞れをはらさるゝ樣に休息なされい。方方申し付けたる用意を致せ。」島助「はあつ。」ト島助、總助、結構なる煙草盆を姉輪が前へ直す。島助茶臺に銀の茶椀に茶を汲み出す。結構なる高坏へ菓子を盛り姉輪が前へ直す。姉輪「御心遣ひ御無用でござる、五十四郡に上使は一人、ひよつと毒でもかはれては平次がばか〱しい、喰べたも同然御馳走御無用、何はともあれ秀衡殿には御子息數多と承つたが、器量骨柄一々鎌倉殿へ申し上げる爲、お近付きに成りませう、お引合頼みぞんずる。」秀衡「是れは〱御尤もなるおたづね、御上使に御引合はせ仕らう。」姉輪「早う〱。」秀衡「家の總領家督にも立つべきは錦戸太郎、夫れへ。」國衡「畏まりました。拙者が則ち秀衡が總領錦戸太郎國衡、お知り人に成りませう、御上使御苦勞にぞんじまする。」姉輪「是れは〱御挨拶でござる、其元が秀衡殿の御總領國衡殿、定めて武運の儀は申すまでもなし諸藝等の心がけ、取分け打物とつての早業、早速其のお心懸けを見まするため姉輪平次がコウ。」

しやい。」ト管絃に成る。姉輪上座へ居る。泰衡、忍、島助、總助、秀衡、舞臺に居ならぶ。秀衡「早速ながら鎌倉表より御上意の趣、秀衡親子に仰せ聞けられ下されうならば、千萬忝う存じまする。」姉輪「頼朝公より仰せ出され、秀衡殿へ申し達するとうけたまはるは、姉輪平次が役目、聞くまいとおいやつても、此方から聞かすべき筈、各方の身の上に目出たい事やら、いま〳〵しい事やら、まだ知れもせぬことを忝いとは、さし當つてそこつの挨拶。上使の趣餘の儀にあらず、此の一通に認めたるをとくと拜見おしやれ。」秀衡「はあ。」ト秀衡、墨付を取り上げ戴き見る。秀衡「何々承安四年の頃、秀衡が先祖清衡より主從の好みに依つて、判官義經を誘引して、年を經て都へ送り、又候此の度頼朝公義經と胡越と別れし折を伺ひ、再び義經を圍まひ置き、逆心の念有る由、鎌倉表へ訴へしきりに依つて、秀衡親子の心底あかさるべく候、文治二年十一月三日秀衡殿へ平三景時。すりや義經公を秀衡誘引して、逆心を企つると鎌倉殿へ訴へしとや、はい。」ト秀衡驚く。泰衡「何、又候義經公を圍まひ、父秀衡逆心を企つるとの風聞とや、はい。」國衡「宜しからない取沙汰、是れは此の分では濟みますまい、弟泰衡こりや何としたらよからう。」泰衡「左樣々々秀衡一族の爲には、身にも覺えぬ御疑ひ掛り早速御請け成されませい。」島助「何に付けても義經公は大きな……誘引したを逆心とは。」忍「此の上は父秀衡の御請け次第で家の大事と。」皆々「罷り成りまするぞ。」秀衡「某先祖藤原清衡より此の

なァ。」 泰衡「すりや其の疊紙より落ちたる黑髮の血しほのしたゝり、至つて嫉妬の深き故と、義經公の仰せらるゝにて、心當りの事こそあれ、妹忍夫れへ出い。」ト、泰衡忍を引寄せて、疊紙と黑髮とを取つて忍に見せる。しのぶ義經が方へ顏を隱し、 忍「兄さん妾や恥かしいわいなァ。」ト泣きふす。 泰衡「そんなら今の黑髮は忍の前の黑髮。」 岩手姬「はてなァ。」ト顏見合はせ思ひいれ有るべし。其のうちにばた／＼にて花道より元吉、高衡、隨分きたなき中間の形にて走り出で、花道の中にて手をつき、 高衡「申し上げまする、鎌倉殿より御上使梶原樣の御名代として、姉輪平次景宗樣、只今これへお入りでござります。」 泰衡「何、御上使とや。」 義經「やあそなたは秀衡が倅。」 高衡「泉三郎が弟、元吉四郎高衡でござりまする、義經公には御安泰にてお入り成されましたか。」ト高衡づか／＼と枝折戸の側へ行き、泰衡門の戸をさして、 泰衡「兄と同席叶はぬぞ下れ。」 高衡「なんと。」ト詰め寄る。花道にて上使と呼ぶ。是れより義經岩手驚き、忍共に三人を泰衡奧へ忍ばせると、高衡橋がゝりへ控ふる。と奧より秀衡、國衡、島助、總助、居竝ぶ。又上使と呼ぶと太鼓樂に成る。と、姉輪平次上下衣裳にて三方に墨付を載せて持ち出る。これに侍大勢付いて出る。花道の中程にて立ちどまる。 秀衡「此の度の御上使、梶原平三景時殿の御名代として姉輪平次景宗殿、鎌倉表より遙々との御出でで長途のお疲れ、先づ／＼御休息ながらあれへ。」 姉輪「上使でござる上座致す。」 皆々「いざ／＼是れへ。」 姉輪「許さつ

をそむくか。」忍「そんなら笑ひまするわいなア。」泰衡「さあ早う笑うてお目に懸けい。」忍「笑はいではお〻可笑しえ〻〻〻。」泰衡「もつとお側へ寄つて、お抱きまうして御機嫌を伺へ。」忍「なんのそれには及ばぬわいなァ。」泰衡「はてお抱き申せ。」忍「あい。」泰衡「何を其の樣に不人相な顔をする、笑うて御目に懸けい、笑ひをらぬか。」忍「あい、へ〻〻〻。」と泣きながら笑ふ。泰衡「若君御誕生で千秋萬歳と御祝儀を申せ。」忍「お〻お目度たい事でござりまする、人には何にもないと云つて、よう此の樣な目出たい事、若君御誕生とはほんにあた目出たうあた嬉しい事でござりまする、餘り目出たうて目出たうてめでた涙がこぼれますわいなア。」ト忍抱子を泰衡につき付ける。泰衡態と取落して抱子を泣かせる。此の內義經忍が云ふことを咳拂ひして、岩手に聞かせぬやうにする。岩手は義經忍が體を見て色々氣をもむ事有るべし。たゞ岩手下に泣いて居る抱子をとり上げるはりあひに、櫛箱より落ちたる疊紙を落す。夫れを知らず、岩手は抱子をねせ付ける。義經何心なく其の紙の落つるを取上げると、義經が膝へだら〳〵と血汐したゝると、義經びつくりして鼻紙にてふいて見て、義經「斯う云ふ事も有るものか、疊紙より落ちくる此の黑髮、何となう取上げ見れば、是れ此の樣に血汐のしたゝり、誠や髮は血に屬して女のせんたいとす、自然と愛著を生ずる故、至つて嫉妬の深き物の、斯かる不思議の有ると云ふ異說を思ひ合はすれば、ても恐ろしい女の心上、見えぬ黑髮の血汐に成りしは、はて

よう似た額の懸り、よう御覽遊ばしませい、二人に成りし其の日より今の今まで、そもやそも大方ならぬ艱難辛苦、此の御子まで何かの不自由をさせましたわいなあ。」 義經「廣き世界に生まれながら、現在の兄は日本の武將、弟に生まれし義經親子は、斯くまで此の身を狹められしか、思へば〳〵口惜しいなア。」ト思入すると、抱子泣き出す。岩手姬取つて抱きかゝへ、 岩手姬「可愛々々。」 秦衡「憚りながら伊達次郎が、ちと若君をお抱き申しませう、近頃憚りながらどれ。」ト岩手姬が方より抱子を取つて、忍が前へ連れ行く。忍氣の毒なる思ひいれ、忍其の子を見てむしやうに腹を立つ。 岩手姬「自分が乳がなうて、大體や大方の難儀な事ではなかつたわいなう。」 秦衡「左樣でござりませうとも、去りながら義經公に似させ給ひ、氣高い御生まれ、是れ〳〵妹お側へ寄つてお見上げ申せ。」 忍「知らぬわいなア。」 秦衡「こいつが〳〵、いかに己年が行かぬとて、若君をお抱き申すを知らぬとは物の云ひ樣を知らぬ。これやい此の若君は義經公と北の方、御中睦ましうて御平產成された若君經若君、其方もおあやかり申す樣に、さあ〳〵お抱き申せ〳〵。」 忍「無理な事許り云はしやんすわいなア、どうして義經公と岩手姬樣と、御中が睦ましうてお出來成された若君樣、何が面白うて抱かるゝものぢやぞいなア、阿房らしい、人の心も知らしやんせいで。」 秦衡「色々の事をぬかし居る、かかる目出たい若君樣おむづかる程に、お側へ寄つて笑うてお目に懸けい。」 忍「何のをかしうもないに。」 秦衡「兄が言葉

まづ御待ち成されませい。」義經「はなしたく〱。」泰衡「伊豫守義經公伊達次郎がお留め申しまする、先づ先づお待ち成されて下さい。」ト唄に成り、障子を引上げる。内に泰衡長上下小刀にてゐる。上の方に岩手姫以前のなりにて、經若丸を抱き立つて居る。義經岩手姫を見て、義經「やあ其方は岩手姫ではないか。」岩手姫「我が君樣、先づ〱お待ち下されませい。」ト岩手姫下へ下りて義經を留める。忍むしやうに腹を立つ。忍「あな阿房らしい何のこつちやいの、貴方樣はどなたさまでござりまするえ。」泰衡「義經公の北の方岩手姫樣、さいつ頃龜割坂にて御誕生まし〱たる若君經若丸樣諸共、先だつて此の館へお越し成された、隨分御大切に致せ。」忍「なんの兒さんとしたことが、まあ貴方方のお世話が、どうしてこちとらが成る物でござんすぞいなア、世間の譬へにも男子は男同士、御前よい樣に御世話成されて上げましたが、ようござんすわいなあ。」泰衡「こいつ色々な事を言ふ奴ぢや、憚りながら義經公へ申し上げまする。御若冠の折柄お目見え仕りましたる、秀衡が次男伊達次郎泰衡めでござりまする、「益〱御機嫌よい體を拜し恐悦至極に存じ奉りまする。」義經「誠に承安四年より今文治二年まで十四年が間、文通のみにて中絶えしたる伊達次郎で有つたか、なんぢも堅固で重疊々々。」泰衡「有り難い御意をうけたまはりましてござりまする。經若丸樣へも御挨拶を遊ばされませい〱。」義經「どれ〱經若丸かやい、そなたの父ぢや是れ顏見せてたも。」ト抱子を受取る。岩手姫「はい貴方に

貴方のお側へついて居て、何から何までかうした首尾も有ればこそ、惜しからぬ命をながらへ居ました、ようお顔をお見せ成されて下さりませい。」義經「それがしとても懐かしさは同じ事、日外越前國秋篠にて、不思議に逢うて夫れより後は便りも聞かず、どうかかうかと案じ居たが、やれ〳〵よう其方にも健康で居て給つたなう。」忍「はい貴方にお目に懸らう〳〵と、思ふ一念許りで、まあかう致しをりまする。時に申し上げねばならぬ事、今日此の館へ鎌倉より貴方の御身の上詮議せんとて、梶原が名代姉輪平次がまゐりましたわいなあ。」義經「なに某が身の上詮議のため、兄頼朝公より此の家の主秀衡へ、姉輪平次が上使とや。」忍「はいお身のために大切なる今日の上使、何かにお心をお付け成されませう。」義經「えゝ情なき頼朝の計らひ、列なる枝葉の某を、何ぞや叛逆密謀の族とひとしく、根を斷つて葉を枯らさんとて今日の上使か。よし〳〵此の儘に死なんより、おのれ姉輪平次陪臣ながらも當の敵、主に刃向ふ人非人、某が一刀の下に討つて捨てん、それ。」忍「もう〳〵お情ない事仰しやります、そんな短氣なお心から、よしない梶原が讒言、貴方のお腹は立たうとも、お待ち成されて下さりませい。」義經「忍の前支ふるな。猪武者とも云へば云へ、おのれ姉輪平次義經が刀の切味見せん、それ。」忍「まづ〳〵お待ち成されませい。」ト義經行かうとするを、忍の前色々留める。此の内に舞臺に有りし櫛箱をひつくり返す。夫れにも構はず義經振り切つて行かうとする。忍「まづ

より下へおりて、義經を上座になほす、忍煙草盆を出し茶を酌んで行く。義經「やはりさし置かれてくだされい。」秀衡「はて扠目眩らしい、其方がせいでもよいことを、女子どもに云ひ付けい。して御修行者にはどれからどれへ通るぞ。」義經「手前儀は紀州熊野山より出羽國の羽黒山へ年籠に參詣仕る者でござる。まことに今は不惜身命、頼みまするは人の御助力、文字にも則ち合せる力と人の力を假の世に、命一つを是れまで漸う難行苦行致して參る、山伏でござるでさ。」秀衡「御身在俗にてましませし時は、奢る平家を討ち亡ぼし、源家の武運を開き勅撰の一に撰まれ、或時は野に臥し山に伏し、山伏とまで成り果て給ふ御身の上、いかに讒言の舌の根の鈍ければとて鎌倉殿の御心底、思へば〳〵何事も前世の約束、藤原清衡は義家公の恩顧の武士、某とても左の通り、義經公に似たる山伏、どこがどこまでもお宿め致さう。」義經「すりや世に捨てられて世を捨てし、此の山伏を昔に替らずお宿成さるゝ御所存か。」秀衡「武士の魂大磐石。」義經「忝い。」秀衡「娘義經公に似たる大切なる御修行者、もしもの事のない樣に、其方お側に居て御馳走まうしや。」忍「あい自らをあなたの御側に。」秀衡「いかにも皆の者參れ。」ト唄に成り、秀衡いく世梅路袖じ花枝續いて奧へ這入る。合方に成り、忍義經が側へ行き振袖にて脊中の雪を拂ひ置き、こたつをおろして義經が側へおく。忍「此の樣な嬉しい事がござりませうかいな、こがれ〳〵て居りました、貴方樣に御目に懸ると云ひ、あの物堅い父上樣まで

て下さりませい。」秀衡「そなたの云ひやる事ならば、強ひては云はぬ兎も角も。」忍「あり難うござりまする、常々おまへの御咄に、あの光明皇后様は千人の垢をお洗ひ成されしも、お身の願ひにて成されしとや、勿體ない事ながら、夫れに習うて自らも、心の願ひも叶ふ様に、どれ〳〵忍がおとめ申しませう。」ト忍の前亭より下へさがりて、門の口をあけて、「降り積む雪に御難儀との事、今宵のお宿を致しませうわいな。」義經「是れは〳〵早速のお志かたじけない。」忍「さあ〳〵こちへ。」ト忍、義經顔を見合ひびつくりして、義經「さあそなたは。」忍「お前様は義經公。」秀衡「何、義經様と。」忍「さあ義經様。義經様ならぬ修行者様、お宿まうしませう。」義經「おもひも寄らぬ忍の前さま。世を忍ぶ身のお宿の御無心、しからば夫れへ通りなされませうか。」忍「さあ〳〵こちへお通り成されませい。」ト忍むしやうに嬉しきこなしにて、秀衡が前に行き、笑ひかけ、忍「もうし父上様、御難儀とあるお方をお宿致さいでよいものかいな、今も今とて御噂申した、伊豫守義經様でござりまするわいなア。」秀衡「やい〳〵戯者め、今日此所へ鎌倉より上使のお入りは、其の義經公詮議の爲、かかる危き其の中へ、義經公をお留め申してよいものか。」忍「ちやと云つても義經様。」秀衡「まだぬかすか、世の中に義經公に似たるお方もある噂、そこつなことを申し、どこがどこまでも義經ではないぞ。」忍「はい。」秀衡「御修行者心置きなう是れへ〳〵。」義經「これは〳〵然らば參りませう。」秀衡「先づ〳〵。」ト秀衡亭

まつた北の方岩手姫の御行方、某が館に又候圍まひ置き、秀衡逆意を企つるなどと、以ての外の噂とり〲、思ひも寄らぬ事なれば、上使へ對し某が申譯は何れとも相分る儀、少しも氣遣ひない程に、そちもさう思うてゐるがよい。」 忍「あの義經樣奧樣があるかえ。」 秀衡「はて仰山な尋ねやう、義經公に北の方があればなんとする。」 忍「さあそれは。」 秀衡「忍これ、あの江州三井寺の撞鐘再興の繪圖を見い、先祖秀鄕たつの都よりさづかり得たる所の梵聲の器、まことや壽量品の切刀には、龍女も佛果を得たるとの不思議、只さへ女は罪深い、ようあきらめてたしなみや〱。」 忍「はい有り難うござりまする、惡い事とは思へども、義經公に奧方が有つては嫉妬ましう。」 秀衡「又かいやい、嫉妬は七去の一つ女の疵ぢや、たしなまう。」 忍「はい。」 秀衡「はやう髮を仕舞つてたも。」 忍「かしこまりました。」ト歌に成り雪強く降る。と花道より義經一番目の山伏のなりにて、笈の上にも笠の上にも雪の積りたる體にて出て來て、直に舞臺へ來て門の外に立ちて、 義經「行き暮したる旅の修行者、ことに筒樣にふり積り、案内もとくと知らざれば、一夜の宿を御かしあれ、卒爾ながら御挨拶賴みぞんじまする。」 秀衡「珍らしき修行者の音信、日こそ多けれ今日は鎌倉より上使の御入り、大切なる館の用、止宿の願ひ叶ひ申さぬ。」 忍「もうし父上樣、仰しやる事は御尤もとは存じますれども、自らが病氣のうち人の難儀を救ふには、妾が身にも加持祈禱、忍が願ひでござりまする、どうぞ今宵はお留め成され

な、何事も命あつての物種と他言は。」鳥助「仕りませぬ。」錦戸「しかと左樣ナ。」兩人「そつともお氣づかひ成されまするな。」錦戸「爰は端近。」岩手「そんなら案内。」皆々「先づお入り成されませう。」ト唄に成る。岩手錦戸鳥助綱助這入ると、奥より腰元錦木、同じく梅路、袖じ、老女の衣裳うちかけ下髪にて花筒へ梅の花を入れて持つて出る。唄の中にて障子を上ぐると、此の内に藤原秀衡羽織衣裳にて鏡にむかひ香を聞いて居る。此の後に忍の前衣裳うちかけ病者鉢卷にて、秀衡が髪を撫で付けて居る。

いくよ「忍の前樣へ申し上げます、今朝は珍らしき雪の氣色、御出來にさはりませうかと思ひの外、常にない御機嫌。」梅路「本に大殿樣のお櫛をおあげ遊ばしてお睦まじきお二方の御中、此の上の事はござりませぬわいなア。」袖じ「今日は鎌倉表より姉輪平次景宗樣の御入り御上使とのかね〴〵の御噂。」

いくよ「如何なる事か存じませねども、大切なる事隨分腰元衆も、麁相のない樣に仕りませうぞや、是れは又お庭に咲きし梅の花、大殿樣へ進ぜられるとの、忍の前樣の仰せ付けられでござりまするわいなア。」秀衡「雪ふれば木每に花ぞ咲きにける。」忍「いづれを梅と分けてをらまし。」秀衡「時知り顔に咲きたる梅、てもしほらしい物ぢやナア。」忍「父上樣へ申し上げまする、今日は鎌倉表よりの御上使のお入り、如何なることか存じませねども、妾やかう案じられまするわいナア。」秀衡「さして案じる事はない、此の間より飛脚を以て、梶原平三景時方より案内、某が主人と仰ぎ奉る伊豫守義經公、

をも連れず懐へ子を抱いて、うぶめかと思へば足があるし、頭を見れば田町の祭を見るやうナ、笠を著てこりや化けたな、今おいらが女にかつゐて居ればとて、つまみに來たな、油斷をするな〱。」島助「合點だ〱。」　岩手「そりやまあ何の事ぢやぞいの、自らは秀衡殿とは好みある者、委しい咄は逢うての事、なんでもあらうと早う此のよし云うてたもれ。」　綱助「云うてたもれ、ひい〱、たもれがあきれるわ、さあ正體を顯はすまいか、どうだ〱。」　錦戸「めつたな事をするな、早まるな待て。」ト錦戸立ちかはり、「あなた樣は伊豫守義經公の北の方、川越太郎重賴殿の御息女岩手姫樣ではござりませぬか。」　岩手「自らが身のうへを委しう知つて居やしやんす其元さまは。」　錦戸「藤原秀衡が總領錦戸太郎國衡めでござりまする。」　岩手「あのその元が。」　錦戸「先づ〱是れへ。」ト岩手を上座へ直し、あたりを伺ひて、「先づ以てさいつ頃、龜割坂の邊に御忍びましますとは承りしが、經若丸樣御誕生より御安泰の體を拜し、箇樣ナ悅ばしい儀はござりませぬ。父秀衡儀も義經公あなた樣の御入りを、朝暮お待ち申して居りました。」　岩手「世になき君や妾まで、待つて居たとは嬉しや〱。」ト云ふ内錦戸立つて島助綱助を見て、そりをうち、錦戸「さあ、貴方樣が義經公の北の方岩手姫、鎌倉殿より詮議嚴しく、梶原平三景時の名代として、姉輪平次景宗此の所へ來る由先達飛脚到來、申さば大切なる折から、下郎は口のさがなき者、さあ他言ひろぐと芋ざしだぞ。」　綱助「あゝ是れ〱、滅多な事を成されまする

ト又唄になり、岩手姫本ぶたいへきて、邊を伺ひ、「嬉しや此處ぢや〳〵、まあ案内をこひて見るがよい。これ一寸問ひたい事があるわいの、誰ぞさう云つてたも、賴みたいぞや〳〵。」綱助「はてぞんざいな案内のこひ樣、誰だ〳〵。」島助「是れおぬしやァそんなに輕はずみに物を云つて、跡で目でもまはさないがよい、此の雪の降るのに女の聲、大方雪女であるも知れぬ。」綱助「いやあ。」島助「夫れだに依つてめつたに挨拶せぬがよい。」綱助「如何樣そこもあり蓋もあり。」島助「よしやれ〳〵。」綱助「何の事があるもんだ、奥州六郡の主秀衡樣の御屋敷に奉公する程にもない、雪女でも大蛇でも、怖がつてつまる物か、己がどこまでも云つて見てこよう、とは云ふ物の矢張おれも氣味がわるい。」島助「夫れ見や、どうして一人行かれる物だ、おぬしと己とつれ立つてはどうだ。」綱助「こいつはよい〳〵、そんなら行きやれ〳〵。」島助「さあ行かう。」ト島助綱助きみわるさうに門口より、綱助「いやあ何と見たか。」島助「美しい物ぢやァないか。」綱助「もうし、いま賴みたいと仰しやつたは。」兩人「おまへかえ。」

岩手「さいなア、自らは遙か田舍の者なるが、秀衡親子の人々に逢はねばならぬ用があつて、雪をも厭はず來た程に、主に斯くと傳へてたも。」島助「なんだか知れないがぞんざいなもの云ひやう、主へ斯くと傳へえとは、こいつ將棊をさしに來たな。」島助「時にお前はどつちから此所へござりました。」

岩手「さあ夫れは。」綱助「島助油斷するな、此の女子は合點の行かぬやつだわえ、此の雪の降るのに供

宮城より送りたる所の、赤銅の撞鐘は梵聲の物なればとて、三井寺へ是れを奉る。此の度秀衡如何なる願にや、碎きし所を再興せんと斯くの通り繪圖をば認め、近々に鑄させんとの事、國衡是れを承り今日最上吉日なれば父秀衡へ伺はんと、是れまで持參致したわやい。」綱助「如何樣是れは有り難い思召し立て、御先祖藤原秀鄕公よりお家目出たき藤原秀衡公、三井寺の鐘御再興とは何よりの御孝行でござりまする。」島助「夫れにつきまして伺ひまするは、今日の御上使鎌倉表より姉輪平次景宗樣、御入り成さるゝとの儀、彌左樣でござりまするかな。」錦戸「成程此度義經公都をつひに開かせ給ひ御行方知れねば、父秀衡に御疑ひ懸り、もし匿まひ置きしかと、夫れ故の上使、大切の折柄なれば、粗忽のない樣に心を付けい。」兩人「畏まりましてござりまする。」錦戸「時々申し付けるは此の庭廻りの掃除、上使のお入りに見苦しうない樣に、此所彼所に降り積りたる雪をかけ。」兩人「ねえい。」ト唄になり、錦戸煙草を呑み居る。島助父はしがゝりの雪をかきに懸る。此の歌の内雪彌強くふり、花道より岩手姬打掛衣裳にて、肌に子を抱き、市女笠に銀の杖をつき、花道の中程に立留る。島助下部綱助内へ這入る。岩手「折惡しう此の雪の降る事わいなう、我が君義經公に龜割坂にてお別れ申し、人目を忍ぶ身の上は、夫れぞと心の付かぬ樣に、此の高館まで尋いでこいと重き仰せと我が子の事、經若が此の顏を一寸なりとも早う御目に懸けたさ、我こそ急ぎ此の道のべ、果てしの付かぬ物ぢやなう。」

役人替名

一 藤原秀衡　傳九郎
一 伊達次郎泰衡　仲藏
一 錦戸太郎國衡　半三郎
一 家主佐七實は本多次郎近常　純右衞門
一 下部島助實は半澤六郎成清　雷藏
一 同 綱助　繩藏
一 腰元梅路　金太郎
一 腰元袖じ　松之丞
一 同 錦木・幾世
一 岩手姫　市松
一 元吉四郎高衡　廣次
一 元吉四郎女房おふゆ 二役 忍の前　半四郎
一 和泉三郎忠衡 二役 伊豫守義經　幸四郎
一 姉輪平次宗實は畠山莊司次郎重忠　海老藏
若衆大勢

本舞臺三間の間。一面の障子家體、西の方に枝折門、東の方九尺の亭、上げ障子見付け、柱に紅梅の幹を取りつけ、一面に雪の降り積りたる見え、幕の内より錦戸上下衣裳にて、三方に高さ二尺ばかり幅一尺位の板に、結構に釣鐘を繪に書かせ、是れに撞鐘再興願主藤原秀衡と書き付け、三方に載せてあり、下部島助同綱助奴のなりにて廂の雪を掻いて居る見え、ちよん〳〵にてまく明く。

綱助「錦戸太郎國衡樣へ申し上げまする、見ますれば江州三井寺撞鐘再興願主藤原秀衡と、大殿の御名をしるし成されたる其の繪圖。」島助「夫れにお据ゑ成されましたは、如何の思召し付けでござりまする。仰せ聞けられませうなら。」島助、綱助「有り難う存じ奉りまする。」錦戸「樣子知らねば尋ぬるは尤も。江州三井寺の撞鐘こそ、父秀衡が先祖下野國の住人田原藤太秀鄕百足を退治、其の功に依つて龍

しい、義經を亡ぼす血祭に、川越太郎も秀國もぶつちめべいと思ひしに、入らざる所へ不動がつん出て、討ちもらすか殘念な。よし〱此の場は一旦別るゝとも、重ねて見參には汝らが首を己がとる、さう思つてけつかれ。」直井「おろか〱、うぬが樣ナ白髮首打落すは安けれど、不動明王の利劍に依つて、此の場は命助けて返す、どつちへなりと失しやァがれ。」齋藤次「何を。」川越「やれ〱かた〲ひかへ召されい、二番目も殘つていれば、一番目出たく納めて此の儘別れ召されい。」直井「しからば舅君の命に任せ、此の場は此のまゝ別れべいか、まづ夫れまでは坂東太郎。」時助、鷲尾「直井左衞門。」齋藤次「川越太郎重頼。」川越「かた〲。」皆々「さらば。」ト是れより太鼓寄りにて、直井時助鎧引合はせて眞中に立ち、鷲尾若衆を積み重ねて下の方の其の上にのり、ちひさき三升の紋の扇を開きあふぐ。川越太郎上の方へなほる。何れも見えよし。富樫、松風、行平「なほ〱行末守るべし。」ト是れよりどうかくになり、上より三升のついたる大提灯兩方へ下る花ふるとう樂打ち上げる。川越「是れより二番目の始まり左樣に御覽下されませう。」幕引。

第二番目　陸奥高館の場

直井「力較べだ。」ト是より大太鼓入りの合方になり、兩人色々たてあるべし。とゞ花道より引臺に成り舞臺へ引戻ししやんと見えになる。とん〳〵にて向うより齋藤次馬に乘りいでて來る。是れにつゞいて軍兵にて大勢若衆出て來る。齋藤次「やれ直井左衛門をやるなえゝ。」皆々「やらぬわ。」川越「まつた。」ト川越太郎奥より長上下にて出で、川越「いかに直井左衛門、敵は大勢味方は小勢、必ずともに誤るまいぞ。」齋藤次「重頼ともに討つてとれえゝ。」皆々「やらぬわ。」ト立廻りあると、向うより鷲尾大廣袖衣裳にていで來て、鷲尾「川越太郎の御難儀と聞いて參りし鷲尾三郎、いで物見せんと云ふまゝに。」ト立廻りあつてしやんと見えになる。齋藤次「やれ討つてとれ。」皆々「やらぬわ。」富樫、松風、行平「やみなんやみなん。」ト是れよりながしになり、正面の山幕引上げると、眞中に富樫石の不動の見えにて左右に松風行平、こんがらせいたかの見えにて押し出す。太鼓打ち上げる。齋藤次「待て〳〵今川越太郎、直井左衛門をぶつちめべいとする所へ、異形の姿を顯はしたが、そもまづうぬア。」皆々「何やつだえゝ。」齋藤次「いやさ。」皆々「何奴だえゝ。」富樫「やみなん〳〵我は是れ、義經日頃信心なす、岩倉山に安置なす不動明王の靈像なり。」トどろ〳〵〳〵。松風「義經を守護の爲顯はれ出でたる金がら童子。」行平「我こそ武運長久を祈らん爲のせいたか童子。」富樫「たとひ義經一旦災難に逢ふとても、二度武運を聞かすべし。」三人「努々疑ふ事なかれ。」トどろ〳〵〳〵。川越「あゝら有り難やナア。」齋藤次「えゝいま〳〵

是非もない殺生せまいと思へどももう料簡がならぬわえ。」喜助「やれ面倒な引ッ剝げやい。」若衆「やらぬは。」常陸坊「羽うちはが此方へ飛びくるからは、いで物見せんと云ふまゝに。」ト是れより可笑しみのたていろ／＼あつて、とゞ喜助若衆三人にて常陸坊を引つぱぎにかゝる。若衆二人をあてて置き、喜助と常陸坊たてあつて、喜助をしめ殺し、一人の若衆に活を入れ、籠のさき棒にして跡を常陸坊かつぎ、やッさこらさにて捨てせりふ云ひながら花道へはひる。すぐに大太鼓ながしに成る。直井時助赤面大廣袖の衣裳にて、八龍の鎧を持つて岩の上にのり是れをおし出す、うしろ山幕に成る。兩方へ石碑を出す太鼓打ち上げる。直井「八龍きんきの甲冑こそ、誂へ付けたるわが土産、仁王の樣な腕節を、なぜ此の鎧へさつかけた。」時助「おやつかな坂東太郎照早が、せしめべいと思ふ鎧、主に渡してつまるものか、尋常におれにわたせ、やだあと云ふと、久振とはいはさない、早くこつちへ呉れまいか。」直井「へゝゝゝ、おつしやつたりな坂東太郎、昔馴染のよしみだけやるまい物ぢやないが、此の鎧に限つちやァ、些との内も渡されない、是れこそ主君義經公御祕藏ありし八龍のおもだか、此の鎧を人手に渡して成るものか、邪魔せずとそこ放せ、やだァと云ふとなうてんからつま先まで、はり／＼と引裂くぞ。痛い目せぬ其の先に、きり／＼そこを放せ／＼。」時助「面倒ナ、おれに渡せ。」直井「そこ放せ。」時助「渡せ。」直井「忠義にこつたる左右の力。」時助「信にこつたる左右の力。」直井「力と。」時助「力との。」

云ひながら籠から出る。「何をそんなにかしましう云ふぞやい。」喜助「やかましい事はござりません、お約束の通り爰まで參りました、さあ此の間のさがりと籠賃を遣はされませい。」常陸坊「何と云ふ、いつぞやの勤めと籠賃をよこせ。」喜助「さやう〳〵。」常陸坊「こいつは〳〵ふといやつぢやァないか、おらァ女郎買はうが、居酒を呑まうが、ばくちを打たうが、ついぞ不義理を出した事はない。此處らまで歩いて來たならば、ひよつと道で金を拾ふまいものでもない、また其の上に馬に乘つて一あせかかせうと思つて、坊主なればこそ後生心できたものだ、此の館へ來ればとてどうして一文も出來るものだ、惡い料簡ナ男でござるわえ。」喜助「こゝな坊樣、此方は立派な形をして、ふとい事を云ふ事だ、錢金をつかはずに女郎がかはれる物かな。」若衆「さうしておいらを寒いに依つて汗をかかせう爲に乘つて來たとは、あんまり人を茶にするやつだ、こりやァ此の分では濟まぬわえ。」若衆「何と喜助樣、いつそ此の坊主を引剝ぐがようござりませう。」喜助「夫れがよい〳〵、いつそ引つぱげ〳〵。」ト三人常陸坊を蹈みのめし、剝ぎに懸るとどろ〳〵になり、上より羽團扇舞ひ下る。是れにて三人うんと悶絕する。常陸坊「さあ是れからは力強くなつた、これやい何奴も起きろやい〳〵。」ト起す。三人共に肝をつぶし、三人「こりやどうだ。」常陸坊「なんと肝がつぶれるか、是れだから勤めを取らずに早く歸れ。」喜助「たとひ命は捨つるとも、さがりを取らずに歸られうか、じんじやうに勤めをよこせ。」常陸坊「まゝ

かゝる。向うから馬士門出以前の形にて鞭を持つて出で來る。ひづめの太郎をおし戻し舞臺へ來て、どつこいとゝまる。ひづめ「こいつはなんだ、ちひさなやつだが、俺をこゝまで押し戻し、どうせうと思ふ。」馬士「是れおぢい、今彼所で聞いてゐれば、手頃な奴があるならば、ぶつちめうと云うたによつて、おれが相手に相應な持ち遊びだから、是れから我を馬にして遊ばうと思つて、夫れでわれをとめるのだ。」ひづめ「こいつは〱ふといやつぢやァないか、汝がなりを見れば馬士だな、おれを馬にしようとは。」ト是れを直井の聲色にて云ふ。「おとなそばえをすると、大旦那へ云ひ付けるよ。」馬士「いんや、おらァ馬士ぢやァない、義經公詮議のため馬士と姿をやつす。某こそ富樫左衛門家直が一子直石丸とはおれが事だ、汝が首を引つこぬいておとゝ樣へ土產にする、おれに首を吳れろ。」ひづめ「此奴は此奴は、飴んぼうでも貰ふ樣に、首をたやすく遣られるものか、惡じやれせずとそこのけ、退き樣が惡いと捻り殺すぞ。」馬士「面倒な、首をくれろ。」ひづめ「そこをのけ。」兩人「どつこい。」ト是れより早笛になり、直石丸ひづめの太郎色々のたてあつて、とゞひづめの太郎を馬にして向うへはひる。早笛の内向うより常陸坊以前の形にて、四手籠に乘り、やッさこりやさと聲をかけ出て來る。跡より若衆喜助若者にて、是れに付いて出て本舞臺へ來て、喜助「もうし〱旦那、御約束の所へ參りました。」ト云ふ。常陸坊默つて居る。喜助「もうし〱旦那。」ト大きくいふ。慴りして、常陸坊「喧しい奴だ。」ト

えだ襷かけかひ〴〵しきなりにて兜を持つて出る。是れにつゞいて若衆二人、眞黒扮裝にて出で、うしろに屈んでゐる。 さえだ「大切なる此の兜、兄さん源八兵衞殿へそれ。」ト行かうとする所へ、若衆二人立ちふさがつて、 若衆「動くな。」 さえだ「こりや自らをなんとするのぢや。」 若衆「何とするとは久しい物だ、疑はしい其の兜、此方へせしめて我々が褒美の金にあててある、女だてらに八龍の兜とはほんに入らぬ物、こつちの流儀は一刀流。」 若衆「一ゑん流やむてき流、流儀々々の手の内で、りう〳〵はつしと酷い目に、逢はぬ昔を元ねにして、とつとゝ兜渡せやい。」 さえだ「ホヽヽ、をかしいわいなあ、女子ぢやと思うて侮らしやんしたら、些とあてが違ふぞえ、悪い奴ぢやと思はんしよ、わたしもやうやう向ひ町から、此の屋敷へは初舞臺、少しなりとも殿樣へ、忠義が立てたい〳〵と、思ふ所へ幸ひ二人のおさんを相手とは、願うてもない此の場の仕儀、お望みならばお二人さん、さあ〳〵相手にならうぞえ。」 若衆「何だ此奴はなま長い事をぬかしたな、そんな事にはとんぢやくない、早く夫れをこつちへ渡せ。」 さえだ「そこ退いて通しや。」 若衆「わたせ。」 さえだ「通しや。」 三人「どつこい。」ト是れより早笛になり、三人いろ〳〵のたてあつて、とゞ二人を向うへ追ひ込むと、とん〳〵にてひづめの太郎まさかりを持つて、出でて來て、 ひづめ「やれ〳〵思ひがけもないとん〳〵で大きに肝を潰したわえ、かういふ姿に扮裝つて手柄をする、此の時節何でも手ごろなやつをぶつちめべい、どりや。」ト花道へ

を見付け、あそう「やあ貴様はおれが親方、勢州鈴鹿のどろばう頭伊勢三郎義盛どの。」お市「さうぬかすはあそうの段八。」富樫「おぼえがあるか。」お市「さあ夫れは。」富樫「もうよい／＼あそうの段八、さあ盗人め、何物に頼まれて冠装束を引きはつて富樫左衛門屋敷へは何しに来た、眞直に白状せぬと、もう頭から爪先まで、から竹割りだぞ、何と。」ト詰め寄る。あそう「あゝ申しませう／＼。」齋藤次「夫れをいはれちやァ。」ト齋藤次あそうへかゝる。富樫隔てて、富樫「齋藤次ちつと用が違ひますべい。さあ松風も村雨も行平も、須磨の浦へ流さうと云つたのは僞りであらうがな。」あそう「左様々々。」富樫「誰に頼まれた、夫れぬかせ。」あそう「たれと申して、外に誰がござりませう、あれにおゐやる齋藤次祐家殿に。」齋藤次「なむうさんぼう。」富樫「齋藤次祐家殿に頼まれたに相違はないか。」あそう「さやう／＼。」齋藤次「夫れを聞かれちやァ、一世の浮沈富樫左衛門觀念。」ト切り付ける。富樫直にその刀をとりて時助が縄を切つてやる。あそう「夫れは。」トあそう時助に懸る。見事に首をきる。皆々「是れは。」富樫「觀世音の盗賊。」時助、お市「かたじけない。」富樫「松風は行平を伴ひ奥へ。」行平、松風「忝い。」富樫「行け。」ト早三重にて行平松風おくへ行く。齋藤次「夫れ。」ト切り付ける。富樫「どつこい。」ト立廻りに成りあてて はひる。齋藤次立ちあがり、齋藤次「伊勢三郎をやるな。」皆々「やらぬは。」時助「どつこい。」ト是れより時助立廻りありて、とゞ、時助市松下座へはひる。とん／＼にて是れより早笛になる。奥より腰元さ

い女子でもござんせぬ、女房でござんす、夫に連るゝは女房の習ひ、御詮議成さるゝ其の觀音は妾が盗んだわいナァ。」時助「何を。」お市「主の知つた事ぢやござんせぬ、時助は存じませせぬ、さあ妾を御詮議成されませい。」齋藤次「こいつは〳〵男にほれた物の云ひ樣、どうで此奴ら許りぢやァ濟まぬ、同類一々引縛して詮議をする。此の野郎よりまづ富樫左衞門、盗人を抱へて置くは、御手前にも詮議がある、遁れぬ所だ觀念をしやれ。」富樫「御尤もなる御疑ひ、此の時助身が家來ではござれども、生得存せぬあぶれ者、常磐御前の守本尊、馬郎婦の觀世音へ心を懸ければ、正しくこいつ義經の餘類、富樫左衞門が詮議がござる、まあ〳〵お年寄お世話やかれずと、些と夫れにて見物おしやれ、蛇の目を洗ひ流した樣に、松風が身の上も行平が身の上も其元の身の上も、是れは善是れは惡と、薩張と顏見せ小袖、仕立てて進上仕らう。」齋藤次「すりや其元は盗人の身の上。」富樫「刀にかけて。」齋藤次「面白い。」ト是れより富樫左衞門、もゝだち取つて肩衣ぬぎ、身拵へして、富樫「此の盗人の同類を詮議なすは火より水よりぶり〳〵より、中納言義明公是れへ入らせられませい。」あそう「心得た。」ト奥よりあそうの段八以前の公家にて出で來る。富樫直にあそうの段八が首筋を取つてこづきまはす。あそう「こりやまあまあ、どうする、中納言義明をどうするのだ。」富樫「どうするものだ、いけ盗人め、汝にやァだいぶ詮議がある、さあ同類を白狀ひろがう。」ト冠裝束も叩き落してつき出す。あそう起き上つて時助

皆々「はあ。」トくわげんに成り、花道より中間時助をしばり奴のなりにて、若衆ぶたいへ連れて出る。富樫「やァ其方は身が家來時助ではないか。」齋藤次「貴殿の家來のうちにもとんだやつがあつて、取りかはしたる馬郎婦の觀世音を、奪ひ取つて立退きたる盗人、富樫左衛門がお見やる前で身の上を詮議なし、奪ひ取られた觀世音身が方へ取り戻し、貴殿へ渡して其の上にて娘松風をつれ歸らん。こりや時助とやらぶ中間のさいで、常磐御前の守本尊、馬郎婦の觀世音を、かつさらつてかん出した、有りやうに白狀しろ。」時助「命にかへても盗み取らんと入り込んだ中間の時助、此の身は縦ひずた〳〵にならうとも、おもひ込んだ馬郎婦の觀音こかした所はいはない〳〵。」齋藤次「やあしぶといげす下郎め、身が方へ請けとらいでは齋藤次が一分が立たぬ、しゝびしほにして成りとも受取つて見せう、是れでも觀音を出さないか、是れでもか〳〵。」ト時助を齋藤次むね打ちにする。時助「たゝかれようが切られようが、云はない〳〵、いはないぞ。」齋藤次「おきやァがれ。」と詰め寄る所へばた〳〵にて、伊勢女房お市以前の形にて取つて返し、齋藤次に縋り付き、女房「まあ〳〵待つてくださんせ。是れこちの人。」時助「是れ〳〵他人だぞ。」お市「でも。」時助「是れ〳〵はて、此の時助は盗人ナ、盗人に親しければ盗人の同類、他人だぞ〳〵。」お市「いえ他人ぢやござんせぬ、妾やお前の女房、あい女房でござんする、縦令お前が盗人にせえ女房は女房、此の場になつて此のお市は、盗人の女房ぢやないと云ふ様ナ水臭

する。」ト足にて蹴る。行平「こりやまた餘り。」トせく。松風「是れはなあとゝさん、お前は〳〵胴慾な、いかにお前の娘ぢやとて、餘りぢやわいナ〳〵、娘可愛と思はしやんせぬか、えゝ情ない。」ト云ひながら、行平へ恥かしきこなしあるべし。「是れいなあ行平さん、お前の難儀も自ら故、堪忍して下さんせ、顔合はせるも面目ないわいナァ。」行平「富樫左衛門家直殿へ對し云譯なき此の行平、頼朝公の嚴命により義經公の御行方、富樫の關を見逃せしは、家直どのの二心と、實否を糺さん其の爲に、密かに來りし其の行平、松風殿と不義の悪名、身のいたづら申譯なく、たゞ今腹かき切りて相果て、せめても是れを武士のまねと思召されて下されい、それ。」ト行平切腹せうとする。齋藤次是れをとめる。
齋藤次「どつこい〳〵殺さぬ〳〵、娘を一人棒にふればめつたに殺して能いものか、まだ〳〵是れぢやァ腹が癒ぬ、松風も行平も某が館へそびいて、思ひの儘にせにやァ置かぬ、さあ兩人ともにうしやあがれ。」ト引立てようとする。富樫出で兩人をかこひ、富樫「齋藤次祐家お待ちやれ、妹松風を貴殿の館へ連れ召さるれば、先だつて取り代したる馬郎婦の觀世音、富樫左衛門へ渡し召されい。」齋藤次「さあそれは。」富樫「此方へ申し請けた貴殿の娘、貴殿へかへしまする上は、此方から遣はしたる觀音、富樫左衛門が受取りまうさう、觀世音受取らぬうちは、松風は身が妹、指でも付けるとゆるさぬぞ。」
齋藤次「成程、受取り置いたる觀世音、そこもとへ御返し申さう、何奴どもえゝ最前の下郎を是れへ。」

村雨「立ち別れいなばの山の峯に生ふる松とし聞かば今かへりこん、の仰せも重き御跡を、忘れもやらず村雨が、今の浮身を賤が業、行平殿にお逢ひ申さんそれ。」ト又一聲にて村雨舞臺へ來ると、奥より腰元まがき同じくいくよぼんぼりを持ち出で村雨を留める。いくよ「まつた。」村雨「こりや村雨をなんで留めさんす。」いくよ「留めいでわいナア、此のお館は松風樣のお館、直井左衞門秀國さまの御妹子村雨樣を奥へやる事はなりませぬ。」まがき「夫れのみならず戀の敵、嫉妬み安いは女の性、行平樣の御身の上に、もしもの事もあらうかと、留めねばならぬ村雨樣。」村雨「そりや聞えぬわいナア、女子は互ひ、戀しく思ふ行平樣に、どうぞ逢はせて下さんせ。」まがきいくよ「ならぬわいナア。」村雨「とほさんせ。」兩人「ならぬ。」三人「どつこい。」ト是れより松に吹き來る風も狂うて、と謠の切にて三人見え事になり立廻りあつて、とゞ村雨兩人をあてて這入る。續いてまがきいくよ這入る。ばた〳〵にて奥より齋藤次、松風を引立て來てひき据ゑ、齋藤次「これやい松風、おのれを生ました親だぞよ、ようも〳〵親の目を拔いて行平にとれあつて、親王の御殿をけちへや同然にしやァがつたナ、よしないうぬら故に、此の祐家までたはけ者のまきぞへになる、うぬらが樣ナやつはあか恥をかかせてくれべい。」ト帶を解きにかゝる。行平出で、行平「祐家樣まあ〳〵お待ちなされませい。」齋藤次「うぬァ下河邊莊司行平だな、いゝ所へうせやァがつた、奴も松風同罪だ、おれがかう

第一番目　七建目

役人替名

一伊勢三郎義盛女房 金剛童子の靈像	市松
一松風姫	權次郎
一せい高童子の靈像行平	門之助
一村雨姫	吉次
一馬方門出よし松實は富樫 左衛門家直一子直石丸	高麗藏
一腰元まがき	歌川
一同　いくよ	龜之助
一同　さえだ	重八
一川越太郎	少長
一山城國岩倉山不動明王 富樫左衛門	團十郎
一中間時助實は 伊勢三郎 坂東太郎照早	又太郎
一齋藤次祐家	勘左衛門
一常陸坊海存	音八
一鷲尾吉久	雷藏
一あそうの段八	國四郎
一若者喜助	澤藏
一ひつか大之助	仲五郎
一直井左衛門秀國	廣次
若者大勢	

（一）

本舞臺三間の間、大翠簾、幕の内より一聲をうちかけ、幕明く。

「鹽汲みくるまわづかなる浮世にめぐるはかなさよ。

ト、此の謠にて、村雨花道より、著ながしの上へ、紋紗の狩衣にて、しづか烏帽子を著て、ちうけい

けて飛びかゝるは、はて恐ろしき物ぢやナア。」富樫「土佐坊昌俊が娘と名乘れ〳〵。」トむね打ちにうつ。どろ〳〵にて苦しみながら玉鷄の印を牛王の上へ取り落す、と燒酎火燃えるとたんに鷄の聲發すると大どろ〳〵に成る。若松は鳥の聲を聞いて鷄の見えになる。敷妙は燒酎火を見て烏のぬきかけに成る。富樫兩方をきつと見て、富樫「さてこそ形を顯はしたる兩人此の體は。」若松「あら恥かしや、我ながら鷄の形を顯はせしは、其の義朝の玉鷄の印、我と雌雄の因ある戀し〳〵と云ひ告げ鳥、かりに姿を人と化し是れまで參り候ぞや。」ト飛び〳〵鳴く。富樫「扨お事は玉鷄の印に雌雄を因みし鷄とや、假に形を契りの若松、傾城と云ふ文字は鷄の聲と書く、夜を籠めて鳥のそらねははかるとも、世に逢坂の關破り、はて扨怪異な事を見る物ぢやナア。さあお事も身の上をあかすまじきや。」敷妙「今は何をか包みませうぞ、我こそは土佐坊昌俊が娘の敷妙と申す者、父の報いを身に受けて今の今まで此の通り、不便と思うて下さりませう。」トどろ〳〵。富樫「察するに違はず昌俊が娘よな、牛王の不思議玉鷄の印の奇瑞。」馬士「今より後に土佐坊が古跡に殘す牛王が池。」若松「此の契りの若松が身に殘す鷄籠山。」富樫「此の玉鷄の印と此の小柄は此の家直が寸志いざ。」兩人「えゝ有り難い。」富樫「早くゆけ。」

ト大どろ〳〵にて幕引。

若松が手を取る。若松又ふり放さうとする。此の張合ひに富樫わざと袂より若松が片袖を落す。若松是れを見て、若松「やあ其の片袖の紋は。」富樫「かげに縫つたる抱き若松。」若松「それ。」と花道へ逃げようとする。富樫「關破り、女に越され武士の一分が立たぬ、富樫左衛門家直がとめた女、おのれ待つまいか。」若松「すりや關破りと。」富樫「にらんで置いた。」若松「さうぢや。」ト若松づか〳〵と來て肌をぬぐと、片袖のなきぬきかけとなる。きつと見えになる。富樫「おのれ故に富樫は恥辱を取つて人前の交りならず、武士の道を捨てしもおのれ故、さあ何故に關を越せしぞ、夫れぬかせ、聞かう。」若松「さあ夫れは。」富樫「さあ〳〵なんと。」若松「はい。」富樫「關破りの若松、富樫左衛門成敗しようはまづ斯くのごとし。」ト富樫敷妙をひき廻し、牛王の上にて指を切る。とゞろ〳〵に成る。敷妙ふるへる。富樫起請を取つて、富樫「さてこそ熊野の牛王へ血しほを濺ぐやいなや、俄に震ひわなゝく有様、ォゝ、夫れよ心に浮む事こそあれ、近頃土佐坊昌俊鎌倉殿の討手を蒙り、堀川御所において、義經公を討たんため書いたる誓詞の御ばつにて、不思議や土佐が血筋たる者、熊野の牛王へ血を濺げば目前に悶絶なすと聞きしは都の噂なりしを、今目のあたりに女が有様、あれ〳〵牛王を恐れ苦しむ有様、昌俊が身寄りなりと、とも〴〵さんげをなすまじきや。」ト詰めよる。どろ〳〵にて敷妙苦しむ。敷妙「勿體なや恐ろしや、上は梵天帝釋四天王五どうの宮、そら誓文の報いにて、牛王の烏のあれ〳〵我を目が

寒いぢやないか。」若松「ほら貝。」ト側へ持ち行く。富樫「妹松風が身の上の事につき。」若松「さあ、さゝ一つ。」ト銚子杯を持ち行く。富樫「時に今は。」ト云ふ内若松小柄を持つて行く。富樫「扨々不氣てん千萬な、寒いと云へばほら貝、松風が事を申せば小柄を出す、取所もなき不氣てんもの、今日より某が目通りへは叶はぬぞ、立つてうせう、立つてうせう。」若松「そんならわたしを。」富樫「いとま遣はした、きり〳〵立つてうせう。」ト云ふ。敷妙小柄を取り上げて、敷妙「此の小柄の模樣は七つ附けたる笹龍膽。」富樫「六條判官爲義が所持の此の小柄。」敷妙「えゝ。」富樫「見覺えたる女さては。」敷妙「わたしがどうしたぞいナア。」敷妙「扨々氣てんのきいたる女子もあればある者ぢやナア、是れからはそなたが眞實の女房、去りながら餘り唯今では見一無頭、さつきふにぞんずれば御心底の程も覺束ない、誠に我等が女房にならるゝならば其許の心中。」ト云ひながら、まへの箱の上書を見て、富樫「此の書附はなんぢや、牛王入筑前坊長くわん、牛王入とは面白いどれ〳〵。」ト箱より牛王一枚取り出し、富樫「幸ひ〳〵をりもをりとて熊野の牛王、此の小柄刀物まで揃うたる起請の調度。さあ〳〵二世も三世も替らぬと云ふ誓詞が見たい〳〵。」敷妙「さあ夫れは。」富樫「さあ替らぬと云ふ其の誓詞が書かれぬか。」敷妙「さあ。」富樫「さあさあ何と。」敷妙「はい。」ト當惑する。富樫「扨は起請は書かれぬな、左樣ならば女房には持たぬ、さあそんなら若松奥へおぢや。」ト手を取る。富樫「最前のは某がわるかつた。機嫌して奥へおぢや。」ト又

假令おのれが制せばとて、某が料簡にさへ落つれば、返事せいでなんとせう、すつこんで居ようぞ。」富樫「さあ／＼是れへ／＼。」ト手を取る。敷妙いつそうれしがり側へ寄る。若松腹を立てる。敷妙「はいはい。」富○「時にそもじの御身の上は何國如何なる御住居、御名はなんと云ひますえ。」敷妙「はゝわたしはずんと田舍在所の奧のひやうたくれのやほ助、何にも存じませぬ者でござりまする。日外の白山の祭の夜宮にお出入の町人衆の所ぢやと云うて、金屏風やらかけ盤やら藝子舞子の打寄れて、唄三味線の其の中に、あなたがお出で遊ばしたを。これはしたり此の召物にほころびが切れて居まするわいな、一寸私が縫うて上げう。」ト敷妙手ばしかく頭巾の針を取つて、帶の絲を拔いて話しながらぬふ。敷妙「殿達の召物は、ほころびが切れる物ぢやわいな。」富樫「したり、そくいで付けてもかう早くは縫はれぬ物ぢや、さらば一ぷく。」敷妙「はい煙草。」ト煙草盆を出す。富樫「なむさん袂に。」ト云ふ内敷妙煙草入を出す。富樫「合點の行かぬ。」ト云ふうちに。敷妙「此の箱かえ。」と香箱を出す。富樫「時にもう。」敷妙「八つでござりませう。」富樫「扨々氣てんのきいた女子、煙草入と云ひ、某が聞きたいと思ふ刻限を八つでござると今のさそく、こりや女房に持たずば成るまいわいの。」敷妙「はい／＼有りがたうござりまする。」若松「何ぢやいな、わたしぢやと云うてお前の心を知らぬではなし、朝夕お側に居る若松、さあ何なりと云うたがようござんすわいナア。」富樫「若松。」若松「はい／＼。」富樫「今日はいかう

うたぞえ。」若松「そんならこなさんが、富樫左衛門家直さまを。」數妙「あい。」若松「貰はしやんすか。」數妙「女だてらにかうふり込んで來たからは、おいやであらうとすかしやんせずと、女房に持つて貰はねばどうも一分が立たぬわいナア、女房に持つて下さんせ。」若松「其の様に云はしやんすが、お前はまアどこの者でお名は何といはしやんすえ。」數妙「わたしや彼所からもこぬわいナア、あつちの方から來たわいナア、わざ〳〵來たのは富樫左衛門様と女夫にならうと思つて來たわいなナア。」若松「おし付けがましい女夫ざた、なんぼこなさんが其のやうに云はしやんしても、そりやならぬわいナア。」數妙「ならぬと云はしやんしても、わたしがまあかう云ひかゝつては、女夫に成つて見せうわいナア。」若松「そりや又どうして。」數妙「富樫左衛門家直様、サアお前のお心一つで、わたしが女子の一分立つやうにも立たぬやうにも成りまする程に、御挨拶成されて下さりませい。」富樫「如何なる人の由縁かはぞんぜぬが、某へ御執心とて是れまでお出で、數ならぬ身に近頃以て有り難いでえす、御返事致さう、御挨拶仕らう。」數妙「有りがたうござりまする、どう云ふ御返事かは存じませぬが、御挨拶なされうとの御事ありがたうござりまする。」ト富樫がそばへよる。若松此の中へはひる。むつとして、若松「なんぢやいな、富樫左衛門様此の若松を側へ置いて、あの女中様へ挨拶せうとは、何と挨拶さしやんす、夫れ聞きやんしよ〳〵。」ト急く若松を下の方へのけて、富樫「てもはしたない、流石は傾城、

れは。」兩人「さあ〳〵なんと。」ト云ふ内詰め寄られ、井上加賀と立廻りあつて、小とみをかこひ、井上「思ひ立つたる大望も可愛と思ふ我が子の爲、我が子にあらぬ町人の娘、娘の手筋に受けとつた。」富樫「然らば所望の源氏の重寶ならぬ此の寵愛娘をさして、御料と云ふ、鐺をさしてごれうと云ふ名によそへたる八龍の鐺、是れを此の場の思出に立ちかへられよ行家殿。」井上「手だてにのつてはいなけれど、一まづ此の場は立ちわかれん、をりを窺ひ。」加賀「何がなんと。」井上「のちの參會。」富樫「行家殿。」井上「家直。」三人「さらば。」ト見えになり、加賀奥へ入る。井上小とみを連れて花道へ這入ると歌になる。左右より敷妙若松出でおもひ入れあるべし。とゞそばへよりて、兩人「富樫左衛門家直さま。」富樫「そなたは。」若松「若松ぢやわいなア。」富樫「そなたは。」敷妙「敷妙と申しまする。」富樫「終に見馴れぬ女中ぢやの、家直に御用か、若松もようがあるさうに、そなたも富樫左衛門に。」若松「云ひたいことがあるわいナア。」富樫「兩人ながら家直に。」兩人「あい。」富樫「若松そなたの用と云ふは。」若松「さあ行つて寢よう、あゆばんせいナア。」敷妙「いや待つて下さんせ、こつちも用があるわいなア。」富樫「して其許のようはな。」敷妙「女房に持つて下さんせ。」富樫「思ひがけなき御相談、富樫左衛門家直には、ちと此方に先約がござつて、其の返事は。」敷妙「ならぬかえ。」若松「あい此の若松がならぬわいなア。」敷妙「こりや面白いわいナア、こなさんがならぬと云はしやんすればようござんす、ぬしをわたしが貰

ごひ請けんなぞとは及ばぬ望み叶はぬ事〳〵、さあ尋常に立ち歸らば此の所見遁さん、但し心を飜へさず頼朝公を無きものにせんと企てあらば、からめ取り注進なす、さあ〳〵行家返答はいかに〳〵。」井上「こしやくな諫言立て、某一歲義經をかたらひ、大藏卿に執奏して、所持なす所の頼朝追討の此の墨附、後鳥羽院の綸言戴くは謀叛でない、逆意でない、さあ家直も味方になれ、違背に及ぶと命がないぞ。」富樫「左程に云はるれば八龍の鎧、富樫左衛門進上いたさう。」井上「何がなんと。」富樫「加賀次郎まゐれ。」加賀「はあゝゝ。」ト奥より鎧持ちいづる。富樫「申し付けた最前の一領、いざ行家へ渡し召されい。」加賀「どれ。」ト鎧櫃の中より小とみを出して井上に渡す。井上びつくりする。小富「とゝさまいなう。」井上「やァ〳〵是れこそ我が娘、可愛や〳〵。」富樫「めつたな事をおいやるな、腰に附けたる此の札に、辨慶橋常陸長屋古金買長兵衛娘。」井上「なんと。」富樫「其許さまは源行家、町人に娘はない筈、某が家の重寶八龍の其の鎧、行家の所望ならば夫れにも等しき其の鎧を、此の町人の古金買の長兵衛にいひ附け召されい。」井上「すりや此の娘は古金買の長兵衛故。」富樫「鎧の手筋をお聞きなさい。」加賀「また此の上に八龍の鎧をして御所望おぢやれば、目前に此の加賀次郎が此のをさな子をまづこの通り。」ト加賀次郎小とみを引きよせながら手込みにする。井上びつくりして、井上「やあ夫れは。」小とみ「こはいわいなう〳〵。」加賀「行家殿此の通り。」富樫「是れでも鎧がお望みか。」井上「さあ夫

にて刀をつゑに煙草盆持ち劒を受け、きつと思ひいれして居る。井上此の體を見てぎよつとして花道へかけ出す。富樫「備前守行家まつた。」井上「何がなんと。」ト立ちかへる。くわげんになる。富樫「今打つたる所の此の小柄、是れこそ六條判官爲義公御所持の笹龍膽の此の小柄、隱すに隱されぬ源行家と、有樣に本名を名乘れ。」トきつと云ふ。井上立ち歸り、富樫につめ寄つて、井上「聲懸けられて思はずも立ち留つたる昔かたぎ、町人とはなつたれども魂はやつさぬ備前守。」富樫「行家殿でござらうがな。」井上「おんでもない事。」富樫「行家殿。」井上「富樫左衞門。」富樫「替つた所の。」兩人「參會ぢやナア。」井上「さあ斯う名乘り合ふからは行家が願ひ云うて聞かさん、富樫左衞門おことが祕藏なす所の八龍の鎧、源氏の重寶たりしを待賢門の軍の折柄、藤原家の手に入つて、汝が家の寶物、某已に一戰に及ばんと思へども、時節來らず、今にも天運環り來て籠城して鎌倉方の討手を引受け、其の期に望む折柄は何卒父の形見たる、八龍の鎧此の行家が肩に懸け、目覺しく働かんと思ひ詰めたる武士の一念、さあ聞き屆けて其の鎧を此の行家におくりやるまいか、返答聞かん、なんと〳〵。」富樫「沛公は楚を討つて政に仁なく、韓信は齊を保つて忠缺けたり、御身源氏の正統として一心の納めあしく、正しく鎌倉殿の伯父君、天下の伯父に有りながら、國々所々を經歷して膝を入るゝの所もなく、一擧に義兵をあげんとは、へゝゝゝはゝゝゝ愚か〳〵、剩へ富樫左衞門家直が、家に傳はる八龍の鎧、

敷妙「さあ。」直井「さあ〳〵なんと。」敷妙「直井左衛門觀念。」ト井上次郎後から斬り付ける。直井左衛門直に立ちまはりにて其の刀をひつたくり、井上を疊み懸けてぶつ。其の烏帽子素袍もとれて古金買の形になり、直井びくりする。ト敷妙宜しくこなし、直井敷妙が前へ刀を投げ出す。直井「めつたによると秀國が峯打の相伴を、ぬしの側杖がくひたいか。」敷妙「さあそれは。」直井「見ていやれ、こいつがざまは何だ、烏帽子素袍で、まのふりをしやァがつて、夫れでも井上次郎忠永が詮議をしたら、どの樣な事が知れまい物でもない、おのれを。」敷妙「こりや。」直井「富樫左衛門へ取り持つてやるをはらいせに、存分にして命は助けた、きり〳〵立つてうせう。」ト唄になり、敷妙をつれ直井は入る。井上殘つて、井上「えゝいま〳〵しい、鳶の子は鷹にならずとよく云うた者ぢや、折角井上次郎になり、入り込みたる古金買の長兵衛、直井左衛門に出會うてまた此のざま、今年は又いま〳〵しいやつが鄰町からうせて、來年一ぱい此樣目に合ふであらう、あたけたいの惡い、夫れに附いて娘の小とみ、どこにどうして居をるやら、逢ひたい物ぢやナア。」トほろりとする。又唄になり、井上たゝかれた腰の痛む思入にて、素袍を疊み風呂敷に包み腰に卷いて、形をつくつて、井上「しよせん知れたる我が身の上、生きるとも死ぬるとも、奥へ踏み込み富樫左衛門が祕藏なす、八龍の鎧奪ひ取つてたち歸らん、目ざす敵は富樫左衛門ゑい。」トちんを目がけ、手裏劍をうつて障子を引きあける。此の内に富樫上下衣裳

は、替つた事の。」井上「さあ今いつたのは。」直井「あれは。」井上「物でござる、町人風情の女夫喧嘩、裏店小店にある其の日暮しのものの申すを、つい戯れに申したのでござる。」直井「いかさま井上次郎忠永殿戯れには、琴棊書畫等の樂しみの外、裏店小店の夫婦喧嘩を唯今のたはむれとは、こりやはやりませうわい。」井上「わしもその心さ。」直井「夫れ又こちらの女中、最前富樫左衛門に深く心を懸け帶の解けぬ思ひのなんかのと、口へ出任せ出し次第に、あゝ云つたのは思ひ付きか、こりやはやりませうわい。」數妙「わたしも其のこゝろさ。」直井「取り持つてやるべい。」數妙「えゝ。」直井「富樫左衛門を此の直井左衛門が命にかへて取り持つてやるべい、樂しみに女なし夫なし、仲人になつて世話をしてやるべい、さあおのれと一所に奥へおきやれ。」ト手を取る。數妙「もし〳〵めつさうな、どうしてまあわたしが。」直井「なぜに、折角おぬしが武士と見懸けおれをたのんだに依つて、取り持つてやるのだ。」數妙「さあ夫れは。」直井「へんがへか。」數妙「さあ夫れは。」直井「いやきになつたか。」數妙「さあ夫れは。」直井「そんならあいびやれ。」數妙「わたしも行きたさは行きたいが。」直井「なぜ。」數妙「今日は日が悪いわいナア。」直井「成程今日は日が悪い、第一天一天上大天上を見ぬ内に、おいらが方の色事は、止めにするがよかんべい、止めにするなら止めにして、聞きかゝつたるお主が身の上、町人の娘でないと云ふ其の話を聞くべいか。」數妙「さあ夫れは。」直井「何ものの娘で名はなんと云ふ、夫れを聞かうか。」

まで來たわいナア。」井上「わいナア所か、是れやいあの娘があればこそ、幾度か腹切つてくたばらうと思つて居る、命をかうしてゐるではないか、やいあの小とみを奪ひ取られては、もう〳〵何にも入らぬ、侍も入らぬ古金買も入らぬ、かはりには汝にもそはぬ、さあ〳〵出てうせう。」敷妙「さあその腹立ちは尤もぢや、命にかへても取り返す程にどうぞ堪忍して下さんせ。」井上「いや〳〵堪忍せぬ、去つた程に出てうせう。」敷妙「そりや又おまへ聞き譯がないわいな。」井上「聞き譯があらうがあるまいが、おのれが樣ナやつは女房には持たぬ。」敷妙「そんならお前さうしやんすか。」井上「さつて〳〵さりこくる。」敷妙「そんならさらしやんせ。」井上「さらいで〳〵。」敷妙「さられうわいナア。」敷妙「おのれはおのれ。」敷妙「こなさんは〳〵。」ト井上は素袍著た形、敷妙は忍びの形にて、世話狂言の夫婦喧嘩のやうになる所へ、直井以前の形にて出で來て、兩方へ分ける。直井「まあ〳〵待つた。」敷妙「いえ〳〵留めて下さんすな。」井上「のいたり〳〵、總體おのれは長屋つき合が惡い、路次のかぎも借りて置かず、はかり炭の、小すみも云ひす、氣に入らぬ事許りぢや出てうせう。」直井「さあ〳〵尤もぢや〳〵お内儀も默らつしやい。」トはじめて敷妙井上直井顏見合はせると、思入、合方になる。敷妙「やあおまへは。」直井「直井左衞門秀國、そなたは最前の女中。」敷妙「あい。」直井「其許さまは。」井上「井上次郎忠永。」直井「見ますれば烏帽子素袍でたゞ今の御口論、長屋附合がわるい、路次の鍵を借りて置かずと

と入り込みし敷妙、富樫左衛門家直にれんぼの體にもてなして、來る事は來ても、館の案内夫れと知らねば、我が子の行方どこに居るやら覺束なく、唯其の内も此の身の上、若しや夫れと知れようかとこはい物ぢやわいナア。」ト云ひながら井上を見付け、敷妙「やあ〳〵こなさんはこちの人長兵衛殿かいなア。」井上「女房。」敷妙「あい。」井上「おのれは〳〵、内を明けてなんで爰へうせたのだ。」敷妙「さあそれはナ。」井上「是れは所か、やいかけ向ひの裏店住家、内をるすにしてなぜうせた、第一火の用心が悪い、さうして小とみはどうしたぞ。」敷妙「さあ其の小とみの事に付いて夫れで爰へ來たわいなア。」井上「氣にかゝる事をぬかしをる、小とみはどうした〳〵。」敷妙「聞いて下さんせこちの人、お前からあづかつたあの。」井上「小とみを。」敷妙「あの小とみを富樫左衛門が家來、加賀次郎にうばひ取られたわいナア。」井上「やあ〳〵あの小とみを、加賀次郎にうばひとられたとは。」敷妙「きび明神の境内において。」井上「えゝおのれは〳〵につくいやつの、よう聞けよ、今でこそ古金買、辨慶橋のおれは長兵衛われはおよし、其の昔は何者ぢや、此の長兵衛は備前守行家、おのれは土佐坊昌俊が娘の敷妙、氏も系圖もれつきとした侍ではないか、其の侍の娘が、預け置いたるあの小とみ、取られたと云うて云譯があるか、えゝおのれはどうしてくれう。」ト腹を立つて、立つたり居たりする。敷妙「尤もでござんす、常々可愛がらしやんすあの小とみ、奪ひ取られてはわしも云譯がないと思うて、夫れでこゝ

れより下座の□に取り、丹前の所作おもしろくあつて、とゞ大勢を取つてなげ、きつと見えになる。皆々「どつこい。」ト奴時助奥より出で、顔見合はせ、お市「やあ、こなさんはこちの人。」時助「こりやこりやなんにも云ふまい、他人だぞまつかい他人のぶ中間、めつたな事を云ふまいぞ。」齋藤次「おもしろい丹前の奴にかたうどか、身の上の詮議に齒ごたへがする、夫れ程此の觀音をほしがつて心を懸けるは、義經の由縁か。」時助「さあ夫れは。」齋藤次「なんと。」時助「さあこれは。」ト時助思案してお市をつき倒しむね打ちにする。お市「是れはなんとしやんす。」時助「女のさいに大それた、齋藤次祐家様が御所持成された尊像へ心を懸けるは合點がゆかぬ、さあ身の上をぬかすまいか。」お市「もし〳〵こちに思はぬお疑ひ、觀音に心を懸けるとは、ぢやァほんにをかしいわいなァ。」時助「盗人たけ〴〵しいと、あり樣に吐さにやァ刃物序にくたばつて仕舞へ。」トお市を引きのけ、齋藤次に斬り付ける。立廻りあつて、齋藤次が懐中のづしに手をかける。立廻りあつて、齋藤次「夫れやるな。」皆々「やらぬわ。」トかゝる。時助皆々を追ひ散らして、お市をつれ花道へはひる。唄になり、敷妙出で來る。井上以前のなりにて出でくる。井上「井上次郎となつて入り込みし備前守行家、富樫左衛門が祕藏なすところの八龍の鎧、奪ひ取つて立ち歸らば、一戰に及ぶ時、某が肩に懸け花々しく合戰と、思ひ詰めたる今の願ひ、何卒折を窺ひ、八龍の鎧を手に入れたい物ぢやナァ。」ト上の方に居る。井上を知らずに、敷妙「まんま

の上をあかすまいか。」お市「めつたな事をおつしやりますな、私がお側へまゐりましたは。」齋藤次「齋藤次がそばへよつたは。」お市「さあ是れは。」齋藤次「なんと。」お市「おゝ夫れ〳〵夫れぢやわいなァ、あなたが承りましたる齋藤次祐家さま、今日のあなたの御趣向は、丹前出立よしや風、よしやといへば名につれて、御供の御用もあらうかと、一寸おそばへ。」ト懐中へ手を入れる、立ちまはり有つて、齋藤次「なんと。」お市「よつたわいなァ。」齋藤次「面白い、丹前出立の齋藤次供の役にもたたうかと、夫れでそ樣が寄つたのか。」お市「あい。」齋藤次「此の馬郎婦の觀音を。」お市「さあ夫れは。」齋藤次「よりやァがるなどぢめらう、是れに心を懸けると見えた詮議が有る。と云はうぞ。有樣はそもじの樣な可愛らしい、どうやら物に機轉のきいた女があらば。老いのねざめに手なづけたい。年がよると二度おぼこ、若い者に負けまいと、我慢がかうじてくわんくわつ出立て、早速そちに用がある。」お市「其の御用。」齋藤次「其の用は。」トぬきかける、お市手はしこくたち廻りあつて、齋藤次が懐のづしを取りて行かうとする。奴ばら〳〵と取り卷き、此の內にお市白い手拭を襟にまき、奴のかたちになる。奴「どつこい。」齋藤次「詮議のある其の女め、繩ぶつて屋敷へひけ。」皆々「うごくな。」お市「其のづしこそ觀世音、實や大悲のちかひには枯れたる木にも花の鳥、一ふりふり出す八文字、供の奴とおもはくの其の中の町。」ト齋藤次へかゝる。齋藤次「どつこい。」皆々「どつこい。」トたち廻りあつて、お市「よんやさァ。」ト是

た事が、こりやなんぢやわいな、山伏の持つ物ぢやわいなあ、をかしい物ぢやなァ、此の樣ナ形でも天上をする時は、恐ろしい物ぢやと云ふ咄を誰やらがしたわいなァ、おゝそれ〳〵大門の兵庫やからござんす、客人のはなしぢやわいなァ。」若松「こはい物ぢやナァ。」やりて「まァ手に取つて見さんせいなァ。」若松「こはい物ぢやこちやいや。」やりて「まあ〳〵此の樣に重いわいなァ。」トやりて貝を手に取る。貝の内より米を若松が膝にこぼすと、若松「こりや米ぢやないかえ。」ト云ふ内、やりて鏡にうつる若松が顏を見て、やりて「やあ〳〵若松さんの顏が、鷄に見えるわいなァ。」ト驚く。若松其の鏡を取つてやりてを見事に切る。きつと思入する。唄になり、若松こゝろを納め死骸をかくして、あたりをうかゞひながら廊下へはひると、齋藤次出て、呼子をふく。いぜんの奴大勢出で來る。奴皆々「御用かな。」齋藤次「家來共へ申しつけ置きたる通り、折を伺ひ富樫左衞門を討ちてしめろ、某事は娘松風姫を引立て屋形へ歸る、用事あらば合點の呼子を。必ずぬかるな。」奴「心得ました。」齋藤次「がてんの行かぬは下部の時助、此の馬郎婦の觀音へ心を懸ける體、きやつこそ正しく義經が餘類、いや〳〵まづ此の用心には繩をはれ、此の馬郎婦の觀音を取られぬ樣に。」ト懷中より出して、包み直さうとする所へ、お市伺ひづしへ手をかける。齋藤次ふり放して、齋藤次「此のあまは何をする。」お市「さあこれは。」齋藤次「がてんの行かぬとぢめらうめ、此の觀音へ手をさし懸けるは曲者に相違はない、さあ有樣に身

つ。」ト酒をつぐ。富樫「さらば御馳走の貝焼出來た、かうしておいて此の玉子、火ばしの手の内御目にかけよう。」ト富樫玉子を取つて火箸にてわる、とたんに鷄の聲すると、直井懐をおさへ心遣ひあるべし。若松鷄の聲を聞いてぎよつとする。富樫は火ばしを持ちながら若松直井を見て、富樫「鷄既に鳴いて忠臣曉を待つ、折もをりとて玉子の手の内、碎くとひとしく鷄の聲、はて面白き今の一聲。」直井「夫れかあらぬかとうてんくわう、東よりまづ杯にもしらけてめえたる、此の場のしぎ。」富樫「鷄のいきより霞むあした哉。直井左衛門奥へ。」ト唄になり、富樫直井奥へはひる。若松あとを見送り一人殘りて、若松「思ひがけない今の一聲、心に誤りある故にはつと立つたる顏、物にかしこき富樫左衛門、もはやさとつて此の場の體、濟まぬとおもうて行かんしたが、氣にかゝる事ぢやわいなア。」ト云ふ内奥よりやりて鏡臺を持つて出で、やりて「爰へ鏡臺を持つてさんじたわいなア、お湯もようわいたと云つて來たわいなア、早う髪もすいてしまうたがよいわいな。」若松「それ／＼そんなら鏡臺こゝへ直して下さんせ。」やりて「ちよつと髪もすきやんせう、おはぐろもわかさうと思うたがな、寒くてつかぬわいな、お前さんは知らぬ事、わたしや雪齒ぢやによつて、寒いと此の樣につかぬわいなア。」ト云ひながらやりてたすきを懸けて、若松が髪をすきにかゝる。若松鏡臺を引寄せて鏡に向ふはり合に、舞臺に落ちてある螺貝を見付け、若松「おたつどんやありやなんぢやえ。」やりて「是れかえ若松さんとし

ぬ、そこ元の御頼みでも此の儀は御用捨に預りたい。」直井「富樫左衞門、そりやお手前日頃にも似合はぬ、挨拶にかけごがあつて表向きのよい事ばかり、直井左衞門うけたまはるまいわえ。」富樫「だまりめされい、直井左衞門、何故にそれがしが挨拶にかけごがござるな、率爾なことといやつて跡で後悔おしやるな。」直井「家直に對し率爾なことを申さうか、其元の妹松風姫に、下河邊行平を添はせたいと、手前勝手の富樫左衞門、是れに違ひはあるまいがな。」富樫「生得不實なる直井左衞門、富樫左衞門が魂を見違へたか、女子供のわざくれ事、夫れを取り上げてえて勝手を申す樣な、器のせまい侍ぢやないぞ。」直井「何がなんと。」富樫「賴朝公の命をおもんじ、富樫左衞門義經公を見逃さぬと云ふ申譯さへ立てば、妹の一人や二人眼前命を捨つることもぞんぜぬが、誠の武士を磨く所夫れを知らず、言葉過すと富樫左衞門がゆるさぬぞ。」直井「相手になるべい。」富樫「相手になるか。」直井「さあ拔け。」富樫「さあ拔け。」兩人「何と。」ト刀のつかへ手をかける。若松心つきあつて、若松「これ。」富樫「へへ。」直井「へゝ。」富樫「はゝゝ。」直井「はゝゝ。」兩人「はゝゝいかいたはけ。」若松「わたしやほんまの事かと思うて、びつくりしたわいなア。」直井「どうして〳〵何を云ふのも心やすさの儘。」富樫「さやうさやう。」若松「そんならお二人さんながら機嫌なほして、さあ〳〵一つあがれいナア。」直井「どれどれ又酒か、さけはたゞ呑まねば須磨の浦さびし。」ト杯を取り上げる。若松「呑めばあかしの波風ぞ立

富樫「若松ロとりはどうぢや、お吸物を申し附けぬか。」若松「あい〳〵一寸いうて參りませう。」富樫「待ちや待ちや、直井殿の珍らしいお出で、何ぞよい口取で一つ進ぜたい物だ、おゝある〳〵幸ひ〳〵、あれ次へしかけ置いたあの火鉢、帆立貝も何もかも、皆爰へ持つておぢや。」若松「あい〳〵。」ト若松奥よりほたて貝、盆にいろ〳〵つみならべて玉子を添へて持つて出る。富樫直に火鉢を引きよせて、富樫「ときに直井殿にはなんと思召して今日の御出でゞえす。」ト富樫火鉢の火をこしらへながら咄すうち、若松ははな紙にて火をあふぎ帆立貝をかける。直井は杯を引きよせて、直井「拙者今日參つたる事は、ちとそこ元に御意得たい儀がござつて、態々參りました。」富樫「左樣ならば家直に。」直井「ちと拙者が御無心がござる。」富樫「なにがな。」直井「外の儀でもござらぬが、下河邊行平殿、鎌倉一の若衆ざかり、綺麗な所に目がついて、拙者が妹あの者と譯ある中、なんと行平殿をそこもと樣のお世話で、拙者が妹へくださるまいか、其の儀をどうぞ。」富樫「そりや成るまい。」直井「なぜに。」富樫「直井左衞門秀國は義經公へ内縁の武士、富樫左衞門家直も常磐御前へ内縁の武士、近頃伊豫守奥州高館藤原秀衡が方へ立ちこえられしとのとり〴〵の噂、安宅の關を越えられしは、富樫左衞門が業などと、賴朝公の上聞に達し、夫れよりお疑ひかゝつて、鎌倉表より下河邊行平おほせ付けられ、某が身の上詮議、其の行平を拙者が仲人いたしては、世間體が濟みますまい、何はともあれ賴朝公へ申譯がござら

はなけれども、出合ひましたるこそ幸ひ、是れから折々何方なりと、そろ〳〵おして見ませうかえ。」
直井「見ませうかとはあり難い。」ト側へよる。　富樫「我等もかはらず。」　直井「呑みかけ山。」ト側へよる。
富樫「山とは。」　直井「ふるいか。」ト側へ寄る。　富樫「ちく生め。」ト手を引く、「孰ぞこいよ、お杯を持つて來い。」　若松「あい〳〵。」ト合方になり、若松うちかけ衣裳にて銚子杯を持つていで、すぐに富樫直井が中へすわる。　富樫「かう云ふ所は又そもじでなければいかぬわいの、一寸お引合はせ申さう、きやつめ我等がねやの花、御見知りなされて下されい。」　直井「したり見事、直井左衞門秀國でえす、折々まゐつて御世話に成るでござらう。」　若松「なんのいな、今お目に懸るこそ幸ひ、隨分と御心やすう。」
直井「くるなといつても參らねばならぬ、其のくせに酒もりをして居る事がならない氣ぜん我儘なやつさ。」　富樫「そりや拙者なぞが其の通り、杯を控へてたら〳〵として居る事が嫌ひでえす、どれ〳〵さうしてゐる内そこ元へ進上いたさう。」ト杯を差上げる。　若松「どれ〳〵つぎやんせう。」　富樫「お酌か。」
若松「珍らしうもないわたしが酌、おいやかえ。」　富樫「おいやとはどうでえす。」　若松「夫れでもどうやらいやさうだによつて。」　直井「いよ〳〵若松さんだの。」トほめる。富樫扇にて顏をかくす。　若松「そんなら此の杯をば、わたしが拾うてあなたへお上げまうさうか。」ト若松直井へさす。直井とり上げて、
直井「さらば一つ下されるか。」　若松「どれ〳〵お酌致しませう。」トつぐ。　直井「是れは〳〵強いお酌の。」

齋藤次「案内おしやれ。」井上「中納言よしあき公のお入り。」ト井上若松を初め殘らずはひる。富樫一人のこり、富樫「がてんのゆかぬ敕使の有樣、こりや一思案せずば成るまい。」トたばこのみ居る所へ、直井左衞門上下にて出て來る。直井「夫れにおゐやるは富樫左衞門殿ではござらぬか。」富樫「左樣おほせらるゝは直井左衞門秀國殿。」直井「左樣々々。」富樫「是れは〱直井殿、まあ〱是れへ〱。」直井「然らば御免ください。」ト座敷へあがる。富樫「さて〱その後は中絶仕つた、先づ〱近う。」直井「何からお咄し申さう、色々山々。」富樫「御同然々々々、先づ〱何事差置きまして。」直井「貴公にも御健勝で珍重にぞんじまする。」富樫「其元にも御堅固にて大慶にぞんじまする。」直井「是れは〱早速ながら御祝儀まうさうは、貴殿の御身分當時鎌倉殿の御前宜しく、段々との御立身、若手の内の隨一でおうらやましう存じまする。」富樫「是れは〱ありがたい御挨拶近頃以て忝い、其のもと樣にも日々の御評判おびたゞしく御ひいきと承り、毎度御噂仕る、さだめて當時御發向の直井どの、色事などはどうでえす。」ト扇にて脊中を叩く。直井「お恥かしい事ながら面の赤いが疵になり、色事と云ふはけもない事けもない事、日頃よりどんな其の上に、女にかけちやァおつて許り、むてときた物ぢやによつて、色事は三年寒がり、女郎買は鬼門、闘づり許りで暮してまかりある。其元樣こそ承つた、品川通ひのまゝ謎をかけしも聞かまほしくたく。」ト脊中をたゝく。富樫「是れは〱迷惑千萬な、左樣な事

きやれ。」齋藤次「なんと。」富樫「富樫左衛門妹に松風姫が有ればこそ某が難儀、妹松風をそこもとへ歸せば家直に咎はないぞ。」齋藤次「さあそれは。」富樫「松風姫を連れておゆきやれ。」松風「是れはまあ兄樣お前は〳〵お情ない、如何に血筋ないとても今の今まで、兄樣妹よと呼ばれたる其の中を、お心強い家直樣、自らはなんぼでも、あなたと緣はきれぬ。」富樫「たはけづらめ、たとひ此の場でそれがしが緣を切つたとて、はてさて緣を切つた、緣を切つてはどこがどこまでも。緣を切らねば此の場が濟まぬぞ、そこ立つてうせう。」松風「お心強い家直さま。」齋藤次「娘を此方へ取り返せば、是れで一家の好みはない、富樫左衛門縄懸れ。」富樫「松風を返してもなぜ家直に縄打つのだ。」齋藤次「賴朝公よりの仰せ付けられたる安宅の關守、關を越されたる富樫左衛門、慥かな證據の此の片袖、此の咎故に縄かける、逃れぬ所腕まはせ。」ト袖をとつて思入あるべし。富樫「さあ夫れは。」齋藤次「さあ。」富樫「さあ。」齋藤次「さあ〳〵どうだ。」井上「富樫左衛門とつた。」ト井上次郎素袍の袖をまくりかゝる。富樫其の手を取つて、富樫「まつた、其元の名はなんと云ふ。」井上「井上次郎忠永。」富樫「かけも構はぬ關破りの詮議に、素袍の袖を捲りたてて、捕つた遣らぬとおつしやるは、御人體にお似合ひ申さぬ。」井上「さありや。」富樫「なんと。」若松「思ひもよらぬ其の片袖。」富樫「覺えがあるか。」若松「いゝえ。」富樫「覺えのないのにきつい肝のつぶし樣の。」齋藤次「云譯があるか。」富樫「云ひわけいたさう。」若松「爰ははし近。」

うだ。」 富樫「敕使の趣るさい承知いたしてはござれども、富樫左衛門家直は、鎌倉の上意により、當時安宅の關守たり、妹松風が身の上の儀は、申さば彼がいたづらと申す者、某かつて存ぜぬ事に縄かゝり囚人と成つて、賴朝公より仰せ付けられたる役目はいづくにある、富樫左衛門が關守の役目は勤まるかな。」 三人「さあそれは。」 富樫「また其の上に松風が身のうへ、下河邊行平と通じましたるといふには、何ぞ慥かな證據がござるかな。」 三人「さあそれは。」 富樫「何がなんと。」 井上「證據のない事を云ふものか、證據と云ふは松風村雨、彼等が覺えがあればこそ、村雨姫に縄かける、彼奴らが論より慥かな證據、富樫左衛門逃れぬ所だ、縄にかゝれ。」 富樫「すりや行平に心を通じ、是明親王の御殿を汚せし慥かな證據。」 井上「目前に松風村雨、御殿を揚屋同然に、よつて集つてこやにした慥かな證據は二人に聞け。」 富樫「すりや兩人に。」 井上「諄い〱、慥かな證據が有るからは、彌三人は須磨の浦へ流罪、行平を引込んだる富樫左衛門は押込、縄ぶつて引いて行く、すみやかに腕廻せ。」 富樫「さあそれは。」 三人「なんと。」 富樫「縄にかゝる事まかりならぬ。」 三人「そりや又なぜだ。」 富樫「おきやアがれ。」 三人「なんと。」ト云ふうち若松を引きよせる。 富樫「三國第一の若松、此の君の容色に富樫左衛門殆んどよわり、しばしが内も離れることならんでえす、縄掛ける氣ならば餘人におほせ聞けられい。」 齋藤次「敕使へ對して不屆なる挨拶、祐家が縄かける、富樫左衛門腕まはせ。」 富樫「妹松風をつれておい

てそれは杓子さ。」喜助「杓子樣とは茅場町ではないかえ。」齋藤次「おきやァがれ。」ト立懸り、齋藤次「己等までが其の樣に嘲弄する、につくい奴の富樫左衛門家直、齋藤次祐家に挨拶はないか。挨拶がなければいいわ。取りかはしたる娘松風、某連れて立歸る、松風こい。」富樫「まつた。」齋藤次「なぜ留める。」富樫「一旦貰ひ受けたる妹松風、理不盡に手を付くると腕骨切つて切り下げるぞ。」齋藤次「富樫左衛門、氣が出て面白い、お身樣の樣ナ腰拔侍に、娘松風やる事はならぬわえ。」富樫「控へ召され祐家、何で富樫左衛門を腰拔とはおいやるぞ。」おそう「敕使引。」富樫「敕使とあれば、ことの仔細を承る。若松ちつとの間、そなたはそこに居てたもれ、どつちへもやりやせぬぞや。」若松「合點ぢやわいナァ。」富樫「ちつとの間だまつて居や、思ひまうけぬ敕使のお入り、富樫左衛門家直へ仰せ聞けられ下さりませうならば、有り難う存じ奉りまする。」井上「それ家直に繩をうて。」皆々「はあ。」富樫「敕使のお入り、某が繩かゝるべき咎、わつぱさつぱとたち騷ぐは、どなたなりともお相手にまかり成るぞ。」井上「やあ落付くな〳〵、富樫左衛門家直、妹松風こと近頃是明親王の御殿にて、ちゝくりあつた行平、其の行平を留め置くは、富樫左衛門が心に一物、よつて繩打つて某が陣屋へ引く、速かに繩かゝれ。」あそう「敕使に立ちしも其の趣、行平松風村雨ともに、攝州須磨のうらへ流罪せよとの敕令、逃れぬ所だ、松風を渡せ。」齋藤次「異議に及ぶと左衛門は重罪逃れぬ所だ、返答は。」井上、齋藤次、あそう「ど

何より、身どもにつゞいてさあおぢやれ。」禿「あいあいゝ。」トすがゝきになり、皆々舞臺へ來る。直に富樫眞中にすわる。傾城若松富樫へもたれてゐる、喜助たばこ盆を持つて行く、やりて杯を持つて行く。此のうち始終すがゝき。喜助「さあ旦那一つお上り成されませい。扨々此の間は寒じが強うなりましたでござりまする、あなたはいつも／＼御盛んでお羨ましうござりまする、なうおたつどの。」おたつ「それ／＼喜助どのの云はしやる通り、主さんの樣なお客さん許りなればよいと、陰では新造さんや中の町のごて樣方とお噂許り致して居りましたでござります。ほゝゝ一つお上り成さいませ。」富樫「又酒にいたさうか、一つついでくれ給へ。」若松「わたしが酌をしやんせう。」富樫「君のしやくとは有りがたい、名こそ多けれ寶やの若松太夫と云ふ酌では、一つ呑まずばなるまいかえ。」若松「さあさあ一つ上れいなァ。」齋藤次「井上次郎忠永殿、此の體を御覽なされたか。」井上「いやもあきれて物が申されぬ、富樫左衞門が此のさま。」齋藤次「何、家直どの齋藤次祐家でござる、唯今御歸り成されたか。」若松「おゝこは、ありやなんぢやえ。」富樫「なんでもよい／＼。」若松「こはいぢゝさんが、何やら物云うてぢやぞえ。」富樫「すてておきや／＼。」齋藤次「是れ／＼富樫左衞門家直、茶にするもことに寄る、是れに御入りなされたは、中納言よしあき卿、まつた井上次郎忠永殿、是明親王の嚴命によつて、おたちなされた今日の敕使、席を改めて御挨拶おしやれ。」若松「敕使とはなんのこつちや。」やりて「はてさ

物になり、花道より若者喜助のなりにて、だき若松の紋付きたる女郎の提灯をともし出で來る、跡より傾城若松うちかけ衣裳傾城のなりにて出てくる。是れに富樫左衞門上下衣裳にてからかささし掛ける。跡よりつるの禿形にて子役松之丞はな紙きせるを持ち附いて出る。跡よりやりておたつやりての形にて出で、花道のなかほどにて、富樫「いうにやさしき月に花、眺めいやます君が風情、富樫左衞門家直我ながら迷うたわいの。」おたつ「惚れられたのと、惚れたのはきつい違ひの人心、誰あらう文武に名高き左衞門樣、能く〳〵御氣に入つたやら、今日の今日までお二人一所、あの嬉しさうなお顏わいなア。」喜助「いかさま世の中にお屋敷へ抱へられた若者程、かすりまはらぬ物はない、紋日物日はお屋敷ばかり、貰ひ引きが出きず無心が云はれず、御門はかたし、是れでも旦那ようござりまするか。」富樫「やぼめ、諸事萬端の。」やりて「まうし太夫さん、今日はどうした御趣向やら殿樣の此のお姿、固い樣でもどこやら粋な性と見えるわいナア。」小役「さうぢやわいナア、揚屋入りとは事變り、お庭傳ひの八文字、おろし歩みも珍らしかろ、眞にしみじみすいたぞえ。」傾城若松「好いた好かぬは初ての內、なじめば同じ谷河の水、流れをたつる浮きふしにも、誠をあかすが苦界の花、今また開く中の町、此の花道のうひ〳〵しく、皆樣免しておくれいなア。」富樫「李延年が一說より、世は傾城の名起れり、島原に鳴く鶯、吉原に住む蛙、猛き者のたて籠る城郭、遊里と見込み山程積る睦言を、語り明すは

からば、彼へおほせ聞け下されませう。」あそう「勅使の趣餘の儀にあらず、此のあひだ是明親王の御殿において、下河邊行平は富樫左衛門が妹松風、まつた直井左衛門が妹村雨、上をおそれず、とりやつて不義をひろいだ其の科によつて、三人ともに須磨の浦へ流罪せよとの勅使。」松風「えゝそんなら今様のをりから、是明親王の御殿をけがせし科によつて、行平様も村雨も此の松風も、あの須磨の浦へながしものとや、ほい。」村雨「自らとても其の折から、御殿をけがしたる科によつて、思ひ設けぬ此のいましめ。」松風「そんならお前も。」村雨「松風様も。」松風「みな戀故に。」松風、村雨「はあ。」井上「遁れぬ所ぢや、それ松風に縄かけい。」侍大勢「はあ引。」まがき「はゞかりながら、お待ちなされて下さりませい。松風姫が其の科にて縄かゝりまするは、勅使の仰せ是非に及びませぬ事でござりますれども、折悪しく富樫左衛門居りませねば、まづ〳〵お待ちくださりませい。」加賀「殊にわれ〳〵此の席に列なりをつて、松風が不義いたづら、委しく様子承知致さぬ其の内に、縄うたれんとはそこつの至り、先づ〳〵お待ち下さりませう。」齋藤次「小しやくなる加賀次郎、行平松風村雨縄うちきたれとは、是明親王の仰せいだされ、流罪とあるは勅諚も同然、尻のしまひは富樫の身の上、急いでまつ風に縄をうて。」皆々「さあそれは。」井上「勅諚を背けば違勅の罪、きり〳〵縄をかけないか。」皆々「さあそれは。」井上「さあ。」皆々「さあ。」井上「さあ〳〵どうだ。」トむかうにて「殿のおかへり。」と呼ぶ。あつらへの鳴

幾度となうさし上げしが、かなはぬ事とてもしほ草、かき捨ておきしに今日の今、あなたの今のお言葉が、妾が爲には力草、よもや直井左衞門さま。」直井「刀にかけて相違ない。」敷妙「あのかたなにかけられて。」直井「そもじの戀はとりもたう。」敷妙「えゝありがたうござりまする。」直井「くせもの觀念。」ト直井拔いてきりつける。手ばしかく立廻りあつて、兩人きつと見えになる。其の内敷妙四建目の玉鷄の印のふくさ包を懷より取落す。直井それをとり上げて、兩人きつと見えになる。敷妙「時こそ野まの内海にて、落命ありしかうのとの。」直井「義朝公の玉鷄の印、軍勢催促の此の印を所持せし女の身の上は。」その時向うにて、「敕使。」と呼ぶ。敷妙「敕使とや。」直井「こい。」ト直井敷妙はひる。直に下りはになり、花道よりあそうの團八、冠裝束にて笏を持ち出て來る。跡より井上次郎重永烏帽子素袍の形にて出で來る。跡より村雨姫袿衣裳にて縛られ、是れを若い衆わり竹にておつたて〳〵出て來る。奥より松風、腰元まがき、同じくいくよ、同じくさえだ、加賀次郎出で來る。あとより齋藤次出て來て、直にあそうの團八、井上次郎、齋藤次、松風、まがき、いくよ、さえだ、加賀次郎ならび、村雨姫を舞臺先へなほす。松風「思ひまうけぬ今日のお敕使、折惡しく兒富樫左衞門事は、白山權現へ參詣いたしまして、御挨拶には此の松風、御敕使の趣おほせ聞けられ下さりませうならば、はいあり難うござりまする。」井上「すりや富樫左衞門には、白山權現へ參詣いたし、折惡う在宿いたさぬとな。」松風「はい。」井上「し

からどうまはつても、聞かにやァならぬお身様の身の上、元來お主や何ものだ。」敷妙「はい、御尤もなる其のお尋ね、假令お尋ねないとても、おはなし申さにやならないもの、直井左衞門秀國樣とお名を唯今承りまして、此方から却つて身の上を、あからさまに申し上げ、其の上にては妾がお願ひ、お聞きなされて下されませい。」直井「直井左衞門秀國と、それがしが名を聞いて身の上をあかし、願ひがあるとか。」敷妙「あい、おなれ〲しい事ながら。」直井「あの秀國に。」敷妙「あい。」直井「めつたにやァ聞かれまい。」敷妙「そりやまたなんで。」直井「女のざいに宜しくない、なんで盗みをひろぐのだ。」敷妙「さあそれは。」直井「いやさ、なんで盗みをひろぐのだ。」敷妙「さあその盗み。」直井「何だ。」敷妙「男をぬすみに來たのぢやわいナァ。」直井「忍び入つたはあの男を。」敷妙「あい、わたしやぬすみに來たわいナァ。」直井「とんだものを盗みに來たな。」敷妙「お聞きなされて下さりませい、はづかしながら戀ゆゑに、かうした形でござりますわいナァ。」直井「して又男は誰だ。」敷妙「北陸道七箇國に隱れなき、加賀國の住人富樫左衞門家直樣に、いつか心をかけ帶の、とけぬ女の心より、おもひあまつて徒らな、あなたをぬすみに來たわいナァ。」直井「とり持つてやらう。」敷妙「えゝ。」直井「じつかちくかは知らねども、女の身にてつきつめた、男を盗みに這入りしとは、あんまり膽が潰れしゆゑ、不便なこつた、取りもつべい。」敷妙「もう有り難うござりまする、あなたを見初め丸三年、便り求めてふみの手傳、

寒さをしのいだ其のせるに、わたしや左へしやくがさし込んだ、どうも痛うてならぬわいナア、お前藥はござんせぬかえ。」敷妙「わたしもつねぐ〵しやく持ちゆゑ藥は持つて居るわいナア、どれ〳〵藥をあげよう。」ト懷よりたゝう紙を出して藥をやり、お市を介抱する。敷妙「女子と云ふものは氣の弱いものぢやによつて、ちつとした事があつても、此のさし込みには困るわいナア。」お市「是れは〳〵あり難うござります。」敷妙「なんのお禮に及ぶ事かいナア。」向うにて、「直井左衞門秀國樣の御入り。」ト呼びお市敷妙びつくりしてさゝやき合ひ、お市はもとの所へ忍び、敷妙はがんだう提燈をさげて花道へ行く。又、「直井左衞門樣お入り。」と呼ぶと、切幕より直井左衞門上下衣裝にて、扇を持ち出て來る。花道の中ほどで敷妙と行き合ふ。互に思入あつて、跡へ敷妙を押しかへす。舞臺にて立ちまはりあつて敷妙花道へ行かうとする。直井「まて。」敷妙「はい。」ト立ち止る。直井「世々顏見世のお定まり、赤い男にくろんばう、さんごじゆとりを見るやうな、取り合つたと思ひの外、ほつとり姿の後かげ、戀のくせものござんなれ、直井左衞門秀國が、目にかゝつちやァむづかしい、きかにやァならぬことがある、身が膝元へずつと來い。」敷妙「それ。」トづか〳〵と立ちかへり詰めよせて、敷妙「參りましたが御用かえ。」直井「したり、としまのきつする見事なもの。時に合點がゆかない、奧を勤めるものならば、座敷の上を頭巾でもあるまいし、よしんば他所のものにもしろ、隱れしのぶやうがない、どち

お市同じく黑仕立にて、がんだうちやうちんを持ち、忍びやかに出で來る。たがひにあたりを窺ひ、敷妙「東南に風起り西北に雲靜かならず、もしやそれぞと知られじと、窺ひ寄りし此の館、富樫左衛門家直樣、お居間はいづくぞ、よき手傳がほしいナア。」お市「思ひ廻せば恐ろしい、女のあられぬ此の姿、夫に逢ひたい意地許りで、來ごとはきても案內は知れず、宜しき手傳がほしいナア。」ト云ひながら兩方互に顏を見合はせて、びつくりしてお市行かうとする。敷妙「まつた。」お市「此方の事かえ。」敷妙「合點のゆかぬ。何ものなれば富樫左衛門家直が館へ、窺ひよりしは何者ぢや。」お市「成程御尤もの御たづね、わたしやいかにもまぎれ者、命をまとに此のおやかたへ、忍び入つたる曲者ぢやわいナア。妾をそれと咎めさんすお前は、さうしてどなたぢやえ。」敷妙「さそれは。」お市「さあおまへのお名を聞きやんしよう。」敷妙「さあ。」お市「がてんのゆかぬ。富樫左衛門家直樣のおやかたへ入り込みし曲もの、ありやうに身の上をあかしや。」敷妙「ほゝゝゝ、ぎやうさんぢやわいナア、今にもそれと顯はれなば、女だてらに大膽な、噂にかゝるは覺悟のまへ、命ひとつを名にくれて、忍び入つたる身の上は、よく〱の事あればこそ。」お市「そんならお前も人しれず。」敷妙「願ひがかなへてほしきゆゑ、此のお屋敷へ。」お市「此のおやかたへ思ひ合うたる。」敷妙「身の上の、女子もあれば。」敷妙、お市「ある者ぢやナア。」お市「よく〱の事なればこそ、こゝまで來たるおそろしさ、こはい〱と思ふ上に、

のびんの毛を後でちよつと結うてもらひたい。」馬士「合點でごんす〱、どれ〱出さつしやい。」ト常陸坊がびんの毛を奴のやうに結うて、すぐに常陸坊羽織衣裳のなりにて、容を造り、常陸坊「どうもゆへぬ〱、是れでは誰が見ても常陸坊海尊とは見えぬ、時に此の笈は此の井戸の内へかうして置いて、是れからちつとしやれかけよう。」ト云ふ。馬士よし松、羽團扇そつと取つて置く。常陸坊「思ひ出せる事こそあれ、某事を知つたるものは馬士許り、下郎は口のさがなきもの、此奴は助けては置かれぬわい、馬士覺悟をしろ。」馬士「そんなら貴様が、あのおれを。」常陸坊「おんでもない事。」馬士「つがもない。」常陸坊「どつこい。」ト是れより相方に成り、立廻りあり、とゞ馬士よし松常陸坊を煽ぎをかしみにてよろ〱奥へ這入る。つゞいて馬士も奥へはひる。ばた〱にて花道より加賀次郎小とみをひつ抱へ出て來る。奥より下河邊行平出て來て互に行き合ふ。下河邊「加賀の次郎殿か。」加賀「下河邊の行平樣か。」下河邊「合點のゆかぬ其の小人は。」加賀「是れこそ日頃お尋ね成さる辨慶のしたち長屋、七道具の長兵衛と申す古鐵買の娘。」下河邊「それこそ備前守源行家、彼が行方をたづぬるには、屈竟の餌、でかしめされた。」加賀「主人富樫左衛門へ。」下河邊「それがしよろしく物語らん。」加賀「行平さま。」下河邊「加賀次郎おきやれ。」ト下河邊小とみ加賀より請取りひつ抱へて兩人奥へ這入る。本かぐらになり、東の垣より敷妙黑仕立のなりにてがんだう提灯を持ち、袖頭巾を著て出ると、西の井筒の内より

でも口をきいて居るを、時助突きたふし、時助「ばか〳〵しい、内でも外でも同じやうに、我が君の仰せ附けられには、常磐御前の御遺物馬郞婦のくわんおんを、此の義盛に奪ひ來れとの仰せ附けられとな。」常陸坊もぢ〳〵して居る。時助「其の事は先きだつてより承知致して居る、斯く云ふ伊勢三郞は、勢州鈴鹿の盜賊なりときこし召されて、此の御用主命にそむかじと入り込みし此の義盛、今日中に貴殿へ渡さう程に、義經公へさし上げておくりやれ。」常陸坊「心得てござる。」時助「まつておいやれ。」ト合方になり、時助奧へはひる。常陸坊跡を見送りて、常陸坊「是れまだ用がある、咄したい事がある、あゝそゝつかしい、おれにまつてゐろと云うても、こんななりで待つてゐては、人目にかゝつて云ひわけがどうもあるものぢやァない、あゝどうぞ常陸坊としれないやうに形をかへて待つて居たいものだが。」ト考への思入ある。「ある〳〵、こんなときの御用意持つて來た此の羽團扇、天狗だうの神通を得たるふしぎの團扇、此の團扇でひと招き招けば何でも人の心をぐにや〳〵とさせて、ほしいものが其の所へ出るといふが一つのかすり、どれ一招きまねいて見よう、どれえゝ。」トそろ〳〵開けて舞臺へふろしき包をおく。常陸坊是れを見て、常陸坊「しめた〳〵、どれ〳〵此の風呂敷包の内をはいけん致さう。」とあけて見て、「いやあ羽團扇の模樣の衣裳羽織、こいつをきれば身體はよいが、頭がつまらぬものだ、幸ひ〳〵是れ馬士。」馬士「なんのようでごんす。」常陸坊「是れ近頃世話ながら、おれが此

常陸坊「今朝からたつた二三町か。」馬士「そのやうにたんとあるくと、此の馬士はくたびれるでごんす。」常陸坊「いかさまたんと歩いたら草臥れさうな大病な馬かた、はてよい馬に乘つたわえ。さりながら、馬士どの、ちつと急いでもらひませう。」馬士「合點でごんす、ほてつぱらめ。」トまた歌になり舞臺へ來る。馬士「さあ／＼旦那きました／＼下りさつしやい。」常陸坊「やれ／＼早く來たなあ、どれ／＼駄賃をやらう、それきはめの六十四文、それ外に酒手の替り、かのこ餅の代が十五文、やれ／＼よく乘せて來た乘せて來た。」馬士「何と早かつたかえ。」常陸坊「花道から爰まで來たものを、早くなくつてどうするものだ。あゝおれも色事師ならば、米やともぐさやと煎餅やに、この出を語つて貰はうに、なにを云ふにもまめだいこを見るやうな品つきで、上るりでもあるまい。ときに伊勢三郎義盛に逢ひたいものだが、案内をしてみよう。たのみませう。」時助「だれだ／＼。」常陸坊「やあ貴樣は伊勢三郎義盛。」時助「是れ其の名を。」ト方々へ心を附け、「常陸坊海尊此所へおきやつた、用事は心許ないなんと／＼。」常陸坊「外の事ではござらぬ、我が君義經公の仰せには、常磐御前の御遺物、あの白銀町の觀音、いやいや馬喰町々の觀音、なんでも其のやうな名のくわんおんを、持參おしやれとの仰せ付け、それゆゑわざ／＼海尊參つた、どうぞ一つ飲ませて下され、馬の上で寒いめをしたれば、水ばな許り、武士の奉公と申すものはさて／＼苦しいものでござる。是れ忠臣藏だと貴樣は勘平、己は彌五郎。」トいつま

引きかへ。」時助「觀音のことは、富樫左衞門樣が御所持と聞いて入り込みし此の義盛、サ其の所持なさるゝ其の觀音、あなたの方にあらうとは、思ひがけなき祐家樣のお咄。」齋藤次「此の觀音引替への身が娘の松風に、とりあつたる行平、此の祐家に云ひぶんあるか。」下河邊「さあそれは。」齋藤次「ゐさいの事は此の家の主富樫左衞門家直に逢つての事、松風奧へ案內しろ。」松風「はい。」齋藤次「行平續いておきやれ。」ト歌になり、齋藤次下河邊行平松風初め、皆々奧へ入る奴時助跡へ殘る。時助「ばらうふの觀音の事は、義經公の御母君常磐御前の守本尊、何とぞ母君の御遺物手に入れ來れとの義經公の仰せ、かしこまり候と御受け申して、入り込みし伊勢三郎義盛、かりに姿をやつしたる中間の時助、をりを窺ひ富樫左衞門が佛間に忍び入りて、奪ひとらんと思ひのほか、齋藤次祐家が所持なしたる體、此處にて拜せしこそ幸ひ、何とて我が手に入れたいなア。」ト云ふ內花道にて、常陸坊「馬士殿や馬を急いでもらひませう。」馬士「合點でごんす。」トすり金の唄、坂はてる〳〵の歌になり、花道より高麗藏脚絆甲掛かけやつし、ひろ袖腹掛馬士の形にてほゝかむりして片はだぬぎ、きせるをもち、馬を引いて出で來る。此の馬に乘り音八笈をしよつて常陸坊の形にて出で來る。花道の中程にて、常陸坊「馬士どのや、もうなん時であらうの。」馬士「いかさまきのふの今時分でもごんしようかいな。」常陸坊「昨日の今時分にしてははやいやうだが、何里ほど來ました。」馬士「されば、もう二三町もきたでごんせう。」

雨姬、そこ元一人を引張り合ひ、見苦しい事がござつたげな。それでも利口さうに鎌倉より御内々の御用があつて參つたとは、ようまあそのやうなしら〴〵しい事が、此方はいはれる事だの。」下河邊「さては先きだつて是明親王の御殿にてのやうすを、貴殿はお聞きなさりしとや。」齋藤次「おんでもないこと。」下河邊「はい。」齋藤次「旨い事をした跡で、やいのすうのとさつとならべた詮索だわえ。」下河邊「何事も是れまでさうぢや。」松風「申し〳〵めつたな事をなされまするな。」下河邊「此の行平が身の上の事、外々へきこえては面目なし、不義いたづらは賴朝公へ申しわけなし、其處放してころして下されい。」奴時助「めつたな事を成されまするな、假令あなたがどのやうな、いたづらがましき御身持にもせよ、松風樣も村雨樣も、いまだ主なき蕾の花、若いお身にはあるならひ、少しも大事にござりませぬぞ。」齋藤次「いゝや大事がある。」奴時助「何がなんと。」齋藤次「松風姬は誰が娘。斯く云ふ齋藤次祐家が娘、安宅の關守富樫左衛門、齋藤次此の兩人仰せ附けられ候てより、大切なる同役故、某事は娘松風を富樫左衛門へ妹に遣はし、まつた富樫左衛門は是れ。」ト懷中よりふくさ包を取り出し、封じ入れの觀音を出し、「是れこそ九條の御ざうし、伊豫守義經公の御母常磐御前の、近江の青墓の宿にて熊坂の爲にさいごを遂げしみぎりまで所持なしたる所の、ばらうふの觀音、家の寶とて、富樫左衛門肌身はなさぬ此のずしを、某へ讓りもの。」時助「すりやそのばらうふの觀音を。」齋藤次「齋藤次祐家が娘松風と

奴紅梅「旦那申しあげまする、今日は此の屋敷へ御大切なる御用にて、お出で成されたではござりませぬか。」奴紅梅「それに左樣のくわんくわつ出たち、憚りながら奴めは、ちつとゝやつとゝ合點が參りませぬで。」兩人「ねいござりまする。」齋藤次「此のひつきりどもはませた事を聞いたりな、今日斯く云ふ齋藤次祐家、富樫左衞門家直にちとたづねべき用事あつて、內々でまゐりたり、祐家聞けば此の頃富樫左衞門には、越前三國の傾城むろ屋の若松と云ふ太夫職、屋敷へ置くと噂とり〴〵、馴染のすゐのいはい心、めだたぬやうに此の出立ち、其の若松にちかづきに成るべいとて、えつちらおつちらまゐつた越前國の住人、齋藤次祐家がまゐつたと、取次いでおくりやれ。」松風「どなたかと存じましたれば、齋藤次祐家樣、ようお出で成されました。」齋藤次「是れは〳〵富樫殿のお妹子松風殿、やれ〳〵久しうて逢ひましたな、それにおゐやるは下河邊行平殿ではござらぬか。」下河邊「左樣でござりまする。祐家どのにはいつも〳〵ごげんきでござりまするな。」齋藤次「是ればつかりが年の一德でござる。ときに承れば、行平殿其元義は、賴朝公より御內々にて、富樫左衞門へ御尋ねなさるゝことあつて、お出でと承つたが、彌左樣でござるかな。」下河邊「さるほどに、左樣でござりまする。」齋藤次「左樣でござりまする是れやい、賴朝公の御用にて此の所へ來りし行平、娘子どもをそゝのかし、此所に長居して御奉公がなり申す。」下河邊「さあそれは。」齋藤次「此の間承つた、是明親王の御殿にて松風姫と村

針の山をたはらころびでもする氣でござりまする。お氣遣ひはなされまするな、さあ下河邊行平樣、是れ程にまでおつしやる事、なんとお返事なさるゝ御心でござりまするか。」下河邊「默らう、某は義經公の御行方を尋ね求めんがため、賴朝公の御內意にて此處に逗留いたすも、富樫左衞門殿若し二心でもあらんかと、未だ疑ひも解けざるに、妹の松風姬假令緣有ればとて、此の行平がさしあたつて心に任せぬ、よつて返事には及ばぬ程に、思ひ切つて下されい。」ト云ひ切つて行かんとする。皆々「まあまあおまち成されませい。」下河邊「いや〳〵放してくだされい。」時助「まづ〳〵お待ちなされませい。」下河邊「いや〳〵放した。」皆々「まづ〳〵、おまち下さりませい。」下河邊「いや〳〵放した。」齋藤次「待つた。」皆々「まてとは。」齋藤次「いろのしよわけも中島の、色ぢゝいがおつ留めた、あねさん達一番まつてくんなさいよややうゥ。」ト切りかけに丹前の出になり、花道より奴紅梅、奴白梅つるの奴の形にて出でて來る。奴の所作少しあつて、納まると、花道より齋藤次ひろ袖羽織衣裳にて紫の頭巾、かさね草履、丹前の形にて、奴を大勢連れて出でて來る。本舞臺にてをさまる。齋藤次「それまかり出でたるやつがれは、親も勘六子も勘六合はせて今年十二箇年、それから後の歸り花、ごさんのゆきにあらねども、いろ樣方の御贔屓を、頂く笠の紋所、お江戸の敵役こんげん根本、なまじりながらみそをあげくにお叱りを、うけめはらひめふたかはめ、のめぢゝいが顏見せの、丹前でたちとつんでるこんた。

がお取持ち申すのぢやわいなう。」いくよ「それを成るの成らぬと行平様が、お心強い事おつしやるわいなう。」さえだ「あなたが成らぬとおつしやれば、松風様の御身の上へのきず、こつちらはじめたたぬわいの。」下河邊「なんぼたたぬと云うても、此の行平は家直殿へたたぬによつて、それで返事せぬのぢやわいなう。」時助「なる程義經公の御行方を糺さんとて、此の程やかたにおいで成さる行平様、返事なさらぬも尤も。」とゆびをる。「又取持ち掛つて返事を聞かねば、松風様へたたぬと云ふも尤も。」トゆび折る。「またなるのならぬのとおつしやるを、お心強いと云ふも尤も。」ト指を折る。「また松風様の事はお主様だによつて、取持つと云ふも尤も。」ト指を折る。「又富樫左衛門様へお隠し成さつて、人しれずほれてゐるとおつしやるも、若い御身の上では是れ尤も。」ト指を折る。「御尤ものいはれはこれで知れた。」松風「なんの事ぢやいなう。」下河邊「どうぞよいやうに云うて、松風殿に思ひ切らるゝやうに云うて下されい。」時助「そりやお前あんまりおどうよくと申すものでござります、鄰町から戀ひにこがれて此の云ひわけ、さう仰しやらずと、此の紋許りひとつ附けておやり成されませ。」下河邊「そなたまでがそのやうな事いやるわいの。」松風「それ〳〵貴方を、ほんまの結ぶの神さんぢやと思うて頼んだ程に、かならず返事を聞かせてたもや。」時助「むすぶの神にしては、がらむきさう應な結ぶの神、どうなりかうなり道行を附けてあげませう。」松風「そんなら頼んだぞや。」時助「人に頼まれた事ならば、

り、思はず知らず奴時助を、五人の中へ挟む。下河邊ひつぱり東の方へつれて行くと、松風引つぱり西の方へつれてくる。又下河邊東の方へつれて行くと松風西の方へつれてくる。時助あきれて兩方ひつぱる。此の時顔を見合はせて皆々びつくりする。　時助「氣が違つたさうだ。」松風「おゝしんき、ひよんな所へ時助がおぢやつたわいなう、こりやまあどうしようぞいなう。」皆々「わるい所へようおぢやつたの。」　時助「はいかやうな所へ歸りましたは、てりふり町下河邊が油見世へ、御上意の御用にて參りましたる此の時助、すいた事のないやうでも、すきあぶらのすきとほし、かういふ所へこまものならば、よかつたに氣を附けたぶのきもつかず、いぢや〳〵をより油、女中方を銀出しのたしにおつかひ成さるゝとは、夢にも我等しら絞り、油づくしをじくねるとは、ちときやらくさうございませう。」皆々「なんのこつちやいの。」時助「若しお前がたは、あんまり眼が見えませぬ、此の時助はよりこたいになりました、お樂しみなされませ。」松風「かんにんしてたも、みんな自らがわるかつたわいの。」時助「お前がさうおつしやつて下されますれば、なんぼ賤しいわたしでも、またどうぞおちからになるまいものでもございませぬ、申し何なりとも仰せ聞けられくださりませ。」松風「そんならそれが正かいな。」時助「ほんの事でござりまする。」松風「そんなら聞いてたも、自らは兄さん左衛門様へお隱し申して、行平様へどうもならぬほど。」時助「ほうれい眞綿とおつしやる事か。」まがき「それぢやによつてこちら

それ白らが是れ程に思ふ事を仇に思うて下さんすと、此の松風は一思ひに死んでしまうて、未來で鬼になるぞえ。」皆々「え丶。」松風「鬼も鬼、こはい鬼になつていとしと思ふ行平樣を。」下河邊「思ひきつて下さるか。」松風「い丶え、鬼になつてもやつぱりほれてゐるわいなァ。」下河邊「それほどに思うて下さる心ざし、幾度もいふ通り御いしたやうには思はぬわいな。さりながらあしわけ船のさはりがち、どうもま丶にならぬ行平が身の上、添はれぬ元緣とあきらめて、思ひきつて下されい。」松風「何のまァ思ひきらる丶位なれば、何しに是れ程に思ひ詰めませうぞいの、なんぼでも白らは思ひきる事はなりませぬ。聞いたわいなう、そのやうにおつしやるは、直井左衞門秀國樣の妹子、あの村雨どのと、女夫におなりなさる丶お心でござりまするかえ。」下河邊「なんの〳〵、そなたにつれなう云ふからは、村雨姬とも行平は添はぬ心ぢやわいなう。」まがき「いえ〳〵さうおつしやつても、村雨樣とお添ひなさる。」下河邊「なんのいなう、さうした事ではないわいなう。」皆々「いえ〳〵さうであろ〳〵。」下河邊「是れはまた迷惑な、まあこ丶は放して下されいなう。」松風「いえ〳〵なんぼでも放す事ぢやござりませぬ。」下河邊「まあ放して下されい。」皆々「ならぬ〳〵。」ト騷ぎの三味線になると、下河邊にやらうとする、松風、まがき、いくよ、さえだ駒取のやうに繩へかける。是れにかまはず花道より、奴時助奴のなりにて革ふみ箱と、水あぶらと、びんつけを入れたる袋を提げていでて來る。うか〳〵と舞臺へ來

うと追ひかけて、度々まがき　いくよ、さえだ、下河邊をつき出し、松風姫にとらまへさせる、下河邊振放さうとする。松風姫抱き附き、皆々「さあ行平様が鬼ぢや〳〵。」松風「そんなら行平様かいな。」下河邊「わしぢやわいの。」松風「おゝ嬉し。」下河邊「さあわしが鬼ぢやほどに、此處を放して下されいなう松風どの、人が見るわいなう。」松風「それでもあなたが目かくしの鬼ならしやんしたぞえ。」下河邊「鬼ぢやわいなう。」松風「鬼も〳〵鬼よりましたお心強さ、云はば語らば玉の緒も、斷える程に思うてゐやんす此の松風。」下河邊「是れ〳〵もうそのやうな事は云うては下さるな、此の下河邊行平は義經公のおゆくへにつき、富樫左衞門家直殿のその心底聞かんがため、賴朝公のおほせにより、此の程から此の館に止る其の内に、そのやうなみだらな事があつては、どうも松風殿の兄、此の館のあるじ左衞門殿へたちませぬわいなう。」松風「またあのやうな固い事許りおしやんすわいの。」まがき「どのやうな固い事云はんしても、ちつともお氣遣ひな事はござりませぬ、申し行平様、其の様なお心強い事仰しやらずと、松風様の御たんのうなさるゝ程に、どうぞいろよい返事して、あげましておくれなされませいなう。」いくよ「それいなう、たいていやおほかたのご執心ではござりませぬ、いかに固いがおん生まれつきぢやと云うて、情と云ふ事をちつとは思召しなされませい。」さえだ「女子といふものはつきつめたものぢやによつて、むごい〳〵とその一心が、大體こはいものぢやござりませぬぞえ。」松風「それ

役人替名

一長兵衞女房實は土佐坊娘敷妙	崎之助
一伊勢の三郎	市松
一女ばうお市	雄次郎
一まつかぜ姫後助高や	門之助
一下河邊莊司行平	高麗藏
一馬士かといてよし松後幸四郎	歌川
一こし元まがき	重八
一同さえだ	谷次
一奴しら梅の八重助後仲藏	龜之助
一こし元いくよ	里好
一三國のけいせい實屋若松實は美濃國けいろう山鷄精君	廣治
一直井左衞門秀國	
一井上次郎重永實は	友右衞門
一備前守行家	又太郎
一奴時助實は伊勢三郎義盛	勘左衞門
一齋藤次祐家	音八
一常陸坊かいそん	半三郎
一やりておたつ	澤藏
一若者喜介	永助
一奴紅梅八重平	染五郎
一かゞの次郎	國四郎
一あそうの團八	七三郎
一行家娘小とみ	
若衆大勢	

本舞臺三間の間、富樫左衞門館(やかた)の體(てい)、上の方へ寄せてきれいなる亭あり、下柱に紅葉の立木、此處に井筒、人の出入なるやうにして、幕の内より松風姫打掛衣裳にて、手拭にてめんないちどりをかけ、其の先へ下河邊行平上下衣裳にて、腰元まがき、腰元いくよ、さえだいづれも打掛衣裳にて目隱しをしてゐる見え、騷ぎにて幕明く、といづれも逃げ返り、下河邊を度々つきやる、下河邊つきやられてにげようとする。

下河邊「手のなるはうへ〳〵。」皆々「おひめ様またい〳〵てのなるはうへ〳〵。」下河邊「さあとつて見やしれ。」皆々「おひめ様またい〳〵。」トはうぐ〳〵逝げ歩く。下河邊も同じやうににげあるく。松風はうは

て。」ひづめ「手が早し、そして女房は子がはやし、そして口が早し、耳が早し。」武藏坊「もういくら程今の山伏はいつたらうな。」出羽「大方三里もいつたであらう。」武藏坊「そんならもうよい加減だわい。」出羽「よいかげんとは、何の事だ。」武藏坊「よいかげんとは跡から行く事だ。」ひづめ「そんならわれやァ。」武藏坊「武藏坊辨慶だわ。」トしばり繩をきる。皆々「いやァ。」武藏坊「我が君を落し參らせ、跡からおつかくる忠義のひとつ、そこおつぴらいて通すまいか。」出羽「辨慶と聞いちやァ通されぬ、夫れやるな。」皆々「やらぬわ。」武藏坊「いで物見せん。」皆々「どつこい。」ト是れより大だいこ太鼓の合方になり、武藏坊きびのよきたてあつて、とゞ殘らず首を拔き、天水桶の中へうち込む。是れを出羽震ひながら手傳うて運ぶ。夫れより出羽が首も引きぬき、急度思入する所へ、以前の山伏殘らず出で來る。此の內義經許り出でず。皆々とつて歸し武藏坊を見て、山伏皆々「できた〳〵。」武藏「やかましい。」ト武藏坊金剛杖を二本とつて首をいものやうに、天水桶にたてて洗ふと片しやぎりにて、幕引。

第一番目　六建目　富樫館の段上の巻

一むらさめ姬　吉次

一富樫左衞門家直　團十郎

りして、いろ〳〵と嬲る。武藏坊めそ〳〵泣く。出羽「是れ見やれこいつは辨慶ではないさうで、大きなざまをしてめそ〳〵ほえるさうだ、これほんよ、我やァ泣くか、やれ可愛や〳〵、こん時だ一年中投げられたり踏まれたりする替りに、かうしてやるべい。」トたゝく。ひづめ「是れやい、夫れ程に縛られたのがせつなきァ、辨慶と名乘れ。」皆々「名のりやァがれ〳〵。」武藏坊「おれも有りやうは辨慶と名乘りたいが、辨慶でもないもせぬものを。」出羽「そんなら辨慶ではないか。」武藏坊「なにさ。」皆々「はてなァ。」武藏坊「はらからの山伏でごんす、今度出羽國羽黒山へとぢこもりに、ゆくに違ひはござりませぬ。」出羽「そんならそれに違ひはないか。」武藏坊「なにさ。」出羽「そんなら此の道筋を知つて居るか。」武藏坊「いゝえ。」出羽「そんなら此の道筋を知らないか。」武藏坊「どうぞ敎へて下さりまし。」ひづめ「此の安宅の關から野の市へ一里、野の市から加賀の金澤へ又一里。」出羽「加賀の金澤から高松よねへいで今濱いくの山此の間が山越しに十八里。」武藏坊「そんなら今の山伏も、よつ程いつたでござりませうな。」出羽「たしかにもう一二里いつたで有らう。」武藏坊「そんならまだ早いわえ。」出羽「早いとは。」武藏坊「おまへのことさ。」出羽「おれがこととは。」武藏坊「お前の手の內、わしに繩を懸けさしやつた、其の手のうちの早さといふもの、夫れが早かつたといふ事さ。」出羽「さう云はれてのり地をかたるではないが、まだ〳〵あんなこつちやァない。」武藏坊「はてな。」出羽「はやいといつちやァまづ第一足が早い、そし

く武藏坊一人殘る。ひづめ出羽侍のこらず舞臺さきへ出て、出羽「やれ〳〵むづかしい詮議であつた。成程今のを通してやるにやァ、ちつとぶきびであつた。」皆々「夫れ〳〵。」ひづめ「時に此の坊主めだ、辨慶ならばよもやお主が手で、縛られさうもないものだ。」出羽「是れ〳〵餘り人を安くするな、辨慶だと云つておれだといつて、あんまり力負けはせぬ、日頃からなんぞで力量が見せたかつた、今日と云ふ今日音に聞えし三塔一のつはもの、武藏坊辨慶をからめ取つたは、なんと強い手柄ぢやァあるまいか。」ひづめ「成程あれが辨慶ならば、お主やァ大きな手柄者、何しろあの親玉を縛るとは、途方もない役があたつたぞや。」出羽「又煩はねばよいが、扨是れからみんナ寄つて、あの坊主を嬲るべいぢやねえか。」ひづめ「そりやよからう〳〵。」出羽「是れやいさう縛られては動きはとれぬ、さあ有りやうに名を名乘れ。」武藏坊「無理な事ばつかり云はつしやる、辨慶ではないもせぬものを。」出羽「何だ辨慶でない、辨慶でないとぬかせば、是れ此の金剛杖でほゝつぺたをつゝき破るぞ。」トひづめの太郎武藏坊が前へ金剛杖を突き出す。武藏坊きもをつぶす、出羽軍藤太直に。出羽「やい先達々々て承知いたした、我は大方辨慶であらう、おいらにしばられてくやしいか、悔しかァ名を名乘れ。」武藏坊「お前むりな事を云はしやる。辨慶ではないものを。」出羽「辨慶でないとぬかせば、あま酒を振舞ひませう。」ひづめ「おいらも振舞ひませう。」若衆大勢「おいらも振舞ひませう。」ト思ひ〳〵に武藏坊を蹴たり蹈んだ

鎌倉殿より巌命によつて山伏を留めよとある、安宅の關をやみ〳〵通してはお手前は格別、かく申す齋藤次祐家が立ち申さぬ、どこがどこまでもまかり成らぬ。」富樫「さやうござらばようござる、富樫左衞門家直を差しおき、そこ許一人のはからひにおしやれ。」齋藤次「言ふにや及ぶ、此の由鎌倉殿へ上聞に達して。」富樫「仰せ付けられたる役目がたつか。」齋藤次「さあそれは。」富樫「鎌倉の詮議を頼まば、我々が此處に於て詮議致すは詮なき事、夫れでも役目が勤まりますか。」齋藤次「さあ夫れは。」富樫「お年が寄つたか祐家殿、刃金がうちへ廻り申す。」齋藤次「夫れなら貴樣の御勝手次第、去りながらその先達こそ辨慶に違ひはない、有りやうに名乘れ〳〵。」武藏坊「さあそれは。」齋藤次「齋藤次祐家も相役の目がねを以て繩かける。夫れあの先達に繩を懸けろ。」出羽「心得てござる。」齋藤次「はやく〳〵。」出羽「さあ先達の大入道のがれぬ所、辨慶と名乘らぬか、さあ〳〵なんと。」武藏坊「はい。」出羽「とつた。」ト出羽武藏坊を縛る。みな〳〵ようとする。出羽「とはうもないやつだ。」齋藤次「でかした〳〵その松の木へくゝし附けい。」ひづめ「立たう。」ト武藏坊を松の木へくゝしつける。富樫「行く先とても關所あり、此處の切手なうては叶はぬ〳〵、富樫左衞門家直が相違なきとの往來切手。」皆々「これは。」富樫「越えぬより思ひこそすれ陸奥の名に流れたる白川の關、きり〳〵爰を通り召されい。」皆々「かたじけない。」富坊「祐家どのござりませう。」ト歌になり、富樫齋藤次奥へ這入る。時の太鼓に成る。義經皆々奥へ行

御無念でござらうぞや。」富樫「さあそれは。」齋藤次「さいぜんから目を附けてまかりあつた中に、ひとりの山伏こそ伊豫守義經に違ひない、繩ぶつて詮議する、者共戸をさし固めて一人も動かぬやうに油斷をするな。」武藏坊「すりや一人義經に似たる者ありとのお咎めとや。」齋藤次「くどい〳〵、夫れ笠かたむけて顏をかくし跡に下りし山伏こそ、伊豫守義經それやるな。」皆々「やらぬわ。」ト大勢義經を取卷き、武藏坊大勢を突きのけ、義經を引寄せて、金剛杖にてめつた打ちに打ちすゑる。皆々おどろき、皆々「これは。」武藏坊「言語道斷強力やある、汝跡におくれずば義經と咎むる者もあるまじきに、又候道におくるゝ故、人も怪しむ間かくあらずんば、能登國まで行くべきに、につくき強力の振舞、思ひ知れ思ひ知れ。」ト義經をうちすゑる。皆々武藏坊が側へよらうとする。義經「いかなる打擲に逢ふとても、申譯なき此の強力、足に痛みの候へば、宥して給はれ先達殿。我があやまりと存ずる故、返す言葉もござりませぬ。」武藏坊「きやつこそ我々がつれたる所の強力、此の上にも疑はるゝものならば、金剛杖の相伴に、力の程をお目にかけうか、さあ〳〵何と。」齋藤次「そんならえゝわさ。」武藏坊「あゝつがもない。」富樫「はて逞しき先達のあり樣、言葉に誠をあらはして、けうはうたる今の有樣、強力に相違もござるまい、安宅の關守富樫左衛門家直詮議の上、相違もなき往來の山伏、きり〳〵此を通り召され。」武藏坊「すりや此所を。」富樫「早う〳〵。」武藏坊「えゝかたじけない。」齋藤次「そりやァならない、

ならば早う。」武蔵坊「心得申して候。」ト是れより又つゞみの相方になり、武蔵坊心づいて、上るりの幕の巻物を出して讀みかゝる。兩方より取つたとかゝるを投げちらす、どつこいとまる。武蔵坊「それつらつらおもんみれば、大おんけうしゆの秋の月は、ねはんの雲にかくれ、生死長夜のながきゆめ、おどろかすべき人のうへ。」ト兩方より勸進帳を取りにかゝる。是れを左右へ投げて、どつこいとゞまる。

主膳太夫上るり「爰に中頃帝おはします、御名をば聖武皇帝と名づけ奉り、最愛の夫人に別れれんぼやみ難く、涕泣まなこにあつてなんだ玉を貫く思ひ。

武蔵坊「せんろに飜して盧舎那佛を建立す。かほどの靈場の絶えなん事をかなしみて。」出羽ひづめ「それを。」トまたかゝる。武蔵坊「なにひろぐ。」ト兩人の腕をねぢ上げる。

上るり「しゆせん蓮華の上に坐せん奇妙敬首、うやまつて申すと天もひゞけと讀み上げたり。

ト上るりの内武蔵坊、下に置きし勸進帳をとつて頂く。上るりきれる。富樫「其の一巻の勸進帳を聞く上は、詮議には及ばぬ、爰を通り召されい。」武蔵坊「すりや此所を。」富樫「通りめされい。」齋藤次「まつた、先だつて噂には、武蔵坊辨慶こそ三塔一の博識にて、辯舌富留那をあざむくとや、勸進帳の出放題やらかすまいものではない、夫れを證據にとほすとは、年のゆかぬ富樫左衛門、ちつとどやつとゝ

隨分不調法のないやうに詮議をしやれ。」　富樫「およそ孝德天皇の御宇に、はじめて諸國に關所をすうる、夫れより伊勢國に鈴鹿の關、美濃國に不破の關、近江國に逢坂の關、越中に砥竝の關、越後には直江の關、加賀國には安宅の關、風も洩らさぬ天下の上意、富樫左衛門家直、若輩ではござれども率爾なことは仕らぬ、御年寄のお心遣ひ、御無用にして差しおかれい。」齊藤次「萬事よろしく賴み申す。」富樫「ちつとも御氣遣ひなさるゝな、さあ往來の山伏達、何とも合點が行かぬ、義經主從も十二人、おことらも同行十二人、伊豫守義經殿主從と見た目はひが目か、ありやうに身の上をあかし召されい。」武藏坊「こは思ひも寄らぬ關守の御尋ね、我々事は紀州熊野より出羽の羽黑山へ罷り通る山伏に相違ござらぬ、深く御詮議おしやつても、山伏は山伏きつするの山伏、きり〳〵ひらいてお通し召されい。」山伏皆々「通し召されい。」　富樫「よういには通さぬ〳〵、さあ山伏と有る慥かな證據が出でざれば、富樫左衛門が罷りならぬ。」　山伏皆々「さあそれは。」富樫「まこと南都の建立とあれば、俊乘坊長源より添狀の有るべき筈、大佛殿の建立とある添狀なければ、叶はぬ〳〵。」武藏坊「さあそれは。」富樫「添狀が有るか。」武藏坊「さん候、新關のすわりし事、南都にてはいまだ知らず、去るによつて添狀は持ち申さぬ。」　富樫「添狀がなくて證據があるか。」武藏坊「慥かな證據はこの勸進帳、人をすゝむる此の一卷、身の上の證據に聞召されい。」富樫「十二人をすゝむる勸進帳とや。」武藏坊「いかにも。」富樫「證據と

ら貝で、一張はつて春の峯、落花狼藉千萬な、命の手のうち請はんため、是れまで出たるやさ法師、お見知り成されてくんさりませう。」皆々「どつこい。」出羽「こいつは〱、どうやら氣味のわるいやつだが、うぬはまァなんと云ふ山伏だ。」辨慶「なにわしかえ、わたしやァ名はさぬき坊。」出羽「なんだ、齒拔坊だ、そんなら龜の甲の笠をかぶればいゝわ。」ひづめ「おきやァがれ。」齋藤次「合點の行かぬ山伏十二人、義經主從にちがひはない、夫れやるな。」皆々「やらぬぞ。」山伏皆々「なんと。」皆々「うごくな。」武藏坊「まつた。」皆々「待てとは。」富樫「加賀國の住人富樫左衛門がとめた、かた〲おひかへなされ。」皆々「やあ。」トつゞみ相方に成り、正面上げ障子、此の内に富樫素袍の形にて、きつと思入してゐる。

齋藤次「誰だと思つたら富樫左衛門、うろんなる山伏十二人引ッくゝらんと存じたところを、貴殿はなんでとゞめ召さるナ。」富樫「頼朝公義經公御中不和とならせ給ひ、先年奥州へ立ちのがれ給ふ例ありとて、此の所に關を据ゑ、往來を留めよとの鎌倉殿よりの嚴命、某とても義經を詮議なす役人、怪しき者と存じたればこそ貴殿をお止め申した、相役の富樫左衛門卒爾なことはいたさぬ、まづ〱お居やれ。」齋藤次「こりや面白い、義經を見遁せば、謀反のかたうど詮議の仕樣が手ぬるいと、此の齋藤次祐家が、鎌倉殿へ言上するぞ。」出羽「年寄を差置きてさし出たことをおいやつて、必ず後悔おしやるな。」ひづめ「ひよつと不念ナ事があつて、よしない事をした抔と口の内で云ふものさ。」齋藤次「そんなら

よ虚にもせよ、問答はむづかしい、獨りも通す事はならぬ。」源八「然らば彌通さるゝ事はなりませぬか。」齋藤次「諄い〳〵、某此の所に在りながら、やみ〳〵通しては鎌倉殿へ申譯がない、どこがどこまでも通す事はならぬぞ。」皆々「はい。」齋藤次「一々どいつらにも繩をぶて。」出羽「心得てござる。さあ山伏達のがれぬ處、尋常に腕を廻して繩に懸れ。」ひづめ「また此の上にいぢむぢぬかさば、どんな浮目を見ようも知れぬ、きり〳〵腕をまはせえゝ。」皆々「どうぞ。」源八「えゝ情ない此の場のしぎ、打破らんは安けれど、手をこまぬいて控へるか、えゝ殘念な。」山伏皆々「えゝ口惜しいナア。」ひづめ「繩かかれ。」皆々「どうだえゝ。」武藏坊「まつた。」皆々「どつこい。」トのつとになる海老藏の辨慶、花道より緋の衣の露を取つたる形にて、いがぐりかづら、檜笠にていらたか珠數金剛杖を持ち、重ね草鞋にて出で來つて、直に本舞臺へ來て侍をつきのけ、十人をうしろにかこひ、急度思入ある。皆々「どつこい。」源八「待て〳〵大きな坊主がつん出たが、さちやァ和僧は親玉だな。」出羽「合點の行かぬ山伏共、通す事はならないぞ。」齋藤次「きり〳〵こゝをさがれえゝ。」皆々「どうだ。」齋藤次「いやさ。」皆々「どうだええ。」武藏坊「夫れ山伏といつぱ、ふしぎな役のうばそくで、勘三が芝居を動かすさらず、不動と成田や十兵衛三代四代とち萬歲、かうべに頂く御ひいきは、こちの判官をかた取りたり。十二いんねん霜月朔日、柹の素袍は子に讓り、柹の鈴かけ染めかへた、かくてさまたげなすならば、にぎるこぶしのほ

我々よりも引下りて御通り遊ばされ、然るべう存じ奉りまする。」義經「いか樣是れは尤もなる廣綱が計らひ、しかしながら、此の所を立越えんには、武藏坊辨慶道に後れし故、此の所にて待ち合はせ、我々諸共通らいでは。」駿河「武藏坊辨慶我が君におくれましたるこそ幸ひ、まだ明けやらぬしのゝめに、目立たぬ樣にいざ〳〵お越しあられませう。」義經「何樣其の儀然るべし、どれ〳〵。」源八「いざ鈴かけを取らせられ、此の笈をいざ。」ト花道にて源八義經に笈を負はせ、鈴かけを取つて跡へ殘し源八上の方へ直り、源八「隨分と草臥れたる體を必ず御忘れなされまするな。」義經「合點ぢや。」源八「いざ。」トのつとになり、源八はじめ何れも舞臺へ來る。義經跡より足を引きずりながら來る。齋藤次見て、齋藤次「そりや。」ト云ふ内大勢立ちかゝつて、皆々「まてえゝ。」源八「合點の參らぬ各方、我々を何故留め給ふ、南都東大寺建立の爲に、國々へ役僧を遣はし報謝に預らんが爲に、只今北陸道へ罷り通る我々、支へ給ふは何故でござる。」齋藤次「やあ何故とはおろか〳〵、賴朝義經御中不和にならせ給ふより、判官殿は奥州秀衡を賴まんがため、十二人の山伏となつて此の關へ通らんは必定、よつて國國に新關を建てて、往來を留むる我々が役目、齋藤次祐家此の所に控へる上からは、どつこいそつこい一人も通す事はならないぞ。」源八「こは情なき關守の仰せ、假令鎌倉殿の仰せなりとも、よもや誠の山伏をとゞめよとの仰せには候まじ、さあ恙なう此の關を通し召されて下されい。」齋藤次「誠にもせ

だあきらめて道すがら、供奉するが忠臣ならずや、行く先とてもかたきの中、油斷のならざる今の身の上。」江田「八方へ目を配り互に心附け合つて、すは御大事と見るならば、今の命はうき世のちり。」常陸坊「さもさうず〳〵、命の直段は三分五厘、極まる相場は皆相伴、後れはとらじ働きて。」源八「君に惻隱の仁あれば、臣に羞惡の義を頂き、憐愍深き主君を持ち、なにか落命苦しかるまじ、さりながらいまの旅行は、安からぬ御身のうへ。」駿河「駿河次郎淸重。」大津「大津次郎民利。」鷲尾「鷲尾三郎義久。」備前「備前盛景。」增尾「增尾十郎兼房。」赤井「赤井次郎景次。」江田「江田源三廣基。」常陸「常陸坊海存。」源八「源八兵衛廣綱、各心を。」皆々「一致にして。」義經「音高し〳〵、是れより先は安宅の湊、富樫左衛門家直齋藤次祐家此の所に新關を据ゑ、山伏を堅く忌むとの事、我々が身の上に差當りたる難儀の一つ。」常陸「こは御諚とも覺えぬものかな、此の關一つは苦にならぬ、たゞ打破つて。」義經「こりや此の關一つ打破り通らんことは安けれど、秀衡が館へ某落ちつくまで、路次の狼藉覺束なし、ただ何事も事故なく、源八兵衛廣綱、其方よきに計らうてよからう。」源八「畏まつてござります、某急度心をめぐらし見ますするに、我々を初め何れと申しても、相違ござらぬ山伏姿、我が君を見まするに、陳じてもちんじられぬ伊豫守義經公、恐れ多くは候へども、某が此の笈を君の御脊に負はすれば、御鈴かけをものけられて、只剛力の姿にて、笠深々と召し給ひ、隨分とつかれ給ひし御姿にて、

末は遥かに湊なる、あしの篠原波寄せて、なびく嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。
ト此の淨瑠璃よい程の中より、幸四郎義經、門之助駿河次郎、新四郎大津次郎、雷藏赤井次郎、國太郎江田源三、音八常陸坊、又太郎源八兵衛、いづれも廣袖きながし、水衣ときん鈴かけ、半大口にてすねあてかさね、草鞋金剛杖じゆず、各綺麗に取り揃へ花道へ出て居並ぶ。義經「義經いやしくも清和のうてなを出で、多田滿中の正統、今天下に威をふるひ、六十餘州が其の間を納め給ふ、右大將正二位源頼朝、我が兄ながら梶原父子が奸佞の舌先にかゝり、空しく兄弟の親しみを斷ちしが、思へば思へば淺ましいなア。」駿河「其の御憤りこそ御尤もにこそ存じまする、我が君親兄の禮を重んじ給ひ、鎌倉殿へ對し野心なきとの義經公の御胸中は、源家の氏神正八幡も照覽あれ。」大津「世に讒言程情なきものはなし、故に菅原道眞卿道を尊び給へども、讒者時平がわざに依つて、終に筑紫の波まくら。」鷲尾「誠に叢蘭茂らんとすれば秋風是れを破るとかや、平家や木曾の大敵を打亡ぼし國家を治め給ひしも、皆我が君の鋒先ならずや、いひ甲斐なき頼朝公の御計らひ、是れ大將の器にあらず、憤りを以て憤りに向はば、忽ち御連枝呉越となり。」備前「むじゆんとなつてしのぎをけづらば、我我とても必死の一戰、おのれやれ鎌倉勢敗北させてくれんずものと。」増尾「はやる心も君の爲、ひとまづ都を開かせられ、二度奥へ忍ばるゝ、義經公の御身の上、御いたはしくも時節をまち。」赤井「た

水かけ論、却つて人の嘲りを受くる、夫れとも慥かな證據があるか。」ひづめ「さあそれは。」齋藤次「なんと。」出羽「まだ其所へは參りませぬ。」齋藤次「ばか／＼しい、其のやうな事で富樫左衞門に腹が切らせられるものか、控へてお居やれ。」出羽「心得てござる。」齋藤次「何に方々、いよ／＼曲者忍びこえしとの儀に相違なくば、今一度はう／＼詮議おしやれ。」皆々「はあ。」ト所々へ氣をつける。齋藤次「まてまて、見れば合點のゆかぬ。あの松が枝に懸りあるは何やらいなものの體に見ゆる、早くおろして持つてまゐれ。」皆々「畏まりました。」ト手ばしかく、松の枝にかゝりたる片袖をとつて齋藤次に渡す。齋藤次合點の行かぬ思入して、齋藤次「さてこそ片袖、縫ひたる紋はだき若松、ことに女の片袖、あの松が枝にかゝりしは、關を越したる曲者の證據、是れさへあれば富樫左衞門家直が不調法に相違はない。然らば鎌倉殿へ右の樣子を言上して。」出羽「左衞門が身の上は。」ひづめ「いよ／＼切腹。」齋藤次「やかましい、此の上は義經に氣を附けい。」皆々「畏まりました。」ト私語き皆々思入して、齋藤次片袖を隱して見事に居並ぶ。ト主膳太夫、上るり、大ざつま。

「旅の衣はすゞかけの、露けき袖や絞るらん。鴻門楯やぶれ、都の外の旅衣、日もはる／＼と越路のすゑ、義經公の御有樣、木にもかやにもゆききにも、心をおくの高殿へ、主從以上十二人、未だならはぬ旅姿、袖のすゞ懸け露霜を、けふあけ初めていつまでの、限りといさやしら波の、

左衛門が不調法、申譯はござるまい、侍中關所の廻りを詮議をしやれ。」ト云ふ内、花道にて、「齋藤次祐家の御入り。」と呼ぶ。時の太鼓にて勘右衛門白髪おやぢにて、股立烏帽子大紋りうじん卷にて中啓を持ち、先へくわの紋の付きし高提灯を二張立て、侍大勢附添ひ、直に本舞臺へ來て方々詮議、出羽ひづめ下へ下つて、出羽「齋藤次祐家樣、關所を越せし曲者の樣子。」ひづめ「委しく御聞きなされましたか。」齋藤次「いかにも、此度賴朝公の嚴命にて、新たに据ゑられし加賀國安宅の關所、なに者にか越えられしとの風聞あつては、富樫左衛門は格別、かく申す越前國の住人齋藤次祐家、年こそ寄れ、鎌倉殿へ對し、一言半句の申譯がござらぬ、よつて取るものも取り敢へず此の所へ罷り越してござる。定めてこゝの角、かしこの隅々、怪しい所を各は詮議しやつたか。」出羽「左樣でござる、隨分と殘りなく詮議致してござれども、是れぞと申すあやしい事も見えませぬ。夜の明けぬ内、詰所の關所を破られし富樫左衛門は論なしの不調法、差當つていたい腹をやらかさざあなりますまい。なんと齋藤次殿、にが〳〵しい事ぢやァござらぬか。」ひづめ「越度がござれば我々とても武士の役目、切腹仕るは兼ての心得。大切なる此の關所を越したる曲者こそ義經の身寄かも知れませぬ、左樣でござれば富樫左衛門は切腹では濟みますまい、殊によつたら縛り首。」齋藤次「是れ〳〵いかに若いとてめつたな事を申すな、大切なる安宅の關所、富樫左衛門家直何者に越えられしと此方から訴へても、證據なければ

替名

一鷲尾三郎義久　雷藏
一常陸坊海存　音八
一ひづめの太郎　仲五郎
一備前の平四郎成景　綱藏
一赤井八郎景次　瀧藏
一駿河次郎淸重　門之助
一武藏坊辨慶　海老藏
若衆大勢

○

本舞臺三開の開、加賀國安宅の關所にて、西東に見えよき木戸を出來、正面に幕を張り、突棒さすまたの飾りつけ、番手桶、是れに好みある東の柱に松の上枝をとぢ附け、思ひの儘に枝葉しげり、高塀一ぱいにはひかゝり、其の枝南の柱まで屆き、此の枝に里好が紋の付きたる衣裳の片袖を懸けある。幕の内より大す流しの紋の附きたる高提灯五張、侍の形にて若衆大勢持つてゐる。出羽軍藤太、ひづめの太郎、對のぶつさき羽織袴股立の形にて弓張提灯を持つて居る。物音して人聲にて幕明く。

ト出羽、ひづめ方々へ氣を附ける。

出羽「方々ぬかるな、此の關所こそ此度源二位頼朝公伊豫守義經公御連枝の御中不和となり給ひ、都堀川の館を逐電あつて、行方知れずとの義經の風聞によつて、新關を据ゑ置く。もしや奥州へ二度下らんとの心もやと往來を改める其の爲、正しく最前忍び越せしは怪しき曲者、何と左樣ではござらぬか。」

ひづめ「いかにも出羽軍藤太とし高殿のおほせの通り、夜の明けぬに忍び越せしは曲者に相違ござらぬ。晝の内は齋藤次祐家が役目、曲者に關を越えられしは、富樫

物ならじ、色と情のないまでも、手綱を腰に馬びしやく、手には又轡、難波入江のあし分けの駒や、つき毛ひばり毛甲斐の黒ひたひ、白三つ白四つ白つき額、扠も見事な乗掛け馬や、手綱早めて行く時は、何時もさくらの花心。

皆々「どつこい。」

「隙を伺ひ左右より、取つたと懸るを無二無三、擲り情もあら馬に、ひらりとのりの玉ぼこや、西天竺まで翔りたる、彼の周の代の駿馬にも、劣らじものと勇み足、駒も雙葉の山嵐、颯々とこき落す、風か木の葉かさら／＼／＼、流石源氏の御大將、越路をさして一鞭に、打ち立て／＼。

トひとり三重の切に一聲になり、向うへ義經馬に乗つて、紅葉の枝を鞭にしていさぎよくはひる。

第一番目　五建目　安宅の關の場

役人

一九郎判官義經	幸四郎	一出羽軍藤太とし高	八藏
一富樫左衛門家直	團十郎	一江田源三廣基	國太郎
一源八兵衛廣綱	又太郎	一大津次郎民利	新四郎
一齋藤次祐家	勘左衛門	一増尾十郎兼房	染藏

と振り拂ひ、立ちのき給ふを慕ひよる、中を隔つる雨やさめ、諫めく\〵て仕方も、涙に道も白河をさして。

義經「忍の前の心ざし、不便には思へども、此の身にせまる今の難儀、堪忍してくれいやい。」ト思入して、義經「いや\〵かう云ふうちも安からぬ某の身の上、人目にそれかゝらぬやうに。」トおしよぼからげをして、ほゝかぶりを被り、馬士のなりにこしらへ、馬を引いて花道へかゝる。金澤太郎始め皆々義經をおし返す。皆々「動くな。」義經「是れは旦那衆どうでござりまする、此の馬士に動くなとはえ。」金澤「成程こりや馬士だ、隱れまがひもない馬士だと、よつく見ぬいて取りまいた、馬士ならば用がある。」義經「はてこはい、馬士ならして馬かたに御用とはえ。」若衆「外のことでもない、此度鎌倉表より御尋ね成さる馬がある、夫れゆゑ我に其の馬の在所を一寸聞かうとおもつて。」ト立廻り有つて若衆を投げて、義經「成程わしやア馬の事なら何なりとも御尋ねなさい、お咄し申しませう。」金澤「そんなら我があの馬のいはれ、古事來歴、尋ぬることをぬかすたまて。」ト寄る。立廻り有つて金澤を投げて、義經「そりやなんなりとも申しませう。」金澤「それ。」皆々「やらぬわ。」義經「やらぬもやるも馬士次第、はいしいどうでも相手になるか。」

上るり「傳へ聞く、しやのく童子も御佛の誓ひの駒は法の道、あらのの道の駒だにも、繋げば繋ぐ

どうしてお先へ參られませう、どうぞあなたと御一所に、お供致して參りませう。」義經「さあ其の心ざしは厚けれども、そなたと一つに行く事は。」忍「そりやお情なうござりまする、折角是れまでやうやうと、思ひ思うて參りました。」直井「はて〱お別れ申して此の後に、二度逢はぬといふではなしひらにお供は御無用々々々。」忍「さあ左うおつしやるなれど、是ればつかりは。」義經「聞きわけのない忍の前、唐李將軍が陣中にて女を戒め、氣を計りたるためしもある、靜御前も津の國大物の浦にて別れしぞや、おしつけ堅固で奥州の、父の屋形で對面せん、さあ〱早うさきへゆきや。」忍「お言葉返すは恐れあれど、五つや六つのその時より思ひ初めたる義經公。」直井「はてさて夫れもおし付け何やかや、かてて加へてお咄し申すぢや。」ト云ふ内人音する。直井「あれ〱又も追手の人音、目に懸つては爲にならぬ、さあ〱早う立ちのき召され。」義經「それ〱直井左衞門、忍の前を四五里が内、切めて送つてやつてたも。」直井「畏まりました、いざ〱。」ト忍の前を引きたつる。忍「これ申し、我が君樣。」直井「こりや。」

上るり「忍は餘りに堪へ兼ねて、逢ふ事しげき戀路さへ、別れて辛いものなるに、まして我が身の上はお傍離れて何時か又、お言葉交す事もなく、戀し〱と思ひ寢の、夢にお顏を見るよりは、外に涙のうき別れ、せめてかた身と縋り寄る、君も便なく思せども、今更の物思ひ、未練見せじ

最前からの立振舞、合點の行かぬと思ひしに、今また君の御供して、いづくへか立退かんと頼もしき詞のはし、そもまあそちは何ものぢや。」忍「かうなりまする上からは、何をかお隠し申しませう、私事は陸奥の一城主、藤原秀衡が娘、忍と申しまする者でござりますわいなア。」直井「やあ何そのはうが奥州秀衡の娘忍の前とや。」忍「あい〳〵さやうでござりまする。」直井「誠に思ひ出せば、秀衡が五人の兄弟、その末子に忍の前、それがし下りし折からは、まだつの髮のいたいけ盛り、父秀衡の祕藏ふかく。」忍「義經公、此の忍が夫よ妻よとおつしやつた、そのお詞を忘れかね、十三年の年月を、こがれこがれし此の身の上、都の事を承り、若しやあなたも今一度、お下りなさるゝ事もやと、お迎への爲あられもない、女子の業に馬追うて、ふしぎにお目に懸りしも、盡きせぬ縁でござります。憚りながら我が君にも、忍が心を御くみ分け遊ばし、是れより直に奥州へ、お下り成されて下さりませうならば、有り難う存じまする。」義經「聞けばきく程深切なる忍の前が心ざし、忘れは置かぬ嬉しいぞや。」直井「さやうでござりまする、十三年以前からあなたの事を大切に、心にかけてをられしとは、日本一の情ある娘、御目かけられて遣はされませう。」義經「成程々々、某とても豫てより、奥州へ下らんと思ひ設けし事なれば、是れより行くは安けれど、女子をつれて路しもいかゞ、人の目つまにかからぬ内、そなたは早う先へ行きや。」忍「いえ〳〵、折角是れまで參りまして、お目にかゝりし忍、

で隠すに隠されぬ、有りやうに名乗つて聞かせう、よつく聞け。事も愚かややつがれは、義經公の身内において、五天王の隨一と呼ばれたる、法性寺入道前關白太政大臣お馬やの喜三太とはおれがことだ。」皆々「やあ。」喜三太「さあどいつなりとも相手になれ、こちらの腕にぱつぱく人力、こちらの腕にぱつぱく人力、都合あはせて千六百人力、一度に出して寄手の面々、一々並べて其の首を、胴の中へたゝき込むぞ、それぢやァ飯が喰はれまいぞ。」金澤「おきやァがれ爭ひ面倒な、夫れ喜三太に繩をかけろ。」皆々「やらぬわ。」喜三太「どつこい。」ト是れより笛三味線入り合方にてをかしみのたて有つて、大勢を相手に色々あつて、とゞ若い衆を花道へ追ひ込む。喜三太花道へはひる、金澤太郎こがくれする所へ、奥より義經忍の前直井左衞門出て、あたりを窺ひ、直井「いまこそ君の御大事、一まづ此所を御立除きあつて然るべく存じ奉りまする。」義經「とても斯くなる義經が絶運、寄手を引受けいさぎよく、腹かき切つて最期を遂げん、直井左衞門用意々々。」直井「御切腹とは云ひがひなし、しばしのうちの御艱難御凌ぎあるものならば、賴朝公にも御連枝の御間つひに目出度く御和睦、只今となり御短慮はいよ／＼野心に似たまふぞや、まづ／＼御ひかへ下さりませう。」忍「それ／＼、直井左衞門秀國の申されまする通り、月にも日にも折々は、曇り給ふ習ひあり、暫しの内は世の中を、忍ばせ給ふも御身の爲、憚りながら自らが、貴方の御供致しませう、さあ／＼御立ち有られませう。」直井「まて、

夫れも嬉しかろ。花が戀する物ならば、うつろふ色に替るもつらい、仇に契るも又しんき、八重に思つて一重に咲いてあかぬ盛りを詠めるならば、嬉しからうぢや有るまいか、夫れ〳〵それもうれしかろ。月が戀する物ならば、曇る心が折々つらい、晴れて思ふも又しんき、逢ふ夜曇りて心が晴れて、替らぬ影を詠めるならば、嬉しからうぢや有るまいか、夫れ〳〵それも嬉しかろ、嬉しかろの若盛り。

トをどり切ると、方々にて人音する。直井忍の前義經をうしろにかこひ、急度思入ある。喜三太にはかに驚き、をかしみ種々有るべし。義經「しやあこしやくなる鎌倉武士、義經是れにある事を、はや知つたるにや、あの人音、昌俊如きの寄手の面々、某引受け追ひかへさん。」直井「こは御短慮なるぞや、太刀物具もあらざるに、せかせ給ふは何事ぞや、先づ〳〵おひかへあられませう。」忍「それ〳〵まあ〳〵お待ち成されませい。」直井「あれ〳〵敵を近々へ寄せたれば、今こそ御身の御大事、先づ先づお忍び成されませい。」ト義經忍の前直井一寸かげをする。喜三太一人殘り種々身ごしらへするをかしみ有るべし。其處へ宮かぐらにて金澤太郎以前の形にて組子を大勢連れて來て、直に喜三太を押取りまき、皆々「動くな。」金澤「さあ汝こそ義經の家來、お馬やの喜三太とよつく見ぬいて取り卷いた、遁れぬ所だ腕まはせえゝ。」喜三太「やあおぢやつたかな〳〵、お馬の喜三太と見ぬかれたからは、どう

さら皿鉢のめつた投げ、去つて〳〵去狀の、三件半の其の上に、落ちる涙はいばらの花、かまどの神のおたゝりを、すゞしめ給へ。」としやべりける。

義經「それ〳〵世の中に女子程恐ろしいものはないわいの、たてから見ても上から見ても、人を欺さう欺さうと明暮思うて居る所へ、ついうか〳〵とかゝらうとあぶない事、どりや我等はいにましよか。」

上るり「これなんの事ぢやいな憎らしい、女子心はとり分けて、戀には迫る胸の暗、つれなき人を戀ひ焦れ亂れ染めにし陸奥の、文の文字ずりくど〳〵とあんじ煩ひ身をかこち、そもまあどのよな神さんに、仇なえにしを結ばれて、思ひ切られぬ小田卷の、愛し殿御と見る人は、三千世界を尋ねても、外にま一人あろかいな。ほれたが因果これいな、ほれられ給ふが因果ぞや、因果同士の中々に、さまで厭はぬあふせ川、私が心も思ひやり、可愛と思うて給はれ。」と、顏をも得上げずすがり寄る。君も今は片絲の、解けてかゝりし戀衣、綻び安きと見て取つて、傍から跡を月よみ日よみ、さて雨の宮風の宮、とうかみ緣に引かれては、かんこん眞實取り持つて、二つ枕を手枕に、一寸鹿島の事ふれか、漸う吉野の夕間暮、月雪花の詠めかえ。

上るり三下り「雪が戀する物ならば、逢はぬ夜毎の積るもつらい、逢うて解けぬもまたしんき、逢ふ夜つもりて打解けて、染める中にも雪をば詠めるならば、嬉しからうぢや有るまいか、それ〳〵

やいや我等手の筋所でないでえす、見れば見る程可愛らしい手の筋、どうぞならう事ならば、足の筋から膝の筋、どこやらを見てやりたうて〳〵、何處も彼處もむせうれいほう川心の鈴がなりをつて、大將甚だ辟易致した。」喜三太「さもさうず〳〵、そこを我等が呑みこんで、祭を渡す此の宮つこ、落著いてござりませ。」直井「こりや落ちついて居られまいわい、落著いて居る内、どこからどんな風が吹いてこようもしれぬによつて、さあこちから持ちかけたり〳〵。」忍「ぢやと云うて打ちつけに恥かしいらしい、どうぞしてまあ。」直太「云はれぬ所を、此奴がそもじに替つてやらかすべい。」喜三太「へいへい言葉のべん平、さらば我等も色事師と、一寸替つて聞くべいか。」直井「云ふわいナア。」喜三太「聞かうわいナア。」

上るり「これ申し、人に恨みがあらばこそ、思ひ切られぬ身の因果、思ひ過して戀しき袂の乾く隙とては、一日へんじもないわいな。私やお前にうち込んで、寐ても起きてもほんにやれ、忘りやせぬにとにじりより、跡はむしやうにほえにける。

上るり「是れそのないわいなのあてぶりは、此の色男はゆかぬぞや、ぢたいやつがれれんほれゝつのわけ知り、涙々に三なみだ、こざるきやれ紋日物日をくつくりつきよとて、おん女郎さん樣の涙がけ、又は彌生の雛棚過ぎて、一季半季の花曇り、我等が如きの裏店住居、山の神が怒り出し

ならお前どうぞよいやうに云うて爰へ呼んで下さんせいナア。」直井「呑みこんだ〳〵。是れ事ぶれ樣に一寸賴みたい事があるに依つて、あのおむすが傍へなんと來てはくれまいか。」喜三太「有りやうは此の事ぶれも、何ぞの用もあらうかと、ひよつくらひよつと出申した、願ひ望み、失せもの、待人當卦本卦の占ひか、ありまさ〳〵。」ト鈴を振る。その袖をひかへて舞臺へ來る。直井「あたるとはありがたい、一寸おむすが手の筋を、どう云ふ筋か見てやつてもらひたい。」喜三太「どれ〳〵ひよつと見てやりませう。」忍「そんなら手の筋を、お世話ながら見てくださんせ。」ト手を出す。喜三太手の筋を見て、

喜三太「はアまづ此の筋がれんほれゝつ、こちらの筋が浮氣半分、こちらの筋が眞實半分、こりやちつとむづかしいわいの、是れこちらの方の此の筋、先でもすこし思ふと云ふ、手の筋に見えるわいの。」

忍「そんなら先でも思うてかえ。」喜三太「思つてとも〳〵、思つて下馬先つなぎ馬、つなぎたがつてゐらるゝ。」忍「そりやまあほんのことかいナア。」喜三太「是れ此の手筋に顯はれてあり〳〵と見えてある。」

直井「どれ〳〵。」喜三太「夫れ〳〵此の手の筋がすつと眞直に通れば相ほれの筋、此の手の筋の横ッ丁の方へ、おし通してあれば角屋敷の嫁入り筋、是れが通つてゐれば籠所筋、夫れからかうが小田原町、かう廻れば石町神田傳馬町それから先が吉原筋、通つてゐるが通りもの、我等手の筋の大通でえす。」

ト鈴をふる。直井「中々こいつ奇妙々々とてもの事に、さあ旦那も手の筋どうでござります。」義經「い

直井「なんぼ此方がさう云ふ氣でも、おらが旦那は大體や大かたの疑ひではない、女に掛ると先をくゞつて、あァ云ふのはかうであらう、かう云ふのはあァであらうと、くゞつて／＼くゞり木戸をくゞつてござるに依つて、相性でも見てもらふか、緣結びでもしてもらはざァ色事にもなるまい程に、さう思つてさつちいろサ。」忍「さつちいる事はいやぢやわいナ。」直井「夫れでもあのやうに固い顏して御座りなさるれば、滅多に傍へよられまいぞ。」忍「おゝしんき。」

上るり「千早振神のをしへを一筋に。

ト合方になり、花道より御馬屋の喜三太鹿嶋の事ぶれの形にて、白丁の肩許りかけて、淺葱頭巾の上に烏帽子著て、えりにかんへいをさし、鈴をふつて出る。

上るり「諸國諸在所をうんどもらが、足にかけまくもかしこくも、是れはこれより東の國、常陸鹿島サの事ふれておしやり申してござり申す、今年や世がようて稻に八重穗がさくといふ、酒の出來が能く小色がさらに、おかゝおよるなら戸たてておよれ、かまかは入るぞやり梅か、やれ是れこんこちないやり梅の、梢もにて候かしくかな、文戀草の種蒔きよしと立ちよれば。

直井「是れ歡べ／＼、相性を見てもらひたい所へ、あれおんじやり申す鹿島の事ぶれ、おれが爰へ呼ぶ程に、なんなりともそもじの願ひを云つて見やれ／＼。」忍「こりやよい思ひ附きぢやわいナア、そん

居る、そなたは唯の馬士ではないわいの。」 直井「眞直に身の上を。」トつめよる。 義經「聞くに及ばぬ伊達女子、所ならひの馬追姿、名所古跡が尋ねたい。」 忍「さあそれは。」 直井「なんと。」

上るり「えき路に慣れし賤の業、覺えし事もありふれし、その名所に身を寄せて、松の色あるかひの濱、あれあらち山風誘ふ、心のたけとむねの火と、思ひくらべて身を秋篠の、里も噂も世のそしりをも、罪もむくいも未來の責めも、だんない〳〵何中々に厭はじと、思ひ亂れし黒髪代へたか、いつはたの山かづら、あかぬ別れの淺水の、橋にしの山玉江にうつる俤の、戀しうて〳〵遙々慕ひ氣比の浦、誠の岩根に打つ波の、共に砕けてちり〳〵鳥の、鳴いて明してゐたわいな。誰も袂はかは島の、うきには濡るゝ習ひぞや、寢覺の千鳥うき寢鳥、鳴いて別れし都の空、思ひ出すも情なや。「そも〳〵甲冑を枕となし、弓箭の業を本意ぞと、軍務に暇あらざりし、此の身も今はうたかたの、哀れはかなき陸奥へ二度結ぶ鴈のふみ、誰が玉章の返り事、思はせぶりか戀のわな、掛けてとくさのその原や。「その腹でゐる此の奴、戀に姿はつかはれものよ、寒の師走も日の六月も、樣にこがれて夜も日も通ふ、所ならひかお國のさほり、姉が妹の酌をする、姉が妹のヤレ酌をする、うつほり〳〵浮いてまた、うは氣盛りの此のおむす、娘々と澤山さうに、云うてたもんな主さんならで、外に任せぬ身ぢやものを、女子どうしのにくらしい。

も大谷叶うたり。」　直井「こいつはおつれを岩井氏、こゝで扇のてふつがひ、離れぬやうに頼みんす。」　義經「直井左衛門さむうてどうもならぬ、早うおろしてくれぬかい。」　直井「畏まりました。時におむすおれは此の樣に見えても、馬に乘る事がきつう不器用、十四五年前に古河の松原で落ちたものだが、夫れから此方馬の傍へ寄るのもきらひだ、近頃おせもじ樣ながら、おらが旦那を一寸馬から下してくれまいか。」　忍「どうしてまあとのたちを、女子の業に下し申す事がなるものぢやぞいナア。」　直井「いやあのやうに見えてもおらが旦那は、かるいとだしては〳〵かるきのうしほ煮か、とうすみ賣の一人もの、一寸あたつて見たまへ〳〵。」　忍「ぢやと云つてあなたのお傍へ、こちとらがやうな賤しきものが。」　直井「そこが旅のならひちつとも大事ない程に、さあお傍へ寄つて早う〳〵。」　忍「そんならおゆるし成されませい。」　直井「免さいでは〳〵。」　義經「はやう下してもらひたい。」　忍「そんならどれ〳〵妾がおろし申して上げませう。」ト義經をだく。直に忍の前に抱き附いて馬よりおりる。直に忍の前ふり放さうとする。直井是れを見て、　直井「見るものぢやない通らしやい〳〵。」　忍「もじ〳〵何をなされまするぞいな、わるい事を成されますな、爰おはなし成されませ。」　義經「こゝがどうして放されるものか、田甫のかはりぢやちつとの間かうしておいてたも。」　忍「ずんともうおゆるし成されて下されませい、義經樣。」ト義經直井と顏見合はせ忍の前を引延して、　義經「合點の行かぬ、某が名をよつく知つて

ト淨るりの内いろ〳〵面白きふりあつて、義經「直井左衛門、中々その方はあぢをやるわいの、どうも云へぬ〳〵。」直井「是れは〳〵拙者儀も、此度初めて箇樣なあり難いお供を仰せ附けられましたるに依つて、なんでも氣がおくれては成りますまいと存じまして、あつがんにしてりんなりで八九杯やつつけましてござりまするに依りて、ほろ〳〵醉ひの酒機嫌、面白いやら嬉しいやら、うか〳〵是れまで參りましたでござりまする、ねいござりまする。」義經「さうであらう〳〵、時に某もかうぢやわいの、馬の上はいかう寒うて、裾から風がはひつてならぬ程に、是れから下りてちつとの内も、あるいてはどうであらうぞ。」直井「それは一段とようござりませう、さあ〳〵拙者がおだき申しませう。」ト傍へよる直井を、煙管でのけて、義經「是れやぼめ、その方に抱かれて下りる位なら、飛んで下りても濟む事ぢやわいの、我等其方にはだかれまい〳〵。」直井「扨々それではおあぶなうござります、どれどれ拙者。」義經「またかいの、夫れあれを知らぬか、屹度してけつこうなあの馬士、だいて乘せるもだいて下すも、道中の馬は馬方次第、きてんきかせ〳〵。」直井「げに〳〵是れはあやまつたり、君の仰せを蒙れば、どれ〳〵肱てつくべいか。」ト、忍の前の傍へより、背中をたゝく。忍「おゝしんき。」直井「しんきな筈だ、初舞臺來年一ぱい百助奴。可愛がつてくんなさい。」忍「そりやこつちから云ふ事ぢやわいナア、お頼み申さにやならぬぞえ。」直井「そりや又なんで。」忍「はて轡の紋は、馬方によく

江戸かたぎは女子にも、あづまからげのなにくれと、かいやり捨てし俤は、昔の道をしたひ行く、月も紅葉にいろ增して、花にうつろふ戀の首尾。」

ト上るり切れると、鳴りもの入りの合方になり、義經眞中に廣袖衣裳羽織の形にて、煙管を持ち小さ刀をさし、紫の頭巾をつむりに置き、張肱をして馬に乘つて居る。此の馬もくらん張りにて綺麗にして、此の東の方に忍の前女馬士、廣ふり袖の形、ぬきかけほゝかぶりをして、手綱を鞭にして立つて居る。直井まつかにぬつて奴の形にて岩臺に腰をかけ、紅葉の枝にぬり樽をつけてかついで、左の手に大津火繩を持つて居る。此の見えにて三人をせりあげる。

上るり「御いたはしや義經公、讒者の爲に御連枝の御中たちし旅衣、昨日は赦せんの一に選まれ給へども、今日は野田の月一つ宿かる露のかごとにも、ゆふべ／＼の夜を數へ日を送るまの我ながら、寐よげに見ゆる女馬士、梅のひとへは室にもねるが、色に逢ふ夜のむろがない、やつす姿も戀草の、戀の重荷に面瘠せて、手綱を鞭に樣まるる、しどけ形振目に立つ娘、目に立つともの大丈夫や、直井左衞門あとにつき、酒に咎なき初紅葉、顏の日和と御ひいきを、力に假の錦取り、氣てんきかせてねい／＼、おつとまかせの煙草の火、差上げ參らせそろ／＼と、ひそりそめたるせなとせな、振つた女郎衆がにくかろならば、御先鳥毛は十文宿、いつもわれ等は八文字。」

な所で、預けた程に大事にせい。」ト行かうとする。よし「いゑ〳〵なんばうでもやらぬ〳〵。」古金買「えゝめんな、のきくされ。」よし「まつた〳〵。」古金買行かうとする、およしむりやりに留めると、むりに振り放し、風呂敷包を抱へて一散に向うへはひる。およし小とみを連れて身ごしらへして、跡より行かうとする後へ、加賀次郎とし國出で、小とみを抱へおよしをつきかけ、花道へ一散にはひる。およし驚き、加賀次郎が跡を追うて花道へはひる。道具廻る。

○

本舞臺三間の間。一面に山組の景色にて、左右の柱紅葉の立木、一かゞみ板より、豐志太夫連中の見えよくならばせ、正面より下げ卸す。近年になき道具の物ずきにて、前びきより直に淨瑠璃になる。

淨瑠璃　色手綱戀の關札

富本豐志太夫　同豐太夫　同富太夫　同齋宮太夫　同豐次

三味線　名見崎德次　同喜惣次　同與惣次

一源義經　幸四郎　一直井左衛門秀國　廣次

一忍前　半四郎　御馬屋の喜三太　團十郎

上るり「關の地藏、おやよりましぢや、ゆるさぬ妻、ゆるさぬ妻を持つ、おやもゆるさぬ妻絲をかせにかけたる、なぞの橋までとけ兼ねて、わく方も、なげの情や仇ぼれも、色の世界の小紫、お

の咎を。」古金買「烏帽子冠大紋裝束。」トひらき見て、古金買「すりや似せ敕使と成つて。」齋藤次「頼まれたと云ふ誓言聞かう。」古金買「さあ其の誓言は。」齋藤次「なんと。」トつめよる。古金買長兵衛、いりきにとまりさいぜんの鶏をとらへ、古金買「この鶏こそ日本の鳥類、願主を見れば富樫左衛門、是れこそ屈竟の會盟の印、此の血を絞つてかための神水。」ト鶏を殺して血をのんで齋藤次へ渡す。齋藤次呑んで雲助段八へなげて渡す。雲助段八きみわるさうにのんで古金買長兵衛へ渡す。古金買長兵衛取つてその鳥をみたらしのうちへ投げ込む。どろ〳〵になりあつらへの合方になり、池の中より里好鶏のせいにてせり上げる。四手籠の内よりおよし是れを見る。雲助齋藤次ともに氣を失ひ、茫然と立ちすくみ下にゐる。その内鶏そろ〳〵花道の方へ行くを古金買拔いて切り附ける。鶏ごうつうにて古金買を苦しめ、花道の中にて消える。古金買方々と切り拂ひ舞臺へ來る。齋藤次雲助心づいて三人顔を見合はせてさゝやきあひ、齋藤次を先に立て雲助花道へ這入る。古金買風呂敷包を抱へ小とみが手を引いて四手駕籠をあける。内よりおよし世話女房の形にて出る。すぐに古金買が胸ぐらを取つて、およし「ええこなさんは〳〵、先刻にから此の内にて、みんな樣子を聞いて居たわいなア、またしても〳〵わるい事にばつかり身を入れて、末は其の身はどうならうと思はしやんすぞこちの人。」古金買「えゝやかましい意見だて、惡事と知つて組するもみんな身の爲我が子の爲、さて聞き分けてこの小とみを、幸ひ

れでもこはいわいなう。」古金買「是れこそ義朝のかた身の一品軍勢催促の玉鷄の印、えゝ忝い。」ト頂き懷中して雲助の段八をける。雲助の段八おきあがつて、雲助「やあこなたは行家殿。」古金買「やかましい、仕事は山分けこつちへ來い。」ト行かうとする。岩戸かぐらになり、西の方の乘物より齋藤次祐家種が島を持ち、古金買長兵衞手ばしかく小とみを帶へくゝし附け、雲助長兵衞を引張り、たてに取つてしり〳〵廻る。雲助長兵衞きみの惡きこなし。行かうとする古金買を見て、齋藤次「身うごきすると親子とも命がないぞ。」古金買「さあそれは。」齋藤次「七つ道具の長兵衞と云ふ町人、尋常ならぬ人物と兼兼聞いて待ち設けたる、越前國の住人齋藤次祐家、所領にかへて頼みたき仔細あり、うじ〳〵せずとこれへ〳〵。」古金買「合點參らぬ祐家樣、拙者をお頼み成され度しとて、所領かへんと仰せらるゝ、してまた其の御用はな。」齋藤次「加賀國にすゑられたる安宅の新關相改めとして、富樫左衞門聰明英智を鼻にかけ、某をないがしろにする其の無念、須臾の間も止む時なし、何卒かれが越度をこしらへ、腹切らせんと思へども、手術なければ是非に及ばず、今日まで延引せり、頼むといふはこゝの事。何卒彼が妹松風姫にさいつ頃、是明親王の御殿に於て、下河邊行平と不義をひろいで、御殿をけがせし咎におふせ、富樫左衞門諸共に流罪させせんと似せ敕使、此のことしおふせるその人物、その方ならで外になし、手術といふは。」ト乘物の中より風呂敷を一つ取り出し古金買へ渡し、齋藤次「是れを用意に其

たちや七つ道具の長兵衛と云ふ古金買、思へば〳〵ゑゝ口惜しい世の中ぢやナァ。」小とみ「申し父上さん其の樣な事おつしやつて、人が聞いても大事ないかえ。」古金買「大事なれど悔しいに附け、不便に附け、思ひ出される我が身の上、おし附け甥の賴朝を亡ぼし、義經と此の行家京と鎌倉とへ別れて、子孫の榮えを樂しみ、その時には其方にもよいものきせて、夫れ〳〵に女も大勢つかはせう、今は昔の物語樂しんで居や。」小とみ「いえ〳〵私やどのやうなよい身のうへにならずとも、私やお前の側に居たいわいなう。」古金買「そりや父とても同じ事、天にも地にも一人のそなた、どうして離しておかうぞいなう。」ト云ふうち花道にて人音する。古金買長兵衛一寸かげを隱す。花道より鎌田兵衛の一子順禮の形にて、玉鷄の印を袱紗に包み抱へてはしり出で來る。跡より雲助あそうの段八、雲助の形にて出で來る。兵衛の一子を引寄せて、雲助「さあわつぱしめ、うぬがほつほへ入れてけつかる、義朝軍勢催促の玉鷄の印、おれが方へ渡しやアがれ。」一子「どうやうな事があつても、大切なる玉鷄の印、渡す事はならぬわいなう。」雲助「あそうの段八へ渡せ。」一子「ならぬわいなう。」雲助「渡しやァがれ。」ト兵衛の一子を引寄せて、玉鷄の印をとらうとする。一子「あれえ〳〵」トにげる。雲助おつかける後より、古金買長兵衛出で雲助を取つて投げ、寄せる所をあてる、雲助うんと倒れる、兵衛の一子古金買の長兵衛にかゝるを引寄せてしめ殺す、小とみぶる〳〵震へて居る。古金買「こはい事はない〳〵。」小とみ「そ

△「あゝ是れ〳〵、こいつが〳〵引賣同然なことをいやァがるな、これャイいかに此の布子が晝過ぎだと云つてよごれた許り、外になんともないぞえ、武士の衣類大道中で三百文とは、どうだそこへ出て相手になれ、ゆるさぬ〳〵。」古金買「あゝ申し早まらしやりまするな〳〵。おまへの方で賣らぬ氣なら買はぬ許り、布子はそちらのもの錢はこちらのもの、何も商賣づくでござります、お腹が立つなら、堪忍なされ。」△「夫れでも三百文にはあんまり安い直の付け樣。」古金買「はて又云はつしやりますか、此の布子許りで二百文百だけは虱を直に入れて三百文に付けました。」△「えゝいま〳〵しいいつその事に三百に賣つてやれ。」古金買「三百にかつてもおまへ腹は立たぬか。」△「をとこは當つて碎けろだ、負けてやらう〳〵。」ト古金買七つ道具の長兵衛へ布子を渡して、羽織の上へ帶をしめる。古金買「そんなら夫れ三百よお前にも百二十文よ。」ト錢を渡して、布子脇差を籠の中へ入れる。○「さあ〳〵是れから又ばくちが出來ると云ふものだ、さあ始めろ〳〵。」△「夫れがよからう〳〵、したがまちやれよ、おし附けお歸りに間もあるまい、なんとこの森の陰へ行くべいぢやァないか。」○「それがよい〳〵、さあ〳〵きやれ〳〵。」古金買「おまへ方はもう何も賣る物はないかえ。」△「此のごろに屋敷へきやれ。」古金買「はい〳〵。」皆々「さあこい〳〵。」トみな〳〵下座へはひる。宮神樂になる。古金買長兵衛四方を見廻し、古金買「いかに世のなり行きぢやと云つて、誰あらう備前守行家ともあらうものが、辨慶橋ひ

荷物を擔ぎ、長兵衛むすめ小とみやつしの娘の形に、迷子札を下げ、古金買に手を引かれ出て來る。花道の中程にて、古金買「古金かはう〳〵。」小とみ「申し父上さん私はいかう草臥れたわいナァ。」古金買「尤もぢや尤もぢや、草臥れもせいでは。慾心まん〳〵たる此の長兵衛、命かぎり足限り歩くことぢやもの、そなたは草臥れいで何とせう、あの境内の水茶屋で大ころばし喰はせるほどに、早うおぢやおぢや。」小とみ「あい〳〵。」ト舞臺へ來る。△「よい所へ古金買が、うらねばならぬ物がある、其の子を連れて古金殿、まあ〳〵爰へきたり〳〵。」皆々「さあ早いがよい〳〵。」古金買「はい〳〵どれ〳〵其處へ參りませう。」○「是れ〳〵早速貴樣に賣りたい物がある、此の脇差はいくらにならうナ。」古金買「どれどれ、ても見事な拵へ、さめがなうて柄絲が眞田、せつぱはゞきが唯のあかがね、身が生くらで鞘が後家ざや、其のかはり鐔が國廣ふんで見た所が鐔許りの直、百十六文にやりませうかい。」○「夫れはあんまりむごいと云ふもの、なんぼ此の樣な態でも百十六文と云ふ腰の物があるものか、どうぞ二百文に買つて下さい〳〵。」古金買「どうして是れが二百に買はれるものでござりまする。」○「そりやァあんまりむごいといふものだ。」古金買「そんならもう四文買つて上げよう。」○「そんなら負けてやれ。」ト手をうつ。そのあとへ△いでて、△「さあ此の布子一杯に買つていくらが物があらうの。」古金買「どれ。」ト布子をいろ〳〵にひろげ見て、綿をつまんで、古金買「この布子は、三百で持つていきませう。」

は、是れ我々が貯へさいを一つぼ、水鉢の柄杓にておつぷせた所がちよぼ一、なんとはる氣はごんせぬか。」○「こいつ中々思ひ付きがよいわい、さあ旦那のお歸りまで、此處でやつつけべいぢやァないか。」△「よかるべい〳〵ちよぼ一なら七里歸つてもはれと云ふ譬へがあれば、おつぱじめろ〳〵。さあ旦那のお歸りまで何のかのと云はうより四割の廻りで、貰ひ筒が四割半、寺なしの大道博奕、さあふせる所が我等が壺。」ト手水鉢の柄杓にてさいをふせる。○「それぴんよ、それ三よ、それ四よ、それぴん、四戻り。」トおつかぶせると、てん〴〵に煙草入より、錢を出してはりかける。だん〳〵つぼを廻して、とゞ殘らず錢をはり込んでしまふ。△「成程此のさいはよくはねるさいだ。あゝ是れもちつとはりたいが錢がなくなつた、なんぞ手ごろなものをやらうか、時代のものだナァ。」○「おれも此の家につたはる一腰を、賣つてしまつて、もう四五百つゞかして見る氣だ。」△「氣所ではない、どのやうな事をしても五六百勝ちたいものだ。」○「勝たうにも負けようにも錢を拵へてえものだ。どうぞかういふ所へ工面のよい商人が。」皆々「ほしい物だナァ。」ト切りまくにて、古金買「古金買はう〳〵。」

皆々「いやァ。」○「ぜにの一文もないところへ古金買とはよいつぼだ、よいものが來るぢやァないか。」

皆々「さうとも〳〵。」ト云ふうち、てんつゝにて古金買七つ道具の長兵衛實は行家、花道より古金買の形やつし、上へ袖なし羽織上帶提げ煙草入門札下げ、淺葱股引紺の足袋草鞋をはき、兩がけ古金買の

騷動、よつて義經なりとも行家なりとも搦め取つて出せよと、鎌倉殿よりの上意に由つて、手の者を引具し、只今にても斯くの如くして。其許には何方へお越し成さるゝナ。」加賀「拙者儀は主人富樫左衞門當社氣比明神へ心願の旨ござつて、納めまする所の此の鷄、卽ち富樫左衞門がゑとの七つ目、代參として拙者が參詣、其許さまにも大切なる御用、御苦勞千萬にぞんじまする。」金澤「役目でござればさのみ大儀ともぞんぜぬ。たゞ今承れば、鷄は富樫左衞門樣のゑとの七つ目ゆゑ、御立願の爲、御奉納成さるとな。」加賀「左樣でござる、武運長久のため、一つには仰せ付けられた加賀國安宅の關、そのもと樣御主人齋藤次祐家樣とは御相役にて、我々主人も固めの大役、隨分とあやまちなき樣に我我までもしんを取り參詣仕りまする。」金澤「夫れは手前とても其の通り、今にも義經姿を替へ往來仕るまじきものでもない、其許樣にもずゐぶんお心を付けられい、拙者もついでがましけれども氣比明神へ參詣いたさう、御案內を賴み存ずる。」加賀「然らばかうお出で成さい。」ト宮かぐらに成り、加賀次郎、金澤太郎、鷄をよき所へ放し這入る。△若い衆「やれ／＼今日の樣に草臥れたことはない、煙草にしよう／＼。」○若い衆「いかに手前があるかぬと云うて、おいらをつかひ殺すと云ふ者ではないわ。義經をほつかけうとても、夜晝なしにかく廻つて、或は二十里三十里毎日々々歩く事だに由つて、息も精も續くものではない。」ト下にゐる。○「やれ／＼草臥れた。」△「その草臥れた所へ、うさをはらす

役人替名

一長兵衛女房およし實は土佐坊妹しきたへ　崎之助
一秀衡娘忍の前　半四郎
一鎌田兵衛一子　辰藏
一加賀次郎年國　染藏
一雲助あそぶの段八　國四郎
一長兵衛娘小とみ　七三郎
一かしまの事ふれへい〳〵言葉の彌兵衛實は御馬やの喜三郎　團十郎
一古金買辨慶橋ひたちや七つ道具の長兵衛實は備前守行家　友右衛門
一越前國の住人齋藤次祐家　勘左衛門
一金澤太郎照門　此藏
一直井左衛門秀國　廣次
若い衆大勢

本舞臺は三間の間、しん〳〵たる森の玉垣石燈籠夥多、一體越前國氣比の明神境内の體、西の方に乘物、東の方に四手駕籠、兩方離れてあり、神樂にて幕明く。ト花道より加賀次郎年國上下にて出で來る。跡より侍の形にて若い衆鷄をかゝへて來る。槍持草履取挾箱持附き添ひ出る。東の方より金澤太郎照門ぶつさき羽織にて取手の形、若い衆五人附き出る。雙方本舞臺にて行き合ふ。

金澤「そこもと樣は富樫左衛門家直樣の御家來、加賀次郎年國どのではござりませぬか。」加賀「さやう仰せらるゝは齋藤次祐家樣の御家來、金澤太郎照門どの、是れは〳〵かはつた所で御意を得申したな。」金澤「さればでござる。手前儀は堀川の御所において、備前守行家まつた伊豫守義經兩人心を一致にして、賴朝公を追討の宣旨を蒙り、及ばぬ逆意を企て、つひに都を出奔して行方知れねば世上の

うだと云ふ事があるものか、三種の神器を尋ね出し、禁庭へ納めんとある忠臣の、熊井太郎へ刃向へば、よこしま非道りきんでは見たものの、心安くしてもらはにやァ、ちつとこつちの理窟が惡い、寶劒をやるべいとうなづきやつた此の照早、首尾よくいつた目出たい顔合はせ、親分一つしめべいか。」熊井「旦那方も助け參らせ寶劒を守護なせば此の上の本望はない、祝つて一つしめべいか。」兩人「よいよい〳〵。」熊井「さあたち歸る熊井太郎、ちつくりとでも云分がござるか、是明親王おつしやりぶんは仲さんどうだ。」是明「無念にははやれども、忠臣の心を感じ命助ける、早く歸れ。」熊井「然らば御暇仕る。」稻毛「それやるなえゝ。」皆々「どつこい。」トかゝるを見事に首を切つて落し、刀をかづき屹度思入。熊井「岩手姫のお立ち。」上るり「いでや紅葉の色見えて、名に紫の江戸の花ゆゝしかりける。」ト岩手姫川越太郎寶劒を持ち、下河邊行平松風姫村雨姫跡より、熊井太郎大太刀をかづき、花道の中まで行きふり返つて、皆々「さらば。」ト是れよりはや下りはにて各花道へ這入る。よろしくまく引く。

第一番目　四建目　淨瑠璃の段

一鷄のせいれい　里好

一九郎判官義經　幸四郎

禁庭へ差上げ、義經に野心なきとの申譯を立てにやァならぬ。すみやかに其の寶劍を忠基へ渡すまいか、返答はどゝどうだ。」 是明「や存外なる熊井太郎、卑職凡下の身を以て、まろへ對し敵たう有様、剩へ寶劍を持ちしなんぞとは何のたは言、殊に岩手姫を隠まひ立后の妨げなす、汝眼下に命を失はん、かはいや〳〵。」 熊井「命は輕んずる事英雄の先んずる所、さあ寶劍をお渡し成されい。」 是明「寶劍は知らぬわャイ。」 熊井「何がなんと。」 是明「岩手姫を渡せ。」 熊井「寶劍を渡せ。」 兩人「どつこい。」ト大勢かゝるをつき除けかきのけ、是明親王を二重臺より引きおろして、懷中の寶劍を取り出して是明をつき倒す。 皆々「どつこい。」 熊井「是れこそは疑ふ所もなき十柄の御劍、熊井太郎が手に入りしこそ、いまだ義經公の御武運長久の徴、えゝ有りがたやナ。」 是明「それを。」トかゝるかすや藤太をつきのけ、熊井「あゝつがも。」 岩手「今に始めぬ熊井太郎が忠臣、父上様御悦び成されませい。」 川越「斯かる忠義の武士を家臣に持つたる堀川どの、いかなれば讒言の舌に懸らせ給ふやらん。夫れに付けても殘念なる事ぢやナア。」 熊井「其のお悔みはさる事ながら、一まづ都を晦まされ、折を見合はせ御開運あらん。いざ〳〵お立ちあられませう。」 下河邊「熊井太郎が働きにて、危急を遁れし此の行平。」 松風「折を待てとの此の松風。」 村雨「此の村雨も紫の。」 熊井「雲井を共にお立ちあられ、然るべう存じ奉りまする。」 かすや「坂東太郎照早、かかる大事を餘所に見て、知らない顔は。」 皆々「こりやどうだ。」 坂東「どうだか

熊井「誰を。」稻毛「われを。」熊井「あはゝゝ、出たのびやくらいおへそでお膳が茶をわかす。」稻毛「所を。」熊井「腕をもぐぞ。」稻毛「いよ市川の大當り。」熊井「あんまりそりや古い。」稻毛「是れも御祝儀內よ。」ト舞臺へ來る。皆々「熊井太郎きり〳〵さがれどうだやえ。」熊井「どうで爰から物を云つちやァ二階から目藥、どれそこへ行つて親王樣にも亦おぢいにも近付きに成るべい、かたつぱしから帶と帶とをくゝし合はせ、手に手をとつて用心しろ。」皆々「いやア。」熊井「旦那寺へ人をやれ。」皆々「いやア。」熊井「早桶の用心しろ。」皆々「いやァ。」熊井「一番そこへ大波をぶたせべいか、どれ。」皆々「ありや〳〵〳〵。」ト大太鼓入りのとびよに成り熊井舞臺へ來る。若い衆敵役殘らず立廻り有つて皆々をかこひ、是明坂東太郞が中へしんと見えに成る。皆々「どつこい。」坂東「いかなれば熊井太郎、下せん匹夫の身を以て親王に近づき、上を恐れぬ無禮の振舞、氣が違つたか醉狂ひか。坂東太郞が相手になるぞ。」熊井「相手に成るとは面白い、どいつなりとも相手に嫌ひはあら金若い衆、親王樣には內々で御無心申さにァならない物がある、妨げひろぐとはり殺すぞ。」かすや「まて親王樣へ對し奉り、內々で御無心とは、合點の行かぬわつぱじめ、かすやの藤太が相手にならうか。」熊井「うぬらにとんぢやくするのぢァない、さあ是明親王樣、深く隱して所持成されし三種の神器の其の一つ、十柄の御劍あつたため有る事をかねて聞き、主君義經此の度鎌倉よりお疑ひを蒙られたる三種の寶調はざる故、忠臣の我々尋ね求めて

る。」下松「丈夫な芝居濟んだわえ。」正親町「さはさりながら。」熊井「なんと。」三人「晩程參りませう。」ト三人とも舞臺へ來る。稻毛せきにせいて、稻毛「どいつもこいつも役にたたぬ、どれどうでおれが出ずば成るまい。さァ熊井太郎たつた今首をたゝき落すぞ觀念ひろげ、と云ふはみんなうそ、三升さんおまへはまあどう成されやしたえ、此の間ばいめいさんで度々お噂、例年の通り御ひき連中、幕もよう染りました、お目出たうござりまする。私も此の暫くの引立は、おまへのおぢい樣の時分から、おとつ樣の時、そしてお前度々出たが、つひぞ荒事をかたき役の方から引立てた事がござりませぬ。よつて今年は氣をかへて、なんと是れから留場の口までも、お前にたつて貰ひ申せば、私も女房子の前へ外聞がようござりまする。どうぞお慈悲にお立ち成されて下さりませ。やれ〳〵おとつ樣によう似申しなさつた。」熊井「誰だと思つたら、貴樣はなりはだな。」尾「さやう〳〵。」熊井「わしも旦那方のおかげで、どうやらかうやらこつちへ呼んでもらつたによつて、云はば目出度たい此の顔見せ。祝儀心に貴樣をたつて。」稻毛「此の所をあつちの方へ。」熊井「のいてやつたらよからうが、こんりんざいのくまい。」稻毛「なんと。」熊井「いやだ。」稻毛「こいつ中々太い奴ぢやァないか、甘酒をなめさせて置けば、喰ひそばえて色々な事をぬかしやァがる。誰だと思ふ稻毛入道手もなくうぬを。」熊井「引立てるか。」稻毛「くどい。」熊井「そりやどこで。」稻毛「こゝで。」熊井「いつ。」稻毛「いま。」熊井「誰が。」稻毛「おれが。」

信濃「構ひもせぬものを。」トあとじさりに舞臺へ來る。 藤森「えゝらちのあかない、どれ〱こんな時にやァ新參古參の用捨はない、おれが出てかたづけべい。」 下松「是れ〱又さきへでるか、今年から中を能くするやうに、二人一所に行くべいぢやないか。」 正親町「待ちやれ〱、一人ばつて行かうより連れのあるうちおれも行くべい。」 藤森「そんなら三人一所に行つて、ものの見事にあのわつぱしを、やらかしてくれべい。」 下松「手柄は一つ褒美はてん〲、三人つれ立ち一ィ二ゥ三ィでいくべい、ムム。」 藤森「お定まりの通りそれがよい。」ト花道へかゝり、 三人「ひいふうみい、わつぱしめ立てえゝ。」 熊井「こりや三人お揃ひなされてお出でだの。」 三人「ちつと舞臺が、大きいぞ。」 熊井「名が聞きたい。」 下松「聞きたくば、高らかに名乘つて聞かせん、よつく聞け、某こそは古馴染の下松右中辨宗春。」 藤森「某は藤森左大辨光高。」 正親町「某こそは正親町左少辨義國。」 熊井「なんだ、正親町に下松、藤森、かうもあらうか。」 三人「なんと。」 熊井「むだなあごたゝき町より下り松は、命にかゝる藤の森かな。」 三人「おきやがれ。」 藤森「かく我々が出でたつて、赤恥かいてあられうか。力まかせにこなみぢん。」 下松「首と胴との生き別れ。」 正親町「觀念ひろげ熊井太郎、返答は。」 三人「どうだえゝ。」 熊井「味噌をぶち上げると、睨み殺すぞ。」 三人「なんと。」 熊井「引込みやがれ。」 藤森「是れだに依つてみつでもあんまりとほられぬ。」 下松「あたまで引立をふんで出ればよかつた。」 正親町「それでもしりにまだ親玉が居

つちやァはえぬいたも同然、動く事はいやだ。」かすや「いやだとぬかせば親王の御前見苦しい、たれかある、熊井太郎を引立てめされい。」皆々「はァ。」西宮「まて〳〵たれかれと云ふより、力自慢の公家の腕立て、某が取つてうつちるべい。」ト花道へかゝり、「やいわッぱらめ今年ぢやァ引立も氣をかへて、優にやさしき冠装束、見かけとは違ふぞよ。さァ痛い目に逢はぬうち、きり〳〵そこを立ち去るまいか。」熊井「見れば立派な装束だ、地合も見ればもくらんだな。」西宮「なにを。」熊井「もくらんの母は餓鬼道のくるしみ、可愛やこいつも、がき道のくるしみかい、してお前のお名はなんと云ふえ。」西宮「西宮右大辨永高と云ふお公家様だ。」熊井「何だ、牛の小便なま長い。」西宮「おきやァがれ、其の口をおれが引ッさくぞ。」熊井「夫れこそほんにとはうもない、引ッ込みやァがれ。」西宮「永高様お入り。」ト八藏本舞臺へ來る。信濃小路左中辨出で、信濃「えゝらちのあかない、どれ〳〵四ッ谷の先生が出てやらう。」ト花道へゆき、信濃「是れやいおれが出たぞ、怖く思はば早くきり〳〵さがれやい。」熊井「こいつは何だ、おらァ元來お江戸生まれ、此の芝居に久しく居たのだ、うぬがやうな奴をつひぞ見た事がない、なんと云ふ公家だ。」信濃「信濃小路左中辨仲平と云ふ、歌をよく詠むお公家さまだ。」熊井「なんだ信濃のものの中氣病みだ。」信濃「なにを。」熊井「信濃なら信濃のやうに、新宿で冬奉公でも稼ぎやァがれ。」信濃「その替り春になつたら。」熊井「ふみ殺してやるべい。」信濃「うぬを。」熊井「何と。」

で見た三升の紋だな。素袍ののりの荒事出立ち、そもまづうぬは。」皆々「何やつだえゝ。」熊井「東岸西岸の柳は遲速同じからず、南枝北枝の梅はかへり新參の我儘もの、足掛三年柹八年、柹の素袍に三升の紋ばかり出したる此の色子は、九郎判官義經公の膝下去らず、熊井太郎忠基と云ふ坊主殺し、一聲かけて見てあれば、いよ仲傍若無人の振舞、もて餘されてみんなみに、赴き歸る一陽來、芝のはてから勘三の代と厄介若衆、鬼も十八情しり、私は山谷の三日月樣よ、えびにちらりと似た許り。にせますまねます隈とります、ます〳〵賑ふ花の顏見せ花のゑみ、雪に見紛ふ三芳野の、古郷の錦金冠、無理な所へ仲くるま、廻る月日の八聲の鳥、げに勇ましき歌舞伎の門前、市川十までのみ込みはね込み、ふみ馬御免三升仕つた、一昨年噂の出見せの判とり、大福帳年馴染の秀鶴、お見知り成されてくんさいもぐさ、團十郎にや貴賤羣集のまん中村と、ほゝ敬つて申す。」皆々「どつこい。」稻毛「さちやアおのれが義經が家來熊井太郎忠基だな、とんだ所へ出たぞよ見たか、是れに御渡りなさるゝは人皇八十二代の帝御鳥羽の院弟宮是明親王樣だぞ。その外びゝしき雲の上人、うぬらが樣な無位無官、喰ふや喰はずの痩せ浪人、主に離れたすでつちの出る所ぢやアない。早くそこをなくなれ〳〵。なくなり樣が遲いと、稻毛入道重成がうぬを取つてぺいするぞ。」熊井「太い奴ぢやアないか。岩手姫は主君の簾中、川越太郎殿は舅君、御難儀と見て爰へ出た熊井太郎、進退共におれがさんまい。かうぶつすわ

存もの、三人共に首を打て。」かすや「畏まつてござりまする。さあどいつもこいつもきり〳〵爰へ直りやがれ。」川越「身に覺えなき罪科にて罪に逢ふのも皆因緣、下河邊行平殿。」下河邊「川越太郎重賴樣。」岩手「松風さん村雨さん。」松風、村雨「岩手姬樣。」五人「是非もなき世の有樣ぢやナァ。」皆々「きり〳〵そこへ直れえゝ。」ト是れより三味線になり、川越岩手を眞中にひき据ゑ、坂東後へ廻り太刀を拔く。かすや下の方へ下河邊を連れ行き、後の方へ廻り刀を拔く。稻毛、松風村雨を上の方へ直し太刀を拔く。坂東「今思はずも主命默止し難く、坂東太郎照早が一刀の下に命を絕つ、岩手姬川越太郎。」かすや「下河邊莊司行平。」稻毛「松風、村雨。」坂東「今が最期だ。」三人「くわん念。」熊井太郎「暫く〳〵。」皆々「いやあゝ暫くと聲を掛けたぞよ。」是明「まて〳〵、まろ、たつふくの君と仰がれ、その威かいかの間に滿ちて斯くの通り、心に任せぬものども、命を絕てよと云ひ付けたる劍の下を、暫く〳〵と聲を掛けたは。」皆々「何やつだえゝ。」熊井「しばらく〳〵。」皆々「しばらくとは。」熊井「しばらく〳〵。」皆々「どつこい。」上るり太夫、主膳太夫。「かかる所へ熊井太郎忠基は。」ト太鼓の相方になり人寄せになり、熊井太郎忠基花道より、栃の素袍烏帽子大刀にて中啓を持ち出づる。「陽に咲き、顏のくまこそ今年と一昨年を、三升の紋の智仁勇、三德を兼ねし荒若衆、世々吉例の大太刀は、龍の臥すかと疑はれ、すさまじかりける次第なり。」皆々「どつこい。」坂東「暫くと聲を懸けて出たやつは、去年一昨年、むかひ丁の役者付

言は全く麿を諫めの言葉にあらず、九郎判官義經を何國へか隱し置き、後日に義兵を催して鎌倉を討ち亡ぼし、一天下を望む下心、夫れに違ひは有るまいがな。」川越「こは親王家の御詞とも覺えませぬ。九郎御曹司におきまして、謀反の萌しなんどはかつ以てござりませぬ。」下河邊「其の上川越太郎重賴は斯く申す行平と申し合はせ義經の行方を尋ね求め、御和睦を願ふ所存、謀反などとは思ひもよらず。めつたな事を御意成されまするな。」かすや「小ざかしきすでつちめ、おのれが不義をさし置いて、忠臣顏が見つともない。誰より先へまァ奴を。」ト下河邊へかゝるを、坂東かすやを突き除け、下河邊を圍ふ。かすや「坂東太郎何をするのだ。」坂東「何をするとはべらぼうめ。旦那殿がだゝァいやァ同じ樣に騷ぎやァがる。是明親王樣、旦那どのなぜ其のやうに無理なる事を云はつしやる、主の有る岩手姬を后にすべいとはそりや無體だ。是れ程廣い日本國、尋ね出しやァいッくらでも、后に立てる樣な女はある。是れ許りはおれがさせない、坂東太郎がさせないぞ。」是明「まろに向つて入らざるおのれが諫言立て。所詮わが心に隨はざる岩手姬、まつた義經を逃せしと、何國へか隱し置いたる川越太郎、兩人ともに首を打て。」川越、是明、村雨、下河邊、松風「えゝ。」トおどろく。川越「すりや兩人共に此の場にて。」是明「太刀取は坂東太郎、おのれに屹度云ひ付けたぞ。」坂東「そりや餘り。」皆々「綸言を背くと朝敵だぞ。」坂東「えゝいま〳〵しい。」是明「下河邊莊司行平は身の一大事をうちわすれ、松風村雨兩人不義をなしたる不所

ずば、違敕の罪に落つべえぞ。」信濃「親もうかめば子もうかむ、結構な身の上をいやがるのは、大べらぼう。」下松「行方も知れない義經に義理立をしようより、後に成り上る分別。」藤森「戀しいと思ふ義經はのたれ死ににくたばつたか。」雨宮「お先も知れぬ色事より、今日の前の旨い物喰つたがよかんべえ。」稻毛「但し敕命を背く氣か、重頼ともに返事をしろ。」かすや「此の返答は、どうだえゝ。」ト此のきつかけにみすの内より、是明「かしましい靜まれえゝ。」トさがりはに成りみすを卷き上げる。是明親王金冠白衣にて笏をもち沓を履いて、左の手に寶劍を持ち、二重臺の上に牀几に掛つて居る。後に坂東太郎日傘をさし掛けて居る。是れにて押出す下りはを打上げる。坂東「是明親王の御入りなるぞ、靜まれ。」皆々「はア。」是明「先づ此の度一天下の望みある所に、先だつて須磨の亂れに安德天王入水の折から、義經竊かに奪ひ取つたる此の寶劍、堀川夜討の爭亂に又候まろが手に入つたる事、大望成就の奇瑞の印、さるが中にも、まろが心に任せぬは、戀は曲者と岩手姫、思ひに餘る心より、今日此の所へ呼び寄せて、今宵をすぐに新枕。川越太郎。」川越「はア。」是明「是れへ參つて、水入らずにまろと妹脊の仲人しろ。」ト眞中へ出る。川越「はア綸言には候へども、凡そ天地の其の間に、無理非道の第一は是れ不義なり。その御鏡にもならせ給はん御身にて、貞女を破らせ給ふ事、世の人口も如何、此の儀は何とぞ思召しきらせ下されませうならば、有りがたう存じ奉りまする。」是明「默れ重頼、汝が今の一

藏出る。同じく「左中辨參內。」と呼んで（信濃小路左中辨仲平）仲五郎出る。同じく「左少將參內」と呼んで（正親町左少辨義國）國四郎出る。何れも公家の形にて仕丁日傘をさし出掛け花道へ並ぶ。打揃ひ本舞臺へ來て皆々居並ぶ。川越太郎、下河邊行平、かすやの藤太、松風姬皆々下の方へ下り控へる。かすや「是れ何れも樣にはお揃ひ遊ばされ、只今の參內何とも合點まゐりませぬ。」西宮「不審は尤も、今日是明親王の敕命には、我々をひそかに召され、何か御內敕有るとのこと。去るに依つて、斯く申す西宮右大辨永高。」正親町「まつた正親町左少辨義國。」下松「下松右中辨宗春。」信濃小路「信濃小路左中辨仲平。」藤森「藤森左大辨光高、斯く我々參內の上からは、かねてまうし付け置きたる岩手姬がこと。」かすや「いや其の義は氣遣ひあられますな、はや先達此の所へ召し寄せましてござりまする。何稻毛入道岩手姬を同道しておきやれ。」稻毛「心得てござる。」トくわんげんになり、岩手姬を連れて出る。岩手姬川越太郎を見て、岩手「重頼樣只今參內遊ばされましたか。」川越「岩手姬、其方ははやせんだつて參內のよし、定めて親王の敕命を逐一承つたであらう。」岩手「いえ〳〵今に置きまして、何の御沙汰もござりませねども、最前から藤太樣入道樣、夫れは〳〵色々な無理非道な事ばかり。いつそくやしうて〳〵ならぬわいナア。」かすや「是れえゝ、なんの無理非道と云ふものだ。己が女房にするのぢやァなし、親王の妃に備へようと云ふものを、無理だと云ふはそちの無理。」正親町「夫れとも又御心に隨は

んと見えになる。かすや「川越太郎重頼殿、只今某不義の科ある行平を引立てんと仕るを、なぜ邪魔をおしやるのだな。」川越「いや全く御邪魔は仕らぬ。さりながらよく思召しても御覽じろ、いまだ若輩な下河邊の行平、彼等は蕾める松風村雨、左樣な事もござらいでは、其の上又今日此の御殿に置きまして今樣興行の由、その役にさされましたる行平松風、今樣の其の一手に味な氣みぶりも有りさうなもの。すりや其の樣に御詮議には及びそもないものかと、重頼めは存じまする。」かすや「すりや何と仰せらるゝ、不義淫奔致しても大事ないとおいやるか。」川越「左樣ではござらぬが、よもや誠に。」かすや「ても不義ものに相違ござらぬ。」川越「然らばなんぞ慥かな證據に成るべき、文などござるかな。」かすや「いやそんなものはなけれども、なんであらうと不義ものさ。」川越「左樣仰せられては御詮議が闇いかと存じまする。こりや此の儘にさし置かれいさ。」かすや「何だかあきれて、物が云はれぬわい。だうりでこそ、其元の御息女岩手姫、是明親王の御心に從はいで、義經とちゝくり合ひ、あげくの果てにあうつけられ、此の程は寡婦ぐらし。親が馬鹿なら子もたはけ。いやはや氣の毒千萬な。」川越「なにを。」ト屹度なると向うにて、「右大辨參内。」と呼ぶ。是れよりさがりはに成り（西の宮右大辨永高）八藏公家の形にて笏を持ち、沓を履いて出る。若衆仕丁にて付いて日傘をさし掛け出る。同じく、「左大辨參内。」と呼び（藤の森左大辨光高）此藏出る。同じく、「右中辨參内。」と呼んで（下松右中辨宗春）澤

斯うするわ。」ト、さん〴〵に打擲する。松風とめて、松風「これ申し藤太樣、そりやまあどうのかうのと云うたのは、私等二人が業。主さんに科はない程に、かまへて聊爾さしやんすな。」かすや「何をこのとちめらうめ。うぬ獨りでも有る事か、おぼこ娘の村雨まで疵物にしやァがつたな。假令女の方から仕掛けても、役義を大切と思へば中々不義放埒が成るものか。根が助兵衞から發つた事だ。えゝまじまじとしたしやッ面だわい。」ト行平が顏を蹴る。行平くやしきこなし色々有つて、行平「是明親王の御殿と云ひ、身の誤りのある故に、無念をじつと耐へて居りやァ、行平程の武士を土足にかけて蹴たぞよ。」かすや「蹴たがどうした。腰拔武士だから蹴たわ。それが悔しいか、くやしくばなぜ義經の詮議はせぬ。なぜ色事に日を送る。但し鎌倉殿の云ひ付けで遙々と都へ上り、松風や村雨と色をしろとの云ひ付けか。よもや左樣ぢや有るまいぞや。」ト此の內行平色々くやしきこなしあつて、行平「えゝおのれをな。」トそりを打ち、松風村雨兩方よりとめる。松風「めつたな事をなされまするナ。」かすや「我や反を打つて己を切る氣か、是れえゝ爰を何處と思ふ、是明親王の御殿だぞ。その鯉口が一寸でも放れると此の場に於て逆ばり付け、さあぬけ〳〵しよせん面倒な、親王の御前へうしやァがれ。」ト引きたてかかるを向うにて、川越「待つた。」かすや「待てとは。」川越「川越太郎重賴がお止め申した。まあ〳〵お待ち下されい。」ト太鼓唄に成り、川越太郎上下にて出で來る。かすやを突きのけ、行平をかこつてしや

れする。鷲藏漸うとして四面を見て、鷲藏「最前のどさくさは、慥かに權藤太奴が化の皮が顯はれたわい。己もかうしちやァ居られない、些とも早くにげるがいい、さうだ。」ト鷲尾是れを引戻し兜を引きたくる。鷲藏花道の方へ行かうとするを引戻し、池へはうり込む。鷲尾「是れこそ主君義經公御祕藏有りし八龍の兜、今思はずも手に入る事、大願成就忝い。」ト頂く所へ、後より新藏乙藏三五郎常八此の四人對の誂への形にて槍を持つて出で、兩方より取卷き四人別れ、四人「人殺し奴動くな。」ト聲をかける。鷲尾「こりや何をひろぐのだ。」乙「今後で見て置いた。人を殺した其の上に。三五郎「奴がものしたその兜早く此方へ。」皆々「渡せえゝ。」鷲尾「命知らずのうんざいめら、入らざる事に邪魔せずと、其所おつぴらいて通せばよし、わるく騷ぐと片ッ端、あの世此の世の暇乞、首と胴との別れだが、其所おつぴらいて通すまいか。」四人「どつこい。」ト是れより大太鼓入りの建に成り花々しく建色々有つて、とゞよい程に二人は池へはうり込み、二人は當身をして、兜を持つて一散に向うへ這入る。二人起き上り跡を追うて這入る。鳴物打ち上げる。直に管絃に成り、奥よりかすや行平を引きずり出る。是れを松風村雨介抱しながら付いて出る。かすや行平を引据ゑて、かすや「こゝな行平の大腰拔め。汝此度上京なしたるは、義經を詮議の爲ぢやァないか。それになんぞや松風村雨の戀路に迷ひ、うつゝをぬかす大べら棒め、武士の風上にもおかれぬやつ。おのれがやうな腰拔侍は、かすやの藤太が斯う

わい。」ト切り蒐る。立廻り有りてしやんと止めて、鷲尾「必ず早まり給ふな行平様、假令いか様な義かござればとて只今のしぎ、何しに人に物語らん、先づ〱お控へ下されませう。」行平「確と左様な。」鷲尾「刀にかけまして。」行平「忝い。」トをさめる。鷲尾「只今の御褒詞に拙者めが願ひ、何卒義經の、御在家知れたる上は、御和睦の御願ひを。」行平「そりや某が命に替へて。」鷲尾「え丶有り難い。」行平「こりや村雨姫松風姫に心をつきや。」村雨「あい。」ト水を汲んで松風に飲ませ氣を付ける。松風氣がつき、村雨を突きのけ屹として、松風「え丶怨めしい村雨姫情ない行平様、こりやまあどうしようぞいナァ。」ト最前の一通を打ち付けてやる。行平見て、行平「此の上書は富樫の左衛門殿へ錦戸太郎、これは。村雨おぢや。」ト唄になり行平村雨を連れて奥へ這入る。松風鷲の尾殘りて、松風「南無阿彌陀佛。」ト鷲の尾が刀にて死なうとする。鷲の尾とめて、鷲尾「こりや氣が違うたのか松風殿、今行平の言葉の端一つの功を立てたなら、思ふ方より風や吹くらんとの謎の一首。其の一通見ずに與へ行きしは此の場の寸志、彼是以て大事の命、此の場で死ぬる事ではない、必ずともに早まりめさるな。」松風「そんなら此の一通内やゆかしき、兄様の心の底を聞きまして。」鷲尾「善惡二ッの其の中にて。」松風「若し兄さんのお心が善に極まるその時は。」鷲尾「思ふ方より風ぞ吹く。」松風「あのお歌を。」鷲尾「まつてお居やれ。」松風「あい。」ト唄になり松風奥へ這入る。鷲の尾思案して池の中より鷲藏出る。鷲の尾是れを見て小隱

ばこちらが怨みん此の場のしぎ、夫れ故手折る此の梅が枝、時に取つての花軍勝色見せし其の方へ、如何にも返事をしようわいなう。」松風、村雨「そんなら妾等二人して。」行平「花の軍の勝負。」松風「これやほんに面白いわいな。此の松風と村雨さん、夫を爭ふ花軍。」村雨「私が殿御といふものか。」松風「私が殿御といふものか。」村雨「私やちつとも川捨はせぬぞえ。」行平「立ち上つて勝負々々。」松風「いざ。」村雨「いざ。」ト是れより三味線入り太鼓賑やかなる相方に成り、松風村雨花軍の建、行平行事の樣なる事色々あつて、取組色々有るべし。とゞ松風、村雨にさん／＼たゝかれ悔しきこなしにて、とゞ癪を發し氣絶する。村雨大きに嬉しきこなし色々あるべし。行平おどろき介抱する。村雨腹を立て振り放す事有るべし。色々にしても氣が附かぬゆゑ、とゞ行平池の端へ來て、水を汲まうとして池をきつと見て、思入れして見えになる。本神樂。行平「さあ怪しき音聲は、内にかけある陰中の陽を含む池中の面、水滿々として氣上に漲るは、はて心得ぬ事ぢやナア。」ト此の内定八梅の枝より出て見て居る。行平是れを見付けて、行平「こゝにも寫るあの梅が枝えゝ。」ト小柄を手裏劍に打つ。此の途端に梅の枝より定八飛びおり、一散に向うへ行かうとする。是れを引戻し見事に投げ、起き上る所を一刀に是れを切り、定八が落せし一通を取つて懐中する所へ鷲の尾出で、行平が刀ののりを拭きしやんと納める。行平「鷲の尾三郎今の樣子を。」鷲尾「篤と拜見致してござりまする。」行平「夫れぢやアいけてはおかれぬ

殿村雨殿、逢はぬ昔とあきらめて思ひ切つて下されや。」松風「なる程おつしやつたお言葉を無理とはさら〳〵思はねども、今爰で今女夫に成らうと云ふではなし、未來で添ふと仰しやつても嬉しくなうて何とせう、お前の口から女夫ぢやと一口云うて下さんせ、夫れ聞かぬ内は何ぼでも爰放しやせぬ、はなさぬわいなあ。」村雨「さうでござんす、どのやうに云はしやんしても、此の返事のない内は動かす事ぢやないわいナァ。」行平「それ程までの志、返事せいではなけれども、何れを見ても憎からぬ、源三位にはあらねども引くぞ煩ふ花菖蒲、何れへ返事を。」ト思案する。松風「それや御思案にはおよばぬ事。私が千束のふみ玉章、よもやお忘れは有るまいがな。」村雨「それや妾とても同じ事、通ひ事の文の數々此の御返事は自らに。」松風「なんぢやいないやらしい、年はも行かいで仇しつこい、なんぼ其のやうに云はしやんしても、ほれたは妾が先ぢやわいナァ。」村雨「いえ〳〵それやお前みんな虚言ぢや、妾が先にほれたわいナァ。」松風「未だかいなァ默らしやんせ。」村雨「おまへ默らんせ。」松風「こなさん默らんせ。」村雨「そなた默らんせ。」松風「我が身默りや。」兩人「えゝほんに阿房らしい。」行平「さてこそ悋氣嫉妬は女の常、さうなうて叶はぬこと、はてどうしたら能からうナァ。」トあたりを見て、行平「それ。」ト是れより相方になり、行平兩方の梅の枝を切つて來る。松風村雨が前に置き、松風、村雨「是れは。」行平「其の二枝は行平が返事。」松風、村雨「此の梅が枝を御返事とは。」行平「さァ此方へ誠の返事せ

を敷くや蓐にねん〳〵、ねとござる、ねとござるえ。合「うつゝなや、合「所は山路の蘭の酒何かは苦しかるべきと、合「人々興に入り給ふ花やかなりし風情かな。

ト歌きれる。松風「ほんにまアあられもない今様を幸ひに、爰までは來たれども、お顔を見れば今更に云ひたい事もえゝ云はず、眞にしんきな事では有るわいナア、申し行平様たつた一言女夫ぢやと仰しやつて下さんせいナア。」ト此の内後へむらさめ姫出で是れを見て眞中へはひる。村雨「ちつとお邪魔に成りやんせう。」ト云ふ。松風びつくり、松風「おゝこはこりやお前は村雨さん、何しに爰へきやしやんしたえ。」村雨「私ぢやとて爰へ來ぬものかえナ。もし行平様いつぞや都へお登り成されしより、ふつと見染めし其のお姿、忘るゝ隙はないわいな、どうぞ色よい御返事を。」松風「えゝつんともう何ぢやいな、お前に返事させましてよいものかえナア、自らに御返事を。」トとり附く。村雨「いゝえ妾へ御返事を。」ト兩方より取附くを行平振り切つて、行平「いかに女子なればとて聞分のなき此の有樣。某とても岩木にあらぬ身なれども、兼て噂にも聞き給ふらん。此の度九郎御曹司御謀反の由、賴朝公の御耳に達し、先達て土佐坊昌俊堀川の御所へ押寄せしより、御行方知れ給はず御いたはしく存ずる故、何卒御在家を尋ね奉り御兄弟の御中を日月の如くなし奉らんと、ちゞに心を碎く下河邊莊司行平、夫れに何ぞや不義放埓に身を委ね、鎌倉殿の御所へ對し、何と申譯の有るべきぞや、惡うは思はぬ松風

諷がゝり「月待つ程のうたゝねに、夢うち覺す夕時雨。かん「四方の梢も色々に、錦色どる谷川に、風のかけたる柵は、ながれもあへぬ紅葉ばを、渡らば錦中たえん。かん「よしや思へば是れとても、前世の契り淺からぬ深き情の色見えて、かかる折しも道野邊の、草葉の露のかごとをも、かけてぞ頼む行末を、契るもはかな打付けに、人の心もしら雲の、立ち煩らへる景色かな。「こうきんしうの山よそおもひをなす、「是れなる紅葉の下枝に落葉かき寄せ薪となし、酒くゆらする其の景色、忍ぶ心の面白く、いざや汲むべし〳〵と、合「唐の朱買臣は錦の袂を會稽に飜す、彼の七賢が樂しみも、合「酒にせい、合「銚子もてこい、杯もてこい、扨おさかなは何々ぞ、頃しも秋の山草花立花の匂ひを含む〳〵、酒のかん、おさへて、「今まで爰に彳む女々、とり〴〵手管の姿を顯はし、或は悋氣のほむらをこがし、又は虛空にしなだれかゝり、咸陽宮のけむりもいそよ七尺の屛風の上に猶餘りて、そのたけ一丈の血文つのも折れかし面も向けぬ恥かしや、惟茂少しも騷がずして、南無や意氣地の大菩薩と、心に念じ煙管を持て待ち掛け給へば、合「口舌になさんと飛んで掛るを飛び違ひ、煙管の眞中もちそへ給へば、其の手を引きしめ、なんなくおてきに從ひ給ふ、紅葉の威勢面白や。合「あたら紅葉の散るは〳〵ちり來るは〳〵、合「かさにとん〳〵とまれば合「とん〳〵とまれば猶いとしく腰をしめたや抱かれて寢たや、おてんとてんと紅葉ば

に長居は如何、某と一所に奥殿へ。」岩手「そんならお前と御一所に。」坂東「岩手姫どのござれ。」ト又今様はじまりと呼ぶ。是れより所作の鳴物に成る。此の鳴物を假りて、坂東岩手奥へ這入る、すぐに正面の翠簾を巻き上げさせて、結構なる山臺の上に紅葉を飾り付け、後の方に段幕を張り、紅葉狩の見え、是れに下河邊莊司平羽織衣裳にて、中けいを持ち左の肩に長けんをかけ、眠つて居る見え、富樫左衛門妹松風姫、打掛衣裳にてはんにやの面と鐵ぢやうを持ち、上の方に立つて居る。是れを押出して誂への所作色々あるべし。

長歌役人替名

一下河邊莊司行平　門之助

一富樫左衛門妹松風姫　雄次郎

長歌　湖出市十郎　柴田小源次　富士田音藏　富士田松藏

三味線　杵屋六三郎　同　喜三郎　同　左吉　同　新太郎　同　定八

小鼓　望月太左衛門　同　幸十郎

大鼓　六郷新十郎

笛　西村吉右衛門　同　彌八

太鼓　坂田仙之助　小西十兵衛

むつの花紅葉狩

谷川町のわんぱく者と、ほゝ敬つて申す。」皆々「どつこい。」岩手「よい所へ坂東太郎照早様よう來て下さんしたナア。」坂東「おゝおれが來るからはもう氣遣ひな事はなんにもない。五六を分けたと思つて落ち付いて居な〳〵。」稻毛「何だ此奴はしやれる奴ぢやァないか、坂東太郎なら實事師、依つて妃に立つべいと思つて、そこでお前へそびくのだ。邪魔だてして坂東太郎大きな目に逢ふなよ。」坂東「此のすだれちよめ、是れよう聞けよ。君を諫めるは臣下の役、夫れに汝ら箇様に非義非道を勸めるは、世の中で云ふげぢ〳〵侍。岩手姫を妃にしてよけりやァ己がする。われらが知つた事ぢやァない、すつこんでけつかれ。夫れに又此の坊主が同じ様に、いかさまの頭取株、いゝ加減に惡さをしろ。あんまりひつこくだゝを云ふとぢきとめに逢はせるぞ。」稻毛「此奴はあまり人を安くするやつだ、其のいけつ口を。」ト坂東太郎照早に掛らうとするを、かすや「是れさ入道お待ちやれ、高が赤子同然の智慧なし野郎だ、締める所で締めて見せう入道おきやれ。」稻毛「までもあんまり。」坂東「なにを。」かすや「坂東太郎。」坂東「兩人。」稻毛、かすや「後に逢ふべい。」トかぐらになり、かすや稻毛若い衆皆々奥へ這入る。岩手坂東殘る。坂東「やれ〳〵堀川の館の亂より、色々との艱難苦勞嘸かし推量致してござる。」岩手「ほんにまあ西も東も敵の中、心ならざる其の中に、夫の行邊を案ずるは、女子心のはかなさと、御推量成されて下さりませい。」ト此のきつかけに、今様始まりと呼ぶ。坂東「最早今様始まりとあれば、此所

やいやぢや。そのやうな辱めを受けうより、いつそ殺してくださんせ。自らは死にたい、いつそ姿は死にたいわいなう。」かすや「手ぬるく云へば附け上りのするどちめらうだ。此の上は我が君の御前へそびき出してくどくがいい。入道合點か。」稲毛「合點だ。」ト岩手姫が後へ廻り、稲毛「さあ岩手姫われわれと一所に。」皆々「うせやァがれえゝ。」ト引きたてようとするひやうしに、とんと梅の中より眞赤な手を出して、稲毛が頭をつかむ。皆々「やあ。」稲毛「待て〳〵今是明親王の御前へ、岩手姫をそびき出さんとする所へ、此の入道が禿頭を田夫野人につかんだが、そもまづうぬは。」皆々「何奴だえゝ。」坂東太郎「待ちやァがれえゝ。」ト是れより太鼓流し、赤面上下衣裳にて股だちとり、梅のうろの中より出で、みな〳〵を追ひ廻し花道より取つてかへし、岩手を圍ひしやんと見えになる。皆々「どつこい。」かすや「やれ待て、今岩手姫を引立てんとする所へ、白梅の中から眞赤な奴が顯はれたが、そもまづうぬは。」皆々「何奴だえゝ。」坂東「それ一陽來復の時來つて、東山梅からつん出るのも、古きを以て新しく、紅葉染めなす龍田川、眞赤な面のから紅、色も姿も吉野川、そのちとせ川音なし川、可愛川の御方を、むたいに袖を布引川、わる根性をよし川に、流しておれに粂川なら、此の場も水に隅田川、たゞしやるなと佐川なら、かたつぱしから初瀬川、いたい目見せつ湊川、身も裾川の風かはらず、清き河原の其のうちに、とつとと爰をしら川と、あくたいまじりの氣短かは、何れも樣も御存じの、長

かすや突きのけ、かすや「推參な稻毛の入道、今朝是明親王の敕命に依つて、川越太郎岩手姬此の兩人を召し來れと某に仰せ付けられ、さるによつて同道なしたる岩手姬、無體に手を取りなんとおしやる。」稻毛「いえ何とも仕らぬ、拙者がお手を取りましたは、矢張君への忠臣でござる。先へ廻るはお髭の塵、わる根性は仕らぬ、あんまり腹をお立ちやるな。」岩手「是れ若しそりやまあ何を仰しやりまするぞいな。自らが事を御存じもござりませう、九郎判官義經と申しまする大事の夫のある身の上。是ればつかりはならぬわいナア。」かすや「いやさうは云はさぬ〳〵。縱ひ鎌倉殿であべいが、綸言を背けば違敕の罪人。其の上又義經はさいつ頃より行方知れず、さすれば寡婦の岩手姬、誰に遠慮もない事だ。いやでも旦那に備へる左樣がてんしておいやれさ。」岩手「いえ〳〵なんぼうでも是ればつかりは嫌ぢや〳〵、嫌ぢやわいナア。」稻毛「是れはどうした物だ、さりとは惡い心得だ、能く〳〵物を積つて見たがいい。是明親王は一天の君、其の妃に立つ岩手姬、舅川越太郎は殊により關白職。夫れになんぞや腰拔武士の義經に貞女だて、なんぼ戀しいゆかしいと思つても、大方今頃は喰ひものに困つて、何所ぞでのたれ死にくたばつたであんべい。なんと藤太殿左樣ぢやあござらぬか。」ト此の岩手くやしきこなし色々あるべし。かすや「左樣々々入らざる事に御心中立て、なんの蚫の片思ひ。それより我々が云ふ事を。」兩人「聞いておくれ。」岩手「縱ひ此の身はどのやうになるとても、此の事許りは妾

り此の水底。」兩人「それよ。」ト兩人元の所へ忍ぶと、三味線入の樂になり、向うより粕谷藤太弓矢を持つて來る。跡より岩手姫打ちかけ衣裳にて、三方に願書を乘せ持つて出で、花道の中にて兩人鶯をきつと見て、かすや「扨も我今日是明親王を諫め奉らんと、小鳥狩の催しをなし、諸鳥を獻ぜんと思ひしに、時ならざる鶯の囀り。誠に鶯は日月星を囀る、是れまでに三種の神寶に倣へて時ならざる囀りに、是明親王の天子に立たせ給はんとの吉瑞なるか。なんにもせよ、心よき鳥の囀りぢやナア。」岩手「鶯は經讀鳥春王殿を囀れば、東宮に立たせ給はん思ひもよらず、剃髪染衣の御姿をしへの爲のあの鶯。はて面白き囀りよナア。」かすや「何にもせよ善惡二つの鶯は、今某が只一矢に。」トづか〱と舞臺へ來る。岩手もづか〱と來てかすやを隔てて、岩手「かすやの藤太有末さま、まあ〱お待ちなされませい。」かすや「はて心得ぬ岩手姫、時節ならざる音を發する梅の梢の鶯を、射て落さんと立ち寄るを、何ゆゑ止めめされたな。」岩手「さいなお止め申さいでは。時節ならぬと仰しやれども、時は一陽來復の、春待ち顔のあの囀り、なんの怪しい事がござりませう。まあ〱お待ち成されませい。」ト隔てる。かすや「いゝや其所のいた。」ト少し立廻りの内、向うより、稻毛羽織衣裳にて軍兵を連れ、「やれ參れ〱。」と云ひながらかけて出で、岩手を見付けて、稻毛「やあよい所へ岩手姫、これよりすぐに引立て此の入道が手柄にする、さあおれと一所に來な。」ト岩手姫が手を取つて引立てにかゝる。

下さんせいナア。」鷲尾「すりや其元にも行平樣に。」村雨「逢はねばならぬことあつて、態々まゐりましたわいナア。」鷲尾「いかにも某同道にて御奥殿にて行平樣に。」村雨「お逢はせ成されて下さんすか。」鷲尾「人目にかゝらぬ其の内に某と一所にサア。」村雨「そんなら三郎義久樣おまへと一所に。」鷲尾「さあござりませう。」ト鷲の尾村雨を連れて奥へ這入る。トかぐらになり以前の軍兵出る。若い衆「扨々なりに似合はぬ手ひどいわつはしめ、夫れに弱い入道樣何所へ逃げさつしやつたか捜さずばなるまい。さあ〳〵來やれ〳〵。」ト云ひながら向うへ這入る。本かぐらに成る。鷲藏忍びのなりにて義經の八龍の兜を持ち池の中より出る。梅の梢より定八忍びにて一通をくはへしづ〳〵と出で、互に顔を見合はせて、鷲藏「梢の權藤太。」定八「池淵兵内。」鷲藏「して首尾は。」定八「まんまと主君錦戸太郎樣の仰せを請け、此の館へ忍び入り、何かの樣子を伺ふ處に、是明親王の御謀反に相違ないわい。」鷲藏「いかにも某も此の義經の著せし八龍の兜を所持なして水底に忍び、委細の樣子殘らず聞いた。なんと此の兜を所持なして水の中に居れば、平地に居るも同然、なんと不思議な兜ではないか。」定八「なる程きたいな兜も有るものだナア。時に此の一通は錦戸太郎樣より、是明親王樣へ御身方に參らんとの一通、一先づこれを富樫の左衞門殿へ送り屆け、直に奥州へ。」鷲藏「出來した〳〵去りながら、最早夜も明けぬれば、人目に懸つては一大事、まづそれまでは。」定八「己はやつぱりあの梅が枝。」鷲藏「己はやつぱ

此の入道に刃向はんなんどとは、身の程知らぬすでつちめ、早くそこをなくなれ〳〵。」鷲尾「いやどこまでもやる事はならないぞ。」入道「やれめんだうなやるなえゝ。」軍兵「やらぬわ。」ト是れより早笛になり稲毛鷲の尾馬引のやうなる見えあつて、よい程に馬より引きおろし、是れより若い衆鷲の尾に蒐ると立廻りあるべし。この内に、鷲尾「どつこい。」入道「こいつはたまらぬ、逃げるがいいわい。」ト云ひながら向うへ一さんにかけて這入る。鷲の尾皆々を追ひ廻し、とゞ奥へ追ひ込むと、はや笛をうちあぐる、どんつゝになり、むかうよりむらさめ姫振袖御守殿のなりにて、文箱を持つて出る。其の供綺麗な奴の形にてついて出で、本舞臺へくると、奥より鷲の尾とつてかへし、むらさめ姫と行きあたる。姫びつくりして、むらさめ「おゝこは。」奴「何者なればおらが大事のお姫様に行き當つた、推參な奴の。」村雨「これいなア何を其のやうにとが〳〵しういやるぞいの、若しどなた樣か存じませぬが、只今の無禮のだん眞平お免し成されて下さりませい。」ト云ひながら顏を見て、村雨「やあお前は義久樣。」鷲尾「さう仰せられるは村雨どのか。」村雨「おまへは何ゆゑお越し成されましたぞえ。」鷲尾「某是れへ參りしは下河邊の莊司行平殿に對面なし、君の御和睦を願はん爲此の御殿へ伺候致してござる。して其元には何用あつて此所へは參られしぞ。」村雨「さいなア、自ら是れへ參りましたは、行平樣にお目に掛りたいばつかりに、是れまで參りましてござりまする。どうぞお前と御一所にお逢はせ成されて

見えにて馬に乘り、明松をかゝげて居る。鷲の尾三郎上下衣裳にて股立をとり、その馬の尾筒をとりてひかへ居る。若い衆大勢軍兵の形にて明松をふりて控へ居る。昌俊のうたひ、時の聲どん〳〵にて幕明く。

稻毛「はて何とも心得ぬ、今稻毛の入道重成が是明親王の敕命を請け、川越太郎重頼が姫岩手姫を引きはらはうと、かんだす馬の尾筒へとつついた奴を見りやァ、鷲の尾三郎吉久だな、何故あつて入道が馬の尾筒へとつついた。わるく邪魔をひろいだら、蹄にかけて蹴殺すが、とつととそこを除くまいか。」鷲尾「それやならない、忝くも岩手姫樣の御事は、主君義經公の北の御方、仔細あつて今日重頼殿同道にてお館へ御入りの由、是れよき幸ひの時節、何卒御兩人に御意得奉り、某諸共當今後鳥羽院の弟宮是明親王の御前にて、我が君判官義經公御身の誤りなき由を申し開かんと來て見れば、稻毛の入道重成殿に出合うたが、今にかはらぬ惡だくみ、サア其の根生よしにして馬よりおりて三拜しろ、達てじたばたぢくねると、武藏坊にはあらねども、坊主頭の鯰くび此の世の暇をとらせるが、はやく此の場を立ちさるまいか。」稻毛「是れへ〳〵ちひさい形をして大きなねごとをぶちまけたな。よくきけ、此度九郎判官義經には、奢る平家を亡ぼしたる武威に兄たる頼朝を失はんとなす由、早くも梶原是れを聞き附け頼朝公へ言上なす、是れ天下の一大事と先つころ土佐坊昌俊討手を蒙り、堀川の館へ押寄せし砌より、義經主從は行方知れず、さすれば天下の日かげもの、其の日陰者のぶんざいで、

御ひいき勸進帳

狂言作者 櫻田治助

第一番目 三建目 暫くの場

役人替名

一岩手姫	佐の川一松
一下河邊行平	市川門之助
一村雨姫	瀬川吉次
一川越太郎	中村少長
一下り松の右中辨	澤村澤藏
一正親町左少辨	中島國四郎
一信濃の小路左中辨	佐の川仲五郎
一坂東太郎照早	坂東又太郎
一熊井太郎忠基	市川團十郎
一松かぜ姫	瀬川雄次郎
一鷲の尾三郎	市川雷藏
一西の宮右大辨	宮崎八藏
一藤の森の左大辨	中村此藏
一いなげの入道	富澤半三郎
一かすやの藤太	市川純右衞門
一是明親王	中村仲藏
若い衆大勢	

本舞臺三間の間、正面翠簾屋體、東の柱紅梅、西の柱白梅、是れに人の登るやうにしてあり、尤も大きなるうろあり、舞臺先に池の體、人の出入する事あり、幕の内より稻毛の入道廣袖衣裳、ちよつぺい頭巾、大口土佐坊の

御ひいき勧進帳

櫻田治助

舞伎年代記』にも、「二番目、切られ與三郎大いに評よし。此の與三郎一條は香講師乾坤坊良齋翁自作の讀物にて、東都諸處講席に於て辯じられ、見物の諸子もよく知られし事故、大當りなり。此の外良齋著述のもの、當時戲場に仕組むもの多し。」とある。大切與三郎が島流しで夢の場となり、『島廻（しまめぐり）色爲朝』と云ふ淨瑠璃、常磐津豐後大掾、岸澤古式部連中之をつとめる。同年五月三日よりは一日通し狂言となる。「當狂言、彌生より皐月まで續いて興行せしは、三升と梅幸の手柄といふべし。」と云はれた。特に鎌倉雪の下源氏店の場は評判が善かつた。

お富の横櫛は、初代菊五郎の女房お豐のいなせな好みから江戸に流行したのを、巧みに此の狂言に用ゐたのである。

此の狂言の書替へとしては、『切られ與三』に對して、『切られお富』がある。河竹默阿彌の作で、『處女翫浮名横櫛（むすめごのみうきなのよこぐし）』と題し、元治元年七月、守田座の二番目に上演せられたのである。

解題　終

はいよ〳〵精妙に入り、悽愴の鬼氣迫るの巧みさがありて、お岩は代々菊五郎の家藝となつた。書卸しの狂言は外題『東海道四谷怪談』であつたが、其の後改訂したものに『いろは假名四谷怪談』がある。甚しい異同はなく、ともに行はれてゐる。

與話情浮名横櫛（よはなさけうきなのよこぐし）

三世瀬川如皐の作。長唄の唄うたひに伊千五郎と云ふもの、木更津にて同地の親分明石金右衛門の妾お政と私通したのを、金右衛門に感づかれ、兩人ともに縛られて、小刀にて散々切りさいなまれた。お政は隙を窺ひて繩を解き、伊千五郎を扶けて海岸に走り、押船に身を投じて、僅かに江戸に歸り、兩人にて大傳馬町の新道に所帶を持ち、其の後、伊千五郎は師匠三代目芳村伊三郎の後を承けて四代目伊三郎となつた。此の兩人の間に生まれた女の子をお富といつた。此の話は天保年間のことで、乾坤坊良齋と云ふ講談師が、之を面白く脚色して講談してゐたのを、如皐が仕組み、之に當時の惡漢蝙蝠安を取入れたのである。

嘉永六年三月十四日より、中村座で二番目狂言として上演せられた。横櫛お富は梅幸（四代目菊五郎）、與三郎は八代目團十郎、蝙蝠安は鶴藏、赤間源左衛門は三十郎で、大當りであつた。『歌

料として取入れられて、脚色されたものである。原筋は四谷左門町に住める同心田宮某の娘が嫉妬の餘りに其の身を亡ぼし、怨靈祟りをなしたと云ふのを土臺とし、之に小幡小平次の怪談を加へ、其の他市井に起つた二三の因緣話を配合し、作者の創意を以て、極めて物凄く、むごたらしく、怖ろしく作り成したのである。文政八年七月二十七日より中村座に於て『忠臣藏』の二番目狂言として、『東海道四谷怪談』と題し上演せられた。小間物屋與七、實は鹽谷の浪人佐藤與茂七、伊右衞門妻お岩、中間小佛小平、菊五郎。小鹽田又之丞、源之助。奧田庄三郎、松助。伊藤後家お弓、藤藏　高野家中伊藤喜平、孫兵衞女房お熊、宗三郎。あんま宅悅、伊右衞門親鹽谷浪人新藤源四郎、門藏。浪人秋山長兵衞、善次。同關口官藏、藥賣五文藤八、染五郎。中間伴介、手代飛助、醫者市ヶ谷尾扇、庵主淨念、尾上扇藏。小平倅次郎吉、藤十郎。民谷一子伊之介、尾上鏡助。伊藤娘お浪、岩井春次。宅悅女房おいろ、長四郎。水茶屋おまき、半十郎。乳母おまき、おの江。お岩親四谷左門、蟹十郎。小平女房おはな、菊次郎。小平親佛孫兵衞、しやばく。お岩妹揚枝店おもん、實は與茂七妻お袖、粂三郎。藤八五文藥賣直介、後に鰻ほり權兵衞、幸四郎。鹽谷家浪人民谷伊右衞門、團十郎。赤垣傳藏、傳九郎。いづれも大出來大當り大評判にて九月十五日まで興行した。文政十年九月十三日より中村座に於て、三世菊五郎はお岩を演じてゐるが、技

ひ、京都にて清水清玄行力櫻とも外題しけり。文化に坂東彦三郎清玄をせし時、戀詣清水櫻と賦し、市川團藏せし時は清水清玄契約櫻と呼ぶ。故歌七二十五回忌追善に、三代目歌右衛門(梅玉)せし折は、傾城釣鐘櫻、天保に四代目歌右衛門のせし時は、けいせい人相櫻と賦しけり。總體清玄は清水場と庵室の場より外に狂言なく、跡は執著の所作事となれば、一日の趣向に足らず、故にいつも抱合はせの狂言は變ると知るべし。」とあるが、抱合はせの狂言は多かつた。

『隅田川花御所染』は文化十一年三月、江戸市村座にて上演したもので、吉田の松若丸、入間の局岩藤、下部軍藏は市川團十郎、粂の平内左衛門長盛、實は後藤兵衛盛長は松本幸四郎、入間の姉姫花子の前、後に新清水の清玄尼、尾上召仕お初は岩井半四郎之をつとめ、女清玄は大當り、大切淨瑠璃『都鳥名所渡』は常磐津連中であつた。此の年には三月七日より中村座にて、『花雲宿(はなのくもやよひの)色衣(いろごろも)』と題し、吃又と清玄との抱合はせ狂言があつて、坂東三津五郎が清玄と吃又とを上演してゐる。

いろは假名四谷怪談

四世鶴屋南北の作で、古今怪談劇の翹楚とも稱すべく、最も名が高い。此の作は色々の物が材

隅田川花御所染

四世鶴屋南北の作で佳作と云はれてゐる。清水清玄を女にして之に隅田川及び加賀見山を配合したものである。此の清水清玄の出所は明らかでない。『脚色餘錄』に、「洛東音羽山清水寺の僧清玄墮落せしといふ事、寺記及び實說といふ書見當らず。是れは彼の志賀寺の上人、京極の御息所に戀想せしを、今樣に作り設けしものか、寛保元酉年に文耕堂の作せし新薄雪物語の清水の場へ清玄をさしこみ作れる物か。」とあるが如く詳かでない。淨瑠璃の古いものでは、土佐少掾の『一心二河白道(びやくだう)』があり、歌舞伎の古いものでは、津打治兵衛の『婚禮音羽瀧』がある。『婚禮音羽瀧』は享保十二年三月、江戸中村座にての上演、清玄は宗十郎、字津美新太郎は幸四郎で、清玄を殺す所大出來であつたと云ふ。其の後の清玄劇で、後世に型を殘したのは、寶曆十二年七月、大阪三桝大五郎座に於ける『清水清玄六道巡』の中村歌右衛門(加賀屋歌七)が演じた清玄であつた。作者は竹田治藏である。之を淨瑠璃に移したものは、明和二年九月竹本座上演の『菊池大作婣(こんれい)袖鏡』で、作者は近松半二、三好松洛等であつた。岩倉宗玄が折琴姫に墮落すると云ふ趣向で、宗玄、清玄仕組は替れど、趣は同じである。『脚色餘錄』に云ふ、「されば清玄は加賀屋歌七にかぎるやうに思

りがけに突然拔劍して、下女の萬に切りつけたるを初めとして、血に渴した猛虎の如く、逃げ惑ふ女や男を手當り次第に殺傷し、卽死二人負傷七人を出したと云ふ大慘劇が演ぜられた。此の報が一たび大阪に傳はると、德叟は僅かに三日にして脚色し、七月二十五日より、角の芝居にて上場した。役割は福岡貢、中山文七。女郞お紺、芳澤いろは。料理人喜助、嵐雛助。萬野、正直正太夫、中山文五郞。藤波左膳、關三右衞門。藍玉屋北六、工左衞門。德島岩次、松五郞。お岸、叶珉子。今田萬次郞、重太郞で、此の狂言大當りであつた。江戸では、文化五年二月五日より、中村座にて二番目として、『伊勢十人切』の外題にて上演、福岡貢、彥三郞。同伯母お米、仙女。料理人喜助、男女藏。下田萬次郞、七三郞。左膳、雷助。御師、正太夫、仲居おまん、音八。孫太夫娘榊、龜三郞。下部林平、鬼次。杉東大藏、坂東七藏。おこんは路考であつた。これについでは、文化九年四月十四日より森田座において、二番目『伊勢音頭戀寢刃』として、福岡貢を重太郞、藤沼左膳を紋十郞、料理人喜助を友右衞門、植木圭水を勇次郞、貢伯母を三右衞門、孫太夫娘さかきを龜三郞、おこんを坂東花妻、正直正太夫を紋治が演じてゐる。

此の作には近松門左衞門の『長町女腹切』の影響もあるし、多少寄木の感もないではないが、一夜漬の際物としては、手際よく出來榮も善いので、屢演出されて今日に及んでゐる。

り毎日大入であつたから、此の四つ目だけを裂いて、『五大力戀緘』と題したのである。五大力とは其の頃の流行神で、書狀の封じ目に五大力と書いて送る時は、他見を忌んで、滯りなく先方に達するとて、花柳社會などにては專ら流行したのである。五瓶は東下して、寛政七年正月都座にて『江戸砂子慶曾我』の二番目に江戸の場面に書き替へて、『五大力』を出した。出石宅右衞門、大谷廣次。さゝの三五兵衞、片岡仁左衞門。さつま源五兵衞、中村宗十郎。小萬、瀨川菊之丞。藝者廻し彌助、龍藏。若黨八右衞門、坂東三津五郎。お此、のしほ。宗十郎大評判にて近來の大入大當りで、七十餘日打ち通した。長唄のめりやす『五大力』は此の時に出來たのである。

三下り「いつまで草の、いつまでも、〽なまなかまみえ物思ふ、〽たとへせかれてほどふるとても、緣と時節の末を待つ、〽何としよう、〽互の心打解けて、うはべは解かぬ五大力、〽さはさりながらかはる色なき御風情、やがて逢はうぞえ、〽語ろぞえ、惜しき筆とめそろかしく。

伊勢音頭戀寐刃

近松德叟の作。寛政八年五月四日の夜、伊勢古市の靑樓油屋にて、醫師の孫福齋宮なる遊客、相手の酌婦お紺と云へる少女が他の座數へ呼ばれて行きたるより、酒亂の癖むら〳〵と發し、歸

打臥してゐた菊野ととめとを斬殺し、續いてとめの夫十兵衛と下女二人を切り倒し、船に乗じて歸國の途に就いたが召捕へて獄に投ぜられ、翌年二月十二日死刑に處せられた。此の五人斬りを淨瑠璃に作り、寶暦七年九月、吉田冠子、竹田小出雲、近松半二、近松景鯉、三好松洛等合作し『薩摩歌妓鑑』と題して演出した。木偶遣ひの名手吉田文三郎がつかふ八右衛門の人形、夜な〳〵樂屋にて動くとの評判があつた。歌舞伎では『國言詢音頭』と題し、また『薩摩歌五人切子』と外題をかへたが、さまでの當りでもなかつた。安永六年、淨瑠璃にて、『置土産今織上布』と外題したものを、歌舞伎に取立て、寛政元年、大阪中の座にて、辰岡萬作が『初嵐元文噺』と題し、大當りを取つた。早田八右衛門事、佐久間源五兵衛は柴崎林左衛門が勤めた。五人切りの所は吉田文三郎の操人形にてした通り、死骸の腹の疵口へ思はず足を蹈み込み、足元に臓腑を引つかける思入は物凄く、見物身の毛もよだつばかりであつた。

　此の曾根崎五人切りの狂言は、近松門左衛門の『源五兵衛おまん薩摩歌』が取入れられて、名前は近松が作中の人物に假りてゐる。並木五瓶は寛政六年二月、中の座の二の替りに『島巡戯聞書』とて、島津の琉球攻の狂言の四つ目に五人斬りを仕組んで、勝間源五兵衛、尾上新七、笹野三五兵衛、片岡仁左衛門、藝子菊野、芳澤いろは、之を勤めたが、四つ目以前は不評で、四つ目富市の場よ

のが、大阪北の新地曾根崎三丁目大和屋十兵衛夫婦及び櫻風呂抱へ菊野と云ふ女郎と、下女二人併せて五人を慘殺した。菊野は八右衛門がわりなく云ひ寄るのを柳と受け流し、衣服初め色々と出來るだけの無心を吹きかけて、扱買ひ調へさせしものの、遂に其の意に從はず、日柄紋日は八右衛門にしまはせて、情夫の堂島中町錢屋善兵衛と忍び逢つてゐた。當時郭中にてこれを流行歌に作りて「させ〳〵というてもあらい薩摩櫛すかぬ此の身は縦へ身をけづるとしてもときやせまい。」と歌ふ者さへあつた。八右衛門之を無念に思ひ、おのれ賣女めたゞ一討と心に逸つたが、從僕伴助に諫められて、思ひ止つた。偶歸國の日迫り、出立の前日、知人に別れを告げんと、諸方を廻つて、到る處で別杯を酌みて酩酊し、醉步蹣跚として曾根崎郭中に赴き、大和屋十兵衛方を音づれたるに、十兵衛妻とめは、過ちあらせじと、菊野は京に赴いたと告げた。八右衛門は暇を告げて、郭中を徘徊する折ふし、菊野が大和屋へ行くのとはたと摺れ違つた。八右衛門はあとを追うて、大和屋へ取つて返し、聲荒らげて、妻とめの虚言を責めたが、とめは菊野ではなくて他し女なりと云ひて、二階に菊野と同座してゐた湊と云ふ女郎を引合はせた。八右衛門は態と面を和げ、いかさまさう聞けば、身共が見違にきまつた、もうよい〳〵と機嫌を直し、又新地中をうろついて、夜の更けるを待ち、丑三の頃、時分はよしと立戻り、下座敷に闖入して、蚊帳の中に

を取置に差圖して、序の御殿の引道具、切の淀の大廻りは、誰しも舌を卷きたる手段、此の時も銀主大きにたんのうして、其の跡くりかへしの信仰記。」とある。此の狂言の筋に就いては、『傳奇作書』に「安永元辰年角の芝居二の替り狂言艘始の作者は、並木正三にて、是れはさして實說に基き工みたる狂言ならず、唯淀川筋にある、地名をよせて、平太の番所、源八の渡と、開發人の名より思ひ付きて、關口平太、神道源八と武士の名に作りまうけて、淀與三右衛門と云ふ捌き役の相手、實惡の名に事かきて河村瑞軒は此の川筋を浚ひし緣あれば、敵役に遣ひしより、婦女は惡人の樣に思ふ。瑞軒の不幸なるべけれ。(中略)其の後に此の世界の人名を用ゐる、『花艘淀川話』『けいせい戀艘』『夏粧淀川堤』などの增補狂言もありけり。」とある。

江戸にては、天明九年、市村座にて興行、信田の左衛門晴之、二役淀左近之助、團十郎、小山の判官と關口平太、爲十郎、信田の奥眞弓御前と、筑波のおたね、瀨川菊之丞、鹿島勘三郎と神道源八、宗十郎、源八女房みふねと御影堂のおくみ、岩井半四郎で評判がよかつた。

五大力戀緘(こひのふうじめ)

並木五瓶の作で、名作と稱されてゐる。元文二年七月二日の夜、薩摩の侍早田八右衛門なるも

け、新たに致させ、『樓門五山桐』と『おはん長右衛門』の間にて相勤め奉り入御覽候。」とあるが、元祖團十郎の武藏坊辨慶と云ふのは、元祿十五年二月二日より中村勘三郎座にて勤めた『星合十二段』四段續きで、大入大當りで百五十日間の興行。これは才牛自作の狂言で、見物は夜のうちから羣集して、棧敷も切落も、見物の人安心して見ることが出來ぬほどの雜沓、星合でなくて、おしあひだとの大評判であつた。其の歲七月からは『新板高館辨慶狀』で、これ又大當り。此の度は二人辨慶であつた。『御攝勸進帳』はそれより百二十餘年を經ての興行である。猶壽勸進帳の事は『歌舞伎十八番考』に精しい。

三十石艠始（よふねのはじまり）

初代並木正三の作。寶曆九年春、大阪中山文七座にて、中山新九郎の花滿憲法、中山文七の神道源八、三枡大五郎の關口平八で興行されたが、特に文七と大五郎とは始めての顏合はせであつた。『並木正三一代咄』に、「古今の大々當り、文七、故大五郎始めての出合はな〳〵しく、大切に砂舞臺共一面の廻り道具を工夫し、芝居は極月上旬より下屋をほり、この大仕掛、法善寺牀の前なるだら〳〵おり、又濱千日角のだら〳〵おりまで、皆此の上にて平地となし、破風口の大臣柱

人の勸進帳を換骨奪胎したものであらう。

首の芋洗などは、金平の名殘の江戸荒事であるが、稚氣滿々たることは云ふまでもない。天保十一年三月河原崎座に於て、三代目並木五瓶が脚色した歌舞伎十八番の『勸進帳』が演出せられ、七代目團十郎(海老藏)に依りて辨慶がつとめられた。卽ち元祖市川團十郎才牛百九十年の壽歌舞伎十八番の內『勸進帳』、武藏坊辨慶、海老藏。判官義經、團十郎。常陸坊海尊、市藏。片岡八郎黑猿。駿河次郎、海猿。富樫左衞門、九藏。長唄、芳村伊十郎、岡安喜代七、芳村金五郎、岡安喜久三郎。三絃、杵屋長次郎、岡安若三郎、杵屋彌七、杵屋三五郎。長唄、岡安喜代八。笛、福住長五郎。小鼓、六郷新三郎。大鼓、小泉長次郎、同六郷新十郎。太鼓、望月太左衞門。振付、西川扇藏。三絃、一世一代杵屋六三郎相勤む。海老藏の口上書に、「私先祖より傳來候歌舞伎十八番の內、安宅の關辨慶勸進帳の儀は、元祖市川團十郎才牛初而相勤め、二代目團十郎栢莚までは相勤め候へども、其の後打絕え候故、私多年右之狂言心掛け種々古き書物等取集め相調べ候處、此の節漸う調べ候につき、幸ひ元祖才牛儀當年まで百九十年に及び候間、代々相續之壽二百年の賀取越しとして、右勸進帳之狂言相勤め申し候。右勸進帳之儀は外記やうのものにて、餘り古代に相成り候間、幸ひ杵屋六三郎儀は私幼年よりの朋友、此の度一世一代として、三絃手事ふしづ

安宅松』を書いてゐる。卽ち長唄の『安宅松』で、

落葉かくなる、里の童の、野邊の遊びも、餘念なく、こりや誰が月つき、ちつちや子もちや、かつらのは、ちんが〱ちんがらこは、しりはしり〱、ついてさきへ行くのは酒屋のおてこ、あとへさがるは、狼狐、あまがべに付いて、とゝやかゝにいはふよ、いうたら大事か、そつてくりよ。坊主々々大坊主。云々」

と、辨慶が落葉搔きの里の童に、路を尋ねると云ふ趣向である。

『勸進帳』は、固より謠曲『安宅』に出たものであるが『安宅』は、『義經記』の記述を作り替へたのである。『義經記』では、富樫の館にてのこととなし、關は荒乳、安宅は渡である。「安宅の渡を越えて、根上の松に著き給ふ。是れは白山の權現に法施をたのむ所なり。いざや白山を拜まんと岩本の十一面觀音に御通夜あり。明くれば白山に參りて、によたいこうの宮を拜み奉らせて、其の日は劒の權現に參り給ひて、御通夜ありて、夜もすがら御神樂參らせて、明くれば、みやしの六郎光あきらがせとを通り給ひて、加賀國富樫といふ所も近くなる。富樫の介と申すは當國の大名なり。鎌倉殿より仰せは蒙らねども、内々用心して、判官殿を待ち奉るとぞ聞えける。」とありて辨慶唯一人にて富樫の館に赴き、勸進帳を讀むこととなつてゐる。之を安宅に作り替へ、辨慶が金剛杖にて義經を散々に打擲する趣向は、謠曲の働きである。然し『義經記』の勸進帳は、文覺上

次すけ家、勘左衛門なり。幸四郎、義經にて山伏姿、備前の平四郎に綱藏、ひだち坊、嵐音八、するがの次郎、門之助、伊勢の三郎、又太郎。五人何れも齋藤次に咎められし所、跡より辨慶にて海老藏出、勸進帳を讀み、五人を通し、我は人質にしばられ、大勢に嬲られ、もう二三里も行きし時分と聞き、繩を引切り、門を打破り、皆々一度に首を切り、水溜桶へ入れて芋洗の幕。市川流の狂言大でき。大詰、岩倉山不動明王の靈像、團十郎、二番目藤原の秀衡、傳九郎、同總領錦戸太郎、富澤半三、二男伊達次郎、仲藏、三男和泉三郎、幸四郎、生醉にて疊のまゝかつがれて出る。鎌倉より上使梶原家來姉輪平次、海老藏なり。三郎に性根をつけんと、刀のむね打を留む。中間奴の形(なり)にて四男元吉四郎、廣次、つめ合よし。四郎妹しのぶ、半四郎、後に岩手姫の身替り、三郎、義經の身替りに立ち、海老藏ひら敵の仕内首を持つて花道へ行く。半三、仲藏出、似せ首持つて行くかといふ時、贋首がてん、本田、半澤まゐれといふと、揚幕より純右衛門、雷藏上下股立にて左右に附き、さし替の大小を出し首桶を兩人請取ると、鎌倉の三老秩父の莊司次郎重忠とは知らざるか、たはけ者めらと、誠に勇氣備はりて見ゆるとの大評判。役者揃といひ、十町中村座初めての勤め、何れも大當り大入なり。」とある。

治助は是れよりさき、明和六年十一月、江戸市村座顏見世狂言『雪梅顏見勢(むつのはなうめのかほみせ)』の大切に、『隈取

御攝勸進帳

初代櫻田治助の傑作と稱せらる。安永二年十一月、江戸中村座にての顔見世。辨慶は市川海老藏、富樫左衞門は五世團十郎、義經は四世松本幸四郎これをつとむ。『歌舞伎年代記』に、「熊井太郎忠基、團十郎、後鳥羽院おとゞ宮惟明親王、仲藏にて、岩手姫、市松、川越太郎、少長、下河邊行平、門之助、松風に雄次郎、村雨に吉次、五人の首討てと云ひつけられ、又太郎、坂東太郎にて、今が最期觀念といふ所へ、しばらくと聲をかけての出、花やかなり。此の顔見世より評判記に、上上吉圖市川團十郎とあり。次に秀衡娘信夫、半四郎、女馬士、義經に幸四郎、直井の左衞門に廣次、眞赤にぬり立てせり出し。團十郎はかしまの事ふれ、實は御殿の喜三太にて淨瑠璃(色手綱戀の關札)富本豐志太夫、富本喜太夫、三味線名見崎德次。一番目四立目大評判。次に富樫の左衞門、團十郎、古金買長兵衞、實は備前守行家、友右衞門、女房およし、崎之介、寶屋の若松、實は鷄の精、中村里好(松江改名)、兩人黑仕立の形にて忍び提灯を持つて出る所、廣次上下花やかに出、「待世々顔見世のお定まり、赤い男に黑んぼう、珊瑚珠とりを見る樣な、ほつてりものに後かけ。」といふせりふ。見物の評判よく、皆覺えて是れをいふ。安宅の關守富樫、團十郎、齋藤

如皐があつた。其の作る所の『與話情浮名横櫛』と『東山櫻莊子』とは大當りで、好評の嘖々たるものがあつた。然し幕末から明治前半期の劇壇を席卷するの勢ひありて、餘勢猶今に及んでゐるものは、實は二世河竹新七、卽ち默阿彌である。彼は日本橋通三丁目の質屋に生まれたが、少時、京橋尾張町の貸本屋の丁稚となり、遂に五世南北の門に入り、初めは勝諺藏と稱し、後に斯波晉輔と改名し、更に二世新七の名を襲いだ。其の長ずる所は世話物で、極めて寫實であつた。因果應報に因はれ、勸善懲惡に律せられて、厭ふべき點も少なからずあつたが、場面の變化に富み、更に觀客をして飽かしめなかつた。市井の出來事も、彼に逢へば、劇化されずんば已まなかつたのである。其の著はす所『吾嬬下五十三驛』『夢結蝶鳥追』『梅雨濡仲町』『蔦紅葉宇都谷峠』『鼠小紋東君新形』『網模樣燈籠菊桐』『絲時雨越路一諷』、『江戸櫻清水清玄』『小春宴三組杯』『小幡怪異雨古沼』『三人吉三郭初買』『八幡祭小望月賑』『龍三升高根雲霧』『青砥稿花紅彩畫』『月見曙名畫一軸』『勸善懲惡覗機關』『三題噺高座新作』『玆江戸小腕達引』『曾我綺俠御所染』『若葉梅浮名横櫛』『小春穩沖津白浪』『鶴千歳曾我門松』『月缺皿戀路宵闇』『處女評判善惡鏡』『怪談月笠森』『上總棉小紋單地』『富士三升扇曾我』『櫓太鼓鳴音吉原』『善惡兩面兒手柏』『新累千種花染』等がある。明治二十六年一月二十二日歿した、享年七十八。

三升屋二三治は、元淺草御藏前の相應の暮しの人なるが、此の道に入りて終に業を捨て今に存命なり。祖父南北と親しみ深く、互にをかしき新しき趣向を負けじ劣らじと思ひつき、果ては厭がらせる事のみを案じて、或秋、南北風邪の心地として臥し居たるを見て、二三治宿所へ歸り、其の頃奥詰御醫師に吉田快庵と云ふは、二三治至つて心易ければ、かの御典醫を頼みて、本位にて南北が住所高砂町の裏店へ長棒の乘物にて行き、南北病氣ゆゑ二三治より頼みによつて見舞ふと、案内させて入りければ、南北驚き、牀の上より這ひ出で、恐れ敬ひ誤り入る。典醫は御立ちにて、跡に若黨仲間兩人殘り酒代を乞ふ。南北再び惘りしていかゞしてよからうやら、始めて御典醫の御見舞に預り、當り付かねば、いか程と問ふに、若黨何れの町人にても金百匹なりと云ふに、仕方なく一歩出してかへし、此のいたづらこそ正しく二三治が思ひつきにぞむしやくしやして、二三治、白銀清正公へ日參して、聖坂に大野屋と云ふ水茶屋あり、爰に美しき娘ありて、一兩度爰に休むをはや浮名に立つ。南北是れを聞いて、其の名と二三治の名の書紋を聞き出し男女の比翼紋つきたる提灯を清正公の神前へかけさせ、諸所の近付へ風聽して、二三治を困らせしは以前の醫師の返報とぞ知られし。かかる馬鹿々々しき咄のあるを歌舞伎作者とも云ふべし。年々人世事賢くなり行いて、風流滑稽ある人を聞かず。

三世櫻田治助は、幕末から明治の初めにかけての作者で、機智があつた。其の門下に三世瀬川

狂言に目が屆き、仕組入組み面白し、筋は屆かぬ事あれど、時代違を組合はせる事上手にして、親の片腕に役者の内より、さま〴〵の狂言工夫して、筋書を出して與へる、筋書の名人、是れにて、役者を欺して納める、中にも半四郎七役のおそめ、早替り女清玄など工夫して、松緑夏芝居幽靈の仕掛物は、皆鶴十郎の相談趣向至つてよし、工夫を增して考へ、いろ〳〵のこんたん外の人には及ばぬこと、一年三座の達作者一人にて勤めしも、餘の人の是れ又及び難し。其の上仕組にかゝり、早き事早手廻し、夫故七代目團十郎抔の相談手助かりして、めつぼふかいの思付き、又は惡る思付き有つて不評を受けた事あり。」と評してゐる。南北の壻に勝兵藏あり、初め龜山爲助と云ひ、後に素人となり、富の札賣をなし、奥山の芝居へ手を出して失敗した。其の養子を五世南北とする。幼名は丑左衛門、鶴屋孫十郎と云ひて役者であつたが後に狂言作者となつた。四世南北の門人に槌井兵七(後に增山金八)、勝周藏(後に勝井源八)、花笠魯助(文京)等があつた。二世瀨川如皐、本屋宗七、福森久助、松井幸三、立川焉馬等は何れも狂言脚本に筆を執つたが、其の中で、歌舞伎に關する隨筆の著を以て知られたものに、三升屋二三治があつた。『作者店おろし』は此の人の著に係る。其の他、『戯場書留』『紙屑籠』『妓川袋』『歌舞伎品定』等、いづれも劇界音曲界のことを知るに參考とするに足りる。傳奇作書に彼と南北との插話を載せてゐる。

後者は全く一場の落語に出來てゐる。然し此の蚊帳の一條は、後に南北これを四谷怪談に利用してゐる。

南北は常にこのんで棺桶を狂言に用ゐるより、棺桶の出る狂言を見れば、作者は南北なりと江戸の見物は稱した。文政十三年十一月二十七日、深川黑稻荷の地内にて歿した。行年七十五歲。豫め正本仕立にて、『寂光門松後萬歲』と題した自己の葬儀を綴つた册子を作り置き、之を會葬者に頒つた。外題には「菩提所は本所押上春慶寺」と書し、廻向の際に南北が萬歲を舞ふと云ふ、頗る洒落氣の多いものである。其の著はす所に『心謎解色絲』『當秋八幡祭』、『お染久松色讀販』『會我祭俠競』『隅田川花御所染』『復再松綠刑部話』『新織博多縞入船』『妹背縁利生組絲』『松竹梅東鑑』『惠方會我萬吉原』『梅柳若葉加賀染』『梅曆曙會我』『三賀庄會我島臺』『敵討櫓太鼓』『現金浮名糶』『浮世柄比翼稻妻』『造物梅の由兵衞』『大和大和花山樵』『初冠會我皐會我』『東海道四谷怪談』『鬼若根舞臺』『舞扇千代の松稚』『紫女伊達染』『會我中村秋取込』『獨道五十三驛』『雪御伽平家』『紅葉鹿封文會我』『金幣猿島都』等がある。其の子を坂東鯛藏と云ひ、後に坂東鶴十郎と稱して、俳優であつたが、やがて俳優をやめ、深川櫓下で妓樓を營み直江屋十兵衞と稱し、父の名勝俵藏をつぎて狂言作者となつた。『作者店おろし』に、「役者出故

章猥褻の最も顯著なる例である。『作者店おろし』に、彼の逸話數箇條を載せてゐるが、其の中、最も可笑味のある表札と蚊帳とを擧げる。

南北は、本所龜戸村植木屋淸五郎の鄰に借地をして、表に小門を建て、表札に南北とばかり印す。龜戸村は在方故、近所にて表札を見て、どこから越してござつたおかたなどと云ふ內、此の年はやり風にて、村中醫師を賴むにも、龜井戸橋の向うまで行かねばならず、幸ひ此の頃おらが村へ、よいお醫者さまが引越して來たと悅ぶもをかし。

俵藏のむかし、高砂町に住む時、昔机に向ひ書物にかゝりゐる時、女房の釜の下を焚付けて、もし湯が沸きましたが、米はどうなさると云ふ。此の事聞きつけず、やはり書物により掛り居る故、又女房、米はどうなさると云ふ。此の催促に俵藏ぢれて、今少し待てと云ふ。薪が無駄になりますと云ふ故、又むつとして忌々しいやつ、ドレとつて來ようと、筆を捨てて立ちかゝる。秋の末の頃なれば、錢はなし、戸棚を明けて、蚊帳を引出し、其のまゝ抱へて下駄をはき驅け出して橫店の大黑座へ行く。四つ角に知つた人に出合ひ、俵さんどこへ行きなさると呼びかけて、其の人俵藏が顏を見れば、顏色變り、癇癪の體ゆゑ、又もや不審に思ひ、どこへ行きなさると、問へば、ハイ殺しに行きますと云ふ。是れにて其の人は猶更悔りして、マア待ちなさい殺しに行くとはどういふわけで。俵藏、イヤサ今蚊帳を殺しに行きますと云ふ。

かくのに其の畑を渡せと書き、旗と畑との文字違ふ、又打出しに、待つ今日は是れぎりと書く、是れもまづといふ事、待つと書くも不思議。」と、彼は學問の素養がなかつたのである。然し世話狂言は、彼の得意とする所で、善く人情の機微を穿ち、江戸つ子の氣に投ずる事の妙を得た。又舞臺裝置の工夫、早變り抔に巧みで、特に彼が好んで描いた怪談物は、此の技巧と相待ちて、凄愴を極めたのであつた。『傳奇作書』に評して、「鶴屋南北は東都近來世話事作りの作者にして、此の名始め三代が間は半道(道化交りを云ふ、ちやりやくなり)の役者なりしが、四代目を勝俵藏と呼び、狂言道に入つて後、滑稽道化場を能く書く。後、舅の名を繼ぎ、鶴屋南北とて、立作者とはなりけり。此の人肚裏に一字の文學なけれど、狂言に一流あつて、入組みたる出し物あれど、筋からみ合つて新しく、これを氣世話と稱へて、其の頃の人氣に叶ふ。其の上、松本幸四郎、二代目の高麗や、坂東三津五郎(大和屋秀佳)、岩井半四郎(杜若)、此の三人の役者の呼吸をよく知り、二番目狂言を著はせし事數多く、中にもお染久松色讀販(うきなのよみうり)(半四郎七役なり)、東海道四谷怪談、古今の當りを取れり。隅田川花御所染は一番の佳作にて、浪華狂言にも相似たる脚色なり。其の餘は文章猥褻にして、所謂江戸狂言とて、一部の趣向立ちたるもの稀なれども、近世の癡情にや叶ひけん、南北風とて一時作名を高くせり。」と云つてゐるが、『獨道(ひとりたび)五十三驛(つぎ)』の如きは、文

屢家を移轉するを好み、老後は辨天山にて歿した。其の花川戶にすまひせし時、柳の井の鄰家なるゆゑ、柳井鄰と稱した。文政三年六月二十七日、七十三歲にて逝く、法名は默了院左交日念信士、下谷わら店法養寺に葬る。生前に淨瑠璃塚を建てんことを願つたが、其の志を遂げなかつたので、友人門人、翌年六月、一週忌に際し、柳島妙見の境內に辭世の句、

花淸し散つても浮む水の上

を碑面に刻して淨瑠璃塚を建てた。門人に笠縫專助(米夫)、村岡幸治(龜玉)、木村園治(園夫、後に紅粉助)、曾根正吉、淸水正七(左曉)、松島半二郞ち二代目櫻田治助等がある。

『芝居乘合船』の作者なる中村重助、常磐津の淨璃瑠『積雪戀關戶』の作者として知られてゐる寶田壽來、瀨川如皐、增山金八等、江戶作者の數は多くあつたが、治助以後に於ける大立者は四世鶴屋南北であつた。鶴屋南北の家は初代より三代まで道化方の役者であつたが、彼は三世南北の娘お吉を娶つたので、四世の名を襲いだのである。江戶乘物町紺屋海老屋の子で、源藏後に伊之助と云ひ、金井三笑の門に入りて、勝俵藏と號した。『作者店おろし』に云ふ、「勝俵藏、見習に出た時より追立に隨ひ、金井三笑を師と賴み、三笑風を專らにして、出世立身して大作者となる。高名も全く三笑が影なり。此の人文字の働き見えず、俵藏の昔より、その旗渡せといふせりふを

右の炭を火鉢へ入れ、火をくわつ〳〵とおこしてあたる。小綱町通り行き合ふ家根船、深川かよひの客など、あれ小舟に炭をおこし、櫻田が乘つてゐる、暖(あつたか)いいい思ひつき、きつい櫻田ぢやねえかと云はれると、是れ評判の第一とする趣向なり。

葛西のせんざい賣、南瓜を籠に入れ、長屋へ賣りに來る。内より左交立出で、もし南瓜をみんな買ひませうと、錢を出し、殘らず買取つて、其の内南瓜二つ殘して、これ〳〵この二つはどこぞへ持つて行き、賣つて行きなさいといふ故、商人びつくりして、なぜ又二つ殘して買ひなされませぬと云ふ。いや其の二つは酒手に進ぜませうといふ故、此の商人嬉しく、夫れは有りがたうござりますと、荷を擔ぎ、又町内の長屋へはひり、今殘らず南瓜を買つた内は、何商賣か聞きたいと、路次口に立つてゐたかみさんに、もしあそこの酒屋の裏の三軒目の内は、何御商賣でござりますと聞けば、其の女房、三軒目の家なら、櫻田治助といふ狂言作りの内だと云ふ。是れにて葛西の商人田舍へ歸り、村中へ櫻田の噺せし事、全く南瓜の總仕舞にて名を賣りし工夫なり。

淺草の地内、辨天山の池のはたに住みし時、戸棚の内に後口へ穴をあけてあり、いかゞと問へば、この内の米びつへ米を入るとき、二朱が米見ぐるしく、前の戸棚の戸開けた時、米屋が來た事人に知れる故、うしろへ穴明けて米を入れる魂膽、至つて見榮坊と知るべし。

左交は吉原好きにて、夜毎に這入らねば寐られぬと云ふ人、仲の町を一遍通りて、兩側の茶屋の女房呼びかけるのを嬉しく思ひ、江戸町より二丁目、京町の格子で噺して、馴染の女郎、あそこからも、爰からも左交さん〳〵と云はれたく、新造禿に仇口云うて、中にも鶴屋の見世で、未だ知らぬ花魁一人有りて、どうかしてあの花魁に物云ひかけられたいと心に思うて趣向して、其の春の正月に、作り花の梅の枝に文を書いてくゝり付け、懸想文の心にて、名宛をして、こま〴〵と認め、格子から梅の枝を内へ投げ込み、あしたの晩又格子へ立つて、其の女郎立つてもしえゆうべの御返事をと云はれて、逃出せし話も可笑し。（此の話は『傳奇作書』には、異なつて傳へられてゐる。即ち、「又其の頃左交、吉原丁子屋に思ひを懸けたる女郎あり、何卒これに近づきになりたしと、種々心を碎き、ふと思ひつきたる淨瑠璃の心を思ひ、作り花の梅が枝に文を書き結び付け、懸想文の見立にし、自分かたげて丁子屋の格子へ投げ込みければ、女郎皆々寄り、騷いで文の名宛を見れば、誰の君さまへ櫻田と書きあれば、流石の全盛丁子屋の名のほまれと、部屋に飾り、女郎より櫻田へ返事を送りし事ありとぞ。是れよき年をして眞の戀にあらず、流行に遲れじと、我が名を高く廣めんが爲なり。これ等は餘人の思ひよらぬ名弘めならずや。」と。いづれにしても治助が名を賣るに汲々であつた例である。）

顏見せに、花川戸より木挽町へ行歸りとて、江戸橋から小船に乗り、船宿へ錢を出して、炭一俵買うて、

『伊達競阿國歌舞伎』『瞻雪榮鉢木』『吾嬬森榮楠』『戯場花萬代曾我』『室町殿榮花舞臺』『四天王宿直著綿』『七種粧曾我』『伊達染仕形講釋』『江戸花三升曾我』『雪見月榮花鉢木』『契情吾妻鏡』『花柄天神利生記』『平家評判記』『春錦伊達染曾我』『女達高麗屋經緯』『松太夫雪伊達染』『富士三升幸曾我』『戻橋綱顔鏡』『名歌德三升玉垣』『初紋日粉飾曾我』『越路花御江戸俠』『幡隨長兵衞精進俎板』等がある。また常磐津節淨瑠璃に文章の妙をあらはして、其の作るところ百二十餘番、『其俤淺間嶽』『戻駕色相肩』『身代りお俊』『高尾懺悔』『信田妻容影中富』(葛の葉)『お半長右衞門』等、世に知られたものが多い。其の師壕越二三治にも、常磐津節の淨瑠璃が少なからずあつた。『介川紅葉柵』『我衣手蓮曙』(高野心中)『牀杯晌水仙』『妹背塚松櫻』(八つはし、又は二人淺間)『松似候男姿』(松風)『花吹雪富士菅笠』(富士太郎)等である。『傳奇作書』の異本に、「この櫻田左交は壕越二三治の門人にて、師の薺陽も豐後淨瑠璃を數冊著はして其の名高し。左交、師薺陽の文句を和げて、當世に演べたるこそ此の人の才智と云ふべけれ。」と云つてゐる。『作者店おろし』に、「左交は松本幸四郎錦江を慕ひて、幡隨院長兵衞など、白の口合に妙を得て、世話狂言の時代違趣向を取組んで面白し。」とあるやうに、彼の作は警句に富んでゐた。彼の逸事に就いては、『作者店おろし』に、

歌舞伎作者となつたが、伏見阪町の伏善なる者が歌舞伎の金主であつた所から、其の勸めに從ひて、始めは並木五瓶、辰岡萬作、二代目並木正三等の下に屬してゐたが、寛政七年から立作者となり、其のあらはす所に、『伊勢音頭戀寢刃(こひのねたば)』『敵討安榮録』『百千鳥鳴門白浪』『淺草靈驗記』『けいせい挾妻(さつま)櫛』『けいせい會稽山』『紅楓秋葉話』『けいせい花(はな)の山崎』『俠競(だてくらべ)郭日記』『けいせい筥(はこ)傳授』『競(あだくらべ)かしくの紅翅(べにがき)』『名作切籠曙(きりこのあけぼの)』『けいせい郭源氏』『いろは歌譽(めいぼく)櫻花』『けいせい英草紙』『舞扇南柯話』『島廻月弓張』等があつた。此の中、『いろは歌譽櫻花』中の岐蘇の谷おろしは、曲亭馬琴の『四天王剿盜異録』より換骨奪胎し、『舞扇南柯話』は同じく馬琴の『三七全傳南柯夢』より、『島廻月弓張』は、同『椿說弓張月』から脚色したものであつた。文化七年八月二十三日歿した。五十九歳とも、六十歳とも、或は五十三歳とも云ひて、明らかでない。其の門人に近松門喬、近松加造(桂壽と云ふ)、近松萬兵衞等がある。

江戸作者の巨星は實に櫻田治助であつた。本姓は田川、通稱を笠屋善兵衞と云ひ、壕越二三治の門人である。狂言堂左交と號した。『作者店おろし』に、「世話狂言名題の書物抔に當世を加へ、古今のまれものなり。」とある如く、世話狂言に長じてゐたが、また江戸好みの荒事を脚色することにも技倆があつた。著はす所に、『御攝(ごひいき)勸進帳』『御誂曾我雛形』『出世太平記』『姿花雪黑主(すがたのはなゆきのくろぬし)』

堂、又は李叟、俳名を秋聲庵蒼々、後に滄々と改めた。西澤家は一風一鳳のみならず、一風の孫にして、一鳳の父なる利右衞門も亦文學の趣味がありて、俳名を一鳳と稱した。一鳳は父の俳號を襲ぎて一鳳軒と號し、脚本の出版業と貸本業とを營める傍、狂言を作るを樂しみとした。其の作る所の脚本には、『けいせい雪月花』『扇屋熊谷』『花魁莟八總』『けいせい濱眞砂』『花菖いろは連歌』『紅楓いろは文庫』『昔語稻妻帖』等がある。天保十二年の春及び弘化四年、江戸に下つたが、歸阪して祖父の名を襲ぎ、九左衞門と改め、「臍の緒を落して四十九左衞門是れより先は生きただけ德。」と詠み、爾後筆を劇作に絶ち、専ら雜書を述作した。『傳奇作書』(其の中、初編三卷は『言狂作書』と呼ぶ)二十一卷、『皇都午睡』九卷、『脚色餘錄』九卷、『綺語文草』十一卷、『讚佛乘』六卷、『徒然文題』三卷、『內外謠曲句集』三卷、『勢語句抄』三卷、『綺語堂發句集』一卷、『忠臣藏類聚大成』四十八卷、『源平類聚大成』十八卷、『當世榮華物語』十八卷は、其の著はす所であつた。嘉永五年十二月二日歿す、享年五十一。

然し此等脚本作家の間に立ちて、並木五瓶につぐ出色の人を京阪に求むると、近松德叟であつた。德叟は始め德三と云ひて、俳諧師一炊庵小野紹蓮の孫で、大阪伏見阪町の娼家大枡屋勝右衞門の子であつた。俳名を雅亮と稱す。幼き頃より芝居を好み、淨瑠璃作者近松半二の門に入り、

澤一洗(始め奈河恒助)、濱松歌國を部下として狂言を製作したが、無論つぎはぎ物にて、龍玉は多く他に代作せしめたので、其の脚本なるものは殆んど云ふに足らなかつた。西澤一鳳も「詐ふ者を建作者二枚目の位に昇し、我も机に直り、年頃三都にて見し狂言を所々にきりはめ、偶新外題を附けしものもあれど、大約歌舞伎院本の古狂言を少しく添削するのみにて、筆を採る者にても、誰か一人一日の趣向を立てる筆力者なければ、多くは寄物にて、一場は龍玉自作する事にて、予にも代作を頼みし事度々あり。前にも云ふ如く役者にかけては、古今の名人と呼ばるゝ者なれど、作道にかけては、一文不才にて、時代人名の新古解らず、傍痛き事まゝあれど、首頭の勢ひに閉口して、諫むる者なし。」と罵倒してゐる。濱松歌國は布屋氏助又清兵衛と稱す。安永五年大阪に生まれ、島の内布袋町に住し、颯々亭南水と號し、戲作を事とし、役者評判記を著はしてゐたが、三代目大谷友右衛門を評して、友右衛門の抗議を受けたので、其の後、筆を評判記に絶ち、狂言作家としては二枚目三枚目の地位にあつた。著書としては隨筆に、『南水漫稿』『攝陽落穗集』『筆拍子』『攝津奇觀』等がある。文政十年二月十九日、行年五十二歳で歿した。西澤一鳳は浮世草子の作者として、將淨瑠璃作家として元祿享保の間に大阪に名のあつた西澤一風即ち書肆正本屋九左衛門の曾孫で、正本屋利助と云ひ、享和二年大阪に生まれた。別號を狂言綺語

まる。後、書拔をとれば、さまでよき役にもあらぬ故、又一洗に欺されしと呟くも可笑し。」と。『作者店おろし』に、彼が江戸にての失敗を敍して、「大阪より始めての下りには、堺町にて半四郎、歌右衛門の三勝半七、後に三津五郎、十次兵衛の二つ蝶々の書直し、大手柄ありて、又後に金主京橋今助、篤助を呼び、此の時は鰕十郎に付いて顔見世、どうやらかうやらやらかせども、三月に至り御所櫻の操を出し、鰕十郎辨慶の大しくじりより、不入にして今助立腹にて、早々上方へ登らせる。」とある。篤助の門人に奈河晴助あり、後に豐晴助と改む。もと京都の生まれで宮島屋嘉兵衛と云ひ、素人俄狂言の作を好み、一泉の門人となり、京都道場因幡藥師芝居の狂言を書いてゐたが、西澤一鳳の父利右衛門に勸められて大阪に下り、嵐吉三郎(二代目璃寛)の狂言のみを書いた。其の作る所の狂言の筋はさら／＼として能く解れども、世界が狹く派手でなかつた。『女夫池駒が池 敵討義戀柵』『越前三國夫婦墳』『那智山御利生 敵討浦朝霧』『遠江瀉戀賊』等は其の作である。文政九年正月二十九日歿す、享年四十五。七五三助の門人に奈河十八助、奈河九二助あり、其の他奈河を名乘るものは少なくなかつた。

俳優三世中村歌右衛門(始め、芝翫、後、梅玉)は、奈河篤助に一洗と云ふ俳號を與へたが、後に之と絶交し、自ら金澤龍玉と號し、金澤芝助(始め奈河十喜助)、金澤芝洛(後、並木吾助)、金

七五三助の門に入り、狂言作者になり、後に奈河一洗、また一泉とも云ひ、老後は京都東山眞葛ヶ原に茶店を開き、一服一泉と云ひ、天保十三年二月三日、享年七十九にて歿し、法號を釋達應と稱した。其の著はすところ『復讐高音鼓』『けいせい薺佳節』『けいせい品評林』、江戸にての作『臺頭綠色幕』『けいせい繁夜話』『三國一夜物語』等がある。此の内、『復讐高音鼓』は題材を曲亭馬琴のに取り、『けいせい品評林』は山東京傳の『稻妻表紙』を狂言化したのである。『傳奇作書』に云ふ、「此の人一日の趣向放曠にして、狂言を手廣に書き、首尾調はぬ事多し。初め七五三助より十九助と名を貰ひ、後、篤助と文字を書替へたり。頭の髮眞赤なる故、仇名を猩々の篤助といふ。一洗といふ名は、故中村歌右衞門（加賀屋歌七といふ、加州金澤の浪人梅玉が實父）の俳名なり。文化五辰年中村歌右衞門（俳名芝翫）江戸表へ行き、同七午年、篤助を浪華より呼び、一洗の俳名を讓れり。同十酉年、芝翫と同じく浪華に歸り、一兩年立つて、一洗の作意、當時の人氣に合はざりけるにや評善からず、依つて七五三助が師龜助の名を繼ぎ、二代目龜助となりけり。是れより芝翫と絶交して一洗の名を返し、京友（京友は濱芝居の仕打若太夫、又は大西芝居等也）となり名を金龜堂一泉と更め、濱芝居の作者と成り果てけり。此の人本讀の名人にて、披講の間にて、一座中の顏色を詠て、正本を空讀して、さも面白くよき役の樣に讀むが故に、俳優手を打つて納

ふ、本讀講釋、唐の開帳を始め、唐物數多所持する故、遺言にて葬禮を唐の道具にて送る、異人なり。」と述べてある。

其の門人奈河七五三助は、『傳奇作書』に、「此の人天明より文化の末まで永く此の道に染みながら、多くは院本を譯文し物、或は古狂言を添削するのみにて、一部の趣向立ちたる物少なし、それ故戲場者流より洗濯物の七五三助と異名を附けたり。」と評してゐる。其の作る所に、『〓礎』『花大樹』『色競紙箭戰』『傾城北國曙』『大振袖粧湖』等時代物が多い。道頓堀福新と云へる茶屋の倅で、幼名を新次郎と云ひ、其の後、日本橋三つ星末吉屋といふ宿屋を營んだと云ふ。

辰岡萬作は、俳優辰岡久菊の子で、初めは京に住ひ、時々大阪に來たが、寛政四年より大阪島の内疊屋町に住み、著はす所『傾城楊柳櫻』『東海道戀關札』『傾城青陽鷄』『艷競石川染』『けいせい遊山櫻』『吉原細見圖』『遠州中山染』『忠孝譽二街』『傾城忍逢淵』『濱眞砂續石川』『けいせい高砂松』等がある。文化六年九月三日、六十八歳にて物故した。

『作者店おろし』に、七五三助が江戸にて一たび火災に遭ひ、二たび衣裳諸道具を燒いて、這々大阪へ逃げ歸つたことを記してゐる。

奈河七五三助の門人に奈河篤助あり、もと泉州一向宗派の僧であつたが、還俗して大阪に來り

奈河龜助は奈良の人、產を破りて河內の緣者に食客となり、後大阪に來りて狂言作者となる。奈河と稱するは、奈良と河內に漂泊したとの義に取つたのだと云ふ。傳奇作書に、「此の頃は仕打興行人は何事も作者に任す事にて、一座の役者を抱へるも、作者の指圖を請ひ、狂言により一座の進退は諸事作者のまゝなりければ、銀主興行人と同格にて、威勢強く、一座の俳優者流は作者に取入り出世をする事なれば、近世の作者とは雲泥の相違なり、龜助中にもよき金主有りし、諸事龜助次第なれば、一座の尊敬も格別なる事なり。」とある。著はす所少なからねど、其のうち名あるものは、『競伊勢物語』『大願成就殿下茶屋聚』『伊賀越乘掛合羽』『加賀見山郭寫本』等で、安永天明以後永く世に行はれ、興行の度每に大入を取つた。但し西澤一鳳は評して、「狂言を手廣く書きたるは自在を得たりといふべし、されど此の人の作は餘りに細密過ぎてくどき所あり。乘掛合羽の傳法屋、殿下茶屋の人形屋、又伊勢物語の春日野の場、加賀見山の菊酒屋、各正本にて百餘枚づゝあり、此の中に畧せんといふ所もなく、詞にも省く所なし。是れ故正本にて讀む時は當時の稗史にまさり面白き事限りなけれど、後世の役者は氣衰へ、下根になりしか、紙數多き時は、見物より役者の飽くものか、短き場を好んで、所々を畧するが故、自づと狂言の筋通じ兼ねる事多し。」と云つてゐる『戲財錄』には「正三門人となり、文才あり、他苗を名乘り、後に永長堂と云

ひ終つて歸る。問ふ人感心せしとなり。白らるりといふ物は、あつたらこんな物であらうと推量して居る所が作者なり。天子將軍の行跡見た事もなし、乞食盜賊に付合ひたる事はなけれども、こんなものであらうと、人情を推量して作るが、白らるりなり。今世に云ひ傳へ聞き傳へする事、戯場より出たる事多し。是れ作者の大丈夫白らるりより定め出せし物なり。此の心持にて萬事仕組む時は、趣向古くても見ざめのせぬ樣に鑢を入れ、衣をかけて、新狂言にする事なり。總じて机に居る時、三千世界は我が物と思ひ、向ふ敵なしと心得、役者は我が物にして遣ふべし。さもなくては筆すくみ、氣がね許り心に浮み、見物の人氣を動かす事能はず、一通り筋立てたる跡にて、役者の甲乙に隨ひ加筆すべし。全體は作意は軍法計畧、筆は諸卒を使ふ采配と思へ。見物の敵に對陣する時、當時の流行物を以て機をひしぎ、評判の凱歌を揚ぐる事、最も勇士の役者、働きありと雖も、軍師の作者陣立備への狂言あしくては、必勝の大功を立つる事難し。大座とて恐るべからず、小座なりとも侮るべからず。大座には立物多く、銘々當らんと先陣を爭ひすれ合の味方討ある物なり。小座は立物の勇士少なく、すれ合なく、互に端役までも出て力を付合ひ、外芝居の大座に負けまいと軋む故、一圖に狂言もはずみ付きて、仕生て大座に勝つ事毎度ためし多し。我意を挾み、依怙贔屓に役者の例を亂すべからず。甲乙により役を見るべし。君子は重からざれば位なし、隨分身持宜しく、内兜を見られぬ樣、諸卒を心にて案じ、場に臨場して、狂言の計畧を工夫すべし。

い倭莊子』『入間詞大名聟儀』『天滿宮菜種御供』『けいせい飛馬始』『けいせい踏島臺』『けいせい誰伏水』『平井權八吉原街』『島巡戲聞書』等あり、『島巡戲聞書』の第四齣は『五大力戀緘』で大當りを取つた。寛政六年より江戸に赴き、同十一年三世宗十郎とともに歸阪したが、其の間に『江戸砂子慶會我』『けいせい時雨櫻』『月武藏野秋狂言』『富岡戀山開』『源平柱礎ごよみ』、『隅田春妓女容性』等の作あり、歸阪して後、『傀儡淺妻船』を作つた。享和元年再び江戸に赴き、大門通高砂町に住し、淺草堂と號し、表を雷神門の如くに建て、風藥、雷除香を商ひ、其の門人を風治（並木陸六）、雷次（高柳宗治）と稱した。文化五年二月二日歿す、年六十二。辭世「梅は咲き我は散り行く如月や」其の門人篠田金治、後に二代目並木五瓶となる。並木三四助、並木長藏、並木吾助、並木喜多助等は皆大阪に於ける初代五瓶の門人である。東西狂言の調節は、五瓶に至りて行はれ、上方の脚本と大道具とを巧みに江戸に輸入したのであつた。彼の著『戲財錄』は、作者の用意と工夫とを說いて、頗る斯道に益するものが多い。竪筋横筋の事、四季人情差別の事、作者役場心得の事等、流石に首肯するに足るべき節はすくなからぬが、其の中に作者金言之事と題して、左の如く述べてゐる。

狂言は何を目的に作るぞと尋ねし者あり。答云、狂言はつれ〴〵の文にある、白うるりを目當にするとい

て、見物の眼をさ覺せし始め、作者にてもまねきの前看板出し始め、不出來の芝居を取立て、役者を立遣ふ事も鍛錬して、外題の頓作、見物の眼を驚かし、威勢は古今獨步にて、座頭をも呼捨て、誠に歌舞伎の作者鏡ともすべき人物、正三一代の當り狂言、其の外所の賑ひを工夫し、英名日本に響きしこと、人よく知る所なり。」と云ひ、又『其の頃の噂に、作は近松門左衛門に並木正三、才智は櫻田宗庵、竹川近江、並木正三、右三人ある故、大坂中恐るゝ由を評す。」と讃美してゐる。『並木正三一代噺』に「凡そ三十年來、道頓堀京都に及んで、狂言戯作の譽高く、一生の述作七十餘番、其の外濱中ゥ芝居の作文、又は一夜づけ、顏見世など數多ければ、漏れもやすらん、剰へ京都の出勤伊勢鄙のさき〴〵にも急なる替りに望んでは見捨つる事なく、筆作に助かれし端本なども多かめれど、是れを記すにいとまあらず。」と云へる程に、彼は多くの當り狂言を作り、また舞臺裝置に夥多の新案工夫を出した。其の門に並木五瓶、奈河龜助あり、同門に並木丈助、並木永助などがあつた。

　並木五瓶は、和泉屋といふ役木戸の倅で初めは五八と云ふ。煙草屋であつたが、後今宮にて酒屋を營む。狂言の著作數おほき中に、有名なのは『鍋祀貞婦競』『日本花赤城鹽竈』『金門五山桐』『棹歌木津川八景』『袖簿播州巡』『歸命曲輪文章』『けいせい黄金鯱』『傾城忍術池』『けいせ

酒讌』『總追捕使鎌倉鑑』『竹篦太郎怪談記』、同十二年には京都で『傾城花城山』、同十三年には松之丞座元にて『傾城熊野山』、明和二年には、竹田座にて『曾我贔屓恵方果報』『傾城十三鐘』『關取二代鑑』『惱り浦島天上返り』、同三年に中の芝居にて、『惟喬親王魔術冠』『男作後日帷』、角の芝居雛助座にて『往古大坂村在所由來』、同四年、『世話料理鱸庖丁』『義經蝦夷語』『大坂日記鹽の長次郎』、竹本座にて『石川五右衞門一代噺』、角の芝居中山來助座にて『男生相生鑑』、明和五年には京都で『傾城桃山錦』、竹田座にて『宿無團七時雨傘』、同六年角の芝居、富士松山十郎座にて『納めの庚申待』『東山殿女狩』『淀屋橋の喧嘩』『夕涼蚊追店』、中の芝居小川吉太郎座にて、『眞一文字魁評判』『桑名屋德藏入船物語』『面影六歌仙』、同八年には中の座にて、『中睦妖藏宮島臺』『三千世界商往來』『近江源氏鮮講釋』等大當りのものが多かつた。安永二年二月十六七日、病中『日本一和布刈神事』を草したが、病急に革まり大喝一聲南無三寶と云ひも敢へず息絶えた。彼は其の最後に至るまで狂言作家であつた。享年四十四歳、中寺町法善寺に葬り、墓に勒して南無三寶正三之墓と云ふ。戒名は當譽正三居士。『戯財錄』に、「元來歌舞伎作者を好み出勤せしより、元來舞臺の大黒柱を取り、場の中の柱も取つて、見物の見障りなきやうにして、せり揚げせり下げ、廻り道具、三段返りのがんどう、其の外數々の道具を工夫仕出し、顔見世の序に化物を出し

三人一所にせり上ぐる、その家臺に十藏、歌右衛門、定助、四郎五郎立並びて定助へ文七、喜代崎が流れ落ちる血汐を呑まし、痞(おし)を直す趣向なれば、此の七人をせり上ぐる前には、大勢屋根での立故、宗十郎一人が長袴のすつくり立つを、緣がは許り上げしとは、何ほう重き違ふ事ぞや、大工棟梁の算段もあらうなれども、正三ならずして萬力の仕かけ、眞綱の取り樣、此の工夫がつくべきや、凡人の及ぶ所にあらず。」（並木正三一代噺）と云はれる程に、舞臺裝置に人目を愕かせたのであつた。『丹波屋助太郎館』『奧州遊行柳』『天照大神宮岩戸曙』『お染久松戀の盂蘭盆』『世話黄金榮』『村鳥郭音聲(さとのねじめ)』『草津小女郎』『大松百助 丹前(たんぜん)六法』『天竺德兵衛聞書往來』『四天王伽藍鑑』『大社結納三番續』『祇園祭禮信仰記』『夏紅葉血汐紅』『稱藤原系圖』『三十石艠始』『大坂神事揃』等を連續製作し、寶曆九年十一月には中村富十郎、市川升藏江戸より登り、文七座にて二の替り『九州釣鐘岬』、文七、鯨つき灘八にて、鐵砲をひらひ耳を塞ぐ幕にて、氣を取り、升藏が死骸の腹なる勘合の印を取り出す趣向面白しとある。「大切には富十郎、『娘道成寺』の所作事、續いて舞臺を破風共に東西へ引分け、山門をつき出し、大五郎文七たての內よりせり上げて目を驚かせしに、辰の年（寶曆十年）正月十日頃までは、さのみ入もなかりしが、十二三日頃より大入して、後には舞臺に棧敷をかける程の大入」であつた。寶曆十一年には文七座にて『霧太郎天狗

には、角の芝居坂東豐三郎座に出勤して、『冬籠妻乞軍』の顏見世狂言、二の替りには『戀淵血汐絞染』を笛十と合作して之を出し、翌二年七月には『男作養老瀧』と云ふ水狂言を出して大に當り、同年十一月より大西三桝大五郎座にて、『蒔黄金勝軍』といふ顏見世狂言、岩井半四郎江戸より登りて好評を博し、二の替りは『大和國井手下紐』にて、同三年四月までの大入、それについで『若翠結相權現松』、同年七月よりは『薄雪遊撰染』と云ふ水狂言、何れも好評嘖々たる者があつた。其の年の暮より淨瑠璃作者並木宗輔の門に入り、宗輔に從ひて豐竹の操座に出勤、翌年七月より中村歌右衛門座、角の芝居へも出勤して、『三人組染貫模樣』に當りを取り、『雨防紅莞蓙（あまやどりくれなゐはるござ）』も好評、つゞいて『織田軍記紅葉篭』も大入であつた。寶暦元年十一月、豐竹をはなれて、三桝大五郎座に移り、並木正三とあらため、『名護屋繊雛鶴錦』『三河國照田姫昔物語』『西東合見臺』『金比羅御利生幼稚子敵討』『泰平木曾譜』等の作があつた。偶疫病の呪ひとて、門口に、『キノエノヤノハノモノ。』と張札する事流行したるより思ひつき、『傾城天羽衣』を作り、正三一代の名聲を博した。大切には三間四方のせり上げを工夫し、滿都の士女をして歡喜せしめた。『飾り付揚屋の道具を引いて取り、奧より三間四方の板葺屋根を突出し、上にて中山新九郎、大勢と立有つて追込み、一人殘る所へ、中山文七、松島喜代崎代つて、故新九郎を諫め、腹を切り自害する內、これなりに

幼名久太郎と云ふ、作道を好んで、寛延二年和泉屋正三と名乘り、作者と成りて歌舞伎へ出勤。」と云ひ、十三回忌に刊行した『並木正三一代咄』には、「其の父元は雲州の仕官にて、いさゝか仕へを辭する事侍りて、大阪堀江へ漂泊し、諸木或は草花金石などより油を取る法、南蠻の祕傳を鍛錬し、卑しからぬ家業を營み、正兵衛と呼ばれ暮せしうち、(奴正兵衛とて人の知つたる男なり。)道頓堀元堺町、扇子屋方の遊客となりしも、然るべき値遇にや、扇子屋の娘に契り、正三をまうけ、幼名を久太と呼びしに、其の後故ありて正兵衛、右扇子屋娘の妹泉屋と云へる芝居茶屋へ入贅して、連子の久太を養育せし故、襁褓の内より櫓太鼓の音を友とし、竹馬の頃は歌舞伎の樂屋をあそび所、又は操芝居へ入込み介錯の助けになり、からくり芝居の下屋へ這入り、ぜんまい積りものの絲どりを見覺え、其の節親正兵衛、出羽の芝居世話せし時、若水千歳狐といふ、手づまからくりの水船のしかけは、久太十四五歳の工夫なりと聞き及びぬ。夫れより後、元服して正三と改め、二十歳に足らずして、大西の芝居にて、中村喜代十郎といへる女形、中ゥ芝居を興行せし時、中橋筋大寶寺町西側栁子屋の鄰、鍛冶屋の娘手をおひし噂を、三番續の狂言に取組み、寛延元年辰八月、右喜代十郎芝居へ出せしが、正三歌舞伎狂言の書き始めなり。則ち其の時狂言作者泉屋正三と名前を出し。」と、委曲を盡してゐるから、之に據るべきであらう。寛延元年十一月

て趣向も出來るなり、十月は小春とて暖かに花も咲き、狂言一替り二替り優曇華の花さくといへども、下よりつはる惠みなければ、春の盛りに身を恨む。學問せよ、學問すな。才智になれ、利口になるな。阿房になれ、阿房すな。恥をかけ、笑はるゝな。色に迷へ、我が色に迷ふな。長生せい、長生すな。」と、作者の心がけを述べてゐる。此の他にも脚本作家もあつたが、並木正三が出づるに及んで、初めて一新面目を開いたのであつた。

『傳奇作書』には、「並木正三は道頓堀宗右衞門町に住む高砂屋平右衞門といへる菓子屋にて、年ふるく住む町人なり、若きころより劇場を好み、並木宗助に入門して、歌舞伎狂言を數多著はせり。」とあり、猶正三の當り狂言なる『宿無團七時雨傘』(一名岩井風呂)の事を記して、「尤も岩井風呂の狂言は『比翼鳥部山』(小菊半兵衞、永樂屋孫太郎)の古き狂言の名前、或は阿彌陀池の開帳場を堺の魚市場に直し拵して、前に云ふはめ物なり。これ等をはめ物の中にても、活取(いけどり)と唱へ、濱芝居の作者の仕事にて、並木正三の作にあらず、それ故始めて此の狂言を出せし時には、高砂屋平右衞門と正本にも書道具の飾付も、菓子屋暖簾などかけあり、宗右衞門町の年寄を勤作者にもあり、太左衞門橋近所の事なれば、幸ひにしてつかひしものなれど、正三は甚だ迷惑がられし由、所の老人に聞けり。」と、菓子屋説を裏書してゐるが、『戯財錄』には、「道頓堀和泉屋正朔倅、

せしが例となり、今に絶えず。京攝に云ふ切狂言なり。總體の看板道具甚だ麁末にて、狂言始まり、二幕許りは中通り小詰にて濟まし、夫れより次幕に默(だんまり)とて、花方役者或は新參の立者など寶物などを爭ひ合ふ事を見せ、是れより續いて狂言を見せる事なり。京師は公卿堂上の高情、庶民に移りて温順なるを好める故に花車風流を專らと書くべし。浪速は高家のみにて、中にも東都に似たる風は北地に有つて、所謂黑船忠右衞門、根津(ねづ)四郎右衞門など堂島の侠客なり。船場は豪家軒を列ね人氣僭上なり。江南は青樓多く陽氣を好む。此の三情を合はして作すべし。洛は勿論東都にても、神社佛閣、雪月花に遊ぶ景地數多あるが故、見物に乏しからず、浪華はさせる遊覽の雅境もなき所にや、見聞識者多く、作文役者の誤りを見出す人多く、是れを俗に穴を探すといふ。格別背の折れる地なれば心を盡して作すべし。都て梨園の上客(おきやく)とする者は、[illegible]家御客人様若旦那等なり。よく〳〵其の情を考ふべし。詞を書くにも傾城と藝子は書分くる[illegible]けれども、遊女と藝子の詞は書別け難き物なれば、必ず打混じぬ樣、書くを作道の心得と知るべし。

と、其の詳に辨じてゐる。

京阪の作家には、淨瑠璃作者竹田出雲の弟子に、爲永千蝶ありて、其の門下に爲永太郎兵衞があつた。「歌舞伎事始」に千蝶の遺書なるものを載せて、「木の葉落ちてめぐむに非ず、下よりつはりめぐむによつて落つるなり。作者の趣向も其の時に臨んで出づるにあらず、多年心がくるを以

より狂言大方は色事六分の筋にて、全體仕組み和か過ぎて力薄し。美女の心持、人間にとりては皮の如し。江戸は人氣荒く人情に合はせ、昔より狂言大時代にて切つた投げたと太平樂を七分の筋にて仕組み堅く、女子の心に叶ひ難し。侍の心持、人間にとりては骨の如し。大阪は人氣理窟めき人情に合はせ、昔より狂言義理八分の筋にて仕組み、ねぢ合ひ多く退屈起る事あり。男作の心持、人間にとりて肉の如し。當世は段々上手になり、三ケの津とも仕組み打ちまぜになる。然れども本性の所は離れず、筋は骨、仕組みは肉、せりふは皮なり。骨肉皮の三つ連足すれば名作と知るべし。時代は骨太に成り難し、御家は肉みちたるがよし、世話は皮薄きがよし、何れ一場に限らず、骨より肉に渡り、肉より皮に渡り、連足して皮を洗ひ見よくせざれば、一人の美男美女は全からず。是れまでの當り狂言を見て考へ見るべし。」と抽象的に云つてゐるが、『傳奇作書』には三都狂言の特色を述べて、

三都劇場の狂言の異なるは、東都は武國なれば、人氣闊達にして滯るを嫌ひ、俗に侠勇(きほひ)といふ。早春の世界は往古より曾我物語を吉例とす。年々三芝居とも同遍なる故趣向に盡く。江戸古作者壕越菜陽、金井三笑の頃より油屋お染、實は化粧坂の少將、丁兒(でつち)久松は五郎時宗などゝ附合して綴り、享保中、大阪の作者元祖並木五瓶彼地へ下り、其の實情を失はん事を愁へて、二番目と號け、別に外題を設け、世話狂言を作

一鳳の傳奇作書には、其の本讀のことを述べて、「金井三笑は江戶狂言作者の冠たる人にして、壕越齋陽と對せり。此の三笑草稿を至つて細字に書く、我も本讀の折は眼鏡をかけて讀む事なり。よつて紙數甚だ少なし、悋嗇にて紙を惜しまるゝかと思ふ者あり。三笑曰く、細字に書くは本讀の節、脇外より延び上り、役者共が見たがるものなり。文字あらければ讀まるゝがうるささにかく細字に書くなりと云はれし由、其の上本讀の席へは、いつも長き刀をさして行かれ、ひやうし幕と讀み切るや否、直に刀を取り上げ、柄を握つて、サア宜しいか悪いかと、萬一其の場の批評を云ふ者あらば、一刀に切つて捨てんとの勢ひにて、恰も首實檢の場の武部源藏の如く、八方へまなこを光らし、長き刀をひけらかすが故、此の權威に恐れ、今少し有りたしと思ふ所も我慢して、直に納め手を打ちしとぞ、是れらは實に年功にも身柄にもあるべし。予も每度本讀の時は三笑の心持にて、利法權の三つの旨を以てすれど、若年と云ひ、帶刀すべき身ならねば是非なし。御城代とか御奉行にて作者をすれば、如何なる悪き役を書くとも、直に納まるべきと獨り笑ひ捨てる事も多かりし。三笑は作者より役者の方上手にてありつらんと思ふ。」と冷かしてゐる。

江戶と上方とは、其の地勢風土を異にし、歷史を異にし、人情風俗を異にしてゐるから、從つて狂言の作風も異なつてゐる。『戲財錄』に其の差別を說いて、「京は人氣和かく人情に合はせ、昔

に、『男文字曾我物語』『男達初買曾我』『百千鳥曲輪曾我』『女夫星浮名天神』等がある。寛延寶曆ごろの人である。壕越二三治は菜陽と號し、常磐津文字太夫の淨瑠璃に好評の作多く、劇場新話にも、「さて又淨瑠璃文句は、近來にては堀越菜陽不思議に珍文句を書き出し、常磐津文字太夫の節附も宜しく、殊更役者は家橘、慶子、二代目路考、何れも名人、三拍子揃ひし故とは申しながら、全くは淨瑠璃文句による事、堀越の手柄なり。」と云ひ、又、「狂言作者も堀越、金井(三笑)などまでは少々古風も殘りしに、いつとなく變じて作者は役者の書役となりし事、世の流行とは云ひながら、口惜しき次第なり。」と嘆じてゐる。寶曆、明和、安永が其の活躍した時代であつた。金井三笑はほとんど彼と時代を同じうし、相竝んで名ある作家であつた。二三治には、『祐經扇系圖』『曲輪商曾我』『三代源氏六條通』『戀染隅田川』等の作があるが、三笑には、『菜花隅田川』『江戸紫根元曾我』『曾我贔屓二本櫻』『色上戸三組曾我』『けいせい名越帶』等の著がある。尾上松助を取り立てて、名優としたのは彼であつた。三升屋二三治の『作者店おろし』に、「近代三ケの津の歌舞伎作者にして、江戸狂言の仕組み、作者のおきて、其の異風誰あつて及ぶ人なき古今の稀者なり、世に三笑風と殘せし人。櫻川(治助)も譽めたる事聞き及ぶなり。尾上松助小詰の頃より、取り立てたるは此の三笑にして、家名を非筒屋と云ふ、輿風亭と名にたかし。」と賞め、西澤

で、「玉の緒のありたけ唄(うた)をかきつくし、今ぞ冥土の道作りなり。」と云ふ辭世をのこして歿した。法名を勇健院英子日雄と云ふ。其の作るところに、「一心二河白道」「式例和曾我(かはらぎそが)」「忠臣いろは軍談」「初髻通曾我(はつもとゆひかよひそが)」「淡島榮花婿」「傾城一張弓」等がある。「歌舞伎事始」に、津打治兵衛の狂言制作の意見を載せて曰ふ、「江戸根生の狂言作者津打治兵衛云へるは、今時の作者趣向の案内合點ゆかず、立役を女形に直し、或は御家の後室を奴になし、いろ／＼變化する故、狂言そぎつぎにして混雜し、山の奥に騷ぎの三絃を鳴らすやら、或は庭などの井戸よりいつのまにやら敵がたより拔穴を掘り姿を隱さんとて井戸へはひり、或は井戸へはまりて濡れたるけしきもなく、ヱあらはれ、ヱ、無念やなどいふやうなる趣向多し。歌舞伎の案じ方はさにあらず、たとへば當り役者にて時の人ほむると雖も、一體の藝しこみなきは金取にてはなし。是れらは立消えするなり、是れを以て金取の役者の身上をば案じ、其の金取を仕損じさすは、作者の誤りなり、其の役者の氣ごんを察し、其の體を以て狂言一部に取組むなりといひけり。」と。其の門人に津打傳十郎、津打半右衛門等あり、其の後、津打を名乘るものに、津打九平次、津打五左衛門、津打三郎八、津打隣軒、津打圓二、津打又左衛門等があつた。

藤村半文は澤村半文と云ひ、「外題をいろ／＼曲をつけし始め」「仕組の名人」と云はれ、其の作

十郎と云ひし時、座頭なりしに、作者の立(たて)は、津打治兵衛とて、其の中合よからず、顔見世前、本よみ當日に至りて、先づ一通り本讀み致せし所、團十郎氣に叶ひ兼ねし樣子、其の時又本を一通り本よみせしに、又もや團十郎心に應ぜざる趣、其の節津打氏少しも怒らず、三度目に又候や本を出して讀み掛らんとせし時に、流石の團十郎感じ入り、誠に名作者かな、一通り二通りと本讀み納まりかねしに、少しもいらはず、一通りさへ中々ならぬことなるに、二通り三通りの心がけ、外人の及ばざる所なり。此の上は貴樣思召しの狂言、何れなりとも差圖あるべきなり。其の狂言早々稽古にかゝり度きよしにて、早速稽古に取りかゝり、其の狂言大當りなりし由申し傳へし。」とありて、此の時淺草觀音の額堂に、治兵衛と團十郎とが首曳して、治兵衛が勝てる圖を奉納したと云ふが、『戯財錄』には、「或は云ふ、役者の立者兩人すれ合ひにて、六度まで狂言をつぎしに六度まで書きかへ、筋世界とも替へしに、七度目にて始めの狂言を名許り替へて讀めば、役者も根氣負けにて狂言納まりしに、治兵衛笑ひて、耳も目もなき者どもと、兩人に意見を加へ中直りさせし、適れ上根立作者の大丈夫と云ふべし、其の頃雜司ヶ谷の鬼子母神へ、繪馬に地獄の秤(はかり)に、一方は津打治兵衛、一方は座中の役者のこらず乘せても、津打の方重き繪をあげたり。」とあるのは異傳で、其のいづれかが轉じたのであらう。彼は寶曆十年、七十八歲(或は云ふ八十二)

の嫁鏡が五度繰り返し、坂田藤十郎の夕霧狂言は十八度當りたると相竝べて、歌舞伎三大部の一と云はれた『傾城淺間ヶ嶽』を自作したと云はれ、其の他河原崎權之助の如き、早川傳五郎、中村傳九郎、光島七郎左衛門、宮崎傳吉、中村明石清三郎の如き、何れも役者兼作者であつた。姉川新四郎、市山助五郎、松島兵太郎、藤川半三郎、市山卜平、長岡久菊、中山來助、尾上新七等も亦雙方を兼ねてゐた。中村傳七は專業の作者であつたが、此の人に就いては、『歌舞伎事始』に、「正德享保の頃、江戸狂言作者に中村傳七といふ者あり、此の人の作は木に竹を接ぎたるやうなる事をとり組みて、始終理窟詰り、見物よく取るやうに作る名人なり。取りわけ引道具せり出し押出しぶん廻し引返し等珍らしき大道具仕出し、見物の目を驚かせしなり。あるが中にも、先年中村座にて嫁入角田川といふ狂言に、兩國橋より三圍の堤まで一里程ある川岸の大引道具、大形なる事古今の珍景にて大入せしとなり。」とありて、舞臺裝置に新工夫を凝らしたのであつた。

江戸の作者としては、實に津打治兵衛を推して一代の名人と稱さねばならぬ。並木五瓶も其の『戲財錄』に於て、「江戸作者中興開山」と讃へてゐる。俳名は英子、大阪役者の親仁方津山治兵衛の子である。『芝居乘合話』にも、「古來より狂言作者の名人と呼ばれし近松門左衛門、近來にては津打治兵衛などと云ひし名人。」と稱し、元祖市川團十郎との逸話を傳へて、「むかし元祖柏莚、團

なりしとなり。是れを以て見れば、三八といふ人は近松門左衛門にも竝ぶ程の人なるべし。」と、其の作意の豐富なる事を賞嘆してゐるが、彼は一種の際物師で、其の當り狂言には「お七歌祭文」がある。音羽次郎三郎の事は『續耳塵集』に、「上手の上、狂言立てる事も達者なり。太平記五日替りといふ狂言を看板出し、五日め〱に新狂言を替へて出せり。又大阪歌舞伎四軒ありし時、角の芝居にて篠塚次郎右衛門大石宮内の役、萬菊力彌の役にて、外題は鬼鹿毛武藏鐙というて、四十七人の狂言を始めてしたる時、大當りせしかば、中の芝居も又取組み、西の芝居は榊山親小四郎、柴崎林左衛門、三軒共に同じ趣向なりけるに、音羽次郎三郎は東の芝居に勤めし所、人まねをせず格別に木曾義仲の狂言を作り出し、評判よく當りしなり。音羽次郎三郎は、淨瑠璃に仕たる事を終にせず。其の故は凡そ操淨瑠璃は元來歌舞伎をまねて語り、人形も歌舞伎を眞似して行ふ事なり、然るを歌舞伎より操をまねぶ事歌舞伎衰微の基なり。」とある。猶此の他に京阪の脚本作家としては、白石彦兵衛、平山豐後、小島彦十郎、杉三安、淺田久四郎等の名を擧げ得る。

江戸の脚本作家には、初代市川團十郎が三升屋兵庫と稱して、『源平雷傳記』、『景政雷問答』、『和國五窄殿』、『傾城王昭君』、『出世隅田川』、『成田山分身不動』、『小栗十二段』、『參會名護屋』（中村明石清三郎と合作）、『兵根元曾我』（同上）等を作り、中村七三郎は、其の當り狂言で、山下半左衛門

じ方は、他へ行かんとて駕籠に乘る。駕籠の者共、何れへ御越し候哉とたづねけるに、面白からん方へ連れて行けといひて、駕籠賃よろこぶ程やるべしといふ。さても異風なる人やとて、利慾にかゝはるもあり、或は四季の景色を云ひて慰めるもあり、又は茶屋遊女の奥を勸むるもありける。三八彼等に從つて、共に戯れ終り、我が家にかへり、狂言出來たりとて役者を揃へ、稽古させしとあり。或人此の案じ方を尋ねけるに、三八曰く、時々移り氣になるが人情なり。されば、はやり歌といふもの、一人より二人へ移り、段々弘まるなり、駕籠の者が勸めし遊女と云ふ者は、諸方の人と交はり多き故、時の氣を善く知れるものなり。故に隨ひて其の氣を案じて、一部の狂言となすといへるよし語りけるとなり。又或時の替り狂言六度役者につかれたり、七度目に當り役者子どもも手を打つて悅び、天晴御器量驚き入りたり、六度狂言をつき、即席に珍らしき御趣向御話しなされ候ことよと、申しければ、三八曰く、しからば何れも氣に入りしやと。役者、此の上御無體申すことなし、此の狂言出し候はゞ大當りなるべしと、口を揃へていへば、三八かぶりを掉うて、何れもの氣に叶うても我が胸に濟まず。此の狂言に景物有つて見物は悅ばんなれど、重ねて出す狂言に見物の氣もそれて、年中芝居相續叶はず、然る時は此の狂言不吉を招くに似たりとて、又一組話しければ、人々其の趣向に服し稽古をなし、初日より大入せし事、古今の繁昌

茶椀のわれにて獨り碁を打ち、太夫奥州との口說の段、他に比類なき仕打にて、京中上を下へとの大評判、顔見世狂言の不評を一時に取返し、此の狂言百二十日間の興行であつたが、其の當時此の好敵手を向うに廻した坂田藤十郎が、「金子吉左衛門を潜かに招き、顔見世より申す如く、今年は少長（中村七三郎）といへる大敵あれば、一座の役者は勿論、先づ狂言に骨を折らねばならず、貴様狂言を作らるゝ故、油斷もあるまじけれど、一座の者よりも隨分貴樣勢ひ強く、狂言工夫あらねば、芝居の爲にならず、顔見世を仕勝ちしものゆゑ、作者の氣ゆるみ出る物ゆゑ、わけて申す。とくれ／＼内意ありける。」とあるほどに、吉左衛門は藤十郎附きの作家であつた。

脚本作家

富田平兵衛と、金子吉左衛門とは、脚本作家としての先驅者であつたが、淨瑠璃作者としての天才近松門左衛門もまた幾多の歌舞伎狂言を作つてゐる。當時に於ても、また、役者と作者とを兼ねた者が少なくなく、藤田長左衛門、福岡彌五四郎、東三八、安達三郎左衛門、松永六郎右衛門、佐渡島三郎右衛門、榊山勘助、音羽次郎三郎等あり。彌五四郎には『女人結緣灌頂』、三郎左衛門には『閏正月吉書始』の作がある。東三八のことに就いては、「歌舞伎事始」に、「此の作者の案

も記憶薄し、昔の立者の勤めしを見覺え、心覺えに書いて置きしが、古代と當代とに少々宛は、風儀違ふ所を書き添へて本にせしが根本の始まり、彌狂言委しきなり。作者といふもの外に定まりて、此の謂ひにて役者の中にも少々宛狂言筋立てして、作者に仕組みせしを、役者が狂言書きたりと云ふ者多し。」と云つてゐるが、『續耳塵集』にも、「凡そ新狂言相談極まりて後、ひと場づゝしぐみ立てる時、其の役人を呼びよせ、團居してせりふを口うつしに教へ、一旦はゐる時まで立ち、又小かへしとて再遍稽古し、又次を作者せりふ工夫して口うつし立てる事なり、其の座の立者出る場は、其の立者狂言を仕組みしなり。中興狂言趣向むづかしく成りてより、執筆頭書せよとて、せりふ付のいひ出しを、一くだり程づゝ書きたり。狂言本とて委しく書く事は、金子一高より始まりけるなり。」と見えてゐる。此の金子一高とは、通稱吉左衞門と云つて、富永平兵衞と同門の人で、元祿後半の作家である。蓋し、狂言本は平兵衞と吉左衞門とに依りて、文字に書き現はされたのである。『耳塵集』は吉左衞門の著はした物で、主として、當時の名優坂田藤十郎の逸事を錄してゐるが、吉左衞門は近松門左衞門と協同して、藤十郎のために作爲した狂言もあつた。『賢外集』に、江戸名優中村七三郎が上洛して、元祿十一年正月二十二日より四條の山下半左衞門座で二の替りに『傾城淺間ヶ嶽』を演じ、七三郎は巴之丞の役を勤め、棊盤縞の羽織を敷き、

衞初まりなり。延寶八年の暮の顏見世なりしが、其の當座は諸人擧つて憎めり。それより平兵衞打續き面白からぬ狂言に見物飽き果てぬ。今一入工夫致され能き狂言を致されよと申せしかば、平兵衞曰く、『わろき狂言を出すはよきこゝろならねど、座元衆の大きなる仕合(しあはせ)なり。替るたびごとに能き狂言を出し、若し其のよき狂言に見飽きなば、道頓堀に草生ゆべき。』といへり。云へば言はるゝものか、可笑しき減らず口なり。』とあるが、よし諸人に憎まれたにもせよ、狂言作者とはじめて番附に署したのは、彼であつた。其の作るところの脚本に、『娘孝行記』、『熊野山開帳』、『業平河内通』、『丹波與作手綱帶』、『五道冥官』、『日本月蓋長者』、『武道達者』(平山豐後と合作)等がある。『南水漫遊續編』に、大阪に於ける其のころの狂言外題として、『室寺開帳』、『龍女つやおしろい』、『南都十三鐘』、『船岡山御幸の車』、『御評番の平野ほん樣』、『鎌倉正月買』、『おばせ心中』、『名殘の杯』、『信田妻後日』、『女郎二河白道』、『丹後國成相觀音』、『大和室の綱引』、『よめかゞみ』、『大和國ちごの文殊』、『當麻中將姫二代記』等の名が載せてある。

『戲財錄』に脚本の根源を說いて、「往古はさだまりし役者の立者、寄合ひ筋立てして、せりふは出合よりいうて見るをならしと云ふ、其の内に定まれる故、根本(脚本のこと)といふものなし一日の狂言も短きものにて、今の如く六ヶしき仕組みは役者の心にあるなり。それより後、役者

賑ひ言語に述べがたし。村山氏の大功、後世の役者尊むべきことなり。」とあるものが、それである。然し十二年間の停止とあるは甚だ疑はしく、これは『歌舞伎事始』に、承應元年停止、同二年奉行、祇園參詣の折、山村又兵衞の駕籠訴訟ありて赦免を願ひ出で、其の上役所まで慕ひ行きて軒下に起臥しての哀訴、同三年、「物眞似狂言づくし」と名目を改めての赦免とあるのが正しからう。斯くして、若衆歌舞伎は一變して、野郎歌舞伎となつた。

離れ狂言は進んで續き狂言となつた。其の創始者は大阪に於ける福井彌五左衞門である。此の人は役者であつて又狂言作者である。恰も名古屋山三郎が作者と役者とを兼ねた如く、猿若勘三郎が座元と役者作者を兼ねたりしが如く、此の當時に於て役者と作者とを兼ねる事は珍らしくなかつた。彌五左衞門が始めて續き狂言を作つたのは、寛文四年の事であると云ふ。『耳塵集』に、「彌五左衞門といふあり、役は花車形にて、狂言作者の名人なり。昔は離れ狂言なりしが、今の二番續き三番續きは、此の彌五左衞門作なり、即ち『非人かたき打ち』の作者なり。」とある。江戸にては都傳内ありて、『今川忍び車』を作つた。彌五左衞門の門に俳優金子六右衞門ありて、其の門下に富永平兵衞があつた。平兵衞は『藝鑑』の著者で、實に狂言作者であつた。『耳塵集』に、「富永平兵衞は右彌五左衞門に次いでの作者にて、今顔見世の役者附に狂言の作者と書く事、富永平兵

から、其の弊害も夥しく、遂に幕府は承應元年六月、若衆の前髪を剃り去らせ、其の年十二月、江戸の劇場、猿若、村山、都、山村の四座の閉鎖を命じたが、頻りに歎願したので、翌年三月之が興行を許した。大阪では承應元年劇場にて爭ひがあつた爲に、一時歌舞伎は停止せられたが、翌年再び許可さるゝ事となつた。京都の歌舞伎停止は江戸大阪と事かはつて十三年間の停止であつたと「藝鑑」に見えてゐる。即ち「明曆二年の丙申、其の頃は女のさげ髪は法度にてありしに、橋本金作といふ女形、下髪にて舞臺へ出で、其の上棧敷にて客と口論し、脇差を拔きたる科によつて、京都歌舞伎殘らず停止仰付けられたり。これによつて京都座元村山又兵衛と云ふもの、芝居御赦免の願ひに御屋敷へ出でたる事十餘年、然れども御取上げなかりし故、又兵衛宿所へも歸らず、御屋敷の表に起臥して、毎日願ひに出づるに、雨露に打たれし故、著物袴も破れ損ひ、痩せ疲れて、人の形もなかりしなり。其の頃の子供役者ども多くは商人職人となり、又は他國へ小間物など商ひに行く者夥多あり、僅かに殘りし子供役者、銘々に出錢して食物を御屋敷の表へ運び、又兵衛をはごくみしが、芝居停止十三年、寛文八年戊申に歌舞伎芝居御赦免なされ、三月朔日より再興の初日出せり。狂言は傾城事なり。此の日は不就日なりとて留めけれども、吉事をなすに惡日なしと、推して初日をいだしぬ。十三年が間の御停止ゆりたることなれば、見物群集の

後いにしへの事を作り入れて、八島島原、安宅島原ともいひしが、年移りて今其の名目は絶えたり。然し上方の狂言名代に傾城と上に置くこと、其の風殘れり。」とあるものは、此の傾城買ひのことである。離れ狂言とは、唯一齣一曲のみを演出したので、其の狂言の異なる毎に見物人は入り替つたのである。

一方には傾城買ひ（或は傾城事）には大盡風俗を現はし、他方には六方（又は丹前）に遊俠の時代相を演出した。『川捨箱』に、「その樣をかぶきに似せ、小袖のゆきいと短く、無反の要刀もつとも長きを閂にさしこらし、手を振つて動き出で、彼の六方詞、名のり詞なんどいふを演べて後、狂言にかゝるが竝べて當時の風なり。」とあるものである。

名のり詞の一例

とやかくや云ふうちに、はや峠にかゝつた。げに雲を腰にひんまいたる山のてつぺんにも水海浪なん〲とさゞなみとう〲とうつたつ磯は、賽の河原、西へ向き東へ向いても二子山をや有けいではないぞな。

江戸の猿若座には『猿若』あり、山村座には『海道下り』ありていづれも相傳の藝として賞美されてゐた。

若衆歌舞伎は三都と共に幾多の劇場を建設して盛んに行はれたが、衆道の悅ばれた世であつた

み、橋懸りよりゆらり〳〵と出で、正面へ立ちながらせりふに曰く、「八まん之が買人でやす。」と、扇にて脇差の柄を叩けば、見物一同に、「そりや買人の名人が出たわ〳〵。」と聲々に譽めること、暫く鳴りも靜まらず。時におくびやう口より、揚屋の亭主、古き淺葱袴の腰をねぢらせ、手拭を腰にさし、貝じやくしを持つて出で、「エ旦那お出でか。」といふ聲の内、扨見物そりや亭主が出たわ、あの顔を見よ、をかしや。」と笑ふ聲、次のせりふも云ひ出せぬ程なり。漸く笑ひしづまれば、八郎兵衛、「なんとまだ太夫は見えぬか。」「イヤもうあれへ、もう追つつけ是へお出で。」と、橋がゝりをうち眺め、「アレ〳〵只今これへ見えます。」といへば、「ヤレ傾城が出てくるわ。」と、見物皆腰を立てなほし、物をも云はず揚幕を眺めゐる。時に傾城の姿、をかしき衣裳金入なり。其の時分女形の鬘かくるはたま〳〵にて、多くは花紙を兵庫髷につゝみ、只一人出て、「大じんさまお出でかえ。」といふを、「扨も。」と悦び、大じんと互に手に手を取れば、又わらひ、座敷のあいさつ、一つ〳〵こなしを、どよみをつくりて譽めたり。扨亭主杯をめぐらし、「酒の肴は太夫様一曲の舞ひ所望々々。」とせりふの内、やがてはやし方出でならべば、女形舞の所作あり。これは狂言一番の仕組なり。

『歌舞伎年代記』明暦二年の條に、「はなれ狂言とは、女鬘をかけて、島原けいせい買ひの體を仕組み、髪切島原、坂田島原などと、狂言の題號にせしより、芝居の總名を島原といへり　又其の

る。「さてもめんえうなこと。今ははや引馬ばかりになつた。」と、馬を引きよせ、「コリヤ馬よ、何と艶之丞がふいといた心はどであろと思ふ。」と問ひ給へば、馬も殿の顔を見て、ついとはひるが幕なり。

「藝鑑」の作者は之に附記して、「今思へば斯樣の狂言大當りとはをかしく侍れども、其の時分の見物、かかる狂言をあつさりと面白く思ひ、又役者もかやうの狂言をよくこなし勤めけるなり。」と云つてゐる。此の狂言の初めにある二上りは、「江戸太平踊」と云ふ唱歌、「松は豊かに、大手馬場先、繋ぎ馬、おりに冷たい今朝の雪、殿の御馬は鴾月毛、連錢毛、かす毛、シトノ＼飛んでは驅け障泥(あふり)、御江戸育ちの髭男、御馬の口をしつかりと、ツリ、ンノ＼、髭男、ツリ、ンノ＼ノ＼ツリ、ンリンノ＼ノ＼、リンと跳ねたる髭男、繋ぎとめたる戀の關札。」を用ゐたもので、舞と狂言盡しとを配合して此の脚本を作爲してゐる。

初期の狂言には傾城買ひと云ふものが多く演出された。其の頃の傾城買ひの狂言に就いては、「藝鑑」に其の要領を述べてゐる。

傾城事の狂言、今とは格別の風儀の違ひなり。先づ其の場に口上出て、「只今傾城買ひの始まり。」と觸れてしまへば、村山八郎兵衛といふ立役、買人にて此の出立、加賀の衣裳に、銀箔にて鹿の角を蜂のさしたる所を、總身の模樣なり。一尺七寸の脇差を向うへ落ちる許りにぬきさし、左は張肘、右の手に扇の要をつま

めたよ戀のせき札。」「皆々大儀ぢや、休め〳〵。」家來が手をつき、「先づ殿樣には神主方にて御休足。」と、歌にて皆々はひる。奴共は景色を詠め、小姓のきりやうを評判、「艶之丞がよい。」「イヤおれは友彌殿に惚れた。」と、いろ〳〵噂するを、侍出て、「何をたはごと、御小姓の噂、今一言云つて見よ。」と咎められて、「ソリヤこそ。」と、跡をも見ずに逃げはひれば、かんなぎ、「お神樂〳〵。」と呼ばはりて、侍はひる所へ、艶之丞出で、神前に向ひ、拍手打ち、「主君國家太平御武運長久。」と祈念するをりから、茶道珍才うしろに立ち、艶之丞が袖を引き、小聲に成りて、「其元のお爲を申さん。殿樣の御寵愛は其元お一人と思ひしに、此の頃はもつぱら友彌殿に御鼻毛を延ばし給ふ。拙者はお使に參る、こなたは神主へ參れと、仰せつけられたは、跡にて友彌と殿樣契らせ給ふはかりごと、御油斷あるな。」とたきつけて、お使に走り入る。艶之丞は腹を立て、「さて〳〵友彌め、にくや腹立ちや。」と嫉みの臺詞ある所へ、「殿樣お立ち。」といふ内に、家來數多出で、奥より殿は出でさせ給ひ、友彌に仰せて艶之丞を呼び給へども返事せず、殿見給ひ、「コリヤ艶之丞、もはや歸らう。これへ參れ、ハツ爰へこい。」と手をとり引寄せ給へば、艶之丞物をもいはず、殿の顏を見て、ふいとふり切り、橋がゝりへはひる。「コレハさてきやつも、フイと行きをつた。」と、草履取を呼び給ひ、「コリヤ艶之丞が、仕方はどうぢやあろと思ふぞ。」と尋ね給へば、草履取又殿の顏を見て、ふいとふり切り、ツイとはひる。かくの如く家來どもを一人々々呼んで問ひ給ふに、皆々同じくふり切りはひ

太郎がどしめくほどに、又九郎主馬のすけ、古びたるおかな、これらの道化もの、人の腹筋をよらする。」とあるが如く、お國歌舞伎一たび出でて、之に倣ふもの多く、遊女をして演藝せしむるものさへありて、遂に社會の風紀を紊すを以て、女歌舞伎の禁止となり、更に若衆歌舞伎の興起を見るに至つた。當時、堺の町人は衰へて、商權は大阪に移つたが、江戸開府と共に、諸國の町人は江戸に集まり、其の勢力も漸く擡頭せんとしたから、京都に起つたお國歌舞伎も東下し、若衆歌舞伎は三都を通じて行はれた。

お國歌舞伎と云ひ若衆歌舞伎と云ひ、其の演ずるところのものは舞と狂言盡しとであつた。此等を鹽梅した脚本の梗概が富永平兵衛の『藝鑑』に見えてゐる。即ち『浪人杯』と、『氏神詣』とであるが、此には其の『氏神詣』を拔萃する。富永平兵衛は其の初めに、「昔の狂言は多く衆道の趣向ありけり、若衆形の立者は、若女形より高給銀なり、其の時分は町々にも衆道はやりけり。昔の狂言を又書付け侍る。」と斷り書きして、其の梗概を述べてゐる。

殿様氏神詣遊ばさる、六法の所作事あり、跡に引馬行列をどり。其の時分の歌「二上り」殿の御馬は鴾月毛、連錢葦毛鹿毛かすげ、しと／＼打つては驅けあがり、お江戸育ちのひげ／＼男、お馬の口をしつかりと、つりんつりゝんひげ男、つりゝん／＼／＼／＼りん／＼／＼りんとはねたるいさみ馬、つなぎと

まりしは、出雲神子(みこ)にお國と云へる者、五條の東の橋詰にて、やゝ子踊といふ事をいたせり。其の後北野の社の東に舞臺を搆へ、念佛に歌を交へ、塗笠に紅の腰蓑を纏ひ、鳧鐘を首にかけて、笛鼓に拍子を合はせて踊りけり。其の時は三味線はなかりき。斯くて三十郎（名古屋山三郎と異名同人）といへる狂言師を夫にまうけ、傳介と云ふものをかたらひて、三條縄手の東のかた、祇園の町のうしろに舞臺をたて、さま〴〵に舞ひ踊る。三十郎が狂言、傳介が絲よりとて、京中これに浮されて見物するほどに、六條の傾城町より佐渡島といふもの、四條河原に舞臺をたて、傾城數多出して舞を踊らせけり。若上臈と云ふ傾城屋、また舞臺を立てて能をいたす。脇もつれも地うたひも、皆傾城どもなりければ、謠は蚊の鳴くやうにて、可笑しかりければ、後には脇地うたひは男を雇ひていたせり。歌舞伎過ぎては、祇園靈山丸山に傾城共をあげ、夜もすがら遊ぶ。これにぞ、歷々樣たち、名をかへ品をかへて、御通ひなされし故に、女歌舞伎はとゞめられぬ。猶も六條町人、夜な〳〵行き給ふ御方ありし故にや、三筋町を追ひたて、西の洞院西七條の中道寺まで一つに合はせて、西朱雀の七條に一構へして押込められ、傾城は此の内より外に出づる事かなはず、其の後若衆歌舞伎始まり、これも故ありて、子どもの前髪をおろさせらる。此の程は乗や吉郎兵衛、大和屋六兵衛、村山又兵衛、此の三兵衛が太鼓を打叩くその中へ、こくもちの勘

解題

古歌舞伎と其の脚本

文學博士　笹川種郎

朝廷には舞樂あり、武家には能樂と狂言とがあつたが、町人階級の微力な時代には、町人のために此等と匹敵すべき興行物は無かつた。しかし町人活躍の曙光が閃いた足利時代の末から、町人本位の興行物が現はる、ことゝなり、此の傾向は、やがてお國歌舞伎を産出するに至つたのである。

お國歌舞伎の創設者なるお國の傳記に就いては、諸説紛々たるが、今は之を省畧する。とにかく田樂より起つて猿樂となり、能と狂言とを作つて、武家の式樂となつたものが、更に民衆化の必要を感じて、お國は先づ念佛踊を始め、やがて名古屋山三郎なるものが早歌(ハヤリウタ)を教へて、此に歌舞伎なるものを作り出した。「東海道名所記」萬治元年頃の作に、「むかし／＼京に歌舞伎のはじ

目次終

近代

日本文學大系 第十卷目次





歌川豐國筆「與話情浮名横櫛」


木曽街道
六十九次之内
追分



歌川國芳筆「四谷怪談」のお岩

脚本集

全

脚本集

全

